
真似と開閉と世界旅行

エミル・キャスタニエ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真似と開閉と世界旅行

【Nコード】

N3523P

【作者名】

エミル・キャスタニエ

【あらすじ】

事故に遭い死んでしまった二人。世界を巡る二人のその瞳は何を見る？

死んでしまった二人はその力で何をする？（前書き）

どうも。エミル・キャスタニエです。また始めますがよろしく願
いします・・・最初はプロフィールから。

死んでしまった二人はその力で何をする？

プロフィール

大澤 亮おおさわ しょう

主人公。中学三年でゲーム好き。クラスでは割りとスベル確率が高いため、余り余計なことを言わないようにしている

身長

175～180ぐらい

歳・・・15

見た目

髪は短めで服装は上下黒の制服

武器

ケータイ（真似用）曲を鳴らすとその曲に関係があるキャラに姿、技術などを真似する事ができる

五十嵐 咲（いがらし さき）

もう一人の主人公名前から女と思われがちだが実際は男。

身長

150～160ぐらい

歳・・・15

見た目

男としては髪は長いほう前にスポーツをやっていたり意外に運動はできるほう

武器

キーブレード（ヴェントスの初期装備）&開閉能力。キーブレードは原作とほぼ同じ。開閉能力は間合いを閉めて高速で近づいたり空間を開いたりできる。

始まり〜(前書き)

さあ、続きます。序章です。

始まり

「ー話をしてしよう、あれはこれから・・・嘘ですごめんなさい。
俺は中学三年生、名前は大澤 亮。趣味は野球、ゲーム、その他も
るもろ・・・」

「おい亮。帰るぞー!」

こいつは俺の友達。名前は五十嵐 咲・・・男だよ?

「おい?」

「おう、いまいくよ」

今日の授業もおわりかあ、一日は早いなあ、もう受験シーズンだし。
・・・そして俺と咲はゲームの話をしながら帰る。

「いや、咲。ここはこのスペルカードだろ?」

「いやいやなに言ってるんだ亮。ここはこっちで・・・」

さてと、進めたいゲームがあるし・・・

「よし。早く帰っ・・・!!」

「亮っ!?!」

立ちこぎをしようとして立ったら、足を滑らせバランスを崩す。

「まずっ!!!!」

このままだと道路に一直線だ!自転車に服が引っ掛かって降りるの
もできない。

「亮ーッ！」

ここで咲が俺の手を掴んで引っ張ろつとするが・・・いかんせん体制が悪すぎた。

「ばかつ！はなせ！」

駄目だ・・・もう間に合わない・・・こんなので俺の人生終わりかよ・・・

「・・・・・・・・えっ？」

その時、俺達の周りに光が広がった・・・これが天国・・・・・・・・？

「ほう、中々鋭いのう」

「えっ・・・・・・・・」

続く

始まり〜(後書き)

どうでしょうか？無理がありますかね？次はもう少しうまく書ける
と思います・・・また次回会いましょう

カク（前書き）

あの老人の正体は？第二話です。

カ

老人説明中・・・

「・・・つまりは、あんたは神様で俺が足を滑らしたのはあんたのせいだと？」

「しかも、ついでに俺も死なせたあ？」

俺と咲は何時でも拳と蹴りを出せるよう準備している・・・つか、まさかこんなテンプレのノリで進むとは・・・

「それで、俺と咲に世界をめぐれと？」

「うむ、その通りじゃ」

「ざけんなゴラアアア！」

「くたばれじじいー！」

「ふんっ！ー！」

「なっ！？」

「嘘っ！？」

じいさんは見えないなにかによって俺達の攻撃を安々とめた・・・結構本気だったのに・・・

「まあ、無論お主に能力を授けてやるう」

じいさんが指パッチンをする、再び光に包まれ形を作る・・・って
オイ

「これ、ケータイじゃねえかー!!」

・・・ふざけてるだろ!?

「なあ？咲!・・・は？」

咲は・・・その、キープレードを持っていた。

「へえ、キープレードかあ。いいね」

「じいさんよお、子の差はなんだ？ええ？」

「まあまあ落ち着け」

説明中・・・

「・・・まあ、要するに物真似能力だと」

「俺は何でも開閉出来るんだな・・・強いかどうかはこの際おいと
くか」

「それで・・・やってくれるかの？」

「・・・ぐたぐた言ってもしょうがないか・・・咲？お前は？」

「むしろいい機会だろ？二次元れつつGO、だぜ」

うわぁー・・・まあ賛成だけど。

「では、いつてこーい」

その瞬間俺達は光に包まれる

「っておい！じいさん！どの世界に・・・」

「知らん」

「じじい！俺の力でその頭開いてやるうー・・・」

俺達は意識を手放した・・・

カゝ（後書き）

・・・・どうかな？チートすぎませんか？少し不安ですね・・・
・まあ、また次回会いましょう。

出会い（前書き）

さあ、今回でこの世界かが解ります。ではどうぞ。

出会い

「ふむ・・・もう春じゃというのに肌寒いのが」

一人の女性がそういう。

「氣候が狂っているのかもね。・・・世の中の動きに呼応して」

もう一人の女性がそう答える

「・・・確かに、最近の世の中の動きは、少々狂ってきておりますからな」

「官匪の圧政、盗賊の横行。・・・世も末よ、ホント」

「確かに・・・ん、策殿っ!!」

「・・・ッ!!」

突然辺りが光だし何も見えなくなる。そして光が引いていき・・・

「ん・・・んん・・・戻っ・・・た？」

「策殿、お怪我はないか!？」

「大丈夫よ、ありがと。・・・でも今の、一体なんだったのかしら？」

「・・・ん？策殿。あそこにひとが・・・」

「……人か妖か……」

と、走り出す女性それを見てもう一人の老将は、

「策殿、危険じゃ！……ええい、全く。人の言うことを聞かんお人じゃ！」

「……男の子？」

そこで、老将が追いつく。

「はあ、はあ、はあ……主よ。あまり老いぼれをイジめんでくれ」

「あ、ごめん……大丈夫？」

「久々に走って、心臓が壊れそうじゃ」

「運動不足じゃない？」

苦しそうな老将を横目に笑いながら答える女性。

「そうかもしれないのう。……それにしてもこの孺子……どこから現れたんじゃ？」

「……さっきの光に関連づけるのが妥当でしょうね」

「策殿……あの管輅の占いを知っておるか？」

「ああ、あの天の御遣いってやつね……まさか？」

老将がそれに答える

「そのまさかかもしれぬかもな」

老将が目で伝える・・・どうするか？・・・と。

「面白そうだから、つれていきましょ」

「ほう？妖かもしれぬぞ？」

「その時は、私が殺すわ・・・いいでしょ？」

その答えに苦笑しながらも老将は賛成したのだった・・・

「ーん、んん・・・あ、あれ、そうだ学校・・・また休み時間
にばか騒ぎすんのかなあ・・・さて、起きよう・・・」

「・・・知らない天井だ・・・」

うん、これが言いたかっただけ。そしてこの状況でさっきの事を思
い出し納得する。

「ここは・・・？」

とりあえず荷物チェックだな。

・ケータイ（真似用）

・七夜・・・もといただの短刀

・カロリーメイト（全種）

「・・・はあ」

あのじいさんもう少しいいのをくれよ・・・しかも着替ええないし・・・
しばらく制服だな・・・

「おっ？目が醒めたか、孺子」

「はっ？・・・あなたは？」

この人はたしか・・・まさか？

「儂か？儂は黄蓋。字は公覆と言う。以後見知りおけ」

成る程・・・ここは・・・

「恋姫の世界か・・・」

まあ、最初の世界としては妥当か・・・

「・・・い！おい！きいておるのか!？」

「はいつ!?!?すみません!?!」

こわっ・・・

「・・・お主はどこからきた？」

「未来」

「・・・ふざけた事を言うな、孺子」

いや、結構マジなんだけどなあ

「いや、結構真面目に言ってるよ俺は、あなたの真名もわかるしね」
「……あ、地雷をふんだかも。」

「……ほづ、すごい自信だな」

「とまあここは！黄蓋さんっていうことは、ここは孫策さんの城？」

「う、うむまあ一応は……（何じゃこいつ……流れがつかめん）」

恋姫は咲のやつに教えてもらってやったやつだからなあ……あいつやったらキャラ多いやつおしえんだもん……覚えんの大変だったよ……あれ？」

「ねえ？俺以外に誰かいなかった？」

「うん？いやお主一人だけじゃったぞ……それよりお主、名は？」

「ああ、俺は大澤亮っていうんだ」

「ふむ、姓は大、名は澤、字は亮か。」

「あー、ごめんごめん。俺の世界だと字はないんだ。だから俺は姓が大澤、名は亮、字はなしなんだ……あつ、俺のことは亮でいいよ」

「ふーむ……」

なんか考えている黄蓋さんを横目に部屋を見渡す。あるのはイス、

机、ベッド、そして武器・・・はまずいだろう・・・その時ドアが開けられる・・・ノックくらいしよつよ。

「おっ、起きてる起きてる。おはよう少年。気分はどう？」
あ、孫策か・・・えと・・・

「はいっ！すごぶる元気です！」

「うあっ！・・・元気ね〜」

あ、少し引かれた・・・シヨック・・・

「ねえ？あなたは どうしてあんなところにいたの？」

やっぱり聞かれるよね・・・とりあえず・・・

少年説明中・・・

説明したけど・・・うーわ、すごい目で見られてるよ。

「う、うんまあ大体は解ったわ・・・多分」

「自信無さそうだね。孫策さん・・・」

「だが、嘘はついてないだろう、雪蓮？」

「うひゃあ！？いたの冥琳？」

後ろにいつの間にか周瑜さんがいた・・・気づかなかった・・・

「どうも・・・大澤亮です。亮って呼んでください」

「ふむ・・・随分と落ち着いているな？」

「まあ、驚きすぎて逆に落ち着いちゃったんだよね……」
「なにがだ？」

よし、三国志について話すか……

少年再び説明中……

「ふむ……中々興味深いが……続きは夜に聞くとしよう」

やっぱり夜になるよなあ。……一刀と同じ、ケータイで説明するか……

「………というわけだ。わかったか？」

「ハイワカリマシタ」

どうせ、ゲームと同じだろうしな……咲は大丈夫かな………
？

もう一人の天の御遣い（前書き）

今回、初めての戦闘描写です。変な表現があっても、暖かい目でお願ひします・・・では、どうぞ。

もう一人の天の御遣い

董卓軍

「ほら、急ぎなさいよ。このグズ！」

「詠ちゃん、そんな言い方悪いよう・・・」

「はいはい、月ゆえ、詠、これをやればいいのか？」

俺は五十嵐咲。今俺は賈馱（真名は詠）に軽い雑用をやらされている。そして董卓（真名は月）が詠をなだめている。

「それにしても・・・あなたが天の遣いねえ・・・」

変な生き物を見るような目で睨んでくる詠・・・俺は某ライトノベルのDM主人公みたいな趣味はないので、軽く威圧された。

「でも、恋ちゃんが拾ってきたのが人だった時は驚いたよう」

「その後になねに思いきり蹴られたけどね・・・」

あれは痛かった、いやマジで。日頃何かと亮に飛び蹴りしてたけど今度からはあんまり攻撃しないようにしよう・・・多分。

「そついえば詠、恋は？」

「そついやいないわねえ・・・またサボっているのかしら？」

「うん．．．華雄と手合わせでもしてんのかなあ」

「．．．恋ちゃんだったら多分中庭かなあ？」

月がそうだったので俺は．．．

「．．．．．うしっ！掃除完了！んじゃ、俺は恋を探してくるわ」

「えっ？あ、うん．．．」

「いつてらっさい」

そして．．．

「恋は．．．咲の力．．．知らない」

天下無双の呂布様がすざましい事してくれました。

「．．．だから勝負すると？」

「．．．（コクッ）」

あっさりうなづく恋

「このキーブレード．．．まだ使い方がわかんないんだよなあ」

「．．．．．？キーぶねどー？」

「え？いやいや・・・キー・ブレード」

「きー・ぶれどー？」

首をかしげている恋を見ているとなぜか癒されていく気がする・・・
なんて意識を恋にむけていたその時、脇を挟むような痛みが襲った。

「ちーんきゅー・・・きいっくっ!!」

「もるすあ!？」

いきなり飛んできたねねの蹴りによってのたうち回る俺。因みにこいつは陳宮。真名は音々音・・・愛称はねねだ。

「ぐ・・・あう・・・あぐう・・・」

ヤバイ、苦しい、息ができない・・・

「・・・ねね、めっ・・・」

コツンと音がする・・・ああ、ねねの頭を恋が叩いたのか・・・

「うっ、恋殿~~~~」

「う・・・ぐ、そんなに俺の事嫌いか？ねね？」

「き、嫌いなのです!」

「えっ、じゃあ何で真名を呼ばせてくれんだい？」

ニヤニヤしながら近づく。

「そ、それは恋殿に言われて・・・」

「・・・ねねいった・・・咲といると楽しいって」

「恋殿っ!?!」

「・・・(ニヤニヤ)」

さて、あまりからかつとまらずいから・・・

チャキ。

「・・・やるか、恋?」

キーブレードを左手で逆手持ちにして構える。

「・・・(コクッ)」

そう頷いて恋も方天画戟を構える。

「・・・閉まれっ!」

キーブレードを振り、間を“閉めた”そして恋に一瞬で近づく。

「・・・ッ!」

しかし、恋もすぐ反応して戟を振るっ。

「せいっ!」

かきゃああああん!!・・・高い音が鳴り咲は飛ばされた。

「はっ・・・?」

完全に受け止めた・・・と、思っていたが予想外に一撃が重かった。

「・・・フツ!」

そして一気に決めに来る恋。

「まだだっ、開け!」

恋の間合いから離れる、さっきまでいた場所に戟がめりこんだ。

「やべっ・・・あれくらったらまずい・・・」

「・・・さっきから変・・・」

「(ちかづいて一撃でも与えられれば、傷口を開いて、痛みで降参させられるかもしれない・・・)」

再び間合い閉めを行い、今度は錯乱作戦にでる・・・が。

「・・・そこっ」

フォンっ・・・!

「なっ・・・!?!?」

恋は移動した瞬間の俺を確実に狙ってきた。

「な、なんで・・・？」

「・・・咲、消えるとき・・・そのほつにきーぶれどーをふる・・・それに合わせた」

まじかよ・・・内心焦り始める俺。

「・・・っそつだキーブレードなら」

俺は意識を集中させ・・・叫んだ。

「ファイアツ！」

「・・・ツ！！！！」

よし、火の玉がでたっ！これなら・・・
フォンツ！ドンツ！・・・嘘っ！？ファイアを打ち抜いた！？・・・
けど！

「・・・？いない・・・？」

「こつちだ！氷よっ！」

キーブレードにブリザドを追加し、上から斬りかかる。

「・・・はあっ！」

「てりゃあああっ！」

かきやああああん！

激突・・・そして吹っ飛ばされる咲。

「うわああああ！？」

背中からもろに落ち、そして、キープレードが真横に刺さり、消える。

「・・・ぐは・・・はあ・・・はあ・・・負けた・・・」

「咲、結構強かった・・・またやりたい・・・」

勘弁してくれ・・・そう思う咲だった・・・余談だがそのあと詠に
なんで人探してそんなボロボロになるのかと、呆れられたのは、ま
た、別の話・・・

もう一人の天の御遣い（後書き）

どうでしょうか？キープレードには魔力がこもっていると言った話を聞いたことがあるので・・・ちがかったら意見お願いします。

一難去ってまた一難(前書き)

なんとか更新することが出来ました・・・受験生なんですけどね
笑)

一難去ってまた一難

あれから一週間がたった・・・あの後の夜はケータイを使って説明に成功したものの種馬になれたのなんだので忙しかった。それと皆を真名で呼ぶ許可を得た。・・・因みに孫策が雪蓮しえれん。周瑜は冥琳めいりん。黄蓋さんが祭さんさいさん。陸遜が穩のん。そして今・・・

「本当にやるのか・・・？」

「決まっているでしょ？何、初めて？」

「当たり前だろ？まだ15なんだぜ俺」

え？なにをしてるかって？・・・模擬戦だよ（笑）

「最初だし・・・これでいくか」

ケータイをいじり、音楽を鳴らし叫ぶ。

「モーシヨンキャプチャー！ルーク！」

体が光に包まれ、その光が消えていく頃に、体がテイルズオブゾディアビスのルークになっていた。

「ホントに姿が変わるのねえ」

雪蓮がビククリしている・・・俺もビククリだよ。

「よし・・・いくぜえええええ！」

さあ、思い切りいくぞっ！！

五分後………

「ぐわあっ!？」

あっさり吹っ飛ばされ、地面を転がり滑る。そりゃもうズザァーッと。そして変身も解け元の姿に戻る。

「……っー……随分と……はあ……あっさりだなあ……俺。」

「ん~~~~結構筋はいいと思うわよ？」

「……それでも、雪蓮に加減されまくってこれだもんなあ……」

「でも、武器とかは使ったことないんでしょ?……それに、素人がよく手加減してるってわかったわね？」

「まあ、あつちには木刀ぐらいしかないし……あと手え抜いてるってわかったのは……戦い終わったらそんな冷静じゃないだろ？」

その言葉に目を見開く雪蓮。

「……そんな事も知ってるの？」

「……まあね、その度に祭さんや冥琳が相手させられてるのも知ってる……」

「あはは……こりゃ、亮相手に隠し事出来ないなあ」

「策殿——っ！何処にいるのじゃ——！」

「あれ？祭さんの声じゃない？」

「……おっ、こんなところにいらしたか……ん？どうして亮はそんなにボロボロなのじゃ？」

「ははっ……ちよつとね……」

苦笑しながらそう答える。

「つと、そうじゃそうじゃ……策殿。袁術が呼んでおるぞ？」

「……はあ、またあ？」

心底うんざりした顔をする雪蓮。……まあまあ抑えて……

「……しよーがない、少し行ってくるわ。また後でね。二人とも」

そういつて歩いていく雪蓮……がんばれよ……。

一難去ってまた一難（後書き）

と言うわけで、最初の物真似はルークでした。・・・まあ、俊殺でしたが（笑）次はやっと戦争がはじまります。それではまた次回会いましょう。

初陣（前書き）

はい、今回初の戦です。・・・果たして亮の出番はあるのでしょうか？ではぶつぞ。

初陣

「はっ?・・・なんだって?」

帰ってきた雪蓮の報告を聞いて思わず聞き返す俺。

「・・・あのチンチクリン、黄巾党本隊と決戦して・・・倒せ・・・だって」

「(原作だと確か・・・その前に一つ戦いがあった・・・はず)・・・なあ冥琳?俺が来る前に戦があったか?」

「・・・?何故わかった?確かに袁術が討伐指令を出したことがあるが・・・」

「いや、それ解ればいいや、ありがと冥琳」

その時雪蓮が声を出す。

「でも皆・・・呉の再興も可能になるわ」

その言葉に反応する冥琳。

「まさか・・・孫権様達を・・・?」

「ええ、許可はとったわ・・・あと少しよ・・・」

「そうですねえ~~~~皆ということとは尚香様もですか?」

「・・・穏?なんか影薄くないか?」

「あゝ！人が気にしているのに……亮さんには情はないんですか？」

「この世界で情は必要なーし！」

「たまにお主が解らなくなるのう……亮よ」

皆揃って苦笑している。そんなに変なこと言ったか？

「ふふ……尚様にはまだ控えてもらおう……ところで亮？お前は戦えるのか？」

「ごめん冥琳、俺の世界……というよりは、俺の世代だと争いは見たこともないんだ……だから、最初は待機させてもらえるか？」

「ふむ……仕方ないか……」

「とにかく！蓮華達との合流は途中で合流するとして出陣するわよ！」

「そだな……行こうか？皆」

「あ、そうそう、口説くの忘れないでね」

「ぶっ！……やる気を削ぐなよ……」

そうして俺達は出陣していった……

「……それで？」

出陣してから暫く後……事件が起きた。

「はっ！……孫策様が黄巾党の別部隊を発見、部隊を率いて黄蓋様と共に先行いたしました！」

「全く世話の焼ける……穩！大澤！すぐに追い掛けるぞ！」

「は〜い！」

「わかった……けど、俺の事は亮ね。冥琳？」

そんなこといいながら俺達は急いだ……

そして追い付いたが、既に雪蓮達は戦闘を始めていた。

「くそっ！何で原作通りにいかないんだよ！？」

俺が苛つき怒鳴った瞬間、雪蓮を狙う弓兵が目に入った……不味い！？

「くそっ！曲を選んでる暇もない！いいのこいよー！」

・・・この曲は！

「モーションキャプチャー！アーチャー！」

そうして俺は第五次聖杯戦争のアーチャーとなる。

「これなら・・・トレスオン投影開始」

そう呟き頭に流れ込んだ基本構成を元に投影する。そうして、アーチャーが使っていた黒い弓と矢を数本投影した。

「・・・シッ！」

矢を引き・・・放つ。その矢は相手の“矢”に当て矢を落とした・・・
・すげえ命中制度・・・そのまま雪蓮に近づく。

「雪蓮！無事か！？」

「・・・？あ、もしかして亮？」

「あつ、そつか、解りにくいよな、声も変わってるし・・・とにかく、皆も来たからここは・・・」

・・・あ、雪蓮の顔が興奮状態の獣になりかけてる・・・怖っ。

「前言撤回・・・素早く殲滅してくれ・・・少し気分が悪い・・・」

目の前で人が切られ死んでいく・・・中学生には耐え難い光景だった・・・余談だがその後の戦は早く終わった・・・理由は察してくだ

さい・・・

「ふんふんふん」

「・・・雪蓮っ！」

ゴスツと音がし、冥琳の拳骨が雪蓮に炸裂した。

「きゃんっ!?!?・・・うゝゝ何すんのよ冥琳ゝゝ」

「・・・いや、普通大将自ら出向いた・・・何て知ったら誰でも怒るぞ?。」

「亮?何か顔が青いし、フラフラしてない?」

「いや・・・さっきのでちよっと、その、吐いちゃって・・・気持ち悪いんだよ」

「はゝい。皆さまん、旗が見えてきましたよゝゝ」

穩の言葉を聞き目を向ける・・・そこには、孫、甘、周の旗。

「あれが孫権達か・・・」

甘寧を怒らせると怖いから気をつけよ・・・全力でそう思う俺だった・・・

初陣（後書き）

．．．．．やってしまいました．．．．．まさかの初戦を、は
しよっちゃいました。ですがこれぐらいのペースでないと、次の世
界にいくまで時間が掛かってしまいますので．．．ではまた次回会
いましょう。

合流、そして戦い（前書き）

少し遅くなってしまいました・・・今回、孫権達が合流します・・・果たして亮はどんなことになるんでしょうか？・・・ではどうぞ。

合流、そして戦い

「……………」

こゝこの状況は一体・・・今の俺は新メンバーの面々に見られています……………」

「…………おいつ」

「はいつ！？」

孫権に声をかけられ少し慌てる俺。

「貴様が天の遣いと言われている男か」

「そ、一応ね」

「…………胡散臭いわね」

「…………デスヨネー」

当たり前前の事を言われ、落ち込む俺。

「…………じゃ、これでどうっ？」

ケータイをいじる。そして……………」

「モーションキャプチャー！雪蓮！」

俺は雪蓮になる。

「「「なっ!?!」」」
三人が声を揃え驚く。

「へえ、結構そっくりになれるのねそれ」

「お姉様が二人!? あ、でもさっきの男が・・・ええつと」

「「「・・・・・・・・つ!?!」」」

雪蓮が感心し、孫権が混乱し、甘寧と周泰が武器を構える。

「お? やるかいい?」

そついい、腰の南海霸王に手をかける。

「まあまあ、そこら辺にしときなさいよ、亮?」

「・・・・・・・・雪蓮」

「なに?」

「これ、メチャクチャ違和感あるんだけど」

そついい、胸を指差す俺。・・・ついでに言えば、下半身にも喪失感が・・・

「あ、やっぱり男の子だもんねえ」

とりあえず変身を解いとこ・・・

「ふう、やっぱりこつちだ・・・」

と、その時孫権が叫んだ。

「って、なぜ姉様の真名を口にする!」

「まあまあ落ち着け権殿よ、儂らは全員亮に真名を許した」

「なっ……」

その言葉にかなり驚く孫権。

「まあ、いきなり信用しろとは言わないよ。信用を得るには実力を
見せる……だろ?」

「……たしかにそうだ……わかった、次の戦い、楽しみにして
いるぞ」

いや、俺は待機組なんですが……つと、呆然としている二人にも、
つと……

「そっちの甘寧と周泰も同じだよ?よろしく」

「う、うむ……」

「はぁ……」

「はっはっ、何じゃその気の抜けた返事は、亮はお前らの夫になる
かもしれん男だぞ?」

「……ええっ!?!」

三人が再び声を揃える……って

「お、落ち着いてくれ皆!!それは雪蓮達が勝手に言っていること
で、俺にその気はな……」

「とにかく三人共、亮に真名を教えなさい？」

「は、はいっ、私は周泰、字は幼平。真名は明命みんめいです！」

「ん、よろしく明命」

「……私は甘寧。字は興霸。……王の命により、真名を教えよう、思春しゅんという」

「よろしくな、思春」

「よろしくするかどうかは、孫権様次第だな……」

「それじゃあ、いく」ちよっと！」「……え？」

いきなり孫権に呼び止められる……なんだ？

「その、私は……」

「いや、まだ戸惑っているだろう？区切りがついたら真名を教えてくださいよ……俺は亮でいいから」

「いや、真名で呼んでくれ……その、まだ戸惑ってはいるけど……」

ん？少し孫権の態度が変わった……？

「っ、ゴホンっ！とにかく、私の真名は蓮華れんぷあだ」

「おう、よろしく。蓮華」

「さっ、自己紹介がすんだところで~~~~~」

俺は、明命と思春に近づく。

「・・・なあ二人とも、今度暇あったら、俺に稽古をつけてくれな
い？」

「・・・なぜだ？お前は戦えないのか？」

「まあ、さっきみたいに真似すりゃ、戦えるけど・・・ほら、自分
自身も鍛えたいんだよ」

「・・・そういうことですか・・・わかりました！」

胸の前で手を合わせて元気に言う明命。

「・・・私は余り乗り気ではないな・・・まずはどんな形であれ実
力を見せてみる・・・それによっては稽古をつけてやる」

「本当か？約束だけ？」

「いいだろう」

「・・・ねえ、きいてる？」

「あ、ごめん雪蓮・・・」

とにかく、再び出発していくのであった・・・

そして今、再び原作と違い、敵の小部隊が目の前に迫ってきていた。

「……通り抜けられないか冥琳？」

そう俺が聞くが……

「無理だな……今から迂回は出来ん……だが、あまり手間取る
と他の諸侯たちに手柄をとられてしまう」

「……なら、俺が囷になろう」

「……平気なの？」

「人は殺せないけどな」

そついいケータイをちらつかせる俺。

「あなたが生きてれば充分よ」

「でも、亮さん。あの数を何とかする方法ってあるんですかあ〜」
「」

「まあな……いくぜ……モーションキャプチャー！十六夜咲夜
！」

曲を鳴らし変身する、俺の姿は東方の紅魔館のメイドさんになる。

「うわぁ・・・綺麗・・・」

・・・このままだと変な人格が目覚めそうだな・・・俺は懐中時計を使い、時を止める。そして敵の軍の真上に飛び、ナイフを大量に投げ、時をまた動かす。・・・無論ナイフは、敵の手や足のみにとたっている。

『うわぁ！？なんだ！』

『いてえよう！』

『おい！空に人がいるぞ！？』

敵は予想通り、混乱している。

「皆！いけっ！」

「あ、あれ？いつの間に亮様があんなところに！？」

「とにかく、いまが好機だぞ雪蓮！」

「うん・・・亮！！必ず生きるのよ！・・・全軍前進ー！ー！！」

よし、うまい具合に抜けていった・・・あとは、時間を稼ぐだけ・・・

「さぁ・・・天に裁かれないのは誰だ！？」

そう言い放ち俺は敵に突っ込んでいった・・・

「ぜはーッ……ぜはーッ……くそ、多すぎだつて……」

「へっへっへ、お嬢ちゃん、もう終わりかい？なら、俺達と楽しいことしようぜ？」

「つく！変態が！くらえ、『ソウルスカルプチュア』！！」

敵の手や足を斬っていく……けど、斬った感触や、血を見てきたらまた気分が悪くなってきた……俺の意識が疎かになったその瞬間。

「このやらあーっ！！」

「ぎゃあっ！！」

「がっ……あっ……！」

賊の一人が俺を思い切り棍棒みたいなもので腹をぶん殴る……そのまま俺は地面を転がる……と、同時に変身が解け元に戻る。

「なんだあ？男じゃねえか。どうなってんだ？」

「なににせよ、男は殺せよ？」

まずい……死ぬ……本気でそう思った次の瞬間。

「ぐわあっ！！？」

「……え？」

よく見たら賊の胸に矢が生えていた……いや、刺さっている……

後ろを振り返ると、そこには夏の旗・・・弓つてことは夏侯淵か・・・

「・・・その少年・・・大丈夫か？」

「う・・・ゲホツ・・・ありがと、夏侯淵さん」

すると夏侯淵さんが驚いた顔をする。

「私を知っているのか？」

「いや、今の弓の力を見てね・・・夏の旗で弓つていたら夏侯淵さんだからね・・・あ、俺は大澤亮。よろしく」

「そうか・・・ところで、お前はどこの軍だ？」

「ん、孫策だよ」

「・・・そうか、ならいつか、戦場で会っただろうな」

「そだね・・・でもま、ありが・・・と・・・？」

立とうとした瞬間、目眩にも似た感覚に襲われ、そのまま倒れる。

「・・・お・・・大丈夫・・・しっか・・・」

周りの声も聞こえない・・・目の前も暗い・・・ま・・・ずい・・・むり・・・をしすぎ・・・たか・・・？そのまま俺は意識を手放した・・・

合流、そして戦い（後書き）

はい・・・え〜とやたら亮が女性になりましたね・・・この物真似は、知っているキャラの記憶、容姿、力を真似る事が出来ます・・・しかし、この力には弱点があり、その内にその弱点を公開したいと思います。ではまた次回会いましょう。

戦の終わり〜（前書き）

今回、少し遊び過ぎた気がします・・・相変わらず文才0ですが是非見ていってください。ではどうぞ。

戦の終わり

「……あれ？……ここは……」

「うんうん……」

「……あっ！目が覚めましたよ！」

「えっ？……明命……それに呉の武將の殆ど……」

俺は周りの面々を見渡す

「あれ？……俺はどうして？」

「うむ……儂らは無事勝利し、手柄を得ることに成功したのじゃが、お主が心配でな。急いで戻って来たのじゃ……そしたら魏の夏侯淵がボロボロのお主を保護しておつての。お主を預かりそのまま城へ戻ってきたのじゃ」

「えと……？俺はどれくらい気を失って……？」

「うん……ざつと半月位ですかね〜」

穩の言葉に驚く。

「半月……？そんなに？」
「はいっ！私達、かなり心配したんですよ？全然目をさまさないから……」

「俺にとってはつい数秒前に感じるけど……」

そこで体を起こそうとしたら、強い眠気が再び襲ってきた。

「あつ……ごめん……まだ……眠い……や」

「……おい」

「……えっ？」

必死に視線を声をかけられた方……思春に向ける。

「……次に起きたら、きっちり訓練をつけてやる……なんにせよお前は実力を見せたんだ。約束は守ってやる」

「思春……ありが……と」

何度も体験するであろう眠気に素直に意識を任せた……

咲

「なんか……久々だ……」

「どうかしたのか咲よ？」

「いやさあ、最近空気だなあと・・・」

「まあいい、最近呂布はおろか誰とも戦っておらんのだ」

そういつて金剛暴斧を振り回す華雄・・・なんかどつかの死後の世界に似たような人いるよね・・・

「わかったよ・・・いくよ、華雄」

素早く左手にキープレードを取り出し構える。

「・・・」

「・・・」

沈黙・・・そして。

「うらああああ！」

「はあああああ！」

カキヤアアン！！

お互いの武器が高い音を出す・・・やはり俺の方が押される。

「くっ・・・！てりやああああ！」

ブンッ！ブオンッ！ヒュオッ！カキンッ！

華雄に攻撃の隙を与えさせないように素早く手数で攻める俺。

「ふっ、ほっ、・・・そこだぁ！」

が、華雄は僅かな隙をつき、なぎはらってきた。

「開けっ！」

「お見通しだっ！」

そういつて華雄は、そのまま遠心力を使い開いた間を詰めてくる。

「なっ！・・・守りよ、リフレク！」

盾を展開するが・・・

カシヤアアアン！

・・・容易く打ち破られ、峰が俺にきまる。

「ぐわぁあっ！」

吹っ飛ばされながらも体制を整え叫ぶ。

「・・・ぐっ！ケアル！」

癒されていくが・・・まだ足りない、しかしもう術を唱えている暇はない。

「終わりだ！はぁぁぁ！」

やば、あれは直撃したらまずい・・・死ぬ・・・死ぬ？何をいつているんだ俺？・・・モウオレハシンデルダロウ？・・・そう思った瞬間脳裏で何かが弾けた。

「うおおおっ！」

そして右手に約束のお守り。左手のキープレードは過ぎ去りし思い出に変わり、構えをロクサスのものにする。

「ほう？・・・面白そうだな・・・」

「・・・いくぞ、華雄うううう！！！」

「こい！咲iiiiiiii！！！」

そうして俺達はぶつかり・・・二人とも倒れた。

「・・・はあ・・・はあ・・・引き分け・・・？」

「そ、そうだな・・・しかし、あんな切り札を持っていたとは・・・」

「いや・・・俺もワケわかんなくて・・・なんか死ぬって思ったら頭ん中クリア・・・ああ、真っ白になってさ・・・」

「ふうむ・・・しかしなんだな・・・私の武は誰にも負けんと思っていたが・・・世界は広いのだな」

ほう？華雄にしては珍しいな・・・

「華雄・・・」

「何だ？」

「・・・長生き・・・しような」

「武人である以上、無理だな」

「即答かよ・・・あははっ」

「ふふっ」

気が付けば二人して倒れながら笑っていた・・・因みにこの後恋に見つかりひどいことになったのは内緒の話・・・

亮

「はああ！」

「振りが甘い！」

ドカァッ！

「ぐわっ!?!?・・・てりゃああ」

「今度は大振り過ぎだ！」

ガスッ！

「がはぁ！？・・・うらぁぁ！」

「脇がから空きだ！」

「がつ！・・・ぐ・・・うっ・・・」

今俺は目を醒まし、思春と明命と共に中庭で訓練をしている。

「・・・どうした？終わりか？」

「・・・ゲホツ・・・が・・・あ・・・ああ・・・」

完全に入ってしまったために呼吸すらままならない。

「大丈夫ですか？亮様？」

声を掛けてくる明命。

「ぐ・・・うっ・・・大・・・丈・・・夫だよ」

「・・・ほら、手を貸してやる。立て」

手を差し出されたのでその手をとる。

「・・・ぐっ・・・ああ、ありがとう思春・・・なんか優しいな」

「まあ、お前の力は見せてもらったからな・・・それに、約束は約束だ」

「ふふっ」

「・・・明命、何が可笑しい？」

「い、いえ！別に思春殿を侮辱したわけではなくて、えと、その・・・」

「ははっ」

「・・・亮？」

「いや、すまん！つい！」

まずい・・・思春がいつの間にか模擬刀から鈴音りんしえんに持ち変えている・・・

「いやね？ほら、普段堅い思春が、こんな漫才みたいな事もあるんだなあ・・・って、ひいつ！？」

やばい！素人でも解るくらいの殺気をぶつけられてる・・・正直に言おう、かなり怖い。

「・・・そこに直れっ！貴様ああ！！」

「う、うわあ！？逃げるぞ明命！？」

「え、あ、はいっ！」

「またんかああ！」

怖い怖い！！原作の思春とかけ離れすぎ！これでもし蓮華と何かあるものなら・・・何だろう、いきなり首筋が寒くなった。

「はあ、はあ・・・くそお、早すぎる！！！」

「亮様！もっと早く！追い付かれます！」

「わかつている！・・・そうだ！」

素早くケータイを操作し、曲を掛ける。

「なんか、このシリーズに頼りきりそうなきがするなあ！モーシヨ
ンキャプチャー！射命丸文！」

光に包まれ、東方の鴉天狗になる。

「亮様あ！それはなんなんですかあ！？というより、女性にしかなれないんですかそれ！？」

「う、うるさい！俺だつてこういうときに役に立つので思い付くのが女のキャラだけなんだよ！・・・っーわけでゴメン！お先！」

一瞬で、高速で空を飛び逃げる・・・なんか後ろから。

「ええい！まずは明命！貴様からだ！」

「私何かしましたかあ！？亮様くく恨みますからねええ！」

・・・ごめん、明命。

「つと・・・」

なんとか適当な場所を見つけ、着地する・・・結構使えるなこれ。

「なにもの!？」

「え?」

突然声がしてそちらに視線を向けるとそこには・・・蓮華がいた。

「あ、いや、俺だよ」

「誰だ!？」

「いや!だから、亮だつて!？」

「亮?・・・ああ、物真似・・・というやつか、しかし何故また女性?」

「きかないでくれ・・・」

「・・・でも、面白そうねそれ、私にもなれるの?」

「うん、その真似をする相手の事を知っていればね」

「そうなの・・・所で思春?どうしたのから?」

は?思春?・・・恐る恐る壊れたロボットのようになりギギギツと擬音が出そうなほどゆっくりと振り返る・・・そこには鈴音を構えた(何故か赤いものがついている)思春が冷やかな目で立っていた。

「……………」

「あは、あはははは」

乾いた笑いをする俺の服の襟を掴み一言。

「……………」

すざましく冷えた声で言ってくれました。

「蓮華……………」

「な、何？」

「俺、生きて帰ってこれたら言いたいことがあるんだ」

「いや、そう言う言葉は言っちゃいけないと思うけど……………」

その後の数日間、俺と明命は思春に話はおろか、近づく事も出来な
かった……………」

戦の終わり〜（後書き）

こんか「ちよつと待ったああああ！」なんですか？

咲

「なんだよ！今回の話！」

亮

「二人揃ってなんてオチだよ！てか思春を怒らせて何がしたいんだよ！？」

だってそう言う思春を見たかったから（笑）

「おかしいな・・・どうしちゃったのかな・・・」

あれ？咲さん？

亮

「下書きだけちゃんとやって本番でそういう事するなら、下書きの意味ないじゃないか・・・」

いや二人とも？その台詞は・・・

二人

「「少し、頭冷やそうか・・・」」

ぎゃあああああ！？

咲

「とうわけで次回の真似と開閉と世界旅行！」

亮

「また見てくださいね！」

二人

「それはまた次回会いましょう！」

それは・・・僕の台詞・・・ガクッ・・・

束の間の平和〜呉（前書き）

今回と次回はおまけ話でいきたいと思っております。ではどうぞ。

束の間の平和と呉

「……なあ明命」

「……はい」

「思春で、あんなに恐いんだな……」

「そうですね……」

俺達は今、庭にて体育座りをしている。

「いや、まさか、あのスピードについてこれるとは……」

「すぴーど？」

きよとんと首を傾げる明命……和む。

「ああ、えっと……まあ速度つてか速さって感じ」

「へへ、天の国にはそんなお言葉があるんですね」

「他にも色々あるよ？……ただ、いざ言えって言われたら思い付かないけどね」

「……亮様」

「何？」

「後ろ……」

後ろ？疑問に思いながら振り向くと……鈴の甘寧様がいらしていました。

「……………」俺絶句。後ろの明命を見ても凄まじいほどに体が震えていた。

「……………訓練の時間だ」

「ひゃい！？わかりました！……………ってなんで鈴音！？模擬刀じゃないの！？」

「何、そろそろ、実戦に近づけた方がいいだろうと思ってな……………」

「……………もしかして、まだ怒ってる？」

「……………怒ってないさ」

嘘だっ！！そう叫びたかったが、俺の本能が知っている……………無闇なことは言つなと……………」

「み、明命、助けっ」

「……………私を見捨てましたよね、前に」

「み、明命……………！」

無論その後徹底的に叩き潰されました。そして……………

「えーと、この曲は………」

現在俺は自室でケータイの曲を作品事に分けている。そしてこの世界にきてわかったこと、それは……

・その曲が少しでもキャラに関係有れば、真似は可能。

・また、真似する時期も選べる（例、ネギま！の場合ネギまの曲で初期のネギ、修学旅行編、学園祭編、魔法世界編のどのネギにもなれる）

・使いすぎると倒れる。（こないだのもこれが原因）

・世界の修正を受けるのか、投影と同じくワンランク下がる。

・充電切れはない（重要）

・普通のケータイの機能もついている（この世界じゃ殆ど意味なし）

「……こんなものか……」

ぐるるうう。……お腹が鳴った。

「腹減ったなあ……そうだ、確かカロリーメイトが……」

あったあった、こういうときだけありがとう神様。

「やっぱりチーズかフルーツだな」

「そついい」「そつ」と荷物をあさり取り出す・・・が

「亮々している？」

雪蓮が入ってきた・・・だからノックしろって・・・

「何？雪蓮」

「・・・ねえ、何それ？」

そついいカロリーメイト（フルーツ味）を指差す雪蓮。

「食べる？俺の昼飯だけど」

「それ食べ物だったの？随分と少ないのね」

「でも、これ四本で結構充分な食事になるよ？」

「へー・・・それじゃあ一本、はむっ」

そついいカロリーメイトをかじる雪蓮。

「もぐもぐ・・・へえ、中々美味しいじゃない」

「そつ？それはよかった・・・ねえ雪蓮？仕事はちゃんとやった？」

「なによっ、ちゃんと後でやるわよ」

「・・・だったらすぐ戻った方がいい、絶対」

「大丈夫だって。・・・冥琳がちゃんとやっているから」

「・・・私としては、是非貴女にやってもらいたいですがね、伯符殿？」

そついい後ろにいつのまにか冥琳が立っていた。雪蓮は笑顔のまま冷や汗だらだらになっている。

「め、冥琳・・・元気？」

「ああ、元気だとも、仕事が多くて休む暇もない」

「だったら、少し休まない？」

「いえ、どこかの王がキチンと仕事をしていれば休めます」

「冥琳・・・少し落ち着けよ・・・怖い」

「そ、そつよ冥琳、亮が私を誘ったんだし・・・」

「おい！？嘘つくなよ！？」

「安心しろ亮・・・嘘だと言うことは重々承知している」

そついい雪蓮の耳を引っ張り帰っていく。

「いたたたたつ！？ちよつ、痛いってば冥琳、助けて亮~~~~~！」

さよなら・・・雪蓮・・・あれ？カロリーメイトがない・・・

「雪蓮えええん！までやごらあああ！」

そう叫び雪蓮の後を全力で追っていた。

俺はいま、さまよっていた（カロリーメイト全部とられた為）

「まずい・・・腹減った・・・」

「お？亮ではないか、どうしたのじゃ？」

「祭さん・・・」

ぐう~~~~っ・・・っその時腹がなった。

「なんじゃ？腹がへっておるのか？」

「うん・・・雪蓮に昼飯取られた・・・」

「なら勝手に厨房にでも言って、適当に何か腹に入れてしまえば良かるっ」

「いや、何か勝手に食べるのって抵抗あるし・・・」

「何を言っておる、儂が許すから、何か食ってー」

そう言い、口を閉ざす祭さん。

「祭さん？」

「ふむ・・・ちょうど良い機会かもしれぬな」

ぶつぶつと何かを呟いていた祭さんが笑いながら俺に向き直る。

「なら儂が何かを作ってやるとしよう」

「マジっ？」

そついや原作でもその話があつたなあ。

そつして俺達は今厨房に来ている。祭さんは鼻歌を唄いながら豪快に鍋を振るっている。

「亮。まさか好き嫌いはなかるう？」

「まあ、あるって言えばあるんだけど」

「あることにはあるけど・・・でもその材料だったら大丈夫だよ」

因みに俺の大的苦手はおかしいと言われるかもしれないが、ドレッシングが苦手だ。あれは不味い・・・

「ええいつめんどくさい！男なら力強く、うん、と頷いておけ」

そう言いながらもどんどん手際よく料理を作っていく。

「にしても、祭さんて料理上手いなだね」

「意外か？」

「まあ、戦だらけって感じはするけど祭さんだって女性だからね」

「ほう、儂みたいな老人を女性扱いか」

「いや、どう見ても老人に見えません・・・」

多分このひと六十歳辺りになってもしわひとつも出来なさそうだなあ。

「まあ、もう少しで出来るから待っておれ」

「はい」

その言葉の通り、程なくして料理が完成した。

「ほれ。たくさん食べて精をつけるが良い」

そういつて祭さんは、机の上に山盛りのご飯と、山盛りの青椒肉絲を置く・・・あれ？何か忘れてるような・・・

「ま、いいや、いただきますー！」

「あつ。そつじゃ、ちよつと待て」

「え？なに？」

いきなり祭さんに止められた。

「うむそれはな・・・」

「え・・・？」

そついい、祭さんは箸で青椒肉絲を掴み、俺の口元に突きつけてきた。・・・忘れてたああああ！！

「ほれ、どうした。『あーん』せんか、『あーん』」

「いや、その・・・」

「どうした？男と女が二人きりで飯を食うのだ。この食べ方以外なかるつ？」

この人はっ・・・！笑ってるし、面白がってるし！

「いや、一人で食べられるって」

「何じゃ・・・せつかく作ったというのにいらんのか」

「まった！食べるっ、食べます！」

「おお、そうか。なら、ほれ」

仕方ない・・・覚悟を決めよう・・・

「あ、あーん」

まさか十五にもなって、『あーん』をやるはめになるとは・・・

「もぐもぐ・・・おおっ！？美味しい！」

「そうか？」

「うん！こんなに美味しいのはバーミンでも食べられないよ！」

「なんじゃそれは？」

そう言いながらもまた青椒肉絲を口元に突きつけてくる祭さん。・・・
・もう腹が減りすぎて抵抗する気はない。

「・・・あーん・・・？」

「うむ、やはり素直が一番じゃな」

そついいながらあーんをしながら再び食べ続けた・・・

「じつそつさまでした！」

「応。よく食べたな亮」

「・・・ねえ祭さん。また作ってくれる？」

「ん？・・・まあ暇があったらな」

「よろしく、祭さん」

そういつて一日は過ぎていった・・・うちの王様は嫌々仕事をしたらしい・・・

束の間の平和と呉（後書き）

穩

「……………」

亮

「穩？……どうした？」

穩

「作者さん……私の事忘れてませんかあ？」

「すみません……つい……」

亮

「安心しろって……まだ来てない仲間もいるんだから、その時に……」

穩

「本当ですか……？」

「はい。約束しましょう。」

亮

「本当か……？まあ嘘をついたら……わかるな？」

「はい、重々承知しております。」

穩

「では……次回の真似と開閉と世界旅行……」

亮

「次回もまた、見てくださいね！」

それではまた次回会いましょう！

束の間の平和と董卓軍（前書き）

はい、今回は董卓軍のお話です。ではさようば。

束の間の平和と董卓軍

ここは洛陽・・・いろいろあってここに拠点を置くことになった。ここは、城の一角の部屋、そこには詠と咲こと俺がいる。

「・・・んで、ここはこう読むのよ」

「え〜と・・・こう?」

「あーもう! 違うわよ! 何でこんなにも物覚えが悪いの?」

「むっ、じゃあ聞くけどこれ読める?」

そういい、紙にひらがなで“かく”と書いた。

「はあ? 何よそれ?」

「俺の世界の文字だよ・・・ちなみにそれで賈馱って読む」

「へ〜・・・って、話それてるじゃない!」

そう叫び差し棒みたいな物を俺に向ける・・・って。

「ば、馬鹿!! こっちに向けんな!」

素早く後ずさる俺。

「え・・・? ちょっと、どうしたのよ?」

いきなりの事態に動揺する詠。

「し、ごめん・・・実は俺、先端恐怖症なんだよ・・・」

「は、先端恐怖症？・・・って何？」

「ええと・・・俺の世界の・・・まあ精神的なものだよ。他には、高い所が怖い高所恐怖症。狭い所が怖い閉所恐怖症・・・色々あるよ」

「・・・あなた、呂布や華雄と模擬戦したときは大丈夫だったの？」

「ああ、それも・・・実は俺、目が悪いんだよ」

「はあ！？あなた、今のいままでそれ隠してたの！？」

「だって・・・眼鏡の事なんて無くなってると思わなかったし、それに買おうにもお金無いし・・・」

そうしたら詠がため息を吐きながら、引き出しから何かを取り出し、突き出してくる。

「詠？これは・・・」

「ボクの予備の眼鏡よ・・・あなたに合うかはわからないけど」

「いいのか？」

「こつちとしても目が見えないとなると、色々と面倒なのよ」

そついい、眼鏡を渡してくる詠。そして俺はそれを付けた・・・
おお。

「見える！見えるよ詠！？」

「そんなに喜ばないですよ……そこまで高価ものでもないし……」

「サンキュー、詠……さて、外を見に……ぐえっ！？」

外に出ようとした瞬間、詠に思い切り服を引っ張られた。

「アンタ……ボクの部屋に来てる理由忘れてるでしょ……」

拳をプルプルと震わせる詠……あつ。

「すまん、忘れ「この馬鹿！」いてえな！？殴るなよ！」

「あんた、ホントにボクにケンカ売ってんの？」

「悪かったって……んじゃ、とつととやろうぜ……」

勉強の結果、少しは文字が読めるようにはなった……こんな文字使うのこの世界だけなのに……

ここは中庭。いま俺はといつと……

「はあっ！」

フォンツ！

「せいっ！」

ブンツ！

「とりゃあああ！」

ビュオンツ！

「はぁー……はぁー……駄目か……」

今俺はキーブレードを振るい、また二刀流にならないかと素振りをして、確かめていた。

「……ふう、ちょっと、休むか……」

そういい、木陰にいき、休もうとしたら……先客がいた。

「すー……すー……」

「すー……」

恋とねねが二人揃って寝ていた……そういや、二人とも今日は休みだっけ。

「でも、和むな、見ると」

いや、あんまり見てると怪しい人だから、そろそろ別の場所に……

「ん……咲？」

うん、なんか起きると思った。

「おはよ、恋」

「・・・おはよ・・・咲はどうしたの・・・？」

「いや、ただ単に鍛練をしていて、疲れたから休もうとしていただけ」

「・・・なら、一緒に寝る・・・」

若干眠てそうかなな恋がねねとは反対側のスペースを開けてくれた。

「いや、でも、俺男だし・・・」

いくらなんでも・・・

「咲は・・・恋と寝るの・・・いや？」

そういつて上目遣いで見る恋・・・うー。

「わかったよ・・・」

もうあきらめた。そして恋の横に行こうとした瞬間・・・

「ちーんきゅーう・・・」

「げっ・・・」

「きーーくっ!」

「開けっ！」

素早く手を振り、ねねとの間を開けた。・・・が。

「二段蹴りー！」

すぐ着地した瞬間、素早くふたたびねねは飛んできた。そしてその蹴りは俺の鳩尾に・・・炸裂した。

「ぶぎゃあぶげぶろぱっ!？」

奇声をあげながら吹っ飛ぶ俺。

「・・・ぐ・・・ねね・・・」

「ふん、甘いのですぞ、咲殿・・・ねねだって学習するのです」

「ぐ・・・そういや、恋との模擬戦の時にいたんだっただっ・・・」

「・・・ねね、咲も・・・一緒に寝る」

「わひゃあっ!？」

「うわあ!？」

恋に引き寄せられ俺、ねね、恋といった感じで寝かされた。

「れ、恋殿!?!?なんでこいつもなんですか!?!？」

「皆仲良し・・・それがいい」

「いいじゃんねね。家族みたいで」

「なつ、なななな、なんですとー!？」

「家族……？」

慌てるねねと、首を傾げる恋。

「だってさ、董卓軍という名の家族だろ、月も、詠も、華雄も、最近来た張遼も、そしてねねや恋もだよ」

「……咲は……家族いた？」

「いたよ。……まあ、姉には色々散々な目にあっただけだね……」

笑いながらそう言う俺。

「恋は……気がついたらいなかった……」

「……」

「恋……戦える、賊を倒すと皆喜んで、恋はお金を貰えた」

「そして、その途中でねねは恋殿にであつたんです」

「そうだったんだ……それで、今は月に？」

「……(コクッ)」

……重い話だ……何度か原作で聞いたりアニメで聞いたしたこともあるが実際には、こんなにも重い話だったんだな……

「……でも……」

「恋？」

「恋殿？」

「今は……満足……皆がいるから……」

「……そうだな……」

「はいです……」

「そうだよ……今がいいならそれでいいじゃないか……原作通りにいけば……皆は死なない。けど……」

「恋、ねね……皆が笑っていける世界を創ろう……皆で」

「……（コクッ）」

「はいですー!」

新たに決意を固め……俺達は眠りについた……

東の間の平和と董卓軍（後書き）

では、今回は、ゲストをお呼びしたいと思います・・・董卓軍総大将、董卓こと月さんと、われらが主人公、五十嵐咲です。

月

「どうも・・・」

咲

「どーもー」

では、今回はどういった感想がありますか？

咲

「いやいや・・・今回は月出てないだろ？」

月

「ううん・・・いいんです。私は皆が楽しんでくれれば、それで・・・」

良い子ですね。

咲

「確かに・・・意外に恋姫では少ない純真無垢タイプだしね」

月

「・・・なんか恥ずかしいです・・・それにしても咲さん、眼鏡お似合いですね」

咲 「あ、うん・・・ありがとう・・・」

はいはい！作者を置いていかないでください！？

月

「う、ごめんなさい・・・」

ま、まあいいですけど・・・次は出番をちゃんと出し・・・出せるかな？

咲

「おいおい・・・」

だって・・・つぎ反董卓連合編だし・・・

月

「大丈夫ですよ。・・・それでは、次回、真似と開閉と世界旅行」

咲

「みなさん、是非見てくださいね」

また次回会いましょう。

反董卓連合了（前書き）

はい、遂に入ります反董卓連合編。果たしてどうなるんでしょうか？ではどうぞ。

反董卓連合

咲

「……ざけんな！」

近くにあった椅子を蹴り飛ばす。

「ごめんなさい……ボクの責任よ……」

申し訳なさそうに頭を下げる詠に声をかける。

「……気にするなよ……あのバカ袁紹はバカだからしょうがなかったんだ」

つまり、洛陽をとった月だったが、袁紹がそれを気に入らず、諸侯に手紙を出し、反董卓連合を結成したらしい。

「でも、どないすんのや？もう敵さんきとるでえ？」

「わかってるよ張遼……」

その言葉に対してあつ、とした顔になる張遼。

「忘れとったわあ……咲い、ウチのことは霞しほって呼んでーなー」

「はっ？何をいきなり」

「だって、だつてえ、咲つて呂布ちゃんや華雄ちゃんと良い勝負したんやろ？ウチは強い男は好みなんや！……だから真名で読んで欲しいんやけど……」

「はぁ・・・わかったよ、改めてよろしく、霞」

「・・・それで、ボクたちはこれからどうするの」

「無論正面からぶつかって、粉碎するのみだ！」

「ばかつ、正面からぶつかったら、勝てるわけないだろう？」

「なんだと！？咲、お前は怖じ気づいたのか！？」

「ああ」

「・・・」

華雄だけでなく、皆も固まった。

「はつきりし過ぎなのです・・・」

ねねは呆れながらそう言っ。

「だって、戦なんて見たこと無いし・・・それに、黄巾党の時だった留守番だったし・・・」

「・・・なら、どうすると言っのだ！」

「ひたすら防御・・・幸いにも洛陽は守りに適した土地・・・相手が崩れるまで待つんだ」

「でも、それだけじゃあ・・・」

「勿論、色々考えてるよ。でも、万が一にも負けたら・・・皆で逃げよう、誰も死んじゃいけないんだ・・・」

「せやなあ、あちらさん、こっちの何倍の兵力があるかわからんし・・・まともにもやりあったら負けるんは目に見えとる」

「だからこそその私達だろう！敵なん「華雄うっさい」ぐっ！」

俺は無無を言わず、言葉をカットする。

「とにかく、細かいことは後で言うよ。詠？これでいいか？」

「・・・上等よ。やってやるわ。皆！出陣用意！」

・・・誰一人死なせるものか！

亮

現在俺は、諸侯が集まる・・・といってもここは雪蓮の陣だが・・・

「雪蓮、ちよっと出歩くよ」

「亮？どこいくの？」

「夏侯淵さんにお礼言いに行くんだよ」

「ちよつとまで」

「冥琳？何？」

「鎧を着けていけ」

「・・・なんでも、まだ俺が天の遣いだということは、まだ隠しておきたいらしい・・・鎧はかなり重かった。」

「・・・着いた」

そしてたどり着き、目の前には曹の旗が広がっている・・・わかるだろうか？この放送で呼ばれて、おろおろしながら職員室の前でうるつく感じ・・・

「よし！いく」「何者だ！」「ひゃあ！？」

声が出た方向を向くと、赤いチャイナドレスを着た女性・・・夏侯惇がいた。

「いや、俺はただ夏侯淵さんにお礼を申し上げただけであります」

緊張しすぎて訳がわからない言語になる俺。

「何？秋蘭に・・・しかし」

「ん？姉者、そいつは？」

そこにタイミングよく夏候淵さんが来てくれた。・・・よかった。

「久しぶり、夏候淵さん」

「・・・？ああ！大澤と言ったか、久しぶりだな」

「え？え？・・・誰？」

「ああ、姉者、こいつは・・・」

説明中

「つまり、お前は大澤と言っただな」

「二人とも、俺のことは亮でいいよ・・・あんま姓で呼ばれたことないし」

「そうか？なら、私達は呼び捨てでも構わん」

「いいのか？」

「ああ、お前はあの数の相手でも、耐えられる力を持っているから・・・力は認めている」

いや、あれは俺の力というか、咲夜の力というか・・・

「しかし亮？戻らなくていいのか？孫の旗が動いてるぞ？」
「げっ！……ありがと夏候淵！じゃあね二人とも！」

そっつい、俺は走っていった。

「ぜーはー……ぜーはー」

鎧を脱ぎ、皆と合流する……あと、蓮華と祭さんは後の計画の為、今回の反董卓連合には参加していない。

「随分と遅かったわね？」

「結構……長話になっちゃって……」

「……馬鹿が」

思春の一言にダメージを受ける俺。

「うっ、冥琳、思春が苛める」

「……まあ、気に入られているから、良いではないか」

「そうですね」

「はいっ！とても仲が良さそうですね！
上から冥琳、穩、明命……って、」

「何処をどう見たら、仲が良さそうにみえる？」

声が揃う俺と思春。

「……ッ！」

周りの皆は笑いを堪えていた……でも雪蓮だけは大笑していた。
・

「……とにかく、華雄を挑発して誘き寄せるんでしょう？劉備と協力して」

「あれ？知ってるの？」

「これぞ、天の知識だよ」

「そういえば……劉備の所にも天の御遣いがいたな」

「なんだって!？」

その言葉に反応する俺。

「冥琳！そいつはどんなやつだった？」

「あ、ああ……何やら白く輝く衣装を身に纏っていたな」

「え？それって・・・」

咲は俺と同じ、上下黒の制服だ・・・まさか・・・北郷・・・一刀・・・？

「・・・あ！敵が動きました〜！」

穩の言葉に意識を戻す俺。

「よし！全軍・・・」

「あ・・・すいません嘘でした〜」

あ、冥琳がずっこけた。

「嘘ってどういう事？」

「多分、華雄が突っ込もうとしたけど、張遼に止められたんだろうな」

「何だと・・・？」

華雄〜

「離せつ張遼！！あんなにこけにされて黙っていられるか！」

「待ちつてば！あんなに見え透いた手えや！咲が言ったこと忘れたんか！？」

「くっ……だがあいつ等は私たちの武を愚弄しているのだぞ！それを許せるとでもいうのか！」

「ウチかて許せへんよ！せやけどウチらは策のために時間を稼がねばならんのや！」

「くそっ……うあああ！」

亮

「……ちっ、動かないなあ」

「不味いですねえ、時間が経てば経つほど相手が冷静になっています」

「どっつするか……」

「……私、ちょっと袁術ちゃんの所にいつてくるわ」

「雪蓮?どうしたの?」

雪蓮に聞く冥琳。

「……ちよつとね、後で話すわ」

.....

戻ってきた雪蓮はすぐ冥琳に言う。

「……冥琳、さつさと軍を動かすわよ」

「ん?いきなりどうした?」

「許可を取ってきたの……私達は袁術ちゃんの命令で劉備軍と連携するわ」

「……それを許すか。つくづくだな、袁術は」

やれやれといった顔で言う冥琳。

「……まっ、とにかく袁術のやつが気を変えないうちに急ごうぜ」

「そうしよう……興覇!幼平!」

「はっ！」

「はいっ！」

「劉備の横まで前進する。その後は華雄の挑発に参加するぞ」

「「御意！」」

「挑発には、私も出るわね」

「「却下」」

俺と冥琳がすぐ雪蓮の案を却下した。

「却下は却下よ……このままじゃ、一緒だし……私という餌があればすぐ食いつくわよ」

「……文台様を絡めて挑発するのか？」

それに頷く雪蓮……そういや、華雄って孫堅に痛い目にあっただけ。

「……わかった。興覇、幼平。二人とも……頼むぞ」

「「……」」

「よろしくね。冥琳と穩、そして亮は後曲で部隊を指揮……釣り上げた大物を逃さないでね」

「ああ、わかったよ、雪蓮・・・気を付けてな？」

「うん・・・ありがと亮」

そうして始まる挑発・・・こつちまでは聞こえるものの、詳しくはわから・・・

「え？」

見てしまった・・・まだ挑発してる途中だというのに、まだ戦闘準備も出来てないというのに・・・華の旗と張の旗が動いていた。それを見た瞬間、俺は無我夢中で雪蓮の元に走り出した。

「しえれーん！」

「え！？亮！？」

「敵が来る！くそつ、完全にタイミングをずらされた！」

「そ、それはいいけど、早く引かないと亮が」

『敵門、尋常じゃない早さで開きました！旗は、漆黒の一字、華雄です！後ろに張の旗も見えます！』

「くつ・・・亮！早く逃げなさい！」

こうして戦いの火蓋は切って落とされた・・・

「はあっ！」

「ぐわあ！」

一人斬り捨て、雪蓮が叫ぶ。

「興覇！幼平！ここはいいから、亮を！」

「はい！」

「はっ！」

そして俺は、敵が近すぎるせいで、変身できずにいた。

「てりやああ！」

「うわあ！？」

また一人峰打ちで倒す。

「食らえ！」

が、鏝迫り合いをしていた兵士に蹴りを喰う。

「ぐわあっ!?!」

この兵達は黄巾賊と違い、動きが洗練されている・・・不利なのは明白だった。

「（唯一の救いは、思春や明命の鍛練のおかげで、太刀筋がよく見えることか）」

そしてまた一人、また一人と倒していく。

「舐めるなっ!」

「あっ・・・」

俺の手から剣が飛んだ・・・

「死ねえ!」

向かってくる一人の兵。

「う・・・うわああ!?!?く、来るなあああ!」

俺はパニックになりながら・・・偶然懐にあった・・・そう、この世界に来たときの荷物から見つけた短刀・・・それを取り出し振り回したその時、

「ぐわ・・・!?!」

嫌な感触が手に伝わり、恐る恐る目を開けた・・・そこには鎧の隙

間を抜け、兵士に短剣が突き刺った・・・そして兵士が力なく倒れていき、血のついた短刀が目にはいる。

殺した。

その言葉が頭に浮かんだ瞬間、何かが切れた。

「う、うわあああ!?! わああああ!?! うわあああ!?!」

叫ぶ。ただひたすら叫ぶ。獣のように。

「殺した! オレガコロシタ! ウワアアアア!」

そこに明命と思春が駆けつける。

「おい! 亮、しっかりしろ!」

「落ち着いてください亮様!」

「うわああああ! あああああ!」

「く、明命! 頼むぞ!」

そっぴい、亮に手刀を落とす、気絶させる。

「え、でも思春殿は……」

「いいから早く行け！」

「は、はい！どうかご無事で！」

そう言うなり、明命は亮を抱え退いていく。思春は自分の鈴音を構える。

「貴様等……仲間を傷つけた罪受けてもらっぞ……」

鈴を鳴らし、走り出す。

「鈴の音は、黄泉路を誘う道しるべと思え！」

走りながら思春は考えていた。

「（あいつは……亮は、立ち直れるのか……？）」

そう胸に思いながら……

反董卓連合了（後書き）

はい、今回もゲストをお呼びしたいと思います。・・・呉の名将周泰こと明命さんと、ちらつと名前だけ出てきた北郷一刀さんです。

明命

「は、はい！よろしくお願いします！」

一刀

「どうも、北郷一刀です・・・ええと、周泰ちゃんていいのかな？」

明命

「はい！一刀様！」

では、感想をどうぞ。

明命

「えっと・・・やはり、亮様がこの後どうなるかが気になります！」

一刀

「俺は自分の出番かな・・・まだ出れるかわからないけど」

そこは、考え中です。

一刀

「でも、出番は欲しいかな・・・ほら、オリキャラがでる作品って大体俺ははしよられるじゃん」

明命

「あうう、一刀様、がんば、がんばなのですよ」

「ありがとう周泰ちゃん・・・」

では、今回はこんなところで・・・

明命

「次回、真似と開閉と世界旅行！」

一刀

「是非見てくれよ！」

それではまた次回会いましょう。

反董卓連合の終焉（前書き）

はい、まるでジェットストリームアタックみたいな感じに進みますが、是非見てください。ではどうぞ。

反董卓連合の終焉

咲

「げほッ！げほッ！・・・何とか成功したか・・・」

何故咳き込んだかというところ、霞たちを支援するために扉を“開けた”のだ・・・しかし、距離が離れすぎているため、集中力を最大限にキープレードに高め、無理矢理距離を広げたのだ。

「・・・くーっ、無理をしすぎたか・・・」

「ちよつと、大丈夫！？」

詠が心配して声をかけてくる。

「あ、ああ・・・なんとか・・・」

「失礼します！・・・張遼様、及び華雄様が敗北し、撤退しました！」

「・・・くそッ、ダメだったか・・・」

「こうなったら、あの二人になんとかしてもらえないかね・・・」

「・・・」

「・・・月、気にするな・・・絶対に勝ってみせるぞ」

「……………めんなさい」

……………くそっ、絶対に勝って見せる……………

亮

ここはどこだ……………？真っ暗だ……………

「う……………うう……………」

だれ？……………どうしたんだ？

「う、それは……………」

それは？

「お前に刺されて痛いんだよ」

ひっ！…うわああああ！くるなあああ！……………

「……かり……ださい！」

……え？目の前の兵が消えていく。

「しっかりしてください！」

あ、ああ……

「しっかりしてください！亮様！」

……明命！！

「……ハツ！？」

いきなり目の前に景色が戻る……天幕の中だった。

「亮様！……正気を取り戻したんですね……よかった」

「明命？正気を……っ！？」

周りを見て愕然とする。所々ボロボロで周りは散らかり放題……そして明命には、体のあちこちに引っ掻き傷や、痣が出来ていた。

「ま、まさか……俺が」

「い、いえ！違います！これは、さっきの戦い・・・」

「戦争して、引つ掻き傷なんて出来るわけないだろ!？」

「う・・・」

「もう一度聞くぞ・・・俺がやったんだな？」

「・・・はい、いきなりうなされ始めて、そして、暴れだしたんです」

「・・・そんな」

「で、でも亮様！私の事はきに・・・」

次の瞬間、俺は明命を抱き締めていた。

「え!?!り、りり亮様!?!」

「ごめん・・・ごめん、ごめん！俺が弱かったから!・・・う、う
う・・・」

泣きながら明命に謝る俺。そんな俺の頭を撫で、言う明命。

「・・・本当に気にしないでください・・・私は大丈夫です」

「うううう・・・ごめん・・・ごめんな・・・」

それから時間が立ち・・・

「落ち着きましたか？」

「ああ・・・悪いな明命」

「いえ、何度も言いますが、気にしないでください」

にっこりと笑いながら俺に言う明命。・・・そして、覚悟を決めた。

「亮様？」

「・・・俺は戦う！世界を平和にするために、争いが無い世界にする・・・その為なら・・・誰とだって戦ってみせる！」

「亮様・・・」

「さあ、いこう、明命」

「・・・はい！」

咲

「終わり……か」

恋達まで負けてしまった……もう、どうしようもない。

「……詠、月。逃げる」

「……ですが」

「あなたはどつするのよ!？」

「足止めだよ……」

「ほう、お前が私を足止めすると言っのか」

「っ!」

声が出た方……そこには、劉備軍の名将、関羽が立っていた。

「……詠、月……逃げる!」

「まって……君達を殺すつもりはないよ」

そう言いながら関羽の後ろに現れたのは……白く輝く服……制服に身を包んだ、北郷一刀がいた。

「まさか……北郷一刀がいるなんて……」

「……?……貴様はご主人様の事を知っているのか?」

「多分・・・俺の素性もわかってるだろ？・・・聖フランチェスカの学生さん」

「・・・まさか、お前は・・・日本人・・・か？」

「ピンポン・・・だいせいかーい・・・それで、月達をどうするつもりだ？」

「・・・勿論、助けるつもりだ」

「助けて、お前になんの得がある？」

「得なんて必要ない。・・・困っている人を助けるのに、理由はいらないだろう？」

「・・・条件がある」

「貴様！只でさえ命をたす・・・」

「いいんだ愛紗あいさ・・・それで？」

「まず一つ、仲間の命の保障」

「それは勿論・・・もう、恋やねねとは話しているよ」

「もう真名を許されたのか？・・・その二、俺とお前、それにもう一人の天の御遣いがあるはずだ・・・そいつを見つけたら、俺は出ていかせてもらう」

「それもOKだ。・・・三国志の関羽みたいなものだろう？」

「そうだな・・・でも、どうやって袁紹達を誤魔化す気だ？」

「えっと・・・朱里しゅり何かあるかな？」

そういつて、後ろにいた諸葛亮に声をかける一刀。

「はい！勿論です！それは・・・」

亮

「・・・大丈夫なの？亮？」

雪蓮が心配そうに聞いてくる。

「ああ。雪蓮、皆・・・心配をかけたよ、でも大丈夫だ」

「・・・覚悟を、決めたのか？」

思春がそう聞いてきたので答える。

「うん。．．．俺は戦う、俺だけ怖じ気づいてたら、死んでいった皆に申し訳がたたない」

「．．．そうか」

「ところで冥琳、穩。今はどついう状況？」

「ああ、それは．．．「伝令です！」なんだ!？」

兵士が慌てて、飛び込んできた。

「は、はい！洛陽に着いた劉備軍からの情報で、城の中から焼死体が二つ見つかったそうです！なお、劉備軍はその焼死体を董卓、賈馱の両名だそうです！」

「何だと!？」

「．．．大丈夫だな．．．」

「亮？どついう事？」

呟いていた事が聞こえたのか、雪蓮が聞いてくる。

「多分劉備の事だから、二人の死をでっち上げて、二人を保護したんだと思う」

「そうですね、あながち間違いでもないかもしれません」

「そうか・・・亮、それも天の知識か？」

「まあ、そういうものだよ冥琳」

「・・・だけど、何とも微妙な終わりかたですね・・・」

「仕方ないさ・・・因みに敵の武将はどうなった？」

「はい、呂布、陳宮の兩名は劉備に、華雄は行方不明、張遼は曹操に降つたみたいです」

よかった・・・取りあえず、誰も死んではいないんだな。でも、原作とはやっぱり違う・・・北郷一刀や俺、咲というイレギュラーのせいかな？

「・・・細かいことは後にして・・・今は洛陽に入ろうぜ」

俺達は洛陽に入り、黄巾党の残党にやられた町の復興に、力を注いだ。そして・・・

「しえ、雪蓮様！冥琳様！大変です！」

慌てた様子で走り寄ってくる明命。

「どうした？何かあったのか？」

「そ、それが！井戸がブワーツてなつてて、それで籠がドーンツて舞い上がつてて、すごいなのって感じです！」

「・・・何それ？」

「どんだけパニックしているのかまともに説明できていない。」

「・・・あつ、玉璽か・・・」

「と、とにかく何かすごいんです！こちらに来てください！」

明命に先導され、町外れの路地に向かった。

「ほら、あそこ！井戸からすごい光が放たれているのです！」

「なんだこの光は・・・」

「ああ、とても良いものが入ってるよ、引き上げてみな？」

「なにそれ。亮は何か知ってるの？」

「まあね・・・明命。よろしく」

「ええっ！？あ、あの・・・大丈夫なのでしょうか・・・？」

「大丈夫大丈夫。害はないよ」

「は、はあ。では・・・行きます！」

明命は命綱をつかい・・・すぐに何かを持って上がってきた。

「井戸にこんなものがありました!」

「何これ? うつつすら光を放っているみたいだけど」

「開けてみるよ」

「ん。・・・よつと」

「小さな・・・印鑑? 違う、これ・・・玉爾っ!?」

「なにっ!?!」

「ほらね、良いものだろ?」

「しかし・・・どうしてこんな井戸の中に?」

「分からんが・・・おそらく、董卓軍撤退の混乱の中、宮廷より持ち出されたものだろうな・・・」

「それを持ち出した人間が、黄巾党の奴らから逃げられないと悟って、この井戸に隠したんだろうな」

「天佑ね、これは・・・」

雪蓮が小さい声で言った。

「この天佑を使うか・・・明命! 幾人かの兵を洛陽の民に偽造させ、噂を流せ。・・・孫策が天より玉爾を授かったとな」

「はいっ!」

「大変だな雪蓮。・・・これからは徳ある王として振る舞わなくちやな」

「はぁ・・・めんどくさいなあ・・・」

「・・・頼むわよ?」

「はいはい・・・了解」

こうして、玉爾効果により、俺達兵は、かなりの利益を得ることが出来た・・・そして、ここに、反董卓連合の戦は終わりを告げた・・・

反董卓連合了終焉（後書き）

亮

「……はあ」

どうしましたか？

亮

「いや……女の子に抱きついて、泣くなんて……」

あー、恥ずかしいですね……

咲

「気にすんなよ亮。……俺なんて、自分の作戦を説明されずに終わってたぜ？」

亮

「あれって要するに、咲が、もし華雄を抑えられなかったら、挑発中に出撃して、不意をつく……だろ？」

はい、その通りです。

咲

「だから、キープレードを使って遠距離の門を素早く開けたんだよな」

はい、仰る通りです。

亮

「まあいつか……次回、真似と開閉と世界旅行！」

咲

「また次回もよろしく！」

それではまた次回会いましょう。

平和な時々呉（前書き）

今回は、幕間みたいなものです。短いですが……ではどうぞ。

平和な時々呉

「はあっ！」

カキインツ！

「……よし、そこまでだ」

「……ふうーっ……今日もありがと、思春、明命」

庭において、俺達は鍛練をしていた。

「ですが亮様、やはり最初に比べればだいぶ上達していますね」

明命に言われる。

「そう……かな？あんまり実感は無いけど……」

「まあ、武などそんなものだ……」

何か思春の様子がいつもと違うような……最近上の空になっていることもあるし……まさか。

「もしかして思春？蓮華の事が心配？」

「……ッ!？」

あ、凶星だな。……って、思春!?なんで鈴音を抜いてるの!?
なにこれ!デジャブ!?

「亮様・・・いい加減学習しましょうよ・・・」

「アハハハ・・・それじゃあさよなら！」

「待てっ！」

ああもう！なんでこうなる！？

スタタタタタ・・・ガチャ！バタン！

素早く走り、素早く扉を開け、素早く扉を閉める。

「はー・・・はー・・・疲れた・・・」

「おや～・・・いきなり私の部屋になんですか？」

このスローペースな喋り方は・・・

「ここ、穩の部屋だったんだ・・・」

「・・・穩、入るぞ」

「げっ、思春！？・・・穩！隠れてて！」

「はいっ？」

「入るぞ穩……どうした？顔が青いぞ？」

「い、いえ……なんでもないぜ……ですよ」

話し方を聞けばわかるように、俺が穩の真似をしている。

「まあ、いい……それより、亮の居場所を知らないか？」

「いいえ、見てませんよ」

「穩？何故か凄く汗が出ているが？」

「ははは……きよ、今日は暑いですからね」

「……快適な程の涼しさだが……」

「わ、私にとっては暑いです！」

「……わかった……亮を見かけたら教えてくれ」

「はい」

ガチャ、ボタン

……

「ふいー・・・疲れた〜」

「もう〜・・・いきなりなんですか〜？」

机の下から穩が出てくる。

「ごめんごめん・・・ちょっと追われてて

」というより、ホントにそっくりですね〜」

まじまじと俺を見つめる穩・・・てか今更だけど、胸が重い。まじで。

ガチャ、

「そつだ、そついえ・・・」

思春が再び戻ってきて何かを言おうとした瞬間、フリーズした。

「・・・そつか、どっちの穩が亮だ？・・・大人しく答えた方が身のためだぞ」

そつは言つが、どう見ても俺に視線が向いています。・・・後ろの窓は空いているか・・・

「さらばっ!」

素早く窓から飛び降り、走り出す・・・走りにくい!

「逃がすと思ったか・・・?」

いつのまにか目の前に現れた思春が、鈴音を構え、突っ込んできた。

「くっ・・・だが、穏だつて戦えるんだ!」

そういい、九節棍を振るう・・・振るう・・・

ぽよんっ。

・・・胸に引っ掛かりました・・・

「・・・」

「い、いや、まって・・・今度こそ!・・・とりゃあ!」

ぽよんっ。

「・・・」

「・・・ちくしょおおおお!」

この後思春によって再びボロボロにされました。

「くっ……いつてえっ……」

俺は体を擦りながら廊下を歩いていた。

「あつ、亮様！大丈夫……じゃないですね」

明命が歩いてきて、俺に声をかけてくる。

「……察してくれてありがとう……」

「亮様？今はお暇ですか？」

「……？暇だけど……何？なんかあるの？」

「はいなのです！実は私、亮様と手合わせがしたいのです！」

いきなりそんなことを言い出す明命……マジすか。

「えーと……」

「……(じーっ)」

そんな子猫がねだるみたいな顔しないで……

「……わかったよ、やるっ?」

「……ッ！はい！」

そして中庭……俺はケータイをいじる。

「いいか？明命」

「はい！何時でもどうぞ！」

「モーションキャプチャー！アサシン！」

今回は、第五次聖杯戦争のアサシンに決めた……決めた理由は刀だから。そして、言ってみたかった言葉を言う。

「私はアサシンのサーヴァント、佐々木小次郎」

「……いきます！」

明命が踏み込んでくる、それに合わせ、刀を振るう。

カキインッ！

「……今度はこっちから行くぞ！」

素早い斬撃を浴びせる。

「……くっ、この、くうう……」

明命の目に焦りが見えてきた……よし。

「明命……避けれるなら……避けてみな！」

そっ、いい、明命に背中を向ける。

「!?!?……敵に背中を見せるとは……!」

明命が突っ込んでくる……かかった。

「食らえ……秘剣、燕返し！」

「えっ!?!」

ヒュンツ、ヒュオツ、ブオンツ!……たった一振り、なのにたくさんの斬撃が襲い……明命の魂切こんせつをぶっ飛ばした。

「……」

「……出来た……」

二人揃って呆然としていたが、明命が我を取り戻し、言う。

「……す、凄いです!今のはどうやったのですか!?!」

「……い、いや……俺もよくわからい……」

取りあえず変身を解いとくか……あれ？

「……うそ……？もう、げん……か……い？」

「亮様!？」

強い眠気が襲ってきた……どうやら、真似だけなら、たくさん持つけど、戦ったり、なにか力を使うとすぐに限界が来るみたいだ……

「ごめ……明命……少し……また……ねむ……る……」

「え、あ、は、はい！わかりました！」

よろしく。……そう言って、俺は眠りに着いた……

平和な時々呉（後書き）

亮

「なあ？作者？そんなにFate好きなのか？二人目だし」

はい、というよりは、男キャラになることが少なくなると、君にそういう趣味があるものと思われてしまいますから。

思春

「だが・・・穩の真似をしていたのだが？」

あつ、貴女は、喋り方が書きにくい思春さんじゃないですか？

思春

「・・・・・・・・（チャキツ）」

すいません。まじ調子乗ってました、許してください。

亮

「はあ・・・とにかく、今回は咲達だから・・・頑張れよ？」

はい。

思春

「・・・次回、真似と開閉と世界旅行・・・」

亮

「是非見てくださいねー！」

思春

「そつだ亮、後で話があるから、私の部屋にこい」

亮

「えっ」

「ご愁傷様〜・・・それではまた次回会いましょう。」

平和な時〜蜀（前書き）

中々ネタが思いつきません・・・ですが、これを読んでくれる皆さんの為に頑張って考えました。ではどうぞ。

平和な時〱蜀

あの反董卓連合からしばらく経った今・・・俺、恋は武将として。月と詠は一刀付きのメイドさん。ねねは軍師と、それぞれの役割を貰った。あとは、皆から一刀と同じく天の御遣いだからと真名を呼ぶことを許された。

「・・・ほい、一丁上がりっ」

「早っ！？お前、ホントに日本人かよ咲？」

「詠に散々叩き込まれたからな・・・っってお前、半分も終わってないじゃん」

今一刀の部屋にて執務に励んでいる。

「いいよ、半分貸してよ、やるから」

そんな感じで俺達はノルマを終わらせたので、お茶を飲むことにした。

「失礼します・・・ご主人様、咲さん・・・お茶をお持ちしました」

「まったく、月にこんなことをさせるんじゃないわよ」

月に続いて、詠が文句を言いながら入ってくる。

「そう言うなよ詠。一刀のおかげで、今俺達は生きていられんだぜ

「？」

「それは、そうだけど・・・」

「詠ちゃん・・・私はご主人様に会えてよかったよ？」

「月っ！？なに血迷ったことを言ってるの!？」

「何が血迷ったことなんだよ・・・」

詠の言葉に若干ショックを受ける一刀。

「・・・詠、ちょっと」

「ん？何よ？」

俺は詠を扉の外に呼んだ。

「・・・なあ、詠。・・・月の様子はどうだ？」

「・・・楽しそうよ・・・忌々しいけど、あいつのおかげね」

「そっか・・・あんな笑顔、全然見たことなかったから・・・」

「まあでも、あいつが月に手を出そうものなら・・・」

恐っ。つか、結構しんみりムードだったのに・・・まあいいや。

「んじゃ、中に戻るか・・・ああそうそう」

「何？」

「この眼鏡、ありがとな、詠」

その言葉に顔が赤く染まる詠。

「べ、別に大したことじゃないわよ！ただ眼鏡の予備が有っただけで・・・別に大した意味は無いんだからね！？」

うわあおう・・・始めて間近でツンデレを見たかも・・・

「はいはい、それじゃあ中に戻ろうか？」

「・・・ええ」

中に戻り、月と一刀がイチヤイチヤしてるのを見て、詠が暴れたのは、別の話・・・

取りあえず俺は仕事が終わったので、気分転換に廊下を散歩していた・・・が、いきなり扉の中から「うあいうあええいうあああ」といった声がしたので、中に入ることにした。

「入るぞー？」

中に入るとそこには、俺たちとは全然比べ物にならない程の書類に囲まれて、だばーと涙を流している、本来の蜀の大将、劉備こと桃香うかがいた。

「・・・ああ・・・咲君だあ・・・」

「桃香・・・凄く大変そうだな・・・」

「うんゝ・・・次から次に増えるから、全然減らないよゝ」俺は一枚を見て、判断する。

「・・・俺には無理だな・・・軍の中心、桃香や愛紗、一刀じゃなきゃダメだな」

「あ、うん大丈夫。これは私の仕事だから、私がやらなきゃ意味がないよ」

「そうか・・・でも、さつき愛紗とすれ違ったときに、これと似たようなものを持って、愚痴をこぼしてたけど・・・？」

「はづうっ!?!？」

本当に分かりやすいなあ。

「ま、頑張つてね桃香？月か詠に会ったら、お茶を持ってこさせるよ」

「あ、うん。またね咲君」

そう言って外にでたとき再び扉から「あうあいうあいえああ・・・ゾンビかお前は。」

ここは中庭。今俺は・・・

「よつと!」

キーブレードをヴェントスみたいにスケボーっぽいやつにして乗っていた。・・・まさかここまで再現されていたとは・・・神様GJ。

「うわぁ!?!」

・・・が、スケボーなんてやったことないので全く乗れません。今も背中から本気で落ちました。

「うゝ・・・いたた・・・」

けど、これに馴れとけば逃げるときに役に立つ（既に戦う概念が無い）。

「よつ!・・・うわぁぁ!速い速い!?!速すぎて操作が出来ない!」

そんなとき、視界の端に、見覚えのある、魔女っ子帽子が目に入った。

「あ、危ねえー!?!来るなあぁ!」

「え?・・・あわわわ!?!」

ドカンっ!!!

派手な音がし二人とも吹っ飛んだ。

「いたた・・・おい！大丈夫か！？」

素早く少女に走りより、声をかけるが、ぐったりとして、ピクリとも動かない。

「嘘だろ・・・打ち所が悪かったのか？」

とにかく、一旦木の陰に移動させる。

「そういえば、顔に水をかけると目を覚ますって聞いたことがあるな、水を取ってこよう」

キーブレードをその場に置いて走り出す・・・一応息をしていたから大丈夫だよな？・・・亮がいれば、あいつ、姉の看護師の本を暇潰しで読んでたらしいし・・・家の姉とは違うなあ・・・

「つーわけで、水を持ってきた訳だけど・・・」

ピチャッ、と顔に水をかけてやる・・・すると、

「う・・・ううん・・・」

「お、目え覚めたか雛里？」

「え……？あわわ！？咲さん!？」

この内気そうな少女はかの有名な軍師、鳳統。真名は雛里ひなり

「ごめんな？俺が変なことをしていたせいで……」

「い、いえ……その、周りを見なかった私もわるいですから……」

そう言い、立とうとした雛里がふらつき、倒れそうになる。

「危ない!……やっぱり頭でも打ったか……?とにかく、しばらく横になってろよ」

そういつて雛里を横にならせる。

「あわわ!?!い、いえ、本当に大丈夫でしゅから!？」

物凄く暴れる雛里を無理矢理横にさせる。

「ダメだ。頭は後が怖いんだから、暫く横になってなさい!」

悶着していたところ、後ろから、バサツッと何かが落ちる音がしたので振り返ると、そこには、かなりの有名軍師、諸葛孔明こと朱里がいた。

「は、はわわ……!ま、まさか雛里ちゃんと咲さんがそういう関係だったなんて……」

「え!?!あ、いや違うぞ!?!これは……」

「そうですねよ朱里ちゃん！咲さんは私を寝かそうとして・・・」

「そ、そんな昼間から、二人で横になって、くんずぼぐれつ・・・」

だあもう！？なんで軍師には一癖も二癖もあるんだ！？公孫贄みたいに普通の人が欲しいよ！・・・なんかいま、どっかから「普通に悪かったな！」なんて聞こえてきたけど、気のせいだな。

「は、はわわ・・・すいませんでした・・・ごゆっくり！」

「ああ！朱里！？なんか見たことあるぞそれ！？・・・雛里、変な誤解を生む前に、朱里の誤解を解くぞ！」

「は、はい！」

その後・・・朱里を追いかけ、誤解を解くのに、数時間を要した・・・
・疲れる。

そして再び中庭。取りあえずキープレードがなきゃ魔法はおろか、戦闘も出来ませんでは話にならないので、現在弓の練習をしていた。

「ふう・・・よし」

矢を引き・・・放つ！

ヒュンツ・・・ルルル、ポテツ。

的に届くことなく落ちました。見事な放物線を描いて。

「・・・クスッ」

笑い声が聞こえたので振り返るとそこには、愛紗がいた。

「・・・愛紗、見たね？」

「い、いえ、すみません咲殿。あまりにも可笑しかったもので・・・」

「・・・そりゃまあ、本物なんて初めて射ったし・・・」

「それであんな、変な構えだったのですね」

「・・・じゃあ愛紗やってみなよ」

弓と矢を愛紗に渡す。

「あ、はい。わかりました」

すぐに弓を構える愛紗。中々様になってた。

「・・・ふっ！」

放たれた矢は、俺とは違い真っ直ぐに飛んでいき、真ん中とはいかないものの、的には命中していた。

「おお・・・」

「・・・こんなところでしょうか・・・もしよろしければ、私が教えますが？」

「・・・お願いします」

その後も、型を整えたり、射つてみたりして、夕暮れまでずっと練習をしていた。

「痛っ・・・」

指に痛みが走り、指を見ると指が切れ、血が出ていた。

「・・・今日はここまでにしましょう・・・もう辺りも暗いですし」

「そうだな・・・結局、的に当たったのは三本くらいか・・・」

「上手い方ですよ咲殿は、ご主人様にもこれくらいのやる気があれば・・・」

溜め息を吐きながら言う愛紗・・・確かに一刀はあっちでは強い方かもしれないけど、ここでは、俺達は非力すぎるからなあ・・・

「・・・痛てて・・・少し包帯でもまくか、予想外に血が出る」

「そうですか・・・私は戻りますが、また今度指導しますよ？」

「ああ、よろしく」

んで、詠に治療を頼めば、「本当にあんたはいらんことするんだか

ら！』と怒られてしまった・・・しめんなさい。

平和な時〜蜀（後書き）

今回は、主旨を変え今までとは違う人をお呼びします。

アーチャー

「・・・いきなりこんなところに連れてこられてそれが・・・」

ルーク

「まあ、いいんじゃないかな？」

というわけで、今回は Fate よりアーチャーとテイルズオブジァ
ビスより、ルーク・フォン・ファブレ（短髪）をお呼びしました！
では二人とも何か一言。

アーチャー

「理想に溺れ・・・溺死しろ」

ルーク

「俺は悪くねえ！」

いや！？そう言う一言ではなくて、感想を・・・

ルーク

「んなこと言っただって・・・俺の出番、孫策さん・・・だっけ？に
瞬殺されたし・・・」

アーチャー

「私は弓を投影しただけだしな・・・」

亮

「しかも、それ俺だし……」

う……ですが……その……じゃあ何かをしてください。

亮

「二人とも、GO!」

アーチャー

トレースおん
「投影開始……偽・螺旋剣!……壊れた幻想!」
カロドボルグ
フロックン・ファンタズム

ぎゃあああああ!?

ルーク

「響け、集え、全てを滅する刃と化せ!……ロスト・フォン・ド
ライーブ!」

うぎゃあああああ!?

亮

「といった感じで二人の力を見れたので今回は、ここまです」

アーチャー

「次回、真似と開閉と世界旅行……」

ルーク

「絶対に見てくれよな!」

亮

「それではまた次回会いましょう!」

もう・・・いや・・・ガクッ・・・

V S 袁術 (前書き)

すいません・・・遅くなりました・・・では袁術戦・・・どうぞ。

V S 袁術

反董卓連合から早二月が経過した。遂にこの日が来た。孫呉の復興の 때가――

「冥琳？仕込みは？」

「仕込みはほぼ完了。決行の日取りは伝えているからそろそろ袁術に一報が届く頃だな」

俺の質問に対してそう自信満々に答える冥琳。

「ふーん・・・で、さっきの報告にあった呂蒙って子。本当に信用できるの？」

「じょぶじょぶ大丈夫。俺が言うんだから間違いなし！」

「そう・・・ならその子は蓮華の右腕として育てましょう」

「ああ、そうしよう」

「・・・ところで、こっちの準備はどのなの？」

「全て完了しているわ。あとは事態の推移を見守るだけってところね」

「了解。・・・準備万端。いよいよね」

その時、館の外から複数の蹄の音が聞こえてきた。

「・・・・・・・・・・来たか」

「ああ。待ちに待った一報。我らの工作が成功した・・・・という」とだろくな」

「よし・・・・・・・・これで」

「ええ。私たちの戦いがいよいよ始まるってこと・・・・」

「いよいよね。・・・・雪蓮、亮。ここから先はあなたたちの演技しだい・・・・・・・・頼むわよ？」

「了解」

「まかせろ」

そして、張勳がやってきて・・・・

「―――ということですね。袁術さまは暴徒の鎮圧をお望みなのですから、当然、行ってくれますよね、孫策さん」

「はあ・・・・・・・・」

「あれ？どうかしました？」

「いや・・・張り合いが無い相手って、ほんと、疲れるものだなあって思ってたね」

「おおー。英雄と言われていい気になってる、孫策さんらしいお言葉ですねー」

「はあ・・・」

「こっちは俺のため息・・・少しはおかしいと思えよ・・・」

「・・・だけど袁術さまのご命令ですから、すみませんがすぐに行ってもらえますか？」

「・・・了解。全ての兵士を連れて行くけど、問題ないわね？」

「相手は十万人って話ですからね。当然問題無しですよ」

「分かったわ。じゃあ袁術ちゃんに、頸を洗って待ってなさいって伝えておいて」

「はあ〜い」

そして張勳が去ってしばらく・・・

「・・・開いた口が塞がらないとはこのことだな。全く・・・」

「まあ楽だから良いんだけどさあ・・・最後の皮肉にも反応がなさ

過ぎて、なんかつまないわね」

「……あいつ、真面目にやれば有能な軍師なのに……」

「そうなの……？まあいいや。興覇、幼平」

「はっ！」

「はいっ！」

「移動の準備、よろしくね」

「「御意！」」

「では私は兵站の方を担当しますね」

「頼む。……準備ができ次第、すぐに出陣しよう」

「了解。……亮、本当に大丈夫？」

「まーかせとけて」

そして時は変わり袁術……

「も、申し上げま……す！」

「あや？どうかしましたかー？」

のんびりとした声で聞く張勳。

「そ、そ、そ、孫策殿が・・・孫策殿がつ！」

「なんじゃ。孫策がどうかしよつたのか？」

「まさか孫策さん、死んじやつてたりして？」

「目の上のたんこぶが居なくなるのは素晴らしいことなのじゃ」

「そ、そんなことはありません！孫策殿が、は、反乱を起こしました！」

「な・・・なんじゃとーっ！？」

「孫策殿は江東に潜んでいた孫家の旧臣を呼び寄せると共に、江東で一揆を起こした農民たちを吸収し、勢力を拡大！」

「現在、国境線にある我らが城を次々落とし、こちらに向かってきております！」

「ぐぬぬーっ・・・孫策のやつめ、妾を騙しておつたのじゃ！」

「そつみたいですねー」

「ですねー、じゃないのじゃ！この状況、七乃が何とかせい！」

その言葉にぎよつとなる張勳。

「な、何とかですか？」

「そうじゃ！七乃の力で孫策を懲らしめるのじゃ！そして二度と妾に逆らえないように、たくさんお仕置きするのじゃ！」

「……（孫策さんを懲らしめるなんてこと、出来るのかなあ……）」

「何か言ったか？」

「い、いいえー、なにもー あ、はは……じゃ、す、すぐに迎撃準備を開始しちやいまーす！」

「………待てよ」

「………？誰じゃ？」

袁術が扉の方を見ると、そこにはとても珍しい服装をした少年が立っていた。

「だ、だれですかあ？入り口には見張りがいたはず……」

「ああ、あの雑魚どものことか……ぐっすりとお寝ん寝してるぞ？」

「わ、妾になんのようじゃ!？」

袁術の言葉に顔に笑みを浮かべながら少年は答えた。

「ハっ・・・ただ単にあんたに力を貸そうっただけだよ・・・勝つ方法もあるしな」

「ホントかや！？・・・よいではないか。その策を聞いてやるっ、お主、名は？」

「俺か？俺は・・・そうだな、ラタトスクと呼んでもらおうか」

「らたとくす？」

「違う、ラタトスクだ」

「そうですね、美羽さま、らたとくすさんに失礼じゃないですか」

「ラタトスクだ！」

「まあいいのじゃ、それよりお主、その策を申してみよ」

「そんなの簡単だ・・・思いつきり皆出陣しまえばいい」

「な、そんな無茶な・・・」

「し・・・孫策の奴がいきなり、総大将が出てきたら、びっくりするだろう？そこを突いて、全軍突撃。・・・これで勝てる」

ラタトスクは笑いながら策？を話した。

「お、おお、見事じゃ！そうじゃな、妾が出れば孫策はビックリす

「るのじゃ！」
「そう言い、椅子から立ち上がる袁術。」

「よし。なら、さっさと全軍出撃準備じゃ！孫策を蹴散らすぞ！」

「・・・ダメだこいつら、早く何とかしないと・・・」

「そう兵士が呟いた言葉は、誰の耳にも入らなかった・・・」

そして、いま袁術を含め、全ての兵士が城の外に並んでいた。

「・・・随分と簡単だったな・・・」

「そうラタトスクがいった瞬間、戦が始まった。」

「らたとすくよ、お主も戦って来るのじゃ」

「ラタトスク・・・いや、合ってるか。ああ、任せろよ」

「剣を引き抜き構えるラタトスク。」

「・・・？何をしてるのじゃ？」

「・・・ハッ・・・」

「・・・？」

「ハッハッハッ！闇に吞まれる！アイン・ソフ・アウル！」

ラタトスクは技を叫びながら剣に溜まったエネルギーを解き放った。
・・・袁術の兵を巻き込んで。

「な、何をしておるのじゃ！？妾の兵が壊滅してしまったではないか！？」

「・・・お前ってホントバカな・・・」

「な、なんじゃと？」

「俺は・・・孫策の仲間だよ」

「な、裏切ったと言うのか！」

「裏切る・・・？ハッ、もとかからお前の仲間じゃねえよ・・・じゃあな・・・獣招来！」

そう言い放ち、ラタトスク・・・“俺”は技を使い素早く空いた道を駆け抜け、雪蓮のもとに向かった・・・

「・・・お待たせ！」

雪蓮の陣に思いつきり跳んで入る。

「……!?!?……って亮か、驚かさないでよ」

雪蓮が笑いながら言った。

「お前のおかげで、袁術の兵を削れた。……しかも総大将を城から出すことにも成功した……言うこと無しだな」

冥琳に誉められ、少し照れる俺。

「それにしても亮様!あの光は何ですか?」

明命が不思議そうに聞いてくる。

「うーん……魔力と言うか、氣と言うか……」

「……そんな事はどうでもいい……」

「お、思春。愛しの蓮華には会えた?」

「………つ!?!?」

素早く俺の首に剣を突きつける……

「い、ごめんなさい……」

「久々に面白い奴じゃなお主は……」

「全くね……」

「あ、祭さん。蓮華。久しぶり」

久々に見た祭さんや蓮華に声をかける・・・その時、

「あなたが天の御遣いー？」

「・・・」

聞き慣れない声に目を向けると、そこには・・・

「えっと・・・孫尚香と・・・呂蒙だね？」

「うわあ、凄おい！そうだよ、私は孫尚香！真名は小蓮だよ。シャオって呼んでね」

「ああ、よろしくシャオ」

「ねえねえ、それも物真似なのー？」

あ、忘れてた・・・解除つと・・・

「うわー、ホントに姿を変えられるんだあ・・・」

「まあね・・・まだ余裕か、アイン・ソフ・アウルを撃ったから結構怖かったんだよな」

「あい・・・？」

不思議そうに聞いてくる雪蓮に答える。

「まあ、あの姿での、あの光を出す掛け声みたいなものかな・・・
それより、そっちは呂蒙だよな？」

「は、はひっ！初めまして！」

「落ち着きなさい亞莎」

「はいつ・・・蓮華様！」

勢いよく・・・顔を隠しながら、俺に話す。

「わ、私は、姓は呂。名は蒙。字は子明。・・・真名は亞莎です！
よろしくお願いします！」

「こちらこそよろしく亞莎。俺は大澤亮。亮って呼んでね」

「は、はひ！亮様！」

様付け二人目か・・・がつくり。

「それと亞莎？人と話す時はちゃんと顔を会わせような？別に亞莎
の目付きは気分を悪くしたりしないから」

「・・・へえ、やっぱり分かってるのね、亮」

蓮華が感心しているようだった・・・なんか誇らしい。

「え、い、あ、あう・・・」

亞莎困惑してるけど・・・思いきり」「どうして?」「感がにじみ出てるし・・・」

「ま、いいや・・・これからは仲間なんだ、段々慣れればいいよ」

「は、はひっ!」

「・・・顔合わせもすんだところで、戦に戻るぞ。亮、まだいけるか?」

「微妙だな・・・あんな大技を使っちゃったから・・・後が怖い」

「なら待機していてくれ・・・お前は充分活躍したからな」

冥琳に言われたのでその言葉に甘える事にした・・・

それから数刻・・・遂に袁術軍の前線が崩れたという報告が入った。

「雪蓮!袁術は多分、裏口に向かっている!」

「それも御遣いの力?」

「ああ！」

「分かった・・・行ってくるわ」

「・・・頸を取ってこいよ？」

「勿論」

雪蓮が行ってしばらく・・・雪蓮が戻ってきた。

「あれ？頸は？」

にやけながら雪蓮に聞く。

「逃げられたの・・・」

「逃がしたの間違いじゃなくて？」

「・・・ぶー、亮には隠し事ができないよー」

「天の御遣いって便利だからね・・・だから、お前も・・・（ボソッ）」

「え？何か言った？」

「なんでもないよ・・・それより、遂にやったな」

「そうね・・・母様からの宿願の・・・始まりよ、やっと」

こうして、対袁術戦は幕を閉じた・・・そして・・・運命の

時は近づいていた・・・

V S 袁術（後書き）

亮

「言い訳は聞くぞ？」

はい。真・恋姫夢想蜀編と、hackをやっている。

咲

「なんでいまさらhack・・・恋姫はまだわかるけど・・・」
だってクリスマスに買ったもんで・・・遂ハマってしまった・・・

亮

「つーか、蜀編知らないで咲の話を書いたのかよ？」

はい。断片的にしか知りません・・・

咲

「まさか、それであんな原作と違う話に・・・」

・・・

亮

「黙るなよ！」

咲

「信じらんねえ・・・そんなんで・・・」

因みにFateも立ち読みなどしたり、パロディゲームをやったり

しましたが、細かいところはわかりません。

亮

「・・・咲」

咲

「任せろ・・・空間よ、開け！」

あれ？地面に穴が・・・アッーーーーー！！

咲

「例えるなら、東方の、八雲紫みたいなものかな？」

亮

「細かいな・・・では、作者が消えてしまったのでこれまでです・・・
・それでは次回、真似と開閉と世界旅行！」

咲「ではまた次回会いましょう」

安らぎの時々呉(前書き)

なんとか更新出来ました・・・では幕間をどうぞ

安らぎの時々呉

ここは中庭・・・今何をしているかというところ・・・

「・・・助かった・・・」

俺は逃げていた。誰から？・・・穩から。

「原作の知識がなかったら、やられていた・・・」

知っている人は知っているだろうが、穩は本を見ると興奮してしまうという、困った性癖をもっていた。・・・ちなみになぜ本を読んだかというと、俺に勉強を教える（という名の大義名分）というわけで本を手にした。そして原作の知識が脳裏に蘇った俺は素早く逃げてきた・・・ってわけ。

「・・・亮？」

「すみませんごめんなさい！逃げてすみマセンでした！」

「・・・プツ、何を言っているのよ」

「あれ？蓮華じゃん、どうしたのさ？」

辺りを見渡すと、そこには、椅子に座ってお茶を飲んでいる蓮華がいた。

「ただの休息よ。あなたは？」

「……色欲魔から逃げてきました……」

「は？」

怪訝な顔をする蓮華。

「いや、こつちの話。……思春は居ないのな」

「ええ。今日は海軍の訓練をしているわ」

「なーんだ……じゃあ、今日は鍛練は無しなのか……」

少しガツカリする俺。そんな俺に声をかける蓮華。

「ああ、いつも思春と鍛練しているのは知っているわ……なら、私とする？」

「えっ？蓮華と？」

「何よ、私じゃ役不足って言うの？」

ぶくーっと頬を軽く膨らませる……あなたの姉や妹じゃないんだから……まあ、少し新鮮だけど。

「いや、助かるよ……やろっ？」

そしてお互いに模擬刀を取り、構える。

「何時でもいいわよ」

「それじゃあ、お言葉に甘えてっつー!」

一気に間合いを詰め、斬りかかると、今更だが、物真似をしていない時の俺の構えはFF?のティードを想像してもらえばいい。

「……ふっ!」

カキン!

その斬撃を受け流し、その勢いで俺に反撃をしてくる。

「せえい!」

「よつと……!」

カキインツ!

「……まだまだいどうぞ!」

蓮華は素早く斬撃を繰り返してくる……

カンツ!

カキインツ!

カキヤアンツ!

次々に攻撃を受け流していく……軽い?

「……くっ……てええい!」

俺は・・・それを避けた。

「え・・・？」

「・・・避けれた・・・」

お互いが沈黙し、先に動きを再開したのは蓮華だった。

「・・・そんなわけが・・・はああああっ！」

再び来る連撃を全て避ける。

「う、嘘だっ!？」

「嘘じゃないんだなっ!」

蓮華の剣に向け、渾身の一撃を当てた。

カキヤアアンツ!

蓮華の剣が舞い、地面に落ちた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

沈黙、そして・・・・・・・・

「・・・・・・・・私の負けね・・・・・・・・」

先に声を出したのは蓮華だった。

「なんとか勝てたな・・・」

「さすがね・・・やっぱり思春のおかげかしら？」

「だと思っよ・・・本当に思春には感謝してるよ」

「そうね・・・あ、亞莎！」

「は？亞莎？」

よく奥を見ると建物の陰に隠れてる亞莎が見えた。

「ホントだ・・・おい！亞莎、こっちに来いよ！」

おそおそとしながらもゆっくりと亞莎が近づいて来た。

「亞莎。どうしたのかしら？」

「い、いえ！なんでもありません！た、ただお二人が剣を振るって
いたので何事かと・・・」

「ああ、単なる鍛練だよ。な、蓮華？」

「そうよ亞莎・・・そうだ亞莎、あなたもやってみない？亮と」

「俺かよ！？・・・まあいいや、やる？亞莎」

「い、いえ！私にはとても恐れ多いでしゅ！」

「（囁んだ……）」

「（囁んだわね……）」

「……大丈夫だよ亞莎。むしろ俺からお願いしたいぐらいだよ」

「え、と、あの……」

「やってみなさいよ亞莎？」

「は、はい！よろしくおねがいます！」

再び構える俺。

「亮？亞莎が武器を持ってないけど……」

「大丈夫だよ、亞莎の武器は体術だから」

「は、はい！その通りです！」

「それじゃあ、行くぜ！」

素早く俺は剣を振り抜く……はずだった。

「はあっ！」

亞莎のあの長い袖に剣を絡められ引っ張られる。

「うおっ!?!」

「せええいつ!」

その勢いのまま、亞莎が放った回し蹴りは……俺の顎先にヒットした。

「ぐはあああっ!?!」

「亮!?!」

「あ……!亮様!」

いかん、いいところに決まった……アニメの亞莎みたいになってしまった……

「うわあああ!ごめんなさい!亮様!しっかりしてください!」

泣きながら俺にすがり付く亞莎だが、もうキツイ……物真似を使
いすぎた時みたいな感じで、俺の意識は闇に吞まれた……

う、うづうん……

「あ、目を覚ましたよ亞莎!」

「ん……ああ、明命？」

目を開けるとそこは俺の部屋で、そばに明命と……亞莎がいた。

「……あの、その」

「ええと……俺は確か……」

蓮華と鍛練をしていて、亞莎を誘って……んで、攻撃をしようとしたら……袖で剣を絡められて……引つ張られて回し蹴りで撃沈……ああ思い出した。

「あの、亞莎？」

「ひっ！ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」

ひぐらし？なんて思ったのは秘密にして（咲が居ないとわかんないネタだし）亞莎に声をかける。

「あの、亞莎？別にそんな怯えながら謝らなくてもいいよ。……誘ったの俺なんだし、むしろ手加減されたほうが怒るよ？」

「ほら、大丈夫でしょ亞莎？亮様はそんなことじゃ、怒らないですよ」

「明命？随分と亞莎と仲がいいんだな。……俺にもそれぐらいの態度で話してくれればいいのに」

「い、いえ！恐れ多い」

「……………」

まずい、亞莎に至っては既に会話が出来なくなっている。

「いや、まあ気にすんなよ亞莎?」

「……………はい」

あーもう!仕方ない。こうなったら……………

「明命!一緒に来てくれ!亞莎!お前はここでまっけて!」

「はい!」

「え、あの」

「反論は認めない!ほら、行こうぜ明命?」

そうして、俺と明命は町にくり出した……………

「でも亮様?何をするつもりですか?」

「こんなときに天の知識が役に立つんだよなあ……………明命。胡麻団子が売ってるお店知ってる?」

「はい!知っているのです!」

後の好物であろう胡麻団子を買っていくことにした・・・

「亞莎ー？帰ったぞー」

「・・・ツ！」

部屋に入った瞬間体を強張らせる亞莎・・・はあ。

「ほら、お土産」

「・・・？な、何ですか？・・・胡麻団子？」

「美味しいから食べてみな」

恐る恐る胡麻団子を食べる亞莎次の瞬間・・・

「・・・！」

物凄く顔を綻ばした。

「美味しいか？」

「はい！とても・・・あ、す、すみません・・・」

「・・・クスッ」

「・・・ははっ」

こころ変わる亞莎の表情を見て、思わず笑ってしまふ俺と明命。
・まあ、馴れてもらえるのはいつでもいいか・・・それよりも、
次は大切なあの場面・・・運命は覆してみせる・・・！

安らぎの時〜蜀（前書き）

さあさあやっと更新出来ました。では蜀（正しくは劉備軍）どうぞ。

安らぎの時〜蜀

「ぼくは〜ここにいる〜今も生きている〜」

「何を歌っているのだ？」

「いや、鈴々・・・お前の食欲を見たら、誰でもそうなるって」

「そうなのかい？」

「そうなのだー」

現在、俺と一刀と鈴々で町の拉麺屋に来ていたが・・・鈴々が食べる量は、俺と一刀の量を足しても到底及ばない程の量であるため、軽く現実逃避に走っていた。

「しかし一刀？いい加減俺に頼らずに仕事をやれよ」

「仕方ないだろ・・・おんなじ国から来た人間だし、男だから気兼ねなく話せるし・・・」

「・・・横文字使えるしな」

正しくは違う世界の日本から来たんだけど・・・そういえば、袁術は俺たちを攻めて来なかった。何故なら孫策が先に反乱を起こし、袁術を滅ぼしたらしい・・・一刀がいるのに、蜀ルートで進まないなんてな・・・まあまだ蜀ではないんだけどね。

「お兄ちゃんも、咲お兄ちゃんもさつきから全然食べてないのだ！

もつと食べるのだ！」

「これが彼の有名な張飛か……」

「……ホントだよな……」

まあ今は細かいことは無しにするか……あーあ、恋やねねは遠い場所に勤務になっちゃったし……呉ルートかっつての。

それからラーメンを食べ終わり鈴々と一刀と別れ、城に戻り、歩くことしばらく……

「……やん……にや……に……」

「……?」

どこからか声がしたので城壁の上を見ると、常山の昇り竜こと趙子竜、せい星がいた……んだが、

「なにやってんの?」

「にゃん、にゃにゃにゃん。にゃん」

「ランデブーってかニャンデブー!？」

ごめんなさい、意味不明な事を叫んでしまいました・・・でも、どこの世界に猫と喋る人がいるよ・・・目の前にいました。

「おや？咲殿ではござらぬか。どうかしたのか？」

「いや、別に大した用はないよ。ただ単に通りすぎたただけだし」

「ほう・・・主と違い、驚かないのですな」

原作知らなかったら医者をお勧めするけどね。

「まあ、ここの人たちは一癖も二癖もある人たちだからね・・・一々驚いてたら切りがない」

「ほう・・・これはまた、主とは違った面白さですな」

「そうかい？でも、いつまでも俺はここにいるわけにはいかないけどね・・・」

「そういえば、咲殿は知り合いをお捜ししたな・・・たしか、大澤殿と言ったか・・・」

「うん。まあ、何処にいるのかも分かってないけどさ」

「・・・」

「星？」

いきなり黙ってしまった星を不審に思ったが、すぐに星は顔を上げた。

「ふふつ、でしたら大澤殿を桃香様の陣営に入れてしまえば、咲殿はここをさらずにすむでしょう?」

「ああ、まあそうなるけど・・・星?なんか良からぬ事を考えてないだろうな?」

「・・・いえ、別に」

「なんだよ、その微妙な間は!??」

笑いながらも思う・・・亮がこの世界に居ないのではないのかと。この原作から若干外れている世界は、どんな最後を迎えるのだろうか?・・・いくら考えても分からなかった・・・

それから数日、一刀と鍛練（ほぼ一刀に対してのいじめ）をしてから、またキーブレードの機能を確かめたりしていた。

「・・・意外に本物じゃないんだよなあ・・・これ」

実はこれ、キープレードみたいに粒子みたいにしてるのではなく、空間の隙間に置いてあるだけで、俺が力を使い、キープレードがある空間を開き、取り出している。

「・・・この間は雛里に大変な事をしちゃったから、気をつけないと・・・」

今日はいろいろ試した。エアロを使い、風王結界をインビシブルエアやるうとして失敗したり（自分がエアロの風圧で吹っ飛んだ）重力剣だなんて格好つけて、グラビデを使いあちこちにクレーターを作り、愛紗に怒られたり、それに興味を持った鈴々が模擬戦をねだってきたり、それでポコポコにされて、治療をもらった詠に馬鹿と言われたり・・・散々だった。

191

「・・・シッ！」

ヒュンッ！・・・

「当たんねえ・・・」

現在誰も居なくなった庭において、弓の練習をしていた。

「今回は、カバーもつけてきたから、指が切れる心配はないな」

あれからもちよくちよく愛紗に見てもらい、段々と上達してきた）

はず)・・・あーあ・・・早く黄忠とか仲間になんないかなー・・・

「よっし！頑張るぞ！」

「はわっ!?!?」

え?・・・気合いをいれて叫んだ真横から、何かが驚いた声が・・・

「・・・あ、朱里」

「はわわ・・・びっくりしました・・・」

そこには、はわわ軍師こと朱里がいた。

「あはは、ごめんごめん、どうかしたのか？」

「あ、いえ、ご主人様から、ずっと休んでないから、お茶でも持つてってやれーって言われたので、お茶を持ってきました」

「お、サンキュー」

「さんきゅー?」

「ありがとうって意味だよ。まあ、それじゃあ休むか・・・朱里もどうだ?」

「私も・・・ですか?」

「うん、雛里とかも誘ってさ・・・」

「でも、お邪魔じゃないですか？」

「いや、むしろ大歓迎だよ・・・なんなら一刀も誘うか？」

無言で首を横に振る朱里・・・ああ、仕事が終わってないのか・・・

「まあ、いいじゃん。一緒に休もうぜ？」

「はあ・・・」

てなわけで、雛里も誘い、レッツお茶会。

「はわわ・・・」

「あわわ・・・」

どうしてこの子達はこんなにもあがってるんだろう・・・

「朱里。雛里。少しは落ち着いたら？」

「はい！しゅみましえん！あう・・・噛んじゃった」

「申し訳ありましえん！あわわ・・・」

うーわあー・・・なんかなごむなあーこの子達は・・・歳同じぐらいだろうけど。

「たまにはこんなのもいいか・・・」

はわあわ言っている二人を横目に空を見上げる。

「……いつまでここに……いや、この世界にいられるんだろっ
な……」

「え……」

「どついう事ですか……?」

「あ、いや何でもないよ」

神のじじいは世界を巡ってくれと言った。つまりは真恋姫無双の物語が終われば、俺は消える可能性が高い。……でも、今を存在している限り、俺はこの世界を生き続ける……そして、誰も死なない世界を、皆が笑っていける世界を作ってみせよう。

「ま、頑張ろうぜ?」

「……?」

「……?」

こんな平和なときがずっと続けばいいのに……そんな事を考えながら、お茶会を続けていった……

安らぎの時（蜀）（後書き）

亮

「で、次ってあれか？」

あれです。

雪蓮

「あれってなに？」

亮

「はいはい、雪蓮はあっち行ってよじろね」

雪蓮

「ちょ、ちょっと！なんなのよ」

咲

「作者？」

はい？

咲

「後ろ……」

後ろ？

音々音

「怒りのちんきゅーきいーっくー！」

ぐはあああああ!?

恋

「・・・恋とねね、出番・・・ない」

だから音々音さんに攻撃をさせたと?

恋

「(コクッ)」

間が短いっすね!?

音々音

「なぜねねたちを出さないのですか?」

はい、それは後のシナリオの為です。

咲

「本当か?」

はい。

咲

「・・・だとさ、恋もねねも、それでいいか?」

恋

「・・・(コクッ)」

音々音

「まあ、咲殿がそう言うのであれば・・・」

咲

「じゃあ、その時が来たら・・・わかったな？」

はい。わかりました。

恋

「・・・次回・・・まねとかいへいとせかいりょこう・・・」

音々音

「次回もまた見るのですぞ！」

それではまた次回会いましょう！

惨劇を打ち破る（前書き）

この時がやってきました・・・なまじいなるでじょつか・・・はじい
ぞ。

惨劇を打ち破る

「……ふわぁ……よく寝た……」

ケータイを開き、今の時間を確認する。

「あー、もう十二時か……十二時イ!？」

いかん!完全に寝過ごした!今日は軍議があるって冥琳に言われてたんだ!

「制服着て、ケータイを持って……よし、準備完了!」

そして会議場に着いたのだが……

「遅いぞ、亮」

「……何をやってたのだから」

冥琳、思春に謝りながら皆にも謝る。蓮華に穏、明命と亞莎に小蓮、そして祭さん……あれ?

「……雪蓮は?」

「ああ。雪蓮なら、文台様の墓参りに行ったぞ……お前にも後から来てくれと言っていたぞ」

「……!?!」

まだ眠気が残っていた体が一気に覚醒する。そして素早くケータイを取り出し曲を鳴らす。

「ど、どうかなされたのですか？」

「明命！俺は雪蓮を追ってくる！・・・冥琳！直ぐに出撃用意！曹操が来るぞ！」

「何をいつている！？いきなり軍を・・・！」

「思春！話は後だ！・・・モーションキャプチャー！カブト！」

今回は、直接変わるのではなく、腰にベルトができて、ケータイがカブトゼクターになる。そして、カブトゼクターを一気にベルトに入れる。

「変身！」

『ヘンシン』

体が仮面ライダーカブトマスクドフォームになる。・・・子供の頃の憧れ、仮面ライダーになれるなんてな・・・

「少し行ってくる！」

そう言い捨て、走り出す・・・周りに誰も居ないのを確認して、カブトゼクターの角を真ん中まで引く。

「よし！行くぞ、キャストオフ！」

『キャストオフ』

そして一気に角を引き、反対側に角が動く・・・その瞬間、身体の外装が飛び、カブトライダーフォームになる。そして、腰にあるスイッチみたいなのを叩く。

「クロツクアップ！」

『クロツクアップ』

その瞬間、時間の流れが変わり、周りの時間がゆっくりになる・・・その勢いのまま、一気に孫堅の墓まで突っ走った。

「（前に教えて貰った場所は確か・・・）」

その時、雪蓮が視界の端に入ったので、そっちに走る・・・もう雪蓮の目の前に矢が迫っていた。

「・・・間に合えっ！」

なんとか矢を叩き落とし、ベルトの三つのボタンを押して、暗殺者

が居る方に走り出す。

『1・・・2・・・3・・・ライダーキック』

「たらああああ！」

回し蹴りを素早く放ち、周りの木々ごと、薙ぎ払った。

「ふうー・・・雪蓮。大丈夫か？」

変身解除しながら、雪蓮に近づく。

「亮？・・・これ、毒矢・・・っ!？」

「間に合って良かったよ・・・」

ホツとしたその時、横の草むらから、音がした。

「亮ッ！」

「・・・え？」

直後、右肩に焼かれたような痛み。肩を見ると、そこには矢が刺さっていた。

「まずっ・・・ドジった・・・」

「亮ッ！・・・この下衆がっ！」

「ぐわあっ!?!」

雪蓮が素早く南海霸王で、敵兵を斬り捨てた。

「亮ッ!亮ッ!大丈夫!」

「・・・あ、ああ・・・直ぐにちりよっ・・・!」

ケータイを出そうとした時に身体に力が入らなくなり、ケータイを落としてしまった。

「亮ッ!?!」

「ぐっ・・・毒・・・か・・・」

「亮ッ!しっかりしなさい!」

「雪・・・蓮・・・その、一ヶ所だけ色が違うボタンを・・・押し
て・・・くれ・・・」

ケータイを指差しながら言う。

「・・・こっつ?」

その曲を聴き、まだ自分がツキに見放されてない事を知る。

「モーシヨン・・・キャプチャー・・・シャマル・・・!」

リリカルなのはのヴォルケンリッターの一人。シャマルになる。

「クラール・・・ヴィント・・・」

眩き、身体が癒されていくと思ったが・・・回復の途中で、変身が解けてしまった。

「・・・くっ！・・・ダメージの喰らいすぎによる強制解除か・・・」

「亮！？駄目なの！？」

「大丈夫・・・致死量の毒は取り除けた・・・死にはしないよ」

「・・・亮様ーっ！雪蓮様ーっ！どこですかぁ！」

「姉様っ！亮っ！何処に居るの！」

「・・・！こつちよ、蓮華！明命！」

その声が届いたのか、二人は直ぐにやって来た。

「・・・ッ！亮様！どうなされたのですか！？」

「亮ッ！？しっかりして！」

「大丈夫・・・！死にはしないよ・・・こんなところで死んでたまるか・・・！」

「亮様・・・」

「雪蓮・・・蓮華・・・明命・・・ここはいいから早く行け・・・」

「だけどっ」

「・・・わかったわ」

「姉様!？」

「亮がこう言っているのよ・・・でも、明命はあなたに付けるわ・・・
いいわね？」

「はい!おまかせください!」

「・・・わかった・・・絶対に勝てよ？」

「分かっているわ!姉様!曹操が攻めてきました!すでに亮の助言
で出撃準備は整っています!」

「分かったわ・・・行くわよ蓮華!仲間を傷つけた罪・・・あいつ
らに受けてもらおうわ!」

雪蓮と蓮華が去ったのを見た瞬間、俺の身体がまるで糸が切れたか
のように崩れ落ちた。

「亮様ツ!？」

「・・・大丈夫・・・明命。悪いけど、俺を本陣に連れて行ってく
れ・・・」

「は、はい!」

なんとか明命に陣地まで運んでもらった。……皆にはとても心配された。

「亮！大丈夫なのか！？」

「大丈夫だよ……祭さん……」

「……持つのか？」

「ああ……なんとか治療は間に合った……身体に力が入んな
いけどな」

「……修業が足りんな」

「厳しいね……思春……」

「ホントに大丈夫なのー！？」

「大丈夫だって、シャオ」

「亮様……」

「そんな心配そうな顔をするなって亞莎？」

雪蓮の号令が始まるらしい……俺は明命に頼み込む。

「明命……俺も号令に参加する……運んでくれ」

「……亮？」

「冥琳……いまこそ、俺が天の御遣いだと名乗る時だ……こころで士気を高め、曹操軍を殲滅する……！」

「……わかった……お前の好きなようにしろ」

「ありがとな冥琳……明命」

「はい！わかりました！」

明命に運ばれ、雪蓮の横に自らの足で立つ。

「雪蓮……」

「……あなたの思うことを言いなさい」

「……ありがとう」

こんな大声は出したことはないが……なんとかなるだろう。

「……聞けっ！！曹魏の兵よ！曹操よ！貴様等の放った暗殺者が我らが王、孫伯符を暗殺しようとしたのだ！その暗殺者はこの天より遣わされし者の一人！孫呉の天の御遣いにより、制裁が下された！しかし！卑劣にもその暗殺者は事もあろうに今度はこの我を暗殺せんとしたのだ！……もはや貴様等は大陸一の卑怯者に成り下がったのだ！……そんな下衆な貴様等には、必ずしも天の裁きが降されるであろう！……さあ！我等孫呉の勇敢な兵達よ！あの卑怯

者共を・・・全て殺しつくせえっ！」

ウオオオオオオオオツ！！

兵士たちが雄叫びにも似たような声をだし、応えてくれた。

「雪蓮・・・後は・・・まかせた・・・ぞ」

「亮様ツ！？」

その場に、全ての力を使い果たしたのか、崩れ落ちてしまった。

「・・・分かったわ・・・全軍！抜刀！」

シャキンッ！

全員が揃った動きで剣を引き抜く。

「全軍・・・突撃ーーーーッ！！！！！」

ウオオオオオオオオオオ！

それを見届け・・・俺は身体を明命に預けた・・・

「う……うう……」

重い瞼を開き、辺りを見渡すと……皆がいた……どつやら、あれからはまだ余り経っていないらしい。

「亮ッ！目が覚めたの！」

「雪蓮……」

「……心配する必要がないな……」

「……思春」

「クスッ、思春？貴女も結構動揺してなかったかしら？」

「蓮華様っ……!？」

「蓮華……」

「まったく……お主はこの年寄りよりも先に逝くつもりか……
馬鹿者が……」

「祭さん……」

「亮様……」

「明命……亞莎……」

「もう。シャオ、とーっても心配したんだからね！」

「シャオ……」

「……ふっ、中々の号令だったぞ」

「冥琳……」

「もう……亮さんが死んじゃったら、私は誰で遊べばいいんですかあ〜？」

「穏……遊ぶって……」

その時、ハツとなって皆に聞く。

「そっだ！戦はどうなった！？」

「あなたのおかげで勝てたわよ……」

「雪蓮？どうしたんだ？」

「……あのね、私。王をやめようと思うの……」

「雪蓮！何を言ってるのよ!？」

冥琳が直ぐに批判の声を上げた。

「だってね・・・今回の事でわかったの・・・もし、亮がいなかったら・・・私は死んでいた・・・亮もどうせ知っているんでしょ？」

「ああ・・・俺とは違う、天の御遣いが舞い降りた時は、この世界を知らない天の御遣いだった・・・だから、雪蓮が死ぬことを知らなかった・・・だから止められなかった」

「あなたが知っている孫呉はどうなったの？」

「その後は蓮華が南海霸王と共に雪蓮の意志を次いで、王になる。・・・この後は言えない・・・」

「・・・今聞いた通りよ・・・亮は全てを知っている・・・なら、亮が知っている通りに話を進めた方がいいと思うのよ・・・亮、正直に答えて、私以外に死んじゃう人はいた？」

「・・・言っているのか？」

周りの皆はそろって頷く・・・俺は意を決して答えた。

「可能性によつては・・・冥琳と・・・祭さんが死ぬ」

「・・・」

名指しされた二人は微妙な顔をした。

「亮……まさかとは思うが……儂たちの死にかたもわかるのか？」

「……ああ、冥琳は病で、祭さんは戦で……」

その言葉に冥琳が反応する。

「安心して二人とも……冥琳の病は俺が治療できるし……祭さんは、天の御遣いの誰かが、魏にいなければ大丈夫だよ」

「……うむう」

祭さんが唸っている……そりゃいきなり死亡宣告されたら誰だつてそうなるわな。

「冥琳……？」

「雪蓮……」

「あなた、私にそんなことを隠していたの？」

「ごめんなさい……この時期に私が外れているわけにはいかなかったのよ……」

「冥琳様……」

「……冥琳のバカッ！」

「雪蓮……」

「私は……あなたと一緒にじゃなきゃ、天下なんかに興味は無いわよ……」

「雪蓮……」

「……それで……どうするんだ蓮華？」

俺は蓮華に問う。

「え……？」

「だから……お前は雪蓮の後を継ぐのかっていつてんだよ……」

「でも……私は……」

「蓮華……」

「姉様……」

「貴女が決めなさい……」

「でも、そうしたら姉様は……」

「私？私は大陸を巡ろうかと思うの」

「大陸を……？」

「ええ、王としてではなく、一人の人間として、大陸を見てみたいのよ」

「ま・・・雪蓮にはお似合いだな・・・それで蓮華？どうするんだ？」

「私は・・・私は・・・」

しばらく顔を伏せていた蓮華だったが、直ぐに顔を上げる・・・その顔には迷いが無かった。

「私は・・・姉様の後を継ぐ！たとえ姉様がない世界でも私はやっついていけたのだろうか？」

「・・・ああ」

「なら私にもできる筈だ！・・・私は、立派な国を・・・民が笑っていける国を創る！」

蓮華の決意に微笑む雪蓮。・・・雪蓮は腰の南海霸王を取り、蓮華に差し出す。

「・・・なら蓮華。これを受け取りなさい」

「これは・・・」

「母様から私に・・・そして今、貴女にこれを託すわ」

「姉様・・・はい！」

蓮華が南海霸王を受け取り、抜刀する。

「蓮華様・・・？」

思春が聞くが、蓮華は答えない・・・蓮華は南海霸王を、自分の髪に当てる。

「これが・・・私の決意だ！」

そついい、蓮華は自分の髪を切った。

「・・・皆・・・私についてきてくれるか？」

「僕はいつまでも孫呉の兵じゃ・・・無論権殿には死ぬまでついていくつもりじゃ」

「雪蓮が叶えようとした夢・・・私たちが叶えましょう、蓮華様」

「私は誰が王であれ、呉からはなれる気はないですよ」

「シャオもお姉ちゃんたちの為に頑張るもん！」

「・・・我らは蓮華様の盾であり剣・・・永遠にお供します」

「私も同じです！蓮華様には何処までもついていきます！」

「わ、私もおなじです！」

「・・・蓮華・・・」

「亮……」

「天の御遣い……貴女達の意志に従い参上した……今問おう。俺の主は貴女か？」

「ええ。あなたは今やこの呉には欠かせない人間……是非私たちに力を貸して」

「御意……生有る限り孫呉に仕える事を約束しよう……蓮華。頑張ろうぜ！」

「……ええ！」

「……頑張るのよ蓮華……」

雪蓮が励ましの言葉を送った……その声が聞こえたのか、蓮華が小さく頷いた。……ここに今回の戦いは終わりを告げた……俺は、雪蓮を助けられたんだ……因みにこの後、シャマルの力を再び使い、冥琳の病気を治した。……このまま、誰も死ななければいいんだけどな……

惨劇を打ち破る（後書き）

亮

「無理矢理……」

う。

思春

「浅はか也……」

いや、それキャラ違うし……

穩

「……一回私を忘れましたよねえ？」

ごめんなさい。

雪蓮

「私の出番これで終わりー？」

後でなんかしらの出番を渡します。

亞莎

「……言葉が少ないような……」

気のせいです。

明命

「……（しんきん）」

亮
「満足そうだなあ・・・」

蓮華
「出番が多いせいかしら？」

祭
「その可能性はたかいのう」

冥琳
「まったく・・・」

なぜ皆さんいらっしゃるんですか？

全員
「お仕置きするため」

え？あ、いや、ちよっ・・・ぎゃあああああ！！！！！！

華雄
「ちなみに・・・私の出番は・・・？」

全員
「・・・」

華雄
「・・・くそっ！孫呉なんてやつぱり嫌いだあああ！！！！」

亮

「ええとそれでは、次回、真似と開閉と世界旅行！」

蓮華

「また見てほしい」

全員

「それではまた次回会いましょうー!!」

楽しい時々泉（前書お）

あけましておめでとういっせいですー！今年もよろしくお願ひしますー！
では幕間ぶっせー！

楽しい時々

雪蓮が旅立ってからしばらく経った。・・・蓮華は早く王に相応しい器になろうと日々努力を続けている。・・・が、端から見ても無理をしすぎているのが目に見えてわかる。

「蓮華ー・・・」

「・・・」

「れーんふあー・・・」

「・・・」

「あーあんなところに大量の野良犬がー！」

「・・・」

「・・・お願いします・・・返事だけでも・・・」

「・・・」

ええ、この子。まったく聞いてません・・・蓮華は仕事に集中しているのか、何事にも反応しなかった。

「・・・亮」

「何さ？冥琳」

「・・・少し蓮華様を連れ出してくれぬか？」

「・・・やっぱり無茶のし過ぎ？」

「・・・ああ・・・このままでは、私の二の舞になりかねん」

「だな。まったくもう・・・少しは雪蓮や小蓮を見習えばいいのに」

「見習いすぎもこまるがな」

「ちがいない。・・・んじゃ、さっそく」

俺は蓮華の肩に手を置きながら話しかける。

「蓮華？少し出掛けようぜ？」

「・・・！！・・・なんだ亮か・・・無理よ、まだ仕事が・・・」

「それは私がやりましょう・・・蓮華様は気分転換をしてくるのがよろしいでしょう」

「冥琳・・・しかし」

「はいはい！ぐだぐだ言うの禁止！ほら行くぞ？」

「あ！ちよ、ちよつと亮！」

俺は蓮華を（ほぼ無理矢理）連れ出し、町に出かけた。

「つーわけで町に出てきたけど・・・どうするか蓮華？」

「え！？あ、いや・・・別に何処でも・・・」

「んじゃ、あそこに行くか？」

「服屋？亮。あなたなにか買うの？」

「何言ってるんだよ・・・蓮華の服を買うんだよ」

「私の！？いや、そんなの」

「いいんだよ気分転換なんだから」

そして店に入り・・・

「・・・おっ、いいの発見・・・ってこれ原作通りの服じゃん・・・俺のセンスは北郷一刀並か・・・」

「？」

「あ、何でもないよ・・・これ着てみて？」

「いや、でも・・・」

「いいからいいから・・・ほら」

そう言っつて無理矢理服を押し付ける。

「・・・笑わないでね？」

「笑わないよ」

蓮華が試着室に入ったのを確認した後、店の前に声をかけた。

「思春?・・・いるんだろ？」

店の中に思春が入ってくる。

「・・・気付いていたのか？」

「いんや、ただ何となく居るだろうなーって感じ」

「・・・頼むぞ？」

その頼むぞの意味を・・・俺は直ぐに理解する

「まかせとけ。・・・それとシャオ?さっきからなにやってんの?」

建物の陰から、ガッシャーんと音がして、シャオが出てきた。

「な、なんでわかったの？」

「いや、さっきから視界にちらちら入ってたし」

「ううう・・・だっってお姉ちゃんばっかりずるいよ」

「蓮華は普段頑張りすぎだから連れてきたの！……まったく……蓮華は二人を見習った方がよくて、二人は蓮華を見習った方がいいなんて……」

その時、後ろの試着室から蓮華が出てきた。

「お待たせ……？……どうしたの一人で慌てて？」

「は？一人……あれ？」

周りを確認したら、二人とも……いや、シャオは服の陰に隠れた。

「……似合ってるな……」

「そ、そうかしら……」

「おうつ……俺は中々嘘はつかんぞ」

「中々つてなによ、中々つて」

そんな感じで服を選び俺の金で（へそくり）買い、今現在蓮華は上機嫌で歩いていた。

「……まっ、いい気晴らしになったか」

「……思春、出てきて構わないぞ……小蓮も」

「……お見通しでございしましたか」

「なんでわかったの？」

「さっきの服屋で、あんなに大きな声で話していたら、誰でも気づくわよ」

「……ですよね」

「申し訳ありません。御身に万が一のことがあればと思ひまして、
・・亮がいるので大丈夫だと思ひましたが、いても立ってもいられ
ず」

「思春は過保護が過ぎる」

あれ？今……思春が認めてくれてた？

「まあいい……思春？ここら辺で落ち着ける茶房を教えろ。思春
ならば詳しいだろう？」

思春が怪訝な顔で蓮華を見つめる。

「茶房、ですか？」

「ああ。皆で行こうと思つてな」

「え？シャオもいいの！」

「ああ」

「うし。……それじゃあ行くしげ？」

「うん！行こう！」

「蓮華様、今日は・・・楽しめましたか」

「ああ、皆のおかげだな」

「それは結構・・・です」

その後俺達はお茶を楽しみ、帰った。・・・帰った後、思春の鍛練でその日は動けなくなった。

それから数日、本を読み終わり（絵本だが、と言うより絵本しか読めない）疲れたので、庭で休む事にした。その途中、鍛練をしている思春と明命が見えたのでそれを見学しに行く。

「・・・」

「・・・」

二人はまるで呼吸すらしていないと錯覚するくらい武器を構え、硬

直していた。

「……………あ」

その時、物陰から猫が飛び出し、二人の間で毛繕いを始めた……その瞬間、明命の集中力が切れた。

「……………はっ！」

「……………っ!？」

思春が一気に突っ込み、明命がひと足遅れて、刀を振る。……二人の刃が交差した瞬間、次の時には決着がついていた。

「……………私の勝ちだな」

「くっ……………負けてしまいました……………」

「よっ、二人とも」

「亮か」

「あ、亮様」

「中々凄かったな二人とも・・・まあ、明命は猫を見ても集中力が続くようにしないとな」

「はうあ！？なぜそれを！？」

「・・・天の知識か」

「その通り」

「あうあう・・・」

「でも二人は凄いな・・・やっぱり暗殺型なのかな」

「まあ、任務がら戦闘に立ち合いなど不要だからな」

「はい。ですから、速やかに初手で終わらせるのが肝要なのです」

「ふーん・・・凄いな」

「・・・亮。お前もやってみろ」

「は！？俺え！？」

「・・・私の教えを受けているんだ・・・やれ」

ついに命令形になった！？

「・・・でも・・・」

「いいから逃げ、ちゃんと殺ってやる」

「おい！なんか嫌な予感がするけど！？」

「……気のせいだ」

「気のせいです」

「明命まで！？」

もう嫌嫌いっつてもしょうがないのでやることにした。

「……行くぞ」

「……ッ！」

一気に空気が凍った。……少しでも気を抜いたらマジで殺られる。……

「……」

集中……！野球のチャンスで打席が回ってきたときみたいに……

「……」

「……今だ！」

思春が感心した瞬間、直ぐに踏み込んだ。……が。

「・・・フツ！」

思春が動揺することもなく、一気に俺の後ろに回り込み、背中に蹴りを入れた。

「がはあっ!?!？」

「・・・(チツチツ)」

くっそく・・・やっぱり本職には勝てねえよ・・・

「・・・参りました」

「でも亮様、中々の集中力でしたよ」

「そうかな？」

「・・・まだまだだな」

「・・・うぐう・・・」

「大丈夫です！これから鍛練を続けていけば、必ず私みたいになります！」

「明命・・・」

「そうだな・・・丁度いい、いまから鍛練を開始するぞ」

「・・・よし！よろしく！」

そんな感じで始まる鍛練・・・ちなみに鍛練している間、明命はずっと猫をもふもふしてた。

楽しい時〜蜀（前書き）

すみません、少し遅れました・・・ではどうぞ。

楽しい時〜蜀

とても天気がいい朝、俺は。

「あひゃあああぁっ!？」

・・・隣の一刀の部屋から聞こえる変な叫び声で目が覚めた。

「・・・一刀?どうした？」

直ぐに部屋からでて、一刀の部屋に入ろうとするが、鍵がかかっていた。

「開け」

手に力を集中させ、鍵を開ける。・・・開閉能力は俺自身の固有スキルなので、キーブレイドが無くても使える・・・効果弱くなるけど。

「・・・一刀?どうした」

「おや・・・」

「あ・・・」

そこには、一刀の他に、星がいた。

「・・・そっか、一刀は星を選んだんだな・・・頑張れよ」

「いやいや!? 誤解だぞ咲! 俺は別に・・・」

「おや、主は私の事はもういらないと・・・」

「酷いな一刀」

「だーっ! 俺はなんか悪いことしたのか!？」

「口八丁手八丁」

「節操無しの種馬」

「なんなんだよ二人して!？」

散々と星と一緒に一刀をからかい、俺は部屋を後にした。

それからしばらく・・・仕事を終わらせ中庭を歩いていたとき、何か騒がしいことに気づいた。

「でえええええいつ! 愛紗、そっちに回り込んだのだ!」

「応！鈴々、桃香様に近寄せせるなっ！」

「分かつてるのだ！てやあっ！」

ええと・・・あの場所に居るのは、愛紗と鈴々と朱里と雛里に桃香・
・あと一刀か。

「ふっ。こちらに名乗らせませぬとは・・・無粋の極みというものぞ！」

・・・訂正。あと一人いたわ・・・あれは・・・

「可憐な花に誘われて、美々しき蝶が今、舞い降りる！我が名は華蝶仮面！混乱の都に美と愛をもたらす、正義の化身なり！」

華蝶仮面・・・星が高らかに名乗り上げる。俺はため息を吐きながら一刀に近寄る。

「・・・あつ、咲。・・・お前は分かつてるよな？」

「星だろ？あれ」

「・・・よかった・・・咲はまともだ」

まてやコラ。

「でも何でせ・・・」

「言わないでっ！」

詠が待ったを付けてきた。……どうしたんだろう……てゆうか二人も居たんだ。

「え、えつと、あれ……」

「言わないでっ！」

月の言葉も遮る詠。

「な、なあ、朱里。どう見ても、あれ……」

「言わないでっば！」

「詠……いい加減現実を見ようぜ……あれは」

「だから、ボクをこれ以上おかしな世界に連れていかないでっば
————っ！」

「ほえ？え、あの、みんな、あの人のこと……」

「………気づきなさいよ」

雛里に詠がツッコミをいれる。

「でええい！そのふざけた仮面を取って、大人しく正体を見せるが
良い！」

「ふっ。この美しき仮面を奪おうなどと、この都には美を解する輩

はおらぬと見える!」

のってるなあ、てか愛紗たちは華蝶仮面の正体に気付いてないみたいだな。

「んじゃ、俺も行くかつ」

「咲!?!」

キーブレードを取り出し、星……華蝶仮面に走っていく。

「二人とも、伏せろ!……魔力集中……雷を喰らえ!サンダラ!」

「あぶつ!?!」

「うわあつ!?!」

「何っ!?!」

三者三通の答えが帰ってきた。……けどサンダラは誰にも当たらなかった。

「さ、咲殿!危ないではありませんか!」

「だから伏せろっていったる愛紗?」

「上から来るのであれば、伏せても意味がないでしょう!?!」

「咲お兄ちゃん・・・メチヤクチャなのだ・・・」

二人に軽く謝って、華蝶仮面に向き直る。

「さあ、今度は俺の番だぜ星・・・じゃなかった、華蝶仮面！」

「ふっ。よろしいだろう・・・来るがいい！」

星とまともにやっても勝ち目はない・・・なら。

「魔力最大集中！・・・はあああ！」

これなら避けられまい！

「燃やし尽くせ！ファイガ！」

燃え盛る炎が星を襲う・・・が、

「・・・ふっ」

凄いよこの人。炎の隙間を潜り抜けた。

「中々に暖かい火であったぞ・・・しかし、ここでは火遊びが流行っているのか？」

カチーン・・・今のはイラっときたぜ・・・次！

「魔力集中！・・・吹き飛ば、エアロラ！」

「それっ」

吹き荒れる風に見事に乗って、悠々と着地する。

「おやおや……私を遊ばせてくれるとは……中々愉快なからだ」

「ぐっ……くぬ……ごっのお……」

何かが切れそうなのを必死に押さえ、次に移る。

「……うおおおっ！潰れやがれえ！グラビデ！」

グラビデを連射するが、全てを避けられる。

「ふーむ……やはり……まだまだか……」

それを聞いた瞬間、何かが切れた。

「……げんに……」

「ん？」

「いい加減にしろやコラアアアっ！！」

キーブレードがキングダムチェーンになり、それが二本になる。

「はあああ……」

その二つのキーブレードを合わせると、光が走り。

（キー）ブレードに変わった。構えはリクやヴァニタスのものに変わる。

「ほう……」

「くらええええ！」

一気に振り抜く！

「……はあ！」

カキヤアンツ！

星も槍を振るい対抗し、鏢迫り合いになる。

「……ぐ……こんのお……」

「……咲殿に……ここまでの力があるとは……！」

鏢迫り合いを続け、先に星が後ろに跳ぶ。

「今回はここまでだ！また相見えることもあるだろう！さらばだ！」

「あ！逃げたのだ！」

「くそっ！逃げるな！この臆病者めーっ！」

「ふふん。大人しく手を引いてやると言っているのだ。三人がかりでこの我を押さえきれぬ者達に、臆病者と罵られる覚えはないわ。はーっはっはっはっはー！」

そう言っつてひらりと舞い、見えなくなる。

「あ、やばい……ホントに殺したくなってきた……俺は追うぞ！」

ブレードを元のキープレードに戻し、ボードにする。

「まちやがれえええっ!!」

「咲……少しは落ち着けよ……」

一刀が一人ポツンと言ったが、それに答える人はいなかった……

「……ふっ」

「いやはや、何と痛快なこと……高みに至った芸術には神仙の力が宿ると聞くが、これはまさしくその至上の逸品に違いない」

「……そりゃあよかったなあ？」

「……ひゃっ!?!」

星にしては珍しい声を上げ、俺に向き直る。

「お、おや・・・咲殿ではござらんか・・・奇遇ですなあ」

「ホントに奇遇だなあ・・・華蝶仮面を追っていたら何故か星が居たぜ・・・？」

「い、いえ・・・華蝶仮面はあつちに去っていきまして・・・」

「おかしいなあ・・・華蝶仮面の事を知っているのは城にいた人間のみ・・・ここは城から離れすぎているから、星はどんな見た目かわからないはずだけどなあ」

「う、うぐう・・・」

「それに・・・」

「あいやまたれい！」

「・・・？」

「ふ・・・ふふふ、咲殿？恋のおやつ・・・」

「な、なんだよ・・・」

「盗み食い・・・ねねの方を見て、ボソッと「ちっちゃい」等々・・・」

「・・・ぐっ！」

「いえ、ばらすつもりはありませんよ……ありませんとも」

そっぴいなながら、仮面をちらちらさせる。……くそっ……

「何か手伝えることはありませんか……!」

「ふむ、なら……」

なんか……いろいろ大変な事になりそうだなあ……心に思う俺
だった。

楽しき時〜蜀（後書き）

今回のゲストは・・・

秋蘭

「私だな」

亮

「あと、俺」

あれ、咲は？

亮

「精神的ダメージを負って泣いている」

秋蘭

「呂布や陳宮にもなにかされていたな」

かわいそうに・・・

亮

「半ばお前のせいだろうか」

秋蘭

「しかし、私は魏の人間だ・・・ここにでてもいいのか？この作品は呉と蜀が主体だろうか？」

いえ、基本的に夏侯淵は魏では好きなキャラなんで大丈夫です。

亮

「・・・ちなみに、魏では他に誰が好き？」

楽進と・・・典韋かな？

亮

「真面目っ娘好きなのな」

秋蘭

「・・・ちなみに華琳様は？」

嫌いではないけど・・・ツンデレは苦手かなあ・・・

亮

「お前、恋姫に何人ツンデレがいると思ってんだ・・・思春は恐いんだからな・・・」

まあ・・・大丈夫ですよ・・・多分。

秋蘭

「しかし・・・こんなことなら姉者も連れてくればよかったな」

まあ・・・次もありますし・・・次の世界に行かない限りは、チャンスはありますよ。

亮

「ちなみに、恋姫の次の世界は考えてるのか？」

・・・では次回、真似と開閉と世界旅行！

亮

「あ、逃げやがった!!」

秋蘭

「ではまた次回会おう」

亮

「夏候淵!?!なんでみんな俺をスルー!?!」

ではまた次回会いましょう!

新呉王の初陣（前書き）

はい。また少し遅れました・・・理由は・・・実は今日、受験だったんです・・・結果は・・・伏せておきます。

ではどうぞ。

新呉王の初陣

雪蓮が居なくなっってから一ヶ月が経過した・・・ただ原作と違うことは皆に悲しみは無い。雪蓮が死ぬという事実をねじ曲げたからだ。・・・けど、そう良いことばかりでは済まない。前に話した劉備の同盟解除。・・・そして雪蓮が居なくなった事を知り、揚州各地で有力豪族たちが叛旗を翻していった。俺たちの今することは、内乱を鎮圧し、雪蓮が築き上げた呉を取り戻すことだった――

「権殿・・・」

「・・・」

「権殿・・・」

「・・・」

「権殿っ！」

「えっ!?!」

祭さんの声に驚く蓮華。

「えっ、ではありませんぞ。先ほどからお呼びしておるのに、ぼんやりとして……」

「あ、す……すまない」

「構いませんが……権殿。少し緊張しすぎでありましょう」

「どーかん……蓮華。たがが内乱の鎮圧……落ち着けよ」

「う、うむ……」

「……別に蓮華の指示に不満を言うやつはいないよ。……もしいたら、今頃お前んところには居ないよ……俺は、俺達は蓮華の為に命を投げ出す覚悟もある」

「それは……!!」

「無論、ただ死ぬ気はないよ……ただの気構えの話だ」

「亮……」

「俺には戦えるだけの力がある。その力が有る限り、いや、どんなときでも戦えない人、願いがある人のために戦う……それだけ」

ケータイを見せながら微笑む。

「そついえば亮よ。お主に通り名がついておるのを知っておるか？」

不意に祭さんがそんなことを聞いてくる・・・通り名？

「・・・それって雪蓮の小霸王みたいなの？」

「うむ・・・お主の通り名は・・・“千の顔を持つ男”じゃ」

さて。どこのジャック・ラカンだそれ。

「・・・でも納得・・・」

俺の物真似能力ならそう見る人がたくさんいるだろうな。

「―――御意」

祭さんと話している内にどつやら戦闘態勢をとることにしたらしい。
・・・俺は蓮華に近づき一言。

「・・・雪蓮は雪蓮。蓮華は蓮華だからな」

「え・・・？」

不思議そうに聞き返してくる蓮華に答える。

「雪蓮の真似をせずに、お前の特徴・・・いや、お前が思った王になればいい・・・人形じゃないんだ、雪蓮になろうとしても無理だ」

「・・・それは私が姉様より無能だと。そう言いたいのか？」

「違うよ。．．．まあこの事については後々ね．．．そんなじゃ」

「あ、ちよつと亮！」

それを無視して俺は思春の元に向かう．．．実は俺、形式上は思春の隊の副隊長．．．つまりは思春の補佐役だ。まあ、思春に補佐なんていらなけれど冥琳曰く「隊に属さぬ者が戦場に出れるか」らしい。

「．．．悪い思春。遅れた」

「．．．」

「んな睨むなよ．．．お前の敬愛する呉王を励ましてきたんだよ」

「．．．そうか」

ダメだ．．．滅茶苦茶不機嫌だよこの人は．．．しかし、千の顔を持つ男、か．．．次にネギま！行ったら嫌な予感しかない。

それからしばらく・・・

「甘寧様！敵は籠城を選択したようです！」

「ああ。こちらでも確認した。・・・私は蓮華様に伝えてくる。その間部隊を頼むぞ亮」

「おつまかせー・・・ちやちやっとなってこいよ」

「言われんでもそつする」

本陣

「孫権様！大澤さまが門をこじ開けることが出来るとおっしゃっております！」

「亮が？でも・・・」

「蓮華様。亮のやつも考えがあつてのことでしょう・・・ここは亮

の提案に乗るべきです」

「すみません、それと伝言です！」「門が使いもんにならなくなるけどいいか？」だそうです！」「

「……はあ、まったくあいつは……蓮華様。いかがいたしますか？」

「……亮を信じよう。大澤に伝える、許可するとな……しかし、無理をしたら……わかっているな、ともな」

「わかりました！」

亮

「……りょーかい！いくか」

一呼吸置いて叫ぶ。

「モーションキャプチャー！七夜志貴！」

月姫のキャラになった……まあ正式な登場はメルディブラッドだ

けど……まあいいや。

「……シッ！」

七夜独特の走法を使い、目にも止まらぬ速さで門に近づく。

『お、おい！あり得ない速さで近づいてくるやつがいるぞ！』

『狼狽えるな！弓で射殺せ！』

雨の様に降り注ぐ矢……けど

「……見える！」

今の俺には全てがスローに見えた。

『な、矢が当たらないぞ！』

『化け物かあいつは！？』

・・・怯んだ！今だ！・・・俺は高々と舞い上がり、叫ぶ。

「キャプチャーキャンセル！」

これは独自で考えた言葉・・・相変わらずネーミングセンスがないな俺。とにかく、元に戻った俺は再度素早く同じ曲をかける。

「モーションキャプチャー！遠野志貴！」

え？何が違うって？・・・つまりは七夜はずば抜けた身体能力だけでスピードアタッカーなため、火力が不足する。遠野は火力はでかいが身体能力は七夜に比べると少々心許ない。以上。

「・・・いくぞ！直死の魔眼、解放！」

魔眼殺しの眼鏡を捨てて、魔眼を発動させる。そして“線”にそり、門を“切った”。

『な、なんだ！？門が！』

『ば、化け物だー！？』

よしよし・・・良い具合に混乱している・・・その時、後ろから声が響き渡った。

「全軍・・・突撃ー！ーッ！」

ウオオオオオオオオオ！！

「ナイスタイミング・・・よし、戻ろう！」

本陣

「ただいま！」

本陣に走ってくる。

「……!!……って亮か……あなた、元に戻ってから陣に来なさい……びっくりするでしょう?」

「あー……悪い悪い……」

なんて蓮華と話した後に冥琳に聞く。

「冥琳。戦況は?」

「概ね問題無しだ……しかし、お前のそれは便利だな」

「……使いすぎると倒れるという弱点があるけどね」

「だが役に立つ……なんなら全ての門を壊して欲しかったがな」

「無理。そんなに力を使ったら間違いなく倒れます」

現に今だって魔眼の副作用で頭痛が残ってるんだから……

「……祭さんが一番乗りか」

「お前の活躍でな……亮」

蓮華が何かを言いたそうにしているので、目を合わせる。

「何?蓮華」

「・・・お前は、姉様みたいに居なくならないで・・・絶対に」

その言葉に素直に頷けなかった。だって、俺はいつかこの世界を去らなければいけない・・・一生ここにいられる保証は・・・ない。

「亮・・・？」

「・・・」

「蓮華様？大体は終わりましたよ？」

「え？あ、ああ、そうか・・・今どうなってる？」

「はい、亞莎ちゃんの指示で今は八割終わってます・・・後は城内を制圧すればおわりです」

「そうか・・・亞莎はどうだ？」

「中々堂に入った指揮ぶりですよー」

「だが、まだまだだな・・・亞莎には、これからの呉を担う人材になってもらわなければならん」

蓮華。冥琳。穩がそれぞれ話しているなか、俺はとても気まずく立
っていた。……。今をもって、内乱は終結した……。
何とも言えない後味の悪さを引きずって……。

新呉王の初陣（後書き）

第一回！パロディやってみよー合戦ー！パフパフー！

亮

「またいきなり・・・なんだよそれ？」

まあ他の作品の何かをこの小説の登場人物でやるつとということですよ。

咲

「・・・ネタ切れか・・・」

出番消すよ？

咲

「ごめんなさい！」

よろしい・・・んじゃあ今回は、テイルズでいこうか。

私たちの武器は

袁紹

「私たちの武器は地位と！」

星

「謀略と」

馬岱

「だ・ま・し・う・ち」

馬超

「最低だ・・・」

どうぞでしよっ？

咲

「わかる人にしかわかんねーよ」

亮

「同じく」

別にいいじゃん。んじゃあもう一個

私たちの武器は？

桃香

「私たちの武器は愛と！」

鈴々

「勇気と！」

愛紗

「き、希望」

咲

「なんとなくわかるなあそれ」

んじゃあ次

俺の力

亮

「これが俺たちの力だ！」

雪蓮

「え！？私軽く流してたよ？」

思春

「お前の力はその程度か？」

亮

「えーっ……」

亮

「・・・(汗)」

咲

「ホントにあっただ・・・」

今回は、こんなとこだね・・・それでは。

亮

「次回、真似と開閉と世界旅行！」

咲

「次回もまた見てください！」

それではまた次回会いましょう！

大切な平穩々呉（前書き）

はい。2日空きです。明日から学校が始まります・・・ぶっちゃけ
面倒くさいですが・・・とりあえずどうぞ。

大切な平穩々呉

あの戦からしばらくたち、あれから蓮華は変わったと思う。いや、忙しいのは変わらないけど何て言うか余裕が出来たって感じだと思う。

「……今日はここまでだ」

そしていつも通りの思春との鍛練を終えた。

「あれ？もう終わりか？」

「……今の時間を考えろ」

そんなこと言われても俺は日の位置で時間が分かるわけでもなく、制服のポケットに入れたケータイを取り出し時間を確認……って

「もう昼時かよ……」

ちなみに鍛練を始めたのは朝の六時から……つまりはかっきり六時間鍛練をしていたらしい……

「でもあんまり疲れを感じないぞ？思春。手を抜いた？」

「・・・私が全力で貴様が耐えられるのか？」

「無理ですごめんなさい」

いきなり殺気を叩きつけられ素早く謝罪する。

「多分貴様の身体が成長してるから段々と物足りなくなっているんだろう。・・・次からは少し本気を出すか・・・」

しまった・・・次からは今まで以上に体が動かなくなるんだろうな・・・筋肉痛で。

「私はもう行くぞ」

「え？あ、うん了解。じゃあね」

そんなんで思春と別れ、今日は仕事もないから町に出る・・・ちなみに俺の仕事は文字を読むだけだから問題は無い。なぜなら冥琳と穏に亞莎共々散々しごかれたから。

「・・・平和だ」

戦なんて無かったんじゃないかと言われんばかりの平穏さ・・・そんな平和に酔ってた次の瞬間。

「どーーーーーんっ!..!」

「じばあああつ!?!?」

突如俺を襲う謎のデイバインバスター……もとい小蓮。

「ぐっ、はあ……効いたあ……」

「……大丈夫?」

「いや、まあ……思春や明命の一撃に比べたら何てこともないよ」

「そう?……ねえねえ亮は何してたの?」

この子は全く反省をいたしません……まあいいけど。

「別に?ただ単にぶらついてただけだよ」

「シャオといっしょだ」

嬉しそうに頬を緩ませるシャオ……それでシャオは腕を絡ませてくる。

「お姉ちゃん達、何か難しい話をしたでしょ?酷いんだよ。そういう時は絶対、シャオを混ぜてくれないんだもん」

「いや、俺もたまにだけど参加してるんだけどね……」

「じゃあ亮は逃げてきたの?」

「違う違う、俺が参加するのは戦前の軍議だけだ」

「……あんまりアテにされてないの？亮って」

「酷っ!？」

シャオの言葉の刺し穿つ死翔ゲイボルグの槍が俺の心を貫いた。

「しょうがないなあ……可愛いそうな亮を、シャオが構ってあげる」

まるで猫だな……いや、孫家の人間って皆猫みたいなんだよなあ……雪蓮は猫ってよりは虎のイメージがあるけど。

「ね？嬉しいでしょ、嬉しいって言うの〜」

「嬉しい嬉しい」

「……ホントに？」

「うん、ホント」

まあ、いままで俺に構ってくるやつは全然いなかった。けどこの世界に来てからは違う。雪蓮に冥琳、祭さんに拾われ、穩や蓮華や明命と思春。それから亞莎や小蓮に出会った。皆俺を仲間として見てくれた。俺を家族みたいにしてくれた。元の世界が嫌いなわけじゃない。けど俺にとってはこの世界の方が居心地がよかった。

「……よう？亮？」

シャオが呼ぶ声にハッと我に戻る。

「あ……悪いシャオ。何？」

「もう！だからシャオと一緒に町を回ろつって言っているの！」

「ん……ああ。いいよ？俺暇だし」

「やったあ！ついでに私、お腹空いたんだけどなあ」

上目遣いに見上げてくるシャオに笑いながら答える。

「おう、俺も腹が空いたからな。一緒に食おうぜ？昼飯」

「わーい」

俺の腕を引っ張りながら早く向かおうとする。……まるで妹が出来たみたいだが、こういう事を本人に言うとは絶対と言って良いほど俺に怒りの一撃が入るだろう。だから口には出さずシャオを引き連れて飯を食べに行った……。これは後日談だけど、俺とシャオが飯を食べに行ったことを知った蓮華が拗ねた事は言うまでもなかった……。

あれから更に数日。中庭には武器を持たずに対峙する俺と思春。なぜかというところ、思春曰く「もし真似が使えず、なおかつ武器を持っていなかった場合を考えるぞ」・・・それで今の体術での鍛練に至ったのだ。

「・・・ふーっ・・・」

僅かに呼吸を整え思春を見すらえる。横には鍛練に付き合ってくれた明命と通りすがった亞莎がいた。

「・・・」

思春の構えは綺麗と言っても過言では無い。

「・・・」

その時、思春が動いた。

「・・・ッ!」

繰り出される右手を左手で流す。その勢いで放たれる左足を右手で防いだ瞬間しまった、と思った。今の俺には体の中心を防ぐ手段が無い。思春が左手を俺の鳩尾に叩き込む。

「がっ・・・!」

一気に飛ばされたが素早く立ち上がる。

「ほう・・・喰らう瞬間に自ら後ろに跳んだか」

「げぼツ・・・完全には勢いを殺せなかったけどね」
「やっぱり思春は凄い。所詮ゲームのキャラだと思ってたけどそれは間違いだった。」

「・・・どんどん行くぞ！」

再び繰り返される攻防。しかし俺は完全に防御に回っていた。否、回るしか無かった

「ぐっ・・・う・・・の・・・！」

嵐の様に放たれてくる拳と蹴り。それを必死にいなしていく。

「・・・もらった！」

密かに隙が出たんだろう。思春は回し蹴りで防御の腕ごと俺をぶっ飛ばした。

ドカアッ！

「ぐ・・・あああっ！」

完全に受け身もとれずに転がる。腕の痛みを耐えて転がった勢いを
使い、立ち上がる。

「今のは腕を貰ったと思ったがな」

「いや・・・今ので左腕が動かなくなった」

まったく、利き手が使えなくなったらどうするんだ。

「・・・休むか？」

「冗談っ！」

動かない腕を無視して思春に接近する。だが、やはり両手が使えないのは痛い。片手で上段、両足で下段を防ぐ。だが、

「隙だらけだ」

思春の容赦の無い拳が俺の防御が空いた所に叩き込まれる。

「うわあああ！」

少し意識が飛び、意識が戻ってみたものは思春が右腕を振りかぶり、渾身の一撃を喰らわそうとしている時だった。

1・捨て身で攻撃する。

2・さよなら、俺。

何故か頭に選択肢が浮かんだ。ってどっち選んでもBADEND直行な気がする。ええい！1だ1！

「ぐっ・・・こんのおおお！」

なんとか動く右手でクロスカウンターを狙う。・・・が、無理が祟ったのか膝がおれてしまった。

「————！」

思わず目を閉じて結果を待つ……が、いつまで経ってもなにも変わらぬ……あれ？手に変な感触が……目をあけた瞬間目にしたのは、俺の拳は思春の胸元、いや胸に当たっていた。対する思春の拳は、俺の左肩の上を通過していて、思春は啞然としていたが、先に俺が事を理解しパニックに陥る。

「！#\$%& amp ;*————！！！」

意味不明な言語を撒き散らし、顔を真っ赤にして慌てる。

「いや！すみません！他意はなかったんです！ただ最後の届けばいいな」的に放った……あぁいや！胸に届けばじゃなくてただ単に思春に向かえばといやとにかく俺は————」

「……亮」

心底冷えた声が俺を黙らした。

「……はい」

思春の目元が見えなかった……いや、見えなくていい、見たら最後二度と立ち直れなくなる。

「いや……思春……？」

俺に近づき一言。

「……シネ」

神は言っている・・・

え、助けてくれるの？

——ここで死ぬ定めだと。

あるえっ！？文字が足りない！？

「ま、まって・・・話せばわか、ぎゃああああっ！？」

防御もなんにもしていない俺の体に見えない嵐が襲った。・・・
・薄れていく意識の中、最後に見たものは、鬼のような・・・いや、
鬼そのものの思春の顔と、物凄く怯えた顔をしている明命と亞莎だ
った・・・・・・・・・・・・・・・・

大切な平穩々呉（後書き）

公孫賛

「私の部屋の中には・・・北郷が入るんだ」

張角

「・・・っ!」

公孫賛

「ぐあっ・・・!」

張角

「・・・ダメじゃない嘘ついちゃ・・・中に誰も居ませんよ?」

咲

「まてまてまてーーーー!!」

なんですか？

咲

「いや!？なんですか?じゃねーよ!いきなり何てネタ出してんだ!」

恋姫バージョン・・・

咲

「禁止!禁止ーーーーッ!」

亮

「つーか、この二人って接点ないしね」
「そうなんですけどね。」

亮

「・・・それはいいけど作者？あれを見るよ？」

？

恋

「・・・（グスッ）」

音々音

「出番出番出番出番出番出番出番出番出番出番」

咲

「うっわぁー・・・めっちゃ病んでるー・・・」

亮

「呂布に至っては涙ぐんでるし」

本当に！しばらくまってください！

咲

「いや、俺から見てもあれは可哀想だぞ・・・仲間になって早々俺の一文で遠方勤務にされたしな・・・」

亮

「まるで無印で僅か一文で殺されたことを語られた公孫贇みたいだ」

公孫贇

「それを言うなあ！だけどさ、真・恋姫じゃあやつと真名を貰えたんだぞ！死ななかつたんだぞ！私の個別シナリオも有ったんだぞ！」

亮

「袁紹たちと同じ扱いだけどな、シナリオが」

公孫贇

「いいんだよ別に！ようは真名と命とシナリオがあればいいんだよ！」

咲

「ばかつ・・・おまつ・・・」

華雄

「・・・真名も無い・・・ルートによっては死ぬ・・・シナリオも袁術のオマケででるだけ・・・くそう・・・」

公孫贇

「あ・・・その・・・すまん・・・」

てなわけで公孫贇が華雄をKOしてしまったのでここまでです。

亮

「半ば俺のせいだよ・・・」

咲

「気にすんなよ・・・それでは次回、真似と開閉と世界旅行」

亮

「次回もまた見てください！」

華雄

「うう……どうせ私は……」

公孫贇

「ほら……涙拭けつて……私の奢りで呑みに行こう、な？」

……それではまた次回会いましょう……

大切な平穩く蜀（前書き）

・・・はい・・・では今回も行ってみましょう・・・訳あって作者はブルーですが、ではどうぞ。

大切な平穩く蜀

今日も今日とていつも通りの仕事を終わらし、廊下を歩いていた時、かなりの大所帯に遭遇した。

「おろ？一刀に桃香に朱里に鈴々に紫苑しおんに璃々りり（りり）ちゃんじゃん。どうした？」

あれからしばらくが経ち、仲間もかなり増えた。……まず今は今いる目の前の人は、黄忠こと真名は紫苑。隣にいる子供は紫苑の娘、璃々ちゃん。……他にはかの有名な錦馬超こと翠すい。翠の従姉妹の馬岱たんぼだいこと蒲公英たんぽぽそれに巖顔いんげんこと桔梗ききょうその部下の魏延すいえんこと焰えん耶んやが仲間になつていたんだ。……多い。

「あのね、かちよーかめんを見に行くんだよ」

「ぶっ！」

何気ない璃々ちゃんの一言に思わず吹いてしまった。

「……咲？」

一刀が怪訝な顔をする。

「あーうん！人気だよね華蝶仮面！うん俺も大好き！」

「どうしたの咲君？……華蝶仮面の話になると朱里ちゃんもおかしいし……」

「「気のせいだよ」です」！！」「

思わず八モる俺と朱里。

「ねえねえ、咲おにいちちゃんも一緒にいこうよ」

「え、あ、うん……」

無理だ。目をキラキラ輝かせる子供を拒否することは出来ない。……
・俺は仕方なく皆についていった。

「うーわあー……すごい人だからだなあおい」

「お、やってるやってる」

一刀が面白そうに現場を眺めている。

「今日は一人のようですね」

紫苑が数を冷静に言う。

「おおーっ」

「・・・鈴々。桃香が興奮して飛び出さないように、気をつけておいてね」

「わかったのだ！」

なんて和やかな会話。なんて事を思っていたら、華蝶仮面が高々と名乗りをあげる。

「悪の蓮花の咲くところ、正義の華蝶の姿あり！かよわき華を護るため、華蝶の連者」

いや、一人しかいないんですが・・・

「・・・が一人、ここに参上っ！」

直した！無理矢理直した！・・・あーあー・・・ゴロツキの皆さんも随分と乗り気で・・・

「・・・あの、ご主人様、咲さん」

紫苑がおずおずと聞いてくる。

「「うん。言わなくていいよ、紫苑」」

俺と一刀が二人で紫苑の言葉に口を挟む。

「・・・ああ、お気づきでしたか」

「若干名気づいてない人がいるけどね・・・」

そう言いながら前にいる桃香や鈴々を見る、二人とも華蝶仮面を精一杯応援していた。

「それにしても、連者ということは複数か・・・ほかは誰だろう？」
「うぐう・・・」

「はう・・・」

「ん？どうした二人とも」

「な、何でもない（ありません）・・・」

「・・・それにしても、何だか劣勢じゃないか？」

「刀がふと思ったことを口にした。」

「苦戦というより、相手を引き込んでいるようにも見えますわね」

紫苑がそれに答える。

「うーん。やっぱりお約束なのかな・・・」

「お約束？何かの計略ですか？」

なんか平和な会話をしてるなか、華蝶仮面がこっちに跳んできた。

「とっつっ！・・・くっ」

「げっ……」

「あ……」

華蝶仮面と目があつてしまつ俺と朱里。

「……戸棚の上から三段目」

華蝶仮面がそんなことを呟く。

「！ふ……ふふーんだ。もうその手は通じないですもんねー！」

「そうか。そういえば、寝台の下に移つたのだったな。確か……左の隅、だったかな？」

「……ひっ！」

「……恋がとつておいたおやつ肉まん」

「うぐっ……！」

「……では、待っているぞ！とっつ！」

また華蝶仮面がゴロツキの集団に突っ込んでいく。

「……なんなんだいった……いや、巻き込まれたんだな二人とも」

「……ああ」

「・・・色々と事情があるんですご主人様」

「それじゃあ、朱里。行くぞ・・・」

「はい・・・」

建物の陰に移り、懐から蝶をイメージした仮面を取り出し、・・・装着した。

「でゅわっ!」

「変身っ!」

いきなり現れた新たな華蝶仮面に蹴り飛ばされるゴロツキ。

「ぐわあっ!?!」

「てめえ、一体何者だ!?!」

「通りすがりの華蝶仮面だ!覚えとけ!」

どこかで聞いたことのあるセリフを口にした華蝶仮面。

「お、おまたせしましたぁ・・・」

「うむ！遅かったな朱華蝶^{あけ}！咲華蝶！」

「・・・はぁ」

「う、うう・・・星華蝶^{ほし}さん、お待たせしましたぁ」

俺たちの登場に桃香たちが盛り上がってるのが分かる。・・・一刀と紫苑が温かい目を向けているのが心に痛かった・・・

「よし！では名乗るぞ！」

「・・・はい」

そう言っつて俺たちは横に並ぶ。

「天知る、神知る、我知る、子知る！」

「悪の蓮花の咲くところ、正義の華蝶の姿あり！」

「悪の花が咲くのなら、善の花も咲き乱れる！」

上から朱里、星、俺の順。

「朱華蝶！」

「咲華蝶！」

「星華蝶！」

「かよわき華を護るため！」

「華蝶の連者、三人揃って」

「ただいま！」

「」「参上！」」「」

ドカアーン！

名乗りと共に爆発する屋根。・・・いいのか？爆発させて。

そうして朱里は先に戻った。・・・戦闘は俺と星の役目だ。

「てめえらがいるからこんな格好をさせられるんだ！死んで償え！」

「え！そんなりふじ・・・ぎゃああああ！？」

・・・こんな感じで敵を殲滅していった。・・・そして、敵は遂に後一人になった。

「ふつ。既に残るは貴様一人、どうする？」

「畜生・・・こうなりやヤケだ！だりやあああつ！」

「味方を見捨てぬとは天晴れな志！・・・咲華蝶、朱華蝶！我々も奥義を出すぞ！」

その言葉を合図に朱里が再び合流する。

「いくぞ！」

「はわわ・・・」

「はあ・・・」

そしてポーズを取る・・・恥ずかしい。

「行くぞ必殺！三位一体！」

「・・・エアロ（ボンッ）」

こっそりキープレードを取り出し、星の回りに吹き荒れる風を出す。そのまま星は敵に走りより・・・

「華蝶！風！月！斬っ！」

ドカアッ！

星が槍の峰で相手を思いつきりぶん殴った。

「ぐはぁっ！」

「・・・安心せい。峰打ちだ」

・・・三位一体って言うてるけど朱里だけ抜かれてるし。

「正義は勝つ！」

よし・・・これで終わったか・・・？

「華蝶仮面！警備の兵が来たぞー！」

そんな野次馬の声が聞こえた。

「む。では、これにて御免！」

「朱里・・・朱華蝶！私の魔法の板に乗るがいい！」

そう言っつて朱里をボードにしたキープレードに乗せる。

「はわわっ！おち、落ちちやいますー！？」

「（落ち着けよ！俺に掴まっつてれば落ちないから）」

朱里に小声で話す。・・・朱里はおずおずと俺に掴まっつてくれたので、直ぐに出発する。

「はわわー！！？」

・・・うん、予想通り。・・・ちなみにこれからしばらく愛紗の機嫌が極限に悪くなり、皆（主に一刀）が八つ当たりされたことは言うまでもない。

更にそれからしばらく経ち、愛紗の代わりに紫苑と桔梗が弓を見てくれたり、キープレードな素振り以自己鍛練したりしているときに、焰耶に追われている一刀を見かけた。

「あー・・・まったくげんきだなあ、焰耶なんて金棒振り回してる・・・金棒!？」

ちよっ、一刀が喰らったらただじゃすまないぞ!？

「・・・まあ、良い薬か」

どうせ焰耶のことだ、桃香関連のことで一刀を追いかけて回してるんだろっ。

「……うるせえ……」

あれからしばらく経ったが、「愛紗と鈴々の薄情者……！」だの、「他人事だと思ってる……っ！」とか言った一刀の叫び声が響き渡るもんだから、集中できたもんじゃない。……そんなとき、一刀がこっちに走ってきた。

「あ！咲！」

嬉しそうに俺によってくる一刀に俺は……

「なあ、一刀」

「え、何？」

「俺はさ、やかましいのって嫌いなんだ」

「うん……」

「……人が集中してんのにぎゃーすかぎゃーすか……やかましいんだよ……！」

いつの間にかキーブレードがブレードに変わってた……どうやらマジギレしたりするとブレードになるんだな。……焰耶も遅れてやって来た。

「どうした？もう……逃げるのは……ん？咲じゃないか」

「よう焰耶……俺も一刀“殺し”……参加するよ……」

「あ、ああ！べ、別に構わんぞ！」

そんなとき一刀が合言葉を言い放つ。

「だ、誰か居ないか」

「げっ……」

「はっ。往生際の悪い奴だ。今更、お前に味方する者など……」

「ここに居るぞーっ！！」

……馬超の従姉妹の馬岱こと蒲公英がいきなり出てきた。

「なに！？」

「あーあ、やっぱり」

来ると思っただんだよ畜生。……あ、ポーツとしてるうちに焰耶と蒲公英が戦い始めた。

「……俺も参加するか」

俺は焰耶とタイミングを合わせ、止むことのない嵐を蒲公英にぶつける。

「うわわっ！？二人がかりは卑怯だっ！」

「戦で敵が一人で来てくれるものか！」

「そこらへんに畏張ってるやつに卑怯呼ばわりされたくない！」

「むう……」

蒲公英の言葉を一刀両断にする。……が、気が緩んでたのか、足が何かに引つ張られた。

「は……？」

視界が逆さまになる……やられた。

「咲！？……うわっ！」

俺に気を取られたのか、焰耶も宙吊りにされた。

「大成功っ」

「あー……畏が有るって分かってたのに……」

そうだよ、畏が有るって知ってても、俺は細かい位置を知らないじゃないか……自分の不甲斐なさに泣きそうになったとき、怒りが収まったからか、ブレードがキーブレードに戻った。

「ええっと……咲は縛んなくてもいいや。焰耶は……にひひ」

「おい、なんで縄を持って妖しげに笑って……おい！やめろ！」

「あんまり暴れない方が良いと思うよ？首とかに変に巻き付いて苦

しくなっても知らないからね」

「くっ……」

数分後……焰耶は蒲公英によって、その、マニアックな縛り方に縛られていた。

「たんぽぽ……亀甲縛りなんて誰に……」

一刀が蒲公英に聞く。

「へへー。上手にできたでしょっ？この縛り方、星姉さまに教えてもらったんだよっ」

「星のやつ……蒲公英に何教えてんだ……」

「こんな事をして、後でただで済むと思っなよ！」

焰耶が悔しそうに吠える……が、蒲公英ははまだ妖しい笑みを浮かべたままだ。

「ふうんだ。いつまでそんな態度でいられることやら」

蒲公英はそう言って、懐をこそごとと漁り始める。

「これなぐんだっ？」

「……？羽でできた扇子みただけど……」

「うん。朱里がね、指揮する時に使おうと思って取り寄せたらしいんだけど、ぜんぜん自分に似合わないから、泣く泣く封印したって
いう伝説の羽扇だよ」

「朱里が・・・」

一刀、想像してないで助けて。そろそろ頭に血が上ってきた。・・・
それから目のやり場に困るような物を見せられ、蒲公英の視線がこ
っちに向いた。

「むふふ・・・次は咲の番だよ？」

「蒲公英・・・それ以上近づいたら後悔するぞ？」

「ふふーん。まほうってやつはこの鍵っばい剣を使わなきゃ使えな
いんでしょ？だから怖くないよー」

「そうか・・・その言葉、覚悟しろよ？」

そう言っつて俺は縄に向かって手を振り、

「・・・開け」

呪文みたいなものを口にした。・・・次の瞬間には地面に落下した
が。

「いや、まさか縄の隙間の広さを“開く”ことができるとは驚きだ
った・・・ところで蒲公英？」

「……な、なに？」

「……覚悟しいや……」

「ひ、ひやあーっ！」

蒲公英を必死に追いかけて回した……ちなみに焰耶は一刀によって保護されました。

大切な平穩く蜀（後書き）

・・・はあ・・・

亮

「なあ、作者どうしたんだ？」

咲

「受験に落ちたんだよ・・・」

明命

「うーん・・・つまりは作者さんは力不足なのですか？」

ぐはあっ!？

恋

「・・・可哀想・・・」

音々音

「ふん!ねねたちを出さないからこうなるのですよ、このクズ!」

咲

「いや、今は止めてやれって・・・」

・・・ふふふ・・・大丈夫ですよ?第2試験もありますし、まだまだチャンスは残ってますから・・・

亮

「うわあ、いたたまれねえ・・・」

射命丸

「あやや・・・スクープ『作者の落ち込む訳は!?!』を調べに来たんですけどそんな空気じゃありませんね」

亮&咲

「「何故お前が居る」」

射命丸

「だって私も物真似された人の一員ですよ?ここにくる権利はあります」

亮

「はいはいわかったわかった」

咲

「おい、よく見ろ、あっちには明命たちを愛でてるアサシンの姿もあるぞ」

亮

「きりないなおい」

射命丸

「それじゃあ、今回はここまでということ、次回!真似と開閉と世界旅行!」

アサシン

「見るがよい」

亮&咲

「「それではまた次回会いましょう！」」

・・・はあ・・・

華雄

「お前も来るか・・・？」

公孫贇

「ほら、お前の分もおこってやるから・・・」

・・・ありがとうございます。

新たなる戦の始まり〜(前書き)

はい。二回目の受験が終わりました。・・・ではどうぞ。

新たなる戦の始まり

「……では蓮華様。すぐにでも南征軍を編成致しましょう」

今回の軍議は戦関連なので、俺も参加していた。……ちなみになぜ南かというと、北には呂布と劉備が居るため、西を攻めた際に、呉を攻められたら退路を断たれてしまう。残りは論外。

「そうしよう。……出陣する武将は、呂蒙、甘寧、周泰、陸遜」

「御意！」

「御意」

「御意！」

「はい！」

点呼された人間が返事を返す……あれ？

「……権殿。出陣武将に俺の名が無いのだが……俺はもはや用済みか？」

「何を言ってるの。祭だからこそ、私は建業の留守を任せられるのよ。」

「私たちの帰る家をしっかりと守って欲しいの」

「むう〜・・・前線で働くことが出来ないとは。齡とは残酷なものよ・・・」

「あのさ・・・蓮華？俺の名も無いんだが・・・」

恐る恐る蓮華に問う。

「亮も同じよ。亮ならもし呂布が来ても、互角、いや、それ以上に戦うことができるわ。・・・貴方だから頼めるの」

「・・・ああ、わかった。俺は蓮華の剣であり、盾だからな。・・・命令には従つた」

「拗ねるな、黄蓋殿、亮。私も居残り組だ。・・・ともに蓮華様たちの帰ってくる家を守るうでは無いか」

「そりゃ守りはするが。・・・つまらんのお」

「ちえ・・・間近で思春や明命の戦いを見ていると勉強になるのに・・・」

「そう言わずに。・・・お願い」

蓮華が真っ直ぐな目で見据えてくる・・・はあ・・・

「むう・・・了解した」

「うーい・・・まあ、ちゃっちやと片付けて来てよ？」

「ああ。思春と穩は部隊の編成を急がせなさい。亞莎と明命は兵站の準備を頼む」

「はっ！」

「了解であります」

「はい！」

「御意です！」

皆がバラバラに自分の仕事をしようと移動するなか、俺は思春と明命に声をかけた。

「あ、ちょっと待ってくれ思春、明命」

「はい。なんででしょうか？」

「……」

「やばい、思春が不機嫌だ。……この間のあれがまずかったんだろ
うなあ……」

「え、えっと……二人とも、戦が終わったらこれを読んでくれ」

そうやって俺は二人に紙切れを渡す。

「……これは？」

「それはもし戦の後に何か起きたときの救済措置だ。・・・戦が終わったり、ここに何かが起きたらそれを見てくれ」

「はい！わかりました！」

「これぐらいの物なら穩に渡せば良いだろう・・・」

「俺は思春と明命だからこそ手渡したんだ。・・・穩に渡すと忘れられかねないし、蓮華や亞沙は緊張で忘れるかもしれない・・・だから二人に渡したんだ」

「・・・いいだろう。承知した」

ホツとした瞬間、入り口の方から「シャオはどうなるのー！」・・・皆が忘れてたって顔だった。

「・・・暇じゃ」

蓮華たちが出陣してから一刻。祭さんはいきなりKOしていた。

「祭さん・・・お願いだから同じことを何回も繰り返さないですよ・・・俺も暇なんだから」

「！・・・じゃあ亮。儂と・・・」

「却下」

「まだ何も言っておらんじゃろ！」

「どうせ模擬戦に付き合えって言っんでしょ……無理。下手に力使つといざって時に気絶しちゃっから」

「むう……」

祭さんは城壁の上でうろうろしていた。……そんなとき冥琳が近寄ってきた。

「大変だな、亮」

「冥琳……見てたんなら助けてよ」

「無理だ。あの人を操れる人はそうおらん」

「……だよねえ……」

その時、俺は冥琳の顔を見る。

「……顔色良いんだな、冥琳」

「ああ。雪蓮やお前には口うるさく言われたからな。ちゃんと早めに睡眠を取るようになっている」

「そっ？ならいいけど……ふわぁ……俺が眠くなっちゃったよ」

「なら少し寝ればいい・・・ここは私に任せておけ」

「・・・いいのか？」

「ふ。人に散々言っておいて自分がしっかりしていなくてどうする」

「だね。・・・それじゃあお休み」

「ああ」

俺は部屋に戻り、仮眠を取ることにした。・・・蓮華。早く戻ってきて、祭さんが大変。

それから数日。そろそろ決着がつくであろうと予想していた日になった。

「むう・・・つまらん・・・つまらん・・・つまらん。どこからか誰か攻めてこんかのお」

「こ、黄蓋様。何を物騒なことを言ってるんです！もう、ワガママばかり言ってちゃダメですよお」

祭さんが限界に近づき、物騒なことを言い出し、兵士の人に注意されていた。

「大変ですね・・・兵士さん」

「確かに大変ですよ・・・大澤様はどうなんですか？」

「んー・・・退屈じゃない。と言えば嘘になりますよ・・・あと、俺の事は名で読んでいいですよ？」

「いえ、それなら先にその敬語を止めてくださいよ。皆言ってますよ、逆に話しづらいつて」

「いえ・・・これは癖なんですよ・・・」

「はあ、そうですね・・・まあ別にいいですけど」

「うがー！誰でもいいから攻めてこんかーい！」

「さ、祭さん！なんで腕振り回して叫んでんですか！」

「むうく・・・暇なんじゃもん」

「何がもんですか、良い歳をして」

祭さんの一言に冥琳が突っ込む。

「歳のことを言うのは卑怯だぞ、公謹」

「ワガママな先達にはそれぐらい言わせてもらわないと」

「むう……」

二人を横目にしながら兵士さんと話す。

「……やっぱり冥琳って凄いですよね」

「そうですね……甘寧様は力づくで黙らせますが、周瑜様は巧みに口を閉じさせますからね」

「あ、わかりますそれ、いつも間近で殺気を受けてますから」

「なんでそんな平気そうなんですか……私たちが受けたら心の臓が止まりますよ」

なんて和やかな会話をしていたら、伝令が走ってきた。

「も、申し上げますー！ーっ！」

「なんじゃー！」

「つい先ほど、深紅の呂旗が国境線を突破！この城に向かって急接近しているとの報告が！」

「やったー！」

「何がやったですか！すぐに蓮華様に伝令を出せ！我らは籠城の準備をするぞ！」

「籠城じゃと!?!」

「当たり前です。この城の兵力は少ない。蓮華様たちが戻ってこなければ、飛將軍と讃えられる呂布に太刀打ちができないでしょう」

「儂がおるぞ！ここにおるぞ！」

「祭さん・・・子供じゃないんだから・・・」

「ほら！亮もおるのじゃ！亮なら呂布の相手ぐらい簡単じゃろ!?!」

「い!?!馬鹿言わないでよ祭さん！俺の時代でも三国無双とか向かうところ敵無しとか言われてる呂布に簡単に勝てるわけないでしょ!?!」

「むう・・・」

まったくこの人は・・・思春と明命は紙を読んでくれただろうか・・・あれには襲撃されること、兵糧を忘れないことを書いたから、多分あまりもたつかないで援軍にこれると思う。・・・そんなとき敵から雄叫びが上がり、突撃してきた。

「おうおう、良い気合いを見せとるのお！戦い甲斐がありそうじゃ」

「・・・祭殿」

「なんじゃ?」

「あまりウキウキせんで欲しいのですが」

「無理じゃー!」

「はぁ・・・そういつと思った・・・」

「がんばれ・・・冥琳・・・」

「だってじゃぞ?あれだけイキの良い敵軍が目の前に居て、どうして興奮を抑えられる!」

「いや、そこは将として抑えて頂きたいのですが」

「無理じゃ」

「ですよー・・・」

「めーりーん・・・俺も飽きてきた・・・モーションキャプチャー・・・チエスター」

俺はテイルズオブファンタジアの弓使いに変わる。

「・・・よし、祭さん。上から狙撃と行こうか」

「おつよ!権殿が来るまでの間、気晴らしをさせてもらおうわい!」

「・・・敵、全滅すんじゃないのか？」
とにかく俺たちは城壁の上に向かった。

「くらえ！紅蓮！」

火を纏った矢を放つ・・・あ、

「今のでTP切れた・・・」

「ていーぴー？」

「あれを射つための力というか源というか・・・とにかく俺は後ろに・・・」

「黄蓋殿！お待たせしましたな！」

「やっとじゃー！やっと儂の出番がきたー！くくくっ、腕が鳴る、腕が鳴るぞーっ！」

「祭さん・・・」

どうやら蓮華たちが戻ってきたようだな。

「蓮華様と連携して呂布を叩きます！皆、出陣準備をせよ！」

「応っ！」

「あれ？冥琳！俺の剣が無いんだけど！？」

俺は腰にあるはずの剣がないことに驚く。

「お主は別に弓で構わんじやろ。ほれ行くぞ」

「いやー！もうTPが無いんだから元に戻るー！」

とにかく元に戻った。

「・・・仕方ない、私の護身用の剣を貸してやる」

「え、でも・・・」

「大丈夫だ。私には白虎九尾がある」

「ありがたく貸していただきます」

そして俺たちは出陣した。

「たあっ！」

ズシヤツ!

「ぎゃあっ!?!」

また一人、あの世に送った。

「仲間の仇!」

「しまっー!」

後ろから不意打ちをくらい、俺は・・・

ズシヤアツ!

「ぎゃあっ!?!」

「え?・・・明命!?思春!?来てくれたのか?」

「・・・まつたく・・・油断をするな」

「怪我はありませんか?」

「ああ。大丈夫・・・ありがとう二人とも」

「それにしても、亮様のおかげで戻ってくるのに時間がかかりませんでした!」

「よかった・・・あれ?二人がこっちに来たってことは、」

「ああ、呂蒙の案により、簡単に敵の後ろを取ることに成功した」

「そうか・・・あれ？どうやら撤退するみたいだぞ」

「本当ですね・・・亮様？どうかしましたか？」

「いや、もしかしたら呂布を捕まえられるかもしれない」

「馬鹿なことを言うな。呂布の元に行くにはこの兵の中を行くということだぞ」

「大丈夫だって・・・モーションキャプチャー！桜咲刹那！」

今度はネギまの剣士になる。

「・・・はあ！」

背中から翼をだす。桜咲刹那は人と鳥族のハーフだ・・・よって翼が出てもおかしくはない。

「はうわ・・・綺麗です」

「・・・無理をするなよ」

「わかってるよ・・・それじゃあ、行ってくる！」

翼の扱い方は射命丸のと同じみたいな感じだった。

「待てっ！」

「……！誰？」

呂布が俺を確認した瞬間、直ぐに身構える。

「呉軍が甘寧の副将、大澤亮」

「……恋は……呂布」

「ああ……さあ、行くぞ！」

一気に間合いを積める。

カキヤアン！

刀と方天戟がぶつかり合う。

「くっ……やっぱり力じゃ勝てないか……」

なら、素早さで攻めるのみ。

「はぁッ！せりゃ！とりゃあ！」

カンッ！カキン！キンキンッ！

「お前……結構強い……」

「お褒めに頂き光栄だよ……出し惜しみは出来ないな……」

俺は一枚のカードを取り出し、呟く。

「来れ（アデアット）」

その瞬間、俺の回りには短刀が浮かんでいた。

「匕首・十六串呂シーカ・シクシロ・・・受けきれるか？」

「・・・こい」

「サービスだ！全部受けとれ！い・ろ・は・に・ほ・へ・と七刀！
・・・切り刻め！」

「・・・！」

カキン！カキン！キンキンキンツ！カキヤアン！

「嘘っ・・・全部防ぎやがった・・・」

くそ・・・化けもんだな畜生・・・

蜀

「恋とねねが出陣したあ!?!」

「そつだよ咲君・・・いま伝令が入つたの」

「くつ・・・桃香!俺も出る・・・!」

「おいおい、待てよ咲。そんな慌てたつて間に合つか・・・」

「最大全速で飛べば間に合つ!」

俺は聞く耳を持たずに走つていった。

「・・・恋・・・ねね・・・無事でいてくれよ・・・」

俺は全速力で飛ばしていた・・・自分に速度強化の魔法もかけた。
・
・ほら、もう見えてきた・・・あれは!?

亮

「神鳴流奥義！斬岩剣！」

ズガアッ！

「・・・ぐっ・・・！」

何とか呂布を吹っ飛ばせた・・・。

「よし・・・呂布、大人しく降伏するんだ。降伏してくれれば手荒なことはー」

「やめろおおおお！」

「ッ！！」

カキヤアン！

とっさに出した夕凧でなんとか弾き、相手の顔を・・・え？

「ちゅき・・・」

「・・・なんで桜咲刹那が俺の名前を知っている!」

「あ……俺だ！大澤亮だ！……ええとキャプチャーキャンセル！」

元に戻った瞬間、咲の顔が驚愕に染まる。

「亮……なのか……」

「……！」

「な！？ぐわっ！」

ドカアッ！

呂布が出した拳が俺を吹っ飛ばした。

「咲……！逃げる……！」

「れ……恋……でも」

「でももしかشもないのですぞ咲殿！」

「ねね……わかった、全軍撤退だ」

「お、おい！咲！」

必死に呼んだその声は……誰にも届かなかった……

新たなる戦の始まり〜（後書き）

亮

「やっと咲とあつたな」

咲

「だな。まあ、幕間だけの出番だったけど俺」

恋

「……（ウキウキ）」

咲

「すごい嬉しそうだな恋」

恋

「……久々に本気で戦えた……」

音々音

「……ねねは言葉が一つしかなかったのです」

忘れてました。

音々音

「問答無用のちんきゅーきいっくー!」

ゴバアアアア!?

亮

「うわ……痛そう……」

明命

「ですね……」

咲

「あれ、周泰も来てたんだ」

明命

「はいなのです！……でも、よろしいんでしょうか？私ばっか出ても……」

亮

「そんなん気にすんなよ？あそこには後書きはおるか本編にも出てこれない人がいるんだから」

雪蓮

「……」

明命

「はうわ！？いつの間に！」

雪蓮

「……確かに旅は楽しいけど……私だけなんかのけ者じゃない？」

我慢してください……必ず出しますから。

雪蓮

「なら信じるけど……嘘ついたら……」(チャキッ)「

わかりましたから武器をしまってください!?

雪蓮

「そんじゃあここは私がもらうわ。・・・次回の真似と開閉と世界旅行」

音々音

「絶対に見るのですぞー!」

全員

「それではまた次回会いましょう!」

咲千里行々（前書き）

なんとか二話投稿出来ました・・・ではどうぞ。

咲千里行

「……よし」

今の時間は深夜0時くらい。俺、五十嵐咲は脱走することを決めた。
……みんなには悪いから何も言っていない。

「……行くか」

部屋を出る。

「「あ」

……出たとたん詠に遭遇してしまった。

「あなた……何処行くのよ？」

「それは……」

「……いいわよ。行きなさい」

「詠……?」

「知ってるわよ……あなたの友達が見つかったんでしょ?……
なら、さっさと行きなさい」

「詠……ゴメン」

俺は走りだす。その後に詠が、

「バカ・・・そこで謝らないだよ」

誰の耳に入ることもなく、その言葉は闇に消えた。

「はっ・・・はっはっ・・・」

俺は走って門まで走り、門を跳んで行こうとしたら、

「・・・行かれるのか？」

「・・・星」

門の前には星がいた。

「・・・邪魔・・・すんのか？」

キーブレードを構え、問う。

「そんな気はありません・・・咲殿は約束をしていたのであろう？・・・なら堂々と皆に告げればよいではないですか」

星の言葉に首を振る。

「いや・・・それだと俺が行けなくなる。ホントはここで星と話してるのも辛いんだ」

「そうか・・・なら私は止めませぬ・・・私は見逃しますが、愛紗

や焰耶は分かりませんか？」

「それでも俺は亮の元に行く・・・じゃあな、星」

「御武運を」

「サンキユ・・・」

俺は再び門を跳んで、また走り出す。ボードで行かないのも蜀の地を踏みしめたいから。俺はひたすら走った。

「ふう・・・」

俺が少し休もうとした瞬間・・・馬の蹄の音が近づいてきた。

「・・・誰だ」

暗闇から馬を連れてきたのは・・・翠だった。

「・・・翠」

「てめえ・・・桃香様を裏切るのかよ」

「裏切ったわけじゃない・・・これは桃香との約束だ」

「そんなん知るか・・・桃香様やご主人様の敵になるんだったら・・・ここでぶっ倒す！」

「・・・！」

馬から降り、十手槍を構える翠。俺はキーブレードを構える。

「くらええええっ！」

「はあっ！」

カキヤアアン！

「グッ・・・！」

「よく受け止められたな・・・ならこれはどうだ！」

素早い点の突きが迫る。

「魔力集中・・・ヘイスラ！」

自身に強化魔法をかけて対抗する。

カキン！カンツ！キキンツ！カキヤアアン！

「・・・ぐ・・・私の槍を全部弾くなんて・・・」

「翠……頼むから引いてくれ……」

「やなこつた。……お前は必ず連れ帰る」

「……ごめんな……魔力最大集中……スロウガ！ヘイスガ！」

翠にスロウガ、俺にヘイスガをかけ、翠に踏み込む

「な……身体が……」

キーブレードを左の胸に突き立てる。

「がっ……！」

「少しの間……眠っててくれ……閉じる」

俺は翠の心を……閉じた。

「あ……」

力なく倒れる翠。それを見届け、

「……ゴメン」

また走り出した。

「・・・今度は誰だ」

「・・・私だ」

「焰耶・・・お前もか？」

「ああ。ただ、翠とは違う。・・・私はお前を・・・殺す」

「くそっ・・・どいつもこいつも・・・」

「行くぞっ！はあああっ！」

「（力に力はよくないな・・・）」

ガアアン！

派手に地面にめり込む。

「・・・くられえ！グラビデ！」

「なっ・・・！？」

ズズン！

焰耶が重力に負けて這いつくばった。

「ぐっ・・・き・・・さま・・・」

「……しばらくすれば元に戻るよ……じゃあね」

「なっ……まで……!」

俺は脇目をふらずに走っていく。体力が続く限り。

「……またか」

走りだと馬に追いつかれるのは目に見えていたが、もう覚悟を決めた。

「……咲殿」

「愛紗……」

「咲殿……本当に行ってしまったのですか？」

「……ああ」

「どうして……貴方が居なくなれば桃香様が悲しまれる……」

「二刀がいる」

「でも！」

「もういい……俺は通る……邪魔をするなら……倒す」

「……わかりました……力づくでも貴方を連れ戻します！」

「ああもう……どいつも……こいつも！いい加減にしるおおおっ！」

頭の中で何かが弾け、キープレードが二刀流に変わった。

「はあああっ！」

「うらあああっ！」

カキヤアアアンツ！……………

「……参りました……」

「愛紗……」

決着は一瞬で決まった。愛紗はどつやら立ち上がることもできないらしい。

「……咲殿……本当に……いくのですか……？」

「……ああ……これは約束だからな……」

「そう……ですか……」

愛紗はそう言って気絶した。

「……サヨナラ……愛紗。弓、教えてくれてありがとう……」

あと少し……あと少しだ……

「最後の難関、か……」

目の前には、恋とねねがいた。

「……咲」

「咲殿……」

「恋……ねね……」

これは勝てないかもな……そう思ったとき、唐突に恋が言い出した。

「……咲……居なくなる……なら、恋も行く……」

「……は？」

「恋殿!？」

啞然とする俺。

「だって……咲は家族……戦いたくない……」

「……そしたら月や詠はどうなるんだよ」

「月と詠は……前線に出てこない……でもきつと咲は前線に出てくる……だから戦いたくない……」

「恋……わかった、好きにしろ」

「……ねね。どうする……?」

「言われるまでもないのです!ねねは何処までも恋殿についていきますぞーっ!」

「ありがとう、二人とも……ありがとう……恋。ねね」

思わぬ味方が増えて……遂に俺は……

「……あ!おーい!咲いーっ!」

「……亮!」

遂に、この世界に共に来た友人と再会した・・・

咲千里行（後書き）

翠 & 焰耶

「……」

咲

「すみません、まじちョーシに乗ってました」

亮

「うっわぁ……怖い……」

翠

「一つ聞くけど……」

咲

「はい……」

翠

「心を閉じたって言うてるけど、私はどうなるんだよ」

安心してください。咲は一時的に閉じただけで、直ぐに復活します。

翠

「んじゃあ平気だな」

焰耶

「……私はこんなにも弱いのか……」

咲

「魔法の知識がないからしょうがないっしょ？」

焰耶

「うむう……」

亮

「……ブラックジャック……」

咲

「ばっ……！それ禁句……」

焰耶

「なんなんだそれは！なぜ私は医者呼ばわりされるんだ！？」

あーあ……責任とってくださいよ？

亮

「え？いや、ちよっ……！？」

焰耶

「うわああっ！」

亮

「ぎゃああああー!？」

愛紗

「ほっ……焰耶があそこまで強いとは……」

咲

「あ、愛紗……大丈夫？」

愛紗

「はい。大丈夫ですよ。そんなに怯えないでください」

咲

「愛紗……」

愛紗

「この借りはいつか戦で返しますから」

咲

「怖いわっ!?!」

えーではそろそろお開きにしますか……

翠

「次回、真似と開閉と世界旅行!」

焰耶

「見るがいい!」

愛紗

「それではまた次回会いましょう!」

いま出来ることと呉（前書き）

まさかインフルエンザが流行ってるこの時期に普通の風邪をひいてしまいました・・・まあ、それは置いといて・・・ではどつど。

いま出来ることゝ呉

「・・・大変だったなあ・・・」

なが大変かって？・・・呂布・・・恋やねねの処罰。咲は俺の知り合いと言うことで祭さんの使い走りとなった。でも、恋とねねは我が軍にかなりの被害をあたえたとのことで・・・蓮華は即行で打ち首と言ったので俺が土下座をしたり。明命達も（珍しく思春も）蓮華に頼み込み、しばらくの間の監禁（ほぼ軟禁に近い）を言い渡された。

「・・・」

「あれ、咲じゃん。どうした？」

「・・・ああ、亮か・・・いや、キープレードに蓄積されてる魔力を体に移せないかな？っと思って・・・」

「どうだったんだ？」

「途中で体が木っ端微塵になるところだった」

「・・・やめようね」

「いや、でも手足とか、部位的ならセーフみたいだぞ？」

「ふーん・・・」

こんなときも相変わらずやってくる悪魔。

「なにか言ったか？」

「何でもないよ、思春」

はい、思春さんの降臨です。

「あ、甘寧じゃん。どうしたんだ？」

「五十嵐か・・・簡単に言えば亮を叩き潰している」

「確かに叩き潰されてるけどさあ・・・鍛練って言うてよ」

「ふーん・・・甘寧もさ、やっぱり強いんだよね？」

「・・・試すか？」

「お、おい・・・？二人とも・・・？」

なんか二人の間に火花が散ってるように見えるんですが・・・

「・・・勝負！」

「・・・望むところだ」

「おい！二人ともー！元々俺の鍛練だったこと忘れんなよーっ！？」

「亮様・・・あの・・・私で良ければ・・・お付き合いますけど・・・」

「うん・・・お願い・・・あ、亞莎も後で体術を教えてよ」

「は、はひ！お願いします！」

少し涙ぐみながらも二人との鍛練に励んだ・・・

「ハアッ！」

ズガアッ！

「セイッ！」

ガスッ！

「タアッ！」

ダンッ！

「たりやあつ！」

ドンッ！

「・・・ふう」

「・・・はああ」

現在は明命との鍛練を終え、亞莎との体術鍛練を始めた。・・・ちなみに前回みたいに袖で絡め取られて蹴り飛ばされてもこまるので、今は亞莎に思春と同じ服を着てもらってる（本人曰く、「恥ずかしいけど、なんか馴染みます」だそうです。・・・アニメで着てたからなー・・・）

「・・・流石ですね・・・」

「そっちこそ・・・」

「・・・」

「・・・」

・・・次で・・・決まる・・・

「ハアアツ！」

「しりあぁっ！」

・・・負けましたー・・・

「ごめんなさいごめんなさい！ほんつとーにごめんなさい！」

「いや・・・大丈夫だから・・・亞莎謝りすぎ」

「まったく・・・弱いなあ亮。な、思春？」

「全くだな・・・確かに未熟だと断言できるな、咲
咲と思春がいつの間にか近くに来ていた。」

「・・・っていつの間にも名と真名で呼んでんだよ」

「昨日の敵は今日の友って言うたろ？」

「蜀の皆さんにとっては逆だよなあ！？」

「・・・ぐだぐだうるさいぞ」

「思春！？今のつて本当に俺が悪いか！？」

「まったく・・・うるさいと思うよな？明命、亞莎」

「・・・少し・・・」

「・・・お猫様が大声で逃げてしまいました・・・」

「いつの間にか俺アウエー！？しかもいつ真名を！？」

「え？もう思春で最後だけど？」

「早っ！祭さんとかは分かるけど、まさか蓮華にまで許されてるとは・・・」

「ちなみに一番最初は穩だった」

「・・・あー・・・」

「あと逃げてる途中に雪蓮にも許された」

「なんでさ！？なんで雪蓮そんなどこにいんだよ！？」

「あと伝言、『いやー、旅って仕事がないから気楽よね・・・みんながんばってねー』だって」

「もとからるくに仕事してなかっただろっがあああっ！」

何でいつの間にか咲との漫才になってんだろっ・・・

「……ふう……」

「二人とも元気なのです……」

「とても仲が良さそう……」

「つつか雪蓮の奴、呉の近くまで来たなら寄ってけよ！」

「俺に言つな。……まあ頑張れよ？た・ね・う・ま」

「しえええれええんんんっ！なんつつうこと教えてんだあああ！」

「そんな怒るなよ。色々と聞いたぞ？種馬」

「種馬言つな！やつと皆忘れてきたのに！ああ！明命、亞莎！？ここで顔を赤らめるな！……思春！？なんでそこで殺気を叩きつけるのさ！？」

「……（ニヤニヤ）」

「咲……そろそろ俺もキレルぞ……」

ケータイを取り出す。

「やるのかい？」

咲はキーブレードを構えた。……刹那、

「やつかましいわああああっ!」

ズガンッ!・・・祭さんの拳骨が唸りを上げた・・・

「~~~~っ!・・・く、ああ~~~~」

「いつ、たあ~~~~」

俺と咲は祭さんの拳骨を貰い、悶絶する。

「さつきから小僧共がやかましい!うるさくて頭にくるわ!」

「・・・どーせ酒を飲んでたんでしょ」

俺のひねくれた一言に・・・拳骨で返事をした。

ズガンッ!

「ッ、ああ・・・ぐ~~~~」

「そんなわけなからう!ちゃんと仕事をしておる」

「~~~~ホントかよ・・・」

「・・・嘘だな(ボソッ)」

ガスンッ!

「・・・ッ!・・・ああ、はあ~~~~」

咲の呟いた声に反応して拳骨を落とす祭さん。

「失礼な！何を言うておる！儂がちゃんと・・・」

「やっておられると言つのですか？」

「・・・！！！」

後ろに登場呉の大軍師。

「・・・お、おう・・・公謹ではないか・・・」

「はい。正直また病にかかるんじゃないかと言つほどの仕事を押し付けられた周公謹ですよ？」

怖いなあ・・・

「・・・祭さん？どれくらいの仕事を押し付けて・・・」

「・・・三日分くらい・・・」

「それは酷い！」

俺だって一日で山のような書類が来るのに、それを三日分？・・・
どんだけですか。

「お、落ち着け公謹・・・儂も少し休んだら戻ろつと・・・」

「二刻半は少しとは言いません。・・・ほら、行きますよ？」

「……こ、公謹……目が据わっておるぞ？」

「サヨナラ……祭さん……」

「大変だなあ」

他人事だね咲君。ま、たまにはいい薬か……

「……お、明命じゃん」

中庭を歩いていた時に丁度明命が歩いてきた。

「あ！亮様！……あれ？咲さんはどうしたんですか？」

「別に年がら年中一緒にいるわけないだろ？……てか、さんねえ……随分と碎けてんじゃん？」

「い、いえ……亮様のは馴れてしまったと言っか……なんといっか……」

困ったようにあたふたする明命にふと気になったことを聞いてみた。

「……そういえば、随分と前に俺が暴れた時の傷……大丈夫？」
それにビクンと反応して、右腕を抱えながら、答える。

「は、はい……治りました……」

「嘘だな」

俺はずい、と明命に近寄る。

「う……」

そのまま明命の右腕を掴んで上に上げる。

「あっ……！」

後ろの肩と肘の間あたりに一筋のみみず腫のような傷が残っていた。

「……俺がつけた傷か？」

「う……あ……」

「明命」

「……はい」

「……じめんな」

「え……？」

「直ぐに治してやるから俺の部屋に來いよ」

「え!?!でも……」

「いいからほら!」

グイッと明命の手を掴み引っ張る。

「明命?」

「……はい!今行きます!」

明命の治療をするためにその場を後にした……余談だが、その現場を穩と祭さんに見られ、たくさんの誤解を生んだ……

「ここが……呉の宝庫か……」

「はい。そうですよ?ここには歴代の方々が遺したいさんがあるんでーす」

「そうなんだ……」

今いるメンバーは、俺と咲と穩の三人。冥琳に頼まれて宝庫の中の

物を確認して、一覧表を創れとのことらしい。

「んじゃあ入るか？」

「はい。今開けまーす」

俺たちは中に入っていった……

「うわ、結構埃っぽいな……」

「大丈夫か亮？おまえ、埃とかダメだろう？」

「大丈夫……おーい穩！はじめ……」

「あー！こ、これは！伝説の初代孫子兵法書です！こんな貴重な品に对面できるなんて……！」

「……俺たちだけでやろうか」

「……そうしよう」

回りにあるものを片っ端から書き写すこと数刻……

「そろそろあがるか……ってええええええええええ！？」

「亮？いきなり叫んでどうした？」

「こ、これを見るよ！？」

そう言っつて俺は錆びた双剣を見せる。

「！……これっつて……」

「ああ……干将・莫耶だ……」

Fateをやったことのある人なら知つてると思うが、干将・莫耶とはアーチャーが愛用している夫婦剣だ。夫婦剣と呼ばれているだけに干将・莫耶のどちらかを紛失しても、残りの片方を持っていれば、必ず戻ってくる。っつていう不思議な剣だ。

「……そういや中国だもんなあ、ここ」

「しかも呉だしな……でも亮？これ、錆びてて使い物にならないぜ？」

咲が聞いてきたので、とりあえず打開策を言ってみる。

「うん……取りあえず、俺の物真似で武器直しの杖が有った気がするから……試してみるか」

「？冥琳に許可を取らないのか？」

「あ……忘れてた」

宝庫を出る前に穩に声をかける。

「穩ー？俺たちはいまから冥琳の所に……」

「はあ……ここはたくさんの本（お宝）があります」

「……放っておこうか……」

「……だな」

そんなんで干将・莫耶を持って冥琳の所に向かった……

「構わんぞ」

「はい？」

まさかの冥琳即答。もうちょっと手間取るかと思っただけど……

「ふ、お前には命を救われたんだ。これぐらいならむしろ足りないぐらいだな」

「お、おお……太っ腹……」

咲もかなり戸惑っていたみたいだった。……そんなその後、俺の部屋にてファイアーエムプレムの杖使いになって、ハマーンの杖を

使つて干将・莫耶を元の切れ味に戻すことに成功した。．．．因みにその干将・莫耶は咲の能力で、空間にしまつておいた。．．．咲曰押し入れぐらゐのスペース。らしい．．．こんなことをしていただけで一日が過ぎていった．．．．．

いま出来ることと呉（後書き）

亮

「干将・莫耶かよ・・・」

漢字合ってますよね？

咲

「知るか・・・ちなみにこれは誰が使うんだ？」

うーん・・・とりあえずは亮かな・・・

咲

「俺が作った空間を使ってるの？」

TPOです。それによっては誰が使うかも分かりません。

亮

「・・・別にいいけど・・・確かに俺の装備品は普通の剣だけだからね・・・」

咲

「物真似能力のせいで自分の力で戦うことは少ないからな」

亮

「この間は一回自分の力で戦ったぞ」

節約ですから。

咲
「燃費が悪いこと……」

亮
「悪いか？」

別にいいんじゃないかな？

咲
「はいそれじゃあ、恒例のパロディ试试看よー！」

F a t e 恋姫

愛紗
「問おう。貴方が私のご主人様か？^{マスター}」

華琳
「理想に溺れ……溺死しなさい」

桃香
「ご主人様は……私だけを見ててくれればいいんです」

袁術
「やっちゃんえなのじゃ！貂蝉！」

貂蝉

「ぶるあああっ！」

一刀

「俺の夢はハーレム王になることなんだ」

亮

「うわっ……」

咲

「びつみよ……」

ですよね……

亮

「まあ、今回はこんなもんだな……それでは次回、真似と開閉と世界旅行！」

咲

「皆さん是非見てください！」

それではまた次回会いましょう！

決戦(蜀)(前書き)

一話投稿・・・ではどうぞ。

決戦蜀

劉備をどうするかと皆悩んでいたが、いきなり劉備軍から使者がきた。・・・内容は「呂布。陳宮。五十嵐咲を引き渡せ、引き渡さなければ敵対行動ととして宣戦布告する」といったものだ。・・・まさかこんなタイミングよく相手から来てくれるとは思わなかった。

そんなんで現在軍議中だ。この軍議は俺と咲も参加している。・・・
けど、

「・・・ZZZ・・・」

「・・・ZZZ」

爆睡しました。

「貴様ら・・・起きんかあああつ!!」

ガスンツ!

ゴスツ!

「んぎゃっ!?!」

「ぐえっ!?!」

祭さんの拳骨により目を覚ましました。

「・・・あれ?軍議は終わった?」

なーんて言ってみれば蓮華に睨まれ、

「ええ。とつくに・・・」

冷えた声で答えてくれました。

「あ・・・ははは・・・ちなみにどうなった?」

「もう亞莎と穩が国境線の城に向かった。・・・相手は関羽だが、二人なら心配は要らないだろう」

そっかそっか・・・亞莎と穩が関羽に・・・って、

「それはダメええええっ!!!!!!!」

俺と咲が大声で反論した。

「な、何?」

蓮華が戸惑ってるが構わず続ける。

「れ、蓮華？二人は出撃しちゃった？」

「い、いや・・・まだだが・・・」

「なら二人は関羽にぶつけちゃダメだ」

「なんで？私の意見に従えないと言っの？」

蓮華が睨んでくるがここは退けない。

「いいから・・・もし出撃させたら・・・亞莎が死ぬぞ？」

その言葉を発した瞬間に軍議場に残っていた人間すべてが反応する。

「どづいことじゃ？」

祭さんが聞いてきたので言う。

「簡単な事だ・・・天の・・・いや、未来の知識だよ・・・呂蒙は確かに関羽を討ち取る。けど呂蒙は関羽の呪いによって死んでしまっ・・・」

「なっ・・・呪いなんて在るわけないでしょう？」

「けど・・・この世界でも未来の知識と同じことが起きてる。雪蓮が暗殺されそうになった。冥琳が病で命を落とすようになった・・・無下にはできないよ」

「ふむ・・・蓮華様。ここは亮の意見を使用した方がよろしいでし

「よう」

「……わかった、冥琳がそう言うなら……でも亮？」

「何？」

「そういう大切なことは……ちゃんと先にいいなさーい!!」

キーーーーーン……

「ぐう……!耳があ……」

蓮華に耳元で怒鳴られ、耳にかなり響いた。……咲の野郎、耳に手を当ててガードしてるし。

「……ふう……あのね亮……このあと少し付き合っただけど……欲しい」

「……俺？」

「ええ……母様のお墓参りよ」

「いいよ」

「え……いいの？」

蓮華もまさか即答で許可されるとは思わなかったんだろ。戸惑いながらも再び聞いてくる。

「構わないよ?もしかた暗殺者が来ても俺は蓮華を必ず守るよ」

「亮・・・お前はよくまあそんなくさい台詞を言えるよなあ・・・」

「うつせえ・・・今自分も口にして恥ずかしかったよ・・・」

「こほん・・・なら、またあとで・・・城門のところまで待ち合わせをしましょう」

「ああ」

そんなんで俺たちは文台さんの墓参りに向かった。

「・・・あ、あつたわ」

「あれか・・・結構粗末なんだよな・・・文台さんが自分でそう言ったんだっけ」

「そうよ・・・母様・・・呉はここまで大きくなりました。これも全て姉様や皆のお陰です」

でも、墓が二つにならないでホントに良かったな・・・毒喰らった後はしばらく身体が動かなくなったけど・・・その時、

(蓮華をよろしく頼むぞ・・・)

「・・・え？」

今、誰かの声が・・・

「亮？・・・どうしたの？」

蓮華が不思議そうに聞いてきた。

「いや・・・なんでも・・・ッ！！」

俺は蓮華を後ろに下がらせて声を出す。

「そこに居るのは誰だ！？さっさと出てこい！」

木の陰に隠れていた・・・黄巾党の残党が五人ほど出てきた。俺は腰の剣を引き抜く。

「・・・なんのようだ」

「別にただ単に恨みを晴らさせてもらおうってだけさ」

「ヒヒッ、そっちの女は結構上物だからな・・・沢山遊んでやるぜ」

「遊ぶんだな・・・」

「このクズ共が・・・蓮華には指一本触れさせないぞ！」

それが開始となったのか五人が同時に攻めてくる。

「チィ・・・数が多すぎる・・・」

「亮！」

「心配するな蓮華！この程度なら楽勝だ！」

「てめえ！言いやがったな！」

やべ・・・蓮華を安心させるつもりが相手を怒らせてしまった・・・

「ていつ！」

ズシャッ！

「ぐあ・・・！」

よし一人！

「次いつ！」

ザシュッ！

「ぎゃ！？」

二人！

「ナメんなガキやあ！」

カキヤアアンツ！

俺の剣が宙を舞う。死んだ。と思ったとき、声が響いた。

「……あらあら……まだまだねえ亮」

「……!?!」

「ぐあ!?!」

「ぐえつ!?!」

「ぬあつ!」

残りの三人が一気に斬り伏せられる……ローブみたいなものを着た人がフードの部分をとった……って、

「「雪蓮（姉様）!?!」」

俺だけではなく、蓮華も驚愕していた。

「やつほー 久しぶり二人とも……元気だった?」

「雪蓮……いつここに……?」

「ついさっきよ……ホントは母様の墓参りをしてすぐに立ち去ろうとしたら、先客がいるんだもん……驚いちゃった」

「私としては姉様が来たことに驚きだわ……」

「あ、蓮華。ちゃんと私の跡継ぎできてる?」

「はい。皆のお陰でやっていけてます」

「そう・・・これから戦？」

「ああ・・・蜀との決戦だ」

「ふーん・・・頑張ってね」

「・・・軽いんだな・・・」

雪蓮も相変わらずだな・・・ため息でそう。

「はい。・・・私たちは絶対に勝ちます」

「そ。それじゃあ私はもう行くわね」

「ああ・・・！いい結果を待ってるよ！」

「ふふっ。楽しみにしてるわ」

そういって雪蓮は去っていった。

「・・・蓮華、行こうか？」

「そうね・・・」

さあ・・・決戦だな。

「関羽が戻った？」

戻ってきて思春から聞いたのは城を目の前にして関羽が退いたらしい……なんで？

「……あ、そうか」

「咲？なにか分かったのか？」

「ああ。一刀が命令したんじゃないかな？」

「そっか、一刀が……って一刀？北郷一刀？」

「そっだよ？」

咲の肩をかなりのスピードで揺らす。

「お前なあ！そういうことは早く言え！」

「だ、ただだだっって逃げるので精一杯だったし……」

「精一杯のやつがなんで雪蓮とくっっちゃべってる余裕があるんだよ！？」

「うあうあうあーっ！？目が回るー！」

「り、亮様！？咲さんが大変なことになってしまいました！」

「・・・はあ」

「・・・ふう」

ため息をはく思春と冥琳。・・・だってさあ・・・

「だが今が好機だな、全軍前進！」

蓮華の号令で軍が動く。・・・咲は戦についてきてるが、恋とねねはまだ監禁期間なのでお留守番している。

「斥候より報告です！劉旗を掲げた軍団が川向こうの丘に集結しているようです！」

明命が前方の様子を報告した。

「来たか。・・・各部隊、臨戦態勢を取れ！このまま前進して渡河し、劉備を一揉みに揉み潰すぞ！」

ふと思いついて俺は蓮華に告げる。

「蓮華。できる限り最大全速で河を渡るんだ。関羽が上流で策を仕掛けてくる。・・・俺は関羽を足止めしてくる」

「なっ、もしそうだとっても亮一人では・・・」

「なら、俺も行くぜ」

咲が名乗り出した。

「文句は言わせないよ。俺と咲は抜けても軍に影響がないからな・
・効率的つていえば効率的だぜ？」

「・・・わかった・・・でも、気をつけて」

「亮様・・・」

「そんな顔をするなよ二人とも・・・ちゃんと帰ってくるから」

「・・・あーあ・・・俺は空気ですかーっての」

咲が拗ねてた。

「関羽將軍！呉の部隊が渡河を始めました！」

「よし！・・・孫権よ。桃香さまに戦いを挑んだことを後悔するが
良い。・・・準備は良いな！」

「はっ！」

「私の合図と共に堰を切れ！」

「了解です！」

「呉の軍勢の渡河速度が予想を上回り、速く渡河を終えています！
すでに半数が渡河を完了！」

「くっ、気付かれたか・・・行くぞ！三、二、一・・・堰を・・・」

「そうは・・・！」

「させるか！」

ドカアッ！

「ぐわっ！？」

堰を切ろうとしていた兵に突撃した。

「誰だ！」

「・・・呉の天の御遣い・・・大澤亮」

「・・・久しぶりだな愛紗・・・」

「咲殿・・・！」

関羽が少し悲しそうな顔をしたあと、すぐに元に戻る。

「咲殿・・・やっぱり裏切るんですか？」

「裏切る・・・ああそうだな・・・俺は裏切り者だ・・・」

「咲・・・」

「けどな、桃香が一度決めたことを変えないように、俺にも譲れないものがある」

咲が空間を開き、キープレードと干将莫耶を取り出し、干将莫耶を俺に渡す。

「愛紗！話はここまでだ。これからの話は戦いで・・・」

「はい。・・・行きますよ！」

咲が関羽を引き付けている間に俺は堰を切ろうとしている兵たちを斬り伏せる。

咲

「せいっ！」

「はあっ!」

カキヤアン!

・・・何合目かはわからないけど、偃月刀とキープレードがぶつかり合う。

「・・・さすが美髪公関羽だな・・・」

「・・・それは誉めているのですか?」

「勿論・・・魔力集中・・・サンダラ!」

「甘い!」

愛紗は上から不規則に落ちてくる雷を全てかわした。

「ちっ・・・」

「今度はこちらからです!」

愛紗の連撃を必死にいなす。

カカカンツ! キンツ! カキヤアン!

「ぐわあ!」

ダメだ・・・元からの実力が違いすぎる・・・魔力を足や腕に移して強化しているが、それでも差がでている。

「その程度ですか咲殿・・・その程度で私と打ち合おうなどと思っ
たのですかっ！」

そうだ・・・俺は・・・こんな中途半端な覚悟で・・・ははっ・・・
こんなんじゃ俺を慕って一緒に来てくれた恋とねねに申し訳がない。

「・・・いや、俺の本気はーーー」

覚醒。二刀流。否、背中に光の剣が翼のように六本出てきた。

「ーーーここからだ」

亮

「たあ！」

ズシャアッ！

「ぐえ！」

「まだまだだ！」

グサツ！

「ぐふっ……」

「うおりゃああ！」

ズバアツ！

「ぎゃあっ！？」

「はぁ……はぁ……これで全員か……」

干将莫耶を握る手の力を少し抜いた……結構使いやすんだなこれ。

「うああああっ！」

ドサアツ！つといきなり関羽が吹っ飛んで来た。向こうには背中に六本の剣を生やしたように見える咲が歩いてくる。

「ぐっ……！」

「……行けよ」

咲が関羽に言う。

「え……？」

「俺に覚悟を決めさせてもらったお礼だよ・・・行けよ？」

「・・・はい・・・」

関羽はそのまま、退いていった。・・・咲がその場に膝から崩れ落ちた。

「咲っ！」

咲に近寄る。

「はは・・・大丈夫大丈夫・・・少し力を使いすぎただけだから・・・よし」

咲はキーブレードをボードにして上に乗る。

「ほら、戻るぞ亮。早く乗れ」

「・・・事故んなよ・・・？」

少し不安になりながらも俺たちは陣に戻っていった。

「・・・もう始まつてるか・・・!」

咲に頼んで蓮華の横に降ろしてもらおう。

「蓮華！状況は？」

「亮？貴方のお陰で兵たちは無傷で渡河し終えたわ。あと少しで敵の frontline も崩れると思う」

「そっか・・・って咲？いつの間にか弓を構えてんですか？」

「え？いや、愛紗や紫苑や桔梗に教わった成果を試そうかなーって・・・」

「指導者多いなあおい」

「はっはっ・・・鈴々や恋には面白半分でわりと本気の模擬戦でポコポコにされたり、桔梗に無理矢理酒を飲ませられたり、璃々ちゃんにねだられて体力が尽きるまで遊んだり星に色々と捲き込まれたり、愛紗が一刀がらみで何かあったら俺が巻き添え喰らったり・・・」

「いや、いい・・・それ以上聞くとこれから咲とまともに会話できなくなる」

「あ、あと董卓軍の時はねねにちんきゅーきつくをくらったり詠に夜な夜な勉強させられたり華雄や霞に本当に本気の模擬戦を挑まれたり・・・」

「もういいから！ホントにもういいから！」

「端で聞いてた私も少し同情してしまった・・・」

蓮華も少し申し訳なさそうな顔をしていた。・・・っと

「んじゃあ行ってくるぜ？」

「ちよっ咲！？」

「大丈夫だって、ここは俺に任せとけ」

「止める！そういうセリフはマジでヤバイから！」

「いってきまーす」

「咲いいいっ！？」

それからしばらくして咲は無事に戻ってきました。

「敵前線、総崩れとなっております！」

「よし！全軍総攻撃に移るぞ！」

「よっしゃー！先鋒は儂に任せい！」

「祭さま、お供致します！」

「それじゃあ、俺も行くよ」

俺も先鋒に名乗り出す。そしたら思春か横から。「……お前は私の隊の副将だろうが……」なんて聞こえたけどスルーの方向で。

「応、来い来い！儂らで劉備の軍をコテンパンに潰してやるっぞ！」

「はっ！」

「了解！」

気合いを入れ直した時、伝令が走ってきた。

「申し上げまー……す！」

「なんだっ！」

「ほ、ほ、北方にぞ、曹操が……っ！」

「曹操がどうした！」

「曹操が……曹操の大軍団が国境を侵犯し、こちらに向かって来ています！」

「なにっ!？」

「曹操軍の居場所が判明しました!ここより北方、およそ五十里!」
明命からの報告が入る。

「予想外に動きが早いな・・・」

「五十里ならば、およそ一週間ほどか・・・!」

思春が的確に制限時間を伝える。

「どうする、権殿。このままでは劉備ごと、我らも曹操の大軍に飲み込まれるやもしれんぞ」

「どうもこうも、今、攻撃の手を緩めるわけにはーーー」

「蓮華。同盟だ!劉備と同盟を組むんだ!」

「なにっ!？」

俺の一言に咲も賛成する。

「亮の言う通りにした方が良いだろうな」

「どういつこと?」

「このままだと、曹操に皆やられる・・・しかもそれだけじゃない。もし劉備と曹操が手を組んだら・・・」

「完全に孤立。俺たちは無念に散ることとなる・・・だろ?亮」

「まあそうだな・・・とにかく今は劉備たちと同盟を組んで曹操をやり過ごすしかない」

「二人の言う通りです。更に言えば、劉備を取り込むのは今この機会しかない・・・!」

冥琳も俺たちの案を推してくれた。

「蓮華さま・・・ご決断を!」

「し、しかし・・・奴らがそれを受け入れるか・・・」

「私が行きます。必ずや説き伏せて参りましょう」

「俺たちも行くぜ。な、咲」

「ああ、勿論だ」

「そんなんっ！亮が行く必要など無い！」

「だから俺は空気なのか!？」

咲が横で叫ぶが皆スルー。

「いや、あるさ・・・ここで俺たちが出向けば天の御遣いが集結する・・・北郷一刀だって馬鹿じゃない・・・話せばわかってくれる」

「くっ・・・だが・・・」

「蓮華！」

「・・・っ!？」

「頼む・・・」

「でも・・・」

「蓮華・・・」

真っ直ぐに蓮華の瞳を見つめる。

「・・・分かった」

「ありがとう・・・冥琳!咲!急ぐぞ!」

「ああ!」

「おっ！」

俺たちは劉備の軍まで急いだ。

俺たちは蜀の兵士に連れられ、劉備を始めとする将たちが集まる場所に出向いた。

「反董卓連合以来、か。久しぶりだな」

「貴様・・・周瑜っ!？」

関羽が驚きの声を上げる。

「そつだ。私が来たということ・・・どういふことが分かってい
るだろう? 諸葛孔明」

「・・・曹操さんとは相容れず、ということですか」

「そついうことだ。・・・おまえたちはどうだ?」

「・・・半ば同意、半ば疑問、というところですね」

「ふっ・・・慎重だな」

「え、ええとっ・・・二人して何の話？」

劉備が聞いてきたので俺が答えた。

「和平交渉の話だよ」

「・・・貴方は？」

「亮。大澤亮だよ。・・・呉の天の御遣いで咲の知り合い」

「や、桃香。久しぶり〜」

俺の後ろからひよっこり顔を出して挨拶する咲。

「ええっ！？三人目の天の御遣いさん！？それに咲君！どうして！？」

その時、馬超が怒鳴りだした。

「てめえ！よく桃香さまの前に顔が出せたなこの裏切り者！」

「よせ翠。咲殿は桃香さまと約束をしていたのだ、後から来たお主には反論できまい」

「ぐ・・・だけど・・・」

趙雲が馬超を宥めている間に一刀が来た。

「咲、久しぶりだな・・・ええとそつちが呉の天の御遣いかい？」

「そうだよ北郷一刀。俺は大澤亮。亮って呼んでくれ」

「それじゃあ、俺も一刀でいいよ」

何だかんだ言っているうちに話がついていた。・・・どうやら呉ルート天下二分ではなく、曹操を交えた蜀ルート天下三分を狙う話になった。・・・そして決着の場は・・・赤壁。とりあえず俺たちは戦力を整える為に建業に戻る事になった。

「あ、そうそう咲」

「なんだ、一刀？」

「詠が心配してたぞ？」あいつ・・・次に顔をみたらポコポコにしてやるわ』だって」

「それは心配していると言っのか!？」

うつわあ・・・ご愁傷様・・・とにかく俺たちは曹操と雌雄を決する為に建業へ急いだ・・・

決戦〱蜀（後書き）

雪蓮

「やったあー！出番があつたあ」

亮

「うわ、嬉しそう・・・」

まだ出番はありますから気を抜かないでくださいね？

雪蓮

「え？まだあるの？わーい」

咲

「子供だ・・・」

それでは恒例行きましょう。

三国志（三国無双）再現〱

雛里

「ここが落鳳坡・・・縁起がわるいですね・・・」

敵奇襲

雛里

「桃香さまぁ・・・朱里ちゃん・・・私、ここで降ります・・・」

チーン・・・

亮

「不味いだろ！今絶体に雛里ファンの人を敵に回したよ！？」

はい次。

亮

「聞けよ！」

星

「桃香さまの子には指一本ふれさせん！・・・趙子龍、参る！」

単騎疾走！

星

「これですぞ！趙子龍ならこの話し合ってこそ！」

桃香

「ふええっ！？私、子供なんかいないよ！？」

大丈夫。いずれ一刀と結ばれるから。

桃香

「ええええっ！？」

はい次々

名言

遼来々！？

霞

「どけどけー！邪魔するやつは皆あの世行きやでーっ！」

ジャーン！ジャーン！

甘寧伏兵！

思春

「今だ！全軍突っ込めー！」

蓮華

「魏に張遼あらば、呉に甘寧ありよー！」

咲

「あつたねえ・・・孫権の名言」

思春

「私には勿体無いお言葉でございます」

蓮華

「何を言っているの。思春、これからも私のそばにいてくれ」

思春

「はっ！この命尽きるまで」

今回は、こんなもんでしょうか？

亮

「いいんじゃない？」

桃香

「あ、じゃあ私がやる〜！次回、真似と開閉と世界旅行」

蓮華

「次回もまた見てくれ」

全員

「それではまた次回会いましょう！」

残り少ない平和と亮（前書き）

亮編と咲編に分けて書きます。ではどうぞ。

残り少ない平和く亮

「……で？」

「お猫様がモフモフさせてくれないんですっ！」

「……ええと？」

「ですからっ、お猫様がっ！」

青空の下、庭で咲とくつろいだいたら、いきなり明命が本当に唐突に変なことを言ってきた。

「あのさ……もう少し段落を追って話してくれない？」

「す、すみません……実はですね……」

簡単に略すとどうやら明命はここ最近お猫様に嫌われたらしい。お願いしてもダメ。煮干しを献上してもダメ。何をしてもダメ。……他のお猫様も同様らしい。

「それで、俺に相談しに……？」

「はい……」

ほんとに落ち込んでんだな・・・

「・・・いいいいよ・・・俺は呉の皆には存在が空気なんだよ。・・・恋たちの所に行く・・・」

あ、咲が拗ねた。・・・この間から無視されてるよなあ・・・

「それで、なんとかしてお猫様と仲良くなりたいと」

「・・・(コクッ)」

頷く明命。

「・・・あ、思い出した」

「あの・・・どうかされたんですか？」

「ああ。・・・明命、お前って外出するときもその服か？」

「は、はい。それはそうですけど・・・」

よし、それじゃあ。

「それじゃあ、猫に擬態してみようか？」

「・・・擬態、ですか？」

「そうだよ。明命が警戒されてるなら、自分自ら猫になって近づけ

ば・・・警戒心も無くなると思うぞ?」

「・・・」

黙りこくってしまふ明命。

「・・・ダメ?」

「素晴らしいですっ!」

「のわっ!?!」

うう・・・また耳が・・・いつか耳がいかれるな、絶体。・・・しかも明命は俺の手を掴みブンブンとぶって・・・痛い痛い!?!肩が抜ける!?!

「やっぱり亮様に相談して良かったですっ!」

「そ、それは良かったな」

「私がお猫様の格好を・・・はわあ〜」

「明命?お〜い、戻ってこ〜い」

「はっ!?!え、えと・・・つまり、お猫様と同じ格好で興味を引くというわけですねっ」

「ああ。どうかな?」

「さすが亮様ですつ。それならきつと上手くいくと思います。ありがとうございます！」

明命は俺にペコリと頭を下げ、走り去っていった。

「……部屋で休むか……」

俺はその場を離れていった。

「……さあ、やって来ました午後の町」

あれから午後に入って午後の仕事を瞬殺して、明命の様子を見に行くことにした。

「……あれ？この後もの凄く大切な戦があるのに……なんでこんなことを？」

いや、細かいことを気にしたら敗けだ。

「ここに居るかな・・・あ、いた」

俺が教えたことを実行しているのか、頭に猫耳、お尻には尻尾・・・どこにあったそれ。

「でも・・・これは必要ないかな・・・」

俺は両手に持っている猫じゃらしとマタタビを見て言った・・・あれ、なんか忘れてる気がする。前に祭さんが料理を作ってくれた時にも同じ感じが・・・気のせいだな。

「おーい、みんめ・・・」

いや、止めた方がいいな。明命が必死に猫に話しかけてたから。

「お猫様・・・私はどうしたらいいんでしょうか・・・」

「・・・？」

「私はもう・・・ドキドキが止まらないんです・・・」

何の話をしてるんだろう？凄く真剣な様子だけど・・・

「はあ~~~~・・・」

溜め息吐いてるし・・・

「・・・あの時から、あの方の存在が私の中で大きくなって・・・」

「あの時の身体のぬくもりが忘れられないんです・・・」

ぬくもり？身体？

「祭さまからは恋の悩みなどあって当たり前と言われてしまいました……」

……明命が……恋……？

「頭が固いつて言われちゃいましたけど、でもどうしていいかわからなくて……」

なんでかな……少しイライラする。

「それにあの方には思春殿や蓮華様もいらっしやるんですよ……私なんか……」

あれ？今、思春と蓮華の名前が出てこなかったか？……うーんと悩んでいたら足下に猫がやって来た。

「お猫様……って、亮様っ！？」

「よ、よ」

やべ……見つかった……

「は、はは……調子はどつ？」

まずい。挙動不審過ぎるぞ俺。

「あ、あのつ、亮様はいつからここにっ!？」

「え?あ、いや・・・今来たところ・・・」

なんて惚けてみれば。

「そ、そうですかー、良かったですー」

明らかにホッとした顔をしている明命。・・・素直すぎて罪悪感が・

「えっと・・・調子はどうだ？」

「はいっ!いきなりお猫様にモフモフさせていただきました!」

ウツトリとした顔をする明命。・・・とりあえずは擬態作戦成功か・
・・・でも、明命の思い人っていったい・・・

「あの、ところで手に持ってるのはなんですか？」

「これ?これは猫じゃらしとマタタビだよ」

「猫じゃらしとマタタビ?」

「ああ。もしお猫様に手こずっているようなら役に立つかなと思っ
て。必要なかつたみたいだけだな」

言いながら明命に手渡す。

「そんなことありませんっ。亮様のおかげでお猫様と仲良くなれたんですっ」

ピヨコンと明命が頭を下げる。明命って本当にすがすがしいぐらいに素直だな。

「あはは、これならお猫様も喜んでくれますよ」

次にお猫様と遊ぶ時のことを考えているのか、本当に楽しそうだな。

「それに、このマタタビも……きっと……喜んで……」

「……あれ？」

明命の様子がおかしいぞ？

「にゃ……亮様……にゃん」

あ、あれ……明命が猫みたいに……

「うにゃん」

みたいじゃない！猫！まんま猫！

「おい、明命!？」

「にゃん」

「いや、にゃんじゃなくて・・・」

「にゃ〜・・・」

「そ、そんな目で俺を見つめるな・・・！」

不覚にも可愛いと思ってしまった・・・

「にゃ〜」

まさかマタタビに酔う人間がいようとは・・・

「ふにゃ〜、にゃっ」

すりすりとも明命が俺にすりよってくる。・・・ヤバイから。
俺は猫じゃらしを掴んで明命の目の前で振る。

「にゃっ、にゃにゃにゃっ！」

「ほーれほれ、こっちだぜ〜」

「うにゃっ、うにゃにゃにゃっ！」

猫じゃらしを左右に振ると、明命もそれを追いかけてくる。

右に。

「にゃっ！」

左に。

「にゃにゃっ!」

「ふわぁ・・・楽しい・・・」

と、油断した隙に、猫じゃらしを押さえられてしまう。

「ふにゃ〜」

そして俺に擦りよって、甘えまくる明命。

「しかし・・・これはどうしたものやら・・・」

こんなん皆に知れたら（俺が）殺される・・・

「うにゃ・・・亮様・・・にゃ」

「明命?」

いま、俺の名前を・・・?マタタビの効果も切れてきたのかな?

「明命っ、俺がわかるか?」

「にゃ〜、亮様にゃ」

「そつだ亮だぞ。しっかりしろ、明命」

「・・・」

「明命？」

「うにゃっ!」

「うわっ!？」

明命が猫のごとく飛びついてきた。・・・やっぱり明命には敵わない。避けれるわけでもなく、ホールドされて行動不能。

「な、なんなんだ!？」

う、明命が一瞬豹に見えた。

「にゃ、亮様・・・」

明命が俺を見つめる。でも大分元に戻ってきたな・・・後少して元に戻りそうだな。

「亮様・・・」

「・・・明命？」

恐る恐る声をかける。

「亮様・・・亮様は猫が好きかにゃ？」

「ま、まあ・・・嫌いじゃないけど・・・」

「明命は猫にゃ・・・亮様は明命が好きにゃ・・・？」

「み、明命・・・？」

明命がじつと俺を見つめてくる。

「・・・そうだったんだ・・・」

明命が言っただ思い人の正体が分かった。・・・そもそも明命とは思春との鍛練のときいつも側にいたし、蓮華たちも知っている男といたら俺と咲しかいない。・・・それから反董卓連合の時に暴れて・・・明命を傷つけて・・・抱き締めて泣きながら謝って・・・多分その頃からなんだろうな。・・・なにより、明命の眼差しが答えを出している。

「・・・ああ。俺は――」

一息おいて明命に答える。

「――明命が好きだよ」

明命の目を見つめ返しながら答える。

「にゃ」

嬉しそうに笑う明命。・・・ああそうか。さっきのイライラは単なる嫉妬だったんだ。明命をいつの間にか意識していたんだな、俺は。

・・・その時、俺の唇になにか柔らかいものが触れた。

「・・・・・・？」

そこには明命の顔がちかくに・・・つてええええええええ！？

「むぐっ！？むー！」

いきなりすることにパニックに陥る・・・今わかった。俺はいきなりなことに弱い。それから明命が正気に戻るまでこのままだった。

「はづらううう・・・」

顔を真っ赤にして明命が悶えていた。・・・よかった。正気に戻って来て・・・なんだけど。

「あうあう・・・」

どうやら猫化していた時の記憶はあるみたいで、明命は自分のやったことを思い出しては、悶えているわけだ。

「えっと、明命？」

俺自身も少し、いやかなり赤くなりながら明命に声をかける。

「はうわっ!？」

ビクンツと反応する明命・・・

「亮様・・・あう~~~~」

俺の方をチラツと見たかと思うと、耳の先まで赤くして俯いてしま
う。

「まあ・・・嬉しかったよ」

「亮様・・・」

「明命の気持ちも分かったし・・・実は俺、明命を傷つけてから俺
は明命に嫌われたんじゃないかと思ってたんだ」

「い、いえ!むしろあの時から亮様が不思議な存在に!・・・あ・・・
・その・・・」

「そっか・・・でも、俺は本当に明命が好きだよ」

「あの・・・本当ですか？」

「ああ。だから明命と・・・その・・・、こうなって嬉しいよ」

「私も・・・あの・・・嬉しいです・・・」

「うん。・・・えっと・・・戻ろっか？」

明命に向かって手を差し出す。

「はいっ」

明命はしっかりと俺の手を握り返してくれた・・・

物影〜

「ふうん・・・亮は明命を選んだんだ」

気楽な声を出すのは元呉王孫策。

「・・・蓮華やシャオじゃなくて明命か・・・亮もそんな気は無
いって言ってたけど・・・以外よね・・・」

それでも笑みを崩さぬまま孫策は言葉を紡ぐ。

「でも・・・明命を選んだんならそれはそれでいいかもね・・・応
援してるわよ明命」

そのまま孫策はその場を立ち去った・・・

残り少ない平和と亮（後書き）

明命

「……」

亮

「……」

……ええと……

咲

「おい……なんだこのラジオなら放送事故になりかねない沈黙は……」

多分、次は貴方が沈黙しますよ？

咲

「……え？」

亮のメインヒロインは明命に決まりましたが……貴方は……

咲

「……誰？」

さあ？

咲

「気になるだろ!？」

じゃあちようせ・・・

咲

「それだけはやめろおおおー!!」

じゃあひみ・・・

咲

「それもダメえええええ!!」

ワガママだな・・・

咲

「何処の作者を探してもそいつらをメインヒロインにするやつらは
絶体にいないっつっ!!」

まあ・・・それは次回のお楽しみっつことぞ。

咲

「~~~~~」

明命

「・・・」

亮

「・・・」

咲

「・・・」

・・・

咲

「それでは次回の真似と開閉と世界旅行っ！」

次回もまた見てください！

咲

「それではまた次回会いましょうっ！」

明命

「・・・亮様・・・」

亮

「・・・明命・・・」

咲

「だあああっ！向こうでやれてめえらあああ！」

ではまた次回。

残り少ない平和と咲（前書き）

はい、咲編です。ではどうぞ。

残り少ない平和〜咲

亮と別れて（というよりは自ら去った）仕事も無く、恋辺りがいれ
ばいいかな〜なんて思ってたけど・・・誰もいません。

「誰かいませんかあ〜」

・・・返事は無し。

「・・・誰か〜」

・・・

「・・・そして誰もいなくなった・・・」

うん。何言ってるんだろうね俺。

「・・・」

「誰かいないかなあ〜」

「・・・」

「いたら返事してくださいーい！」

「・・・」

「うわぁおっ!?!?」

「……………」

俺が驚いたのがおかしかったのか、恋は首を傾げた。

「いや、なんでもないよ……恋？仕事は？」

「……………今日は無い」

「そっか」

ぎゅるるる……

可愛らしい腹の虫が鳴った。

「……………」

「……………一緒に飯を食いに行こうか？」

「……………(コクコクッ)！」

二回連続で首を降る恋。

そんなんで俺たちは町にやって来た。・・・途中に猫耳と尻尾を付けた明命が居たような気がしたが・・・気のせいだな、うん。

「・・・・・・・・」

そこで飯屋に入ってありったけの注文をした。董卓軍のころから節約（というよりは使い道があまり無かった）していたから、金はかなりある。

「・・・お、きたきた」

ずらっ、と並ぶ料理たち。・・・見るだけでお腹が一杯になりそうだなこれ。

「・・・」

「あ、食べていいよ」

「うん・・・モグッ、モグ・・・もふもふもふ、ごくんっ」

一気に口の中に消える料理たち。

「……………モグ」

止まった。……………ああ、お茶か。

「はい、お茶」

「……………じゅっじゅっじゅっ、ぷは」

豪快な飲みっぷりだな。

「モグッ、モグモグモグ」

勢い衰えず。胃袋は鉄でできている……………なんて思うほどの食いっぷりだ。

「……………美味しい」

「ん、よかつたな」

小動物みたいだな……………

「……………こんなに美味しいのは、初めてかも」

「そうか？前にもここに来なかったっけ？」

「……………特別に美味しい」

さらにもぐもぐエヴァン リオンのごとく料理を貪るようになって行く。

「……咲は食べないの？」

「いや。恋の食いつぶりを見ていたらお腹一杯になった……」

これはわりと本気で思ってることだ。その内にも恋もぐもぐ食べ進んで行く……

「……はひは、ほぶ」

「そんなに慌てるなって、誰も取りやしないから」

ほっぺをパンパンに膨らませて新たに一個の肉まんを掴む。

「……くんっ」

口に溜まったものを飲み下し、肉まんをこっちに差し出す。

「咲はこっち」

「俺に？」

「……（コクッ）」

頷きながら、手にした肉まんをさらに差し出す。

「大丈夫だって、皆恋が食べな？」

「……………(コクッ)」

熟慮の末の頷き。再び食を再開する。

「……………はい、お茶」

「……………(コクッ)」

流れるような動きでお茶が消えた。

「……………可愛いなあ、恋は」

「……………(コクッ)」

「あ、何でもない」

うっかりしてた……………だってさあ……………

「……………可愛いのはウン」

「ウンじゃないだろ？」

あ。うっかり素早く口にした。

「……………本当だった」

恋の手が止まる。

「胸のところ……」

「あー……まあ、気にすんな。食べよ食べよ」

それでも恋のペースは落ちたままだった。

「お腹一杯？」

「……（フルフル）」

そう言っただけで恋が肉まんを持ち……一気に肉まんが二個消えた。

「……あと百個食べられる」

「……マジですか……」

そうこうしてる内に、皿の肉まんが残り一個になる。……恋はその肉まんを俺に突き出す。

「だから俺は大丈夫だって。あと百個食う気なんだろう？」

「……食べられるけど、最後の一個は咲の」

恋が真っ直ぐに見つめながら俺に肉まんを突き出す。

「・・・食べて」

「・・・ああ。じゃありがたいいただくよ」

「・・・ホッ」

そこで安堵の息を吐かれたら、微笑ましくなってきた。

「・・・ん」

「あ、悪い悪い、いただきませ？」

肉まんを口に入れる。

「・・・」

「んぐんぐ・・・ん、冷めてても美味しいな」

「・・・」

「・・・恋、そんなに見つめられると食べにくい」

「・・・咲もいつも見てる」

「俺はいいんだよ。恋は可愛いなあって見てるんだから」

「いっただい俺は何を口走ってんだろっな・・・」

「・・・・・・・・」

「俺が食つのを見てもつまらないだろ？」

「・・・・・・・・（フルフルツ）」

力強く首を振って否定する恋。

「・・・・・・・・楽しい」

「楽しまれても」

「・・・・・・・・可愛い」

「・・・・・・・・なんで・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・？？」

なんで怪訝そうな顔をするんだ。

「恋は、可愛いって言われると嬉しかった・・・」

息子がカワイイか？・・・なんでブリーが思いついたんだろっ？

「・・・咲は嬉しくない？」

「・・・男で可愛いつて言われてもな・・・カッコイイとかなら分かるけど・・・」

「・・・かつこいい」

「なんだ、そのありありと言わせた感じは・・・」

「・・・ふふ」

「今、笑っただろ・・・」

「・・・笑ってない」

「ウーソーだ、絶対笑った」

「・・・笑った」

あっさりと恋は笑ったことを認めて、俺にすりよってくる。

「咲と一緒にだと、恋は・・・嬉しい」

少しドキッとしてしまう。

「・・・」

「お、お腹一杯になったか？」

少し赤くなって恋に問う。

「・・・咲、帰るの？」

「うん。・・・ねねがつるさいだらうつからね」

「・・・あ」

「恋？・・・まさかねねを忘れてた訳じゃ・・・」

「・・・忘れてた・・・」

おいおい・・・

「・・・咲」

「何？」

「一緒に、ねねの所に行く・・・」

「・・・おづ。一緒にいーいせ」

「・・・うん」

恋が俺の手を両手で取る。・・・たまにはこんなのもいいか。

時刻は夜になった。ねねがすっぱかされたことに怒ってちんきゅーきつくを俺に放ち、見事に喰らって苦しんだり。・・・その後今に至るまでずっと恋とねねと遊んでた。・・・ねねが眠そうになったので、二人に別れを告げて今は城壁の上に来て涼んでいた。

「・・・ふう」

次はラストバトル・・・それを終えたら、俺たちはどうなるんだろう？・・・一刀が三国を治めるか？それとも三国の人それぞれが良い国を作っていくのか？・・・それともこの世界自体が消えてしまふのか？・・・分からない・・・

「・・・咲」

「うわ!？」

後ろからまた声をかけられて思わず驚いた。

「・・・あ・・・恋?」

「……………」

「恋？……ねねは？」

「……もう寝た」

「そっか……恋は何でここに？」

「……………」

「恋？」

「……咲に、会いたかったから……」

「……………」

「まずい、思わず思考停止してしまったぞ……」

「そ、そうか……」

「……………」

「あ、寒く……ないか？……」

「・・・平気」

「・・・」

「・・・」

か、会話が続かない・・・

「ま、まあこっちに来て座れよ」

俺は恋を城壁の上に招き寄せる。

「・・・うん」

俺たちは二人ならんで座った。

「そういえば、さ」

「・・・?」

「この世界に来たとき、恋が俺を拾ってくれたんだろ?」

「・・・(コクッ)」

「ありがとな。恋のおかげで皆に出会えた」

「・・・恋も、咲に会えた」

「ああ。本当に恋には感謝している」

「……………」

少し嬉しそうに微笑む恋。

「…………恋、咲と一緒にいると、胸がきゅゅってする」

「…………そうか」

「……………」

「今はどうなんだ？」

「…………今はちょっとだけきゅゅってする」

「…………じゃあもう少しこっちに来いよ」

俺は恋を近くに寄せた。

「……………」

「…………不思議。咲とくっついてると、胸がきゅゅってするのが
治まる」

かわりに俺の心拍数がとんでもないぐらい上がってますがね…………

「……………」

「……………」

「……」じつやあってくつついていると、胸がポカポカする
恋がたまにすりよってくる。

「……あ、ああ。俺もだよ」

「……咲も同じ?」

「そうだ。……恋と同じ」

「……そうなの?」

「そうなの」

「……恋と咲が同じ。……」

咳くように言葉にする恋。

「……」

「……」

俺は……恋にたいしてあることを言うことに決めた。

「あのさ……」

「……?」

「上手く言えないんだけど……俺は恋が好きだな」

「……咲は、恋が好き」

恥ずかしいながらの告白。・・・俺は恋に問いかける。

「・・・恋は俺のことをどう思っているんだ？」

「・・・」

考え込むように顔を伏せる恋。

「・・・恋は咲が好き」

顔を上げて恋ははっきりと答えた。・・・結構嬉しくなる自分が出た。

「ふう・・・」

「・・・咲、どうしたの？」

「うーん・・・緊張と安心・・・かな？」

「・・・??？」

「そんなに考え込むなよ」

「・・・ん」

「だから俺は・・・いつまでも恋と一緒にいたいと思ってるんだ」

「・・・そうなの？」

「そうなの。好きな人と一緒にいたいと思うのは、当たり前だろう？」

「・・・当たり前」

「こんなん亮に聞かれたら、散々からかわれるんだろうな・・・」

「・・・恋も咲と、いつまでも一緒にいたい」

「一緒にいれる保証はないけど・・・」

「ああ。これからも一緒にいような」

「・・・あ」

「なんだ？」

「・・・さつき、咲困った顔をした」

「ちつきっ？」

「・・・一緒にいようって言う前」

「・・・あ・・・」

「どうやら考えてたことが顔に出てたみたいだ。」

「……本当は嫌なの……？」

「ううん、違うよ。俺は確かに恋と一緒にいたいと思ってる」

「……本当？」

「恋は俺を信じてないのか？」

「……（フルフルフル）」

ものすごい勢いで首を振る恋。

「……俺を信じろよ？」

「……じゃあ約束のちゅう……」

「……はい？」

いきなり何を言ってるんですかこの子は。

「ご主人様が言った……約束するならちゅうをするって」

「（一刀お~~~~っ!）」

「……えい」

「むぐぐ!?!」

恋の唇が俺の唇に合わさる。

「……………」

「……………」

本日二度目の機能停止。…………そして恋が離れて…………

「…………約束した」

「あ、ああ……………」

「いつまでも一緒……………」

「…………ああ」

そのあとしばらく俺らは月を眺めながら話をして、部屋に戻っていった…………一刀…………次に会ったら色々と問いたださなきゃ…………

残り少ない平和と咲（後書き）

咲

「……………」

恋

「……………」

はい。お二人様ご案内ーい。

亮

「ま、まあなんだその……」

明命

「よ、よかったですね……」

咲

「……………」

恋

「……………」

亮

「まあ、明命……これからもよろしく」

明命

「は、はい……」

思春

「……………」

亮

「…………ツ!？」

どうしましたか？

亮

「いや、いま嫌な寒気が……………」

蓮華

「……………」

亮

「…………ツ!？気のせいじゃない!絶対に誰か居るって!」

気のせいです。

亮

「気のせいじゃ…………ツ!？」

ズシャツ……………」

明命

「あれ?亮様!どこに行っただんですか!？」

本当に何処に逝っただらうね?

明命

「字が違いますよ!?!」

気のせいです。

明命

「で、では亮様が消えてしまったので私が………次回の真似と開閉と世界旅行!」

ぜひ見てくださいね。

亮

「ひっ!思春?蓮華?なんで武器を………ってぎゃああああああっ!?!」

明命

「………それではまた次回会いましょう!」

レッドクリフ（前書き）

あえて三国志の映画がTV放送される日に投稿しました。ではどうぞ

レッドクリフ

「……ZZZ」

ここは赤壁の手前に設置された陣。……予想外に早く到着してしまい、劉備たちが来るのは明日だった。そんでいつも通りに思春と鍛練して明命と話をしたりして一日が過ぎていった……

「……ううん……」

あれ……？もう朝……？

「ケータイケータイ……」

時間を確認してあらビックリ。

「……軍議の時間とうに過ぎてるーッ!?!?」

ヤバイ!畜生……咲のやつ……天幕隣なんだから起こしてくれても『しまったあ!寝過ぎたあッ!』……あいつもか。

「亮！お前はケータイがあっただろ！？アラームぐらいかけとけよ！」

「かけたさ！六重にしてたよ！」

「なんでそれで寝坊すんだよ！」

「つか、起きれなかった自己責任を俺のせいにするなよ！」

今俺たちは全力疾走で口喧嘩をしながら軍議の場に向かっていた。

「第一お前は『黄蓋を鞭打ちの刑に処す！引っ立てい！』・・・ッ！！！」

いきなり怒声が響き、軍議の場から祭さんが明命に連れられて来た。

「祭さん！？」

「亮様に咲さん！？」

「・・・」

「・・・ああ。忘れてた」

祭さんに近づいて声をかけようとしてふとこっぴどくなった原因を思い出した俺たちは声を揃えた。

「……」

「……祭さん」

「……なんじゃ」

俺は妖しく笑って一言。

「やるなら徹底的に、な」

「……任せとけ」

「……?」

明命だけが頭に?を浮かべていた。……そこで軍議の中に入った
ら……空気が重い……

「……遅いぞ亮」

「あ、ああ……悪い冥琳」

「……一刀、何でこんなにも空気が重いんだ?」

「咲か……黄蓋さんがちよつとね……」

「いや、それは分かってるんだけど……重すぎない?」

「それだけじゃなくて愛紗たちが周瑜に問い詰めてさらに・・・」

「はぁ・・・一刀は歴史を知ってるから分かるだろ？」

「黄蓋さんのことか？知ってるから落ち着いてんだけど・・・」

「じゃあ、後で桃香たちに説明してやれよ」

「分かった」

咲と一刀が話終わったのかこっちに帰ろうとして振り返る。

「・・・後で恋について聞きたいことがあるから・・・逃げるなよ？」

「・・・あ、ああ」

一瞬だけ咲が思春に勝るとも劣らない殺気を一刀に叩きつけた。

軍議が終わって蓮華が冥琳に聞いたのだした。

「冥琳っ！この大切なときに、さきほどの振る舞いはどういふことだ！お前らしくもない！」

「……今はまだ、ご説明すべきでは無いかと」

「なにっ！」

「……私はこれから、為すべきことを為さなければなりません。お先に天幕に下がらせて頂きます」

「な……」

「では……」

そのまま冥琳は去っていった……あと咲は蜀の陣営に言っている。

「……はあ」

「ずいぶん気落ちしてるのな」

「と、当然でしょ！この大切なときに、呉の宿老と柱石が喧嘩なんて……！」

「……あのさ、蓮華」

「なに？」

「も少しさ、二人を信じようよ」

「……?どつどつ」と?

「あの二人が呉を不利にするようなことを本当にすると思うか?」

「それは……」

「しないよ。……だからさ、今は口出しをしないほうがいいんだ
よ」

「……亮は何か知ってるの?……まさか前に祭が死ぬって言う
てたのは……」

「違う違う。それは天の御遣いの誰かが魏に行ったときの話……
そうだな、これは俺も咲も……しまいには一刀も知ってることだ
よ」

「……」

「……まあ、来るときが来たら教えるよ」

「……信じて良いんだな?」

「勿論。俺を信じてくれ」

「……分かった。なら信じる……」

「ああ。……ありがとう」

そのまま俺は蓮華と別れて冥琳の所に向かった。

「冥琳」

声をかけたら冥琳が振り返った。

「亮か・・・何用だ？」

「まあ色々と・・・この後のこととか」

「この後とは？」

「祭さんが抜け出した後だよ」

「・・・ほお。見抜いていたか」

「無論さ。俺は天の御遣いだぜ？・・・隠し事はさせないぞ」

「・・・ふむ、流石明命と恋仲になっただけあるな」

冥琳が爆弾発言をしてくれました。

「め、めめめめ冥琳！？ななな何でそれを！？」

「ふむ……本当だったのか……」

「かまを掛けただけかよ畜生！」

油断ならないなこの軍師は……

「ふ。……まあそのことは後でも良いだろう……この後のことだったな？黄蓋殿は曹操の陣に向かい、降伏を申し出る」

「それで降伏した祭さんが、曹操の陣で暴れまくるってわけね……

」

「そういうことだ。……よくぞ、我が策に気付いてくれたと思う」

「……は？まさか二人とも打ち合わせとかしてなかったのか？」

「そんな暇があったと思うか？」

「……俺、寝坊したからよくわかんないんだけど……」

「……そういえばそうだったな」

冥琳の目が険しくなったので慌てて話題を振る。

「や、やっぱり凄いな二人とも……」

「ふっ……伊達に呉の宿将や、呉の柱石などと、偉そうな名で呼ばれてはおらんだよ」

「……だな。……感動したよ」

「感動するのはまだ早いさ。……この策を成功させなければ全てが水泡に帰す」

「ああ。……必ず成功させような」

「させるぞ。必ず……」

「なんか俺に手伝えることは……」

「今のところは何もないな。……いや、蓮華さまに上手く説明を……」

「もうやった。……信じるってさ」

「そうか……」

そのまま後の策について話し合い。最後に聞いた。

「じゃあ最後に……冥琳。身体の具合は？」

「問題無しだ……いきなりなんだ？」

「……俺が知っている世界はここで冥琳が祭さんが死ぬ」

「……今はどうなんだ？」

「問題無しだな・・・病は無し。敵に天の御遣いはいない・・・本
当に問題無しだな」

「・・・そうだな」

それを確認して俺は決戦に備えて休むことにした・・・

咲
〜

軍議が終わって一刀とO H A N A S Iをして（その過程で一
刀をボコボコにした）蜀の陣地を歩きまわっていた。

「「あ」」

前にもこんなことがあったような気がする・・・俺は詠に出会った。

「・・・」

「えーと・・・ただいま？」

なんて詠に話しかけてみれば・・・

「・・・お帰り」

多少ムスツとしながらも言葉を返してくれた。

「・・・このバカ・・・ボクはともかく月にまで心配をかけるなんて・・・」

「・・・悪い」

「・・・別にいいけど・・・恋とねねはどうなのよ？」

「ああ、元気だ」

「ならいいわ・・・それと」

「・・・？」

「眼鏡、まだ付けててくれてたんだ」

「ああ。詠からもらった物だからな。大切に使用してもらってるよ」

「・・・そうなんだ・・・あ、忘れてたわ」

「なんだ？」

「翠と焰耶があんたのことを根に持ってたわよ」

「……（ゾクッ）」

背中に寒気が走った……こわっ。

「……ちよつと、顔が青いわよ？」

「一人ならともかく……二人がかりでこられたら……」

「大丈夫でしょ。アンタ死ななそうだし」

「いくら俺でも死ぬときは死ぬからな……？」

「あんなら大丈夫よ」

「簡単に言ってくれるなあ……ん？なんか騒がしくないか？」

「本当ね……どうしたのかしら？」

そのとき一刀が走ってきた。

「詠！それに咲！こんなところにいたのか！？」

「一刀？どうしたんだ？」

「ちよつと、慌てすぎよ」

「それどころじゃない！黄蓋さんが……」

「祭さんが……？」

「兵士を連れて曹操の軍に向かったんだ！」

「なんですって!?!」

「ふーん……」

「やっぱり驚かないんだな咲……」

それは知識がありますから……

亮〜

「慌てるな!すぐに部隊を出して追撃するぞ!」

思春が素早く命令を出す。

「しかし!黄蓋さまが……黄蓋さまが私たちを裏切るなんて!何かの間違いですっ!」

「明命。現実を見る。今、この事態が起っているのはどうしてだ?」

「それは・・・」

「希望的観測を判断の基準にするな。現実を冷静に分析し、部下に指示を出せ」

「は、はい・・・」

俺は見えてられなくなって明命に近寄る。

「明命」

「あ、亮様・・・」

「明命、祭さんを信じようよ」

「祭さまを・・・」

「そう。今は言えないけど祭さんは裏切りはしない。・・・祭さんを、そして俺を信じてくれ」

「・・・亮様がそこまで言うなら・・・」

「ああ。今はそれでいい」

そのとき蓮華が指令を出した。

「・・・では穩。おまえが全軍の指揮を執ってくれ」

「了解であります」

「必ず・・・必ず、生きて祭を私の下に連れ戻してくれ・・・頼む！」

「はい では皆さん、完全武装したあと、一生懸命追っつりをしましょう」

「は？ふ、ふりですか？」

亞莎が疑問の声を上げる・・・俺は穩の足を踏んだ。

「いたっ！？うう・・・間違えてしまいました。一生懸命、祭さまを追いましょうね・・・グスッ」

「はっ・・・」

思春があきらかにやる気無くしてるし・・・

「思春・・・」

「なんだ？」

「あくまで全力で、なおかつ本気でやるなよ？」

「・・・わかっている」

俺の言葉の意味が分かったのか返事をくれた。・・・普通の人は矛盾してるって言うだろうけど・・・とにかく俺は留守番することにした・・・

「じゃあいつてらっしやーい」

「「「はあっ!?!」「」」

「留守番しようと思えば声をかけたら皆に叫ばれました。

「な、なにを言ってるの亮!」

「だって蓮華?戦前に力使いたくないし」

「い、いや、確かにそうだけど・・・」

「・・・お前自身が戦えばいいだろう」

「無理。咲に干将莫耶を預けてるし、普通の剣は余ってないし」

「・・・槍でいけ」

「思春!?横暴だよそれ!?一回も使ったこと無いんだけど!?!」

「・・・はあ、蓮華様。こいつは置いていきましょう」

「あ、ああ……」

「いつてらっしやーい」

「亮様ってこんな人だったかなあ……」

「亞莎……気にしちゃダメです……」

そしてしばらくして皆が帰ってきた。

「明命、ちよいこつちに」

「あ……亮様」

「その様子だと説明されたみたいだな」

「はい……亮様の言う通りです……」

「ま、わかったんならそれでいいや」

「はい」

「・・・あーあ・・・ラブラブなことだ」

「っ！さ、咲！？」

「咲さん！？」

いつの間にか後ろに咲が来ていた。

「いやあく、亮が明命にフラグを立てるとは以外だなあ・・・」

「ぐ・・・」

「ふらぐ？」

明命だけ訳が分からずに困惑していた。

「しかしまさかお前が・・・」

「咲・・・見つけた」

いきなり咲の後ろに恋が現れて咲に抱きついた・・・咲の顔にびっしりと冷や汗が出ていた。

「ほう・・・」

「い、いや・・・これは・・・」

「咲・・・桃香が呼んでる・・・一緒に行こう・・・？」

「あ、ああ・・・行こうか・・・じゃあな二人とも」

「・・・なんかムカつくうううっ!!」

「り、亮様！落ち着いてください!」

しばらくの間、俺は明命に（拳で）静められ、とりあえずは作戦に備えて配置につくことにした・・・

配置について間もなく・・・

「前方の空に火が見えます!」

「始まったか・・・!祭はどうしたっ!」

「ええと・・・あ!曹操の陣より船が出ました!」

「それが祭だな・・・よし!全軍に通達!黄蓋の投降は裏切りにあらず!周公謹、一世一代の策だったとな!」

「御意！」

伝令が走っていく。

「呂蒙！」

「はっ！」

「甘寧、周泰と共に黄蓋を守れ！必ずや無事に連れ帰ってこい！」

「御意！行きますよ、思春さん、明命！」

「応っ！」

「うんっ！」

三人が祭さんの船に向かう。

「陸遜！」

「はい！」

「後曲の本陣をいつでも動かせるようにしておけ。祭を迎え入れたあと、すぐに動くぞ！」

「御意です」

「周瑜、劉備陣営の動きはどうか！」

「我らと同じく、すでに動き始めておるようです。．．．さすがは諸葛孔明」

「敵としては恐ろしいが、味方としては頼もしいか。．．．よし。すぐに作戦主旨を告げる使者を出せ」

「御意！」

「全軍に告ぐ！この戦いによって曹魏を完膚無きまでに叩き、孫呉の未来を手に入れるのだ！」

オオオオオオオオーツツツ！

兵たちの咆哮が天高く響き渡った。．．．

そして祭さんが無事に帰還してきた。．．．

「良く．．．良くぞしてのけてくれた。．．．ありがとう、祭」

蓮華が祭さんに感謝している。祭さんは少し嬉しそうに、

「ふふつ、この老躯の賭けどころ、どうやら間違いでは無かったよ
うですな」

「ええ・・・！祭のお陰でこの戦いに勝機が見えた。・・・後は曹
魏を叩くのみ！」

「敵は大混乱に陥っています。今こそ我らの力を見せつけるとき。
・・・蓮華様！お下知をっ！」

「蓮華！景気良いのを頼むぜ？」

「ああっ！」

蓮華が一步前が出る。

「聞け！勇敢なる孫呉の兵たちよ！」

「この戦いこそ天下分け目の戦い！」

「負ければ我らは滅ぶであろう。だが、勝てば天下への道が開かれ
るのだ！」

「思い出せ！皆の胸にある夢を！平和を目指す熱い願いを！」

「平和は無血にして得ること能わず！」

「我が血を燃やし、汗水を拭い、血みどろとなって手に入れるもの！」

「その命、燃やし尽くせ！我が子の代、孫の代を、笑って過ごせるその日のために！」

オオオオオオオオーツツツ！！

「行け、孫呉の勇者たちよ！曹魏の兵を根絶やしにせよ！」

オオオオオオオオーツツツ！！

「・・・始まる」

「前方！一部の部隊が突出してきます！」

「思春、明命の部隊で対応しろ！」

「御意！」

「御意・・・亮、今度は・・・」

「無論、ついていくな。一応俺は思春の副将だからな」

「まってください！劉備さんの船がそちらに向かっていきます！そちらは劉備軍に任せましょー！」

「よし、分かった。ならば我らはこのまま曹操本陣に突貫する。それで良いのだな、亞莎！」

「はい！」

「前方に曹魏の船が展開！夏侯、楽、李、于の旗を掲げております！」

「その後方には、郭、程、荀、張の旗！その更に後方には曹魏の牙門旗！」

「・・・随分と対応が早いなおい」

「容易には突破できそうに無いな。・・・どうする？」

蓮華が亞莎に聞く。

「まず劉備さんの動きを確認しましょう。・・・明命、劉備さんの動き、どうなってる？」

「ええと・・・馬の旗二つと敵、魏と更に咲と呂の旗が、突出してきた船と戦ってる。あとの人たちは私たちの横に並んでくれているみたい」

「咲って將軍だったのか！？」

驚いた・・・まさか咲が將軍クラスだとは・・・

「あ、亮様。咲さんがこれを渡せと・・・」

そう言つて明命は俺に干将莫耶を渡してくる。

「サンキュー・・・細かいことは無しだ！行くぜ明命！」

「はいっ！」

「あ、ちよつと亮!？」

蓮華の言葉を無視して敵陣に突っ込む。

「たあ！」

ズバツ!

「ぐう・・・」

「ふう・・・一段落・・・ハッ！」

その時足元に氣弾が撃ち込まれた。

「・・・外したか」

「楽進か・・・」

チツ・・・武将クラスに会っちゃったよ畜生・・・とにかく物真似しなくちゃ・・・

「モーションキャプチャー。スバル・ナカジマ」

俺はリリカルなのはのフォワードの一人、スバルになる。

「変わった！？・・・そうか、貴様が“千の顔を持つ男”か」

「リボルバーナックル・・・異常無し。マツハキヤリバー・・・よし！」

マツハキヤリバーを始動させて楽進に突っ込む。

「ハアアアツ！」

「・・・くっ！」

ズガア！

「まだまだあ！」

俺は拳と足の嵐をお見舞いする。

「ぐっ……まだだ！」

バシッ！

ガンッ！

ドガアッ！

楽進はなんとか動きについてくる……魔力行使をしてもついてこれるなんて……

「……！隙あり！」

ガッ！

「あぐっ！？」

楽進の拳が腹に決まる瞬間、なんとか後ろに飛んで威力を殺した。

「……しまっ」

「ハアアッ……！」

楽進が氣を練り始める。

「食らえ！てりゃあ！」

氣弾が放たれる。

「……カートリッジロード……！」

ガシャンと音がして、一発弾を使う。

「リボルバー……」

一撃を放つ。

「シューーーーッ！！」

気弾と魔弾がぶつかり……爆発する。

ドオオオオンッ！！

「……！？」

楽進はすでに次弾の用意をしていた。……あの大きさは球というよりはレーザーレベルだ。

「……んのやろう、まだあんな切り札を……」

なら、こっちも切り札を出すだけだ。

「カートリッジフルロード！」

全ての弾を使ってもこれで決める。

「これで……終わりだっ！！！」

楽進が放つ光線。

「ハアア・・・デイバイイン・・・バスタアアア!!」

それに負けないくらいの光線を俺は出した。それはたやすく楽進の
氣弾を撃ち抜き、楽進を飲み込む。

「な!?!う、うわああああっ!」

ズガアアアアッ!

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

煙が晴れてそこにいたのは無惨に身体中から煙を出して横たわって
いる楽進の姿だった。

「あ・・・ぐ・・・」

まだ息があるみたいだ。・・・どうする。

「凧い!」

「凧ちゃん!」

その時、李典と于禁が楽進に近寄った。

「・・・凧ちゃんには指一本触れさせないの!」

「凧をやるんやったらウチらが相手してやるで!」

二人が双剣と螺旋槍を構える。

「・・・いいよ。行きなよ」

「「は？」」

「いや、別に俺は楽進をどうこうするつもりは無いよ」

「女の子なのに俺って言うの珍しいの・・・」

「ああ。俺は男だし、今はこんな姿だけど」

「嘘おっ！？」

李典が驚いた顔をする。

「・・・じゃあウチらは逃げさせてもらおうぞ」

「ああ。追わないから早く行きな」

「ありがとうなの！こんどその服の作り方教えてほしいの！」

「く・・・沙和・・・真桜・・・すまない・・・」

そのまま三人が退いていく。

「・・・俺も戻るか」

俺は本陣に退いていった。

咲
〜

「・・・お前は」

「私か？・・・私は夏侯淳だ」

「・・・まさかの強敵だな」

まずいな・・・勝てる気がしない。その時、俺たちの間に割って入る人影があった。

「・・・咲に・・・近づかせない」

「恋！」

「くっ！呂布か」

「・・・咲は先に行つてて」

「悪い、頼む恋！」

「行かせるな！季衣、流琉！」

「はい！」

「わかりました！」

夏侯惇が指示を出した瞬間、頭の上に影がつて、

「うおおああ!?!」

必死に横っ飛びして避ける。俺がさっきまでいたところにはクレイターができていた。

「あ、あぶっ・・・危ないだろ!?!」

「兄ちゃんには恨みはないけど・・・」

「覚悟してください！」

魏のちびっこ二人組か・・・力負けしそうだな・・・

「てえええい！」

ブオンツ!

「くっ！」

カキヤアン!

「重っ……！」

「やああああ！」

「……ぐっ！」

カキイイン！

二人の攻撃が交互に迫る。

「へへーん、兄ちゃん弱いなあ……やっぱり普通の人よりちっちゃいからかなあ」

ブチッ。

「ブチッ？」

典章が首を傾げている。……ちなみに俺は何かキレた。

「今、何て言った……？」

「へ？だからちっちゃいって」

ブチブチッ。

「き、季衣……」

「……そこに……直れくそがきいいいい！……！」

いつの間にか ブレードに変わっていた。

「わー！？兄ちゃんがキレたー！？」

「喰らええ！」

「うわっ！？」

カキヤアン！

鉄球を吹っ飛ばした。

「季衣！？やあああ！」

「たらあっ！」

ガキヤアアンツ！

「きゃっ・・・！」

ヨーヨーも吹っ飛ばした。

「あわわ・・・」

「ひ・・・！」

完全に怯えてる二人。だが俺は歩き続ける。

「さあて・・・しっけがなっていない子供には、どんなお仕置きが必要かなあ？」

「うう……流琉……」

「季衣……怖いよお」

すでに泣いてる二人を見てさすがの咲も少し危ない人になっていると自分で理解した。

「季衣！流琉！」

その時、大剣が迫ってきて、俺はなんとかそれを弾く。

「ぐ……」

「今は退くぞ！」

「春蘭様あ。怖かったですよ……」

「ヒック……私たち……何をされるのかと……グスッ」

「……何があつたんだ？」

そう言いながらも撤退していった。

「……そうだ、恋！無事か」

「……うん」

「よし、んじゃあ一回戻るぞ」

「……(コクッ)」

俺たちは一旦自陣に戻っていった。

亮〜

「よし、相手の戦線が崩れてきた！」

このまま行けば勝てる！

「……ほう……こういう外史があったのか」

不意に、声が、聞こえてきた。

「・・・誰だ」

「俺か？俺は・・・この外史を壊すものだ」

そこにいたのは・・・この世界にいるはずのない男・・・左慈がいた。

「なん、で・・・」

「ふん、別の外史の北郷一刀は消し損なったが、この外史は面白い。北郷一刀以外に貴様らというオマケがいやがるとはな」

周りの人間も違和感に気づいて慌てだす。

「貴様！どうやってここに・・・」

「五月蠅いんだよ傀儡風情が」

「な・・・」

蓮華を一蹴して俺に視線を戻す。

「さて・・・大澤亮、と言ったな・・・俺はこの外史を消すためならばどういふこともする」

パチンと指を鳴らした瞬間、いきなり空間が開いて、中から骨で出来た兵が出てきた。

「竜牙兵・・・!?!」

「今日はこれだけだ・・・明日、貴様を含む三人を殺す。覚えておけ」

その言葉を最後に左慈の身体が消えた。

「亮様!危ない!」

ガシャアッ!

明命が俺に迫っていた骨を倒す。

「あ、す、すまない・・・」

「・・・よそ見をするな。私についてこい」

「わかったよ思春・・・」

骨たちを全滅させあとに蓮華に言った。

「……魏は？」

「同じ状況よ……あつちにもあの骨みたいなやつが……」

「……冥琳、三国同盟ってできるか？」

「……やれないことはないな」

「じゃあやろう……傷ついた呉と蜀だけじゃ無理だ。……魏の力を借りないと……」

「……良いだろう」

「冥琳……」

「私が必ず同盟を組ませてやる。お前たちはすぐに戦の準備を始める」

「冥琳……頼む」

俺たちは直ぐに戦の再準備を始めた……

レッドクリフ（後書き）

亮

「……うつそお」

咲

「まさか左慈を出すとは……」

だってあのまま終わったらつまんないし。

亮

「だからって……」

はい恒例のパロディスタート！

咲

「逃げやがった」

蓮華

「え？今日は私？……ええと」二人が芸をしますのでシラケたらこれを押してください』……」

亮

「中の人ネタ……」

咲

「禁句禁句……このイスに座るのか？」

はい。

亮

「うっわ、座りたくねえ……」

それじゃあ、一番目咲君。

咲

「お、俺？……コホン、スチャ（仮面をつける）華蝶仮面推参！
！」

シラ~~~~~

蓮華

「こっ、かしら……」

ポチッ。

チュドーンッ！

咲

「げぶっっ！？」

亮

「おお~~~~……飛んでる飛んでる」

見事に天井に叩きつけられましたね。……次は亮君。ちなみにテ

ーヌは告白。

亮

「なんでテーマ限定!?!」

明命

「ドキドキ……」

亮

「しかも何故に明命……あー……こんなときに場所も選ばず!」
「めんなさい! 貴女のことはずっと好きでした!」

蓮華

「……(ポチッ)」

チュドーンッ

亮

「ぐはああ!?!」

咲

「うわ……容赦ねえ……まさか、明命にしっ……」

蓮華

「(ポチッ)」

咲

「うっほああ!?!」

ドカーンッ!

・・・今回はここまでです・・・

蓮華

「真似と開閉と世界旅行・・・」

明命

「じ、次回もまた見てくださいね」

それではまた次回会いましょう。

クライマックスバトル (前書き)

すみません。誤って恋姫編最終話のみを投稿してしまいました。混乱してしまったと思います。すみませんでした。

クライマックスバトル

一日が経過して、満月の夜。決戦の時が来た・・・曹操との同盟も難なく成功した。しかも曹操は天下三分の計に同意してくれた・・・
・まあ劉備や蓮華の説得のお陰でもあるんだけどね・・・今は最終決戦に向けて最後の軍議を始めていた。

「・・・というわけでまず敵の前線はあの骨でできた兵士です。その後ろには白装束を来た人たちが配置されています」

「少しいいか孔明？」

俺は諸葛亮に聞いてみる。

「なんですか？」

「左慈・・・敵の総大将はどこにいるんだ？」

「・・・実は最も後方に一人の人影があると情報が入っています」

「じゃあ俺と亮はそこを最優先にさせてもらうぜ。いいな？朱里」

「はい。・・・それで作戦なんですが・・・」

「……どうなんだ諸葛孔明殿」

冥琳が諸葛亮に問う。

「……はい。あの骨も白装束の人も無尽蔵にわき出します。ですからまずは最もたくさん兵士がいる魏の皆さんが先鋒を行います。そしてある程度道が開けたら、次は咲さん、大澤さんのために更に道を開きます。呉、蜀の将の方々が白装束を倒してお二人の力を出るだけ温存します」

「……私たちは囿と言うわけね。わかったわ」

曹操が策を了承した。

「……諸葛亮、私たち呉の人間は全員亮と咲の援護に向かうのか？」

「あ、それ私も気になりました。朱里ちゃん、どうなのかな？」
蓮華、劉備が諸葛亮に聞く。

「いえ、両国の戦力をあまり集中させると魏の方々が大変です。ですから両国の少数の方々が二人の護衛に回ってもらいます」

「なら！呉は私が亮様の護衛につきます！」

「明命……」

「……なら、私も亮の援護に参加する」

「思春……でも」

「亮、私なら大丈夫よ。貴方は勝つことを考えて」

「蓮華……ありがとう」

俺の護衛は明命と思春の二人に決まった。

「……なら、恋は咲と一緒に行く……」

「ああ。頼むぜ恋」

「ふつ。なら同志の仲だ。私も行く」

「星も来てくれるのか？」

咲の方は二人で……

「まで。私も行かせてもらおうか」

「ああ、私もだぜ」

「焰耶！？翠！？」

「……では、呉は二名、蜀は四名で宜しいですか？」

誰も異議を唱えないため、諸葛亮は話を続ける。

「……では、次は……ご主人様？どうしましたか？」

諸葛亮が一刀の方を見る。

「いや……俺より年下の二人が戦うつてのに俺は何も出来ないのが歯痒くつて……」

「……一刀、お前はそんなん気にするな。お前はお前のできることをしろ」

「咲の言う通りだ。お前にはこの戦いの後にやってもらうことがたくさんあるんだからな」

「……ああ。わかったよ」

一刀が多少持ち直したのを確認して諸葛亮が話を続行する。

「……では続けます。護衛の六名の方は少数の兵士を引き連れて咲さん、大澤さんの両名を囲む感じで敵の中心を駆け抜けます」

「いざつてときは俺たちも参加していいんだろ？」

咲が諸葛亮に確認する。

「いえ、もし囲まれましたらいかなる手段を用いても敵の総大将のもとに向かってください」

「……明命たちを見捨てるって言うのか？」

俺は少し怒気を態度に表して問う。

「……はい、私もそんなことにならなければ、と思っ
ていますが、」

「いや、いい。孔明の言ってることは正しい」

「そうね。私の部下は皆私のためなら命を捨ててくれるわよ？」

「……曹操、お前んとこと俺らを一緒にすんな」

「貴様！華琳様になんて口を……」

「春蘭。いいわ、構わない」

「しかし……」

「姉者、華琳様がいいと言ってるんだ。……私らがどっ
か言っ
問題では無い」

夏候淵が夏候淳を宥める。

「……では基本はここまでです。既に敵はすぐそこま
で来
ます。直ぐに準備をしてください」

「分かった」

「分かったわ」

「うん、分かったよ」

蓮華、曹操、劉備が返事を返してそれぞれの陣営に帰っていった。

「……いよいよ……か」

「亮様……」

「明命……」

「亮様……亮様は私たちが必ず守ります！ですから……」

「ああ。俺と咲は必ず左慈を倒す。そして平和を掴むんだ」

「はい！」

咲
〜
〜

「・・・咲」

「・・・恋か」

「・・・咲、不安？」

「まあな。俺たちの勝敗で戦が決まるからな」

「・・・なら恋が戦う」

「いや、あいつは外史の人間を操れるやつが仲間にいるんだ・・・
恋が敵になったら対処ができない」

「・・・わかった」

「そのかわり、左慈の所までは頼むぜ？」

「・・・(コクッ)」

亮〜

ウオオオオオオツ!!

「始まった!」

前線の魏軍、数名を省いた呉、蜀軍も戦闘が開始した。

「・・・亮、そろそろ行くぞ」

思春が前から声をかけてくる。ちなみに配置は俺と咲を真ん中に、思春、馬超が前。明命、恋が横、魏延、趙雲が後ろを守ってくれている。

「ああ・・・行くぜ!」

俺たちも前線に向かった・・・

「おらめ!どきやがれ!」

「……どけ！」

思春と馬超の二人が白装束を斬っていく。……が、数が違いすぎるのか全然進めなかった。

「畜生っ！多すぎるぞこいつら！」

「このままでは埒があかない……！」

「思春殿……！」

「……馬超！付き合ってもらっぞ！甘寧隊、道をこじ開ける！前に出て左右に開け！」

「思春！？」

「ここは私に任せて早く行け！」

「……へっ、なら私も手伝っぜ甘寧！馬超隊も甘寧隊に合わせる！」

「翠！」

「いいから行きな！そんでさっさと帰ってきて私ともっ一回勝負だ咲！」

「……必ず生きろよっ。」

「もちろん！」

「趙雲隊、空いた位置に移動しろ！」

「魏延隊もだ！急げ！」

「・・・二人とも！また後で！」

二人は・・・それに笑顔で答えてくれた。

「今度は骨かよ！せっかく翠たちが道を開いてくれたのに・・・」

咲が苛立ちを隠さずに言葉を発する。

「・・・なら、今度は私たちだな」

「星！？これ以上は・・・」

「ふん、貴様はそんな軟弱者なのか？」

「焰耶・・・」

「貴様は今、敵の大將を倒すことだけを考える。・・・貴様たちは皆の期待を背負っているんだ。そのためになら命を投げ出すことぐらい造作もない」

「焰耶・・・でも」

「そこら辺にしたいほうがよろしいですよ？」

「星・・・」

「華蝶仮面は負けん・・・同じ華蝶仮面なら分かっておられるでしょ」

「・・・咲、お前・・・」

まさか咲が華蝶仮面になってるなんて・・・

「ちがつ！？誤解だ！俺は弱味を握られて・・・！」

「ああうん、わかってるよ」

「わかってないだろーっ！」

「・・・さあ、行け！」

「咲！」

「ああ！」

また道を切り開いてくれた二人を横目に俺たちは素早く馬を走らせた。

「……ちっ」

今度は骨と白装束の合成軍団かよ!?

「仕方ない、次は俺たちが……」

「……ダメ、恋が行く」

「……ッ!」

「亮様……」

「……」

確かに予想はしていた。けど……

「……大丈夫、恋は強い」

「私たちはこんなものには負けません!」

「……また必ず会えるのか？恋」

「……（コクッ）」

「……わかった、信じる」

咲は覚悟を決めて恋に託すことを決めた。

「明命……また会おうぜ」

「……はい！」

俺も明命にこの場を任せた。

「さあ、行くぞ亮！」

「ああ！必ず終わりにしてやる」

俺たちは大切な人を置いて決着をつけに走る。

「……驚いたな、まさかこんな早く来るとは」

「・・・左慈」

遂にここまでできた。後はこいつを・・・倒すだけだ。

「しかし助かったぜ・・・傀儡共を誰一人連れてこなくてな」

「?・・・どういうことだ?」

咲が左慈の言葉に反応する。

「・・・操ったりするのは于吉のヤロウの技だからな・・・傀儡風情とはいえ、俺一人じゃ面倒だ」

「なら好都合、ここで倒してやるよ!」

「・・・くつくつく・・・俺がただ単になにもせずに待っていると思っていたか?」

「なんだと?」

左慈が意味深なことを言ったので俺はそれに食いつく。

「こづいことだ!」

パチンと指を鳴らした瞬間、また空間が開いて、中から二人の人影が出てきた。

「ふふっ・・・新しいお人形さんだあ・・・」

「俺は・・・あいつの願いを・・・」

片方は足下から頭まで真っ黒いコートで身を包んだ少年。（俺といつたから多分少年）もう片方は少女で金髪のシヨートヘアにナイトキャップっぽいのを付けている。けどそれより目についたのは、背中の虹のような色が付いた羽だった。

「・・・咲、あれが誰だかわかるか？」

「多分ね・・・女の子はフランドール・スカーレット。男は・・・身長的にロクサスだと思う」

「・・・なら咲はロクサスを頼む。俺はフランドールで行く」

「・・・干将莫耶は？」

「いない。・・・あいつには俺自身で戦つのは無謀すぎる」

「わかった・・・行くぞ！」

そして、俺たちの戦いが始まった。

「お兄ちゃんがわたしのお人形になってくれるの？」

「ああ。．．．ただお前に操られるんじゃないくて、自立で動く人形だ」

ケータイを取り出す。

「モーションキャプチャー！レミリア・スカーレット！」

妹が相手なら姉になる。

「うわぁ．．．お姉様だぁ．．．ふふふっ、楽しみ。お姉様を私のお人形にできるなんて」

妖しく笑いながら俺を見据える。．．．そして弾幕を撃たれる前に接近して肉弾戦を挑んだ。．．．

咲
〜

カキヤアン！

計三本のキープレードがぶつかり合う。

「いい加減……！顔を見せやがれえ！エアロ！」

フードを風で吹き飛ばすと、見たことのあるツンツン頭が目に入る。

「……やっぱりロクサスか……」

「俺は……あいつを……シオンを……」

一方のロクサスはブツブツと何かを呟いてた。

「シオンの……願いを……邪魔だ！どけえええっ！」

ロクサスが一瞬で目の前に現れた。

「ぐっ……！」

カキイン！

何とかその斬撃を何とか防ぐ。

「こっちだって……負けてられないんだああ……！」

ロクサスを力に任せて押し返す。

「うぐ……！」

「まだだ！」

ロクサスは無駄に速い。なら動く前に攻撃をしまくる。

「うりゃあああ！」

ガキヤアアンツ！

「ぐわっ!?!」

「よし!どんど……」

「くう……ホーリー！」

突如光の力が俺を吹き飛ばした。

「うわああ!?!」

忘れてた……ロクサスは魔法もバランス良く使えるんだ……

「もらった!」

「はあっ!」

キイイン!

攻防が逆転して俺が防御に回る。

カキヤアン!

カキン!

ギイン!

「調子に……」

頭で何かが弾ける。

「乗るなあああ!!」

ロクサスと同じ、二刀流のキープレードに変化する。

「く、何でお前がそのキープレードを!!」

ロクサスが攻撃を仕掛けてくる。

「知るかつ!!」

ロクサスを吹っ飛ばした。

「うわあああっ!!」

「よし、今度こそ……」

「まだまだ!!」

「嘘!?!」

ロクサスはしぶとく抵抗してきた。

「ハアアアッ！」

カキヤアンツ！

「しまっ……」

一撃で二本ともキーブレードを吹っ飛ばされた。

「これで……」

「くっ……！」

俺は急いで自分のキーブレードの元へ走ろうとしたが、素早くロクサスに回り込まれる。

「行かせるかよ……武器も無いんじゃ、お前の負けだ！」

ロクサスが一番大きい動作でキーブレードを振り下ろそうとする。その時俺はニヤリと笑って、この戦闘で一度も使わなかった力を使う。

「開け」

空間を開いて中から干将莫耶を取り出す。

カキイイン！

振り下ろされたキープレードを干将で弾き、ロクサスの横を駆け抜け、

ザシュツ！

莫耶でロクサスを斬りつけた。

「な・・・そんな・・・」

ロクサスがドサツと倒れる。

「こんな・・・俺は・・・シオンとの約束を・・・」

「その願いはお前じゃ果たせないけど、ある意味お前が果たす・・・だから今は帰れ」

「く、あああああ！！」

そのままロクサスが光に包まれて消えた。

「・・・そうだ亮！」

俺はキープレードを拾って亮が戦っている場所へ急いだ。

亮〜

バシッ！

バンッ！

ドン！

ドゴンッ！

「くぅ……ハア……ハア……」

「あれえ？もう終わりなの？」

服も身体もボロボロな俺に対してフレンドールの身体は綺麗なものだった。

「ハア……ハア……」

「それじゃあ、まずは手足を千切ってから……」

「……っざけるなあああ！」

一気に近づいて攻撃を仕掛けるが、逆に吹っ飛ばされた。

「あぐっ!?!?」

「あーあ……なんかつまないから……モウシンジャエ」

「ッ!?!?」

フランドールを見た瞬間、冷や汗が出た。……なぜなら強大な剣のようなものが空を染めていた。

「禁忌「レーヴァテイン」」

俺は咄嗟に一枚のスペルカードを取り出す。

「いけるか!?!?……神槍「スピア・ザ・グングニル」!」

俺は剣に対して槍で対抗する。

「吹っ飛んじやえー!?!?!?!」

「ハアアアツ!！」

放たれる二つの力。そして爆発。・・・煙が晴れて倒れているのは・・・俺だった。

「あ・・・あう・・・が・・・」

「やっぱりお姉様の身体だから頑丈なんだねえ・・・ふふふっ、たくさん楽しめそう・・・」

「ぐ・・・う・・・」

ゆっくりと近づいてくるフレンドール・・・俺の負け、なのか・・・？

「・・・ですが周りの気配も読むべきでしたね」

ザシュウッ!

「え・・・?」

フレンドールの背中から血が吹き出す。後ろにいたのは、

「明、命」

「亮様！止めを！」

「……！」

俺はなんとか立ち上がってフレンドールに近寄る。

「あれ……？背中が痛いよ……？どうして……何で？」

俺は容赦なくフレンドールの首を掴み上げる。

「あ……が……お姉様」

もう俺のことも本物のレミリアだと感じているらしい。俺は手に力を込めた。

「……お休みなさい、フラン」
グシャツ。

俺は最後に出来る限りレミリアに似せてフレンドールに声を投げ掛け……首を力の限り握り潰した。その瞬間、フレンドールは光に包まれて消えた。

「……キャプチャー、キャンセル」

俺は元に戻った瞬間、膝から力が抜けて倒れてしまった。

「亮様！？しつかり！」

「くそ……力を……使いすぎたか……」

「亮」

そこに立っていたのは……思春だった。

「し……しゅん……」

「立て。早く立つんだ」

「……く、おおお！」

俺は、なんとか立つことが出来た。……その時、何かが俺の前に飛んできたのでキャッチする。

「……これは」

思春の愛刀鈴音。それが俺の手にあった。

「……それを使え。生身で戦うならな」

「で、でも、これって思春の魂とかじゃないのか？」

武人にとって武器は魂だ……って聞いたことがある。

「構わん。．．．つまりお前は私の魂を預けられるほどの人間だといふことだ」

「思春．．．」

「だが、それを使うからには必ず勝て。絶対にだ」

「ああ！必ず勝ってみせるさ！行こうか明命！」

「はい！」

俺は明命と共に咲との合流を目指した．．．．．

「咲！」

「亮！」

俺たちは合流して左慈の所へ向かう。

「．．．恋も咲と合流したのか」

「……うん」

「しっかし随分ボロボロだな、亮」

「人のこと言えんのか？」

「……」

大切な戦いの前に緊張しないように軽いボケトークを咲とする。

「亮様！いました！」

「……チツ、さつさとくたばればいいものを……」

「悪いけどそう簡単にくたばれないんでね！」

「むしろお前がくたばれ！」

「……まだ手はあるんだよ！」

パチンと指を鳴らして骨の兵士を呼び出す左慈

「……くっ！こっちは力が残ってないってのに……！」

「……咲は恋が守る」

「邪魔ですっ、私の前に立たないで！」

骨に戦いを挑もうとした瞬間、骨がなきはらわれた。

「……!?!」

そこには二人の人間が立っていた……

「な……華雄!?!」

「雪蓮!?!何で!?!」

咲も俺も驚きの声を上げる。明命と恋もかなり驚いているようだった。

「ふ……助けに来たぞ咲!」

「華雄……生きてたんだな」

「ああ……なんたつて私は、長生きする質だからな」

「……ははっ」

「雪蓮……」

「随分苦戦してるわね、亮」

「ああ。悔しいけど俺たちだけじゃ勝てなかった。・・・皆が居てくれたからここまで来れたんだ」

「・・・ならその一人に私も入るわ。・・・いいでしょ?」

「ああ。頼む!」

「・・・けど亮、流石に数が多すぎるぞ」

「・・・咲、上に乗って」

そう言っつて恋が方天画戟の面の部分を向けてくる。

「ふむ・・・ならそっちのお前は私のに乗れ」

華雄が俺に向けて斧を向ける。

「・・・?ああ」

「こっつか?恋」

俺たちは武器の上に乗って。

「・・・えい」

「せええいつ!」

ぶん投げられた。

「うわぁぁっ!?!」

「わぁっ!?!」

俺たちは左慈に向かって凄いスピードで飛んでいく。

「……くっ、亮!このまま行くぞ!ファイア!」

咲は二本のキープレードに炎を追加する。

「ああ!これで終いだ、左慈いいいい!」

俺は鈴音を空中で構える。

「なんだとっ!?!」

「三爪炎痕!!」

左慈を斬りつけた。

「ぐわぁぁぁっ!?!」

その場に膝まづく左慈。

「バカな……この俺が……」

「は、一昨日来やがれ！」

「咲、セリフが悪役だぞ」

「は、ははは……これで終わりだと思っな……必ず俺はお前らを殺す……」

左慈はそう言い捨て消えた。

「……あ、骨も白装束も消えた」

「……戻るか」

俺たちは皆の元に帰っていった……

別れ〜また会う日まで〜（前書き）

恋姫編最終回です。ではどうぞ。

別れ〜また会う日まで〜

俺たちは皆の所へ向かう。

「……しかし、よく咲は三爪炎痕知ってたな」

「……頭に浮かんだ」

そして皆が見えてきた……魏呉蜀の皆が誰一人欠けることなく皆が五体満足でいた。

「おーいつ！みんな……！？」

「……なっ！？」

皆に近寄ろうとした瞬間、身体に異変が起きた。

「亮！？」

「咲君！？」

蓮華と劉備が心配そうに声をかけるなか、俺たちは身体を確認する。

「……消えてる！？」

俺たちは足下から光に包まれて消えかかっていた。

「……終わり……なのか……？」

恋姫の話が終わりを迎えた……ということなのか……？

「亮様！？」

「……咲！」

明命が俺に、恋が咲に抱きつく、すると二人も光に包まれて消え始める。

「バカっ！放せ明命！お前まで……」

「構いません！私は……私は亮様と一緒にいたいんです！」

「明命……」

「……恋、お前、ホントにいいのか？」

「……（コクッ）」

「ねねはどっするんだ？」

「……また、戻ってくればいい」

「……恋」

二人とも決意は固いようだった・・・その時。

「・・・亮」

「蓮華・・・」

「・・・行っちゃうの?」

「・・・ごめん」

すると蓮華はニコリと笑って、

「・・・明命を、頼むわよ?」

「・・・ああ!」

「亮」

「思春・・・あ、そうだ鈴音・・・」

「構わん、持っていけ」

「え、でも・・・」

「だが、貸すだけだ、必ず返しに来い」

「ああ、わかったよ」

「亮さん・・・」

「穩、本はほどほどにな」

「……はい」

「それから雪蓮、冥琳、祭さん」

「何？」

「なんだ？」

「なんじゃ？」

「……俺を呉に迎えてくれてありがとう。そして約束を守れなくてごめん」

三人はただただ微笑むだけだった。

「小蓮、あんまり皆を困らせるなよ。亞莎、勉強頑張れよ」

「……うん」

「……はい」

「咲殿」

「星か・・・悪い、お別れだな」

「・・・華蝶の誓い、忘れずに」

「いつ誓ったんだよ・・・」

「・・・咲」

「翠か」

「絶対に戻ってこいよな！それで私と勝負だ！」

「もちろん私もだからな！」

「わかってるよ、翠、焰耶」

「・・・咲殿」

「愛紗、弓を教えてくれてありがとうな。紫苑も桔梗も・・・ね」

「いえ・・・」

「そのお返しに璃々と遊んでくださってありがとうございました」

「ふん、焰耶も少しはましになったからの、こちらこそ感謝じゃ」

「二人とも……」

「一刀……」

「……後は頼むぜ」

咲が一刀に頼み事をする。

「……ああ。俺が……俺たちがこの国を平和にしていくよ」

これで全員……か？

「待つのです！」

声が響き渡る。そこには息を切らした陳宮と賈馱がいた。

「……咲殿！必ず恋殿を幸せにするのですぞ！」

陳宮は目に涙を溜めながら咲に言っ。

「……ああ。必ず」

「……ヒック……恋殿お……」

「……ねね、泣かない」

「うっ……ぐす……」

「……また会えるから」

「ぐすっ……」(クッ)

「咲」

「詠、後は頼むよ」

「……まったく、ホントにあんたってヤツはボクに迷惑をかけるのね」

「……悪い」

「……許すわ」

「早いなおい」

「……しるわっ」

「ま、もう一回言っけど、眼鏡、ありがとな」

「……ふん」

今度こそこれで最後だ・・・あ・・・そうだ。俺はまだ残っている
両手で制服のボタンを取る。

「蓮華、思春！受けとれ」

俺は取ったボタンを二人に向かって投げる。

「・・・これは？」

「んー・・・また会おうっていう約束の証かな？」

「・・・ふふ、ならまた会いましょう」

「なら俺も・・・ほら、詠、ねね」

咲も二人に向かって投げる。

「・・・確かに受け取ったわ」

もう身体のほとんどが消えている。俺たちは最後に・・・

「さよなら・・・いや、いつてきます」

「・・・いつてらっしやい」

蓮華は俺に優しく言葉をかけて、

「じゃあな、また会おうぜ皆」

「必ず戻ってくるのですぞ！」

「……ちゃんと帰ってきてきなさいよ」

「ああ」

俺たちの意識は……そこで途絶えた……

別れ〜また会う日まで〜（後書き）

亮

「と、いうわけで・・・」

全員

「お疲れ様でしたーっ！」

咲

「いやあ、やっと恋姫編終わったな」

長かったですね。

明命

「ちなみに私と恋殿は、どうなんでしょうか？」

無論、次の世界でも出します。

恋

「・・・（わくわく）」

雪蓮

「私たちは？」

・・・どうでしょう・・・

雪蓮

「……ぶ〜……」

咲

「後、肝心のことなんだが、次の世界は……」

もちろん決めてありますが……どこか分かるのは次の次です。

亮

「？間に一話入れるのか？」

はい。あの人が……あのおじさんが出てきます。

咲

「おーい、若干ネタバレじゃないか？」

構いません。

とにかく……今回はここまでにしましょう……恋姫の皆さん、お疲れさまでしたぁーッ！

明命

「コホン……それでは次回の真似と開閉と世界旅行！」

恋

「……また見る」

亮&咲

「それではまた次回会いましょう！」

新たな世界に向けて（前書き）

軽い間話です、そして短いです。ではどうぞ。

新たな世界に向けて

目を開けたらそこは初めに来た周りが白い空間だった。

「……無事に物語を終わらしたようじゃの」

自称神のじいさんがいた。

「……じいさんか……久しぶりなことで」

「んで？次はどこの世界だ？」

咲がじいさんに聞いた。

「知らん」

「「はあ!?!」」

「ここのじいさんは……!?!」

「ふざけんなじい!どこ行くか分かんなきや対処のしようがないだろ!」

咲が軽くキレていた。

「むう……そうは言っても儂はお主たちを世界に存在を合わせて送るだけじゃからの、どこに行ったかはお主たちが送られて初めて分かるんじゃ」

「ちえ・・・仕方ないな・・・ってそつだ明命は!？」

肝心の事を忘れていた・・・

「そつだ!恋は何処に・・・!？」

「うむ・・・あの二人は他の世界に行けるように存在を変えておる」
存在を・・・変える？

「つまりはのう・・・もし現代の世界だったら周泰や呂布がいたら
矛盾が生まれて世界に消されてしまう・・・」

「なるほど・・・確かにおかしいよな」

「だから二人の存在を変えて世界に矛盾が起きないようにする・・・
ってことが」

「そうじゃの、だから次の世界には間に合わせるようにするから、
今は見逃してくれんかのう・・・」

「・・・しょうがないな・・・」

俺たちは渋々怒りを抑える。

「うむ・・・それでは次の世界に送るぞ・・・」

「ちょっと待ってくれ」

咲が待ったをかける。

「咲？」

「あいつ・・・左慈は一体何者なんだ？あいつがなんであの世界に・・・」

なるほど、咲の疑問ももつともだ。

「うむ・・・それはのう・・・つまりはお主たちの影響なのじゃ」

「俺たちが・・・？」

「うむ、お主たちがイレギュラーとして認識されて、排除するために左慈という登場人物が選ばれたのじゃ」

「ふうん・・・ま、いくら来ても倒すだけだけだな。な、亮？」

「おう」

「では送るぞ・・・」

俺たちは光に包まれて意識が薄くなっていく・・・

「・・・お、次の世界の為にお主たちに力を追加しておくからの・・・」

そのじいさんの言葉を最後に俺たちの意識は完全に途絶えた。

新しい世界へ（前書き）

新しい世界に入ります。．．．ではどうぞ。

新しい世界へ

目を開けてみると……絶賛落下中だった。

「えええええつ!?」

なんで!? なんでいきなり空を落ちてるの俺たちは!?

「……く! 開け!」

咲が空間を開いてキープレードを取り出す。

「……亮! 掴まれ!」

咲が俺の手を掴んでキープレードをボードに変える。

「ふう……」

これで安心だな……そんなこんなで地面に降りる。すると、

「あれ? お兄ちゃんたち、誰?」

声が出て振り返るとそこには雪のような髪と赤い瞳の少女と……
二メートルはあるであろう巨人だった。

「……なっ……イリヤ……スフィール」

「バーサーカー……」

Fateの世界なのか……

「……ま、誰であろうとバーサーカーを見ちゃったからには死んで貰うけどね」

一瞬で寒気が走り、俺はケータイを取り出す。

「魔力集中！マイティガード！」

咲が自分と俺に補助魔法をかける。……ちなみに効果はバリアマバリアヘイストの効果をもとめてかけるものだ。

「モーションキャプチャー！ザファイラ！」

リリカルなのはの守護獣に変わる。

「……ふうん……変わった魔術を使うんだね……でもそんな私のバーサーカーには通用しないよ？……やっちゃんえ、バーサーカー」

「……………」

咆哮、それで俺たちは軽く怯えたが、今は怯えている時じゃない。

「……咲、隙を見つけたら逃げるぞ」

「わかってる」

しかしその少しの合間にバーサーカーは斬り込んでくる。

「ッ！魔力最大集中！バリア！」

「セイオオオオオ！！」

俺と咲で二人で防御をするが・・・

「—————！」

ドオオオオンッ！

その防御ごと吹き飛ばされる。

「ガッ・・・！」

「ぐあ・・・！」

宙を飛ぶ俺たち。・・・このままじゃあ地面に叩きつけられて死んでしまう。

「・・・咲！」

「ああ！魔力最大集中！エアロガ！」

風の力を使って上手く着地した瞬間、後ろから声が聞こえた。

「な、なんだ！？」

後ろを見ると、そこにはこの世界の主役、衛宮士郎とそのサーヴァントのセイバー、その後ろにはアーチャーのマスターの遠坂凜が居た。

「こんばんはお兄ちゃん。こうして会うのは二度目だね」

坂の上から追いついてきたイリヤスフィールが衛宮士郎に声をかける。

「……やば。あいつ、桁違いだ」

遠坂凜が身構えながら言う。

「あれ？なんだ、あなたのサーヴァントはお休みなんだ。つまらないなあ、二匹いっしょに潰してあげようって思ったのに」

不味いな……。いつの間にか俺の物真似もさっきの一撃で解除されてしまった。……とその時、イリヤスフィールがお辞儀をした。

「はじめまして、リン。わたしはイリヤ。イリヤスフィール・フォーン・アインツベルンって言えばわかるでしょ？」

「アインツベルン……」

遠坂凜がイリヤスフィールの名に聞き覚えがあるのか、微かに体が揺れた。

「じゃあいくね。やっちゃえ、バーサーカー」

次の瞬間にはバーサーカーが一瞬で近づいてきた。

「シロウ、下がって……!」

それをセイバーが応戦する。……セイバーは視えない剣でバーサーカーの一撃を止めた。

「っ——」

セイバーに容赦なく一撃を浴びせていく。

「くっ……」

押し戻されるセイバー、それでもバーサーカーの攻撃は止まない。

カキインと剣の音が耳障りな程に耳に響く。

「——逃げろ」

衛宮士郎が呟く。

確かにセイバーは勝てない、このままだと殺られてしまう。

「I l v i e r S t i l l E r s c h i e u n g . . . !」

遠坂凜の魔術がバーサーカーに命中する。 だが効かない、傷一つも付いてない。

「つ . . . ! ? く、なんてデタラメな体してんのよ、こいつ !」

それでも遠坂凜は攻撃を止めない、バーサーカーは止まらずにセイバーに突っ込む。よく見るとセイバーは胸から血が滲んでいた。たぶんランサーにやられた傷だろう。

「だめだ、逃げるセイバー . . . !」

衛宮士郎が渾身の力で叫んだ。 . . . だがセイバーはその声を聞いて、むしろ自らバーサーカーに突っ込んでいく。

「 . . . 無理だ」

思わず呟いてしまうほどに俺はバーサーカーの圧倒的な力に怯えていた。

「—————！」

バーサーカーが吼える。・・・次の瞬間にはセイバーが吹き飛ばされていた。

「っ、あ・・・」

最早セイバーは立ち上がることができないほどの傷を負っていた。だがセイバーはマスターを守るために意識が無くとも立ち上がる。

「あは、勝てるわけじゃない。わたしのバーサーカーはね、ギリシャ最大の英雄なんだから」

「・・・！？ギリシャ最大の英雄って、まさか——」

イリヤスフィールが淡々と告げ始める。

「そうよ。そこにいるのはヘラクレスっていう魔物。あなたたち程度が使役できる英雄とは格が違う、最凶の怪物なんだから」

イリヤスフィールは愉しげに瞳を細める。

「いいわよバーサーカー。そいつ、再生するから一撃で仕留めなさい」

イリヤスフィールの一言でバーサーカーが動き出す。

「こ……のおおお……!!」

その時、衛宮士郎がセイバーに向けて走り出す。そして

ドクシャッ

……腹の部分をバーサーカーに挟られた。

「……なんで？」

イリヤスフィールが呟く。

「……もついい。こんなの、つまんない」

そのまま遠坂凜に向けて、

「……リン。次にあつたら殺すから」

そして俺たちの方へ向き、

「でも、あなたたちは逃がしてあげない。ここで死になさい」

「……!？」

俺と咲に緊張が走る。だが次の瞬間、足下に魔方陣みたいな物が浮

き上がっていた。

「……嘘。あれってまさかサーヴァントを呼び出す……」

遠坂凜があり得ないといった感じで呟いた。……俺たちの頭の中に言葉が浮かんだ。

「……告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に」

「聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

俺と咲が詠唱を始める。……体中に痛みが走る。

「誓いを此処に。我は常世全ての善と成る者、我は常世全ての悪を敷く者。汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ……！」

視界が光で消される。頭に形の無いスイッチが出てきた気がする。俺は迷わずそのスイッチを入れる。

「……！！」

何かが繋がる感覚。……そして光が消えて、俺たちの目の前には……大切な人が居た。

「……サーヴァントアサシン、ここに」

「……サーヴァントランサー……」

明命と、恋がそこにいた……

「……うそ、そんなのあり得ない……」

イリヤスフィールが愕然とした表情で呟く。

「……なんで……？なんでわたしが知らないサーヴァントがいるの……？」

イリヤスフィールは動揺が激しいようだった。

「バーサーカー！退くわよ！」

イリヤスフィールは明命たちと戦わせずにバーサーカーを退かせて、自分自身も撤退していった。

「……明命」

「……はい、お久しぶりです。亮様」

「……よっ、恋」

「……会えた」

……っと、和やかに会話している場合じゃない！

「おい、遠坂凜！衛宮士郎は大丈夫か？」

俺は衛宮士郎を見ていた遠坂凜に確認をとる。

「……！」

……が、遠坂凜と何とか持ち直したセイバーが俺たちに戦闘態勢をとった。

「お、おい！俺たちに戦う意思は無い！今は衛宮士郎を……」

咲が必死に弁解する。

「……もし、シロウに手を出したら……」

セイバーが構えながら聞いてくる。

「ああ。約束する」

「……わかりました。今はあなたたちを信じましょう」

セイバーが剣を引いてくれた。……その時、ズキリ、と左手が痛んだ。

「……令呪か」

咲の方もどうやら右手に令呪が浮かんでいるようだった。

「ちょっと、あなたたち、手を貸してちょうだい」

遠坂凜が俺たちに衛宮士郎を持つように言ってきたので、俺たちは協力して衛宮士郎を家まで運んでいった……

新しい世界（後書き）

新世界に入って最初のゲストをお呼びしましょう！

士郎

「俺か？」

はい。

亮

「でも、衛宮士郎の出番は一瞬で終わったよね」

咲

「脇腹をグシャッ、っと一撃」

士郎

「・・・む」

亮

「まあ、主人公は最初はそんなもんだな」

ですね。

咲

「ちなみFateの世界だったわけだけど・・・何ルート？」

基本はセイバールートで行こうと思います。

亮

「思います・・・ねえ」

咲

「つまりは基本セイバールートだけどあちこちになにか変化を加えるってことか？」

多分・・・

士郎

「まあ・・・俺は何でもいいけど・・・」

亮

「あとは・・・明命たちをサーヴァントにしたことか」

あれはただ単に世界に合わせただけです。

咲

「確かに呂布や周泰だったら英霊としては問題ないからな」

はい。その通りです。

亮

「でも明命がアサシンってのはわかるけど・・・」

呂布は万能なんですよね。ランサーも良し、赤兔馬があればライダーもいけるし、バーサーカー・・・はチートすぎるからボツ。

咲

「エクストラだと呂布はバーサーカーだがな」
でも自我が無い呂布でいいんですか？

咲

「・・・やだ」

士郎

「ほぼ即答だな」

まあ、今回はここまでです。

士郎

「えーと・・・次回の真似と開閉と世界旅行」

亮

「また次回も見てくださいね！」

咲

「それではまた次回会いましょう」

とじあえも今のじとを〜 (前書き)

Fate 編第二話です。ではじつぞ。

とりあえず今のことを

「ふぁ……」

衛宮士郎を運んでから俺たちはあまり会話せずに衛宮士郎の家の土蔵を借りて爆睡した。

「咲……はまだ寝てるか」

あと今更なんだけど俺たちの服装が衛宮士郎たちが通っている学校の制服に変わっていた……なんで？

「……とりあえず居間に行くか」

ここにいてもしょうがない。俺は咲をおいて居間に「おはようございます亮様!」「うわっ!?!」

「……明命……いきなり上から降りてくるのは止めてくれ、心臓に悪い」

「……申し訳ありません」

がくっ、とうなだれる明命を見て、あ、と思い出す。

「そっいや明命、恋は?」

俺が聞くと明命は無言で指を指す。すると明命が指差した屋根の上で爆睡している三国無双がいた。

「……居間に行こうか」

「……はい」

そんなんで居間に入った。中には衛宮士郎と遠坂凜が居た。

「やつ、傷は塞がってるみたいだな」

俺は衛宮士郎に声をかける。

「……！お前は昨日の……」

「あら、まだいたのね」

「まだいたのねはひどいdar。俺はここまで衛宮士郎を運んできたんだから」

少し非難の声をあげながら遠坂凜に言う。

「……それより貴方たちは何者？うちの学校の制服を着ているみたいだけど、貴方たちみたいな魔術師が居たなんてわたしは知らなかったわ」

「あー……うん……」

「しかもサーヴァントを呼び出した。……これはあり得ないことよ、すでに士郎のセイバーが七人目のサーヴァントだったのに貴方たちはアサシンとランサーを呼び出した。……そんなにサーヴァントを呼ぶ魔力は聖杯には無い」

「うーん・・・あれ、まてよ。俺はランサーに襲われたんだけど、あんな女の子じゃなかったぞ?」

遠坂凜、衛宮士郎がとにかく俺を言葉責めにする。

「あーあー！少し静まれ!・・・説明するとだなあ、俺たちはこの世界の住人じゃない」

「はあ?なによそれ」

「遠坂凜、最後まで聞け。俺たちはようするに魔術なんかが無い世界から来たんだ」

すると遠坂凜がブツブツと呟き始めた。

「・・・でも、確かに最初は魔力を感じなかったけど・・・でもそれならまるで第二魔法みたいだし・・・並行世界から来た人間なんて・・・」

声をかけても無駄そうだったから、俺は衛宮士郎に向き直る。

「・・・ちなみに聞くけど、お前らはこの・・・聖杯戦争ってやつに参加するの?」

衛宮士郎が俺に聞いてきたので答える。

「ああ。．．．だけど俺たちからは戦うことは少ないと思う。無関係な人たちを巻き込むのは嫌だから」

その言葉に衛宮士郎がホツとした。

「．．．そうか、だったら、俺たちとー」

「．．．ちょっと、なにわたしを無視して話を進めてんのよ」遠坂凛が自分の世界から帰ってきたのか、俺たちに突っ込みをいれる。

「別にいいじゃないか遠坂。味方が多いにこしたことは無いだろ？」

「そうだけど．．．」

まだ渋る遠坂凛。

「あー．．．つまりは俺たちが信用できないんだな？．．．なら俺たちは交換条件として明命．．．アサシンたちの真名しんめいを教えるよ」

俺が最大の条件を提示する。

「真名を．．．？いいわ、なら聞かせてもらおうじゃない」

その時、外から声が聞こえた。

「ーああのな亮、別に構わないけど少しは俺を起こしてくれてもいいんじゃないか？」

咲が入ってきた。

「あら、貴方も来たのね・・・それで？」

ああ、そうだった、真名真名、つと

「明命、入ってこい」

「恋も来いよ」

二人が入り口から入ってくる。

「・・・まず、こつちのアサシンだけど、真名は周泰って言う」

「・・・は？」

遠坂凜が頭に？を浮かべた。

「・・・ちよつとまって、わたしの記憶が正しければ、周泰って三国志の武将よね？」

「そうだけど・・・なにか？」

「なにか？、じゃなあって！周泰って男でしょ！？このアサシン、どこからどう見ても女じゃない！？」

遠坂凜が叫んだ。・・・うおう・・・耳に効くなあ・・・

「だから並行世界から来たって言うてるだろ？・・・つまりは三国志の武将が女になつてる世界が有っても不思議じゃない」

「ぐ・・・まあいいわ、それで？そつちのぼーっとしたランサーは？」

俺ではなく、咲が答える。

「ああ、ランサーの真名は、呂布だ」

「「ええええ!?!」」

今度は衛宮士郎も一緒になって絶叫した。

「な、なんでさ……」

「もう……意味がわかんない……」

二人とも何故か意気消沈していた。

「……それで、どうだ？同盟を組んでくれるか？」

俺が二人に聞く。

「……いいわ、周泰はともかく呂布の実力はよくわかるもの。……
・同盟を組みましょう。いいわね士郎？」

遠坂凛が衛宮士郎に聞く。

「……ああ、俺は元々手を組むつもりだったからな……ところ

で二人とも、名前は？」

あ、忘れてた。

「ええと・・・俺は大澤亮。亮って呼んでくれ」

「俺は五十嵐咲だ。俺も名前で呼んでくれ」

「亮に咲か・・・俺は衛宮士郎、好きなように呼んでくれ」

「・・・わたしは遠坂凜よ」

「ああ、よろしく、士郎、遠坂」

「こつちも頼むぞ、ええと、士郎と凜」

俺と咲が目を合わせて一番重要な事を口にする。

「それで士郎・・・さっそくお願いがあるんだが・・・」

「ん？なんだ？」

「・・・俺と亮に・・・寝泊まりする場所をくれないか？」

咲が俺の言葉を継いで士郎に言った。

「・・・え？」

「いやさ・・・昨日の夜にこの世界に来たから・・・住むところが無いんだよ・・・」

「あ、ああ・・・別にそういうことなら空き部屋があるからそこを使っただいいぞ？」

「ありがとう・・・助かる」

俺が感謝をして、明命に話しかける。

「と言うわけで、何とか寝所を確保できたぞ明命」

「・・・ねえ、わたし思ったんだけど、その明命ってなに？アサシンの真名は周泰じゃないの？」

遠坂が真名を口にしたので俺は少し慌てたが、明命が黙っているの
で、明命に聞いてみる。

「・・・明命？真名を言われたのにいいのか？」

「・・・実際にはよくありませんが、この世界では真名というものが存在していないことを既に私は知っています」

「あ、そうか。サーヴァントになると一般常識と聖杯戦争に関する
こと全てが頭に叩き込まれるんだっけ？」

「はい。ですから衛宮様と遠坂様には真名を呼ばれてもあまり気になりません。しかし、もし本来のアサシンと戦った場合、同じアサシンだと混乱しますから・・・お二人には真名で呼んでほしいのです」

「・・・ちょっと待ってよ・・・まな、ってなに？」

うわ、そこから説明しなくちゃだめか・・・

説明中~~~~~

「つまり、貴女たちの世界には四つ目の名があったわけね・・・」
ふう、と遠坂が行きを吐いた。

「ええと、それで貴女が・・・」

「はい。私はアサシンのサーヴァント周泰。真名は明命です」

「・・・それでそっちが」

「・・・ランサーのサーヴァント・・・恋」

「恋・・・ね・・・わかったわ、これからはそう呼ばせてもらおうわ」

それていきなり遠坂が立ち上がった。

「さて、それじゃあ、わたしは戻るけど」

「え？ああ、お疲れさま」

士郎が遠坂を見上げる形になる。

「協力関係になったからって間違わないでね。わたしと貴方はいずれ戦う関係にある。最後の日になって他のマスターたちが倒れていくにしろ、全員健在であるにしろ、これだけは変わらない。だからわたしを人間と見ないほうが楽よ、衛宮くん、咲くん、亮くん」

そう言葉にして遠坂は自分の家に帰っていった。

「ふう……」

息を吐いて横になる士郎……絶対にこいつ、セイバーのことを忘れてるな。

「士郎……くつろぐのはいいけど、セイバーはいいのか」

「————！」

素早く立ち上がった。士郎はあちこちを探し始めた。

「……平和だなあ」

「惚けんなよバカ」

咲に言われて少しムツとする。

「……咲、恋……飽きた」

「そんじゃあ一緒に出掛けるか？」

「……(コクッ)」

「待て待て！咲、お前は恋をそのままの格好で町に連れていく気が！？」

「霊体かさせればいいだろ？」

「……できるのか？」

「……ごめん無理だ」

「……だろ？」

その時、咲の頭に電球が浮かんだような感じになった。

「そうだ……亮、お前の物真似で服を作ってくれよ」

「はあ？」

いきなりなにを・・・

「・・・(ニコッ)」

ニコッじゃない！？あの笑みはニヤリだ！・・・結局俺は錬金術師になってそこらの布から服を作るはめになった・・・

「・・・」

そして恋は今、白いセーターに下は黒いミニスカートに靴は白黒のスニーカー・・・言ってしまうえば遠坂の私服白バージョン。

「・・・ふふ」

そこで明命はシャツの上に水色のダウン、下はジーンズに靴はムートンブーツ。・・・明命の方が凝ってる気がする。・・・いや、別に明命をひいきしたわけではなく。たくさん服を作ったその中から二人がこれがいい、と言うものを選んでもらったのだ。

「それで、どこに行くんだ？」

「……普通に散歩すりゃいいんじゃないね？」

俺たちは普通に長シャツにジーンズの組み合わせだった。

「亮様！どこに行くのですか？」

様付けのせいか、周りの視線が向く。

『……あんな可愛い女の子に様付けで呼ばさせるなんて……』

『畜生ッ！二人とも可愛いぞ……いいなあ……』

……軽く妬みの視線もあったが、とりあえず明命に「つだけお願いをする。」

「……明命、頼むから皆の目がある時は、さんかくんか……呼び捨てで頼む」

「え！あ、す、すみません……」

「ほら、言ってみな？」

「え、えつと……り、亮さん……あう……」

「よくできました」

真っ赤になつた明命の頭をなでてやる。・・・横の咲から「・・・バカップル」・・・なんて言われたけど、お前も大差ないだろうが。恋は咲と腕を組んでいた。

「・・・よし！隣町まで遊びに行くぞ！」

そのままバカみたいに遊びまくつた。明命と恋は初めて見るものに皆目を輝かせて楽しんだ。・・・ちなみに昼食は恋対策でバイキングにした。・・・出てくるときに土郎から地図を貰ったから道に迷う心配は無い。

「・・・ふう〜」

「流石に・・・疲れたな・・・」

俺と咲は既に疲労困憊だった。

「亮さん・・・大丈夫ですか？」

「・・・咲、大丈夫？」

二人が心配そうに覗いてくる。・・・さすがサーヴァント・・・

「・・・最後にそこによっていくか」

俺が行こうと勧めたのは・・・

「・・・バッテリーングセンターかよ・・・」

「な、なんだよ・・・目の前にバッティングセンターがあるのに打ちに行かないなんて野球選手の名が廢るぜ」

「お前は野球をやってるけど俺たちは野球をやってないからな？」

細かいことを無視して早速打ちに行った・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・づづづ・・・・」

俺は泣き崩れていた。

「お、おい、亮？」

「亮さん・・・・？」

ま、まさか魔力行使無しで負けるなんて・・・やったことの無い命と恋にまで負けるなんて・・・

「あー・・・ほら、俺には勝てたからいいじゃないか」

「・・・・・・・・づづ・・・・」

「・・・大丈夫、恋は本気じゃなかったから」

「づわあああ！」

恋の言葉が俺の心を撃ち抜いていった。

「恋……そのフォローは逆効果だ……」

「……？ふおろー？」

「……後で説明するよ」

「うう……取りあえず、そろそろ帰ろうか」

「そう、だな……大分暗くなってきたし……」

「へえ……随分人間くさいサーヴァントだな」

「「「「……！！」「」「」」

俺たちに緊張が走った。……振り返った先に居たのは、青い服に身を包んだ……本来のランサーが居た。

「よっ。まさかオレと同じ役割クラスがいるとは予想外だったぜ」

「……咲！下がって」

「亮さん、後ろに」

いつの間にか明命たちの服は見馴れたものになっていた。

「ほう……やるかい？」

ランサーが深紅の槍を取り出す。

「……」

「……」

恋と明命も自分の武器を構える。

「んで？どつちから来んだ？別に二人がかりでも構わねえぜ？」

「……！」

明命が動き出そうとした瞬間、恋が止めた。

「……あいつは……恋がやる」

「恋殿？」

「同じランサー……絶対に勝つ……」

それに明命も納得したのか、一步後ろに下がった。

「じゃあ……行くぜ、嬢ちゃん！」

ランサーが素早い動きで恋との間合いを詰める。

「……！」

カキン！

だが突き出した槍は方天画戟によって弾かれる。

「……こんどはこっち」

方天画戟を横薙ぎに払う。

カキイイン！

それをランサーは受け止める。

「……グツ！？……お前、本当にランサーか？まるでバーサーカー並みの力じゃねえか」

確かに恋の一撃はバーサーカー並みの力を持っている。……一撃でも当たればひとだまりもない。

「へ、面白いじゃねえか……そろそろそろあー！！」

ランサーは本当に楽しそうに俊速の槍を突き出す。だが恋はそれを弾き続ける。

「……早い」

だが別に余裕というわけではなさそうだ。恋の顔も苦悶に歪んでいる。

「どうしたどうした？もう終わりか？」

ランサーが余裕そうに恋に聞く。

「・・・まだこれから」

恋は負けないように攻めに出る。・・・最早二人とも人の目につくことを考えていないらしい。確かに今の時間帯なら人は中々通らない。

「・・・亮さん」

「ダメだ明命。参加は許さない」

「ですが・・・！」

「あいつだって・・・咲だって恋を信じてるんだ。・・・だから待ってやれ」

「・・・はい」

澁々ながら明命は退いてくれた。

「ハハッ、やるじゃねえか嬢ちゃん！だが、これで終いだ！」

ランサーが後ろに飛んで距離をとった。

「……！」

恋は何かを感じたのかすぐにランサーとの間を詰める。

「……その心臓、貰い受ける！」

ランサーが槍を放つ。

「ダメだ恋！避ける！」

咲が必死に叫んだ。

「……！」

「刺し穿つ（ゲイ）」

ランサーの槍に魔力が帯びる。

「死棘の槍（ボルク）！」

ランサーの下段に放たれた槍は、軌道を変えて恋の心臓へ
！

ドスッ！

「・・・あ・・・」

槍は恋の心臓ではなく、脇腹を抉っていった。

「恋！・・・テムエエエエ！」

咲が怒り、ランサーに突っ込む。

「魔力最大集中！ヘイスガ！」

そのままランサーと打ち合う。

カキヤアン！

カキイイン！

カアン！

ブオンッ！

「おうおう、人間のわりには早いじゃねえか・・・だが、まだまだだな」

ドガアッ！

「あぐつ！」

ランサーに蹴り飛ばされる咲。

「・・・さて、次はアサシン、お前だ・・・と言いたいところだが、我が必殺のゲイボルクをまさか避けるやつがセイバー以外にいやがったとはな・・・今は首を預けてやるぜランサーの嬢ちゃん。アサシン、お前は後で必ず相手をしてやる。・・・首を洗って待っていな」

そのままランサーは立ち去っていく。

「・・・そうだ！恋！」

俺たちは恋と咲に近寄る。

「おい！咲、大丈夫か！？」

「ぐ・・・俺より・・・恋を」

「明命？」

「・・・大丈夫です。致命傷ではありません」

「・・・く・・・咲、ごめん・・・」

「いいさ・・・取りあえず・・・魔力最大集中、レジスト、ケアルガ」

まず、ゲイボルクの呪いを解呪してから傷を回復する。

「……あ、治った」

恋が立ち上がって少し動く。

「ありがとう、咲」

「いいよ礼なんて……恋の方が頑張ったんだから」

「……うん」

「亮さん……今は帰りましょう。ほかのサーヴァントに教われたら不味いです」

「ああ、帰ろう。……咲？立てるか？」

「……ああ、大丈夫だ」

咲が起き上がって明命たちは私服に戻る。

「……さて、どう士郎たちに報告するか……」

俺たちはひとまず士郎の家に向かった………

とりあえず今のことを（後書き）

今回は二人のステータスを出したいと思います。

亮

「まあサーヴァントの基本だよな」

C L A S S アサシン

マスター 大澤亮

真名 周泰（明命）

性別 女性

身長・体重 ？

属性 秩序・善

能力

筋力 C +

耐久 D

俊敏 A

魔力 E

幸運 B+

宝具 ?

保有スキル

直感 B

矢避けの加護 C

単独行動 C

クラス別能力

気配遮断 A

CLASS ランサー

マスター 五十嵐咲

真名 呂布(恋)

性別 女性

身長・体重 ?

属性 秩序・善

心眼（偽） B

怪力 A

単独行動 C

矢避けの加護 B +

戦闘続行 B

カリスマ C

保有スキル

宝具 ?

幸運 A

魔力 C

俊敏 A

耐久 B

筋力 A

クラス別能力

対魔力 C

という感じですよ。

亮

「恋強っ!?!」

咲

「さすが呂布……」

まず知名度もありますからね。

亮

「周泰は……三国志を少しでも読めばわかる武将だけ……」

咲

「呂布はゲームとかでもわかりやすいくらい目立つから……」

神の調整によって、二人は実在した二人の武将の存在に合わせられています。

亮
「つまり・・・明命は現代の三国志の周泰と同一人物になっているのか？」

はい。

咲
「・・・あと身長・体重が？なのはわかるけど、宝具は？」

・・・

亮
「考え付いてないのか？」

・・・はい。

咲
「ま、まあ、一回使えばいい方が・・・」
「ですね・・・では、今回はここまでです。」

咲
「次回の真似と開閉と世界旅行」

亮
「次回も見てくださいね！」

それではまた次回会いましょう。

夜、学校は？（前書き）

亮たちは学校をどうするのか？・・・ではどうぞ。

夜、学校は??

取りあえず帰ってきたら、既に夕食は終わっていたらしい。三人とも、ただ座ってこれからのことを話していた。

「ただいま」

「お、帰ってきたのか」

「随分と遅くまで出歩いてたじゃない」

士郎と遠坂が声をかけてくる。・・・セイバーは「・・・まったく、サーヴァントに襲われたらどうするんですか」・・・ごめん、襲われました。

「ああ、俺と恋は二倍疲れたな」

咲が息を吐き捨てながら言った。

「ん？そんなに遊んでたのか？」

「ランサーに襲われた」

・・・・・・沈黙。

「あ、あなた・・・いまなんて？」

「だから、ランサーに襲われたんだよ、凜」

淡々と語る咲に・・・遠坂が爆発した。

「なんでそんなに淡々としているのよー！ーっ！！」

「・・・耳に来るなあ・・・」

「恋、本当ですか？」

セイバーが恋に聞く。・・・てか、いつの間に真名を許されたんだ？

「・・・襲われた」

恋もゲイボルクを喰らったってのにいつも通りの恋だった。

「・・・はあ、しかし、今貴女がいるということは、ランサーを倒したのですか？」

「・・・（フルフル）」

首を降る恋。

「そつですか・・・」

「・・・げいぼるくを喰らって、恋が負けた」

・・・再沈黙。

「ちょっと待ちなさいよ！なんで宝具を喰らってそんなにピンシヤンしてるのよ！」

遠坂が呆れ半分怒り半分で聞いてくる。

「俺のまま………魔術で呪いを解呪して回復させた」

咲が答えた。遠坂は若干不満げだったが、とりあえずは退いてくれた。

「……まあ、それは置いといて、四人ともなんか食つか？おにぎりぐらいなら用意できるぞ？」

士郎がありがたい提案をしてくれた。

「んじゃあ、俺は三個」

「ランサーに蹴られたから食欲あんまり無いから、二個」

「私は一個で充分です」

「……恋は、二十個」

俺たちは士郎に希望を告げる。

「はいよ、亮が三個で咲が二個。明命が一個で、恋が二十個……いやいやいや」

士郎がいきなり騒ぎだした。

「なんだよ士郎？なにかおかしかったか？」

「おかしいだろ！？なんで一人だけ桁が違っただよ！？」

「おいおい、恋にしては控えているほうだぞ？」

「二十個でか！？」

「士郎、うるさいわよ」

「シロウ、なぜそんなに騒いでいるのですか？」

「なんでさ！？なんで俺がおかしいみたいなの空気なんだ！？」

結局士郎は米を炊いておにぎりを作ってくれました。

「……本当に食いきった」

士郎が愕然としていたがスルー。

「実は遠坂、話があるんだが……」

「ん？なに？」

「俺たちって・・・学校に行くのか？」

「一番疑問に思っていることを口にする。」

「あら？貴方たちってうちの学校じゃないんだっけ？」

「ああ」

「・・・うーん・・・転校生で行こうか？」

「士郎がいい案を出してくれる。」

「そうね・・・取りあえず身分をでっち上げて・・・貴方たち、歳はいくつ？」

「「15」」

「・・・となると一年生か・・・」

「遠坂が思考の海に沈んでしまったので、俺たちは士郎とセイバーに後を任せて、自分たちにあてがわれた部屋で眠ることにした・・・」

「……うん……」

目を擦って周りを見れば、既に朝だった。

「……明命」

「なんですか？」

貴女はいつの間に俺の後ろにいるんですか？

「……いきなり出てこないでと言ったのに……」

「あう……すみません亮さん」

「いいけどさ……咲……咲……。起きろ……。朝だぞ……」

咲を起こし「……うるせえ」

ガツン！

……裏拳をもらいました。

「……（ブチッ）」

「り、亮さん……?」

「さっさと……起きるユラマアアッ!」
朝から賑やかになった。

「取りあえず、飯食うか……」

居間に歩き出そうとしたら、玄関に人が溜まっていた。

「おはよう間桐さん。こんなところで顔を会わせるなんて、以外だった?」

遠坂の目の前にいるのは、士郎と遠坂の後輩、間桐桜だった。

「……遠坂、先輩」

「……」

士郎がかなり困っていた。

「先輩……あの、これはどういう……」

間桐桜が士郎に助けを求める。

「ああ。それが、話すと長くなるんだけど……」

「長くないわよ。単に、わたしがここに下宿する事になっただけだもの」

「……先輩、本当なんですか」

「要点だけ言えばな。ちょっとした事情があつて、遠坂にはしばらくうちに居てもらつ事になった。……ごめん、連絡を入れ忘れた。朝から驚かせてすまなかつた」

「あ、謝らないでください先輩つ。……その、たしかに驚きましたけど、そんなのはいいんです。それより今の話し、本当に――」

「……そうこうしてるうちに終いには遠坂を無視して間桐桜は家に入った。……瞬間、目があった。

「え……？だ、誰ですか？」

「あー・・・まあ、今日から同じ学校に通う転校生」

「右に同じく」

俺と咲が事情を軽く説明する。

「・・・そうなんですか。両親がお亡くなりになって、それで二人ともここに・・・」

「うん。そこで宿に困っていたら、士郎が助けてくれたんだ」

「・・・先輩らしいです」

間桐桜が少しやれやれといった感じで言った。

「・・・事情はわかりました。ええと・・・」

「亮、大澤亮。亮って呼んでくれればいいよ」

「俺は五十嵐咲だ。咲と呼んでくれ」

「はい。私は間桐桜です」

「よろしく、桜」

「よろしくなー」

挨拶がすんで士郎がセイバーに説明しに言って、その間明命たちを桜に紹介した。(昔両親に世話になった人ということにした)

そんで朝食。

「どうぞ先輩。遠坂先輩も、咲さんも亮さんもいかがですか？」

「……ん。じゃ、お言葉に甘えて」

「お、サンキュー」

「いただくよ」

「明命さんと恋さんもどうですか？」

「はい！いただきますー！」

「……食べる」

俺は士郎に近づき一言

「……（別にセイバー紹介してもいいんじゃないか？）」

「……（ばか言え、明命たちはお前ら絡みだけど、セイバーは俺絡みだぞ？遠坂でさえあんな態度になったのに、ここでセイバーなんて紹介したら……）」

「……（八つ裂きだな）」

咲が士郎の結末をボソリと呟いた。

「先輩？どうかしたんですか？」

「い、いや、何でもない……」

取りあえず朝食スタート……だが

「……」

「……」

「……」

「……」

いかん、会話が無さすぎる。

「……何かを忘れてる気がする」

士郎ふと口にした。・・・その時、

「おはよー。いやー、寝坊しちゃった寝坊しちゃった」

いきなり声がして士郎の学校の教師、藤村大河がやって来た。それ
でなにくわぬ顔で朝食に参加して、士郎と二、三言話して、

「って、下宿ってなによ士郎ーーーー！！！！」

テーブルをちゃぶ台返しの如くひっくり返す藤村先生。・・・桜は
風上、士郎以外の人間は自分の分の朝食を確保して避難。士郎はテ
ーブルに残った全ての物の洗礼を受けた。

「あちーーーー！なななにすんだよ藤ねえ！みそ汁だぞ炊きたての
ご飯だぞつくね煮込んだ鍋ものだぞ！？こんなもんかけられたら熱
いだろうつーーーーて、何故に朝っぱらから鍋物なぞ・・・！？」

絶叫する士郎。

「うるさーい！アンタこそなに考えてるのよ士郎！同い年の女の子
を下宿させるなんてどこのラブコメだい、ええいわたしやそんな質
の悪い冗談じゃ笑ってやらないんだから！」

「笑いをとるつもりなんかねーってば・・・！っていうか熱！熱い、
火傷する、桜タオルくれタオル！」

「はい。冷やしたタオルなら用意しておきました、先輩」

「サンキュ、助かる・・・！うわ、襟元からつくねが、必要以上に加熱されたつくねがあー！ー！？」

そんなコントをよそにして飯を食べ続ける四人。

「いや、一回食べてみたかったんだよな、桜のご飯」

「うん。確かに一度は思った・・・」

「・・・咲？どうしたの？」

「い・・・いや、前に食わされた愛紗の料理を思い出した・・・」

「・・・うわ」

そんな会話をしているうちに、話に決着がついていた。

「・・・それで土郎？こつちの子達はだれ？」

「ああ、藤ねえ、それは・・・」

土郎が説明してくれる。

「・・・ふんふん・・・つまり貴方たちは仲良し四人組なのね・・・
つて、こいつらもかー！ー！！！」

「お、おい藤ねえ！」

「なんなの！？最近の若者はそうというのが流行ってるの！？なにか
してからじゃ遅いのよー！ー！？」

「・・・はあ」

士郎が疲労のため息を吐いた。

そのあとなんとか状況を説明して、藤村先生に納得してもらい、転
入手続きをするために士郎たちより早く家を出た。・・・ちなみに
明命たちは、昨日の内に教わった霊体化を使って後ろについてきて
もらうことにした。

そんで、学校・・・

「桜と同じクラスか・・・」

「ま、気楽に行くか・・・ん？」

校庭を覗いた咲が何かを発見する。

「あれは・・・」

今登校してきた土郎たちと、ワカメ・・・もとい、桜の兄の間桐慎二が居た。

「・・・たく、何をちよっかい出しているのやら・・・って咲？」

横を見たら、いつ出したのか、咲は弓を構えていた。・・・ちなみここは三階だ。

「・・・亮、窓開けて」

「お、おう」

窓を開けた瞬間、

「・・・シッ！」

・・・矢を放った。

ドスッ！

「ヒアッ!？」

矢は間桐慎二に当たらず、間近の地面に刺さった。

「・・・チツ、外したか」

「・・・咲？」

「あ、そつだ亮、ネギまの龍宮とかになれば狙撃が・・・」

「しないよ!？つてかなんでいきなり狙撃!？」

「・・・禁則事項です」

「・・・どこかで聞いたことがあるんだが・・・」

「気にするな」

後はなんなく一日を終えて、俺たちは帰っていった。

「・・・ついていけない・・・」

まだ中学生だったのに、いきなり高校生の授業はないだろう・・・結果、転校初日から補習をくらって学校を出たのが六時・・・まずい、遅くなりすぎた。咲と恋には先に帰るように言ったから・・・

「・・・亮さん、急ぎましょう」

・・・明命が後ろにいるだけだ。

「ああ、早く帰ろっ!？」

叩きつけられた殺気に振り向けば、そこに居たのは、

「よう、アサシン。預けた勝負をやりに来たぜ」

ランサーが、いた。

「・・・明命!」

「はい!」

魔力を通して霊体化を解除する。

「ほう・・・別のアサシンと似たような獲物じゃねえか。・・・さ、いくぜ!」

先手はランサー。明命は難なく初撃をかわす。

「避けるたあやるじゃねえか・・・もっとスピードを上げて行くぜ!」

突きのスピードを上げられ、明命も魂切を振るって防ぐ。

「・・・はあっ！」

「おっと・・・！」

カキイイン！

明命もたまたまに攻撃をするが、全ていなされてしまっ。

「しっかし、ランサーといい、お前といい、本来のクラスを軽く凌駕してるじゃねえか」

ランサーが心底愉快そうに笑う。

「・・・ふっ！」

「・・・とおっ！」

カキヤアン！

カキン！

カンツ！

ブンツ！

ブオンツ！

一歩も譲らない、攻防。しかし、その均衡は破られた。

「そらよ!」

「あ……!」

ガスッ!

ランサーが放った一撃が、魂切ごと明命を吹っ飛ばした。

「明命!」

「うぐ……あう……」

苦しそうにもがく明命。

「あーあ……少し、深く入っちゃったか」

「……ランサー!」

「……大、丈夫です……亮さん……下がってください」

「お、まだやれるか……」

「……貴方を倒すためには、全力を出さなければいけないようですね……」

「ああん?」

明命は目を閉じて集中する。

「……行きます」

「……!?!」

明命がランサーに向けて走り出す。

「は、相も変わらず突っ込んで来るだけか!」

だが明命は止まらない。

「闇夜を駆ける———」(コン)

明命の姿が消える。

「何っ!?!」

「———疾風の一撃」(セツ)

ランサーの後ろにいきなり現れる明命。

「……?」

怪訝な顔をするランサー。

「……貴方には聞こえたでしょうか……」

明命が刀を鞘に納める。

「……風の声が……」

ブシャアアツ！

鞘にしまうと同時にランサーから血が吹き出した。

「がはあ！？」

膝をつくランサー。

「ランサー殿、まだやりますか？それとも退きますか？」
明命がランサーに問う。

「……本来ならまだまだ続けたいんだが、あいにく今はそれをやれないんでね、退かせてもらうぜ」

ランサーはすぐに飛び去る。

「……明命、大丈夫か？」

俺は明命に駆け寄る。

「……はい。体に異常はありません」

「……そうか、なら良かった」

ランサーを退けた俺たちは、ひとまず衛宮邸に帰った。

夜、学校は？（後書き）

亮

「・・・明命の真名解放か」

半ば適当だったでしょうか？

咲

「別にいいとは思わないが、明命の台詞はどこかで聞いたことがあるんだが・・・」

・・・ある漫画の台詞をパクりました。

亮

「ふーん・・・」

咲

「ちなみに恋の真名解放は・・・？」

あまり使えないと思います。・・・威力が高すぎて・・・

亮

「さすが一騎当千の武将・・・」

咲

「マスターである俺の魔力を全て持ってかれそうだな」

・・・それぐらいの威力はあるかと。

亮

「だな、明命は対人宝具だな」

咲

「じゃあ恋は対軍宝具か・・・？」

今は決めてません・・・それより、今はいいけど、次の世界はどうしようとかあるし・・・

亮

「その時はその時だろ」

咲

「・・・俺はどこでもいいぞ？」

・・・考えます。では今回はここまでです。

亮

「次回の真似と開閉と世界旅行！」

咲

「次回もまた見てくださいね！」

それではまた次回会いましょう。

起承転結（前書き）

少し遅れました。ではどうぞ。

起承転結

遅れて家に帰ると既に晩飯は始まっていた・・・始まっていたのだが・・・明らかに一人多い。

「・・・ただいま」

「お、帰ってきたか」

「帰ってきたか、じゃねえ。・・・何故にセイバーが・・・」

「だってセイバーだけみんなといないなんて不公平だろ？」

「・・・相変わらずの平和主義なこと・・・」

「・・・もぐもぐ・・・」

「ほら、恋。あんまり急いで食べると喉に詰まるぞ？」

「・・・(コクツ)」

なんか餌付けしてるみたいだし。

「・・・咲、なんか空気がピリピリしてない？」

咲に近づいて聞く。

「・・・士郎がセイバーを紹介してからああなった」

「……あー」

納得。……その時、藤村先生が立ち上がる。

「……納得できない。……いいわ。そこまで言うんなら、腕前を見せてもらうんだから」

そう言つて藤村先生はセイバーと土郎と遠坂に桜を連れて道場に向かつていった………。いったい何を言つたんだらうセイバー！

「……俺たちはご飯を食べるか」

「そうですね」

いつの間にか明命が隣に現れた。とりあえず青椒肉絲を一口。

「もぐ………(たばー)」

「うわ！？なんで泣きながら食ってるんだ!？」

咲が驚いて聞いてくる。

「……だって……祭さんの料理に味が似てて……」

「……あ、ホントです」

明命も一口食べて驚いてた。

「・・・凜と祭さんって何か似てるのかな・・・」

咲の咳きに答えるものはいなかった・・・

あれから二時間ぐらい経って、藤村先生はセイバーの住居を認めた。
桜は藤村先生に送られて帰った。

そして俺たちは部屋に戻った。

「ランサーに襲われたあ!？」

・・・咲に叫ばれました。

「……そうだよ、来るとは思っていたけど、まさかあんな早く来るとは思わなかった」

「……逃げたのか？」

「明命が宝具を使って退けたよ」

「宝具？それって魂切か？」

「ああ。……恋の宝具は？」

「わからない。方天画戟なのはわかってるんだが、攻撃範囲がな……」

「確かに……」

俺はとりあえず立ち上がる。

「亮？」

「少し出歩く。……念のため干将莫耶を貸してくれ」

「鈴音は？」

「いない。……強化を使えるようになるまでは使う予定はないよ」

万が一鈴音を折ったりしたら思春に申し訳が立たない。

「……ほい」

咲が干将莫耶を渡してくる。

「サンキュ」

俺は外に出て、屋根の上に赤い外套を纏った男がいるのを確認して、屋根に上る。

「よ、アーチャー」

「……貴様は確か……」

「亮。第二のアサシンのマスターの大澤亮だ」

「……ああ。衛宮士郎と同じ、自ら戦いを挑まない軟弱者か」

アーチャーの皮肉には反応しない。

「……随分と自分のことをけなせるんだな」

俺は見逃さなかった。アーチャーの顔が一瞬変わったのを。

「……それはどういう意味だ？」

「別に？たいした意味はないよ、英霊エミヤ」

「……貴様、何故私の真名を知っている？いや、そもそも、私は貴様を見たことがない。……貴様は何者だ？」

アーチャーが殺気を隠さず聞いてくる。

「うーん・・・別に？俺はイレギュラーな存在なだけだよ・・・
本来ならいないはずの人間。俺たちがいるだけで世界を狂わす疫病
神」

「・・・では最初の質問だ、“何故オレの真名を知っている”」

“知っているから”・・・そうとしか言えないな」

「・・・その様子だと、私の目的も知っているみたいだな」

「ああ、衛宮士郎・・・自分の抹殺・・・だろ？」

「そうだ。・・・貴様が邪魔をしようなら・・・」

アーチャーはどこから出したのか、干将莫耶を構えていた。

「・・・倒すのみ！」

アーチャーが突っ込んで来る。俺は手に持った干将莫耶で防ぐ。

カキヤアン！

「・・・なんだと!？」

アーチャーが驚く。

「……まさか貴様のそれは、オリジナル本物か」

「……ちよつと違うかな？」

確かにこれは呉で見つけたものだが……恋姫の世界という時点で本物かどうかは怪しい。

「ま、俺は邪魔する気はないさ」

俺はアーチャーに背を向けて部屋に戻る……実はただ単にアーチャーを見たかっただけでここまで来たんだよな……

そして朝が来て朝食。

「あ、ごめん桜。わたしバターだめなの。そのマーマレイドちよっ
うだい」

「そうなんですか？遠坂先輩、甘いものは好きじゃないような口振りでしたけど」

「まさか、そんな女の子はいないわよ。糖分は嫌いじゃなくて取れないだけだってば。油断すると見えないうところが増えるの。甘味どころは週に一回にしなくちゃね」

「遠坂、それマジか？」

俺は遠坂に聞いてみた。

「マジよ。あんまり糖分を取りすぎると・・・女の敵が増えるわ」

「・・・」

ごめん亞莎。俺、そんなこと知らずにお前にごま団子をプレゼントしてたよ。

「・・・」

明命も女の敵と聞いたあたりからトーストに何もつけずに食べていた。

「・・・もぐもぐ」

「ほら、お茶だぞ恋」

「ん、・・・んぐんぐ・・・ぶはっ」

・・・あれは別なんだろうな。

「……って、黙ってればよく食べるわねセイバー。ちっこい体のくせに桜なみの量じゃない」

「そつでしようか。私は平均だと思えますし、桜が口にしたパンは私を大きく上回っていると思いますか」

「そ、そんなコトないです……！遠坂先輩もセイバーさんもわたしも、みんな仲良くトースト二枚じゃないですかっ」

「いえ、厚さが違う。一センチに対して二センチですから、桜はよく食べています。成長期ですし、栄養を摂るのはいい。凜も一枚だけと言わず、残さず食べてはどうですか」

「だから駄目だって言ってるじゃない。桜と違って胸に栄養がいくワケじゃなし、朝からそんなに食べたなら増えるっていうの。ただでさえ朝は食べない主義なんだから、これだめ譲歩してるのよ」

「……食べないと逆に増えるって聞いたことがあるな……（ボソッ）」

ピシッ、と場の空気が凍った。

「……バカだな亮。地雷踏んだな」

咲が少し俺から距離をとった。

「……大澤くん？」

初めて遠坂に名字を呼ばれた。

「……は、はい」

「少し……お話ししましょうか」

「い、いや！えんりよ（ガシツ！）イヤアアアアアアア！！！！！」

……その後のことは思い出したくもなかった……

そして学校に来て思ったこと。

「……だるい」

そう。体がダルいのだ。……多分結界が張ってあるせいだと思う。

「……明命、いるか？」

「（御意、後ろに）」

霊体化している明命が答える。

「……明命は校内を探索。怪しいものがあつたら教えてくれ」

「（わかりました）」

明命の気配が消える。……明命はアサシンの能力があるから誰かに見つかるとは無いと思う。

「……お先」

咲がいきなり駆け出す。……なんだ？

きーんこーんかーんこーん。

・・・予鈴がなった。

「さ、咲いい！分かってたんなら教えるよおおお！」

教室に向けて走っていった。

そして放課後。

「桜、俺たちは帰るけど・・・お前は？」

「あ、わたしは少し用事がありますから・・・先に帰っててください
い」

「ほいよ、んじゃあ行くこうぜ亮」

桜を置いて先に俺たちは帰ってきた・・・が、

「・・・鍵が・・・」

門が開きません。

「咲、GO」

「はいはい・・・開け」

咲が勝手に門を開けて中に入った。

「あれ、セイバーいたんだ」

俺は居間にいたセイバーに声をかける。

「・・・亮、帰ってきたのですか。シロウは？」

「まだじゃないかな？・・・あいつは遅いからな・・・」

「そうですね・・・」

とりあえずそのあと士郎と藤村先生と桜が帰ってきて晩飯を作り始めた。そして・・・藤村先生が散々騒いだが晩飯の始まり。

「・・・あのなあ藤ねえ。今日は山ほど飯作っただから、別にがつつく必要なんかないぞ。ちゃんと飯もおかずも人数分作っただし」

と、士郎。

「そ、そうですね・・・でも先輩、これはちょっと作りすぎかなー、

とか」

桜。

「ええ。四人分の樽を三段重ね、というのはあきらかに重量過多です」

セイバー。

「樽じゃない、おひつ。いいんだよ、今日のメインはごはんなんだから多めに作っても。余ったらおにぎりにするから、明日の昼飯にもなるし」

また士郎。

「……もぐもぐ……」

「……多分残らないと思う……」

恋と咲……てか最近恋は喋ってない気がする。

「……恋は、ちゃんと喋れる」

考えを見透かされました。……とにかく、そんな感じで晩飯が終わり、桜と藤村先生が帰っていったので、士郎が今日の話をする。

「……というわけだ」

今日、士郎はライダーのマスター……間桐慎二に共闘を申し込まれて、それを断った。そしてライダーの情報により、柳洞寺にもマスターがいることが判明した。……その時、セイバーが柳洞寺に行くかどうか聞いてきた。

「わたしはパス。どうにも畏くさいし、正直それだけの情報じゃ動けないわ。相手のホームグラウンドに行くんなら、せめてどんなサーヴァントを連れているのか判明するまで待つべきよ」

遠坂が答える。

「……意外ですね。凜ならば戦いに赴くと思ったのですが」

「侮ってもらって結構よ。こっちはアーチャーがまだ本調子じゃないし、しばらくは傍観するわ」

「……俺もパスだな」

咲が言った。

「……咲もですか、何故です」

「恋が本調子じゃないからな」

「・・・恋は戦える」

「ランサーに穿れた傷も癒えてないのか？」

「・・・治った」

「嘘つけ、じゃあ触るぞ」

そう言っただけはランサーにやられた脇腹を触る。

「・・・ッ!」

瞬間、恋の顔に苦痛の表情が浮かぶ。

「・・・ほらな」

「・・・つまり戦えるサーヴァントは明命とセイバーだけか・・・俺はどっちでも構わないぜ？」

「・・・ではシロウ、私たちが柳洞寺にいきましょう」

「・・・いや、俺も遠坂と同じだ。まだあそこに手を出さない方がいい」

「な・・・貴方まで戦わないと言うのですか・・・!? バカな、今まで体を休めていたのは何の為です! 敵の所在が判明した以上、打

って出るのが戦いというものでしょう!」

「……はあ、これだから特攻バカは……」

「咲、いきなり何ですか?」

「別に?ただ単にバカだと思っただけだ」

「……!いくら同盟を組んでいるといっても私に対する侮辱は許しません!」

「別に許してもらおうなんて思っちゃいねーよ。そうやって他人の言葉に耳を傾けないから、あんな最期を迎えるんだ」

「……き、貴様……!」

「お、おいセイバー落ち着け!咲も下手に挑発するな!」

士郎が間に入って止める。

「しかしシロウ!咲は私を侮辱しているのです!……第一、戦いをしようとして何が悪い!戦わずに平和が欲しいなどとそんなくだらないことを……ッ!」

その時、咲が切れた。

「てめえ……今なんて言った?」

「……ですから戦いをしないで平和が欲しいと言っている人間は軟弱だと言っているのです」

「……ッ！」

バキィッ！

気がついたら咲はセイバーを殴っていた。士郎がセイバーを押さえていたため、セイバーはあまり反応出来ずに殴られた。

「ぐっ……！」

「ふざけるなセイバー！お前に、お前に月や桃香、それ以外の皆の理想に対して侮辱する権利は無い！」

「おい咲！」

俺は咲を止めようとするが、咲は止まらない。

「戦わないと平和は掴めない？確かにそうだが今のお前はいろんな戦いをして、いらん被害を出そうとしているんだぞ！お前にも、という考えは無いのか！もしサーヴァントが二体いたらどうする！もしなにか士郎とかを操れる力があつたらどうする！もしお前でさえ勝てないサーヴァントがいたらどうする！」

「……そんなものは所詮憶測でしかない」

「ああそつさ！だが完全に無いとは言い切れまい！」

「咲！いい加減落ち着け！」

「・・・ハ・・・ハ・・・」

咲が肩で息をする。

「・・・すまん士郎、遠坂。俺たちは先に部屋に戻るよ」

「あ、ああ・・・」

「・・・わかったわ」

俺たちは部屋に戻った。

「どうしたんだ？お前らしくもない」

俺は咲に聞く。

「だってさ・・・あいつは月や桃香を侮辱したんだぞ？軟弱だって」

「その前にお前も挑発してただろうが・・・」

「・・・だけど、あいつらが侮辱されるのは許せなかったんだ」

「あんな、恋だって我慢したんだぞ？なあれ・・・！？」

恋の方を向こうとしたら、・・・その、赤いオーラが見えた。しかも顔が影にかかって見えないのがさらに怖い。

「セイバー……月をばかにした……」

やばい、サーヴァントとマスターは似るといっけど本当だ、かなり似ている。

「……まあ、俺も呉の皆を侮辱されたら怒るけどさ……」

「……」

「流石にあれはおあいこだぜ？明日にでもセイバーに謝っとけよ？」

「……わかった」

そして俺たちは眠りについた……

起承転結（後書き）

亮

「咲がキレた……」

咲

「……悪いセイバー。顔、大丈夫か？」

セイバー

「大丈夫です。既に回復しました」

咲

「あ、そう……」

亮

「しかし、作者も大胆だな。分かりにくい表現をして咲を理不尽にキレさせて」

たまにはぶつちやけたい時もあるんです。

咲

「……いつもぶつちやけてるだろうが」

うるさいですよ。

セイバー

「しかし、また随分と中途半端に終わりましたね」

自分の体力がつかまりました。

亮

「2日開けてそれか・・・」

はい。

咲

「ま、いいけどさ・・・それでは次回の真似と開閉と世界旅行」

亮

「また次回会いましょう！」

セイバー

「それではまた次回」

月下流麗（前書き）

自分の文才力のなさに絶望してきました・・・ではどうぞ。

月下流麗

時刻は零時を過ぎていた。今、俺と明命は寝ている咲たちを起こさずに衛宮邸の前に立っていた。

「……さむ」

「大丈夫ですか？ 亮さん」

明命が心配してくるが、大丈夫と答える。……ちなみになぜ外にいるかと言うと、寝る直前に原作を思い出したので、セイバーを止めるために外に出ていた。

「……来ます！」

「……！」

その時、セイバーが衛宮邸の塀を乗り越えてきた。

「……！ 亮、明命。何用ですか？」

セイバーも俺たちを確認したのか声をかけてくる。

「それはこっちの台詞だセイバー。……武装までして、一体どこに行くつもりだ？」

「……貴方には関係のない話です」

「いや、関係あるね。士郎とは同盟関係なんだ。その士郎のサーヴ

アントが勝手なことをしようとしてるのを止める権利が俺にはある」

「なら、貴方たちを倒して先に行くまでです！」

「亮さんには指一本触れさせません！」

突進してくるセイバーを明命が迎え撃つ。

「はあっ！」

「やあっ！」

カキイイン！

セイバーの視えない剣、明命の魂切がぶつかり合う。

「……ツ、武器が見えないのはやりにくいです……！」

「……たああっ！」

「くっ!?!」

カキヤン！

明命はセイバーの剣に苦戦していた。

「これでどうだ！」

カキイイン！

「ぐう！」

セイバーが明命を押し返した。

「明命！」

「平気です！……今度はこちらの番です！」

明命がセイバーに詰め寄る。

「えいつ！」

「たああ！」

カキヤアン！

カキン！

打ち合いが続く。

「……くっ、これ以上は……これで決める！」

「……え？」

ブオンツ！

……明命には何が起こったかは分からなかっただろう。セイバーはあまり支障がでない程度に風王結界を解放して、その風で明命をインピシブルエア

吹き飛ばした。

「明命！」

俺は明命に向けて走り出す。このままでは明命は壁に叩きつけられてしまう。

「……ッ！」

ガシッ！

ドガアッ！

……明命を受け止めたが、勢いを殺しきれず、壁に叩きつけられた。

「がは……！」

「え……亮さん！？しつかりしてください！亮さん！？」

明命が必死に呼びかけるが、俺は返事すら出来ない。

「……終わりです。では、私は行きますので」

セイバーの気配が立ち去ったのが分かった。

「亮さん！……亮さぁん！」

明命の声に答えられないのが腹立たしい。．．．それでも俺は声を絞り出した。

「みん．．．めい．．．俺はいいから．．．セイバーを追え．．．」

「亮さん!? そんな、亮さんを置いてくなんて．．．」

「いいから．．．頼む」

必死に明命に頼み込む。

「．．．分かりました．．．直ぐに戻ってきますから!」

明命も走り去っていった。．．．俺は．．．意識を．．．手放した．．．

「．．．い、．．．かりしろ!」

声が聞こえる．．．俺は目を開けると、そこには土郎が居た。

「亮! 大丈夫か!？」

「あ、ああ・・・、っ！？そうだ士郎、セイバーが！」

「分かってる！いまから向かうところだ」

「明命が先に向かっているから・・・なんとかなると思う」

「ああ。わかった」

そして士郎も自転車で走り出す。・・・俺は再度意識を手放した。

明命

少し遅れながらも私はセイバーさんを追いかけていた。

「・・・ッ！」

セイバーさんは早い。気を抜くと簡単に置いていかれる。・・・セイバーさんは私には気づいていないみたいだった。

「・・・え！？」

突如セイバーさんの気配が消える。しまった！見失った！

「・・・くっ」

亮さんが言っていました。もしキャスターと出会ったら不用意に近づくな。セイバーさんはそれを知らない。だからこそ追い付く必要があるのだが・・・

「・・・私だけじゃあ道がわからない・・・」

「あ・・・明命！」

後ろから声が聞こえたので振り向くと、衛宮様がじてんしゃと呼ばれるものに乗って近づいてきました。

「衛宮様！」

「明命、セイバーは？」

「・・・申し訳ありません・・・見失ってしまいました・・・」

「・・・大丈夫。行き先は分かってるから、明命！ついてきてくれ
！」

「御意！」

私は衛宮様についていく・・・

そして柳洞寺と呼ばれる場所についた瞬間、突風が吹き荒れた。

「うわ!?!」

「・・・くっ!?!」

目を開けるのも辛いほどの突風、それを受けながらも私と衛宮様は石段を上っていく。

「・・・っ!?!」

その時、衛宮様のすぐ近くを短剣が通りすぎた。

「誰だ!?!」

衛宮様が声を上げる。

「衛宮様!下がってください・・・」
刀を抜こうとした右腕に痛み。見ると右腕に短剣が刺さっていた。

「ぐ・・・あああっ!」

痛みを耐えながら短剣を抜くが、右腕がまるで動かなくなってしまった。

「明命!？」

「だ……大丈夫……です」

その時、風がいきなり止んだ。……その時、セイバーさんがふらりと倒れる。それを衛宮様が受け止めた。

「……亮……さん……」

おかしい。ただの短剣のはずだが、血が止まらない。出血量が多すぎるせいで目の前が霞む。

「……あ……」

少し気が緩み、私は地に伏した……

亮

俺は居間で休まされていた。あのあと遠坂によって家に運び込まれ、軽く衝撃を受けた所を見てもらった。

「・・・土郎、帰ってきたのか」

土郎が帰ってきてきてホッとした瞬間、土郎におぶられてる腕が血まみれの明命を見た。

「明命！？おい、明命！」

いったいどうして・・・！！

「・・・土郎、ごめん・・・明命を部屋につれていく・・・」

「ああ、わかった」

俺は明命を土郎から預かり、部屋に行く。

「・・・！？亮、明命はどうしたんだ？」

部屋に入るなり咲と恋が迎えてくれた。

「咲、とりあえず明命に回復魔法を・・・」

「あ、ああ・・・魔力最大集中・・・ケアルガ」

明命の腕の傷が消えていく・・・と同時に明命が目覚めました。

「明命！・・・目を冷ましたのか・・・」

「・・・あれ？・・・亮、さん・・・？」

「大丈夫か明命？」

「はい・・・すみません、心配をおかけしました・・・」

明命が起き上がろうとした瞬間、明命が違和感を感じた。

「・・・明命？」

「・・・右腕が・・・動きません・・・」

明命が少し悲しそうな声で言う。

「な・・・咲、明命は・・・」

「・・・多分神経が何かを傷つけたんだろうな・・・多分サーヴァントだからしばらくすれば治ると思うけどな・・・」

そっぴいながら咲は明命にリジエネをかけてくれた。

「明命？一体誰にやられたんだ？」

「それが・・・いきなり短剣が飛んできて・・・」

短剣？・・・それが該当する人間は少ししかない。・・・俺は何も言わずに屋根上に向かった・・・・・・・・

「・・・アーチャー、いるんだろ」

俺がそう言うとアーチャーが霊体化を解いて目の前に現れた。

「単刀直入に言うぞ。明命を狙撃したのはお前か？」

「そうだ」

少しの間もなく答えるアーチャーに殺意が沸く。

「・・・なぜ、明命を攻撃した・・・」

「なに、衛宮士郎を抹殺するのに邪魔だったからな。ついでだ」

「何がついでだ！貴様・・・」

アーチャーに詰め寄ろうとするが、自分をなんとか抑える。

「・・・次に俺の仲間に被害が及んだら・・・アーチャー、貴様を許しはしない。覚えとけ」

俺はそれだけ言って部屋に戻っていった・・・

「・・・ただいま」

「・・・当たりか？」

咲が聞いてきた。

「・・・ああ。犯人はアーチャーだ。・・・明命は？」

「あれ？どこ行ったんだろ？」

「・・・明命は、道場に行った」

恋が言った。

「道場に？・・・どうしたんだろう・・・」

「さあな？気になるのならマスター自身が確認すれば？」

「そうする。お前はセイバーに謝っとけよ」

「・・・へいへい」

俺は道場に、咲は居間に向かった。

今、道場の前に来ているが・・・

「やあ！・・・えい！」

ビュン、と中から音が聞こえる。中に入ると、左手で竹刀を持って、右腕はだらり、と下げたまま素振りをしている明命がいた。

「・・・明命」

「・・・！？・・・亮さん」

「なにやってんだ？こんな遅い時間に」

「じ、これは・・・」

明命が言い淀む。

「大方動く左腕で戦えるか確かめてたんだろ？」

「・・・はい。亮さんの足手まといにはなりたくありませんから」

「そんな、足手まといなんて・・・」

「いいえ！足手まといなんです！セイバーさんにやられて亮さんに怪我を負わせた！・・・今は片腕が動かない・・・これが足手まといじゃなければなんなのです！」

「明命・・・」

「宝具を使ってやっとランサー殿を退けられる程度なのに！それなのに片腕が使えないなんて・・・使えないなんて・・・！」

明命が俺は一度も見たことのない涙をあふれさせながら言う。

「・・・いいから、落ち着けよ」

「こ、こんなのじゃ、ぐすつ・・・亮さんのサーヴァントである資格がありません・・・！」

「いいから!!」

「・・・!!」

明命の頭に手をのせる。

「いいから・・・俺は明命がいてくれるだけでも嬉しいんだ・・・それに俺は足手まといだからって明命をサーヴァントとして認めない、なんて言わないから」

ゆっくりと頭を撫でながら明命を慰める。

「うう・・・ヒック・・・亮さまあ・・・」

昔の呼び方に戻っていても今は気にしない。

「前は俺が泣かせてもらったんだ・・・だから今は明命が好きだから泣いていいよ」

「う、うわああん！」

明命の気が済むまで俺は明命の頭を撫で続けた・・・

咲

「・・・」

居間に入ろうとしても足が進まない・・・謝ることに戸惑いはないが、なんて謝ればいいのかわからない。

「・・・うー」

悩む、悩む・・・その時、

「なにやっつてるんだ？」

鈍感主人公が中から出てきやがりました。

「え、あ・・・セイバー、いる？」

「ああ。中に入れよ」

士郎に招かれ、中に入る。

「・・・」

そしてセイバーの方を向き、一言。

「ごめん！」

頭を九十度下げて謝る。

「セイバーを、生前のお前を侮辱してすまなかった！あと、理不尽にキレて顔を殴ってごめん！」

思いつく謝罪の言葉をひたすら口にする。するとセイバーが、

「いえ、大丈夫です。気にしていませんから顔を上げてください咲」

「・・・え？」

「もう気にしていません。確かに周りの意見に耳を傾けなかった私が悪いですから・・・それに私こそ軽率な発言をしてしまい申

し訳ありませんでした。・・・ユエとトウカというのは誰だか知りませんが、きつと咲が尊敬している人物なのでしょう、それを私は侮辱してしまった」

「い、いや、その侮辱だって俺が先に言ったから・・・」

「いえ、私が聞き流せばよかったのを無理に追求した結果です。それにあのような言葉で怒りを覚え、他者を愚弄するなど、騎士としてはあるまじき行為です」

「騎士とはいえ誰だってバカにされたら怒るだろ？普通」

「ええ。それを分かっていたながら私は侮辱したのです。だから・・・」

「ああもう！いい加減にしなさいー！！！！！！」

凜の叫びが居間に、いや、ここら一带に響いた。

「・・・遠坂、今何時だと思ってるんだ」

「り、凜！いきなりなんだよ！？」

「凜、仮にも女性が声を荒げるのははしたないですよ」

「うるさいのよアンタたちは！いいじゃないおあいこで！ほら、二人とも謝る！」

「・・・ごめんなさい」

「・・・申し訳ありませんでした」

「はい、これで終り！ほら、咲くんは早く恋の所に行ってあげなさい！さっきからちらちらとアホ毛が視界にはいつてんのよ！」

「お、おう・・・」

俺はとりあえず恋の所に向かう。

そして部屋に戻った。

「恋？お前はもう怒ってないのか？」

「・・・もういい」

「なんで？」

「・・・セイバーも、大変だったから」

「・・・そっか」

何が大変だったかは知らないが、恋が言うなら別にいい。

「・・・なあ恋」

「・・・何？」

「帰りたいと・・・思うか？」

ふと気になったことを聞いてみた。

「・・・帰りたくないと思ったら、嘘になる」

「・・・うん」

「でも、咲と一緒にいるから大丈夫・・・」

「・・・」

「恋は・・・ねねや月や詠や霞・・・みんなと一緒にいればいいと思う・・・」

おい恋。一人忘れてるぞ。

「・・・咲が言ってくれたから・・・月も詠もねねも霞も咲も恋も・・・皆が家族って言ってくれた」

だから一人忘れてるって。

「・・・咲は家族の中で一番大切」

「ねねは？」

「……」

あ、困った顔をしている。

「……ねねも咲も一番」

「……ぷっ」

あまりにも可笑しくてつい笑ってしまった。……それでも恋が俺を大切と言ってくれたのは嬉しかった。

「……はは、なあ恋、最後まで生き残ろうな」

「……(コクッ)……咲は、皆は恋が守る」

「ああ。期待してるぜ」

俺たちは亮たちを待たずに眠りについた……

月下流麗（後書き）

華雄

「呂布うー！ー！私を忘れるなあー！ー！ー！」

咲&亮

「あはは・・・」

恋

「・・・だれ？」

華雄

「おい！私を忘れたのか！？猛将にして良将と呼ばれたこの私を忘れたのか！？」

恋

「・・・忘れた」

華雄

「・・・うわあああ！！貴様なんぞゾンビだらけのショッピングモールに72時間閉じ込められればいいんだあー！ー！ー！」

慎二

「おい！そいつは僕の台詞だぞ！」

華雄

「うるさい！黙れワカメ！」

慎二

「な、人が気にしていることを言うなあー！ー！」

咲

「・・・あの二人は置いといて」

亮

「久々に明命と恋の拠点フェイズみたいだったな」

咲

「確かにな・・・」

実は最初は小次郎アサシンの所だけを更新する予定でした。

亮

「予定？」

はい。予想外に小次郎アサシンだけだとページ数がいかず、急遽後
の話を入れました。

咲

「ふーん・・・」

亮

「ま、今回はここまででだな」

それでは次回の真似と開閉と世界旅行。

咲

「次回もまた見てください!!」

恋

「・・・また会う・・・」

華雄

「貴様なんぞワカメで充分だ!馬鹿めが」

慎二

「なんだと!?バカって言う方がバカなんだバカアーーー!!」

華雄

「何い!?貴様、私を侮辱するか!」

咲

「もう帰れお前ら!!!!!!」

鍛練開始（前書き）

はい・・・今日から家庭教師が自分につきました・・・まあ、それは置いて・・・ではどうぞ。

鍛練開始

「……………うん……………」

……………眠い……………どうやら道場で寝てしまったようだ。

「さて……………って、ええ!?!」

入り口から声がある。俺は眠たい目を開けてそっちを見る。

「……………しろ……………おはよう……………」

「おはようじゃないだろ!?!道理でどこを探してもいないわけだな……………それにお前……………」

「……………なに?」

少しずつ目が覚めてきた。

「……………自分で確認しろ」

「……………?」

不思議に思いながら体を起こそうとしたら、腕に軽い重み。

「……………は?」

それを確認する……………その重みの正体は、俺に抱きつきながら寝ている明命だった。

「はあああつ!?!」

俺ビツクリ。そういえば昨日、泣きつかれたのか明命は俺の服をつかんだまま寝ちゃったんだった・・・それで俺もまあいいかって感じで寝ちゃったんだよな・・・

「・・・士郎」

「な、なんだ？」

「・・・誤解だ」

「・・・わかってるさ」

「・・・ふにゃあ？」

明命が猫みたいな声をあげた。

「起きた？明命」

「にゃ・・・亮さん・・・って亮さん!?!」

ズサササ!つと顔を真っ赤にしながら素早く俺から離れる。

「あ、あの、これは・・・」

「覚えてないのか?昨日、散々泣いたあと、そのまま寝ちゃったんだぞ?お前」

「そ、そうだったのですか・・・」

「・・・ところでさ・・・亮、お前、遅刻だぞ？」

「・・・休む」

即答する。士郎がここに来た時点でなにをしに来たかは分かっている。

「・・・まったく」

士郎がやれやれと言った感じで掃除を始めた。・・・そして程なくしてセイバーがやって来て、士郎と試合を始めた・・・が、

スパーン！

開始早々士郎は地に伏した。

「・・・」

「・・・」

俺たち啞然。セイバーのやつ、手加減するつもりがないな。

「・・・亮、ちょうどいいですから、貴方も戦いましょう」

なんてセイバーに言われてお先真っ暗。

「・・・い、いや・・・俺は・・・」

「どのみちシロウがこれでは目が覚めるのに時間がかかります。．．
・時間は有限です。この間の時間を無駄にしないように私と戦いま
しょう」

もう逃げられません。俺は渋々竹刀を手にする。

「．．．では、行きますよ！」

ビュン、と見えない速度で振るわれる竹刀を、俺は勘で受ける。

バシィ！

「．．．ほう」

セイバーが声を洩らす。．．．やばい、指が痺れた。指と言うよりは腕にまで痺れが．．．

「隙ありっ！」

スパーン！．．．．．俺も意識を落とされた．．．．．

あれから俺と士郎は交互に失神させられた。二人ともダウンしたら、明命がセイバーと左手で手合わせをしたり。・・・そんな感じで時間が過ぎていった。・・・

「・・・すまんセイバー、ギブアップ」

「・・・そうですね、そろそろいい時間です。・・・しかし、シロウはともかく亮は誰か師がいましたね？」

流石セイバーだな。正解だ。

「ああ、俺には大切な、師であり仲間がいた。・・・そいつが貸してくれた剣が・・・これだ」

そう言っつて俺は咲から返してもらった鈴音をセイバーに見せる。

「・・・そうですね、それが貴方の師の・・・汚れ一つない立派な剣ですね」

「当然だ。粗末にしたら、俺の首が飛ぶ」

隣で士郎が気楽に笑うが・・・ごめん、結構マジ話。

「・・・ちよつと水を飲んでくる」

俺は士郎を見捨てて逃げた。

「・・・土郎は？」

「シロウなら買い物に出掛けましたが・・・」

「・・・あのバカ・・・明命」

「はい」

明命を霊体化させて家を出ようとする。

「亮？」

「土郎を迎えに行ってくる」

「・・・分かりました」

そして商店街の近くの公園に差し掛かった所で、何かがぶつかってきた。

「きゃ!?!」

「危ない!?!」

俺は咄嗟に手を伸ばして目の前の倒れそうな人を支える・・・そして顔を見て、硬直した。

「イ、イ、イリヤスフィール!?!」

「・・・あ、アサシンのマスターだ」

バーサーカーのマスター、イリヤスフィールだった。

「・・・」

「・・・」

イリヤスフィールは、参ったといった感じでこちらを見ている。当たり前だ、こっちはサーヴァントがいてイリヤスフィールにはサーヴァントが今はいない。倒すなら絶好のチャンス・・・だが、

「・・・ふう、お嬢ちゃん。大丈夫かい?」

普段使わないような言葉でイリヤスフィールに話す。

「え？あ、うん・・・」

「そっか、なら気をつけて帰りな？」

「え・・・わたしを殺さないの？」

「なにを昼間から物騒なことを・・・いいから行きな？俺は誰も見なかったし、お前も土郎としか会わなかった」

「・・・！」

「ほら、早く」

「・・・ねえ、お兄ちゃんの名前は？」

「俺か？俺は大澤亮つつうんだ」

「オオサワリヨウツツ？」

「どこのカンキチだそれ・・・亮。名前は亮だよイリヤスフィール」

「リヨウ・・・よし、覚えた。わたしはイリヤでいいよ？」

「そっか？・・・それじゃ、またなイリヤ」

「うん。またね」

俺はイリヤと別れて、士郎を見つけて家に帰った……

そしてそのあとセイバーと打ち込みをして、気がついたら夕方だった。そして夕飯も終わって（士郎の顔が赤かったが）風呂に入ろうとする。

ガチャ。

ドアを開けて、「はうあ！？亮さん！？……はい？

「……な……」

目の前には、タオルを一枚だけ巻いた明命が立っていた。

「き、きゃあああ！？」

明命が叫び声をあげる。

「な、なんだ？いまのこ」来ないでください！」「ぐはっ！？」

様子を見に来た咲に石鹼が直撃した・・・ドンマイ咲。

「は、早く出ていってくださーい!？」

「うわ、すまん明命!」

俺は慌てて咲を引きずって居間まで撤退した・・・

「・・・酷い目にあつた・・・」

咲が直撃した鼻をさすりながら言った。ちなみに俺は、

「やっちまつたやっちまつたやっちまつたやっちまつたやっちまつた
たやっちまつたやっちまつたやっちまつた」

ひたすら自分を責めていた。

「・・・亮?」

「なんてことを・・・こんなことが蓮華や思春に知れたら・・・殺
される・・・」

「・・・確かにな・・・」

その時、明命が風呂からあがったのか、パジャマを来て居間に来た。

「あ、亮さん……」

明命と目が会わせられない。明命を見てるとさっきの、って消える消える消えるおおおおっ！思い出すな俺！

「……すまん明命」

「い、いや、大丈夫ですから気にしないでください……」

「でも、流石にあれは……」

いくら俺を好きと言ってくれたとしてもあれはマズイと思う。

「大丈夫ですから……亮さんなら別に……」

「え？何か言った？」

「い、いえ！なんでもありません！」

「……いいお茶だなあ」

咲が横で茶を飲んでた。

それで士郎が遠坂の部屋から帰ってきて、俺たちに一言。

「遠坂が部屋に來いってさ」

なんだろうと思いつながら俺たちは遠坂の部屋に向かった……………

「なにか用か？遠坂」

「あ、来たわね。とても大切なことよ」

「大切なことってなんだ、凜？」

咲が聞いた。

「それはね……貴方たち、魔術が使えないでしょ？」

「うぐ……」

「ぎく……」

咲はともかく、俺は魔術の使い方はよくは知らない。

「でも、スイッチやら魔術回路とかはあるみたいだから・・・うん。最初は強化から始めましょうか」

遠坂が提案する。願ってもないことだ。強化が使えるようになれば、部屋に置いてある鈴音も使えると言っものだ。

「やり方は分かる？」

「ああ、大丈夫だ」

俺は返事をする。

「・・・ホントに平気なのか？」

咲が疑心の目で見つめてくる。

「・・・大丈夫だって、一度アーチャーの物真似をしたことあるから」

「・・・そうなのか」

「・・・いかしら？それじゃあ手頃な木の枝を拾ってきたから、これを強化してちょうだい」

俺たちは木の枝を受け取って、魔力を通す。

「（・・・対象にあるスキ間の部分に魔力を通す・・・）」

見えないスイッチを入れて、魔力を木の枝に込めて強化する。

「・・・成功？」

俺と咲は二人揃って枝をぶつける。

カキン！

・・・木の枝にあるまじき音になった。

「あら、飲み込みが良いわね。・・・じゃあ次回は別のことを教えるから、今日はここまでね」

俺たちは遠坂にお礼を言っつて部屋に戻った。

「・・・帰ってきた・・・さみしかった」

恋が少し涙目で咲にすがりついた。

「あ・・・すまない・・・」

ちなみに明命はすでに寝ていた。・・・恋はやはり傷が痛むのか、立ち上がったたりするたびに顔を苦痛に歪めたり、明命はやはり動かないみたいで、一日中右腕をだらりと下げていた。

「・・・寝るか」

「・・・だな」

「・・・咲、一緒に寝てくれる・・・？」

恋に言われて断れない咲は、いつも以上に恋に密着して、眠れなくなりながらも、頑張つて寝ようと努力していた・・・俺も、眠気が襲ってきたので、眠りについた・・・

鍛練開始（後書き）

亮

「……………（ビクビク）」

……………彼は一体？

咲

「明命を覗いたことによる、二人の鬼の来襲に怯えてる」

ここまで来ませんよ（笑）

チリーン…………チリーン…………

亮

「ヒッ！？す、鈴の音が聞こえる！？」

咲

「……………」

……………

亮

「……………え？」

ズシャツ……………

咲 「・・・死んだな、あれ」

死にましたね。

ザシュツ！バキィツ！ゴシヤアツ！

咲

「あ、悪魔たん・・・」

明命

「・・・（ガクガク）」

恋

「・・・また、出番が少なくなってきた・・・」

大丈夫ですから、あちらの陰からキックを繰り出そうとしている人を止めてください。

咲

「思い切り蹴っていいぞー」

やめてください!?

明命

「こ、このままでは終わらないので、私が終わらせませす！次回の真似と開閉と世界旅行！」

恋

「・・・次回も見る」

咲

「それではまた次回会いましょう!」

対ライダー（前書き）

一話投稿です。ではさようば。

対ライダー

朝が来て、朝食を終わらせる。・・・余談だが、桜は衛宮邸には来ていない。なぜなら遠坂が来るなど言ったから。桜は渋々とそれに従った（条件付きで）。

「士郎、今日は学校に行くからな？」

俺は士郎に声をかける。

「おう。そっちは任せませ」

すると咲が頭をかきながら、

「つつても俺たちのサーヴァントはセイバーを除いて負傷してるけどな」

「大丈夫よ。いくらなんでもサーヴァントが三人もいればやられることは無いわ」

すると外から、

「・・・ちよつとー！皆は学校に行かないのー!？」

藤村先生が声をあげる・・・忘れてた。

学校も昼休みに入っけていきなり。

「おい、大澤亮はいるか」

・・・顔を腫らした間桐慎二が立っていた。

「に、兄さん・・・」

近くにいた桜が声をあげる。

「・・・何かご用ですか？間桐先輩」

俺は普段使わない敬語を使う。

「話があるんだよ。ほら、さっさと来いよ」

なんだこのワカメ。人にものを頼む態度じゃないだろ。・・・だが仕方なく俺はワカメに連れられて屋上にやってきた。

「・・・話ってなんですか間桐先輩？」

「いや、ただ単に僕と協力しないかどうかを聞きたいんだ」

「・・・はあ？」

一瞬だが、俺の顔は（；、）？になっていただろう。

「ふふ、知っているんだよ、君もマスターだって。君のサーヴァントの力は知らないけど、普通に行動してるあたり、中々いいのを引き当てたんだろ？君、どうやら衛宮や遠坂と仲がいいみたいだから、簡単に二人を倒せるだろ？それに残ったサーヴァントも二人なら倒せるし・・・」

「お断りです」

「な、に・・・？」

俺はぐだぐだ喋っている間桐慎二の案を拒否する。

「いや、驚きですよ。衛宮先輩に断られ、遠坂先輩にはナツクルを喰らって、それに懲りずに今度は俺ですか・・・中々しぶといですね」

「おまえ・・・！いいのかよ、そんな口を叩いて・・・おまえみたいな肩に協力してやるってこの僕が言っているんだぞ？」

「（・・・亮さん）」

「（落ち着け明命、頼むから・・・）」

霊体化してる筈なのに、殺気をかなり感じる程、明命がキレかけていた。

「・・・そんなことはどうでもいいんですよ。俺はアンタと組むつもりは無い。・・・それではサヨナラ」

俺はそのまま教室に戻る・・・前に屋上の扉に接着剤を塗っておいた。

そして放課後。咲が少し遅れて学校から出てきた。

「咲？どこ行ってたんだ？」

「ワカメに呼び出された」

「……チツ、接着剤だけじゃ甘かったか……」

「……それで？」

「手を組まないかだとさ。そんで条件つけた」

「条件？」

「ああ、弓で勝負して、ワカメが勝ったら俺は協力するって条件」

「……結果は？」

「愛紗に紫苑に桔梗に祭さんの教えを受けて、外すと思うか？」

「聞くだけ野暮だった」

そのまま家に帰り、遠坂も帰ってきて、夕飯を食べて、藤村先生が帰って今に至る……ちなみに間桐慎二の顔が腫れていた理由は、遠坂が怒り、ナックルパートでボコボコにしたらしい。そして夜になり……遠坂がフラフラな士郎を連れてきて、

「次は貴方たちよ」

と言って部屋に戻っていった。……俺たちは遠坂の部屋に向かった。

「来たわね。今日は強化の上の変化を教えるわ」

「変化？」

変化は聞いたことがあるがよくは知らない。

「……ま、要するに形状を変えたり、本来なら無理なことを追加するのが変化ね」

「なるほど……」

咲がうなずく。

「それじゃあ、はい」

再び渡される木の枝。

「それを……そうね、弓の形にしてもらえるかしら？」

弓……とりあえず頭のスイッチを切り替えて、魔力を使う。

「……ふっ！」

パキン。

俺 失敗

咲 成功

「……よし」

「……くそう」

「……驚いた、咲くんは変化も使いこなせるのね……亮くんは多分想像力が足りないのよ」

ええ、よく分かりました。

「……まあ、今日はこれをつけて、それによって次を考えるわ」

その後、結局俺は一度も変化は成功しなかった……

そして次の日、学校に行き、六時間目に差し掛かった瞬間、異変が起きた。

「……がつ!?!」

一瞬で視界が赤く染まる。……次の瞬間には、俺と咲と桜を除く全員が床に倒れていった。

「……ライダーの結界か……!」

咲が声を出す。

「……うそ、兄さん……なんで」

桜が震えながら声を絞り出す。

「桜!」

「……!?!」

「桜、今は非常事態だ、皆を頼む。恋!」

「……」

「行くぞ!」

咲が教室から出ていく。

「明命」

「」

「あ、あの……私は……」

「大丈夫だって、間桐……いや、遠坂桜?」

「な、なんで……!?!」

「全部知ってるよ。後でマキリの爺さんが仕込んだ虫を取り出してやるから、今は皆を頼む」

俺はそのまま走り出す。

三階に辿り着いて見たものは、ライダーと戦う恋と咲がいた。

「ら、ライダー！」

それに反応したのか、ライダーは咲を蹴り飛ばし……外に落とすた。

「は、ははは！どうしたんだ？五十嵐のサーヴァント！助けないとマスターが死ぬぞ？」

間桐慎二が勝ち誇った顔で言った。

「……必要ない」

「ああ？なんだって？」

「……まったく、中々いい蹴りだな」

「な……！？」

そこにはキーブレードをボードにして空を飛ぶ咲がいた。

「……燃えやがれ！ファイア！」

咲が間桐慎二の本に向けて火を放つ。

「・・・シンジ！」

それをライダーが全て弾くが・・・

「・・・見つけた！」

そこにセイバーが到着する。これで三対一。そこに血だらけの士郎も到着する。

「いまだ！」

俺、咲、士郎が同時に間桐慎二に向けて走り出す。

「ひっ・・・！」

間桐慎二は黒い影を放つ・・・が、

カキン！

カキヤアン！

カキイイン！

咲がキープレードで、俺が強化した鈴音で、士郎が強化したモップでそれぞれを叩き斬った。

「ひい・・・」

「慎二……！」

「食らえ！」

「ねね必殺！ちんきゅー！きー！きー！つく！！！」

士郎と俺の拳、咲の飛び蹴りが炸裂して、間桐慎二は吹っ飛ぶ。・
・士郎がそのままの勢いで、間桐慎二の腕を折った。

「あー！つあ、いああああ・・・！！！」

士郎は悲鳴を無視して、間桐慎二の髪を掴む。

「悲鳴は後だ。いまずぐ結界を止めろ、慎二！」

「ふ・・・ふざけるな、誰がおまえなんか、の」

往生際が悪い間桐慎二の首を士郎が掴む。

「なら結界の前におまえの息の根を止めるだけだ。どっちでもいいぞ、俺は。早く決めろ」

「は、デタラメだ。おまえにそんなコトができるもんか。そ、それにまだ誰も殺していないぞ。ただみんなから少しだけ命を分けてもらっただけー！ー」

「・・・わかった。じゃあな、慎二」

士郎が腕に力を込めた。

「ま・・・待て！待ってくれ、わかった、僕の負けだ衛宮・・・！
結界はすぐに止める、止めるから・・・！」

「・・・」

「フーッーはあ、はあ、はあ・・・くそ、ばか力出しやがって・・・
おいライダー！ブラッドフォートを止める！マスターの命が危ない
んだぞ・・・！」

ぶつちやけた話、ここでライダーが慎二を助ける義理はあまりない。
・・・てかよく三人相手に持ってたなライダー。

「————」

何かを呟いて結界を解除する。さらに間桐慎二に詰め寄ろうとする
士郎を、

「士郎！危ない！」

咲が蹴り飛ばした。

ヒュンッ！

ライダーの一撃が、士郎のいた場所に入る。

「ら、ライダー・・・！？」

「下がりなさいマスター。この場から離脱します」

「シロウ、下がって・・・！ライダーは結界維持に使っていた魔力を全て解放するつもりです・・・！」

「・・・！？魔力を解放する・・・！？」

「亮さん！？」

「・・・咲！」

二人が声をかけてきたので、士郎と共に下がる。・・・その時、

ザシュツ！

ライダーが自らの首を切り裂いた。

「っっな・・・！？」「」

その場にいた全員が声を上げる。しかしライダーは倒れずに、飛び散る血液は魔法陣を描いていった。

「・・・マズイ！」

戻りきれない！このままじゃ俺たちはライダーの宝具に巻き込まれる・・・！！

「・・・咲、下がって」

恋が前に出る。

「おい、まさか！」

「・・・威力は抑える」

そう言つて恋は方天画戟を腰辺りに構える。そして、ライダーが“それ”を放つ瞬間、あることを口にした。

「————戦場を駆ける一騎当千の将————」
ホウテンガケキ

光に光が激突した……………

「…………くう！」

光が止んで、目に入ったものは…………無惨な破壊の跡のみだった……………

「…………あ…………」

咲が膝をついた。

「咲！？」

「…………大丈夫、予想外の魔力消費に体がついていなかったただけだ」

咲はすぐに立ち上がる。

「シロウ？シロウ！」

セイバーが気絶している土郎に声を必死にかける。

「・・・今は土郎が先か・・・」

ライダーたちには逃げられてしまったから、今やることは土郎を家に連れていくことだった・・・

対ライダー（後書き）

宝具紹介〜いえーい。

亮

「ノリノリだな・・・」

闇夜を駆ける疾風のコンセツ一撃

ランク：C+

種別：対人宝具

レンジ：1〜3

最大補足：1人

使用者：アサシン（周泰）

戦場を駆ける一騎当千の将ホウテンガケキ

ランク：B+（現在）

種別：対軍宝具

レンジ：1～99

最大補足：1000人

使用者：ランサー（呂布）

咲
「・・・現在？」

呂布は宝具を加減して撃ちましたからね。

亮
「・・・本気だったらもつといくのか・・・」

はい。

咲
「・・・明命は完全に対人宝具だな」

亮
「技を見る限りそうだろ」

咲
「まあな・・・ま、今回はこころ辺で・・・」

亮

「次回の真似と開閉と世界旅行」

咲

「次回もまた見てくださいね！」

それではまた次回会いましょう。

ライダー探索（前書き）

10万PV！そして1万ユニーク突破！こんな駄文を読んでくださる皆さん、ありがとうございます！……それでは本編をどうぞ！

ライダー探索

次の日になって、最初にやることは間桐慎二の搜索だった。学校は休校になり、完全に数日フリーになる。

「・・・それじゃあ、それぞれ別れて捜そうか」

士郎の提案にうなづく俺と咲。

「気を付けて下さい。明命と恋は本調子ではない」

セイバーも声をかけてくる。

「はい！大丈夫です！」

「・・・大丈夫」

「それじゃあ行くぞ明命」

「はい！」

「恋。行くぞ」

「……(コクッ)」

「セイバー」

「はい」

こうして俺たちは別々に間桐慎二の搜索を始めた………

「……疲れた」

いきなりばてました。

「亮さん……少しだけ休みますか？」

明命が声をかけてくる。ちなみに今日はサーヴァントの三人は実体化していた。

「いや、大丈夫。士郎たちも頑張ってるんだし、ここで俺が……
ってまて」

ふと目に入った茶屋でズズツとお茶を飲む咲たちを見つける。

「……なにやってんだ？」

「おー、亮か。ただ休んでるだけ」

「……美味しい」

恋が恐るべきスピードで団子を食べ歩いていく。

「……明命」

「……はい」

「休もうか？」

「……はい……」

俺たちもお茶を飲むことにした……

「…………ふう」

周りは既に真っ暗になっていた。

「流石にここまでかな？」

咲が言う。……とその時、

「……………!亮さん!」

「……………咲!」

明命と恋が同時にマスターの名を呼ぶ。

「……………サーヴァントか?恋」

「……………(コクッ)……………すぐその建物……………」

恋が指差した方を向くと、武装したセイバーがライダーと共にビルの壁を上り、屋上に向かっていった。士郎も入り口から上を目指す。

「……………恋!行くぞ!」

咲がキープレードをボードにして、屋上に向かう。恋も明命も続く……………

「うおい！？俺は置き去りかよ！？」

仕方なく俺も階段を使って屋上に向かった……………

「ぜはーっ…………ぜはーっ…………」

駄目。階段多すぎ。既にはてている俺は、ガクガクする足に力を入れて、二段ぐらい飛ばして階段を上る。

ズドオオオン！！

「…………！？」

いきなり地響きが来て、バランスを崩す。

カツンカツンカツンカツン！

誰かが急いで階段を降りる音がする。俺はその音の主を待ち構える。

「・・・ツ!?」

ゾクリ、と背中に悪寒が走る。振り返るが、そこには壁しかない・・・いや、あそこに壁は無かった。・・・あれは・・・

「あ、リヨウだ。久しぶりね」

・・・壁だと思っていたものはイリヤのサーヴァント、バーサーカーだった。

「・・・まずい」

今、手元に武器は無い。・・・なら、

「モーションキャプチャー!ロイド・アーヴィング!」

今回はテイルズオブシンフォニアの主人公、ロイドを選ぶ。

「魔神剣!」

物真似をして早々に技をぶつける・・・が、

カキン!

・・・あっさりと弾かれてしまう。

「クスツ。そんなのじゃあバーサーカーには傷一つつけられないよ？」

「・・・ちっ」

舌打ちをする。だがまだだ。俺は天井ギリギリまで跳ぶ。

「鳳凰天駆！」

炎を纏い。鳥となってバーサーカーに突撃する。

ズズウン！

少しだけバーサーカーの体が揺らいた。・・・だがダメージは期待できない。

「・・・逃げるが勝ちってね」

そのまま一気に階段を飛び降りる。

「な・・・！？逃がさないでバーサーカー！必ず仕留めなさい！」

「—————！！」

イリヤのサーヴァントが吼えて。階段を降る。

「……どうだ!？」

何とか外に出ることは成功した。……しかし、そこで気付いた。周りが静かすぎる、と。

「……もう鬼ごっこはおしまい?」

バーサーカーとイリヤが出てくる。

「……」

「驚いた?最近は何騒なことが多いから、この時間をうるつく人はいないんだよ?」

そう、人目がない。それだけのことでこいつは、バーサーカーはこんな場所ならどこまでも敵を追尾できる。

「……まだまだ!火炎裂空!」

再び炎を纏い。縦に回りながらバーサーカーに突撃する。

「……………ッ!」

カキヤアアアン!

しかしバーサーカーはそれをものともせず弾く。

「ぐっ……!なら、獅子戦吼!」

獅子の形をした闘気をバーサーカーに放つ。

カキン!

しかし、それすらも容易く弾く。

「……ッ!」

「もうおしまい?それじゃあ、やっちゃえ、バーサーカー」

「……………ッ!」

「……!」

ブオオオンツ!

凄まじい剣激が襲う。

「……はあ!」

それを上に飛んで避けた……と思った瞬間、右肩から血飛沫が上

がった。

「ぐう……!?!」

そのまま着地する。

「……くそ、完全にかわしてこれか」

赤い弓兵と同じことを口にする。

「……バーサーカー」

しかしイリヤは追撃せずにそのままバーサーカーを呼び戻し、帰ろうとする。

「……この間はリヨウはわたしを見逃してくれたから、今日はわたしが見逃してあげる」

そしてそのままイリヤが遠ざかる。……助かった。……しかし、見逃すならなぜ戦闘を行ったのだろう。……それだけが分からない。

「亮さん……!」

明命が駆けてくる。どうやら俺の危機を察して来てくれたらしい。……とりあえずは決着がついたみたいだった。……

咲

俺はキーブレードで屋上へ向かう。恋や明命がついてきてくれるが、既にセイバーとライダーは屋上へついてしまっている。

「・・・あ」

その時、屋上から一筋の光が飛び立つ。・・・それはライダーが乗る、天馬。幻想種を携えたライダーはあちこちからセイバーを襲う。

「・・・くっ！急ぐぞ、恋！明命！」

「・・・わかった」

「はい！」

スピードを上げて屋上につこうとした瞬間、何かが聞こえた。

「「 騎英の（ベルレ）ー」」

ライダーが天馬に何かを取り付ける。

「……………手綱……………（！！！！）」

ライダーが乗る天馬が一瞬で落雷と化した。……しかし、突如突風が吹き荒れる。

「……………セイバーの宝具……………！」

突風は眩い光に変わる。

「……………約束された勝利の剣……………！！！！」

黄金の光がライダーへと向かっていく。

「……………！！」

俺は何かを唱えた。だが、なにかは自分でも分からない。……そして光は止み。俺たちは屋上へついた。

「……………え？」

そこで見たものは、力なく倒れたセイバーとセイバーに駆け寄る士

郎の姿だった。

「士郎！」

「……咲か！……セイバーが！」

「……」

あんなに強力な宝具を放てば、膨大にあるセイバーの魔力も殆ど使いきってしまふ。恋の加減した宝具だって恋の魔力では足りず、俺の魔力まで奪うほどの威力……あの有名な剣の真名解放はとてつもない魔力を消費したに違いない。

「……士郎！とりあえずセイバーを家に連れて帰るぞ！」

「あ、ああ！」

その時、明命がビクンと体を硬直させる。

「……明命？」

「亮さんが……危ない！」

そのまま明命は屋上から飛び降りる。

「お、おい！明命！」

静止の声も聞かずに明命は飛び降りる。

「……士郎、とりあえず……」

「ああ。わかってる」

「……急ぐ」

俺たちはすぐに下へ向かっていった……

ライダー探索（後書き）

亮

「・・・今回は何もないのか？」

咲

「・・・みたいだな」

はい。特にやりたいネタもなし。話すこともあまりない。

亮

「つまりはネタギレだろ？」

・・・はい。

咲

「それじゃあ、応募してみれば？」

？

咲

「これを読んでくださる皆さんに、後書きまでやってほしい」とか
を応募するんだよ」

ああ。（ぼんっ）

亮

「あとは俺の物真似とかだな」

なるほど・・・では皆さん、感想や希望をお待ちしておりますので、
どしどし応募お願いします！

亮

「通販番組かっつての・・・」

咲

「とまあ、今回はここら辺で・・・」

亮

「次回の真似と開閉と世界旅行！」

咲

「また是非見てくださいね！」

それではまた次回会いましょう。

I a m t h e b o n e o f m y s w o r d (前書き)

はい。少し遅れました。ではどうぞ。

I a m t h e b o n e o f m y s w o r d }

・・・セイバーは魔力が殆ど空だ。帰ってきてセイバーを見た遠坂はそう口にした。・・・確かにセイバーの宝具はかなりの魔力を消費する。遠坂曰く戦いさえできないらしい。とりあえず明日、そのことを話し合うことにして、今は睡眠をとることにした・・・

そして朝になり、家の中が騒がしくなり、遠坂が部屋に入ってくる。

「アンタたち！いつまで寝てるの！？早く準備して、出掛けるわよ！」

「・・・どこに??」

「アインツベルンの城よ。セイバーが言うには士郎に危機が迫ってるって」

「・・・!」

目が覚める。咲たちを起こしてすぐに仕度をして、出掛ける。そして・・・

「……迷いそうだな……」

アインツベルンの森に入って早々これだ。

「亮……方向音痴か？」

「失敬な。咲は一人でここを抜けられると言うのか？」

「……悪い、無理」

緊張感の欠片もない話を咲としている。

「ところで明命、腕は？」

俺は明命に聞く。

「……すみません。動くことには動きますが、まだ力が入りませ
ん……」

しゅん、とうなだれる明命。

「気にすんな。ちゃんと責任を取ってアーチャーがなんとかしてく

れるわ」

俺は嫌味たっぷりな目でアーチャーを見る。

「ふっ、敵のサーヴァントに頼るとは……随分と甘い男だな」

……俺、こいつ嫌い。

「ほう？随分と偉そうな態度じゃねえか？」

「実質この中では偉い方ではないのか？」

「ぐ……」

戦える、という意味では確かに偉いが……納得いかん。

「……ふん」

結局、俺はアーチャーから目を逸らした。

「……アーチャー、どげん？」

遠坂がアーチャーに聞く。

「ふむ・・・特に敵はいないようだ。行けるぞ、凜」

「オーケー・・・とりあえず、わたしとアーチャーとセイバー。そして亮くんと明命と咲くんと恋。二手に別れるわ」

遠坂の案に全員頷く。そしてアインツベルンの城に入って、士郎探索を始めた・・・

そしてしばらくもしないうちに士郎が見つかり、脱出をはかる。

「しかし、士郎を助けに来るのに、まさか日付が変わるほど遅くなるとは思わなかった」

咲が呟く。

「まあ、仕方ないんじゃないか？アインツベルンの城って遠いし」

俺が返答する。そして出口に辿り着いたと思った瞬間、

「・・・なあんだ、もう帰っちゃうの？せっかく来たのに残念ね」

くすくすと忍び笑いをしながら・・・イリヤが現れた。

「・・・チッ」

舌打ちをする。「ご丁寧にバーサーカーもしっかりいる。

「こんばんは。あなたの方から来てくれて嬉しいわ、リン」

愉しげに言うイリヤ。

「どうしたの？黙っていちゃつまらないわ。せつかく時間をあげてるんだから、遺言ぐらい残した方がいいと思うな」

「・・・おあいにくさま、俺は既に一度死んでるんでね、遺言を残す意味がよくわからないんだよ」

俺が答える。この程度で隙ができるとは考えられないが、それでも答えてみる。

「ふふ、おかしいなことを言うのね。あなたは今、ここで生きてるじゃない」

しかし、隙など見せず、なおかつバーサーカーをロビーの中央に送る。・・・チエックメイト。・・・その時、遠坂が声を出す。

「・・・アーチャー、聞こえる？」

静かな声で呟く。

「少しでいいわ。一人でアイツの足止めをして」

自らのサーヴァントに“死ね”と言った。

「馬鹿な……！正気ですか凜、アーチャー一人ではバーサーカーには敵わない……！」

「わたしたちはその隙に逃げる。アーチャーには、わたしたちが逃げきるまで時間を稼いでもらうわ」

するとアーチャーが頷き、

「賢明だ。凜たちが先に逃げてくれれば私も逃げられる。単独行動は弓兵の得意分野だからな」

一歩前に進む。

「へえ、びっくり。そんな誰とも知らないサーヴァントでわたしのヘラクレスを止めるって言うんだ。なーんだ、あんがいかわいいトコあるのね、リン」

「……なら、俺も残るぜ」

「……！亮さん!？」

「こんだけ人数がいるんだから当然だろ？明命の力じゃバーサーカーには傷一つつけられない。恋とセイバーは本調子ではない。咲に

はアイツにダメージを与えるほどの力は少ない・・・なら、“コレ”を扱う俺なら、時間稼ぎには最適だ」

そう言っつてケータイを取り出す。

「亮さん！私も残ります！」

「ダメだ。明命のカじゃ、無駄死にするだけだ」

「いえ、なんと云おうとも、私は残ります」

「・・・仕方ないか」

俺は左手を明命に向ける。

「サーヴァントアサシンのマスターが命じる。マスターを置いて、皆と共に森から脱出しろ」

左手の令呪が光り、一つ消える。

「そんな・・・亮さん・・・！」

近づこうとする明命の体が硬直して動けなくなる。

「・・・はあ、まったく、変なところで頑固だよな、お前」

「お前に言われたくはないよ、咲」

「・・・必ず戻ってこいよ？」

「……ああ」

「……アーチャー、わたし」

そして遠坂が何かを言いかける。

「ところで凜。一つ確認していいかな」

平然とアーチャーが口を挟む。

「……いいわ。なに」

「ああ。時間を稼ぐのはいいが……別に、アレを倒してしまっても構わんのだろう?」

アーチャーが、自信満々に、名言を口にする。

「アーチャー、アンタ……ええ、遠慮はいらないわ。がっんと痛い目にあわせてやって、アーチャー」

「そうか。ならば、期待に応えらとしよう」

アーチャーが更に前に出る。俺もソレに合わせて前に出る。

「衛宮士郎」

アーチャーが逃げようとする士郎に呼びかける。

「……いいか。お前は戦う者ではなく、生み出す者にすぎん」

「余分な事など考えるな。お前に出来る事は一つだけだろう。ならば、その一つを極めてみる」

アーチャーが短剣を手にする。

「……忘れるな。イメージするものは常に最強の自分だ。外敵など要らぬ。おまえにとって戦う相手とは、自分のイメージに他ならない」

「……そして、戦いは始まった……」

「アーチャー！前は任せた！」

「貴様に言われずともそうする！」

俺はアーチャーが時間を稼いでくれている間に、ケータイを操作する。

「モーションキャプチャー！ティアナ・ランスター！」

リリカルなのはのフォワードの一人、ティアナになる。

「アーチャー、下がれ！」

アーチャーが反応して横に跳ぶ。

「バレットシユート！」

魔法弾を飛ばす。

カキン！カキヤアン！カキイイン！

しかし、バーサーカーには届かず、全て弾かれる。

「この馬鹿者が！まったく効いていないではないか！」

「うっさい！なら次だ！」

カートリッジをロードする。

「これならどうだ！クロスファイア・・・シユート！」

まるで雨のような魔法弾をバーサーカーに浴びせる。

カキキキキキン！

今度も弾かれる。だが効果はある。

「次！うらあああ！ファントム・ブレ・・・！」

「————ツ！！！」

ブオオオン！

「な！？ぐわああ！？？」

「なに！？こつちにくるな！」

バーサーカーに吹き飛ばされて、アーチャーを捲き込んで壁に激突する。

「ぐ・・・」

「貴様というやつは・・・それに姿に対しての追求もしたいが・・・今はそれどころでは無いな」

「・・・とりあえずアーチャー、気配を消して上に移動して」

「それは無理だな。いくらなんでもここから動けば見つかる。今は瓦礫が壁になって相手からは見えてないみたいだが」

「充分だ。俺がなんとかするから上に移動しろ」

「・・・分かった。貴様のことを信じてやる」

俺は魔力を集中する。

「・・・バーサーカー！その瓦礫ごと叩き潰しなさい！」

イリヤが待ちきれなくなり、バーサーカーに指示を飛ばす・・・その時、瓦礫からアーチャーが出てくる。

「あら、かくれんぼはおしまいかしら？」

イリヤが笑いながら、尋ねる・・・が、アーチャーは口を開かない。

「……………」

バーサーカーがアーチャーに攻撃を仕掛ける。

ドゴオオオンツ！

それはアーチャーを容易く吹き飛ばした。

「・・・なあんだ、随分あっけなかったわね」

イリヤがつまらなそうに呟く。

「リヨウも隠れてないで出てきたら……………ツ!?」

イリヤが困惑の表情を浮かべる。当然だろう、潰したはずのアーチャーが一人・・・いや、何十人もいるのだから。

「な、なによこれ！・・・バーサーカー！全部叩き潰しなさい！」

「……………」

バーサーカーがアーチャーたちを倒していく。それでも数は減らない。なぜなら、

「ハッ・・・ハッ・・・ハッ・・・」

俺がフェイクシルエットを使って、アーチャーの分身を作っているから・・・それと気づいたことがある。なぜかなのは系列の物真似をすると、デバイスがまったく喋らない。・・・多分、俺の記憶不足だろうなあ・・・

「・・・まだか・・・アーチャー・・・！！！」

しかし、いつまでもこの技は続けていられない。と、その時、

「I am the bone of my sword

（体は剣でできている）」

アーチャーの、そんな声が聞こえる。

「・・・！バーサーカー！上よ！」

イリヤが気づき、バーサーカーを上に向かわせる・・・今だ！

「フェイクシルエット解除！カートリッジフルロード！」

フェイクシルエットを解除して、バーサーカーに狙いをつける。

「バーサーカー！後ろよ！」

イリヤが気づく・・・・・・が、遅い！

「全力全開！スターライト・・・ブレイカアアア！！！」

ティアナの未完成ながらの必殺技。

「……偽・螺旋剣？（カラドボルグ）……！！！」

アーチャーが矢を、剣を放つ。

ズガアアアッ！

アインツベルンの城が爆音と光に包まれる。……………目を開けるとバーサーカーがうずくまっていた。

「……うそ、バーサーカーが防御の構えをさせられるなんて……」

イリヤが信じられないといった感じで呟く。

「ハア・・・ハア・・・キャプチャー、キャンセル」

俺は元の姿に戻る。

「アーチャー、上に行くぞ！」

足に魔力を込めて空いた天井から上へ上る。

「・・・バーサーカー！逃がさないで！」

「……………」

そして上に上り、俺はアーチャーより更に上へ上がる。そしてバーサーカーがやって来て、アーチャーが大量の干将莫耶をバーサーカーに投げ、自身が持つ干将莫耶を後ろに回し、形状を変化させてまるで鳥のように舞い上がる。それに合わせて俺も飛び降りる。

「モーションキャプチャー！アイク！」

ファイアーエムブレムの主人公、アイクへ変わる。

「……鶴翼、欠落ヲ不ラズ（しんぎむけつにしてばんじゃく）」

アーチャーが呟く、そして、

「天、空！！」

俺が金色に輝くラグネルをバーサーカーに叩きつけ、

「鶴翼三連！」

アーチャーも干将莫耶を叩き込む。

ズシャアッ！

手応えがあつた。そして次の瞬間、

ドカアアアッ！！

爆発がおきてアーチャーと俺は吹き飛ばされる。

「ぐわっ！？」

「ぬっつ！？」

その衝撃で物真似が解けてしまい、元に戻った。・・・瞬間、目眩がした。・・・ティアナで力を使いすぎたらしい。多分、次の物真似が最後だ。

「……！アーチャー！」

俺は未だに動けないバーサーカーの横を走ってアーチャーに走り寄る。

「……なんだ？生憎だが私は左腕を負傷してね、貴様の要望には応えられんぞ？」

相変わらずの嫌味な野郎だ……

「んなことはどうでもいい。アーチャー、固有結界の用意は？」

「……なぜ貴様はそうも私のことを知っている」

「……知っているから。そうとしか言えない」

前にも同じことを言った気がするが気にしない。

「……ふう、固有結界ならあと少しで詠唱を完了する。それまで待ってる」

「了解……！？アーチャー！危ない！」

「何っ！？」

復活したバーサーカーが一撃を叩き込んでくる。

「うわあああ！？」

なんとか避けたが、床が崩れて再びホールに落とされる。

「……くそ！アーチャー、俺が時間を稼ぐから、お前は固有結果の用意を！」

「……了解した」

俺は一気にバーサーカーに突っ込む。

「モーションキャプチャー！」

これが最後だ！

「ガウエイン！」

俺はFate EXTRAのセイバー、そしてアーサー王に従った円卓の白騎士。ガウエインとなる。

「うおおおおお！」

「————！」

俺の剣とバーサーカーの斧剣がぶつかり合う。

ズガアアアンツ！！

「ぐう……」

やはりワンランク落ちているのが痛い。バーサーカーに押し戻されながらも果敢に攻める。

カキイイン！

ブオン！

ズガアツ！

カキヤアン！

グワンツ！

「・・・アーチャー！」

「あと少しだ！大人しく戦ってる！」

・・・チツ、仕方がないか・・・俺は後ろに飛んで剣を構える。

「バーサーカー！気を付けなさい！宝具よ！」

「—————転輪する勝利の剣—————エクスカリバー・ガラティーン！！！！！！！」

セイバーのエクスカリバーが星の光を集めるのなら、ガラティーンは日輪の熱線を相手に叩き込む！

「ウオオオオツ！！！」

俺は残っている魔力を全て注ぎ込む。・・・そして、待ち望んだものが間に合った。

「Ill Unlimited blade works（無限の剣で出来ていた）」

アーチャーが呟いた瞬間、世界が赤く変わる。俺は力を使い果たし、倒れながらアーチャーを見る、するとアーチャーは、

「行くぞ大英雄。命の貯蔵は充分か」

アーチャーはそう言ってバーサーカーに突っ込んでいった……

……しかし、結果は良いものではなかった。アーチャーはバーサーカーを六度殺すことに成功した。だが、それが限界だった。アーチャーはバーサーカーにやられ、消えた。イリヤは俺にゆっくりと近づいてくる。

「……リヨウ、あなたは簡単に殺さないわ。あなたの大切なものを壊してあげるから、ここで待ってなさい」

イリヤの言葉を最後に……俺の意識は闇に落ちていった……

明命

「あ、あの！亮さん！」

恋

「・・・咲」

亮

「なんだ？」

咲

「なにさ、恋？」

明命

「・・・あ、あの・・・これ・・・」

恋

「・・・(モジモジ)」

亮

「これって・・・」

咲

「チヨコ？」

明命

「は、はい。遠坂様が言うには、今日はばれんたいんでーと言う日だと、思い人にちよここと共に想いを伝える日だそうですね！」

恋
「……だから、凜に作り方教えてもらって、咲のために作った……」

亮

「明命……」

咲

「恋……」

明命

「受け取って……貰えますか？」

恋

「……ん（スツ）」

亮

「ああ、ありがたく頂くよ」

咲

「サンキューな、恋」

明命

「……えへへ」

恋

「……ふふっ」

あそこのバカップルたちは置いておきましょう。

ランサー

「なんだ？ひがみか？」

！？な、なぜここに……

ランサー

「うちのマスターに言われてな。どうせチョコなんぞ貰えないだろうから、お前が行って励ましてこい……ってな」

……くそっ……

ランサー

「あーらら……随分とご傷心じゃねえか、ああ？」

ええ……かなり……

ランサー

「……ま、元気出せよ。生きてる限りいいことあるぞ」

ありがとうございます……では、今回はこのままでです。

ランサー

「そんじゃ、次回の真似と開閉と世界旅行、っと」

次回もまた見てください……

ランサー

「……それじゃあな」

亮

「……うん、美味しいよ、明命」

明命

「ほ、ホントですか!?!」

咲

「へえ、恋ってお菓子作れたんだな……美味いぜ?」

恋

「……(テレテレ)」

ああもう!他所でやれええええええええええ!!!!!!!!

逃亡 (前書き)

はい。前書きで書くことが思い付きません・・・ではどうも。

逃亡

咲

「……凜！士郎たちが遅れてる！」

俺は凜に伝える。

「……まったく、ホントにダメなやつ」

凜が渋々と言った感じで止まる。

「……あ、ああ……」

「明命？」

明命の目からいきなり涙があふれる。

「亮さんが……亮さんが……」

明命がうつむきながら呟く。

「!?!……嘘だろ？だってマスターがいなきゃサーヴァントであるお前は消えるんだぞ？」

「ですが……亮さんを感じることが出来ないんです……」

「……！んなもん、気絶してるだけだ！あいつが簡単にくたばるかよ！」

「……明命」

「恋殿……？」

「……信じる」

「え……？」

「自分のマスターを……亮を信じる」

恋が、明命に言った。

「……はい」

「……ふん、別に消えてくれれば俺も手間が省けるがな」

「な……」

いきなり森に響く声。その声は忘れもしないあいつの声だ。

「……左慈！」

恋姫の世界にも出てきた俺たちと同じイレギュラー。

「……凜、士郎たちをつれて先に行け」

「ちょ、ちよつと……」

「いいから行け！早く！」

「……！……わかったわ。……必ず追いつきなさいよ」

「ああ、わかってる」

俺はキープレードを取り出す。

「気が早いな……だが、そんなに焦んなくても貴様は殺してやるよ！」

左慈が指を鳴らした。そして空間が開き、中から出てきたものは……

「……たく、いきなり何なんだよ」

「グルル……」

そこにいたのは男だが、髪を腰まで伸ばした……テイルズのユリ・ローウェル。そして獣のような黒い影を纏ったのは……ネギ

まのネギか？

「……恋！明命！」

「……（コクッ）」

「はいー！」

俺は左慈に。恋はネギに。明命はユーリに向かった。

明命

私はユーリさんといわれる方と戦っている……が、戦いにくい。確かに片腕が使えないのも原因だが、相手は振り切った刀を投げて逆の手に持ってまた攻撃……といった変わった変わった攻撃を仕掛けてきていた。

「そらそら！とろいぜ？」

「……くっ！」

カキヤアン！

武器がぶつかり合い、金属特有の音が響く。

「ハのー！」

「よつと、」

カアン！

私が繰り出す斬撃をは全て弾かれてしまう。

「・・・ッ！」

悔しい。多分この人には両腕が使えたとしても勝てるか分からない。サーヴァントじゃなかったら私は一瞬で殺されてしまっただろう。

「喰らいな、牙狼撃！」

「くう・・・！」

カキイイン！

何とかそれをいなしたと思った瞬間、

ドゴオッ！

「が……!」

あとから来た拳が私の腹を捉えた。

「……決まったな」

私はその場に倒れる。

「あ……が……」

「止めときな。結構マジで入ったかな……しばらくは動けないぜ」

ユーリさんが声を投げ掛けてくる。

「……ません」

声を振り絞って出す。

「ああ?」

「……諦めません!」

私は無理矢理立ち上がる。

「……は、随分とタフじゃねえか」

「……私は負けられないんです……マスターに……亮さんに再び会うまでは!」

「・・・気に入った！とっておきを喰らわせてやるぜ！」

するとユーリさんが力を溜め始める。

「飛ばして行きますかぁー!!」

その力を解放するかのようにユーリさんが体を仰け反らせる。

「邪魔だ！三散華！」

拳が三連発で襲ってくる。

ズガッ！

ドガッ！

バキィッ！

「ああああっ！」

「まだまだ！爪竜連牙斬！」

今度は斬撃と蹴りを合わせた技を使ってくる。

「きゃあああっ！」

防御もままならず、全てもとに喰らい、鮮血が舞う。

「オレに力を！」

イタイイタイイタイイタイイタイ。頭の中がそれだけを繰り返す。今までに味わったことのない激痛が自ら死を求め始める。．．．でも私は諦めるつもりはない。

「瞬け、明星の光！ウオオオオツ！天翔！光翼剣ツ！！」

ユーリさんが巨大な光の剣を放つ。だが、

「．．．今です！」

やっと見せた大きな隙、これを逃せば私が負ける。

「――闇夜を駆ける疾風の一撃――！！！！」^{コンセツ}

一気にユーリさんの後ろまで駆け抜ける。．．．数秒間お互いが硬直して、先に動いたのはユーリさんだった。

ズシャアッ！

「．．．チツ、オレの負けか．．．なかなかやるな嬢ちゃん、名前は何？」

ユーリさんが私に聞く。この人になら．．．

「．．．私は周泰。真名は明命です」

「真名あ？．．．ま、世界が違うなら当然か．．．オレは」

「存じております。ユーリさんでしょう？」

「……こりや驚きだ。なんで知ってるんだ？」

「色々あるのです……」

理由は亮さんだ。前に暇なときは色々な人物について説明してもらったことがある。といっても名前や外見とかだから技などは知らない。

「……時間か……じゃあな明命。縁があつたらまた会おうぜ」

「はい……ユーリさん」

そしてユーリさんが消える。すると唐突に眠気が襲う。

「……眠って……いいのでしょうか……」

だが抗う力は既に残っていなかった……

「（蓮華様……亞……莎……亮……さん……すみません……）」

頭の中に色んな人を思い浮かべて、私は眠りについた。

恋

「ガアアアツ!!」

「・・・ツ!!」

ドカアアンツ!

先程まで自分がいた位置に何かの光が炸裂する。

「・・・えい!!」

一気に近づいて黒い影に一撃を叩き込むが、容易く避けられる。

「グルル・・・」

本来なら敵には容赦しない自分だが、この少年には同情が生まれる。

「・・・かわいいそう・・・」

少年は自分の意思で戦っていない。野生の本能と言っか何と言っか・・・とりあえずなんとなく分かった。

「ガアッ！」

一気に敵から接近され、鋭く伸びた爪で斬りつけてくる。

カキヤアン！

「くう・・・」

それを受け止めて押し返す。

「・・・喰らえ」

ブオオオンツ！！

一瞬出来た隙を狙い、武器を叩きつける。

「グオオオオ！」

カキイイン！

無理矢理体制を直して少年は防ぐ。

「グアアアッ！」

そして少年は先程の光と違い、今度は白く光る雷を当ててくる。

「……くうっ!？」

ドカーン!

それをまともに喰らって吹き飛ばされる。

「……まだまだ」

吹っ飛んだ勢いを使ってそのまま立ち上がる。

「……弱い?」

そう、威力が弱い。仮にもサーヴァントだ。相手の魔力は感じるこ
とが出来る。だが今の一撃は少年の魔力と差がありすぎた。

「……弱いやつは死ね」

いくらかわいそうだと思っても戦う以上、手を抜かれたら武人とし
てはかなりの侮辱だ。方天画戟を構え直して少年に突っ込む。

「……僕は……」

「……ッ!？」

今、微かに理性が戻った。だがそれは直ぐにかき消され、まるで嵐

のような雷を放ってくる。

「……まずい」

自身の対魔力ではあれを防げない。なら、これしかない。

「……戦場を駆ける一騎当千の将——」
ホウテンガケキ

再び手加減をした宝具を雷にぶつける。

ドゴオオオンッ!!

「……!!」

それをなんとか相殺して、煙が消えるところを狙う。しかし、そこに少年はいなかった。

シュンッ!

いつの間にか背後に立っていた少年の肘打ちが決まる。

ズガアッ!

「が……!」

完全に意表を突かれた攻撃だった。……だが、仮にも自分は飛将軍呂布。簡単にやられはしない。

「ガアアアッ!!」

少年が莫大な魔力を使い、槍のような雷を構える。・・・しかし、少年の狙いは自分ではなく・・・

「・・・咲！」

必死に自身が愛するものの元へ向かった・・・

咲

目の前の左慈に対して全力で立ち向かう。

「・・・魔力、始動」

キーブレードの魔力を腕と足に移し、強化する。

「・・・加速」

更に自身の魔術回路の魔力を体に回し、更に強化する。

「左慈イイツ！」

キーブレードを振る。

「・・・なめんなよテムエー！」

ドカーン！

キープレードを拳で受け止める左慈。

「・・・くっ・・・」

「ふん、弱すぎるぞ貴様」

「その弱いやつに一度負けたのは誰だ！」

俺は後ろに飛んで距離をとる。そして、

「ラグナロク！」

キープレードに貯めた魔力を十数本の光弾にして発射する。

「そんなトロいものが当たるかよ！」

左慈はそのラグナロクの間を通り抜けて俺に向かってくる。

「・・・甘い！」

ラグナロクが左慈の後ろから迫る。ラグナロクには追尾機能がついているため、一定時間逃げるか、防ぐかしか逃げ道がない。

「ふざけるなっ！」

ドオオオン！

それを拳で弾く左慈。・・・化け物かこいつは、俺は更に次を使おうとした瞬間、集めた魔力が消えた。

「・・・ッ!？」

恋が宝具を使った。そして爆発音。・・・恋の宝具はかなりの魔力を使うため、恋自身の足りない分は俺の魔力を使わなくてはならない。

「はっ!隙だらけだぞ!」

ドンッ!

「がはっ・・・!」

左慈の拳によってぶっ飛ばされる。

「・・・くそ、こいつ、強くなってやがる・・・」

俺が呟いた瞬間、

「・・・咲!」

恋の、声が聞こえた。

ドスッ!

「……え？」

俺が見たものは、迫ってくる雷の槍を恋が身を挺して俺の壁となり、そして恋の腹部に槍が突き刺さる光景だった。

「れ……」

ぐらり、と力なく倒れる恋。

「……恋……ッ……」

俺は恋に駆け寄る。

「恋！しっかりしろ、恋！」

俺は恋を抱き抱え、揺らす。

「……ゴフツ……さ、咲……？」

血を吐きながら恋が俺を見上げる。

「なんで……なんで……」

すると恋は笑顔で、

「咲が……無事でよかった……」

「れ……ん……」

「ふん、たがが傀儡風情にそこまで感情的になる意味がわからんな」
頭の中が真っ白になる。

「なん・・・だと?」

「わからないのか?なら何度でも言ってみよう。その傀儡に存在価値はないって事だ」

その言葉に・・・何かがキレた。

「貴様・・・貴様アアアツ!!」

キーブレードが ブレードになる。

「・・・なに?」

そして頭に浮かぶ言葉を口にす。

「開け!怨念の集まりし墓場よ!集え!担い手を無くした鍵たちよ
!」

その瞬間、世界が変わった。

「なんだこれは!?!」

——周りの景色は無限に広がる鍵の墓場。・・・そう、これは魔術師たちの到達点でもある、固有結界。心情風景を表すこの世界。まさに今の俺にはピッタリな世界だろう。

「・・・・・・・・シネ」

そう呟き、大量のキープレードを左慈とネギに向ける。

「・・・・・・・・イケ」

そして・・・・・・・・全て放たれた。

ズドドドンッ！！

「ガアアアッ!?!」

「ぐおおおっ!?!」

そして身を引き裂かれる二人。魔力なら問題はない。自身の魔力とキープレードの魔力を使えば、いくらでも事足りる。

「くそ!・・・・・・・・またしても・・・・・・・・!!」

左慈が怨みがましく口にする。

「・・・・・・・・まだ生きているのか。さっさとシネ」

俺は全て左慈に意識を向ける。

「畜生……畜生——ッ！」

左慈と、ネギはそれで消え去った。それに合わせて固有結界も消える。

「ハア……ハア……ッ！恋！」

俺は思い出したかのように恋に駆け寄る。恋は息を荒げながら顔を上げた。

「……咲、先に行って」

「な、なにを言うんだ！お前と明命を連れて凜たちに追い付くんだよ！」

「……駄目、咲は一人で行く」

「でも……！」

「……」

恋が強い目で俺を見つめる。

「……わかったよ。……まったく、なんで俺の周りには頑固なやつが多いのかな……」

「……ふふ」

恋が静かに笑う。

「……必ず迎えに来るから」

「……（コクッ）」

そして俺は明命が戦っていたであろう場所へ向かう。

「明命！どこだ、みんな……ッ!？」

辺りを見渡し、目に入ったのは、身体中血まみれでまるで死んでい
るように目を閉じている明命だった。

「おい！明命、明命！」

明命の肩を掴み揺らす。

「……あ……咲……さん……」

虚ろな瞳で明命が俺を確認する。

「明命！大丈夫か!？」

「……すみません……しくじっちゃいました……」

「……あんまり喋らなくていい!」

「すみません……これじゃあ亮さんに合わせる顔がありません……」

「いいから大人しくしてろ」

「……最早俺の魔力は底を尽きかけている……今の魔力はケアルが使えるかどうか。だけど今、魔力を使いければ、体の傷に魔力をあてている恋が消滅してしまう。」

「……私を気にせず……先に行ってください……」

「……!」

先程恋に言われたことを再び言われた。

「だが……俺だってお前に何かがあれば亮に顔向けが出来ない……」

「……大丈夫です……私は……消えませんが……」

明命がそう言う。

「明命……」

「だから……早く行ってください……」

「……わかった。でも、お前も……必ず迎えに来るから」

俺は恋と明命。二人を見捨て、凜たちを追いかけた……
……
……

逃亡了（後書き）

咲

「よし、生き残った（ガッツポーズ）」

亮

「……（気絶）」

明命

「……（瀕死）」

恋

「……（瀕死）」

咲

「……あはは……」

亮

「……いいよなあ。戦闘可能でなおかつ新たに固有結界とは……」

「

咲

「い、いや、でめ使うには莫大な魔力が……」

亮

「それでもキーブレード墓場はやりすぎだろ。まさにギルガメッシュ
ユ虐めだな」

咲

「・・・アーチャーや士郎には剣だから投影されたら勝てないぞ？」

亮

「・・・構造がわからなければ大丈夫だろ」

咲

「しかも固有結界の方が本物だからね、キープレード」

亮

「あー・・・そういえば咲のキープレードって確か神が作った模造品なんだっけ？」

咲

「そうだな・・・意外に完成度高いけど・・・」

明命

「・・・殆ど私はやられてました・・・」

恋

「・・・恋もあんまり攻められなかった・・・」

咲

「つつかユーリすごいな。サーヴァントを圧倒するなんて」

ブラスティアのお陰じゃないですか？

亮

「・・・強すぎだろ」

咲

「まさかのネギ暴走か・・・」

亮

「・・・でもさ、まだ伏線回収出来てないよな？」

・・・あ、

咲

「あ・・・？」

恋

「・・・忘れてた」

・・・すみません・・・

亮

「どうすんだ、主人公最多殺しを記録したあの方を置いていたら・・・

」

咲

「・・・ネギ以上の暴走・・・だな」

その話はこの部分にきりがついたら・・・

亮

「・・・頼むぜ？」

明命

「・・・どちらにせよ私たちはしばらく戦闘不能ですよね・・・」

亮

「俺は単純なダメージと魔力切れだけど……………」

明命

「私は拳を数発と斬撃をかなり……………」

恋

「……………(お腹を擦る)」

咲

「み、みんな？顔が怖いぞ？」

全員

「……………気のせい(だ)(です)」

咲

「う……………う……………それでは次回の真似と開閉と世界旅行！」

次回もまた見てください。

咲

「それではまた次回会いましょう！……………ではらば！」

亮

「逃がすかあつ！」

咲

「ぎゃああああつ！?？」

明命

「・・・それではおもしろいな・・・」

VSバーサーカー (前書き)

VSバーサーカーです。ではどうぞ。

V S バーサーカー

咲

「ハッ、ハッ、ハッ、ハッ」

俺は全力で駆ける。アーチャーや亮、それに恋や明命も置いてきた。なら俺は必ず凜たちと合流しなくちゃいけない。

そしていくら走ったかはわからないくらい走った時、目の前に建物が見えた。

「……あつた！」

多分、あそこに凜たちがいる。俺は扉に近づき、ノックする。

「……誰!？」

中から声が聞こえる。

「・・・俺だ・・・咲だ・・・」

「咲くん！？・・・まってて、今開けるわ」

そして凜が扉を開いた。

「・・・咲くん？恋と明命は？」

「・・・」

「まさか・・・」

「・・・いや・・・まだ消えてない・・・」

俺は右手の令呪を凜に見せる。

「・・・それじゃあ、」

「二人は・・・動けないほどの傷を負ったから・・・置いてきた・・・」

俺はその場に倒れ込む。

「ちょ・・・！・・・くん・・・さ・・・」

凜の声が聞こえなくなり。俺は意識を手放した・・・

そして朝を迎え、気がついたら外に放り出されてた。

「……士郎」

「お、目が覚めたか」

「……何故に俺は外にいるんだ？」

「……遠坂が女の朝は大変だー、って言って俺と気絶してる咲を

部屋から追い出したんだ」

「……凜は傷を負った人間をなんだと思っているんだろうな……」

「……」

気まぜい沈黙。

「……あ、令呪……」

少し不安になりながらも俺は右手を確認する……よかった、まだ令呪は残ってる。

「士郎ー！終わったから入ってきてー！」

凜の声が聞こえたので、俺と士郎は中に入った。

「こちらですシロウ。凜から話があるそうです」

セイバーが普段と変わらない態度で士郎と接する。

「回復したんだな、セイバー」

「咲、あなたもよく無事でここまで辿り着きましたね」

「・・・色々と諦められない事情があるからね」

「・・・咲くんは目が覚めたみたいね。なら作戦会議を始めるけど、会議っていつでも口論しあう暇はないわ。バーサーカーを倒す方法も限られているし、とりあえずわたしの話を聞いてもらえる？」

それに頷く俺たち。

・・・作戦としては簡単なものだった。

一、セイバーと士郎、それに俺がバーサーカーの気を引く。

二、隙が出来た瞬間、隠れていた凜がバーサーカーに一撃を喰らわす。

以上。

「ところで咲くん。なんか魔力が微弱すぎるんだけど。・・・何をやったの？」

「・・・固有結界を使った」

「はぁ・・・？」

凜が呆気にとられた顔をする。

「なにをバカなことを言っているのよ！固有結界なんて代物、アンタが使えるわけないでしょ！？」

「でも事実使えたわけだし」

「無理に決まってるじゃない！固有結界に使う魔力はそんな魔術師個人の魔力で足りるわけじゃないじゃない！」

「俺には魔術回路以外にも使える魔力があるんだよ」

そんな感じで討論をしているとき、士郎が木の枝から弓を作った。

「・・・士郎、今の」

「ああ。慎二との一件でなんとなくコツが判った。遠坂も言ってた

だろ。力みすぎるなって」

「・・・そう。ま、手段が出来たのはいいことだし、今はいいわ」

そして凜が話し出す。

「話を戻すけど。とにかく、三人にはバーサーカーと戦ってもらおう。わたしは予め木に登って、上から様子を観察してるから。で、セイバーがなんとかバーサーカーに隙を作ったら、死角である頭上からとっておきの宝石を使いきってバーサーカーを串刺しにする。作戦としてはそれだけの、単純な物だけだ」

それで話は大体終わった。そして俺たちはバーサーカーと戦いやすい場所へ向かった。

そして、広い場所に出て、バーサーカーを待ち構える。

「……来るぞセイバー。準備はいいか？」

「……貴方も。戦いが始まったら、決してここから前には出ないように。何かあると、バーサーカーをここには近づけさせません。……咲、シロウを頼みます」

「……ああ」

そして現れるイリヤスフィール。

「意外ね、てつきり最期まで逃げ回るとばかり思ったのに。それとももう観念したの、お兄ちゃん？」

「……イリヤスフィールとの距離は四十メートルほどだ。」

「……ふうん、セイバーは治ったんだ。そっか、だから逃げ回るのは止めたのね。……おしいなあ。そんなことでわたしに勝てると思うのはかわいいんだけど……残念ね。シロウはここで死ぬんだもの」

くすくすと笑いながらイリヤスフィールが言った。

「もう。つまらないなあ、ずいぶん無口になっちゃったのね。もし

かして殺されるのは怖いのか？そんなのもつたいないよ？いま命乞いをすれば、わたしも許してあげないコトもないんだから」

そろそろ凜が木を登り終える頃だろう。

「……そう。あくまでそういう態度なんだ。ならお喋りはここままでだね。リンともども殺してあげ……待ちなさい。リンはどうしたの、シロウ」

「遠坂はここにはいない。あいつと俺たちはとうに別れた」

「別行動をとったの？そっか、セイバーを連れてるシロウは足手まといだものね。リン一人なら、もっと遠くに逃げられる」

「……つつか、めんどくさいから早く始めるぞ」

俺が口を挟む。これ以上あれこれ聞かれ続けると土郎がいつかボロを出しかねない。

「セイバー！」

「はい！」

そしてセイバーが接近する。

「……遊びは終わりよ。蹴散らさない、ヘラクレス」

「——————ッ！……！」

いつもより響く咆哮・・・まさか、

「そんな・・・理性を奪っていただけで、凶暴化させていなかった
というのか・・・!?!?」

セイバーが戦慄する。

「行け・・・! 近寄るモノはみんな殺しちゃえ、バーサーカー・・・
!」

「————ツ!!」

そして始まる戦い。

カキヤアン!

カアン!

キヤアンツ!

カキイイン!

・・・まるで嵐が吹き荒れているようだ。絶え間のない剣戟の音。
セイバーが押されているのは明白だった。

「・・・ツ! 士郎!」

士郎に声をかけると、士郎は弓を構える。

「ぶつ————!!」

「ストライクレイドッ!」

士郎が弓を放ち、俺はキーブレードを投げる。

カキン!

「なっ!?!」

しかし、それは容易くバーサーカーに弾かれる。防御をしたわけではない。純粋な堅さだけで弾いたのだ。

「そうよバーサーカー、そこの二人は放っておきなさい。セイバーを殺したあとで、いくらでも料理できるんだから」

イリヤの笑い声が響く。

「・・・チツ」

「っ、く、そ・・・」

このままでは負ける。

「—————!」

その時、バーサーカーの一撃が、セイバーを薙ぎ払った。

「セイバー・・・!」

「いや、まだまだ！」

バーサーカーが薙ぎ払ったのは鎧のみ。セイバーはわざとそこを狙わした。そして隙が出来たバーサーカーに一撃を喰らわせる――！

ズガァン！

そして、セイバーがバーサーカーを押し返した瞬間、

「引いて、セイバー……！」

凜が跳んできた。

「Neun·Acht·Sieben――！Still·sch
ie t Erschie ungen――！」

舞い落ちる氷の雨。

「だめ、避けなさいバーサーカー……！」

イリヤスフィールが声をあげるが……遅い。あれはかわせない……
が、

「――ッ――！」

カキイン!

キャアンツ!

バーサーカーは片手で斧剣を振り、氷塊のうちの三つを叩き落とした。

ズシャアツ!

残った一撃がバーサーカーに当たり、バーサーカーの腕が凍る。だが、

ガシイ!

なんとバーサーカーは残った手で凧を掴んだのだ。

「と、遠坂——!!!!」

「……ふん。そんなコトだろうと思ったわ」

にやりと、そう言い捨てた。……凧はまだ宝石を持っていた。それを指と指の間に挟んでいる。

「取った……!!」

ズガアアアンツ!

放たれる光弾。それはバーサーカーの顔を吹き飛ばした。

「……やったか……？」

士郎が呟く。……いや、まだだ。

「……ッ！」

俺は駆け出す。そして

「ソニッククレイヴ！」

バーサーカーに突きを放つが、

バキッ！

「うわあああ!？」

バーサーカーが放った拳により弾かれ、吹き飛ばされた。

「……う、うう……」

バーサーカーの顔は再生を始めていた。

「……宝具……か……」

頭でも打ち付けたか、意識がはつきりしない。そして駆け寄った士郎も吹き飛ばされ、宙を舞う。

「・・・限界・・・なのか・・・」

諦めかけたその時、士郎が、“剣を”手にした。

「な・・・あの剣は、私の・・・!？」

呆然とするセイバー。

「おーー」

士郎がバーサーカーの腕めがけて剣を振るう。

「オオオオオオー！ー！」

ズシャアッ!

バーサーカーの腕を両断する。

カシャアン!

その一撃で剣が砕け散る。

「ー」 “投影”、開始

士郎が呟く。

「ぎーくう、う、あああ、あーー」

士郎は剣を作り出していく。

「くーーーーあ、ああああ……!?!?!?!」

そして出来上がる黄金の剣。

「……………!?!?!」

あの剣が脅威と分かったのかバーサーカーは士郎を狙う。

「つ……………!?!」

士郎はなんとか剣で受け止めたものの、派手に吹き飛ばされる。

「……………士郎!」

頭を振りながらキープレードを杖がわりにして立ち上がる。だが、それより早くセイバーが士郎と共に剣を持つ。

「シロウ、手を……………!」

……………バーサーカーを、斧剣ごと叩き斬った。そして……………

「……く……どう、なった……？」

周りの視界が回復して、周りを見ると、バーサーカーが消えようとしていた。

「……終わり……か？」

その時、右手に鈍い痛み。俺はそれでハッ、となる。

「……恋！」

俺はバーサーカーが消えて呆然としているイリヤスフィールを含め、
なんとか自由になった凜たちを連れて、皆のところへ向かった……
……

VSバーサーカー（後書き）

咲 「……ふう」

亮 「……どうした？」

咲 「……最近、パロディやらないな、と……」

亮 「……やりたいのか？」

咲 「……少し」

ならやりましょっつぱぷぱぷ

亮 「……どこから湧いてきた」

士郎

「お前・・・ウザいよ」

凜

「響け！終焉の笛！ラグナロク！」

ランサー

「俺の歌を聴けえ！」

ギルガメツシュ

「ばあああくねっ！ゴッド・・・フィンガアアアッ！」

慎二

「絶望した！！」

アサシン

「その名の通り・・・狙い撃つぜえ！」

亮 「……え！終わり！？」

咲 「今日は中の人ネタか……」

亮 「中の人とか言うなあ！？」

咲 「それでは次回の真似と開閉と世界旅行！」

次回もまた見てください。

亮 「え、あ、うあ……それではまた次回会いましょう！」

マキリン（前書き）

完全にオリジナル話です。ではどうぞ。

マキリ

?????

・・・これは夢だろうか。目の前にいるのはどこにでもいるような少女。普通な生活を送っている一般人。しかし、その生活は終わりを告げる。

武器を持ち、自分が従う王。そして次期王。そして国の人たち。それらを守るために人を殺す。最初は戸惑い、恐れを覚えた。だが、くじけそうな度に自分が守ってきたものを思い出してはまた人を殺してきた。

『・・・私は・・・本当に皆を救えているのでしょうか・・・』

悩む。 仲間に相談したこともある。

『・・・悩むな。 貴様の迷いが逆に全てを殺す』

『迷う必要なんてないよ。 それでも笑顔になった人はいるんだから』

・・・少女はそれでも悩む。・・・そして、訪れる救い。

『前は俺が泣かせてもらったから・・・今は が好きなだけ泣いていいよ』

その言葉で今まで抱えていたものが全てあふれでる。言葉にならない声で、今までの悩みを涙で流す。・・・その少女は・・・

亮

「ん・・・」

今は・・・明命の記憶・・・？

「・・・いたっ・・・」

痛みに顔をしかめて体を見る。

「・・・なんだこりゃ」

一言で言うなら、ミイラ男。全身が包帯だらけになっていた。

「・・・あ、亮さん。目が覚めたんですね」

そこにいたのは・・・ミイラ女だった。

「・・・明命？」

「はい？」

「どうやら明命みたいだった。いや別に露出してる部分全てが包帯を巻かれているわけでもないけど。」

「・・・あ、そうか・・・」

「今、思い出した。俺はバーサーカーと戦って魔力切れで倒れたんだっけ・・・」

「・・・うわ」

辺りを見れば、同じくミイラになっている恋と咲。

「・・・ふむ」

しばらく思索して・・・

「・・・咲、起きろ」

「まずは咲をおこし」「うるさい」「ガッンッ！・・・再び喰らう裏拳。」

「・・・起きろおおお！」

無理矢理咲をたたき起こす。

「……それで？」

咲を無理矢理起こして、二人で間桐邸へ向かう。

「……ああ。今日は1日フリーだからな。桜を助けるには丁度良い」

「……だから俺を起こしてケアルガを使わせたわけね……」

ちなみに、何故明命を連れてこなかったかと言うと、魔力が万端じやなくちゃ後々面倒だし、万が一マキリの爺さんが明命を媒体に真アサシンを喚ばれても困る。

784

「桜とは待ち合わせをして……あ、いたいた」

間桐邸の前に立っている桜を発見する。

「おい桜!!」

「……あ、亮さん、咲さん」

桜がこつちを確認して微笑む。

「桜、とりあえず場所を変えよう」

俺は間桐邸を睨みながら言った。

そして公園へ来た。

「……人がいないな……」

目に入る人間がいない。

「ま、好都合っっちゃあ好都合だが」

俺はケータイを取り出す。

「え……あの……」

桜がおどおどとしながら俺に尋ねる。

「大丈夫だよ。モーションキャプチャー、シヤマル」

「……あんまり同じキャラは使いたくないけど……絶対にシヤマルは何度も使うな……お世話になりますシヤマル先生。」

「え……え!?!」

桜が驚愕してるが……

「……クラールヴィント」

俺は桜の体を徹底的に回復する。

「あ……イヤ……イヤアアツ!!」

桜が悲鳴をあげる。当然だ、魔力も回復したから、胎内の“蟲”が魔力を食らうために体を動き始める。

「……咲!」

「ああ!閉じる!」

咲は蟲の行動する範囲を閉じる。そして蟲は一ヶ所に集められる。

「……よし」

俺はクラールヴィントを操作して、蟲を掴む準備をする。

「……捕まえ、た!」

一気に桜の胎内から蟲を引きずり出す。

「あ……」

よし……これで……ッ!?

「う、あああ!?!」

蟲が俺の手を食らい始める。

「亮っ!?!」

まず……い、意識が……

「キ、キャプチャーキャンセル!」

元に戻る際の余波で蟲を無理矢理吹き飛ばす。

「……く……」

その時、吹き飛ばした蟲が集まって人の姿を形作る。

「……な!?!」それは……全身がほぼ黒くなっているシャマルだった。

「……ふむ、なかなか面白い能力じゃのう」

シャマルが声を出す。……いや、まるで年寄りみたいな声を出した時点でシャマルの声と言えるかはわからないが。

「貴様は……」

「……しかし、お主たちは余計なことをしてくれたのう……」

シャマルが……いや、間桐臓硯がそう呟く。

「・・・じゃが、また桜を調整すれば済む話。・・・悪いがお主たちには死んでもらおう」

その言葉と同時に出てくる大量の蟲。

「・・・不味い！」

桜が撤退しきつてない！

「・・・モーションキャプチャー！モモタロス！」
なら、桜を戦えるようにすればいい。

「桜！体借りるぞ！」

「え？・・・きゃっ!?!？」

バシユウン！

俺は桜に取りつく。そして桜の瞳は赤くなり、髪に赤いメッシュが入る。そして・・・

「変身！」

素早く腰に回したベルトで変身する。・・・その姿は仮面ライダー電王、ソードフォーム。

「俺！参上！」

言いたかったことを言ってみた。

(一体何なんですか!?)

「あ、スマン桜。こっちの方が安全性高いから・・・」

(・・・でも)

「大丈夫!必ず勝つから!」

そして俺は臆硯に向き直る。

「言っておくが、俺は最初から最後までクライマックスだぜ!」

再び名言を口にする。そして武器を構えて突撃する。

「行くぜ行くぜ行くぜー!」

戦闘が始まった・・・

「とりゃあっ！」

シャキーン！

「……蟲が多すぎる……！」

「……亮、どけ！……燃え尽きる、ファイア！」

咲が炎で蟲を一掃する。しかし、

「うっわ、うじゃうじゃ出てきた!?!」

限りなく出てくる蟲たち。それに恐怖を覚えながらも必死に戦う。

「くそ！まだ桜にアヴェンジャーの契約があるのに！」

(アヴェンジャー?)

桜が反応する。……しまった、体を借りてるんだから俺の思考もまるわかりか。

「いや、なんでもない」

それに、あのシャルルを使っている臓硯を倒しても、まだ本体が残ってる。

「こりゃあお世辞にも良い状況とは言えねえなあおい」

咲が吐き捨てるように言う。

「……なら」

俺はベルトの紫色のボタンを押す。瞬間、勝手に物真似が変わった。

「よし！」

そしてパスをベルトにあててフォームを変える。……なったのは電王ガンフォーム。

「……お前、倒すけどいいよね？」

「なに……？」

そして一回転して、

「答えは聞いてない！」

銃を発砲する。

「亮……痛すぎるぞ……」

「……うっせ」

しかし銃は便利だ。蟲たちを近寄らせずに全て撃ち抜ける。

「なら、これでどつだー！」

「どっした？もう終わりかの？」

「・・・舐めんなよ！モーションキャプチャー！」

俺は走り出す。臓硯は何か触手みたいなもので俺を射殺そうとしている。

「上条、当麻！」

とある魔術の禁書目録の不幸男。ぶっちゃけ弱いが、こういう世界ではほぼ無敵だ。

「・・・ぶっ！」

迫り来る触手を避けて臓硯に接近する。

「何！？」

よし、もらった！

「まだだ！」

そう言つて臓硯は巨大な盾を出した。・・・けど、俺は怯まずに右手を突き出す。

キュインッ！

右手に触れた盾は消滅する。これが上条当麻の能力。右手に触れた

ものが異能のモノだった場合、それを“殺す”ことが出来る。

「なんじゃと!?!」

そのまま臓硯の頭を掴む。

キュインッ!

「ぬ、ぬおおおお!?!」

そのまま消え去る臓硯。

「……咲!」

「大丈夫!桜も無事だ」

遠くで桜を守りながら蟲と戦っていた咲が近寄ってくる。

「……とりあえず、まだ安心出来ない。間桐邸に行くぞ。あいつを消さない限り終わりは無い」

「……(コクッ)」

咲が頷いた。

「……あ、でも桜が……」

「……サクラのことは任せてください」

「……っ!?!ライダー!?!」

いきなり後ろに現れたライダーにビックリする。

「……あー、あの時唱えた魔法ってデジョン（離脱）だったのか・
」

咲が声を出した……ってお前かい。

「……その前に」

俺は一旦物真似を解除する。

「モーションキャプチャー、キャスター」

そして短刀を構える。

「……ッ！」

「大丈夫だライダー。別に殺そうってわけじゃない」

「……破戒すべき全ての符ルブルレイカー……」

それを桜に突き立てる。瞬間、何かが確かに消えた。

「よし……」

「……ライダー、桜を任せた」

「……わかりました」

俺たちは決着をつけるために閻桐邸に向かった。

閻桐邸についた瞬間、辺りが暗闇に包まれた。

「……臓硯！」

そこにはもうじき死ぬのではないのか？と思う程の老人が立っていた。

「……思っていたより早かったのう」

「……悪いな、不安要素は徹底的に取り除くタイプなんでな」

「ふむ、確かにそれには賛成できるのう……ならば始めるとするか」

臓硯が言った瞬間辺りに蟲が集まり始める。

「亮！」

咲が干将莫耶を渡してくる。ちなみに鈴音は家に置いてきた。

「・・・強化、開始」

無限に群がる蟲を切り払う。

「・・・ッ！多すぎるぞ！」

「下がれ亮！・・・逃げ惑え、フレア！」

火の球体が蟲に触れた瞬間、爆発が起きた。

「うわあああ！？」

「・・・これでもダメか」

蟲は新たに増えてくる。

「くそ！どうする・・・」

仮面ライダーの必殺技にイマジンプレイカーとルールブレイカー・・・
・結構力を使ってしまっている・・・後何回持つか・・・と、その
時、

ズシャアッ！

「亮さんっ！」

「・・・咲！」

蟲を切り捨てて明命と恋が来た。

「バカッ!? 明命、来るな!」

「ほう・・・随分と変わったアサシンじゃのう・・・じゃが、アサシンに変わりはないから問題はなかるう」

臓硯が何かを呟いた瞬間、

ズブツ・・・!

「・・・え?」

明命は自分に起きていることが理解できなかつただらう。だって自らの腹から手が生えてるんだから・・・

ズブズブ・・・!

「あ、い、いやッ! イヤアアア!?!」

「明命!・・・止めてめえー!・・・!」

俺は臓硯に近づこうとするが、蟲に阻まれる。

ズブツ、ブシャアッ!

「アアアアアアアアアアアアアアアア!・・・!」

「明命っ!」

「閉じろっ!」

咲が無理矢理サーヴァント召喚の儀式を閉じる。瞬間、

「グ、アアアアアッ!」

咲の体から血が吹き出した。

「咲っ!」

「お、おれはいいからはやく・・・」

咲は全力を使って明命を助けようとしてくれる。なら俺は一刻も早く臓硯を倒す!

「モーシヨンキャプチャー!美堂蛮!」

ゲッドバツカーズの奪還屋の一人、美堂蛮になる。

「臓硯!俺の目を見ろお!」

「・・・!」

「イービルアイ邪眼オープン!解放!」

「・・・な!??」

邪眼……それは目を合わせた相手に一分間の幻覚を見せることができる。……まあ、一日三回までって言う決まりがあるんだが……ちなみに何を見せているかというところ、臓硯の本来の目的を思い出させるために過去を見せた。

「……そうか、僕は……」

「……いい夢、見れたかよ」

そして恋が臓硯の真上に跳ぶ。

「——戦場を駆ける一騎当千の将——！」
ホウテンガケキ

ズガアアアンツ！

周りの蟲ごと臓硯を、本気の宝具で消し飛ばした。

「……ガハツ……!？」

「咲!？」

「う、ああああ!？」

「明命!？」

咲が倒れ、明命も腕は消えたが、腹に穴が空いたまま倒れる。

「恋！咲を頼む！」

「……わかった」

俺たちはとりあえず間桐邸に入った。

「……明命」

とりあえず明命と咲に治療を施して間桐邸に居座ることにした時、意外……でもないけど訪問者が来た。

「……ひっ！？大澤と五十嵐のサーヴァント！？」

「……間桐先輩ですか。お久しぶりです」

「そんなことはどうでもいいんだよ！なんでここに来た！？」

「俺のサーヴァントと咲を手当てするために借りたんだよ」

「……ほ、本当にそれだけか？僕を殺そうって気じゃないだろうな？」

「そんなことはしないですよ。俺は向かってくるやつは倒すけど、戦う意志が無い奴は攻撃しない」

「そ、そうかよ・・・」

「それで、間桐先輩にお願いがあります」

「？」

「桜を・・・大切にしてください」

「!?!な、」

「自分が魔術師になれないからって他人に八つ当たりはよせ」

「お前に、僕の何が・・・!」

「わかんねえよ!それに、自分が特別じゃなくてもいいだろう?」

「・・・」

「正直な話、人間誰でも特別なんだよ。間桐先輩にだって何かがある。それを捜すのも悪くないんじゃないかな?」

「僕の・・・」

「・・・すみません、たかが後輩がでかい口を叩きました。そこまですべておいてなんですが・・・」

「・・・なんだよ」

「・・・部屋・・・貸してくれませんか？」

「・・・好きにしろよ」

あれ、意外。

「か、勘違いするなよ！別に深い意味は無いからな！僕は礼を言う気も・・・」

「あー、はいはい。別に構いませんから」

そうして俺たちは部屋で休むことにした・・・

マキリ〜（後書き）

亮

「臓硯撃破！」

咲

「危うく明命が死にかけたがな」

亮

「うぐ……」

咲

「本気の恋の一撃でいいところを奪われたがな」

亮

「……咲、魔力は？」

咲

「……ほとんど持ってかれた」

亮

「……ランクは？」

B + EX

亮

「嘘おっ!?!」

咲

「呂布の名は伊達じゃないな……」

亮

「さすがだな」

恋

「……役に立って嬉しい」

明命

「……私の過去を見ましたね?」

亮

「ああ。あれも完全にオリジナルだからなあ」

咲

「夢の中で明命と話していたのは誰なんだ?」

亮

「それは……秘密だな」

咲

「……まあ、大体分かるけど」

亮

「……だな」

明命

「それでは今回はこの辺で」

恋

「・・・次回の真似と開閉と世界旅行」

亮&咲

「次回もまた見てください!!」

全員

「それではまた次回会いましょう!」

新たなサーヴァント（前書き）

少し遅れました。ではどうぞ。

新たなサーヴァント

「……まずった」

起きて開口一番がそれだ。

「……亮？」

咲が部屋に入ってくる。

「お、目が覚めたか」

「まあな。ていうかお前が最後だぞ？一日経つてのもう夕方だし」

「嘘っ!？」

それは寝過ぎだ……とりあえず俺は体を起こして部屋から……出る前に咲に声をかける。

「……咲」

「ん？」

「……ありがとな。お前がいなかったら明命は死んでた」

「気にすんな。仲間を見捨てるほど俺は外道じゃない」

「……鬼ごっこで鬼に追われていたら？」

「見捨てるだろ、普通」

「外道じゃねえか!？」

「それとこれは話が別だ」

「・・・むう」

とりあえず俺たちは下に降りる。

「そついや亮、お前はワカメに何を言ったんだ？」

「・・・なんで？」

「・・・気持ちが悪いくらいに良いキャラになった」

「・・・あー」

ま、まあいいや・・・

「・・・あ、亮さん」

明命が椅子に座っていた。

「明命、大丈夫か？」

「はい。咲さんに回復してもらいましたから、戦闘には支障はありません」

「そうか。それはなにより」

「……咲」

「……恋？その大量のお菓子は……」

「……私が与えました」

「ライダー！？」

咲がビツクリする。……本当はライダーじゃなくてアサシンじゃなからうな……？

「レンがお腹を空かしていましたので私が与えたのですが……本当にレンはサーヴァントですか？サーヴァントは本来食事を必要としないのですが……」

「……恋たちは色々と違うんだよライダー」

「……そうですね。ミンメイ、貴女はどうですか？」

「あ、はい。いただきます」

……真名を許可するほど仲が良くなったんだな。

「……リヨウ、サキ」

「何？」

「なんだ？」

ライダーが話しかけてくる。

「……サクラを助けて頂き、ありがとうございます」

ペコリ、と頭を下げるライダー。

「気にするなよ。俺たちが好きでやったんだから、ライダーが礼を言う必要はないぜ？」

「それでもです。私のマスターだけでなく、シンジの目を覚まさせてくれたりもしたのですから」

「……厚意は無駄にしないほうが良いぞ、亮？」

「……そだな。どういたしましてライダー」

そのまま俺たちは衛宮邸に帰る準備をする。

「……もう行くのですか？」

「ああ。早く帰らないといけないし」

ライダーにそう言って帰ろうとした瞬間、違和感を覚えた。

ガシャッ、ガシャッ、ガシャッ

「……ッ!？」

外に出ると、そこには大量の骨がいた。

「竜牙兵!？」

「亮さん!下がってください!」

明命が前に出て、骨を薙ぎ払う。

「……これは、私たちの世界にも出てきた……」

「……明命、恋も協力する」

「咲」

「ああ。ほら」

俺は咲から干将莫耶を受け取る。コイツらが相手なら、物真似を使う必要もない。

「リョウ、サキ、ここは私に任せて先に行ってください」

「ライダー、でも」

「この程度なら大丈夫です。それに今のマスターはサクラですから、力も上がっています」

「そうか・・・なら頼む！行くぞ明命！」

「はい！」

「恋！」

「・・・わかった」

俺たちは全力で走り出す。

「うらぁ！」

バキィッ！

骨を叩き壊す。

「・・・チツ、数が多い・・・！」

俺は愚痴を言いながら骨を倒す。

「口を動かす・・・おっと、暇があるなら・・・うわっ！?・・・

もつと倒せ!」

「わかって……おわっ!?!」

数が多すぎるため、まったく進めない。……土郎の家は近いはずなのに……

「……亮さん」

「ダメだ。今度は誰も残らせないからな」

「ですが……」

「ワガママ言うつと令呪を使つぞ」

「……そっちの方がワガママです……」

「恋はそんなこと言わないよな?」

「……(コクッ)」

……その時、いきなり骨が消えた。

「え!?!」

「……なんでだ……?」

「亮さん。咲さん。とりあえず急ぎましょう！」

俺たちは衛宮邸に向けて一気に走り出す。

「……あれは!？」

衛宮邸の扉の上に立つ金色の鎧を着た男……あいつは前回の聖杯戦争のアーチャー……真名は世界最古の英霊、ギルガメッシュ。今まさに衛宮邸に向けて宝具の嵐を放とうとしていた。

「……止めるテメエー！」

咲が体に魔力を通して一気に斬りかかった。だが

「……」

ビュン!

「うわあああ!?!」

カキイン!

ノーモーションで放たれた剣に弾かれ、家の中に落ちる。

「……咲!？」

恋が一足早く咲を追う。俺たちも急いで追いかける。

「……雑種が。我オレに攻撃をするとは何様のつもりか!？」

ギルガメツシュが声を上げる。

「げほっ……天の御遣い様のつもりだよ」

咲が立ち上がりながらそう言った。

「……ん?そうか、貴様らがあの導師の言っていた雑種か」

「導師、だと?」

俺がギルガメツシュに聞く。

「おい!どういう意味だ!」

咲も問う。

「……答える義理は無いな。……本当はこのまま帰ろうかとも思っていたが、お前らはあの導師から殺せと言われているからな。貴様らはここで殺してやるっ」

「……冗談!」

俺は干将莫耶を放り捨てて、ケータイを手にする。

「モーションキャプチャー！ギルガメツシュ！」

この場を凌ぐにはこれしかない！

「・・・貴様、雑種風情が我を真似るとは何事か」

静かに、怒りを押さえながらギルガメツシュが言った。

「・・・ふん、だが所詮は紛い物。すぐに粉碎してくれるわ」

ギルガメツシュが静かに手を上げ・・・降り下ろした。

ズドドドドンッ！

無数の宝具が俺を狙い、殺そうとする。

「行けっ！」

俺も宝具を射出する。

カキキキキンッ！

「・・・なに？」

ギルガメツシュが疑問の声を上げる。当然だ、本来なら剣と剣がぶつかれば、偽物である自身の宝具が碎ける。・・・だが、俺が放つ宝具はまともにもぶつかり合わない。剣には槍を。槍には鎌を。・・・といった具合に別のものをぶつけることによって、打ち負けるのだけは阻止している。

「くっ・・・！おのれ雑種ううう！！！」

ギルガメツシュが更に威力を上げて、段々俺の体に宝具を当ててくる。・・・けど、

「恋、明命！俺に力を！」

「・・・わかった」

「はい！」

咲が二人の力を合わせて放つ。

「トリニティ・・・リミット！！！」

バアアアッ！

世界が光に包まれ、次に目を開いた瞬間、鎧に傷が付いただけのギルガメツシュが立っていた。

「・・・ダメか・・・」

「・・・」

しかしギルガメッシュはなににも言わずに、俺たちを睨み付けてそのまま跳び去った。

「・・・ふう」

俺が軽く息を吐いた。そして士郎たちと共に、家の中に入った。

そしてキャスターにやられた士郎の治療をしている間、今までの状況を聞いてみる。そしてわかったことは、

- ・俺たちが桜を助けているときに、キャスターが襲撃してきた。
- ・士郎のケガは、その際にセイバーを庇ってできたもの。
- ・そのキャスターは、いきなり来た黄金のサーヴァントに消された。
- ・そしてタイミング良く俺らが間に合った。

・・・らしい。咲としばらく情報を整理していたら、いつの間にかギルガメツシユの・・・黄金のサーヴァントの真名について士郎たちが話し合っていた。

「遠坂、遠坂ー。いいから戻ってこーい」

「ああもう、黙っててよ士郎！アンタが茶々いれるから頭が混乱してきたじゃないっ！」

「いや、茶々をいれるつもりはない。あいつの宝具の事だろ？・・・形状だけで言うなら、ダンスレフとハルペー、デュランダルにヴアジユラにカラドボルグ、ああ、あとゲイボルクもあったか。なんか中華っぽかったのは流石に判らないけど、有名どころはそんな物じゃなかったか？」

「士郎、中華っぽかったのは多分恋と同じの方天戟だと思うぞ？」

「ああ！そうそう、それだ」

士郎と咲がギルガメツシユが使っていた宝具を口にする。

「う・・・それ、あってる」

遠坂がうつ、とした顔になる。

「けど、それってどういう事よ！？そんなデタラメな数の宝具を持つてる英雄なんていないわ。いえ、そもそも出典がごちゃまぜで、もう何がなんだか・・・」

「ええ。ですから私も彼の正体は判らなかつた。英雄の証となる宝

具を、あの男は湯水のように持っているのです。あまりにも数があ
りすぎる為、アーチャーの正体を絞り込むことはできなかった」

うー、と悩む皆に爆弾発言をする。

「・・・わかりやすいと思うけどなあ」

ボソツ、と言った言葉が聞こえたのか、遠坂が反応する。

「ちよつと亮くん！今なんて言ったのよ!？」

「い、いや・・・なにも・・・」

「・・・丁度良いわ。あのサーヴァントの正体も知りたいけど、貴
方たちのことも追求しなきゃいけないわ」

「な、なにが・・・？」

「だから、貴方たちについてよ。別世界から来たって言うけど、そ
れでハイそうですか、なんて言えないわ。それに亮くんの魔術はお
かしいし、明命と恋も変よ。咲くんだって他人の魔力をパスなしで
通せるなんておかしいわ。・・・さあ！全て話してもらおうじゃな
い」

・・・仕方ないか・・・俺は咲と遠坂たちに説明を始める。・・・
事故で死んだこと。明命たちと共に駆け抜けた三国時代。そして今
に至るまで。全てを話した。

「……」

気づけば、周りは沈黙に包まれていた。

「……正直、嘘みたいな話だけど……」

信じてくれるか？と目で問いかける。

「俺は信じるぞ」

「士郎……」

「だってお前は嘘をついてないんだろ？なら、それでいいじゃないか」

「……私も信じましょう」

「セイバー？」

「先程言っていたゲームと言われるものの登場人物……そう言われても実感は湧きませんが……それなら納得がいく」

「？……何が？」

「咲の発言です。あの時の咲の言葉は、まるで私の正体を知っているようでした……あの時私が苛ついたのは、あまりにも核心を突かれたからだと思います」

「……まあな。俺と亮は未来さえも分かる……けど、あまりそれを言おうと努力をしなくなるかもしれない。世界が変わってしまう」

かもしれない・・・そんな感じで今までは極端には言わなかったんだが・・・亮もそうだよな？」

「・・・」

「・・・亮？」

脂汗をだらだら流しながら目を逸らす・・・だってさあ・・・雪蓮や冥琳や祭さんを死なせるわけにはいかなかったんだから。明命と恋にもそこまで説明をしていなかったため、二人も驚いた顔をしていた。

「・・・はあ、貴方たちってメチャクチャね。・・・でもま、わたしも信じるわ」

「遠坂・・・」

「あのアーチャーについても、今は聞かないわ。・・・その時が来たら、教えてちょうだい・・・あと」

遠坂が更に言葉を紡ぐ。

「・・・わたしたちが例え物語の登場人物だとしても・・・今のこの時は確かに誰かに創られた物じゃない。確かに自分で考えているわ。だって貴方たちはその物語に存在しないんだから」

・・・そうだな。確かに俺たちの事を考えた時点で、登場人物とはかけ離れる。

「・・・ん。まあ、この話は追々するとして・・・今は寝ようか」

そうして俺たちは眠りについた・・・

新たなサーヴァント（後書き）

よっしゃああああああああああああ！！！！

咲

「うわ！？ビックリした・・・」

亮

「どうした作者」

ついに高校に受けました。

咲

「・・・へー」

亮

「・・・そうかい」

では、せいゆ・・・ゲフンゲフン、パロディをやりましょう！

亮

「言い直す必要あったのか？」

慎二

「そんなのつてねえよ・・・ねえよ・・・死にきれねえよ・・・！」

言峰

「ギロギロギロギロギロ」

ライダー

「ああ、宇宙^{ユニバース}が宇宙が墜ちる！」

アサシン

「ホワイトチャーミーな敵役」

EXTRAキヤスター

「うおおおお！リボルバー・・・シュートオオオオ！！！」

EXTRAセイバー

「いくよケロちゃん！」

EXTRAキヤスター（アリス）

「昔みたいにこのちゃん、て呼んで〜な〜」

ランルーくん

「い、いえ！木乃香お嬢様に対して恐れ多い・・・」

亮

「カオスウウウウウ!?」

合格祝いです。

咲

「・・・でも、後半からネタがなくなつたら、F a t e E X T R A
も使うなんて」

う・・・

亮

「しかも分かりにくいし・・・」

いいんですよ!では、今回はこの辺で。

亮

「次回の真似と開閉と世界旅行!」

咲

「次回もまた見てください!」

それではまた次回会いましょう！

遭遇（前書き）

すみません遅れました。ではどうぞ。

遭遇

朝、目が覚めて最初に思ったこと。

「……？咲がない……」

隣で寝ていたはずの咲と恋がない。明命もない。……軽い鬱になりかけた。

「……あ、起きたのですか？」

明命がひよこつと廊下から顔を出す。……少しホッ、とした。

「明命？咲たちは？」

「ええと……衛宮様とセイバー殿がでいとをするから面白そうだと言ってこつそり着いていきました」

「……はあ」

デートイベントねえ……そしたら置き去りをくらった俺は暇なんですけどね……あ、そうだ……

「明命、久しぶりに鍛練しないか？」

「……はい！よろしいのです！」

俺は部屋の隅に置いてある鈴音を持って中庭に出た。

「・・・よし、行くぞ明命！」

「どこからでもどっぞぞ！」

「セイツ！」

俺はまっすぐに振り切る。

「ハッ！」

カキン！

「まだまだ！」

「甘いです！」

カキヤアン！

「タアッ！」

「やあ！」

カキヤアン！

「……くっ……」

「隙あり！」

ドカア！

「ぐえ！？」

蹴り飛ばされて宙を舞う俺。

「はうあ！？亮さん！？」

明命が心配そうに近づいてくる。

「な、なんて強さだ……」

「すみません！つい加減を忘れてしまって……」

「いや、構わないさ。続けよう」

「はい！」

それから続けること数時間。完全に俺と明命はばてていた。

「ハア……ハア……」

「ふう……ふう……」

中庭に大の字で寝転がる俺たち。

「……アンタたち、なにやってんの？」

遠坂が家の中から聞いてきた。

「前の……世界でもやってた……鍛練……なんだけど……」

「サーヴァントの息を切らせるまで鍛練って、それは鍛練って言うの？」

「……俺の師匠様は鍛練と称して容赦なく俺を叩き潰してたがな」

「……はは……」

明命が笑った。

「ま、それは置いといて……二人とも、お昼ができたわよ」

「お、ありがとう」

「頂きます」

俺たちはとりあえず家に入っていった……

昼食を食べ終えて、明命との鍛練を再開する。

「てりゃー！」

「はあっ！」

カキイーン！

「……ふう」

「ここらへんにしますか？」

「そう……だな。もうじきいい時間になる」

そして今まで戦闘服に身を包んでいた明命が私服に戻る。

「……なあ、明命」

「はい？」

「……服変えるのになれたのか？」

随分となれた感じで服を変えるものだから、少し気になった。

「そう……ですね。結構便利ですから。これは」

「ふうん……そんじゃ、中に戻って鈴音を研くとするか」

「あ、お付き合いします」

俺たちは家の中に戻った。

鈴音を研き終わる頃には咲たちが帰ってきた。

「ようストーカー」

「ストーカー言うな。第一途中で見失ったから今まで恋と遊んでたんだよ」

「あれ意外。咲ならしつこく追いかけてそうなものなのに」

「……連れが腹減りでダウンしたから」

「……なるほど」

「……って、思春の剣を研いてたのか？」

「ああ。大切な預かり物だからな。丹精込めて綺麗にしないと……」

「ふーん……俺も詠からもらった眼鏡を磨くかな……」

「そっぴや、みんなどうしてるかなあ……」

思い出す呉のみんな。雪蓮に冥琳や祭さんに穂と亞莎に小蓮、そして蓮華に思春。・・・本当にどうしてるんだろっな・・・

「・・・一刀に襲われてたりして(ボソッ)」

咲がボソッ、っと言ったのを、俺は聞き逃さない。

「ああ？」

「いやさ、あの一刀だからさ・・・みんなを慰めると言いながら・・・」

「・・・クロス」

「お、落ち着けよ・・・いくらなんでもそこまで節操無しじゃないっつて」

「・・・じゃあ、もし賈馱やねねが一刀の毒牙にかかっていたら？」

「・・・クロス」

「・・・だろ？」

「あの・・・亮さん？」

「・・・咲、怖い」

二人が何か話しかけてきたが、一刃に対しての黒い感情で反応はできなかった。

そして、うつかり寝てしまい、起きたら午後十時になっていた。

「・・・しまった。最近多いぞ、寝入るパターンが・・・」

その時、ドタドタと音がして誰かが家から出ていくのがわかった。

「ちょっと亮くん！？起きてる！？」

「どうした遠坂？」

「衛宮くんがいきなり飛び出してどこかに行っちゃったのよ」

「士郎が・・・？・・・あ！」

思い出した！確か士郎がセイバーを置いてきて・・・

「悪いけど士郎を追いかけてくれない？わたしはイリヤを見てなくちゃいけないから・・・」

そういえばイリヤが眠ったまんまなんだっけ・・・

「わかった！明命！」

「・・・ここに」

寝てたはずなのに、俺が声をかけた瞬間、戦闘モードで俺の隣に現れた。

「・・・ふわあ、恋、行くぞ」

「・・・わかった」

どうやら咲も起きたようで、準備をする。

「それじゃあ、行ってくる！」

「頼んだわ」

俺たちは士郎たちがいるであろう隣町を繋ぐ橋へ急いだ。

「いた！」

そこには士郎とセイバーと……ギルガメッシュがいた。

「士郎ーッ！」

「……！亮！……あ、」

「亮さん！危ないです！」

「え……？」

ドオンッ！

「が……！」

見えない力が脇腹を襲い、吹き飛ばされる。

「ぐ……うう……」

「おやあ？随分とあっけないですねえ」

「貴様！」

「五十嵐咲ですか……安心してください。ちゃんと貴方も殺してさしあげますから」

俺は何とか立ち上がる。

「お、まえは……于吉……！」

「私をご存知ですか。光栄ですね」

「……そうか、ギルガメッシュが言っていたのはお前だったのか」

「ええ。私も左慈と同じくして自我が目覚めましてね。こうして北郷一刀がない外史にも出歩けるようになったのですよ」

「そうかい……でも、取りあえずお前をぶっ倒す！」

俺は于吉に向かって駆け出す。

「おやおや。ちゃんと貴方たちの相手は用意していますよ」

パチン、と指を鳴らす于吉。例に漏れず空間が開いて中から何かが出てくる。

「俺は破壊者だ。歯向かうものは全て破壊する！」

「所詮……私は世界の便利屋か……」

前の二人は仮面ライダーディケイドと、赤いアーチャー。

「なに！？アーチャー！？」

「……ほう。私がおの名で呼ばれるとはな……何者だ？」

「……こいつ」

多分英霊になって聖杯戦争に参加していない時のアーチャー……

「グ……ギギギ……」

「ふん、何故俺がこのような場所に呼ばれたかは知らんが……強い奴と戦えるなら、俺は満足だ」

その後ろにいたのは本来アサシンとして喚ばれるはずのハサン。隣にいるのは三国無双の呂布。

「はは……まさかこんな豪華ゲストとはな……」

咲が呟く。俺はケータイを取り出す。

「……仕方ない……行くぞみんな！」

俺はデイケイドに、咲はアーチャーに、明命はアサシンに、恋は呂布に、それぞれ向かっていった。

俺はケータイを操作する。

「仮面ライダーには仮面ライダーだ！モーションキャプチャー！ブレイド！」

ケータイがベルトに変わる。俺はベルトのレバーみたいなものを引く。

「変身！」

『ターンアップ』

壁みたいなものが出てきて、俺はそれを通り抜ける・・・すると俺は仮面ライダーブレイドとなった。

「ブレイドだと!?!」

ディケイドが驚いた顔をする。

「うおおおっ!」

俺は右の拳を混乱しているディケイドに叩き込む。

バキッ!

「ぐわっ!?!」

「まだまだ!」

どんどん攻撃を加えていく……が、ディケイドもやられっぱなしではない。

「調子に乗るな!」

『アタックライド……クロックアップ!』

瞬間、ディケイドの姿が消える。

ドカアッ!

「うわあ!?!」

ドカン!

「ぐわっ!?!」

見えない速度で攻撃される。すると咲がこちらを見ていることに気がついた。

「……ぐわっ!? ……五十嵐さん! 何故見てるんです!」

バキィッ!

「ぐう……オンドウルルラギツタンディスクー(俺を裏切ったんですか)!?」

「アホなこと言ってないでちゃんと戦えバカ!」

咲に本気で怒られた……軽いジョークなのに……

「ジョーク言ってる余裕があるならさっさと倒せ!」

「はいはい」

俺はブレイラウザーからカードを一枚引き抜く。

『マッハ』

俺はクロックアップについていく。

「なんだと?」

「どうだディケイド!」

しかしディケイドは動じずに新たなカードをバツクルに入れる。

『ファイナルアタックライド……デイ、デイ、デイ、ディケイド
!』

ディケイドが空高く舞い上がる。

「まずい!?!」

俺は三枚のカードを取り出す

『キック、サンダー、マツハ』

「ハアアアアツ・・・」

『ライトニングソニック』

雷を纏いながらディケイドに対抗する。

「タアアアアツ!」

「てりゃあああああつ!」

ドカアアアアッ!

「ぐわっ!?!」

「ぐわっ!?!」

俺たちはお互いに吹っ飛び、着地する。

「もう一発食らえ!」

体の負担を考えずに同じカードを使い、攻撃する。

ズガアアアッ！

「グワアアアッ！」

デイケイドはそのまま光になって消えた。

「・・・勝った・・・」

変身を解いた瞬間、俺は倒れてしまった。

「無理を・・・しすぎたか・・・」

俺はそのまま意識を手放した。

咲

「・・・ぐ！」

亮のふざけた発言に多少キレながらもアーチャーと対峙する。

「どうしたのかね？随分と動きが遅いようだが・・・」

「・・・ぬかせ！」

俺は集中してキーブレードを二刀流にする。

「はあ！」

「フンッ！」

カキイイン！

アーチャーは投影した干将莫耶でキーブレードを受け止めた。

「それで終わりか？なら今度はこちらから行こうか」

カキヤアン！

「ぐう・・・！」

一撃一撃が鋭いアーチャーの攻撃をなんとかいなす。

「くっ・・・そう・・・」

このままじゃ負ける・・・

「・・・仕方ない・・・第二強化！」

魔術回路の魔力で体を強化する。

「うおおおお！」

「なに！？」

カキン！

カンツ！

カキヤアン！

「・・・くっ・・・」

こないだから感じてはいたが、この二段階目の強化を使うと体が悲鳴を上げる。極限の強化に体がついていけないのだ。

「タアアアアツ！」

「ハアツ！」

カキヤアン！

「・・・このままでは埒があかないな」

そう言ってアーチャーは距離をとった。

「トレスオン 投影開始」

アーチャーは弓と・・・あれは・・・

「I am the bone of my sword
我が骨子は捻れ狂う」

ドリルみたいな剣を造り出した。

「まずー」

「偽・螺旋剣？（カラドボルグ）！」

まっすぐに放たれる武器。

「バリア全開！」

それを自身の渾身の魔力で対応する。

ガアアアアッ！！

「ぐ・・・ああああー！」

「ー」壊れた幻想ブロークンファンタズム

瞬間、武器が爆発した。

「うわあああ！？」

バリアを軽く破られて吹き飛ばされた。

「・・・くそ」

桁違いすぎるぞ……こりゃ、諦めるしかないかな……

(恋殿を……必ず幸せにするのですぞ!)

諦めかけたその時、頭にねねの音が響いた。

「そう……だな……」

悪いな愛紗、また決意が揺らぐところだった。

「う、ううううう!」

体が熱くなる。俺は……

「おおおおお!」

その熱さを解放した。

「なんだと!?!」

アーチャーの驚愕の声。俺は背中に六本の光の剣……いや、六本のアルテマウエポンを翼のように展開する。

「いくぞアーチャー……貴様の余力は十分か」

名台詞を奪ってアーチャーに向かっていく。

「ハアアアッ！！」

「く……！」

「ウオオオオッ！！」

「ぬう……」

圧倒的な力でアーチャーを追い込む。余裕が出来たから恋たちの方を見たが、あちらももう終わりそうだった。

「……明命」

「はい！行きます！」

二人は武器を構える。

「……闇夜を駆ける（コン）……」

「……戦場を駆ける（ハウテン）……」

二人は真名を解放する。

「……疾風の一撃……！！」

「……一騎当千の将……！！」

「ギギヤ……！！！！！！！！！！」

「なんだとおおお！？！？」

そのまま敵の二人は消え去った。

「……ごつちも終いにしようぜアーチャアアアッ！」

俺は全てのキープレードを振り回す。

「ラストアルカナム!!」

シャキーンッ!

「ぐう・・・!」

そのままアーチャーは消えていった。

「・・・于吉! 覚悟おおっ!」

俺は于吉に向かって突っ込む。

「おやおや・・・やはりあの程度では勝てませんか・・・今回はここまでにさせていただきますよ」

そう言って于吉は消えた。于吉が消えた瞬間、体から力が一気に抜ける。

「・・・咲!」

恋が心配そうに駆け寄ってくる。

「・・・大丈夫・・・土郎や亮は?」

「・・・大丈夫、みんな無事?」

「何故に疑問系なんだ・・・」

「……だって亮は倒れてるし、士郎は血塗れだから……」

「ええ！？……明命！本当か？」

「え？……あ、亮さん！？」

明命が亮に駆け寄る。士郎はセイバーが支えているみたいだった。
……俺たちは亮を連れて家に戻った……

遭遇（後書き）

今回はこちらの方々をお呼びしております。

蓮華

「みんな・・・覚えていてくれたか？」

思春

「・・・」

愛紗

「あ・・・お久しぶりです・・・」

鈴々

「みんなー！久しぶりなのだー！！」

夏候惇

「はーっはっはっは！久しぶりだな皆の衆！」

夏候淵

「姉者・・・少しうるさいぞ」

亮

「？・・・なんでこの六人・・・？」

咲

「……あ……」

亮

「咲？」

お気付きですか？

咲

「……ゲームか」

はい。

亮

「は？」

咲

「今度ゲーセンで稼働する格闘ゲーム『真・恋姫夢想』の操作キヤラなんだよこの六人」

亮

「へへ。よかったな蓮華、思春」

蓮華

「ああ、ありがとう」

思春

「……まあな」

咲

「愛紗たちもおめでとう」

愛紗

「い、いえ……実は私たちの登場が決めた際にですね……桃香様が駄々をこねまして……」

鈴々

「でも、前、桃香お姉ちゃんは一人だけで出たのだー、って言ったら諦めたのだ」

亮

「あー……まあ、夏候姉妹は？」

夏候淵

「また普段呼ばれないような呼び方を使ったな……」

夏候惇

「うむ！華琳様は『頑張つてきなさい』と私たちを応援してくださいましたのだ！」

蓮華

「……曹操はまともだな……姉様は……」

亮

「……わかるよそれ」

咲

「……とりあえずみんな頑張れよな」

亮

「そんじゃ、今回はここまで……次回の真似と開閉と世界旅行」

咲

「次回もまた見てください!」

それではまた次回会いましょう。

襲撃者（前書き）

最近、遅くなることが多いです・・・ではございませぬ。

襲撃者

咲

「……亮くんが目を覚まさない？」

「……ああ、昨日気絶してそのまんまなんだよ」

朝になって最初の問題がおきた。亮が目を覚まさないのだ。明命や恋はかなり心配していた。

「もしかして、あのありえない魔術の後遺症かなにか？」

凜が聞いてきたが、俺にはよくわからなかった。

「……そっか、まあ、アイツはいつか目覚めるわよ。……咲くん？少し聞きたいことがあるの」

「……なんだ？」

「……わたしの、アーチャーの正体よ」

「……！」

やっぱり聞きにきたか……

「……もうアーチャーは消えたんだから、これは聞いても問題はないわよね？」

「・・・ふう・・・わかった。凜にだけ言っよ。他言は無用な、わかったか？」

コクツ、と頷く凜。

「まず凜はアーチャーの正体をなんだと推測した？」

「わたし？わたしはセイバーに縁のある騎士じゃないかと思ったわ・・・ほら、アイツって意外にセイバーのことか気にかけてたら・・・」

「・・・まあ、縁はあるよなあ・・・」

「やっぱり？じゃあ、円卓の騎士の誰かかしら？」

「ハズレ。アーチャーの正体は・・・英霊エミヤだ」

「え・・・？」

凜がフリーズする。

「ちょ、ちょっとまって・・・エミヤって衛宮くんのこと？」

「そう。自分の理想を追い続けた未来の鋼鉄の英雄。アーチャーは衛宮士郎の未来なんだよ」

「・・・まさか、未来の英雄まで呼ぶなんて・・・」

「・・・だからさ、もしアイツがアーチャーみたいになりそうだったら助けてやれよ？」

「・・・わかったわ・・・それじゃあ、あとひとつ」

「?・・・なに?」

「この世界は・・・貴方たちの世界ではどんなお話だったの?」

これは言ってもいいのかな・・・?

「・・・俺たちの世界では、この話は三つに分かれる」

「・・・三つに?」

「そう。・・・ま、単純な話、士郎が誰を好きになっただかで話が変わるな」

「はあ!?!それだけで話が分かれるの!?!」

「そうだよ。簡単に分けちまえばセイバールト、凜ルート、桜ルート、に分けられるかな?」

「え!?!わたしまであるの!?!」

「そうだよ?」

「・・・あー、わけわかんない・・・ってちょっとまちなさい」

「なんだ？」

「桜の話……ってことは……知ってるの？」

「……ああ、凜と桜が姉妹だったこと？」

「！？……やっぱり知っているのね……」

凜が落ち込んだ表情を浮かべた。

「安心しろよ。もう桜は元に戻ったから」

「……それってどういう……」

「桜を蝕んでた蟲は全て消滅させたからな。もう桜が苦しむことはない」

「……ホント？」

「嘘ついてどうする」

「あ……さく、ら……グスッ」

凜の目に涙が浮かぶ。

「……とりあえず、士郎は？全然見かけないんだけど」

「？貴方なら話を知ってるんだからわかるんじゃないの？」

「・・・悪いけどこの世界は亮の方が知っているから・・・」

「こら辺の話はよく覚えていない。」

「・・・俺は亮を見てくるよ」

そう言っつて俺は部屋に戻った。

そして亮を診ていたらいきなり凜が部屋に入ってきた。

「・・・また悪いんだけど・・・」

「・・・セイバーか士郎が飛び出したのか？」

「セイバーよ。教会に行くつて言うてすぐに行っちゃったわ。また追ってくれないかしら？亮くんはわたしが診てるから」

「・・・わかった。恋、あと明命はどうする？」

「・・・私も行きます。亮さんだったらどんな状況でも私を行かせるでしょうから・・・」

「・・・別に、亮が心配なら残っていいんだぞ？」

「いえ、いきます。なにか役に立つことがあれば、ですけど」

「充分役に立つさ。じゃあ行くぞ」

行こうとした瞬間、凜に呼び止められる。

「・・・咲くん」

「ん？」

「さっきなアーチャーの話なんだけど・・・別に、英雄と呼ばれたのなら士郎としての望みは果たせたんじゃないの？なのに士郎をアーチャーみたいにしなくて・・・」

「・・・アイツは、人を助けるために世界と契約した。だけど、そこでアイツがやらされたことは、単なる掃除屋だったんだ・・・」

「・・・それって」

「終には衛宮士郎としての目標も摩耗して昔の自分を怨み、憎んだ」

「・・・」

「・・・この話は追々するさ。今はセイバーを追いかけてくる」

「……わかったわ。セイバーを頼むわね」

そうして俺たちは教会に向けて走り出した。

亮

……おかしいな夢を見た。自分の存在が判らなくなって自分が自分じゃなくなる夢。……確かに記憶に残るほどの強烈な、そして鮮明な夢だ。……俺は誰？ 私は誰？ 僕は誰？ 僕は誰？ 俺はだれ？ だれだれだれだれだれだれだれ？

「……つわあああつ！？」

俺は布団から跳ね起きる。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

全身に冷や汗をかきながら立ち上がる。

「・・・みんなは・・・？」

そして居間に行ったとき、体に寒気が走った。

「言峰・・・綺礼」

そう、居間には遠坂とこの世界での黒幕の言峰がいた。そして言峰は遠坂に向かって攻撃を加えようとしていた。

「遠坂、危ない！」

「・・・え！？」

ズガア！

「じぶっ・・・」

「遠坂ッ！」

俺は遠坂に駆け寄る。

「・・・貴様が声をかけたから若干避けられたか・・・」

「ぐ・・・綺礼・・・アンタ・・・」

「残念だったな凜。生憎とランサーのマスターは私だ」

「・・・何の用だアンタ」

「なに、大した用ではないさ。ただ単に聖杯を渡してもらおうと思
ってな」

「・・・それはイリヤのことが・・・悪いけど、アンタに渡す気は
更々ないね」

「別に渡さなくとも奪えばよい」

俺はケータイを取り出す。

「中国拳法には中国拳法だ！モーションキャプチャー！」

言峰が踏み込んでくる。俺はその前に物真似を終わらせる。

「古菲！」

俺はネギまの生徒の一人、古菲に変わる。

「フンッ！」

「ハイイツ！」

バシィッ！

初撃はなんとか受け止める。

「ほう……中国拳法か……」

「……」

言峰は大して動じずに次を叩き込んでくる。

「チツ……ホントに単なる真似事か？随分と動きが洗練されてる
じゃなねえか」

「真似事さ、極めたものには通じんが、貴様みたいなものには通じ
るさ。貴様の方こそ真似事だからな」

「く……」

確かに俺のは所詮真似事。無理があるかもしれない。けど、

「諦めるつもりは更々ないんだよ！」

俺は突っ込んでいく。

「ハイハイハイハイハイーッ！」

決死に放った拳は……

「遅いな」

軽く避けられてしまった。

「……！アデアッ……！」

「ハアッ！」

ドガンッ！

「がつ！？」

アーティファクトを出そうとした瞬間、拳を受けて壁際まで吹っ飛ばされる。

「ここまでだな。なに、命までは取らんさ」

「ぐ・・・亮、くん」

「わかって、るよ・・・」

俺と遠坂は無理矢理立ち上がる。

「ほう・・・無駄と判つてもまだやるか」

「無駄なことなんて存在しない！何かをした結果は必ず何かに繋がるのだから！」

「そうよ・・・綺礼。アンタには負けなわ！」

そして俺たちは言峰に突っ込んでいった・・・

咲

「見えたぞ二人とも！」

俺は恋と明命と共に教会に来ていた。すると中からセイバー士郎が出てきた。

「士郎！セイバー！」

「咲！来てくれたのですか」

セイバーが声をかけてきた。

「……そうだ聞いてくれ、黒幕は……」

「判ってる。言峰だろう？」

「……ああ」

「……士郎、なんで怪我してるの？」

恋が士郎に聞いた。

「あ、ああ・・・ランサーにやられたんだ」

「・・・恋は、そんなことしてない」

「違う違う、恋じゃなくて青いランサーだ。でも、今はアイツが時間稼いでくれて・・・」

「・・・!」

すると恋が教会に向けて走っていった。

「お、おい!恋!」

「・・・ランサーを助ける」

「・・・たく、仕方がない、俺も・・・つて明命?」

明命を見ると顔を青くしてガタガタ震えていた。

「亮・・・さん・・・」

「明命?」

「・・・亮さん!」

明命は今来た道を引き返していく。

「え・・・明命!?... 士郎、セイバー。明命を頼む!」

俺は恋を追って教会に入ってしまった。

「……！」

中に入った途端体を襲う悪寒。そして地下への階段を降りたところでギルガメツシユと対峙する恋とランサーを見つけた。

「……何者だ女」

ギルガメツシユが恋を睨む。

「……名乗るときはまず自分から」

「ふーはははは！雑種風情が我に何様のつもりで名を聞く。王が聞いておるのだぞ？貴様から名乗るのが普通である」

「……お前に名乗る名前はない」

「ほう……女、貴様は英霊でありながら礼儀は持たぬと言つのか」

「……お前は別、礼儀はいらない」

「むー」

ギルガメッシュにズバズバ言いたいことを言う恋。

「・・・ランサーの嬢ちゃん。悪いことは言わねえ。すぐに消えな」

「・・・(フルフル)」

「ああ？」

「・・・ここでランサーは消させない」

「・・・なんだ？オレが負けると思ってたのか？」

「・・・一人より、二人の方が確実」

「・・・は、違いねえ」

方天画戟とゲイボルクを構える二人のランサー。

「雑種がいくら集まるうとも我の敵ではないわ！」

そして戦闘が始まった。

「ハアッ！」

「・・・えい」

カキヤアン！

「そらよ！」

「効かぬわ！」

カキイン！

ランサーと恋の二人がかりでもギルガメッシュは動じない。

「ふはは！どうした、まるで手応えがないぞ？」

「チッ・・・」

「くっ・・・」

こんなに狭いところじゃ恋の宝具は使えない・・・

「・・・ふむ、」
「ここら辺にしておくか」

パチン、と指を鳴らした瞬間、いきなり鎖が現れてランサーと恋を縛る。

「なにっ!?!」

「あぐ……!」

「恋!」

俺は恋に近寄ろうとするが、

「失せる雑種」

放たれる宝具に阻まれて近づけない。ギルガメッシュは恋に近づいていく。

「ほう、女。よく見ればセイバーには劣るが中々整った顔をしているではないか。どうだ? 我に忠誠を誓えば、生かしておいてやってもよいぞ?」

その言葉に恋は首をふる。

「……いらない」

「なに?」

「お前みたいなやつに……忠誠を誓いたくはない」

「なんだと……?」

「……恋が忠誠を誓うのは、月と桃香と蓮華……そして咲だけ」

「……恋」

「……ふん」

グイッ、と鎖が引かれる。

「あう……」

「ならば貴様は死ぬ」

ギルガメッシュがどこから取り出したのか、剣を恋に向けて振りかぶる。

「やめろ!」

「……雑種が我に命令するな」

更に強く引かれる鎖。

「……うぐ……あ……」

恋の痛みに苦しむ顔を見た瞬間、何かがキレた。

「やめろって……言っただろうが————!!」

キーブレードが ブレードに変わる。

「開け！怨念の溜まりし墓場よ！集え！担い手をなくした鍵たちよ
！」

辺りに世界が広がる。

「固有結界だと・・・！？」

ギルガメツシユの顔が驚愕に染まる。

「さあ、貴様はシネ」

俺は無限に散らばるキーブレードをギルガメツシユに飛ばす。

「凶に乗るな雑種うううう！！」

ギルガメツシユも負けじと宝具を打ち出す。

「凶に乗る？・・・ハッ、凶に乗ってんのは・・・オマエノハウダ
ロウガ」

構わずキーブレードを発射し続ける。

「おい坊主！そろそろ退くぞ！」

「ウルサイ、ヒクナラキサマヒトリデヒケ」

「・・・咲？」

なんだ恋。そんな顔で俺を見るな。

「・・・咲、ごめん」

ガスッ！

「・・・え？」

恋に・・・殴られて・・・意識・・・が・・・

「・・・ランサー、協力して」

「おう、今なら逃げられるな」

その言葉を最後に・・・俺の意識は・・・完全に闇へ落ちた・・・

襲撃者（後書き）

蓮華

「私の夢を叶えるコーナー！」

亮

「また唐突だな」

咲

「・・・中の人」

蓮華

「私って実は呉の国にある茶屋とかの店員になってみたかったのー！」

亮

「顔が凄く赤いぞ・・・」

蓮華

「私は茶屋の店員な。亮と咲と明命はお客様な。私がいらっしやいませー！ご注文はなんですか？と言っからなんか面白いことを言え」

明命

「私もですか!？」

蓮華

「いらっしやいませー！ご注文はなんですか？」

三人

『 × 』

蓮華

「ようし！一人ずつ聞いていくぞ！まず亮、何て言った」

亮

「君を・・・テイクアウトで」

蓮華

「どこのキザ野郎だ！？そもそもここは呉の国なんだよ！テイクアウトとか言われても「はあ？」って感じだよ！二十五点」

亮

「低っ！？」

蓮華

「次は咲だ」

咲

「ラーメン大盛り一杯で」

蓮華

「あるわけないだろーッ！茶屋って言うてんだろ！？あるのは菓子と茶だけなんだよ！それぐらいわかれ！三十点」

亮

「負けたあああ！」

蓮華

「次、明命」

明命

「お猫様一匹お願いします」

蓮華

「だからあるわきゃねーんだよ！この時代にはラーメンはともかく
ペットシヨップなんてあるわけないんだよ！いい加減わかれ！六十
点」

二人

「ちくしょーっ！！」

明命

「えへへ・・・」

今回はこのくらいにしましょう。

亮

「あれ？もう終わりか？」

次回もまたやりますから。

蓮華

「なんだと！？私はまたこんな恥ずかしいことをやらされるのか？」

亮

「頑張れ・・・」

咲

「それでは次回の真似と開閉と世界旅行」

明命

「次回もまた見てください!!」

それではまた次回会いましょう。

仲間く決着く（前書き）

頭痛いのが治りません・・・ではどうぞ。

仲間く決着く

亮く

「……さん！亮さん！」

あれ……声がする……

「……明……命……？」

「亮さん！目を覚ましたんですね！」

「え……？うぐつ！？」

起き上がるうとした瞬間、激痛が走る。

「亮さん！？大丈夫ですか！？」

「……あく……あ……」

「亮さん、喋らないで下さい」

そつだ……俺は遠坂と言峰を倒そうとしたんだ……けど、俺たちは返り討ちに遭ってしまったんだ……

「うぐつ！？……明命……遠坂は……」

「いま衛宮様が治療をしています。咲さんが帰ってくるまで頑張ってください！」

「……」

しかし、俺は耐えきれなくなり、意識を手放した……

「……うっ」

「お、目が覚めたか？坊主」

「……ッ！ラララ、ランサー！？なんでここに……!？」

「ん？いやなに、ランサーの嬢ちゃんとそのマスターに助けられたんでね。詫びの印でこうしてお前を看てやってたんだよ」

「……そうか、悪い、助かった」

「おっと、礼なら嬢ちゃんのマスターに言いな。アイツが治したんだからな」

「あ、ああ……」

俺はランサーと共に居間に行く。やっぱりメチャクチャだったが、みんな揃っていた。

「みんな・・・」

「目が覚めたのか亮」

士郎が心配そうに声をかけてくる。

「ああ、大丈夫だ」

「よかったです・・・亮さん、本当に大丈夫ですか？」

「おう。すっかり元気だ。・・・遠坂は？」

「・・・残念だけど、わたしは動けないわ」

「・・・そっか」

そして作戦会議に入る。

「・・・ランサー？お前はここに居て良いのか？」

「さあな。オレはお前らと戦う気はねえし。今のところ言峰からの命令もないしな」

「じゃあさ、俺たちに協力してくれないか？」

「馬鹿言うな。もし協力したとしても言峰に令呪が使われたら一発でアウトだぜ？」

「……言峰との契約が無ければいいんだろ？」

俺はニヤリ、と笑って言った。

「士郎、キャスターのルールブレイカーを投影出来るか？」

「ん……ああ、多分、できると思うけど……あ、なるほど」

「しかし亮。ランサーの契約を切ってもマスターがいなければ……」

セイバーが聞いてくる。

「大丈夫だ。そこで遠坂に頼みたい」

「わたしに？」

「ああ。遠坂はまだ令呪が残ってるし、ランサーが承諾してくれれば……」

「……わたしは構わないわ」

「……ランサー」

「・・・面白れえじゃねえか。いいぜ、オレは嬢ちゃんのサーバー
ントになるぜ」

よし・・・次は・・・

「悪い、俺、ちょっと出掛けてくる」

そう言っつて俺はある場所へ向かう。

そして帰ってくると士郎たちが凄い反応した。

「「桜!?!」」

「あ・・・衛宮先輩・・・遠坂先輩・・・」

「桜、士郎はまだだけど、遠坂はもう知ってるよ」

「・・・でも・・・」

「はぁ・・・士郎、今から桜がなにを言っても嫌うなよ?」

「当たり前だろ?桜は桜だ。どんな秘密を持っていても俺は桜を軽蔑したりはしないさ」

「先輩・・・」

そして桜は意を決してみんなに向き直る。

「ライダー、出てきて」

「はい。サクラ」

「・・・ッ!ライダー!?!」

「先輩・・・実はわたし・・・魔術師なんです」

「そうだったのか・・・」

「嫌ですよ。何度もライダーは先輩を襲いました。・・・兄さんも抑えられないわたしなんて・・・」

「桜、そんなの気にするなよ」

「先輩・・・」

「・・・桜」

「遠坂先輩・・・」

遠坂が桜を抱く。

「え……!?!」

「ゴメンね……迎えに行けなくてゴメンね……!」

「……はい、“姉さん”」

「……咲?どうしたんだ?さっきから一言も話してないけど」

「……ああ、ちょっと不安でさ……」

「不安?」

「……俺、最近闇に囚われてる気がするんだ……」

「闇に……」

「さっきも恋がやられそうになったのを見て、我を忘れて暴走したんだ……」

「……大丈夫さ、俺なんて最近、自分自体が判らなくなる夢を見るからな」

「……でも」

「いざって時は俺たちが止めてやる。だからお前は何も心配するな」

「・・・ああ」

「・・・それで、どうするんだ？」

士郎が聞いてくる。

「・・・ああ、今更言つがイリヤは拐われてしまった・・・それはみんな判っているな？」

コクツ、と頷く面々。

「ここにはまだサーヴァントが五人もいる。つまりはまだ聖杯は満ちていない」

「・・・」

「とりあえず言峰とギルガメッシュを倒せばあとはなんとかなる。・・・頼むぜ」

「やってやるうじやなえか。言峰の野郎には借りがあるんだ。それを返さなきゃな」

「・・・私はサクラを助けてくれたお礼として動きます。リョウ。貴方にはいくら感謝しても足りませんから」

「・・・恋も、咲のため、みんなのために戦う」

「・・・私はシロウの剣だ。シロウが命じれば私はなんでもする」

「今更ですよ亮さん。私はいつまでも亮さんと一緒にいます」

サーヴァントのみんなが賛同してくれる。

「・・・ありがとう。少し休憩をとって、二時間後に出発するぞ」

「・・・どこに綺礼がいるかわかってんの？」

遠坂に言われる。

「あそこのお寺でしょ？」

名前忘れたけど。

「・・・参加できないのが腹立たしいわね・・・」

「大丈夫だよ遠坂。お前には家を片付けると言う役目があるから」

遠坂が「何よそれーッ！」と言っていたが、無視して部屋に戻る。

俺は明命と共にいた。

「……亮さん、これがくらいまっくす、ってやつですか？」

「どこでそんな言葉をおぼえてくるんだか……そうだよ。蓮華たちの世界と同じ。全てが終われば俺たちは消える」

「私は……亮さんがいればどこの世界でもいいです……」

明命が体を寄せてくる。

「……ああ、俺もだ」

そのまま時間が過ぎていった……

咲

「……咲」

「・・・恋」

「・・・不安？」

「前も聞かれたよな・・・ああ、今は別の意味で不安だ」

「大丈夫」

「恋？」

「咲がどうなっても、恋は咲の味方だから・・・」

「恋・・・」

「・・・助け合っのが家族」

「・・・そうだな。よろしく、恋」

「・・・(コクッ)」

恋に感謝しながら俺は時を過ごした・・・

亮

そして時が来た。俺たちは玄関に集合する。

「よし！行こう！」

俺たちは目的地へ向かっていった……

「……」

そして、遂に柳洞寺にたどり着いた。

「……よし、一気に目的地へ向かうぞ」

階段を上がる。門番のアサシンの姿はなかった。そして、門を潜る時、士郎が言う。

「……セイバー」

多分、士郎はセイバーと別れたくはないのだろう。士郎はとっくに聖杯を壊すと心に決めている。だがそれは同時にサーヴァントの消失を意味する。

「……」

見ると桜も顔を伏せていた。一時期とはいえ、黒聖杯と繋がってたんだから、桜にはライダーを留めておくだけの魔力はあるはずだ。桜は自分のサーヴァントだけを残したくないと思っっているのだろう。

「……」

そして士郎はセイバーに、俺たちに向き直る。

「……行こう。これが最後の戦いだ」

その言葉にみんなが頷く。

「……来たか、待ちわびたぞ、セイバー」

境内にいたのは・・・ギルガメツシュだった。

「・・・ギルガメツシュ。貴方の目的はなんだ。あの呪い――聖杯と偽っていたモノを使って、何を望む」

セイバーが言う。

「望みなどないと言っただろう。言峰が聖杯をどう扱おうと我は知らん。今のところ、私の関心はおまえだけだ」

そしてギルガメツシュが片腕を上げると、背後に数多の宝具が現れる。そして・・・

「・・・なんだあ？随分と面白そうじゃないかい？」

「ふ、はははは。確かに、だがあまり長くは居たくないな。早く最愛の妻に会いたいからな」

後ろから現れるFateEXTRAのライダーとランサー。それに合わせてこちらのセイバーとランサーとライダーが前に出る。

「・・・セイバー、頼む」

「はい」

「ランサー・・・」

「んな顔をすんな坊主。お前はあのアサシンと一緒に先へ行け」

「・・・わかった。頑張れよな」

「サクラ、私の後ろに」

「うん。気をつけてねライダー」

「桜……」

「……先輩。必ず無事に戻ってきてきて下さいね」

「……ああ」

そして俺と咲と恋、明命と土郎は境内の奥へ向けて走り出す。

「……チッ」

そこにもサーヴァントがいた。

「む？来たか……余は待ちくたびれたぞ」

「神様を待たせるなんて言語道断！バリバリ呪うぞ」

先程と同じくFateEXTRAのセイバーとキャスターがいた。

「セイバー……!？」

士郎が声を上げる。

「落ち着けよ士郎。アイツは別のセイバーだ。真名も違う」

咲が士郎に向けて言う。

「……咲、ここは恋がやる」

「……妥当だな。まかせた恋」

「……(コクッ)」

「明命……」

「わかっています。倒せば良いのですよね?」

「……おっ、思いっきりやっています」

「……はい」

三人は更に奥へ走り出す。すると・・・

「おや？もう来ましたか・・・随分と早いですねえ」

・・・于吉がいた。

「・・・お前を倒せば奴らは消える。倒させてもらうぞ」

「大澤亮。貴方にはちゃんと相手を用意していますよ」

パチン、と指をならす。そして現れたのは・・・

「・・・な・・・に・・・!?!?」

「・・・亮、か・・・」

・・・そこにいたのは・・・思春だった・・・

「思春・・・いや！偽者だ！偽者を使って俺を惑わそうとしてるんだろ!?!?」

あくまでも隙を見せないように叫ぶ・・・が、見てしまった。思春が服の裾に、俺が渡したボタンを着けていることを――

「・・・あ・・・」

「りょ、う・・・」

思春が苦しそうに声を出す。よく見ると思春は顔にびっしりと汗を

搔いていた。

「思春……？」

「わた、し……を……倒せ……！」

ゆっくりと普通の剣を構える思春。

「貴様……于吉！」

「無駄ですよ。甘寧には念入りに術を掛けましたからね。その内理性も無くなるでしょう」

そして思春が突っ込んでくる。俺はすぐに鈴音を構えて受け止める。

カキイーン！

「ぐ……」

「……体が、言うことを効かない……亮、頼む……私を……倒せ……」

「出来るわけないだろ！？思春は……俺の……大事な仲間なんだから……！」

「甘ったれたことを言うな！」

ビクッ、と体が跳ねる。

「お前に・・・頼んでいるんだ・・・」

「思春・・・」

「・・・もう、限界だ・・・亮。これが最後だ。“私を倒せ”」

「う、おおおおおー!!」

力任せに思春をぶっ飛ばす。

「そつだ・・・それでいい・・・ぐっ!？」

思春が苦しみ出す。

「ぐ・・・が・・・あ、あああああ!!」

その時、思春の目から理性が消えた。

「————!!」

聞き取れない叫びを発しながら思春が再び突っ込んでくる。

「く・・・思春・・・」

「士郎!ここは俺と亮が何とかする!お前は言峰を!」

「わかった!」

そうして俺は思春。咲は于吉へ向き直る。

「まってる思春……今、楽にしてやるから……！」

戦いが、始まった。

「……………」

「ハアッ！」

カキヤアン！

いくら理性が無くとも思春の鋭さは衰えない。赤く染まった目は俺を殺す、と殺気を放っている。

「ぐ……！流石思春……」

「……………」

だが、とても痛々しい。俺は今、凄く悲しんでいる。

「ていつ！」

カキン！

思春は勢いは衰えずに、ひたすら攻めてくる。

「ぐ……く……う……」

段々と押されてくる。……ただの剣でよくここまで戦えるものだ。

「ーッ！」

カキヤアン！

「ぐわっ！？」

思春の一撃で体を軽々飛ばされる。

「ぐ……う……」

勝てない……このままじゃあ……この間合いじゃケータイをいじる隙もない。

「……ダメか……」

諦めようとした瞬間、辺りが白い景色に覆われる。

「え……？」

そして・・・その先には思春が立っていた。

「・・・思春？」

「・・・真似をしる」

「・・・？」

「私の真似をしると言っている」

「でも・・・ケータイを使う隙なんて・・・」

「そのまま真似る。常に私と鍛練していたんだ。私の動きは全て分かるだろう」

「・・・」

そして思春がフツ、と笑って、

「・・・それに、真似はお前の専売特許だろう。・・・頑張れよ」

思春に言われる珍しい激励。・・・そうだな。

「・・・ああ。真似は俺の専売特許だ。必ずお前を解放してやる」

「・・・ああ、頼む」

「・・・ハッ」

そして戻る景色。俺は近くに落ちた鈴音を拾い。目を瞑る。

「ふうう・・・」

息を吸って呼吸を整え、思春の全てを思い出す。

「・・・」

ほんの少しの動きも全て真似するつもりで意識を集中させる。

「……………」

思春が突っ込んでくる。だが、それよりも早く、

「キャプチャー、コンプリート」

目を開き、迫る一撃を逆手に持った鈴音で受け止める。

「!?!」

「・・・ハアッ!」

カキヤアン!

思春を吹き飛ばす。

「……」

そして鈴音を構えて、言う。

「……鈴の音は黄泉路を誘う道しるべと知れ！」

そう言い放って思春に攻め寄る。

「ハアアアツ！」

「……！」

カキヤアン！

力一杯振り切った斬撃は……思春の剣をぶっ飛ばしていた。

「ウオオオオツ！これで、終わりだあああ！」

思春の横を駆け抜け……

ズシャアツ！！

……脇腹を切り裂いた。

「……………」

思春は断末魔を叫び、髪がほどけながら仰向けに倒れた。俺は思春に駆け寄る。

「……思春！」

「……亮……よくやった……」

「思春、正気に……」

「ああ……お前の……お陰だな……」

「思春、喋るな！今治療を……」

「いい……私には分かるんだ……私は……蓮華様の元へ帰れる……」

そして思春の体が光に包まれ始める。

「私の武器は……ちゃんと手入れしているようだな……」

「当たり前だろっ！思春から借りた大切な武器なんだ……粗末に扱わずがな！」

「ふ……そうか……なあ亮……明命はどうしてる？」

「今も別の場所で戦ってくれている」

「そうではない……幸せかと言う意味だ」

「・・・ああ、俺は俺なりに明命を幸せにしてるよ」

「・・・そうか・・・それを聞ければ・・・」

「思春？」

『・・・満足だ・・・』

そして消える思春。残っているものは思春の髪を纏めていた布だけだ。俺はその布を握りしめる。

「思春・・・思春！思春ー！ーッ！ー！うわあああ！ー！」

俺はずっと泣き叫んだ・・・

咲

「喰らいなさい」

ド「オオンミッー」

「・・・くっ」

于吉は何か黒い波動みたいなモノを撃ち続ける。

「リフレク！」

「無駄ですよ」

パライイン！

「な！？ぐあああ！？」

黒い波動を直に受けて吹き飛ぶ。

「もう終わりですか？まったく・・・あの左慈を倒したような力を使ってくればいいものを・・・」

「それは・・・固有結界のことか・・・」

あれは・・・

「ええ、あの力は素晴らしい！是非見たいものです」

「断る」

「ほう・・・使わないのですか？いや、使えない、の方が正しいみたいですね」

「・・・そうだな。確かに俺はそう自由に力を使えない」

「・・・」

「でもな、固有結界は使えずとも・・・」

キープレードが消えて、背中から六本のアルテムウエポンが現れる。

「俺には・・・覚悟と言う名の力がある！！」

「は、無駄ですよ。貴方の力では私の障壁は破れない」

「それは・・・」

二本の鍵を持ち、

「・・・どうかな!？」

投げる。

「・・・ふん」

カキイーン!

しかしその二本は容易く防御され、于吉の背後に飛んでいく。

「まだだ!」

更に二本のキープレードを持って斬りかかる。

「無駄ですよ」

于吉は俺に対して障壁を展開する・・・が、

フォン、フォン、フォン！！

後ろからさつき投げたキープレードが迫る。

「・・・ストライクレイド」

「小癩な！」

于吉は後ろから迫るキープレードを対処しようとする。

「もらったあ！」

「舐めるなあ！」

カキイイン！

「な・・・！？」

四本のアルテマウエポン・・・それらを全てはね飛ばす。

「————！！」

「・・・于吉、チェックメイトだ」

頭に文字が浮かぶ。

鶴翼、欠落ヲ不ラス

心技、泰山ニ至リ

心技、黄河ヲ渡ル

唯名、別天ニ納メ

両雄、共ニ命ヲ別ツ

アーチャーが確か使っていた技。それを今、六本のキープレードで再現する……!

「鶴翼三連!叩き込む!」

パライイン!

于吉の障壁を抜けて……于吉を切り裂く……!

「グアアアアアツ!?!」

……決まった。今のは完璧だ。……まさかゲームで見た技を再現できるとはな……

「く……五十嵐咲……!必ず……また……!」

于吉はそう言って消え去る。俺はホッととしてその場に座り込む。

「まず……やりすぎた……」

力が残っていない……亮は……？

「……亮……」

俺は亮がいる方向に向けて歩き出した。

他の所も決着が付けられようとしていた。

「……！」

セイバーは鞘を使い、ギルガメッシュへ向けて駆ける。鎧に回した魔力も剣に込めて。

「ぬううう……！！おのれ、そのような小細工で……！」

「約束された（エクス）……！」

「セイバーアアアアア……！！……！！……！」

「勝利の剣^{カリバー}……！」

ギルガメッシュを両断する。

「へっ、終いにしようぜランサー」

そう言つて青い槍兵は身構える。

「刺し穿つ（ゲイ）——」

一気に魔力を解放する。

「——死棘の槍^{ポルク}——！！」

「ぬおおおお！？」

「サクラ、これで決めます！」

ライダーは後ろに飛ぶ。

「騎英の（ベルレ）——」

ライダーは自身と同じライダーに突撃する。

「——手綱^{フォー}——！！！！」

「なんだつてええええつ！？」

「……これで終わり」

「……宝具は使わせんぞ！」

恋に向けて赤いセイバーが駆ける。

「花散る天幕ロサ・イクトウス——！！」

「……効かない」

軽々しくセイバーの斬撃を跳ね返す。

「く……！！？」

「もらった……」

武器を腰辺りに構える恋。

「“戦場を駆ける（ハウテン）——”」

自身の魔力が維持できる分を相手に叩き込む。

「一騎当千の将^{カケキ}——！」

光がセイバーを飲み込む。

「奏者……すまない……」

「炎天よ、走れ！」

「くっ！」

「まだまだです！氷天よ、碎け！」

「あぐ！？」

「もう終わりですか？」

「まだ……終わらないのです！」

明命はキャスターに向けて走る。

「突っ込んでくるとはおバカさんですね 炎天よー」

「闇夜を駆ける(コン)ー」

明命の姿が掻き消える。

「え!?!」

「――疾風の一撃――!」

突如キャスターの後ろに現れ、キャスターが気づく頃には、キャスターの全身から血が噴き出していた。

「きゃあああつ!?!?・・・ご主人・・・様」

亮

「・・・」

「・・・亮」

「・・・咲」

「・・・行こう、この世界の終焉へ」

「・・・ああ」

咲に促され、俺は布をポケットに入れた。

「・・・行こう！」

士郎が向かっていった先に走っていった・・・

そして追いつく。今まさに士郎は決着を着けようとしていた。

「ウオオオオオッ！」

士郎が突撃する。

「言峰綺礼——！」

そして遠坂から譲り受けたであろう短剣を言峰の胸に突き刺す。

「っ——！」

「っ——！」

そして土郎はありったけの魔力を左手に込め、短剣を殴る。

「 a t ”——！」

解放の意味を持つ言葉にて、全魔力が言峰を襲う。

そして言峰は倒れ、“泥”に吞まれる。

セイバーは何食わぬ顔でやってきて、聖杯を見上げる。

「・・・聖杯を破壊します。それが、私の役割です」

何時からか狂ってしまった聖杯を壊す――その瞬間がいまやってきた。

「マスター、命令を。貴方の命がなければ、アレは破壊できない」

セイバーが士郎に背を向けたまま言う。

「――シロウ、貴方の声で聞かせてほしい」

「――セイバー。その責務を、果たしてくれ」

その瞬間、辺りに光が満ち溢れ、全ての視界が白に染まった・・・

仲間〜決着〜（後書き）

Fate 編も終わりに近いので軽いアンケートを取ります。

・次の世界はどこがいい？

・東方

・ネギま！

・テイルズオブシンフォニアラタトスクの騎士

・ひぐらしのなく頃に

・リリナのAS

・・・こんなところです。どれがいいか意見をどんどん下さい。では本当の後書きをどうぞ。

蓮華

「私の夢を叶えるコーナー！」

亮

「つわ、最早二回目にして完全にやけくそになった！」

蓮華

「私、実は班長をやってみたかったのー！」

咲

「お前はその上を行く王だろうが・・・」

蓮華

「私は班長な。亮と咲と恋は班の人間な。私が「よし、全員揃ったな。じゃあ行くぞー！」と言っから後からなんか言え」

恋

「・・・捲き込まれた」

蓮華

「よし、全員揃ったな。じゃあ行くぞー！」

三人

「 × 」

蓮華

「ようしーつずつ聞いていくぞー！まず亮、何て言った」

亮

「コイツらなんか頼っておいて、俺と二人きりでデートしない？」

蓮華

「またキザ野郎かー！ツ！いつの時代の人間だよ！大体班長を務めるやつなんて真面目なんだよ！ナンパしたって「はあ、そうですか」で終わりだよ！十点」

亮

「すげえ下がった!？」

蓮華

「次、咲」

咲

「すみません班長。いくらなんでも朝っぱらから肉は……」

蓮華

「私はどこに連れてこうとしてるんだー!？朝から肉食う?良いんじゃないねえの別に!？でもな、大体班行動は朝飯はもう食ってきてるんだよ!浅はかすぎ!三十五点」

咲

「若干増えたぜ……」

蓮華

「最後、恋」

恋

「お腹空いたから……肉食べる」

蓮華

「いたよ!朝飯に肉所望するやつここにいたよ!つうか朝飯食べたんじゃないかねえのか!？」

恋

「……食べたけど空いた」

蓮華

「わかってるよ！どうせそうだと思ったよ！なんなんだよコイツら！必ずネタを固めてきやがって！でも面白い！八十点」

二人

「高あああ！？」

はい、今回はここまでです。

蓮華

「う・・・私はもう帰るっ！うわあああ！」

亮

「蓮華は泣きながら部屋から出ていった・・・」

咲

「何にせよ、次回の真似と開閉と世界旅行」

亮

「次回もまた見てくださいね！！」

それではまた次回会いましょう。

ちよみじなら〜 (前書き)

かなり短いです。ではどうぞ。

さようなら」

・・・光が消え、周りが見渡せるようになった。

「これで、終わったのですね」

セイバーは士郎に向けて言った。

「・・・ああ。これで終わりだ。もう、何も残っていない」

「そうですね。では私たちの契約もここまでですね。貴方の剣となり、敵を討ち、御身を守った。・・・この約束を、果たせて良かった」

「・・・そうだな、セイバーはよくやってくれた」

そして朝日が昇り、長かった夜が明ける。

「最後に、一つだけ伝えないと」

セイバーが強い意思を秘めた言葉で言う。

「・・・ああ、どんな？」

セイバーは士郎へ振り返る。そのまっすぐな瞳で士郎を見つめ、

「シロウーイー貴方を、愛している」

そんな言葉を、口にした。

風が吹く。わずかに目を閉じてすぐに目を開くが……そこにセイバーはいなかった。そして土郎はポツリ、と口にする。

「ああーイー本当に、おまえらしい」

この様子だと明命と恋を含めたサーヴァントはみんな消えただろう。

「……あ……」

「……時間か……」

案の定光に包まれて足から消え始める。

「え……？お、おい、なんでお前らが消えるんだよ！？」

士郎が慌てた様子で声をかけてくる。

「……終わりだよ」

「なんでさ？お前らはサーヴァントじゃないだろ？」

「前に言っただろ？俺たちは別世界の人間。物語を終わらせる為にやって来た」

「……じゃあ」

「……そう、この物語は終焉を迎えた。だけど勘違いするなよ士郎。俺らが消えてもお前たちの物語は続くからな。あくまでも一区切りついただけだ」

咲が言いたいことを言っていく。

「……あとさ、遠坂や桜には勝手に消えてゴメン、って伝えておいて」

俺は士郎に頼む。

「……それ、確実に俺に飛び火するだろ」

「あはははっ！まあいいじゃん。ついでに藤村先生とそこで寝てるイリヤと間桐先輩にもよろしく」

「？慎二にもか？」

「そ、多分新学期始まったら嫌なほどキャラ変わってるから半分笑いながら口にする。

「・・・時間だ、じゃあな士郎」

「・・・ああ」

「あと、道を踏み外すなよ」

そう言って俺たちはその世界から消えた・・・

おまじなうらゝ（後書き）

と言うわけで、Fateの皆さんお疲れさまでした！

Fate

「ワーーーーッ！」

亮

「テンション高……」

今回は主人公&ヒロインズを招いております。

亮

「うえ！？絶対その中の誰も「ワーーーーッ！」なんて言わないだろ
！」

士郎

「別にいいんじゃないか？」

凜

「そうそう。細かいことは気にしちゃダメよ」

桜

「その通りです」

セイバー

「……（恥ずかしい）」

咲

「そついや思ったんだけどさ。亮、なんか顔がボコボコじゃない？」

亮

「今さらか・・・ああ。二回連続のアレで蓮華が部屋に閉じ籠つてな。慰めにいったんだが、悪化した上に思春が勘違いをして・・・」

咲

「もういいや・・・」

士郎

「でも、やっと終わったんだよな」

セイバー

「そうですね。これでしたら早く休めればいいのですが・・・」

凜

「無理ね。セイバーは多分、あの道化師によって呼び出されるわね」

セイバー

「う・・・」

桜

「大丈夫ですよ。なんだかんだでFate最多殺人を記録してるのは・・・」

凜

「桜？」

黒桜

「・・・わたしですから」

亮

「うわわ！？桜が黒くなった！？アンリマユの契約を断ち切ったのに!？」

黒桜

「ふふふ・・・先輩？先輩はどんな秘密があってもわたしを受け入れてくれるんですよね？」

士郎

「さ、桜？なんか変だぞ・・・お、おい、変な影を出すな！い、や、やめ・・・!？」

セイバー

「シロウ！？シロウが何かに呑み込まれてますが!？」

凜

「ほっときなさいセイバー」

咲

「でもま、これで新たな世界だな。今度はどこだろう?？」

亮

「もつとでもいいや・・・」

凜

「それじゃあ、今回はここまでにしめしよつ」

亮

「次回の真似と開閉と世界旅行」

咲

「次回もまた見てください！」

黒桜

「それではまた次回会いましょう・・・」

凜

「・・・」

セイバー

「・・・」

次の世界への準備（前書き）

今回もかなり短いです。ではどうぞ。

次の世界への準備

・・・再び目を開けるとそこには白い空間、そして・・・

「ふむ、無事に物語を終わらしたようじゃの」

自称神様がいた。

「・・・爺さん、Fateの世界も物語を終わらしたぞ」

「・・・よし、なら次へ・・・」

「さてジジイ」

咲がまつたをかける。

「ん？なんじゃ？」

「なんじゃ？じゃねーよ。いい加減に教えろよ。なんで物語を終わらす必要があるか」

「・・・」

「どうした？何を黙っている」

「お、おい、咲？」

「・・・今はまだ話せん」

「なんだと・・・!?!?」

「時が来れば話そう。それまで待ってくれんか?」

「・・・咲」

「・・・わかったよ」

咲は渋々後ろに下がる。

「ところでお主たち。なにか体に違和感がないか?」

突然神がそんなことを言った。

「・・・?なにがさ」

「いや、別に無いのならそれで良いのじゃ」

「・・・」

いや、俺たちはお互いに体が、心がおかしくなってきた。

「・・・どうかしたかの?」

「いや、なんでもない・・・」

「なら良いがの・・・」

「なあ爺さん? 明命たちは・・・」

「……………」

「……………」

「それがのう……何の手違いか既に次の世界に送られてしまったのじゃ」

「……………」

まさかそんなことが……………」

「後をたどれば同じ世界には行けるのじゃが、同じ時間帯には行けないのじゃ」

それってつまり……………」

「……………明命たちと同じタイミングで会えない」

「下手したら数年くらい差が開いちゃうのか？」

「……………うむ、その可能性もある」

「……………でも、別にいいか」

「……………」

「そうそう。俺は恋に会えればいいんだよ」

「それは楽じゃのう……すまん。では送るぞ」

体が光に包まれる。

「……次は何処に行くのやら……」

「いいじゃん亮。どこだって」

「そつだな」

そして俺たちの意識は消えた……

次の世界への準備（後書き）

再び主人公二人の現時点でのステータス

亮

「また唐突な・・・」

大澤 亮

身長 170～180

体重 60～70

利き手 左（ただし、野球は右打ち右投げ）

年齢 15？

年齢が15？なのは世界の始まりで死んだとき、つまりは十五歳の体に戻るため、精神年齢はもう少し高い。

使用武器 剣 夫婦剣干将莫耶 鈴音

能力 ケータイを使った物真似能力。物真似をすると見た目、声、能力がそのキャラになる。ちなみに能力はワンランク下がる。

その他 魔力強化（武器、身体能力等） 基礎体術

五十嵐 咲

身長 150～160

体重 40～50

利き手 右（ただし、キープレードは左手で持つ）

年齢 15？

使用武器 片手キープレード（めぐりあう二人、アルテマウエポン等も） 夫婦剣干将莫耶

能力 なんでも開閉が出来る。ただし、対象のものに対して自身の負担が変わる。最悪死に至る。

その他 魔法各種 キープレードをボードに変える。 固有結界強化 変化

咲

「バリエーションが多いな」

亮

「その気になれば色々できるな咲」

咲

「かるいチートになってるな」

本当はまだまだありますが、スペースが足りなくなるのでここまです。

亮

「それでは次回の真似と開閉と世界旅行」

咲

「次回もまた見てくださいね」

それではまた次回会いましょう。

新たな世界へ（前書き）

新しい世界へ入ります。ではどうぞ。

新たな世界へ

「ん……って、うわあああ!?!」

目を開けるとやっぱり落下してました。

「さ、咲!?!」

「わかってる!開け!」

咲がキープレードをボードにしてその上に乗る。

「掴まれ、亮」

「おっ」

咲に掴まりゆっくりと地面に降りる。

「どこの世界だ……?」

「……て言うか俺たちは必ず夜に落ちるよな」

その通り。月も雲に隠れて辺りは真っ暗だった。

「……これじゃあどこがどこかも判らないな」

「現時点で咲の顔も見にくいからな。少し動けばすぐ迷子だ」

「そうだな・・・！？亮、構える！」

咲がいきなり干将莫耶を投げってくる。

「は？何をいきなり・・・！？」

その時、いきなり目の前から殺気を叩きつけられ、斬撃が迫る。

「ハアツ！」

カキイイン！

「！？」

不意打ちを止められたのが意外だったのだろう。相手は動揺している。

「セイツ！」

「く・・・」

カキヤアン！

カキン！

カアンツ！

「・・・この太刀筋・・・」

どこかで見たとような気がするけど・・・それで気が緩んだのか、相

手が今までより鋭い一撃が放たれ、干将莫耶が両方吹き飛ばされた。

「しまっ……!!」

「終わりです!」

俺は倒されてマウントポジションを取られ、首筋に刀をあてられる。咲の方を見ると、暗くてよくは判らないが、咲も制圧されてるようだった。……その時、更に足音が聞こえてくる。

「明命!恋!捕まえたのか?」

「はい、刹那さん」

「刹那……こつちも捕まえた」

「は?明命……?」

「恋……?」

俺は新たに現れた黒髪をサイドテールに縛った少女よりも俺に刀を向けている人影に目を凝らす。そして雲が切れ、月明かりが辺りをてらす。

「え……亮……さん?」

「……咲?」

「……明命!」

「恋！」

俺たちは、思っていたよりも早く、大事な人に会えた。

「ごめんなさい亮さん！」

「気にするな明命。俺も無視して戦ってたんだからおあいこだ」

「・・・咲」

「んな泣きそつな顔をするな。恋に泣かれたら俺がねねや詠に殺される」

「・・・(コクッ)」

俺たちは再会に喜んでいたが、少女が・・・桜咲刹那が声をかけてくる。

「あの・・・あなたたちは・・・」

「あ、ああ・・・俺は大澤亮。亮って呼んでくれ」

「俺は五十嵐咲だ。同じく名前で呼んでくれよ」

「私は桜咲刹那です」

「ああ。よろしく刹那」

「……とりあえず学園長の元に案内します。ついてきてください」

こうして俺たちは刹那に連れられ、学園長の元に案内された。

「失礼します学園長」

「……（ぬらりひょんが学校にいる）」

「……（ぬらりひょんだ）」

「……何か失礼なことを考えておらんかのう……」

「いえ、何も」

「……まあ、よしとしよう。お主たちが明命君たちが言っていた少年かね？」

「はい。学園長。こちらが私の話した方たちです」

明命が学園長の質問に答える。

「どうも、大澤亮です」

「・・・五十嵐咲です」

俺たちは会釈する。

「話は聞いておるぞ。なんでも世界を巡っておるようじゃの」

「はい。物語を終わらすこと。それが俺たちの使命です」

「ふむ、なるほど・・・ところでお主たち。これから住む宛はあるのかの？」

「・・・残念ながら」

「あるわけないだろ。こっちは今この世界に来たんだからな」

「・・・咲、言葉遣い」

「うるさいよ亮。敬語は苦手なんだ」

「フオフオフオ。別に気にしておらんよ。・・・ふむ、行く宛が無いのなら。この学園の生徒にならんか？」

まあ、まずは生徒にならないと色々とやりにくいよな。

「・・・あのさ刹那。今は何年？」

「はい？私は今は二年生ですが・・・なにか？」

「・・・担任は？」

「先日まで高畑先生でしたが、今はネギ先生と言う方が担任を務めております」

「ってことは既に本編は始まっているのか・・・」

「明命たちは生徒なのか？」

「いえ。私と恋さんは警備員をやっています」

「あれ？明命って恋をさん付けで呼んでたっけ？」

「恋、いつから呼び方変わったんだ？」

咲が恋に尋ねる。

「・・・この世界だと殿とか止めた方がいいって刹那が教えてくれた」

「まあ公衆のみんなには変な顔をされるよな・・・あれ、長瀬楓は・・・まあいいや。」

「しかし困ったのう・・・明命君たちは刹那君たちの部屋に泊めておったのじゃが・・・」

「俺たちに空き部屋はない・・・か」

困ったなあ・・・

「学園長。お願いがあるんですが・・・」

「なんじゃ？」

「部屋は俺たちが何とかします。あと転入は三年生になってからでよろしいですか？」

「？なんでじゃ？」

・・・実際期末試験が嫌なだけです。

「特に理由はありませんが、新学期までこの世界について色々知りたいのです」

「そっか・・・なら、好きにしてよいぞ」

「はい。ありがとうございます。では失礼します」

俺は頭を下げて咲たちと部屋を出ようとする。すると・・・

「ところでお主たち、是非孫のこのかの・・・」

最後まで聞かずに俺は学園長室の扉を閉じた。

「・・・時間がずれるとは聞いたけど一年間か・・・」

どうやら明命たちは一年前からこの世界に来ていたらしい。

「はい・・・私たちにとっても長い一年でした」

「・・・ゴメン」

「いいんです。またこうして会えたんですから・・・」

「明命・・・」

「悪かったな恋。寂しい思いをさせて」

「・・・大丈夫。必ず会えるって判ってたから」

「・・・」

俺は後ろを向いていた刹那に話しかける。

「刹那？どうしたんだ？俺についてきても何にもならないぞ？」

「いえ、少し聞きたいことが・・・」

「？何ぞ？」

「住むところはどつするんですか？」

う・・・

「・・・そうなんだよなあ・・・」

「・・・さすがに私の部屋は入りきりませんね・・・」

「・・・私たちが霊体化できればよかったですけど・・・」

「え？霊体化できないのか？」

俺は明命に聞いてみる。

「はい。私たちは既にサーヴァントではありません。力も若干ですが落ちています」

その言葉を聞いて俺は左手を見る。そこにあった令呪は痣のような物に変わっていた。

「・・・」

よく集中すると魔術回路は無くなっていて、まるで溢れた水のように体全体に魔力が満ちていた。

「……まあ住むところは何とかなるとして……細かいことは明日にしよう」

「そだな……じゃあな恋、明命、刹那」

「……また明日」

「お休みなさい」

「亮さん。また明日」

とりあえず俺たちは野宿することを決めて今日は眠りについた……

新たな世界へ（後書き）

と言っわけで次の世界は魔法先生ネギま！です！

亮

「いいのー？まだ終わってない作品だぞ？」

適当な所でオチをつけますよ。

咲

「うっわ・・・」

刹那

「あの・・・いつの間にか連れられて来たんですが・・・」

亮

「あ、いらっしやい。ネギまゲスト第一号だな」

刹那

「はあ・・・」

咲

「・・・あのさ亮。また顔の傷が増えてないか？」

亮

「・・・相変わらず蓮華が殻に閉じ籠ってる」

咲

「その言葉で大体理解した」

刹那

「こんなところで話をしてもしお嬢様の身に何かあったら・・・」

「

亮

「刹那。ここでは本編の設定を無視していいんだぞ？」

そうです。試しにこれを読んで落ち着いてください。大声で。

刹那

「えっと・・・どこまでも、裏切り者をいじめ抜く！楽しいかよ！弱いものいじめが、そんなに楽しいのかよ！ええ！？どうなんだよ！！！」

亮

「見事なキヤラ崩壊だな」

刹那

「・・・ここでは常識は通用しないのですね（赤面）」

咲

「刹那が理解したところで今回はここまで！」

刹那

「次回の真似と開閉と世界旅行」

亮

「次回もまたよろしく！」

咲

「また次回会いましょう！」

探検（前書き）

明日は卒業式です。・・・ではさようば。

探検

あれから数日経って、俺たちはその合間に魔法先生方に挨拶をしておいた。どうやら学園長が色々と話しておいてくれたらしく、挨拶は簡単に終わらしていった。・・・何気に忘れるんだけど学園長って近衛木乃香のお爺ちゃんなんだよな・・・そして今は担任になる先生、この世界の主人公、ネギ・スプリングフィールドに挨拶している。

「と言うわけで俺も魔法関係者なんで、よろしく、ネギ先生」

「よろしくな」

「はい！亮さん！咲さん！」

・・・労働基準法ってこの世界にあるんだろうか・・・

「ネギ先生・・・めんどいからネギって呼ぶよ。・・・生徒には俺たちが転入する三年生まで俺たちのことは秘密な」

「え、あ、ハイ！わかりました」

俺たちはそのまま学校を出る。

「・・・やること終わった」

「・・・暇だな」

学校に行きたいわけじゃないが、さすがに暇すぎる。

「・・・暇つぶしに校内ぶらつくか」

「一般人に見つかんなきゃいいけどな」

校内をブラブラして最後に屋上に出る。

「・・・広い」

学校が広すぎます。さすが学園都市麻帆良・・・

「にしても屋上はいいなー」

咲ものほほんとしている。・・・その時、

「・・・誰だ貴様ら」

「ひいつ!?!」

思いもよらない方から声をかけられ、変な悲鳴を上げる。

「・・・えつと・・・」

上を見るとそこには、ネギの生徒の一人、真祖の吸血鬼のエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルがいた。

「誰だ、と聞いている」

「・・・俺は大澤亮! 亮って呼んでくれ! エヴァンジェリン!」

「俺は五十嵐咲！右に同じく！」

「・・・なんで男子生徒がここにいる」

「色々あるんだよ。ちなみに魔法関係者だ」

その瞬間、エヴァンジェリンが目を見開く。

「・・・またジジイが何かをしたのか・・・」

ふう、とため息を吐くエヴァンジェリン

「ところでエヴァンジャリ・・・すまん、噛んだ、エヴァって呼んでいいか？」

「・・・構わん、好きにしる」

エヴァがそう言うのでそう呼ばせてもらおうとする。

「エヴァ。聞きたいことがあるんだが」

「なんだ？」

「・・・吸血鬼って面倒か？」

「!？」

言った瞬間、いきなり首筋に爪を立てられる。・・・切れよ爪。

「・・・答える。なんで知っている」

「知っているから。・・・そうとしか言えないな」

新しい世界に来る度に言う言葉をエヴァに言う。

「・・・」

澁々エヴァは殺気と爪を退いてくれた。

「・・・後でかならず話すよ。それまで待っていてくれエヴァ」

「・・・別に貴様の話に興味は無い」

「・・・亮。チャイムが鳴るぞ。じゃあなエヴァ」

俺たちはそのまま野宿している場所へ向かった。ちなみに野宿の場所は人気の無くなった世界樹の下だ。意外に誰にも気づかれぬ。

それから数日が経過した。夜になって野宿場に戻ろうとしたら、途中に人影が見えたので追っていく。

「あれは……」

「……バカレンジャーと図書館探検部と……ネギか」

見るとどうやら図書館島に行くみたいだった。

「あー……そういやもうすぐ期末テストか……刹那が言ったな……」

あれから暇つぶしに刹那の手伝いをする事が多くなり、龍宮とも知り合った。……存在を秘密にするどころか堂々とバレてるな……

「……おい、中に入ったぞ。どうする亮。恋たちを連れてくるか？」

「……いや、このまま行こう。ただでさえ俺は方向音痴なんだからここであの団体を見失ったら確実に終わりだ」

「……だな、行くか」

扉の近くにいる宮崎のどかと早乙女ハルナをやりすごして中に入る。

「……すげ」

「どんだけ本があるんだよ・・・」

「・・・しっ、わりと近くにいる」

魔力を抑えてネギに探知されないようにする。・・・魔法の矢はま
だ使えないけど、だいぶ魔力を操れるようになってきた。

「・・・でも、ホントにすじ・・・」

カチッ

「・・・カチッ？」

ビュン！

「おわぁ！？」

俺の目の前を矢が通過する。

「ん？」

「どうしましたアスナさん？」

「いや、今声が・・・」

「なんも聞こえへんかったよ？」

「気のせいです」

「そっぴいじゅんよ」

「……あつぶねー……」

「危ないなんてもんじゃないぞ！？俺、今死にかけたし！」

「いやいや、亮はわざと罠にかかったんだよな」

「かかるか！自ら罠にかかるやつはよほどのドMだよ！」

「ほらほら、先に行くぞ」

「……ぐ……はぁ……」

……その後も度々罠にかかり（俺だけ）やっと最深部らしい所についた。向こうを見るとバカレンジャーがツイスターゲームをやっ

てた。

「第11問『BASEBALL』」

たしか、和訳した答えに手をつけるんだっけ？・・・なんて考えている内に、なんか凄いことになってた。

「あたたたっ!？」

「死ぬ、死んじゃうっっ！」

「問題に作為を感じるです・・・」

・・・一言では言い表せない体制になってた。

「最後の問題じゃ」

ゴーレムが・・・どう聞いても学園長だけど、学園長の声が最後の問題を告げた。・・・そしてそれを佐々木まき絵と神楽坂明日菜が自信満々に押していく。

「お!」

「さ!」

「ら!」

・・・らといいながるを押した一人だった・・・

「・・・おさる?」

「ちがうアルよーッ!」

「ハズレじゃな」

バカアッ!

ゴーレムが降り下ろしたハンマーが床を打ち砕いて、みんな下に落ちていく。・・・学園長のゴーレムまでもが

「アスナのおさる~~~~~!!」

「いやああ~~~~」

「・・・」

「・・・」

俺たちはなんとも言えない気持ちでそれを眺めていた。

「・・・追つか?」

「・・・ああ」

なんとか自我を取り戻して咲のボードを使ってゆっくりと降りていった………

下に降りてみると……なんか楽園でした。みんな勉強してるし……あの高さから落ちてあんまりケガがないって、どんだけ体が丈夫なんだよ……

「……亮、こっち」

「……おっ」

意外にも中は住みやすい温度で、食材もキッチンもあるという完全装備。俺たちはそれを利用しながら一日を過ごした……

「……ところでなんでついてきたんだっけ？」

「……なんでだろうな」

そんな肝心なことも考えてなかったりした………

次の日になって最初に聞いた声は、

「キヤーーッ！」

・・・悲鳴だった。

「・・・咲！」

「・・・ああ」

眠そうにしながら咲がついてくる。悲鳴の方へ駆けつけると・・・色々と直視しづらい光景があったが、取りあえずは佐々木まき絵が学園長ゴーレムに捕まっていた。

「・・・確かネギのやつは魔法を封印してるんだよなー・・・」

どうする？いつそこから原作介入するか？

「・・・咲、どうす・・・咲？咲ー？」

・・・となりに居たはずの咲が消えた。あたりを見渡していると声が響いた。

「あいやまたれい！」

上を見るとマントを羽織り、蝶の仮面を身に付けた……咲がいた。

「天知る、神知る、我知る、子知る！」

咲が堂々と名乗りを上げる。

「悪の蓮花の咲くところ、正義の華蝶の姿あり！」

そして咲はポーズを取る。

「美と正義の使者、華蝶仮面……推参！」

シーン……

……空気が凍った。咲は顔を赤くしながら告げる。

「ここは私に任せて先に行きたまえ！」

やばい！アイツ、ノリノリだ！

「え……あの、ありがとうございます」

ネギは正体に気づいてないらしい。

「隙ありでござるよ」

バシィッ！

長瀬楓がゴーレムの間をついて佐々木まき絵を救出する。その際に佐々木まき絵がリボンを使ってゴーレムに引つ掛かった頭が良くなる本（メルキセデクだっけ？）を取ってバカレンジャー+ はそのまま走っていく。

「華蝶なんかの人！足止めお願いアルよ〜！」

それに咲はフツ、と笑って言った。

「なに、足止めしろと言うが・・・別に、あれをたおしくほあああ
あっ!?!？」

「咲ーーーーッ!?!？」

学園長の野郎！大切な決め台詞を言ってる途中に攻撃しやがった！

「咲！大丈夫か？」

「・・・頭ん中でAngel Beatsのエンディングが流れた
ぜ・・・」

「・・・すまん、俺がケータイで曲をかけてた」

「・・・そうか・・・」

「一応時間稼ぎにはなったか・・・？今から追ってもどろじよづも無いので、俺たちはゆっくりと地上を目指していった・・・」

そして地上に出る頃には辺りは真っ暗になってた。

「咲い・・・大丈夫か？」

「・・・じじい殺す・・・」

「あ、あはは・・・」

さらば学園長。達者でな・・・肝心のテストはバカレンジャーの努力によって見事1位になり、そしてネギは麻帆良学園正式採用となった・・・

探検（後書き）

亮

「・・・俺たちはホームレスか・・・」

咲

「落ち着けよ、あとちょっとで本格的にネギまが始まるから」

亮

「そつだな・・・」

咲

「・・・」

亮

「・・・」

咲

「なにこの沈黙！」

亮

「放送事故か!？」

単にネタが無いだけです。

咲

「また中の人ネタやればいいじゃん」

亮

「それともあれか？それすらネタ切れとか？」

「・・・今回は短いですが、ここまでです！ここで一つ応募したいと思います！」

亮

「こいつ・・・逃げやがった・・・」

咲

「応募ってなにを？」

大澤亮、及びに五十嵐咲の声です。

亮

「え、俺たちはそれすら決まって無かったのか？」

はい。

咲

「つまりは声を宛てるとしたらどの声優か・・・ってこと？」

亮

「それぐらい考えろよ・・・」

仕方ないでしょう！貴方たちのキャラ立てが大変だったんだから！

亮

「いきなり責任転換するな！」

それでは今回はここまで！

咲

「逃げた・・・次回の真似と開閉と世界旅行」

亮

「次回もまた見てください・・・」

それではまた次回会いましょう。

転入く（前書き）

地震凄かったですね 帰れなくなって友達の家泊まった男（笑）
・
・これ以上犠牲者が増えないことを祈ります。ではどうぞ。

転入

遂にこの日が来た。どうやら男子に固定の制服は無いようで、いつの間にか戻ってた黒い学ランを来て、・・・“女子”の中等部へ向かった・・・

「・・・亮」

「ん？」

「女子校に来た理由はお前にまかせた」

「・・・えー」

そうこう言っているうちにネギと合流する。

「あ、亮さん、咲さん。こっちです！」

ネギが手を振って呼んでくる。

「それじゃあ、ボクが呼んだら中に入ってきてください」

ネギはそう言って中に入った。途端、

『3年！A組！！ネギ先生ーっ！』

金 先生かっつての・・・

『・・・それでは入ってきてください』

俺たちはその声に反応して俺たちは中に入った。

「えっと……これから皆さんのクラスメートになる大澤亮さんと五十嵐咲さんです」

俺たちはそれに合わせて自己紹介する。

「どうも。紹介された大澤亮です。皆さん、俺のことは亮と呼んでください」

「……右に同じく」

「……お前さ、ちゃんと自己紹介しろよ」

「(メンドイ……)」

……と、その時俺たちは教室が静かになっているのに気づいた。

「……か」

か？

「……カッコイイ〜!」

何イ!? クラスのほとんどが俺たちに突っ込んでくる。

「なんで男子がここに来たの!？」

「好きな人はいる!？」

「どこから来たの!？」

クラスのほぼ全員に質問責めにされる。

「え、えつと・・・」

困り果てたその時、誰かが声をみんなにかけた。

「まあまあ。そんなんじや話せないでしょ?ここは私に任せてよ」

「ええと・・・出席番号3番の・・・」

「朝倉和美だよ。麻帆良のパパラッチと言ったら私のこと!それじやあ質問行くよ」

朝倉は何かのメモを取り出した。

「名前は聞いたから・・・そんじやあ好きな物は？」

「えつと・・・俺が好きなものはゲーム。後、野球」

「俺は基本パソコン。最近やってないけどな」

「ふむふむ・・・それじやあ好きな人はいる？」

「な!？」

「・・・っ!？」

俺と咲は同時に赤面する。

「あー・・・答えにくいか。それじゃあ好みのタイプは？」

それぐらいなら・・・

「・・・黒髪ロングで真面目な子」

「・・・シヨートの無口だけど実は優しい子」

・・・まんま明命と恋だな。

「ふむふむ・・・なるほどねえ・・・それじゃあみんな気になる大切なこと。なんで女子校に来たの？」

・・・来たか・・・

「その理由は俺たちは転校が決まったんだけど、あまりにも急だったから男子校の余裕がなかったんだ。だから余裕ができるまでは女子校に通え、って学園長が言ったんだ」

「・・・嘘つき野郎・・・」

「・・・うつせえよ」

「・・・なるほどね。他には・・・」

と、その時、しずな先生が入ってくる。

「ネギ先生。今日は身体測定ですよ。3 Aのみんなもすぐ準備してくださいね」

「あ、そうでした、ここですか!?!?! わかりましたしずな先生!」

ネギは両手を振りながらみんなに言う。

「で、では皆さん身体測定ですので……えと、あのっ、今すぐ脱いで準備してください!」

……ハア……するとみんな揃ってネギを見て、

「ネギ先生のエッチ~~~~ッ」

「うわ~~~~ん!間違えましたー!」

「……いやいや、俺たちは体操着すらないんだが……」

「……とりあえず外に出ようぜ」

俺たちはネギと共に外に出て待つことにした……

それからしばらくして、廊下を誰かが走ってきた。

「先生ーっ！大変やーっ！まき絵が・・・まき絵がーっ！」

出席番号5番和泉亜子が走ってきた。すると3 Aのみんなが窓から乗り出してきた。・・・その、下着姿で。

「何！？まき絵がどーしたの！？」「」

・・・その後、佐々木まき絵が桜通りで倒れていたらしいことを知った。・・・ええと、確かエヴァが犯人なんだっけ？・・・それから夜になり、俺は咲と一緒に桜通りへ向かった。

「・・・あれか？」

見るとネギはエヴァと対峙していた。・・・あの場にいるのは神楽坂明日菜と近衛木乃香と気絶している宮崎のどかか・・・ダメだ、魔法が使えないな。そうこうしてるうちにエヴァは逃げはじめ、ネギはそれを追っていった。俺たちもそれを追う。

ネギはエヴァに追いついた。

「いた！」

「はい、そう言えば坊やは風が得意だったな」

そしてエヴァは空を飛んで逃げた。もちろんネギもそれを追う。

「俺も行くぞ！」

咲もボードを使って飛んでいく……って、

「だから俺は飛べないんだよーっ！」

必死に叫んで俺は回り道をしながら三人を追った。

やっと追いついた頃にはネギはエヴァに血を吸われそうになってた。
・・・咲は？

「・・・？あれ？」

咲がいない・・・よく見たらキープレードが落っこちていた。・・・
その近くに墜落したのか咲が倒れていた。

「咲ーーーーッ!？」

「・・・武装解除の巻き添えくらった・・・」

コイツこの前からろくな目に逢ってねえ!

上はどうやら神楽坂明日菜がネギを助けて、エヴァを退けたようだった。

「・・・咲、大丈夫？」

「ここにいましたか亮さん」

明命と恋も駆けつけてくる。

「あー・・・悪いけどどこか休める場所を・・・」

「・・・こっち」

恋が咲を抱えて歩いていく。俺と明命もそれについていった・・・

「……恋？」

「……？」

「？……じゃなくて、「こ」は……」

「……刹那と真名の部屋」

「いや、わかってるけどさ……」

咲を抱き抱えながら中に入る恋。中には刹那と龍宮がいた。

「……どうしたんだ？そんな大勢で」

「何かあつたんですか？」

「ちょっとね……悪いけど、咲を休まさせてくれないか？」

「あ、はい。構いませんよ」

恋は咲をソファアの上に寝かせる。

「……何があつたんだい？」

「……墜落事故が起きた」

「……」

「……」

疑惑の視線を向けてくる二人。明命と恋は納得した顔だったが。

「そういえば亮さん。つかぬことをお訊きしますが……」
「なに？刹那」

「……寝泊まりする場所は確保できましたか？」

「……」

無言で顔を逸らす俺。

「りよ、亮さん……？まさかまだ……野宿とか、してないですよね……？」

明命からも目を逸らす

「……亮、家がない？」

恋からも目を逸らす……首が変な方向に曲がりかけた。

「はぁ……亮さん。仕方ありません。私と龍宮の部屋に泊まってください」

「え、でも刹那……」

龍宮とかが迷惑なんじゃ・・・

「ああ、私なら構わないぞ?」

「・・・」

「亮さん・・・」

刹那と明命が見つめてくる。

「・・・お願いします」

俺は何とか寢床を見つげられた。・・・起きた咲に説明するのがめんどくさかったが。

「……ん」

誰かが部屋を出ていくのを感じて目を覚ました。

「……まだ午前3時じゃないか……」

とりあえず俺は誰かを追いかけていった。

「……咲と……龍宮か」

部屋を出たのはあの二人か……

「何やってんだ？」

「ッ！」

カチャッ

龍宮に額に銃を突きつけられた。

「あ、あわわわわ!？」

「……なんだ亮か、私の後ろに立たないでくれ」

「お前はどこのスナイパーだつっつの!！」

「……流石だな龍宮」

「……とりあえず何をしてたんだ？」

気を取り直して二人に聞いた。

「なに、咲が銃を教えてほしいと言っからな」

「……なんで？」

「やっぱりボードに乗っていると魔法が使えないからさー……遠距離武器が欲しいんだよ」

「弓あるじゃん」

「……素直に言います。銃を使いたいです」

「素直でよろしい」

「……だが、私の授業料は高いぞ？」

「あ、それじゃあこれで」

咲は何かの袋を取り出して籠宮に渡す。

「……ほう、これは本物か？」

「もちろん」

「……何を渡したんだ？」

「恋姫の世界のお金」

「本物の金じゃん！」

忘れてた！何故かあの世界のお金は本物の金や銀をたくさん使ってたんだ。そりゃあ価値はあるな。・・・俺も後で換金しよう。

「・・・ふむ、ならこれはどうだ？」

そう言っつて龍宮はポイツと咲に何かを投げる。

「?・・・っつて、本物の拳銃じゃん！投げるなよ龍宮！」

咲が軽く怒る。

「安心しろ。安全装置はついてる」

「安全装置あつても暴発しちゃ意味無いんだよ！てか何故いきなり本物!？」

「私は習うより慣れろだからな。体で覚えた方が早い」

「・・・」

龍宮つてこんなギャグに対応できるキャラだったっけ・・・？

「とりあえず的に向けて撃つてみる」

咲は遠くにある的に向けて両手でしっかり構える。……あの銃の名前は……。あれだ、Angel Beatsの音無が使ってた……。グロツグだっけ？

「……」

パンツ！パンツ！

咲が引き金を引いて弾を撃つ。……一発目は当たったが、二発目は反動で検討違いの方向へ向かっていった。

「……咲、お前は銃を撃ったことがあるのか？」

「いや、ない。俺が使ったことがあるのは弓矢だけだし」

「……そうか。最初にそれだけ撃てれば上出来だ」

「え、マジ？」

「ああ、マジ、だ。……その銃はお前にあげよう」

「いいのか？」

「お前からもらった金額はかなりの額だからな。むしろ釣りが来るくらいだな」

……。咲はどれだけの金を持ってたんだ……。？そう疑問に思いながら俺は部屋に戻っていった……………

転入（後書き）

みんな。地震の被害者たちに黙祷。

全員

「……」

今回は後書きは無しの方角で行きます。次回は普段通りの後書きで行きますので、今回はここまでです。

亮

「明日から計画停電が始まります」

咲

「懐中電灯やローソクをたくさん購入しましょう」

亮

「それでは次回の真似と開閉と世界旅行」

咲

「次回もまた見てください」

それではまた次回会いましょう。

先生の悩み（前書き）

余震が続きますね・・・ではどうぞ。

先生の悩み

登校時間になって俺たちは学校に向かう。・・・ネギが神楽坂明日菜に担がれてたが、あえて突っ込まなかった。その日の授業はネギの様子がかなりおかしかった。そして俺たちは大分クラスの人間と仲良くなった。後俺たちの席は綾瀬夕映と長谷川千雨の後ろだ。

キーンコーンカーンコーン・・・

「・・・終わったあー・・・」

一日が長いぜ・・・

「ねえねえ亮君、咲君」

「ええと、なんだ？柿崎」

柿崎が声をかけてくる。すると残りの二人も声をかけてくる。

「今日の6時に教室に来てくれない？」

「とーっても大切なことがあるがら必ず来てね」

釘宮、椎名がそう言う。

「・・・」

「・・・」

刹那と龍宮に目配せすると、二人は少し笑って頷いた。

「ああ、わかったよ」

「りょーかい」

とりあえず俺たちは帰宅することにした。

「……でもさ、学園に居づらいよな」

「……確かに。図書館とか食堂とかいっても男子だから周りの視線が痛いよな。後ひそひそ話」

地味に俺たちの神経を削っていきます。

家に着くといつの間にか帰ってたのか刹那と龍宮がそれぞれの武器を整備していた。

「……まだ時間があるから俺も鈴音を整備するか」

「俺のキープレードは整備する必要が無いからな。切れ味云々じゃ

ないし」

咲から鈴音を受け取って刹那に道具を借りて整備を始める。

「亮さんは刀ではなく幅広の剣を使っんですね」

「そうだよ。俺の大切な仲間から借りた大切な武器だ」

「なるほど。……それとつまらない事を訊きますが、亮さんは何か格闘技などをやっておられましたか？」

「なんで？」

「立ち振舞いとかに中国拳法のそれが見えるのですが……違いますか？」

「うーん……俺のは叩き込まれて体が覚えたと言うか何と言うか……」

実質俺の剣術とかも思春や明命とか雪蓮とか蓮華とか……色々な人を見よう見まねでやってただけだからな……

「……亮は思春や亞莎にボコボコにされてたからな」

うっさい。意外に虫を殺さんような顔をしておきながら亞莎は容赦がなかったからな……何度頭に蹴りが入ったことやら……ちなみに咲は龍宮に銃の整備の仕方を聞いていた。

「……（思春）」

Fateの世界で思春を倒した記憶が甦る。アイツは無事に蓮華の元へ帰れたのだろうか・・・それだけが知りたかった。

「・・・(でも)」

それを知る手段は無い。新たな物語が生まれない限りはあの世界に帰ることはない。いや、考えちゃいけない・・・もう恋姫の世界は自分達の力で物語を続けている。俺たちが入る余地は・・・無い。

「・・・さん、亮さん？」

「・・・え？あ、ああ・・・悪い、少し考え事してた」「そうですか・・・遠い目をしてたものですか・・・」

「・・・そういえば明命たちは？見かけないけど」

「明命たちは学園の警備をしていますよ。二人が来てから私たちも余裕が出来ました」

「そっか・・・」

なんか寂しいな・・・

「・・・あ、」

「刹那？」

「ふと思い出したんですが・・・恋と最初に会ったときに、私の事

を亮さんと呼んだのですが・・・何故ですか？」

「・・・あー」

前に恋と戦った時に刹那の真似をしたんだよなあ・・・懐かしい。

「・・・亮ー？そろそろ時間だぜー？」

「ああ。刹那たちは・・・」

「行きますよ。それでは私たちはお先に」

「また後でな」

刹那と龍宮が部屋から出ていく。俺たちも少ししてから部屋を出た。

そして教室の前についた。

「よし、入るか」

入ろうとした瞬間、パンツ！と音がしてクラッカーがなった。そして、

『3 Aにようこそ！亮君、咲君ーッ！』

・・・3 Aのみんなが口を揃えてそう言った。

「・・・え？」

「・・・ハハッ」

「ほらほら、主役は真ん中」

朝倉に手を引かれて席に座る。・・・どうやら歓迎会を開いてくれたみたいだった。

「あう、あうあう・・・」

「のどか、男嫌いを克服するチャンスですよ」

「そうそう。こんなチャンス滅多にないよー？」

「で、でも・・・」

「安心しろよのどか。俺たちは何もしないぜ？」

「ま、男嫌いを治すのはさすがに一筋縄じゃいかないけどな」

「あうう・・・ごめんなさい」

「謝るな謝るな。段々馴れてけばいいよ」

「……中々面白い人たちなのです」

「そっだね」

「ねえねえ！クラスのみんなの名前は覚えてー？」

まき絵がそう聞いてきた。

「ああ、バツチリ。お前はバカピンク」

「違うよーッ！？私は……」

「冗談だよ。佐々木まき絵だろ？」

クラスのみんなの笑い声が響く。

「……いい場所だな……」

恋姫の世界の時と同じくらい和みがあった。……Fateの世界は毎日が忙しかったからな……。何はともあれ、更に俺たちはクラスのみんなと交流を深めた。

次の日も特に何も無かった。あえて言えばオコジヨ妖精のアルベール・カモミールが来て、のどかをネギと仮契約させようとしたくらいか。・・・無関係な人間を捲き込むなよ。・・・後に捲き込まれるけどさ。

そして次の日、事件は起きた。

学校の帰り道。茶々丸を見つけた。

「・・・なにやってんだ？」

「・・・追つか？」

茶々丸を追うと色んな事がわかった。かなりの善人、みんなの人気者・・・ホントにロボットかアイツは？そして猫に餌をやっている途中、ネギとアスナが出てきた。・・・あ、忘れてた！

「咲！」

「ああ！」

俺と咲は三人を止めようとするが・・・

「――魔法の射手連弾・光の11矢！！！」
サギタ・マギカ セリエス・ルーキス

ネギがそれより速く魔法の矢を放った。

「まずっ・・・」

しかしその時、誰かが合間に入って魔法の矢を弾こうとしたが・・・いかんせん威力が高すぎた。ネギが魔法の矢を戻すのも間に合わず、その誰かにほとんどの魔法の矢が当たり、その誰かは崩れ落ちた。

「あ・・・」

「な・・・」

俺たちはその誰かを見て固まった。・・・その誰かは・・・恋だった。

「あ……ああ……」

「咲……?」

「き……キッサマアアア!」

一瞬でネギとの距離を詰めてネギの首を締め上げる。

「あ……ぐう……」

「……クロス」

咲の手に握られてるのは ブレード。俺は咲に向けて駆ける。

「止める咲イツ!」

咲にタツクルをして吹き飛ばす。

「グ……ジャマヲスルナ、リョウウウウツ!」

完全に闇に囚われてる……魔力を集めて対抗しようとした瞬間、

「う、う……」

恋が苦しそうに声を出す。

「……ハッ!?……れ、恋!」

咲は正気を取り戻して恋に駆け寄る。

「咲さん。マスターの家なら治療が出来ます。行きましょう」

「・・・スマン茶々丸」

咲は一瞬ネギを睨んで、そのまま去っていった。俺は呆然としている二人（と一匹）を連れて部屋に戻った・・・

次の日になって俺はアスナの部屋に来ていた。

「アンタも魔法関係者だったの？」

「ああ。と言っても俺が得意なのは物真似だけだな」

その時、カモが叫んだ。

「兄貴は命を狙われてんでしょ！？ 奴ア生徒の前に敵ツスよ敵！
！」

「黙れよカモネギ」

「カモツス旦那!!」

「ハア・・・お前が要らんことをしたせいで咲と恋がエヴァ側についたんだぞ？無駄に相手の戦力を増やしやがって・・・」

「う・・・」

「ネギもネギだ。明らかにアレは魔力が強すぎる。捕縛系ならまだしも攻撃系だからな・・・下手すりゃ茶々丸は木っ端微塵。もしかしたら恋も死ぬかもしれない」

「・・・」

「少しは加減できるようにしないと。ありすぎる力は他人を、己を傷付けるぞ？」

「う、うう・・・」

「正直恋をやられた際には俺もキレかったけど・・・仕方ないからな、協力はしてやる」

「・・・とにかく、奴らが本気で来たらヤバイツ。姐さんや寮内の他のカタギの集にまで迷惑がかかるかも・・・」

「あ、バカ、カモネギ・・・」

「う・・・うわあゝゝん!!」

「ネギーーーーーッ!?!?」

「兄貴ー！ツ！？」

ネギが窓を開けて杖で飛んでいった。アスナたちもそれを追いかけていく。

「……明命」

「……お側に」

「……本当に来るとは思わなかった」

「サーヴァントとマスターの契約が切れてもおぼろげに亮さんの思考は感じられます」

「そうか……それじゃあネギを追ってくれ。多分、山の方にいるから」

「はい。楓さんが居る方ですね？」

「そうそう楓が……って、え？」

何故に楓を知っている。

「一年も麻帆帆良にいましたからね。大体の人は顔見知りなのです！」

「……まさかと思うけど……」

「大丈夫なのです！私が周泰だと言う事は誰にも話しておりません」

「声が大きい……！誰かに聞かれたらどうするのか」

「あう……すみません……あ、あと三国志も読みました」

「……読んだのか……それで感想は？」

「……案外皆さん悲しい死に方をしてるんですね……亞莎なんて血が噴き出すなんて……」

……あー……

「思春殿も一騎討ちでやられてしまってますし……穏様は裏切るし……」

「あ、あはは……」

「……あ、あと……みんなに……あの……」
「……」

明命が顔を赤くしながら言った。

「お、落ち着け明命！？それはあくまで歴史上の三国志であって明命たちとは違……」

「……亮さんは、私とはもういいと……」

「誰がそんなことを言ったーッ!?」

「だって子供は愛の結晶なのです！子供を否定するのは愛が無いからなのです……」

明命ってこんななんだっけ！？キャラ崩壊もいいところだぞ！？

「安心しろ明命！？俺はお前の事を嫌いになんかならないよ！？」

「……本当ですか？」

「ホントホント」

「じゃあ。私かけ、けけ結婚してくださいって言ったらどうします？」

「なッーーー」

だ、誰がこんなことを明命に教えやがったあああ！？……何故か頭の中に赤い悪魔の姿が浮かんだが……

「いっ、いっごめんさい！おかしなことを口走りました！忘れてください！では！」

「あ、ちょ、明命！？」

明命は窓から飛び降りて走り去っていった……ここ何階だと思っ
てんの？とりあえず俺は部屋に戻ることにした。刹那と龍宮にはし
ばらく咲は用事で戻ってこないと伝えた。

それから月曜日になった。

「おはよーございます！今日も元気にいきましょう！」

ネギが元気に声を出す。俺はネギに近づく。

「吹っ切れたか？」

「わかりませんが・・・今は大丈夫です！」

「そっか」

そして教室に入るなり、

「おはようございますっ！エヴァンジェリンさんいますかっ!?!？」

「あー、ネギ君おはよー」

「エヴァンジェリンさんならまだ来てないですが」

ハルナ、夕映が言った。

「へ・・・あ・・・そうですか・・・」

「何やカゼでお休みするて連絡が・・・」

亜子がネギに言った。そしてネギはしばらく考えた後、どこかに走っていった。・・・結局、咲も学校に来なかった。・・・

先生の悩み（後書き）

亮

「あつとがき」

咲

「どうした？なんか変なものでも食べたか？」

亮

「・・・蓮華の引きこもりを治すには同じくらいはっちゃけるって雪蓮に言われた」

咲

「あゝあ・・・頑張れ」

エヴァ

「・・・貴様はいつもはっかけているだろうに・・・」

亮

「それでは行きます！衝撃的告白！実は蓮華や思春も結構好きです
！」

明命

「ええええええっ!？」

咲

「・・・（結局は明命一筋だろうに）」

亮

「その二！自分で結構痛い子だと思ってます！」

咲

「まあ、たまにアニメキャラの台詞を言ったりするからな」

亮

「その三！　　！」

エヴァ

「何を言ってるんだ！？」

咲

「ストップ！ストローップ！」

亮

「・・・もう勘弁してください・・・」

明命

「あ、亮さんが前のめりで伏せった」

咲

「・・・今回はここまでにしてやるっぜ」

エヴァ

「なら私が言おう。次回の真似と開閉と世界旅行」

咲

「次回もまた見てください！！」

明命

「それではまた次回会いましょう！」

亮

「う、うう……」

明命

「……それと亮さん……？さっきのお話を詳しく……」

亮

「ヒイイイイツ！？」

咲

「……」愁傷様

決着（前書き）

エヴァ編も今回で終わりです。ではどうぞ。

決着

次の日になって学校へ行くと珍しくエヴァと咲が来ていた。

「・・・咲、恋は？」

「・・・命に別状は無いよ」

「・・・それとネギは・・・」

「もう許したよ」

「は？」

「そもそもあのタイミングで止められなかった俺が悪いんだし、いつまでも気にしててもしょうがないからな」

「・・・そっか」

「それにしても驚いた。ネギがエヴァの家に来たと思ったたらいきなり『ごめんなさい!!』って頭が取れるかと思うほど頭を下げるんだもの・・・許すしかないさ」

「ふん・・・」

「あゝ、あと俺はエヴァにつくからよろしく」

「うえ・・・」

結局授業は大して問題なく進み、放課後にもなると購買に人が集まりはじめた。

「……（刹那、あれは？）」

「……（今日は学園都市全体の年に2回のメンテナンスの日なんです。だから今日は夜8時から深夜12時まで停電します。ですから停電にそなえてみんな色々買っているのですしょう）」

なるほど……確かエヴァとの決着は今日だったっけ？

そして夜になって俺は鈴音を持って寮を出る。ちなみに俺はいち早

く帰り、いち早く家を出ているため、まだ女子生徒には俺がここにいるのを知られてはいない。・・・今さらだが、若い男女が同じ部屋にいて良いのだろうか・・・まあ、明命や恋とは何て言うか慣れたと言うか・・・

そしてある程度走るといきなり声が響いた。

「魔法の射手連弾・氷の17矢セリエス・フルグラリス!!!」

バキイインツ!

いきなり浴場の窓が割れてネギが落ちてくる。だがネギはすぐに気を取り戻して杖で飛んでいった。

「ネギ!」

俺はネギを追って走る。・・・ええい!俺も空を飛びてえよ!!

・・・俺は目の前に誰かが立っているのを見て、立ち止まる。

「・・・来たか」

「・・・咲」

「・・・亮、来た」

咲と恋が立っていた。

「へ・・・二人がかりか？」

「ん？・・・いや、恋の相手は今来たぞ？」

「・・・亮さん！」

「明命？」

明命が跳んできた。

「明命、状況わかるな？」

「一応は。私は恋さんを足止めすればよろしいのですね？」

「……」

俺は無言で頷く。

「……では」

「……戦う」

そのまま二人は跳び去って戦い始める。

「行くぞ！」

俺はケータイを取り出す。すると、

「……プラクテ・ピギ・ナル」

「……ッ!？」

初心者用始動キー!？

「……魔法の射手サギタ・マギカ間の1矢ウナ・オブスクーリー!!！」

バシィッ!

放たれた魔法の矢は俺の手を捉えてケータイを弾き飛ばした。

「……ちゃんと実力で戦おうぜ？」

「……予想外だな……魔法の矢なんて……」

コイツはいつもいつも俺の一步先を進んでる。

「まだ一本が限界だけだな。……ちゃんと詠唱すれば三本はいけるが（ボソツ）」

「だけど二度は通じないぞ」

俺はケータイを拾うのを諦めて、鈴音を構える。

「……ただだぜ。俺のカードはまだ残ってる」

咲は体を丸めて力を溜め始める。

「ウウウウウッ！」

そして力を解き放つ。

「オオオオオッ！！」

黒い闇に飲まれて、闇が晴れると咲は、姿が変わっていた。

「……^{ダイク}Dモード」

咲の姿はキングダムハーツのリクのDモードの姿になっていた。

「・・・俺のパクリか？」

「顔とかはそのまんまだろうが。・・・エヴァとの特訓で身に付けた俺の闇を制御する方法だ」

咲は魔剣ソウルイーターを構える。

「・・・行くぞ」

俺たちの戦いは始まった。

「タアッ！」

「ハアッ！」

カンッ！

カキン！

キャンッ！

キキキンッ！

カキヤアン！

お互いがお互い相手を殺すつもりで剣を振る。

「ダークファイガッ!!」

咲が黒い炎を撃ち出してくる。

「・・・フッ」

俺はそれをひたすらかわす。そしてまた斬り合い。

「テイツ！ヤアッ！・・・はは、はははは・・・」

愉しくなってくる。いつも近くにいた友人と命を懸けて戦い合う。勝負は互角。自分もまだまだ戦える喜びで笑いがこぼれる。

「クッ・・・ははは、あはは！」

咲も笑う。お互いに笑いながら殺し合う。

「どうしたどうした！？攻撃がトロくなってきたぜ!？」

「そっちこそ！鈴音が重いんじゃないか!？」

「結構軽い、ぜっ!」

「そのわりには重そうに振るなあ？もう限界か!？」

「・・・抜かせっ!」

そして一区切りつけて俺たちは間を開ける。

「まだまだ続けたいけど・・・」

「生憎と時間が無くなってきた」

「俺はお前を倒してネギを助ける」

「俺はエヴァを助ける」

「なら、さっさと決着をつけようぜ！」

俺たちは同時に走り出す。・・・そして次の瞬間には、お互いの首に剣を突きつけていた。

「・・・あ・・・」

「・・・引き分け、か・・・」

咲は元の姿に戻る。

「・・・いや、自分の力だけで戦ってたお前の勝ちか」

俺は構えを解く。

「・・・いや、その力だってお前が努力して手に入れた力だろ？なら引き分けで良いじゃないか」

俺は落っこちているケータイを拾いに行く。・・・と、その時、明かりがついた。

「え……?」

その時、橋の方にいたエヴァに何か当たり、エヴァがまっ逆さまに落ちていく。

「咲!」

「……距離が遠すぎる……! 届け! 魔力最大集中! エアログ!」

咲は風の魔法をエヴァに向けて使うが……

「……届かない……!?!?」

絶体絶命……そう思ったとき、ネギが間髪でエヴァを助けた。

「エヴァ! 大丈夫か?」

咲がエヴァに向けて走り出す。

「えへへ、さあ、これでホントに僕の勝ちですよー!」

ネギが喜ぶ。

「もうこれで悪いコトもやめて、授業にもしっかり出してもらいますからね!」

「……わかったよ。確かに今日のは一つ借りだな……」

エヴァが渋々ながら納得する。

「よーし、名簿の所に「僕が勝った」と書いて」

「何すんだ貴様やめろ！てゆーかどこから出したソレ！」

「えー、だつて」

「停電が続いていれば絶対私が勝つてたんだよ！」

「……（子供だ）」

「……（仲の良い小学生にしか見えない）」

「おい貴様ら……何か言ったか？」

「……ッ！！（ブンブンッ！）」

俺たちは本気で首を横に降った。……何にせよ、これでエヴァン
ジエリン編も終わりか……。まだまだ先は長いと思った今日だった。
……

決着（後書き）

亮

「ずるいぞ、咲ばかり新しい能力で・・・」

咲

「まあいいじゃん。換わりにお前の剣術は俺より上だから」

ちなみに使えるものをやると・・・

亮

「剣術・体術・強化・物真似・完全な物真似（思春のみ）・・・ぐら
い？」

咲

「開閉能力・FFの魔法全般・強化・変化・固有結界・二刀流・六刀
流・Dモード・魔法の矢・弓術・銃・・・等々」

亮

「納得出来るかーっ！！終いにはこの話の題名の真似と開閉は最近
全然使ってないし！」

咲

「バリエーション豊かだな、俺は」

亮

「羨ましいよ畜生・・・」

咲

「大丈夫だって。必ず何か強くなれる日が来るさ」

亮

「だと良いけどな・・・」

それでは今回はここまでです。

亮

「次回の真似と開閉と世界旅行！」

咲

「次回もまた見てくださいね！」

それではまた次回会いましょう！

新しい話（前書き）

修学旅行編スタートです。ではどうぞ。

新しい話

エヴァの吸血鬼騒ぎから数日・・・修学旅行が近づいてきた・・・

「・・・それで学園長？なぜ俺たちを・・・」

「ふむ、単刀直入に言おう。修学旅行で孫のこのかの護衛に付いてもらいたいのじゃよ」

「・・・関西呪術協会から・・・か？」

「その通りじゃ。亮君と咲君の二人でじゃ」

「・・・あと刹那か」

「うむ。ネギ先生には親書を渡したのじゃが・・・多分、何かしらの妨害をして、親書を渡さないようにしてくるのじゃろ。・・・そのどさくさに紛れてこのかに害が及ぶかもしれん。・・・流石にそれは無いかも知れんがの」

「・・・わかりました学園長」

「納得したよ。・・・さて、まさか修学旅行はずっと・・・？」

「うむ。女子組に混ぜてもらおう」

「ハアッ！？待ってください学園長！」

「今だって女子の部屋に泊まっておろっ？なら問題は無いはずじゃ」

「・・・ふう、諦めようぜ亮」

「ああ・・・男が恋しい・・・」

士郎。お前は今どうしてる・・・？

「お前・・・コレなのか？」

咲が自分の顔に手をあてる。

「ちっげえよっ！？ただ単に恋姫の世界から周りが女だらけなんだよ！いい加減仲の良い男子が欲しいわ！」

「無茶言つなよ。ネギまとか男で目立つキャラはすぐやられるだろ？仲良くなってもすぐサヨナラだぜ？」

「嫌なこと言つなー！ツ！！メタ発言禁止ッ！！」

結局そのまま時は過ぎていった・・・

あれから明命たちと修学旅行で着る服を買ったり、アスナの誕生日を祝ったり。このかがネギと仮契約しそうになったりと忙しかった。

そして修学旅行当日。俺と咲はいつものように寮を早く出て駅に向かった。あと明命たちは来ない。刹那たちの分まで見回りをしなくちゃいけないそうさ。・・・明命たちも連れて行きたかったなあ・・・そんなことを考えている内に駅に着いた。

「あれ？亮君と咲君だ」

まき絵が最初に気づいて手を振ってくる。

「もしかして、二人とも女子の方？」

アキラが聞いてくる。

「そうなんだよ。でも、あまり知らない男子よりは気が楽かな？」

「咲さんは随分と眠たそうですね」

「そうだよ夕映ー・・・俺は朝が苦手なんだー・・・」

「気を付ける？コイツを起こそうとすると裏拳が飛んでくるぞ」

「ふーん？ダメだよ、私は徹夜しても朝早く起きれるからね？」

「・・・ハルナは私たちが起こしているからでしょ？」

「その通りです」

「コ、コラ、二人ともバラさないでよ！」

時間になってみんなが電車に乗る。

「ネギ先生」

「あ・・・あなたは15番桜咲刹那さん・・・」

「はい。・・・私が6班の班長だったので・・・エヴァンジェリンさん他2名が欠席したので6班はザジさんと私の二人になりました。どうすればいいんでしょうか？」

「わ、わかりました。他の班に入れてもらいますね」

「ネギ、俺たちは、アスナたちと班行動させてもらっせ」

「え？私たちの班？」

俺はアスナに近づいて耳打ちをする。

「・・・（魔法関連で何かあったら駆けつけやすいだろ？）」

「……(あ、なるほど……)」

そうしているところのかが刹那に近づいた。

「あ……せつちゃん。一緒の班やなあ……」

「あ……」

刹那はペコッ、と頭を下げてそのまま行ってしまった……

電車に乗っていると、刹那が席を立ったので追いかける。

「……刹那？」

「……亮さん」

「あ、さ……このかのコトなんだけど……」

「……なんでしょうが」

「話ぐらいいはしてもいいんじゃないか？お前が無視してる方がこの

かは傷付くぞ?」

「亮さん……私にも色々あるんです。……あまり詮索はしないで下さい」

……悪い。詮索も何も全部知ってます。最近忘れて来たけど。……その時、鳥が飛んできた。

「……!?!?」

「亮さん、下がってください」

そう言つて刹那は刀を構える。

「刹那?」

キンツ!

刹那が刀を振ると鳥は真っ二つになって紙に戻る。式神か……

「待てー!」

「……ネギ先生……」

「ネギ?」

「さ……桜咲さん……亮さん……?」

「あ……コレ……落とし物です……」

「え……あーっ！これは僕の大切な親書！」

「ネギ……大切なもんならしっかり持ってろよ……」

「う……何にせよ、ありがとうございます！助かりました！」

「それは先生のモノですか？」

そして刹那は歩き出しながら言った。

「気をつけた方がいいですね、先生。……特に……“向こう”に着いてからはね。……それでは」

「お、おい……刹那？」

俺は刹那を追いかけた。

「おい、刹那。あれじゃあ誤解を生むぞ？」

「そうですね？……私はこのかお嬢様の護衛を任されていますから。神経質になっているのかもしれない」

「はぁ……明命と言いセイバーと言い刹那と言い……なんで女剣士はお堅いのかなぁ？」

ポツリと軽い愚痴を溢しながら席に戻った……ちなみに咲は爆睡してた。

そして京都に着いた。

「京都おーっ！！」

椎名が高らかに声を出す。

「これが噂の飛び降りるアレ！」

祐奈が、

「誰かつ！！誰か飛び降りれっ！」

風香が、

「では拙者が・・・」

楓が、はしゃいでた。

「ここが清水寺の本堂、いわゆる「清水の舞台」ですね」

「夕映？」

咲が尋ねる。だが夕映は止まらない。

「本来は本尊の観音様に能や躍りを楽しんでもらうための装置であ

り、国宝に指定されています。有名な――」

凄まじいうんちくを披露してくれました。

「……次行こうぜ」

そして色々巡った。恋占いの石の時は落とし穴の罠があったりした。そして音羽の滝に着いた。

「ゆえゆえっ！どれが何だっけー!？」

「右から健康・学業・縁むすびです」

するとみんなして、

「左・左――ッ！」

するとしばらくして、

「……何かみんな酔いつぶれてしまったようですが……」

「ええ――っ!？」

咲は一杯飲んでいた。

「……酒だコレ」

「あれ？酔わないのか？」

「アツハツハツ！桔梗や紫苑に飲まされた酒に比べりゃ全然軽いよ」

「・・・うぶ、祭さんに飲まされた強い酒を思い出した・・・」

苦労しながらみんなをホテルに運び込んだ。そして夜、風呂場の近くで、

「ひゃあああ~~~~っ！」

悲鳴が聞こえてきた。

「何があつた!?!」

咲が脱衣所の扉を開けようとした瞬間、

「開けるなバカっ！」

カコオーンッ！

中から投げられた桶が咲に直撃した。

「咲ーッ!?」

「いつも・・・こんな役ばっか・・・ガクッ」

・・・明命に石鹼はぶつけられるわ今のは多分アスナに桶をぶつけられるわ・・・そのしばらく前には学園長には決め台詞を言ってる途中に吹っ飛ばされたり・・・

「・・・憐れすぎる」

どうやら何者かがこのかを拐おうとしたみたいだった。・・・気のせいかイリヤがさらわれた時と似てるな、と思った。

そしてそれからしばらくすると、ケータイが鳴り響いた。

「はい、もしも『大変です亮さん!このかさんが拐われてしまいました!』はあ!?!」

「・・・亮」

「めんどくさいから俺はショートカットするぞ!」

俺はケータイを取り出す。

「モーションキャプチャー、龍騎！」

ケータイがカードケースみたいなものになる。そしてそれを近くに
あつた鏡に写すとベルトが現れる。

「変身！」

俺は仮面ライダー龍騎となった。

「じゃ、お先に！」

俺は鏡の中に飛び込む。そこはミラーワールド、つまりは鏡の世界。
俺はバイクを使ってこのかがいるであろう駅に向けてバイクを走ら
せた。

そして駅に着いて、鏡から元の世界を見ると、原作より多く式神を・
・ええと、サル女が出していた。アスナはその式神と、刹那は神
鳴流剣士の月詠と戦っていた。ネギはサル女を狙おうとしているが、
敵の数が多すぎるため、攻撃できないでいた。

「・・・よし、行くか！」

俺は鏡から元の世界に飛び出す。

「な・・・」

「は・・・？」

「え・・・？」

みんな揃っておかしな声を出した。

「さて、焼きザルといこうか？」

俺はベルトからカードを取り出す。

『ストライクベント』

右手に龍の頭みたいなのが現れる。

「ハアアア・・・ハアッ！！」

右手を突き出すと炎が飛び出て式神を焼き払う。

「もしかして・・・亮さんですか？」

「そうだよ刹那。よくわかったな」

俺は更にカードを取り出して使う。

『ソードベント』

「刹那、アイツは俺に任せてお前はこのかを」

「・・・すみません、頼みます」

「あ〜ん・・・ウチは刹那センパイと仕合たいんや〜・・・あなたに用はないですえ〜？」

「ククク、俺は多分、刹那より腕は上だぜ？」

そして剣を構える。

「呉の將軍甘寧の副将、大澤亮！幾度の戦を生き抜いた力を見せてやる！」

そして俺は月詠に突っ込んだ。

「タアッ！」

「やあ〜」

カキン！

カキキンツ！

カキヤアンツ！

お互い一歩も退かない攻防を繰り返す。

「ざーんがーんけーん」

ズガアン！

「おわ！？」

「うふふ・・・楽しいですえ〜・・・もっともっと仕合いましよ〜」

「こんのバトルマニアが・・・！聖杯戦争行け！」

満足いく戦いが出来るだろうよ！

「それじゃあ決めだ！」

カードを取り出す。

『ファイナルベント』

ドラグレッターが現れて、共に宙を舞う。

「くらええええつ!!!」

ライダーキックを月詠に向けて放つ。

「ほえ・・・？」

だが間一髪で避けられてしまった。

「ライダーがキックを外すか？普通・・・」

「つ、月詠はん！」

見ると完全に制圧されたサル女が式神を使って逃げようとしていた。

「・・・残念です。またこんど仕合いませう」

「あ、待て！」しかし二人とも逃がしてしまった。

「・・・チツ」

俺は変身を解いた。

「え、亮さんだっただんですか!？」

「ネギ・・・気づかなかったのか・・・」

その時、このかが目を開けた。

「ん……あれ、せつちゃん……？」

「お嬢様!？」

「あー、せつちゃん……ウチ、夢を見たえ……変なおサルに拐われて……でも、せつちゃんやネギ君やアスナや亮君が助けてくれるんや……」

「……よかった、もう大丈夫です。このかお嬢様……」

刹那がホツとしていた。

「よかったー……せつちゃん……ウチのコト嫌ってる訳やなかったんやなー……」

「えっ……そ、そりゃ私かてこのちゃんと話し……ハッ」

刹那がザザツ、と後ずさる。

「し、失礼しました!」

「え……せつちゃん?」

「刹那さん……」

「わ……私はこのちゃ……お嬢様をお守りできればそれだけで

幸せ、いや、それもひっそりと陰からお支えできればそれで・・・
あの・・・」

そのまま刹那は走り去る。

「御免!！」

「あ・・・せつちゃん!！」

「お、おい刹那!！」

俺は刹那を追いかける。するとアスナが、

「桜咲さん!明日の班行動一緒に奈良回ろうねー!約束だよー
ーっ!」

・・・明日は忙しくなりそうだった・・・

新しい話（後書き）

蓮華

「……………」

咲

「あれ、蓮華？」

思春

「……………必死に我らが説得してな……………」

亞莎

「やっと呼び出すことが出来ました……………」

咲

「……………亮は？」

思春

「……………あそこだ」

亮

「……………（ピクピク）」

咲

「うわぁ……………見るも無惨な姿に……………」

亞莎

「……………犯人は……………」

思春

「亞莎、余計なことと言つな」

亞莎

「は、はひ！」

咲

「……(怖)」

蓮華

「私は……あんなことはあまりやりたくはないが……皆が望むならば……」

咲

「まああれはあれでもし(チャキツ)蓮華が嫌ならやめたほうがいいかな！」

思春

「……だそつです」

亞莎

「……思春さん……怖いです……」

咲

「……(このままだと俺の命が危ねえ……)今回はここまでです！亞莎、頼んだ！」

亞莎

「ええ！？逃げないで下さいよ！？」

思春

「どうした亞莎。早くやれ」

亞莎

「はいい！えと、次回の真似と開閉と世界旅行！」

蓮華

「次回もまた見てくれ」

思春

「・・・ではまた次回会おう」

波乱の予感（前書き）

平和の中に波乱あり・・・ではどうぞ。

波乱の予感

二日目の朝。俺たちは女子の組で飯を食っていた。・・・朝からうるさかったが。

「班行動か・・・」

その時、まき絵がネギに突っ込む。

「ネギくん、今日ウチの班と見学しようよー！ー！」

「ちよ、まき絵さん！ネギ先生はウチの3班と見学を！」

「あー・・・」

「あ、何よー！ー私が先に誘ったのにー！ーっ」

「ずるー！ーい！だったら僕の班もー！ー！」

ネギがもみくちやにされてる時、のどかが声を出す。

「あ・・・あの、ネギ先生せんせい！！よ、よろしければ今日の自由行動・・・私たちと一緒に回りませんかー！ー！？」

「え・・・」

「み、宮崎さん・・・」

ネギはしばらく考えた後、

「わかりました宮崎さん！今日はぼく、宮崎さんの5班と回ることにします！」

クラスのみんなが沸き立った。すると、

「じゃあ咲君一緒に行こうよー」

まき絵が咲に手を伸ばす。俺はこっそりと部屋から逃げる。

「いや、俺より亮の方が・・・って、いねえし！？逃げやがったなアイツはー！？」

スマン咲。今日は戦闘は無いと思うから楽しんでこい。俺たちは正式には班に入っていないので、どの班行動にもついていけないのだ。

そして俺はアスナの班と行動するはずだったが・・・

「アスナーー！亮くーん！一緒に大仏見よーよ！」

「せつちゃんお団子買ってきたえ！一緒に食べへんー？」

・・・ハルナと夕映に拉致られた。そして俺は一人で奈良を巡ることにした・・・

・・・そして迷った。奈良なんて生きてた時に一回修学旅行で行っただけだからな・・・

「やたらに店が多いなここら辺・・・」

ごま団子の店とかあるし・・・その時、ふと見覚えのあるキョんシ―帽が目に入った気がした。

「亞莎!？」

しかし、店内を見返してもそこには普通の一般人しかいなかった。

「・・・はぁ・・・」

どうやら俺は元の世界やFateの世界よりも恋姫の世界に依存しているみたいだった。

「……ッ！」

その時、確かに殺気を感じた。俺は急いで人が無い広場へ走る。

「……誰だ？出てこいよ」

「は、随分と鋭いんだな、お前」

出てきたのは見覚えのある白装束……

「……左慈」

「やっと見つけたぜ……テメエのいる世界を捜すのは骨が折れる……」

「相変わらずしつこい奴だなお前は……いい加減諦めて他の外史を潰せばいいだろう？」

「……そうしたいのは山々だが、今はお前らを基準とした外史が多くなってるんでな、一々潰すよりもお前らを潰す方が早い」

「……パラレルワールドってことか……」

「・・・簡単に言えばそうだ。お前らを消せば基準が消える。つまりその広がった外史を一気に消せる」

そして左慈は指を鳴らす。そこにいたのは・・・

「・・・何なんだよ一体・・・」

・・・赤い衣装に身を包んだ・・・リリカルなのはヴォルケンリッターの一人、ヴィータだった。

「こんな所に寄り道してる暇はねーんだ・・・さっさとぶっ潰させてもらっぞー！」

ヴィータが突っ込んでくる。

「グラーファイゼン、カートリッジロード！」

その言葉と同時にカートリッジがロードされる。

「うおりゃあああぁー!!」

「くっ!?!」

俺は横っ飛びして避ける。

ズガアアアアッ!!

そこに大きなクレーターが出来る。・・・危な・・・

「魔法少女には魔法少女か！？モーションキャプチャー、高町なのは！」

こっちは主人公に変わる。

「お前・・・高町なんか！？」

「なのはだ！ちゃんと覚えろ！」

「・・・って何で俺がキレてるんだろうな・・・とにかく俺はレイジングハートを構える。」

「行くぞ・・・ヴィータ！」

「アクセルシューター！」

俺は大量の魔法弾を放つ。

「そんなの・・・！」

ヴィータは難なく障壁で魔法弾を防いだ。

「・・・チツ、そんなに防御力が高かったらザフィーラの存在価値が無いだろうが・・・!」

「うつせえよ!今度はこつちから行くぞ!」

ヴィータのグラーフアイゼンの先端がまるで尖ったドリルみたいになつた。

「ラケーテン・・・ハンマアアアアツ!!」

そのままグラーフアイゼンのロケット噴射の力で回りながら突っ込んでくる。

「しまっ!?!」

俺はそれを障壁とレイジングハートで防ぐ・・・が、

パキインッ!

「ガアッ!?!」

障壁はもちろん、バリアジャケットも砕かれ、俺は地面を転がる。

「ぐ・・・このバカ力が・・・」

・・・ちょうどいい具合に距離が開いた。使つなら今だ。

「・・・いけ」

その時、ヴィータの体を何かが縛る。

「な……バインド!?!」

「レイジングハート……カートリッジフルロード」

そしてレイジングハートを構えると辺りの光が収縮されていく。

「……行くぜ!スターライト……が!?!」

撃とうとした瞬間、違和感が起きた。

「な……に……?」

胸を見るとそこから手が生えていた。

「く……はははは!」

左慈が高らかに笑う。

「……馬鹿だな、俺がたった一人だけ召喚すると思ったか?」

「なん……だと……?」

しくじった……どこにいる……シャマル!

「ぐ……あああ!?!」

魔力を奪われていくのがわかる。

「ぐ……は……があ……」

俺は何とかレイジングハートを構え直す。

「スターライトオ……ブレイカアアア！」

ヴィータごと、左慈に向けて放つ。

「うわあああ!?!」

「ハアツ……ハアツ……どう……だ……」

力を使い果たしたのか……俺は気を失った……

咲

嫌な予感がして、俺はまき絵たちから逃げた。そして案の定、天高く光が飛ぶのを見て確信する。

「亮の奴・・・無茶すんなよ・・・」

現場に何とかたどり着く。そこには気絶した亮とボロボロの・・・あれはヴィータか？それと今亮を殺そうと構えている左慈がいた。俺は迷うことなく干将莫耶を投げて、キープレードを構える。

「なに!?!」

左慈は剣に気づいて、飛んで避けるが、すでに上には俺が構えて待っていた。

「しま・・・」

「ハアアア!」

一閃。左慈はそのまま地に伏した。

「ぐ・・・五十嵐咲・・・貴様は・・・また・・・」

その言葉を最後に左慈は光になって消えた。

「はやてえ・・・痛いよ・・・痛いよお・・・」

ヴィータも消えた。

「・・・ッ！ストライクレイド！」何かを感じて、キープレードを投げるが、現れた盾によって防がれる。

「・・・シヤマルか」

「・・・はい」

物陰からシヤマルが出てくる。

「・・・どうせやめろって言っても聞かないんだろ？」

「・・・私は戦いたくないけど・・・体が勝手に動くの・・・」

やっぱりか・・・

「じゃ、すぐに楽にしてやんよ！」

キープレードを構えて突っ込む。

「クラールヴィント！」

盾が現れる・・・が、

「魔力集中！デスペル！」

魔法で盾を消し去る。

「くらいな！ソニックレイヴ！」

そのままシャルルを貫いた。

「あ……はやて……ちゃん……」

そしてシャルルは光になって消えた。

「おい、亮？」

俺は亮に駆け寄って揺するが、目を覚まさない。

「仕方ない……」

俺は亮を背負いながらホテルに戻った……

亮

「う、うん……」

俺は目を覚ます。ここは俺と咲の部屋だ……確か、俺は……

「目え覚めたか？」

「咲……」

「ビックリしたぜ。嫌な予感がするから向かってみればコレだ」

「……悪い。助かった」

「いいつてことよ」

俺たちはとりあえずロビーに行くことにした……。ロビーに行ったらネギが身悶えしてた。

「……ネギ？」

「どうしたんだ？」

「あ、りよりよ亮さんに咲さん！？べべ別に何もありませんよ！？別に告白なんかされて……あ」

全部言っちゃってるし……

「あつあつ……し、失礼します!!」

「あ、おいネギ!？」

そのままネギは走り去ってしまった。

「初々しいなあ……俺も恋の時はああったかも……」

咲が懐かしそうに言う。・・・明命ともそうだったよな・・・あの猫化事件はそうそう忘れられないよ・・・

それから夜になって原作の出来事を思い出したから、俺は咲に言うて浴場に向かう。

「・・・」

そして浴場の入り口には先生専用時間と書かれていた。俺はそのまま浴場に入る。中にはネギとしずな先生がいた。

「亮さん!？」

「あ、あら?どつかしたのかしら、亮君?」

俺はしずな先生・・・いや、

「おかしいな……？しずな先生は俺のことは“大澤君”って呼ぶはずなんだけど……」

「……！？流石に先生には名前で呼ばれないか……！」

俺はその誰かの顔を掴む。

「嘘だよ。先生にも俺は名前で呼んでもらうようにしてるんだよ……ミスったな朝倉？」

一気に顔の皮を引き裂く。

「う……」

その顔の下にあったのは、Aの朝倉だった。

「さて、コイツは没収な」

「あ、返してよ私のケータイ！」

「ダメだ。……どうする？このままこのコトは忘れるか？」

「ぐ……せつかく見つけたスクープを逃すと思う？」

「別に構わないけどな。でも、深追いすると最悪記憶じゃなくて存在を消されるぜ？」

「へ、下手な脅しは私には効かないよ？存在を消したら逆にみんなが怪しむんじゃないかな？」

その言葉に俺はニヤリと笑いながらケータイを取り出す。

「モーションキャプチャー、朝倉和美」

俺は朝倉そつくりになる。

「え……！？私が二人!？」

「……とまあこんな具合に代わりを立てられんだよ。……もう一度聞くぞ？“どうする？”」

「う……わかったよ……忘れる」

「……キャプチャーキャンセル」

俺は画像を消したケータイを投げる。

「わかればよし。でも、次に関わったら……わかるな？」

思春直伝の殺気を叩き込む。朝倉は顔を青くしながら頷いた。俺はそのまま部屋に戻る。……絶対に朝倉はコレで懲りないな、と思
いながら……

そして夜になって部屋でくつろいでいたら、いきなりしずな先生が入ってきた。

「二人とも、そろそろ就寝時間ですよ？今からあまり部屋から出ないようにすぐ寝てくださいね？」

そしてそのまましずな先生は部屋から出ていった。俺は頭を抱えた。

「亮……アレって」

「言うな……」

「いや、でも……」

「言うなって……」

「でも、アレって絶対にあさ……」

「だから言うなってばーっ！」

朝倉の奴……ダメだな、絶対に懲りてない。俺たちは巻き込まれたくないから、部屋から逃げ出した。

「……いない？」

「……ああ、進路クリアだ」

俺と咲はコソコソしながら外へ向かう。

「バイオハザードみたいだな」

「どつちかって言うとメタルギアだろ」

そんな会話をしてる時、敵が来た。

「およ？見つけたアルよー！」

「亮殿に咲殿でござるか」

「げ、古菲に楓！？」

古菲は俺に向けて拳を放つ。

「ハイイツ！」

「危なああ！？」

俺は何とかソレを受け流す。

「やっぱりその動きは中国拳法アルね？楽しみアル！倒したあとにキスをもらつアルよーッ！」

「よし、亮。後は任せた！じゃあな！」

「あ、コラ逃げんな！」

咲はそのまま走り去る。

「逃がさないでござるよ〜」

楓がそれを追っていく。

「古菲……？キスはあんまりしたくないんじゃないのか……？」
せめて恥ずかしがってここで止めてくれ……

「強い男なら大歓迎アル！亮があっさり終わるようなら見過ごすアルが……」

古菲は再び拳を叩き込んで来る。

「もし強かったら私の唇と共に古家を継いでもらつアルよ！」

「……（俺には明命がいるんだっつーの！）」

必死にソレを受け流していく。

「ハイハイハイハイーッ！」

「おわつと!?!?」

バシィッ!

バンッ!

ダンッ！

互いに拳を合わせていたその時、

「コリア！誰がいるのか？」

・・・新田先生の声が聞こえてきた。

「・・・ッ！古菲、この勝負は預けた！」

「・・・仕方ないアルね・・・」

俺と古菲はバラバラに逃げた。

「誰だあ！？」

「くそ、しつこい・・・」

なんとか曲がり道を使って姿は見られてないものの、流石にウザクなってきた。俺は目の前にあった部屋に飛び込む。中にいたのは龍宮に亜子にアキラだった。

「うわ！？亮君！？」

「スマン！何も言わずに匿ってくれ！」

「……見てたよ。新田先生に追われてるんでしょ？」

「……好きにするがいいさ」

そのまま俺はリアルタイムで様子を観察していた。……咲が人数増えて鳴滝姉妹やまき絵にも追われたり、ネギが五人に増えてみんながそつちに夢中になっている内に咲はどこかに逃げたり……

「……いつまでここに居ればいいんだろう……」

「私は構わないよ」

「ウチも構わへんよ？亮君、変なことはしないやろ？」

「するか！……いくらなんでもそんな外道じゃないよ」

「だろうな。それは私と刹那がよくわかっている」

「龍宮、シーツ！」

「ああ、すまない」

その日は丁度布団が空いてたから、俺はみんなと一人離れて寝た。
・ ・ ・ 結局原作通りこれは朝倉が考えた遊びに見せかけて仮契約を結ばせる作戦だった。結果はのどかが本物のネギと半ば事故のような形でキスをして、仮契約をした。 ・ ・ ・ ・ ・ カモネギ、朝倉 ・ ・ ・ 明日は覚悟しろ ・ ・ ・ ・ ・ ？

波乱の予感（後書き）

亮

「弱いなー俺は」

咲

「何もやられ方まで 真似しなくてもいいだろうに」

亮

「好きでやられてんじゃねーやい！」

咲

「ふーん……」

亮

「何かなのは系になるとろくな目に逢ってない気がする……」

咲

「スバルは勝ったんじゃないっけ？」

亮

「楽進相手にな。あとは……ティアナとザフィーラはバーサーカーに吹っ飛ばされて、シャマルは途中までしか回復しないわ蟲に食われかけるわ……なのは言うまでもない」

咲

「ティアナはなんとかやりあえてたよな。バーサーカー相手に」

亮

「……まあな」

咲

「……と言うより亮の物真似をした戦いの勝敗を知りたいな」

それではあとで調べておきます。

亮

「いたのか作者……」

いました。

咲

「頼むぜ。一体どんな感じなんだろうーな？」

亮

「……それでは次回の真似と開閉と世界旅行」

咲

「逃げたな……次回もまた見てください!!」

それではまた次回会いましょう。

平和に見える激闘（前書き）

前書きを書く必要があるのだろうか・・・ではどうぞ。

平和に見える激闘

次の日になって修学旅行三日目。魔法関係者＋朝倉が集まる。

「おい・・・亮？」

「亮さん・・・？」

「・・・」

俺はかなり不機嫌だった。

「どうしたのさ亮君？」

「・・・だ」

「ん？」

「・・・お前のせいだったのー！！」

「うひゃあ!？」

「昨日言ったよなあ!？マジで存在を消すぞ！」

「でもいいんじゃないですか？亮の旦那」

「・・・そう言えばお前も共犯だったなカモネギ・・・」

俺はカモを雑巾しぼりの要領で捻る。

「ああ〜小動物虐待つ〜!?」

「・・・とにかく、ホントに魔法は一瞬で死に到るんだから、気をつけてくれよ?・・・特別に今回は見逃してやる。・・・でも、次に何かやったら・・・」

俺は力モを握る手に力を込める。

「ああ〜!? 本当に体が大変なことに〜!? わかったツス。わかったツスから放してください〜!」

結局許した。咲には甘いと言われたけど・・・実はあんまり朝倉がやったことについては怒ってない。アイツも後半になればちゃんと事を理解するからな。・・・ただ、今は自重心が足りないだけだ。・・・だから必死に警告してんだけど・・・無駄だな。俺と咲は私服に着替えて（Fateで着ていた服とほぼ同じ）出かけることにした。と言っても目的は親書を届けるのとかこのかを守ったりすることだ。

「じゃ、俺はこのかの護衛に回るよ」

「じゃあ俺は親書を渡すネギと行くか・・・おっと、お前、鈴音は？」

「・・・あ、ホテルに忘れてきた」

「・・・はあ、仕方ない、ほら」

咲はそう言って干将莫耶を渡してきた。

「・・・どこに持っとけと・・・」

「布か何かでまとめとけば？」

「・・・そうするか」

結果はブリーチの斬月みたいになった。・・・どうやってほどこうかなこれ。

「・・・どうしてこうなった」

予定ではネギとアスナだけが親書をしに行く予定だったが、ハル

なたちに見つかり、明らかに人が多くなっていた。

「・・・」

このかを探していたら何故か咲と合流して更にこのかを見つけたと思っただけなら本来はいない予定のアスナと一緒にいたり・・・もう疲れる。

そしてゲーセンに行つてプリクラやカードゲームをしている内にネギたちはこっそり抜け出した。

咲

俺とネギとアスナはあの場から抜け出して関西呪術協会の本山へ向かった。

「ここが関西呪術協会の本山・・・？」

「伏見神社つてのに似てるな」

「よくそんなん知ってるな淫獣」

「カモツスよ旦那！？」

「うわー、何か出そうねー」

その時、いきなり刹那小型版が出てきた。

「神楽坂さん、ネギ先生、咲さん！大丈夫ですか」

「わっ！？・・・なっ・・・！？何よアンタ！」

「せ、刹那さん？」

「はい。連絡係の分身のようなものです。心配で見にきました。ち

びせつなとお呼びください」

刹那・・・いや、ちびせつなはペコツと頭を下げる。

「この奥には確かに関西呪術協会の長がいると思いますが・・・東からの使者のネギ先生が歓迎されるとは限りません。ワナなどに気をつけてください。一昨日襲ってきた奴等の動向もわかりませんし・・・」

「ま・・・さつさで行こうぜ？」

みんな武器を構え、突っ込む。

しばらく走った後、違和感に気づく。すると案の定結界に閉じ込められてしまった。

「あ・・・くそ、忘れてた・・・」

それから走り続けて休憩所を見つけた。

「ふうー、一息ついた・・・」

「……ん？」

俺は誰かに見られてる気がしたので、空間を開いて銃を取り出し、放つ。

バンッ！バンッ！

……反応なしか。

「ちょ、なんでいきなり銃を撃つのよ！？と言うよりなんで銃を持つてんのよ！？」

「細かいことは気にするなアスナ」

やっぱり慣れない銃はダメか……気を取り直して今度は弓を構える。

「いったい何処から出してるんですか！？」
ネギにもツツコミを入れられた。

「細かいことは気にするな」

その後、魔力や気について話をしたあと、何処からか声が聞こえてきた。

「だっ……だれ！？」

「来るぞ！」

すると上から蜘蛛の式神に乗った少年が降りてきた。

「そーゆうデカイ口叩くんやったら、まずはこの俺と戦ってもらおうか」

そして少年は俺に指を突き刺す。

「それとそこのにーちゃん！いきなり銃をぶっぱなすなんてどーいうコトや！？本気で死にかけたやろ！」

「いや、敵に情けはいらないし」

「・・・上等オ！」

戦闘が始まった。

「見たとこにーちゃんが一番強そうやから、この二人を倒したら相

手したるわ。それまでコイツらと遊んどきい！」

そう言つて少年は大量の狗神を召喚する。

「・・・多いな」

大量の敵を相手にするのは戦で馴れてる。とりあえずキープブレードを構える。

「ネギ！アスナ！そつちは任せた！」

「はい！」

「わかつたわ！」

「たらあつ！」

バシユンッ！

「多すぎねー！？」

すでに三十分は戦っている。フレアやアルテマを使つ暇すらない。・

・使えたら楽勝なのに。気がつくともネギたちはすでに逃げていた。

「……！俺も逃げるか……」

キーブレードをボードにして離脱する。

そしてネギたちを見つけたが、今に決着が着きそうだった。ネギがカウンターパンチを叩き込み、詠唱を始める。

「ラス・テル……マ・スキル・マギステル……闇夜を切り裂く
一条の光（ウヌース・フルゴル・コンキデンス・ノクテム）我が手
に宿りて敵を喰らえ（イン・メア・マヌー・エンス・イニミークム・
エダット）」

そしてネギは少年に手をあてる。

「フルグラテイオー・アルヒカンス
白き雷……！」

雷をくらいそのまま動けなくなる少年。

「どうだ！これが西洋魔術師の力だ！」

そして俺たちは逃げようとしますが、いきなり少年が獣化する。やられそうになるネギだったが・・・

「左ですネギ先生ー！！」

「のどかさんー！！？」

その後はのどかのおかげで何とか逃げることに成功した。

亮

「ふっ・・・ふっ・・・ふっ・・・」

俺たちは走っていた。なぜか？後ろから誰かが追尾してくるから。

「・・・ッー」

飛んできた“何か”を手で弾く。・・・街中でも容赦無しか・・・！

「な、なぜ・・・いきなりマラソン大会に・・・？」

「ちょ、ちょっと桜咲さん・・・何かあったのー!?」

・・・さすが探検部。俺と刹那に追いついてきてる。

「・・・刹那！」

前にシネマ村が見えてきた。

「あれ!?ここってシネマ村じゃん。何よ桜咲さん・・・シネマ村に来たかつたんだ〜!?」

刹那は何かを閃いたような顔をして、

「すみません！綾瀬さん、早乙女さん！わ、私、このか・・・さんとふ、二人きりになりたいんです！！ここで別れましょう!!」

そして刹那は跳んで中に入っていった・・・金払えよ。そして俺も中に入るうとしたら、首を服を引っ張られる。

「ぐえっ!?!」

見るとハルナがにんまりと笑いながら、

「亮君は、逃がさないよぉ・・・?」

「覚悟してください」

「あ、あはは・・・」

結果、俺はむりやり衣装を着せられた。何を着せられたかと言うと、思春が着ていた服にズボンがあるだけ。・・・こんなにそっくりなモノがあるなんて思わなかったぞ。・・・

「似合ってんじゃない亮君」

「後ろの剣もあるせいか、かなり凛々しいです」

更に干将莫耶の布をほどいて、ベルトで巻き付けて、腰に装備している状態。・・・ちなみに干将莫耶は作り物扱いになってる。

「・・・ほら、刹那を探すぞ」

「はいはい」

「わかりました」

それからしばらくもしない内に刹那たちは見つかった。・・・こっちは更に人数が増えたが。

「・・・!？」

その時、馬車に乗って月詠がやってきて刹那にこのかを賭けて戦いを挑んだ。

「このか様をかけて決闘を申し込ませて頂きますー・・・30分後、場所はシネマ村正門横「日本橋」にてー」

そして月詠は去り際に狂気じみた殺気を叩きつけていった。

「・・・刹那」

「・・・はい、やるしかありませんね」

そのあと刹那はみんなに勘違いされてメチャクチャにされていた。

結局みんなを撒くことができず、全員連れて月詠の元へ向かう羽目

になった。そして何故かちっさいネギがやってきたりもした（あとカモモ）

そして橋に着いた。・・・クラスメートだけならまだしも大勢の一般人まで見学に来てしまった。

「ツクヨミ・・・と言ったか？この人たちは・・・」

「ハイ センパイ。心得てます〜〜」
そう言つて月詠はたくさんのお札をだす。

「この方達には私の可愛いペットがお相手しますーひゃっきゃこおー」

現れる大量の妖怪・・・いや、明らかに仮面ライダーみたいな怪人までいる。そいつは剣みたいなお爪を振り上げて・・・

「夕映！伏せろ！」

振り下ろされる前に干将莫耶で切り裂く。

「月詠！貴様は・・・」

だが月詠自体は疑問に満ちた顔をしていた。・・・月詠の意思じゃない？・・・だが、やることは一つだ。

「刹那！こつちはまかせろ！」

「・・・頼みます！」

俺は大量の妖怪や怪人に向き直る。

「俺のクラスメートに・・・仲間に手を出す奴は許さん！！」

俺は素早く目の前の敵を倒していく。

「・・・ッ！数が多いな・・・」

「・・・ここじゃ魔法は使えないし・・・あ、これなら誤魔化せるかも。」

「モーションキャプチャー！クウガ！」

腰にベルトが現れる。俺は右手を左側に突き出して、それをゆつくりと右に動かしていく。そして両拳を合わせてベルトのスイッチを腕で押す。

「変身！！」

俺は仮面ライダークウガとなる。

「ええ！？亮君が有名なヒーローに！？」

「あらあら」

「・・・おかしいだろうが・・・」

上からハルナ、千鶴、千雨。あと一般人の子供大喜び。

「行くぜえええ！」

怪人たちをどンドン倒していく。

「今回は決めるぜ！ハアアア・・・」

中腰に構えて走り出す。

「マイティキイック！！」

ドガアアアッ！

怪人が派手に爆発する。・・・だが怪人はまだまだいる。本当に無害な妖怪はさっきのキックに巻き込まれてほとんどが消えていた。

「・・・！ハルナ！その刀貸せっ！」

「え？あ、うん！」

ハルナが模造刀を投げる。俺はソレを受け取りながら、

「超変身!!」

仮面ライダークウガタイタンフォームになる。そして手に持ってた刀は見た目がガラリと変わった。

「オラオラオラオラー!!!」

シャキーンツ!

カキヤアンツ!

カアンツ!

みるみる敵の数が減っていく。

「ハアアア!!!」

そのまま突き進もうとした瞬間、今までと違う鋭い斬撃に襲われる。

「なに!?!」

カキーン!

「・・・お前は!」

銀髪のおかつぱ頭・・・イザーク！・・・じゃなくて魂魄妖夢！

「・・・百鬼夜行って言うてるのに幽霊じゃん」

だが魂魄妖夢からは鋭い殺気が放たれている。

「・・・っ!?!?」

「お前が・・・お前が幽々子様をッ!」

「は？俺が何を・・・」

「問答無用!」

容赦なく刀が振るわれる。

「ぐ・・・!?!?コイツ・・・」

俺は受け止めながら後ろに言う。

「朝倉！お前の刀も貸せ！あと夏美！そこら辺で何か銃みたいなのを持ってきてくれ！何でもいいから!」

「あ、わかったよ!」

「え？え？ええ?」

朝倉から受け取った刀も剣に変えて二刀流で挑む。

「やあぁっ!」

「ハアッ!」

カキン!

カキヤアンツ!

「絶対に・・・許さない・・・!」

「いったい何があったんだ? 並大抵のことじゃ人は・・・幽霊?・・・半人半霊ってどっちに区分されるんだろう・・・じゃなくて! ようするにほどのことがなきやあんな殺気は中々出せない。」

「ウワアアッ!」

「ぐ!?!」

「俺は力負けをして押し戻される。・・・少女の力じゃないからコレは。」

「もらったあぁぁっ!」

「そつ易々とやらせるかよ!」

「力で負けるなら速さでどうだ!

「超変身!」

「俺は仮面ライダークウガドラゴンフォームになる。そして橋の鉄棒

を引きちぎってロッドにする。

「そろそろそろそろーッ!」

「う、くう・・・!」

「間合いに入れなきゃ刀は弱いな!」

「・・・!まだまだ!」

魂魄妖夢は一瞬で間合いを詰めてくる・・・かかった。

「・・・残念でした」

俺は武器を空振りしたフリをしてその勢いで蹴りを放つ。

「一つ言ってやる。忘れやすいけど仮面ライダーの攻撃は結構重いんだぜ?」バキィッ!

「ああああ!」

魂魄妖夢を蹴り飛ばす。

「お嬢さま!」

刹那が叫んだ。そっちを見ると城の上で人形サイズに巨大化したネギとこのかが追い詰められていた。

「夏美！」

「あ、コレでいい!?!」

そう言っつて投げ渡されたのは木でできたゴム鉄砲……大丈夫かな？

「超変身!?!」

仮面ライダークウガペガサスフォームになる。そしてゴム鉄砲はボウガンみたいな銃になった。

「制限時間50秒……一発で決めるぜ!」

狙いを二人を弓で狙ってる式神に定める。

「……フウ……」

集中、集中……その時、風が吹いて二人がバランスを崩す。

「も、ほ?」

それに反応して式神が矢を放つ。

「ま、ず、つ……!」

バシユンッ!

慌てて矢に向けて銃を撃つが慌てて撃つたため、当たるわけがなく弾は外れた。

「このかー！ー！？」

このかに矢が当たりそうになった瞬間・・・刹那が身を挺してこのかを庇った。

「刹那っ！？」

「センパイ！？」

「せつちやー！ーん！ー！」

城から落ちる刹那を追いかけて飛び降りるこのか。誰も死んだと思っただ瞬間、辺りを光に包んだ・・・・・・・・・・

時間が来て変身が解ける。刹那はこのかが無意識に使った“チカラ”によって無傷だった。

「・・・・・・・・！アイツらは・・・・・・・・」

見ると魂魄妖夢も月詠もサル女もいなかった。

「亮さん！」

辺りを探していると刹那が声をかけてくる。

「今からお嬢様の御実家へ向かいます！後で落ち合いしましょう！」

刹那はそのままこのかと走り去っていった。俺も誰かに捕まらない内にその場を去っていった……

平和に見える激闘（後書き）

パロディ合戦ネギま！〜！！

亮

「まためんどくさいことを・・・」

のどか

「いつぺん・・・死んでみる？」

夕映

「アンタは母親だろう!？」

楓

「綾崎ハーマイオニーです」

まき絵

「シユークリームなのですよ。あう」

刹那

「こんばんは。よろず屋せつちゃんです」

あやか

「行くぞちっさいワンコ!」

小太郎

「行け!スパイダ!」

茶々丸

「燃やし尽くせ!インフェルノドライブ!」

亮

「ハイハイカオスカオス」

咲

「なげやりだな」

亮

「だってさ、まだクラスの半分もいってないんだぜ？またやるに決まってるだろ」

咲

「・・・だよな」

それでは今回はここまでです。

亮

「次回の真似と開閉と世界旅行」

咲

「次回もまた見てください」

それではまた次回会いましょう。

新たなる襲撃者（前書き）

足を怪我しました・・・おかげで外出禁止です・・・ではどうぞ。

新たなる襲撃者

俺たちは合流して総本山へ向かうはずだったんだが……

本来のメンバー

俺

咲

ネギ

アスナ

刹那

このか

のどか

これはしょうがない

俺

咲

ネギ

アスナ

刹那

このか

のどか

ハルナ

夕映

朝倉

・・・おかしい。色々とおかしい。

「・・・亮」

「スマン・・・まさかGPSを使ってくるとは・・・」

「私の不覚です・・・」

「仕方ない、か・・・」

その後、総本山に着いて予想外に歓迎された。ネギは関西呪術協会の長・・・このかの父親の近衛詠春に親書を渡した。・・・つまり、これでネギは重任を果たした。近衛詠春はもう遅いから今日は泊まっつていきなさいと勧めてくれたので、俺たちはそれに甘えることにした。

「・・・来るか？」

「・・・ああ」

俺と咲は来たる襲撃に備え始める。

「それじゃあ俺はあっちに行ってみる」

「わかった。気をつけるよ」

そしてしばらく家の中を歩いていたとき、寒気が走った。

「……ッ!」

振り向きざまに干将を振る。だが後ろに迫っていた何かは軽々とそれを避ける。

「驚いた。かなり訓練された兵士並みの反射神経だね」

「実際によく訓練された兵士なんだよ……フェイト・アーウェル
ンクス」

「……どうして僕の名を?」

「知っているから……そうとしか言えないな」

本名は忘れたけど。

「・・・君の能力は厄介だからね。悪いけどここで倒させていだだ
くよ」

フェイトが構える。

「最近黒星が多いからな。ここでそろそろ勝たせてもらっぜ！」

俺はケータイを取り出す。

「いい加減勝たないとな！モーションキャプチャー！暁美ほむら！」

なのはシリーズでダメなら今の魔法少女だ！俺は物真似が終わると
同時にマシンガンを構える。

「・・・銃が魔法使いに効くとも？」

「やってみなくちゃわからない・・・ぜ？」

俺は時を止めてフェイトの後ろに回る。

「え？」

「喰らえや！！」

俺は残弾をありったけ叩き込む。

「・・・やったか？」

あのマシンガンでくたばると思えない。

「・・・甘いよ」

「やっぱりか」

後ろから迫るフェイトをかわしながらマシンガンを捨ててショットガンに持ちかえる。

「・・・なんなんだい君は？彼らから話は聞いていたけど、実際に会ってみると奇妙なことこの上ないね」

「まあ、な！」

コイツも左慈に依頼された男か・・・！俺は時を止める。

「・・・また後ろだろう？」

フェイトは裏拳を放つ・・・が、そこにあっただのは、手榴弾だった。

「・・・なに・・・？」

ドガアアアンツッ！

室内にも関わらずに手榴弾を使うのはどうかと思ったが、フェイトを倒すのにあれこれ言ってる余裕はない。

「まだまだ行くぜ！」

「く……」

俺は至近距離でショットガンをぶっぱなす。

「この距離ならバリアは張れないな!!」

どこかで聞いた台詞をいいながら弾を撃ち込む。

「……今度はどうだ……?」

これでダメなら……

「残念だったね。アレは分身だよ」

「な……」

その瞬間、辺りに煙が充満する。

「やば……!」

俺はすぐに時を止めて外に飛び出す。だが……

「……！体が！？」

徐々に体が石化していく。

「ふう……結構強かったね。本当なら石化した君を砕かなきゃいけないんだけど……」

「……？」

「僕の“今の”目的はお嬢様だからね。後で必ず砕いてあげるよ」
そう言ってフェイトは去っていった。

「ちくしょう……ちくしょおおおっ！」

俺はその言葉を最後に意識が途絶えた……

咲

「咲さん！」

「ッ！ネギにアスナに刹那・・・このかは？」

「・・・」

「そう、か・・・」

やっぱりさらわれたか・・・

「・・・おい、亮を見なかったか？」

「いや、見てないですが・・・まさか!？」

「・・・探すぞ！」

俺たちは一斉に走り出す。そして中庭に辿り着いたとき、一つの石像を見つけた。

「これは・・・」

「なんでコイツの石像が・・・」

その石像はまどか マギカの暁美ほむらだった。・・・いや、開け放たれた部屋の中に落ちている干将莫耶を見て確信する。

「・・・亮」

「え？これが亮さん・・・？」

「どっからどう見ても女の子じゃない」

「ネギ・・・アスナ、これが亮の能力・・・物真似さ」

「物真似・・・これが」

刹那が納得したように頷く。

「・・・治せないんですか？」

「・・・時間がかかるな・・・どうやらたった今石化したみたいだから・・・ざっと十分ってところか」

「・・・わかりました。なら、咲さんが亮さんを治療している間、僕たちはこのかさんを助け出します！」

「・・・わかった。任せた」

ネギたちはそのまま走っていく。俺は亮を治すために魔力を集め出した・・・

亮

「……ガハアツ!？」

体が石化から解放されると同時に物真似も解除される。

「……やつと回復したか……」

「……咲?……ああ、お前が助けてくれたのか。助かったよ」

「気にすんな。それより早くネギたちを追いかけるぞ?」

咲がキープレードをボードにする。

「……ああ。行くぜ」

俺はボードに乗った……………

「……見えた!」

下を見ると大量の妖怪と刹那とアスナが戦っていた。

「亮!」

「わかってる！」

俺はボードからとびおりる。

「モーションキャプチャー！バマミ！」

いい加減勝たないと主人公（笑）なんて呼ばれちまう！わざわざ俺は負けが込んでる魔法少女をあえて選ぶ。

「・・・ふっ！」

大量のマスケット銃を何処からともなく取り出す。

「刹那！アスナ！」

「・・・誰？」

「まさか・・・亮さん・・・ですか？」

俺は地面に突き刺さったマスケット銃を引き抜く。

「だーいせーいかーい・・・伏せる二人とも！」

バンッ！

バンッ！

バンッ！

素早く銃を撃つ。地面に刺さっているマスケット銃を蹴ったり引き抜いたりして単発式のソレをあたかも連発式に見せる。

「・・・凄い」

「・・・私たちも負けていられないわよ刹那さん！」

そして俺は一際大きいマスケット銃を取り出す。

「ティロ・ファイナーレ！！」

ズガアアアアッ！！

それで大半の妖怪が消し飛ぶ。

「へっへーん。やっと俺にも勝ち運が・・・」

その時大口を開けた妖怪が俺を食らおうと目の前に現れた。

「・・・え？」

そして俺が食われそうになった瞬間、

「魔法の矢連弾・闇の17矢！！」
サキタ・マギカ セリエス・オブスクーリー

・・・妖怪は消し飛んだ。

「アホか亮っ！そこまで真似しなくてもいいんだよ！」

どうやら咲が援護してくれたようだった。

「うるせえ！誰が好き好んで頭と体をサヨナラさせるかよ!?!」

「今なりそうだっただろ!?!しかも死亡率100%のキャラを選んだお前が悪い!」

「あーッ！今の発言は確実にファンの人を敵に回したぞ!いいじゃないか死亡率100%!世の中には死亡率100%でもヒロインになれる空気嫁だっているんだよ!」

「ちよつとアンタたち!こんなときにケンカしない!!」

「・・・ゴホン、待たせたな妖怪共!」

俺は若干顔を赤くしながらマスケット銃を構えて言う。

「今のは不覚をとったが今度は・・・え?」

再び大口を開けて迫ってくる妖怪。・・・死んだ、そう思った瞬間、妖怪の頭が破裂した。

「は・・・?」

「ふ……苦戦してるみたいじゃないか、亮？」

「た、龍宮!？」

「真名じゃないか」

俺と咲が口々に言う。

「うひゃー あのデカいの本物アルかー？強そアルねー」

古菲まで来てるのか……

「ここは私たちに任せてくれ」

「……任せた！亮！」

「了解！四人とも、よろしく！」

ボードに乗って先に行ったであろうネギを追いかける。

「・・・なんだあの光は!?!」

夜の筈なのにまるで昼間並みに明るくなるほどの光の柱が天高く輝いていた。

「・・・まだ間に合う!」

咲がスピードを上げようとした瞬間、斬撃が俺を襲う。

「うわあああつ!?!」

「亮!?!」

とっさにマスキット銃で防いだがそのまま地面に叩き落とされる。

「がは!?!」

その衝撃で物真似が解除される。

「ぐ・・・お前は・・・」

「幽々子様を・・・幽々子様を帰せえええええ!!!!」

魂魄妖夢が二本の刀で斬りかかってくる。

「亮!受けとれ!」

咲から投げられた干将莫耶を受け取って斬撃を防ぐ。

「なんで・・・俺を狙う!?!」

「白々しい！お前が幽々子様をどこかに閉じ込めたんだ！」

「だから何でそれで犯人が俺だと思ってるんだ！？」

剣を交えながらお互いに自分の意見をぶつける。

「あの白装束の人が言っていたんだ！」

「ぐ！？・・・またかよ！」

俺はソレを聞くなり魂魄妖夢から背を向けて走り出す。

「な！？・・・逃げるなあ！」

俺は魔力を使って走る。儀式を完成させないために。

「・・・くっ、ネギは間に合わなかったのか！？」

見ると儀式は終了して既にこのかの魔力によってリョウメンスクナノカミが呼び出されようとしていた。

「くそ！こうなったら一番活躍してる仮面ライダーだ！」

俺はケータイを取り出す。

「モーションキャプチャー！ギャレン！」

腰にベルトが現れる。俺は迷わずにベルトのレバーを引く。

『ターンアップ』

俺は仮面ライダーギャレンに変身する。

「頼むぜ……」

俺はカードを引き抜く。

『バレット』

弾を連射する。だがあまり効果はないみたいだった。……その時、咲とネギが目に入る。

「雷を纏いて（クム・フルグラテイオー 二）吹きすさべ（フレック
ト・テンペスターズ）アフストーリーナ南洋の嵐！」

「闇を従え（クム・オブスクラテイオー 二）吹雪け（フレックト・テ
ンペスターズ）ニラァリス常夜の氷雪！」

咲とネギが同時に魔法を放とうとしている。

「ヨウイス・テンベスターズ・フルゲリエンス雷の暴風！！！！」

「ニウイス・テンベスターズ・オブスクランス闇の吹雪！！！！」

二つの魔力が当たっても少しのけぞる程度にしかならなかった。

「・・・咲のやつ、よりによってなんで馴れてない魔法を・・・」

と言うよりこのかの魔力は凄いな・・・確か、ネギより莫大な魔力があるんだっけ？・・・下手したらサーヴァント並みの力を持つてるんじゃないか今のスクナは？

「・・・咲！！」

「亮！来たのか！！」

その時、フェイトが歩いてくる。

「・・・君、大澤亮だよ。どうやって石化を治したんだい？」

「咲のお陰だよ・・・どうするフェイト？ネギがもう魔力切れだとしても三対一だぜ？」

「・・・いいや、三体二だよ」

フェイトがそう言った瞬間、魂魄妖夢が突っ込んでくる。・・・この距離じゃあ銃は不利だ。千将莫耶も置いて来ちゃったし・・・俺は左腕についてるラウズアブソバーにカードをいれる。

『アブソープクイーン』

更にカードを一枚使う。

『フュージョンジャック』

背中に羽が生え、銃も先端に剣がつく。

「やあぁっ！」

「てりゃ！」

カキン！

「いい加減・・・諦めろよ・・・！」

「うるさい！絶対に・・・絶対に許さない！」

仕方ない。なら実力行使だ。俺は一気に力任せに押し返す。

「ぐ！？」

そしてカードを三枚使う。

『バレット ラピット ファイア』

俺は空を飛ぶ。

『バーニングショット』

炎の弾を乱射する。

「う、うわあああぁっ！？」

ソレをまともくらい吹っ飛ぶ。

「ふう……」

気を緩めた次の瞬間、黒い波動に攻撃された。

「ぐわっ！？」

その衝撃で変身は解けなかったが、ジャックフォームは解除されてしまった。俺は波動が飛んできた方に顔を向ける。

「……于吉！」

「・・・まったく使えませんか・・・」西行寺幽々子は大澤亮が閉じ込めた」・・・そう言えば貴方を確実に殺すと思ったんですが・・・期待はずれです」

その言葉に反応したのは魂魄妖夢だった。

「それは・・・どういう意味・・・ですか？」

「意味も何もそのままの意味ですよ。西行寺幽々子を閉じ込めたのは大澤亮ではなく私たちです」

魂魄妖夢の殺気が一際大きくなる。

「よくも騙したなああ！！」

我を忘れて于吉に飛びかかる。

「・・・無駄ですよ」

それは于吉が展開した障壁に弾かれ、魂魄妖夢は吹き飛ばされて転がる。

「なら、今度は俺だ！」

カードをまた三枚使う。

『ドロップ　ファイア　ジエミニ』

「ハアアア・・・」

『バーニングデイド』

宙を飛んで、俺は二人に分裂する。

「タアアアアアツ！！」

そして炎を纏った蹴りを于吉に放つ。

「・・・効きませんよ」

それすらも軽々しく弾き、俺は吹き飛ぶ。・・・それと同時に物真似も解除されてしまった。

「く・・・」

「ここまでですよ。大澤亮、魂魄妖夢。貴方たちはここで消させてもらいます」

ここまでか・・・そう思った時、声が響いた。

『・・・あら？誰の許可を得て妖夢を消すのかしら？』

その瞬間、空間が開いてその中から大量の弾幕が放たれる。

「何っ！？」

于吉はそれを飛んで避ける。そして空間から二人の女性が出てくる・・・あれは、

「幽々子様!？」

「八雲紫!？」

「久しぶりね、妖夢」

「な、何故西行寺幽々子が……」

それに八雲紫が答える。

「私が助けたのよ」

「馬鹿な、あの空間にはあの世界の住人である人間は入れないように……まさか!」

「そのまさかよ。私はね……既に自我が目覚めているのよ……幽々子を閉じ込めていた空間に侵入するのは簡単だったわ」

自我が……?

「そうそう、そこの貴方?」

八雲紫が俺に声をかけてくる。

「……俺?」

「そうよ……名前は確か……」

「亮、大澤亮」

「そうそう・・・私は八雲紫。あの神様から依頼されて助けに来たわ」

「じいさんに・・・」

「紫。相手は待っていてくれないみたいだけど？」

西行寺幽々子がそう言った。

「大丈夫よ。行きなさい、藍、橙」

空間・・・スキマから更に二人飛び出してくる。

「わかりました紫様！橙、下は水だから落ちるな！」

「はい！」

「く・・・式風情が・・・」

西行寺幽々子がこっちに向き直る。

「うちの妖夢が迷惑をかけたわね・・・ええっと・・・」

「亮だよ、西行寺幽々子」

「そうそうそれ。・・・あと一々そんな長く言わないで幽々子だけでいいわよ？」

幽々子がそう言ったのでそうさせてもらおう。

「ここは私たちに任せて頂戴」

「でも紫？そんなメリットなしで俺を助けるのか？」

「メリット・・・と言うよりは仕返しね。私の友人に手を出したんだから」

「なるほど」

「・・・まで、つまりは幽々子がどこかに閉じ込められていなかったら・・・」

「無論、貴方は助けられないわ」

「・・・人の考えてることを読まないでくれる？」

まあいい。今はこの五人に任せよう。

「じゃあ頼むぜ、紫！幽々子！」

俺は咲たちがいると思う場所に向けて走り出す。

俺は向こう端にいる咲たちと・・・ネギが仮契約カードの力で呼び出したアスナと刹那がいた。

「みんな！」

「亮！無事だったか」

「亮さん・・・丁度いいです。みなさん逃げてください。お嬢様は私が救い出します！」

刹那がいきなり言い出した。

「お嬢様は千草と共にあの巨人の肩の所にいます。私ならあそこまで行けますから」

「で、でも、あんな高い所にどうやって」

アスナが刹那に言う。

「・・・実は私・・・四人にも、このかお嬢様にも秘密にしておいたコトがあります・・・」

刹那はうつむいてそう言った。

「この姿を見られたらもう・・・お別れしなくてはなりません」

刹那はそう言って力を溜める。

「でも・・・今なら、あなた達になら・・・」

そして刹那の背中に……白い翼が出てくる。

「……これが私の正体。奴らと同じ……化け物です」

刹那は更に言葉を繋ぐ。

「でもっ……誤解しないでください。私のお嬢様を守りたいという気持ちは本物です！……今まで秘密にしていたのは……この醜い姿をお嬢様に知られて嫌われるのが怖かっただけ……！私っ……宮崎さんのような勇気も持てない……情けない女ですっ……」

「……ふうーん」

アスナがぺたぺたと刹那の翼に触れる……と次の瞬間、

バッチイイン！

思いっきり刹那の背中を叩いた。

「なーに言ってるのよ刹那さん。こんなの背中に生えてくんなんてカッコイイじゃん」

「え……」

更に俺が言う。

「そっだよ。それにソレで化け物なら……なあ？」

今まで出逢ってきた敵を思い出す。

「……そうだな。醜くなんてないさ。このかだつてアツサリ受け入れるさ。……受け入れてもらうためにさっさとこのかを助けに行くぞ？俺も空を飛べるから手伝ってやる」

「ホラ、早く刹那さん」

「……ハ、ハイ！」

「……そこにいたのか」

フェイトが歩いてくる。

「ネギ先生……このちゃんのためにがんばってくれてありがとうございます」

「んじゃ、任せませ」

刹那と咲が飛んでいく。

「さ、さて……ここから……どうしようかカモ君」

「ああ……こっちはもう手は出し尽くしちゃったしな」

その時、声が頭に響く。

『……坊や、聞こえるか？坊や』

エヴァの声だ。そしてエヴァはあと1分半でこちらに来ることがわかった。

「ちょっと亮君・・・あの物真似だっけ？使えない？」

「キツいな・・・時間止めにティロ・ファイナーレにバーニングデイドライブ・ニングショット・・・次は流石に・・・」

一瞬紫たちに助けを求めようとしたが、あつちはあつちで大変そうだから止めた。

「でも、やることは一つ！」

「いきますー！」

「OKー！」

「GOー！」

「シ・・・シス・メア・パルス契約執行・・・！！！」

アスナと俺が一齐に突っ込む。だが、俺自身も疲れが貯まっていたんだろう。背後に容易く回られアスナ共々蹴り飛ばされる。

「はっっ！」

「うわっ！」

「アスナさんっ！亮さんっ！……っ！？」

ネギも正拳突きでこっちに飛ばされる。

「く……おおっ……！」

俺はフェイトと直接殴りあう。

「……君はやっぱり予想外だね」

「所詮イレギュラーなんで、ね！」

見よう見まねとは言え思春と亞莎の動きを必死に真似たんだ。易々やられるわけにはいかん。

「……そら、よ！」

「……！」

フェイトを蹴り飛ばすがフェイトはその勢いを使って空を飛ぶ。

「バーシリスケ・ガレオーテ ヴイシユ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト。小さき王八つ足のメタ・コクター・ポドーン・カイ 蜥蜴邪眼の主よ（カコイン・オンマトイン）」

狙いは俺でなくネギたちだ。

「ネギ、避ける!？」

「その光ト・フオー我が手に宿し（エメーイ・ケイリ・カテイアース）災いなる（トイー・カコーイ・デルグマティ）目差しで射よ（トクセウサトー）」

「ネギ！」

アスナがネギを庇う。

「石化カコン・オンマ・ペトロセオースの邪眼！！！」

ズシャアアツ！

やられたかと思っただが、アスナは服が石になっただけだった。

「やはり。魔力完全無効化能力か？」

そう言っただけでフェイトはアスナに狙いを定めるが、ネギがソレを阻止する。

「イタズラの過ぎるガキには……おしおきよっ！！！」

アスナがハマノツルギを一閃。フェイトの障壁が無効化される。

「ネギ！行くぞ！」

俺とネギは手に魔力を込めてフェイトを殴り飛ばす。

「……身体に直接拳を入れられたのは……初めてだよ、君たち！」

フェイトが俺たちに攻撃しようとした瞬間、地面から手が出てきてフェイトを掴む。

「ウチのぼーやが世話になったようだな、若造」

そして地面から出てきた誰かがフェイトを吹き飛ばす。

「あっ……エ……エツ……エツ……エヴァンジェリンさん
!」

「これで借りは無しだなぼーや」

そして空を飛んでいた茶々丸が結界弾を撃ってスクナを封じ込める。

「……させない」

本来なら来ないはずのフェイトが突っ込んでくる。

「……亮さんには触れさせません!」

さっきのエヴァが使った転移魔法から……明命が飛び出してきてフェイトを一閃した。

「明命!?!」

「……恋もいる」

二人がゲートから飛び出して構える。

「・・・エヴァ、一緒に攻撃する」

「む？よし、共に最強と言つものを教えてやるうじゃないか！」

エヴァが空を飛び、恋は跳ぶ。

「来れ（エビゲネーター）とこしえのやみ（タイオーニオンエ
レボス）！えいえんのひょうが（ハイオーニエ・クリユスタレ）！
！」

スクナが完全に凍る。・・・やったらエヴァがハイテンションだっ
たが。

「おわるせかい」（コスミケー・カラストロフエー）フツ・・・
砕ける」

そして完全に砕け散る前に恋が復活の余地を許さないほどの力を叩
き込む。

「————戦場を駆ける一騎当千の将————！！！」
ホウテンガケキ

恋の宝具で完全にスクナは消滅する。・・・まだ宝具を使えたんだ。

「威力は落ちてますけどね」

隣にいる明命が言う。・・・いや、アレは落ちてるのか？メチャク
チャ高威力なんです。

そして咲も走りよってくる。

「あれ？恋？」

「・・・咲、久しぶり」

恋はそう言っつて咲に抱きつく。

「ちょ、れれれ恋！？いきなり何を！？」

アスナたちはポカンとしていた。

「・・・く・・・」

「む・・・さすがにキツそうだなぼーや。大丈夫か？」

その時、後ろから何かが現れる。

「エヴァンジェリンさん！！うしろっ・・・！！」

その瞬間、大量の弾幕が降り注ぐ。

「く……妖怪に幽霊に式か……厄介だね。……分が悪いから、今回は退かせてもらおうよ」

そのままフェイトは水になって消えた。そして紫たちがこっちに来た。

「……！？貴様は……」

「咲、紫たちは仲間だよ」

「……え？」

「……于吉は取り逃がしたわ」

「相手してくれただけでも助かったよ」

「そう……何か聞いたそうな顔してるわよ」

「……ああ。自我が生まれるとはどういう意味だかを知りたい」

「……いいわ、教えてあげましょう。まず、自我が生まれるとは他の世界に干渉できることを言うの。条件は“世界”を見ること。私は暇つぶしに色々な世界を巡ったから自我が生まれ、他の限りない世界に干渉できるようになった」

「……さて、それじゃあ左慈や于吉が呼び出しているのは……」

「・・・あれは自我を持たないから他の世界には干渉できないはず・・・そう思っているのね？」

俺は頷く。

「それも簡単よ。自我を持った者の恩智を受ければ他の世界でも干渉できる。・・・けど」

「けど？」

「その恩智を受けたものは恩智を与えたものの命令には背けないの・・・妖夢は何も命令されてなかったみたいけど・・・あとここにいる藍と橙と妖夢は他者の恩智を受けてここにいるのよ」

「なるほど・・・」

常に令呪が無限のサーヴァント状態ってわけか・・・

「・・・それじゃあ私たちは幻想郷に帰るわ」

「ああ、助かったよみんな」

「あの・・・」

妖夢が恐る恐る声をかけてくる。

「ん？なんだ？」

すると頭を思いつきり下げて、

「申し訳ありませんでした！！勘違いで何度も襲ってしまっ
て……」

「あー……気にすんなよ。しょうがないって」

「ですが……」

「妖夢？亮は気にしてないって言っているのよ？ならもういいじや
ない」

幽々子が妖夢に言った。

「……亮、もし幻想郷に来ることがあったら白玉桜に来てね？歡
迎するわ」

「そうね……幻想郷はすべてを受け入れるわ……もし来ること
があるなら……幻想郷は歓迎すると思う」

「……考えておくよ」

「……それじゃあ、行くわよ？藍、橙」

「行きましよう妖夢。私、お腹が空いちやっただわ」

そして五人はスキマを通っていった。

その時、ネギが倒れた。

「ネギ!？」

そしてみんなが集まる。

「・・・危険な状態です」

茶々丸が言うにはネギの対魔力が高すぎるせいで石化の進行速度がかなり遅くなっている。つまりこの速度で首が石化した時点で呼吸ができなくなり窒息死になってしまう。・・・みんなが慌てるなか、このかが名乗り出た。

「みんな・・・ウチ、せつちゃんに色々聞きました・・・ありがとう」

このかは言葉を繋いでいく。

「今日はこんなにたくさんの方のクラスのおかげに助けてもらって・・・ウチにはこれくらいしかできひんから・・・」

そしてこのかはネギと仮契約をした。その力を使ったことにより。石化していた人はみんな元に戻った。・・・俺たちはとりあえず休むことにした・・・

新たなる襲撃者（後書き）

亮

「……一気にいったなおい」

そうですか？

咲

「と言うよりこのタイミングで恋たちを出したか……」

亮

「于吉は取り逃がすしな」

咲

「今さらになって自我の説明もあったし」

う……

亮

「ま、いいけどさ」

咲

「だな」

亮

「次で修学旅行編はおしまいか」

そうですね。

咲

「それじゃあ早いけど今回はここまで」

亮

「次回の真似と開閉と世界旅行」

次回もまた見てください

一区切り〜(前書き)

修学旅行編完結です。ではどうぞ。

「区切り」

朝になって目が覚めたので外に出る。すると刹那がどこかに行こうとしていた。

「刹那」

「ッ！・・・亮、さん」

「どこに行くつもりだよ。このかを置いて」

「い、一応一族の掟ですから・・・あの姿を見られた以上仕方ないのです・・・」

そのまま刹那は去ろうとする。

「・・・刹那」

「・・・なんです・・・っ!?!?」

刹那が振り返った先にあつたのは俺の人差し指。

「バーカが見るー」

刹那の頬を指で突つつく。

「な、なにを・・・」

「バカかお前は。一族云々じゃなくてお前の意思で決めろよ」

「それでも・・・！」

「わっかんない奴だなお前は！この際言っちゃまうけどな、前に恋と戦ったときにお前の物真似をしてるんだよ！だからお前に翼があることは恋はおるか明命も知ってるっつーの！」

「な、勝手に私の真似をしたんですか！？しかもよりによってそんな堂々と・・・」

そんな言い争いをしてるとき、みんなが慌てて出てくる。

「なになっ・・・何事ですか！？」

「実は3 Aの旅館に飛ばした私達の身代わりの紙型が大暴れしてるらしいのよっ」

「うえ！？マジかそれ」

「おっ、ここにいたか桜咲！」

「亮、ホテル嵐山へ急行するアルよ！」

「荷物の準備できましたー！」

「ホラ刹那！身代わりはお前の専門だろ？」

「せっちゃんはよー！」

「刹那さん急いでください！」

「お前らが最後だぞ！恋と明命はとっくに支度終わってるよ！」

「……誰も喋らないよ、刹那」

「……仕方……ないですね……」

刹那は涙を拭いながら顔を上げる。

「ありがとう。亮さん……」

そして旅館に帰ってきて見て見たものは……

「わー！？いきなりなんなん亮君！？」

「うわー！ 亮君だいたーん」

「……最低」

・・・亜子に抱きつこうとしてる俺の身代わり。

「なに・・・」

手に魔力を籠める。

「してんだゴラアアツ!!」

身代わりを全力で殴り飛ばした。

「あれ！？亮君が二人」

「どうして？」

「あれ？あれ？ウチに抱きつこうとしたのが亮君で、助けてくれたのも亮君・・・あれ？」

・・・その説明にかなり時間を使った。・・・そして、

「待ったか？明命」

「いえ、今来たところです」

詠春との待ち合わせにはまだ時間がある。俺と咲は別行動をして二人に京都巡りをさせることにした。

「・・・あれ、その服どうしたんだ？」

明命の服があのだ々目のやり場に困る服ではなく、スカートに長シヤツといった服装だった。

「はい！美砂さんや円さん、桜子さんに貸して頂きました！」

両手を合わせながら嬉しそうに言う・・・って、

「柿崎たちに？」

「はい。前にも言いましたが、この一年で3 Aのみなさんや魔法関係者のみなさんとはほとんど顔見知り・・・もしくは良い仲なのです」

「いや、それは聞いたけど・・・いきなり来て驚かなかったのか？」

「はい。私たちは実は麻帆良七不思議に登録されているのです！」

なんだそれ！？

「私たちはその中の一つ“夜な夜な現れる謎の少女”なんです・・・
・と言っても一度刹那さんや真名さんに見つかったことを始めにみなさんと普通に話してるんですけどね」

「・・・だから夜な夜な神出鬼没で現れてた明命たちがここにいても誰も気にしない・・・か」

「はい！」

「ま、いいや・・・」

俺は明命に手を差し出す。

「行こうぜ明命。・・・Fateの世界じゃあんまり見せられなかった天の御遣いが住む世界を見せてやるよ」

明命は笑顔で俺の手を握って、

「・・・はい！お願いします！」

清水寺や色んな観光地を見せて廻った。

「・・・楽しいか？」

「楽しいです！・・・でも」

明命は少し沈んだ声で言う。

「蓮華様や思春殿に・・・亞莎にも・・・この景色を見せてあげたいです・・・」

そんな明命の頭を撫でる。

「亮さん？」

「見せられるさ。紫の話聞いてたたる？・・・いつか世界の壁を超えて外の世界の人間を呼び出せるようになったら・・・俺たちの仲間をみんな呼んで、俺と咲がみんなに恩智を与えて・・・みんな楽しんでもう、な？」

「・・・はい」

左慈や于吉、紫ができるなら俺たちだっていつか外の世界の人間を呼び出せるようになるはずだ。・・・その時はみんなに謝罪の意味も籠めて楽しませよう。武器を持たなくていい世界を・・・

そんなとき、同じく観光していたエヴァたちを含めたネギたちがやってきた。

「む・・・亮に明命か。なんだ、デート中だったか」

「・・・亮さん？遠坂様も言っていましたけどでえとってなんなのですか？」

「い……いや、明命は知らなくていいんだようん！」

「ほほう……」

エヴァの目がキラリと光る。

「教えてやるう明命。デートと言つのは……」

「あわわわ！？エヴァ！頼むから変なことは言つなよ！？」

そしてエヴァが明命に耳打ちして数秒後……ボン！と音がして明命の顔が真っ赤になる。

「ちよつとエヴァちゃん！？何を言つたのよ！？」

アスナがエヴァに詰め寄る。

「い、いや、ただ単にお互いのことを好きな男女が共に歩き回る……
とだけしか言っていないんだが……」

「ん？なんかラブ臭が……」

ハルナが何かを言っていたがスルーだスルー！

「そろそろ時間です。長の所へ向かいましょう」

ネギがそう言ってみんなを止める。……助かったよネギ。合流した咲も同じようにいろいろ言われて慌てていたが、恋はむしろ嬉しそうに咲に抱きついていた……恋ってこんなキャラだったっけ……

・
？

「やあ皆さん。休めましたか？」

詠春と合流する。

「ねえねえドコ行くの？」

「何でもネギ先生の父親の別荘に・・・」

「ネギ先生のー・・・」

「・・・ここです。10年の間に草木が茂ってしまいましたが、中はキレイなものですよ」

そう言ってたどり着いたのはどちらかと言うと洋風の家。そして俺たちは中に入る。

「スゴイ。本がたくさん」

「好感度UP」

「け、けっこーオシャレね・・・モダンってゆーか」

上からハルナ、夕映、アスナ。

「彼が最後に訪れた時のまま保存しています」

「ここに・・・昔、父さんが・・・」

そしてみんなは好き好きに動き出す。

「・・・亮君、咲君。来てください」

詠春に呼ばれる。そして一枚の写真の前に案内される。

「・・・この写真は？」

「サウザンドマスターの戦友達・・・黒い服が私です」

「戦友・・・？」

「ええ、20年前の写真です」

「わひゃー！これ父様？わかー！ーい」

俺はそのなかのジャック・ラカンとアルビレオ・イマに注目する。

「・・・千の顔を持つ英雄・・・か」

俺の恋姫で付けられた通り名は千の顔を持つ男。しかも物真似能力はイノチノシヘンみたいだな。

「私はかつての大戦でまだ少年だったナギと共に戦った戦友でした。・・・そして、20年前に平和が戻った時、彼は既に数々の活躍から英雄・・・サウザンドマスターと呼ばれていたのです」

その後も話は続いた。公式の記録ではナギ・スプリングフィールドは1993年に死亡扱いされていた。

「ハーーーーー！そつちのみなさん難しい話は終わったかなー？記念写真撮るよー！下に集まって」

「記念写真？」

「そーそー忘れてたの、他の班はもう撮ってんだよ」

「わ、私はいいぞそんなもん！」

「ほらほら、駄々こねるなエヴァ」

「ちょ、咲！？人形みたいに私を持つなー！？」

「ほら、明命ちゃんと恋ちゃんもこっち来なって」

「和美さん！？でも私たちは生徒じゃ・・・」

「いっていいって、ほら」

「撮ろうぜ明命。よく考えたら写真とか教えてなかったし」

「・・・咲、一緒に」

「お、おお・・・」

そんな感じで今は帰りの電車。

「・・・終わったな」

「・・・そうだな」

明命たちも電車に乗せようとしたが・・・

『大丈夫です。乗り物に乗るよりも跳んでいったほうが速いですか』

『ら』

・・・なんて言って先に行ってしまった。・・・流石周泰&呂布・・・悔りがたし。

「なににせよ、これで一段落だな・・・」

「・・・そういやお前、だいぶ東方組と仲良くなったよな」

「・・・紫や幽々子のことか？」

「そ、羨ましいぜ。コレでもし東方の世界に行ったら寢床に苦勞しないなお前」

「・・・そうかぁ？あの紫たちがいる幻想郷に行けるとは限らないんだぜ？」

「・・・そうだけどさー・・・ふわぁ・・・眠い・・・」

「明命・・・たちと・・・色々巡ったからな・・・」

「・・・俺は限界だ・・・おやすみ・・・」

咲はそう言ってカクンっと頭が下がる。

「・・・そうだな、今は・・・」

俺は目を閉じる。

「（・・・ゆっくり、眠るか・・・）」

こつして修学旅行編は終わりを告げた・・・

一区切り（後書き）

亮

「やっぱり勝ち少ねえええ！？」

咲

「あっはっは」

亮

「笑うな！？」

咲

「だって・・・ねえ？」

亮

「・・・この調子じゃネギにも負けそうだ・・・」

咲

「いいんじゃないかな？」

亮

「よくねーよ」

咲

「そんな勝率で大丈夫か？」

亮

「大丈夫じゃない、問題だ」

咲 「まあ……亮の活躍は遠い未来に期待して……」

亮

「遠い未来！？しばらくはやられるの確定なのか!？」

咲

「次回の真似と開閉と世界旅行」

亮

「聞けよっ!」

咲

「次回もまた見てくださーい」

亮

「くそ……!なら真っ先にお前を……」

咲

「デジヨン」

亮

「うわあああああ……」

咲

「それではまた次回」

突き進む少年〜(前書き)

前書きで書くことが思いつかない・・・ではどうぞ。

突き進む少年

修学旅行から帰ってきて意識せずうつかり刹那の部屋に入った結果、俺たちが刹那の部屋に住んでいることがバレた（幸いにも魔法関係者のみ）そして・・・

コンコン

「ネギー？入るぞー？」

俺と明命はネギの部屋に入る。

「あ、亮さん、明命さん」

「どうしたのいきなり？」

「んー？明命との鍛練が終わったからちよこつと暇潰しだよ・・・それは？」

俺はネギが見ていた何かを見る。

「これは長さんからもらった手がかりです」

「これ・・・麻帆良の地図？」

何か読めない文字の中にカタカナでオレノテガカリとか書いてあったりした。

「ま、いいや・・・そろそろ咲たちも起きただろうし・・・行くぞ、明命」

「・・・はい」

「・・・明命？」

「はい？」

何かがおかしいような・・・ま、いいか・・・

「・・・なんだ、誰もいないのか・・・」

「・・・」

「……でも、しばらくすれば帰ってくるか」

「……じゃ」

「……明命？」

嫌な予感がして恐る恐る明命に声をかける。

「じゃん」

悪夢再来。頭にはその四文字が浮かんでいた。

「み、みみみ明命！？なんで猫モードに!？」

「亮さまぁ……じゃん」

やばい、呼び方まであの頃に戻ってる。

「なんで……いきなり……」

「あのアスナさんにもらったチョコを食べたら私もお猫様みたいな気持ちになってきましたぁ」

どうやら今回は酔っ払っているわけではないらしい。……だから普通に喋れるわけか。

「……じゃん!」

「な!？」

ピョンっと俺に飛び付いてきてマウントポジションを奪う明命。

「く……あの頃の無力な俺とは違う!」

そう言っつて魔力を籠めて逃げようとするが……

「……逃がさないにや……」

ソレを上回る力で抑える明命。

「……つて、元サーヴァントの力に勝てるかあああ!」

その時、

ガチャッ

「ただいまー……ッ!??」

咲と恋が帰ってきてくれた。

「あ、丁度いいときに帰ってきてくれ」亮「え?」

咲は温かい目をしながら、

「……悪い、邪魔した」

そのまま部屋から出ていく咲たち。

「まっつてええええええ!?!この状況で置いてかないでええええ!?!」

「にゃん」

一瞬だが明命の力が弱まった。俺はその一瞬の隙を突いて逃げ出す。

「・・・逃げるが勝ちっ・・・！」

そして色々な所を逃げたのだが・・・結局、

「ああ~~~~んせつちゃん好き好き、好きや~~~~」

「ああっ、ネギ先生アスナさん、たすけてください~~~~っ」

「にゃあん・・・亮様・・・」

「み、明命・・・！頼むから一旦落ち着こう・・・な？・・・アスナとネギも見えてないで助けるよ~~~~っ！？」

・・・結果、被害者が増え、正気に戻った明命が真っ赤になって必死に俺に謝るのだった・・・

それから数日、全ての元凶だったカモを雑巾絞りの刑に処して（と言っても明命にチヨコを勧めたのはアスナだが）今はネギの部屋に

いる。

「エヴァに弟子入りする？」

「はい。僕は今回のことで力不足を実感しました・・・魔法使いの戦い方を学ぶにはエヴァンジェリンさんしかいなと思ったんです」

「まあな。俺や咲は戦い方が根本的に違うし・・・やっぱりエヴァが妥当か」

「と言つても試験に合格しなければいけないんですけどね・・・」

「んー、俺が使えるのは基本、闇属性だからな・・・エヴァみたいに得意じゃなくてもバシバシ色んな魔法を使えるのは理想的だな」

「すっかり闇に染まったな、咲」

「・・・このまま、闇に溶けるのもいいかもな・・・」

「アホか」

「・・・あ、そうだ。古菲には中国拳法を教わってるんだって？」

咲が思い出したのか聞いてみる。

「はい。・・・あの少年に勝つために・・・少しでも力が欲しいんです」

「そうか。だけど忘れるなよ、ネギ」

「“ありすぎる力は他人をも傷つける”・・・大丈夫ですよ亮さん」
「・・・ならいいけど」

そして次の日の学校。

「・・・なあ、亜子」

「なんや？」

「まき絵、元気無さそうだけど・・・」

「あはは・・・ちょっと色々あったんや・・・」

「まるで中々結果が出せないジャイアンツの選手みたいだな」

「え？そこはタイガースを例えに使うべきやろ？」

「なに言ってるんだよ。ジャイアンツだろ？普通」

「そっちこそ何を言うとするんや。タイガースに決まっとする」

「ジャイアンツ！」

「タイガース！」

「・・・私はオリックスだと思っ」

「「アキラ!?!」」

何でいきなり野球対談に・・・ちなみにその後はサッカーのことに
ついて亜子から、水泳についてアキラから、しかも面白そうに次々と
運動部員が増えていき、やりもしないスポーツについてまで詳しく
なってしまうた。

「・・・バカ」

咲の言葉が心に突き刺さった・・・

それからネギと古菲の体術鍛練とアスナと刹那の剣術鍛練にまき絵が加わった。どうやらまき絵も新体操で色々迷うことがあるらしく、共に悩んでいたネギと一緒に頑張りたと言った……って亜子から聞いた。あとアスナの鍛練には俺と明命も参加している。咲は、「俺のは我流だから他人に教えるのは無理かな……」と言ってエヴァの元へ行き、授業料を払いながら魔法の鍛練をしていた。

そしてその夜、咲と共にネギの試験が行われる場所に向かう。

「そっぴやさ、咲」

「なんだ？」

「明命と刹那と妖夢……似てないか？」

「なんだいきなり。と言うよりどこら辺が？」

「誰かに忠実」

「他には」

「刀」

「・・・他には」

「お堅い」

「他には」

「気配」

「・・・」

「でも、なんか似てない？」

「んー・・・」

そんなアホな会話をしてる内にエヴァたちが見える。

「オッス、エヴァ」

「む、咲に亮か」

「こんばんは」

「茶々丸が相手をするのか？」

「ああ。茶々丸に一撃でも与えられたらばーやは合格だ」

「ふうん・・・」

そしてネギが到着する・・・大量のギャラリーを連れて。

「よく来たなぼーや。では早速始めようか」

そしてエヴァは条件を告げる。

「お前のカンフーもどきで茶々丸に一撃でも入れられれば合格。手も足も出ずに貴様がくたばればそれまでだ。わかったか」

するとネギはニツと笑いながら、

「・・・その条件でいいんですね？」

そしてネギと茶々丸が構える。

「では始めるがいい！！」

そして始まる戦い。

「・・・亮」

「ん？」

「お前、この後の展開を覚えてるよな？」

「・・・ああ、まあかなり要所要所が曖昧になってるけど・・・
キャラの特性は覚えてるんだけど」

「・・・てかお前の能力的にキャラの特性を忘れたら終わるぞ、色々と」

「・・・うっせ。・・・んで？それがどうしたよ」

「・・・ネギが勝つと思うか？」

「どうした急に」

「・・・いや、何でもない」

「・・・おかしなやつ」

その時、茶々丸をわざと誘ってネギがカウンターを入れようとする。
・・・が、茶々丸は壁を使って三角跳びをして逆にネギへカウンターを見舞う。

ズギヤツ！

そのままネギは地面を転がり動かなくなる。

「残念だったなぼーや。だが、それが貴様の器だ。顔を洗って出直してこい」

だが、ネギはそれでも立ち上がる。

「まだです・・・まだ僕くたばってませんよ。エヴァンジェリンさん」

「ぬっ・・・？何を言ってる？勝負はもう着いたぞ、ガキは帰って

「寝ろ」

「……でも、条件は「僕がくたばるまで」でしたよね。それに確か時間制限もなかったと思いますけど？」

「な……何っ!?まさか貴様……!」

「く……あっはっはっは!!」

咲がいきなり笑いだす。

「いいじゃんエヴァ、続けさせてやれよ」

「……好きにしろ」

「……だ、そうだネギ。まだやれるよな？」

「はい!」

しかし自身への魔力供給が切れたネギは茶々丸にボコボコにされる。

「……あれは左目が見えてないな」

顔の腫れ具合からそう判断する。さすがのエヴァもネギを止めようとするがネギは聞かない。終いにはアスナたちも止めようと動き出すが……

「だめーアスナ!!!止めちゃダメー!」

まき絵がみんなを止める。そして茶々丸さえも気が緩んだ瞬間、

「オイ、茶々丸!!」

「え」

ぺちんっ

「・・・あ」

「な」

「あ・・・当たりまふいた・・・」

そのまま倒れ込むネギ。

「・・・エヴァ」

「わかってるさ、咲。だがただでさえお前がいるのにぼーやまで・・・」

「その代わりに俺の血を飲ませてんだろっが」

「ぼーやの魔力に比べれば足りん」

「む・・・キープレードの魔力を合わせりゃ俺だってそこそこは・・・」

「・・・キープレードが無い俺はそれ以下ですかい・・・」

そしてエヴァはネギの弟子入りを認めた。こうして夜は明けていった。。。。。

突き進む少年（後書き）

刹那

「みなさんどうも。桜咲刹那です」

セイバー

「私はアル……アーサー・ペンドラゴンです」

妖夢

「魂魄妖夢です」

明命

「私は周泰。字は幼平。真名は明命です」

刹那

「でも、今回はなんで私たちなんでしょうか？」

セイバー

「中の人……の繋がりは無いですね」

妖夢

「う……」

明命

「よ、妖夢さん。がんばがんばなのですよ」

刹那

「……」

セイバー

「……もしかして、本編で亮が言ってた……」

明命

「お堅い剣士……ですか？」

ぴんぽん。

妖夢

「……正解みたいですね」

セイバー

「でも、咲も言っていましたけどどこら辺が……」

ポンツ 亮・士郎・幽々子・このかのぬいぐるみ

全員

「……っ!?!?」

バシィッ 各自迷うことなく目的のぬいぐるみをキャッチ

全員

「……あ」

全員

「……」 お互いを見つめあう

ガシッ！ 無言でみんなの手を繋ぎあう

刹那

「それでは次回の真似と開閉と世界旅行」

セイバー

「次回もまた見てください」

妖夢

「それではまた次回会いましょう」

明命

「次回もお楽しみに！」

発覚（前書き）

今は何話なんでしょうか・・・ではどうぞ。

発覚

ネギの弟子入りが決まって次の日の早朝。

「……きろ、起きろ、亮」

「ん？……なんだ？」

咲に起こされて目が覚める。

「ネギが一人でどこかに行ったぞ。追わないか？」

「……うむ、いくか」

いつもと違い、俺が寝ぼけた状態でネギを追いかけた。

「……のどかに夕映？」

ネギと話をしている二人を見つけた。

「おや、亮さんに咲さんじゃないですか」

「おはようございますー」

「丁度よかったです。亮さんたちにも聞きたいことがあったんです」

「・・・何を？」

「貴方達は・・・魔法使いですね？」

「え・・・」

「な、何を証拠にそんなこと」

「修学旅行の時です。亮さんはシネマ村で変身をしていましたし・・・それに私は空を飛ぶ咲さんを目撃しています」

「う・・・」

「げ・・・」

「しかもお二人が魔法使いであるとすると常に一緒にいる明命さんと恋さんも関係者だと思われれます。第一おかしいのです。生徒ではないのに麻帆良に在中・・・それに男子なのに女子校にいつまでもいたり穴を探せばたくさん見つかりますが・・・」

「いかん、逃げ道が消えていく・・・仕方ない。」

「・・・その通り。俺たちは魔法関係者だよ。男子校にいかないのは単に女子校の方が都合がいいから・・・それで？」

「・・・？」

「コッチの世界に来るのかってことだ」

「勿論です。私は既に覚悟を決めています」

夕映の目をしつかり見る。・・・うん、真っ直ぐな目だ。蓮華や思春みたいに迷いが無い目だ。

「・・・だつてさネギ」

「・・・仕方ありません。わかりました」

そう言つてネギは杖に乗る。

「では、乗ってください」

「え・・・」

「乗る？」

そして俺は咲のボードに乗って空を飛んで図書館島に向かう。更に入つても罨に引つ掛かりまくつた。・・・またトータルで一番俺が罨に掛かつたけど。

そして皆ボロボロになりながらも目的地に着いた。

「・・・なんで・・・ここに来ただっけ・・・？」

息切れを起こしながら咲に聞く。

「ネギの・・・親父の手がかりを探しに来たんだろ・・・？」

その時、何か大きい影に明かりを遮られる。

ゴアアアアアッ！！

雄叫びが聞こえて振り向いた先には・・・ドラゴン竜がいた。

「「は？」」

「につ、逃げっ・・・夕映さんのどかさん逃げてーっ！」

「咲！」

「おう！」

サーヴァントなんて人外のものと戦ってきたせいかならずに竜に突っ込む。

「セイ、ヤッ！」

「そらっ！」

鈴音とキーブレードで攻撃する・・・が、

カキイインッ！

肩にまで衝撃が走り、弾かれる。

「堅あ！？」

「魔力を高めて斬りつけたのに・・・！」

・・・そつだ。あれならどうだろう。

「咲！時間稼ぎを頼む！」

そつ言つて目を閉じる。・・・思い出せ、思春の全てを・・・

「・・・っ！キャプチャーコンプリート！」

見違える速さで竜に斬りかかる・・・が

カキキキキンッ！

全ての斬撃を弾かれ、更に

ピシッ・・・

鈴音にヒビが入る。

「く……」

なら……アイツはどうだ……

「咲！干涉莫耶！」

「……わかった！」

咲から渡された干涉莫耶を持って目を閉じる。

思い出すのはアーチャー。投影したものとはいえ、アイツが最も活用していた夫婦剣。そして最後に共に戦ったときのアイツの動きを思い出す。……孤高の英雄エミヤ。

「……キャプチャー、コンプリート……」

失われていた魔術回路に魔力が籠められていく。

「……いくぞー！」

干涉莫耶を地面に突き刺し、真上に跳ぶ。

「I am the bone of my sword」我が骨
子は捻れ狂う」

投影する弓と螺旋状の剣。剣を変化させて矢にして弓で構える。

「――偽・螺旋剣？（カラドボルグ）――！！！」

竜に着弾して爆発する。竜は仰け反る。

「ハアツ・・・ハアツ・・・」

まだ二回しか真似をしてないのに既に体が限界だった。その時、

「脱出します。ネギ先生」

「ちゃ・・・茶々丸さん!？」

「亮!」

「・・・っ!ああ!」

茶々丸の介入により無事に逃げることが出来た。そして外に出た瞬間、目の前が暗くなっていく。

「あれ・・・おかしい・・・な・・・」

「亮!？」

「亮さん!？」

みんなが心配そうに声をかけてくるが・・・俺は力なく倒れ、意識は簡単に失われていった・・・

「う・・・」

「亮さん！大丈夫ですか！？」

「明命・・・？えっと、ここは・・・」

「エヴァさんの家です。・・・咲さんに知らされたときはホントに心配したんですからね？」

「あ・・・ゴメン・・・今は何時？学校が・・・」

「午前3時です」

「え・・・午後じゃなくて？」

「はい」

「・・・まで、明命はいつから俺を看てるんだ？」

「倒れたと連絡を受けてからずっとです！」

「……睡眠は？」

「あの……まったく」

「眠くないのか？」

「そこは大丈夫です。前に戦があったときは思春殿と一緒に1日半不眠で過ごしたことがあります」

「……いいから少し寝ときなよ。俺は大丈夫だから」

「……わかりました。では仮眠をとらせていただきます」

明命はそう言って近くにあった毛布にくるまって寝始める。……別にありがちな寝てるときにゃはやらないのでご安心を。

「……って誰に言ってるんだ俺」

とりあえず俺は下に降りることにした。

「……？体が……」

体がメチャクチャ軽い。半日以上寝てたからかな？

「・・・エヴァ、何をやってるんだ？」

「ん？目が覚めたのか。・・・なに、ゲームだよゲーム。見てわからんか？」

「いやわかるけどさ・・・今は午前3時だぞ？別に吸血鬼は夜行性ってわけじゃないんだろ？」

「うむ、吸血鬼にもよるらしいが別に必ず夜行性ってわけじゃないぞ？」

「・・・そうなのか？」

「そもそも真祖にもなると日の光にも対応でき始める場合が多いから、灰になることもないし」

「・・・ちなみに聞くけどエヴァが知っている吸血鬼は？」

「・・・む・・・ブリュンスタッドとか・・・串刺し公とか・・・言っていくときりがないな」

意外に結構知っていた。

「・・・まあ、私がゲームにハマっているのも、サウザンドマスターの呪いのせいだからな」

「そうなのか？」

「そうさ！初めの内は「学生も良いかもな」なんて思っていたが流石に15年も学生やってれば飽きてくるんだよ！そうになると何か暇潰しが欲しくなってるな・・・」

「それで着目したのはゲームか」

「ああ！ゲームは素晴らしい！最近のはグラフィックもキレイになってきてな、やりこみ要素もバツチりだ！残念なのは最近なんとなくマンネリ化していることか」

そう言ってるエヴァを横目にエヴァがやっているゲームを見る。

『斬刑に処す！』

「エヴァさん！？一人で格ゲーをやってたんですか！？」

「ああ、このキャラは中々使いやすくてな。今はサバイバルで茶々丸が叩き出した記録に着々と近づけているんだ」

ネギまにメルブラがあることに驚きなんですが！？

「他にはFFやDQとかのRPGやあと他には」

「いいから！もういいから！」

「おお、そうだ亮。お前も私に付き合え。茶々丸が本気になるとどうしても本気じゃ勝てないんだ」

「・・・何をやらせるおつもりで？」

「KOFだが？」

「あー・・・」

「亮はどのゲームが好きだ？貴様は言っていたよな？好きなものはゲームだと」

「うー・・・好きなのは格ゲーとRPG。嫌いなのはシューティング」

「ふむ・・・なら私はたくさんゲームを持っているからな。今後は私の練習台になってもらうぞ」

そう言つてエヴァは大量のゲームを取り出す・・・いやいや多すぎでしょうよ・・・

「・・・まさかと思うけど咲は・・・」

「授業料に血と共にゲームに付き合わせたな。アイツは何気に狩りゲーやシューティングの弾除けが上手いぞ」

そうですか・・・結局俺はエヴァが眠くなるまでゲームに付き合わされた。・・・今日は休みでよかった・・・

そしてその日の午後、ネギとその従者4人と夕映と古菲と咲と恋が

集まった。

「亮？なんか顔がやつれてるぞ」

「・・・エヴァってゲーム上手いな」

「OK把握した」

一方のネギは4人に契約執行と対物と対魔の障壁を施し、更にサギタ・マギカを199本を放って倒れていた。

「・・・よし、咲、手本を見せてやれ」

エヴァが咲に言う。そして咲は詠唱を始める。・・・相変わらず初心者用始動キーだった。

「闇の精霊199柱ウンデトリギンタ スピリトウス・オブスクーリサギタ・マギカ・魔法の射手連弾セリエス・オブスクーリー・闇の199矢！！！」

咲が放った魔法の矢は天高く飛んでいき、エヴァが張った結界に当たって結界にヒビをいれた。

「・・・お〜」

みんなが感心する。

「随分と沢山射てるようになったんだな」

「ああ。エヴァとの訓練だな。Fateじゃ変化までしか使えなかったから、この世界の魔法はコンプしないと・・・」

「・・・凄いな・・・俺は、火よ灯れ（アールデスカット）が限界

だ」

「努力だ努力」

「・・・ですね」

そのまま鍛練が終わっていきなりネギとアスナがケンカをして、アスナが走り去ってしまった。

「・・・アスナ」

「あ、おい恋？」

恋と咲がアスナを追っていった。俺と明命はエヴァの家に残った。

「ぼーや、これからの修業の方向性を決めるため、お前には自分の戦いのスタイルを選択してもらおう」

「戦いのスタイル・・・ですか」

「うむ、修学旅行での戦いからお前の進むべき道は二つ考えられる。二者択一、簡単に言おう」

挙げられたのは『魔法使い』タイプと『魔法剣士』タイプの二つ。ネギの父親のナギは魔法剣士タイプらしい。

「ま、ゆっくり考えるがいい。・・・木乃香、お前にはもう少し詳しい話がある。下に来い」

「あ、うん、了解やエヴァちゃん」

こうして今部屋にいるのは俺と明命と刹那とネギとカモ。・・・ネギがアスナとケンカをしたことについて色々葛藤していた。

「ネギさ、取りあえず謝つとけよ。アスナだって謝れば許してくれるさ」

「あ・・・わかりました！」

「・・・あ、今じゃなくて後の方が・・・」

その言葉は届かず、しばらくしてからアスナの絶叫と怒声が響くのであった・・・

それから3日・・・俺たちは今・・・

「海だーっ！っ！」

・・・南の島にいた。

「うぐぐぐ、これは一体・・・ネギ先生との二人っきりのパラダイ

ス計画が・・・なな、なぜこんなことに、しかもクラスの半数以上が・・・!？」

「和美とハルナさんにもれたのはマズかったわね、あやか」

「あなた達もですっ！」

「・・・俺は祐奈とハルナに無理矢理連れてこられたんだけどな」

「・・・俺はチアリーディング部に」

「私たちもです・・・」

「・・・(コクツ)」

お馴染み4人組はみんな誰かに無理矢理連れてこられました。

「亮くん！咲くん！あっそぼーっ！」

「まき絵!?!いや、ちよ」

「早く早くっ！やっぱり普段ふれ合いの少ない男子なんだから、みんな待つてるよーっ！」

「祐奈も引っ張るなっ！」

「・・・っ！ハッ！」

咲がいきなり真っ直ぐに幅跳びをした。

「咲、何をやってぶあつ!?!」

いきなり砂を踏み抜いて落下する。・・・俺を引っ張っていた祐奈はいち早く避難してやがった。

「きしし・・・引っ掛かってやんのー」

俺は直ぐに落とし穴から這い出る。・・・あの一瞬にどつやって俺の背丈ほどの落とし穴を掘れたんでしょーかね。

「ぶ〜う〜か〜?お前の仕業か〜」

「あ、あれ?なんか怖いよ?怒ってる?」

「・・・怒るに決まってるだろうがあああ!?!」

「わーっ!?亮がキレたーっ!?」

風香を追いかけ回す。

「まてやコイ、ぐはあつ!?!」

再び落とし穴に落ちる。

「わーい 引っ掛かったー」

「まき絵!今度はお前かーっ!」

以下エンドレス。

「ゼハーツ・・・ゼハーツ・・・ゼハーツ・・・」

かなりバテていた。

「なん、で・・・咲は落とし穴に・・・引つ掛かないんだよ・・・」

「そりゃあお前、蒲公英の罠に比べりゃちよろいちよろい」

「あーそうですかー・・・明命、お前は味方だよな？」

「・・・すみません。一回落とし穴を掘りました」

「明命っ!？」

「・・・恋も、掘った」

「あ、俺も」

「俺に味方は無いのか!？・・・はっ、そうだ、イジメやケンカが嫌いなアキラや亜子なら」

「「・・・(プイッ)」」

「あれえ!？もしかして参加してました!？」

その後も散々からかわれた。更にネギとアスナの仲も悪化していた。

そして次の日になって。

「ホラ、さっさと帰るわよ。早くしなさいネギ」

「ま、まっってくださいよ」

「・・・仲直りしたのか？」

「さあ？」

結局、訳がわからないままこの騒動は幕を閉じた・・・

発覚（後書き）

亮

「…………（ガクガク）」

亜子

「…………どないしたんや、アレ」

アキラ

「何でも大切な預かりものを傷つけたらしいよ」

祐奈

「それで青くなるなんて亮君も可愛いにや」

まき絵

「…………でも、あの怯え具合は尋常じゃないよ？」

咲

「まあ…………色々あるからな…………」

アキラ

「…………でも、人のものを大切に出来るのは良いと思う」

まき絵

「しかも男の子！アキラ、思い切って告白してみれば？」

アキラ

「え……無理だよ。他のみんなに悪いし……」

祐奈

「じゃあ咲君は？」

アキラ

「だから何で私？確かにカワイイとは思うけど……」

咲

「なんで俺はカワイイって言われるんだ！？」

まき絵

「じゃあ亜子は？」

亜子

「……ウチは……」

咲

「もう止めないこの話？ここで何を言ったって本編には関係ないんだし」

祐奈

「……本編に関係ないなら尚更だよ！」

まき絵

「そうそう もっと話そうよ……。……今度はいつ来れるかわからないんだから」

咲

「……次回の真似と開閉と世界旅行！」

アキラ

「次回も見てください」

亜子

「ほんならまた次回」

二人

「逃げた」！

過去 (前書き)

（OMO）ザヨゴオオオオ！・・・すみませんいきなり。では
あしひ。

過去

ある日の授業、明らかにネギの様子がおかしかった。

「それでは……42ページを開いてください」

「ネギ？そこはさっきやったぞ？」

「あ……すみません」

ボーツとしてると言うかふらふらしてると言うか。結局ネギは1日をそんな感じで過ごしていた。……そして放課後、ネギとエヴァの後をまるで金魚の糞のようにつついていく魔法関係者のみならず。

「……何やってんだお前ら……刹那まで」

「うひゃあ！？亮君！？咲君！？」

「いや……その……」

「……ハア」

仕方なく俺たちも着いていくことにした。

そしてやって来ましたエヴァ宅。何度も入った家の中に入る

「・・・あれ？誰もいない・・・？」

エヴァの家の中には人の気配がなかった。

「み、みなさんこっちへ~~~~っ」

のどかが地下室で何かを見つけたらしい。俺たちはそこに向かった。

そこに有ったのは塔のミニチュアが入った球体だった。

カチッ

「ん？お？」

カチッ

「・・・ほえ？」

カチツ カチツ

「あ……」

「うーん……ん？あれ……？ちよつとみんな？ちよつと……何処行っちゃったの？」

「アスナ、みんなは……」

カチツ

「……あ」

その瞬間、俺は一瞬意識が飛んだ。

「よっ……と」

そこは……見たことのない景色だった。

「亮さんではないですか」

「お、夕映。・・・なんで三角座り？」

「・・・大した理由は無いです」

「あっそう・・・ん？」

ヒュルルルウウウ・・・

「え？」

「危ない！！」

ズガンッ！

「ぐへっ！？」

上から降ってきた咲に踏まれた。

「うっ・・・何をするんだ・・・って」

ヒュルルルウウウ・・・

「嫌な予感！」

咄嗟に横っ飛びをする・・・が、

ズガンッ！

「あ」

「ウボアアア!？」

・・・その一撃は俺の意識を刈り取った・・・

「う、ううん・・・」

目を覚ますと・・・

「む、起きたか」

俺の首筋に噛みつこうとしているエヴァがいた。

「――!? な、なな何をしようとしたんだよ!」

「血&魔力をもらおうとしたんだよ」

「ネギと咲ので充分だろ!？」

「私の魔力を満たすには足りん」

「亮さん?目をさまし・・・はうあ!？」

「明命！？これはちがつ」

「ほうあああああつ！？」

明命がそのまま走り去る。

「明命！？なんでここに居るのか、とか何でいつもいつもヒロインってのは間が悪いのかなーとか色々言いたいけど取りあえずまっつてええええええ！？」

何とか誤解を解くのに多大な疲労が溜まった。どうやら明命と恋も暇があればネギの特訓に付き合ってるらしい。その時、エヴァがニヤリと笑った。

「丁度いい、亮、咲、ぼーやと戦ってみる」

「マ、^{マスター}師匠！？いきなり何を・・・」

「ぼーやに拒否権は無い。あるのはどっちと戦つか決めるのみだ」

「う、うう・・・それじゃあ咲さんから・・・」

「俺？いいぜ」

広い場所に出て二人が構える。

「それじゃあいきます！ラス・テル・マ・スキル・・・」

「圧縮、圧縮、魔力を圧縮ウ！爆^はぜろ！アルテマ！」

ズガアアアッ！

一瞬で勝負はついた。

「情けないなぼーや」

「・・・障壁をまるで紙のように貫通したな、咲」

「ネ、ネギ先生ー！？大丈夫ですかー！？」

「ちよつとネギ！？」

「あつう・・・」

数分後、復活したネギと向き合うのは俺。

「安心しろよネギ。咲と違って一瞬じゃ終わらせないぞ？」

「は、はい・・・」

俺はケータイを取り出し、観戦しているクラスメイトに指を指す。

「だ・れ・に・し・よ・う・か・な」

そして誰かに指を指す。

「モーションキャプチャー、綾瀬夕映」

「え!？」

夕映の姿が変わる。

「……どういことですか亮さん」

「どう、とは？」

「……確かそれは真似をした人の姿、能力になるんですよね?・・・魔法が使えない夕映さんになって・・・」

どうしたいのか?とネギは言いたかったのだろう。だが俺はネギより先に声を出す。

「確かに綾瀬夕映は魔法を使えない・・・ただし、“今”はな」

そう言っつて俺は剣を構える。

「メイ・アルメット
装剣」

更に呪文を唱える。

「コンフィルマーティオー・フルミネアンス
雷撃武器強化」

剣に雷が宿る。

「さあ、覚悟はいいか？」

一気に踏み込む。

「ッ!？」

ブンッ!

ネギは何とかその一撃をかわす。

「まだまだいくぜ!」

「く、ぐう……」

障壁で防いでいるとはいえ、まだネギは未熟だ。段々と余裕がなくなっていく。

「く……!」

ネギは距離を開いた。

「甘いよネギ」

俺は後ろに回って蹴り飛ばす。

「フオア・ゾ・クラティカ・ソクラティカ！闇夜を切り裂く（ウー
クス・フルゴル）一条の光コンデンス・ノクテム我が手に宿りて（イン・メア・マヌー・
エンス）敵を喰らえ（イニミークム・エダット）！」

「ッ！始動キー！？」

「終わりだ！白き雷フルグラティオー・アルピカンス！！！」

「うわああ！？」

白き雷がネギに炸裂する。

「キャプチャーキャンセル」

元の姿に戻る。

「ネギ？もう終いか？」

「まだ……です」

ネギは立ち上がってくる。

「それでこそ、だな。んじゃ、次は……」

また適当に指を指す。

「モーションキャプチャー、宮崎のどか」

「……油断はしません」

ネギは今度はちゃんと構えてきた。

「……来れ（アダアット）」

「いどのえにつき」を取り出し、二つの道具アイテムを装備する。無論、すでに強化魔法も掛けてある。

「……」

「ネギ、お前の考えてることを当ててやる。アーティファクトを使うには一旦相手から目を逸らさなくちゃいけない。だから死角から魔法や拳法で攻めればいい……だろ？」

「……それもアーティファクトの力ですか？」

「いや、これは誰しも考えることだよ」

「……一つ、いいですか？」

「なんだ？」

「……のどかさんの声で亮さんの口調で喋られると……違和感が……」

「……ですよねー」

俺は気を取り直して構える。

「ネギ・スプリングフィールド！」

「ハ、ハイツ」

これで下準備はできた。

「ふっ！」

ネギに向かって踏み込む。

「く・・・！」

ネギはカウンターを入れようとするが、

「お見通しだ！」

アーティファクトのお陰で簡単に攻撃が入る。

「ハアツ！テイツ！トリヤ！」

「ぐ、うわ・・・あう・・・」

ネギはろくに反撃も出来ずに俺の打撃を喰らっていく。

「ヤアツ！・・・止め！」

バキッ！

障壁を打ち抜いた拳がネギをぶっ飛ばした。

「……そこまで！ぼーや、一撃も当てられないとは情けない」

「う……」

「ふう……疲れたー……」

「亮、時間かけすぎ」

「スピードキルしたお前は逆に酷すぎ」

そのあとは特に変わったことはせず、みんなが魔法の訓練をしたりした。そして、その夜……みんながわらわらと外に出ていった。

「……？」

俺はその後をついていくとエヴァを含めてのどかのアーティファクトでネギの昔話を見ていた。

「……何やってんの？」

「あ、亮君……今いいところだから黙ってて」

「朝倉……はあ」

そしてネギの話が終わり、咲たちも起きてきた。

「……そうだ、亮、咲。お前達の記憶も見せる」

多分あんまり意識しないでエヴァは言ったんだろう。だけど俺たちは無言で顔を見合わせる。

「え〜見せてくれてもええやん〜」

「ただでさえ自分のことを話さないんだからさ」

「亮さんたちのことも気になります」

「そうですね」

「・・・咲」

「構わないよ」

「明命、恋」

「・・・(コクッ)」

「エヴァ、みんなに記憶を見せられる魔法はあるか？」

「あることにはあるぞ?・・・多少疲れるがな」

「頼む。あとこの記憶にはちょっと過激な映像が入るからな。・・・
キツいと思ったら言ってくれ」

うなづくみんな。そしてエヴァは呪文を唱え・・・景色が変わった。

映し出すのは俺たちが死ぬ直前。

「・・・あれ？メチャクチャ普通じゃない」

「今はな・・・」

そして、

キキーーーーッ！

「え！？」

そこで映像が途切れる。

「・・・」

みんなが固まる。

「・・・これで俺たちは“一度”死んだ」

「ちょっと待つです。本当に死んだのなら、なぜ今ここにいるのですか？」

「それはな、自称神様がな、物語を終わらせたいからお前たち頑張ってください？的なノリで甦らせてくれたんだ」

「・・・それでここに・・・？」

「いや、ここに来る前に二つの世界を廻ってるんだ・・・ホラ」

そして次に映像は、雪蓮に拾われた俺だ。

「あれ？咲君は？」

朝倉が疑問を言ってくる。

「俺は別の人に拾われたんだよ」

「ところでこの女の人は誰ですか？」

「雪蓮って言うんだ。・・・ちなみにこの世界には真なる名と書いて真名と呼ぶものがあるんだ」

「？つまりはその雪蓮というやつにも真名があるのか？」

「はうわ！？そんな容易く孫策様の真名を・・・！」

「・・・今、何と言ったですか？」

「夕映、つまりこの世界は三国志の武将が女性になってる世界なんだ」

「・・・えええええっ！？」

その場にいた全員が叫ぶ。

「じゃ、じゃあこつちの二人は誰アルか？」

「左の人は冥琳、名前は周瑜。右の人は祭さん、名前は黄蓋だ」

「……」

再びみんなが固まる。

「そして、戦が始まるんだ」

「……時期を見ると黄巾の乱でしょうか？」

「さすが夕映。正解だ。……アスナと古菲はついてこれてるか？」

「なんで私たちを名指しで言うのよ!？」

「私の実家何処だと思てるネ!？」

よしよし大丈夫だな。

「あの、戦と言うのは……」

のどかがおずおずと聞いてくる。

「そのままの意味だよ、戦争だ」

「……」

「俺はこの時、足止めをしてたからあまり直接は参加してないんだよ」

そして更に映像が変わる。

「……？あれは明命では無いですか？」

「あ、ホントや」

「待ってください、明命さんがここにいると言っことは……」

「勘がいいなネギ。……見てな」

『……とにかく、三人は亮に真名を預けなさい』

『は、はい！あの……姓は周、名は泰、字は幼平、真名は明命！
亮様、よろしく願います！』

「周泰……ですか？」

「はい。私はこの世界の出身です」

「あと恋もな」

「……じゃあ恋は誰アルか？」

「見てればわかるさ」

『・・・我が名は甘寧。字は興霸。・・・王の命令により真名を教えよう。思春と言っ』

「この思春が俺の大切な仲間であり、師匠なんだ」

「こいつ、いつつも思春に叩きのめされてたんだぜ？」

「うっせ、んで、こっちの雪蓮に似てるのは・・・」

「多分孫権では無いでしょうか」

「・・・夕映がいると話がしやすいな・・・その通り、コイツは孫権。真名は蓮華・・・俺が忠誠を誓った二人目の主だ」

そして映像が変わり、今度は椅子を蹴飛ばす咲が映る。

「これは・・・恋がいるな」

「こっちは董卓軍。あそこの玉座に座っているのが董卓。真名は月」

「？ゆえ？」

のどかが首を傾げる。

「こっちは月と書いてユエだけどな・・・それで俺の隣にいる眼鏡

を掛けたのは賈馱。真名は詠。そのサラシを巻いているのは張遼。真名は霞。アツチの銀髪は華雄・・・真名は・・・真名は・・・いや、取りあえずその恋の近くにいるチビッコは陳宮。真名は音々音だ。・・・そして、そこにいる恋は・・・わかるな？」

バカレンジャーも三国志は知っていたのだろう。みんなが顔を見合わせる。

「・・・まさか、呂布、ですか？」

「正解だ」

「「「ええええええっ!?!?!?!」」」

そりゃ驚くわな。そして夕映がこっちを向く。

「あの、もう少し真名について説明をして欲しいのですが・・・」

「・・・そうだな、亮、頼む」

「俺かよ!・・・まあいいや。・・・真名って言うのはさっきも言った通り真なる名だ。その人のことを表した名前なんだ。肉親や親しいものしか呼んではいけない神聖な名だ。もし許可なく呼んだら何をされても文句は言えない・・・て、感じかな？」

「・・・あ、ですがみなさんは構わないのです!私たちの世界と違うことは既に知っていますし・・・」

「・・・みんななら、真名で呼ばれたい」

明命と恋が言う。

「そんで、なんで董卓連合が結成されたかと言うと、大バカな袁紹が土地を持っていてる月に腹を立ててあることないこと言って連合軍を結成しやがったんだ」

「そして、この戦は・・・俺が初めて人を殺した戦だ」

「「「・・・!?」「」」

みんなが驚愕して俺を見る。

「・・・ほら、この場面だ」

短刀を突き立てる恋姫の俺、

『殺した！オレガコロシタ！！ウワアアアツ！！』

そして思春に気絶させられて記憶が途切れる。

「・・・のどか？顔が青いぞ？」

「あ、大丈夫です・・・」

見るとエヴァや茶々丸以外のクラスメートは顔を青くしていた。

「そしてこのあと色々あって俺は人を殺すことを恐れないようにした」

その後も色々と見せた。雪蓮が暗殺されそうになったこと。結局劉備に保護された咲と敵同士で再会したこと。

「……あ、せつちゃんや」

このかが声を出す。

「……若干太刀筋がおかしいようですが……」

「俺の物真似は力がワンランク下がるんだよ」

そして咲と恋とねねが脱走して呉に来たこと、蜀との決戦。そして魏軍の襲来。協力して戦った赤壁の戦い。クライマックスの三国同盟で戦った左慈たち。

「みんな、大丈夫か？」

「私は平気だ」

「私もです」

「お嬢様、大丈夫ですか？」

「……少し、疲れてきたんやけど……」

ネギは一度恐怖を味わったからか、他のクラスメートよりはマトモだった……それでも辛そうだったが。

「……そして、役目を終えた俺たちは消えていくんだ。その時、明命と恋が一緒に来てくれた。俺と咲は繋がり証として制服のボ

タンと思春の鈴音を」

「俺はボタンと詠の眼鏡をそれぞれ交換したんだ。・・・まあ、眼鏡は結構最初にくれたんだけどな」

「・・・まだ話は続くけど、今日はここまでにしよう」

「ん？終わるか？」

「エヴァと茶々丸はまだ平気だろうけど、かなり省略したこの話でさえネギ達が持たないからな、今日は止めとこう」

「そうか。なら、魔法を解くぞ」

そして戻る景色。・・・確かにかなり省略したんだよな。特に明命の猫化事件とか咲と恋との話とか。

「・・・最後によろしいでしょうか？」

「なんだ、夕映？」

「・・・亮さんたちがここにいるということは・・・この世界も数える物語の一部なのですか？」

「・・・そうだ。だからお前らのことも知っている。ネギの過去、夕映が勉強しない理由。エヴァの吸血鬼化、このかの潜在魔力。刹那の鳥人と人とのハーフだとか・・・挙げていけばきりが無い」

「・・・」

「朝倉？こればかりは記事にしないでくれよ？」

「……コレを記事にしてもみんなはフィクションだーって言うと思っよ?」

「違うない」

「待ってください」

ネギに呼び止められる。

「……なに?」

「それじゃあ……父さんの居場所も知っているんですか?」

エヴァもソレに食いつく。

「いや……悪いけどアイツの行方は俺たちの世界でも明らかにされてないんだ……だからわからない」

「そう……ですか……」

「それに最近は元の世界の記憶も摩耗して来てるから……細かいところは思い出せなくなってきたる」

そして俺たち四人は部屋に向けて歩き出す。

「ま、あんな映像を見たんだ。ゆっくり寝た方がいいぞ?じゃあ、おやすみ」

俺たちはそうして眠りについた……

過去 (後書き)

亮

「ひーかりのこーえがそらあたーかーくきこーえる」

咲

「どうしたいきなり」

亮

「なんとなく頭に浮かんだ歌を歌った。反省はしている後悔はしていない」

明命

「絶え間ない雨に打たれ 少女は涙を流した」

咲

「・・・なにやってんの？」

明命

「マスターに着いていくのがサーヴァントです！」

咲

「いや、もうサーヴァントじゃないからね」

亞莎

『嘘だッ！』

咲

「いや嘘じゃないし！しかも今誰かいたし！」

公孫贊

「虹の洗礼！インフィニット！」

咲

「……！今白蓮いたよなあ！？」

張角

「……誰もいませんよ？」

咲

「いや、いたよなあ！？」

セイバー

「元気になつね、ゴロゴロ」

咲

「!？」

亮

「いきなりクゝイズ。壁の後ろにいるのは葉加瀬とイリヤどっちでしょう」

咲

「ええ！？えーとえーと……って中の人と同じじゃ判別つかんわ！」

亮

「じゃあ董卓とザジ……」

咲

「中の方は止めるーッ!!なんでそこまで中の人を・・・」

雛里

「禁則事項です」

咲

「!?!」

思春

「・・・なぜ私が拳銃を持たねばならん」

穩

「私も参加した方がいいですかね?」

咲

「段々と後書き部屋が狭くなってきたんですけど!?!」

アスナ

「・・・」

のどか

「・・・」

咲

「なんか喋ろーうよ!お前たちは他の作品でも主人公取り合っただから!」

亮

「最高ウウウッ!」

咲
「イカン、亮が壊れ始めてきた・・・次回の真似と開閉と世界旅行！」

恋
「・・・次回も見る」

咲
「それではまた次回会いましょう！・・・っていい加減に静まれお前らああああ」

遠坂
「リ、リリカルマジカル・・・（ダッ！）」

士郎
「ああ！？遠坂が逃げた！？」

怒り〜（前書き）

少し無茶苦茶になって来た気が・・・ではどうぞ。

怒り

・・・エヴァの別荘を出て数時間。エヴァの別荘の中は1日が外の1時間だから外に出てもそう遅い時間ではなかった・・・だが、

「・・・亮、咲、刹那を知らないか？」

「んー？どこかに出歩いてんじゃないのか？」

「・・・そうか、なら探してみるとしよう」

そう言つて龍宮は部屋を出ていった。・・・そしてその後、部屋に誰かが入ってきた。

「誰だー・・・っ!？」

「咲？どうし・・・!」

そこにいたのは血まみれの恋だった。恋は方天画戟を落として倒れる。

「恋っ！恋っ！どうした！何があった!」

咲が必死に恋に声をかける。

「・・・侵、入者・・・明命も・・・やられた・・・」

途切れ途切れに恋は声を繋いでいく。

「……ッ！あんまり喋るなよ……」

「名前は……確か……ヘルマン……」

「「ッ!？」」

「……咲……気をつけ……て……」

ガクッ、と恋の体から力が無くなる。

「恋……?恋!」

「落ちつけ咲!気を失っただけだ!」

とりあえず恋に回復魔法をかけて横にする。

「……亮、少し行ってくる」

「な、お前一人じゃ……」

「恋の話が聞かなかつたのか?……明命もやられたんだぞ?お前は明命を助けに行くんだ!」

「咲……すまない、すぐに追いかけるから!」

俺はその場から走り出す。

「明命ーッ！返事をしてくれーッ！」

外は雨が降っていた。・・・もし出血をしているなら雨はマズイ。

「明命ーッ！」

「・・・さん・・・」

「・・・ッ！」

聞こえた。今確かに聞こえた。俺はその方向へ走り出す。

「・・・明命ッ！」

「亮・・・さん・・・」

いた。明命は案の定血まみれで木に背中を預けて座っていた。

「明命！無事か！」

「亮さん……すみません……不覚を取りました……」

「明命……」

「本当に情けないですね……私は、亮さんの足を引っ張ってばかり……」

「な……そんなことはない！明命は……共にいてくれるだけでもいいのに……本当は戦わせたくはないんだ、お前を！……お前に何かあつたら蓮華や思春、呉のみんなに顔向けができない……」

「……亮、さん……」

「明命、とにかく部屋に戻ろう……な？」

すると明命は力なく微笑み、

「いえ……自分で戻れます……それより、これを……」

明命はそう言つて魂切を差し出してくる。

「明命……」

「亮さん……鈴音はまだ使えませんよね？……だから、代わりにコレを使ってください」

「明命……わかった」

俺は魂切を受け取って立ち上がる。

「明命・・・死ぬなよ」

最後に明命は微笑んで俺を送った。

「・・・亮さん・・・生きて・・・下さい・・・」

咲

ボードを使って空を飛ぶ。大学部のステージを目指す。

「・・・いた！」

既に戦闘を始めているネギと・・・あれは・・・犬上小太郎！？・・・
・何にせよ俺はヘルマンに狙いを付けてボードをキープレードに戻して飛び降りる。

「へエエルマアアンツ！！！」

しかし、その攻撃が届く前に突如横から放たれた攻撃で吹き飛ばされる。

「うわああっ！？！」

そして、俺を吹き飛ばしたのは・・・

「なんだあ・・・？こんなエリアあったか？」

「・・・ハセヲ！」

そこにいたのはhackのハセヲだった。

「・・・何にせよ、俺の邪魔をするなら倒してやる」

ハセヲは剣を構える。

「・・・この“死の恐怖”のハセヲがな！」

ハセヲが突っ込んでくる。俺はキープレードで対抗する。

ガキイインツ！

「・・・するな」

「ああ？」

「俺の・・・邪魔をするなっ！」

力任せにハセヲをぶっ飛ばす。

「・・・チツ、中途半端に抵抗しやがって・・・うぜえんだよ!!！」

ハセヲはまた突っ込んでくる。

「俺の・・・目の前から・・・」

体に力がみなぎる。闇が沸騰してくる。

「・・・消えろおおおおっ!!！」

闇を開放してDモードになる。右手に ブレード、左手にソウルイーターを構える。

「消え去れえええ!!！」

「ぐうっ!?!？」

カキヤアンツ!!!

ハセヲをそのまま吹き飛ばす。

「ハッハア！どうしたハセヲオ！？弱すぎるぞ！」

「・・・舐めんじゃねえよ・・・本気、見せてやる！」

ハセヲが立ち上がる。そして・・・

「・・・いいぜ・・・来い・・・来いよ・・・俺は・・・ここに
いる！スケエエエイスツ！！」

ハセヲの体がぶれて、巨大な、まるで死神のような人形・・・スケ
イスになる。

「・・・ツ！」

「・・・ふん、どうやらスケイスが見えてるみたいだな・・・つま
りお前は碑文使い！大人しく俺の力になりやがれ！」

「・・・ざけんな、恋の仇も討てずに死ねるかよお！」

俺はスケイスに向かって真っ向から挑んでいった・・・

亮

「……ッ！くそ！本当に飛べないのは不便だな畜生ッ！」

くくくくく

その時、ケータイがなる。

「……もしもし？」

走りながら電話にでる。

『亮。私だ、龍宮だ』

「龍宮？どうした」

『いや、いま瀕死の明命を見つけて学園内の病院に連れていったところだ』

「明命を？……それで、明命は!?!」

『……わからない。運び込まれてそれきりだ』

「……そうか」

『それとどうやら私達のクラスメートの何人が行方不明になっているようだ』

「それは知ってる。今、犯人のところに向かっている」

『そうか。私も向かおうか？』

「ありがたいけど・・・出来れば明命を頼みたいんだ・・・」

『・・・わかった。私の力が必要になったら言ってくれ。どうやら刹那も奴らにさらわれたらしいからな』

「ああ。わかった。・・・切るぞ」

俺はケータイをしまい、走ることに専念する。

そしてしばらく走っていたとき、声が響いた。

「神槍『スピア・ザ・グングニル』！」

「銀符『シルバーバウンド』！」

上から降り注ぐ攻撃。俺はそれを跳んで避ける。

「く・・・」

更に後ろに誰かが迫る。

「虹符『烈虹真拳』！」

高速で打ち出される拳を受け止めきれずに飛ばされる。

「ぐう……!？」

そして目に入ったのは更なる攻撃。

「土水符『ノエキアンデリユージュ』！」

「うわあああ!？」

大半の攻撃が当たってしまった。俺はすぐに立ち上がる。そこにいたのは……

「……紅魔館組か……」

東方の紅魔館組がそこにいた。いたのは紅 美鈴、十六夜咲夜、パチュリー・ノーレッジ、そして紅魔館の主、レミリア・スカーレット。

「……こんばんは、妹がお世話になったわね」

「……ッ」

恋姫の世界に出てきたフランドールと同じ幻想郷から来たのか……

「行方不明になったかと思ったら、いきなり死にかけて帰ってきた

からビックリしたわ」

「……」

「そして今回はあの白装束の男に呼び出されて確信した。……フ
ランを傷つけたのはあなたね？」

「……ああ」

「……！私が行きます！」

踏み込んでくる美鈴。俺はケータイを取り出す。

「モーションキャプチャー！アサシン！」

真似するのはFateEXTRAのアサシン。

「ヤアツ！タアツ！」

美鈴が放つ拳や蹴りを避けていく。

「……ッ！」

攻撃を避け続け、遂に隙が出た。

「……逃げる……ばかり、ですか！」

大振りになった攻撃、それを避けて踏み込む。

「しまっ……」

「我が拳……二の打ちいらす！」

ズドンッ！

「か……は……」

体をくの字に曲げて、よろけながらも後ろに跳ぶ。

「ぐ……まだま……！？」

まだ俺に向かってこよつとした瞬間、血を吐きながら美鈴は崩れ落ちる。

「な……」

「妖怪とはいえ、中をぐちゃぐちゃにされちゃ動けないだろ」

そのまま美鈴は光になって消える。

「……ッ！美鈴！」

それに真っ先に反応したのは咲夜だ。それに合わせてパチュリーが詠唱を始める。

「キャプチャーキャンセル！モーションキャプチャー、アーチャー

「！」

物真似を解除してすぐにFateEXTRAの緑アーチャーに姿を変える。

「十六夜咲夜！お前の相手は後だ！」

俺は真上に跳ぶ。

「シッ！」

矢をパチュリーに向けて放つ。

「……ッ！」

「パチエ！」

パチュリーはそれを間一髪で避けた……が、

ドスッ

「う……！」

避けたはずのパチュリーの左の腕に矢が刺さっていた。

「……もらった！」

「……まだよ！火水木金土符……」

撃たせるか！俺は宝具を発動する。

「パチュリー様！避けてください！」

「遅い！喰らえ・・・祈りの弓！」
イ・バウ

パチュリーの周りに木が出てきて、それが一瞬で枯れる。

「・・・ッ！！げほっ！ごほっ！ごほっ！」

宝具を喰らったパチュリーがむせこんで倒れる。

「・・・パチエに何をしたの！」

「ただだんに持病を悪化させたただだよ」

祈りの弓は相手の不純を肥大させる力がある。・・・念のため毒矢を喰らわしたから多分立ってないだろう。現にパチュリーはヒュー、ヒュー、と酸素を求めて気管が音を出していた。・・・そして力なく頭を下げるとパチュリーは消えていった。

「く・・・美鈴に続けてパチュリー様まで・・・」

咲夜はともかくレミリアの殺気も凄くなってきた。・・・いくらなんでも二人同時は・・・その時、俺の目の前に二人の人影が現れた。

「ふん、随分と面白そうだな、亮」

「どうも、亮さん」

「エヴァー！？茶々丸！？」

「コイツらの足止めは任せてお前は仇でも取りに行け」

「だが、エヴァー・・・お前は結界が・・・」

「・・・こうすれば解決だ。・・・そこのお前、私の目を見る」

その瞬間、エヴァーとレミアアが動かなくなる。・・・これは・・・

「亮さん、ここはマスターと私が引き受けます。どうやらマスターは暴れたいようですから」

俺は置いてあった魂切を拾う。

「スマン・・・任せた！」

俺は更に走り出す。

咲

ゴキヤアンツ！

未だにスケイスと戦っていた。

「く……まさかスケイスが追い込まれてるなんて……」

「復讐の力……今ならそれに呑まれる気持ちができる……
だけ
ど！」

ブレードがキングダムチェーンに変わる。

「それでも……！感情に身を任せちゃいけないんだ……！」

スケイスに向けて跳ぶ。

「光と闇よ！交わりて敵を滅ぼせ！^{クロス}ブレード！」
光と闇。二つの力が合わさりスケイスを消し去る。

「なん……だとお……!?!？」

ハセヲもそれに合わせて消える。俺はそのままステージに向けて走る。

亮

「見えた！」

ヘルマンの放った光線からネギを救った……あれは小太郎？……とにかく二人は体制を立て直していた。見ると咲も走ってきている。俺は魂切を鞘から抜いて目を閉じる。

「……（思い出せ……）」

思春や付き合いが短かったアーチャーでさえ真似ができたんだ。いつも一緒にいた明命の真似くらい……

「キャプチャー、コンプリート！」

目を開き、爆発的な瞬発力で接近する。

「させねエヨ！」

突っ込んでくるスライム三人娘。

「邪魔だ！」

一刀の元に斬り捨てる。……いや、スライムだからすぐに再生した。その隙に捕らえられていたみんなが水牢から脱出して、朝倉がアスナの首にかかっていたペンダントを引きちぎった。……何故

か数名裸なのは突っ込んではいけないだろう。

「いいぞ！！来たまえ！！」

ヘルマンが声を出す。

「おっちゃん何笑っとんや！もう魔法は・・・」

小太郎はそう言って影分身する。

「防げへんのやで！！！！」

しかしヘルマンは怯まない。

「どきたまえ小太郎君！私の狙いは・・・ネギ君唯一人だよ！！」

ドガッ！

小太郎が吹き飛ばされ、ネギに狙いが定められた瞬間・・・小太郎が目の前に現れる。

「こつちが本体や、おっちゃん」

ガッ！

「次は俺だ！・・・闇よ！刃向かうものを消し去れ！ダークオーラ！」

まるで分身したように見える咲がヘルマンを斬り刻む。

「ぬううう!?!」

「次は俺の番だ!動くなよ!動くと痛いぞ!」
魂切を両手で構える。

「————闇夜を駆ける疾風のコンセツ一撃————!!!斬り裂けえ!!!」
更にヘルマンに追い討ちをかける。

「ネギ!」

「止めを!」

「はい!魔法のサギタ・マギカ射手雷ウナ・フルゲラテイオーの一矢!!!」
無詠唱のサギタ・マギカからのコンボだ。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル!来れ(ケノテートス)虚アストラフサト空の雷アストラフサト薙ぎ払え(デ・テメト)」

「ぬづづづ」

「うわあああ!?!?!雷テイオス・テユコスの斧!?!?!」

ドガンッ!

「・・・倒した・・・」

俺は体から力が抜けて膝をつく。

「亮!？」

「あ・・・大丈夫。いつも通りの力を使いすぎただけだから・・・」

~~~~~

ケータイから音楽がなり、すぐに電話に出る。

「もしもし!？」

『私だ』

「龍宮?・・・明命は・・・」

『一命は取り止めたそうだ。だが、意識は戻っていない』

「そう、か・・・悪いな。ずっと見てるのは辛かったろ?」

『そうでもないさ。狙撃手ならこれくらいの時間は何てことはない』

「そうか・・・言うことが違ったな。・・・ありがとう」

『ふっ・・・今回はサービスしとくよ』

「ああ・・・それじゃあな」

電話を切る。

「真名からか？」

「ああ、明命は一命を取り止めたって・・・ッ！」

後ろに振り向くとそこには四人の男が立っていた。

「・・・誰だ？」

咲が疑問を口にする。

「何にせよ・・・于吉が呼んだ奴だろーよ」

俺は何とか立ち上がる。

「小太郎！千鶴を連れて戻れ！」

「え、何でや！？」

「千鶴に魔法を見せるわけにもいかないだろ！？」

「・・・そやな。すぐに戻ってきて俺も戦うからな！ネギ！簡単に負けんなよ！」

そして四人が取り出したのは・・・ベルト？

「・・・仮面ライダー！？」

「行きますよ、橘さん！始！睦月！」

四人は一斉に構える。

「『『『『変身ッ！』』』』」

『『ターンアップ』』

『オープンアップ』

『チエンジン』

男が仮面ライダーブレイド、ギャレン、レンゲル、カリスになる。

「く・・・咲！こっちも変身だ！モーションキャプチャー！<sup>ダブル</sup>W！」

俺と咲にベルトが現れる。

「は！？俺も！？」

「俺は動けないからな。お前に任せる」

『サイクロン！』

ベルトにガイアメモリを入れる。すると咲のベルトの方にガイアメモリが転送される。

「・・・やるしかないか」

『ジョーカー!』

「変身!」

『サイクロン!ジョーカー!』

俺は意識が一瞬途切れ、咲の視線と同じになる。

「「さあ、お前の罪を数えろ!」」

仮面ライダーWに変身する。

「仮面ライダーの戦いはお前に任せるぞ、亮」

「任せる!」

「僕も手伝います!」

「私も手伝います!」

ネギと刹那も参加してくる。

「睦月！始！子供達にはあまり手をだすな！」

「わかってますけど・・・！」

『・・・必要以上に攻撃してくるからな、加減が出来ない』

「どこ見てんだブレイド！」

「ウワツ！？」

打撃を加えていくが、

ズキユウンツ！！

「ぐわっ！？」

「油断するな剣崎！」

「すみません橘さん。助かりました」

そう言ってブレイドはカードを取り出す。

『サンダー スラッシュ』

『ライトニングスラッシュ』

「ウエーイ！」

シャキーンッ！

「うわあああ!?!」

そのまま地面を転がる。

「くそ!こうなったら・・・」

腰のスロットにメモリを入れる。

『ジョーカー!マキシマムドライブ』

「・・・ッ!どけ、剣崎!」

『ドロップ ファイア ジェミニ』

『バーニングディバイド』

「ジョーカーエクストリーム!」

蹴りと蹴りがぶつかり合う。そして、

「ぐわあああつ!?!」

「橘さん!?!」

ギヤレンが打ち負け、そのまま消える。

「よくも橘さんを……!」

ブレイドは腕のラウズアブソーバーにカードを入れる。

『アブソーブクイーン フュージョンジャック』

「そっちがその気なら……」

『メタル!』

ガイアメモリを交換する。

『サイクロン!メタル!』

お互いの武器で攻撃する。

「タアアアツ!」

「ハアアアツ!」

カキヤアンツ!

他の戦っている二人は……

「神鳴流奥義！百烈桜華斬！！」

ドカアッ！

「うわぁぁ！？」

『レンゲル！？』

「よそ見をしないで下さい！」

ネギが魔法を使おうとする。

『……ッ！』

『フロート トルネード ドリル』

『スピニングダンス』

『ウオオオッ！』

「……雷を纏いて吹きすさべ（クム・フルグラティオーニ・フレット・テンペスターズ）南洋のアウストリーナ嵐！……雷のヨウイス・テンペスターズ・フルグリエンス暴風！！！」

ぶつかり合う台風。その均衡を破ったのはネギだった。

『……ッ！このパワー、剣崎以上だ……！グワアアアッ！？』  
ドオオオオンッ！！



「始っ!?!」

「相川さん!?!」

カリスは光となって消えた。

「く……!?!まずはあの仮面ライダーからだ……」

『ブリザード』

「……ッ!?!刹那!?!避ける!?!」

「な……!?!足が……」

刹那の足にブリザードが当たり、刹那の足が凍って動けなくなる。

「亮!?!氷には火だ!?!」

「わかってる!?!」

『ヒート!?!』

メモリを交換する。

『ヒート!?!メタル!?!』

そしてメタルシャフトにメタルのメモリを入れる。

『メタル!?!マキシマムドライブ!?!』

『バイト ブリザード』

『ブリザードクラッシュ』

レンゲルが空を跳び、氷を使いながら蹴りを放つ。

「「メタルブランディング!!」」

「ヤアアアアッ!」

炎を纏ったメタルシャフトを振り切る。

「グ・・・うわあああ!?!」

何とか押し勝ち、レンゲルは消える。

「睦月ーンッ!」

ブレイドがこつちを見据える。

「よくも・・・!よくもみんなを!」

カードを取り出すブレイド。

「咲!遠距離だ!」

「ああ!」

『エボリューションキング』

『ルナ！』

『トリガー！』

二人同時にフォームを変える。

「ウ、オオオオッ！」

『ルナ！トリガー！』

「喰らえ！」

ありったけの弾をブレイドに叩き込む。

ダンドンダンッ！

しかしブレイドはまったく怯まない。

「く……！ヒートトリガーの方が良かったか……！？」

「みんなの仇だ！」

『スピード10 スピードJ スピードQ スピードK スピード

A

』  
「まず……！」

俺はすぐにトリガーマグナムにトリガーメモリを入れる。

『トリガー！マキシマムドライブ！』

『ロイヤルストレートフラッシュ』

「トリガーフルバースト！」

「ウエーイーッ！」

剣より放たれる光線を横つ飛びをしながら避け、こちらも必殺技を叩き込む。

ズガアアアッ！

「ぐ……かすっただけでこの威力か……！」

ブレイドは……

「ハアアアッ！」

「く……！無傷か！」

こうなったら……

『サイクロン！ジョーカー！』

更に……

『エクストリーム！』

仮面ライダーW C J エクストリームになる。

『ロイヤルストレートフラッシュ』

『エクストリーム！マキシマムドライブ！』

「ダブルエクストリーム！」

「ウオオオオッ！」

ダメだ、これでも押されている……！

「諦めないください！神鳴流奥義！斬魔剣！」

「ヨウイス・テンベスターズ・フルケリエンズ雷の暴風！！！」

刹那とネギが協力してくれる。

「「「喰らええええっ！！」「」「」

「うぐ……うわあああああ！？」

ブレイドのロイヤルストレートフラッシュを撃ち抜いてブレイドに攻撃があたり、ブレイドは消える。

「やった！」

そして変身を解く……すると、やっぱり目眩に襲われた。

「ダメ……だ……あとは……まか……せ……る……」

俺は眠るようにその場に倒れた……

?????

「……今なら消耗している大澤亮を消せますね……」  
手を高々と挙げる男。しかし、

バシユウンツ!

突如手に銃弾が当たる。

「……ッ!……どうやら優秀な狙撃手がいるようですね……  
仕方ありません。今回は退きましよう」

男の姿が消える。

「……ふっ、コレもサービスにしとくよ。亮、咲」

ライフルを構えた少女はそう言って去っていった……

亮

「……う」

目を覚ますとソコはいつもの刹那達の部屋だった。

「……目を覚ましたか」

「龍宮？」

「大丈夫か？亮」

「咲……」

刹那はいなかった。……って、

「そつだ明命！」

「……残念ながら面会はまだできないぞ」

「あ……じゃあ、恋は？」

「……まだ目覚めてないよ」

「……そっか……そうだ、悪い！ちょっと出掛けてくる！」

「お、おい！お前……」

「体なら問題はねーよ！別にダメージで気絶したわけじゃないからな！」

俺はそう言ってエヴァの家に向かう。

そしてエヴァの家に入る。

「エヴァ！無事だったか！？」

「ああ、亮か。私は無事だぞ？」

「来たのね、大澤亮」

……あれ？俺は目を擦ってもう一度見てみる。



「どうした、そんな鳩が豆鉄砲喰らったみたいな顔をして」

「本当ね。間抜けに見えるわ」

「なん、で・・・」

「？」

「なんでレミリア・スカーレットがいるんだよおおお！？」

「咲夜もいるわよ？」

「何でえええ！？」

「あのあとお互いに本気で殺しあってな。戦っている内に仲が良くなってる」

「こうしてお茶と一緒に楽しんでいるのよ・・・うん、咲夜もいいけど茶々丸も中々の腕ね」

「恐れ入ります、レミリアさん」

「・・・メツチャ仲良さそうっすね・・・っってお前ら、強制力は無いのか！？」

「確か恩智を与えられたものは与えたものに逆らえないんじゃない・・・」

「そこは私の能力で『白装束の男から恩智を与えられた』という運命を『大澤亮から恩智を与えられた』に変えたのよ」

なるほど・・・考えたな。俺は命令するきなんかないからな。変わり身にはづつてつけだろう。

「・・・こちらとしては美鈴やパチュリー様をやられましたので・・・」

「咲夜。私は気にしてないわ。私はエヴァに大澤亮がどんな人物がよく聞いた。・・・好き好んで人を傷つける男ではない、って」

「レミリア・スカーレット？一々、大澤亮って言わないで名前ですんでくれないか？」

「・・・なら私もレミリアで構わないわ。咲夜も好きなように呼びなさい」

「え・・・いいのか？」

「・・・(コクッ)」

今のは肯定の返事だろう。恋の顔きを見てきたからか、どんな感じがよくわかる。

「あ、でもどうするんだ？幻想郷に帰るのは・・・」

「・・・そこが問題なんだよ、亮。レミリア達は帰る手段がないらしい」

「・・・うん・・・」

悩んでいたその時、頭の中に声が聞こえてくる。

(・・・亮、聞こえる?)

「・・・紫?」

(そうよ。・・・そっちに幻想郷の誰かが行ってないかしら?何故か世界が不安定なのよ)

「ああ、いるぞ。レミリア・スカーレットとそのメイド一名」

(・・・そう、なら世界を越えるのに少し、時間がかかるから・・・それまでその世界に二人を置いといてくれないかしら?)

「・・・どのみち断る理由が無いよ。わかった、出来るだけ早くな、紫」

(・・・わかったわ)

「・・・聞いてたか?」

「ええ。・・・だけど」

「レミリア、住むところなら私の家を使えばいい」

「そう?ならお邪魔させていただくわ、エヴァ」

「・・・はは」

何か・・・これは波乱が起きそうだな・・・



怒り〜（後書き）

亮

「仮面ライダー多おおおい!?」

咲

「東方組も多おおおい!なんかハセヲだけ一人だし!」

亮

「しかも明命て恋が意識不明の重体って・・・」

咲

「色々とかオスになって来たな・・・次はどこまでいくんだろーね  
ー・・・」

亮

「しかも感想に俺の大怪我率が多すぎるって言われた・・・結構気にしてんだよね・・・」

咲

「でもお前が無傷で終わらせたこと少ないよね」

亮

「う・・・」

咲

「しかもやったら倒れる」

亮

「うっ……」

咲

「明命も結構勝てても派手にやられるパターン多いし」

亮

「ぐ……明命はバカにするな」

咲

「何にせよ、今回はここまでです」

亮

「あ、このやる……」

咲

「次回の真似と開閉と世界旅行！」

亮

「……次回もまた見てください！」

二人

「それではまた次回会いましょう！」

## 忙しい日々（前書き）

完全にオリジナル話です。気分を害したらごめんなさい。ではどうぞ。

忙しい日々

「神槍『スピア・ザ・グングニル』」

「うわあああ!?!」

ズガアアアアッ!

・・・ここはエヴァの別荘。レミリアと咲夜のこととはみんなに説明した。それからはレミリアや咲夜が“暇つぶし”でネギの特訓に参加していた。

「・・・はあ」

「む?どうしたんだ、二人してため息を吐いて」

エヴァが俺達に聞いてくる。

「「明命(恋)が目を覚まさなくてな・・・」」

何日も経過したけど明命も恋も目を覚まさない。呪いの類いかと思っただがエヴァに言わせれば“それはない”らしい。つまり、純粹なダメージで昏睡状態になっているようだ。

「・・・ヘルマンのやるー、ちったあ手加減しろよな・・・」

「しかしお前ら、勉強はいいのか?もうじき中間テストだぞ?」

サツ、と顔が青ざめる。咲は賈馱や諸葛亮とかに鍛えられていたら



しいから」・・・少し教科書読んだだけで覚えられる」なんて言い  
やがった。現に咲はテストと聞いても余裕そうな顔をしていた。・・・  
俺は・・・

『あ、亮様！今日は勉強が・・・』

『悪い亞莎！今日は思春との修行が入ってるんだ！』

『ええ！？そんな、それだと私が怒られるんですけど！？』

『許せ！あとでごま団子買ってやるから！』

『あ、待ってくださいよ！』

・・・自業自得だな、俺。

「・・・亮、そろそろ1日だ」

「ん、それじゃあ俺達は先に帰るぜ」

「ああ、わかった」

俺と咲はエヴァの別荘を出て真っ先に俺は病院に、咲は刹那の部屋に向かう。



コンコン

俺はドアをノックする・・・と言ってもこの病室には明命しかないな

いが。

「・・・明命」

やっぱり明命は眠ったままだった。所々に包帯を巻かれて死んでい  
るのでは、と思うほど静かにねむっていた。面会を許されたのは昨  
日だ。魔法関係者だけでなく、クラスメートまでもが見舞いに来た。  
・・・それでも明命が起きる気配はなかった。

(明命を・・・頼むわよ)

「・・・(悪い蓮華。約束・・・守れてないや・・・)」

コンコン

「・・・ん？どうぞ」

看護婦さんが入ってきた。

「あ、今日も来てるんですね」

「・・・どうも」

「今から明命ちゃんを着替えさせるのだけど・・・」

「あ、わかりました。それじゃあ俺、お昼まだなんで食べてきます」

「ええ、そうしてください。・・・明命ちゃんもいいわね。こんな  
彼氏がいて」

「か、かかか彼氏!？」

「あら? 違うの?」

「いや、その……確かにお互いとも好きだけど……っていやいやいや!……失礼します!」

俺は走……っちやマズイから早歩きで購買へ向かった。

「……ふう」

紅茶を買って飲む。明命と恋には定期的に回復魔法をかけているから食事をとらなくても大丈夫みたいだ。・・・と、その時、

「あれ、亮君じゃん？どないしたん？」

「あ、わかった 明命ちゃんのお見舞いだよね」

「まき絵、病院だから静かに」

「実は私達もお見舞いに来たんだよね」

声をかけて来たのは運動部四人組。

「ん・・・ああ」

「・・・まだ目を覚まさへんの？」

「・・・ああ」

「・・・大丈夫？」

「大丈夫・・・とは言えないかもな」

「ま、まあ元気出しなよ」

「そ、そっだよ。そんなへこんでたってどうしようも無いんだから」

「・・・ああ、ありがとう、みんな」

そのまま看病を終えて時間が来る。

「そろそろ時間ですよ」

「あ、はい。わかりました」

「ほな行こか？」

「そうだね」

「はいはい」

「次は恋だね！」

そしてみんなが帰ろうとする。

「あ・・・そうだ」

俺はあることを思いついて荷物からあるものを取り出す。

「これ・・・プレゼントだよ」

明命の枕元に猫のぬいぐるみを置く。

「じゃあ、またな」

病室を出る。すると、

「・・・亮・・・さん」



「・・・ッ!？」

後ろを振り向く・・・だけど明命は寝たまんまだった。

「・・・」

今度こそ帰る。そして刹那の部屋にみんなで入る。

「ただいま」

「お帰りーって、なんだこの大所帯・・・」

「恋の見舞いに来たんやけど・・・」

「ああ、構わないぜ、今は刹那も真名もないから大丈夫さ」

みんなが部屋に上がる。龍宮がベッドを恋に貸してくれているのでみんなベッドに向かう。・・・その途中、目に入ったのは壁に立ててある二本の武器。鈴音と魂切。・・・互いに王を護るために振られてきた剣。今は二本とも今は本来の担い手がいない状態だ。・・・俺は、思春と明命の魂を預かっているんだ。

「・・・そうだ、落ち込んでる暇なんて・・・ない」

そう決心した時、コンコン、っと誰かがやってきた。

「亮と咲はいるかしら?」

入ってきたのはレミリアだった・・・レミリア?

「ハアアア！？なんでここに来てるんだよお前は！？」

「なに……って唯単にエヴァから呼んできてくれって言われたのよ」

「だからってここに来るのはマズイって！」

「亮君何やってるの？」

「……ッ！」

間に合わない。そう思った俺はレミリアの後ろに回り込み、羽を引っ張って背中に隠す。

「ひゃっ……」

「な、なんや？この子……」

「（ちょっと！手を離さない！）」

「（我慢しろ！）」

「……誰？」

「こ、コイツはレミリアって言ってな。……エヴァの知り合いなんだよ」

「あれ？こんな子学校にいたっけ？」

このバカピンク！こういうときはスルーしやがれ！

「ちょっと色々あってな・・・それじゃあ、俺は用事ができたからこれで・・・」

俺はレミリアとバックをしながら部屋から出ていく。そしてエヴァの家に向かった・・・



「レミリア・・・せめて咲夜を迎えに寄越せよな・・・」

「仕方ないでしょう？色々と気になるのよ」

「だったら羽を隠せ。この学園祭が近い時期は多分平気だと思うけど、変なコスプレに見られるから、絶対」

「大丈夫よ。飛んできたから」

「尚更悪いわ！」

万が一誰かに見つかったらどうするんだ！

「・・・」

そしてエヴァの家に着いた。

「エヴァ〜？何のようだ？」

「む、来たか・・・咲は？」

「多分、状況説明」

「そうか」

「それでエヴァ？こんな夜中に俺を呼んだ理由は？」

「ああ。明命達についてだ」

「……！」

俺は目を見開く。

「……」

「おい、今にも私に飛びかかりそうな構えはやめろ。……いい報告だ。二人はもうじき目覚める」

「……なんでわかるんだ？」

「夢だ」

「夢……？」

「ぼーやに頼んで二人の夢を見させてもらったんだ。……どうやら体が動かないからか頭が普段より活発に働いてな、今までの記憶を思い返しているらしい」

「つまり……その記憶を全て思い返し終わったら……」

「……多分だが目を覚ますだろうな」

「……はは」

その場に座り込んでしまう。

「亮!？」

「いや・・・大丈夫・・・気が抜けたみたいだ」

すぐに立ち上がる。

「・・・それで、細かい時間は・・・」

「・・・そこまではわからんな」

「・・・そっか、エヴァ、ありがとう!俺・・・明命の傍にいるよ

」!

「ああ、行ってこい。・・・咲にも伝えてやらなくちゃならんな・・・」

俺は走って病院へ向かった・・・









「・・・」

そんで病室。明命を見てくれてる看護婦さんに30分粘って許可を出してもらった。

「・・・明命」

改めてよく見るとやっぱり明命は小柄だ。こんなに小さいのにランサーやヘルマンみたいな体格的に不利な相手と戦ってきたんだ・・・

「・・・ホント、情けない・・・」

よく考えたら明命とのファーストコンタクトは雪蓮の真似をして、思春と明命には殺気を叩きつけられたり蓮華に怒られたり・・・それから鍛練を思春や明命に付き合ってもらったり。戦でもその戦い方を見て学習させてもらったりした。そしてこんな俺に居場所を捨ててまでも着いてきてくれた。サーヴァントとして聖杯戦争を一緒

に戦ってくれた。・・・よく考えたら俺が人を殺す覚悟をさせてくれたのも明命だ。

「・・・」

俺は明命が眠っているベッドの隣に置いてある椅子に腰かける。

「・・・明日は日曜日だから、泊まっても平気だよな・・・」

眠気に襲われて俺は上半身をベッドに預ける。

「（・・・いつもありがとな、明命）」







夢を見た気がする。・・・武器を持つ少女。その手は汗で濡れ、胸の鼓動は高まり続け、収まる気配がない。・・・鳴り響く銅鑼。それは少女にとって初めての出陣の合図。迫る敵、舞う鮮血、散っていく仲間達。少女は震え、怯えながら敵を殺す。そうしなくちゃ生き延びられないから。そうやって血に濡れていく毎日。今となっては汗ではなく血で手が濡れ、鼓動の高鳴りは恐怖から達成感に変わった。













「うっん……」

唐突に映像が途切れて目が覚める。

「……亮さん」

声が聞こえた。俺はそれに反応して飛び起きる。

「明命！」

明命はうっすらと目を開けて微笑んでいた。

「……おはようございます」

「っ……！……いつまで寝てんだよ、バカ」

涙が溢れてくる。するとアスナ達も入ってくる。

「失礼します……って明命ちゃん！？目が覚めたの!？」

そのあとはクラスのみんなのほとんどが見舞いに来てくれた。そしてどうやら恋も目が覚めたらしく、明命の見舞いが終わったらみんなは刹那の部屋に向かっていった。

「・・・それで全部か？」

「はい。・・・といっても大して荷物はありませんが」

「そっか」

そして向かうは刹那の部屋。

ガヤガヤ・・・

刹那の部屋は案の定騒がしかった。入るとクラスの大半の人間がいて、その中心に恋と咲がいた。

「・・・そつちも目が覚めたみたいだな」

「亮か。・・・なんだ、泣いてたのか？目が赤いぞ」

「な、泣いてねーよ」

俺は壁に立て掛けてあった魂切をもって明命に差し出す。

「あ・・・」

「返すぜ、武器ってのは本来の持ち主が持って初めて力を発揮できるんだからな」

「・・・はい」

俺は明命に魂切を手渡す。そして、



「ほら、咲、恋。エヴァのそこに行くぞ。今ならネギもいるから丁度いいだろ」

そしてみんなに一言告げ、全力でエヴァの家に向かった。よく考えたら羽を生やしてるレミリアもレミリアだが、メイド服来てる咲夜にこられても面倒だ、色々と。

「あの……亮さん？」

「なんだ？」

「これ……」

そう言っつて明命が出したのは猫のぬいぐるみ。

「ああ、それは俺からのプレゼントだ」

「ぶれぜんと……贈り物ですか？」

「そ、いつも世話になってるお礼」

すると明命はぬいぐるみを抱きしめ。

「……ありがとうございます！大切にしますね！」

……この笑顔を見るともっと大きいやつを買ってやればよかった  
と思った。そしてエヴァの家に入り、別荘に入る。

「『殺人ドール』」

「『不夜城レッド』」

「うわあああ!？」

……入った瞬間、ネギが吹っ飛んでた。



「……」

そして初対面の明命達とレミリア達が紹介しあってエヴァに目覚めたことを報告して、目を覚ましたネギを含めてお茶会をしたり……

「学園祭も近いな……」

「あの……その前にテストがあるんですけど……」

「う……」

「亮、お前……大丈夫か？」

「だ……大丈夫……国語は（ボソツ）」

「……国語の最高点数は？」

「……88点」

「数学」

「……15点」

「……」

みんなが沈黙した。

「……亮さん……ちゃんと冥琳様や穩様の勉強会に出てれば……」

「・

「うづく……」

「一回俺達と食べ歩きでサボってたよな」

「……(コクッ)」

「……うづうづ」

「……こんなバカに美鈴やパチエがやられたのかしら」

「うづうづ」

「……ハア」

「うー……!」

「失礼ですが、少々学力不足ではありませんか?……その点数はマスターより……」

「うー!うー!」

「そのうーうー言うのを止めなさい!」

パツシイインッ!

「痛つてえええっ!? 咲、なんでいきなり平手打ち!?!」

「いや、空気を読んだ方がいいかなー、っと」

まあ少し、狙ったんだけど・・・

「そうだよな・・・確かに学力がな・・・得意教科はいい点数が取れるんだけど・・・」

「ちゃんと勉強をしないからそうなるんだ」

珍しく咲が眼鏡をクイツと上げながら言った。・・・咲は戦闘時は眼鏡を外す。理由は先端恐怖症だから相手に武器を向けられると体が竦み上がるらしい。・・・よくボヤけた視界で飛び道具が当たるな、おい。

「鍛えてますから、シュツ」

「アホ」

そんな感じでお茶会を終えて、一日を過ごして家を出る。・・・まだ昼前だ。・・・どうしよう・・・

「亮」

「・・・レミリア？どうした？」

「ここが気になるんだけど・・・」

そう言って差し出されたのは何かの地図・・・秋葉原と書かれていた。

「・・・」

「かなり賑わってる場所らしいじゃない。幻想郷から出れることなんて絶対無いんだから」

「まあ・・・秋葉原ならその服でも大丈夫・・・でもないな。咲夜も来るんだろ？」

「はい、そうですわ」

「・・・その敬語をやめてくれないか？」

「・・・わかったわ」

反応早いつすね。

「ほら、行くぞ・・・日傘は自分でさせよ」

「・・・どこに行く気？そっちは学生寮・・・」

「服を借りるんだよ。・・・レミリアは夕映に借りて咲夜は・・・千鶴でいいかな？」

そして・・・





「……着いたー……」

電車で数時間。遂に秋葉原に着いた。

「ここが……」

「確かに凄い熱気……」

「うわあ……凄いです」

「……（ワクワク）」

「何時ぶりだろうな……」

メンバーは何時もの四人にレミアアと咲夜だ。レミアアは夕映が修学旅行で着ていた服。何故か羽は見えない。……どこにしまった？……咲夜は千鶴から借りたロングスカートに半袖の上着だ。

「……咲夜、行くわよ」

「はい、お嬢様」

「お、おい・・・!？」

「道なら大丈夫よ。咲夜に地図を持たせてるから」

「ああ、そう・・・それじゃあ5時にまた集合な」

「ええ。わかったわ」

「それじゃあ俺も少し別れるぜ」

咲と恋が離れる。

「?どこいくんだ？」

「一旦東京のアメ横に行ってくる。そして恋と明命の記念のパーティーの食材を買ってくるんだ」

「・・・わかった。・・・俺達はどっしよっかな・・・」

「・・・そうですね・・・」

「うーん・・・」

考えてみると大して行きたいところが無い。

「・・・店を見て回ろうか」

そして適当に巡っていた時、目に入った題名が一つ。

「恋姫夢想」

「!?!?!?!?!」

「亮さん?どうしましたか?」

「何でもないよ!?さあ次だ次!」

今のは忘れよう!よく見るとキャラの細部が違うからね、うん!

「あ、ここはなんですか!?!」

「んー?」

明命は次に新たな店に入ろうとする。・・・えーと、店名は・・・

〔大人の玩具〕

「待つてえええええ!?!」

明命を全力で引き留める。

「はう!?!?!?!ダメなんですか?」

「ああ!明命みたいないい子が来ちゃダメだ絶対!?!」

「・・・わかりました。でも、なぜ玩具が・・・あとで夕映さん辺りに聞いてみて・・・」

「・・・夕映が真っ赤になって倒れるだろうからやめましょね」

そのあとお昼を食べて再び明命と秋葉原を巡る。そしてその途中。

「亮さんー」

明命が嬉しそうに声をかけてくる。

「なんだー？……ってうえええっ！？」

何故か明命がメイド服を着ていた。

「……何故メイド服……」

「何故かお兄さん達が私にこの可愛い服を譲って下さったんです！」

俺は人混みの後ろの方で明命を撮影してる男を発見した。……アイツか……

「あの……亮さん……？」

俺はニコツ、と笑って明命に一言、

「少し、頭を冷やさせてくる……」

俺は目的の男に向かって歩いていった……





そして時間が来てみんな集合する。・・・咲夜と咲が大量に荷物を持っていた。

「どうした咲々コンビ」

「変な呼び方すんな。・・・予想外に買いすぎただけだ」

「同じく」

レミリアと恋はかなり満足そうな顔をしていた。そして帰りの電車の中・・・

「あの夕映って子、パチエに似てる気がしたわね」

「千鶴さんも美鈴の服を着せたらそっくりになりそうです」



なんて会話をしていましたよこの二人。

「……あ、ちょっと部屋に忘れ物が……明命、頼めるか？」

「え？亮さんは？」

「色々と準備があるからな。教室に行ってるよ」

「あ、はい。わかりました」

「・・・よかった。咲と話していたパーティーの話は聞こえてなかったみたいだ。」

「レミリアと咲夜も来いよ」

「・・・なぜかしら？」

「私も・・・」

「ついでにみんなに紹介する。・・・エヴァの家にずっといるよりは良いだろ？今はさ、紅魔館の主とそのメイドじゃなくてただの一般人としての時間を楽しめよ」

「・・・そうね。そうさせてもらおうわ」

「・・・お嬢様、それでは一旦エヴァンジェリンさんの家に戻りましょう」

「あ、恋も明命に着いていってくれ」

「・・・わかった」

二人が寮に向かっていく。

「……よし、急ぐぞ」

「……おう！」

教室に向かって走り出す。



そして・・・

「亮さん？いらつしやらないのですか？」

「・・・咲、いないの？」

二人がガラツとドアを開けた瞬間、パァン！とクラッカーがなる。

「」「明命ちゃん&恋ちゃん復活おめでとーーーーッ！」「」

・・・クラスみんなが大きい声を出した。

「え・・・？」

「・・・？」

「ほら、何をボサツとしてんだよ明命」

「来いよ、恋。・・・お前達を祝ってるんだぜ」

すると二人が少し涙ぐみながら、

「ありがとうございます・・・」

「・・・ありがとうございます」

そしてレミリアと咲夜も入ってくる。みんなは素早くクラッカーを持ち変えて鳴らす。

「」「新しい友達ようこそーーーーッ！」「」

レミリアと咲夜もみんなに引き込まれていく。・・・気のせいか二人には笑顔が浮かんでいた気がする。

「ふう・・・」

「お疲れですか？」

明命が声をかけてくる。・・・今日はネギが宿直な為、校内に教師はネギ以外いない。と言うかコツソリネギが人払いの魔法を掛けていた。・・・意外に悪だな、ネギ。

「・・・なあ、明命」

「はい？」

「楽しいか？」

「・・・はい！もちろんなのです！」

「そうか・・・」

教室を見るとカオスな光景になっていた。

「おゝ、旦那と明命の姉さん良い空気ツスね兄貴」

「ダメだよカモ君・・・」

「・・・ハア、何のようだカモネギ」

「・・・ツ！？・・・い、いえ・・・なんでも・・・あの、そんなに仲が良いなら仮契約でもくなんて・・・」

「お前はどこそそのマスコット兼悪役の小動物か。事あることに仮契約を進めやがって」

「仮契約・・・でも、亮さんと仮契約したいのです・・・」

「明命！？」

「ほらあ、明命の姉さんは乗り気だぜ？」

「え・・・いや・・・」

「私は、亮さんの事が大好きです」

「・・・ッ!」

「亮さん・・・」

明命が迫ってくる。カモが魔方陣を書く。



「何を・・・今更・・・」

今更言う必要はないけど、口にする。

「・・・俺も、明命が大好きだ・・・何時までも一緒にいてほしい」

「・・・はい」

そして唇が重なる。

「バックテイオー仮契約成立!!」

光が溢れ、俺の手にカードが現れる。その絵は南海霸王を持った明命の姿だった。・・・俺達はその後、パーティーを楽しんだ・・・



忙しい日々（後書き）

亮

「パクティオー……」

咲

「……ま、いいじゃん。仲が深まって」

亮

「いや、さ……裏で見ている恋姫勢に何を言われるか……」

咲

「そんな些細なことを気にしてたのか。あそこを見るよ」

亮

「？」

呉の皆

「……」

亮

「ピイツ！？」

慎二

「どうしたんだい大澤？」

亮

「また唐突に出てきたな、おい。何気に出番が多いの知ってます？」

慎二

「ふ．．．それはこの僕が美しすぎるからさ」

蓮華

「黙りなさいおとな．．．ワカメ」

慎二

「ああ？なんだよゆり．．．孫権」

亮

「先輩、言い直しても名前ほとんど言ってます」

咲

「なんで出てきたんだこの二人．．．」

黒桜

「兄さん．．．？迷惑ですから私達に宛てられた部屋に行きましょう．．．？」

慎二

「桜！？兄を片手で引きずるなあ．．．！？」

雪蓮

「ほらほら、戻るわよ蓮華」

蓮華

「あ、ちよ．．．姉様！？」

咲

「・・・えと、次回の真似と開閉と世界旅行」

亮

「次回もまた見てください」

二人

「それではまた次回会いましょう！」

学園祭準備〜開催〜(前書き)

かなり話を飛びますが・・・ではどうぞ。

## 学園祭準備〜開催〜

それから数日・・・中間テストも無事に乗りきり、学園祭の準備が始まっていた。・・・最初、我がクラスはメイド喫茶をやるうとしてコスプレ喫茶に変わったり、結局新田先生に叱られたりして何にするのか決まらなかった。・・・そして次の日。

「ドキッ 女だらけの水着大会・カフェ 』がいいと思いまーす」

椎名の発言から始まった。

「何なのよソレ！意味わかんないわよーっ！」

「・・・それだ」

「ウソつけーっ！」

その後もかなり沢山の意見が出たが・・・

「あ、あの、オンナダラケとかノーパンキツサとか全然イミがわからないんですが・・・」

ネギとのどかと史伽がガタガタ震えていた。

「うむ。君達は生涯知らなくていいことだ。そして良い子は意味がわからなくても決してお父さんやお母さんに尋ねてはいけない。君達とお姉さんとの約束だ」

「・・・真名、一応のどかと史伽は同じ年だろ・・・」

「咲……それは多分触れちゃいけない部分だと思う……」

結局全然決まらないまま次の日になり、気のせいかな嬉しそうなの意見により、3 Aの出し物は『お化け屋敷』に決まった……

そんな矢先、一つの事件が起きた。出席番号1番で“幽霊”の相坂さよが出現した。だけどネギと朝倉のお陰で事なきを得た……この話は時間が出来たら思い返そうと思う。

とある日の深夜……

「……なんでこんなこと……」



3 Aと+ の人間は泊まり込みでお化け屋敷を作っていた。

「咲夜さんゴメンねー。手伝わせちゃって」

「いえ、気にしないで下さい」

「明命ちゃん。恋ちゃんは？」

「・・・寝てしまいました」

「・・・咲？」

俺は咲のペースが異様に早いのを見て作業を見ると・・・ほほう・・・

「・・・ッ！」

ポカンッ！

「あ痛っ！何すんだ！」

「変化させて強化を掛けるなこの反則男！」

咲夜も咲夜でかなりはかどってるし・・・絶対時止めてやがる、ア  
レ・・・そのまま朝になった。明命達はいち早く立ち去り、肝心  
のお化け屋敷は外側は何とかなった。そしてチア部に何故か呼ばれ  
て咲と行くと恋と明命もいた。・・・ちなみにネギ達は学園長に呼  
ばれてどこかに行った。

「・・・それで、何のようだ？」

「んー？いやあ、亮君達もバンドやらない？」

「はい・・・？」

「この間明命をカラオケに連れて行ってみたらかなり歌えるんだよね。・・・実は私達も出るバンドイベントの参加者に空きがあつてね、それで明命と一緒にメンバーを探してたのよ」

「・・・」

結局・・・

ボーカル 明命

ギター 咲

ベース 恋

ドラム 俺

になった。・・・恋はドラムを一回破壊した。そしてベースをやらせてみるか、とやらせてみたら手本を見せただけで恋はベースをマスターした。・・・俺と咲はかなり苦戦したのに。その帰り、超チャオ・リンシェン鈴音を送っていったネギと合流する。

「あ、亮さん！実は・・・」

「世界樹だろ？知ってるよ。・・・あとネギ、一つ忠告だ」

「え？」

「超に気を許すな」

「な・・・何を・・・」

「絶対に後悔するからな、ネギ」

咲も一緒に念を押す。

「・・・あ、全員見つけたー」

「前夜祭が始まるよー！レミリアさんと咲夜さんも来てるから早く

ー」

クラスのみんなが呼んでくる。俺達は取りあえず前夜祭を楽しんだ・

・・・

・・・そして次の日、遂に学園祭が始まった。どうやら仮装OKらしいので、俺は思春の服、明命と恋は戦闘服、咲は何故か執事服を着ていた。

「……なぜ執事？」

「……3 Aの陰謀だ」

「……あはは……」

「あの、パトロールは……」

「俺等は動けたら動くってことになってる」

「……恋、遊びたい……」

「ああ。たっぷり遊ばせてやるよ」

「それじゃあ何処に行くか……」

その時、ポケットから仮契約カードが落ちる。

「ん？コレは……」

「うわわ！？咲、見るな！」

慌てて咲からカードをぶんどる。

「ほほう……仮契約ね……」

「……」

すると咲は懐からカードを取り出す。そこには咲のとは違うキーブレードを構えた恋が描かれている。

「な……え……」

「俺も既に仮契約済みだぜ」

「うええええええ!?!」

恋を見ると顔を赤くして俯いていた。

「……」

……俺達はそんなノリのまま学園祭を見て回った……すると、

「ネギ? 刹那? ……なんだその格好」

二人はなんかウサギ装備だった。

「りよ、亮さん!?! いえ、その……見ないでください!」

「はうわ! せ、刹那さん……もふ、もも、もふらせてくださいー!  
!?!」

「明命!?! いきなり何を……」

「……ネギ、可愛い」

「れ、恋さん……!?!」

それから事情を聞いた。超から借りたカシオペア……簡単に言えばタイムマシンを使って今日の夜8時から今に戻ってきたらしい。そこで自分に会うと大変だからと今の変装をしているのだそうだ。

「……」

「やっぱり超さんは悪い人じゃありませんよ」

「いや、そう決めるのは早いぞ」

「そんな……」

「忘れたのかネギ。俺達は“知っている”んだぞ」

「う……」

ネギがたじろぐのを見て少し、退いてやる。

「ま……生徒を信じない教師はいない……か」

「え……」

「お前の好きなようにやれよ。……何があるつとフォローはしてやる」

「あ……ありがとうございます……」

咲がネギの背中を叩く。

「これからのどかとデートだろ？行っていいよ」

「デ、デートじゃないですよ……」

そのままネギは着替えに向かった。俺達は変わらず一日を楽しむ・  
・すると夕方。世界樹が光った。

~~~~~

ケータイになる。・・・恥ずかしいが俺は念話が使えない。

「もしもし？」

『もしもし？私です、愛衣です』

魔法生徒からの電話だ。

『今、観測班から連絡が入りました！どこかで告白生徒が出たかも
しれません！』

「わかった。心当たりがあるから俺はそこに向かう。じゃあな」

ケータイを切って咲達に目で伝え、走り出す。

「・・・あ」

しかしたどり着いたが、時既に遅し。世界樹の力で暴走したネギがアスナにキスをしていた。・・・それはもうディープなものを。

「それよりあのー、僕、最後にアスナさんに何をしたんですか？」

「それは、あのー・・・大人の・・・」

「ディープ・・・」

「ギャアア！？待った待って！！言わないでーっ！」

・・・カオスだ。

それから数時間。のどかとのデートを終わらしたネギが帰ってきた。

「ええーっ！？たいむましん！？」

アスナ達にも説明して時間を跳ぶ。

「……よっ、と……」

時間を遡り、昼間に戻った。

「……では、僕達はパトロールに行きます。……亮さん達は？」

「俺達も見回るよ。……“ソレ”の存在を知ってたから遊んでたんだし」

「わかりました。それではまた後で……」

そのまま時間が過ぎて武道会の時間になる。

「あれ？」

優勝賞金の0が多いような……。一、十、百、千、万、十万、百万、
……1000万!?

「……」

「……忘れてた……」

本当に最近記憶が曖昧になってきた・・・

「・・・で、出るのか？」

「勿論」

「・・・恋も、出たい」

「あの・・・私も」

するとネギ達がやって来たので俺達も参加することを伝えた。

「ええええええ！？そ、そんな、古老師に龍宮隊長に楓さんに加えて
師匠やタカミチ・・・それにアスナさんも出るのに・・・」

「なんでや、めっちゃめっちゃ面白そうやんか」

『では参加希望者は前へ出てくじを引いてください！予選会は20
名一組のグループで行われるバトルロワイヤル！！予選会終了ギリ
ギリまで参加者を受け付けます！！年齢性別資格制限一切なし！！
本選は学祭2日目の明朝午前8時より！！ただいまより予選会を始
めます！-！』

「・・・つつしや、行くぜ！」

そして本来の予選と違い、グループが増えていた。

「・・・よし、知り合いは咲だけか」

「ある意味ラッキーだな」

そして予選が始まる。

「ハアアアツ！」

バキッ！

「ぐわっ!？」

咲が一人倒す。俺は・・・

「う・・・ぐ・・・」

苦戦していた。いや、本来なら苦戦しないはずだ。だが違和感にか
られて戸惑いで集中できなかった。

「・・・（体に魔力強化ができない・・・!）」

魔力を高めようとするとも魔力が四散してしまうのだ。

「亮！」

咲から木刀を投げられる。

「何やってんだ！武器がないとダメか！？」

どうやら咲は俺が普通に苦戦していると思っているらしい。だがありがたい、俺は木刀を構える。

「そうだよ・・・俺は・・・」

走り出す。禁止されている武器は死に繋がるものだけだったはずだ。

「――元々魔力なんてねえんだよっ！！」

『・・・おおっと！イグループも決まったあーっ！っ！！予選通過者は大澤亮選手と五十嵐咲選手だーっ！』

「ふう・・・」

何とか立ち上がる。その後、トーナメント表が表示される。

一回戦から

佐倉愛衣VS村上小太郎

大豪院ポチVSクウネル・サンダース

長瀬楓VS中村達也

龍宮真名VS古菲

恋VS五十嵐咲

十六夜咲夜VS高音・D・グッドマン

ネギ・スプリングフィールドVSタカミチ・T・高畑

神楽坂明日菜VS桜咲刹那

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルVS山下慶一

大澤亮VS明命

「……げ、初戦から明命か……」

「……こつちも朝倉が仕組んだとしか思えないな……」

「……つて、おい！咲夜の名前もあるぞ！」

「なにいつ!?!?」

「……私が参加していたらおかしいかしら？」

「咲夜……」

「本当はお嬢様も出たかったみたいだけれど、本選が朝と聞いて辞退なさったわ」

「……なるほど」

咲が納得しているなか、俺はエヴァの別荘に向かう。

「お、おい……亮？」

「……」

それを無視して俺は別荘に走り出す。

「・・・くそ、くそ、くそお！」

何度やってもダメだ・・・魔力が体に行き渡らない・・・ダメなんだよこの世界じゃ・・・物真似を使うにしても使いすぎで倒れちゃ意味がない。・・・だからこそ体を魔力で強化する必要がある。・・・なのに肝心の魔力が集まらない・・・そんな感じでエヴァの別荘で数週間を過ごした・・・

「・・・亮」

エヴァがやって来た。

「はぁ・・・はぁ・・・なん、だよ・・・」

「貴様、魔力を消してみろ」

「何を言って・・・」

「いいからヤレと言ってるんだ」

ぐ……俺は魔力を落ち着ける……あれ？

「なんだ……この魔力とは別の力が溢れる感じは……」
するとエヴァがため息を吐く。

「ふう……やっぱりか」

「？」

「貴様が魔力を使えなくなった理由……それは“気”だ」

「気？」

「ああ。それも魔力と反発しあうほどのな」

「……でも、なんで気が……」

「気なんて体を鍛えていれば使えるようになる。……貴様はそれに気づかなかっただけだ」

「え……と……それじゃ、強化が使えなくなったのは……俺の不調じゃなくて……」

「……ただ単に新しい力で自分の首を絞めてただけだ」

「なん、だよ……」

俺はホッとして倒れる。

「……おい」

エヴァが声を掛けてくる。

「……ん？」

「貴様に良いものを教えてやる、亮」

そして俺は地獄の特訓に入ったのだった……

そして、決戦の時が来た。

『さあやってまいりました！既に何度も興奮させてくれた一回戦も中盤！次の対戦は……』

明命が先にリング上に上がる。

『麻帆良七不思議に登録されている謎の少女！はたして戦闘力はいかに！？明命選手ーっ！』

実況の朝倉がノリノリで実況する。

『対してこちらは男子なのに女子校通いの羨ましい男！大澤亮ーっ！』

「アホが！」

「死にやがれーっ！」

「羨ましいんだよ畜生ーっ！」

・・・戦で怒声を聞くことはあつたけど罵倒はなかつたな・・・

「・・・亮さん」

「・・・なんだ？」

明命は特注の長い木刀を構える。

「本気で来てください！」

俺も木刀を構える。

「そつちこそ手加減するなよー！！」

『それでは・・・試合開始！』

「ヤアアアアッ!!」

「ハアアアアッ!!」

カキヤアアアッ!

木刀だが魔力で強化しているため、鉄のような音が響く。

「喰らえ!」

ヒュンッ!

「当たりません!」

お互いの全力を使って闘う。武器を振り、蹴りを放ち、飛び回る。
・時間がないのがムカつく。

「フッ!」

一旦距離を取った・・・瞬間、

「もらった!」

明命が振るった木刀から衝撃波が・・・ってうおおお！？

「危なああっ！？」

ズガアアンツ！

「み、明命！？何の技だ！？」

「亮さんがいなかった一年間、何もしなかったわけではありません。・・・魔力の効率的な使い方や戦い方を勉強しました。・・・そして生み出したのがこの技、魔力を瞬間的に爆発させ、その反動で衝撃波を飛ばす」

「・・・カマイタチか？・・・だけど、切札はまだある！」

俺は意識を集中させる。

「・・・左腕に“魔力”・・・」

力を・・・高める・・・

「・・・右腕に・・・“気”・・・」

両手を胸の前で合わせる。

「・・・合成！！！！咸掛法！！！！」

身体に力がみなぎる・・・これがエヴァとの特訓で身につけた切札・・・そしてお互いが一気に踏み込む。

「いつも自分の力不足に悩んでいた！どうしたら大切な人を傷つけないですむか！！」

「私もです！私の力不足でいつもボロボロになる人がいた！」

「だから思った！」

「だから願った！」

「もっと、力が欲しいって！！」

お互いの思いを乗せて一撃をぶつけていく。

『さあ、残り1分だー！このままメール投票になるのかー！？』

その言葉を聞いて俺と明命は距離を取る。

「・・・亮さん」

「・・・明命」

「どっちが勝っても恨みっこなしだ（です）！！」「そして・・・最後の一撃が決まったのは・・・」

『・・・9、10！勝者、亮選手ーっ！』

立っていたのは俺だった。俺は明命に手を差し出す。

「・・・これで、足手まとい卒業かな？」

「・・・思春殿から言わせたらまだまだって言われると思います」

「はは、違うない」

明命が手を掴む。俺は明命を立たせてやる。

舞台から降りる。すると咲達が集まってきた。

「おいおい！なんだよいきなり姿を消したと思ったらこんな時間ギリギリに現れて更に咸掛法なんて大技を覚えてやがって！！」

「・・・亮、強くなってる」

「ハハ・・・参ったね・・・」

「高畑先生？」

高畑先生がかなりショックを受けていた。

「・・・そっぴゃ俺は試合を見てないんだけど・・・」

「次がタカミチとネギの試合だよ。その後が俺と恋だ」

「……その肝心のネギは？」

「特訓」

「……まだやってたのか？」

「……う、ゲホッ！ゲホッ！」

「明命！？」

明命が苦しそうに咳き込む。

「だ、大丈夫です……多少は魔力で防御しましたから……」

「……ならいいけど……」

その時、唐突に眠気が襲ってきた。

「……まだ……咸掛法は使いこなせてないんだよ……」

「亮？」

「少し、眠ってくる……咲」

「なんだよ？」

「勝てよ」

「……おっ」

そして医務室に行って布団に入る。案の定直ぐに眠気が意識を消していった。

そして目が覚めて会場に走る。

「……咲！試合は！？」

「まだまだよ、ネギ達が派手に壊したから修理に時間がかかってんだよ」

「あ……それでネギは……」

「ネギの勝ち。ホント、アイツは頭良いよな」

『……どうやら修理が完了した模様です！！それでは次の二名は舞台上がってください！！』

「よ……」

「……」

咲

俺は舞台上上がり、恋を見据える。

『さあやってまいりました！次の試合、まずは明命に続く麻帆良七不思議に登録されている謎の少女2号！まるで動物のようにはほんとしていながらその実力はまさに三国志の猛将呂布！彼女に長物を持たせたら右に出るものはいない！・・・その名も恋選手――
――！！』

朝倉・・・確かに呂布だよ。確かに。

『対するは大澤亮選手と同じ、男子なのに女子校通いの執事服に身を包んだ五十嵐咲選手――！！』

「執事服を着せたのはお前が主犯だろーが！！！」

「・・・咲」

恋の言葉に反応して振り向く。

「・・・咲と戦うのは久しぶり」

「そうだな。最近は“本気の”勝負はしてないよな」

キーブレードを取り出す。事前に許可は取った。

「・・・恋は、咲より強い」

「どうかな？やってみなくちゃわからんぜ？」

「・・・（フルフル）・・・咲より強くないと咲を守れない」

「・・・好きな相手に守ってやるって言われてもな・・・」

普通は逆だ、逆。恋は長い棒を構える。

「・・・勝負」

「来い！」

その瞬間、恋が視界から消える。

「ッ！開け！」

久々に使う距離開き、恋の一撃は俺の後ろから放たれた。

「・・・遅い」

「く・・・第一強化！」

体を自身の魔力で強化する。

「・・・ッ、まだまだ」

突き、払い、斬り、まるで刃物の嵐のような恋の猛攻に押される。
ザワツ・・・

「く・・・ダメだ！」

闇が疼く。もつと戦いを楽しみたいと。相手をなぶり殺したいと、

「・・・ッ！第二強化ア！」

キーブレードの魔力を使って体を強化する。・・・この試合に闇の力は必要ない！

「ウオオオオツ！！！」

カキキキンツ！！

「・・・ッ！早い・・・！」

今度は逆に恋を押ししていく。そして、

「タアアアツ！」

バキツ！

「・・・ッ！」

恋の武器が真っ二つになる。

「もらった・・・！」

その時、恋があるものを取り出す。

「……来れ（アデアット）」

恋の手に現れる二本の鍵。

「……鍵の剣」
メグリアウフタリ

「……アーティファクトか！」

「咲、もつと戦う」

気のせいか恋が凄く楽しそうだ。……いや、

「俺も楽しんでたなっとお！」

俺は六本のアルテマウェポンを展開する。

「……ふふ」

「……くく」

戦いは楽しい。血がたぎる、沸き踊る、力がみなぎる！！

「……セイツ！」

「ウオオオオッ！」

お互いの渾身が練りだされた……

「時間切れです！ただいまからメール投票に入ります！」

その声が聞こえて俺と恋は同時にしゃがみこんだ。

「……ツ、ゼハーツ、ゼハーツ……さすがだよ、恋」

「ハア……ハア……咲も強かった」

「覚えているか？初めて戦った時のことを」

「……（コクッ）」

「俺の持てた力を全部恋は打ち負かしてくれたよ」

「……あの時は、咲にあまり興味はなかった」

「うえ……そりゃ厳しい」

「でも、今は違う」

「？」

「今は……興味だけじゃない。……一緒にいるとホッとする」

「……」

「ずっと一緒にいたいから……恋は強いから咲の分も戦つ。咲の分も戦えば咲は戦わなくて済む。……だから一緒にいられる」

「……それは違うな」

「え……？」

「俺から言えば恋に置いていかれる寂しさ、ヘルマンにやられた時の悔しさと怒り、なぜ一緒にいてやらなかったんだと自分への苛立ち。・・・戦わないことで逆に傷つくんだ、俺は・・・だから・・・」

『結果が出ました！勝者は――』

「だから、俺も恋と・・・」

『――勝者は、五十嵐咲選手――！』

「共に肩を並べて・・・一緒に戦わせてくれ」

「・・・」

いつもより弱々しく、それでもはつきりと恋は頷いてくれた。

学園祭準備〜開催〜（後書き）

亮

「学祭編かー」

咲

「やっとだよな」

凜

「……なんで今日はわたしがゲストなの？」

亮

「ちょうどEXTRAで遠坂を倒したから」

凜

「……なんですって？」

亞莎

「……あの、私は……」

咲

「やったら魔法に関わるから。淫獣だったり幼女だったり先輩魔法少女だったり」

亮

「……全部悲惨な目にあってるがな」

夕映

「……私もいます」

亮
「これは……」

咲
「リリなのメンバーだな、あとラニ＝？がいてもいいけど」

エヴァ
「……私もいるぞ」

亮
「うっわ、確定」

小太郎
「俺もいるんやけど」

咲
「多いって！このペースだと終わらなくなるから今回はここまで！
！！」

全員
「えーーーーー？」

咲
「反論は認めん！それでは次回の真似と開閉と世界旅行！次回もまた見てください！」

亮
「それではまた次回会いましょう」

武道会（前書き）

相変わらず飛ばしていきます・・・ではどうぞ。

武道会

あの戦いからしばらくして俺達は医務室にいた。

「・・・肋が折れてますね」

「「ええええええ!?!」」

衝撃的発言に俺と咲が叫ぶ。

「・・・」

あまりにも明命が苦しそうだから医務室に連れていったらこれだ。

「・・・咲」

「あ、ああ・・・ちゃんと回復魔法をかけとくよ・・・」

その時、ネギが入ってくる。

「あ!もうすぐ二回戦が始まりますよ!」

「うえ!?!もうそんな時間か!?!亮!」

「お、おう!」

「あ、後で見に行きます!」

「・・・恋も」

『第一回戦のハイライトですー』』

それは一回戦の映像の良いところ取りだった。・・・そして二回戦の組み合わせが決まる。

村上小太郎VSクウネル・サンダース

長瀬楓、古菲が腕の骨折により棄権、不戦勝

十六夜咲夜VSネギ・スプリングフィールド

桜咲刹那VSエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

大澤亮VS五十嵐咲

「……」

「……」

咲と無言で見合う。そして、

「勝つのは俺だ!」

同時に口にした。

「……エヴァ、咸掛法について教授を……」

「断る」

「ええ〜!?頼むよ、まだ出力の調整ができないんだよ〜!」

「知るか、そもそもお前にそこまでの義理が無い」

「んー……じゃあ物真似でナギになる……は嫌だよな」

「なんだと!?アレはナギにもなれるのか!？」

「え、まあその真似する相手のことを知ってれば……」

「それじゃあ私の呪いも解けるのか!？」

「あ、ソレ無理」

ズコーツ、とエヴァがコケる。

「何でだーっ!?!」

「俺の真似はワンランク下がるんだよ」

「く……よし、ならナギの姿で私に1日付き合え」

「え、やだ」

「だからなんでだーっ!」

「だっってお前、俺を無事に帰す気ないだろ?」

「……そ、そんなことはないぞ?」

「その微妙な間でなおかつなんで疑問系なんだよ」

「……じゃあナギみたいに私に接してくれるのは……」

「……それくらいなら……」

そして特訓を始めて、しばらくしてから試合をみるために戻った。

「……小太郎がやられた?」

「そりゃもう一瞬で」

次は・・・

「咲夜の番ね」

「うおう！？レミリアいたのか！？」

「何、私がいたらいけないの？」

「いや、別にいいんだけどさ」

『さあ次の対戦は！麻帆良に現れた謎のメイド！一回戦では一瞬で相手の服を切り裂いたトリックは判明するのか！？十六夜咲夜選手
ーーーーッ！』

咲夜がお辞儀をしながら舞台上がる。

『そして相手はかなりの人気を誇る子供先生！その頭脳で相手の力を見破れるか！？ネギ・スプリングフィールド選手ーーーーッ！』

二人が向き合う。

「まあ、気を付けないと」

『それではーーーー』

「ーーーーネギの負けだな」

『ーーーー試合開始！』

ズガアアアンツ！

ネギがぶっ飛んでネギがいた位置に咲夜が立っていた。

『おお？おおお！？いきなりネギ選手がぶっ飛んだー！一体何が起きたんだー！？』

ネギは直ぐにリング上に戻ってくる。

「え……」

観戦しているみんなが疑問の声を出す。

「……アレは、一体……」

刹那が聞いてくる。

「……アスナ、今咲夜が見えたか？」

「え……見えなかったけど……」

「それが答えだ、刹那」

「は、はぁ……」

そんな会話をしてる内にネギは追い込まれている。咲夜は上手い具

合にナイフで障壁を砕き、打撃技を喰らわしていく。勿論ナイフは誰にも見えていない。

バキィッ！

またネギに攻撃が決まる。．．．そもそも咲夜には今のネギ以上の中国拳法の仲間がいる。ネギが勝つのは難しいだろう。

「さあ、どうするネギ．．．」

やられ続けていたネギがニヤリと笑った。．．．お、どうするんだ？

「．．．ッ！」

ネギが消えて咲夜の後ろに着いた。

「な．．．」

「桜華崩拳！！」

ドガアアアッ！

「な．．．が．．．！」

咲夜はバウンドしながら舞台の上を転がる。．．．ネギのやるっ、カシオペアを使いやがったな？

「．．．やるじゃん」

咲も感心していた。……まさかこの段階であの戦い方を思い付くなんて……

「……咲夜！」

レミリアが声を出す。咲夜はそれに呼応するかのよう立ち上がる。

「……お嬢様の前で……醜態は晒せない……！」

「……凄いな」

忠誠心とかそういう次元じゃないぞ、あれ。

「……」

咲夜が一瞬でネギの後ろに回る。だがネギは更に咲夜の後ろに回り込んで……再び一撃を加えた。

「ああ……が……！」

……咲夜、アレは分が悪すぎるよ。だけどネギも大分疲れているようだった。……まだ慣れてないのか？……でも、咲夜は限界だったみたいだ。今度はピクリとも動かない。

『9……10！試合終了！勝者はネギ選手ー！ーッ！』

「咲夜！」

レミリアが咲夜に近寄る。咲と俺も着いていく。

「魔力最大集中・・・ケアルガ」

咲夜の怪我が治っていく。

「背中に二発・・・しかも最大パワーだからな・・・」

「く・・・申し訳ありません・・・お嬢様・・・」

「今は喋らなくていいわ、咲夜。・・・ゆっくり休みなさい」

咲夜は静かに目を閉じる。

「・・・ネギ・スプリングフィールド！」

「は、はい！」

「咲夜をこんなにボロボロにしたのだから・・・絶対に勝ちなさい。勝てなかったら・・・わかるわね？」

レミリアがかなり妖しい笑みを浮かべた。

「は・・・はい・・・」

しかしネギもそのまま倒れてしまった。

「ネギ!？」

取りあえず咲夜とネギを医務室に運んだ・・・

その後すぐに俺達の番が回ってくる。

『さあさあやってまいりました!遂に始まる女子校通いの男子生徒同士の戦いだー!ツ!親友とも呼べる存在が最強を賭けて今、戦う!』

「・・・左腕に魔力・・・右腕に気・・・」

「・・・第一強化・・・」

『それでは、試合開始!』

「合成!咸掛法!」

「第二強化ア!」

最初っからアクセル全開で戦う。

「ウラァァッ！」

「ダァァァッ！」カキヤァンツ！

木刀とキーブレードがぶつかり合う。

「タラァッ！」

「ハッ！」

カンツ！

ビュンツ！

カカンツ！

キキキキンツ！

カキヤンツ！

火花を散らしながら武器を振るっていく。

「もっとだ！もっと来い！亮オオオ！」

咲は六本のアルテマウェポンを展開する。

「――鶴翼、欠落ヲ不ラズ」

咲がキーブレードを二本投げってくる。

「ハアッ!!!」

カキヤアンツ!

それをまとめて弾く。咲は更にキーブレードを持って突っ込んでき
て、更に背後からもキーブレードが戻ってくる。

「なめ、るなあ!」

それらをまとめて弾き飛ばした。追撃できないように咲を思いつき
り弾き飛ばす。

「・・・かかった」

「なに!?!」

「ストライクレイド!」

咲がキーブレードを投げ、計六本のキーブレードが俺の周りを不規
則に飛び回る。

「弾けるっ!」

キーブレードが・・・爆発した。

ズガアアアンツ!!

「・・・やったか？」

『おーっ！と！？ここで亮選手が爆発にのまれたああ！？これは生きてるのかーっ！？』

・・・俺は咲の後ろに移動していた。

「なん・・・だと・・・」

「悪いね、咲」

咸掛法の力を全て木刀に使う。

「俺はーっ！」

木刀を振り切る。

「瞬動も覚えたんだよ！！」

バキィィィッ！

「があ……」

咲はその場に崩れ落ちた。

『……試合終了ー！ーッ！この試合の勝者は大澤亮選手ー！ーッ
』！

「……勝ったぜ」

「……負けた」

咲が観念して言った。

「魔法の矢は使えないけどこういうのぐらいはできないと置いてかれるからな」

「……エヴァに教えてもらったのか？」

「……俺は特訓の内容を思い出して高速でガクガク震えだす。」

「あ、悪い、トラウマだったか」

咲に体を貸して立たせる。

「あたた・・・俺も骨折ったか？」

「お前は回復魔法があるから医務室に運ばなくても良いよな？」

「・・・運んでください」

仕方ないので医務室に運んでやった。

「・・・咲、大丈夫？」

恋が咲に声をかけた。

「ん・・・ああ、大丈夫だよ、心配するな」

咲が恋の頭をくしゃくしゃ撫でながら言う。

「さすがです亮さん！」

「ラッキーだよ。手の内を知られてたら俺の負けだったさ」

「いや、手の内を隠すだろ普通、って白蓮が言ってたぞ」

「さすが普通・・・」

その時、ネギが入ってきた。

「あつう……」

「ネギ？」

「どうしましょう……レミリアさん怒ってますよね……」

「……大丈夫、だと思う……」

「……あ、そうだネギ」

俺がネギに声を掛ける。

「？」

「カシオペア使ったのか？」

「あ……はい。……あれしか勝つ手段が見つかりませんでしたから……」

「咲夜だって似たような技使ったんだからおあいこだろ」

「……つと、本題を忘れるとこだった……ネギ、あの技はあまり使わない方がいいかもな」

「え……なんでですか？」

「アレはお前の魔力を多大に使うからな、あの技はもう少し封印しとけ」

「・・・わかりました。亮さん達のアドバイスは正確ですから」

よし、良い子だ。・・・そして試合もあらかた片付き、次の対戦が発表された。

ネギ・スプリングフィールドVS桜咲刹那

クウネル・サンダースVS長瀬楓

大澤亮、シード扱い。クウネル・サンダースVS長瀬楓の勝者が大澤亮と戦う。

「・・・シード？」

「・・・ずる」

「言っとくけど、お前が勝ってたら同じこと言っからな、俺」

しかし余裕があるな・・・どうせクウネルが相手なんだ。物真似も使う覚悟じゃないと・・・

「・・・次は楓さんの試合なのです」

「・・・楓、強い・・・でも、あの男も強い」

明命と恋が交互に言う。

「そりゃ、楓は忍者だしな・・・」

「クウネルは魔法使いだからな・・・強いのは当たり前だな」

「・・・取りあえず、試合を見に行くか」

そして会場に行ったとき、屋根の上で観戦しているクラスメートが目に入る。

「・・・なにやってるんだ？」

「あ、亮君！」

「・・・念のため聞こうか、お化け屋敷は？」

「・・・」

全員が俺から目を逸らした。

「・・・お前ら」

「あー、ほら、お腹空かない？私が食べるもの作ってきたから」

柿崎がタッパを差し出し出してくる。

「?・・・なにこれ」

「私特製パインサラダ!」

「柿崎イイイツ!?!」

俺を殺す気ですか!?!

「あとステーキ」

「だから柿崎イイイツ!?!」

お前の名字でその料理はやめるおおお!?!

「・・・気持ちだけ受け取っとくよ・・・」

「亮君は参加してるのかな?」

アキラが聞いてきた。

「おう、ちゃんと勝ってるぞ」

「そうなんだ。私達はいさつき来たんだ」

「サボって?」

「う・・・ごめん」

「ザジに任せてきちゃったんだろ？」

「え、なんで知つとるん？」

亜子も話に参加してくる。

「んー・・・知っているから・・・そうとしか言えないなあ」

「あ、あの・・・それでネギ先生の試合は・・・」

「大丈夫だよ委員長、これからだから」

見ると楓の試合が終わって勝ったのはクウネルだった。

「・・・次がネギの試合だよ」

「まあ・・・」

「あのさ亮君」

「なんだ？椎名」

「・・・どこから来たの、今？」

「・・・」

跳んできました　なんて言えないよな・・・

「企業秘密」

「なんでやねん！」

ナイスツツコミ亜子。

「それじゃあ俺は戻るから、警備の人に捕まんなよ？」

そして飛び降りる・・・あ、

『あれ！？ここ結構高かったよね！？』

自分の浅はかさに頭が痛くなった。

そして入場するネギを見ると、明らかに緊張しているのがわかった。

「・・・硬いな・・・」

そして試合が始まる。ネギは瞬動を使って刹那の後ろを取り、杖を呼び寄せる。

「桜華槍衝太公釣魚勢！！！」

ドガアッ！

「ほお、棒術・・・いや、槍術でござるか」

「うむ！！八極拳は槍も得意アル！！達人は『神槍』と呼ばれて称えられたネ！有名な所では李書文トカ・・・」

「『二の打ち要らず』？」

「お、よく知てるアルね」

「・・・一回真似したからね・・・」

肝心の刹那はネギの一撃を気で逸らしていた。

「神鳴流・・・奥義、百烈桜華斬！！！」

ガガガガッ！

「斬空閃！」

ゴゴッ！

「ぐ・・・」

「神鳴流奥義、斬岩剣！！！」

ドッ！！

「うわっ！」

「奥義・・・斬鉄閃！！！」

ズシャアアツ！

「くあっ！？」

刹那は攻撃の手を休めない。

「神鳴流浮雲・桜散華！」

「わあああっ！？」

ドカアツ！！

頭から舞台に落とされるネギ。

「やるねえ、刹那」

その後しばらく打ち合い、刹那とネギが二三話した時、ネギの体から硬さが消えた。

「・・・うん？」

「楓？どした？」

「・・・ちよつと用事ができたでいじゆぬよ」

「あ、私も行くアルよ」

二人がどこかに行く。試合の方は終盤に入っていた。

「……そろそろ時間です。次の一撃で決めましょう」

武器のデッキブラシを捨てて刹那が言う。

『おおっと、フィニッシュ宣言！！た、確かに時間は14分……あとわずかです！これがラストか！？』

二人が拳を構える。すると会場は緊迫した空気に包まれる。
ドンッ！

音がした瞬間には決着がついていた。

『……き、決まったー！ーッ！桜咲選手ダウン！！ダウンー！ーッ！ー！』

そのままカウントが数えられ、ネギの勝利が決まった。

……そしてやって来る戦い。

「……」

「ふふ、貴方が大澤亮ですか？」

「そうだよ、トーナメント表見りゃわかんだろ」

「なるほど、確かに八雲紫が言っていた面白い人物ですね」

「は？紫？」

「知らなかったですか？前に私のお茶会に誘ったんですよ」

「……」

その時、クウネルがカードを取り出す。

「……！」

そして一瞬で水がはね上がり、回りが見えなくなる。

「これで貴方も存分に戦えますよ」

ケータイを取り出す。

「随分と優しいねえ……」

突っ込んでくるクウネルの姿は近衛詠春だ。

「モーションキャプチャー！近衛詠春！」

そしてぶつかり合う夕凧。

「おや？私のより弱いですよ？」

「く……」

そしてクウネルに弾き飛ばされる。

「ぐあ……」

次は……ガトウか！

「キャプチャーキャンセル！モーションキャプチャー！ガトウ・カ
グラ・ヴァンテンバーグ！」

居合い拳には居合い拳で対抗する。

「魔力の練りが甘いですよ」

ズガアアッ！

「ぐわああっ!?!」

「次です」

今度は・・・ジャック・ラカン！

「キャプチャーキャンセル・・・モーションキャプチャー、ジャック・ラカン」

コイツに戦法はない。チートだし。そのまま時間まで粘る。

「・・・そろそろ時間ですね。このままではメール投票で私が勝ちます」

「はあ・・・あ、ぐ・・・はあ・・・」

目眩や眠気が酷い。

「貴方もそろそろ限界でしょう。次で決めます」

空高く飛んで降りてくる時には・・・アイツは！

「モーションキャプチャー！ナギ・スプリングフィールド！」

その全力をぶつける、が、

プツ、ン・・・

「あ・・・」

何かが切れた音がして意識が途絶えていく。

「ま・・・ただ・・・」

しかしそのまま俺は倒れてしまい、意識は消え去っていった・・・

武道会（後書き）

第一回人気投票ーっ！

亮

「いきなり出てきてなんだ」

少し、趣旨を変えようかと。

咲

「ええと・・・この小説を読んでくださる皆さんへ、よろしければこの小説で好きなキャラを教えてください！対象者はこの小説に出てきたものならどんなチヨイ役でも結構です！」

亮

「皆さんの投票を心からお待ちしております！」

咲

「・・・後書き読まない人がいたらどうするのかね」

・・・大丈夫です。

亮

「それでは次回の真似と開閉と世界旅行」

咲

「それではまた次回会いましょう」

紳士？（前書き）

今回は短いです。ではどうも。

紳士？

「……」

目を開けた。

「あ、目が覚めたんですね、亮さん」

目の前にいた……いたのは……誰だ？

「あ……う……」

「？亮さん？」

黒髪の少女が顔を覗き込んでくる。……俺の名前は亮……

「……」

「亮、さん……？」

いや、まて、本当に俺は亮と言う名なのか？目の前の少女が言っただけだ。そもそもここはどこだ？いや、俺の……俺？オレットナ
ンダ？

「亮！」

すぱんっ！

「ぐー!？」

いきなり誰かに頭を叩かれて・・・あれ？

「さ、き・・・」

「どうしたんだ？目の焦点が定まっていなかったぞ？」

・・・あれ？

「明、命・・・だよな」

「？何を言ってるんですか？そんなの当たり前じゃないですか」

「頭でも打ったか？亮」

「いや・・・なんでもない」

確か・・・クウネルのヤツと戦って・・・そうだ、何かが切れたんだ。ただ、その何かがわからない。

「・・・俺、どのくらい・・・寝てた？」

「三日だな」

「三日あ！？え、学園祭は・・・」

「はあ・・・よく見る、二二はどいつだ？」

「え？」

周りを見渡すとそこは・・・エヴァの別荘だった。

「・・・あ、まだ三時間・・・」

「そっだよ」

焦った・・・学園祭が終わったかと・・・

「・・・よし、と」

ベッドから跳ね起きる。

「行こう。咲、恋は？」

「ネギについていってるよ」

「そっか」

そのままエヴァの別荘を出る。

外に出て真っ先に浴びた洗礼は・・・

「あ、大澤選手に五十嵐選手！？しかも明命選手まで！取材しているですか！？」

物凄い数の人が寄ってくる。

「・・・咲、明命・・・」

少し、溜めながら言った。

「・・・逃げるぞ！」

「おうよ！」

「御意っ！」

全力で逃げた。

「・・・ふう」

何とか逃げ切った。

「そっぴや大会の決勝戦はどうなつたんだ？」

「ナギ使つたクウネルの勝ち。・・・に決まってるだろ？」

「・・・だよなあ」

「そっぴえば今日の夕方ですよね、ライブ」

明命が言ってくる。

「そーだなー・・・恋は？」

「後から合流すれば・・・」

クイクイ

「ん？・・・取りあえず恋を探して・・・」

クイクイ

「誰だ・・・よ？」

そこにいたのは5歳くらいの女の子。

「・・・咲」

しかも咲の名前を呼んだ。

「そうか・・・咲にそんな趣味が・・・」

「なっ！？違うぞバカッ！俺にそんな趣味はない！」

「じゃあねねは？」

「あれは家族で妹みたいなもんだっつーの！そっちこそ小蓮やイリヤスフィールとかに好かれてんじゃねーかよ！」

「シャオも妹みたいなもんだ！イリヤは土郎命だろーよ！ソレ言ったらお前の場合黄忠の娘とか諸葛亮とか張飛とか挙げていったらきりがねーぞ！しかも恋が言ってたけど魏のちびっこ二人をまるで変態のように追い詰めてたって聞いたぞ！」

「・・・咲、どうして恋を無視するの・・・？」

「・・・え？」

女の子が言った・・・って、

「お前、恋・・・なのか？」

「・・・(コクッ)」

「「ええええええ!?!」」

その時、更に走ってくる人影が多数。

「あ・・・」

「・・・え」

明らかに見た目が変わってるが・・・

「ネギに小太郎に茶々丸に・・・千雨？」

「あ、はい。そうです」

「ちょっとまって！何で私のことがわかるんだよ!?!？」

そりゃ知ってますから・・・聞けば年齢詐称薬を使って報道部から逃げてるんだとか。

「あ、もつじきライブの前練習に行くか」

「そだな」

取りあえずネギと一緒に会場へ向かう。

そしてネギが入って行ってしばらくして亜子が走り去っていった。

「亜子!?!」

釘宮が走ってきた。

「釘宮?」

「あ、亮君、皆!ちょっと亜子捜すの手伝って!」

「あ、ああ!」

皆で走り回る。・・・まあ、なんとかなるよな・・・

「……千雨、見つかったか？」

「見つかったよ、ほらそこだ」

草むらにしゃがみこむ。見るとネギが亜子に眠りの魔法をかけて眠らした。

「……よし、行きますよ、皆さん」

ネギがカシオペアを出す。そして亜子を連れていつの間にかそばにいた小太郎や咲達と一緒に時間を跳んだ。

その後はネギは・・・ナギと名乗って亜子とデートをする。亜子は告白しようとしたが後一步勇気が出ず、告白は出来なかった。・・・そして本番がやって来る。

『次は初参加の4人組ガールズバンド!!でこぴんロケット!!』

『もっとスパーキングナウ!強く、タフなハート!磨いたら世界は見違える!』

そして歌が終わって、メンバートークに入る。

『・・・今日・・・と、とてもお世話になった人に・・・伝えたいことがあります・・・あります』

そして亜子はゆっくりと・・・

『あ、あの、私っ・・・そのっ・・・私・・・す、好っ・・・すっ・・・』

そして思いつきり。

『すゴク楽しかったです！！メールアドレス教えてくださーいー
ーいっ！ー！』

・・・皆が派手にずっこけた。・・・そして曲を全て歌い終わる。

『ありがとっございました！続きましてこちらも今回が初参加！猫
々にゃーにゃーずー！』

ぶっ、と吹いた。・・・明命が笑顔でバンド名をつけたがったのは
こっ言うことだったのか・・・

『たとえ、どんな運命さだめが待ち受けていても！繋いだ手を離さない！
何処までも闘う！』

歌は順調に進んでいった。

『誰かに捧ぐ命なら！自分の境界を越えて！今なら、ここでなら、
強さに変わり、明日に続くよ！』

『さあ、見事な歌でした！では定番のメンバーのトークを！』

『はうあ！？えっと・・・それでは！バンドの皆さんを紹介します
』！

明命が俺に向けて指を指す。

『まずはドラムの大澤亮ー！』

『いきなり俺かよ！？・・・えっと・・・皆ー！盛り上がって
いーぜー！』

ウオオオオオオツ!!

おお、懐かしい咆哮。

『続いてはギター五十嵐咲ーーーーッ!』

『皆ーっ!最後までついてこいよーーーーッ!』

ウオオオオオオツ!

『そしてベースの恋ーーーーッ!』

『・・・みんな、楽しい?』

オオオオオオツ!

咆哮で返事をする観客。

『最後は私、ボーカルの明命ですーーーーッ!』

ウオオオオオオオツ!!

『残念ながら次が最後の曲です!最後は皆さんも一緒に歌いませよ

ー!』

始まる最後の曲。

『夢』

『愛』

『希望』

『友情』

『・・・根性』

『最重要事項って？』

『・・・どれが最重要事項だかわかんないから全部』

『『『『抱き締めよ！』』』』

これには俺と咲も参加していた。

『『『二ー二ーハオハオ無礼講！』』』

（イエイツ！）

『・・・集まれ、乙女繚乱』

(りりり)

『リンリンランラン大変だあ!』

(がびーん!)

『『熊猫と書いてパンパンダ!』』

(ニャンニャン!)

『シェーシェーミラクル杏仁ドーフ!』

(ウマツ!?)

『『ありや?四面楚歌』』

(ななな)

『・・・オンナのコッてそーゆーもん』

(ふえ〜)

『『欲張りなんて言わせない!』』

(ふう!)

『『『『『気にしない、気にしない!イエーイツ!...!』』』』』

ワァァァッ!!

「はぁ・・・疲れました・・・」

「お疲れ、明命、恋も」

「・・・恋、歌えてた？」

「おう。良い歌声だったよ」

「・・・ありがとう（ボソッ）」

「そっいや、明命。メンバー紹介の時、俺を呼び捨てで呼んだよな」
「？」

「はっ！？あ、あれは、その・・・申し訳ありません！」

「謝る必要はないよ。……でさ、そのついでで俺を呼び捨てで呼んでくれないか？」

「ええ！？いや、そ、それは、その……あう……」

「……明命」

「う……りよ、亮……あうう」

俺は明命の頭をくしくしゃ撫でる。

「うんうん、やっぱり好きな人には呼び捨てで呼んでほしいよな」

「……努力します」

その後はネギの元へ向かって再び時間を跳んだ……

紳士？（後書き）

恋姫勢の部屋

蓮華

「……」

思春

「……蓮華様、いかがなされましたか？」

蓮華

「いや……随分と仲がよくなったな……と」

亞莎

「亮様と明命のこと……ですか？」

雪蓮

「アハハ、やっぱり蓮華も乙女なのよね」

冥琳

「あのお堅かった蓮華様が進歩したものです」

祭

「やはり若さはいいのう！見てて面白いぞ」

蓮華

「姉様！冥琳！祭！」

小蓮

「お姉ちゃんも素直になりなよ、亮のことは皆大好きだよ？」

穩

「そうですね？明命ちゃんが羨ましいですよ」

蓮華

「……」

亞莎

「そうですねよ孫権様！思春さんもそうですね？」

思春

「な……そんなわけなからう」

雪蓮

「思春？顔が赤いわよ？」

思春

「そ、孫策様！？」

小蓮

「へ……あの思春が……」

冥琳

「ふ……本当に亮は皆に多大に影響を与えたな」

祭

「お主かてその一人じゃろっ？」

冥琳

「そついつ貴女ですよ、黄蓋殿」

亞莎

「……そつ言えば最近、明命がここにこないなあ……」

穩

「どつやらレギュラー組の部屋にいるみたいですね」

蓮華

「……」

思春

「蓮華様？」

小蓮

「どつせ羨ましいとか思ってたんでしょ？」

蓮華

「シャオ！」

小蓮

「そんな顔を赤くして怒鳴っても怖くないよ」

冥琳

「・・・收拾がつかなくなったな」

祭

「うむ、それでは次回の真似と開閉と世界旅行」

雪蓮

「次回も見てね〜 あと出番がほしいよ〜」

冥琳

「我慢なさい。・・・それではまた次回会おう」

蓮華

「待ちなさい、シャオ！」

小蓮

「鬼さんこっちら〜」

亞莎

「れ、蓮華様！落ち着いてください！」

穩

「やっぱり楽しいですね〜」

思春

「・・・ハア」

亮

「・・・」 入ろうとしたけど入るタイミングを逃した。

悲劇（前書き）

今回は少々意味がわからないかもしれませんが・・・ではどうぞ。

悲劇

「……よし」

腰に鈴音を布で固定する。学園祭中ならどんな格好をしても大丈夫だからな。……その時、

~~~~~

「……はい、もしも『アカン亮君！ウチどないしたらえーんやろー！？』ツ！？……このか？」

どうやら夕映がネギのことを好きなことをのどかに知られてしまい、非常に気まずくなってるらしい。

「……りよ、亮……どうかしたのですか？」

明命が呼んでくる。……まだぎこちないけどまあいいか。

「少し、野暮用がな……明命も来るか？」

「あ、はい。いきます。……咲さん達は？」

「後で呼べばいいよ」

そしてこのかに呼ばれた場所に向かう。

ある程度待ち合わせ場所に近づいたとき、皆が走ってきた。

「え!?!」

「あ、亮君！ナイスタイミング！夕映を追いかけて！」

ハルナに言われて俺達も走り出す。

「ゆえさーんっ!?!」

「待ちなさいっ!?!」

「意外に足速いなアイツは!?!」

夕映が壁の非常ボタンのスイッチを入れた。

「装甲防火扉やっ!?!」

「何でそんなもんが図書館に!？」

カモがハルナに飛び移り、コケたこのかに気を取られたネギと明命、それに純粹が足が遅いのが防壁に阻まれる。

「ゆえっ！」

なんとか夕映に追いついた。

「待ちなっつてゆえ!!逃げなくていいっつてのさつきも言ったでしょ  
！」

「そつだぜ、誰が誰を好きになろうと勝手だろ?それよりもその事実から逃げないでこれからどうするかを考えるよ」

「……もちろんあんたがどんな選択肢を選んでも私は応援するよ。たとえ、あんたがこれからネギ君にモーレッツアタックするっつてもね。なーに、あんた達ならさつきの三角関係の話みたいにはならないっつてば」

「そつだぜ、だから夕映……」

「違うですハルナ、亮さん」

「え……」

「私はもう選んでしまったです。のどこかに対してヒドイ裏切りをするという選択肢を……昨日、私はのどかとのデートを終えたネギ先生に相談を受けて……」

「……どうしたの？」

「ヒドイ裏切りをしたです。……私が何より恐れているのは、のどこかに嫌われてしまうことなのに……」

「……ゆえ……ゆえ、あんた考えすぎだって、人間恋すりゃ誰でも……」

「いえ、私は自分が許せません。心の底からのどこかを応援していたハズがあんな最低のことを……愚劣で！アホで！汚らしい……最悪です」

「確かにアホだがな、そんな自分のことを隠してたら将来苦労するぞ」

「それでも……こんな醜い感情など……私ごと消えてなくなっ  
てしまえばいいのに」

夕映が涙を流しながら後ずさる。……後ろに地面はない。

「オイ、コラ嬢ちゃん」

「ちよつとゆえ……」

「……バカなことは止めとけ」

「ハルナ、亮さん。……のどかにごめんと伝えてくださいです」

トンツ……

夕映が後ろに跳んだ。

「ちよ……」

しかし夕映はフックを使って滑り降りていった。

「さすが図書館探検部だなー」

「つたく、あのバカ……」

……ボチャーン……

「……今のは」

「……降りたいけど道具もないし、戻って降りるしかないよ。のどかの奴も心配だし」

「俺なら、降りられる。ハッ！」

「ちよ、亮君!?!」

魔力を手と足に籠めて壁を滑り降りる。・・・意外にスリリング。

そして下に降りきろうとしたとき、夕映とのかと・・・存在してはいけないものがいた。

「・・・ッ！のか、夕映！避ける！」

のかと夕映の前に回り込んだ瞬間、腹部を襲う衝撃。

「が・・・」

腹から槍が飛び出していた。槍は抜かれ、血が吹き出す。

「ふ・・・！」

膝をついて敵を見据える。

「・・・よう、坊主、久しぶりだな」

「ラン、サー・・・」

ランサーがいた。俺のことを知っているということは俺が行ったFateのランサーか……

「亮さん!？」

「……来るなっ!」

「……悪りいな、オレもこんなことあしたくねえんだけど……」

「知ってるさ……」

ケータイを取り出し……しばらく考える。……もし、俺が俺でなくなったら?……いや、今は……

「……モーションキャプチャー……!アヴェンジャー!」

聖杯に入り込んだ呪い……この世すべての悪。アンリマユ

「一撃で殺さなかったのが失敗だったなランサー」

「んだと?」

「因果応報ってね!偽り写し示す万象!」ヴェルグ・アヴェスター

それを発動した瞬間、ランサーから俺の傷と同じ位置から血が吹き出した。

「なに……!？」



「キャプチャー、キャンセル・・・モーションキャプチャー、シヤマル」

今の内に回復を済ませる。どうやらランサーはゲイボルグの効果は使ってなかったようで、簡単に回復が出来た。そして元に戻り、鈴音を構える。

「ほう・・・随分と雰囲気変わったじゃねえか」

傷など無いかのように振る舞うランサー。

「ラ、ランサーさん！貴方の目的は何ですか!？」

のどかが聞いて、驚愕する。

「・・・！考えてることが、でない・・・」

当たり前だ。コイツの名前はランサーじゃない。

「のどか！コイツはクー・・・ッ!」

カキヤアンツ!

真名を言おうとした瞬間、槍が迫り、それを弾く。

「く・・・」

「坊主。男なら己だけで勝負しようぜ」

「・・・左腕に魔力、右腕に気・・・合成、咸掛法」

こうなつてはしょうがない。俺は最初から本気で行く。

「行くぜ！」

俺は瞬動を使ってランサーの背後に回る。

「ハアッ！」

「なに！？」

だが流石はサーヴァント。それに驚きながらも攻撃を弾く。

「今度はこっちの番だぜ！そらそらそらそらあ！」

高速の突きが迫る。

「……ッ！」

それを弾く。あの時の俺じゃ無理だったろっけど今の俺ならギリギリ着いていける。

「やるじゃねえか坊主。今のはわりと本気でやったんだがな」

「人間は常に成長するもんだからな」

「違いねえ」

お互いの武器を構え直す。

「そらよっ」

「タアッ！」

普段より体が軽い。呪いの影響も・・・まで、俺に呪いなんてないだろ。俺は・・・守護騎士・・・でもない。オレハ・・・

「どうした坊主！動きが雑だぜ！」

メノマエノアオイオトコガイツテクル。

「亮さん！」

「・・・う・・・う・・・！」

そっだ、俺は大澤亮だ。危ない、また記憶が消えてた。

「・・・ウオオッ！！」

「なっ！？」

ランサーを吹き飛ばす。

「・・・へっ、やるじゃねえか。・・・オレも・・・ぐっ！？」

ランサーの動きが突如止まり、体が見えない糸で操られているように見える。

「貴様、何を・・・！」

ランサーが呻きながら槍を構える。

「……………坊主！その嬢ちゃん達を連れて逃げろ！」

「ランサー！？」

「早く行け！」

まさか……ゲイボルクを使うか！？……まさか于吉の奴……！

「夕映！のどか！逃げろ！」

ダメだ、間に合わない！俺はせめて力を集中して夕映達に被害が及ばないようにする。

「亮さん！？」

「……………突き穿つ（ゲイ）……………」

俺は目を閉じた。……だが、来るはずの衝撃は来ず、代わりに聞こえる声。

「……………闇夜を駆ける疾風の一撃……………」「シンボル」

ズバァッ！

「ぐっ……!?!」

「……亮!大丈夫ですか!?!」

「明命……」

ランサーは宝具をまともに喰い、倒れそうになるがランサーは何とか踏ん張る。

「……よう、久しぶりだな、アサシン」

「……ランサー殿」

「……羨ましいぜアサシン。お前にはしっかりしたマスターがいてよ」

「……明命です」

「あ?」

「ランサー殿の世界で言う真名みたいなものです」

「ほう?だが、そんな英霊聞いたことがねえんだが?」

「……そうです。私の世界には名前が複数あるのです。……記録されている人物で言うなら、私は周泰です」

「……はっ、周泰って言ったら男だろうが……ま、そんなことあどつでもいいんだがな」

ランサーが消え始める。

「アサシン……いや、明命。オレの真名は知ってんだろ？」

「はい。ケルト神話の英雄……クー・フリーン」

ランサーはフツ、と笑う。

「……おい坊主。今度は最後まで戦おうぜ……じゃあな」

ランサーが光になって消えた。俺はその場に座り込む。

「亮!？」

明命が心配そうに話しかけてくる。

「……サンキュー、助かったよ明命」

「い、いえ……本当はもう少し早く来れたのですが……」

「扉を壊すわけにもいかなかった……だろ? いいんだよ、助けに来てくれただけで」

夕映の方を見るとハルナが乱入してきてどうやら話は終わったみたいだ。

~~~~~

「……電話?……もしもし」

『亮か？咲だけど』

「……何の用だよ」

『ちよつとこつちに来てくれよ。アスナとタカミチがデートしてるぜ』

呑気だなオイ。取りあえず俺達はネギ達を置いて咲達の所に向かった。

その向かう途中、いきなり誰かが横から突っ込んできた。

「亮!？」

「……ッ!？」

繰り出された蹴り避ける。

シュッ、バシッ!

長い何か腕に絡まり引っ張られる。

「……！」

ドンッ！

拳が腹部に直撃し……吹っ飛ぶ。

「があっ……」

「あ……亮!?!」

明命が寄ってくる。そして月に照らされてその襲撃者の顔が見える。

「な……」

「え……」

驚愕。その襲撃者は……

「亮様……明命……！」

「亞、莎……」

「そんな……」

顔にびっしりと汗を浮かべた亞莎がいた……

「まさか……于吉に……」

「……はい、私は……いきなりあの男の人に連れ去られ、今、

この場にいます・・・まるで夢を見てる気分です」

「・・・」

思い出すのは操られた思春のこと。

「でも・・・もう自我も消されます・・・今だけは残った力を必死に抵抗していますが・・・」

亞莎は辛そうに肩を上下させる。

「亞莎・・・」

「明命。私、明命の幸せそうな姿を見て嬉しいな。・・・だけど、こんな形で再会したくなかったよ・・・」

「・・・私もだよ」

亞莎は後ろを向く。

「亞莎・・・」

「サヨナラ・・・二人とも」

亞莎はそのまま去っていく。

「亮・・・亞莎を助ける方法はないのですか？」

「・・・無理だと思う・・・」

「そんな！レミリアさんに頼めば・・・」

「それも難しい。于吉はレミリアや咲夜みたいに個人的に逆らう気がない奴には恩智を与えるだけで後は楽しむだけ・・・だけど思春や亞莎は他者の干渉を一切遮断するほどに操るんだ。・・・思春はバーサーカーみたいだったんだ」

俺はポケットから思春が髪を纏めるのに使っていた布を取り出す。

「・・・きつと亞莎も何かしら・・・」

「そんな・・・でも、でも」

「明命！」

「ッ!!」

「・・・こうなったら亞莎を救うには・・・この世界で存在している亞莎を殺さなくちゃいけないんだ・・・!!」

「・・・ッ」

「明命は何もしなくていい・・・汚れるのは俺で充分だ」

「ダメです!!」

「明命・・・」

「・・・私が、やります。・・・それが親友の役目だから・・・」

「……わかったよ、だけど、無理はするなよ」

「……はい」

その時、クラツと目眩がする。

「亮？」

「……そういや、最後に寝たのは随分前だったな……」

「……そう言えば……私も……眠いです……」

明命が眠いって言うのは相当だ。

「……」

「亮……先に寝ても構いませんのです……私がエヴァさんの別荘に運びますから……」

「……ああ……お願いするよ……」

そして俺はそのまま命に体を預けて眠りについた・・・

悲劇（後書き）

Fate勢

士郎

「・・・今回も終わったな」

凜

「そうね。・・・ランサー、出番があるなんて・・・」

セイバー

「・・・うらましい」

士郎

「セイバー？」

桜

「・・・そう言えば兄さんもかなり後書きに出ていますよね・・・」

ライダー

「・・・そうですね」

言峰

「現在、オーズが使用可能なメダルは」

ギルガメッシュ

「ゴオーラーカイジャー……！！！！」

士郎

「・・・なんだアレは」

イリヤ

「どうせ朝の番組の練習でしょ」

ガチャッ

蓮華

「すまない。シャオを見なかったか？」

イリヤ

「シャオは知らないわよ」

ライダー

「レンファ、どうかしたのですか？」

蓮華

「いや、少しな・・・すまない、邪魔をしたな」

ガチャ、バタン

イリヤ

「・・・出てきていいわよ、シャオ」

小蓮

「えへへ」

士郎

「ずっとイリヤの椅子の後ろにいたのか・・・」

セイバー

「気づけなかった……」

小蓮

「イリヤ、このお礼は今度するね。風香や史伽も誘って……」

イリヤ

「あと鈴々や季衣や流琉とねねも誘いましょう」

凜

「……仲睦まじいわね」

ライダー

「……」

桜

「ライダー？どうしたの？」

ライダー

「いえ……先ほどシオンとキキョウとサイに誘われたのですが……」

小蓮

「……ライダーってお酒強い？」

ライダー

「……？まあ、少しは」

小蓮

「……そう」

士郎

「……何があるんだ？」

セイバー

「……さあ、わかりませんが……」

凜

「……あ、そろそろ終わりね」

桜

「あ、私がやります。次回の真似と開閉と世界旅行」

士郎

「次回もまた見てくれ」

凜

「それじゃあ、また次回会いましょう」

慎二

「……今、戻ってき……ってもう終わり！？僕の順番は！？」

士郎

「……来るのが遅かったな慎二」

凜

「ホント、トロいのね」

黒桜

「ワカメ兄さん・・・情けない」

セイバー

「ちゃんと時間を確認してください。些細なミスが戦場では命取りです」

慎二

「う、うわあああ！絶望した！」

イリヤ&小蓮

「それはまた次回」
「」

決戦へ〜(前書き)

最早話のスピードがジェットストリームアタック並みに・・・では
ないぞ。

決戦へ」

「無理ね」

「・・・そうか」

ここはエヴァの別荘。今俺と明命はレミリアに相談していた。

「・・・」

明命は泣きそうな顔でうつ向いている。

「私達もフランを傷つけた男を倒しますか？つてあの男に言われてそれで自らの意思で決めたから強制力が弱いから私の能力でなんとかなったけど・・・」

「念には念を入れられた亞莎は解放できない・・・か」

やっぱり・・・

「・・・やるしかないのか」

「・・・ッ」

「明命、お前は戦わなくていい。・・・俺が倒す」

「そんな！亮だけに・・・」

「・・・そもそも俺達が神の頼みを聞かなきゃよかつたんだ・・・」

「何を言ってるのですか!？」

「だって俺達があの世界に行かなければ于吉も亞莎は選ばなかった
だろ?・・・俺は、天の御遣いなんかじゃなくて・・・疫病神なの
かも・・・」

パシンッ!

「あ・・・」

明命に頬を叩かれる。

「そんな・・・そんな悲しいこと言わないでください!・・・亮が
いたから・・・雪蓮様や冥琳様が死なずに済んだのです・・・!だ
から・・・だから・・・疫病神なんてことはありません!」

「明命・・・」

涙をこぼしながら明命が言う。

「・・・悪い、ちょっと最近、色々あつて弱気になつてるとみたいた。
・・・ん、もう大丈夫だ。・・・そうだな、せめて俺達の手で亞莎
を解放してやろう」

「・・・はい!」

「・・・俺と恋も亞莎の仲間なんだけどな」

「咲・・・聞いてたのか?」

「最初から最後までしつかりと。．．．水くさいぞ、親友に隠し事なんて」

「．．．亞莎も、家族」

「．．．恋の家族は何人なんだ？」

「．．．咲と、月と詠とねねと霞と蜀の皆と呉の皆と土郎と凜と桜と．．．」

「いや、いい。言わなくていい、わかったから。しかもまた華雄忘れてるし」

「．．．だんご大家族」

「は？」

「いや、なんでもない．．．」

いい感じに気分転換になったな。咲はこっちを見てニツ、と笑う。．．．アイツ．．．

「そうだ．．．俺はバカなんだからうだうだ考えるのは考えるだけ無駄だ」

俺は勢いよく椅子から立ち上がる。

「……あ、ここにいたんですか、亮さん」

「ネギ？……さて、この騒がしさは……」

「魔法関係者は皆来ています。千雨さんやハルナさんも……」

「……最近、魔法って秘密なのかどうかわからないな」

そして時間は過ぎて夜になる。

「……」

「亮」

「……咲か」

咲が俺に声をかけてくる。

「何か用か？」

「用……と言うほどでもないけど……」

咲は息を吐いて、言った。

「記憶はまだ大丈夫か？」

「……ッ!？」

俺は驚いて咲を見る。

「なんで……」

「前にFateの世界で自分が判らなくなる夢を見たっていったら？その時から怪しいとは思ってたけど、この世界に来てから疑問は確信に変わった」

「……」

「お前、今どのくらい記憶が跳んだ？」

「……朝とか一瞬記憶が消える日もある。あとは物真似の時にそのキャラの記憶に塗り潰されそうになる」

「……」

「……」

お互いに沈黙する。

「……それだけ判りゃ充分だ。じゃあな」

「え……?お、おい……」

「お前はそこで見てる恋人と話してるよ。……俺だって空気ぐらいは読めるぞ」

咲はそう言って去っていく。

「……明命」

「……はい」

明命が物陰から出てくる。

「……聞いてたのか？」

「はい……」

「……あの、さ」

「止めません」

「あ……」

「……亮のことです。『明命は俺が物真似を使うのを止めるのか？』……辺りでしょう？」

「……正解」

「ふふ……私もいつまでもからかわれたりしませんよ、“亮様”」

俺は両手を上げながら言う。

「参った参った……あのさ、もし記憶が無くなっても、俺が明命を好きなのは変わらない……それだけは覚えてくれ」

「はい」

そのまま俺達は部屋に戻った。

咲

「…………ぐっ…………！」

俺は柱に身を任せて座り込む。

ズブ…………ズブ…………

身体を黒い闇が侵蝕していく。

「あ…………があ…………ぐっ…………！」

苦しみて呻く。

「はは…………何が親友に隠し事はするな…………か」

所詮エヴァに鍛えてもらったとはいえ一度目覚めた協力的な闇は簡単には抑えられない。

「…………咲」

「…………！」

声がしてすぐ立ち上がる。

「恋……」

「……咲、具合悪いの？」

「いや……別に……」

「……恋のせい」

「え……」

「……咲が、その怖い力を最初に使ったのは恋がネギにやられた時……」

「は、はは……何を言ってるんだよ、恋。その前にも怒りで色々……」

「……違う」

「う……」

「おかしいと思ったのはあの時から、恋はそう思う」

「……はあ、亮や明命なら誤魔化せるけど、恋には誤魔化せない……か」

「……」

「……でも、しばらくは大丈夫だ。恋、万が一暴走したら……」
「……」

「……俺を倒せ。闇の力が暴走したらまともに相手できるのは恋、お前だけだ」

「……」

「だから、もしもの時は……」

「……嫌」

「恋……」

「咲が苦しむなら恋も苦しむ。咲が喜ぶなら恋も喜ぶ。……咲が死ぬなら、恋も死ぬ」

「恋……！そんな簡単に……」

死ぬなんて言うな。そう言おうと思った瞬間、

「簡単じゃない……！！」

「……ッ！」

聞いたことがない恋の怒声。

「どうして……いつも咲は他人を優先するの……？」

「……」

「恋と咲は家族って咲が言った。家族は助け合うもの……そうも聞いた」

「……」

「……一緒に肩を並べて戦うなら……苦しみも一緒に……背負いたい」

「……恋、悪かった。恋の気持ちがわかってなかった」

「……」

「そうだよな……俺達は繋がっているんだ」

仮契約カードを取り出して言う。

「……元気でねねの所に……皆の所に帰る」

「ああ、俺にとってはあの世界が家みたいなものだ……絶対に帰るぞ」

決意を決めて空を見上げた……

亮

次の日、ネギパーティーが集合する。

「みなさん！僕の話聞いてください！！」

ネギが大声を出す。

「超さんは学園祭最終日。つまり今日、大変な作戦を実行しようとしています。目的は“『魔法』の存在を全世界にバラす”こと」

ネギはどんどん言葉を繋いでいく。

「作戦の詳細はわかりませんが、もしこの目的が達せられれば、世界中が大混乱・・・少なくとも大騒ぎになってたくさんの人に迷惑がかかったり色々な問題が起こることが当然予想されます」

「・・・」

「亮？どうしましたか？」

「いや・・・何か忘れてる気がしてな・・・」

「亮もか？・・・俺もだ」

「咲も・・・？」

そうこうしている内にエヴァの別荘から出る。そしてしばらくしてから合流することにして一時解散する。

「・・・咲」

「わかってる・・・これは学園祭最終日の景色じゃない」

まるでいつもの登校風景だった。・・・思い出した！

「そっだ・・・超の畏があっただ・・・クソッ」

「・・・見つけたよ」

「高畑先生・・・」

「タカミチ・・・」

「君達にも来てもらおうよ。いいね？」

そのまま高畑先生に連れられて、取り調べ室のような場所に入れられた。

「・・・まず、何があったかと言つと・・・」

「言わなくてもわかります。・・・魔法使いは超に負けた」

「その通りだ・・・君達に説明はいらなかな。・・・さっきネギ君にも話を聞いたよ。タイムマシン・・・だつたかな」

「・・・信じられないと思いますけどね」

「・・・いや、信じるよ。今、君の仲間が助けに来るだろう」

高畑先生が席を立つ。

「タカミチ、いいのか？」

「どのみち力ずくでも元の時間に戻るんだろう？・・・寝不足の人間の警備が甘くなる・・・僕でもそれくらいのミスはするさ」

「・・・くく、いいねタカミチ」

そのまま高畑先生が出ていく。

「・・・咲、持ち物は？」

「ちよつと待て・・・開け」

空間を開いて持ち物を取り出す。

「あるのは干将莫耶、キープレード、弓矢にグロッグに・・・その他色々」

「仮契約カードは取られちゃったしな」

「・・・取りあえず、開け」

咲は扉を開く。俺達は外に出る。

「・・・ここには置いてないのか・・・」

よく考えたら俺は仮契約カードどころか鈴音もケータイも取られている。・・・不味いな・・・

「・・・取りあえずネギと合流しよう」

「・・・そうだな。行こうぜ、亮」

そして走り出してしばらく、向こうからネギ達が走ってくる。

「あ・・・亮さーん！咲さーん！受け取ってくださいーい！」

ネギはそう言って仮契約カードと鈴音とケータイを投げる。

「よっ・・・とー！」

鈴音をキャッチしてその勢いで腰に固定してそのまま両手で仮契約カードとケータイをキャッチする。

「よし……明命は!?!」

「明命さんと恋さんは竜を抑えてもらっています!亮さん、咲さん、二人を!」

「あ、ああ!」

(明命!召喚するぞ!)

(……亮!わかりました!)

そして明命と恋を召喚する。

「……亮!……よかったです……」

「……咲、無事?」

「ああ、大丈夫だ。行くぞ、恋!」

そして走り出す。カモが言うにはカシオペアを動かすには世界樹の力が必要らしい。今は一週間後。だが、まだ根本には魔力が残っている可能性があることがわかり、そこから元の時間に戻れる……らしい。刹那とも合流して更に走る。……そして、

「ななな、何じゃこりゃあああ〜っ!?!?」

「何だよコレ!何でこんな巨大遺跡が学園の地下にあんだよ!?!?」

「知らないわよっ!」

かなり広い空間に出た。

「みんなっ、あそこだ!あの中心部!」

「・・・!?竜が来たぞ!」

後ろから迫ってくる竜。

「……宝具も使ったのに……」

「堅いですね」

「まてや、宝具喰らってあんなピンシヤンしてんの？」

「……着いた！ネギ！」

「ダメです！まだ楓さんが……」

「拙者ならここに」

楓が到着する。だけどネギはカシオペアを起動させない。

「ネギ！言ったたる！？どんな選択をしてもフォローしてやるって
「！」

「……みんな掴まってください！！いきます！！」

そして……かなりの距離を跳んだのがわかった……

そして・・・転移が終わった瞬間、かなりの高さだった。

「うわあああっ！？」

「な、なな、何で空の上なのーっ！？」

「知るかーっ！」

「くっ・・・」

「刹那、任せる！」

咲がキープレードを構える。

「魔力最大集中・・・エアロガア！」

風が撒き上がり、みんなは無事に着地する・・・が、

ドサツ・・・

「ネギ先生!？」

「ちよつとネギ!？」

「ネギせんせい!？」

倒れたネギを運んで俺達は作戦会議をすることに決めた・・・

決戦へ〜（後書き）

恋姫蜀勢〜

桃香

「・・・終わった〜」

愛紗

「あの・・・桃香様・・・鈴々の姿が見えないのですが・・・」

一刀

「鈴々はイリヤ達とどこかに行ったよ」

朱里

「はわわ・・・このあとどうなるんでしょうか・・・」

雛里

「あわわ・・・」

翠

「咲の奴が簡単に負けるわけねーだろ」

焰耶

「その通りだ。お館より骨があるんだ。簡単に闇に屈したりなどしない！」

蒲公英

「あつれえ〜？なんで二人ともそんなにムキになってるのかな〜？」

翠

「べ、別に大した意味はねーよ！」

星

「ふ．．．確かに咲殿はやらねはしないだろうな．．．おや？白蓮殿？」

白蓮

「．．．私さ、名前とかは出てるのに本編にはまったく出てないんだぞ．．．？いくら普通普通言われても普通は少し出れるんじゃないのか．．．？」

全員

「．．．」

白蓮

「同じ地味キャラで仲間と思っていた華雄まで結構出番があるしさ．．．」

麗羽

「おーっほっほ！アーチャーさん、中々いいお茶ですわね！」

アーチャー

「お誉めに頂き光栄だ。君みたいな美人に飲まれたならお茶も嬉し
いだろう」

麗羽

「な．．．！？と、当然ですわ！おーっほっほ！」

猪々子

「・・・スゲー、アーチャーのアニキ」

斗詩

「麗羽様を手懐けてる・・・」

アーチャー

「なに、こう言ったタイプの女性は経験済みでね、どついう扱いをすればいいのか心得ている」

白蓮

「そつだよ・・・あの麗羽ですらツンデレと言う特徴があるんだ・・・私は・・・普通すぎる・・・」

アーチャー

「公孫贖、そこまで気にすることではない。普通なら普通なりに頑張れば良いのだ。・・・諦めなければ誰かしら君の良さに気づいてくれるさ」

白蓮

「アーチャー・・・ありがとう!」

一刀

「・・・」

桃香

「ご主人様もあれくらい格好良ければな・・・」

一刀

「・・・次回の真似と開閉と世界旅行」

愛紗

「次回もまた見てください」

一刀

「・・・ところで紫苑達は？」

愛紗

「・・・ライダー殿やタカミチ殿を誘って酒盛りをしています・・・」

「

一刀

「ああ・・・そう・・・」

アーチャー

「ライダー・・・私の中のイメージが崩れていくぞ・・・」

戦闘開始（前書き）

結構早く投稿出来ました。ではどうぞ。

戦闘開始

ネギを図書室に運んでからしばらく経ち、カモとネギの案により、学園の皆にも手伝わってもらうことにした。そして俺や咲達は学園長に呼ばれた。

「全世界に対する強制認識魔法・・・そんなことが可能なのか・・・」

「あなどっていたな・・・学園長、この情報はどこから？」

「情報源はいつでもよろしい。なんとしてもこの計画は阻止せねばならん」

そのまま魔法先生、及びに魔法生徒は委員長協力の元で開催されるイベントのヒーローユニットとして動くことになった。そして・・・

『・・・さあ、魔法使いの皆さん！準備はいいですか！？』

朝倉がゲームの始まりを告げる。

『ゲーム、^{スタート}開始！！』

始まる戦い。生徒は学園長が用意した魔法具で超のロボット兵器と戦っている。

「・・・よし、出番かな」

「亮、私は違うエリアへ行きます。・・・亞莎を見つけたら・・・」

「ああ、連絡してくれ」

俺は高台から飛び降りて囲まれている裕奈達を援護する。

「とりゃああっ!」

ドガァァンッ!

咲から受け取った干将莫耶でロボ田中を切り裂く。

「うえ!?!亮君!?!」

「よし」

「亮さんもヒーローユニットですか?」

「その通りだ史伽。しばらくはここで援護してやるよ」

「むゝ!ボク達の獲物をとるなよー!」

「それはお前らが俺より早く倒せればいいんだよ。・・・っと」

よそ見している内に沢山田中がやってくる。

「さあて・・・やるか・・・」

干将莫耶を構え直す。

「いらっしやいませええええ!!!!」

田中に突っ込んで行く……

咲

「……こりゃ、中々骨が折れるね……」

ボードに乗って空から弓矢で狙撃をする。

「……燃え上がれ！」

矢に火の属性を追加して放つ。

ズガアアンツ！

「……ふう」

その時、反射的に真後ろに矢を放つ。すると

ガギンツ

銃弾と当たり、その場に謎の空間が出来る。

「……ッ！真名か！」

直ぐに下に降りて走る。止まっていたら格好の獲物だ。

「……くそ、まだなのかネギ……」

亮

「せいやっ!」

バキインツ!

大分数が少なくなってきたな・・・そう思った瞬間、ガトリングを
持った田中が現れる。

「アレは・・・!」

弾を避ける。しかし、避けきれなかった亜子と史伽、それに多数の
生徒が謎の空間に消える。その時、

『フフハハハハ!!! 苦戦しているようネ! 魔法使いの諸君!』

「超……!」

『……やられても復活アリのルールは有能な君達には少々優しすぎたようだ。……そこで新ルールを用意したヨ』

ホログラムの巨大超は銃弾を取り出す。

『……この銃弾に当たると“即失格”おまけに工学部のヒミツの新技术で当たった瞬間に負け犬部屋へ強制搬送。ゲームが終わるまでグッスリ寝てもらうこととした』

そして更に超はあり得ない発言をした。

『……こちらもヒーローユニットに対抗するダークユニットを用意することにした。……このダークユニットには肉体的にもダメージがいく恐れがあるネ。生半可な気持ちでは挑まない方が得策ヨ』

「な……っ!?!」

そんな話、聞いたことがない。

「お、アレかな?」

生徒の声が聞こえてそっちに振り向く。

「……消え去るがいい」

その少女は足下に魔方陣を展開する。

「な・・・」

「消え去れ・・・エクスカリバアアア！！」

ズガアアアアッ！

『う、うわあああ！？』

沢山の生徒が捲き込まれる。

「ッ！モーシヨンキャプチャー！」

要はキャラを真似しなきゃいいんだ！

「風香！お前はこのかを呼んでこい！アキラ！これを受けとれ！」

アキラに笛のようなモノを渡す。

「？コレは・・・？」

「それを吹いて額に当てろ！」

アキラは言われた通りに笛を吹いて額に近づける。するとアキラは風に包まれた。・・・そして・・・

「え・・・」

「ええ！？アキラ！？」

そこにいたのは仮面ライダー・・・いや、鬼の天鬼だ。アキラ・・・よかつた。無事に变身できたみたいだ。

「戦い方は頭に流れてくるはずだ！頼むぞアキラ！」

「う、うん・・・わかった」

この場はアキラに任せて俺は別の場所の援護に向かう。

「……待てっ!」

空から青い髪の少女が降りてくる。

「く……偽フェイトか……」

「偽フェイトって言うなあ!結構気にしてるんだぞ!?!」

確か……マテリアルF……だっけ。

「……まあいい、お前を倒して僕の武器の山葵になってもらう!」

「山葵じゃなくて錆な、サビ」

すると顔を真っ赤にして。

「う、うるさい！そうとも言うんだ！」

「そうとしか言わねーよ、バカ」

「バカって言う方がバカなんだこのバカーーッ！」

その時、恋が来る。

「・・・恋？」

「・・・ここは恋に任せて先に行って」

「咲は？」

「・・・真名を足止めしてる」

そうか・・・

「・・・わかった。頼むぞ、恋」

「・・・」
「コクッ」

マテリアルは恋に任せて更に走り出す。

「・・・明命！」

「亮・・・！」

明命と合流する。その時、強い殺気に気づき、ゆっくりと振り返る。

「亞、莎・・・？」

亞莎と断言できなかったのは見た目があまりにも変貌していたから。・・・服はリリなのナンバースみtainなピッタリとした服。髪は下ろしてあり、髪の半分が白髪になっている。手甲、人解れんげを装備していて、よくみると腕や太股に暗器を身に付けている。

「亮様・・・明命・・・」

殺気が一際強くなる。瞳も紅く、単色になっている。唯一亞莎と分かるものは顔立ちとまだ変わりきってない髪の色と片眼鏡、それと何となく気配も残っていた。

「・・・いきます」

亞莎が一瞬で踏み込んでくる。

「く・・・」

「ハアッ！」

一撃。その一撃で腕が痺れ、

「ヤアツ！」

カキヤアンツ！

一撃目で干将莫耶を飛ばされ、

「タアツ！」

ドゴオオンツ！

「がふっ……！？」

壁に叩きつけられる。

「亮！？……あ、」

「ウアアア！」

ドガアアンツ！

「キヤアアツ！？」

明命も壁に叩きつけられた。

「く……亞莎があそこまで強いなんて……」

「今の亞莎は……普段の謙虚な性格じゃないから……」

「普段出せない力が出せてるわけか……！」

俺達は立ち上がる。

「……かつた」

「……？」

「私も……一緒に行きたかったっ！」

「亞莎……」

「でも……亮様には明命がいる……あ、そうだ……」

亞莎は不気味なほどの笑みを浮かべる。

「……明命を殺しちゃえばいいんだ」

「ッ！？明命、後ろだ！」

「くっ！？」

またもや一瞬で背後に回り込まれ、俺達は回し蹴りで吹き飛ばされる。

「くそ、黒桜ならぬ黒亞莎ってか……明命！」

腰に固定されている鈴音を引き抜く。

「はい！・・・蓮華様、私に力を・・・来れ（アデアット）！」

明命はカードを剣に変化させる。

「・・・呉王の誇り（ナンカイハオウ）」

南海霸王と魂切を構える明命。

「ヤアアアツ！」

亞莎は突撃してくる。

「この・・・」

「えいつ！」

繰り出した攻撃を全て亞莎は弾く。

「な・・・」

「たあああつ！」

ガゴンツ！

こめかみに拳を叩き込まれる。

「あ・・・ぐ・・・」

フラフラしてその場に倒れこんでしまう。

「亮!？」

「ふふ・・・亮様はそこで見ててください・・・明命を殺した後、ゆっくりと楽しみましょう・・・」

「亞莎・・・」

ゾクツとする。これがあの亞莎・・・？

「亞莎・・・どうして・・・」

「・・・いつも亮様と一緒にいれる明命にはわからないよ!・・・明命に残された私達の気持ちがある!?あの思春さんでさえ仕事中に上の空になることだってある。蓮華様も最近じゃ食事もなくに食べない・・・私も、ごま団子のお店を見る度に亮様を思い出す・・・!」

「・・・」

「小蓮様は部屋でいつも泣いていた!祭様もお酒をあまり飲まなくなつた!穩様だつて本を全然読まなくなつた!孫策様だつて・・・冥琳様だつて・・・」

「・・・それは言い訳だよ、亞莎」

「な・・・」

「それは私が亮についていなくてもその悲しんだ皆に私が入るだ

け・・・亞莎も一緒に来ればよかったんだよ」

「う、うるさい！黙れえ！」

「黙らないよ。亞莎、絶対に助けてみせる。それが親友だから」

「明命なんか・・・親友じゃない！敵だ！」

「じゃあ何で今、真名を呼んでも怒らないの？それはまだ亞莎がどこかで私を親友だと思っていていてくれるからでしょ？」

「ち、違う違う違う！適当なことを言うなあ！」

「・・・亞莎、いくよ」

今度は明命が攻める。亞莎の行動を全て避け、亞莎を蹴り飛ばした。

「あう・・・」

明命は更に追撃する。亞莎に反撃させる余裕すら与えない。

「グ、アアアッ！？」

遂に剣が亞莎に届いた。亞莎からは鮮血が舞う。

「く・・・親友なんて言っておいて・・・傷つけてるじゃないかあ・・・！」

「甘やかすのが親友なの？時にはケンカをするのも当たり前だと思
うよ」

「うあああ!」

苦し紛れに放つ拳は空を切る。

「当たらないよ」

「う、うあああ!」

やけくそになったのか暗器を飛ばす亞莎。

「そんな考えなしで……」

明命は軽々避ける……が、見えた。暗器に糸がくくりつけてあった。

「明命! 避ける!」

「え……アアアッ!？」

ズシャッ!

脇腹や腕や足を切り裂く暗器。

「ふ、ふふはは……どうしたの明命? その程度で終わり!？」

最早亞莎とは思えない言葉遣いを使いながらもまだ亞莎の優しさが残っていることがわかる。……なぜなら、

「亞莎……どうして外したの?」

「な、何を……」

「今の、その気になれば首を切り裂けたはず。……なのにどうして腕や足を狙ったの？」

「そ、そんなの、動けないようにするために……」

「だから私を殺すって断言してるのにどうしてわざわざ動きを奪おうとしたの？……亞莎なら、最も効果的な戦い方を使うよ」

「だ……黙れ！ だったら殺してあげるよ！」

亞莎は人解に力を込める。

「……」

明命は魂切を捨て、南海霸王を構える。

「……明命えええつ！！」

「……亞莎えええつ！！」

ガアアアアンツ！！

「・・・亞莎・・・」

「・・・明命、亮様・・・」

服装や気配がいつもの亞莎に戻る。

「なんで・・・こんなことしたんだろう・・・」

「亞莎・・・亞莎・・・！」

明命が泣きながら亞莎に抱きつく。

「・・・明命、ありがとう・・・私、亮様や明命を殺さなくてよかった・・・」

「・・・なあ、本当に皆は亞莎が言った通りなのか？」

「はい・・・皆、どことなく無気力なんです・・・」

「・・・亮、自分のせいだと思わないでほしいのですよ」

「わかってるさ……」

「亮様……」

亞莎の体が光に包まれる。

「亞莎！」

「これ……を……」

亞莎は人解を差し出す。

「せめて……武器だけでも、亮様と一緒に……」

「……ああ、大切にに使わせてもらうよ」

亞莎から人解を受け取る。

「……これで……もう心残りはない……です……」

「亞莎……！」

「明命……私達……親友……だよ……？」

「うん……！うん……！いつまでも、ずっと親友だよ……」

「亞莎、皆に伝えてくれ……必ず帰るって」

亞莎は最後に微笑んで、

『・・・はい、わかりました・・・』

方眼鏡を残して亞莎は消えた。俺も堪らず涙を流す。

「・・・」

だから気づけなかった。背後に巨大な妖怪が迫っていたことに。

「・・・ッ！しま・・・」

ダンッ！ダンッ！

「・・・？」

妖怪に何かが炸裂する。

「二人とも、大丈夫？」

「アキラ！？」

「アキラさん！」

アキラは再び武器を構える。

「音撃射、疾風一閃！」

音撃管を吹き鳴らし、妖怪を爆散させる。

「すっげえ・・・」

「アキラさんって一般人……ですよね？」

「……大丈夫だね。何か嫌な予感がしたから……」

「助かったよ、サンキュー」

「裕奈さん達は大丈夫なのですか？」

「大丈夫だよ。そう簡単には負けないから。……それにレミリアさんたちも来てくれた」

「そうなのか……あ、明命！」

モニターを見ると超の横に于吉がいた。……アイツが……アイツが亞莎を……！

「……行くぞ」

「はい！」

亞莎の眼鏡を明命が拾って、俺は人解を装備する。……于吉、勝負だ！！

戦闘開始（後書き）

恋姫董卓軍

月

「皆さんお久し振りです」

詠

「まったく、アイツはボク達のことを忘れてんじゃないでしょうね」

音々音

「恋殿が羨ましいのです・・・」

華雄

「咲・・・私のことを覚えていてくれたのだな・・・！」

霞

「・・・ウチ、序盤の出番から一度もでてへんのやけど・・・」

詠

「・・・まあ、気を落とすんじゃないわよ？」

月

「今回は次の世界の希望を取るみたいだよ？詠ちゃん」

詠

「え〜と・・・候補は・・・」

世界崩壊編（元ネタはディケイドのライダー大戦）

Angel Beats!編

東方編

ネギま魔法世界編

霞

「なるほどな……ウチの出番もほしいんやけどな……」

音々音

「ねねもです……」

華雄

「なら世界崩壊編なら出れるんじゃないのか？」

霞

「華雄ちゃんは浅はかやな……そんなんキャラが多数でてウチらの出番が消えるやん」

月

「私は……皆が楽しめればどこでもいいかな……」

詠

「月……そんないつも他人優先じゃダメだと思っわよ……」

華雄

「ふ、いいではないか賈馱よ。それが主の良いところなのだからな」

詠

「そうだけど……」

音々音

「……やっぱりねねは恋殿の活躍が見ればそれでいいのです！」

霞

「……ウチはなんと言われようと出番はほしいんやけど……」

華雄

「それは作者の気分次第だな……では、今回はここまでにしてお

こう」

月

「次回の真似と開閉と世界旅行」

詠

「絶対に次回も見なさいよ！」

音々音

「それではまた会つのです！」

決着へく異変く（前書き）

亮

「久々だー」

咲

「大分出番が薄いな、俺。・・・俺も主役なんだけどな」

恋

「・・・どんな扱いでも咲は咲」

明命

「そうなのです！・・・まだ出番があるほうがマシだと思います・・・この間呉の部屋に行ってみましたか・・・凄かったのです」

亮

「あはは・・・しかし亞莎の黒化は驚いたな」

黒亞莎

「・・・」

亮

「そうそうこんな感じ・・・って、ホワアアアツ!？」

亞莎

「あ・・・すいません！着替えないで来ちゃいました」

亮

「ビックリするだろー!?!ただでさえあの本編の一撃でトラウマに

なっ たわ！」

咲

「ヤンデレと化したからな。見てて面白い」

亮

「いや、さ……ヤンデレって間近でやられるとかなり怖いんだよ……？」

明命

「……確かに」

恋

「亞莎……かなり楽しそうだった」

亞莎

「ええっ！？そ、そんなことはありませんよ！私がそんな……」

亮

「じゃあ前回の話を見てみるよ」

……鑑賞中……

亞莎

「……わ、私……こんな怖い顔を……」

亮

「あの明命でさえ本編終わったあと顔が真っ青になってたからな」

亞莎

「そ、それじゃあ・・・前回から皆が私から目を逸らすのは・・・」

四人

「・・・」

亞莎

「そこで四人揃って目を逸らさないでください!？」

咲

「だって・・・ねえ？」

亮

「だよなあ・・・」

明命

「・・・ごめん亞莎。フオーロー出来ないよ・・・」

恋

「・・・無理」

亞莎

「う、うう・・・」

亮

「と、取りあえず着替えてこいよ。そしてFateの部屋に行って桜に聞いてこい・・・色々とな」

亞莎

「・・・はい」

咲

「えー、ではかなり本編が混乱してきましたが、どうなるかはまた次回」

亮

「それでは次回の真似と開閉と世界旅行」

恋

「・・・次回も見る」

咲

「それではまた次回会いましょう」

明命

「ほら、亞莎。一緒に行こう?」

亞莎

「うん・・・グスッ」

決着へく異変く

走る。身体中に力がみなぎる。

「亮！」

「・・・咲」

咲と恋も合流してきた。

「・・・亞莎は？」

「・・・私が倒しました」

「・・・明命、気を落とさない」

「大丈夫です。・・・今は、于吉を倒すことを優先します」

明命の目に悲しみはあれど迷いはなかった。

「・・・ほう。親友殺しにしては随分と簡単に割り切りましたね」

「」「」「于吉・・・！」「」「」

俺達は一斉に武器を構える。

「よくも、よくも亞莎を・・・」

「おかしいことを言う。私は呂蒙の本音を引き出したただけですよ？」

「ふざけんな・・・結局亞莎を呼び出したのはお前だろう！」

「・・・いけませんねえ、殺した責任を私に擦り付けられても」

「「・・・ッ!」」

「亮、明命。于吉の野郎の言葉に耳を貸すな」

「・・・二人とも、落ち着いて」

「・・・はい」

「わかってる・・・！」

今にも于吉を消し去りたい衝動に襲われるが、ソレを堪える。

「・・・まあ、俺もそろそろ理性が消し飛ぶかもな」

咲から尋常じゃない闇が溢れ出している。

「ふむ・・・流石に四人は辛いですね。ご協力してもらいましょう」

于吉が指を鳴らすと空間から・・・

「・・・え？」

モンハンやゴッドイーター等の巨大な敵が沢山出てきた。

「あ、はは……これはデカすぎないか？」

「……実際に見るとここまでなのか……」

「……！」

その時、後ろから誰かがやってくる。

「アキラ……」

「私達もいるよー！」

「ボクもー！」

「裕奈！？風香！？」

「……おやおや、随分と元気な方達だ」

「……これもゲームの一種？」

「そんなもんだと思ってくれ」

「それじゃあ……行くぜ！」

大乱戦が始まった……

「ハアッ！」

グオオオオオオツ！

威掛法の出力を高めて敵を粉碎する。

「鬼爪！ヤアッ！」

「敵を撃て（ヤクレー・トゥル）！」

アキラ達もかなり敵を倒していた。

「——戦場を駆ける（ハウテン）——」

「ま、待て恋！こんなところで宝具を使つな！」

咲が恋を止める。・・・確かにここで宝具が使われたら学園が消し

飛ぶな。

「さ、流石に数が多い……」

「風香！キツイなら下がってる！」

「なにをーっ！？まだまだ大丈夫だよ！」

……と言いつつも変身しているアキラはともかく裕奈と風香は顔に疲労の色が浮かんでいた。

グオオオオオツ！

「……ッ！ブレス……！」

「任せる！魔力最大集中！ブリザガ！」

火炎弾と氷が激突する。

「……く、このままじゃ……」

その時、裕奈を狙ってブレスが飛ぶ。

「裕……ッ！」

「危ない！」

アキラが裕奈の前に立ち……直撃する。

「アキラア!!」

アキラは崩れ落ちて変身が解除される。

「え……アキ……ラ……?」

「裕奈! ボーツとするな! 直ぐにアキラを連れて風香と下がれ!」

ケータイを拾いながら、咲に回復魔法を使ってもらった。

「逃がしませんよ」

迫る敵。まずい……そう思った時、空から大量の弾幕が降り注いだ。

「……随分と苦戦しているじゃない」

「レミリアに咲夜!？」

「なに? 何故貴女達がいるのですか?」

「答える義理はありませんわ」

「……今だ!」

「今回はお前らに譲ってやる! 行け、亮! 明命!」

「于吉ううう!!」

拳に力を込める。

「キャプチャーコンプリート！亞莎！」

力を貸してくれ、亞莎……！

「ウオオオオツ……！」

拳のラツシュ、于吉は血を吐きながら後ろに下がる。

「逃しません！……闇夜を駆ける疾風の一撃^{コンセツ}……！」

明命の一撃で于吉は真つ二つになる。

「ぐあ……！……おのれ……またしても……！」

于吉はそのまま消えた。同時に于吉が呼び出したモノも消えていく。

「亞莎……やったよ……」

ピシッ

まるで大澤亮と言う存在にヒビが入ったような感じがする。

「亮……」

明命が涙を流す。

「おかしいのです……！涙が……涙が止まらない……」
俺も泣きそうになる。

「あの、さ……空気読めてないと思うけど、まだネギは戦っているんだけど……」

咲がバツが悪そうに声をかけてきた。

「いや、その通りだな。……ネギは……」

「もうじき終わるわ。私達もその時に幻想郷に帰るつもりよ」

「？……紫が来たのか？」

「何となくよ。……そうね。最後はエヴァに挨拶していくわ」

「……お嬢様、私は茶々丸に別れを……」

「いいわよ。行ってきなさい」

「……ありがとうございます」

そして去ろうとするレミリアが一言。

「亮、咲。幻想郷に来るなら紅魔館に来なさい」

「いや・・・俺、結構行きにくいんだけど・・・」

二人倒してるし。

「どうせ美鈴は許すだろうし、パチエは興味がなくて終わるわ」

「・・・」

それはそれでかなしいが。そしてレミリアは去っていく。空を見ると決着は今つきそうだった・・・

上空

向かい合つはネギと超。

「……一つだけ……教えてください。このためだけにこの時代に
来たと言いました。これが全てだと」

超は黙つて聞いている。

「では、くーふえさんや葉加瀬さん……3 Aの皆と過ごしたこの2年間は……超さんにとって何だったんですか？」

「クラスの……みんな……フ、そうネ。それが私の唯一の計算違い。驚いたことにこの2年間は……」

超は少し溜めてから言った。

「とても楽しい2年間だよ。だが……それも私にとっては儚い夢のようなモノ……」

一瞬微笑みで顔が緩んだ超だが、すぐに顔を引き締める。

「……おしゃべりは終わりネ」

「ラスト・テイル・マイ・マジック・スキル・マジステル！契約に従い（ト・シユンボライオン）我に従え炎の霸王（デИАーコネー
ト・モイ・ホ・テユラネ・フロゴス）！！」

「ラス・テル・マ・スキル・マジステル！来れウエニアント・スレギル・ウエレス・フルグリエンテース雷精風の精！！」

「来れ浄化の炎（エビゲネーテートー・フロクス・カタルセオース）」

燃え盛る（フロギネー）ロンファイア 大剣！ほとばしれよ（レウサントーン）ソ
ドムを（ビュール・カイ）焼きし（テイオン）！」

「雷を纏いて（クム・フルグラテイオーネ）吹きすさべ（フレット・
テンペスターズ）アウストリーナ 南洋の風！」

ネギの方が威力は低いが詠唱は早い。

「あああッ！」

「火と硫黄罪ありし者を（ハマルトートウス）死の塵に（エイス・
クーン・タナトウ）」

「雷の暴風！ヨウイス・テンペスターズ・フルケリエンス！」

「燃える天空！ウーラニア・フロゴシス！！！」

ドオッ！！

「くうあああッ！」

「ああッ！」

互いの思いをぶつける。それにケリをつけたのは……………

ペキンッ！

…………先に超が限界に達し、雷の暴風をまともに喰らった……………

.

亮

「あ……！」

落ちる超をネギが掴む。しかし、どうやら強制認識魔法の詠唱は完了したらしい。空に光が集まる。

「……でも」

コレは覚えている。大丈夫だ。ネギが超に打ち勝った時点で勝敗は決した。

「……！ネギが落ちる」

恋が声を出す。……って、

「おいおい！咲！」

「無理だ！距離がありすぎる！」

二人とも落ちる……。そう思った時、五月が店を飛ばして二人をキヤッチした。……。なぜ店が飛んだかは追求しないでおこう。

『・・・さあ！！皆さん！！敵火星ロボ軍団はあらかた壊滅！！
巨大ロボも皆さんの活躍で消滅していきます！！・・・さらに・・・
・ラスボスとのガチバトルも子供先生が勝利を収めました・・・と
いうことは？』

空に溜まった光が飛び散る。

『我々学園防衛魔法騎士団の完全勝利です!!!!』

これで、この話は終わりを告げた……

そしてその後夜祭、ネギの所に向かう。

「ネギーーツ！」

その時、体に異変が起きた。

「は……？」

足下から消えていつている。

「な……！まだネギまの物語は終わって……」

「亮さん！？」

ネギが走ってくる。……が、それよりも早く俺達の存在は消えた。
……

破滅（前書き）

急展開過ぎますかね・・・ではございませう。

破滅

「うっ……」

目を開ける。そこは遙か先まで広がる砂漠だった。

「ここは……」

「おーい！ 亮ーッ！」

「咲！」

離れた位置から咲が走ってくる。

「咲……これは一体……」

「わからない……そっだ、恋達は？」

その言葉を聞いて辺りを見渡す。

「……そう言えないな……」

仮契約カードを取り出す。

（明命！ 聞こえるか、明命！）

しかし応答はない。どれくらい時間が経ったのか調べようとしたが、ケータイの時計は機能を停止していた。

「く……ここはどこの世界なんだ？」

「いや……それがよくわからないんだよ」

「そうか……取りあえず、歩こう。止まってもどこにもならない」

そして歩いていたら、おかしな光景を目にして走り出す。

「なんで……」

そこは戦闘が行われていた……だが、何かがおかしい。

「行きますよ！アスナさん！」

「うん！刹那さん！」

「気をつけてセイバー！」

「わかっていきます、凜は下がって」

そしてその更に先には。

「戦いの歌！」

「投影、開始！」

ネギと士郎が向かい合っていた。

「なんで……アイツらが……」

「避けないでよ、高いんだから！」

「な……うわあああ！？」

「刹那さん！？」

遠坂の一撃が刹那を襲う。そして攻撃を喰らった刹那は光になって消えた。

「こん、のおおおー！」

「これで・・・」

セイバーが剣を構える。

「—————約束された勝利の剣—————エクスカリバー!!!!」

セイバーの宝具はアスナにまっすぐに向かっていく。

「ハアッ！」

アスナは剣を一振り。エクスカリバーを消し去った。

「なに・・・!?!」

セイバーは宝具の反動でまともに動けない。

「セイバー!!」

アスナの一撃はセイバーを庇った遠坂に直撃する。

「キャアアアッ!?!」

「凜ッ!?!」

遠坂も光になって消える。

「遠坂ッ!・・・セイバー、退くぞ!!」

「く・・・」

士郎とセイバーはその場から去っていく。

そして俺達は刹那の“死んだ”仮契約カードを見詰めているネギに話しかける。

「ネギ……」

「……ツ！亮さん……」

「アンタ達……今まで何処に……」

「ネギ。この世界はなんなんだ？どうして士郎達と戦って……」

「……僕達の世界を守るためです」

「それは一体……」

「僕達……本当は他にもいたんですが……取りあえず、色々な人が于吉と左慈と言う人にこの世界に呼び出され、勝ち残った世界を復活させると言われて……」

「最初は本屋ちゃんとかもいたんだけど・・・」

ネギはアスナ以外の“死んだ”仮契約カードを取り出す。

「みんな・・・消えてしまいました」

「・・・」

「ですが・・・この戦いに生き残れば皆が蘇ります！亮さん！咲さん！力を貸してください！」

「ネギ・・・」

俺は迷うが咲が断言する。

「断る」

「ぎゅぎゅって・・・」

「これは于吉の罠だ。アイツは外史を消そうとしている。・・・自ら潰しあってたらアイツらの思うつぼだ」

「・・・」

「行くつぜ、亮。恋達を探そう」

「あ、ああ・・・悪いな、ネギ」

俺達はその場から歩いていった・・・

そして見慣れた家にたどり着く。

「……土郎」

「二人とも……！来てたのか……」

「……お久しぶりです。亮、咲」

「……事はネギから聞いたよ。……残ったのはお前らだけか？」

「……そうだ。遠坂も桜もライダーも、あのアーチャーやランサーでさえやられた。……残っているのは俺とセイバーだけだ」

「……」

「……亮、咲、私たちに協力してもらえませんか？」

「……そうだ。この戦いに勝てればみんなは復活する……頼む」

「……悪い」

「どうして……まさか、あの少年の味方をする……?」

「違うけど……ちょっとまってろ」

俺達はある所に向かった……

?????

そこで戦うは三人と一人。

「ヤアアアツ！」

カキヤアンツ!

「しま……」

「思春さん!」

一撃から思春を庇う亞莎。

ズシヤツ!

「あ……」

亞莎は光になって消えた。

「亞莎！……あ……」

「蓮華様！」

同じように蓮華を庇い、思春も消える。そして……

「これで……」

「……ッ！」

「止めてくださいお二人とも！」

「明命ちゃん!？」

「……今だ！」

蓮華は剣を振り抜き……アスナを切り裂いた。

「ネギ……ゴメン……」

アスナも光りになって消える。

「蓮華様……なぜ……」

「アイツは……思春と亞莎を……！」

「ですが、何故話し合わないのですか？どうして争うのですか？」

「・・・明命。知ったような口で話さないで」

「ですが・・・」

「私が話すなど言っているんだ・・・幼平」

「蓮華様・・・」

「・・・明命がいるということは亮もいるのでしょうか？案内して、
明命」

「それが・・・今は恋さんが探していますが・・・どこにいるのか」

「・・・」

「そう・・・」

亮

「い、いきなり何なんですか？」

ネギを連れて士郎の家に入る。

「……ッ！」

その途端、場に緊張が走る。

「あー、そう殺気立つな。お前らに話がある」

俺は三人に話しかける。

「……話とは他でもない、協力しあって于吉を倒そう。じゃなきゃこのまま泥沼の戦いを続けるだけだ」

「……無理だ」

「士郎……！」

「こっちは遠坂やみんながやられたんだ。正直子供とはいえ協力しにくい」

「……私も士郎と同意見です」

「僕だって……刹那さんやのどかさん……皆を消されたんです。……協力する気はありません」

「そんな意地張ってる場合か！世界が消えるかもしれないんだぞ！？」

「……亮さんは自分の世界が無いからそう言っているんですよ」

「な……」

「ネギ……!!」

「そうだ。……被害が俺個人で済むならその可能性にすがりたい。……けどな、下手な選択で世界を……みんなを傷つけるのなら……」

「そん、な……」

俺はうなだれる。すると咲が、

「……あーあ、立派なことだ」

「咲……?」

「ホント、キレイな正義の味方だな、士郎。まるでアーチャーみたいだ」

「……ッ！それは……」

「ネギもネギだ。立派な魔法使い（マギステル・マギ）？そんなのに縛られてて楽しいか？あん？」

「……」

「第一お前ら……」

「咲……もう止める」

「何でだよ亮」

「いいんだよ！・・・俺達だけでケリをつける。・・・行くぞ」

俺はそのまま歩いていく。

そして広い場所に出た。その時、

「・・・久しぶりだな」

「・・・左慈」

「私はついさっき会ったばかりですね」

「于吉・・・！」

そして現れる白装束と竜牙兵。

「・・・は、随分と数がいるじゃねえか」

咲はキーブレードを構える。

「所詮烏合の集……だろ？」

人解をはめ直し鈴音の位置を確認する。

「……ま、今まで何度も死にそうな目に遇って生きてこれたんだ……今度も生きよう」

「もちろん……俺達の物語は終わらせないぜ！」

いざ突撃しようとした時、いきなり爆発が起きて敵が吹っ飛ぶ。

「え……」

そこには士郎とセイバーが立っていた。

「そうだよな……目の前の人間も救えなくて正義の味方にはなれないよな！」

「……行きます！」

「二人とも……」

「行くぜ、亮」

俺達は数多の敵に向かって走っていった……

場所は変わり、Fateの町と町を繋ぐ橋の所に出た。だけどおかしいのは橋の向こうに見えるのは麻帆良学園だ。

「ここまで世界の、外史の融合が・・・」

「こりゃ早くケリつけなきゃダメだな」

咲は出来るだけ広範囲の魔法を叩き込む。

「ふむ・・・中々しぶといですね」

「呑気に言っな。さっさとアイツら共々外史を消すぞ」

その時、奥から人影が出てくる。

「な……ギルガメツシュ！」

「久しいな、セイバー」

「……さあ、再び開幕といこうじゃないか」

「言峰……！」

「……士郎、決めるぞ」

「左手に魔力……右手に気……合成！咸掛法！」

咸掛法全開で決める。

「どうしたセイバー、動きが遅いぞ？」

「……まだだ！」

「衛宮士郎。まだ叶わぬ夢を追っているのか」

「叶わない夢なんてない！切嗣^{オヤジ}だってそう信じていた筈だ！」

「それこそ間違いだ。アイツはむしろ簡単に夢に絶望した男だから
な」

セイバーと士郎は苦戦を強いられていた。俺は言峰を、咲はギルガメッシュに向き直る。

「リベンジといかせてもらっぜ、言峰！」

「死人は大人しく寝てろ！ギルガメッシュ！」

「・・・退きますよ、左慈」

「あ？何でだよ」

「どのみち“計画”を早める予定でしょう？ここは彼らに任せて私達は戻りますよ」

「・・・そうだな」

「あ、待て！」

「焦らずとも後で消してやるよ」

左慈と于吉が消える。

「咲！今はこっちに集中しろ！」

「・・・わかってるさ!」

俺は雑兵を無視して言峰に接近する。

「ハッ! ヤッ! セイツ!」

言峰に拳を叩き込む。

「ぬ・・・成長したな」

まるでダメージが無いように動く言峰。

「まったく・・・化け物だな、ホントに」

でも、それなら士郎にやつてもらおう。

「・・・いけ、士郎!!」

「トレス オフ 投影完了・・・ウオオオオオオツ!!」

士郎は光輝く剣で言峰を両断した。

「ぐ・・・!!・・・なるほど・・・さすがだな・・・」

言峰が消えると同時に敵も半数が消えた。

「おのれ・・・雑種ゴときが・・・！」

「雑種雑種うるさいんだよ！」

「今度こそ終わりだ、英雄王」

咲はキープレードで斬りかかるが、ギルガメッシュは難なく防ぐ。

「・・・かかった」

「なに!？」

「閉じる！」

咲がギルガメッシュの回路を閉じる。

「な・・・力が・・・」

「セイバー！」

セイバーは剣を構え、突撃する。

「—————約束された勝利の剣—————!!」
エクスカリバー

「グオオオオオオツ!？」

両断。その光の剣の輝きの前にギルガメッシュが消える。そして敵は全員消えた。

「よし……！」

「終わりか……？」

しかし、その瞬間、

「が……あぐ……があ……！」

「う、うう……！」

突然士郎とセイバーが苦しみだした。

「おい、どうした!？」

「二人ともしつかりしろ！」

「ぐ……うわああっ!？」

「あ……うああっ!？」

士郎とセイバーが消えた。

「士郎!? セイバー!？」

「消えた・・・!?!」

困惑している時、上から声が響く。

「霊符『夢想封印』」

「アクセルシューター!」

空から光が降り注ぐ。

「な・・・!?!」

「うわ!?!」

俺と咲は同時に避ける。すると上から巫女と魔法少女が降りてきた。

「博麗霊夢!」

「高町なのは!」

俺が霊夢、咲がなのはに向き合う。

「あーあ、Fateの世界が消えちゃったか」

「どつという意味だ、博麗霊夢」

「そのままの意味よ。あの白装束の男がやったのよ。・・・世界と世界を融合させたのよ」

「なに……?」

「……つまり、世界と世界が融合するとお互いの世界が矛盾を消しあう……つまり世界が滅びるってことなの」

なのはもこの現象について知っているようだった。

「まあ……つまり……」

「私たちがやることは……」

霊夢がお払い棒。なのはがレイジングハートを構える。

「……アンタ達をボコしてあの白装束もボコる!」

「それだけが……世界を破壊から救う方法なの!」

「く……みすみす殺られてたまるかよ!」

しかし霊夢は一瞬で懐に入ってくる。

「え……」

「遅いわ」

バキィッ!

霊夢の蹴りが当たる。

「ぐ……！普通肉弾戦する巫女なんて聞いたことねえよ！」

「そうかしら？まあ、別にどうでもいいけど」

絶え間なく放たれる打撃。咲の方は爆発音だ聞こえてくる。

「よそ見している余裕があるの？」

「しまっ……」

ゴキヤアッ！

「ぐは……！」

こうなったら威掛法最大で……そう思った瞬間、

ガキイン

「……ッ！バインド!？」

「……いくよ、レイジングハート」

遠いからよくわからないがなのは魔力を溜めている。そしてその射線上にいるのは咲と俺……マズイ！

「こっちも用意できてるわよ」

霊夢の陰陽玉にも光が集っていた。

「げ……」

「全力全開！スターライト……」

「『夢想……』」

ダメだ！バインドから脱け出せない！

「……ブレイカー……ッ……！！」

「……天生……！！」

ズガアアアアッ……！！

高威力の攻撃が直撃する。

「ガア……！！」

「ぐは……！！」

川に落ちていく。……薄れる意識の中、誰かが助けに来てくれた気がした……

破滅（後書き）

ネギま勢

ネギ

「えっと・・・また急展開でしたね」

明日菜

「はは・・・私と刹那さん結構早く消えちゃったわね・・・」

このか

「・・・ウチらは既に消えてるんやけど・・・」

のどか

「・・・そうですね・・・」

夕映

「私もです・・・」

ハルナ

「いいじゃん二人は・・・私なんて能力使ってないんだよ？」

千雨

「（・・・何で私がかんなどころに・・・）」

エヴァ

「ふふ・・・私は出番が多かったからな。多分ぼーやより目立って

たな

明日菜

「……それはないと思う」

ガチャ

イリヤ

「エヴァ、いるかしら」

エヴァ

「む、どうした？」

イリヤ

「レミリアが捜してたわよ。部屋の位置がわからないって」

エヴァ

「そうか。……ならこっちから出向いてやるか」

イリヤ

「そうしてあげたほうがいいわね。……ああ、そうそう。ユエ、ノドカ。この間借りた本は面白かったわ。また面白いの貸してね」

のどか

「あ、はい」

夕映

「わかりましたです」

刹那

「……こうしてみるとイリヤさんって中々友達の輪が広いですね」

このか

「そやな〜……他にも鈴々ちゃんやたんぽぽちゃんやふーちゃん
ふみちゃんも結構他の世界のひとと遊んどるよ?」

明日菜

「あと璃々ちゃんの面倒みたりとかね。紫苑さんも忙しいから」

のどか

「璃々ちゃんはどんな絵本も熱心に読んでくれますから」

夕映

「こちらも読ませがいがあるです」

千雨

「私はアーチャーにせめてパソコンだけでも遠坂に教えてやってく
れって言われたな」

ハルナ

「私は穏さんが楽しいかな」

のどか&夕映

「……ッ!？」

ネギ

「どっかしましたか?」

のどか

「い、いえ……」

夕映

「何でもないです・・・」

明日菜

「ま、今回はここまでね」

ネギ

「それでは次回の真似と開閉と世界旅行」

刹那

「次回もまた見てくださいね」

このか

「ほなまたな」

再会了（前書き）

今回意外なキャラが登場します。・・・ではどうぞ。

再会

・・・誰かに呼ばれている気がする。

「・・・あ・・・」

目を開く。

「・・・目が覚めたのね」

「蓮華!?!」

懐かしい姿を見て驚きの声を出す。

「待っていて、今明命達を呼んでくるわ」

蓮華はそう言って歩いていく。・・・少しして明命がやってくる。

「亮、大丈夫ですか?」

「ああ、助けてくれたのは明命か?」

「はい。・・・無事で良かったです」

「・・・あ、そうだ!この世界に来たのは蓮華だけか!?」

「・・・」

蓮華は無言でうつ向く。

「あ……悪い……」

「……気にしないで。私の……力不足だから……」

俺は人解と鈴音を取り出す。

「……それは……亞莎と思春の……」

「ああ。……大切な……預かりものだ……皆に会いたかったよ」

「……ところで明命？咲達は……」

「今、来ますよ」

すると咲と恋もやってきた。

「……これで全員だな」

蓮華の口調が王のモノになる。

「咲……お前に会わせたい人がいる」

「……？」

蓮華は俺達を連れて洞窟みたいな所に入る。

「……ツ！……あ……蓮華ちゃん……」

「……蓮華」

「桃香、詠、今戻った」

その声に咲が反応する。

「桃香に詠！？」

「咲君！？」

「咲！？それに恋も！？」

「蓮華様……これは一体……」

「……実はこの世界には魏、呉、蜀の三国の人間がいたのだが……」

「……残ったのは蓮華様達だけ……ですか？」

「……そうだ」

「……咲、君……う、うわああん！」

劉備が泣いて咲に抱きつく。

「と、桃香……？」

「う、ヒック……愛紗ちゃんや鈴々ちゃん……それにご主人様」

まで……わ、私を、庇って……」

「桃香……」

「もう……私しか残っていないくて……」

「……大変だったんだな」

「……久しぶりだな、劉備」

「あ……三人目の御使いさん……」

「……亮って呼んでくれ」

「……それじゃあ私は桃香でいいよ」

劉備……桃香は力なく微笑んて言った。

「……咲」

「詠……」

「月や……ねねを守れなかった……」

賈馱も涙を流しながら咲に言った。

「霞や、華雄も戦っていてくれたのに……ボクは……何も出来なかった……」

「詠……仕方ないよ……お前が悪いわけじゃない」

「・・・ねねが、消えた」

- ・ 恋も涙を流していた。その場は泣き声だけが支配していた・・・

「……落ち着いたか？」

「うん……」

「ええ……」

「……（コクッ）」

「……明命」

「……大丈夫です」

「蓮華は……泣かないのか？」

「涙は……貴方が消えた日から一度も流していないわ」

「……」

そして皆が向き合つ。

「……これからどうするか……」

「……蓮華達は……この戦いは……」

「私達は憎しみや恨みでは戦わない。……私達は、どんな結末になろうとも貴方達の味方よ」

それに頷く恋姫勢。俺と咲は嬉しくなり、思わず泣きそつになる。

「でも・・・具体的にどうするの?」

「・・・それだが、俺と亮が戦っていたとき、于吉が何か言っていた。・・・計画、そう聞こえた。・・・つまり俺達ごと外史を消す手段を持っているんだろう。・・・まずはそれを止める」

「・・・だけど、下手に動いても高町なのはや博麗霊夢にやられるのがオチだよな・・・賈馱、何かないか?軍師だろ?」

「いきなりボクに振るんじゃないわよ。手がかりも無しにわかるわけないでしょ」

「・・・だよなあ・・・」

「ん〜・・・それじゃあ呼んでみるとかはどうかかな?」

「呼んで出てくるようなバカじゃないと思うけど・・・」

「えと・・・それじゃあ聞き込みをするとか?」

「誰にだよ。・・・お前のそのどこか抜けてるのは相変わらずなんだな」

「えへへ・・・」

「誉められてないから・・・！」

桃香、賈馱、咲が三人で話し合っていた。

「・・・蓮華と明命は？」

「・・・」

「あの・・・私が偵察して来ましようか？」

「・・・それは危険」

明命の意見を恋が両断する。

「」「うーん・・・」

結局全員良い案が出ないまま時間だけが過ぎていく。

「・・・俺と咲が囿になる・・・ってのは？」

「なるほどな、左慈達は俺達を個人的な感情で消したがつている・・・つまり、殲滅できる」

「それは危険だ！亮を危険な目に逢わせるわけには・・・」

「蓮華、俺も明命も咲も恋も皆死にそうな目に逢ってきた・・・今更囿ぐらいじゃ危険はないよ」

「だが・・・」

「俺を信じてくれ。俺は蓮華の盾と剣なんだ。主が信じてくれないとその力を出せない」

「う……」

「蓮華ちゃん。咲君達の決意は本物だよ」

「このバカ達には何を言っても無駄よ」

「蓮華様……亮は私が守りますから」

「……咲も、守る」

「……わかった。だけど、気をつける」

俺はふと思ったことを聞いてみる。

「なあ桃香……蓮華って皆の前だと……」

「……そうだよ、あんな話し方なんだよ？」

「……変わんないな……もちっと可愛いげがあっても……」

ゴスンッ！

「あ痛あ！？」

蓮華の拳が頭部を直撃する。

「な、何を話している！答えねば殴るぞ！」

「殴ってから言うなよ！？だいたいなあ！お前の堅さに俺と冥琳が何度ため息吐いたと思ってるんだ！」

「し、仕方ないだろう！？これは癖なんだ！」

「だからそれを治せって言うてんの！少しは雪蓮を見習・・・いすぎるのもマズイけど・・・そうだ、せめて桃香！桃香を真似しろ！」

「あんな能天気な真似をできるわけないだろう！？」

「蓮華ちゃん！？」

桃香はショックを受けながら蓮華に抗議するが蓮華はまったく聞かない。

「・・・ッ！」

「・・・ッ！」

そして二人で睨みあって・・・

「・・・クッ」

「・・・ふふ」

「・・・あははっ！」

「クスクス・・・」

お互いに笑っていた。また蓮華と会話できるとは・・・

「・・・亮、こんな時になに遊んでるんだよ・・・」

「・・・バカの友達は大カね・・・」

「おいコラ詠。それは俺が大カって意味か？」

「決まってるでしょ？」

「・・・ッ！」

「・・・ッ！」

「・・・繰り返し」

「そうですね・・・」

その時、殺気を感じた。

「・・・どうやら向こうから来てくれたみたいだな」

「・・・そうですね」

人解を填めて鈴音を装備する。

「・・・詠、桃香、下がってる」

「……皆は恋を守る」

入り口から大量の竜牙兵が入ってくる。

「ッ！多い!？」

「……来れ（アデアット）」

恋は狭い洞窟では長物は不利だと感じたのか、武器をキープブレードに変える。

「蓮華は下がって桃香達を頼む！」

「……わかった！」

正直竜牙兵程度なら一刀でも倒せる。なら蓮華ならなんの問題もない。

「咲！デカイ魔法は使つなよ！」

「わかってるさ！洞窟が崩れるからな！」

何とか外に出れば……！

「皆！外に出るぞ！」

俺は気だけを拳に込める。

「ハアアアア・・・ハアツ！」

気弾を放ち、道を作る。

「走れ！」

一斉に駆け出す。

「・・・あつ！？」

賈馱が躓いて転ぶ。

「詠！？」

俺も咲も間に合わない！竜牙兵は高々と剣を振り上げ・・・降ろした。

「・・・ツ！」

カキインツ！！

「え・・・」

その剣を阻んだのは・・・

「う……くう……」

「桃香！」

桃香は竜牙兵相手に力負けしていた。

「ハアッ！」

ガアンッ！

蓮華が竜牙兵を薙ぎ払う。

「急げ！」

何とか外に出ることが出来た。

「俺が殿を引き受ける！」

「……恋も手伝う」

「頼む、咲、恋！」

あの二人なら多少距離が開いても大丈夫だろう。

「……燃え盛れ！ファイア！」

ドガンッ！

「タアアアッ！」

前に立ち塞がる竜牙兵を回転しながら引き抜いた鈴音で一掃する。
そしてそのまま走っていった……

「……ふう……皆無事か？」

「私は大丈夫です」

「……私も無事だ」

「問題ないし」

「……大丈夫」

「はぁ……はぁ……へ、平気よ……」

「ふう……ふう……大丈夫、だよ」

「・・・大丈夫か？桃香、賈馱」

かなりばてているのが二名。

「そついや詠。お前転んだよな？怪我してないか？」

「だ、大丈夫よ」

咲は無言で近寄って賈馱の膝辺りをペシン、と叩く。

「いつ・・・!？」

「・・・下手な嘘はつかないでくれ、詠。・・・ほら、足出せ、治すから」

咲はケアルを使う用意をする。

「あ、ありがとう・・・」

「気にすんなよ、家族だろ？」

「・・・詠、大丈夫？」

「ん・・・あ、痛くない」

賈馱は立ち上がって軽く屈伸運動をする。

「・・・これなら大丈夫よ。・・・ホント、まほつって意味がわからないわね」

「俺もわからん」

「……まさか、あの大群を抜けるとは思いませんでした」

その声で一気に武器を持てるものは武器を構える。

「于吉！」

「左慈！」

「五十嵐咲……絶対にお前は消してやる……！」

「ふむ……なら私は大澤亮を消させて頂きますかね」

「……やれるもんならやってみな」

「来いよ……于吉！」

「ですが……流石に“9”対2はキツイですね」

「は……？」

俺達は七人・・・だよな？

「・・・見つけた。さっさと終わらすわよ、なのは」

「はい！霊夢さん！」

後ろから二人が飛んでくる。・・・まずい、挟まれた。

「・・・！」

「ふむ・・・なら、今回は趣旨を変えましょうか」

そう言って于吉が空間を開いて呼び出したのは・・・二人の同い年ぐらいの女の子だった。

「・・・また、喚ばれたんだ、サキ」

「仕方ないでしょ・・・喚ばれたなら喚ばれたで楽しむだけよ、リ
ヨー」

目の前の少女が消えた・・・そう思った瞬間、俺と咲は吹き飛ばされていった。

「うわ！？？」

「ぐっ！？？」

「亮！」

「……咲！」

「貴女達はごちらですよ」

大量の雑兵が出てくる。

「お前は……」

「私？私は大澤リョーコ」

「大澤・・・まさか」

「そ、限り無い世界の一つ・・・もしも女だったら？という感じで生まれた貴方よ」

「・・・ホントにそういう外史があったんだな・・・」

「まあね・・・ま、于吉には負けちゃったけど」

「負けた・・・？」

と、女の俺は大剣を取り出す。

「それは・・・」

「これ？春蘭がくれたのよ」

「夏侯惇が・・・？」

「・・・ふーん、貴方は甘寧から武器を買ったんだ」

「・・・借り物だよ」

「しかもお供は周泰・・・うん、そこも似てるね」

「何がだよ」

「私はね、凧がついてきてくれたんだ・・・もう消えちゃったけど」

ね

「消えた……」

「風は……最後まで私と戦ってくれた。お別れの時も微笑んでくれた」

「……」

「……今じゃ私は単なる于吉の駒。……自分を倒すなんて嫌な気分だけど……」

もう一人の俺……リョーコは構えた。

「……覚悟！」

自分との戦いが始まった……

「ハアッ！」

「くっ・・・」

カキインツ！

重い一撃が放たれる。

「なめ・・・るな！」
カキヤアンツ！

負けじと剣を振るう。

「さっすが私！簡単にはやられないか！」

「負けられない理由があるんでね！」

お互いに距離を取る。

「・・・それじゃあ」

「やるか！」

俺達は同時に両手を合わせる。

「左手に魔力・・・右手に気・・・合成！威掛法！」

出力もほぼ互角・・・待てよ・・・俺とリョーコが同一人物なら・・・
相討ちにしかならないんじゃない・・・

「・・・いや」

今は考えてる余裕はない。周りからすれば光がぶつかっているような速度でぶつかり合う。

「く・・・中々ね・・・」

「へ……思春に鬼のようにしごかれたからな……」

「私もよ！春蘭や霞に頼み込んだわ！」

「女で魏に行ったんだ！大変だったろうよ！」

ピタッ……

その瞬間、空気が固まった。

「ふ、ふふ……そうよ、“用事がある”なんて華琳に呼ばれて行ってみたらいきなり春蘭と秋蘭と桂花に縛られて……その後四人がかりで……」

あ、泣き出した。

「次の日には事情をしまった霞や真桜に絡まれて、凜には鼻血を噴かれ、凧や沙和には温かい目で見られたり……涙が止まらなかったわよ……！」

「あ……その」

気の毒すぎて声もかけられん……

「サキも……サキもいたのに何で私だけ……！」

「……」

「……純潔を散らされた恨み！貴方で晴らさせてもらおうわ！」

「うえ！？なんでそうなる！」

「うるさい！乙女の怒りを思いしれ！」

迫り来るリョーコを見ながら思った・・・

「（・・・無事で良かった）」

咲

「そらそらそらそらあ！！」

女の俺が大量のファイアを放ってくる。

「く・・・ホントに俺かよお前は！？まるでお前のファイアは『メラゾーマではない、メラだ』みたいだぞ！？」

「うっさいよ！アタシに勝てるかな！？」

そう言ってサキは空間から方天画戟を振り下ろしてくる。

「なに・・・！？」

それをキープレードで防ぐ。

「さすがあ！いいね男のアタシ！」

「く……この乱暴チビ娘が……」

ブチッ

「ブチッ？」

「……チビって言うなああ！？気にしてるんだぞ！何気に朱里や離里と同じ背丈で悪いか！？敵の兵に微妙な顔をされたさ！イリヤにも子供扱いされたさ！風香や史伽にも同盟組まされたさ！……でもなあ……でもなあ……鈴々よりは背が高いんだよあ！」

「……」

あれ、目から水が……

「……男の私はまだマシね……」

「そりゃ、恋と同じくらいだし」

「……殺す」

方天画戟を振り回す。

「く……!!」

「キーブレードなんて良いもの持ってんじゃない！アタシもそれがよかつ、たな！」

ズガアアアンツ！

地面にクレーターが出来る。

「ふふふ……この武器はずっと愛紗と訓練してたから余裕よ……」

「愛紗と……」

「そうよ。男のアタシは恋といるみたいだけど、アタシは愛紗とい
たのよ」

「流石平行世界……」

「……にしてもリョーコも可愛いそーねーアタシは蜀から捕虜に
なつて魏に行ったことあるんだけど、リョーコ……あの桂花にも
夜の相手をさせられていたのよ……アタシは風とのほんとして
たらスルーされたよ」

「……可愛いそうに……」

「ま……お喋りはお仕舞いにして……もっと殺しあいを楽しも
うよおおおおー！」

「ちっ……このバトルマニアが！」

俺はこんなじゃねえぞー！

「……」

沈黙・・・

「・・・え・・・」

ち、違うんだからな！絶対に俺はバトルマニアなんかじゃない！・・・
・微妙な空気を背負って戦いを再開した・・・

再会了（後書き）

亮

「えー……」

咲

「意外な展開だな、アハハ」

亮

「絶対笑い事じゃねえ……」

咲

「今回さ……この後書き部屋、広いと思わないか？」

亮

「そう言えば……静かだな」

咲

「今回はレギュラーメンバー誰もいないからな。いまここにいるのは俺とお前だけだぞ」

亮

「ええ！？明命は!？」

咲

「今日は用事があるんだとき、ちなみに恋は腹が減ったから帰った」

亮

「フリーダム」

リョーコ

「・・・」

サキ

「・・・」

咲

「んで、今回出てきた二人だけど」

亮

「随分リアルな人形だな・・・」

大澤リョーコ

見た目

ストレートの黒髪ロング。見た目は黒い女子の制服。身長は160
ぐらい。すでに純潔は散らされた。物真似能力も持っていると思わ
れるが・・・

五十嵐サキ

見た目

髪は水色のセミロング。サイドポニーにしている。ちなみに髪は地毛。身長は140ぐらいで、それをツツコムとキレる。開閉能力は使え、武器は一通り使える。

亮

「ふん」

咲

「意外に背がひく・・・」

ドスッ！ 手裏剣が刺さった音

二人

「……」

咲

「こ、今回はここまで……」

亮

「じ、次回の真似と開閉と世界旅行」

咲

「次回もまた見てください！」

想いゝ（前書き）

訳が判らない描写があるかもしれません。ではどうぞ。

想いゝ

「セイヤア！」

カキインツッ！！

剣と剣がぶつかり合う。

「……ッ！（威掛法はあとどれくらい持つか……）」

「……今考えてること当ててあげる。威掛法はいつまで持つか……でしょ？」

「……正解」

「自分の事を当てるのは余裕よ」

「……流石に女の思考はわからん」

「ああ安心して、私、男子の方が友達多いから、多分思考も男子っぽいと思うよ？」

「……それはそれで問題があると思うが……」

「でもね、本当に親友って呼べるのはサキだけだった……」

「え……」

「元の世界で死んで、華琳に出会った。それから親友が増えた」

「・・・」

お互い攻撃する手を休めずにリョーコは話す。

「Fateの世界・・・グラップラー 凧は拳闘士として聖杯戦争を戦い抜いた。
・・・ネギまの世界・・・私はね」

そう言って取り出したのは数枚の“死んだ”仮契約カード。

「アキラやハルナが私に協力してくれた・・・もう皆いないけどね」

その瞳が・・・突如恐ろしいナニカに変わった。

「アンタに・・・がわかる？」

「え・・・？」

「アンタに・・・親友が消えた気持ちが解るのかあ!？」

ガキヤン!

「ぐわ!？」

つばぜり合いをしていた剣ごとぶっ飛ばされる。

「く・・・な!？」

上を見ると剣を高々と振り上げるリョーコがいた。

「……春蘭が！秋蘭が！桂花が！皆が！……風が消えたときの絶望がアンタにわかるの！？」

話している内に感情を押さえられなくなっただろう。……さっきまでの軽い態度は自分を誤魔化すため。言葉を吐き出す度に振り下ろされる剣を必死に防ぐ。

「ウワアアツ！……一度絶望に落ちたら……もうそこから這い上がれない！絶望は何処まで行っても絶望なのよ！」

俺はその言葉を聞いて、一気に立ち上がる。

「ッ！？」

その反応が意外だったのだろう。リョーコは一瞬動きが鈍る。

「諦めなければ……」

鈍った剣を弾き……その勢いで剣を体ごと回転させる。

「……絶望の先の希望を見つけられるんだよ！……」

そして……剣はリョーコを切り裂いた……

咲

「アハハハッ！踊れ踊れえ！」

相変わらず大量の魔法を放ってくる。

「この・・・いい加減にしゃがれ！グラビデ！」

まとわりつく炎を押し潰す。

「楽しいよねえ！アタシ、ゾクゾクしてきた！」

「変態かお前は・・・」

「楽しいものは楽しいでしょ？アタシはそれを人一倍楽しんでるだけ」

「・・・ま、あながちおかしくもないなあ」

「でしょ？だからさ、もーっと殺ろうよ？男のアタシと戦えるなんて奇跡・・・絶対無いから！」

「それは同意見だよ！」

するとサキは空間を開いて中から大量の武器を取り出す。

「おい・・・まさか」

「んー、アーチャーやギルガメッシュ、バマリに美樹さやかって知ってる?」

「……知ってるけど」

「アタシさ、趣味は武器集めなんだ」

「……聞きたくないけど、それで?」

「……こつこついう事もできるんだ」

パチン、と指を鳴らすと空間から大量に武器が飛び出してくる。

「マジかよ!?!」

瞬時にキープレードが二本になり、武器を弾く。

「く……まるで雨だな……」

「さあさあ喜劇を始めましょう!大量の剣を持って遊ぶ二体の人形!剣が刺さるのはどちらの人形!?幕は上がった、さあ楽しみましょう!」

両手を広げながら高らかと声を上げるサキ。

「つまり……この武器の雨を抜ければいいんだろ!」

「やれるもんならやってみなさいよ!アタシかお前か、どっちのサキが生き残るかしら!?!」

「俺に決まってるんだろ！」

ジリジリと前に進んでいく。どうやら飛ばした武器はまた空間に収容してまた射出・・・を繰り返してるみたいだ。さっき同じ武器が何度か飛んでいくのを見た。

「・・・流石に同じ武器じゃ弾かれるか・・・じゃ、これはどう!?」

そう言って取り出したのは二丁の拳銃。

「・・・お人形は頭を吹き飛ばされてしまいましたと・・・さ!!」
ババババン!!

ただでさえ武器を弾くのに苦労していたのに、そこに弾丸が加わる。

「自分に殺されるってどんな気持ち? ねえ、どんな気持ち!??」

「・・・ホントに自分の女版かわからねえな、オイ」

まだ防げる・・・あと少し近づければ・・・

「・・・“加速”」

「な・・・!??」

武器と弾が加速する。コイツ・・・まだ・・・!

「アツハツハツハ！大人しくしてよ！そうすればアタシが一撃で頭を撃ち抜いてあげるからさあ！」

「……く、くく……“開け”」

ドスツドスツ

「え……」

サキの目が見開く。サキの体から干将莫耶が突き出していた。

「あ……が……なん、で……」

「お前が武器を飛ばせて俺が飛ばせないなんておかしいだろ？ずっと耐えていたのは力を集中してお前の後ろに空間を開くためだったんだよ」

俺はグロツグを取り出して構える。

「ゲームオーバー……だな」

「い、嫌……死にたくない……！」

口から血を吐き、涙を流しながら後ずさるサキ。

「諦めな。左慈達に負けた時点でお前の旅は終わったんだ……なら、ちゃんと休め。そして生まれ変わることがあればちったあ女らしく生きる」

「う、助、け……あい……しゃ……」

「……じゃあな」

亮

「……あの子は“壊れたの”」

「……壊れた？」

「サキは……自分の大切な人達が消えて……狂って、壊れてしまったのよ」

「あ……」

「……そうだ、私が于吉達に負けた理由……知ってる？」

「いや……」

「私のせいよ、私はあの時自分が壊れるのが怖くてコレを使わなかった」

そう言って取り出したのは俺と同じデザインのケータイ。

「……忠告よ。自分が壊れるのを恐れないで。万が一でも躊躇すれば……負けるわ」

「……ッ!」

それは……俺が壊れるという意味なのか……?

「……時間ね。……必ず勝つてよ……」

リョーコは光になっていく。

『……応援するわ、男の私』

そして消えた。そして咲が近寄ってくる。

「……終わったのか?」

「……後味悪かったけどな」

咲は頭を掻きながら言った。

「……あ、そうだ! 明命!」

俺と咲は皆を思い出し、走り出す。

「なん・・・だよ・・・」レ

例えるなら地獄絵図。辺りは荒れまくり、明命と恋の姿は無く、蓮華達が血まみれで倒れていた。

「蓮華ッ！！」

「詠ッ！桃香ア！」

俺達は三人に駆け寄る。

「あ・・・亮・・・」

「蓮華、無事か！？」

「・・・ごめんなさい・・・桃香達を守れなかった・・・」

「・・・っ、辛いなら喋らなくていいから・・・」

「明命・・・達は・・・あの白装束のやつらに・・・」

「なんだって・・・？」

「さ、き・・・」

「詠、待ってる・・・今回復魔法を・・・！」

「アイツら……“計画”とか……“力が足りない”とか……色々言ってた……」

「なに……」

「……アイツらは……恋達を使って……何かをしようとしている……」

「詠……く、血が止まらない……!」

「ボクよりも……桃香を、先に……」

「バカ言つな!桃香も、お前も、蓮華も皆救ってみせる!」

「……蓮華、少し我慢してくれ……」

俺は不慣れの魔法を使って蓮華と桃香の両名を回復させる。

「……(助かったよ、ネギ)」

コレでしばらくは持つはずだ……その時、蓮華と賈馱の服に俺達が渡したボタンが付いていたことに気がつく。

「ねえ……咲……」

「なんだよ、詠」

「お願いがあるの・・・」

「・・・何だよ、いつもみたいに偉そうに命令しないのかよ・・・」
「？」

「目を・・・閉じて？」

咲は言われた通りに目を閉じた。・・・すると、

「・・・ん」

咲と賈馱の唇が重なった。

「な・・・詠・・・」

「・・・血の味しかないでしょ・・・？嫌よね・・・ボクみたいな女じゃ・・・」

「詠・・・そんな自分に卑屈になるなよ・・・お前らしくない・・・」
「

すると賈馱は力無く笑い、

「・・・咲・・・大好き・・・よ・・・」

・・・賈馱は光になって消えた。

「詠・・・詠・・・！ウワァァッ!？」

咲が泣き叫ぶ。

「咲……！悲しむより今は残った二人を……！」

「くそ……わかった」

そして何とか二人は傷を治すことに成功したのだった……

「……行くぞ、亮」

「おい、待て……何の策も無しに行っただって……」

すると咲が胸ぐらを掴んでくる。

「ああ！？んなこと言っている内に恋達に何かあったらどうすんだ！ええ！？どうなんだよ！」

「……つつせえんだよ！こっちだって今にもアイツらぶっ殺したくて堪ないんだよ！」

俺と咲はお互いの胸ぐらを掴んで今にも殴りあいになりそうな空気になる。

「……亮」

「……ッ！蓮華、大丈夫か？痛いところは無いか？」

「……ふふ、大丈夫よ」

「……咲君、ありがとう」

「桃香……まだ動かないほうが……」

「大丈夫……詠ちゃんも消えちゃったの……？」

「……」

「……そんなのってないよ……」

「……亮、今すぐ白装束を……」

「蓮華……咲にも言ったけど下手に動いてもやられるだけだ……
何かしら策がないと……」

落ち着け……こんな時、冥琳や穩や亞莎ならどう考える？……
味方の増援。

「……蓮華、桃香……今から俺が言うことをよく聞いてくれ」

「……？」

・・・俺達は変な広場に辿り着く。

「・・・おや、何故ここがわかったんですか？」

「・・・俺達は繋がっている。・・・明命がいる所は大々わかる」

「・・・どうする于吉」

「どうするもこうするも・・・まだ力が溜まっていませんからね」

その言葉を聞いてよく見ると、二つの培養液みたいなものが入ったカプセルのようなもの・・・その中に明命と恋がいた。

「・・・于吉、明命達を解放しろ」

「お断りです」

「・・・じゃあ死ね」

俺達は武器を構える。

「おやおや・・・血の気の多いことで・・・」

「たった二人で来るとはいい度胸だよ、お前達」

そして呼び出される敵兵。

「……行くぜ、咲」

「おう。……皆殺した」

俺達は突撃した……

「テリヤアッ！」

ドゴオンッ！

「じじあっ……！」

ガシヤアンッ！

「……チツ、どんだけいるんだよ……！」

「弱音吐くな亮！チャンスは来る！」

「……じぶとこですねぇ」

「さつさと楽になればいいものを・・・」

「は、今に見てるよ！必ず明命達を助けてお前達を倒す！」

その調子で敵を殲滅していく。そして・・・

「はぁ・・・はぁ・・・」

「ぜえ・・・ぜえ・・・」

俺達は片膝をついて肩で息をする。

「く・・・はははは！ざまあないなあ！」

「・・・ここまですぬ」

敵兵が剣を振り上げた瞬間、その敵の体は砕けていた。

「亮、待たせたわね！」

「蓮華！」

「・・・孫権か・・・兵士よ、そこにいる劉備を捕らえなさい」

「え・・・キヤアアアツ!？」

悲鳴を上げた桃香・・・が、桃香はニヤリと笑った。

「・・・なんちゃって。来れ（アデアット）！」

カードが光り、辺りに様々な武器が突き刺さる。

「やあつ！」

蛇矛を振り回し、迫る敵を一掃した。

「……雷の暴風ヨウイス・テンベスターズ・フルグリエンス！！！」

更に強力な魔法が敵を吹き飛ばす。

「……ネギ！」

「……蓮華さん達に話を聞いて……蓮華さんの意志を知りました。……僕も手伝います！」

「……真名を許したのか？」

「ええ、あの子の大切な人を消してしまった償いと言うか……」

「認めたんだろ？」

「……そうね。子供であそこまで判断力があれば充分よ」

「咲君……？いくら子供だからって口づけは恥ずかしかったかな……」

「わ、悪い……」

「……カモ君を連れてこなくて正解でした。今、協力しま……」

ッ！」

上から魔法弾が降り注いだ。

「……見つけたの！」

高町なのはが空から飛んでくる。

「な……やめてください！君は僕と同じ年ぐらいじゃ……」

「私の世界のためなの……」

「そんな……せめて、話を聞かせてください！」

「……ごめんなさいなの」

「……わかりました！僕が勝つたら話を聞かせてもらいます！」

「……立場逆だろ」

なににせよなのははネギに任せた方が良さそうだ。

「蓮華……久々に呉の誇りを見せてやるっぜ」

「ええ。そして明命を助ける！」

「なら、俺達は絆の力を見せてやるっぜ」

「うん！皆の力で！」

咲はキーブレードからパイルバンカーみたいな武器に変える。桃香は蛇矛から十手槍に持ち変える。

「行けるか？桃香」

「ネギ君の……まりよく……だっけ？それがあるから大丈夫だよ」

「……よし、行くぜッ！」

四人ならわりと楽だった。桃香と咲は武器をこまめに変えて敵を困惑させている。蓮華はまるで別人のような剣捌きで切り裂いていく。

「よし……」

道が開く。今だ！

「……咲！」

「おつよー！」

咲はキーブレードを構える。俺は咸掛法の力を左腕に・・・手に集中させる。

「消し飛べ！ラグナロク！」

「ウオオオオ・・・タアツ！」

幾つもの光弾が于吉達を襲った・・・が、

「な・・・」

于吉はなんと左慈を盾にしていた。

「于吉・・・テメ・・・」

「・・・すみませんねえ左慈。私はここで消えるわけには行かないんですよ」

左慈は消えた。そして于吉は・・・

「ハハハハ！残念ですが転移の準備は整いました。ではさようなら」

「ま・・・」

于吉が消える。明命達のカプセルも、敵兵も同時に。

「・・・こそ！」

「亮さん・・・」

ネギも戻ってくる。・・・その時、

「な・・・あ、うう・・・」

「え・・・な、に・・・」

「ぐ・・・う・・・」

三人が苦しみ出した。

「蓮華！？ネギ！？」

「桃香・・・！？」

「う、あああ！？」

「イヤアアアッ！？」

「アアアアアッ！？」

三人も光になって消えた。

「そんな・・・」

「嘘、だろ・・・」

俺達は同時に座り込んでしまう。

「こんなことって・・・畜生」

咲の体から闇が吹き出してくる。

「咲・・・」

俺は、最後の策を話す。

「・・・まだ、策はある。皆を元に戻し、明命達を救う策が・・・」

「え・・・」

俺はその策を話し始めた・・・

想い〜（後書き）

亮

「お、おおっ……あの左慈の為なら死んでもいいと言った于吉が左慈を盾にするとは……」

咲

「様子がおかしかったけどな」

桃香

「うっ……腕が痛いよ」

蓮華

「あれって中身は軽く調整されてたんじゃなかったの？女性陣の武器はみんな軽量されている筈だけど……」

桃香

「愛紗ちゃんや鈴々ちゃんとかの長い武器だと体のアチコチに当たって……」

咲

「まさか、隣から聴こえてきた鈍い音って……」

桃香

「……私が体に武器をぶつける音」

三人

「……」

リョーコ

「あ、いたいた」

亮

「うええっ！？なんで来たんだよ!？」

リョーコ

「だって暇なのよ」

咲

「サキの方はどうした・・・」

リョーコ

「今回の狂った台詞と大量の血を間違っつて飲んでちゃって『リョーコ』
『・・・喉が痛いよ』って言うてきたから病院に連れていったわ」

亮

「・・・そっですか・・・」

リョーコ

「いやー、簡単に出番終わっちゃったな。・・・もうちょっと事故に見せかけて亮を殴ればよかった」

亮

「おい、聞こえてるぞ」

リョーコ

「あ、ゴメンね、わざとなのよ」

亮

「でしょうねえ！」

蓮華

「・・・随分と仲がいいのね・・・」

桃香

「・・・あ、咲君。詠ちゃんから伝言」

咲

「ん？なに？」

桃香

「『一緒にご飯食べにいかない？・・・べ、別に大した意味はないからね！？』・・・だって」

亮&リョーコ

「ツンデレ・・・」

咲

「・・・仕方ないな、行ってやるか」

ガチャ、バタン。

亮

「いや、まだ後書きの途中なんですけど・・・」

蓮華

「なら、今回はここまでいいでしょう？」

亮

「・・・それじゃあ、次回の真似と開閉と世界旅行」

桃香

「次回もまた見てねー！」

蓮華

「そ、その・・・思春も誘って私達もご飯を食べにいかない？」

亮

「・・・いいぜ、行こう」

ガチャ、バタン。

桃香

「・・・」

リョーコ

「・・・劉備、ドンマイ」

復活(サヨナラ)(前書き)

早いですが今回、于吉と決着がつきます。勝つのか負けるのか、そして世界はどうなるのか?ではどうぞ。

復活！サヨナラ！

「・・・来たぞ」

「・・・ああ」

俺達は迫り来る敵を見据える。すると、

『ハハハ、まだ諦めないんですか？もう貴方達に仲間はいませんよ』

「・・・それはどうかな」

『なに・・・？』

「やれ、咲」

「・・・世界の壁よ・・・開けえ！」

その瞬間、一面に今まで廻った世界の皆がその場に現れた。

『な・・・そんな馬鹿な・・・！その世界は消えたはず・・・まさか！』

「そうさ・・・外史は人の思いや想像で創られる・・・俺と咲は消えた世界のことを思い、想像して1から創りあげたんだ！！」

『そんなこと・・・ありえない！ありえませんが！』

「うるせえよ・・・恋を・・・返してもらっぞ！」

一気に突っ込んでいった・・・

「けど・・・やっぱり数が多くないか・・・？」

「うるさい！前見ろ、前！」

大量に迫る敵・・・

パンツッ！

ドスッ！

ドガンッ！

銃弾や矢が大量に降り注ぐ。

「・・・この報酬は私達の世界にしておこうかな」

「真名！」

「・・・どうした大澤亮。貴様の力はそんなものか？」

「アーチャー・・・！」

「私達もいますわよ？」

「紫苑よ、もつと派手に行こうではないか！」

「ふ……こういうのも、良いものだな……」

「さあ行け小僧共！」

「紫苑……桔梗！」

「夏候淵に祭さん！」

そして開いた道を駆け抜ける。

「次だッ！」

そして俺達より早く敵を切り捨てるのは……

「神鳴流奥義……百花繚乱！」

ズガアアッ！

「この剣に斬れぬものなどあんまりない！」

ズバアッ！

「……約束された勝利の剣エクスカリバー……！！！」

「我が青龍の一撃を受けてみよ！」

ズドオオオンッ！

「刹那、妖夢！」

「セイバーと愛紗！」

「ここは任せて下さい！」

「亮さんと咲さんは明命達を！」

「咲殿、早く！」

「行ってください、亮」

「・・・頼む！」

その後も皆に助けられていく。

「・・・今度は完全に囲まれた・・・！」

「大丈夫だ！・・・誰か助けしてくれる人はいないかぁー！ツ！！」

「・・・ここにいるぞぉー！ツ！！」

「シャオもいくよ！」

俺達の前に現れる二人の影。

「蒲公英！・・・ホントに来るとは・・・」

「シャオ・・・！」

「・・・話しは後だよ、咲」

「今は明命達を助けることを考えなくちゃね」

「だけどお前らじゃ・・・」

と思った瞬間、敵が落とし穴に落ちた。

「・・・え？」

「蒲公英・・・？いつ落とし穴掘る暇が・・・いや、今はいいや。ありがとな！」

走る。目的地へ向けて。

「また・・・！」

そこでとんでくる魔法の矢。

「・・・間に合いました！」

「正義の味方・・・まだ諦めてない！」

「これで俺も役に立てたかな・・・？」

「ネギ、士郎！」

「一刀まで!？」

「俺だけじゃないさ」

そして敵を殲滅していく味方がいた。

「ハアーツハツハ!この華雄に勝てると思ったのか!？」

「どけどけーっ!張遼様のお通りやーっ!！」

「元呉王の剣の錆になりなさい!」

「華雄・・・霞・・・」

「雪蓮!」

「ここは僕達に任せて下さい!」

「・・・悪い!」

そして佇む二人の影を見つける。

「……博麗霊夢」

「高町なのは……」

「……待っていたわ。こうなったら外史云々じゃなく、個人的な

感情で相手をさせてもらっわ」

「もう・・・間に合わないの・・・」

今度こそ勝負か？そう思った瞬間、後ろから弾幕が降り注いだ。

「・・・あら、久しぶりね、霊夢」

「・・・お腹空いたな」

「・・・霊夢」

「な・・・アンタ達・・・」

「紫に幽々子にレミリア・・・」

「いきなさい。外史の運命は貴方達に委ねるわ」

「ありがとう・・・行くぞ、咲！」

「……見えた……！」

まだかなり遠いが確かにカプセルが見えた。だが、敵も意地があるのか、今まで以上の敵が押し寄せてくる。

「……っしゃおらあっ!!」

「ふんっ！」

新たに現れた二人によって敵は粉碎される。

「おいおい、約束はどうなったんだよ？」

「よもや貴様、勝ち逃げするつもりでは無かるうな？」

「翠……！焔耶……！」

そして次の影が……

「……やはり、まだ未熟だな」

「ご無事ですか？亮様」

「思春！亞莎！」

「……さっさと行けよ！それで世界を救った後に……」

「わかってるさ！ケリをつけよう！」

「いいだろう。今度は私が勝つ」

「思春、亞莎・・・武器、まだ借りるな」

「・・・行け！」

「明命を・・・頼みます！」

これで後少しだ・・・後・・・少し・・・！

だが、ようやく目の前に辿り着いたと思った瞬間、敵がまた現れてきた。

「……ッ！亮！行けよ！」

「咲ッ！？」

「お前なら瞬動が使えるだろ？今なら抜けられる！」

「……わかった！」

俺は瞬動を使い、一気に于吉に迫る。

『……躊躇すれば負けるわ』

リョーコの言葉を思い出す。俺はケータイを握り締める。

「……ッ！……モーションキャプチャー！蓮華！」

真似するのは自分が剣と盾になると誓った少女。俺は南海霸王を振り上げる。

「ウオオリヤアアッ！」

ズバアアッ！！

何か障壁のようなモノに攻撃を阻まれ・・・

ピシッ

「な・・・」

記憶が砕けた。それと同時に物真似も解除される。

「く・・・ああ！モーションキャプチャー！衛宮士郎！」

Fateの正義の味方を目指す一人の人間。

「トレースオン——投影開始」

造り出すは黄金の剣。先ほどと同じように剣を振り下ろす。

バキインッ！！

障壁にヒビが入る。だが、

パキン

「く・・・」

また砕けた。だが止まるわけにはいかない。

「モーションキャプチャー！ネギ・スプリングフィールド！」

「調子に・・・乗るな！」

于吉は黒い波動を撃ち出し始める。

「デフレクシオー
風楯！！！」

ズガンッ！

そして瞬動を使って障壁の弱まっている部分を狙う。

「桜華崩拳！！！」

パライイインッ！

遂に障壁を砕くことに成功した。

パリン

もう・・・記憶が持たない・・・けど！

「・・・亞莎・・・キャプチャーコンプリート！」

腕に力を込める。そして、

「ウラアアッ！！！」

于吉をぶん殴る。

ドゴオオンッ！！

「ぐう・・・」

ピシッピシッ

遂に、自分を慕ってくれた、ごま団子の大好きな少女が記憶から消えていく。

「う、ああああ！」

腰の鈴音を引き抜く。

「頼むぞ思春……！キャプチャーコンプリート！」

鈴音を使い、素早く斬り込む。

「ハアツ！セイツ！ウラツ！」

そして……いつも鍛錬に付き合ってくれた、自分に敵しかった少女の記憶も消えた。

「ぐう……！」

于吉が撤退しようとする。……逃がさない。

目に見えたのは明命のカプセルの横に置いてある魂切。俺は魂切を手に取るが……

「……明命の……」

記憶は失いたくない……けど！

「キャプチャー、コンプリート」

最後の力を・・・記憶を振り絞る。

「――闇夜を駆ける疾風の一撃――^{コンセツ}――!!」

魂切を・・・振り下ろす。

「明命――ツ――!!」

ズバァァンツ!!

「ぐ・・・は・・・おのれ・・・おのれえええええええ!!!!!!」

于吉は消えた・・・そして、

「よかった・・・」

明命の記憶が消えなかった・・・だけど、オレがわからなくなってきた。

「やば・・・」

意識が黒ずんでいく。

「あ・・・」

ゴメン・・・ミン、ナ・・・

咲
〜

「・・・ツ！・・・敵が・・・」

大量にいた敵が消えた。俺は走り出す。

「・・・亮！」

そこにいたのは倒れた亮だけだった。

「・・・開け」

明命達を入れていたカプセルを開く。二人は力無くその場に倒れ込む。

「・・・咲！」

皆が走ってくる。

「・・・亮！」

呉の皆や桜やライダー、刹那や妖夢が亮に駆け寄る。

「亮……！しっかりして、亮……！」

蓮華が亮を揺らす。

「……亮、様……？」

「お姉ちゃん……亮、どうなっちゃったの？」

亮は魂切を握り締めたまま、虚ろな、何も見ていない目を開いているだけだった。……例えるなら、息をするだけの人形。

「め、冥琳様……亮さんが……」

「穏……言うな」

「この馬鹿者が……なぜ自分を犠牲にしたのじゃ……」

「私を……死の運命から救ってくれたのに……私は、亮を助けられないの……？」

「雪蓮……」

「……その覚悟だけは認めてやるぞ、亮」

「そんなのって……わたしも、助けてくれて、兄さんも元気にしてくれたのに……」

「サクラ……」

「……くそ、お前が壊れちゃダメだろうよ、亮」

俺は言葉を吐き捨てるように言う。

「……咲」

「一刀……土郎」

「……治らないのか？」

「……流石に人格や記憶までは……」

俺はそれを横目に歩き出す。

「……咲！」

「詠……」

「アンタ……何処に行くつもりよ……」

「……このままじゃまた世界が融合を始めてしまう。……世界を、また基本から創り直して融合できないようにする」

「それで……アンタは戻ってくるの……？」

「……ああ」

「ちょ、待てや咲ィ！その間は怪しいんやけど!？」

「貴様、まさか・・・」

霞や華雄にも気づかれる。

「・・・やらなきや、ダメなんだ」

そして歩き出そうとした瞬間、

「・・・ちんきゅー・・・きーーっく!!」

ガスッ!

「ぐは・・・!」

「待つのです！ねねとの約束を忘れたのですか!？」

「ねね・・・この空気でちんきゅーきっくは・・・やめてくれ・・・」

結構痛い。

「咲さん・・・」

「月も来たのか・・・」

これで董卓軍集合か・・・

「恋殿は・・・恋殿はどうなるのですか！ねねは・・・悲しむ恋殿を見たくはないのです！」

「・・・悪いな、どのみち・・・」

体に闇がまとわりつく。

「・・・どのみち、俺ももうじき“壊れる”・・・目の前で壊れるのを見られたくない」

「咲・・・待ってよ！まだ返事が・・・ボクには・・・」

俺は振り返る。

「ああー・・・俺も大好きだよ・・・詠」

俺は走り出した。

「あ・・・待って、待ってよ、咲ー！！！」

「止めとき買戻ち！ウチらに咲を止める資格はあらへん！」

「いや・・・いやああ！！！」

そして鏡が置いてあることに気付いた。

「・・・これが」

于吉達が集めていた力。これを使えば世界を直すことも可能だ。・
・亮の野郎、俺に全部の仕事押し付けやがって。

「よし・・・やるか」

「・・・咲！」

「・・・ツ！」

振り返る。そこには壊れた亮を抱えた恋と明命がいた。

「お前ら・・・！なんで・・・」

「・・・恋も手伝っ」

「ダメだ！帰れッ！お前らまで捲き込むわけには・・・」

「・・・咲、恋は・・・咲のいない世界に居たくない」

「・・・」

「私も・・・亮と一緒に居たいです・・・」

「・・・わかった。手伝ってくれ」

鏡とキープレードを持ち、掲げる。

「・・・」

想像する。一つ一つの世界を。万が一融合しても矛盾が起きず、崩壊しない世界を。

「・・・世界よ・・・」

そして・・・開けた扉を・・・

「・・・閉じる」

眩いた瞬間、辺りが光に包まれる。消えゆく意識の中、亮が動いた気がした・・・

復活（サヨナラ）（後書き）

星

「・・・私は、咲殿とはそれなりに会話していたような・・・主でさえ出番があったのに・・・」

明命

「・・・はあ」

恋

「・・・どうしたの？」

明命

「亮が・・・亮が私を置いて蓮華様達とご飯を食べに行ってしまったのです・・・」

恋

「・・・咲も、詠と二人きり」

二人

「……はあ」

一刀

「こうして顔を合わせるのは初めてだよな、士郎」

士郎

「そう、だな……」

一刀

「やっぱり大変か？女だらけって」

士郎

「……まあな。でも俺は一刀を尊敬するよ。……俺の家よりスゴいからな」

一刀

「……国単位だからね」

ネギ

「……僕も……」

士郎

「……あれ、もしかすると俺が一番数が少ないか……？」

ガチャ、

なのは

「ネギ君いますか？」

ネギ

「あ、なのは」

なのは

「今から私の世界の人を紹介するの！」

ネギ

「それじゃあ僕もアスナさん達を紹介するよ」

士郎

「お前達って作品違うよな？」

一刀

「随分仲がいいんだな」

ネギ

「はい。話してみたら気が合いました」

なのは

「こうしてお友達になったんです。・・・」

士郎

「・・・なんだ？」

なのは

「衛宮・・・士郎さん？」

士郎

「・・・そうだけど？」

なのは

「私のお父さんも士郎って名前なんです！」

士郎

「・・・それって名前で呼びづらくないか？俺」

なのは

「いえ・・・大丈夫です！慣れますから！・・・それじゃあネギ君、
行こう？」

ネギ

「うん、今いくよ」

ガチャ、ボタン。

「・・・あー、ネギ！また変な女を連れてる！・・・」

「・・・ア、アーニヤ！？何でここに！？・・・」

士郎

「大変だな・・・」

一刀

「・・・俺達も人のことは言えないけどな」

ガチャ、

セイバー

「こんなところにいましたか士郎」

愛紗

「ご主人様、皆がお呼びです」

士郎

「・・・それじゃ、次回の真似と開閉と世界旅行」

一刀

「次回もまた見てください」

選択（前書き）

同日二話目投稿。彼らはどうなるのか・・・えらい短いですが、ではどうぞ。

選択

亮

「う……」

「目が覚めたかの」

「え……」

そこはあの一面白い世界だった。

「あれ……？俺、壊れたんじゃ……」

「ここはあのせमितいなものじゃからな。ここでは自分を維持できるのじゃよ」

「……そつだ！世界はどうなった!？」

「……俺達が修復したよ」

「咲……」

「……しかし困ったのう……お主達の“器”はもう……」

「……あの、お爺さん……」

「ん?」

「一つ・・・教えてくれ」

「・・・何かの」

「・・・俺達は、正史の人間じゃないんじゃないのか？」

「・・・どういう意味かな？」

「・・・あり得ないんだよ。そもそもいくら存在を修正しようと“正史の人間”が外史にいたら矛盾が絶えないだろ？」

「む・・・」

「そもそも俺達は死んだんだろ？・・・そんなご都合主義で神様が生き返らせてくれる訳がない。他にも死んだ奴はいるはずだ。なぜ俺達を選んだ？もしかしたら一番最初に俺達の世界・・・“外史”が滅んだんじゃないのか？」

「・・・うむ、わかった。話してやろう」

爺さんは語り始める。

「まずは・・・お主の推理は滅茶苦茶で外れてはおるが、結論は間違っておらん。お主達は外史の人間じゃ」

「やっぱり・・・」

俺は顔を軽く赤くしながら言う。

「平気なふりをしてても顔赤いぞ、亮」

「……るせえ！」

滅茶苦茶な推理で悪かったな畜生。

「実は正史の人間は外史に干渉することはできないのじゃよ」

「え……でも……」

「そうじゃのう……例えば、人気作品のリメイクがあるとするとするじやろつ？」

「ん……ああ、シーン追加とかシナリオ改変とか……」

「あれ？いきなり干渉してるんじゃ……」

「それは違うの。リメイク前とリメイク後ではまったく別の外史になるのじゃよ」

「……頭痛くなってきた」

俺は頭を抑えながら言う。

「じゃがな、完結しない外史が増えてくると正史にまで負担がいき……正史が消えてしまう」

「……それで？」

「しかし、それではイカンと儂よりも上級の神が一つの手段を作った」

「外史の人間の干渉……」

「うむ。そこでちょうど外史の出番を終えたお主達を・・・」

「蘇らして外史の物語を終わらしていったのか・・・」

「そうじゃの。ちなみに、正史が創った物語までを終わらせれば良いので・・・」

「今の蓮華達の物語は終わらせなくてもいい・・・」

「そうじゃ。・・・まあ、その位か・・・お主達、これからどうしたいかの？」

「どうしたい・・・って言われても」

「俺達は壊れちまつてるからな・・・」

「まだ道はあるぞい」

「え・・・!?!?」

「あるではないか、死んでも行ける世界と、まったく常識が通じない世界が」

「・・・!」

「その世界を廻っている間に儂が新たな器を創っておこう」

「・・・ありがとう」

「礼はいらん。代わりにその物語も終わらせることができるのじゃないかな」

「……意外に気前がいいな」

「ふ……では、選ぶがよい」

「……」

死んだ世界か……幻想郷か……

選択（後書き）

今回は希望を取ろうかと思えます。

・Angel Beats!

・東方

いきなり選択肢が減ったのはご都合主義です（笑）

それではまた次回会いましょう！

答え（前書き）

新たな世界へ行きます。・・・ではどうぞ。

答え

「・・・そうか、その世界に決めたのかの？」

「・・・ああ・・・あとさ、爺さんって行く世界は選べないんじゃないかなかったけ？」

「・・・まあ、力を使えば選ぶことも可能じゃが・・・」

「じゃが？」

「・・・力の半分を使ってしまふのじゃよ」

「・・・そうなんだ・・・」

「更にお主達の器も必要となると・・・うむ、儂の力は一割ぐらいになるかのう」

「・・・そこまでしてくれるなんて・・・」

「なに、気にすることはないぞ。元々外史の出番を終えたお主達を無理矢理儂が廻らしているのじゃからな」

「・・・いや、俺は感謝してるよ、じじい」

「咲・・・」

「じじいのおかげで俺は恋や皆と出会えた」

「・・・確かに、そこは感謝だな」

「・・・」

「・・・そうだ、明命達は・・・」

「・・・お主達と共にいたせいか器は壊れてしまったのじゃが・・・
安心せい。キチンと造っておくからの」

「・・・そうか」

「んじゃあと一つ・・・詠達に・・・俺達は消えてないことを伝えたいんだけど・・・」

「儂が伝えておこう。・・・準備はいいかね？」

俺と咲は頷く。そして消えていく意識。

「ん・・・」

目を開けたくない。絶対に。

「・・・諦める、亮。・・・やっぱり」

渋々目を開けると、咲は言った。

「・・・また落ちてるから」

「ウオアアアツ!?!」

「はぁ・・・掴まれ、ほら」

毎度よろしく咲に助けってもらって降りていく。

「・・・ん?」

何かが聞こえる・・・

――背後にはシャッターの壁 指先は鉄の匂い――

「・・・歌?」

「・・・おい、あそこ!」

咲に言われて下を見ると、二人の人間が見える。片方の男は拳銃を構え、片方の少女は銃弾をもともせずに歩く。

「・・・どつちを助ける?」

咲がニヤツと笑いながら言うてくる。

「物語的には・・・男だよな」

「・・・だよな」

俺はボードから飛び降りて剣を振り下ろす。

「・・・ッ!」

少女は両腕から刃を出してそれで防いだ。

「よっ、と・・・」

「な、何だよお前!？」

後ろからこの物語の主人公・・・音無が言ってくる。

「んっ・・・天の御遣い・・・かな？」

「天・・・?」

「いや、亮・・・この世界でそれはマズイと思うけど・・・」

咲も降りてくる。と、その時、何かが飛んできた。

「うお!?!」

何とか避けて少女は飛んできたものを弾く。

「・・・チッ、外したか・・・」

一目で喧嘩っ早いのがわかる男が来た。

「待たせたな！」

「一番弱エ所狙われたんじゃねえのか!？」

「まだハンドソニックだけだよ！」

「とにかく広い場所へ！」

「おい、あそこに天使の他に二人いるぞ！」

たくさん人がやって来た。

「構わねえ！まとめてやっちまえ！」

「嘘お!？」

「来るぞ、亮！」

そして男達は一斉に銃を構え、

「・・・つてえ！」

バババババン!!

「く・・・干将莫耶！」

「はいよー！」

咲から干将莫耶を受け取り、弾丸を弾く。・・・着々と人間離れしてるな・・・

「く・・・」

「亮！真似は・・・」

「試したいけど・・・」

（・・・大丈夫じゃぞ）

（爺さん！？）

（お主達にはちゃんと強化を施してある。・・・能力を使っても壊れないはずじゃ）

「・・・よし！」

ケータイを構える。

「・・・」

「・・・亮？」

「・・・何に真似しよう・・・」

「さっさと選べアホー！！」

「んじゃ、銃には銃で行くか！モーションキャプチャー！龍宮真名

「！」

物真似が終わると同時にライフルを構える。

「……ッ！」

パンツ！ガチャ、パンツ！

相手の銃のみを的確に撃ち抜いていく。その時、紙吹雪が飛んできた。

「は……？」

それと同時に退いていく男達。

「ふう……」

俺達は少女に話しかける。

「くんばんは……かな？」

「……もう門限は過ぎてるわ。早く寮に戻りなさい」

「え……」

「いやいや、それは素っ気ないだろ、生徒会長」

「生徒会長だからよ。……早く戻りなさい」

「……戻るも何も、今この世界に来たばっかなんだけど……」

「・・・そうだったの？でも大丈夫。もう部屋割りも済んでいるから」

そのまま歩いていく少女。

「・・・俺は大澤亮。お前は？」

「・・・立華、立華 奏」

「・・・じゃあな、奏」

俺達はとりあえず部屋にいてその日は休んだ・・・・・・・・

答え（後書き）

日向

「へへ、本編のカオスなキャラコメから脱け出して、やっとここにこれたぜ！・・・おっと、お前は誰だっけ？感じだよな？俺は日向だ。今回少しか喋ってないけどな」

蓮華

「・・・誰だお前は？」

日向

「ッ！？ここにまで来やがったかゆりっ・・・ペ？」

蓮華

「・・・ゆりならAngel Beatsの部屋にいるぞ。と言っかさつきから私は、間違われているのだが」

日向

「・・・あぁいや悪い悪い。あまりにも声が似てるもんだから・・・」

蓮華

「・・・なら間桐も呼ぶか？」

日向

「間桐？誰だそれ」

慎二

「・・・僕のことか」

日向

「音無い！？……ってまた別人かよ……」

慎二

「おいお前。あのピンク頭は知り合いか？」

日向

「ああ？ユイのことか？」

慎二

「そう、ソイツだよ！アイツ、僕の髪を見ていきなりワカメって言いやがったんだ！」

二人

「……」

日向

「……ま、頑張れよ」

蓮華

「応援は、してやる……」

慎二

「何だよその憐れみを込めた目は！？くっつそあー！ー！！絶望したあ！」

ガチャ、ボタン！

日向

「……そんじゃ、今回はここまでにしてるか」

蓮華

「次回の真似と開閉と世界旅行」

日向

「絶対に見てくれよな！」

対面（前書き）

・・・誰か忘れているメインはないだろうか・・・ではどうぞ。

対面

「……よし」

俺達は校長室に向かう。

「……んで、何処にあるんだ？」

「……咲、偉い人の大体は高いところにいるよな」

「知らないなら知らないって言えばよ」

結局、そこら辺の一般生徒に場所を聞いて校長室に向かった。

「……ここだな」

そしていざ入ろうとしたら……

「え……亮……？」

「は……」

「……もしかして、咲？」

振り返ると、そこには……

「あ……明、命」

「……はは」

あんのじじい……随分と仕事が早いじゃねえか……

「……亮！」

「……咲！」

明命が飛び込んでくる。

「よかった……！よかったです……！」

「……悪い、心配かけた……」

「……咲、無事」

「ああ。俺が簡単にくたばるとでも……いや、くたばりましたね、うん」

咲はここが死んだ世界であることを思い出して言い直した。

「……丁度いい、今から校長室に入るぞ」

「……亮、合言葉は？」

「……あ」

忘れていた……合言葉言わないと罠が発動するんだ……

「えと……神のみぞ知る世界？」

「それ違う」

「天使ちゃんマジ天使」

「違う」

「ほ……仏の顔も三度まで？」

「ちつがあーう！わざとか？わざとなのか、亮！？」

結構マジだ。

「……誰だ！」

中からハルバードを持った男が出てくる。

「あ、丁度いいな、失礼しまーす」

「おい貴様！無視するな！」

そして中に入った瞬間、一斉に銃を構えられた。それに反応して武器を構える明命と恋。

「あー、まてまて、武器を納めてくれ」

そしてリーダーであろう少女が話しかけてくる。

「……何者？……いや、話しは聞いているわ。天使の仲間だそうね」

「は？なんでさ」

「……皆の証言よ」

「いやいや、こっちはこの世界に来たばかりで、その銃が下手な男を助けたのに、コイツらから一斉掃射を喰らったから仕方なく応戦したんだけど？」

「……待ちなさい。……よく考えたら、この二人を撃って言ったのは誰？」

「……」

全員の視線がハルバード男に向けられた。

「な、ふざけるな！第一貴様らもノリノリで発砲してただろ！」

「……そういやコイツ……俺をハルバードで狙ったよな？」

「狙われてたな」

「……つまり、野田君の勘違いってわけね……」

「……そう言っただけ少女はため息を吐く。

「……話を聞くに、貴方達四人はこの世界に最近来て、いきなり私達のメンバーに迷惑をかけられたわけね」

「ゆりっぺえ！俺はなあ……！」

「少し黙ってて。……いきなりだけど」

「いいぜ」

「戦線に……って早っ!？」

「だって俺は記憶が残っているからなんでここにいるのか理解できるし」

「つーか、明らかにデザインが違う制服を着てれば、コイツら、何かやるな?ってワクワクするし」

「そ、そう……」

「音無の時と違って随分あっさり決まったな、ゆりっぺ」

「お、おい待て!……貴様らが戦線に入るのに相應しいか俺が試してやる!」

「お、入団テストかい？」

咲が目を輝かせる。俺は青い髪の男に近寄る。

「(……入団テストなんてあるのか?)」

「(普通はねえよ。ま、適当に付き合っっちゃってくれ。俺は日向。お前は?)」

「（亮、大澤亮だ。亮って呼んでくれ）」

そうこうしている内に、校長室にいた殆どが校庭に出る。

「・・・ふん。まずは貴様からだ」

「・・・なんで咲がノリノリだったのに俺が・・・」

「よっし、俺は新入りが勝つに食券十枚！」

「甘えよ日向。ここは手堅く野田に十枚だ」

「じゃあ僕も藤巻君と同じにするよ」

「なら、俺は新入りに肉うどんだな」

「・・・浅はか也・・・」

「私は、こういふのには参加しません」

「音無とゆりっぺと岩沢はどうするんだよ？」

「俺？・・・新入りだ」

「私は止めておくわ」

「・・・興味ない」

「……さて、逃げるなら今のうちだぞ？」

「……いや、逃げる気ないし」

「いい覚悟だ……武器を持たずに俺に挑むとはな……」

ハルバードをブンツ、と振り回す野田と呼ばれた男。……あと、さつきから視界にやったら踊りまくっている奴がいたが、スルーしよう。

「……つつか、何処を見ているんだ？」

俺は拳を見せる。そこには装着済みの人解があった。

「……武器は既に装備してるぜ？」

「……上等だア！百回死ねえ！！」

上から振り下ろされるハルバードを避けて……右拳を振り上げる。

ゴギャンツッ！

……いーつもひーとーりであーるいてた……

ドシャアッ 地面に落ちた音。

「ぐほあ・・・」

「やるじゃん新入り！」

「いや・・・大丈夫か？あね。結構本気で殴っちゃったんだけど・・・」

「心配はいらないわ。ここは死んだ世界。すぐに復活するわ」

ゆりと呼ばれている少女がそう言った。
バキインッ！！

「げはあ・・・」

・・・野田が咲によって空を飛んでいた。

「……ふ、女が相手か。……面倒だから二人一辺にこい」

「……アイツ、流石にプライドが潰れていつてるよな」

「……僕もそう思う」

「……浅はか也」

「……にしてもバカだな……」

俺はポツリと言う。

「ほう……貴様も長物を使うのか……だが……」

そう野田が言った瞬間、恋が懐まで接近する。

「なにい!?!」

カキインッ!

「……お……すげえ、アレを防いだのか」

が、その直後。

「セイツ!」

「……えい」

ズガンッ！

明命と恋の一撃が当たり、野田が空を舞った。

「畜生・・・畜生・・・」

野田は見事な絶望のポーズをしながら絶望していた。

「・・・まあ、貴方達の実力はわかったわ。・・・あたしは、この戦線のリーダーを務めているゆりよ、貴方達は？」

「俺は大澤亮。亮って呼んでくれ」

「・・・五十嵐咲、俺も名前で呼んでくれ」

「亮君に咲君ね・・・それじゃあ、戦線のメンバーを紹介するわ。まず、そこのおちゃらけた感じの人は日向君。一応この戦線の古参よ。その隣にいるのが音無君。音無君も昨日入ったばかりの新入りだから、仲良くしてね。そっちの長ドスを持っているのが藤巻君。そこにいるのは特徴が無いのが特徴の大山君。そこで絶望しているのが野田君。身体が大きいのは松下君。柔道五段だから、みんな親しみを込めて松下五段と呼ぶわ。そっちの眼鏡をかけたのが高松君。」

ぶつちやけバカよ。そこで踊り続けているのがTK。本名は誰も知らないわ。あそこで浅はか也って言っているのは椎名さん。私の隣に居るのが岩沢さん。陽動を担当しているわ。・・・他にも色々いるけど、今はこんなところね」

皆に軽く挨拶する。そして明命と恋も挨拶する。

「私はしゅ・・・明命です。よろしくお願いします」

「恋は・・・恋」

「・・・それじゃあ、これに着替えてもらいましょうか」

そう言って差し出されたのは戦線メンバーと同じデザインの制服。

「・・・んじゃ、着替えてくるか・・・」

俺達は空き教室を使って着替える。

そして着替え終わって、ゆりからこの世界について色々聞いた。ここは死んだ世界。つまり理不尽な死に方をした少年少女がここにくるらしい。そこで“天使”と呼ばれる少女とずっと戦っている……だそうだ。

「……今日は特にオペレーションは無いわ。じゃ、各自解散！」

俺はとりあえず校内を巡ることにした……

そしてしばらく歩いていたら、何かが聞こえてきた。

「……歌？」

空き教室から聞こえてきたので、中に入る。

「……あ、アンタは……」

中に入るとそこは戦線の陽動部隊、ガールズ・デッド・モンスター、略してガルデモのメンバーがいた。

「亮だよ、岩沢」

「ああ、そうそう。……何の用？」

「いや、歌が聴こえてきたからね、ちょっと見学」

「……岩沢、コイツが例の新入り？」

「そうだよひさ子」

そして後ろの二人も軽くお辞儀してくる。

「岩沢以外は初めて会うよな。俺は大澤亮、亮って呼んでくれ」

「あたしはひさ子だ。よろしく、新入り」

「私は、関根です」

「わたしは入江です」

そこで入江が使っているドラムを見て、学園祭で皆とやったライブを思い出す。

「……どうかした？」

「音楽に興味があるのか？」

「いや……前に俺を含む新入り四人で学園祭ライブに出たことがあってさ、その時のことを思い出した」

「四人……記憶無し男以外の？」

「そ。だから懐かしくってね」

実際大してあの時からあまり時間は経っていないけど……

「あ、ちなみにどんな楽器を使っただんですか？」

「その質問しているお前の楽器なんだけど……」

入江を指差して言う。

「ドラム……ですか？」

「そうさ。……まあ、大して長くやってたわけじゃないんだけどね」

「ふうん……」

「・・・悪い、練習の邪魔したかな？」

「いや、いい気分転換になったよ。ありがとう」

「ついでに私達の演奏を聴いていきませんか？お安いですよぉ？」

関根が手を擦りながら言うてくる。

「しおりん・・・お金とるの？」

「なに言ってるのみゆきち。稼げるときに稼がないと」

「・・・俺が思うには、その悪代官みたいなポーズがよく似合う女子がいることに驚きだよ」

「・・・同感です」

俺は肩をすくめて言う。

「・・・でも、聴かせてもらうか、明命」

パチン、と指を鳴らすと・・・

「・・・」

一瞬で明命がやってくる。

「え・・・」

「・・・何処にいた？」

「まさか・・・ゆ、幽霊・・・？」

「いや、私達幽霊みたいなモノだから・・・」

「・・・新入りだよ」

「明命と申します。皆さん、よろしくお願いします」

「なんつーか、椎名の真面目版って言うか・・・」

ひさ子が頭を掻きながら言う。

「・・・とりあえず、やろつか！二人の観客にとびっきりの歌を歌おう！」

始まった演奏を聴きながら思った・・・

「・・・（岩沢、随分と生き生きしてるな・・・）」

演奏を聴き終わり、ガルデモに別れを告げてから再び校内を歩く。

「……良い曲でしたね」

「そうだな、呉の皆にも聴かせたいな……」

「……そうですね……」

「……CDないかな」

「……無いと思いますけど」

「……まあ、作る気になれば作れるんだらうけど、

「・・・Hello！」

「はいハローハロー」

TKをスルーする・・・だって長々と言ってたけどハローしか判らなかつた。

「・・・お、亮に明命じゃねえか」

「日向」

「日向さん」

「あかさ・・・誰もツツコミをいれないからスルーしてたけどよ・・・」

日向が多少言いくそうにする。

「なんだよ？」

「お前さん・・・昨日、姿が変わってなかつたか？」

「ああ、それね。俺は他者の真似ができるんだよ・・・どうもこの世界に来てからできるんだよ、な、明命？」

俺は目で明命に合図する。

「は、はい！そうなのです！」

「・・・凄えな・・・ま、性格がマトモだから別にいつか」

「あ、判断基準そこなんだ」

「まあな・・・ほら、ウチの戦線って変わった奴が多いから・・・」

「なるほど・・・」

「・・・っと、そうだ音無見なかったか？」

「ん？見てないけど・・・何で？」

「ちよつと用事があるんだよ」

「・・・コレなのか？」

顔に手をあてる。

「違げえよ!？」

そんな感じで日向とも別れた。そして・・・

「・・・お、新入りじゃねえか」

「藤巻に・・・大山か」

「何をしているのですか？」

「ただ話していただけだよ。オペレーションが無いとやることないからね、僕達」

「……それとよ、いつもドス持つてる俺が言えることじゃねえんだが……お前ら、結構奇抜だぞ」

「そうか？」

俺達の服装は……

SSSの制服に……人解と鈴音を装備しているだけ。明命は制服に背中に太刀を装備している。

「……でも、僕達も銃を常備してるんだよね……」

「……まあな」

その話も終わって夕方辺りに屋上へ行くと、音無とゆりがいた。

「おっす」

「あら、亮君達じゃない、どうしたの？」

「校内見学。……下手したら迷うからね、俺」

「……そうか？俺は大して迷わないぞ？」

「音無……方向音痴なんだよ、俺は」

「あ、そうなのか……」

その時、ゆりが何かを投げってくる。

「おっ……と」

それは缶コーヒーだった。

「コーヒー？」

「美味しいわよ」

俺は片方を明命に渡す。

「……うえ」

「明命？」

「……苦いのです」

いや、結構甘いと思うが……

「こつこつというのは思春殿が好きそうですね」

「いやいや、意外に甘いもの好きかもしれないぞ？」

頭の中に甘いものを口に含み、顔が緩んだが、慌てて顔を引き締め、思春が思い浮かぶ。

「……ッ！」

可笑しくなってバンバン地面を叩きながら笑いを堪える。

「・・・何やってるのよ？」

「頭でも打ったか？」

「りよ、亮・・・いくらなんでも失礼ですよ・・・」

そんな感じで一日は過ぎていった・・・

対面（後書き）

ゆり

「遂に来たわ！あたしの時代が！」

亮

「来やがった……」

大山

「ちなみに僕もいるよ」

日向

「なあよそうぜ？ただでさえ本編でカオスなコメンタリーをやったんだから、自重つてもんを……」

ゆり

「自重なんて言葉、あたしの辞書にはない！」

日向

「だろうなあ！」

蓮華

「……そうか、お前なのだな……」

全員

「え……」

亮

「お、おい蓮華……？何故に南海霸王を構えていらっしやるので

すか？」

蓮華

「ゆり……貴様という存在があったために私は、あんな目に……！」

大山

「す、凄い……声はゆりっぺそっくりだけど、性格は反対だよ！」

亮

「ある意味拗ねたりしたら呉の中でもやっかいだからな……」

日向

「……前回とは別人だぜ……」

ゆり

「ま、まあ落ち着きましょう？落ち着けば色々……」

蓮華

「……覚悟おお……！」

ガチャ、バタン。二人が全力で外に走っていった。

日向

「……結果オーライ、か？」

大山

「……凄いね……白蓮さんから色々聞いたけど、ここまで凄い

なんて……」

亮

「あれ？Angel Beatsの皆の部屋ができたのって、前話だよな？もうそんな他作品と仲良いのか？」

日向

「ここじゃ、外に出る度に必ずと言ってもいいほど誰かとすれ違うからな。俺も何人かは知り合いだけ」

亮

「……ま、公孫贇と大山は……普通同盟か。あと夏美も呼んで……」

大山

「……そうだよ、普通だけど何か？普通だって魅力はあるんだよ！」

日向

「おお、大山がコメンタリーモードに」

大山

「僕だって……好きで特徴がないわけじゃないだよ！」

亮

「大山が壊れたので今回はここまで！次回の真似と開閉と世界旅行！」

日向

「次回もまた見てくれよな！」

蓮華

「待てー！ーッ！」

ゆり

「く・・・なんであたしがこんな目「ー！ーッ！？」

降下作戦（前書き）

G W・・・どこにもいかずに家に籠る俺・・・どはぁいびや。

降下作戦

「ギルド降下作戦？」

ゆりから告げられた作戦だった。

「……降下……」

「どっした？音無」

「……高いのは、得意じゃないんだ」

「音無、その降下違う」

「咲君の言う通りよ、空からの降下じゃなくて、ここから地下へ降下よ」

「なんだ、地下に……って地下あ！？」

ゆりが言うには、この学校の地下にギルドを作っているらしい。ギルドが武器や弾を生成している。今は武器が少なくなったから、武器を取りに行く……だそうだ。

「今回はここにいるメンバーで行くわ」

「あれ？野田君は？」

「どうせあのバカは単独行動してるんだろつよ」

そして体育館のあの椅子が置いてある箇所にある地下への入り口から地下に降りる。

「……暗いな」

「おい、誰かいるぞ！」

藤巻がライトを照らすとそこには、ハルバードを煌めかせた野田がいた。

「うわー……バカがいた」

日向の素直な意見に頷く。

「音無と聞いたか……俺はお前をまだ認めていない」

「わざわざこんな所で待ち構えている意味がわかんないよなあ？」

「野田君はシチュエーションを重要視するみたいだよ」

「意味不明ね」

「……いつからいたの？」

「恋……それはツツコンじゃダメだ」

「……別に認められたくない」

「貴様……今度は千回死なせたらあつはあああつ!?!」

ズガンッ！ いきなり現れたハンマーが直撃。

ガゴンッ！ 野田、壁に打ち付けられる。

ゴンッ！ ハンマー追い討ち。

ガラガラ・・・ 壁が崩れて野田、生き埋め。

「臨戦態勢！」

「トラップが解除されてねえのか!？」

「ゆりさん、トラップって何ですか？」

「つまり、天使に対抗するための用意よ、明命ちゃん」

「・・・さっき連絡して解除させてなかったっけ？」

俺がゆりに言う。

「・・・ギルドが独断でトラップを再起動させたのよ」

「一体なんのために？」

松下も聞く。

「状況を考えるに敵・・・天使が来たんじゃないの？」

「とりあえずうだうだ考えてねーで進もう。天使がいるにせよいにせよ、俺達は武器を補給しに来たんだろ？それに、天使がいるなら倒さないと、ギルドが破壊されて戦力ダウンだぜ？」

「……亮君の言う通りね、行くわよ」

そして長い通路をゆりを先頭に歩く。すると、

「……！マズイ、来るぞ！」

椎名が声を出す。

「え、何が……」

音無が言った瞬間、天井を突き破って巨大な鉄球が出てきた。

「げ……」

「走れ！」

全員が一斉に走り出す。

「こつちだ！早く！」

椎名が誰よりも早く脇道に逃げ込む。・・・俺達四人より早いつて
どういうことですか。

「・・・咲、掴まれ！」

急転回出来ない咲を掴んで瞬動を使って脇道に飛び込む。

「ウワアアアツ！？」

・・・高松の悲鳴がこだました。

「・・・いくらここじゃ死なないからって罠が過激すぎるだろ」

「高松君以外は無事みたいね。・・・いきましよう」

そして次の狭い通路に入る。

「・・・開けられる？」

「もち無理だぜ」

全員入った時、入り口が閉まる。

「うわぁ！？しまった忘れてたよ！ここは閉じ込められるトラップ
だった！」

「そんな大事なことを忘れるなよ！」

「……浅はか也」

その時、明かりがついて、何かの起動音が聞こえる。

「……ッ！伏せる！」

俺は皆に向けて叫ぶ。

「な、なんだ！？」

椎名が煙り玉を投げると、一本のレーザーが見えた。

「……当たるとどうなるんだ？」

「最高の切れ味で胴体を真っ二つにしてくれるぜ」

「第二射来るぞ！」

「……危ない？」

「間違っても触れるなよ恋」

「……（コクッ）」

「第三射来るぞ！」

「第三射なんだっけ！？」

「Xだ！」

「あんなのどうやって避けろって言っただよ！」

「各自何とかして！」

「咲！」

「距離がありすぎだ！」

レーザーを避けていく面々・・・だが、

ズシャアッ！

「ぐほおうえいおあああ！？」

・・・巨体の松下がレーザーの餌食になった。

「バイオの映画でもあったよなあ、これ！」

「ああ！綺麗にサイコロステーキになってたよな！」

いくら何度も死体を見てきたからって後ろを見る気はない。

「開いたぞ！」

全員押し寄せようように外に出る。

「今度は松下か・・・」

大山が吐いていた。

「さすがにシヨツキング映像だったか……」

通路を歩いていたら、道の真ん中に食べ物が出てあった。

「……いくらなんでも、これは罠だろ」

音無が呆れたように言う。

「まったくだ、これに引っ掛かる奴なんて……」

「……お腹、空いた……」

「……って、恋!？」

恋がフラフラと食べ物に向かっていく。

「待ってって恋!こんな明らかに……」

咲が恋に近づいた瞬間、

ガタン！

床が開き、恋が落ちる。・・・咲の足を掴んで。

「あああつ！？恋、足を掴むなああああ・・・」

ボタンと閉まる床。

「「「・・・」」」

沈黙するメンバー。

「・・・行こうか」

次の部屋に来たとき、やっぱり起動音がした。

「トランプが発動しているわ！」

「ああッ！しまった忘れてたよ！ここは天井が落ちてくるトランプだったあ！」「だからそんな大事なことを忘れるなよ！？」

俺達は潰された・・・かに見えたが、

「『TK!』」

なんとTKが天井を支えていた。

「……ッ！Hurry Up!今ならまだ間に合う……OH……
・飛んでいって抱き締めてやれ……!」

「ありがとう」

「じゃあな」

「達者でな」

「頑張れよ」

「えっと……がんばですよ」

「……ソーリー」

皆が出口にたどり着き、天井が完全にTKを潰す。

「……TKまで犠牲に……」

「したんだろ、お前らが」

「……ま、次いこうか」

更に新たな通路に出る。

「……?」

「どうした、ゆり」

その時、地面が崩れる。

「しまったあ忘れたよう!ここはああああ……」

大山が落ちていく……つてマズイ!周りに掴むものがない!

「……つく!モーションキャプチャー!オーズ!」

腰にベルトが現れ、メダルを入れて変身する。

「変身!」

『タカ!ウナギ!バツタ!』

「ハアッ!」

足場に向かって触手を伸ばす……が、届かない。

「まず……!」

落ちるかと思った瞬間、

「亮!」

「明命!」

明命が触手を掴んでくれた。

「よっ、と……」

変身を解除しながら上に上がる。

「……サンキュー」

その時、

「きゃああ！？そんな所持てるわけないでしょ！？」

バシッ！

「うわあああ！？バカああああ……」

「……どうやら俺の変身を見ていたものはいなかったようだ。」

「……ゆり？日向は……」

「犠牲になっ たわ」

間髪入れずに答えを返された。

「……よくもまあ新入りのお前らが生き残ってるもんだな」

「藤巻……」

「次はお前らだぜ」

そう言った藤巻は・・・

「・・・水責めか・・・」

「コイツ・・・カナヅチだったのか・・・」

・・・藤巻は、水死体になってた。

「・・・ゆり、こつちだ」

椎名が先導して潜って先に進む。

「・・・ぶはっ」

俺達は出口にでた。

「・・・明命、大丈夫か？」

「・・・はい。呉の訓練の中には泳ぐ訓練もありますから」

「・・・納得」

呉は海戦が得意だからな・・・

「・・・ん？」

その時、上流から段ボールに入った子犬と子猫のぬいぐるみが見が流れてきた。

「あーっ！子犬が流されてるーっ！」

「お猫様が！！」

「椎名さん！ダメえ！」

「ちよ、明命！？」

二人は水に飛び込み・・・

「「不覚！ぬいぐるみだった（でした）ー！！！！」」

・・・滝壺に落ちていった。

「……明命……お前な……」

「つつか、あんなのも罷なのかよ」

「罷……なんだろうな。しかも椎名に意外な一面が……」

「案外カワイイところもあるんだな……ってゆり？」

ゆりはスタスタと歩いていく。俺は反対側にいたため、遠回りをする羽目になった。

「……待ってくれよー！音無、ゆりー！」

「……あ、悪い、忘れてた」

「……」

「……ゆり、どうしたんだ？」

「……丁度いいわ。亮君も聞いて……あたしは……」

ゆりから聞いたのは生きていたときの話。理不尽な運命に抗おうと決めるきっかけになった事件。

「……つまり、ゆりの姉妹達は……」

「死んだわ。……わずか三十分でね」

「……」

耐え難い沈黙が続く……

「でも、ま……強いよ、ゆり」

俺が言う。

「……どうして？」

「普通はそんな事があつたら人は“壊れる”……直らない程な」

「……」

「俺もそう思う。……さっきゆりは自分をリーダー失格とか言つてたけど、自分が何と言おうと評価を決めるのは他人だ。その他人からリーダーって言われているなら、間違いなくゆりはリーダーだ」

音無がゆりにしっかりと聞かせていく。

「さっすが、良いこと言うねえ」

「茶化すなよ」

「……さ、行きましょう」

何となく元気を取り戻したゆりが声をかけてくる……が、

「……いや、先に行ってくれ」

「亮君？」

「……天使が、来る」

「え……」

「早く行け！」

「でも……」

「いいから！走れ！」

ゆりと音無が走っていく。

「よし……物真似を……」

ケータイを取り出……あれ？

「ケータイが……あ」

ケータイはベルトのままだった・・・気づけ、俺。

「・・・でも、いいかもしれないな」

活躍している仮面ライダーだ。下手な真似よりマシかもしれない。

「・・・来たか」

「・・・あなたは」

「悪いね、奏。足止めさせてもらっつ」

「・・・」

奏はハンドソニックを出してくる。

「・・・変身！」

『タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！タトバ タ・ト・バ！』

仮面ライダーオーズに変身する。

「ウオリヤアアッ！」

爪を使って奏に攻撃する。

カキイインツ！

「・・・チツ、早いな・・・」

反応がやたら早い。今のは直撃だと思ったけど・・・

「ハッ、セイヤツ！」

キンッ！

カキキャンッ！

カアアンッ！

奏は一撃一撃対応してくる。

「・・・ッ！流石天使・・・ッ！」

「天使じゃないわ、あたしは生徒会長よ」

「知ってる、よ！」

一旦距離を取ってメダルを入れ替える。

『タカ！カマキリ！バツタ！』

ひたすら技で攻める。

カキキャンッ！

キキキンッ！

キンッ！

「・・・チッ、これでもダメか・・・」

「遅いわ」

だったら遅いなら遅いなりに……!

『サイ!ゴリラ!ゾウ!サゴーズ……サゴーズ!』

……パワーで攻めてやるさ!

「ウオオオオ!」

力任せの一撃は……

ブオン!

……簡単に避けられた。

「な……」

シャキインツ!

「ぐわっ!?!」

斬られ、飛ばされる。

「く……」

ここまで苦戦するなんて……下手したらサーヴァント並みかもな……

「……まだコンボを使っても平気か……?」

メダルを入れ替える。

『タカ！クジャク！コンドル！タ〜ジャ〜ドル〜！』
「……」

「く……」

奏の攻撃をほむ……タジャスピナーで防ぐ……だが、

「……！」

奏は回転して、高速で斬撃を繰り出してくる。

シャキーンッ！

「うわぁっ!?!」

直撃し、変身が解除される。

「くそ、強い……」

生身だったら既に戦闘不能の傷だらけだ。

「亮君！避けて！」

その言葉に反応して横に飛んで避ける。

パンッ！パンッ！

そして銃弾が飛び交う。俺はゆり達に近寄る。

「・・・間に合ったのか？」

「ええ、亮君のおかげよ」

「く・・・銃弾が・・・」

音無が悔しそうに呟く。見ると奏の周りに何か壁みたいなのができたかのように、銃弾が逸れていく。

「・・・！亮君、手伝って！」

「合点承知！」

ゆりはナイフを、俺は人解を構える。

「ヤアッ！」

「ウラァッ！」

カキヤアンツ！

奏は顔色変えずにそれを防ぐ。

「くそ・・・」

「音無、無理はするな！」

狙いを必死に定めている音無に声をかけた……その時、

「亮君！」

「……ッ!？」

ハンドソニックが迫る。俺は身を捻って避け……

ズシヤッ

「あ……」

首に一瞬感じる冷たい感じ、直後に吹き出る大量の血。

「亮!？」

「亮君!？」

俺は首を抑えながら後ずさりをする。

「あ……あ……う……」

死んだ。そう思った。視界が霞む。身体から力が抜ける。

「……」

そのまま意識は消えていった……

・・・誰かが呼んでいる気がする。

「・・・亮・・・起きろ・・・」

蓮華・・・？

「起きて・・・」

懐かしいな・・・

「起きなさい・・・」

よく聞いた声。

「起きないと・・・撃つわよ」

「ッ!？」

俺は跳ね起きた。見ると蓮華ではなくゆりが俺の額に銃を突きつけていた。

「ため・・・!なにしてた!？」

「いつまで経っても起きないからよ」

「首切られてそう簡単に復活できるかぁ！」

「……アレが首を切られた時の痛みか……二度と味わいたくない。」

「……って、ここは」

いつもの校長室だ……

「あたしと音無君で運んできたのよ。……見える位置に血を吹き出して倒れてるのを無視できないわよ」

「……大丈夫か？おい」

「サンキユ、二人とも。……皆は？」

「今、戻り始めている頃よ」

「……ギルドは？」

「爆破したよ」

「……ダイナミックな……」

どうやらもう一つギルドがあるようだった。だから容赦なく爆破したのか……

「……あー死ぬかと思ったぜ」

「……もう死んでるけどね」

「日向、大山」

二人を始め、次々とメンバーが入ってきた。

「あー……酷い目に遭った」

「……咲、ごめん」

「よ、咲」

「よう……最後まで生き残ったのか？」

「天使に切られたよ。頸動脈両断」

「うっわ……明命は？」

「椎名もろとも滝に落ちた」

「……」

沈黙。

「……只今戻りました」

「……」

明命と椎名が入ってくる。

「……明命……ぬいぐるみって……」

「はうわ！？亮、忘れてください！」

「……浅はか也」

それしか言えんのか椎名。……いや、他にも色々言ってたけどさ・
……言葉の八割は浅はか也の気がするぞ。

「……」

何にせよ、ギルド降下作戦の当初の目的が果たせたかどうかはゆりのみか知っていた……

降下作戦（後書き）

岩沢

「・・・なんであたし達なんだ？」

ひさ子

「知らねーよ・・・」

関根

「いいじゃないですか二人とも！ここなら好き勝手できるんですよ！？」

ひさ子

「お前はAngel Beats本編で十分好き勝手してるだろ！？」

関根

「あたたた！？痛いですってひさ子さん！？」

入江

「・・・今のはしおりんの自業自得だと思っけど・・・」

ひさ子

「よく考えたらキャラコメはおるか実際のガルドモの仕事も滅茶苦茶だったよな！？岩沢！コイツどう落とし前つける？」

岩沢

「・・・え、なんで？」

ひさ子

「いやいや、そこで『え、なんで?』とか言われても困るから!」

岩沢

「別にいいだろひさ子。何にせよ、関根は音楽には一生懸命なんだから」

関根

「い、岩沢さん……!」

入江

「あはは……」

ひさ子

「ぐ……でも、コイツは……」

岩沢

「そんな怒るなよひさ子。そんなことより、歌おうぜ。あたしとひさ子と歌っている時が一番楽しんだ」

ひさ子

「岩沢……ああ、アタシもだよ」

関根

「いきなり百合ポイント!!羨ましいな!そつだ、私達も一緒に百合っぽくなりましょう入江さん!」

入江

「ええー……」

関根

「ドン引かれた！？あんなあん畜生な二人に負けていいの！？鬼畜王の岩沢まさみと高橋ひさ子に負けていいの！？」

ひさ子

「てめえ・・・誰に向かって口きいてんだ〜！？」

関根

「いだだだだ！？痛いですって！？」

岩沢

「それよりさ、他の作品の奴も誘って歌おうぜ？でこぴんロケットの皆に聴かせる予定だろ？早く行って聴かせてやるうぜ」

関根

「・・・その時、私達は同じことを思った・・・岩沢さん、貴女は・・・」

三人

「音楽キチだ・・・」

入江

「・・・って何か終わった空気になってるけど、確かこの後書きってお決まりのオチがあったような・・・」

関根

「しまったーっ！？うっかりキャラコメと同じ感じで締めようとしてしまったー！？」

ひさ子

「・・・じゃあ今やればいいだろ？次回の真似と開閉と世界旅行」

入江

「次回もまた見てください」

岩沢

「じゃあな、皆」

関根

「あれ！？私のセリフが残ってない……え？もう終わりなんです
か！？ええええええ！？」

ひさ子

「……終わりだ」

日常（前書き）

少々短いですが・・・ではどうぞ。

日常

「うーっす」

「ああ、また来たのか？」

「好きなんでね、ガルデモの曲」

あれから俺はちよくちよくガルデモの曲を聴きに来てた。

「・・・そんなに好きなら何かに記録して渡そうか？」

岩沢がそんなことを提案してきた。

「マジ？」

「マジだよ」

・・・実はケータイにガルデモの曲も入っているのは内緒だ。

「でも、好きなんですか？音楽」

入江が聞いてくる。

「まあ、色々と音楽を聴く機会が多いからね・・・」

「そうですね・・・」

「・・・よし、今日はここら辺にしとくっ...」

「・・・そうだな。お疲れ、皆」

「・・・ほい、差し入れ」

俺は買っておいたミネラルウォーターを皆に渡す。

「お、サンキュー」

「気が利いてるな」

「私達の間もですか？」

「ありがとうございます」

そのまま帰ろうとすると、岩沢に呼び止められた。

「なあ、亮」

「ん？なんだ、岩沢」

「・・・言いたくないなら言わなくてもいいけどさ・・・亮はどっ
して死んだんだ？」

俺は軽いため息を吐いて、一言。

「不意打ちの交通事故で、ドン」

皆黙ってしまったので、言葉を加える。

「・・・ま、ある意味納得しちまってるからな、死んだことは・・・
・今は、この場にいれることを楽しんでるよ」

今度こそ別れを告げて部屋を出る。

・・・ふと中庭を見たら、二階に居るはずなのに、俺の目の高さに野田がいて・・・落ちた。

「・・・」

窓の下を見ると、下にいたのは、武器を構えた咲と恋。・・・ああ、飛ばされたか。俺はそれを無視して歩いた。

そのまま校内をさ迷っていたら、誰かにぶつかる。

「んぎゃ!?!」

「うわっ!?!」

体格の差があつたせいか相手は派手にぶっ飛んだ。

「……すまん、大丈夫か?」

「う、うう……」

俺は手を掴んで起こしてやる。

「す、すみません……前を見てなくて」

「いや、俺も考え事をしてたからな」

「……あ、あなたは……」

「ん?」

「いつも武器を持ち歩いてる物騒な先輩の一人!」

「……俺は野田や藤巻レベルか……」

ピンク頭の少女は元気に話す。

「そしてよくガルデモの皆さんの練習を覗いている人ですよね?」

「覗きじゃない、ちゃんと許可を取って曲を聴いている……言わば観客だ」

「……そうですか。ええと」

「亮、大澤亮だよ」

「亮先輩ですか……私は、ユイって言います！」

ユイはビシツ、と手を挙げて言う。

「ユイ……か、そういえば前にガルデモの歌を歌ってたよな？」

「え、見てたんですか!？」

「そりゃ、多少近づけば聴こえるからね」

「えっと、それで……」

「まだ下手だな」

「まだ何も言ってますんよう!？」

「何となくわかった。……ま、練習すれば後にガルデモのメンバーになれるさ」

「む、無理ですよ!あのメンバーの中に私が入る余地ありませんって!」

「む・・・じゃ、お前がガルデモに入れたら・・・そうだな、コー
ヒーを奢ってもらおうか」

「・・・それ、私にマイナスしかありませんよね」

「気にするな。・・・それじゃ、俺は行くから」

「ハイ！それでは」

また校内を歩き始めた・・・

「……あれ、咲じゃん」

「亮」

部屋に戻ると咲がいた。

「……なにやってんの？」

「武器しまってる空間の整理だ」

「……それ、整理する必要があるのか？」

「……某猫型ロボットのポケットとってくれ」

「ああ……どこに何があるかわからない訳ね」

「そ。……それに」

咲が空間から色々出してくる。

「……世界から世界に移動するときさ、無くなったと思ったものが出てくるんだよ……この空間」

「……うっわ、結構沢山あるんだな」

空間を覗いてみると、中には一定の位置に留まる干将莫耶や大量の拳銃、それにキープレードとか弓矢とか見ているときりが無い。

「よく瞬時で空間から出せるよな・・・」

「お前こそよく曲を選べるよな・・・」

「・・・馴れ、か」

「・・・だな」

「・・・なあ咲。気に・・・ならないか？」

「崩壊を阻止した世界達のことか？」

「そうさ。俺は于吉を・・・そうだな、ちゃんと覚えてるのは瞬動を使って接近したまで・・・かな？・・・だから最後に蓮華達と話すひまも無かった」

「俺は・・・」

その時、咲の顔が赤くなった。

「・・・咲？」

「い、いや！何でもないぞ！？」

「声が裏返ってるぞ」

「何でもねーよ！」

咲に話題を強制的に終わらされる。

「・・・な、お前は世界の壁を開けたよな？あれ、使えないのか？」

「・・・無理だな。あの時は世界が融合しかけてたから壁を開けたけど・・・この世界じゃまだ于吉や紫みたいには出来ない」

「そっか・・・」

「・・・もし、また蓮華達に会えることがあるなら・・・皆の願いを聞いてやるう。そして俺ができる範囲ならなんでもしてやるう。・・・
・そう思う俺だった・・・」

日常（後書き）

蓮華

「……」

ゆり

「……」

アスナ

「せ、セイバーさん……？あれは……」

セイバー

「……私が見るにはゆりが蓮華に怯えている気がしますが……」

アスナ

「……そういえばこの間蓮華さんが剣を持ってゆりさんを追いかけてたような……」

セイバー

「……ああ、私も見ました」

ゆり

「えっと……蓮華さん？」

蓮華

「……なんだ」

ゆり

「怒って……る？」

蓮華

「怒ってなどいない」

ゆり

「・・・目が笑ってないんだけど・・・」

蓮華

「気のせいだ」

アスナ

「・・・」

セイバー

「・・・」

アスナ

「・・・まあ、今回はここまでで・・・」

セイバー

「次回の真似と開閉と世界旅行」

アスナ

「次回もまた見てください」

消滅（前書き）

今回は原作の中でも好きな話です。ではどうぞ。

消滅

ここは校長室。今は岩沢が新曲を歌っていた。

「……なぜ新曲がバラード？」

「いけない？」

「陽動にはね」

「その……陽動ってのはなんなんだ？」

音無が聞く。

「トルネードの時、聞いてなかったの？彼女は校内でロックバンドを組んでいて、一般生徒の人気を勝ち得ている。あたし達は彼らに直接危害を加えないけど、時には利用したり、妨げになる時はその場から排除しないとまらない。そういうとき、彼女達が陽動するの」

「……NPCのくせにミスターなやつらだなあ」

「つまり、彼女達のバンドには、それだけの実力と魅力があるってことだ」

「へ〜」

そこで岩沢が声を出す。

「……ダメなの？」

「うん・・・バラードはちょっとね・・・しんみり聴きいっちゃったら、あたし達が派手に立ち振舞えないじゃない」

「そう。・・・ならポツね」

そして始まるオペレーションの説明。その作戦に使うため、メンバーを追加するらしい。

「今回は、彼が作戦に同行する」

「・・・よろしく」

・・・ゆりの椅子の後ろから出てきた。

「椅子の後ろから!?!」

「眼鏡被り・・・!」

「いや、俺も被ってるぜ?」

「ゆりっぺ、何の冗談だ」

「そんな青瓢箪が使いもんになんのかよ?」

「まあまあ、そう言わないでくれる?」

すると野田がいきなり、

「な、なんでわかったんだよ咲・・・」

とりあえず、その場は解散となった・・・

その後はミネラルウォーターを人数分買っていつものようにガルドモの練習を見に行く。

「……よっ」

「亮。また来てくれたのか？」

「まあな」

「亮がいると助かるよ。観客が一人いるだけでも身の入り方が違うからな」

ひさ子がそう言うてくる。

「……ミネラルウォーター、ここに置いておくぞ」

「いつもすいません……」

「そんなに気を使わなくてもいいのにさ」

「いいんだよ、他に金の使い道ないんだから」

練習が始まり、しばらくしたら……

「おっと……」

ひさ子の弦が切れたらしい。

「……悪い、すぐに張り直す」

「ふう……じゃあ、休憩。……ん？」

岩沢の視線を追うと、そこにはコーヒを片手に持った音無がいた。

そして、ひさ子が弦を張り直している間に、俺は入江に頼み込んでドラムをやらせてもらったりした。しばらくしたらひさ子は弦を張り終え、岩沢と音無が入ってくる。

「……昔話は終わったか？」

「……聞いてたのか？」

「いや、なんとなく……ね」

「……後で話そうか？あたしだけ聞いといてなんだし」

「いいよ別に。俺は他人のことを探るのは嫌いだし」

隣で音無が嘘つけ、とか言ってたけどスルーで。

・ ・ ・
そして、
時間が来る。
俺達四人は天使エリアへの侵入班。
そ

してその明命と恋は外の見回り。女子だからこそ頼める役割だ。

「……」

部屋の扉を開け、一斉に部屋へ入る。

「……障害物、無し」

「……クリア」

「クリア」

「……よし、まずは侵入成功ね」

「……はあ？」

「天使エリアに侵入……ドア閉めなさいよ！」

「なあ……」

音無がそう言って電気を点ける。すると全員が身構える。

「ただの女子の部屋荒しじゃねーかよ！？犯罪じゃねーか！」

「貴様、何をする！」

「女子寮だぞ！？電気を消せ！」

「しかもコンピュータで制御だあ！？パソコンが一台あるだけじゃねえかよ！」

「……パスワード？」

「前は誰も解らなかつたわ」

「なるほど……僕の腕の見せ所だ……解析に入ります」

竹山はそう言ってパソコンにノートパソコンを繋ぐ。

「ほう……一応使えるみたいだな」

「……円周率で悶絶した奴が言える台詞じゃないな」

「ッ、コラコラ……プライバシーの侵害だって……ッ!？」

俺は鈴音を音無に突きつける。

「大人しくしろって。しっかり見てればわかるよ」

「だからって……むがつ!？」

野田がハルバードを音無の首に当てる。

「うるさいやつだ……それ以上騒ぐなら喉元掻き切るぞ」

「なんだよ！ちょっとお前らのこと、見直してきた所なのによお！」

「……」

「亮？」

「……悪い、ガルデモの様子を見てくる！」

「お、おい、亮！」

咲の言葉を無視して走り出す。体育館へ向けて。

「……いいね、うじらでちよつと甘いもの、食べていい……」
体育館に近づくと連れて、曲が聴こえてくる。……原作を思い出
せ……このあとは、確か……

そして体育館に着く頃には、既にガルデモの皆は教師に取り押さえ
られていた。

「……なるうー!」

瞬動を使ってステージの真上に跳ぶ。

「ウラアッ!」

岩沢とひさを拘束している教師と入江と関根、そして遊佐の近くにいた教師を殴り倒す。

「ぐあ……」

「……亮!？」

「「亮さん!？」」

そして、岩沢のギターを掴んでいる教師も殴り倒そうとしたら……
岩沢がそれよりも早く駆け出す。

「それに……触るなあああっ!!!!」

岩沢が教師にタックルをかまし、ギターを取り返す。

「ひさ子!上にいけ!」

「ッ!ああ!」

ひさは上に向けて階段を登る。そしてひさ子と岩沢を再び拘束しようとしている教師を牽制する。

「む……貴様、なんのつもりだ!」

「大の大人が女の子相手に大人げないんじゃない？・・・少し、俺と遊んでよ」

「亮・・・」

岩沢が呟く。俺は、構えながら一言。

「・・・岩沢、お前の歌いたい歌を歌え！！」

そして始まった歌は・・・

——泣いてる君こそ 孤独な君こそ正しいよ——

その曲は、今までみたいなノリのいい曲じゃない。・・・けど、どこか心に響く曲だった。

「・・・」

そして・・・岩沢がどこか満足な顔をして、一瞬目を逸らした瞬間、
岩沢は・・・消えていた。

「岩沢・・・」

・・・岩沢が使っていたギターを残して・・・

その翌日・・・

「わかったことを纏めてくれ、ゆりっぺ」

「・・・天使は自分の能力を自分で開発してた・・・それは奇しくもあたし達が武器を作る方法と同じだったのよ」

その話題はしばらくして終わりを告げる。

「・・・では、もう一つの案件です」

高松が立ち上がる。

「・・・岩沢さんは、どこに消えてしまったのか」

「天使に消されたんじゃないのか？」

「ライブ中だぞ？」

「それに・・・俺は間近にいたけど、天使はかなり後ろ・・・入り口の方にいた。・・・とてもじゃないが、天使には無理だ」

「誰が一体岩沢さんを・・・」

「誰も・・・あの子が納得しちゃった・・・それだけのことよ」

そして寮に帰る途中。

「あ・・・亮」

「ひさ子・・・」

どこか落ち込んだ様子のひさ子が話しかけてくる。

「どうしたんだ？」

「ちょっとさ・・・アタシの部屋に寄ってくんねーかな？」

「・・・ああ、わかった」

俺はひさ子に着いていく。・・・ひさ子や明命達のおかげか、他の女子にはうるさく言われなかった。

「……入ってくれ」

「……邪魔するよ」

中に入ると部屋のソファアの上に関根と入江がいた。

「あ……」

「亮さん……」

「お前らもいたのか」

俺は近くにあった椅子に座る。わりと部屋の中は綺麗に整頓されていた。

「……それで？」

「岩沢のことなんだけどさ……」

「……やけに三人共元気がないな。……いや、仕方ないか、長らくやってきたバンドのリーダーが消えちまったからな……」

「……その岩沢から、お前に贈り物だ」

そう言ってひさ子が一枚のCDケースを投げてくる。

「……これは？」

「あの……前に約束していた」

「……わたし達の曲が入ったCDです」

「ああ……」

ケースを開けると、紙が入っていた。

「……えつと、『亮へ、やっとCDができたから、約束通りにア
ンタに渡すよ。……それから、あたしの過去についても話してお
こうと思う。――』……このあとは、岩沢の過去が書かれ
ているな」

好きな歌が歌えなくなった。……それは地獄だったろうな……
岩沢はあと少しで自由になれる所で……他の誰でもない、実の親
に自由を……夢を潰された。

「……アタシさ、岩沢が消えた理由……わかる気がするんだ」

入江と関根も頷く。

「満足……いや、見つけたんだよな……岩沢は……」

俺はひさ子の言葉に頷く。

「……これから、どうするんだ？ガルデモは」

「……新しいボーカルを捜すさ。……アタシ達は陽動部隊なんだから」

「そうか……」

「私達は……立ち止まれないんです」

「そうです……わたし達が止まる時は……岩沢さんのように何か”を見つけた時なんですよ」

「……わかった。俺には応援するしかできないからな……俺は帰るけど、何かあったら言ってくれ、力になる」

「ああ……ありがとう」

俺は部屋に戻っていった……

消滅（後書き）

咲

「・・・俺って・・・主人公・・・だよな？」

亮

「一応な」

咲

「一応かよ!？」

明命

「私達は・・・ヒロインですよね!？」

恋

「・・・台詞、少ない」

岩沢

「・・・悪いな、あたしが出すぎちゃったから・・・」

明命

「い、いえ・・・今回は岩沢さんのメイン回ですから。気にしていませんよ」

咲

「・・・にしても良い曲ばっかだよな、ガルデモ」

亮

「CDも買ったぜ。サンキューな、岩沢」

岩沢

「気にするなよ。こっちはいつも聴きに來てくれて、しかも差し入れまでくれるからな」

咲

「……まさか亮、浮気するつもりじゃ……」

亮

「は!?!?……俺には明命がいるんだよ!」

岩沢

「……それに、あたしは音楽が恋人だよ。……と言うより、人を好きになることがわからない……の方が正しいかな?」

恋

「……難しい」

明命

「あ、あの……亮。いまのお言葉は……」

亮

「ああ、いや……その……」

岩沢

「……今回はここまでにしておこうか」

咲

「それじゃ、次回の真似と開閉と世界旅行」

恋

「……次回も見る」

野球（前書き）

ギャグが薄い・・・ではどうぞ。

野球

「……それで、岩沢さんの替わりだけど……」

「……ゆり、お前がやればいいんじゃないか？」

「止めとけ音無。長年一緒にいるが、ゆりっぺはぶっっちゃけ音痴だ」

「……日向、ゆりが拳銃構えてるぞ」

なんて軽い漫才をやっていたり。

「……明命、お前はどうか？」

「え！？私ですか!？」

「……亮君。明命ちゃんは歌えるの？」

「……前に学園祭でバンドやったとき、明命はボーカルだ」

「……懐かしいな。俺がギターで、恋がベース。亮がドラムだったよな」

「……また、やりたい」

「……とりあえず、歌ってみようぜ」

藤巻が勧め、明命は歌い出す。

「……中々いいと思うよ?」

「だが……明命はギターが弾けん」

「……岩沢の替わりは無理か……」

「……じゃ、俺がやるか?」

俺が挙手する。

「バカか貴様は。名前からして男は無理だ」

「……男なら……だろ?」

俺はケータイを取り出す。

「モーシヨンキャプチャー、岩沢まさみ」

姿が岩沢になる。

「」「」……ッ!?!?」「」

皆が驚愕する。咲はやれやれといった感じだったが。

「ど、どづいづことだ……?」

「……亮君……よね」

「ああ、俺は他人の真似ができるんだよ」

「そんなんで納得できるかよ」

藤巻と野田が詰め寄ってくる。

「……別におかしくないだろ。そういう世界から来たんだから」

「……ちょっとまってくれ。今、なんと……」

松下が聞いてくる。

「……まさかさ、世界が一つだと思ったか?世界は限り無くあるんだぜ?」

俺達は今までのことを多少嘘を交えて話した。

「……つまり、貴方達は何故か違う物語を転々している……」

「そんなので納得できるか。貴様は天使の仲間じゃないのか?」

「野田、俺達が天使の仲間なら、とっくに裏切ってるよ」

「・・・あとよ、亮達と明命達の世界は違っんだろ？」

「そうだ。明命達は、『もし三国志の登場人物が女性だったら？』
という世界から来たんだ」

「・・・それじゃあ、明命ちゃん達は何かの武将なの？」

「・・・ああ、明命」

「はい。私は、姓は周。名は泰。字は幼平。真名は明命と申します」

「・・・恋は、呂布」

「「「ええええええ!?!?!?!」」」

一同再び驚愕。

「・・・ねえねえ、真名ってなに?」

「ええと、真名は・・・」

説明タイム・・・

「・・・頭が痛いわね」

ゆりが頭を抱える。

「……ま、なんであれ、亮達が戦線の仲間なのは変わらねえよ、ゆりっ。」

「日向」

「……とりあえず、亮君。歌ってみなさい」

「はっ。」

「・・・どうかな？」

「うん・・・何か違和感が・・・」

「だよな・・・俺の物真似ってワンランク下がるんだよな・・・」

「だからか。何か心に響かなかったからな」

音無にすら言われる。

「ん・・・」

それからしばらくして・・・

「・・・コイツが岩沢の替わりだと」

「ユイっていいます！よろしくお願いします！」

・・・ユイが校長室に来ていた。

「・・・誰だコイツ？」

日向が言う。

「お前、何も聞いてなかったのか？ガルデモのニューボーカル候補だよ」

とりあえず皆を納得させるために歌い始めるユイ。

「イエーイ！みんな、今日は来てくれて、ありがとうおー！イヤ
ツハアアー・・・ふぐっ!？」

マイクスタンドを蹴りあげて、自ら首を吊った。

「・・・何かのパフォーマンスですか」

「・・・デスメタルだったか・・・」

「・・・凄い」

「し、死ぬ・・・」

「いや、事故のようだよ」

ユイを助けだし、結局ガルデモメンバーにユイを採用するかどうかを任せることにした。

「・・・球技大会？」

「・・・ああ、戦線でチームを作って、それでゲリラ参加だよ」

「野球……ですか」

「……頑張る」

「……現時点で四人か。……仕方ない、校内をうろつくか」

「……よっ、亮」

「ひさ子。どうしたんだ？」

「いや、アタシ達三人は亮のチームに参加しようかと思ってさ」

「マジ？助かるぜ！」

「……亮って意外なところで人望あるよな……」

「……ですね」

ひさ子、入江、関根が入って現在七人。

「……野球をやるには最低でもあと二人か……」

「つつか男入れようぜ、亮」

咲が言ってくる。

「・・・確かに」

よく考えたらメンバーの半数以上が女子だ。

「・・・悪いな」

「・・・ダメか・・・」

だが、男子は殆ど他のチームにとられてしまった。

「うーん・・・」

「どうするんだ？アタシはもう人数さえいりゃいいと思うけど」

「・・・だよなあ・・・」

結局、名も知らない女子メンバーを入れて、一応は九人揃った。

そして打順とポジションは以下の通り。

一番 センター 明命

二番 キャッチャー 咲

三番 ショート ひさ子

四番 ファースト 恋

五番 ピッチャー 俺

六番 セカンド 入江

七番 サード 関根

残りは名も知らないメンバー

「……と言っわけで俺達も参加するよ」

「……またかよ」

審判のNPCがうんざりしたように言う。

「そう言うなよ、コチラに方達はかのガルデモだぞ？」

咲はひさ子達に指を指す。

「な……」

NPCに反応が見られた。

「……ひさ子、もう一押し」

「（……しょうがないな……もし参加してくれるなら、ガルデモのサインをあげるよ」

「……ッ！……参加していいぞ」

「……アツサリでしたね」

「それほどガルデモは人気なんだよ」

「つーわけで試合開始。」

「……よし」

「明命ーッ！ かつ飛ばせーッ！！」

「……戦闘バッターが女かよ……」

そんな油断して投げた球を……

「……ヤッ！」

カキーンッ！

明命が打ったボールは綺麗にセンター前に転がる。

「ナイスバッティング！」

「……次は俺か、二番の役目は……」

そう言った咲は、バントの構えをする。

コンッ

球はサードに転がっていく。

「……これはアウトだ……って速あ!?!」

サードが捕る頃には既に咲は一塁を踏んでいた。

「……よつと」

カキインツ!

ひさ子もヒットを打ち、

「……えい」

カキアアンツ!

恋が打った球は……

「……ホームラン」

「よし、四点先取!」

「五番は俺か……よし、俺もホームランを……」

ブオン!

「ストライク。バッターアウト」

「……」

「お前、経験者だよな……？」

「……うるせえ」

続くガルデモの二人も凡打に終わり、守備になる。

「……」

俺は大きく振りかぶって、上手から投げる。

ズバン！

「ストライク」

「く……てめえ！速すぎだよ！」

「え！？強化してねえぜ！？」

咲が手を振りながらボールを返してくる。

「……（変化いくぞ）」

「……（え、ちょ、）」

俺は球を指から抜くように投げる。

ククッ

大きく変化するカーブ。・・・バッターが空振りし、ワンバンした
ボールは咲の防具がない部分に・・・

ドスッ

「ぐー!?・・・こ、この野郎・・・」

「す、すまん！予想外に曲がった！」

その回は三者三振に抑え、次の回でワールド勝ちをした。

「・・・亮」

「咲・・・すまん」

「いいんだけどさ・・・合間合間にケアル使ってるからいいんだけどね」

「・・・何キロ出てるかな・・・」

「140後半はかたいぞ」

「・・・俺のMAXは120だったんだけどな・・・そもそも俺はファーストだ」

変化球なんか遊びでしか投げたことがない。

「・・・みんなー！スポーツドリンク買ってきたぞ！」

九本のスポーツドリンクを一人一人に渡していく。

「・・・だいぶ汗かいてるだろうし、水分とか塩分とかしっかり採らないとな」

「サンキュ、助かるよ」

「疲れました〜」

「こんなこと普段しないもんね・・・」

「ご苦労さん。無事に終わったら大量に集めた食券でご馳走してやるよ」

「本当ですか！？頑張ります！」

「しおりんは元気だね・・・」

入江が一番ぐったりしていた。

そして次の試合もアツサリコールドで勝利する。

そして次の相手は・・・

「げ・・・戦線メンバーかよ」

「日向チームか」

「貴様ら・・・遂に雌雄を決するときがきたよつだな」

「・・・来いよ、野田」

そして始まる試合。

「・・・ハアッ！」

渾身のストレートを、

カキンッ！

「嘘お！？」

音無に打たれる。

「く・・・」

カキンッ！

カキキャンッ！

カキヤアアンッ！

「ホームラン」

「な・・・な・・・」

俺は絶望して四つん這いになる。

「お、おいおい・・・元気出せよ」

ひさ子が声をかけてくる。

「・・・ドンマイ」

「亮・・・がんば、がんばですよ」

「・・・頑張つて」

何とかその後は抑えて攻撃に移る。

「ふ！」

カキインッ！

「よっ！」

カキキャンッ！

とりあえず三点は返したが、あまり点は変わらないまま、最終回に入る。

「・・・最後の攻撃か・・・」

差は二点。返せなければ負けだ。

「よ、とー！」

カキキャンツ！

パシン

「アウト」

「くそ・・・カみすぎた」

咲が悔しそうに帰ってきた。

カキキャンツ！

ひさ子と恋は何か出塁。現在ツーアウト二三塁。

「・・・打つ！」

ブン！

「ストライク」

「く・・・」

二球目・・・

カキキャンツ！

球は高く上がり・・・

「ファール」

これでツーストライク。次で決まる・・・その球は・・・

カキインツ！

レフトに飛ぶ打球。レフトにいるのは女子NPC。

「いったか・・・？」

球を追いかける女子。だが取れないだろう・・・そう油断した時、

パシン

「は・・・」

「え・・・」

どこから来たのか、サードにいた椎名がレフトフライをキャッチしていた。

「アウト、ゲームセット」

「そ、そんなあああああ！？」

俺達の試合はここで終わった・・・

・・・その後は結局生徒会チームによって戦線チームは全敗した。
・・・どうやら日向が消えそうになったが、ユイの一撃でそれは回避
したらしい。

「・・・つーわけで、みんな、好きなもん食べていいぞ」

俺は前に貯めておいた食券をチームの皆に見せる。

「うわ・・・沢山あるな・・・」

「おお・・・普段私達は選べませんからね・・・」

「残り物しかないし・・・」

「・・・ありがたくゴチになるよ」

「・・・咲達もいいぞー？」

「んじゃ、中華セットもらいー」

「私は、お魚にします!」

「・・・沢山食べる」

そのまま時は過ぎていく。・・・勝ちたかったな、試合。

野球（後書き）

咲

「なんかさ、楽しみがいっぱいだな・・・このあと」

亮

「・・・なんで？」

咲

「Angel Beats！自体はゲーム化が進んでるし、ネギまは映画化するし、恋姫は格ゲー化するし」

亮

「・・・やっぱりAngel Beatsは選択肢個別ルートかな？」

咲

「岩沢ルート入ったら岩沢が最後まで残るとかな」

亮

「なんと、男性キャラも交流可能だったりして」

咲

「そいつは・・・最高に楽しいな」

日向

「俺の台詞をパクるな！」

亮

「あれ、いたのか日向」

日向

「いたよ最初から!」

ユイ

「今回は私もいまーす!」

咲

「おお、デスメタル娘」

ユイ

「違いますよ!?!私は、」

日向

「単なるお転婆娘だ」

ユイ

「んだとう!?!誰のおかげで消えずに済んだと思ってるんだー!?!」

日向

「うっせえよ!お前の蹴りだのなんなので身体中痛いんだよ!」

ユイ

「そんなこと言ったらひなつち先輩の方が酷いですよ!あの技のあと、身体が固まっちゃったんですからね!?!」

亮

「・・・え、見苦しい夫婦漫才が始まったので、今回はここまで」

咲

「次回の真似と開閉と世界旅行！」

亮

「次回もまた見てください！」

高く飛べ〜(前書き)

今回はギャグ回として有名な話です。ではどうぞ。

高く飛べ〜

「・・・遂に、この時期がやって来たか・・・」

ゆりがそう言った。

「なんだ？なにか始まるのか？」

「・・・天使の猛攻が始まる」

「天使の猛攻・・・」

「言っておくけどお前の想像は間違いだぞ」

「だからなんで俺の考えがわかるんだよ？」

「ふ・・・わかるから、そうとしか言えないな」

「人の台詞をパクるな咲」

この世界に来てからは一度も言っていない・・・よな？

「・・・猛攻って、どうしてなんだ？」

「テストが近いから」

「ああ・・・なぜ・・・？」

「天使さんは私達に真面目にしてほしいんですね？」

「・・・多分」

「つまり、テストも真面目な生徒の条件・・・って訳だ」

「けどこのテスト期間、逆に天使を陥れる大きなチャンスとなりえるかもしれない」

「何か思いついたみてえだなゆりっぺ。聞かせてもらっぜえ」

「・・・ゆりの作戦は、天使のテストを妨害する。それにより、周りからの印象を悪くしよう・・・簡単に言えばこういうことだ。」

「まずは今回の作戦メンバーを決める」

そう言ってゆりはメンバーを指名していく。

「高松君。日向君。大山君。竹山君。亮君。咲君。明命ちゃん。音無君」

「げ・・・」

「また俺かよ？」

「僕の話はクライストと「見た目が普通なやつらを選んだだけよ」・・・」

「ま、待てよゆり、俺は見た目普通じゃないぜ？」

「なんか気配が普通よ」

「な・・・！」

「亮。お前だけ逃げるのは卑怯だぜ？」

「くそ・・・」

というわけでテスト当日。席はくじ引きで決まり、まずは天使の近くの席を当てなくてはならない。

「必要なのは36番か・・・」

日向が最初に引く。

「よっと・・・20、外れたー・・・」

「11・・・天使からは遠いですね」

「33・・・アハハ、全然ダメだー・・・」

「俺か・・・25、っと俺も遠いな」

「32・・・ダメです・・・」

「17・・・咲は？」

「39・・・惜しいな」

「キヤー！1番よー！・・・って、このっ！このっ！このっ！」

ゆりがくじを踏みまくる。

「近くに誰かいないの！？横でも前でもいいから！」

「・・・一つ前です」

竹山の手には36と書かれたくじがあった。

「よっしやあっ！」

そして竹山が天使のテストを入れ替える役目になった。・・・が、

「あ、でも待つてください。名前の欄には一体何て書けばいいんでしょう？」

シーン・・・

「天使」

「アホか。・・・生徒会長・・・で通るんじゃない？」

高松、日向が言う。

「そつだよね。どうせイルカの飼育員・・・なんて答えるくらいバカなんだから」

「いやいや、自分の名前ぐらい書けなきゃアホすぎるだろ！？つうか、お前らが名前知らないのが驚きだよ！」

「・・・奏だ」

「は？」

「立華奏・・・アイツの名前だよ」

「お前なんで知ってるんだよ？」

日向が聞いてくる。

「俺達が来た初日に問答無用で銃をぶっぱなしてくれたろ？そんなきに多少会話したんだよ。・・・まあ、お互いの名前交換ぐらいしかなかったけどよ」

「あー・・・あのときの」

全員納得していた。

1900

そして答案用紙を交換する際に、日向がリアクションを起こし、全員の注目を集めることになった。

キーンコーンカーンカーン……

「はい。じゃあ後ろから集めて」

「く……な、ぬあんじゃありやあああ！？グラウンドから超巨大なタケノコがニヨキニヨキとおおー！！」

日向が大声で言うが・・・

シーン・・・

「・・・くそ！」

「・・・アホだ」

「・・・つたく、仕方ないわね」

ゆりが何かのボタンをおす。すると、

ドカアアンツ！！

「ぬはぁっ!?!」

いきなり日向の椅子が飛び上がり、日向が天井に打ち付けられる。
そしてその内に竹山が答案用紙を入れ換えた。

「・・・あなたがミスした時の為に椅子の下に推進エンジンを積んでおいたのよ。どうだった？ちよっとした宇宙飛行士気分は？」

「一瞬で天井に激突して落下したよ！！つか、推進エンジンなんてよく造れたな！？」

日向が怒りで指をガクガクさせる。

「フォローしてあげたんだから感謝なさいよ」

そして次は高松が指名された。

「そ、それは日向さんの役割では・・・」

「狼少年の話・・・知ってる？」

「繰り返される嘘は信憑性を失っていく・・・」

「そういうワケー」

「ま・・・まさか、そのために頭数を・・・！」

「さあ・・・？」

「じ、辞退を！」

「うぶ・・・やるのよ」

「……私も飛ぶんでしょうか……」

「……全員が振り向く何かをすれば大丈夫だ、明命」

そのあと、メンバーの数名がもめ始めたか、ゆりの大声によって鎮圧された。……お前が注意惹き付けろよ、畜生。

キンコンカーンカーン……

「はい。じゃあ後ろから集めてー」

そして高松が立ち上がる。

「ん？……どうしたの、その君？」

「先生。実は私……」

高松が上着を脱ぐ。

「着痩せするタイプなんです……!!」

……服の下は筋肉ムキムキだった。

「……どうですか?」

「わかったから座りなさい」

「はい」

ズドオオオンッ!

「うぐう!?!」

「……うっわぁ……」

「……つたく、よくまああんな浅はかな案を自信を持って遂行できたものね」

「自信あつたんですが……意外性があるといいますが……見かけによらないといえますか……陰で鍛えてるので」

「いいから上着ろよ」

「……バカだ」

そして次は大山が指名され、ゆりから告白すれば飛ばないで済むと言われた。

「ん？……なんだって？」

「天使に告白するのよ。『こんな時に場所も選ばずごめんなさい。あなたのことがずっと好きでした。付き合ってください』って」

「ええええええ！？」

そのあと再び内乱が起き、ゆりに鎮圧される。……だからお前がやれよ、ゆり。

キンコンカンカーン……

「はい。じゃあ後ろから集めて」

大山が立ち上がる。

「立華さん！こんな時に場所も選ばずごめんなさい！あなたのことがずっと好きでした！付き合ってください！」

おお！大山が勇気をだした！

「……じゃあ時と場所を選んで」

「……そこ、座れ」

「……はい」

「あーあーやつちまったあ、とぶぬっはあっ!?!?」

何故か日向が天井に激突して宙吊りになった。

「くおら!」ら待てい!」

「何よ、寄ってこないでよ!」

「なんで俺が飛ばされるんだよ!?!?」

「だって大山君は充分心に傷を負ったじゃない」

「それでなんで俺なんだよ！？わけわっかんねーよ！！」

「それより皆、おっひるっにしっまっしょ」

「」
「」
「」
「」

・・・その後のテストも熾烈を極めた。

キンコンカンカーンカーン……

遂に来てしまった……

「はい。じゃあ後ろから集めて」

俺はケータイを取り出す。

「先生！見てください！生徒会長そっくり！」

奏の真似をすれば……！

「……よくできた着ぐるみですね。ですが、ちゃんとテストを受けなさい」

「はい……グハアッ!？」

ズガアアアッ!!

見事に俺は宙を飛んだ。

キンコンカンカンカン・・・

「後ろから集めなさい」

「先生！見てください！ロッカーが勝手に開閉しています！」

咲が能力を使つて注意を引こうとする・・・が、

「・・・あとで直しておいてください」

「・・・わかりました・・・ギヤアアアッ!？」

ズドオオオンッ！！

憐れな………

キンコンカンカーン……

次は明命か……

「見てください！可愛いお猫様のぬいぐるみです！」

「確かに可愛いですがテストには unnecessary です。没収します」

「……（タパー）」

明命が無言で泣き出した！？そしてゆりがボタンを構える。

「ッ！？ゆり、明命までとばつぎゃああっ！？」

バゴオオオンッ！！

何故か俺が空を舞った・・・

「・・・待てよゴリア！なんで俺が飛んでんだよ！？」

「だって女の子を飛ばせるわけじゃないじゃない」

「じゃあなんで明命を作戦メンバーに加えたんだよ！？明命は今二重の意味で心に傷を負ったぞ！？」

「うう・・・ぐす、ひっく・・・」

明命は机に突っ伏して泣いていた。

それから数日。全校生徒の前で奏が生徒会長を辞任……いや、退任を言い渡された。

「直井文人か……」

その日の夜、俺はガルデモメンバーの所に行く。

「ひさ子!」

「亮!どうしたんだ?」

「新ボーカルの応援……かな?ユイは?」

「そこにいるよ」

見るとユイは深呼吸を繰り返していた。

「よ、ユイ」

「ふえ!?亮先輩!」

「緊張してるのか?」

「は、はい……初ライブですから……」

「……ひさ子!岩沢のギター残ってるか!」

「え……あ、ああ……」

ひさ子が岩沢のギターを渡してくる。

「でもどうするんだ？」

「こつするのさ、モーションキャプチャー、岩沢まさみ」

岩沢の真似をする。するとガルデモメンバーが全員混乱する。

「い、岩沢先輩!？」

「で、でも、今は亮が・・・」

「落ち着けよ。ゆりから聞いてないのか？俺は他人の真似ができる能力をもってるんだ。・・・ワンランク下がるけどな」

ひさ子は納得したようだが、残りの三人はまだ混乱していた。入江に至っては「ゆ、幽霊!？」とか言ってるし・・・俺達自身幽霊みたいなものなのに。

「つーわけだ。最初は俺とお前のツインボーカルでいくぞ」

「うえええ!？マジっすか!？」

「・・・さ、行こつぜ皆!」

いつも通りのゲリラライブ。だが、俺は歌い出す前に言う。

『皆ーッ!今日で俺・・・あたしは引退する!』

ざわめきが広がる。

『理由は言えないけど、これからはコイツが新しいボーカルだ!』

俺はコイツを指差す。

『あたしに比べたらまだ下手かもしれない!けど、必ずあたしの後を継いでくれるだろう!・・・今日はいつも以上に盛り上がって行くぞ!』

ワアアアアア!!

歌うのは岩沢が残した最後の曲。・・・その歌の途中、天使が目に入る。・・・だが、俺は気にしない。今はガルデモの岩沢として歌うんだ。

そして強風が吹き、食券が吹雪のように舞う。・・・オペレーションは・・・成功だった・・・

「・・・お疲れ」

「サンキュ、咲」

咲がチャールハンを持って椅子に座る。

「・・・って咲・・・これは・・・」

「麻婆。金出して買った」

「テメエ！嫌がらせか!？」

「いやいや、つい掴んじまったんだよ」

「たった今、金で買ったって言うてたろーが！」

「まあまあ、食ってみるよ」

俺は仕方なく麻婆を蓮華れんげにすくって一口。

「ツ！？辛っ！？辛いよ！そして痛い！！」

テーブルをバンバン叩く。・・・ん？

「・・・しかし、その辛味の後に来る旨味は中々・・・」

「・・・なるほど、うまいのか・・・」

「だけど麻婆はトラウマものだ・・・前に言峰にやられたことがあるし・・・」

「・・・そう言えばそうだったな」

その時、大量の生徒会員が俺達戦線メンバーを取り囲む。

「ッ！」

「コイツら・・・」

「・・・そこまでだ。色々と容疑はあるが・・・とりあえず時間外活動の校則違反により、全員反省室へ連行する。僕が生徒会長とな

「だからには、貴様らに甘い選択はない。・・・連れていけ」

俺達は抵抗せずにそれに従った・・・

高く飛べ〜（後書き）

エヴァ

「……」

亮

「……なにやってんの？」

エヴァ

「ネットゲーだよ、hack」

亮

「はあ！？なんでここにあるんだよ！？」

エヴァ

「ちなみにPC名はミレイユだ」

亮

「中の人ネタキターッ！」

エヴァ

「他にも誘ったやつはいるぞ？セイバーとかライダーとか宮崎のどかとか沢山参加しているぞ？」

亮

「それ全部中の人ネタだよなあ！？」

ひび子

「……出番多いなーアタシは」

岩沢

「いいんじゃないか？あたしはもう出ることもないんだし」

音無

「・・・俺、主役・・・だよな・・・」

亮

「これ自体の主役は俺と咲だ」

音無

「Angel Beatsという物語じゃ俺が主役だろ？・・・このままじゃ俺の存在が空気に・・・」

亮

「ま、いいんじゃない？」

エヴァ

「む・・・さすがだな、アトリは」

亮

「何かもう話題がないんでここまで！」

ひさ子

「次回の真似と開閉と世界旅行」

岩沢

「次回もまた見てくれよな」

音無

「それじゃあまた次回」

回想（前書き）

今回は書いてて恥ずかしくなってきました。・・・ではございませう。

回想

俺達四人は反省室に入れられている。・・・ホント色々あるなこの世界・・・

「・・・しっかし、随分しっかりした扉だな・・・」

「俺なら簡単に開けられるけどな」

「・・・咲、ダメ」

「そうですよ。ゆりっぺさん達に迷惑がかかってしまいます」

明命・・・お前はいつの間にゆりをゆりっぺと・・・？

「・・・そういえばさ、ゆりっぺ蓮華に声が似てない？」

「・・・中の人同じだからな」

咲が痛恨なことを言う。

「そっぴやさ、覚えてるか、明命？」

「何をですか？」

「・・・蓮華の暴走」

「・・・ッ!」

「は？なにそれ」

「聞かせてやるよ・・・俺達は百越と呼ばれる蛮族を討伐することになって・・・」

それはまだ俺が真似ぐらいしか使えない時だった。

「一人として逃がすではない！一人残らず殲滅せよ！ただの勝利は
いらん！敵が全滅するか降伏するまで、休みなく攻めよ！」

蓮華や、

「火矢を射かける！兵にではなく、馬に当てるのだ。さすれば逃げ
られん！」

思春や明命・・・それに祭さんがいた。

「騎馬隊はそのまま突撃せよ！」

「蓮華様！危のうございます！御自ら先陣に立つなど、万が一があ
つてはっ！」

「ええい！私を誰と思う！孫文台の子にして、孫伯符の妹！気遣い

なぞ無用！」

「しかし……それでは……」

「くどい！者共、一気に畳み掛けるぞ！」

「お、おいおい蓮華！？」

「権殿、出張りすぎだ！大将が血気に流行って蛮勇を振るってどうする！」

「はあ……はあ……黙れ！祭といえども口答えは無用。ここで蛮族を殲滅せねば、呉の安寧はない！」

蓮華はそう言つて敵陣の中に飛び込んでいく。

「……あのアホ……！思春！明命！蓮華の背中を守るぞ！」

「言われなくても分かっている。明命、亮、行くぞ！」

「はいつ、思春殿つ。亮様も気を付けてください」

俺達三人も蓮華の援護のために敵陣へ突撃していった……

結果、戦は勝利に終わった。．．．だが、蓮華の望む全滅には至らず、少数の蛮族を逃してしまった。．．．蓮華は自陣に戻ってからもまるで虎のようにいきり立っていた。．．．

「蓮華様、傷の当てを。そのまましておくのはお身体に障ります」

「ええいっ！かまわぬ！このような傷、かすり傷でもないわ」

「そう、いきり立つではない」

「別に私はいきり立ってなどいない。ただ、口惜しいだけよ。それより．．．此度の戦は私に任されているはず。呉三代に仕える宿将重臣といえども口出しは無用。祭、あなたにとって私は、今でも母

や姉の袖に隠れている少女に見えるか？」

蓮華の声は祭さんでさえ反論を許さないほど、感情を押し殺した声だった。

「蓮華・・・確かにお前は立派になってきたけどさ・・・」

「姉より継いだこの江南の地。皆の助けを借り守らなければならぬ。私だけいつまでも過保護にされていては示しがつかないわ」

「はっ・・・申し訳ありません。出すぎた真似をいたしました」

臣下の礼をとる祭さんに、蓮華は手で応える。

「・・・蓮華、口を挟むけど、戦いは思い通りの結果になる可能性は限り無く低い。・・・それに、全勝は後に禍をもたらすかもしれない」

「分かっている。だが、蛮族の総大将を逃してしまった。それが悔やんでも悔やみきれないのよ」

「そうだけどさ・・・そんな全てを一発で手にいれようとするのは雪蓮を見てわかるけど、かなり悪い癖だ。・・・下手したら身を滅ぼす。周りの皆は心配してんだぜ？それに、お前に何かあれば雪蓮・・・もしくはシャオが悲しむ。せつかく雪蓮を死の運命から救いだしたんだ。お前も絶対に死なせない」

「・・・そうね。亮には余計な心配をかけたしまったわね」

「・・・いや、俺も言い過ぎたな・・・王のプレッシャー・・・重圧があるのに」

「母様、亮の例もある。念のため手当てをすることにするわ。思春、明命、亮、三人にも無理をさせてしまったわね。・・・私の独断専行から三人には余計な傷を負わせてしまって・・・本当にすまない」

「い、いえ。蓮華様をお守りするのが私の役目でございます。当然のことをしたままでに過ぎません」

「はい、蓮華様からそのようなお言葉を頂けるとは、この明命も幸せでございます」

「俺は剣であり、盾だ。蓮華を守るのが俺の役目だよ」

こうして見ると、蓮華もかなり王の気配が板についてきた気がする。

「傷の手当てなら、一緒にした方がいいわね。私の天幕に来なさい」

「はっ！ありがたき幸せ」

「ありがとうございます」

「俺は遠慮しとく。・・・男だし」

そして三人は天幕に入っていった。

「・・・だいぶ蓮華も自身がついたみたいだね」

「・・・此度の戦で前線に立ったことが自身に繋がったのであろうな」

祭さんはまるで母親のように蓮華の成長を喜んでいるみたいだった。

「今日の蓮華は恐かったよ？迫力が」

「迫力？いやいや、文台殿に比べればまだまだ。もう少し、英雄として……ああ、そうかなるほど」

「どうかした？」

「権殿もようやく孫一族の血に目覚めたということよ。これは儂が迂闊だったわい。叱責を喰らって当然じゃな」

「孫一族……って……」

「知っておるのか？」

「確か……感情が高ぶると、暴走するんだっけ……？」

「うむ。儂もよく文台殿のときによく相手をしたことか」

「うっわ……」

俺は身震いする。……ある意味助かったかもしれない。

「はぁ……それにしても、あやつらだけで大丈夫かのお？二人とも孫一族の血については知らぬようじゃし……」

「思春は知らないのか？結構昔からの付き合いなんですよ？」

「多分、知らんじやろうな。権殿はいつも責任感が先にくる子じゃったし、思春を信頼はしておるじやろうが・・・それとはちと、別の次元の話ではあるしの」

「そっか・・・」

「明命はそんなことに免疫はなさそうじゃし・・・亮なら知っておるわけじゃし・・・」

「・・・様子を見てこいつて？」

「おお、さすがは天の御遣い。儂の思いを察知するとは頼りになるの」

「わかるっての。・・・でも、俺でも手に余るぜ？」

「きゃあああああ!？」

「お、お止めください!？」

「・・・」

惨劇は始まっている。・・・俺は意を決して天幕へ向かった・・・

「ダメ、動くと結べないでしょ」

「そ、その通りでございますが……んうっ……ね、蓮華様……そのように……や、優しく……触らずに……もっと、しっかりと巻いてくださるほうが……うっ！」

「せつかく、優しく巻いているのに我儘な子ね。そんなに優しいのはキライなの？」

「で、ですから……手の甲で撫でるのは……きやふっ……その……そこは傷を負っておりませぬ……故に……」

「じゃあ、なんで声が出るの？ねえ？」

「で、ですから……そ、そのようにお優しくするのが……ああ……お許しくださいませ」

俺はため息を吐く。……いつもの蓮華や思春の面影は木っ端微塵になつてた。

「りょくお、そこで逃げようとしてる明命、捕まえておいてね」

「は、はいいいいっ！？な、なぜ、私の動きを……く、く存じでいきましたか」

見ると明命はこそそ逃げ出そうとしていた。・・・今の蓮華には逆らえない。

「・・・スマン」

「はうっ！亮様まで・・・」

「うふふふう・・・せつかくの子猫ちゃん、逃がすわけないでしょ・・・じゅる・・・い、いけないいけない。なんかヨダレ出ちゃった」

「ひいひいひい・・・ね、蓮華さまあ・・・お、お許しを・・・」

「りよ〜お〜〜しっかり捕まえておいてね」

「仰せの通りに・・・」

「りよ、亮様・・・あ、あの・・・私、酷いことになりませんよね？なりませんよね？大丈夫ですよね？」

「・・・」愁傷様「

「ひゃああああ・・・そ、そんなああ・・・」

「ひゃあああっ！ね、蓮華ああ・・・さあ、まあ・・・そ、そんなところ・・・っ、摘ままないでください・・・うじうじ・・・く、苦し・・・」

「だめよ・・・うふふふ・・・さりげなく、後ろに下がるうとしても・・・思春は特に傷が酷いから、しっかり手当てしなきゃね」

「で、ですが・・・こ、こんなところまでえ・・・うううう・・・くっ・・・」

俺は全力で視線を逸らす。・・・中学生には刺激が強すぎます。

「ほら、やっぱり、鼻の頭が擦りむいてる。ちゃんと手当てしなくっちゃ・・・ねえ、亮。そうでしょ？」

「そ、それは蓮華様が、お摘まみになりますから・・・血が滲んだだけで・・・くっ・・・」

「・・・ふう・・・ふう・・・お酒吹き掛けるから、沁みるわよお・・・」

「消毒なされてから・・・おっしやならないでください・・・」

「うふふ・・・ごめんごめん・・・酔っぱらってるわね・・・私・・・これじゃあ、満足に手当てが出来ないから、亮にしてもらおう？」

「なっ・・・そ、それは・・・それはお許し下さ・・・うっ・・・蓮華様・・・私の太ももにそうやって・・・指を這わすのは・・・お、お止めください・・・」

「傷がないかの確認よ。ほら、亮も明命を連れて、早くここに来て」

明命が物凄く首を左右に振るが・・・

「・・・ホントにスマン・・・明命」

「はう！そ、そんな・・・お、お母様・・・み、明命は・・・お終いのようですよ」

嫌がる明命は押しして蓮華の元へ連れて行く。

「りよ〜お〜、あんまり驚いてないのね。なんかツマンナイ」

「・・・驚いてますよ」

つい敬語になってしまった。

「それにしても、落ち着いてるみたいだけど？」

「・・・祭さんが予想してたし・・・俺も知識にあるから」

「あら？そつなの？」

「・・・雪蓮もそつだし・・・」

「そう・・・姉様もそつだったの」

思春は最早限界なのかぐつたりしていた。

「それで、姉様はどんな感じなの？激しかったの？ねえねえ」

「言わない。・・・言ったら二人が完全に燃え尽きる」

「ふ〜〜ん、そんな凄いことを姉様はするんだ」

「れ、蓮華様っ!?!?・・・きゃああっ!?!?」

思春が目で『なんでそんな大事なことを言わなかった』といった抗議の視線を殺気と共に送ってくる。

「ま、まあ、俺が蓮華の手当てをするから、二人を解放しても・・・」

「

「ああんっ!もうそうやって二人つきりになって、手当てにかこつけて、私に恥ずかしい格好をさせて、それからそれから、なりふり構わず・・・まあ、亮ったらいやらしいんだから」

ああ・・・蓮華のイメージが崩壊してゆく・・・

「いえいえ、亮様はそんなことをなさるような方ではございませんから、是非とも蓮華様のお手当てをお願いするのが・・・」

「明命!そういえば、あなたの手当てがまだだったわね・・・むふふじゅる」

「・・・バカ、今の蓮華には逆効果だよ・・・」

「ひゃああああ・・・わ、わたしは結構ですう」

「ふ~~~~ん、私の手当てを受けたくないっていつの?明命はそうなんだ?」

「うううううう~~~~亮様~~~~お助けくださいませえ~~~~」

」

「なんだか、さっきから明命は亮のことばかりね・・・どうなの亮？」

「・・・きつと蓮華の気を惹きたいから、俺をダシに使ってるんだよ」

「りよ、亮様あああ~~~~」

・・・スマン、明命。

「うふふふ・・・じゆる。いけない、またヨダレが・・・さあ、明命。こっちにもっと寄って寄って」

「ううう~~~~亮様。お恨みいたしますううう・・・ううう~~~~」

「・・・助きたいけど、孫一族に従えるなら、これは逃げられん。諦めてくれ」

「ああああ・・・は、お母様」

・・・いつかシャオもこうなる日があるんだろうか・・・やだな。

「まずはどこに傷があるかちゃんと調べなきゃね。さあ明命、そう強ばってないで緊張を解いて」

「ううう~~~~蓮華様・・・その・・・変なことは・・・お願いですからお止め・・・ください」

蓮華はまじまじと明命は見つめる。・・・俺はいつまでこの地獄にいなきゃいけないんだ・・・？そう思っているうちに蓮華が明命に治療？をしていた。

「ううううううれ、蓮華様、あの～ホントに大丈夫でございますから・・・」

「もう～変な事はしないわよ～もちろん・・・じゅる・・・やだ、ホントにヨダレでちゃう。そうだわ、これを明命の傷に・・・」

蓮華はヨダレを指につけ、それを明命の傷口につける。

「ひいひいひい・・・れ、蓮華ああああ・・・そ、そのような・・・うううううう」

「あら？お酒だと沁みちゃうからと思って、これにしたのに・・・不満なの？」

「お、お願いです・・・お酒での消毒で・・・大丈夫ですからあ」

「上手い言い逃れね。じゃあ許してあげようっかな」

「そうです。傷の手当ては私どもだけでできますから、蓮華様はゆつくりお酒でもお飲みになって・・・」

「じゃあ、ごうしましよ。亮、明命と思春の手当て、私の代わりにして」

蓮華が爆弾発言をかましてくれました。

「ええええええええええ！」

「私は・・・空気。私は空気・・・存在をなすだけ出さないよう・・・
・空気のように・・・存在を・・・えっ？れ、蓮華様っ、お、お許
しく下さい！そ、それだけは」

「だゝめ！亮だつて突つ立ってるだけじゃあ面白くないでしょ」

・・・そつだ。

「・・・じゃあ、俺が真似をして・・・」

それを聞いた瞬間、明命はおるか思春までもが希望を見つけたような顔になる。

「・・・それはだゝめ〜！」

バシン！

バカな！？蓮華が投げた石みたいな何か俺の手からケータイを弾きとばす。・・・マジですか。

「も、もう・・・限界です！明命は逐電いたします！てやあっ！」

「あつ！明命！そなただけズルイぞ！わ、私も・・・」

二人はいつもより素早く先を争うように天幕から逃げ出そうとする。

「逃がすか！」

しゅるるるる

蓮華が布を引つ張った。

「きゃあああああ！」

「きゃあああああ！」

すると二人の包帯は取れそうになり、思春までもが少女の悲鳴をだした。

「ほら、ちゃんと結ばなかったから解けちゃったじゃない。慌てるからよ……むふふふふ」

「あわわわわ……お母様……私は悪い主君に食べられてしまいます」

「れ、蓮華様……その、逃げようとした私どもが悪うございまして……で、ですから……そのようなお顔をしてお近づきになるのは……くうっ」

「ひ、引っ張っちゃああ……だ、ダメです……や、やああ……み、見えちゃううううううう」

「れ、蓮華！いい加減にしろ！」

これ以上は俺が危ない（命的な意味で）

「うふふふふ……だあって……とつても楽しいんだもん」

「お、おい！亮！み、見るな！……きゃああっ……そこまで解けて……」

「見ないでください見ないでください見ないでください……お願いですから見ないでください」

「えへへへ」

二人はなんとか逃げたいのであろう。だが、それには肌を完全に露にしなくてはならない。……蓮華はそれを見てニヤリツと笑う。

「えへへい！」

「きゃああああ！？」

蓮華が段々とエスカレーターしていく。

「こ、こらっ！亮！蓮華様をなんとかしろ。そのためにここに来たのではないのかっ！？」

「俺だつて必死だよ！」

「えへい」

「ひっ……ね、蓮華様……ふ、不意打ちは……ひ、卑怯で」

ぞいます」

「ごめんね〜思春。じゃあ、今から引つ張るね〜用意はいい〜?」

「そ、そんな・・・宣言されても・・・きゃあっ!」

蓮華はホントに楽しそうに包帯を引つ張る。

「も、もうだめ・・・で・・・す・・・」

「思春ーーツ!?!」

俺は崩れ落ちた思春を支えようとするが・・・

「こおらあ〜〜りよ〜う〜私以外の乙女に抱きついちゃあ〜
〜だめええ!」

しゅるるる

蓮華が投げた布が俺の足に絡み付く。

「ば、バカ!?倒れるから!?!」

「う、うるひゃあ〜〜い」

蓮華は容赦なく布を引つ張った。

「やああああ!りよ、亮様!こつち来ちゃ、ダメええええええええ

「！」

「む、無理だー！ー！ツ！！」

「あはははー、面白ーいつ」

ドカァンツ！

「きゃははは・・・みんな一緒一緒。一塊ねー」

「なんで包帯引つ張つた蓮華まで絡まつてんの！？」

「だつてえゝゝゝ楽しそうなんだもん」

「バカ！変に引つ張るな！ますます絡まるだろっ！？」

「あわわわわ・・・りよ、亮様の、お股が・・・目の前に・・・やあ・・・いやあああ」

「み、明命・・・う、動くな・・・くつ、だ、誰だつ、私の尻を触つてるのはっ」

「なんだ、思春のお尻なんだ」

「そんな・・・がっかりしないでください！」

「うおあああ！？なんで俺のを触つてんだよ！？」

「りよ、亮様ああ・・・う、動いちゃああ・・・うっうっうっうっ、お

母様・・・明命は汚れてしまいましたあ・・・」

「明命・・・泣いちゃだめ。女の子が必ず通る道よ。あなたはもっと強くなれるわ」

「通らねえよ！人の尻触りながらそれっばいこと言っなああああ！」

俺は明命のために体勢を変えようとしても、蓮華が邪魔するし、空いた方に行けば思春の身体があるし、どうにもならない。

「しくしく・・・お母様あああ・・・」

「おい、亮・・・もう、が、我慢するから・・・どこでも触っていから・・・この体勢を・・・なんとかしろ」

「・・・了解、隊長・・・」

「だっ誰が揉んでいいと言った！亮！」

「俺じゃねえ！蓮華だ！」

「思春の胸って柔らかくくしい」

「お、お戯れを・・・りよ、亮！は、早くしないか・・・わ、私も・・・その・・・泣きそうだ」

見ると思春の目が若干潤んできた。・・・急ごう、このままじゃ、蓮華だけではなく、思春のイメージすら壊れる。

「……つて蓮華！足を絡めるな！解けないだろ！？」

「亮様……それ、私の足です……ひつく……」

「わ、悪い……もうなにがなんだか」

「喉乾いた」

蓮華が、唐突にそんなことを言い出した。

「え？」

「え？」

「は？」

「かいてえ〜〜ん！」

蓮華はそう言つて転がり始める。……俺達を捲き込んで。

「」「うわあああああ！」「」「」

「うふふ……これでお酒に手が届くわ……あんっ……やあだ

あ……亮、胸に顔を埋めちゃだめよ？」

「……もう、勘弁してください……！」

もう俺すら泣き始めていた。

「み、明命……解けそうか？」

「ひつく・・・はい、なんとか。さっきのおかげで大分楽な体勢になりましたから・・・亮様が蓮華様の毒牙にかかっている間に・・・なんとか抜け出してみます」

この野郎・・・俺を囮にしやがった・・・

「こっちは左の手が自由だ。明命は？」

「は、はい・・・右の足が・・・でも、亮様の足に挟まっているせいで・・・」

「なんとか外れないか？」

「や、やってみます」

明命は足を引き抜こうと勢いよく膝を曲げる。

ズンツ！

「~~~~~?!?!?!?」

襲いかかる最悪の痛み。

「え？も、もしかして・・・りよ、亮様!?!?・・・じゅめんなさい」

「~~~~~ツ!?!?!?~~~~~あぁ~~~~~」

この痛みは・・・男にしかわからない・・・!!

「ええいつ！いつまでも騒がしいと思ったら・・・いい加減にせんか！」

ゴツンッ！

「きゃふんっ！いつたあ~~~~い」

「ハメを外すのもいいが、大概にせんか！」

蓮華は乱入してきた祭さんの一撃でようやく沈んだ。

・・・翌朝の軍議はこれでもかと言うくらい余所余所しかった。明命は下を向いて落ち込み、思春はまるで魂が抜け落ちたかのように集点が定まっていな目で見つめていた。

「蛮族も概ね平定したわけだし、戻ることでするしいですか？ 権殿」

「え？ ああ・・・そのように頼む」

蓮華は蓮華で心ここにあらずといった感じだった。

「では、それぞれ準備にとりかかるよう。権殿はこの後、少しお話
が」

「え？ああ、分かった」

「亮は二人に話を頼む」

「・・・はい・・・」

俺もかなり疲労困憊だった。

「明命・・・」

「お、恐ろしい・・・蓮華様にあのようなご趣味があったとは・・・
やはり普段、お堅くて真面目だから・・・その反動で・・・ぶつぶ
つ」

「・・・明命、聞こえてるか？」

「ひいと！？りよ、亮様・・・」

「大丈夫・・・じゃないか」

「……あの……その……ちょっと自信なくなりました。蓮華様にあのようなご趣味があったとは知りませんでしたし……」

「……趣味じゃないんだよ……アレは……孫一族の……血だ」

「詳しく話せ」

思春も話に加わってくる。

「俺もよくは知らない……けど、どうやら戦とかで感情が高ぶるとああなるらしい……下手したら、シャオもああなる可能性が充分になる」

「ッ！……こ、このお役目、思春殿にお譲りします」

「わ、私は……蓮華様のためならば……いや、しかし……」

「……嫌でもこれから何度も味わう羽目になると思っよ？」

「な、何度も……さ、避けて通ることは……できないんですよ、ね、はあ〜」

「むう……私はどうすれば」

「……これからは、俺達が戦で頑張って、蓮華の出番を減らすしかない……！」

「それです！それがいいです」

「何がいいのかしら？」

「ひいっ！れ、蓮華様！あ、あの・・・し、失礼します！」

「思春！時間があるから鍛練しようぜ！」

「あ、ああ！付き合ってやる！れ、蓮華様・・・失礼致します！」

俺達三人は同時に逃げ出した。

「（雪蓮くっっ！やっぱりお前の妹だくっくっ！！）」

1970

「……と、言うことがあったんだ」

「……凄いな……」

咲の口元がひきつってた。

「……あのあとは大変でした」

「……大変？」

「……実はあの後も一回討伐することになったんだけど……」

亞莎が・・・」

「あー・・・わかった」

「咲が羨ましいよ。蜀は平和そうで」

「いや・・・そうでもなかったぜ？・・・意外に朱里と雛里が間違つて酒を飲んだときなんか・・・」

「なんか？」

「・・・あの星が色事の話で先に折れた」

「・・・うっわ」

「・・・恋は、大丈夫」

「・・・恋が酒飲んで変わったら怖いよ・・・」

「・・・饒舌になつたりしてな、恋が」

俺と咲は同時にそれを思い浮かべる。

『恋・・・お腹空いちゃったな 咲、ご飯食べよっ』

「・・・ないない」

俺と咲は手を振りまくる。とりあえず、俺達は寝ることに決めた。

回想（後書き）

蓮華

「いやあああ！？な、何でこのタイミングでコレを！？」

亮

「アハハ・・・」

セイバー

「蓮華・・・流石に酒でここまで変わるの・・・」

刹那

「・・・凄いですね」

亮

「いや、亞莎に至っては蓮華にすれ違っただけで目を回して倒れたからね？」

蓮華

「・・・母様も姉様も・・・」

刹那

「・・・お酒とは怖いですね」

亮

「いや、酒のせいってか孫一族の血のせいだけ？」

セイバー

「なるほど・・・歴史としては私の方が後ですが・・・そのような情報はなかった」

亮

「セイバーは酒を飲まないのか？」

セイバー

「勝利の盃ぐらいですかね。・・・私的で飲むことはありませんでした」

亮

「刹那は？」

刹那

「いえいえ・・・私は未成年ですから」

亮

「あ、そっか・・・恋姫の世界は年齢に関係なく酒を飲むからな」

蓮華

「わ、私はそこまで飲まないぞ！」

亮

「・・・知ってるよ。つうか酒の出費は大体雪蓮か祭さんだからね・・・たまに冥琳も飲むけどホントにたまにだし」

セイバー

「・・・しかし、大変ですね。あのようなことがあるとなると、王としても悩むでしょう」

亮
「・・・よく考えたら、蓮華は孫権だし、セイバーはアーサー王な
んだよな・・・」

刹那
「凄いですね・・・」

蓮華
「・・・今回はここまでにしておいてくれ・・・」

亮
「・・・それじゃ、次回の真似と開閉と世界旅行」

セイバー
「次回もまた見てください」

刹那
「それではまた次回」

神々（前書き）

・・・テストが近いな。・・・学生の人はそのテストがありませんよ。ね？・・・まあそれは関係なしに投稿します。ではどうぞ。

神

・・・やっと解放の時が来て、皆が集まる。

「くっやっど解放されたぁ・・・あんなかつてえ床で寝かされて首痛つてえ」

「天使を失墜させれば私達の楽園となるんじゃないですか、この学校は」

「・・・何で脱いでるの？」

「・・・何なんだあの連中！」

「・・・次来たら返り討ちにするか？」

「・・・一般生徒だからダメよ」

咲が提案するがゆりが却下する。

「・・・でも、こんな形で反省を強いる一般生徒なんていなかった」

「天使が抑止力になってたんじゃないのか？」

「・・・そうね。NPCの行いは基本的にはあたし達のなすべき模範だけど、その感情は現実の人間と同じもの。どんな偏屈な奴がいたって不思議じゃないってわけか」

「・・・厄介ですね・・・」

「・・・倒す？」

「・・・恋、ついさっき一般生徒だからダメって言われたろ？」

「・・・(コクッ)」

「にしても、何か手がないかな・・・」

「色仕掛け行きますかー」

ユイがいきなり言い出す。

「お前のどこに色気があるんだよ？」

日向が間髪入れずに言う。

「んだとう！？見たことあんなのかあ！？」

「上着越しでも充分わからあ」

「揉んだことあるのかゴリア！絶妙の柔らかかさなんじゃない！」

「ッ！知るかよ！」

「・・・浅はか也」

そして今後の行動を決めるために、適当に授業を受けることになった。

「・・・んて、参加してみたのはいいもの・・・」

大山がポテチを食べてたり、

「通れば、追いリー！」

「残念。リーチチートイ、ドラドラ親満」

「んだよくっそ〜！ひさ子の一人越しじゃねえか！」

「く……名前に麻雀なら勝てると思ったのに……」

「女相手に、なんたる体たらくな……!」

「その一角……もう少し静かに」

「ああ、すみません」

ひさ子、藤巻、咲、松下は麻雀をしていた。……TKは踊ってるし。

「先生ーッ!トイレ!」

「……またお前か……行ってこい」

ユイはどうやら一分間ごとにトイレにいく生徒をやってた……アホだ。

「……」

椎名は指で色んなもん支えてたり、高松は腕立てやったり、野田は机の上で爆睡してた。

「……ま、俺も」

人解や鈴音を整備してるけどね……その時、ガラッと入口が開き、直井が入ってくる。

「そこまでだ貴様ら」

俺は瞬動を使って窓から逃げ出した・・・

それからしばらく・・・

「おい、貴様」

直井が声をかけてくる。

「ああ？」

「なんだそれは？」

直井はそう言つて人解と鈴音を指差す。

「・・・単なる装飾品だけど？」

「・・・貴様らは堂々と校則違反をするな・・・まあいい、それは没収だ。大人しく渡せばこの場は見逃してやる」

そう言つて鈴音と人解を取ろうとする一般生徒。・・・その一般生徒が武器に触れようとした瞬間、俺はキレた。

「……ッ！NPC風情がコレに触るなあ！！」

バキィ！

拳が一般生徒に直撃し、一般生徒が吹っ飛ぶ。

「……！」

怒りに任せて動こうとした瞬間、

パン

「え……」

……撃った……のか……？……一瞬で意識は消えていった……

「……」

目が覚める。……辺りはまるで独房のような……ってあれ？

「……咲？」

「……………」

咲は身体中縄やテープでぐるぐる巻きにされていた。……俺は手錠が掛けられているだけだ。俺は咲の口に貼ってあるガムテープを剥がす。

「……ぶはっ！……あー、死ぬかと思った……」

「……どうしたんだ？」

「いや……銃声が聞こえてさ、様子を見にきたら……後ろからガッーン、と」

「……スマン」

俺は謝りながら咲に聞く。

「……お前の能力でどうにかならないのか？」

「さっきからやってるよ。……けど、手までガッチリ固められてるから、対象物を選択できないんだよ」

「……くそ、直井の野郎……鈴音と人解を持っていきやつて……！」

せめて鈴音があれば縄を斬れるのに……

ズズウ……ン……

その時、低い唸り声のような地響きが聞こえる。

「……く、確かこのあとは……」

「……亮！咸掛法の力で手の縄を引きちぎってくれ！」

「……その手段があったか！」

俺は咸掛法を使って無理矢理咲の手を固めているテープと縄を外す。

「よし……開け！」

咲が自身にまとわりついているモノと俺の手錠を外す。

「……もいつちよ！開け！」

咲は更に扉も開ける。

「……サンキュ」

「いーさ、早くいーいっ」

俺達は校庭へ急ぐ。

・・・校庭はまさに死屍累々。地獄絵図だった。

「く・・・咲！」

「・・・無理だ！負傷者が多すぎる！」

野田、藤巻、大山、松下、椎名・・・それに日向やゆり、そしてほとんどの戦線メンバーが血まみれで倒れていた。

「・・・どうやって抜け出した？」

直井がそう聞いてくる。

「・・・お前に答える義理はないね」

「・・・それより、俺の武器を返してもらおうか？」

「このことか？」

直井はそう言っつて、大切な武器を取り出す。

「返してやるさ・・・そら」

直井は事もあるつに鈴音と人解を・・・雨で濡れたグラウンドに放り投げた。

「……ッ！」

「どうした？持っていないのか？」

直井は更に鈴音と人解を踏みつける。……ッ！

「……んの、やるおおおお！！！！」

俺は瞬動を使って一気に直井へ突っ込む。

「……ッ！？亮、避ける！」

咲の言葉、そして自身の直感で横に飛んで避ける。

ヒュンッ！

そこに空を切る一撃。俺はすぐに立ち上がる。……が、相手を見て固まった。

「……」

「な……明……命……」

虚ろな目をした明命がそこにいた。

「亮……ッ！うわ！？」

ズガァンッ！

新たに現れた誰かによって咲は吹き飛ばされる。

「嘘だろ……！」

「……恋！」

明命と同じように虚ろな目をした恋がいた。

「直井……明命達に何をした……！」

「ふ……少し暗示をかけてやっただけだ」

「コイツ……」

咲が体から黒い闇を発する。

「……決めた。テメエは精神が崩壊するまでブッコロス！」

咲がDモードを使う。

「……まずは明命達を正気に戻すぞ！モーションキャプチャー！
蓮華！」

蓮華……力を貸してくれ……！

「……わかってる、お前の方が直井をぶっ殺したいだろうしな……」

咸掛法を使用したままのせいか、蓮華の真似をしながらも咸掛法は
持続していた。

「・・・タアッ！」

「・・・」

カキイインツ！

振り下ろした一撃は簡単に受け止められる。

「やあっ！せいやっ！そらあ！」

カキン！

キキキンツ！

カキヤアンツ！

く・・・！コレでもダメなのか？・・・

「うらっ！」

カキンツ！

戦いながら思う。・・・明命は、かなり強い。いや、強いのは判っていたが、今の明命には容赦がない。麻帆良の武道会の時よりも一撃が鋭かった。

「・・・！」

ヒュオンツ！

明命が刀を振った瞬間、見えない何かで吹き飛ばされる。

「ぐわあっ!?!」

地を転がり、口の中に血の味が広がる。

「く……」

このままじゃあ……明命を助けるどころか俺まで危ない。……いくら死なないからと言ってここで死んで意識を失えば次に目が覚めた時は全てが終わってしまう。

「(……嫌だ)」

負けられないんだ……!俺は明命を助けたい!

(……なら、力を貸してやろう)

「……え?」

声が聞こえたと思った瞬間、手が……いや、南海霸王が、明命が持つ魂切、そして地に転がる鈴音と人解が光ながら一ヶ所に集まる。

「な……え……」

そしてソレは槍を形どっていく。

「……」

そして光が収まり、槍の見た目が明らかになる。……価値があり

そんな装飾を施された、紅い槍。

「・・・聞いたことがある」

祭さんが言っていた。孫堅・・・文台さんは深紅の槍を使い、敵陣へ斬り込んでいった、と・・・

「まさか・・・コレが・・・」

俺は槍を手に取る。・・・その瞬間、記憶が流れ込んでくる。

『祭！ついてこい！』

『応っ！』

・・・かなり昔なのだろうか祭さんはまだ俺と同じ年ぐらいだった。そして記憶はどんどん流れてくる。

『今から劉表を討伐する！雪蓮、私は裏門を攻める。・・・正面は任せたぞ！』

『はい！お母様！』

戦局は有利に進んでいる・・・はずだった。

『・・・来たぞ、孫堅だ！縄を切れ！』

敵兵が縄を切ると、岩石が転がってくる。

『なっ!?!しまっ・・・』

一瞬で景色が変わる。そこにいるのは岩石の前で泣き崩れる雪蓮。

『あ・・・ああ・・・!お母様・・・お母様あ・・・!』

『策殿・・・非情じゃが、まだ戦は終わっておらん』

『・・・分かってるわ・・・祭』

雪蓮は文台さんが使っていた槍をその場に突き刺し、同じく側に落ちていた南海霸王を手に取る。

『劉表・・・!絶対に頸を取る!』

「・・・!」

景色が戻る。それはさっきと全然変わらない雨が降るグラウンド。

「・・・文台さん、力借ります」

槍を回して、構える。

「我、呉王也!!」

さっきより身体が軽い……!俺は使ったことがあるはずのない槍をまるで手足のように振り回す。

「ウラララアッ!!」

「ッ!!」

キキキキンツ!

明命は素早く隠し持っていた小太刀で防ぐ。……だが、いささか無理があつた。

「ハアッ!!」

カキヤアアンツ!

小太刀を弾き飛ばす。

「明命……」

俺は槍を構え……覚悟を決める。

「ヤアアアアッ!!」

ズシャツ・・・

その一撃は・・・明命を貫いた。

咲

「く・・・」

「・・・」

ズガアアアッ！

容赦ない一撃はグラウンドにクレーターを作っていく。

「・・・」

ズドオオンッ！

「ぐ・・・」

アレをまともに喰らったら一撃で終了だ。

「ダークファイガ！」

「・・・」

ガアアンツ！

たまに反撃するが、弾かれてしまう。

「・・・」

その隙を突いた一撃・・・避けられない！

「ツ！ダークシールド！」

盾を展開するが・・・

ガキヤアアンツ！

「がはっ・・・」

容易く盾ごとぶっ飛ばされる。

「チツ・・・」

恋は容赦なく次の一撃を叩き込もうとしてくる。俺は詠唱を始める。

「魔法の射手連弾・闇の29矢！！！」
セリエス・オブスクーリー

あまり詠唱が出来ないせいで本数は少ないが威力は高めた。・・・

だが、恋は避けることもせず、

「……」

ガガガガンツ！

……全て弾いた。そしてそのまま恋は突撃してくる。

「……ッ！ラア！」

カキイインツ！

やはり押される……！

「けど……」

負けられない。恋は他人を思いやる心が強い。万が一俺を一度でも殺したと知れば……

「……そうならないためにも！」

勝つしかないんだ！

「……ッ!？」

その時だった。ソウルイーターが輝き始める。

「なん、だ……？」

ソウルイーターの輝きが収まり、見るとソウルイーターではなく、
キーブレード ウェイトウザドゥーンとなっていた。

「……行くぜ！」

空いている右手にキングダムチェーンが現れ、俺はその二本のキー
ブレードを投げる。

「セッション！」

光と闇がぶつかり合い、大規模な爆発を引き起こした……………

亮

「……う……」

抱き抱えていた明命が目を覚ます。

「明命……！」

「あれ……？蓮華様……？」

「・・・俺だよ」

「・・・亮、それは・・・」

明命は槍を指差す。

「これか？・・・これは、文台さんの武器だよ。・・・名前知らないけどな」

そしてまた槍が光り、元の武器に戻る。

「（呉王の槍・・・か）」

見ると咲も恋を抱き抱えていた。・・・そして音無達がたどり着き、直井の胸ぐらを掴んで叫んでいた。

「ーーーーじゃあ、アンタ認めてくれんの？」

「お前以外の何を認めろって言うんだよッ!」

アツチは大丈夫かな・・・？少し気が緩み、物真似が解除されると同時に意識が途絶えた・・・

神（後書き）

亮

「くっそ・・・直井の奴・・・」

咲

「まあそう怒るなよ」

亮

「じゃあお前は賈馱の眼鏡割られたらどうするんだ？」

咲

「殺す。詠から貰った大切な眼鏡だ。・・・俺の宝物なんだ」

亮

「ふん・・・咲、後ろ」

咲

「あ？後ろ？」

詠

「・・・」

咲

「・・・」

詠

「・・・その、ボク的眼鏡をそこまで大切にしてくれてたんで・・・
もう少し良いのを渡せばよかった・・・（ボソッ）」

咲 「え、今なんて・・・？」

詠

「ッ！な、何でもないわよ！」

亮

「・・・あーあーごちそうさま」

詠

「・・・うっさい」

亮

「・・・コホン、今回は読んでくださっている皆さんにアンケートを取ります」

咲

「またえらい唐突だな」

亮

「・・・それは、今回登場した文台さんの槍の名前です。・・・希望がございましたらどんどん言ってください、お願いします」

咲

「・・・今回はここまでにしておきますか」

詠

「次回の真似と開閉と世界旅行！」

亮

「次回もまた見てください」

咲
「それではまた次回」

川の主釣り〜（前書き）

鳩麦さん！アイデアをありがたく使わせていただきます！ではどうぞ。

川の主釣り

・・・あの出来事から数日が経過した。

「・・・鈴音はこれで完璧か・・・くそ、人解は細かいとこまで泥が入ってるな・・・」

俺は針を使って泥を取っていく・・・実は俺が目覚めたのはついさっきだ。

「・・・でさ」

俺は何食わぬ顔で読書している直井の方を向く。

「・・・なんでテメエがいるんだよ!? ああ！」

「・・・貴様に言う必要はない」

「んだと・・・？」

「ついでに言えば何故そんな鉄のあぐつ!?!」

バキイイインッ!!

俺は直井を“咸掛法”全開でぶん殴る。

「・・・高松・・・窓開ける・・・!!」

「は、はいい!?!」

高松にも殺気を当てる。

「お、おい！貴様、何をする！」

直井を片手で持ち上げて窓の近くまで持って行く。

「ま、まさか……」

「……さあ、お前の罪を数える」

「は？何を言っている。僕に罪など、ああああああ……！！！」

直井の言葉の途中で俺は直井を投げた。

「……じゃあまず一つ目……俺を撃ったことだ！」

威掛法のエネルギーを左手に乗せて放つ。

ズドオオオンッ！

「二つ目……鈴音と人解をよくも粗末に扱いやがった、な！！！」

ズドオオオオンッ！

「三つ目……明命や恋……それに戦線の皆を傷つけたよな！！！」

ズドオオオオンッ！

「最後に・・・なんかムカつくんだよテムエはあああああ！！！！」
ズドオオオンッ！

「ハアー・・・ハアー・・・ハアー」

大山が「最後のは亮君個人の好みの問題じゃないの・・・？」とか言ったから殺気を叩きつけたら黙った。ちなみにその後しばらく戦線メンバーに避けられた。・・・咲いわく理由は「なんか怖かったから」らしい。

・・・それから更に数日いつもと変わらない日々が続いた。

「・・・つたく、ここは小学校かよ、ガキばっか増えていくなあ・・・」

日向がボソリと言った。

「・・・貴様、僕に言ってるのか？僕は神だぞ」

「ああ？まだそんなこと言ってるのかよ・・・音無に抱きついて大

泣きしてたくせによ……うおお!?」
直井が一瞬で日向との間を詰めていた。

「誰が泣いたつて? ……泣くのは貴様だ。さあ、選択バサミの有能さに気づくんだ。洗濯バサミにも劣る自分の不甲斐なさを……嘆くがいい」

そして直井が洗濯バサミを投げる。

「せ、洗濯バサミ……挟める、挟んでも落ちない……!洗濯物が汚れない!素晴らしい!……ああ!クリップ替わりに紙を挟んだりとか応用も利く使える!それに対して俺は何なんだああ!」

……催眠術か……ウゼエ。

「……直井、調子乗るなゴラ」

「は、はいいい!申し訳ありません!」

「……亮、一体何をしたのですか……」

明命の質問には答えない。

「……そっぴや咲、お前は直井を殺らないのか?」

「……直井に対しては物騒だなお前は……お前がやり過ぎで俺の殺気は失せたよ」

「ふーん……」

終いには日向が跪いて泣き始めていた。

「……音無君、直井君も……ちよつと来て」

ゆりが二人を呼び出す。……ええと……確か音無の記憶を呼び覚ますんだっけ？……妹が死んで……それで生き甲斐を見つけるために医者になろうとした矢先に……死んだ。……だっけ？もの凄い記憶がぼやけてるけど……

「……俺はいつものようにガルデモの練習を見に行く。……のだが、」

「……（イライラ）」

「……亮、お前さ……」

「……ああ？」

「いや……何でもねーよ……」

「……（ビクビク）」

「・・・ひ、ひさ子先輩・・・何か物凄く空気が重いんですが・・・」

「・・・そうだ、なあひさ子」

「ッ！・・・あ、ああ、なんだ？」

「・・・お前達は無事だったのか？あの時」

「あー、アタシは少し制圧されたな」

「・・・んだと？」

俺の殺気が一際強くなる。

「・・・私も少し引っ掻かれましたかねー・・・あはは」

「バカ、関根・・・」

「そうかそうか・・・悪い、急用が出来たわ、じゃな」

俺は部屋を出た。・・・ガルデモの面々はその瞬間、ため息を吐いた・・・が、その直後に直井の悲鳴が聞こえ、再びガルデモの面々はビクッ、となった。

「……」

「……亮、お前さ……直井嫌いだろ」

「何を当たり前のことを。……なに？咲は直井を庇うのか？」

「い、いや……！そんな気は微塵もないぜ！？」

咲は明命に近づく。

「……なあ、明命……亮って呉であんな状態になったことあるか？」

「……いえ、あそこまで露骨に嫌みたっぷりな亮は初めて見ます」

「……亮、怖い」

「……そして、高松が食券が不足しているらしいと言った。

「どうする？トルネード行っとくか？」

藤巻が提案する。……意外に発言数多いんだよな、藤巻。

「いや……今日のオペレーションは、モンスターストリームよ」

「うわあああ……！」

「遂に来よったかあ……！」

「絶望のCarhival・・・」

「何なんだ、その作戦は・・・!？」

「あ、毎度のことだけどお前の考えてることは違つぞ」

「だから・・・なんで知ってるんだよ・・・!」

「知ってい・・・いや、何でもない」

俺が片目で咲を見ると咲は慌てて口を閉じた。

「・・・ちよつと歩いたところに川があるだろ?そこで食料の調達だ」

日向が説明する。

「そ、それつてもしかして単なる川釣りなんじゃ・・・」

「そうだけど・・・それがどうかしたか?」

「ああ、いや・・・」

そして川に向かうことになったのだが・・・

「おま、なんてヤツ連れてくんだよ・・・」

・・・音無が奏を連れてきてた。

「い、いいじゃないか・・・混ぜてやるっぜ」

「敵だぞ！我らが戦線の宿敵だぞ！」

野田がブンブンハルバードを振りながら言う。

「アホですね」

「浅はか也」

・・・誰か言わなくても判る台詞を言う二人。

「聞いてくれ、もう無害だ！敵じゃない！」

「だが、まがりなりにも生徒会長だぞ！」

「ちなみに、現生徒会長代理もいますが」

「その通りです。が、その前に僕は神です」

「ああん？」

「い、いえ！ 勿論大澤様の方がお偉いですが！」

「・・・直井が随分へタレてきたな・・・」

「・・・どうすんだよ、ゆりっぺ」

「・・・もう生徒会長でもないんだし、いいんじゃない？」

「『ええええええええええええ！？』」

戦線メンバーが叫ぶ。

「だ、大丈夫かよ・・・」

「なんか凄いメンバーになりつつあるなあ・・・」

そして川に着くと、先着がいた。

「・・・誰だアレ？」

「ん？ああ、亮は知らないんだっけ？・・・アイツは斉藤。大の釣り好きでな、仲間からはフィッシュ斉藤と呼ばれている」

日向が説明してくれる。・・・見た目は釣りキチだがやってることは釣りバカだな・・・

「・・・つーわけで釣り・・・やるか」

明命はやったことがあるのか、手慣れた手つきで用意をする・・・が、

「・・・？」

「・・・」

恋と奏は竿を持って止まっている。・・・咲はまだ自分の準備が終わってないのか荷物を漁ってた。

「・・・恋、竿を勢いつけて振るんだよ。そんで魚がエサに掛かるのを待つ」

「・・・（コクッ）」

奏も音無に教わり、二人は同時に振りかぶり・・・

「「いだだだ！？俺、俺が釣れて、伸び、伸びる！?!?」」

・・・咲と日向が釣れた。・・・そして奏は音無にしっかりと教わり、第二投・・・！

「うわああああ!?!」

・・・竹山が針に引っかかって飛んでいった。

「竹山ああああ!?!」

「クライストとおおお・・・!!」

キラーンと音がして竹山が消えた。

「つかお前・・・凄い怪力だな」

「・・・オーバードライブはパツシブだから」

「パツシブ?」

・・・その後もしばらく釣りを続けた。・・・結果、

明命 五匹

恋 四匹

咲 二匹

俺・・・すっからかん

「う、うう・・・」

俺は泣き崩れた。

「あ、あうう・・・」

「……かける言葉が見つからねえよ……」

「……亮……」

その時、いきなり辺りが曇り出す。

「ん……？」

その時、ユイとゆりを除いた全員がまるで大きなカブのように協力して竿を引っ張る。

「……まだまだ魚は釣れません。ってか」

「……アホ」

次の瞬間には奏がメンバーごとバカでかい魚を釣り上げた。

「……って、マズくないか!？」

「……ッ!」

恋が方天画戟を構える……

「って恋!その角度で宝具を使ったら皆まで消し炭になっちまうよ!？」

咲が恋を止める。すると明命が構える。

「私なら捲き込まずにいけます!」

明命が跳ぶ。そして奏もハーモニクスを使って分身を出す。

「――闇夜を駆ける疾風の一撃コンセツ――!!」

ズバァアンツ!!

・・・魚は細切れになった・・・

「・・・!!」

俺は見逃さなかった。奏が出した分身が消えずにどこかへ行こうと
しているのを。

「ッ!!」

俺は瞬動を使って偽奏を追いかけた。

「……待てよ」

「……」

俺の声を聞いた瞬間、偽奏（まあ正しくは偽じゃないけど）はハン
ドソニックを出す。

「……容赦なしか……！」

（私の力を使え！）

文台さんの声が聞こえた気がした。俺は右手を高く上げる。

「……来れ、呉の若き誇りよ！ここに集いて呉王の力を呼び覚ま
せ！」

そして空に明命の南海霸王、鈴音、人解、魂切が集まり、槍を形作
る。

「天をも駆ける呉王の牙！『刺天猛虎』！！！」

槍を手にした瞬間、身体が軽くなる。

「……来いよ」

「……！」

偽奏が突撃してくる。俺は慌てずに初撃を弾く。

「どつした？遅いぜ？」

「く……」

偽奏は回転しながら斬り込んでくるが……今の俺には通じない。

「ハアツ!!！」

カキヤアンツ!

キキキキンツ!

ガキインツ!

槍なんて使ったことないのに……なんだこの一体感は？まるで自分の武器みたいだ……

「そろそろそろあー!!！」

容赦なく俺は突きを繰り返す。

「……ふふ」

「何がおか……ッ!？」

ズシヤッ

「な、にい・・・？」

自分の体から突き出てる刃を確認しながら後ろを向く。・・・そこには、もう一人の偽奏だ。

「く、そお・・・」

カランカラン・・・

槍が落ちて、分裂して元に戻る。・・・南海霸王は明命の仮契約カードに戻った。

「く・・・」

俺は崩れ落ちた・・・最後に見たのはコッチに向かって走ってくるゆりの姿だった・・・

川の主釣り（後書き）

亞莎

「あの・・・このメンバーは・・・」

ユイ

「え？なに？」

関根

「・・・何かおかしいですか？」

このか

「なんや別におかしいことはあらへんよ？」

亞莎

「いや、何か引つ掛かります。こう言つのは亮様に聞けば・・・」

アーニヤ

「・・・その必要はないわ」

このか

「あれ？どないしたん？」

アーニヤ

「あ、いや・・・リヨウって人にこの部屋に入るならこの言葉を言えって・・・」

ユイ

「もしかして・・・中の人ネタってヤツですか!？」

関根

「う……亮さんならやりかねない……」

アーニヤ

「でも、こんなに都合がいい奇跡がおこるのかしら？」

ユイ

「……き、奇跡も偶然もあるんだよ……」

関根

「……まさか」

ユイ

「……はい」

亞莎

「だ、大丈夫です。皆でネタをやれば……もう何も怖くない！」

関根

「自然な流れでネタを言った！ズルイ！私の台詞はちょっといじつても絶対にわかるんですけど！？」

ユイ

「……じゃ、あたしは帰りますから」

このか

「そんな、やっと友達になれたのに……」

関根

「またさりげなく言ったああ!? え、残ってるの私だけ!？」

亞莎

「……では、関根さんお願いします」

関根

「う、うう……わ、私と契約してガルデモのメンバーになってよ
!」

全員

「「「……え」」」

関根

「なんで私だけブーイング!? 酷くないですか!？」

亞莎

「それでは次回の真似と開閉と世界旅行」

ユイ

「次回もまたユイにゃんの活躍を見てください」

このか

「ほんならまた次回」

関根

「えええ!? 私だけスベって終り!? そんなー……ッ!？」

アーニャ

「・・・結局、あんまり喋ってないんだけど・・・」

乱入（前書き）

・・・何故かよくあること。それは・・・

平日（-”-；）・・・眠い・・・ハッ！もう8時！？

休日＼（^ー^）ノよく寝た〜・・・5:00・・・「。（。）

「・・・なん・・・だと・・・？」

乱入

「・・・く」

俺は起き上がる。・・・景色はさっきと変わらない。死後硬直か何かなのか身体が硬い。それでも俺は立ち上がり、散らばっている武器を拾って皆がいると思われる方へ走る。

「・・・アレは！」

俺が見た景色は奏を含む戦線メンバーが倒れ、ゆりの目の前に立っているのは・・・例えるなら虎の化物。

「・・・ここに契約は完了した」

あの怪物は・・・イマジン！？何で仮面ライダーの怪人が・・・俺はそのままケータイを使う。

「モーションキャプチャー！ウラタロス！」

俺はイマジンになりながらゆりに飛び込む。

バシューウン！

その勢いで転がって避ける。

「なに！？」

俺は“ゆりの体”で立ち上がる。その見た目はゆりの瞳は青色になり、髪の一部には青いメッシュが入り、更に眼鏡も掛けていた。

(な、なんなのよ、コレ！？)

ゆりがそう言う。

「（・・・悪いね、体借りてるよ）」

（そんな勝手に・・・）

「・・・何者だ貴様!？」

「さあね？ま、ゆりが何か言っただろうけど、その契約は無効って
ことだ」

「ふざけるな!」

「（・・・ゆり、何を言ったんだ?）」

（・・・アイツの口車に乗っちゃったのよ）

「（・・・状況が状況だから仕方ない・・・か）」

俺はベルトを取り出し巻き付ける。

「貴様・・・電王か!」

「よくご存じで・・・その通り」

戦線メンバーがざわつき始めたが今はそれよりも・・・と意識をメ
ンバーに向けた瞬間、

「今だ!」

バシン！

「しまった!？」

イマジンが爪を延ばし、変身に必要なパスを弾き飛ばされる。

「残念だな電王！」

イマジンが突撃してくる。俺は懐から拳銃を取り出し、撃つ。

パン、パン！

「効かぬわあ！」

「く・・・」

マズイ・・・そう思った瞬間、

「受けとれえ！」

いち早く立ち上がった野田がハルバードでパスを打ち返してくる。

「ナイス野田！」

(ナイスフォローよ、野田君！)

俺はベルトの青いボタンを押し、パスをベルトに通す。

『ロッドフォーム』

俺は仮面ライダー電王ロッドフォームとなる。

「お前・・・俺に釣られてみる？」

デングッシャーをロッドにして構える。

「ぬかせっ!」

イマジンは爪を延ばして攻撃してくるが、俺はそれを容易く弾く。

「まだまだだね。これじゃあ一撃も当たらないよ?」

「貴様・・・」

「隙あり!」

カキインツ!

俺は隙を見つけて突きを喰らわす。

「ん・・・?なんだ、この程度か」

イマジンはあまり効いてなさそうな態度を取る。

「・・・マジか」

(ちょっとどつするのよ?)

ゆりが聞いてくる。

「慌てるなよ・・・？」

俺はボタンを押してフォームを変える。

『アクセスフォーム』

ロッドフォームからアクセスフォームに変わる。そして、股を開き、首を指で鳴らしながら言う。

「俺の強さにお前が泣いたあ！！」

(って、誰の体でやってると思ってるんよ！！)

「(あ・・・悪い、ゆり)」

謝りながらもデンガツシャーをアクセスに変える。

「喰らえ！」

イメージが攻撃してくるが・・・

カキンッ！

「な・・・」

「効かない、ぜ！」

アクセスを上から振り下ろす。

シャキイインッ！

「ぬわっ!?!」

イマジンが退く前に更に一撃を喰らわす。

シャキイインッ！

「ぎゃ!?!」

イマジンが吹き飛ぶ。

「……止め行きますか!」

パスをベルトにかざす。

『フルチャージ』

再び股を開き、相撲取りのような構えを取り、アックスを上に向けて投げる。そして俺も跳び、空中でアックスをキャッチし、そのまま落下の勢いでアックスを振り下ろす。

シャキイインッ!!

「ぬわああああ!?!」

ズガアアアッ!

イマジンが大爆発する。

「ダイナミックチョップ」

そう言っつてベルトを取り、ゆりから離れる。

「ふう……」

「……だから、あたしの体であんな体勢を取るな……」

「悪い悪い……あ、野田。さっきはサンキューな」

「……そうね。野田君のおかげで助かったわ。ありがとう」

「ふん、ゆりっぺの為なら当然だ」

それに合わせて皆が立ち上がってくる。

「咲、イマジンにやられたのか？」

「……偽天使にやられたんだよ」

「そっか……そだ、明命」

俺は魂切とカードを明命に投げ渡す。

「あ、ありがとうございます……」

「何で明命が礼を言っつんだよ？俺が勝手に借りたんだぜ？」

笑いながら俺は言う。

「……奏！しっかりしろ、奏！」

音無が奏に必死に呼びかける。

「……奏はどうしたんだ？」

「……あの化け物からあたしを助けようとして……」

「あのイマジン……だっけ？の爪に貫かれてな……」

「……そういや、ゆりの望みって……」

「俺達の救いだよ。……ま、ゆりっぺを責めるのは筋違いだな」

日向が頭を掻きながら言ってくる。

「そっか……」

「……とじろでね」

日向が寄ってくる。

「……ゆりっぺの体に入ったんだろ？どうだった？」

「どっ、って……動きやすかったけど？」

「そうじゃねえよ……アイツの身体的ななにくはっ！？」

ゆりが拳銃で日向をぶん殴った。

「何を聞こうとしてるのよ・・・!」

その後、奏を保健室へ運び、今日はお開きになった・・・ま
あ、仮面ライダーについては散々ツツコミを入られた。

「・・・なあ、亮」

「・・・ん？」

咲が話し掛けてくる。

「・・・おかしいと思わないか？」

「イメージのことか？」

「ああ。俺達は確かに于吉と左慈を倒した・・・筈」

「・・・つか、自分が壊れる覚悟で力を使ったのに、『実は生きてたんですよ』なんて言われたら泣きそうになるぞ」

「・・・確かにな・・・けど、アイツらはしつこく復活してきた。・・・もしかしたら今回も・・・」

「その時は・・・またぶちのめすだけさ」

「・・・だな」

そう話している内に保健室に着いた。今回の集合場所は保健室だ。

「……同じヤツが二人ってどういうことだよ？そんなワケわかんねえ世界になっちまったのか？」

日向がそう口にする。

「……理由はあるわ」

「どんな？」

ゆりの言葉に野田が反応する。

「天使エリアへの侵入ミッション。……覚えてる？」

「あ、ああ」

「彼女のマシンに、スキルを開発するソフトがあっただでしょ。その中に見たことのない能力幾つかあった。……その一つ、ハーモニクスっていうスキルが発動していたのよ」

「……分身、か」

「しっかし、そっくりそのままじゃないって感じだったぜ？」

「コイツと違って好戦的だ。何故だ？」

「奏は、自分を守るための能力しか使わない。刃にしたってそうだが跳弾させるためだ！」

音無が必死に言う。

「まったく・・・無能な集団だな、貴様らは・・・あ、勿論音無さんや大澤様以外ですが」

「基本アホの集まりですから」

直井・・・もう喋るな・・・

「・・・俺が言うよ。・・・もし、その分身を作ったさいに、一番攻撃的な意志が強かったら・・・」

「・・・あの時だな」

俺の言葉に咲が思い出す。

「なるほど・・・その時の本体の命令に今も従い続けてるってことか・・・」

「でも・・・奏が強い攻撃の意思を持つことなんてない」

「・・・どうでもいいけど、貴方、やけにこの子を庇っわね」

「あ・・・それは・・・可哀想だろ？」

「とりあえず・・・当面の目的は分身を消す方法を探すことだな・・・」

「そうですね・・・私が思うには、奏さん本人が消せるなら、既に消えていると思います。・・・結局は、あの怪物が倒してくれましてけど・・・」

「・・・亮君や明命ちゃんの言う通りね」

「・・・ま、明日は授業を真面目に受けるフリをして、その間に対策を練るしかないな」

「・・・恋が、分身を倒す」

「止めとけ、万が一があったらマズイしな」

恋の案を咲が却下する。・・・結局、しばらくは授業を真面目に受けるフリをすることになった・・・

「・・・待ちなさい、亮君、咲君、明命ちゃん、恋ちゃん」

突然ゆりに引き留められる。

「・・・なに？」

「聞きたいことがあるの」

その場にいるのはゆりと音無、日向に直井だ。

「……話してもらおうわ。本当のことを」

「……やっぱり？」

「……昨日の化け物で確信したわ」

「……仕方ない、か」

俺達は前回の説明を嘘の部分を真実にして話す。

「……この世界を知っている……つまり、岩沢さんが消えるのを知っていたわけね」

「……ああ」

「……なぜ黙っていたの？」

「言っただけになっただけ？」

「ッ！」

「……決められた道から踏み外す……それは、決められたゴールに行けなくなる。……俺達は言わば道案内役なんだよ」

「……」

「ま、とりあえず……お前らには……正しくは亮と咲の二人はこの世界の結末を知ってるってことだな」

日向が言う。

「……まあな、……だけど、もう記憶も朧気だ。俺が覚えてるのは大まかな物語の流れと結末。それだけだ」

「それは……嘘じゃないだろうな？」

「ホントだよ、音無」

咲が肯定してくれる。

「……そういやさ……昨日ゆりっぺの身体使って……仮面ライダーに変身してたよな？」

「あれ、仮面ライダー知ってんの？」

「子供の頃は憧れるよ、誰でも」

「まあ、黙っていたことは不問にしてあげる。……これからは」

「変わらずに戦線にいるよ。……俺達の役目を果たすためにも」

「……だな、恋達は？」

「……恋はずっと咲に着いていく」

「私も亮がいるところなら何処へでも」

「……アツいねえ」

日向が茶化してくるが。否定できないので黙る。

「……」

「直井？どうしたんだ？」

一言も喋らない直井に違和感を感じたんだろう。音無が声をかける。

「あ、いえ……今口を出したら身に危機が迫ると感じまして……」

直井。その勘は正解だ。

「……わかったわ、それじゃああたしは行くわ」

その言葉を最後に俺達は解散した……

そして授業を受けるフリしながら岩沢から貰ったCDを聴く。・・・
そして、最後の曲は岩沢が消える間際に歌っていた曲。

「（・・・岩沢・・・）」

そんな感じで一日が過ぎていく。

「・・・そういやさ、咲」

「んー？」

「この世界は製造方法さえ知ってれば土くれから何でも造れるんだ
よな？」

「・・・そう、だったよな。それが？」

「俺の物真似能力を使えば・・・」

「なるほど・・・」

その時、保健室から戦線メンバーが出てきた。

「あれ？どうしたんだ？」

「・・・奏が・・・」

「奏が？」

「奏が・・・拐われたんだ」

音無の一言で俺達は状況を理解した。

そしてその後、しばらくしてから体育館に集まった。

「迅速に集められた情報から、幽閉されている場所はギルドの可能性が高いとわかったわ。・・・となれば、その最深部ね」

ゆりが言う。

「あの爆破した場所にか？」

そして今回は誘導無しで全員での侵入とゆりが決めた。

そして地下。

「前のトラップはそのまま放置されてるな。ラッキー」

「あの・・・こんなところで天使に出くわしたらどのみち漏れそうなんですけど・・・」

「構わん」

「構ってくださいよう!？」

ユイと日向が漫才してるなか、全員が何かいるのに気づく。

「ひゃいえええ!？」

「構わん」

「うう、構ってくださいよう!」

「さっそく現れたわね・・・撃て!」

だが、その言葉と共に天使が突撃してくる。

「」「うわっ!?!」「」

偽奏が一瞬で駆け抜けた。・・・次の瞬間。

シャキンッ!

全員の武器が両断された。

「くそ!早ええ!?!」

「まだハンドガンがある！」

ゆりはそう言って手榴弾を投げる。

ズガアアアンツ！

「各個射撃！」

全員が銃を乱射する。

「・・・意外と早くケリがつきそうね・・・」

と、ゆりが言った瞬間、

ズシヤツ！

「ぐぼおー！？」

「ツ！？」

「な、にい・・・？」

新たに現れた偽奏によって野田が貫かれていた。

「これ、どじいつことー！？」

「オリジナル
本物か！？」

「違う！コイツも分身だ！」

「どうでもいいが・・・また真っ先にやられたな、アイツ・・・」

「くそっ・・・撃てえ！」

「後ろはどうするんだよ!?!」

「・・・私達が食い止めます！」

「明命!?!」

「・・・手伝う」

「恋・・・!」

俺はしばらく考えた後・・・

「・・・わかった！頼むぞ！」

「御意！」

「・・・恋！」

「・・・(コクッ)」

「全員、あそこまで走って！」

ゆりが先導して扉へ誘導する。・・・俺達は安全に扉へ逃げ込むこ

とができた・・・

「・・・あんな狂暴な天使が二体・・・前の降下作戦より夕子がわるいぜ・・・」

「なんで二体目が・・・」

「分身もスキルを使える。・・・そう思った方がいいな」

「まったく低脳な奴らだな．．．いや、音無さんと大澤様は違いますよ?」

「．．．ウゼエ。ゆり、俺の考えを言っぜ。まず、偽奏はいくつ分身を作ったか．．．ゆりが能力追加よりも早く、分身を生産されたら．．．既に罠を張られたことになる。．．．武器の補充もできない。後ろに戻るのも危険だ。．．．ま、進むしかないってことだ」

「．．．そうね。行きましよう」

「・・・また現れた」

「三体目かよう・・・」

ゆりが拳銃構えるが、松下がそれを抑える。

「弾が、勿体なかるう」

「な、何するんだ？」

すると松下は偽奏に向けて走り出す。

「うおおおおお！！」

そして偽奏を抑え込む。

ズシヤッ

松下は案の定ハンドソニックに貫かれるが・・・

「『松下五段！』」

「行けえ・・・！俺の意識がある内に・・・！行けえ！！」
「何だよその死に際だけ良いヤツみたいな台詞！？」

「急いで！今の内に行くわよ！」

俺達はそのまま走り出す。

「・・・彼のおかげで判ったんだけど、アレが一番良い方法なのよ。天使は身体が小さいから、動きを封じるにはアレが一番。・・・松
下君に教わった柔道が役立つ時が来たわね」

「・・・四体目！」

するとTKが前に出て走り出す。

「フウーーーーハッハアーーーー！！・・・オウツ・・・」

ズシヤッ

「「TKーーーーッ！！」「」

「お、おい！何だよこの少年漫画の最終回近い展開はあ！？」

「いいから、どんどん行くわよ！」

それからどんどん犠牲が増えていく。

「この肉体・・・見せるときが来たようですな」

ズシヤッ

「「高松ウーーーーッ！！」「」

「へ・・・へへへビビってられるかってんだ・・・うおおあああ
！」

ズシヤッ

「「藤卷ーーーーッ！！」「」

「浅はか也・・・浅はか也ーーーーッ！」

ズシヤッ

「「「椎名アーーーーッ！」「「「

「・・・さあ、気づくんだ。お前はピエロだ。ほづら、あんな暗いところに、寂しげな目をしている女の子がいるよ・・・」

「ああ、いつけない。本当だあ。アハア、僕が笑わせてあげ

ズシヤッ

「大山アーーーーッ！」

「・・・お前最低な」

「ああう音無さん違うんですよ。聞いてください、言葉のアヤです。次は僕がいきますから」

ズシヤッ

「「「「・・・」「「「

「・・・おい、誰か何か言っただれよ」

「いや、あたし名前知らないですし・・・」

「バカは放っておいて先に行こう」

「そっね。行きましよう」

「……コレで何体目よ……」

「……わかんねえ、もう数えてねえよ……」

「……今度こそ俺が行く」

音無が立候補するが、日向がそれを却下する。そして色々言っている最中に……

「行くんならとつとに行けやアツ！」

ドガァンッ！

ユイが日向の後頭部に蹴りを入れ、

「うわわわわ『ドスッ！』」

「待ってて……先輩！」

「お前……アイツのこと好きなのか嫌いなのか……？」

「……さあ？」

咲も首を捻っていた。

「・・・ここを降りるのか？」

ギルド跡に着いた。そこはかなりの急斜面になっていた。

「よし・・・行くか！」

俺達は斜面を滑る。

「・・・？あうわわ！？んぎゃっ！？？」

ガンッ！

・・・視界の隅にいたユイが消えた。

「・・・あれ？ユイは？」

「・・・あはは・・・」

上を見ながら笑っしかなかった・・・

「・・・来たぞ」

偽奏が二体現れる。俺はすぐに構える。

「・・・りよ、亮？」

「なん・・・だよ・・・？」

「・・・どうしたんだ、お前」

「え……」

「いや、自分でわからないのか？」

俺は自分を見ると……

「なん、で……」

身体中がガクガク震え、冷や汗がダラダラと出ている。そしてそれに自覚した瞬間、体から熱が冷めていく。俺はその場に跪いてしま

咲
〜

「おい！亮！？」
「」

亮は青い顔をして動かなくなってしまう。

「…………お、おい…………」

「いいから音無君は行って！」
「」

ゆりの言葉で音無は走り出す。

「…………亮はどうしたんだ？」
「」

「トラウマ…………じゃないかしら」

「トラウマ？」

「前に亮君は二度、天使に殺されている。．．．いくら強固な精神を持っている人間でも、同じ人間に殺されたら嫌でも意識してしま
うわ」

「そんなもんかねえ．．．」

「そんなもんよ。．．．亮君、大丈夫？」

「．．．無理なら下がってる」

「大、丈夫．．．やるさ、やってやるさ」

亮が立ち上がる。

「．．．行くぜ！」

「ウラツ！」

「く・・・ラアツ！」

カキヤアンツ！

二人がかりでも容易く弾かれてしまう。

「チツ・・・魔力最大集中！ヘイスガ！スロウガ！」

これで少しは・・・

「・・・くす」

「「ッ!？」」

だが分身の速度は変わらない。むしろ“ディレイ”により更に速くなっている。

「くそ・・・」

亮がケータイを取り出す。

「モーションキャプチャー！ランサー！」

亮は最速のサーヴァントに姿を変える。

「ウオオオオオ！」

キキキキキンッ！

「これでもダメか……！」

「だけど押している！そのまま攻めろ！」

亮と俺は挟むような形で攻撃していくが……やはり分身はそれも避ける。……その時、ゆりの声が響いた。

「……耳を塞いで！」

ほとんど反射的に俺達は耳を塞ぐ。

——キイイイイン——

「な……」

超音波。例えるならそれがしっくりくる衝撃だった。

「なん、だ……これは……!?!?」

しかし、その音も唐突に止まった。音が止まった瞬間、分身は一瞬動揺した。

「亮！」

亮はその声に反応して走り出す。

「――刺し穿つ死棘の槍ゲイ・ホルク――！！！！」

ズシヤアツ！！

その一撃は分身を貫いた……………

・・・それからしばらくして、音無が奏を背負いながら戻ってきた。
・・・ゆりは詳しいことは後にして、今は戻ろうと言ったので、俺
達はそれに従った・・・

乱入（後書き）

日向

「つーわけで今回のゲストは・・・」

ひさ子

「アタシだな」

大山

「僕もいるよ」

日向&ひさ子

「・・・ホッ」

大山

「あれ、どうして二人とも安心してるの?」

日向

「だって・・・なあ?」

ひさ子

「ああ。大山一人じゃ大したことはできないからな」

日向

「そうそう。蓮華には感謝だぜ・・・」

ガチャ

ゆり

「よし！集まってるなーッ！」

日向&ひさ子

「ええええええええええ！？」

ゆり

「んじゃ早速あたしの夢を叶えるコーナー」

日向

「いやいや！？なんでゆりっぺがここにいるんだよ！？」

ひさ子

「そっだぜ！蓮華が血眼になってお前を捜し回ってたはず・・・」

ゆり

「それ？亮君にデートを誘わせたら何処かに行ったわよ？」

日向&ひさ子

「亮ーーーーッ！..！」

ゆり

「と言っわけでやるわよー」

大山

「待ってました！」

ひさ子

「いやいややらせねえよ！..？」

日向

「そつだ！ここだけはしつかりした後書きをやりたいんだ！」

ゆり

「そつは言うけどこの後書きも結構力オスよ？」

日向

「うぐ……」

大山

「第一作者が何か言わなければ基本何でもしていいんだよ！」

ひさ子

「いや！何でもはダメだろ！？」

日向

「だ、だが！ここで滅茶苦茶やると……」

ゆり

「……どつなるのよ」

日向

「出番が消える」

大山

「ええええええええええええ！？そんなあ！ただでさえ僕は出番が少ないんだよ！？しかもこれから減るってわかってるんだよ……！？」

日向

「ハッ、ダメなヤツめ。疲れがなくていいじゃねえか」

大山

「僕は日向君と違って疲れなんてない！サボることなんてないんだよ！」

日向

「んだとう！？俺が出番多くて疲れてサボってるってか!？」

ゆり

「ぐおらぁー！ツ！あたしが一番出番が多いんじゃない!！」

ひさ子

「いや・・・それはないから・・・」

日向

「・・・頃合いだな。次回の真似と開閉と世界旅行！」

ひさ子

「次回もまた見てくれよな！」

大山

「しまった忘れてたよ！この後書きには文字数制限があるんだつた！」

ゆり

「そんな大事なことを忘れるなよ！」

ひさ子

「・・・また次回」

俺がしてやんよ (前書き)

・・・なんか色々と取り返しがつかなくなってきた気がします・・・
ではどうぞ。

俺がしてやんよ」

・・・奏を救出した夜。音無以外のメンバーは校長室に集まっていた。

「コレまでにないことです。・・・天使のあんな状態は初めてです。このまま二度と目覚めないということも、場合によってはあり得るかもしれません」

「それこそイレギュラーな事態よ。目覚めるわ。いつか目覚めて、ただ寝過ぎただけという結果に変わる・・・」

「その時の彼女は、どの彼女なんだ？」

「「「「「「」」」」」」」

場が一瞬沈黙して・・・

「ウオオオオ！？椎名が喋った！」

「これは相当重要な問題だったことだよ！？」

「・・・いや、結構喋ってないか？」

藤巻、大山のリアクションにツツコム。

「・・・ですが実際、目覚めたとき、奏さんは・・・」

「・・・どうなるの？」

明命や恋が疑問を言う。

「……で、どのみちどっちの天使なんだ？」

「それは最初の天使だよ。一緒に釣りをした」

「……だが俺達を襲った意識は、全て好戦的で冷酷だった」

「お前、一瞬でやられたわりにはしっかり観察してたんだな」

「何い!?!」

咲が野田をおちよくる。

「……数で言うなら百対一ぐらいだぜ……」

「今何故意識を失っているのか……」

「簡単に言っちゃえば身体の主導権争いだろっな」

「……つまり、アイツは自分を奪われないように頑張ってるってわけか、咲？」

「……そう言うことだな……ま、どちらに転んでも大して変わらなと思うけどな……」

「……勿論、その対処もしてあるわ」

ゆりがそう言った。

「……今、竹山君を天使エリアに送り込んだ。……マニュアル翻訳ができる仲間と共だね」

「TKと松下は？」

「保健室よ。二人の見張り」

「TKはあれで全然英語ダメだからな」……

「……だが、それも一時しのぎに過ぎない」

「……そうだな。どうせデータを書き換えても必ずいつかは復活する。……むしろ、抵抗の余地が無くなるくらいパワーアップされたりしてな」

「流石に機械本体を破壊しても、予備があるでしょうし……」

「ありゃ？今日の皆さんは頭良さそうですよ？悪いものでも食べましたか？」

「……ユイ、バカは死ななきゃ治らないって言うだろ？」

「なるほど……つまり！何回も死んでる亮先輩は何度もバカが治ってるんですね」

俺はその言葉を聞いた瞬間、ユイの後ろに回り込みヘッドロックを決める。

「だ・れ・に……口訊いてんだテメー……っ!!」

「あだだだだ！？折れ、折れますって！？助けてくださいいひなっ
ち先輩！」

「もっと強くやれ」

「ラジャー！」

「ギブギブギブ！？後で覚えてろよおお！？」

結局その日は解散となった。

「・・・よお」

帰る途中ひさ子がいた。

「どうした？」

「・・・ちょっと話があるんだけどさ・・・」

その目には何かを決めたような強さがあった。

「・・・悪い、咲。先行っててくれ」

「ああ。・・・明命がいるんだから、浮気すんなよ？」

「アホか！そもそもひさ子がそんな恋なんてするあだあつ！？」

ガツンッ！

「・・・テメエはアタシを何だと思ってんだよ・・・！」

ひさ子に思いつきり頭を殴られた。

「・・・そんな話じゃねえよ。・・・少し、さ」

「あ、ああ」

俺達は場所を移す。

「・・・ほら」

俺はコーヒーをひさ子に渡す。

「・・・サンキュー」

「それで？」

「・・・ああ、お願いがあるんだ」

「・・・俺が役に立てるなら」

ひさ子は俺の目をまっすぐに見て、

「・・・アタシに、戦い方を教えてくれ！」

その言葉にしばらく啞然する。

「・・・理由を聞かせてくれ」

「・・・今さ、今までにないことが起こってるだろ？・・・それに、岩沢の時も、直井の時も何も出来なかった・・・何かしたいんだよ、アタシも・・・」

多分、ひさ子はもつと言いたいことがあるんだろうけど、上手く言葉に出来ないんだろう。・・・俺はひさ子に向き直る。

「・・・覚悟はあるのか？」

ひさ子に本気の殺気を叩き込む。

「・・・ツ！・・・ああ！覚悟はある！」

その言葉を聞いて・・・俺は殺気を消す。

「・・・わかった。鍛えてやるよ・・・あ、でもガルデモの練習が・・・」

「両立させるよ。・・・ここ最近、陽動をすることが少なくなってきたけどな・・・」

「・・・よし！そうと決まれば明日からピシバシ行くぞ！」

俺は自分の部屋に向かって歩き出す。

「ひさ子もさっさと寝ろよ？あー・・・あれだ、夜更かしはお肌の敵ってな」

「何だよそれ・・・っーかこの世界じゃそついうのないんじゃないか？」

いや、確か最後の方で誰かが激的な変化を遂げたような・・・

そして次の日・・・

「つーわけで鍛練開始するわけだが・・・」

「おう。最初は何をするんだ？」

「実力試し。ほら」

俺はひさ子に干将莫耶を投げる。

「危なっ！？いきなり何を投げるんだよ！」

ひさ子は半歩下がって剣を避けた。

「干将、莫耶。使えるなら両方でもいいし、難しいなら片方だけでもいいけどな」

「……お、おい……」

俺は鈴音を構える。

「……悪いけど俺の教え方は荒いぜ？」

ひさ子はその言葉に苦笑いしながら莫耶を手にとる。

「……上等！」

ひさ子は俺に向かって走り出す。

「げほっ……げほっ……！」

五回目の峰打ち。今まで立ち上がってきたひさ子は完全に仰向けに倒れる。

「……大丈夫か？」

俺はひさ子に手を差し出す。

「……いや……少し、このままにさせてくれ……」

「あはは……悪い、少し本気出しちゃった」

「いいさ、手を抜かれたら逆に怒るよ」

「・・・ジャージ着てきて正解だな、ひさ子」

「まったくだ・・・」

制服で来てたら二度と着れないくらいボロボロになっただろう。

「・・・でも、悔しいぜ・・・一撃も亮に当てられないなんてさ」

「・・・いきなり当てられたら俺は自信を無くすぞ・・・？」

だが危ない場面はあった。・・・初めて剣を握ったとは思えない、真っ直ぐな太刀筋だったからだ。

「・・・なあ、亮はどれくらい特訓してたんだ？」

「俺？・・・さあな・・・一年は軽く越してるよ」

「・・・」

「・・・干将莫耶、貸すからさ、自主トレしても構わないよ」

「・・・もう終わりなのか？」

ひさ子が服を叩きながら立ち上がる。

「・・・今、始めたときから二時間経ってる。・・・鍛練としちゃやりすぎなくらいだよ」

・・・その後、奏が生徒会長に復職。俺達の前に姿を現すことはな

く
な
っ
た。
・
・
・
反
省
文
？
も
ち
ろ
ん
逃
げ
ま
し
た。
た。

あれから数日。いつものようにガルデモの練習を見に来ていた。・
・しかしひさ子スゲーな。・・・毎日数時間もマジバトルしてるの
に演奏に疲れはない。・・・そして歌の途中、

「ストップ！」

ひさ子が止めた。

「コラ、ユイ！そんなヨレヨレのリズムで続けるな！」

「ええ〜・・・」

「ユイ・・・歌うか弾くかどっちかに専念した方がいいんじゃない
の？」

「あー、そりゃ言ってる。今のまんまじゃ酷すぎるわ」

ユイは三人にダメ出しされる。

「そんなぁ！岩沢さん、弾きながら歌ってましたよ？」

「そりゃ岩沢はどっちも上手かったからだよ」

「……確かにな……このままじゃ、陽動にならないかもしれないし……」

「うう……あたしだって頑張ってますよぉ……皆言うことキツすぎますよ！ライブだってちゃんと盛り上がってるじゃないですか
！」

「……でも、今回は新曲だぜ？」

その時、ガラツ、とドアが開いた。入ってきたのは……

「天使っ!？」

「ッ!」

俺は拳を構えるが……奏はユイを指差して一言。

「お前のギターのせいでバンドが死んでいる」

「……」

沈黙。

「い、一瞬にして今のバンドの弱点を見抜いたぁ!？」

「やっぱりただ者じゃない！」

「音がわかるのよ……！」

「……マジすか」

「そんなぁ！？皆は気づいてないと思ってたのに！」

「と言っわけでしたらしくそのギターは没収させてもらっ」

奏はユイのギターを持って去っていく。……ユイはその場に座り込んでしまった。

「ちよつとユイ！？」

「大丈夫か！？」

「ちよつと下がってる……ハッ！」

俺は気だけをユイに流し込む。

「はうあつ！？……って死ぬわーッ！？」

「目が覚めたか」

「亮、今のどうやったの？」

「んー……教えない」

「えー？なんで？」

最近、入江と関根の二人は大分砕けた感じで接してくれた。．．．うん。やっぱり砕けてる方がいいよな。．．．そして今度はギター無しで歌い．．．

「そうそう。ギター無しじゃ全然ヨレないじゃん」

入江が感想を述べる。

「．．．でも、サウンドが薄っぺらくないですか？リズムギターいるっしょ」

「．．．じゃ、亮に適当に真似してもらってサイドギターやってもらっか」

「ぐうう．．．！あたしが言いたいのなあ．．．！」

ユイがひさ子に詰め寄る。

「やっぱりバンドはボーカルがギターしよって歌うのが一番絵面的に

痺れんできて話じゃ「リアアアア!」!

「この……!」

「うわ、コイツひささんにキレた!」?

「ちょ、ひさ子! 莫耶はマズイって莫耶は!」

「ひ……と、とにかく。あたし、ギター取り返してくる!」

ユイが走り出す。

「おい!」オラユイ!」!

「……」

そして何となく微妙な空気になる。

「……しゃーない。ひさ子、やるか?」

鈴音を取り出す。

「そつだな……しばらく帰ってこなそつだし」

「え……何をやるの?」

入江が不安そうに聞いてくる。

「ん?」デート」

「ええええ！？ホントに!？」

「ウ・ソ」

ガツンッ！

「あ痛ったあ!？・・・てめ、莫耶で殴打するか普通・・・」

ひさ子が顔を赤くしながら莫耶の峰で殴ってきた。

「・・・アタシ、着替えてくる」

ひさ子はそう言って歩き出す。

「・・・いくらなんでも女の子にそういう冗談はダメでしょ」

「デリカシーないね・・・」

二人にズバズバ言われる。俺は中庭に向けて歩き出した・・・

そしてひさ子との鍛練も終わる。

「ふう……今日は終わりか？」

「……スゲーよひさ子。始めた時はバテてたのに今じゃ軽く息を乱す程度だ。……下手したら、俺より強くなったりしてな」

「んなわけないだろ。まだまだだよ」

「……何やってんの？」

咲が歩いてくる。

「ああ、ひさ子とデーあ痛ア!？」

「おんなじボケすんじゃないやねえよ……!」

「……仲良いのな……」

ひさ子と別れて咲と歩いていると、野球のグラウンドのフェンスの所に日向がいた。

「日向？」

「ツ……なんだ、お前達かよ……」

日向の視線を追いかけると、そこには音無とユイが野球をしていた。

「なるほど・・・つまり、音無とユイのどっちを選ぶか悩んでたのか」

「違いえよ！ちょっと様子を見てただけだっつーの！」

「・・・何でさ？」

「亮。原作思い出せよ」

俺は記憶を手繰り寄せる。・・・ああ。

「ユイが心配なのか」

「ばっ・・・！そんなんじやねえよ！」

「照れるな照れるな」

「照れてねーよ！」

散々日向をからかって今日は寮に帰った。

それから数日の夕方。俺はグラウンドへ向かう。記憶が正しければ
今日は・・・

「・・・じゃあ先輩、あたしと結婚してくれますか」

ユイが音無に言う。・・・生前事故で身体が動かせなかったユイの一番の願い。それが結婚。

「・・・それは・・・」

「俺がしてやんよ！」

いきなり日向がグラウンドに入ってきてそう言った。

「日向・・・」

「・・・俺が結婚してやんよ。これが・・・俺の本気だ」

「そんな・・・先輩が、本当のあたしを知らないもん」

「現実が・・・！生きてた時のお前がどんなでも、俺が結婚してやんよ！もしお前が・・・どんなハンデを抱えてても・・・！」

「ユイ、歩けないよ？立てないよ？」

「どんなハンデでもつつつたる！！」

「……！」

「歩けなくても、立てなくても、もし……子供が産めなくても……それでも……俺はお前と結婚してやんよ！！」

「……」

「ずっとずっと……傍にいてやんよ。ここで出会ったお前は、ユイの偽物じゃない、ユイだ。どこで出会っていたとしても、俺は……好きになつていたはずだ」

日向はユイに近寄る。

「また六十億分の一の確率であえたら、そんなときもまた、お前が動けない身体だったとしても……お前と結婚してやんよ」

「出逢えないよ……ユイ、家で寝たつきりだもん」

「俺、野球やってるからさ、ある日、お前ん家の窓をパリーンって打った球で割っちまうんだ。それを取りに行くとき、お前がいるんだ。……へ、それが出かい」

「……」

「話するとき、気が合つてさ、いつしか毎日通うようになる。介護

も始める。そーゆーのはどうだ？」

「うん・・・ねえ、そんなときはさ、あたしをいつも一人でさ、頑張って介護してくれたあたしのお母さん・・・楽にしてあげてね」

「・・・任せる」

「よかった・・・」

風が吹く。一瞬目を逸らすと、ユイの姿は消えていた。・・・俺は日向に近づく。

「・・・よかったのか？」

「・・・よかったさ」

「お前は、これからどうする？」

「俺も最後まで付き合っさ。・・・まだまだ心配な奴らが・・・残ってるからな」

「そっか・・・」

「・・・音無、しばらく一人にさせてやるっぜ」

「・・・ああ」

俺達はその場から離れた・・・

俺がしてやんよ（後書き）

日向

「……」

亮

「いや、日向？何でここ（レギュラー）の部屋に来てんの？」

日向

「……あの告白のシーンでな……」

咲

「……シーンで？」

日向

「そのシーンを見た早乙女や朝倉、それに遠坂とかランサーとか星とか霞とか色々な奴にネタにされて……」

咲

「そりゃ大変だ。そのメンバーにからかわれたら絶望しかないぜ？」

亮

「……しかもそれ、ほんの一部だろ？……ま、俺と咲はタイミング的にからかう人間が少なかったから助かったけどな」

日向

「戦線メンバーにも知れ渡っちまってるし……もう外であるけねーよ……」

咲
「……」愁傷さま

亮
「あはは……まあ、なんだ……頑張れ」

咲
「そっぴやさつきユイが捜してたぞ？」

日向
「マジ？」

咲
「マジマジ。会いに行つてやれよ」

日向
「……よし、ならバレないように……」

ガチャ、バタン

「……あ、見つけたよ日向さん……」

「……日向殿、是非聞きたいことが……」

「……うえええ！？何でいるんだよ！？……」

亮
「……あー、次回の真似と開閉と世界旅行」

咲
「次回もまた見てください」

影 (前書き)

あれ・・・？何かおかしいような・・・いや、気のせいですね。ではどうせ。

影

「ハアッ！」

「甘いつ！」

カキヤアンツ！

今日もひさ子と鍛練をしていた。

「……よし、ここまで！」

「……はいよ」

ひさ子は莫耶を肩に担ぎながら歩いてくる。

「……どうかな？」

ひさ子が聞いてくる。

「大分上達してるよ。今なら藤巻ぐらい倒せるかな？」

「藤巻かよ……せめて野田くらいは倒したいな」

「あー、アレは頭使えば勝てるから除外。……そうだな、最終目標は椎名かな？」

「……なんか勝てる気しねーよ……」

その時、放送が入る。

『……生徒会長の立華奏さん。今すぐ生徒会室に来てください』

「……今の、ゆりじゃねーか？」

「……だな、一体何が……」

そこまで言ったとき、何か悪寒がした。

「……ツ！亮！後ろ……！！」

「ツ！？」

その言葉に反応して前へ跳ぶ。そしてすぐに振り返ると、そこには黒い影が佇んでいた。

「なんだコイツ……？」

「……ひさ子、下がってる」

俺はひさ子を下がらせて鈴音を構え直す。

「ウラアッ！」

ズバアアンツ！

「……！？」

手応えがない……！まるで空気を斬っているようだ。

「く……」

それでも斬り続ける。

ズバン！

……そして影は消滅した。

「……何なんだコイツは……」

「……大丈夫か？」

「ああ……コイツらは……」

パン……パン……

「……銃声!?」

「……明命！」

「ジュジュ」

明命がすぐ隣に現れる。

「ひさ子を頼む！」

「御意!……お気をつけて」

それに手で応えて走り出す。

・・・そして、校庭に出ると、多数の影に囲まれたメンバーの姿があった。

「左手に魔力！右手に気！合成、咸掛法！！」

俺は咸掛法のエネルギーを両方の指先に集め、マシンガンのように放つ。

ズダダダダッ！

「・・・苦戦してるか！？」

「・・・そんなわけあるか。貴様なんぞいなくても充分だ」

「・・・浅はか也」

「Nice」

三人はそれぞれ口にする。

「・・・上等お！..」

そのまま戦い続けると、ゆりや音無、それに日向と直井もやって来た。

「・・・カットバック・・・ドロップターン!!」

咲が真上から急降下してくる。

ズシャツ!

「遅せえぞ咲!」

「これでも、飛ばした方だ、ぜ!!」

「ウオオオオオ!!!!」

野田が回転しながらハルバードを振り回す。・・・そしてそれは日向の足下に刺さった。

「うおっ!?!? テメ、味方ごと斬る気かよ!?!」

「・・・計算の内だ」

「入れるなよ! 省けよ!」

「バカやってないで援護しあつて!」

ゆりが発砲しながら言う。

「・・・しっかし、数が多くないか?」

「・・・どうした咲? 限界か?」

「んなわけねーよ!」

咲は機関銃を取り出して撃ちまくる。

「・・・宝具」

いつの間にか恋が武器を構えていた。

「ツ！？全員伏せろー！ー！！！」

皆はそれに反応して伏せた。

「ー！ー！戦場を駆ける一騎当千の将^{ホウテンカゲキ}ー！ー！」

ズガアアアンツ！！！！

恋が放った宝具は影を一掃した・・・

「皆……無事か？」

「あ、ああ……何なんだよアイツら、化け物かよ……」

「あんな不気味な存在、この世界にはいなかったぞ」

「……これは悪夢か……」

「……この世界に長く居過ぎたのかしら……」

「・・・相変わらずスゲー威力・・・」

「さすが飛將軍呂布・・・」

「おーい!!おーい!!」

「・・・藤巻?」

藤巻が息を切らしながらやって来た。

「ヤベエぞ・・・!高松が・・・高松がやられちゃったあ!!」

・・・俺達は渡り廊下に来る。そこには・・・

「アイツの眼鏡だ・・・」

「僕、見たんだ・・・あの影に喰われるところを・・・」

「喰われるって・・・」

「僕が出くわした時にはもう、全身影に覆われていて・・・僕も助けようとしたんだ！！・・・でも、どうしようもなくて・・・最後には・・・眼鏡まで外れて・・・」

「アイツが眼鏡を落とすなんて・・・相当だぜ・・・」

「・・・で？」

「・・・地面に・・・呑み込まれていった」

「地面に？」

「・・・イレギュラー過ぎる」

「・・・終焉が近いのか・・・」

そして次の日……

「……高松がいたぞ!!」

野田がそう言った。そして日向達は教室に入る。……俺達は教室の外で待っている。……しばらくして皆が出てきて、メンバーは階段に集まる。

「……今の問答だけで判ったわ。……彼、NPCになっちゃったのよ」

「「「・・・！！！！！」」」

全員が驚く。

「ちよ、ちよっと待てよ・・・！それってどういうことだよ？ワケ
わかんねえ・・・」

「NPCってことは魂が無いって言うこと！？じゃあ、彼の魂はど
こにいつちゃったの！？」

「それを喰われちゃったんじゃない？」

「それってどういうことだよ！なに、アイツは消えることもできず
に、永遠にここで授業を受け続けていくってことか！？」

「・・・そういうことになるわ」

「そんな・・・それって死ぬよりか酷くねえ！？永遠にかよ・・・
永遠にここに閉じ込められちゃったのかよ！？何だよそりゃ！？ク
ソオツ！！！」

日向が力任せに壁を殴り付ける。

「こんな事が起こりうるのか・・・この世界は・・・」

「これじゃあ、天使に消されちゃった方がまだマシじゃねえかよ」

「・・・しかも、影は増殖を始めているようだが？」

野田、藤巻、椎名が口にする。

「ねえ!??どうすればいいの!??ゆりっぺ!」

ゆりはしばらく考えて・・・

「・・・皆、戦線メンバーを体育館に集めて」

その日の夜、あまり話さない名も知らない戦線メンバー全員が体育館に集まった。

「……この世界に異変が起き始めている。天使とは異なる敵の出現。まんまでなんだけど、影と読んでる。天使と違って神出鬼没で無差別に攻撃を仕掛けてくる。……影に喰われたものは魂を失い、毎日授業を受けるNPCと化す。現在、無制限で増殖中。原因は不明……打開策も今のところ無し。……先に遊佐さんに告げてもらったように、集団行動で身を守りあってもらうしかない。……さて、こうした危機に瀕するなか、この死んだ世界戦線に別の思想を持つもの達が現れ、戦線を新たな道に導こうとしている。……その道は、現在のこの世界に於ける危機回避の一つの選択肢にも成り得る。なので、そちらの代表として……音無君、堂々とここでその思いを語ってもらえるかしら？」

指名された音無は前へ出て新たな打開策を告げる。それはこの世界の事実。この世界の存在価値や色々と言無は語った。

「……ふざけんな！いい加減なことを言つな！」

「そんな都合の良い話があるか！」

戦線メンバーが批判の声を出す。

「……あつたんだよ」

日向が前へ出る。

「ユイはそれを見つけた。……俺みたいない人間のクズのまま死んできたような奴でもさ、この世界でソレを与えてやる事が出来た……」

「僕もです」

直井も前へ出る。

「僕は神ですが……それでも、音無さんだけが、僕に人の心を取り戻させてくれた。たった一言掛けてくれた……辛い言葉で……」

そして俺も前へ出る。

「……岩沢を知ってるだろ？アイツだって自分の力でこの世界から消えていった……もう、この物語も終わりなんだ……新たな物語を始めるためにも、この物語を無事に終わらせるんだ……そして、新しい人生へ進む……それだけの話だ」

「……どの道を選ぶかは、皆に任せるわ任せるわ」

「ゆりっぺは・・・ゆりっぺはどうするんだ!？」

戦線メンバーが聞く。

「あたし?あたしはいっだって勝手だったし、貴方達を守れやしな
いし、あたしがしたいようにするだけよ」

そしてそのまま解散になる・・・と思ったら、

「・・・ちよつといい?」

俺達四人と音無等三人+奏は外に出る。

「・・・なんだ、ゆり？」

音無がゆりに聞く。

「・・・その子を影の迎撃に当たらせなさい」

「奏を・・・？なぜ？」

「頭を使って行動させるより、何も考えず戦わせる方が向いてるわよ。・・・見てた分には」

「うえ・・・見られてたのかよ・・・」

「・・・明命ちゃんと恋ちゃんにも任せたいんだけど・・・」

「はい！お任せください！」

「・・・戦つ」

「・・・この二人なら心配ないよな・・・」

俺は確かめるように言う。

「……ま、ゆりっぺの目は欺けんわなあ」

「でも、奏は俺達の仲間だ、一緒に居るべきだ！」

「他の戦線メンバーだって、貴方達の仲間でしょ。彼らを守るには、その子の力が必要よ」

そしてしばらく会話して……

「確かに……天使だけにそれは適任だな……」

「……別にその子、天使じゃないわよ？」

「……は、ええ！？今なんつった!？」

「……あたし達と同じ人間よ。気づいてなかったの？」

「「ええええええええええ!？」」

「……神は、何でもお見通しでしたが……」

「動揺してんじゃねえか……」

直井の身体は驚きで震えていた。

音無が聞く。

「……で……ゆ……お前……」

「確かめてみたいことがあるの」

「一人で戦うのか!？」

「……場合によつては」

「……ま、いいんじゃないの?ゆりの好きだしな」

「咲君……」

「……ゆり、強いから平気」

「おお、恋に認められたぞ」

「……確かに……凄いな」

「……そしてゆりは走り出す。

「じゃあ、また会えたら会いましょう」

「ゆりっぺ!」

日向が叫ぶ。

「……酷いあだ名、でも、そのお陰で皆に慕われたのかもね。……
・ありがとじ」

再びゆりは走り出す。……俺達も別々の時間を過ごす。

「・・・なあ、亮・・・」

「んー？」

「・・・来ると思うか？」

「さあ、な・・・」

「亮・・・この物語は・・・」

明命が聞いてくる。

「ああ・・・クライマックス、だ」

「・・・咲」

「・・・頑張ろうな、恋」

「・・・（コクッ）・・・みんな、守る」

そのまま俺達は夜を過ごした・・・

・・・次の日、廊下を歩いていたら、ガルデモの三人がいた。

「あ・・・」

「亮・・・」

「・・・逝くのか？」

「・・・いや、アタシは残るよ」

「ひさ子・・・」

「私達は、先に逝くけどね」

「ひさ子さんみたいに戦えないから、わたし達は」

関根と入江はどこか満足げな顔をしていた。

「・・・なんかさ、あつという間だったよね」

「亮達に来てから、すぐに色々動き出したからな・・・」

「でも、楽しかったな・・・」

「・・・ホント、俺も楽しかったよ」

二人はニコツ、と笑った。

「それじゃあ・・・私達はまだ伝えなきゃいけないから・・・」

「これでサヨナラだね」

「そうだな・・・じゃあな、しおり、みゆき」

最後に二人の名前を初めて呼ぶ。

「・・・うん」

「じゃあね。亮、ひさ子さん」

「ああ、アタシもすぐ逝くさ……」

二人は歩いていった……

パン！パン！

外から銃声が聞こえた。

「……ひさ子！覚悟はいいな！？」

「……勿論！！」

俺は窓から校庭へ飛び出す。

「ウオオオオオ！」

ズバァンツ！

「亮！来てくれたのか！」

「言っただる音無！俺達は物語を終わらせるためにいるんだ、って
！」

「・・・はあああ・・・魔力最大集中！エアロガ！」

グオオオンツ！！

咲が走ってくる。

「悪い、遅れた！」

その時、影を切り裂く人影が・・・

「・・・ふん、ゲスが・・・」

「野田・・・!?!?」

「流石だぜ野田あ!」

「俺達の為に戦ってくれるのか!?!?」

「馬鹿なことを言うな!俺が動くのは、ゆりっぺの助けになる時だけだあ!?!?」

「へへーん、なる!お前もとことん一途な奴だな!・・・ッ!?!?」

日向が影に襲われそうになる。

ダアンツ!

「大山!」

大山が窓からライフルを構えていた。

「何の取り柄もない僕だけど、ここで活躍できたら神様もビックリ仰天かな、って!」

「・・・ああ、見返してやれ!・・・ッ!」

「フッ!テヤアッ!」

藤巻も来た。

「俺も忘れてもらっちゃ困るぜえ。このままいなくなっても、誰も気づかなそうだからなあ！最後に……」

「フウーーーーーフォーーーーッ!!」

TKも回りながらやって来る。

「テメエ！人の台詞の途中で……ッ!？」

「藤巻!」

藤巻に影が襲いかかる、が、

「ハアアッ!」

後ろからひさ子が莫耶で斬りつけた。

「ひさ子!？お前、戦えんのかよう……」

「コイツは役者が揃ってきたな……」

その時、細身の誰かが跳んできた。

「なんだこの世界は？何が起きたって言うんだ!？」

「と言うかお前に何が起きたんだよ」

「誰だお前」

「うむ、しばらく山籠りしてたんだが、食いもんが少なくてな」

「お前、松下五段かよ・・・!?!?」

「・・・よし、突破するぞ!?!」

俺達は影に立ち向かった・・・

「・・・ああもう！なんでいつつもいつつも数が多いんだよ！」

「愚痴るな亮！お約束ってヤツだ！！」

咲と背中合わせになる。

「・・・言いたいことがある」

「多分、俺も同じことだ」

俺達は同時に走り出す。

「自分の背中は自分で守りなっ！！」「」

この程度なら負ける気はしない！

「・・・音無！日向！直井！先行け！」

「わかった！頼むぞ！」

「行こうぜ音無！」

「ああ！」

「あ、待ってください音無さん！」

「・・・さて、皆、まだやれるな？」

「俺を見くびるなよ。この程度、楽勝だ」

「アタシも余裕だぜ」

「余裕だぜ」

「あと百体ぐらい行けそうだな」

「僕もまだ活躍できるよ！」

「OKOK」

よし、なら・・・

「咲！」

「りょーかいつ！開け！」

咲が空間を開く。そして中から大量の何かを取り出す。

「・・・何だよそれ」

藤巻が聞いてくる。

「俺の真似能力を参考に色んな武器を作ってみた」

そこから適当に漁る。

「・・・ほらよ。野田、藤巻」

「・・・何だコレは？」

「刀・・・か？」

「昔の武人が使っていた蛇矛と言う武器だ。藤巻のはとある剣士が使っている夕凧っていう刀だ」

更に大山とTKにも渡す。

「これは・・・」

「子供の憧れ・・・体験してみな」

二人はそれぞれ構える。

「変身！」

『カメンライド・・・ディエンド！』

「ヘンシン！」

『ガンフォーム』

大山がディエンド、TKが電王になる。

「アタシのは？」

「・・・これは？」

「・・・剣？」

「聖剣エクスカリバー・・・お前なら使えると思っけどな」

「松下は・・・」

「いや、俺はこの身一つあれば充分だ！」

「そ、そうか・・・」

「皆・・・行けるな!?!」

再び体勢を立て直して突撃する。

「・・・大山！」

「う、うん！」

大山がカードを取り出す。

『カメンライド・・・王蛇！』

仮面ライダーを召喚する。

「うおらあああ!!！」

野田が蛇矛を一振り。影が消滅していく。

「意外に使いやすいでこの刀ア!!！」

藤巻も夕凧を振り回す。

「KILL YOU」

「ガルデモの意地を見せてやるよ!」

「どっせええいつ!」

俺は仮契約カードを取り出す。

「(明命!聞こえるか?)」

(・・・はい!聞こえます!)

「(今何処にいる?)」

(奏さんや恋さんと一緒に食堂に・・・何かありましたか?)

「(いや、こっちは問題ない。・・・音無達を助けてやってくれ)」

(・・・御意。わかりました)

「(・・・頼むぜ)」

「・・・亮!」

咲が叫ぶ。俺は反射的に鈴音を振る。

カキヤアンツ!

「く……!?!」

そこにいたのは……

「……今の一撃を避けるか……」

「セイバー!? いや、違う!」

ソイツは真っ黒なセイバー……セイバーオルタがいた。

「喰らえ!」

「しまっ……」

一瞬の隙でセイバーが斬り込んでくる。だが、その一撃は……

カキインツ!

「……浅はか也」

「……椎名!」

合間に入り込んできた椎名によって防がれた。

「でも……やっぱり」

俺は影の中に人影を見つける。

「クロス・・・クロスウウウ!!」

「・・・左慈!」

影に包まれた左慈がいた。

「アイツ・・・この世界に来ていたのか!?!」

「・・・そりゃ、俺と亮の攻撃の盾にされりゃ無念だわな」

「・・・敵だけどアイツを倒して解放してやらなきゃな」

「だけどもまずは目の前のセイバーを何とかしなくちゃな・・・」

「・・・任せておけ」

「今の僕達なら何とか出来るよ!」

「L e t s G o」

「・・・頼む!」

「逃がすか!」

『アタックライド・・・プレスト!』

ズガガガッ!

「なに・・・!」

「僕達がお相手するよ!」

「んで、この影の中、どうやって左慈のところまでいくか……」

「お前の仕事だろ、咲。破壊者さん」

「……能力的にお前の方が破壊者だろうが……ま、いや、詠唱時間稼げ」

「……了解！」

鈴音を構えて影に立ち向かう。

「タアツ！テリヤア！」

ズバアアンツ！

「……下がれ、亮！」

「応さ！」

俺は真後ろに跳ぶ。

「魔力最大集中！アルテマ！」

ズガアアアンツ！！

影が一掃される。

「さっすが・・・」

「ボサツとしてんな！行くぜ！」

左慈に向けて走り出す。

「これで決める！威掛法！出力最大！」

明命、武器借りるぜ・・・！俺は左手を突き上げる。

「来れ、呉の若き誇りよ！ここに集いて呉王の力を呼び覚ませ！」

魂切、南海霸王、鈴音、人解が融合する。

「目覚めろ！刺天猛虎！」

その勢いで左慈に向かう。

「コロスウウウ！」

ズドン！

「ぐあ・・・！」

左慈が放った黒い波動に吹き飛ばされてしまう。

「何やってんだ亮！」

咲がキープレードを構えながら突っ込む。

「タリヤアアア！」

バキインツ！

「グア・・・」

左慈が吹き飛ぶ。

「俺にグリリバ補正は通用しないぜ！」

「アホか」

立ち上がりながら槍を構える。

「・・・クロス！」

「それしか言えないのかね・・・」

「さあな、・・・止め行くぜ」

咲の手に二本のキープレードが現れる。

「はあああ・・・たあっ！」

咸掛法の力を槍の先端に集め、跳ぶ。

「ウオオオオオ！」

咲は走りながらキープレードを構える。

「貫けえ！！！」

「ソニッククレイブ！！！」

ズシャアッ！

その一撃は左慈を貫いた。

「ゲ・・・アアアアア！？」

バシユウンッ！

左慈は消滅する。後ろを振り返ると・・・

セイバーが黒い聖剣を構える。

「ッ！TK！来るよ！」

「Oh・・・Destroy」

大山とTKはそれに対抗しようとする。

『ファイナルアタックライド・・・デイデイデイエンド！』

『フルチャージ』

「―――約束された勝利の剣―――！」
エクスカリバー

力と力がぶつかる。・・・セイバーが若干押している。

「そんな！？二人がかりなのに！」

「・・・え？うわ！？」

ひさ子がエクスカリバーに引っ張られる。

「どうしたひさ子！？」

藤巻が不思議そうに聞く。

「け、剣が勝手に・・・」

ひさ子は剣を構える。

「……そういつことが」

そうひさ子は眩き、叫ぶ。

「―――約束された勝利の剣エクスカリバー―――!!」

新たな聖剣に籠められていた魔力が解放される。

「な……ぐ、おのれ……おのれ―――!?!」

ズガアアアンツ!!

流石にそれまでは耐えられなかったようで、セイバーは消滅する。
・
・そしてひさ子のエクスカリバーは魔力を使い果たし、砕けた。

「……終わり、か……」

「亮―――ッ!?!」

明命達が気絶しているゆりを連れてやって来る。

「・・・あつちも無事みたいだな」

気がつけば影は消滅していた。・・・多分かなり前から出現は止まっていたと思う。・・・何であれとりあえず俺達はゆりを保健室に連れていった・・・

影（後書き）

亮

「んで、今回は定番の次の世界へのアンケートだな」

咲

「さて・・・今度は・・・」

・東方

・ネギま〜魔法世界編

・恋姫〜オリジナル

亮

「東方以外また返り咲き!？」

咲

「・・・でも久々に詠達に会いたいな」

亮

「あゝ・・・最近刹那達とも会ってないな」

咲

「俺達はこの部屋からあまり動かないからな」

亮

「・・・コホン、次回はいよいよAngel Beats! 最終回
!」

咲

「楽しみにしててくれよ！」

亮

「それでは次回の真似と開閉と世界旅行！」

咲

「次回もまたよろしく！」

亮

「それではまた次回！」

卒業（前書き）

風邪をひくとは・・・バカは風邪をひかないと言っのた・・・では
どしど。

卒業

・・・次の日の朝、俺は適当にぶらついてた。すると、

「あ・・・ひさ子？」

「よう・・・」

ひさ子が立っていた。

「どうしたんだ？そんな暗い顔して」

「いや、そろそろ逝こうかと思って・・・さ」

「そっか・・・」

「アタシさ・・・何かしら役に立てたかな？」

「・・・ああ。少なくともあのセイバーを倒したのはひさ子を含めた皆だ。・・・サンキューな」

「・・・礼を言うのはこっちだよ。色々と助けられた」

「・・・そっか？」

「そっさ。今だから言うけど、岩沢の奴、お前のこと結構気に入ってたんだぜ？」

「・・・マジか」

「ああ、マジだ。・・・ま、ガルデモメンバーはほとんどお前のことを気に入っていたよ」

「・・・それって、ひさ子もか？」

笑いながら聞いてみる。

「え、あ、ま、まあ、そうだけど・・・」

「・・・」

俺、笑顔でフリーズ。・・・いかん、新たな地雷を踏んだかもしれない。

「そ、それは置いといて・・・もう逝くのか？」

すると顔が少し、赤くなっていたひさ子が真面目な顔になる。

「・・・ああ、アタシが最後のガルデモだ。・・・アタシが消えてやっとガルデモが終わる」

「・・・終わりじゃないさ」

「え・・・」

「・・・始まりだよ」

「・・・そっだな」

俺達は腕を伸ばしてコッソ、と拳をぶつけ合う。

「・・・じゃあな！また会えたら会おうぜ！」

「・・・ああ！また会おう、ひさ子！」

そう言って俺は目を閉じる。・・・そして開けた時、ひさ子は消えていた。

「・・・よ、フラグ乱立男」

「咲・・・」

咲が歩いてくる。

「・・・他の奴らも逝ったよ。残ってるのはメインメンバーだけだ」

「そうか・・・よし、行くか」

歩き出そうとしたその時、

「亮・・・」

「咲・・・」

「明命・・・ッ！お前・・・」

「恋・・・身体が・・・」

二人はいつも味わっている終わり。つまり、二人は足下から光にな

っていった。

「すみません・・・どうやら私達はここまでです」

「・・・そうか、でも安心しろ明命。この物語はすぐ終わる」

「・・・咲」

「んな顔をするなよ。・・・大丈夫、すぐ後を追うぞ」

咲が恋の頭をくしゃくしゃ撫でる。

「・・・皆さんが待ってますよ、亮」

「あ、ああ・・・わかった、じゃあな、明命。・・・次の世界で会おうぜ」

「・・・はい！」

「恋、生まれ変わったらまた会おうぜ」

「・・・(コクッ)・・・待ってる」

「・・・バカだなあ、お前が・・・」

ゴチン

「あだあ！？何するんだ亮！」

「そのネタに走るな・・・！」

「……くす」

「……ふふ」

「……じゃ、また後で……」

「またな、恋！」

最後に二人は微笑んで光になった。

「……よし、今度こそ行くか。……咲、ここで消えるなんて冗談はやめてくれよ？」

「……ここで消えたら俺は神を呪うぞ……」

俺達は多分皆がいるであろう体育館へ向かった……

「……何やってるんだ？」

「……おお、亮じゃねえか！まだいたのか？」

日向が若干失礼なことを言う。

「……日向、お前の言い方だと誤解されるぞ」

音無が言う。

「音無、何やってるんだ？なんか奏が文字を黙々と紙に書いてるんだけど」

俺は音無に聞いてみる。

「……ああ、奏が卒業式をやったことがないんだってさ。……だから、卒業式をやるうって話になったんだ」

「なるほど……」

「あれ？そういやさ、明命達はどうしたんだよ」

日向が聞いてくる。

「ああ……まあ……その……」

俺が言い淀むと咲が口にする。

「消えたよ。……この物語はもうじき終焉を迎えるんだ」

「……もう、終わりなんだな……」

「音無さん……」

「……だったら最後は楽しくやるうぜ。俺と亮も手伝つよ」

「・・・そだな、やるか！」

そして二日後・・・俺達はゆりが寝ている保健室に来ていた。

「・・・高松も逝けたのか？」

「おお、そうなんだよ。アイツ、ちゃんと元に戻って消えることができたんだぜ」

「へえ・・・」

その時、ゆりが目を覚ました。

「・・・じじは・・・どじじ・・・？」

「保健室だよ」

「保健室？・・・貴方達、どうしてまだいるの？」

ゆりが起き上がる。

「……無理しちゃダメ」

奏が言う。

「大丈夫よ、奏ちゃん」

「まあゆりっぺにしちゃ大変だったようだな」

「よくそんなものでリーダーが務まっていたものだな」

「貴方達まで……いったい何してるのよ？影はもういないんじゃないの？なら邪魔するものは何も無いはず……」

「ああ、わかってる」

「だったら……」

「まだ、お前が残ってるじゃないか」

「……ッ!」

「……まったく、リーダーを置いて先に消えるわけにもいかないだろ？」

「そうそう、亮はこう見えて地味に律儀なところがあるからな」

「こう見えて……って普段どんな目で見てんだよ……」

「……ええと、その……何て言うか……」

「……なんだよ？」

「多分だけど……もうゆりの抱えてた葛藤は解けてる」

「「えっ？」」

奏の発言に音無と日向が反応する。

「ッー！」

「そうなのか？ゆり」

「え？……それは、その……」

「よし、僕が催眠術で吐かせてやる」

「やめるコラアアア！！！」

ゆりが直井に掛布団を投げた。

「……と、嫌がるということとは……的中」

「え、いや……そんなこと、ないわ。あたしリーダーなのにそんな簡単に解けちゃってたらいい笑い種じゃない、あはは、はは……」

「じゃあ催眠術で」

バスン！

「そうよ解けたわよ悪いかああ！？」

ゆりが直井に枕を直撃させた。

「……あ、認めた」

「う……はあ、奏ちゃん。意地悪なんだ……」

「ゆりがあまのじゃくなだけ」

「貴女……言うのね。……でも、何となく嬉しいな……」

「……何が？」

「ゆりって呼んでくれて」

「……どうして？」

「だって……友達みたいじゃない？」

「友達……そうね」

「……んじゃあ準備は無駄にならなかったわけだな」

「ああ」

日向と音無の問答にゆりが疑問を抱く。

「準備つて・・・何か始まるの？」

「最後に、したいことがあるんだ」

「こちらの生徒会長様がね」

「奏・・・やったことないんだと」

咲と俺が言う。

「え・・・何を？」

全員が口を揃えて言う。

「」「卒業式」「」

そして体育館に着いた。

「はぁ・・・」

「俺達で作ったんだ。文字は奏」

そこには壇上の紙に『死んだ世界戦線 卒業式』と書いてあった。

「そうなんだ・・・奏ちゃん、卒業式したことなかったんだ」

「面白いのかなって・・・」

「面白かねーよ」

日向が笑いながら否定する。

「でも、字を書いている時は楽しそうだったけどな」

「女子は大抵泣くんだぜ？」

「ふん・・・これだから女は」

「・・・俺達は卒業前に死んだんだよな・・・」

「単なる一学生だった俺達があつきゃ世界の冒険者だ。・・・ホント、スゴい話だよな」

「・・・じゃあ、始めようか」

「え！？今から？」

「何の為に着替えたんだよ？」

「ええいや、その・・・本当に消えるのになって、心の準備が・・・」

「なんだ・・・それでも元リーダーか」

「な、何よお!?!」

「お前、皆が消えたらリーダーっぽくなくなったよなあ・・・なん
か」

「そ、そう?」

「確かに何か変わったなあ・・・」

日向も考え始める。

「え?どう?」

「そうだな・・・何て言うか、女の子っぽくなった」

音無が言った。

「・・・それ、喜ばいいのか?・・・怒ればいいのか?」

「・・・戦い終わったらそんなこともわからない無垢な女の子に戻っ
ちまったんだなあ。ゆりつぺも可愛いとこあんじゃん」

「な・・・か・・・!?あた、あ、あたあががが!」

「あて!?!あたたた!?!」

バシバシ！ビシッ！バシッ！バンッ！グキヤッ！

顔を真つ赤にしたゆりが日向に掴みかかった。……生理的にマズイ音が鳴った気がするが……気のせいだな、うん。

「……開式の辞！これより、死んだ世界で戦ってきた、死んだ世界戦線の卒業式を執り行います！」

音無が司会進行役だ。

「ではまず、戦歌斉唱！」

「戦歌！？何それ！？」

ゆりが反応する。

「死んだ世界戦線の歌だよ。校歌の代わりみたいなもの」

「あたし、そんなの創らせた覚え、無いわよ？」

「それも奏が創った」

「貴女が創ったの？ていうかそもそも貴女、戦線じゃないじゃない！」

「別にいいじゃんゆり。奏も仲間ってことで」

「そうそう。きっと恋の家族構成にも入ってるぜ？」

「ん？なんだよそれ」

日向が聞いてくる。

「……どうやら俺の発言が元でさ、恋にとって親しい人間は皆家族なんだよ。……アイツ、物心ついたときにはもう家族がいなかったらしいからな……」

「……そうなんだ」

「……さ、歌おうぜ、これが歌詞だ」

そして歌う。……何かやったら麻婆麻婆言ってた気がするが……案の定日向が歌詞にツッコム。俺は……

「……どうした？亮」

「……俺は激辛好きなキャラと絡む定めなのか……？」
楽進とか言峰とか奏とか……しかもその内の二人には惨敗してるし……

「次は・・・卒業証書授与！」

「あるの？」

「作ったんだよ、また主に奏がな」

「えっへん」

奏が胸を張る。

「・・・で、授与する校長は？」

「俺だよ！」

日向がステージ上でポーズを取っていた。・・・ハゲのカツラに眼鏡と髭を付けて。

「・・・うわぁ・・・」

「くそお！俺がジャンケンで負けたんだよ！なんか文句あつかあ！？」

「ふん、貴様には適任だ」

「似合ってるぞ日向ー」

直井と咲が言った。

「……始めようぜー!」

「卒業証書授与!……では、立華 奏!」

「……はい!」

奏が椅子から立ち上がる。そして証書を受け取り、戻る。

「次、大澤 亮!」

「……はいよ」

俺は日向から証書を受け取る。

「ツッコミ役ご苦労さん、日向」

「……まったくだ」

「・・・五十嵐 咲！」

「はい、とー！」

「仲村 ゆり！」

「はい！」

「次、直井文人！」
「はい」

「音無 結弦！・・・はい！」

音無が証書を受け取り、日向にカツラをとらせる。

「日向 秀樹！」

「え？は、はい！」

二人は握手を交わす。

「卒業生代表、答辞！」

音無が立ち上がる。

「・・・振り返ると、色んなことがありました。この学校で、初めて出会ったのは、仲村ゆりさんでした。・・・いきなり『死んだの

よ』と説明されました。そして、この死後の世界に残っている人達は、皆一応に自分の生きてきた人生を受け入れられず、神に抗っていることを知りました。私もその一員として戦いました。・・・しかし、私は失っていた記憶を取り戻すことにより、自分の人生を受け入れることができませんでした。それは、かけがえのない想いでした。・・・それを皆にも感じてほしいと思い始めました。・・・ずっと抗ってきた彼らです。それは大変、難しいことです。・・・でも彼らは助け合うこと、信じ合えることができたのです。仲村ゆりさんを中心に出来上がった戦線は、そんな人達の、集まりになっていきました。その力を勇気に皆は受け入れ始めました。・・・皆、最後は前を見て立ち去っていきました。・・・ここに残る七名も・・・今日をもって卒業します」

音無の声に涙が混ざり始める。

「・・・一緒に過ごした仲間の顔を忘れてしまっても、この・・・魂に刻みあった絆は忘れません。皆と過ごさせて本当によかったです。ありがとうございました！卒業生代表！音無結弦！」

パチパチパチ

全員で拍手をする。

「全員起立！仰げば尊し！」

そして・・・その合唱も歌い終わり全員が笑う。

「……閉式の辞！これをもって、死んだ世界戦線の卒業式を閉式と致します。卒業生、退場！」

「ふ……女の泣き顔なんて見たくない。……先に逝く」

直井が音無の前に立ち、帽子をとる。

「……オメエが泣いてんじゃねえかよ」

「ぐす……音無さん……音無さんに出会えてなかったら、僕は……ずっと報われなくて……でも……僕は……！……もう迷いません。……ありがとうございます！！」

「ああ、もう逝け」

「ありがとうございます……」

「・・・直井」

俺は最後に声を掛ける。

「・・・俺の名前は亮だ。以後そう呼べ」

「・・・はい、亮さん・・・」

そして直井が消えた。

「・・・逝ったか。・・・さあて、次は誰が泣く番だ？」

日向が茶化す。

「泣きなんかしないわよ！・・・奏ちゃん。争ってばかりでごめんね。どうしてもっと早く友達になれなかったのかな・・・本当に、ごめんね」

「・・・うつん」

「あたしね、長女でね、やんちゃな妹や弟を親代わりに面倒を見てきたから、奏ちゃんに色んなこと・・・教えてあげられたんだよ？」

奏ちゃん、世間知らずっぽいから、余計に心配なんだよ？色んなこと・・・できたのね・・・色んなこととして・・・遊べたのね・・・もっと、もっと・・・時間があつたらいいのね・・・！もう、お別れだね・・・！」

「・・・うん」

ゆりが奏を抱きしめる。

「・・・さよなら、奏ちゃん・・・」

「うん・・・」

そしてゆりが振り返る。

「・・・じゃあね」

「ああ・・・ありがとな・・・色々世話になりまくった」

「リーダー、お疲れさん」

「今度は人生を悔いなく生きろよ」

「またリーダーやることがあつたら頑張れよ」

「うん。じゃ、またどこかで！」

・・・ゆりも消える。

「・・・ま、俺だわな、順番的に言って」

日向が前に出る。

「……色々ありがとな、お前がいなきやなにも始まらなかったし、こんな終わりも迎えられなかった。感謝してる」

「……たまたまだよ、よく考えたら俺、ここに来ることはなかったんだよな」

「……どういこだ？」

「俺は最後には、報われた人生を送っていたんだ。その記憶が閉ざされていたから、この世界に迷い込んできた。それを思い出したから、報われた人生の気持ちを、この世界で知ることができた」

「……そうだったのか……本当に特別な存在だったんだな、お前ら」

日向は俺達も含めてそう言う。

「だから皆の力になれたのも……そういう、たまたまのおかげなんだよ」

「そっか……まあ長話もなんだ、じゃ、逝くわ」

「ああ、会えたら……ユイにもよろしく」

「おう。運は残しまくってあるはずだからな、使いまくってくるぜ」

「！」

日向は音無に近寄る。

「……おっし！」

二人はハイタッチを交わす。

「じゃあな！親友！！」

……そして日向が消えた。

「……後は……」

「俺と咲……なんだけど……」

「俺達は自分の意思じゃ消えられないからな……」

「そうなのか……？」

「……そ、音無……奏と外、散歩してるよ。もしかしたらその間に消えるかもしれないしさ」

「……そうか。わかったよ。……奏？」

「……うん」

二人は外に出ていく。

「……この世界も終わりか……」

「だな。……次はどこに行くのやら……」

「どこだろうな……ま、俺達の器が出来上がってればいいんだけどな」

俺は笑いながら言う。

「……そうだな」

そしてしばらくして、音無が一人で帰ってくる。

「奏は……逝ったのか？」

「……ああ」

その時、俺達は足下から消え始める。

「……俺達も終わりか」

「……なあ、音無。……お前はどつするんだ？」

「・・・まず、NPCをまた造らないといけないし、迷い込んできた奴を導かないといけない。・・・奏の後を追うのはそれからじゃないとな」

「そうか・・・頑張れよ」

「じゃあな、音無」

「・・・ああ、いつかまたどこかで」

俺達の意識は消えた・・・

・・・彼らは報われたのだろうか・・・

「・・・ちゃん・・・」

「ん・・・」

「お姉ちゃん！もう朝だよ！」

「え・・・あーっ！遅刻だああ！？」

・・・戦線のリーダーだった少女は平和な日々を過ごしていた。

「ごめんね。遅刻しちゃうからアンタ達のお弁当を作ってあげられないんだけど・・・」

「大丈夫だよお姉ちゃん。私はもう食べたから、はい、お姉ちゃんのお弁当」

「え・・・」

「お姉ちゃんは今日お仕事でしょ？頑張ってね」

妹や弟達のありがたさを知りながら家を出る。

『皆ーーーーッ！ありがとーーーーッ！』

ここはライブ会場。歌っているのは今、人気の女性バンドグループ、ガールズデッドモンスター・・・通称ガルデモ。

「お疲れ、岩沢」

「ひさ子もな。お疲れさん」

「・・・でも、まさかここまで人気になるとは思わなかったよな・・・」

「いいじゃん別に。あたしはさ、そんな名声とかよりも見知らぬ誰かに勇気を与えたいんだよ」

「は・・・岩沢らしいな」

「そうかな？・・・よし、今日はあたしがご飯おごるよ。入江と関根もどうだ？」

「え、いいんですか？」

「ゴチになります！」

「現金な奴らだな・・・」

「秀樹さん！今のライブ最高でしたね！」

車椅子の上ではしゃぐ少女と車椅子を押す男がいる。

「ガルデモ・・・だったっけか？ユイは好きだよな、それ」

「だって憧れなんですもん！・・・あゝ・・・いつかはあたしもバンドやりたいな」

「やれるさ。・・・お前だってリハビリを続ければ希望はあるって言われたんだろ？」

「そうですね！やっとこないだ指先を動かせるようになったんです！」

「そりゃ何よりだ。・・・俺はこうやってお前の看護を続けるのもいいけど、いつかお前と走り回ってみてえよ」

「その時まで待っていてくださいね、秀樹さん」

「おう。待ってるぜ」

「・・・父さん。どうですか？」

陶芸家としての評価を父に聞く。

「・・・文人」

「はい・・・」

「・・・よくここまで上達したな」

「え・・・」

「・・・ここまで私の教えについてきてくれてありがとう、文人」

「父、さん・・・」

「そして、これからも頑張れ。・・・それが父から息子に送る言葉だ」

「はい・・・！頑張ります！」

「・・・それじゃあ、行ってくるよ」

「また図書館でお勉強？お兄ちゃん」

「ああ。初音は家にいるのか？」

「うん。・・・またあの人？よく会ってるよね」

「うん。この間知り合ったんだよ。・・・話してみたら意外に息が合ってた」

「ふ〜ん・・・でも、そんなに勉強漬けだと体壊しちゃうよ？」

「平気だよ。・・・昔の俺は無力で医学の進歩を待たなきゃお前を救ってやれなかった。・・・なら、こつやっつて少しでも勉強して、誰かを笑顔にできるようにしないと」

「・・・お兄ちゃんらしいね。・・・行ってらっしゃい」

「ああ、行ってくるよ」

そして待ち合わせ場所へ向かう。

「ええと・・・確かこの辺りで待ち合わせを・・・」

その時、見覚えのある少女が横切る。

「あ・・・」

すぐに振り返って追いかける・・・そして手を伸ばした・・・

卒業（後書き）

亮

「Angel Beats! 終了! お疲れさま!」

日向

「いや、終わってみるとずいぶんあっさりだな・・・」

ゆり

「そうね・・・これであたし達の出番も終わりか・・・」

音無

「・・・またいつか出れるだろ? なぁ奏」

奏

「あたしは出れなくても皆と一緒にだったらそれでいいわ」

亮

「・・・奏らしいな」

音無

「そこが奏の良さだよな」

ゆり

「ホントね。日向君も見習ったら?」

日向

「いやいや、何でそこで俺に振るんだよ? おかしいですよねぇ!」

奏

「……やっぱりそうなのピタリ」

音無

「だな」

日向

「まさか後書きでもこんなことになるなんて思わなかったぜ……」

亮

「……ま、最後はお前らに譲るよ」

ゆり

「それじゃ、次回の真似と開閉と世界旅行」

音無

「また次回も見てくれ」

日向

「そしてAngel Beats!編を見てくれて」

奏

「ごつもありがとつごいしました」

全員

「それではまた次回会いましょう!」

仰天く次の世界へく（前書き）

新たな世界に入ります。ではどうぞ。

「んな非常識なことあるかあああ!!」

咲が大声を出す。

「常識なんぞ神にあるわけなからう」

「言いきりやがった!？」

「……それとな、非常に言いにくいのじゃが……」

「なんだよ……」

「お主達の器を造るのに力を使いすぎてしまったの……あと何回お主達を別世界に送れるか……」

「……つまり?」

「……つまり、下手をしたら儂の力が戻るまでその世界に置き去りになってしまふのじゃ」

「……一応参考までに聞くが、力が戻るのはどれくらいに……」

「……人の一生分じゃろつな」

今までまともに話していない俺が口を開く。

「……ようするに、物語を終わらせても消えることがなけりゃ、残りの人生をその世界で過ごせ……ってことか」

「亮……」

「……いいさ、さあ、次の世界に送ってくれ。……俺達の身体はできてるんだろ？」

「……うむ。わかった」

俺達の意識が薄れていく。

「……さて、次の世界はどこに行くのやら……」

「さあな。……どこでもいいわ」

・
・
・
目を開ける。

「……やっぱりかあああ！？」

絶賛落下中だった。

「く……咲！……咲？」

返事がない。……まさか……

「……亮！」

俺を呼ぶ声が聞こえる。……この声は咲じゃない。

「……明命！」

「掴まってください！」

手を伸ばして明命の手を掴む。

「……ってこの後どーすんだよおお！？」

「……すみません。考えていませんでした」

「えええええええ！？」

このままじゃ二人揃ってくしゃりだ。

「く……あ、そっだ」

自分の能力を忘れていた。

「モーションキャプチャー！ライダー！」

ライダーに物真似して天馬を召喚する。

「よっ……」

「わぁ……もふもふです……」

……なんか明命が悦に入った。……そして俺達は無事に地面に降りる。

「よし……キャプチャーキャンセル」

物真似を解除して周りを見渡す。

「あの、亮？」

「ん？なに？」

「今更なんですが……見た目が変わってませんか？」

「え……？」

身体を確認すると……

「……ホントだ」

少し背が伸びていた。それに髪も前髪が目に見えなくなってるし……

「……これがじいさんが造った新しい器か……」

「……格好良い……」

「へ？」

「はうわ！？何でもありません！！」

明命が顔を真っ赤にして否定するので追求をやめる。

「……しかし、ここがどの世界かもわからないんじゃないかな……」

「……とりあえず歩きましょう。……どうやら、離れた位置に大きい街があるみたいです。今行けば朝には着きます」

「……明命、お前見えるのか？」

「ええ、まあ、魔力の補助もありますが……」

「魔力って万能だね……」

俺達は歩き出す。ちょうど近くに良い感じのロープが落ちていたのでそれを身につける。

「……でも、何でロープが……」

「明命。ご都合主義だよ」

街に着いた。

「うわぁ・・・」

「凄いですね・・・」

一言で言うのならかなり広い街だ。

「・・・どうですか亮？」

「ああ・・・この世界は多分・・・」

というよりさつきからやったら人外の方々が目に入る。エルフだの獣人だの。

「お、お猫様・・・」

「通行人だから襲っちゃダメだからな？」

その時、前が騒がしくなっていることに気がついた。・・・アレは・・・

「・・・亮」

「ああ、行ってくる」

「おうおう！痛いじゃねえかよ!？」

「そんな・・・ぶつかってきたのはそつちじゃ・・・」

「ああん？なんだ、言いがかりをつけんのか？」

「言いがかりって・・・そつちの方が言いがかりやん！」

「んだと？ナメンじゃねーぞガキが」

「おい、止めとけよ。コイツらは奴隷だ。傷つければ後が面倒だぜ」
「？」

「へーきだよバレなきや」

「・・・そうだな・・・」

「いや、失礼」

俺はチンピラとメイド服を着た・・・亜子とアキラの間に割って入る。

「なんだテメーは!？」

「コイツらの知り合いでね。・・・悪いけど退いてくれないか？」

「ああ？コイツらは俺達にぶつかって来たんだぞ？・・・なのに態度がなまってなくてよ〜」

「どうせ二人は謝ったのに執拗に絡んだんだろ？」

「どこの世界でもチンピラはチンピラだな・・・」

「・・・て、テメー・・・」

「構わねえ！やっちまえ！」

チンピラが突っ込んでくる。・・・数は三人。やれない数じゃない。

「おらっ！」

拳を避けて相手の鳩尾に拳を叩き込む。
ズドン！

「ぐえ・・・」

「この野郎！」

飛び蹴りをかわして気だけで練った玉を炸裂させる。

ズガアンッ！

「がは・・・」

チンピラ二人が地に沈む。

「・・・まだやる?」

「あたりめえだろうが!ここで退けるか!」

残ったチンピラが拳を・・・って、

「速あつ!?!」

コイツ・・・肉体強化の魔法を・・・!

「く・・・街中じゃ威掛法の破壊力はマズイよな・・・モーション
キャプチャー!」

チンピラの拳がかすってロープのフード部分が外れる。

「・・・立華、奏・・・!」

既に物真似は終えていた。

「なんだよ、テメーもガキじゃねえかよ!ふん捕まえて楽しませて
もらうか!」

「外道が・・・」

チンピラの拳が迫る。

「ガードスキル・・・ディレイ」

一瞬で移動して拳を避ける。

「な・・・」

「ガードスキル ハンドソニック」

手から刃を出す。

「おおう!?・・・だがな!」

チンピラが何かを呟いた瞬間、周りに火の玉が浮かぶ。

「・・・魔法の射手サキタ・マキカ・・・!!」

「こつなつたら吹き飛ばしてやるぜ!」

魔法の矢が放たれる。・・・けど、甘い。

「ガードスキル ディストーション」

・・・魔法の矢は俺に当たることはなく、全て空に逸れた。

「よし・・・ハアアツ!」

ハンドソニックを構え、突撃する。

ガキイイインツ!

「ぐ・・・へへ、障壁は抜けないみたいだなあ?」

「ナメんなよ。・・・2!」

ハンドソニックの形状が変わる。

「・・・3!」

トライデントの形になり、障壁にひびが入る。

「な・・・」

「4!」

華の形になり、障壁が弾け飛ぶ。

「又ワアアッ!」

チンピラが地面を転がる。

「ぐ・・・え?」

俺は更にハンドソニックを変化させてヤンキー座りにして首筋をぺちぺち叩く。

「どうする?まだやんのか、ああ?」

・・・コレ見たら音無やゆりはどんな反応を示すんだろーな。

「く、くそ!覚えてやがれ!」

「イヤだね」

お決まりの捨て台詞を両断する。

「あ、あの……どうもありがとうございました」

アキラが近づいてくる。

「おいおい、何でそんな他人行儀なんだよ」

「え……」

「キャプチャー、キャンセル」

物真似を解除する……

「よ、アキラ、亜子。久しぶり」

「あ、あ……亮、君……？」

「な、何でいるん……？」

「……亮！ご無事ですか？」

「え……まさか……」

それに気付いた明命がフードを取る。

「……お久しぶりです、アキラさん、亜子さん」

「明命まで……」

「そ、そや。今はナギさんとかもいるんやけど」

「そうだね・・・紹介しておこう」

「ほなら着いてきて」

俺達はフードを被って歩き出す。

「
・
・
あ、
お帰り
・
・
誰？」

夏美がそう聞いてきた。

「……忘れたか？ クラスメートを」

フードを取る。

「あ……！ 亮君！？」

「私もいますよ」

「……どうしましたか、皆さん？」

後ろから年齢詐称薬で大きくなったネギと小太郎がやって来た。

「久しぶりだな、ネ……ナギ」

「……ッ！？ もしかして亮さんですか！？」

「ん？ 亮……ってあの兄ちゃんか？」

「天の御遣い再び物語を終わらすために見参だ」

「……あの、少し、来てください」

ネギに呼ばれて室内に入る。

「……無事だったんですね」

「無事……かどうか言いにくいけどね」

「……蓮華さんと甘寧さん怒ってましたよ？」

「あの世界を覚えてるのか？」

「他のみんなは曖昧みたいですけど……僕はコレを見たら思い出しました」

そう言っつてネギは桃香の絵が書かれた仮契約カードを取り出す。

「それ、消えなかったのか」

「はい。……どうやら世界が違ってても大丈夫みたいなんです。……
“死んだ”仮契約カードになりませんから」

「ふむ……ネギ、今の状況を分りやすく説明してくれるか？」

「あ、ハイ」

ネギに説明されること数分……

「・・・なるほど、アキラ達は100万ドラクマの借金をしたワケか・・・」

「それで、僕達、仮契約メンバーは指名手配を出されてまして・・・」

「だから年齢詐称薬で誤魔化してるわけね」

「はい。．．．ですから、その．．．」

「わーってるよ。亜子には内緒にしとけばいいんだろ？」

「．．．そうしてくれると助かります」

「だよ。分かったな、明命」

「．．．はい」

明命が真後ろに現れる。．．．うん、慣れた。

「そんで今は拳闘士で金を稼いでアキラ達を助けるのが目的．．．
明命」

「はい？」

俺はニヤリと笑って言った．．．

「・・・ハツ、何だてめえらは！？最近はガキが拳闘士をやるのが流行ってんのか!？」

トサカとかいう男がそう言ってくる。

「ま、金は大事だからな」

「お金が欲しいのですよ」

「ふ……なら、訓練士に勝ってみるよ。何と兄貴はあのサウザンドマスターをボコしたこともあるくらいだがな！」

「……亮、サウザンドマスターってネギさんの……」

「……大丈夫、勝てるよ」

「……兄貴、頼みます！」

「……だれだあ、命知らずなガキはよ」

そう言つてハゲ男が入ってくる。

「亮、下がってください」

明命がロープを脱ぎ捨てる。

「……たまには暴れてみたいんです」

明命の目が猫のように鋭くなる。

「怖……油断はするなよ？」

よく見たら俺の服はあの思春と同じ服になってた。明命は恋姫時の服に戻ってる。

「ほら、かかってこいよ」

「ッ！行きます！」

明命が距離を詰める。

「ふん！」

男の姿が消える。・・・瞬動使いか・・・

「おらよ！」

拳が明命に当たる。・・・と思われたが、明命は軽々と避けた。

「なにい！？」

「ふっ！」

明命が回し蹴りを放って男を蹴り飛ばす。

「さっすが明命。長らく一緒にいて有りがたさがよくわかるな」

「は、はい！ありがとうございます！」

明命がコツチを見る・・・って、

「咸掛法！」

「え、きや！？」

明命の後ろに瞬動を使って回り込み、起き上がった男の打撃を防ぐ。

「明命、油断するなよ」

「あう……すみません」

「く……ガキの癖に……」

「こちらら何度も死線を潜り抜けてきてんだよ！……もっと恐ろしい目にあってきたんだ！……主に鍛練で」

最後の一言は明命にしか聞こえなかったらしい。……明命が少し、哀れみの視線を向けてきたのが背中越しても分かった。

「決めるか……ハアアツ！」

一気に男を殴り飛ばした。

「く……ナメんなガキがあ！」

男の周りに砂の魔法の矢が現れる。

「……明命！頼む！」

「はい！」

俺は左手に力を溜める。

「そらよ！」

「ヤアアアア！」

カキキキンツ！

男が放った矢を明命は全て叩き落とす。

「ふううう・・・明命、退け！」

明命がそれに反応して跳ぶ。

「ウオオオ！ハアツ！！」

ズガアアアンツ！！

「グオオオツ！？」

玉が男に直撃してぶっ飛んで壁に激突する。

「っしやあ！」

魔法の矢は使えんがこうというのは得意だ！

「・・・結局亮が決めるのですか・・・」

「悪い、明命・・・後で勝負してやるから」

「・・・あ・・・」

「・・・トサカさん！これでいいですか！？」

「ちゃんと倒したぜ！」

「く……わかった。……お前らを拳闘士として認めてやる」

「やった!」「」

俺達はこの世界に来てようやく第一歩を踏み出したのであった……

仰天く次の世界へく（後書き）

明命

「新しい世界に入ったのです！」

日向

「そりゃよかつたな」

明命

「あれ？どうしたのですか？」

日向

「なぜかは知らないが今日もこの部屋に呼ばれたんだよ」

小太郎

「俺もいるんやけど・・・」

明命

「こゝ、小太郎さん！？そゝ、その耳をもふらせてください！」

小太郎

「い！？やゝ、やめてーな明命ねーちゃん！」

慎二

「僕も呼ばれたんだけど？」

明命

「・・・あゝ、解りました！」

三人

「？」

明命

「皆さんは主人公の親友なんですよ！」

慎二

「お、おい！僕と衛宮が親友だって？馬鹿な冗談はよしてくれよ」

小太郎

「そつやで！ネギはライバルや！」

明命

「わ、私に詰め寄られても……」

日向

「よかった……俺はちゃんと音無の親友でいられたんだな……あれ、俺……消えるのか？」

慎二

「思い残すことがなければ……って僕に何言わせるんだあ——ッ！」

日向

「いやお前が乗ってきたんじゃないかよ」

小太郎

「なんやオモイ人ばっかやなあ」

明命

「そう言えば小太郎さん、呉の皆さんの部屋に入っていましたよね？」

小太郎

「そうそう！亞莎ねーちゃんや思春ねーちゃんがあんなに強いなんて思わなかったで！」

慎二

「あーあーやだやだ。これだから野蛮な子供は・・・」

日向

「お前、今までの女性キャラを口説いて殆ど撃沈してたろ」

明命

「しかも蓮華様に何かを言って思春殿に追いかけてまわされましたね」

慎二

「ぐ・・・くそ！終わりだ終わり！」

日向

「しゃーねーな・・・次回の真似と開閉と世界旅行！」

小太郎

「次回もまた見るんやで！」

明命

「それではまた次回会いましょう！」

恋

「・・・出番」

全員

「!？」

強さ (前書き)

最近題名が中身と関係なくなってるような・・・ではどうぞ。

強さ

「タアッ！」

「ヤアッ！」

ズガアアアンツ！

今は俺達の拳闘士としてのデビュー戦だ。

「明命！」

「はい！」

明命が跳んで踵落としを喰らわす。

「止めえ！」

俺が拳を放って敵を沈黙させる。

『・・・おーっと！ここで試合終了！強い、強いぞー！先程のナギ
&コジローといい、今回の新人は期待が高まるーッ！』

そして何か羽生やした人がやって来る。

『どうもー 勝利者インタビューです！凄いですね新人のお二人さん！お名前は！？』

マイクを近づけられる。

『・・・俺は』

本名はマズイかな・・・

『・・・俺は、カン・コウ八だ!』

「亮!?!」

明命が横で驚く。

『では、そちらのお名前は?』

『え、あ、はい! シュウ・ヨウヘイです!』

『皆さん! 新たな拳闘士の出現に興奮しております! 新人の彼らがどこまで行けるのか見物デス!』

「・・・亮、思春殿の名前を使うのはマズイのでは・・・」

「だって本名使うわけにはいかないだろ?・・・フェイトに名前知

られてんだし」

「それはそうですが……」

「お疲れさん二人とも」

「朝倉」

朝倉が立っていた。……ちなみに今この付近にいるのはネギと小太郎（偽名ゴジロー）朝倉、千雨に茶々丸。そしてアキラと亜子と夏美だ。

「いや、驚いたよ。まさか亮君達までいるなんてさ。……咲君達
は？」

「それがさ……俺達も戻ってきたばっかです。……バラバラだ
よ」

「あっちゃあ……搜索目的が増えちゃったね……」

「……でも、あの二人なら大丈夫や」

小太郎とネギがやって来る。

「そうですよ。お二人とも強いですから」

「そつだな……」

「あの〜・・・」

朝倉の肩から声が聞こえた。

「・・・誰？」

「忘れたんですか！？私です、さよですよ〜！」

「あー！相坂さよか！お前も来てたんだな！」

「・・・亮さん。明命さん。マスターからコレを預かってます」

新たにやって来た茶々丸達からバッジを渡される。

「・・・コレは？」

「ま、簡単に言えば俺らの仲間の証やな」

「マスターは必ずまた戻ってくるだろうと言って余分に四個作りました」

「エヴァが・・・」

「・・・まったく、男が女子校に来るなんておかしいと思ったら・・・」

千雨が頭を抱えて言う。

「ま、これからもよろしく」

俺はバッジを服に、明命は前髪に髪飾りのようにして付けた。

アリアドネー」

「・・・ただいま」

「あ、お帰り、ユエ、レン。どうだった？調べものは」

「・・・ダメです。まったく思い出せませんでした」

「・・・わからなかった」

「そっか・・・それにしても大変だね、二人とも。・・・ユエは記憶喪失。レンは人探し」

「ですがコレットがいて助かりました。・・・下手をしたら私は行き倒れていたかも知れないです」

「・・・恋も、コレットがご飯をくれなかったら倒れてた」

「あはは・・・そう言えばレンはユエを知ってるみたいだったけど・

「・・・」

「・・・恋が知ってる夕映とユエは違かった・・・」

「えっ？どつどつどつどつ」

「・・・とりあえず今日はもう遅いから寝ましょつ」

「・・・」
「コクッ」

「そつだね」

「????」

ズガガガッ！

「ダメだ、崩れるっ！」

「走って走ってえー！！」

「まさかこんな最後にベタなトラップたあね！」

「嬢ちゃん大丈夫か！？」

「ハイッ！・・・ッ！」

少女に落石が落下してくる。

「・・・魔力最大集中！エアロガア！」

突風が落石を防ぐ。

「無事か？のどか」

「は、はい・・・助かりました」

「・・・見ろっ、出口だ！」

「やったあっ！」

「俺は一抜け！」

・・・先程までいた遺跡が崩れる。

「たーーーーー・・・危なかつたーーーー」

「まさか遺跡が丸ごと崩れるとはねえ」

「ふーーーー、死ぬかとー・・・」

「ケガはない、ノドカ？」

「ハ、ハイ」

「アイシヤ、俺は？」

「サキは心配いらぬもの」

「うえ・・・」

「あつはは！どんまいサキ！」

「クリス・・・テメー他人事だと思いやがって」

「・・・でも、ホントたくましくなつたわよねえ。遺跡で拾つたア
ンタが仲間に入れてくれて言つた時はどうしよかと思つたけど」

「うんうん。ノドカちゃんの農発見能力は一級品！」

「使える・・・」

「その年でそんな技能何処で身につけたんだい？・・・坊主もな。その年でよくそんな大魔法を使えるよな」

「私は、えーと・・・部活で・・・」

「俺は特訓の末に」

「・・・よーし！お待ちかねのお宝分配タイムだぜ！」

「苦労しただけあって大漁だねえ！」

皆がお宝にがつつく。

「・・・あれ、坊主、そんだけでいいのかい？」

「いやいや、結構値打ちもんだぜこれは」

「意外にサキのモノを見る目は確かだからね〜」

「・・・悪どい」

「リン・・・それだけだと俺が悪人みたいなんだけど・・・？」

「・・・ま、いきなり空から降ってきたらあまり良い感想は持てないわよねえ？」

「う・・・」

「・・・恋さん達は・・・」

「バラバラだよ。・・・せめてもの救いがのどかと出逢えたことだ

よ。・・・ここで知り合いもないでいたら精神的に参ってた」

「おやおや〜？もしかしてお二人はそういう関係〜？」

「バツ、何言つてんだよクリス！俺には恋が・・・いや、何でもない」

「おやあ？もしかして本命がいるのか？」

「クリス・・・！その口を閉じてやるうか？」

「げ・・・アレは勘弁・・・」

「いきなり軽口叩いたクリスが1日口を開けなかったんだよなあ」

「ある意味いい能力よねえ」

「・・・便利」

「鍵関連は全てサキに任せちゃうからね」

「お陰で今まで取れなかったお宝も取り放題」

「・・・早く、会いたいな・・・」

ポツリと呟く。

「……恋……」

亮

「……また勝ったぜ」

「……ですね。……あと何回戦えばよいのですか？」

「アキラ達の借金は百万ドラクマ。……そして選ばれた拳闘士達が集う大会の賞金も百万だ。……これが意味するのは？」

「……賞金を手にするまでが私達の戦い……」

「だけじゃないけどな。……ん？何か騒がしいな……」

「あ……大変です！」

「どうした茶々丸？」

「ネギ先生が……街中での決闘で重傷を……！」

「ええ！？本当ですか!？」

「・・・あ、亮君・・・」

アキラが立っていた。

「・・・ネギは？」

「命に別状はないって・・・腕が切れてたらしいけど・・・」

「心配？」

「うん。・・・あの、亜子のことなんだけど・・・」

「亜子？・・・ああ、“ナギ”ね」

「そっだよ。・・・亜子は架空の人物に恋してて・・・私はどうしたらいいんだろう・・・」

「ああ・・・なるようになるしかないんじゃないか・・・」

「はあ・・・」

アキラがため息を吐く。

「……でも、アキラにはできることがある」

「え……?」

「ちゃんと支えてやれよ。……友達なんだから?」

「……うん」

「気負いすぎるな、でも能天気すぎるな。……矛盾してるな。けど俺はある意味正しいと思ってるな」

「?……どういう意味……」

「つまり、臨機応変にってことだ。……アキラやネギとかは気負いすぎだ」

「……う」

「……じゃ、あまり夜更かしするなよ」

「……ありがとう」

俺は部屋へと戻っていった……

そして二日後の昼頃。ここは空港。

「これが搜索ルートか。ホンマに世界一周やなあ」

地図を見ながら小太郎が言う。

「人口密集地は大方カバーしています」

「……んで、ネギ？腕は？」

「あ、はい。問題ないです」

「そ。ならいいや」

「……この旅費でこれまでのお二人のファイトマネー5万は消えました」

「ま、世界一周の旅費じゃ、しゃーないな。後は亮兄ちゃん達が稼いだ金で何とかするわ」

「……でもさー、空の上から位置を確認するだけじゃ意味なくな
い？朝倉」

夏美が朝倉に聞く。……今更だけど朝倉も年齢詐称薬でちっこく
なっていた。

「フッフ、そこでご登場となるのが本作戦の目玉……これさ！」

朝倉はそう言っつて何かを取り出す。

「仮契約カード!?」

「ふふふ……ちうつちが電腦関係のいいのが出たから、私も取材情報収集関連のいいのが出るんじゃないかと思っつてたんだ」

朝倉のアーティファクトは六体のスパイゴーレムを使うものだった。

「発見した仲間にこのスパイゴーレムを向かわせれば状況は一目瞭然っつて訳だね」

「それはいいがてめえらいつヤツたんだ!? 聞いてねえぞ!? それに仮契約はあのオコジョがいねえと出来ないんじゃないのか？」

「ヤツたつて何を？」

千雨とアキラが言った。

「そらお前、仮契約つたらこのポケネギとあの姉ちゃんがキスしたちゅーことや」

「ええーっ!?!? キス!?!」

「あはは……」

明命がそれを聞いて顔を赤くして苦笑してた。

「ま、千雨ちゃん。ここには仮契約屋つてのがあるんだよ。それでまあこれが私の・・・ファーストキス記念写真さー」

朝倉は仮契約の瞬間の写真を取り出した。

「てめえがファーストキスな訳ねーだろっ!」

千雨が朝倉を追いかけまわしていた。

「ん〜ふふふ、ネギ君赤くなって震えてて初々しかったな〜いい体験させてもらっちゃったい」

「朝倉さんっ!?!」

「てめえその幼女顔で言うなっ、きめえっ!!」

「と言いつつネギ先生の仮契約者はすでに8人目ですが・・・」

「は・・・8人・・・不潔だっ!ネギ先生ッ!」

アキラがダッシュしてどこかに走っていった。それをネギが追いかけていく。・・・ちなみに桃香を加えれば9人だけだな。

そしてアキラが戻ってきて一言。

「まさか・・・亮君も？」

俺は言いづらそうに仮契約カードを取り出す。

「ああ、まあ、その・・・明命と」

「え・・・」

そうこうしてる内に朝倉とさよと茶々丸は飛行機に乗っていった。

「・・・は？ネギが？」

「そうや。稽古つけてもらいに行ったんや」

ジャック・ラカンか・・・

「明命」

「はい、なんででしょうか？」

「ネギを追いかけてくれ」

「え……ですが……」

「いいからいいから。俺と小太郎が交互にお互いの代理ででりゃお
得だ」

「それ良い考えやな。先に千雨姉ちゃんも行つとるはずや」

「……分かりました。ですが約束してください」

明命がズイッと顔を近づけてくる。

「絶対に無茶はしないでください。いいですか？」

「……おう。明命もな」

俺は振り返って一言。

「力を……最強を見てこい（ボソツ）」

俺達はバラバラに歩き出す。……そして強くなっていく……

強さ了（後書き）

ゆり

「え……今回の基準は……」

蓮華

「さあな……」

アスナ

「うん……」

凜

「何かしら……」

亮

「……ヒロインっぽいけどヒロインじゃない人？」

全員

「!?!?」

ゆり

「ちょ、ちょっと待ちなさい！あたしは……確かにヒロインではなかったのかもしれないけど、ファンのでヒロインに……」

亮

「奏に座を奪われただろ？」

蓮華

「わ、私は呉王で、原作では……」

亮

「この小説だと明命に座を奪われたけどな」

凜

「わたしだってルートによっては……」

亮

「だからこの小説だとセイバーに座を奪われただろって」

アスナ

「ヒロインって……私とネギはそんなんじゃ……」

亮

「……確かにのどかや千雨の方がヒロインに見えなくもないけど・
……」

ゆり

「……だってどうせバカばかりだし……」

蓮華

「……私だってもう少し早く亮に……」

アスナ

「私は別に……」

凜

「……だって士郎はいつつもセイバーセイバーって……」

亮

「・・・何か居づらいな・・・では、次回の真似と開閉と世界旅行！」

アスナ

「次回もまた見てください！」

全員

「・・・それではまた次回・・・はあ」

亮

「アスナ。早くここから出よう」

アスナ

「確かにこの空気はちょっと・・・」

千の顔を持つ英雄（前書き）

・・・明命ってこんなキャラだったっけ？ではどうぞ。

千の顔を持つ英雄

明命

「えっ、と……気配は……」

私はネギさん達の気配を伝って走る。

「あ……千雨さん！」

「ん……明命じゃねえか、どうした？」

「亮に命じられてネギさんを追いかけてきました。……ネギさんは？」

「ワケわからん修行をやらされてるよ」

「はい？」

「お〜？何だあ、この嬢ちゃんは？」

大柄な男の人がやって来る。……一目で解る。この人は強い。

「……私は明命と申します。貴方は……ジャック・ラカンさんですか？」

「ほう？俺の名前を知ってるたあな。……ふむふむ」

ラカンさんが私を確認するように見る。

「……随分血の匂いがするな」

「……ッ!」

やっぱりこの人は出来る……

「……ええ。私は数えきれない人を殺めてきました」

「んで、一時期悩んでたが、今は吹っ切れた……ってとこだな」

「はい。私には亮が……大切な人がいますから」

「な……」

千雨さんが顔を赤くしてましたがそれはスルーします。

「いい顔じゃねえか。あのぼーずもちったあ見習えばいいのこよ」

そんな感じでしたら私達は話し込んだ。

アリアドネー)

「……ユエ、何処行くの?」

「あ、レンさんですか。……いえ、今からコレットと同じ教室で授業を受けに行くのです」

「レンは部屋に居てくれれば……」

「……恋も、行く」

「「え?」「」

「……一人ぼっちは寂しい」

「ね、レンがいいなら別にいいけど……」

「……コレット・ファランドールの遠い親戚、ユエ・ファランドールさんとレン・ファランドールさんです。みんな仲良く」

「よろしくです」

「……よろしく」

「じゃ、コレットの横にでも」

「ハイです」

「……わかった」

そして授業は実技に入る。

「ハイ、行った行ったー！今日は飛行訓練百キロマラソンよー！」

「よし……」

ユエは勢いよく駆け出し……

ズシャアアッ！

……顔面スライディングをした。

「……ユエ、大丈夫？」

「だからやめた方がいいって……」

「やはりまだ無理なようです」

「まったく……どういふこと？」

「え」

「ユエといったかしら新入りさん。ホウキも扱えないような人がこのクラスにいるというのは問題です。出来ないのなら見学に徹していた方がいいのではなくて？」

「……エミリィ」

「な、なんですの……」

恋がエミリィに詰め寄る。

「……ユエを苛めちゃダメ」

「な！苛めでは……」

「……」

「そ、そんな目で見つめないください！……こ、今回はあまりうるさくは言いません」

「お、おお……スゴいよレン。いいんちょを言いくるめるなんて」

「ですが気にしなくてもいいです。……私が落ちこぼれなのは事実ですから。……コレット達は先に行っててください」

「え、でもー・・・」

「・・・コレット」

恋はホウキに“立って”乗る。

「え・・・跨がないの？」

「・・・座ると、飛びにくい」

「そ、そうなんだ・・・」

「・・・行く」

ズドン！

みるみる内に恋がコレットの視界から消えていく。

「え、ま、待ってよレン〜〜!!」

そして放課後・・・

ズベシヤアッ！

再びユエが地を滑る。

「むう……どうも私は相当な落ちこぼれだったようですな」

「そんなことないよ」

コレットが手を差しのべる。

「私も手伝うユエ。一緒に頑張る」

「コレット……」

「……恋も、手伝う」

「レンさん……」

「……呼び捨てで、いい」

「……ありがとうございます」

明命

「999!・・・1000!・・・ハアツ、ハアツ」

ネギさんが息を整えて一言。

「死のう・・・」

「ネギさんツ!?!」

「先生ーーーーツ!!!?」

物凄くネガティブになりました。そして千雨さんがネギさんを引かずってラカンさんに詰め寄っていく。

「コラア!おっさんどーしてくれんだ!見るよこの体たらく!何が闇の修行だ、大丈夫なのかよこの特訓」

「闇・・・?」

私はネギさんがやってることが理解できなかったが、今の言葉で大分理解できた。

「ウム・・・正直ちょっとやりすぎだったかなーっと・・・」

「アホかーーーーツ!!!」

「ああ・・・闇なら咲さんがいれば・・・」

「あん？何で五十嵐が出てくんだよ？」

「咲さんは闇を得意としていますから・・・」

・・・亮、私をここに来させて何が目的なのでしょう・・・

亮

「そらよ！」

「これでも喰らえや！」

ズガアアアッ！

『・・・試合終了！勝ったのはカン・コウ八選手とオオガミ・コジロ―選手！』

「ご苦労さん、小太郎」

「亮兄ちゃんもな。．．．にしても何で明命姉ちゃんをネギの所に送ったんや？」

「んゝ．．．何となく、かな」

「はあ！？そんな理由で．．．」

「冗談だよ。．．．念のためが半分と、最強を知ってもらいたいの
が半分」

「ん？念のため．．．って」

「ネギの迷いを万が一千雨だけじゃ解消できない時のためだ。．．．
アイツも一時期悩んでたからな。お堅い同士良いカウンセリングに
なるだろ」

「そんなもんか．．．？」

「・・・お疲れさま〜・・・これ、お茶みたいなものやけど」

「サンキュ、亜子」

「貰っとくわ」

「・・・あ、コタローくん！電話だよ！」

夏美がやって来た。

「おう。今行くわ」

そして小太郎と夏美が歩いていってしばらく・・・何か慌てて戻ってきた。

「亮兄ちゃん！大ニュースや！」

二人が言うには、俺達・・・特にネギの呼び掛けにより、刹那、楓、アスナ、このかの四人と、古菲。そしてのとかと・・・咲から連絡があったらしい。

「・・・咲の奴、無事だったか・・・でも、恋が一人か〜」

「あとチビ助と祐奈さんとまき絵さんと・・・」

「ハルナにアーニヤちゃんだね」

「まき絵と祐奈は心配だな・・・でも、中々運動神経がいいから、

無事だとおも」

「亮君ーーーーッ！コタロー君ーーーーッ！」

亜子とアキラが走ってくる。

「まき絵とゆうーなが見つかったんやーッ！」

「「ええ！？」」

俺と小太郎は全力のハイタッチをかます。

明命

あの後、ネギさんは二つの選択肢を迫られた。・・・光の道か、闇の道かを。・・・そして闇の魔法を実際にやったラカンさんが爆発して倒れました。嘘ではありません、本当です。そしてその夜。

「・・・ネギさん」

「あ、どうしましたか？明命さん」

私は単刀直入に言う。

「・・・迷っていますか？」

「ッ！・・・ハイ」

「そうですか・・・」

私はそう言いながら刀を構える。

「明命・・・さん・・・？」

「構えてくださいネギさん」

「え、そんないきなり・・・！」

「ヤアッ！」

「わっ！？」

私はネギさんに斬り込む。・・・突然の襲撃にネギさんは避けたものの、バランスを崩して倒れる。私はその上に乗って首筋に刀を当てる。

「・・・今のこの状況は、今の迷っているネギさんなら死亡。光の道なら仲間が助けてくれて、闇の道なら己の力でこの状況を打破できます」

「・・・」

「・・・迷ってはいけないのです。・・・迷ったら、着いてきてくれた人、大切な人。・・・全てに迷惑をかけます」

「う・・・」

「今のネギさんが欲しいのは力・・・誰も傷付けずに済むほどの・・・ですが、その考えは甘いです。どんな人であれ、必ず一度は傷付きます。・・・万が一傷付かない人がいるとすれば、その人の人生に光があるとは言いにくいでしょう」

「明命さんも・・・迷ったんですか？」

「・・・ハイ。・・・私には力がある。だからあの戦を駆け抜けてきた。・・・でも、それでも・・・私は迷っていた。親友にも聞いたけど根本的な解決にはなりませんでした。・・・その時、ある人が迷いを断ち切ってくれました。・・・ネギさんにも、そんな存在がいるはずですよ」

私は上から退いてネギさんを立たせる。

「・・・単刀直入に言いますよ。どちらの道を選んでも皆さんは着いてきてくれます。・・・学園祭の時の亮の言葉を覚えてますか？」

「・・・はい」

「その時点で亮は味方です。もちろん私や恋さんや咲さん・・・きつと学校の皆さんも受け入れてくれます。・・・闇が恐いから逃げた、なんて言う人はいません。力が欲しくて闇に身を染めたからって軽蔑する人もいません」

「・・・」

「最後に言います。ネギさんはお父様に近づこうとしていますが・・・私は似た人を知っています。・・・蓮華様を覚えていますか？あの人も姉である先代呉王の雪蓮様に近づこうとしましたが・・・」

「しましたが・・・？」

「・・・蓮華様は雪蓮様とは根本から違っていたんです。・・・ですからネギさんも無理にお父様と同じ道を歩む必要はありません」

「・・・」

「・・・私からは以上です・・・それでは、ネギさんの選択を楽しみにしています」

私は最後に微笑みながら礼をして、寢床に戻る・・・

「よう」

「千雨さん・・・」

「ずいぶん長々と喋ってたな。・・・んで？」

「え……」

「どうなんだよ、先生は」

「……わかりません。……ですがどちらを選んでも、千雨さんは味方でいてあげて下さい」

「……てめえに言われるまでもねーよ。……あんなちっさいガキが必死に考えてるんだ。……なら精一杯フォローしてやるよ」

「……ふふ、千雨さんはネギさんが好きなんですね」

「ば、ちげーよ！ただ単にアイツが危なっかしくてだな……」

「なるほど。保護者愛ですね」

「あのなあ!？」

「……今更だけど、私ってこんな風に話していたっけ?……きつと亮達に影響されてるんだろうな……そうして夜は更けていく……」

千の顔を持つ英雄（後書き）

亮

「やったら喋るね、明命」

思春

「あそこまで語る明命は初めて見たな」

亞莎

「ですね。．．．それで肝心の明命は．．．」

亮

「長々と喋ったせいか一回舌嚙んでな、今医務室」

二人

「．．．」

亮

「ちなみに咲は出番の少なさを嘆き、恋は咲に付き添い。恋姫のメンバーはガールズトーク。Fateのメンバーはまったく居残りの組が魔法世に暇を持て余し、ネギまのメンバーは出番がない居残り組が魔法世界組をネチネチからかって、Angel Beats!メンバーは音無と奏、日向とユイのイチャイチャムードに撃沈。．．．そしてこのレギュラー部屋に思春達がいるんだよ」

思春

「．．．確かに今、呉の部屋に戻ったら．．．」

亞莎

「大変ですよ……」

亮

「何で？」

亞莎

「……雪蓮様が冥琳様をも捲き込んで宴会を……」

亮

「冥琳が……」

思春

「延々と他の皆に愚痴を洩らしていたな」

亮

「黄巾の乱ならぬ公瑾の酒乱か……」

思春

「誰が上手いことを言えと言った」

亞莎

「しかもそれアニメのネタですし」

亮

「うっせ。……それでは次回の真似と開閉と世界旅行！」

亞莎

「次回もまた見てください！」

思春

「では、また次回」

闇の道々(前書き)

ラカンのキャラがわからない!...!...ではどうぞ。

闇の道

・・・その日の朝。ネギさんがラカンさんの前に立っていた。その手に握られているのはラカンさんから渡されたエヴァさんが記した『闇の魔法』の巻物。マギア・エレベア

「・・・で？光と闇、どっちだ？」

「ハイ・・・」

ネギさんは巻物を差し出す。

「千雨さん、明命さん、スミマセンやっぱり・・・この選択って無茶かもしれないね」

・・・ネギさんは既に覚悟を決めている。

「・・・ふん。何だよ先生、まだ悩んでんのかよ。正しいか間違ってるかなんてやってみるまでわかんねーだろ。デカイ決断だしわかんなくもないが・・・」

千雨さんがはつきりと口にする。

「けどな・・・それは・・・あんた自身を選ぶ道だ!!・・・あんたがあんた自身で踏み出す一歩だ!・・・無茶だとか関係ねえ。胸張っていいんだぜ？私が・・・ちゃんと見届けてやるからさ」

「・・・ほら、早速貴方を認めてくれましたよ。・・・もう、心は

決まっていますよね？・・・どんな道でも応援します」

「・・・ありがとうございます」

ネギさんはそう言って巻物を開く。

「ラカンさん！僕は・・・闇を選びます！！」

「ほ・・・ほっほー、こりや意外だぜ。けどぼーず、親父を目指すつてのはいいーのか？」

「僕は父さんじゃありません。格好だけ真似しても父さんにはなれない。・・・僕に闇の素養があるのなら・・・それを突き詰めることとしか父さんには辿り着けないと思うんです。それに僕・・・師匠のコトも大好きですから」

「プ・・・ワハハハハ！そりゃいいぜ、愛の告白だなぼーず！！」

「え！？いえ、そーゆー意味じゃ・・・？」

「フフ・・・闇を甘く見たなぼーず。その巻物・・・一度開けちまつた以上・・・キツイぜ？」

「・・・それもわかっています。この巻物が普通じゃないコト・・・覚悟の上です。乗り切ってみせますよ」

『言ツタナ餓鬼ガ』

「え・・・」

声が響き・・・巻物からエヴァさんが・・・いや、アレはエヴァさ

んじゃない。……なんにせよ、エヴァさんのようなものがネギさんの頭を掴む。

「ど、どういことだよ!?!」

「言つたる? キツイって」

「うわあああ!?!」

そのままネギさんは倒れこんだ……

「……くそっ! 熱が下がらねえ! オイツ、あの女何しやがった!?!
?つかどこ行った!?!」

苦しんでいるネギさんを千雨さんが看病している。

「あの女? エヴァもどきのコトか?……ありゃあエヴァの劣化コピー……人造霊だな。今頃ばーずの中だろうぜ。闇を使いこなせるようになるための試練だな」

ラカンさんは淡々と告げる。

「ぼーずがこの試練を乗り越えられなければ、二度と目を覚まさないか、少なくとも魔法を使えねえ身体になっちまうだろうな」

「なっ……そんな話聞いてねえぞ！知ってたんなら止めっ……」

「……千雨さん。楽しんで手に入れられる力はありません」

「ミンメイ嬢ちゃんの言う通りだな。マトモじゃない方法なんだ。これくらいは覚悟の上だろ？」

「……こそ！」

千雨さんはネギさんの看病を続ける。

「千雨さん、お手伝いします」

私はネギさんの方に歩き出した。

亮

「……っわっ！？」

「ぐっ!？」

俺と小太郎は吹き飛ばされる。

「小太郎!無事か？」

「何とかな!・・・にしても何やアイツは!？」

「知るか!俺達の攻撃が見切られてるなんて・・・」

「ふっふっふ・・・私には貴様らの戦闘パターンは全て入っている」

ロボットみたいな奴が言ってくる。・・・ウォーズマンみたいな奴だな。

「そして、そのデータを元にオレが先読みして攻撃を仕掛ける」

筋肉男が言う。・・・それと筋肉男はどうやら時間操作・・・極限まで俺達との時間差を開いて俺達に反応させない・・・なら、

「・・・下がれ小太郎!」

俺はケータイを取り出す。

「モーションキャプチャー!ガタック!」

ケータイが消えてガタックゼクターが飛んでくる。

「・・・変身!」

『ヘンシン』

仮面ライダーガタックに変身する。

「ガタックバルカン！」

肩に付いているバルカンで射撃するが・・・

「当たらねえよ！」

全て避けられる・・・なら、

「・・・キャストオフ！」

『キャストオフ』

身体の外装が弾け飛ぶ。

『チェンジ スタッグビートル』

素早くベルトの腰のボタンを叩く。

「クロックアップ！」

『クロックアップ』

時間の流れが変わる。

「ウオオオオ！！！」

肩のガタックダブルガリバーで斬りかかる。

ズガアアアッ！

「ぬおっ！？」

「その腕・・・貰った！」

ガリバーを合体させて鉄のような形にする。

「ライダーカッティング！」

『ライダーカッティング』

そのまま筋肉男の腕を断ち切る。

『クロックオーバー』

「うぎゃあああ！？」

男が片腕を押さえてのたうち回る。

「・・・次はお前だ！」

大丈夫だよな・・・コレ。

「ライダーキック！」

『1・・・2・・・3・・・ライダーキック』

「タアアアツ！」

助走を付けて跳びながら空中で回し蹴りを放つ。

ドガアアアンツ！！

「ぎゃあああ！？」

ロボットが吹っ飛んで壁にぶち当たる。

「よし・・・あ、大丈夫ですか？」

「む・・・仕方ない。勝負だからな・・・」

優しい声をかけてくれる。・・・汗だらだらで。

「亮兄ちゃん・・・エグイで・・・」

「あは、あははは・・・」

もう笑うしかない・・・

明命

「・・・かはっ！」

ネギさんが血を吐く。

「先生っ!？」

「ネギさん・・・!？」

「オイおっさん!血い吐きやがったぞ!!危険なのは頭の中だけじゃなかったのかよ!？」

「何?血を?ホントか?・・・そりゃよっぽど同調がいいんだな。闇に向いてるってのは間違いないかもだぜ。・・・しかしマズイかな」

「何で!？」

「下手すつとマジで死ぬ」

「っおおいつ!？」

「・・・!」

その間にもネギさんはどんどん出血が激しくなっていく。

「・・・ラカンさん」

「おう。コレを使いな」

ラカンさんはそう言って何かの葉っぱを取り出す。

「コレを磨り潰して傷に塗っやれば身体は大丈夫だぜチサメ嬢ちゃん、ミンメイ嬢ちゃん」

「な、私が！？何で！？」

「・・・千雨さん。やりましょう。・・・ネギさんに決意を決めさせたのは私達です」

「く・・・命のリスクまであると思わねーだろフツー！！デカイ選択肢だろうとは思ってたけどよ！」

「そりゃ甘く見たな。男の選択はいつだって命懸けだぜ」

「ラカンさん。男かどうかではなく、誰の選択も命懸けですよ」

「ぬ・・・確かに」

「んなこたどうでもいいんだよ！死んだらどうするんだよ！？ああ！？」

「ま、いいや。確かに死んだら終わりだしな・・・これを渡しとくぜ。もしあんたがどうしても無理だと判断したら、このナイフでエヴァの巻物を刺しな。闇の魔法は二度と使えなくなるがぼーずの命は助かるぜ」

「・・・！」

「……この判断は千雨さんに任せます」

「ハアッ!？」

「……正直ネギさんといった時期は千雨さんの方が長いです。……私が判断して良いのかは……」

「く……どいつもコイツも……!」

千雨さんはそう言いながら葉を磨り潰していく。

「……ラカンさん、葉を下さい」

「ん?おっ」

ラカンさんが差し出した葉を……一瞬で細切れにする。

「千雨さん。これで磨り潰しやすくなったと思います」

そのまま私は外に出る。……何となく千雨さんに任せただ方がいい気がした。

「ふう……」

私は外で刀を構えて集中する。

「……ラカンさんですか」

「お、やるじゃねえか。気配は消したつもりだったのよ」

私は刀を鞘に収めてラカンさんに向き直る。

「……何かご用ですか？」

「ん？いやなに、気まぐれだよ気まぐれ」

「そうですね……」

私は再び刀を構えようとするが……

「なあ嬢ちゃん。自分の力を知りたくねえか？」

「え……」

「確認させてやるよ。ほれ、必殺技持ってたんだろ？見せてみるや」

「ですが……」

「何だあ？俺様にビビって腰が引けちゃったのか軟弱だな？」

「……ッ」

その言葉に感化されて刀を構える。

「……行きます!」

私は走り出す。

「――闇夜を駆ける疾風のコンセツ一撃――!」

……全力で宝具を放つ……が、

「ふむふむ……こんなもんか」

「無傷……!?!」

服が斬れたただけだ。……そんな無茶苦茶な……

「中々筋はいいが……死ぬな」

「弱い……という意味ですか?」

「正直に言うと弱いな。……だけどまだまだ伸びる可能性はある
ぜ?」

「……ラカンさん。お願いがあるんですが……」

「なんだ?」

「私にも……鍛練をお願いします!」

「別にいいが・・・500万ドラクマだな」

「・・・出世払いをお願いします」

「く、ははは！いいな嬢ちゃん！・・・いいぜ、来な」

「・・・今私は思春殿に鍛練を受けた亮の気持ちができる。・・・少しでも強くなりたい。誰かを守りたい。」

「・・・ハアアツ！！」

私はラカンさんに向けて突撃した・・・

あれから二日の日が経った・・・

「ハアツ・・・ハアツ・・・！」

「・・・いや驚いたぜ。・・・2日ぶっ続けてこの俺様に挑んでくるなんてよ」

「私は・・・強く・・・なりたいんです！」

「そんな直ぐに強くなれるわきゃねえぞ？」

「それでも・・・止まりたくないんです！」

「でも、限界じゃねーか？フラフラだぜ？」

「・・・まだ・・・で・・・」

足から力が抜けて座り込んでしまう。

「・・・ほづら言わんこつちゃない。・・・さっさとぼーずの所に行きな。・・・今日の明け方がタイムリミットだぜ」

ラカンさんはそう言って歩いていく。

「・・・強・・・かった・・・」

最初に当てさせてもらった一撃以外一度も当たらなかった・・・

「亮・・・貴方は・・・」

この人に私を会わせたかった・・・？

「・・・行こう」

ネギさんの決意を見届けるために……！

「……千雨さん？」

「明、命……私……もう」

千雨さんがナイフを構える。

「……先生はまだ10才なんだ……こんなので……こんなとこで死んでいい訳がないんだよ……！」

千雨さんがナイフを振り上げる。……私は止めない。千雨さんに託しているから……

「ウアアアツ……！」

千雨さんが振り下ろしたナイフは……巻物に届かなかった。

「おはようございます。千雨さん、明命さん」

「な……」

「……！」

「もう、大丈夫です」

ネギさんが起きた。それだけで私達は涙が溢れる。

「……目覚めんならとつと目覚めろっつーんだこのアホガキッ！お約束みたくギリギリのギリで目覚めやがって！とんだ心の無駄遣いしちゃったじゃねーか！」

「ネギさん……よかったですね」

その後ラカンさんがやって来て暫く話し込む。

「……いずれにせよよくやったばーず！！これでようやくスター
トラインには立てたな！！」

そしてラカンさんに言われてネギさんが魔力を両腕に魔力を籠めると……

「これは……」

ネギさんの両腕に模様が浮かぶ。

「エヴァの『闇の魔法』を会得した証……お前がお前自身で手に入れたお前だけの力だ。誇りに思いな」

私は空を見上げる……そして、

「……ネギさん」

「何ですか？」

「……あの、融合した世界の終わり……咲さんを見ましたね？」

「は、はい……」

「……間に吞まれないください」

「……はい！」

「……ようし！んじゃ早速見せてもらおうか！」

「ハイ！」

「私もいきます！」

「……いやいやいや！？休めよ！？」

私達はラカンさんについていった……

闇の道（後書き）

咲

「いや、出番少ないな・・・」

亜子

「ま、まあ落ち込んだらアカンて」

岩沢

「別に出番なんか重要じゃないだろ？重要なのは自分のやりたいことをやる・・・だろ？」

咲

「いやいや、俺はこの小説だけの命だから・・・出番消えたら命も消えるから・・・」

亜子

「あはは・・・」

岩沢

「そんなもんかな・・・なあ、和泉・・・ガルデモとでこぴんロケツトで合同演奏しないか？」

亜子

「ええええ！？無理ですって！岩沢さん滅茶苦茶プロですよん！？」

岩沢

「何言ってるんだよ？音楽に上手い下手は関係ないぞ・・・大事ななのは気持ちだ・・・わかるか？」

亜子

「は、はぁ・・・」

岩沢

「・・・さ、行くつぜ。あたしはひと子達を呼んでくるから、お前は柿崎達を頼むぜ?」

亜子

「は、はいい!」

ガチャ バタン!

咲

「え!?!後書きは!?!俺だけ!?!マジで!?!」

亮

「・・・大変だな、アイツも・・・」

祭

「何じゃ？どつかしたのか？」

亮

「いや、ちよっと……」

祭

「……そんなことはどうでもいい。早く酒を飲みに行くぞ」

亮

「いやいや！俺未成年ですから！」

祭

「そんなの関係ないじゃろ！……ほれ、策殿や冥琳も来るのじゃからはようせい！」

亮

「うわあああ……」

咲

「うう……一人じゃどうしようもない……次回の真似と開閉と世界旅行！次回もまた見てください……やっぱり締めが微妙すぎるって……！」

白蓮

「……いいえいいえ、私なんて出番のない知らない子なんだから……」

マガリア・エレベア（前書き）

更新が遅くなってしまいましたすみません。・・・ではどうぞ。

マギア・エレベア

亮

俺達は拳闘大会の予選出場資格を手に入れ、空飛ぶ街、オスティアに来了。

「……でもくたびれたな」

「いくらなんでも普通の倍試合したら疲れるわな」

小太郎にそう言われる。

「……多分、ネギ達も来てるよな……」

「探すか？」

「……そうだな、さすがに予選は明命がないと……」

「予選は代え禁止やからな……ここで失格になったら最悪やで」

「だな……んじゃ、ちつと捜してくるわ。小太郎はそっちな」

「おっ」

「……でもさ、こんな人混みで特定の人物を捜すのは無理があるよね……」

誰に言ったわけでもなく呟く。……その時、

「……亮？」

声が聞こえた。俺は振り返る。

「……明命！」

「やっぱり亮ですー！」

明命が駆け寄ってくる。

「・・・何か気配が変わった？」

何となく明命の気が変わった気がする。

「・・・多分ラカンさんに稽古をしてもらったからだと・・・」

「ジャック・ラカンに！？大丈夫か明命？セクハラとか何か変なことされなかったか？」

「それは大丈夫ですけど・・・というより亮？何か興奮しているようです・・・」

「・・・あはは、やっぱり好きな人とは離れたくないものだなんて思ってた」

「りよ、亮！いきなりこんな街中で・・・」

明命が顔を赤くして手を振る。

「何を今更恥ずかしかってたんだよ。仮契約を迫ったのは明命のくせに」

「う・・・だって好きですから・・・」

指と指を合わせながらうつつ向いて言う明命。

「・・・ま、うん・・・なんだ・・・その」

「んで、いつまで私達はてめえらのラブコメを見てなくちゃいけないんだ？」

「ち、千雨!?!ネギまで!?!い、いつから・・・」

「え、と・・・最初からです・・・」

「うぐあうつええおおああ!?!」

恥ずかしさで頭を両手で抱えてジタバタする。

「く・・・さすがに誰かに聞かれてたら恥ずかしいぜ・・・」

とりあえず俺達はしばらく自由時間になった・・・

「……凄いですね……この世界は」

明命が言う。

「でもな……前にも言ったかもしれないけど泉の壁にも見せてやりたいよ」

俺は思春の髪止めの布を取り出す。

「そう、ですね……」

明命は亞莎の片眼鏡を取り出した。

「……よっし、飯食つか。奢るぞ?」

「……はい、行きましょー!」

俺達は近くの屋台を巡り回った。

「……恋さんは見つかってないのですか？」

「……ああ、あと夕映とアーニヤとハルナとカモネギが行方不明だな」

「大丈夫なんでしょうか……」

「大丈夫さ」

「・・・根拠はあるのですか？」

「知っているから。そうとしか言えないな」

「またそれですか・・・」

「おーい！」

その時、人混みからチビ朝倉が走ってきた。

「朝倉！来てたのか？」

「お久しぶりです！」

「それどころじゃないよ！急いで来て！」

「ど、どうしたんだよ？」

「宮崎達が賞金稼ぎ集団に襲われたんだ！今から助けに行くよ！」

「・・・りょーかい！！明命、行くぞ！！！」

「御意！！！」

俺達は走り出した・・・

咲

ズガガガッ！！

大量の魔法の矢が降り注ぐ。

「大丈夫か、嬢ちゃん！」

「ハ、ハイ！」

「どうだあクリス！サキ！」

「マズイねー。雨あられの魔法の矢攻撃だよ。しかも超遠距離！今までの雑魚賞金稼ぎとは違うね」

「・・・気配的には敵は三人・・・いや、四人だ・・・他にも気配がある」

『見えたわ!』

「アイシャ!」

念話でアイシャが話す。

『千里眼で敵の姿を捉えたわ。・・・距離3千。人数は見える範囲で4人・・・砂蟲っぽい魔獣も2体見えるわ。これは・・・マズイわね、あの黒衣姿・・・見たことがあるわ。シルチス亜大陸で名を挙げてる賞金稼ぎ結社、“黒い猟犬”(カニス・ニゲル)!!!』

「・・・こりゃ、逃げる用意をした方が・・・」

『キヤアツ!?!』

「アイシャ!? アイシャ!」

クリスが呼び掛けるが返事が返ってこない。

「おいリン! 無事か!?!」

『無事じゃない大ピンチ!』

「アイシャさんは!?!」

『捕まった!!』

「アイシャさんっ!!」

「出るな嬢ちゃんっ! 狙い撃ちされるぞ! 奴等の手だ!」

「・・・アイシャを助ける! 援護頼むよ二人とも!」

「お、おいクリス!!」

クリスが走り出してしまった。それに併せてクレイグも走り出す。

「チツ・・・のどか! そこで待ってる!」

俺はボードに乗って空から近づく。

「・・・うわっ!?!」

砂蟲が突っ込んでくる。

「く・・・邪魔すんな!」

空間から弓矢を取り出す。

「闇よ・・・貫けえ!!」

闇の力で矢を創り、放つ。

ズガアンッ!

「やったか・・・？」

グギヤアアッ！！

「っ・・・堅いな」

殆ど無傷だ。

ゴギヤアアッ！！

「しま・・・」

バキインッ！！

「うわあああ！？」

弾かれ、ボードから落下する。

「ぐ、があ・・・」

立ち上がる。だが、立ち上がった瞬間更に砂蟲に吹き飛ばされる。

「ぐあ・・・！？」

そして砂蟲の触手に拘束された。

「く……離せ！離せよ！！」

律儀に手まで固定されている。これじゃ空間すら開けない。見るとのどかも触手に拘束されていた。

「絶体絶命……なのか」

その時、

「雷鳴剣！！」

ズガアッ！

「な……」

キキンッ！

そして拘束されていた触手も斬られる。

「刹那さんっ！」

「のどかさん、助けに来ました！」

「刹那！久しぶりだな」

「……えっと……」

「・・・まさか、俺を忘れたんじゃない？・・・楓は判るよな？」

刹那とやって来た楓に聞いてみる。

「・・・もしかして、咲殿でござるか？」

「さっすが楓！」

「え！？咲さんですか？・・・変わりましたね」

「・・・そんなに変わった？」

確かに背が伸びて髪も下手したら女ぐらいだし・・・切るのがめんどいからな・・・

「・・・はっ！ダメです刹那さんッ！これはわ・・・にゃ！？きゃああっ！？」

のどかが魔族の腕に掴まれる。

「ふふふ・・・せつかくの人質、簡単には返してやれないな」

「貴様等アツ！」

「まあ落ち着きたまえ。・・・君達は我々に感謝した方がいいとおもっかね。これから君達が味わう攻撃にこの子は耐えられないだろうから・・・ね」

そう言ってソイツは何かを取り出した。

「転移魔法符!!?」

敵が消えた・・・瞬間、足元にデカイ魔方陣が現れる。

「これは・・・戦術広域魔方陣!!」

「畏かつ!?!」

「刹那! 楓! 俺の傍に!!」

俺は魔力を集中させる。

「バリア全開!!」

ガガアアンツ!!

「ぐ・・・うう・・・!!」

ピシッ

バリアにひびが入る。

「マズ・・・!」

だがバリアが碎けるよりも早く、雷が消えた。・・・そこに立っていたのは・・・

「アスナ!」

「・・・誰?」

「お前もかい！咲だよ！五十嵐咲！」

「ええ！？かなり見た目変わってるじゃん！」

「好きで変わったわけじゃねーやい！」

背が伸びたのは嬉しいけど。．．．恋に再開して「．．．だれ？」とか言われたら泣くぞ。．．．そんな話をしてる内に、何か黒いネギが敵を圧倒していた。

「．．．闇の魔法か！」

俺はすぐに力を籠める。

「久々にやってみるか．．．ハアアアツ！！！」

闇の力を解放してDモードになる。

「行ってくる！」

俺は敵に向けて跳んだ。

「雷の暴風」スタグネット 固定!!!コンプレクサードメントウム・プロ 掌握魔力充愼アルマテイオーネ ……アギリタース・フルミニス 術式兵装『疾風迅雷』
!?!?!」

そしてネギは詠唱しながら空高く跳び……雷の槍を投げた。

ズダンッ!

砂蟲がそれで両断される。

「……流石ネギだな」

「……?もしかして咲さんですか?」

「せーかいだ。……積もる話もあるが……いくか」

「……はい」

俺達は同時に突っ込み、俺はソウルイーターを、ネギは拳を叩き込む。

ドムッ!!

「ぐ……」

これで合わせて三人潰れた。……あと一人だ。

「ネギ!行け!……ダークファイガッ!!!」

雨のように炎を撃ちだし、その隙にネギが迫り……

デクストラ・エミッタム
「右腕解放!!」

ガキヤアアツ!!

……莫大な魔力によって敵は沈黙した……

「・・・アイシャ、クリス、クレイグ、リン、無事か？」

「ああ。サキは？」

「問題はないさ。そっちの方がダメージでかいだろ？」

「こっちも大丈夫よ」

「結構痛かったけどね」

「平気だ」

「そ、・・・しっかしまあ」

俺は振り返る。そこには大量のクラスメイトがいた。

「・・・沢山いるんだからな・・・って亮!？」

「え？・・・まさか咲か？」

「何で皆断言出来ないんだよ・・・」

「だってさ、まるで女だぞお前」

俺は髪を掴む。

「仕方ないだろ？ハサミなんてないんだし、気がついたらこんな伸びてたんだよ」

「ふん・・・しかも背まで伸びてるし・・・」

「ああ。それはマジで感謝だな」

「・・・あのさ・・・まさか咲君なの？」

「ハルナ・・・お前もか・・・」

ハルナがやって来て言った。

「ビックリしたな、ハルナがこんなデカイ飛行船を持ってきた時は」

「そうですね」

「お、明命はそのまんまなんだな」

「はい。・・・咲、さん・・・？」

「もういいから！何か嫌みに聞こえてくんだよ！..」

そして俺はネギに近づく。

「ネギ」

「咲さん」

「・・・闇を選んだのか？」

「ハイ。一度決めた道です。・・・僕は勝ちたいんです」

「そう、か・・・一応聞いておくけど、身体が疼いたりしないか？」

「え・・・あ、ありませんよ」

「・・・ホントだな？嘘はつくなよな・・・」

俺はふと気がついて亮に聞く。

「なあ亮・・・恋は・・・」

「・・・」

亮は無言で首を振る。

「そうか・・・大丈夫、だよな・・・」

「信じてないのか？」

「信じてるぞ。・・・家族、だから・・・」

俺達はハルナが買った飛行船に乗り込んでいった・・・

マギア・エレベア（後書き）

亮

「つーわけで今回はNEWな俺達だ」

咲

「髪ウザいんだよね・・・」

亮

「ま、俺は目に掛かる程度だからな。・・・お前は・・・」

咲

「前髪は蓮華みたいにシャキツとしてるけど後ろ髪は背中まであるからな・・・」

亮

「お前男の娘になったのか」

咲

「・・・今スツゲエお前に殺意湧き出たんだけど」

亮

「冗談だから ブレードをしまえ」

咲

「・・・切るっかな・・・」

亮

「そんで加減を間違えておかつぱに・・・すみませんマジ調子乗っ

てましたから闇の吹雪は止めてください」

咲

「マジで切るう……」

亮

「でもさ、マジ話で作者がしようと思わないと髪切れないぞ？」

咲

「く……やはり俺達の敵は作者なのか……！」

亮

「え……まあ、今回はここまで」

咲

「次回の真似と開閉と世界旅行！」

亮

「次回もまた見てください！」

咲

「それではまた次回」

衝撃（前書き）

警策って痛いんですね・・・ではどうぞ。

衝撃

「……だけどよく買えたなこんなデカイ船」

俺は素直な感想をハルナに言う。

「まあね。私の才能で一稼ぎしちゃってね」

「ホントに中古かこれ？」

咲もそう言う。

「……しかし、ホントに咲アルか？なんか別人アルよ」

「もう止めてくれ……！気にしてるんだから……」

「んー、ならせめてコレで髪を留めればいいでござるよ」

楓が咲に髪留めを渡した。

「……これでいいかな？」

咲が楓を真似して後ろ髪を一本に纏める。

「……根本的な解決にはなっていないな」

「じゃあどうすりゃいいんだよー！」

「我慢しろ」

「く……」

咲はしぶしぶ退いた。

「でも久しぶりアルな」

「そうですね。……いきなり消えてしまいましたから」

刹那がそう言った。

「悪いな、勝手に消えて。……ま、今度はちゃんとこの物語を終わらせるよ」

「……いつまでですか？……この物語は……」

「……言いくいけど、俺達の世界だとまだこの物語は終わっていないんだ」

「つまり、俺達は途中から完全に物語に対応できなくなる」

「……構いません」

ネギがやって来た。

「僕達の物語は僕達が歩みます。……亮さん達も僕達と一緒に歩んでください。この物語が終わるまで……」

「……ああ、わかってる」

「・・・皆さん、ご飯ができましたよ！」

明命が皿を持ってきて皆に言う。

「え？明命さんって料理できるんですか？」

「ハイ！祭様・・・黄蓋様に教わったり遠坂様に教わったり・・・」

恋姫の世界を見せたことがあるメンバーはなるほどと言った顔をしていた。

「・・・さて、Fateの世界はほぼ毎日が戦いだっただけなんだが・・・いつそんな暇が・・・」

「・・・右腕が使えない間暇でしたから・・・」

「ああ、そう・・・」

そうしてる内に皆食べ始めていた。

「ウマイ！」

「ふむ、見事な味付けでござるな」

「美味しいです」

「・・・明命にこんな才能があったとは・・・」

皆それぞれ感想を口にする。俺は青椒肉絲を口に運ぶ。

「……うまい」

「ホントですか!?!」

明命が身を乗り出して聞いてくる。

「うん、最高。……これならもっと早く食べたかったかな」

「はうう……言ってくださればいつでもお作りしましたのに」

「そうなのか?……ちえ、惜しいことしたな……」

「亮……」

「……てめーらイチヤイチャすんのは場所を選べええええ!!!!」

咲に怒鳴られた。……確かに恥ずかしいな。

「……そろそろ着きますよー」

茶々丸が教えてくれた。

そしてオステイアに着いていきなりアスナがネギに詰め寄って色々揉めたが、千雨のお陰で事なきを得た。

上空

「・・・ユエ、もう少しでオスティアに着くよ？」

「ス、スミマセンが、この騎士団正装のサイズが合わなくて・・・」

「・・・大丈夫？」

「あ、レンは着れたんだ？」

「……………(コクッ)」

「ですが良かったですね。レンも戦乙女騎士団に入れて……………」

「……………学園長のお陰」

「だよ。まさか推薦枠があつたなんて……………」

「……………これで咲を捜せる」

「……………見つかるといいですね」

「……………(コクッ)」

亮

そして俺達は……

「威掛法、出力最大！」

「——闇夜を駆ける疾風の^{コンセツ}一撃——！！！」

ズガアアアンツ！！

『……コウ八選手とヨウヘイ選手の勝利————ッ！』

「……明命、強くなったな」

俺は鈴音を軽く回して腰に収める。

「いえ、亮も上達していますよ」

そして通路を歩いていたら時、誰かにぶつかる。

「わっ、と……すみません」

「あ、こちらこそ……」

「……ってあれ？祐奈とまき絵か？」

「え？・・・もしかして・・・亮、君？」

「あー！明命ちゃんもいる！」

「お久しぶりです、まき絵さん、祐奈さん」

「ふーん・・・亮君も魔法使いだったんだ」

まき絵が言う。

「ま、ね。ついでに咲と恋も関係者だよ」

「おかしいと思ってたんだよ、何で男子が女子校に来てるのかなー
って」

「普通は誰でもおかしいと思うけどな・・・」

「でも楽しいから特には疑問に思わなかったんだよね」

「いやそこは疑問に思えよ・・・」

そんな会話をしたら・・・

「おーい亮ー！」

咲が走ってくる。

「・・・ってあれ？祐奈にまき絵？」

「「・・・誰？」」

その言葉を聞いて咲は通路の端に座り込んだ。

「いいんだいいんだ・・・俺は所詮その程度の存在感なんだ・・・」

あ、いじけた。

「・・・咲だよ」

「「ええええええええええ！？」」

「やはり驚きますよね・・・」

「「・・・」」

そして二人は咲をガン見する。

「な、なんだよ・・・」

「咲君・・・その髪・・・」

「男の子なのに・・・サラサラ・・・」

二人は咲の髪を触る。

「あ、コラ！触るな、引っ張るな〜！亮！見てないで助けるよ！」

「無理」

「早ッ!？」

見ててもいいんだが、仕方ないので助け船を出す。

「・・・二人とも、昼飯は食べた？」

「いや、まだだよ？」

「じゃあ行つてこいよ。ここ安いし」

「うん、分かったよ。それじゃまた後でね」

二人は歩いていった。

「・・・大変でしたね」

「まったくだ・・・ってそれどころじゃない!大変だ亮!」

咲が焦りながら言う。

「・・・どうしたんだ？」

「フェイトが・・・フェイト・アーウェルンクスが現れた!」

それを聞いて俺と明命は走り出した。

「・・・何だアレは!？」

空から無数の柱が降ってきていた。

「く・・・咲! 明命を連れて柱の破壊! 俺は直接ネギの所に向かう!」

「了解！乗れ、明命！」

「はい！」

咲がボードで飛んでいく。

「・・・ツ・・・始まった・・・！」

あちこちから戦闘の音が聞こえてくる。

「急がないと・・・ツ!？」

悪寒を感じて反射的に鈴音を後ろに振る。

カキヤアンツ!

「ぐわっ!？」

構えが不完全だったため吹っ飛ばされる。

「ぐう……」

……この太刀筋……どこかで……

「誰、だ……ッ!？」

そこに立っていたのは……この世界にいない筈の人間。そもそも予想はしていた。思春や亞莎が来たのなら、彼女が来てもおかしくはないんだ……ソレは、ソイツは……

「……亮」

「蓮、華……」

自身が忠誠を誓った主がそこにいた……

衝撃（後書き）

桜

「また急展開ですね」

亞莎

「そうですね、どうなるのでしょうか・・・」

咲

「つーか今回のメンバーの選定基準は何なんだろーな」

セイバー

「・・・私には解りかねますが・・・」

亞莎

「・・・もしかして」

全員

「・・・？」

亞莎

「この本編と原作で闇堕ちした人・・・」

咲

「そう言えば・・・そうだな・・・あれ？ネギは？」

桜

「姉さんに魔術を教えてもらっていたような・・・」

セイバー

「あの少年は天才です。あの成長速度は見ていてとても頼もしい」

亞莎

「そうなんですか？・・・でも、やっぱり・・・」

桜

「何ですか？」

亞莎

「今更なんですけど・・・咲さん・・・ですよっ」

咲（Dモード）

「いい加減にしてくれるかな・・・」

セイバー

「な、なんと禍々しい魔力・・・」

桜

「・・・怖い・・・」

亞莎

「ひっ・・・じ、次回の真似と開閉と世界旅行！」

桜

「次回もまた見てくださいね」

セイバー

「それではまた次回会いましょう」

咲

「亞莎……ちよーっとなっちにおいで……」

亞莎

「い、いや、た、助けてください……!」

困惑（前書き）

端折りすぎたかなー・・・ではどうぞ。

困惑

咲

「・・・飛ばすぞ！しっかり掴まってる！」

「はい！」

その時、柱の大半が消える。

「・・・アスナか！」

だがまだ柱は残っている。

「私にお任せください！」

明命が刀に魔力を溜め、放つ。

ズガガガガッ！！

その見えない力は柱を完全に分解した。

「お、おお・・・柱が雪みたいに舞っていく・・・」

「・・・咲さん！」

明命が叫び、俺は詠唱を素早く終わらせる。

「来れ（エビゲネーター）とこしえのやみ（タイオーニオン）

エレボス）えいえんのひょうが（ハイオーニエ・クリユスタレ）！
「

柱が凍りつく。俺はそのまま詠唱を続ける。・・・そして、エヴァのように指を鳴らし・・・

「・・・おわるせかい（コズミケー・カタストロフエー）！！」

パキヤアアンツ！！

こっちの方が雪みたいだった。

「・・・さすがですね。エヴァさんとの修行の成果ですか？」

「まあね。俺はどちらかと言えば闇の方が得意だけどな」

ついでと言ってエヴァは氷系統も教えてくれたんだよな・・・

「・・・この調子で破壊していくぜ！」

「御意！」

亮

「蓮華……」

「……」

蓮華はゆっくりと南海霸王を構える。

「ッ！……止め……」

「アアアアア！！」

振り下ろされる一撃を鈴音で受け止める。

ガキヤアン！

「ぐ……」

「ワアアアツ！」

蓮華の手は止まらない。

カキインツ！

ガキヤツ！

キキキンッ！

「止める……止めてくれ……！」

「ヤアアッ！」

ズガアアンッ！

力任せにぶっ飛ばされる。

「が……！」

「りょ、う……」

同じだ……思春と亞莎と……冷汗を流しながら必死に身体を止めようとしている。

「蓮華……！」

蓮華は荒い息をしながらも、何かを言う。

「亮……」

蓮華が足下から消え始める。

「私を……倒して……」

そして蓮華は消えた。転移魔法か……？俺はしばらくその場に立ち尽くしていた……が、

「亮ーッ！」

咲と明命が空からやって来た。

「亮！警備兵が来ます！逃げましょう！」

「……ああ……」

「……何ボーツとしてんだよ！急ぐぞ！」

咲に促されて俺はハルナの船に急いだ……

そして船にたどり着き……近場の浮遊岩で全員降りた。

「えー、と、言う訳で、僕達『白き翼』アラアルバは本日午後1時を以て」

ネギが宣言する。

「世界滅亡を企む謎の組織『完全なる世界』コスモエンテレケイア 残党と戦うことになつてしまいました!!」

俺は……一人その騒がしさから離れる。

「蓮華……」

于吉、もしくは左慈が完全に消滅していなかったのか……それとも別の誰かが犯人なのかは解らないが、たった一つ解っている事がある。それは蓮華が敵だと言うこと。

「……くそ!」

その時、咲が近づいてくる。

「……何か用か?」

「いや……何かあったのかなって思ってた」

「別に……」

「嘘つくなよ。……お前はすぐ態度に出るんだからな」

俺はため息を吐く。

「……はあ、お前には敵わないよ。……話してもいいけど、他言無用な」

「……ああ」

俺は息を吸って簡単にまとめて言う。

「蓮華が敵として現れた」

「……!」

咲は啞然とする。

「この事は誰にも……特に明命には絶対に言わないでくれ」

「……お前……」

「俺がケリをつける。……もう明命に仲間殺しをさせたくない」

「でも実際に死ぬわけじゃ……」

「だが斬った感触は残る。……俺も、思春を斬った……人を殺した感触を今も覚えている」

「だが・・・」

「それに明命はあんな性格だ・・・俺を一人で戦わせるようなことはしない」

「・・・でも」

「お前だから言ったんだ・・・頼む」

「・・・ッ」

咲はそれきり黙ってしまふ。

「亮さん！」

刹那がやって来た。

「・・・どうした？」

「今からラカン殿が昔の映像を見せてくれるみたいですが・・・」

「・・・俺は遠慮しておくよ。・・・少し、一人になりたいんだ・・・」

ようはネギの親・・・ナギがどんな活躍をしたのかを見るだけだしな・・・刹那が何か言おうとするが、咲に止められてそのまま二人とも戻っていった・・・

それから翌日……

「……まさか温泉とは……」

オステイアに着いて俺達は温泉に入っていた。まさかこんな広い温泉があるとは……

「旦那、旦那」

カモネギが話しかけてくる……って、

「お前いつの間に合流したんだ」

「気づいてなかったんですかい!？」

「……んで？」

「おっと・・・どっつすか？！ っちょ覗きでも・・・」

「やだ」

「な、なんで・・・」

「・・・後が怖いし・・・ああそっそっ」

俺はカモネギを驚掴みにする。

「もし明命を覗いたら・・・今度から呼ぶときカモとネギになるかな」

「真っ二つ!？」

そして時は流れて、俺達は闘技場にいた。

『さあ予選最終戦! どちらが本戦に出場できるのかーッ!？』

「・・・明命、下がってくれ」

「え……?」

「……俺に任せてくれ」

明命は頷くと後ろに跳ぶ。そして俺は左手を空高く突き上げる。

「来れ、呉の若き誇りよ、ここに集いて呉王の力を呼び覚ませ」
武器が融合して槍になる。

「……吼えろ!刺天猛虎!」

文台さん……教えてくれ……

「ウオオオ!!!」

俺は……どうすればいい……?

「……」

「亮!待ってください!」

明命が走ってくる。

「どうかしたのですか？先程も太刀筋がかなり荒れていて・・・」

「・・・何でもないよ」

「嘘です！亮、何を隠して・・・」

「何でもないって言ってるだろ！！」

「う・・・」

俺はハツとなる。

「・・・ゴメン、調子が悪いみたいだから・・・それじゃあ」

「あ・・・」

俺は明命の視界から消えたのを確認してから、思いっきり壁を殴った。

「くそっ・・・最低だ・・・俺・・・」

明命に当たるなんて・・・

「・・・亮君？どうしたの？」

アキラが近づいて、俺の左手を見た。

「・・・ッ！血が出てる・・・」

「あ、大した怪我じゃないから・・・」

「ダメだよ。菌が入ったら大変だし・・・」

人解を外して壁を殴ったせいか拳から血が流れていた。

「・・・はい、出来たよ」

「・・・悪いな」

「・・・ねえ、亮君？」

「・・・何？」

「・・・何か悩んでない？」

俺は目を見開く。

「それ、は・・・」

「無理に話さなくてもいいよ。誰にだって悩みごとはあるだろうし・

「．．けど」

アキラが続けて言う。

「一人で悩み込んだじゃダメだよ．．．亮君には相談できる人がいるから．．．」

「でも．．．ソイツには．．．話したくは．．．」

「亮君はその人を信じていないの？」

「．．．ツ！」

俺はドキツとする。

「もしそれがその人にとって大変な事でも．．．たった一人で悩むのは違う．．．って私が言えたことじゃないか．．．」

「いや．．．ありがとう．．．少し考えてみる」

俺はアキラに礼を言ってから自室へ戻っていった．．．

「……んで？」

部屋に入った瞬間、咲が聞いてくる。

「……ああ、覚悟は決めた。……だけど今は目の前の事を片付けてからだ。……そして、大会が終わったら……明命に話す」

「そうか……」

「……そういや咲、恋は……」

「……ダメだ。昨日念話も試したけど妨害か、ただ単に範囲外なのかは解らないけど……通じなかった」

「・・・ま、恋ならのらりくらりやってるだろ」

「当たり前だ。アイツはずっと・・・月の所に行く前、ずっと一人でやってきたんだ。・・・大丈夫、なんだ・・・」

それでも咲の目からは不安の色が浮かんだままだった。

「・・・そつだ亮。少し気になったんだが・・・」

「・・・何だ？」

「何でお前の大切な仲間ばかり呼ばれるんだ？・・・俺は誰も・・・」

「・・・そつだ。何でだ？」

「・・・まるで亮を追い込んでるような・・・」

「・・・俺を追い詰めて何になるんだよ？」

咲は右手に闇を発生させる。

「亮を闇に落とす・・・とか？」

「んなバカな。・・・だったら闇化できるキャラを呼んで俺を闇に染めればいいだけだろ？」

「うーん・・・」

「・・・ま、悩んでいてもしょうがない。俺はもう寝るよ」

「そう、だな・・・」

俺達は寝ることにした・・・

困惑（後書き）

大山

「うっわぁ！この後はどうなるんだろう！」

白蓮

「お、おい大山・・・なんでそんなにはしゃいでるんだ？」

大山

「だって僕らは地味なんだからテンション上げていかないよ」あれ？あんなキャラ居たっけ？」とか言われちゃうよ？」

白蓮

「う・・・それは嫌だな・・・」

桃香

「大丈夫だよ白蓮ちゃん！白蓮ちゃんも魅力はあるから！」

藤巻

「そうだぜ大山。お前に比べたら俺の方が地味だぜ・・・」

白蓮

「そうは言ってもな、巨乳、天然、姉とか属性の塊の桃香に言われると逆に傷つくんだよな・・・」

大山

「大丈夫だよ藤巻君！藤巻君には長ドスという特徴があるじゃない！それにAngel Beats本編じゃそれなりに発言回数は多

「かったよ！」

藤巻

「そ、そうか、そうだよな・・・へへ、自信持てたぜ、サンキューな、大山！」

桃香

「そ、そんな・・・私より胸大きい人たくさんいるし、天然な人もいるし、姉属性だってどっちかっていうと愛紗ちゃんの方がお姉ちゃんっぽいし・・・」

白蓮

「馬鹿、世の中にはな、ギャップ萌えがあるって北郷の奴が言ってたぞ！」

藤巻

「・・・冷静に考えたら北郷ってスゲーよな」

大山

「うん・・・二股以上してるのに許される人柄・・・憧れるよ」

桃香

「ご主人様はちゃんと女の子を大切にしてくれるからね」

大山

「・・・北郷君って結構恨まれそうだよね・・・」

白蓮

「主人公補正つてやつだろ？」

藤巻

「・・・音無の野郎は天使一択みただけだな」

大山

「あはは・・・それじゃあ次回の真似と開閉と世界旅行！」

桃香

「次回もまた見てね」

激突〜（前書き）

オリジナルが混じっております・・・ではございませぬ。

激突

あれからしばらく・・・俺と明命は決勝トーナメントへの出場を決定させた。

「・・・あのさ、明命」

「・・・は、はい・・・何でしょうか・・・」

俺は思いっきり頭を下げる。

「この前はゴメン！少し不安定になってたんだ。・・・もう大丈夫だ」

「・・・そうですか・・・」

「それで・・・この決勝トーナメントを終わらせたら必ずお前にも話す。・・・だから今は何も聞かないでくれ」

「・・・わかりました、亮を信じます」

「ありがとう・・・明命」

明命は笑顔で答えてくれた。

戦乙女

「凄い人ばかりですね。一体・・・？」

「なぬ？じゃ、ユエわかってなかったの？この警備シフトの役得を
！」

「・・・役得？」

恋はコレットに聞く。

「今から予選を突破した生ナギの出るトーナメント表が発表される
んだよ！」

「トーナメント表・・・？」

「・・・大会」

恋はナギについては知っていた。・・・だが、ナギがネギだということには気づいていない。・・・そしてトーナメント表が発表される。

「おおっこれは・・・」

「決勝で当たるコトになるね！」

「な、何がです？」

「・・・誰が？」

「相変わらずニブイですね。ユエさん、レンさん」

エミリイがやって来て言った。

「それはつまり！！」『紅き翼』アラレルフ伝説の英雄の一人、ラカン様と！ナギ様の生まれ変わり、ナギ選手との運命的、奇跡の一戦！！」

だが恋の興味を惹いたのは別の名前だ。そこに書いてあるのは、漢字で甘 興覇と周 幼平と書かれていた。

「・・・思春、明命・・・？」

「・・・レン、警備に行くですよ」

「・・・わかった」

気にはなつたが迷惑をかけるわけにもいかないのので、恋はその場を離れた・・・

亮

「……まったく……」

「予想外でしたね……」

俺と明命は頭を抱えていた……何故なら……

「ラカン（さん）が大会に参加するなんて……」

そう、あのジャック・ラカンがネギの腕をぶっ飛ばしたカゲタロウと組んで予選を通過したのだ。

「ですが私達はネギさん達とも当たりますよ」

「……だな。……ま、やれるところまでやってくれ」

「……はい」

コンコン

扉が叩かれる？

「……はい？」

「……俺だ、咲だ」

咲が入ってくる。

「……どうかしたのですか？」

「ん？ちよつとネギの所に行かないか？」

「……そうだな」

原作は……確か……

そして街から離れた岩礁地帯に向かい、そこで見たのは……たくさんの人。

「……咲達か」

そう言って来たのは……って、

「「エヴァ!?!」」

俺達は驚く。

「あ、違いますよ亮。このエヴァさんは本物じゃありません」

明命がそう言った。・・・えーと、巻物のエヴァもどき・・・だっけかな？

「・・・んじゃそちらの三人は？」

俺は見慣れない三人に向けて言う。

「亮君知らないの？この人はヘラス帝国第三皇女の・・・」

「テオドラじゃ。テオで良いぞ」

「そしてこつちが・・・」

「俺様はあケチな政治家やってるリカードってもんよ！」

「私はアリアドネー騎士団総長、セラスよ」

めっっちゃ有名人でした。

「・・・あー！あの映画に出てた・・・！」

咲が声を出す。・・・やっぱ見れば良かった・・・

「・・・っーかコレって・・・」

俺はそこに置かれていたモノを見る。

「師匠のと同じです。ここで特訓すればラカンさんとの試合までの

3日間を30日間に延ばせます」

俺は、俺と明命はその言葉に引っかかる。

「……へえ、途中で当たる俺達は大した障害じゃないってか？」

「……ハイ。僕は優勝を狙っています。……なら、重要なのは決勝戦でしょう？」

それはネギにしては珍しい挑発。……実は俺は嬉しかったりする。……あのネギがこういう事を言えるようになったのを。

「……わかりました。ですが特訓は30日も要りません。20日で充分です」

「……何故ですか？明命さん」

「私と亮が明後日の試合で勝つからです。……負けたらこの特訓は必要ないですよね？」

……まさか明命まで言うとは……咲に至っては二人の言い合いを楽しんでいた。

「……じゃ、俺達も……」

許可をとって俺達も鍛練を始める。

「ハアアツ！」

「ヤアアツ！」

咲のキーブレードを人解で受け止める。きっと戦いは鈴音を使つより人解での拳の方が早い。

「……隙あり」

咲が左手を向ける。

「闇の吹雪」
ニウイス・テンベスターズ・オブスクランス

ズガアアツッ！

「グワアアアツ！？」

そのまま地面に叩きつけられた。

「……悪い、大丈夫か？」

「……ネギと戦う前にお前に戦闘不能にされるかと思ったよ」

俺は跳ね起きで立ち上がる。

「……お主は既に身体が出来ておるから筋トレの必要がないのう・
」

「……そう？テオは魔法とかは……」

「それはセラスの方が専売特許じゃからの。……ホントに出番が
少ない……」

テオと話していると祭さんを思い出す。

「……次は貴方の番よ」

セラスがやって来る。その横には明命がいる。

「……よし、じゃあお願いしますか、セラス先生？」

俺はセラスの横に立つ。

「貴方は魔法はどれくらい使えるの？」

「基本魔法と身体強化。それと・・・」

咸掛法を発動させる。

「・・・この咸掛法くらいかな？」

「・・・咸掛法が使えるのは流石ね。・・・だけどまだ練りが甘いわ」

「・・・これでも上達した方なんだけどな・・・」

「・・・なら教えてあげるわ」

そして魔力と同時に気の練り方も教えてもらい、次はリカードだ。明命は体術使いではないので、セラスに効率のいい魔力の扱い方を教わったりしていた。

「オラオラアツ！もう終わりかアツ！？」

ラリアットで吹き飛ばされる。

「がふっ！？」

強・・・滅茶苦茶な人間多すぎだっの・・・

「・・・明命」

「・・・あ、何ですか？」

刀を構えて集中していた明命が振り返る。

「いや・・・いよいよ明日だなと思ってな」

「・・・そうですね」

俺は明命に言う。

「明命、力が欲しくないか？」

俺は唯一明命に教えられる事を教えた・・・

『さあ決勝戦を賭けた大切な試合！伝説の英雄、ジャック・ラカンに挑むのはどちらのコンビだーーーーッ!?』

「……明命、お前はネギとやれ」

「え……」

「ネギの選択を見届けたんだろ？ならその成果も見てやれよ」

「……はい！」

『それでは、試合開始ーーーーッ!!!!!!』

どうやら彼方も決めていたようで、小太郎が真っ直ぐ突っ込んで来た。

「咸掛法……最大！」

気と魔力を合成する。……セラスのお陰で出力は倍以上になっている。

「タアアアッ！」

「オラアアッ！」

拳と拳が激突した・・・

明命

私は魂切をゆっくり構え、気配を消す。

「・・・ッ！」

ネギさんが息を飲む。・・・やはりネギさんは成長している。これは思春殿とやっていた鍛練。相手が隙を見せるまでこちらは動かない。・・・普通の人間だったら痺れを切らして突っ込んで来て・・・死ぬ。

「・・・」

「・・・」

私達はお互い見つめあったまま動かない、いや、動けない。

「・・・ふう」

「・・・！」

ネギさんが息を吐いた一瞬に間合いを詰める。

「な・・・」

「ハアアッ！」

ビュンッ！

放った一閃はギリギリでかわされる。

「今のを避けるなんて・・・！」

ネギさんは体制を立て直して拳を繰り出してくる。

「ヤッ！」

ネギさんの拳を空いた手で弾いた・・・かと思ったら私の腕に巻き付き、完全に決まった。

「（折られる！）」

咄嗟に腕の関節を外して、拘束が緩んだ瞬間、蹴りで距離を開く。

「うう・・・今のは決まったと思いましたが・・・」

私はすぐに関節を填める。

「・・・そんな簡単には負けませんよ、ネ・・・ナギさん」
中継されている以上本名は言わない方がいいだろう。

「・・・僕も本気でいきます！コンクッコンクッ掌握！」

詠唱を一瞬で終わらせたネギさんがマギア・エレベアを使う。

「・・・ッ！！」

ネギさんが一瞬で後ろに回り込む。

「く・・・！？」

魂切で拳を弾く。

「（速い・・・けど！）」

まだ反応できる。型は疾風迅雷・・・つまり素早さに特化させている。

「まだまだです！」

ネギさんの速度が上昇する。

「ぐう・・・！？」

そして拳が腹部に直撃する。

ズンッ！

「が……!」

私は結界まで吹っ飛ばされる。

「う、うう……」

何とか立ち上がる。あと少し障壁が遅れたら私の身体はボロボロになっただろう。

「……なら」

私も新たな手札を切るだけだ。

「……ふうう……」

自分を無にする。

「……左腕に魔力、右腕に気……」

二つの力を……

「合成!!!! 咸掛法!!!!」

身体に力がみなぎる。

「……まさか、明命さんまで使えるなんて……」

「これでもまだネギさんには届いてないのかもしれないかも。……
ですが私は止まりません……もう、二度と！」

「……流石です、明命さん。……もしかしたら意志の強さでは
明命さんの方が上かもしれませぬね」

「……いえ、強い意志は人の力になります。その闇の魔法を選ん
だ意志はかなりの強さになっているはずです」

そう言っつて私達は構える。

「……ウアアアツ！」

「ヤアアアツ！」

お互いに素早く攻撃している。……例えるならそれは嵐。目まぐ
るしい戦いが続く。

「ハアアアアツ！！」

「タアアアツ！」

拳と刀が弾きあう。

亮

「ウラアッ！」

「トアッ！」

俺は蹴りを、小太郎は拳を繰り出す。

「……あちらも盛り上がるとし、こっちもいくでー！」

小太郎の腕が黒く変色する。

「狗音爆碎拳！」

「ウワアアアッ!？」

咄嗟にガードしたが簡単に打ち破られる。

「チッ……やる……」

「亮兄ちゃんも必殺技を考えたらどうや？」

「必殺技……ねえ」

必殺技・・・よし、俺の誇り・・・呉の誇りを再現するような・・・

「・・・よし！思いついた！」

「早あつ！？ホントは前から考えとつたやろ！」

「・・・ああ、使えたらいいなーと思つてたんだ」

俺は龍騎のファイナルベントのような構えを取る。

「ハッ！ハアアア・・・」

今の威掛法の密度なら・・・やれる！

「・・・へへ、随分と威力がありそうやないか」

力を操り、空中にまるで虎がいるような錯覚に・・・いや、錯覚じゃない。俺が造り出した力が虎を生み出した。

「必殺・・・猛虎獣衝撃！！」

腕を振ると虎が吼え、小太郎に向かっていく。

「・・・ツ！」

「いつけええええええ！！！！」

ズガアアンツ！！！！

予想以上の威力だ。セラスに魔力とかの練り方、リカードに気の上昇とかを教えてもらったお陰だろう。

「・・・やったか？」

俺は少し近づいていく。

「・・・アカン、獣化しとらんかったらバラバラやったわ」
小太郎が背後に回り込む。

ズガガガガッ！

「ぐう！」

やっぱり一筋縄じゃいかないか・・・！

明命

デクストラー・エーミッタム
「右腕解放！・・・桜華崩拳！！」

「きゃああっ！？」

魂切で防ぐが魂切ごと弾かれる。

「もらった!」

ネギさんが回り込んで拳を放つ・・・が、

「来れ(アデアット)!!」

直ぐに南海霸王を取り出して防ぐ。

「まだ終わりません・・・!」

そう言ったとき、剣が震え出した。

「うわっ!?!」

亮の声が聞こえたと思ったら、鈴音と人解、そしてさっき弾き飛ばされた魂切が飛んでくる。

「これ、は・・・」

それらが南海霸王と合わさって一本の紅い槍になる。

「・・・これが、刺天猛虎・・・」

槍を構える。そして流れ込む記憶。

「・・・呉軍の将、周泰・・・参ります!」

槍を手足のように操り、連続突きを放つ。

「ヤヤヤヤッ！」

「ッ！動きが・・・！」

ネギさんが驚きの声を出す。・・・内心私も驚いている。普段より身体が軽い、自信が湧いてくる。これなら何も怖くない！！！！

「ハアアアッ！」

ズバアアアッ！

結界ごとネギさんを吹っ飛ばす。

「くう・・・！」

ネギさんは地面を滑りながら堪える。

「これで・・・」

私は槍を高く構える。

「決まりです！」

高く飛び上がり、槍を投げる。

「ヤアアアッ！！！」

槍は光となり、ネギさんに向かっていく。

ドガアアアッ!!

デカイ爆発音が鳴り響き、地面が振動する。

「・・・が!？」

ズガンッ!

え・・・?

バキインッ!

「あぐ・・・」

何が起こったのか解らなかった。さっきとは違ったネギさんに、知覚できない速度で攻撃されたと感じいたのは地に伏してからだった。

「ぐ・・・まだ、きゃっ!？」

身体を何かに縛られる。

「ぐあ・・・!？」

亮が吹っ飛んできて同様に縛られる。

「これ・・・バインド!？」

亮が叫ぶ。

「まさか・・・ネギ！」

亮がネギさんに聞いた。

「・・・ハイ。なのはさんから教わりました」

「だけど・・・世界が違うのに・・・」

「その矛盾を消してくれたのは貴方達ですよ、亮さん」

「げ・・・」

「・・・これで終わりです！必殺！」

ネギさんの身体が雷に包まれる。

「チハヤブルイカズチ千盤破雷！！！！」

ガガアアアッ！！

私達は光に包まれた・・・

亮

「……まいったな……」

俺は動かない身体をそのままにして顔だけをネギ達に向ける。

「まさかお前らに負けるなんてな。前のお前達なら二対一でも楽勝だったのにさ」

「……へ、俺達も成長しとるんやで」

「それに……僕がこの世界で強くなれたのは師匠やラカンさん、それに千雨さんや明命さん達のお陰なんです」

「……いえ、強くなりたいと願い、それを叶えたのは貴方自身ですよ」

明命も首だけをネギ達に向ける。

「負けました。私達は……ネギさん達の勝ちです」

「負けるのは嫌いだけど……たまにはこんな負け方もあり、か……」

急激に眠気が襲ってくる。

「……よくがんばったよ……お前は……」

それを最後に俺は晴々とした気持ちで意識を手放した……

「・・・」

目を開ける。

「・・・お、起きたか」

「・・・咲？」

「いやー5日間も寝てるなんて、結構ダメージでかかったんだな」

「ハアツ!?5日ア!？」

俺は起き上がろうとするが、咲に止められる。

「・・・明命が起きるぞ？」

は？明命?・・・よく意識したら右腕に何か感触が・・・

「・・・ツ!?!?」

明命が俺の右腕を抱き枕のようにしてすやすや眠っていた。

「何か・・・前にも似たような事が・・・」

でも俺は明命を起こさず、頭を撫でてやる。

「・・・凄いやお前は・・・はは、俺は足手まといになりたくないつてのにどんどん強くなるんだからな・・・」

「・・・さて、お前が目を覚ましたなら俺は行くかな」

「どこに？・・・て待て、5日・・・ってまさかネギの試合は・・・」

俺は一つの疑問を咲に聞く。

「・・・どこぞーこだ」

俺はそう言われて辺りを見渡す・・・ああ。

「魔法球の中か・・・」

「そ、だから外じゃまだ5時間ってわけ」

「そうか・・・んで、どこに行くんだよ？」

その時、咲の顔が真面目になる。

「セラスに聞いてな・・・人捜し」

俺はそれに反応する。

「それってまさか……！」

「……」

咲が頷く。

「……分かったよ、行ってこい」

「悪いね、それじゃあ！」

咲は小走りで行っていった。

「う、ううん……」

その時、明命が目を開いた。

「おはよう、明命」

「おはようございます……ッ！はうあ！？」

明命が俺の腕を抱いているのに気づいて慌てて起き上がる。

「あう……申し訳ありません……」

「気にするなよ。俺もさつき起きたばっかだから」

俺はまた明命の頭を撫でる。

「……やっぱ明命は凄い。咸掛法や刺天猛虎を軽々使いこなした

んだからな」

「い、いえ……威掛法は亮に教えてもらったわけですし、刺天猛虎はその……記憶が流れてきて……」

明命もあの映像を見たのだろう。

「……明命、大会が終わったから約束通り全て話す」

明命は聞く体制をとる。今更、本当に聞くのか？なんて言わない。約束だからだ。

「……あのフェイトが現れた時、俺は……」

俺は一度息を多く吸い込み……

「……蓮華に、会ったんだ……」

「……」

「蓮華は俺に……倒してくれと言った。……そこまでだ」

「……」

「悪かった！ずっと黙ってて……殴っても罵ってもいい……明命の気が済むまで何でも好きなようにしてくれ」

すると明命は微笑み……

「……知っていました」

「え．．．!?」

思わぬ言葉に顔を上げる。

「．．．すみません。聞く気はなかったのですが．．．亮と咲さんが話しているのを偶然聞いてしまったのです」

あの時の．．．

「もし私に内緒で一人で蓮華様と戦う気なら私も怒りました」

「．．．」

俺は顔を伏せる。

「．．．ですが亮は私に話してくれると言ってくれた．．．それだけは嬉しかった．．．だから、亮が話してくれるのを待っていたのです」

「明命．．．」

「共に．．．蓮華様を止めましょう!」

「．．．ああ!」

俺と明命はお互いに見つめあい．．．俺はふと思い出した。

「そだ、明命、これ」

俺はそう言っただけで脱いだ。ロープから猫のぬいぐるみを投げた。

「あ……！」

「これ、Angel Beats……死んだ世界でのオペレーションで没収されてた？」

「取り戻してくれたのですか……？」

「ああ。あの時の明命のショックは相当だったみたいだし」

「……ありがとうございます！これは……亮が私にくれた大切なお猫様のぬいぐるみですから……」

だからそんな安物で喜ばないよ……でも、喜んでるならいいか……俺達は残りの時間をネギと小太郎の修行を手伝うと決めたのだ……

激突（後書き）

日向

「まさかゆりつぺのオペレーションがこんなダメージを与えてたなんてな」

ライダー

「・・・ヒデキ、貴方はここにおいて良いのですか？ユイは・・・」

日向

「そんな何時までも一緒に居る訳じゃねえよ。たまにはこの後書きにも顔を出さねえとな」

刹那

「・・・そうですね。日向さん達とはあまり話しませんから・・・」

ライダー

「・・・セツナ？先程はコノカといませんでしたか？」

刹那

「い、いえ・・・その・・・」

日向

「だいたいライダーもさっきまで衛宮といたじゃねえか」

ライダー

「・・・視線に耐えられないのです」

刹那

「衛宮さんは私達の間でもお世話になっていますからね。・・・主に冷房の修理とか・・・」

日向

「パシリじゃん」

ライダー

「ですがそれこそが士郎の良いところです」

刹那

「そうですね。・・・それでは、次回の真似と開閉と世界旅行」

日向

「次回も見ろよな！」

ライダー

「それではまた次回」

男の戦い〜(前書き)

V5ラカン戦・・・ではどつどつ。

男の戦い

ここは魔法球の中。

「オラアアツ！」

ズガアアンツ！

「ぐあ……」

「どうした小太郎オ！俺には勝ったんじゃないのかあ！？」

俺と小太郎は修行の総仕上げだ。

「……ふうう……必殺！猛虎獣衝撃！！！」

一気に腕を振り抜く。

「何度も当たるわけないやろ！」

小太郎は横に避ける……けど、

「……誰が一発なんて言っただけ？」

「な……」

既にもう片方の腕にも力を集中させている。

「二連……猛獣撃！！！」

ドガアアアンツ！！

その一撃は小太郎に直撃した・・・

「・・・アカン、何で亮兄ちゃんに勝てたのかわからなくなってきた」

「ま、人は日々成長するものです」

「なんやそれ」

ちなみにネギはエヴァの巻物の中で特訓していた。・・・咲もそれに付き合っている。

「・・・にしても明日か、試合」

「そやな・・・といっても向こうじゃもう時間はないんと思っで？」

「おいガキ共オ！最後は二人纏めて見てやるぜえ！来な！」

リカードが言う。

「え……俺もかよ……」

「やるしかないんやで亮兄ちゃん……」

俺達は渋々リカードに向かっていき……叩き潰された……

咲

「……なるほど」

ネギは今、面白い魔法を創ろうとしている。

「……ふと思ったんですが」

「……何だ？」

ネギが聞いてくる。

「咲さんはマジア・エレベアを使えるんですか？」

「うーん・・・使えるっちゃあ使えるんだけど・・・」

「何か問題か？」

「時間制限があつてな。だからずっと変身してられるDモードを好んで使つてんだよ」

「そんなんですか・・・見せてもらえませんか？」

「え・・・しゃーねーな、分かった」

俺は魔力を集中させる。

「闇の吹雪固定「ウイーススラグネクターズ・オブスクランス・・・」

それを握り潰すように力を加える。

「コンプレクシオ掌握！！！」

次の瞬間には身体が冷気に包まれる。

「・・・」

「・・・型の名前は・・・どうでもいいや・・・これなら十分・・・いや、十五分持つかな」

「・・・戦いならそれだけ持てば充分じゃ・・・」

「あー・・・俺ってさ、ほとんど多対一の確率が高いからさ、どう
しても長期戦になっちゃうんだよ」

「はあ・・・それは・・・氷、ですか」

「・・・ああ、守りに徹するタイプだな。あと柔軟性」

「・・・？」

「例えば何かして氷の身体が削れる。・・・それでソレを操って水
素にする。・・・んで、火花を散らせば・・・」

「・・・爆発」

俺は頭を掻く。

「・・・といってもそんな上手く操作できないけどな」

「そうですね・・・」

「んで、ネギ？切り札はどうなった？」

「その2まではできました。・・・あとはコレを完成させれば・・・」

「・・・よっし、手伝っぜ。・・・現実世界で言っならあと一時間
で始まるんだ。・・・気合い入れていくぜ！」

「ハイ!!」

亮

「……遂に試合開始時間になった。俺達は観客席で観戦することにした。」

「……どっちが勝つと思う？明命」

「……実力ならラカンさんの方が上ですが……」

「上ですが？」

「私個人の感情で言うならネギさんはそれに負けない努力をします」

「……信用してるんだな」

「……ええ。……それ以前にネギさん達が勝たないとアキラさん達を解放出来ませんからね」

「……まあ、アレだ。負けたら負けたで何か手段を考えるさ」

そうしてる内に試合が始まった。

「来れ（アデアット）！！！」

ネギが手にしたカードが何か手帳のような何かが現れた。

「仮契約カード！？誰と……」

明命が横で疑問を問う。

「……テオか！」

俺はふと思いついて言った。……そしてネギが詠唱を始め、小太郎がカゲタロウの攻撃を防ぐ。

「・・・全開つつたな？いいだろうばーず。俺様も久々に全開・
・ってのを試してみるぜ」

そう言ったラカンが持つ槍は尋常じゃない力を放出していた。

「オラアッ！！」

ドゴオオオオンッ！！

会場全体が衝撃に包まれる。

「いつつ・・・」

「亮！？大丈夫ですか？」

明命に支えられて席に戻る。

「・・・つたくあの野郎・・・観客まで殺す気か・・・！！？」

『こら！ジャック！貴様という奴は後先考えず！客がいるのじゃぞ
っ！？』

案の定テオに怒られていた・・・いいのか？代表があんな口調使っ

て。

「……ってネギは!？」

アレで木っ端微塵になってんじゃねーだろーな!？

「……いえ、無事です！」

土煙が晴れ、ネギと小太郎の姿が露になる。……その姿に傷はない……何よりネギが“ハマノツルギ”を手にしていることに気がついた。

「無傷だと!？馬鹿な!？」

カゲタロウが驚きの声を出す。そしてネギ達は同時に突出する。

「来るか!」

「来れ(アデアット)」

ラカンも負けじとアーティファクトを出すが、ネギの持つハマノツルギが全てを消した。

「うはは、俺様の伝説のアーティファクトがまるでバターだな。本

物じゃねえか、どういうこと？」

「去れ（アベアット）」

ネギはそれに答えず、手帳に刹那の仮契約カードを装填する。

「アイツのアーティファクトの効果は・・・」

俺はそう呟く。

「なるほど・・・自らの従者のアーティファクトを自在に使用できるアーティファクト。こいつぁ激レアだな」

・・・俺、アーティファクトの南海霸王を使って刺天猛虎出してんだけど・・・ネギはそのまま構えを取る。

「解放・固定エミミットム・エト・スタグネットキーリブル・アストラペー！！！！千の雷コンプレクシオー！！！！ぐっうううあっ！！！！掌握コンプレクシオー！！！！」

ネギの身体に雷が纏う。

「プロ・アルマティオーネ術式兵装『雷天大壮（ヘー・アストラペー・ヒューベル・ウーラヌー・メガ・デュナメネー）』！！！！」

そしてネギは一瞬でラカンに拳を浴びせ、ラッシュに持ち込む。

「アレは・・・私が喰らった・・・」

「術者雷化・・・！！」

ラカンでも知覚できないスピードでネギは攻める。アレは切り札その2。……あと今更だが咲は恋を捜しにいった。試合は中継で見ている……はず。

「……いきますッ、必殺!!!」

ネギが空から急降下してくる。

チハヤブルイカスチ
「千盤破雷!!!」

ズガガアアンツ!!!

「な・・まさかラカン殿!?!」

「おっとカゲちゃんよ、よそ見はアカンで」

小太郎が獣化してカゲタロウをぶっ飛ばした。

「ぐううむ効いたぜ。普通の高位魔法使いなら消し飛んでるぜ。容赦ねえな、ぼーず」

「いえ、まだです」

ネギが真後ろに回り込む。

ヨウイス・テンベスターズ・フルグリエンス
「雷の暴風!!!」

ゼロ距離でネギが術をぶつける。

『ダッ、ダ、ダウンッ、ダウーーン！！ラカンチーム同時ダウン！』

「・・・外されました」

「明命も気づいたか。・・・ああ、寸前で直撃を免れていた」

案の定ラカン達は立ち上がる。そして会場内がラカンの気で圧迫される。

「・・・始まる！」

再び雷天大壮を発動させたネギは・・・一瞬で打撃を入られた。

「速い・・・！」

雷速瞬動を使って逃げようとするが、すぐに追い付かれ、手が当てられる。

「・・・！」

「羅漢破裏剣拳！！」

「ネギさん！！！」

明命は構わず本名で叫ぶ。・・・小太郎も腹、腕、足をカゲに貫かれた。

「……ラカンの奴……弱点に気がついた！」

「弱点？」

「ああ。それは……」

「……弱点がある。その1、雷速といっても技を発動した一瞬の話。お前の思考も速まる訳じゃねえ。……てことは技の出かかりを潰す戦法が有効だ」

「くっ……（だからってソレを実行するなんて！）」

ネギは拳のラッシュをするが……全て防がれる。

「その2、今のお前は『雷そのもの』自分が“落ちる”空間を風系魔法で電位差を操作することで決定しているようだが・・・古強者の俺様は空気の“カンジ”で雷の落ちる場所を予測できる・・・しかもご丁寧にもノホンの雷よろしく先行放電ストリーマーまであるんじゃないか」
ラカンが構えを取る。

「カウンターの餌食だぜ!!!」

その後も攻撃を喰らいまくり、ネギはダウンした。

「ネギさん!」

明命がネギを見つめる。

「・・・く、ホントバケモンだな・・・」

カウントが続く中、ラカンが何かをネギに言った瞬間・・・ネギが立ち上がった。・・・そして小太郎も復帰する。

「……コタロー君。彼らは僕らを侮った。……ここまでが限界だと見誤ったんだ。……僥倖だ。この勝負、僕らが勝つ」

「は、言うようになったやないか、ネギ!!」

「立った……!ネギさん……!」

「アイツ……内臓ぐちゃぐちゃの筈なのに……!」

そして小太郎が完全獣化し、ハマノツルギを加えながらカゲタロウに突っ込む。

ウンブラエ・セブツキモカス・ファンティコルボラーリス
「影布七重対物障壁!!」

ドガアッ!!

カゲタロウが障壁を張るが容易く小太郎は打ち破る。

「・・・マズイ、ネギが無防備だ！」

ラカンがネギを狙うが・・・小太郎がそれを死守する。

「・・・魔獣退治はオレの専門領域でな」

小太郎はアーティファクトで串刺しにされる。

「・・・切り札、その3!!!」

詠唱を終えたネギが千の雷を“二つ”掌握する。

ドゥブレタヌブレクシオー
「**双腕掌握**!!!」

・・・まるでスーパーなんちゃら3みただな。

「二重装填なんてコトができるとはな。．．．それが最後の切り札か？」

「さあ？どうでしょう。『雷天大壮2』とでも呼んでください」

カゲタロウは壁に縫い付けられ、小太郎はダウン。．．．実質一対一だ。

「あ．．．」

ネギはさっきより素早くラカンに打撃を加えていく。

「．．．アレで．．．弱点が消えた」

「気づいたか？．．．そう、常時雷化だ。そしてカウンターを防ぐには．．．近接戦闘^{インファイト}．．．まあ、いつも俺がやってる戦法だな」

「亮は物真似しない限り近づくことしかしませんからね．．．」

ネギは勇猛果敢に攻める。．．．だが、ラカンは倒れない。

「がんばった．．．が、最後の切り札がこれなら．．．お前は勝て

ん

「・・・アレ？ラカンさん、僕・・・これが最後の切り札って言いましたっけ？」

ネギは不敵に笑う。そしてラカンの足が小太郎により、固定される。ネギはそれを見てから何かバカでかい槍を構える。

「切り札その4！雷神槍『巨人ころし（ティタノクトノン）』！！」

「どんだけ切り札あるんだアイツ・・・！！」

だがネギはラカン相手に力比べを挑んだ。

「馬鹿・・・何で力比べを・・・」

「ッ！違います亮！アレは・・・」

ラカンが放った莫大な気を・・・ネギは吸収した。

「ラカンさん・・・確かに今の僕の力ではあなたに届かないかも知れませんが・・・」

ネギはラカンの力を掌握する。

「ですが・・・貴方自身の力ならどうです！？」

ズンツ！！

「決まった！！」

「いってください！ネギさん！」

「おおっ！」

グパンツ！！

そこからはネギの最強技のオンパレードだ。数えただけでも八発は当たっている。

「おお！！解放雷神槍！！！！」
千ミツデンネス・ロンケイ

ついさつき決めた巨人ころしに雷が宿る。

「千雷招来（キーリプレーン・アストラペーン・ブロードウカム）！
！！！！」

ドガガガガッ！！

「うわああああ！！」

パキヤアアアンツ！！

闘技場の障壁が破れたあ！？

「ですが・・・あそこまでやれば・・・」

その瞬間、ネギが殴り飛ばされた。

「見事ツ！見事だぜぼーず！！！」
ラカンが立ち上がった。

「うえええええっ！？何ですかあああ！？？」

「あれもうバグとかチートじゃ済まねえだろおおお！？！？？」

俺と明命は二人して叫びまくった。・・・だつてさ、明命が叫ぶのも俺が叫ぶのもきつとこの状況を見ればあの思春やライダーだつて納得してくれる筈だ。・・・つまり、何が言いたいかと言うと、“滅茶苦茶”この一言以外に当てはまる言葉はないだろう。・・・試

合は結局引き分けで終わったのだった……

「……」

咲が歩いてくる。

「よう、見つかったか？」

「……ダメだった。……だけど、名前だけは聞いた。レン・フ
アランドール。……その名は“ありえない”」

「そうだな……確かに記憶が曖昧になっても名前を聞けばその
キャラは思い出せる。……いや、俺は何故かキャラクターの事は
思い出せる。……ネギまにそんなキャラはいない」

「ああ。……だから、きつとこの町のどこかにいる筈だ……残
念だがホントは個人名すら教えるのはマズイらしい」

「待て……お前、どこでその情報を……」

「裏ルートでな。俺はトレジャーハンターで多少なりとも稼いだか
らな」

「買収……ですか？」

俺は思わず敬語になる。

「大丈夫……手がかりは揃ってきてるんだ……見つける、見つけられる……」

「咲……」

「亮！咲さん！」

明命が走ってくる。

「どうしたんだ？」

「今から亜子さん達を解放するみたいです！一緒にいきましょう！」

「……」

「ほら、行くぞ咲。あんまネガティブだとまた闇に吞まれるぞ？」

「……へ、ナメんなよ。もう吞まれたりはしないさ……絶対に
な」

俺達は歩き出すのだった……

男の戦い（後書き）

ランサー

「……なあ、あのラカンって奴と戦ってみていいか？」

亮

「止めた方がいい。なんかゲイボルクを「気合いだー」とかいつて避けそう」

遠坂

「多分固有結界も破壊されるわよ。アレは」

亮

「既にもアレ扱い……」

ランサー

「……いよっし！っわけでオレはちよいと席を外すぜ」

遠坂

「あ、ちよっとランサー！」

亮

「……行っちゃったよ。……マズイって、マジで」

遠坂

「まあ……たまにはいい薬かもね。負けるのも」

亮

「……アイツ勝ったことあるっけ？」

遠坂

「ある……筈」

亮

「……」

遠坂

「……」

亮

「……じ、次回の真似と開閉と世界旅行！」

遠坂

「じ、次回もまた見なさいよ……！」

敵か味方か (前書き)

テストが近い・・・ではどうぞ。

敵か味方か

「……眠い」

朝起きて言うことはそれだった。

「……おはよう、亮君」

アキラが歩いてくる。

「よ、解放おめでとさん」

「ありがと。亮君達のお陰だよ」

「いや、俺達は全然だよ。……全部ネギと小太郎のお陰だよ」

「それでも頑張ってくれたから」

アキラはそう言ってお礼を言ってくれた。

「……そうだ、ネギから聞いた。……バレたんだった？ 亜子に」

「……うん。でも、亜子はもう吹っ切れたみたいだよ」

「そっか。……これからも友達でいてやれよ」

「……うん」

その時、ネギがやって来る。

「亮さん、今から闘技場の皆さんに挨拶に行くんですが、どうですか？」

「お、行くよ……じゃな、アキラ」

「あ、うん」

「・・・30時間後？」

「はい。奴等のアジトに潜入してアーニヤと夕映さんを救出して、現実世界へのゲートを起動させてこの世界から脱出します」

「なるほど。ハルナ達が見当たらないと思ったらコレを調べてたのか」

「・・・でも、今から挨拶に行くのはいいけど、明命ちゃんと咲君は置いてきていいの？」

アスナが聞いてくる。

「明命は後から来るってさ」

「咲さんも少し捜し物があるみたいですよ」

俺とのどかはそう言った。

「ホラ、もう、アイスがほっぺについてますよ、ユエさん！」

「こ……これは失礼」

声が出た方を向くと……

「ゆ……え……?」

「え……」

クラスメートの一人、綾瀬夕映の姿があった。

「ゆえっ！無事だったんだね……!」

のどかが夕映に抱きつく。

「心配したよ……無事で本当に良かった……!」

「……の、ど……か?」

「ゆ、ゆえちゃんどーしたのよ一体!?下の廃都に捕まってると思
ってたわよ!」

「え……あの……」

「……?」

夕映の様子がおかしい。まるで見慣れない人を見るような……

「あ……あの、あなたはどなたですか?」

「!?ゆえ・・・?」

・・・思い出した・・・確か記憶喪失なんだ・・・今の夕映は・・・

「おーい何やってるの委員長・・・ってアレ?」

「お嬢様ツ!」

「ちょ・・・委員長、そいつら指名手配犯!」

「え・・・何ですって!?!」

新たに二人やって来た。

「しまった!こつちから話しかけたから認識障害メガネの効果が薄まっちゃった!?!」

「チツ・・・」

「く・・・逮捕します!?!」

結界弾を撃たれ、のどかが捕縛されるが、ネギが素手で破壊する。

「ま、待ってください・・・アリアドネー騎士団の方ですよ。僕達は争うつもりは・・・」

「犯罪者が何を又ケ又ケと・・・問答無用ですツ!?!コレット、ビー!いきなさい!」

「・・・仕方ない」

俺とネギは同時に二人を投げ飛ばす。

「ちょ、乱暴は・・・！」

・・・が、二人は一回転して綺麗に直立した。

「む・・・あなたはカン・コウ八選手！？なぜ犯罪者と・・・！」

あー、自分がそれなりに名が売れてるの忘れてた・・・

「・・・く、コレット、ビー！装剣なさい！最大出力で仕留めますよ！」

三人が剣を構えて魔力を高める。・・・その時、

「・・・エミリイ、ダメ・・・！」

誰かが俺達の前に跳んできた。

「レ、レンさん！？そこをどきなさい！」

「どいて、レンー！」

「え・・・？」

俺達の前に立っていたのは・・・一緒に旅してきた仲間の一人、恋だった。

「恋!?!」

「……亮?」

「……退いてください亮さん! 風花^{フランス}……」

げ……マズイ。

「恋! 真上に跳べ!」

俺は直感を頼りに恋と上に跳ぶ。……そして着地したとき……
武装解除が事件を起こしていた。

「こ……こんのバカネギは……あなたは脱がさないと気が済
まないのー!?!」

「わーん、スミマセン! 力の加減がうまくできないみたいでー!」

俺と恋は皆から離れた位置にいた。

「……まさか、恋がアリアドネー騎士団に入ってるなんてな」

「……頑張った」

「……咲もこの町に来てるんだぜ？」

「……！咲……」

「でも、アイツはかなり見た目変わってるから恋も判るかどうか……」

「大丈夫……」

「根拠は？」

「……恋は判る。……亮だつて判った」

「う、ま、まあ俺は咲ほど見た目は変わっちゃいないと思っただけ……」

すると恋は首を横に振りながら、言った。

「見た目は変わった。……けど、中身は変わってない」

「あ……」

「恋は咲が好き。．．．好きな人はどんなに変わっても判る。．．．
そうだと恋は思う」

．．．以外に惚けてるように見えて、恋は深いことを言うんだよな．
．

「．．．そだな。咲に連絡を．．．ッ!？」

何か騒がしい．．．

「恋!行くぞ!」

「．．．ッ!」(コクッ)「

俺達は騒ぎの方へ走り出す。

そして大広間に出たとき、大量の兵士が目に入った。

「く……邪魔だ……！」

俺は瞬動を使つて空中から落ちる。……状況は悪い。アスナは肩を斬られてダウン。ネギは謎のメガネ野郎に伏せられている。その他は……二人、いや、アスナを含めて何故か全裸だったが、そんなのは関係ない。

「ネギを離せええええ！！！」

俺は落下の力を利用しながら鈴音を振り下ろす……が、

カキヤアアンツ！

「がっ……！？」

横から斬撃が迫り、それに弾き飛ばされて地を転がる。

「ぐ……ッ！？」

「亮・・・大丈・・・ッ！」

恋もやって来て俺を起こそうとするが、ソレを見て固まる。

「蓮華・・・！」

「ハアツ・・・ハアツ・・・亮・・・！」

まだ自我はあるみたいだ。・・・だが、俺は迷うことなく鈴音を構える。

「蓮華・・・お前を倒して・・・解放する！」

その瞬間、辺りが煙に包まれる。

「え・・・」

「・・・亮！」

「咲！」

咲がやって来る。

「退くぜ亮！とりあえずこの場は退いて・・・え？」

咲が固まる。

「・・・咲！？」

「恋・・・！？」

「咲さん！急いでください！」

明命の声が聞こえてくる。

「くそ・・・恋！また後で！」

「・・・（コクッ）」

俺達はその場から離脱した・・・

「・・・！」

「嬉しそうだな、咲」

「だって恋がいたんだぜ！？無事って判ったんだから嬉しくないワケがないだろ？」

「・・・そうだな。俺もお前の立場ならそわそわしてたな」

「・・・つーか見つけたなら恋に連絡入れさせるよ・・・念話とかさ・・・」

「わ、悪い・・・連絡を入れようとしたらあの騒ぎでさ・・・」

そう言ってる時に蓮華の顔を思い出す。

「苦しそう・・・だったな」

「は？」

「蓮華だよ・・・いたんだ」

「あ、ああ・・・待て、オスティアの総督と居たのか？」

「ん・・・いや、アレはどっちかって言つと、俺を狙って飛び出してきた感が・・・」

「なら繋がりはないか・・・」

「あっても困る」

「・・・だな」

「……亮」

明命がやって来る。

「どうした？」

「……あの総督から伝言がありまして……ネギさん達は総督府で開かれる舞踏会に行くことにしたようです」

「……怪しいな」

「私は行きますが……お二人は……」

「行くさ。咲は……」

見ると咲は仮契約カードを額に当てていた。

「……ああ、じゃあ来れるのか？……おう、わかった……ああ、じゃあな」

咲は軽く息を吐いてこっちを向く。

「……恋から連絡があった……俺も行くぜ」

そして俺達は出かける用意を始めた……

敵か味方か（後書き）

恋

「・・・出番あった」

音々音

「良かったですね、恋殿・・・」

咲

「ねね？・・・大分ガツカリしてない？」

霞

「そらウチらまったく出番があらへんし・・・」

詠

「ボクも出番が欲しいわよ・・・ねえ月？」

月

「へう？・・・でも、こつちやって後書きは出れてるよっ」

華雄

「ふ・・・董卓様らしいな」

咲

「そっぴやお前だけ月を真名で呼ばないよな。・・・実は信頼されてなかったりして」

華雄

「な……!？」

月

「そ、そんなことはないよ、華雄……あなたも私を守ってくれた大切な仲間なんだから……」

華雄

「と、董卓様……ありがたき幸せ……!」

霞

「でも真名は呼ばせないんやな」

詠

「バカ……空気読みなさいよ」

音々音

「ここで真名を許可したら本編に影響が出るのです」

恋

「……華雄の真名は？」

全員

「……」

華雄

「真名など……真名などいらぬわあああ!」

月

「あ……華雄……」

詠
「ほっとこうよ、月」

音々音

「そうなのです。この面々で揃うことは滅多にないので、残ったメンバーだけで話すのです」

霞

「華雄ちゃんもかわいそうやな〜・・・ことあるごとにネタにされるんやから」

咲

「しかも皆名前や真名で表記されてなのに華雄だけ武将名だからな・・・」

恋

「・・・かわいそう?」

詠

「何で疑問系なのよ」

咲

「はあ・・・仕方ない、華雄を追いかけてやるか・・・行くぞ、皆」

霞

「・・・そやな、迎えにいつてやるかな」

月

「・・・うん、行くぞ。・・・ね、詠ちゃん?」

詠

「う……月が言うなら……」

音々音

「それでは次回の真似と開閉と世界旅行！」

恋

「……次回も見て」

咲

「それじゃ、また次回」

舞踏会（前書き）

・・・最近亮が物真似を使うタイミングがありませんね・・・では
どうぞ。

舞踏会

「・・・暇だ」

「・・・だな」

女性陣は今舞踏会に着ていくドレスを選んでいた。・・・俺と咲は無理矢理スーツを着せられた。

「・・・なんで女性ってこついつの時間かかるんだろうっね？」

「俺に聞くな。知るわけないだろ」

「・・・ですよー」

「・・・亮!どうでしょうか？」

明命がやって来て・・・俺はまじまじ見つめてしまつた。

「あ・・・変・・・ですか？」

明命は着物を着ていた。・・・かなり似合っていて、綺麗だった。

「いや・・・似合ってるよ。・・・うん、綺麗だ」

「そ、そうですね・・・良かったです」

「・・・へ、このバカップルは・・・」

咲が横で拗ねていた。

「・・・咲さん、クレイグさん達に挨拶をしなくていいんですか？」

のどかが咲に近づいてそう言った。

「・・・俺はいいや、もう会えないワケじゃないし・・・とりあえずよろしく言っといてくれ」

「あ、はい、わかりました」

そのまま時は流れる・・・

そして夜になり、舞踏会に到着した。

「・・・人いるな・・・」

「・・・亮」

明命が小走りでやって来る。

「どうしたよ？」

「あ・・・ラカンさんを見ませんでしたか？・・・先程お手洗いに
行くと言ってからしばらく立つのですが・・・」

原作は・・・どうなるんだっけ・・・

「・・・大丈夫だろ。あのバグキャラは何があっても死ななそうだし・・・それより明命？」

俺は手を差し出す。

「是非俺と踊ってもらえないでしょうか？」

「えう！？あ、その、あの・・・」

明命はしばらくあたふたして、顔を伏せながら言う。

「・・・はい、お願いします・・・」

俺は周りのを見よう見まねで明命と踊る。・・・真似は自分の専門分野だ。

『・・・アレは拳闘士のカン・コウ八選手とシュウ・ヨウハイ選手
じゃないかね？』

『なるほど・・・あの二人はそういう仲なのですね』

「あ、あの・・・亮・・・」

「気にするなよ。俺達は俺達で勝手にするだけさ」

そして、しばらく踊った後、軽くご飯を食べる。

「・・・しっかし、こういう空気は苦手だな・・・」

「・・・確かにここまで人が集まる場所に行く機会は少ないですからね」

「しかも全部セレブ・・・気が滅入るな」

最早仲間達が何処にいるのかも判らない。

「・・・ところで亮・・・？」

「ああ・・・気づいてる・・・」

周りの方の視線がメツチャ集中しています。

「・・・二こじや瞬動使うわけにはいかないしな・・・」

「どっしりますっ？」

「うーん・・・さりげなく逃げる・・・かな」

俺達は談笑しているフリをしながら外に向かって歩いていく。

咲

「・・・恋！」

「・・・咲」

恋の近くに寄る。

「あー・・・そのー・・・」

色々言いたいことがあるせいで逆に話せない。

「・・・無事でよかった。嬉しいよ」

「・・・咲は無事？」

「・・・おう、何とかな・・・でも驚いたぜ。恋が騎士団に入っ

てるなんてな」

「うん・・・大変だった」

恋が大変と言うなら大変だったのだろう。

「・・・ちよつとそこのあなた！」

その時、少女が間に入ってくる。

「レンさんとどんな関係ですか!？」

「いや・・・」

「まさかナンパですか!？そのような下らないことは・・・」

「エミリイ・・・違う」

「え・・・」

恋がエミリイと呼んだ少女に仮契約カードを取り出す。

「・・・こういう関係なんだよね」

「な・・・じゃ、じゃあレンさんが探していた人って・・・」

「そう。・・・恋は咲を捜していた」

その後はしばらく雑談をしていた。そしてエミリイの他にも、コレットやベアトリクス・・・そしてユエと知り合った・・・ユエと

夕映・・・か・・・

亮

「・・・随分と仮契約者が増えたな」

ネギだけで二人、小太郎は一人、仮契約した。

「・・・ナギ様、クルト・ゲードル総督が特別室でお待ちです。同行者は3名までを許可されています」

「わかりました」

「よし、来たわね。行くわよ！」

アスナが意気込むが・・・

「アスナさんはダメです」

ネギがそれを却下する。

「な、なんでよ!？」

「アスナさんは大事な身体ですから。．．．刹那さん、護衛よろしくお願いします」

「ハイ」

そしてネギが同行者を選ぶ。

「では、まずのどかさん」

「ひゃ？ハイッ！」

「2人目は朝倉さん」

「サンキュ、ネギ君」

「3人目は千雨さん」

「ちよ？」

千雨が抗議する。

「その二人はわかるが私は何でだ！？ファンタジーの中核とか勘弁しろよっ！？」

「？千雨さんにはいつも傍にいて欲しいんですが？」

「そーゆー台詞真顔で言うなよ。いつか女に刺されるぜ？」

千雨が顔を真っ赤にしていた。

「……コタロー君。古老師……そして亮さん明命さん、いざという時は」

「おっ」

「任せるアル」

「気を付けてください」

「……いい結果を待ってるよ」

ちなみに咲はまだ戻ってきていない。……まあ、いいけどね、今ぐらいは……

「……アキラ」

俺はアキラに近づく。

「え……何？」

「コレ……覚えてるな？」

俺は笛をアキラに手渡す。

「コレは……」

「万が一の時は使え。……まあ、無理なら逃げに徹してくれ」

「……わかった」

その後、朝倉からの中継で、ナギとアリカの映画を見て。……そしてクルトの勧誘をネギは……断った。

「ネギ君と総督の会談は決裂したっ！よしっ、みんなズラかるわよ！」

ハルナが声を出す。

「ま、待ってくださいです、今の話は……」

いつの間にか合流したユエ達顔が青くしたが……

「詮索は後です、ユエさん！今は脱出を！……打ち合わせどおり小太郎君と古は先生を！！」

「おっっ」

「うむ！」

「亮さんと明命はみんなを！」

「あいよ！」

「御意！」

「・・・待ちなさい、ネギ君の所には僕も同行しよう。かの総督とは旧知の間柄でね」

「あ、あなたは・・・！」

一人の男が歩いてくる。・・・その男は・・・

「「高畑先生！？」」「」

それからしばらく経った。咲や恋達は舞踏会場に戻った。咲が何か嫌な予感がすると言って走っていったのを騎士団が追いかけていたからだ。

「ちょっとパル！こんなところでグズグズしてていいの！？早く逃げ

「ようよーッ!」

「まあまああわてなさんな。宮殿の中を大勢で逃げても捕まるだけよ。ここは私に任せなさい」

「任せるって何を任せるのよ!」

「交渉決裂したらずぐ逃げろって言われてたじゃん!」

アスナと祐奈が言った瞬間、

「その女ども!動くな!」

振り返るとそこには大量の兵士がいた。

「……へー」

俺は鈴音を引き抜く。

「……最近ストレスが溜まるからな……ここらで発散させてもらおうかあ!」

後ろからグレートパール様号が来たがそんなの無視して走り出す。

「ちょ、亮さーん!」

「亮さーん!」

「……ったらあっ!!」

ズガンッ!

また一人ぶっ飛ばす。

「亮殿!下がるでござる!!」

「……!了解!」

俺はバック転をしながら下がる。

「楓忍法!」

「神鳴流奥義!」

二人が技を放った。

「縛鎖爆炎陣!!」

「百花繚乱!!」

敵の大半をその一撃で倒す。……その時、

ドオオオオンッ！！

「な、何よ今のは！？」

「巡洋艦クラスの艦載精霊砲と確認、威嚇射撃です！！」

そしてデカイ戦艦がやって来たが・・・

「！？ア・・・アレは何でござるか！？」

「な・・・！？」

敵の戦艦が黒い触手に捕まり、破壊されていく。

「あれもあなたの仕業なの、パル！？」

「あんなラヴクラ トなクトウ フは知らないわよッ！！」

「チツ・・・何が出てくるんだ！？ニヤルラトホテプか？クトウグアか？」

「そんな冗談言ってる場合じゃないってのー！」

その瞬間、黒い手が伸びてきて足場を破壊された。

「「「キヤアアアッ！？」「」」

「く……!」

何とか足場を見つけて瞬動で着地する。

「亮!無事ですか!？」

明命も同じ足場に着地した。

「……そうだ!他の皆は……!」

慌てて辺りを見渡すと、楓と小太郎が皆を助けていた。

「……仕方ない!プランBよ!第二集合地点に向かって!そこで拾うわ!」

「……おう!明命、行くぞ!」

「ですが咲さん達が……」

「アイツなら自力で何とかできる!急ぐぞ!」

「……はい!」

俺達は下に向かって走り出した。

咲

「……く、何なんだよコイツら！」

舞踏会場に現れた謎の影を一体消し飛ばす。

「……信じらんねえ……一般人まで巻き込みやがって……！」

怒りが沸き上がってくる。

「Dモード……更にもう一段階……」

髪が金色に染まる。

「ウガアアアアツ!!!」

そして細部が変わり、背中に黒い翼が生える。

「ハアア……スベテツブス!!!」

俺は新たに死神が持つような鎌を取り出す。……Angel B
eatsの世界で武器は腐るほど造った。

「タアツ!!!」

ズガアアアツ!

「・・・前は怖くてできなかったが・・・今ならヤミヲツカイコナセル!!」

敵をひたすら薙ぎ払う。・・・その時、

「ふ・・・随分と変わった姿じゃないか、咲」

上から跳んできたのは・・・

「・・・真名!?!」

龍宮真名だった。

「・・・よく俺だつて判つたな」

「なに、私の魔眼にかかれば楽勝さ」

「・・・見切れるのか?ソレ」

会話をしながらも敵を倒していく。

「ダークフェザー!」

羽を飛ばして遠くの敵を倒す。・・・その瞬間、多くの警備兵が消え去った。

「なに・・・!?!」

「今のは俺じゃないぞ・・・!?!?」

そして俺は呆然と立ち尽くす恋を見つけた。

「・・・おい恋!ボサツとしてるな!」

「・・・さない」

「え・・・?」

恋から殺気があふれでる

「よくも・・・エミリイを・・・」

恋の方天画戟が炎に包まれる。

コソファイルマーティン・イグネース
「炎熱武器強化」

そして恋は踏み込む。

「絶対に・・・許さない・・・!!」

あそこまで怒りを露にした恋は珍しい。．．．だが危険だ。俺は恋の注意が疎かになっっている方の敵を駆逐する。

「．．．咲！離脱するぞ！」

真名が叫ぶ。

「ああ！．．．恋！退くぜ．．．」

「許さない．．．許さない！」

だが恋の耳には届いてないようだ。

「．．．恋！宮崎が言っていた！消された人間を復活させる方法があるぞ！」

「．．．！？」

恋の動きがピタリと止まる。

「．．．エミリイが．．．」

「．．．ああ、だから今は退くぞ、恋！」

「．．．わかった」

亮

「……ッ！」

感じたことのある気配を感じ、その場に立ち止まる。

「亮？どうし……!?」

明命もソレに気づいたのか足を止める。

「……来たか、今度こそ解放してやる」

「……」

俺と明命は剣を構える。

「……蓮華！」

「……来い！」

蓮華も南海霸王を構える。……その目にはまだ理性が残っている。

・・・なら理性が残っている内に倒す・・・!

「ウオオオオツ!!」

「ハアアアツ!」

俺と明命は同時に走り出す。

「セイヤアツ!」

「フツ!」

カキインツ!

初撃は防がれる。

「ハアツ!」

「タアツ!」

カキヤアンツ!

俺と明命は交互に攻撃を仕掛けるが、簡単に防がれる。

「・・・!強い・・・!」

「蓮華様が・・・ここまで強くなってるなんて・・・!」

「・・・私も・・・亮が消えてから何もしなかったわけではない!」

蓮華が叫ぶ。

「いつか・・・また会えると信じて私は力を求めた！再会した時恥ずかしくないように・・・！それなのに・・・それなのに・・・！」

蓮華の目から涙が溢れる。

「く・・・！タアアアツ！！」

そのまま攻防を繰り返す。

「・・・ハアアアアツ」

蓮華の剣に炎が纏う。

「！？明命、避ける！」

「う・・・！？」

俺と明命は左右に跳ぶ。

「ウアアアツ！」

その炎が放たれ、後ろの壁を“溶かした”

「っ・・・どんだけ火力高いんだよ！」

再び蓮華が炎を放とうとしている。

「チツ・・・なら・・・」

今度は避けられない。・・・だったら立ち向かってやる。

「猛虎・・・獣衝撃!!」

ズガガガガッ!!

虎と炎がぶつかり合う。

「ぐ、ううう・・・!!」

そして・・・虎が炎に吞まれた。

「あ・・・」

炎が迫る。

「亮ーーーーッ!」

明命が俺に体当たりをして炎の射程から外してくれた。

「・・・悪い、助かった!」

「いえ・・・ですがコレはマズイです。私達が本気を出しても勝てるかどうか・・・」

「確かにな・・・このままじゃじり貧だ。・・・明命、武器借りるぜ」

「……わかりました」

「……来れ、呉の若き誇りよ、ここに集いて呉王の力を呼び覚ませ」

武器が融合して刺天猛虎になる。

「……一気に決めないと……タアアアツ!!」

槍を構えて連続攻撃を繰り出す。

カキキキンツ!

「ヤヤヤヤツ!!」

「くう……!」

蓮華の手に限界が来たのが分かる。

「ウラアアアツ!」

カキヤアアンツ!

蓮華の手から南海霸王が飛ぶ。

「これで……」

止めを差そうとした瞬間、寒気がする。

「……やっぱり君は厄介だね」

背中に手が当てられる。

「お……」

アイオーニオン・ペトロシス
「永久石化」

やられた。そう思った時、何かに突き飛ばされる。

「ぐあ……」

そして起き上がった時に見たものは……

「……驚いたね。まさか他人の為に身を投げるとは……」

「れ……」

「りょ、う……」

俺の身代わりになったのは……蓮華だった。

「亮……」

蓮華が石化していくなか、手を伸ばしてくるが……俺はその手を掴めず、その前に蓮華は完全に石化した。

「あ、ああ……蓮華……蓮華アアアアツ!!!」

俺は蓮華を石化させた……フェイト・アーウェルンクスを睨み付

ける。

「蓮華様を・・・蓮華様をよくも・・・」

「・・・意味がわからないね。君達はこの人形を消そうとしてたじやないか」

「蓮華は人形じゃない!」

「人形だよ。・・・勿論、君達もね」

「・・・ゴタゴタうるせえ!!ぶっ殺してやらあああ!!」

俺と明命が飛びかかろうとした瞬間、

ドクン・・・

「が・・・!?!?」

「あ、う・・・!?!?」

俺と明命は謎の苦しみに襲われ、その場につづくまる。

「ガアアア・・・!」

「ア、アアアア・・・!」

そして俺と明命から黒い何か飛び出て空中でソレが形作る。

「な……!? 亮……!?」

そこにいたのは全身が黒い俺だ。

「は……はははは！遂に復活できましたよ！」

だがその口から出された声は俺の声ではない聞いたことのある声……
コイツは……コイツは……!

「……貴様が……于吉ううう!!」

「くくく……お久しぶりですね……大澤亮」

「何でだ……何で貴様が……」

「保険を掛けておいたのですよ……あの世界でね」

「なんだと……」

「周泰と呂布の心に細工を施したのですよ！私と左慈の魂を刻み込んだのです！」

于吉は何が嬉しいのか声のテンションが高い。

「貴方が五十嵐咲が闇に染まる時、細工が作動してその闇と刻み込んだ魂が新たな身体を構築する……素晴らしい……本来なら左慈も復活させる予定でしたが、生憎五十嵐咲は闇を完全に我が

物にしてしまっている……ですが私だけでも蘇れば充分！アーツ
ハハハ！！」

俺は立ち上がる。

「……じゃあ……思春や亞莎……蓮華を差し向けたのは……」

「勿論この時の為ですよ！」

「……許さない……」

俺は刺天猛虎を構え直す。

「……やるのですか？……そうだ、貴方も仲間になりませんか？
楽しいですよ……外史を破壊する時のその世界の人間の絶望する
顔を眺めるのは……」

「黙れえええええ！！！」

刺天猛虎をメチャクチャに振り回す。

「おやおや……」

于吉は黒い鈴音で涼しい顔をしながら攻撃を受け流す。

「短気ですねえ、そんなんですから、被害が増えるんですよ？」

「ダメレ……ダメレダメレダメレダメレダメレダメレエエエエ！」

「！！！」

だが怒りに任せた攻撃は届くことはなく。于吉に刺天猛虎を弾かれる。

「ふ……終わりです」

ズシヤッ

「が……」

于吉の一撃が俺を斬り裂いた。

「亮——ッ！！！」

明命の悲痛な叫びが聞こえる。……俺は地面がなくなったような感じに襲われ、その場にうつ伏せに倒れる。

「ふむ……浅かったですか」

「亮！立ってください！立って……立って逃げてえええ！！！」

明命の声がおぼろげに聞こえる。

「（もう……いや……）」

諦めかけたその時、声が聞こえた。

「……あら、諦めるにはまだ早いんじゃないかしら？」

聞いたことのある声。そして空間が開いて中から出てきたのは……

「ゆか……り……」

「久しぶりね、亮」

八雲紫がそこにいた。

「おや……珍しい顔ですね」

「そういう貴方はウザイ声ね」

「コレは厳しい……それで、私と戦うおつもりですか？」

「……違うわ。貴方と戦うのは……彼女達よ」

そう言ってスキマから誰かが飛び出して于吉を吹き飛ばす。

「ぐー!?……ほう、これはまた……」

そこに立っていたのは……

「……どうした、もう終わりか？亮」

「……諦めるなんて亮様らしくありませんよ」

大切な……仲間……

「思春……亞莎……!」

「于吉・・・わが主と仲間を傷つけた罪を償ってもらおうぞ！」

「・・・覚悟してください！」

二人は何かを溜めるように構える。

「ハアア・・・」

「フウウ・・・」

思春の目が真紅にそまり、亞莎の身体に闇が纏う。

「「タアアアツ!!」」

二人とも敵として現れた時と同じ姿になる。

「・・・その、姿・・・」

「私達はどんな力であれ強くなりたいんです」

「・・・守りたいものを守るためにな」

「・・・さすがに分が悪いですね。・・・退きますよ、フエイト」

「・・・そうだね。行こうか」

「・・・ッ! 待て!!」

于吉達は地面に吸い込まれるようにして消えた。

「……ぐう……！」

斬られた部分が痛む。……だけど死ぬような傷じゃない。……それよりも、俺は身体を引きずりながら石と化した蓮華に近づく。

「りよ、亮様！無理をしないでください！」

亞莎に身体を支えられる。

「だけど、蓮華が……俺は……蓮華の剣と盾になるって決めたのに……そのどちらにもなれなかった……！」

「……大丈夫よ。まだ彼女を助ける手段はあるわ」

「どうやって……」

「幻想郷には不可能なことはないわ」

紫の言葉に、目に嘘偽りはなかった。

「……亮」

思春が歩いてくる。

「思春……？」

「蓮華様は私達に任せてくれ」

思春の目には強い決意が宿っていた。

「だけど……」

「頼む。……それにお前はこの物語を終わらせなければいけないのだろう。……私と亞莎に任せてくれ」

「……わかったよ……蓮華を……頼……む……」

「亮様!？」

俺は全ての感覚と意識を手放した……

舞踏会（後書き）

ゆり

「これは急展開ね・・・」

日向

「そのタイミングでどうして俺らが担当なのかは疑問だけどな・・・」

ゆり

「ほら、アレよ、中の人」

日向

「随分前にそれが原因で蓮華に追われたのを忘れたのかよ？」

遠坂

「ああ、アレね」

日向

「そんでなんどお前までいるんだよ？」

遠坂

「いるんだからしょうがないでしょう？わかりきった事聞かないで
「よ」

日向

「うわぁ・・・ゆりっぺが増えた気分だぜ」

士郎

「まあ頑張れよ。何だかんだでここまで付き合えてんだからさ」

日向

「・・・だな」

ゆり

「そういえば日向君。ユイはどうしたの？」

遠坂

「そうね、セイバーは？衛宮くん」

日向

「ユイはガルデモの面々と出掛けたよ」

士郎

「セイバーは古菲とか刹那と特訓してたな」

遠坂

「うわ・・・何でそんなことしてんのよ」

士郎

「？なんでさ。セイバーらしいだろ？」

ゆり

「さすがに日向君も女の子だけの集団には着いていけなかったのね」

日向

「俺はギャルゲーの主人公じゃねえからな。多数の女子を相手にするんのは・・・」

士郎

「・・・コレなのか？」

日向

「違いよ！？つか何でお前がそのネタ使うんだよ！」

士郎

「何となくだよ」

ゆり

「まったく、日向君はすぐ叫べばいいなんて思うんだから」

日向

「叫びたくもなるわああ！何か俺、キャラコメでもこの後書きでも叫んでばっかだああああ！」

遠坂

「・・・というわけで日向君が壊れたので今回はここまで」

士郎

「次回の真似と開閉と世界旅行」

ゆり

「次回も絶対に見なさい！」

悔しさゝ(前書き)

テーストー、何故やるのー、教師の勝手でしょー・・・黒一文字様！この間ありがとうございまして！ではござ。

悔しき〜

??????

「亮……」

「蓮華……?」

蓮華に歩み寄ろうとする。

アイオーニオン・ペトロシス
「永久石化」

「な……!?!」

蓮華が一瞬にして石になり、砕かれる。

「……残念だね。君は誰も守れはしない」

「あ、ああ……うわあああああああ!?!?!」

オレは……オレは……!?!?!

亮

「亮！落ち着いてください！亮！」

「ワアアアア！？・・・ハッ・・・ハッ・・・う、ああ・・・」

気がつくとも命は俺に抱きついていて。・・・その身体にはいつかの事を思い出すように痣や引つ掻き傷だらけだった。

「あ・・・俺、また・・・ああ、ああ・・・」

「亮・・・大丈夫ですから・・・！私は大丈夫ですから・・・！」

明命が一層強い力で抱き締めてくる。

「は、は・・・ぐっ・・・！」

胸が激痛に襲われ、ベッドに倒れこむ。

「亮！？大丈夫ですか！？」

「う、うう・・・うう、は・・・」

「ハルナさんの船の中です」

「……俺……蓮華を守れなかったんだ……俺が不甲斐なかったから……」

「亮……悔しいのは、悲しいのは亮だけじゃありません……私も……！あの時、一步も動けなかった……！！」

明命は唇を強く噛み締める。

「……そうだ……悲しんでる場合じゃない……于吉を……倒さないと……！！」

俺は無理矢理身体を起こす。

「……亮！ダメです！まだ休んでないと……」

「休んでる暇はない……！！……それとゴメン、明命……」

「え……」

俺は明命に簡単な回復魔法をかける。

「……また、お前を傷つけてしまった……あの時のように……」

すると明命は微笑む。

「……なら大丈夫です」

「え……」

「だって“亮様”はその時に戦う決意をしました。……なら“亮”は同じ状況の今は何を決意しますか？」

明命はそんなコトを言う。

「……今は……」

俺は明命の目をまっすぐ見据える。

「……今はこの物語を終わらせるコトに全力を尽くす！……蓮華のコトは紫に……思春や亞莎に任せよう。……俺達は今の物語に決着をつける！」

「……ふ、随分と元気じゃないか」

そう言って入ってきたのは……

「龍宮！？」

龍宮が部屋に入ってくる。

「ああ、今先生がダイオラマ球に行こうとしているんだが、目覚めたら亮にも来てほしいそうだ」

「・・・ネギが？わかった」

そして立ち上がる。

「・・・ぐ・・・!？」

胸が痛み、呻き声を出す。

「亮！無茶をしないでください・・・」

明命が支えてくれる。

「・・・一応咲さんが回復魔法を使ってくれましたが・・・傷は残るみたいです」

「・・・いいさ、傷が残るならソレは俺自身への戒めだ」

そう言いながら俺は魔法球へと歩いていく。

「……そういえば明命が俺を運んだのか？」

「……いえ、私も気絶してしまったので……」

「……じゃあ思春か亞莎が運んでくれたのかな……」

「……よっ、と」

「……ん？来たのか？」

咲と恋が目の前にいた。

「……」

恋は何処か暗い顔をしている。

「……恋の奴、どうかしたのか？」

俺は咲に聞く。

「ちょっと、な……恋の友達が一人犠牲になっちまったんだ」

「あ……」

そして咲は俺を見ながら言う。

「……明命から聞いたよ……自分を責めるなよ？」

「……」

「……于吉のヤローもフェイトも皆ぶっ飛ばしてこの世界を終焉に導こう」

「……ああ」

「……咲は、辛くないの……？」

恋が咲に聞く。

「……咲も仲間を消された」

「……大丈夫さ、のどかが言っていた。消された人も元に戻せるってさ……」

「……あ、そうだ……ネギは？俺、アイツに呼ばれてただけ

ど……」

「……アイツなら今寝込んでるよ」

「え？」

「……闇の魔法を使いこなす特訓をしててな」

よく見たら咲や恋は所々汚れていた。

「……一歩間違えたら自分もあーなつてたかもしれないって思うとゾツとするな……」

「……アイツも大変なんだな……あそこの小屋か？」

「いや、アッチは捕虜部屋」

「捕虜？」

俺は咲に聞く。

「そ、フェイトの部下がアスナに化けててな……でもソイツはどつやらもう敵対するつもりはないらしい」

「……そつか……んじゃ、アッチ？」

俺は違う小屋を指差す。

「……ああ、行ってこい……さて恋。俺達も鍛練するか」

「……(コケッ)……もっと強くなる……!」

「……私もお付き合いします!」

「……俺は用事がすんだら参加するよ」

俺はドアをノックして入る。

「……あ、亮君……」

運動部四人組がネギの看病をしていた。

「よう……ネギの看病?」

「うん……そうだよ」

まき絵がそう答える。

「・・・亮、さん・・・」

ネギが起き上がる。

「起きたらアカンよネギ君！」

亜子が止めるがネギはソレを無視して俺に言う。

「・・・思春さんからの伝言です」

「・・・真名を許可されたのか？」

「・・・ハイ。・・・僕が気絶する少し前に亮さん達を背負って思春さんと亞莎さんが来て・・・」

やっぱり二人が運んでくれたのか・・・

「・・・そして亮さんが起きたらこう伝えてくれと言われました。・・・『今やらなければならぬコトがあるのなら戦え。後悔するのは後でもできる』・・・だそうです」

「・・・思春らしい・・・」

「・・・そして『蓮華様の事は任せてください。必ず元に戻しますから』・・・とも」

「亞莎か」

「・・・最後に、コレを」

そう言つてネギが差し出したのは・・・

「南海・・・霸王・・・」

孫家に受け継がれている剣。それをネギが持っていた。

「・・・お二人が亮さんに託すそうです」

「・・・」

ネギから南海霸王を受け取った瞬間、光が視界を染めた・・・

「何だ・・・？」

「亮」

懐かしい声が聞こえ、その声の方に向くと。

「はっい 久しぶり」

「雪蓮！？どうして・・・」

「・・・南海霸王を通して私達の意味を繋げているのよ」

「蓮華まで……」

「私達だけじゃないわよ？」

雪蓮に言われて目を凝らすと確かに後一人いる。

「……初めまして、はおかしいな。私のことはわかるな？」

「……はい、文台さん」

雪蓮に似ているが、身に纏う空気が違う。

「……すまないな。娘が世話になっている」

「いえ……世話になっているのは俺の方ですし……それに、俺は……」

「気にするな、亮」

「蓮華……」

「私が好きであなたを庇ったのよ？亮が気にすることじゃないわ」

蓮華の口調が優しいものになっていく。

「そうそう。それに私の命も救ってくれたんだから、胸を張っていいのよ？」

「……」

「今は蓮華がいなくなっちゃったから私が呉に戻ってるけど、もし私が死んでいたらまだ幼いシャオに全てを背負わせてたかもしれないのよ？」

「でも……」

「悩むな！」

文台さんに一喝される。

「……！」

「男なら堂々と生きろ！後悔するのは全てが終わった後か死んだ時にしろ！」

「……」

「……私も死んでから後悔したな。どうして娘達にもっと親として接してやれなかったのかと……」

「文台さん……」

「祭や冥琳にも悪いことをした。大事な時に死んでしまったのだからな」

「ホントよ。母様が死んでから大変だったのよ？まだ未熟だったのに表舞台に立たされて」

「……姉様は更に無責任に私に王を押し付けましたけどね」

「う……ほら、それは混沌と化した大陸を見て廻るために……」

「あちらこちらの店で食いまくったのみまくったりしてただけじゃないのか？」

「ちょ、母様なんで知って……」

「私は常に見ているからな。雪蓮も蓮華も小蓮も……そして呉の皆をな」

「母様……」

「そして、亮」

「え、あ、はい！」

いきなり名指しで呼ばれ、慌てる。

「……我らの誇りを受け継いでほしい」

「え……」

「つまり、南海霸王を託すってことよ」

「確かに今の亮ならその資格は充分ある」

「雪蓮……蓮華……」

「……そして、もし受け継いでくれるのなら、二度と後悔して立ち止まらないでくれ」

「……」

俺はしばらく溜めて、ハッキリと返事をした。

「……わかりました！呉の誇り……受け取らさせて頂きます！」

「……ありがとう、なら後一つ託すものがある」

視界が再び白に染まり始める。

「……私の真名は水蓮^{すいれん}だ。私の真名も託そう」

「……じゃ、亮が帰ってくるのを待ってるわね」

「……私の事は大丈夫だから、亮は明命をお願いね」

「……う君！亮君！」

俺はハツとする。目の前にはアキラがいて、俺の肩を掴んで揺すっていた。

「……大丈夫？いきなり呆然と立ち尽くして声を掛けても反応がないから……」

「あ、ああ……大丈夫……」

夢……じゃないよな……

「……亮さん……僕も……いつしよに戦……う……」

「ネギ君!？」

ネギが倒れそうになるが、祐奈がそれを支えて防ぐ。

「ハアツ……ハアツ……」

「ダメだよ寝てなきゃ!まき絵、足持って!」

「う、うん!」

二人がかりでネギをベッドに戻す。

「……俺、少し用事があるから、ネギの口頼むよ」

俺はそう言って外に出る。

「・・・明命」

俺は魂切を構えて集中していた明命に声を掛ける。

「・・・亮？」

「・・・鍛練してくれないかな」

俺の意志が伝わったのか、明命は笑顔で言った。

「はい！いくらでも！」

「ああ・・・頼む！」

俺は左手に鈴音、右手に南海霸王を持ち、走り出す。・・・迷いを断ち切り、今は戦う。・・・いつか呉の皆の元へ胸を張って帰れるように・・・！！！！！！

悔しさ（後書き）

呉

雪蓮

「何よこの豪勢な料理は・・・」

亮

「この間知り合ったとある世界の人からもらったんだ」

小蓮

「美味しい〜」

蓮華

「こらシャオ！つまみ食いは止めなさい！」

亞莎

「お、落ち着いてください蓮華様」

祭

「酒は無いのか？酒は」

亮

「・・・ゴメン、酒にいい思い出はないよ」

冥琳

「しかし中々のモノだな。コレを調理した者はさぞ料理が得意な
だろうな」

明命

「・・・痛た・・・」

穩

「どうかしたんですか？」

亮

「単なる二日酔いでしょ。大丈夫か？明命」

明命

「は、はい・・・」

雪蓮

「さ、早く食べましょうよ」

穩

「ですね」

亮

「・・・よし、それじゃ皆席に座って・・・手を合わせて、せーの
っ！」

全員

『いただきます！』

亮

「・・・サンキューな、クレス。皆喜んでるよ・・・今度はコツチ
が何かしないとな・・・」

制御（前書き）

・・・今回、亮がやらかしてくれます。ではどうぞ。

制御

・・・俺と咲は今、闇の魔法が暴走したネギと対峙している。

「・・・あー、勝てる気がしないなー・・・」

俺はぼやきながら人解を構える。

「・・・ま、やるっきゃないな。俺も一度は呑まれかけた身。闇の先輩の意地を見せてやるさ。・・・ハアッ！」

咲は姿を変える・・・って、おい。

「何だその悪役みたいな姿は・・・」

「え？・・・ああ、亮には見せてないっけ？Dモードを更に一段階上げた・・・そうだな、Bモードと名付けるか」
ビースト

「にしてもその黒い翼とか金色の髪とか目とか・・・」

すると咲は目元を押さえる。

「・・・目まで変わってるのか？」

「・・・ああ、金色の猫目になってるぞ」

「マジか・・・その内DモードのDが）デビル（になりそうだな・・・」

「……って亮さん！咲さん！」

刹那が叫ぶ。振り向くとネギが突っ込んできた。

「うおっ!?!」

「よっと!」

咲が俺を踏み台にして避ける。

「咲、テメ……飛べるなら自分で飛びやがれ！」

「悪い、どうしても翼の存在を忘れがちで……うお!?!」

ネギが繰り出す拳を咲が避ける。

「俺を無視すんな！」

俺はネギを殴り飛ばす。

「……チツ、マジでやってやるか」

咲が空間から偃月刀を取り出す……あれ？

「お前、キープレードは？」

「……キープレードだけじゃ戦術の幅が狭いからな。ちなみに」
「レは霞の偃月刀だな」

「……似合わないな……よっ!?!」

雷天大壮を使ったネギの打撃を避ける。

「……？」

“避けられた”？……おかしい、雷天大壮は明命ですら知覚できなかった……なのに俺が直感で避けられた？

「……そりゃそうだ」

「咲？」

「あれじゃ力を使ってるんじゃないかって使わされてるな」

「……つまり、弱いつてことか」

実は今こうやって会話している間も俺達はネギの攻撃を避け続けている。

「さて……」

俺は拳を握りしめる。

「……やりますか」

咲が偃月刀を構える。

「ウオオオオツ！！！！」

ズガアアンツ！！

その一撃でネギは地に沈んだ……

「・・・ウオオオオツ！」

「ヤアアアアツ！」

そして今は俺と明命が戦っている。明命は強くなるため、俺は強くなるためと同時に南海霸王に慣れる為だ。

「フッ！」

俺は鈴音と南海霸王を投げる。

「ッ！」

カキインツ！

それは弾かれ、二本の剣は宙へ舞う。

「今だ！」

俺は人解で接近戦に持ち込む。

カキキインツ！

手甲と刀がぶつかり、火花を散らす。・・・そして俺は一瞬の隙を突いて明命の腹に手を当てる。

「しま・・・」

「気功破！」

ズンツ！

手に気を込めて明命を打ち抜く。

「く……」

だが明命にあまりダメージは見られない。……が、俺の目的は違う。

「ハアッ！」

俺はエクシアよろしく回転しながら跳ぶ。……そして跳んだ先にあるのは……二本の剣。

「ウオラアアアアアア！！！」

カキヤアアンツ！！

全身全霊の一撃を放つ。

「ぐ、うあ……！！！」

ズガアアンツ！

俺達はお互いに弾き飛ばされる。

「く……まだ……！！！」

「……いえ」

明命が軽く息を吐く。

「・・・私の負けです」

明命の手に魂切は無かった。

「・・・もう亮は初めて会った頃とは全然違いますね」

「当然だ。人は日々進化する生き物だからな」

俺は笑いながら明命に言う。

ズズ・・・ン・・・

遠くから地響きがしてくる。

「・・・ネギさん・・・大丈夫でしょうか・・・」

俺は明命の頭に手を載せる。

「大丈夫さ、アイツなら・・・主役だしな」

「ふふ・・・何ですかそれ？」

「・・・ホントバカップルだよな」

咲が飛んでくる。

「何やってんだ？咲」

「せつかく翼があるのに飛べないのは勿体ないから飛ぶ練習だ」

「……ますますキーブレードの出番が……」

「……でも素早さはボードの方が早いから、まだ利用価値は全然ある。……それに俺はキーブレードがないとFF魔法が使えないんだよ」

「ふーん……恋は？」

「アイツは今ネギと戦ってるよ」

さっきの地響きは恋か……

「……なあ亮……」

咲が言いづらそうに口を開く。

「大丈夫なのか？」

蓮華の事だろう。咲は自分が闇に染まっているからか、人の負の感情に敏感になってる気がする。

「……ああ、大丈夫」

俺は南海霸王を見つめる。

「誓ったんだ・・・立ち止まらないって・・・！」

「・・・そうか、ならいいけどよ・・・無理するなよ。お前には」

「わかってる。・・・俺には明命や咲に恋・・・仲間がいる。俺一人で背負わないさ。・・・ま、さすがに于吉は俺が叩き潰したいけどな」

「それはお前と明命に譲ってやるさ。・・・俺と恋はフェイトをぶっ飛ばす」

咲が掌に拳を打ち付ける。

「・・・まずはネギだけだな・・・」

「・・・ああ、アイツが闇を克服しないコトには話にならない」

俺達はそのまま自己鍛練を続け・・・その夜。

「あ、あの・・・亮君？」

アキラが歩いてくる。

「どうしたアキラ？眠れないのか？」

「い、いや・・・その・・・」

「・・・待った」

「え・・・?」

俺は物陰に向けて声を出す。

「・・・祐奈、まき絵、カモネギ・・・それに明命・・・出てこい」

感じた気配をそのまま言い当てるとぞろぞろ出てきた。

「何やってんだよお前は?」

「ま、まあアキラの行動を見たくて・・・」

「でもアキラがね・・・」

祐奈とまき絵がよく分からない口トを言う。

「そ、そんなんじゃない!・・・それに、亮君には明命が・・・」

・・・明命がどうしたんだ?

「アキラさん、私は構いませんよ?」

「え・・・」

「亮はこんな人ですから、好きになっても私はしょうがないと思っています」

「は……？誰が誰を好きって……」

俺は思考がついていつてない。

「旦那、つまり姉さんは旦那のコトが好きなんですよ」

カモネギに言われて……思考がフリーズする。

「え……ええええええええええ！？アキラが！？何で！？」

「亮」

明命に呼ばれ、俺は向き直る。

「女性が好きと言っているのに無下にはしませんよね？」

「み、明命……私なんか亮君は……」

「何言ってるんのアキラ！？アキラはそこらの人より美人だから！」

祐奈がアキラに言う。

「……りよ、亮君！」

「は、はい……」

思わず直立不動になる。

「……その、私と……仮契約してほしい……」

「……ッ！」

顔が一気に赤くなる。

「……」

俺は明命に視線を向けるが、明命は頷くだけだ。

「……いいのか？俺は消えるかもしれないんだぞ？」

「……覚悟の上だよ」

アキラは顔が赤いながらもまっすぐに見つめてくる。

「……分かった。カモネギ！」

「OKッス！旦那！」

カモネギが魔方陣を描く。

「……」

「……」

そして、口に柔らかい感触。

「バックティオー
仮契約!!」

光が満ち溢れ一枚のカードが現れる。

「あー、何だ・・・」

俺はカードを見せて一言。

「この戦い・・・仮契約した以上、共に最後まで戦うぞ」

「・・・うん!」

俺は守らなくちゃいけない相手が増えたコトに更に気が引き締まった。・・・俺を好きと思ってくれてるならその期待に応えないとな・・・

制御（後書き）

咲

「……ついわけで今回はボツになったネタを紹介しようかな」

亮

「えーと、例えば……？」

・亮と共に行くのは亞莎だった

亮

「……マジ？」

咲

「ボツ理由としては亞莎だと戦力が心許ないのでは？と考えたからだな」

亮

「……今は恐ろしい程強いがな……え、と次は……」

・咲の性格は大人しいタイプ

亮

「……ないな」

咲

「断言するなよ！……まあ、俺も今の性格でよかったと思ってるけどな……」

・当初二人にはまったく関係ないパートナーを付ける予定だった

亮

「へー……」

咲

「最初は二人のリインフォースをパートナーにする予定だったみたいだけど、作者の力じゃ、あの時点で四人介入は無理だったみたいだ」

・このかがミラーモンスターに拐われて刹那が変身する

亮

「この作者は仮面ライダーが好きだからな。……だけどボツ理由は？」

咲

「使う時期がわからなかったのと刹那はファムがあるならまだしもこのかはどうするかと悩みが尽きなかったためだな」

・本当は世界融合の時で話を終わらせる予定だった

亮

「ええええ!？」

咲

「……予定としてはあの時点で俺と亮は消滅。明命と恋は恋姫の世界に戻り、数年後皆の元へ俺達が帰ってくるというベタな終わりだったらしい」

亮 「はー・・・」

咲

「だけどネギマが中途半端だったりしたため、Angel Beastsを通して復活させるという荒業を使ったんだ」

亮

「つか、何でお前ボツ理由知ってんだよ？」

咲

「カンペだよ、カンペ」

亮

「・・・次回の真似と開閉と世界旅行！」

咲

「次回もまた見てください！」

闇の真髄〜(前書き)

このままだと35巻が出る前に追い付きそう・・・ではどうぞ。

闇の真髄

あれから数日・・・外の世界では数時間が過ぎた。俺達は今砂浜にいた。

「スゴイスゴイ！どこまでも伸びるよ！」

まき絵はアーティファクトのリボンでかなり遠くにあるヤシの実を取る。

「うひゃー！スツゴイ・・・でも、なんかコレ手にしっくりくるんだよねー」

祐奈や亜子もアーティファクトを確認する。・・・そう、この三人はネギと仮契約した。アキラは・・・

「アーティファクトがでない？」

「うん・・・カードが消えて何も起こらないんだ・・・」

ハズレ？単なる仮契約カードだったのか・・・？

「うーん・・・つか、亮。お前、アキラと仮契約したのか？」

咲が不意にそんなことを言う。

「・・・そーだよ、悪いか？」

「別にー、俺には関係ないからな」

俺はとりあえずアキラに向き直る。

「・・・もしかしたら身体強化系・・・？でもそれならアキラ自身
がわかるハズだし・・・」

俺はブツブツ考えに没頭する。

「おーい？亮ー？・・・ダメだ、完全に思考に浸ってるな・・・ア
キラ、とりあえずこの偃月刀持ってみるよ」

「う、うん・・・え！？」

アキラの声が思考から現実に戻したが・・・アキラを見てフリ
ーズした。

「な・・・な・・・」

「み、見ないで！」

アキラがその場にうづくまる・・・何故か？・・・それは・・・

「何でアキラの服が霞に・・・？」

咲が疑問を言う。そうだ、張遼と同じ服装になっているんだ。・・・

まさか、

「アキラ、コレを持ってくれないか？」

俺は鈴音をアキラに渡す。

「え……わ!？」

鈴音を手にした瞬間、アキラの服装が思春のモノになる。

「なるほど……アキラ、ちょっと……許せ！」

俺はアキラに南海霸王を振り下ろす。

「!!!」

カキーンッ!

「な……」

俺の本気の一撃はアキラが手にした鈴音で弾かれていた。

「そのアーティファクトは真似能力……つまり俺と同じように他者の能力を扱える……」

「……亮のとは違って変わるのには服装だけか……後触れてる武器限定か……」

「……どうやって戻ると？」

アキラが服の裾を抑えながら聞いてくる。

「普通に去れ（アベアット）すればいいんじゃないのか？」

そう言ったらアキラは素早く元の姿に戻る。

「……これはアキラの特性と言うより亮の特性だよな」

「……じゃあじゃあ、ネギ君の杖を触ったらネギ君の服になって魔法が使えるの？」

まき絵がそう言う。

「……そうだな、アキラ……中々レアなアーティファクトを引き当てたな」

「……でも、さっきのは恥ずかしいんだけど……」

「……そうか？俺も着てるけど中々動きやすいよ？」

「亮君のはズボンがあるけど私のはないじゃないか！」

アキラが涙目になりながら訴える。

「あはは……でも、その能力は好都合。咲」

俺は咲に視線を向ける。

「・・・はいよ。開け」

咲が軽く手を振ると空間から武器が出てきて砂浜に刺さる。

「・・・こんなに作ったっけ？俺」

「・・・あの世界は構造さえ知ってれば何でも作れたから・・・調子にのって作りすぎた」

「・・・咲君、こんなにぎょーさん武器持ってて全部使ってるん？」

咲は近くにあった直槍とさっきアキラに渡したのとは違う偃月刀を手にとる。

「愛紗に星・・・皆元気かな・・・」

咲は武器を見つめて何か色々ブツブツ呟き始めた。

「・・・んで、アキラには何かを持ってもらいたいんだよね」

「え、でも・・・」

「大丈夫だって、別に人を殺すワケじゃないんだから。単にお守り程度だよ」

「う、うん・・・」

そう言つてアキラは武器を選び始める。・・・アキラは武器の性能云々よりまず変わった際の服装の方が重要らしい。それに祐奈やまき絵に亜子が加わつてアキラが着せ替え人形みたいにされているのを横目に見ながら俺と咲はネギの所に向かう。今は巻物エヴァが相手をしていたハズ・・・

「・・・明命」

「恋」

「亮、咲さん」

「・・・二人とも」

「ネギは？」

「・・・見てください、段々と速度が上がっているんです」

明命は百聞は一見にしかずというように俺に実際に見ると言った。・・・確かに劣化コピーとは言えかなりの実力を誇るエヴァに互角の戦い・・・いや、ネギが押し始めていた。

「……う」

咲が軽く呻く。

「……咲、大丈夫？」

恋が心配そうに聞く。

「……大丈夫、俺の闇がネギの闇に惹かれただけだ」

「……疼くのか？」

俺は咲に聞いてみる。

「暴走とまではいかないけどな。……けど俺自身闘争本能に呑まれそうになる」

「どこぞの戦闘民族かお前は、Bモードなら更にスーパーなんたら3みたいだし」

「言うな、ああ見えて結構俊敏に動けるんだぜ？……闇はいいぞ？亮も染まってみるか？」

咲が怪しい笑みを浮かべながら言う。

「……止めとく、俺が闇に染まりかけたせいで于吉が復活しちゃうたからな」

「あ……悪い……無神経だった」

咲がバツが悪そうに頬を掻く。

「……気にするなよ、もう気にしてないから。……時は戻らない、なら起きたことはもう向き合うしかない」

「……そうですね。絶対に皆の恨みを晴らしましょう!」

明命が拳を突き出しながら意気込む。

「……つと、ネギは……」

ネギを確認しようとした瞬間……

ズドンッ!!!

「うわっ!?!」

派手な音と共に水柱が上がる。……そして水霧が晴れた時、エヴァが膝をついていた。俺達は二人に急いで近づく。

「……まだ未完成……不完全だ。いつまた闇が貴様を喰らい尽くそうとするかわからぬぞ」

エヴァがネギに問う。

「わかっています。どうも……これを抑えるのは僕一人じゃ無理っばい……だから僕は前だけ見てようかと」

「何?」

「闇に取り込まれそうになっちゃったらそれはその時、あとは皆にお願いしようかと思って。白き翼の皆ならきつと何とかしてくれま
す」

・・・丸投げじゃん、ソレ。

「それに・・・闇の魔法に取り込まれても、死ぬか、魔物になるだけでしょ？・・・僕の相性からいって死ぬ確率は低いです。それに・・・魔物になっても・・・」

「ん・・・」

ネギは笑いながら言う。

「それって師匠と同じになるってだけじゃないですか。だったらいいかなって。・・・僕、師匠のことは大好きですから」

「ぬ」

軽い爆弾発言をネギがかます。

「アレ？師匠、どうかしましたか？」

エヴァが断罪の剣を出す。

「そーゆー台詞は・・・400年早いわガキがー！ツッ！」

「キャー！ー！ー！？」

ネギがぶっ飛ばされる。

「……ところでネギさん、貴方が見つけた答えとはなんなのですか？」

明命がネギに聞く。

「……僕は……」

ネギは一度言葉を区切る。

「僕はフェイトと友達になりたいんです」

ネギはハッキリとそう言った。

そして俺と咲は最後の模擬戦に入る。

「……俺達も総仕上げだ、頼むぜ、咲！」

俺は南海霸王と鈴音を構える。

「……ああ、いくぜー!!」

咲は十文字槍と金棒を構える。……バランス悪くないか？ソレ。

「ソリヤアアア!!」

金棒が迫る。

「……受け止めたら折れるよな……」

俺はソレを受け止めずに避ける。

「そらそらそらそらあ!!」

すると今度は槍で連続突きを放ってくる。

「セイツ!!」

カキキキンッ!!

それらを全て弾く。すると咲は俺から距離を取り始めた。

「……?」

「……開け」

すると咲の後ろから大量の武器が現れる。

「おい……まさか……!?!?」

「飛べッー!!」

ズドドドドンッー!!

まるでギルガメッシュのように武器を飛ばしてくる。

「嘘だろー！ー！？」

俺は必死に飛んでくる武器を避け、弾き、かわしていく。

「く……!!」

「何処を見ているんだ？」

背中に手を当てられる。

「闇の吹雪」
ニウイス・テンベスターズ・オブスクランス

ズガアアンッー!!

辺りが冷気に包まれる。

「……やり過ぎたか？」

「……別に」

「ッー!？」

俺は咲の背後に回り込み、弾き飛ばす。

「ぐ……は、やるじゃねえか」

「本気出せよ、咲。このままじゃ負けるぜ？」

「……上等ッ！！ハアアアアッ！！」

咲はBモードを発動させる。そして槍と金棒の代わりに大弓を構える。

「貫けえ！！！」

咲は闇の力で作った矢を放ってくる……けど

「見える！」

俺は矢の間を潜り抜けて咲に接近する。

「……なら、コイツだ！」

咲は足下に刺さっていた片鎌槍を引き抜く。

「……テリヤアッ！」

「ソイヤッ！」

カキヤアアッ！

俺達そのまま打ち合い続ける。

「……やっぱりコレか……来い、ウェイトウザドゥーン!!」

咲がキープレードを手に取る。なら……

「来れ、呉の若き誇りよ!ここに集いて呉王の力を呼び覚ませ!……
・吼えろ、刺天猛虎!」

武器を融合させて構える……あれ?

「何だ……コレは……」

刺天猛虎の形状が若干変わっている。刀身も伸びてるみたいだし……
・そうか、本物の南海霸王を使ったからパワーアップしたんだ。

「ウラアアアアア!!」

「オルアアアア!!」

ズガアアアアッ!!!!

俺達はぶつかり合い……倒れた。

「・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・相討ち・・・？」

「ゼエ・・・ゼエ・・・だな・・・」

「つか・・・何だよあの技は・・・反則だろ・・・」

俺は咲の武器飛ばしに抗議する。

「前に・・・サキがやってたのを思い出してな・・・」

サキ・・・ああ、咲の女バージョンの奴か。

「亮ーーーーッ！」

明命と恋が走ってくる。

「・・・咲、平気？」

「平気平気」

「まったく・・・亮！咲さん！決戦前なのに倒れるほど手合わせを
してどうするのですか！」

「う・・・ほら、俺達は多少の無茶ぐらい・・・」

「お二人の無茶は無謀なんです！もう少し自重してください！」

「・・・スママセン・・・」

俺達は普段怒らない人間が怒るとどうなるか再び身に染み渡らせる
のであった……

闇の真髓（後書き）

咲

「今回はボツネタバージョン2だな」

亮

「まだやるのか・・・」

・本当はガルデモ全員戦わせる予定だった。

亮

「・・・マジか、ひさ子だけで『えー？』みたいな空気があったのに全員は・・・」

咲

「仮面ライダー響鬼シリーズを使わせる予定だったんだと」

亮

「ボツにして正解だったの・・・」

・Fate編はセイバールートではなく凜ルートでの予定もあった。

亮

「？コレは何でボツになったんだ？」

咲

「途中から俺達が絡みにくいと思ったんだってさ」

亮

「まあセイバーとアーチャーが途中離脱するしな・・・」

・亮と咲はどの世界でも敵対するハズだった。

亮

「そついや俺と咲が敵対したのって二回ぐらいだよな？」

咲

「恋姫の時とネギまの時だな・・・基本的に亮が主人公サイド、俺は悪役サイドの予定だったらしい。ボツ理由としてはさすがに何度も敵対するのはおかしいだろうと初期段階で考えから棄てられたな」

・一つの世界で一人ヒロインがつくハズだった。

咲

「コレの名残で亮がひさ子やアキラに好かれたんだな・・・まあ、ひさ子っつーかユイを除くガルデモ全員に好かれてたが・・・」

亮

「・・・お陰で俺は日々神経がすり減ってるがな」

・亮は鬼畜な性格をも持つ二重人格だった。

亮 「……え〜」

咲 「ちなみに鬼畜亮はあの思春ですら泣かせる程性格が最悪だったら
しい」

亮 「思春すらって……どんな虐めをしたらそうなるのやら……」

咲 「それでは次回、バージョン3もお楽しみに！」

亮 「まだあるのかよ!？」

咲 「それでは次回の真似と開閉と世界旅行！」

亮 「……次回もまた見てください」

突撃（前書き）

今回は後書きに別小説からゲストが来ます。ではどうぞ。

突撃

俺達はネギから少し遅れて外に出る。するとネギがやって来て言った。

「皆さん、丁度今作戦をまとめていたところです。甲板に上がってもらえますか？」

そう言われて俺達は外に出る。

「これは・・・」

「あ、来たね四人共。今から説明し直すよ」

ハルナが解りやすいように説明してくれた。

・全体を4班にわけろ。

1 ジョニーと言う人の船で待つ待機組。

2 脱出路を確保するグレートパール様号

3 宮殿突撃班A「アーニヤ救出」

4 宮殿突撃班B「最後の鍵奪取」

グレートグランドマスターキー

・侵入は王国の霊廟のバリアを突破し、警備の薄い下から侵入してそこから上がっていく感じ。

「メンバー構成は配ったプリントの通り、意見や要望があれば言うてください。作戦開始は約30分後、クルトさんとの通信後すぐです。食事やトイレは済ませておいてくださいね」

俺達はプリントを確認する。・・・俺と明命は宮殿突撃班Bか・・・咲と恋は宮殿突撃班Aだ。

「さて、それでは皆さん・・・よろしくお願いします」「コラー！だめだめ、リーダー！もっと気合いの入る奴お願いよ！」

ネギはハルナにダメ出しされる。

「で、ではあまり得意じゃないですけど・・・白き翼の諸君！！最後の戦いだ！！いくぞ！！」

『おおッ！！！』

・・・今さらだけど春日達までいるんだよね。

俺達は船の中にいる。

「いよいよだな」

「ああ、中に入れば俺達は完全に予測不可能になる」

「それは・・・この物語が終焉に近いからですか？」

「・・・終わり？」

明命と恋が聞いてくる。

「多分な。・・・絶対に勝つ・・・！」

俺は拳を握りしめる。その時、

ズガアンッ！！

甲板から音がした。

「ッ！恋！」

「……（コクッ）」

二人が走っていく。

「俺達も行くぞ！」

「はい！」

甲板に上がった時、目に入ったのは大量の化物。

「何だあの量……!?!」

「僕が数を減らして止めます！墓守り人の宮殿へ向かってください
！」

ネギが敵を蹴散らしながら叫ぶ。

「……俺も手伝うぜ！」

咲がボードを使って飛ぶ。

「く……飛べないのが腹立たしいな畜生！」

『発進！！』

ハルナとジョニーが船を発進させる。

『ーってちよっと待った待ったーっ！』

ネギと咲が討ち漏らした敵が着いてきている。

「く……やるぞ明命！」

「御意！」

俺と明命は船に近づく敵を倒していく。

「……恋もやる」

「気を付けるよ、あんまり魔力使うと後がキツイぞ」

「……大丈夫」

そう言っつて恋はブツブツと何かを呟き始める。

「……我を焼け（インケンダント・エト）彼を焼け（セント・ソールム・インケンダントデーヌメー・エト・エウム）其はただ焼き尽くす者」

「ちよ……」

その詠唱は……

「インケンディウム・ゲヘナエ
奈落の業火！」

ドガアアアンツッ！

敵の大半が消え去る。

「……さすがアリアドネー騎士団」

「いやいや……スゴすぎだろ」

明命と俺が言う。

「つか、大丈夫なのか？」

「……大丈夫、宝具より魔力は使わない」

「そうですね……」

『霧を抜けるわよ！』

二船は霧を抜ける。

「デカブツまで追いついてきたようだ、できればお前たちも手伝ってくれ！」

敵を迎撃していた龍宮がアリアドネー組に言う。

「では私たちは船体周囲を旋回しつつ、真掩にあたります！」

夕映達が飛んでいく。

「恋もいく・・・！」

「・・・気をつけるよ」

「・・・(コクッ)・・・ウエステイオー着装」

恋が鎧を纏い、杖に乗り飛んでいく。・・・恋も飛べるのか。・・・なら、

「モーションキャプチャー！フェイト・T・ハラオウン！」

俺はリリなのメインキャラの一人、フェイトになる。

「ソニックムーブ！」

バルディッシュを構えて敵のど真ん中に入る。

「プラズマスマッシュアアアア！！！」

魔法弾を放ち、敵を殲滅していく。

「カートリッジロード！・・・ハーケンセイバアアア！！！」

バルディッシュを鎌にしながらその勢いで魔力を放った。

ズガガガ!

「更にもう一撃・・・雷光一閃!」

バルディッシュをザンバーモードにして構える。

「プラズマザンバアアア!!!」

ズガアアンツ!!

「まだまだ・・・ハッ!」

俺は真・ソニックフォームを使う。

「ライオットザンバー・・・喰らえ!」

敵を切り捨てていく。

「・・・亮?」

恋が飛んでくる。

「どづした?」

「・・・ハルナが船に戻ってって言った」

「・・・了解！」

俺と恋は急いで船に戻る。

「亮！急いでください！」

船の入り口で明命が手を伸ばしてくる。・・・マズイ、魔力が濃すぎて吹き飛ばされそうだ。

「く・・・恋！」

同じく入り口にいた咲が恋を掴んで中に入る。

「急げ亮！吹き飛ばされるぞ！！！」

「わかってる・・・！頼む・・・ソニックムーブ！！！」

無理矢理速度を上げ、明命の手を掴む。

「うわっ！？」

「きゃっ！？」

物真似が解除され、船内を転がる。

「よかった・・・よかったです・・・」

「・・・まったく・・・決戦前にリタイアするつもりかよ・・・」

「わ、悪い・・・深追いしすぎた・・・」

「・・・来る」

「え・・・」

恋が言った瞬間、衝撃が船を襲う。

「な、何だ!？」

『皆さん掴まってください!』

ネギの声が船内に響き渡る。

ズガアアッ!

「く・・・!」

衝撃が入り、沈黙する。

「止まつ、た・・・?」

「・・・誰かいる」

恋が手慣れた手つきでモニターを開き、俺達に見せる。

「・・・な!？」

「この人は・・・！」

外にいたのはクラスメートの一人、ザジ・レイニーデイだった。

「・・・おかしい」

恋すらも疑問に満ちている声で言う。・・・そして更に周りの景色が麻帆良学園に変わっている。その時、ザジが一枚のカードを取り出す。・・・アーティファクトカード!?

「りよ・・・」

「明・・・」

その瞬間、光が視界に広がっていった・・・

「・・・よじ・・・」

「……まだ……あと十分……」

「起きなさい、亮！」

その一言で目が覚める。

「わっ!?!……って蓮華!?!何で!?!」

「何で……って、貴方がここに呼んだのでしょっつ。」

「だってお前……お前……」

「……何を……言おうと思ったんだっけ……?」

「……ふふ、変な亮」

「……変って言うなよ」

「……何をやっているのやら」

「思春?いつの間に……」

「まだ未熟だな、私の気配に気づけないとは……」

「うっせ……どーせ俺は未熟だよー」

「お父さまー!」

そう言っただけで近づいてくるのは……え？近づいてきたのは蓮華そっくりのちびっこだ。

「え……え……？」

「お父さま、遊ぼう」

俺は混乱している。お父さま？誰が？

「なにやってるのよ、亮？まさか娘の頼みを断るといつの？」

「……父上、今日は母上と共に私に稽古をつけてくださるのでは……？」

そう言っただけで思春にそっくりの子供が俺の制服の裾を引っ張る。

「だめーっ！今日はわたしと遊ぶのーっ！」

「姉上……でもずっと前から父上と約束してたのに……」

「……亮、まさか我が娘の頼みを断るのか？」

「えー！？それってどっち選んでも嫌われんじゃん！」

俺は反抗するが娘達がそれを許してくれない。

「わ・た・しとあそぶのーっ！」

「いくら姉上でもこれは譲れません……！」

「痛た！？子供の力じゃないって!？」

服を引っ張るならまだしも両腕をちぎれんばかりに引っ張る二人。蓮華と思春はそれを笑みを浮かべながら見ている。

「あ、あの・・・だんな様？少しぐずって・・・ってあれ？」

亞莎も子供をおんぶしながら歩いてくる。

「お父様ー」

今度は明命そっくりの子供が首にぶら下がって・・・って首がしまる・・・!

「こ、こらー！亮が苦しそうですよ?」

明命が娘を優しく諭す。

「・・・あーあ、いいなー、私も子供欲しいなー」

「雪蓮・・・我慢しなさい」

「雪蓮・・・冥琳」

「良いではないか、儂はもつばばあじや」

「祭さん・・・まだ若いって」

ホントになに一つ変わらないなこの人は・・・

「ぶ〜・・・どうして私には子供がいないんですか？」

穩がそう言う。

「五人もいたら子育てはキツイから」

「だって」

シヤオも寄ってくる。

「あ、五人か」

「ッ！がぶっ！」

「あだだ！？噛みつくなシヤオ！」

皆の笑いが場を盛り上げる。・・・俺は俺にくっついてる娘達やシヤオを優しく放す。

「・・・楽しいし、嬉しい・・・けど」

俺は・・・まだ・・・

「・・・この世界は俺がいるべき世界じゃない」

・・・この場所に帰ってくるわけにはいかないんだ。

「・・・だってここは、俺じゃない“大澤亮”がいるべき世界なん

だから……」

その時、周りの時間が止まる。

「……驚きました。まさか自力で気づけるとは……」

ザジが歩いてくる。

「……ザジ、これは数ある世界の可能性の一つ……なんだろう？」

「……ハイ、もし貴方がこの世界の最後の戦いで消えずにこの世界に残った場合、こういった世界になります」

「……いい世界だ……下手したら一生ここにいたいぐらいだ……」

「……」

「……だけど、与えられた幸せじゃ意味はない……幸せは自分の手で掴まなくちゃな」

「……良いのですか？せめて少しの間は貴方の大切な仲間といえますよ？」

ザジの言葉に首を振る。

「……ダメだ、ここで甘えるわけにはいかない……それに」

俺は息を吸って言う。

「それに・・・俺には明命がいる！」

「・・・わかりました。ここから出るキーワードをお教えします。
・・・『わずかな勇氣』です。・・・外には私の姉がいます。・・・
姉は手強いです」

「・・・へ、俺はいつも危機に瀕してるんだ。・・・余裕だ」

「・・・わかりました。貴方が麻帆良に帰ってこれるかはわかりませんが、皆さんと貴方たちの帰りを待っています」

「・・・ああ・・・『わずかな勇氣』」
アウターキア・パウラ

俺は帰る・・・皆の元へ・・・明命の元へ・・・!!

突撃（後書き）

亮

「……つーわけで今回のゲストは……『魔法先生ネギま！』
第二の人生へと』より、主役の結衣咲シイの登場です！」

シイ

「えと……初めまして……はおかしいかな、結衣咲シイです」

亮

「何故に敬語なんだ？」

シイ

「だって敬語使えばキャラ崩壊とかあまり気にならないでしょ？」

明命

「あはは……ですがよく来てくれました。歓迎します！」

シイ

「うん。……でも遊びに来たのはいいけど何をすればいいの？」

亮

「雑談するだけだよ。基本ここはそついう場所だ」

蓮華

「……」

明命

「蓮華様？どうしてさっきから黙っておられるのですか？」

蓮華

「いや・・・その・・・」

シイ

「・・・もしかして邪魔だった？私」

蓮華

「い、いや、そんなことはない！だが・・・その・・・」

亮

「戸惑ってるんだよ。きつと仲良くなりたいたいけど素直になれてないんだよ」

蓮華

「りよ、亮！」

シイ

「・・・じゃあ嫌われてるわけじゃないんだ・・・よかった。・・・私の事はシイって呼んでね」

蓮華

「あ・・・私は・・・孫権だ・・・その、真名は蓮華、私の事は蓮華と呼んでくれ」

シイ

「うん！よろしくね、蓮華」

亮

「ま、堅い口調は許してやってくれ」

シイ

「大丈夫、これから仲良くなっていけばいいんだから」

明命

「そうですね、きっとシイさんなら皆と仲良くなれます」

シイ

「そうしたい。皆とO H A N A S H I Iしたいからね」

亮

「文字が物騒だな・・・あ、そうだ、コレ持ってけよ」

シイ

「これは？CD？」

亮

「俺が岩沢から貰ったCDを更にもう一枚予備として写したガルドエ
モノCD。皆と聞いてくれ」

シイ

「・・・ありがとう。そろそろ終わり？」

蓮華

「・・・そうだな」

シイ

「あ、じゃあ私がやりたい！」

明命

「はい、どつぞー！」

シィ

「それでは次回の真似と開閉と世界旅行！」

蓮華

「次回もまた見てくれ」

明命

「それではまた次回会いましょう！」

亮

「・・・あ、次回は別の主人公が来るよ」

シィ

「それじゃあ皆、また会おうね」

対決（前書き）

- ・今回もゲストを呼んであります。・・・というか夏休みが来ますね
- ・テストじゃ赤点取りますし・・・ま、まあ、気を取り直して・・・
- ・ではどうぞ。

対決

「う……」

目を覚ます。そして俺はすぐに三人に呼びかける。

「おい！明命！咲！恋！起きろ、おい！」

「く……」

咲が起き上がる。

「……いや参った。危うく抜けられなくなるトコだった」

「どんな世界にいたんだよ……」

「別に？ただ平和に恋や董卓軍の皆と過ごしているだけさ。……
亮は？」

「ッ……」

さっきのを思い出して顔が赤くなる。

「……亮？」

「……親になつた」

「……あー」

その時、モニターが目に入る。・・・何じゃこれ。

「ザジ・・・じゃないよな」

「ああ、ザジの姉らしい」

「とりあえずいくぜ！」

咲が先に行く。俺はソレに着いていった。

「・・・もし僕の考えが上手くいけば、全ての問題は解決します！」

「いや、違う。問題は解決しない。やはり君の道に血は流れるポヨ。
やはり・・・」

ザジの姉の背後に現れた黒い何かが強大な魔力を発した。

「・・・力づくでも、止めるしかないポヨ」

「!?!」

ドガアアアアッ!!

「……間に合った」

俺と咲、それに武道四天王が魔力を防いでいた。

「皆さん!!!」

「ポヨ。先生の脱出でタガが緩んだポヨか」

「遅れてスマヌ、ネギ坊主」

「待たせたな、ネギ」

楓と咲が言う。

「……なるほど、『完全なる世界』コスモ・エンテレケイア 恐ろしい術だな。幸せという麻薬はいかなる脅迫にも拷問にも勝る」

龍宮が目を伏せながら言う。

「死んだジジババと里でのんびり過ごしてしまったでござるよ」

「アハハ、俺もだ」

「「「「「」」」」」」

俺と刹那と古菲は顔を赤くしてプルプル震える。

「・・・何を顔を赤くして震えている？」

「「「何でもないっ（アルツ）（ぞ）！！」「」」

「・・・みな目覚めてしまったポヨか。だが計画を止めさせる訳にはいかぬポヨ」

凄まじい魔力が身体を襲う。

「・・・ポヨ・レイニーデイさんは僕が引き受けます！！みんなはその隙に上層部へ救出に向かってください！！」

・・・それは本名なのか？

「いや、ネギ先生、君はリーダーだ。最大の戦力でもある。ここは私に任せて君が皆を率いて上へ向かうんだ」

龍宮がネギの案を却下する。

「ダメです隊長ツ！ポヨさんの力は未知数です！フェイト達以上の強敵の可能性もある！やはり僕がここを・・・」

「だからこそ君は力を温存しておかなくてはな。私を信じる、少年」

そう言っつて龍宮は何かスイッチを押す。

ポボンッ！

するとジャンプ地雷が作動し、……えー、ポヨの動きを重力で封じ、ライフルで地面に穴を開けてポヨを落とした。

「……さっすが真名……」

「……じゃあな先生。しっかりやりな」

「龍宮さんッ！！」

「大丈夫さ、お代はもう貰ってある」

「いえっ……じゃなくて……！」

「君こそお姫様と幼なじみをちゃんと助けて、ライバルときっちりカタをつけてくるんだな」

そう言っつて龍宮は先ほど開けた穴に飛び込んでいった。

「龍宮さんッ！」

「真名ならばきつと大丈夫でござるよ」

「でも、あの相手に一人で……」

「足止めに徹すればどんな相手にも遅れは取りません。私が保証し

ます」

「そうだぞ、生徒を信じてやれ、ネギ先生」

楓、刹那、俺が言う。

「……わかりました。皆を起こして……行きましょう！」

「……と、いう訳で、多少変更はありましたが概ね計算どおりです」

そして新たに班が組まれる。

一班、船の修理&脱出路の確保。

メンバー

・ ジョニー ココネ ハルナ 茶々丸 愛衣 高音 コレット

春日

二班、アーニヤの救出。

メンバー

・小太郎 夏美 さよ 朝倉 ベアトリクス ユエ 咲恋

三班、「造物主の掟」の奪取。
「ド・オブ・ザ・ライフメイカー」

メンバー

・ネギ このか のどか 刹那 楓 古菲 千雨 アスナ（栞）
運動部四人組 俺 明命

「……じゃあ」

「おうっ」

「行くっ!!」

戦えない者は楓のアーティファクトに収納して全員が進み出す。……
……本来なら進むのは困難なはずだが……

ゴシヤアッ!!

ドガガガガッ！！

ドンッ！！

・・・全てネギが薙ぎ払っていく。

「・・・やることねー」

「・・・ハイペース過ぎる・・・危ないぞ、ネギ・・・」

そして班が分離する場所に来る。

「・・・気を付けるよ、亮」

「そっちなもな、咲」

「行くで！」

「皆さんこちらへ！」

班に別れて行動を始めた・・・

「……あれが墓所への扉です」

朧がそう言った時、俺達は何か強い気配を感じた。

「……コレは……」

「いますね……何かが……」

「待ち伏せ……罠か？」

「いや……強大な気と魔力を隠そうともせず、これはおそらく尋常の勝負を……」

「……いきましよう!」

ネギの一言に俺達は頷く。そしてしばらく歩いたのち、広間に出た。

「ようこそ、白き翼の諸君。次代の子等よ」

奥にいる黒ずくめの男が言う。

「……亮!」

明命がいきなり俺を突き飛ばした。そして明命は飛来した“何か”

を弾く………

「壊れた幻想」
フロークン・ファンタズム

ズガアアンツ！！

「キヤアアアツ！？」

「明命ツ！？」

それが爆発し、直撃した明命は爆風に飛ばされ下に落ちていく。

「明命エエエツ！！！！」

俺が明命に向かって走り出そうとした時、足下に矢が数本突き刺さった。

「……弓兵に背中を見せたら射抜かれるぞ」

この声は……！俺はすぐに振り返る。

「アー、チャー」

「久しいな。だが相変わらず未熟者だな」

「テ……メエ……！！」

鈴音と南海霸王を構える。

「よくも明命を……！！」

「油断していた貴様等が悪い。私はただ隙だらけな輩を狙撃しただけだよ」

「ほざけ・・・前に言ったよな・・・次に手を出したら容赦しないって！」

「ふ・・・私を倒せると思っているのかね？」

「御託はいい・・・行くぞ！」

俺は走り出す。アーチャーは夫婦剣を投影した。

「ウオオツ!!」

ガキヤアンツ!!

「ほう・・・」

カアンツ!

キキキキンツ!

ブオンツ!

ヒュンツ!

捌ききれないと判断した斬撃は避ける。

「サーヴァントの動きについてこれるとは、前言撤回しよう。成長はしてるようだな」

「うつさい・・・お前の言い方うぜーんだよ」

「それはすまない。だが生憎コレは性分なのでな」

「そうかい!」

俺が剣を振るおうとした瞬間、身体が動かなくなる。

「な・・・!?!」

これは・・・

「アイツか・・・!?!」

アーティファクトを手に持つ少女が目に入る。

「・・・あつけない幕引きだな。さらばだ」

アーチャーは剣を振り上げた・・・

咲

俺達は夏美のアーティファクトを使用して歩いてきた。ちなみに夏美のアーティファクトの効果はとあるひみつ道具の石ころ帽子みたいなものだ。

「ねえ、ホントにこっちでいいの？真っ暗だけど」

「ああ、おそらくこの先の部屋に捕らえられてるハズや」

「おそらくって・・・」

「ま、少なくとも情報源は確かや」

柔か・・・その時、少し身体がざわついた。

「く・・・」

「どっしたんや？」

「大丈夫・・・少し闇が疼いただけ・・・」

「咲・・・」

恋が不安そうにこっちを見る。

「大丈夫だ・・・呑まれるほどじゃない・・・けど」

俺の闇が反応するってことはネギが力を行使しているということだ。

「しっ……静かにです！何かが……！」

夕映がそう言った。……そして足音がして、歩いてきたのは……

「ふえーともがっ」

「（アホオ！）」

フェイトがやって来て、夏美が叫びそうになるがさよによって阻止される。

「（きっ……気づいてないの？）」

「（ああ……らしいな。見事なアーティファクトやで、夏美姉ちゃん！）」

「（……）」

俺の手を握る恋の手に力が入るのを感じる。

「（絶対手え放すなや。放したら俺達一巻の終わりや。俺らも全員は守れん）」

確かに俺や恋、小太郎だけなら立ちまわえる……けど……そのままフェイトは気づかずに歩いていく。

「……ッ！」

その時、何を思ったか小太郎が片腕を上げた。

「(ちよっ・・・コタ君！何のつもり！？)」

「(殺れる！やるなら今や！)」

「(待てコラ・・・ぐ！？)」

闇が一際強く疼き、強制的にDモードになってしまった。

「(咲・・・う・・・！？)」

何と手を握っている恋の手もDモードのように変貌する。・・・だが同じく手を握っている朝倉にはなんの影響もない。・・・てことは仮契約やサーヴァントの繋がりが恋に闇を・・・？

「(咲・・・恋は大丈夫・・・だから・・・)」

恋は苦しそうに呼吸をする。

「(ここでフェイトを仕留めればそこで終わりや！)」

「(待てっ、コタロ！俺達の役割は人質の救出だ待て間違えるなッ
！)」

「(ダメっ、やめてっコタ君。私、イヤな予感が・・・)」

カモと夏美が止めるがソレを無視して小太郎は腕を・・・振
り下ろさなかった。・・・フェイトはそのまま去っていく。

「手を出さなかった？いや、出せなかったの？」

「気づかれたのか？コタロ」

「いや、それはない。気づかれとったら今頃全員綺麗に石になるか『完全なる世界』いきやるな」

フエイトが去ったコトでDモードが解除される。・・・そうか、無意識にクレイグやアイシャのコトを思い出してネギの力も相まって闇が具現した・・・

「・・・！ 恋、大丈夫か？」

俺は恋に訪ねる。

「・・・大、丈夫・・・気にしないで」

そう言いながら恋の顔色は悪い。だが俺達には止まるといっ選択肢はなかった・・・

亮

「・・・ッ！」
次に来る斬撃に目を瞑る・・・だが、予想していた音とは違つ音が
なつた。

カキインッ！！

「え・・・」

俺は目を開けると、アーチャーと同じ夫婦剣・・・干将莫耶でアー
チャーの斬撃を防いでいたのは・・・アキラだつた。

「亮君はやらせない・・・来れ（アデアット）！」

すると仮契約カードが光り、アキラの服装は黒いシャツ、黒いジ
パン、そして赤い外套を纏い、アーチャーと同じ服に変わっていた。

「ふ・・・なるほど、私の真似事というわけか」

「下がれアキラ！お前の力じゃ・・・！」

その時、身体が動くようになる。そのバランスを崩した一瞬・・・

カキキキキンッ！！

「ッ！」

目に入った景色はアーチャーと対等に戦うアキラの姿だつた。

「ぬ・・・やる！」

「身体が・・・軽い！」

そしてアキラはあの呪文を口にする。

トレースオン
「投影開始」

干将莫耶を投げ、新たに作り出した名も無き剣を振るう。

「甘い！」

アーチャーはアキラの一撃を受け止める。・・・だがアキラは笑っている。

「まだまだよ！」

ヒュンヒュンヒュンッ！

投げた干将莫耶がお互いを求めて宙を舞う。そして干将莫耶が接触する場所にいるのは・・・アーチャーだ。

「なにっ!?!？」

アーチャーはその干将莫耶を弾き落とす。

「・・・もらった！」

アキラが剣を振り下ろした。

ガキヤアンッ！

「ふっ……!?!」

アーチャーは押され、少し地を滑る。

「……亮君!ここは任せて、ネギ先生の方に!」

「……わかった、けど……死ぬなよ」

「……うん」

「……ネギ君、私達いけるっポイよ!!」

「先に行つて!!」

「み……みんな……」

明命は心配だ……けど、明命なら大丈夫。俺は信じてる。明命は絶対に私のコトは気にせず先に行けと言っただろうから……俺はネギに向かって走り出した……

対決（後書き）

咲

「つーわけで今回は『バカとある兄妹と召喚獣』より、クレス・エスティードの登場だーッ！」

クレス

「初めまして……で、いいのか？」

恋

「恋にとっては久しぶり……」

詠

「……またおかしな奴が来たわね……」

咲

「さて……いきなりで悪いんだが……」

クレス

「何だ？」

咲

「この料理の山は何だよ!？」

クレス

「手ぶらじゃアレだからな、とりあえず酒や料理を持ってきてみた」

恋

「……おいしそう」

詠

「……す、少しはやるようね」

咲

「そついや詠って料理ダメ（ガスッ！）痛あつ！？」

詠

「ボ、ボクだつてやろうと思えばできるわよ！？」

クレス

「……なんつーか、俺の世界にも似たような奴がいるな。このツンデレ具合と無口具合が」

咲

「あー、まあそれはそれとして……中華料理中心なのな」

クレス

「……この間はスルーしてたがコイツらは三国志の人間だろ？だから馴染みのある味の方がいいと思っただが……」

咲

「……確かにな。……って詠、お前自己紹介しろよ」

詠

「わかってるわよ。……ボクは賈馱、字は文和。……真名は詠よ」

クレス

「いいのか？真名は大切じゃないのか？」

詠

「大切だけど・・・アンタは何か信頼できそうなのよね」

クレス

「そうか。ならありがたく真名を受けとるか。よろしくな、詠。俺の事はクレスと呼んでくれ」

恋

「・・・おいしい」

全員

「（・・・いつ食べ始めたんだ・・・）」

咲

「・・・そういや亮の奴は何かを渡したんだよな・・・なら」

クレス

「・・・？何だ？」

咲

「青龍偃月刀。三国志の関羽が使ってた武器だ。やるよ」

クレス

「いいのか？・・・だが俺の世界じゃ銃刀法違反なんだけど・・・」

「

詠

「別に家とかに置いて置けばいいんじゃない？」

クレス

「うーん・・・それだと家には義妹とかいるからな・・・」

咲

「あ、そうか危ないかな？」

クレス

「いや、ルナは大丈夫だと思うんだが・・・」

咲

「・・・ま、いいか」

詠

「そろそろ締めだからアンタがやっていいわよ」

クレス

「それじゃあお言葉に甘えて・・・次回の真似と開閉と世界旅行」

咲

「次回もまた見てくれよな！」

詠

「それじゃあまた次回！」

咲

「・・・にしても相変わらず美味しいな・・・」

詠

「お、美味しい・・・（真面目に料理を教わろうかな・・・）」

崩壊（前書き）

夏休み。宿題以外やることがない・・・ちなみに何とか単位は取れてました。ではどうぞ。

崩壊

俺は走ってネギの元に向かう。

「……亮さん！こちらは任せて亮さんは明命さんを！」

ネギは俺を確認するなりそう言った。

「だけど……」

「……大丈夫です！それに、万が一の時は……いえ、何でもありません。行ってください！」

「……すまない！」

俺は明命が落ちていった方へ走り出す。……瞬間、

ズシヤッ

「え……？」

後ろからそんな音が聞こえた。……音の正体は仮面の男……デユナミスの腕がネギを貫いた音だった。

「ネギ！」

「アアアアツ！？」

そして何かがすぐ横を吹っ飛んでいった。

「……アキラ!？」

「く……うぁ……」

「……やはり、真事は真事ということか」

俺はアーチャーに向き直る。……アーチャーは軽く息を乱している。……乱している？

「……」

つまり、アキラはアーチャーを疲れさせるまで戦わせた……のか？

「……次は貴様だ」

アーチャーが干将莫耶を握り直してそう言った。

「……いいぜ、かかってこいよ」

コイツを倒して明命を助けにいかなくては……!

「ウアアアアツ!！」

ガキインツ!

「ぬう!！」

いける・・・！さつきに比べてアーチャーの顔に苦が見られる。俺はアーチャーに蹴りを入れてそのまま距離を開ける。

「猛虎・・・獣衝撃ッ！！」

最大限に強めた力をアーチャーに向けて放つ。

「I I am the bone of my sword
I」

アーチャーが何かを呟いた。

「な・・・！？」

するとまるで花のような盾が現れ、虎を受け止めた。

「む・・・おおおおお！！」

「ウラアアアッ！！」

パリン

盾が一枚欠ける。・・・盾は残り六枚。ソレを全て撃ち抜く！

「オオオオッ！！」

「アアアアッ！！」

ズガアアンッ！！！！

辺りが光に包まれる。

「・・・やったか・・・？」

バガアアンツ！！

「・・・ツ！？」

後ろからデカイ爆発音がする。

見ると暴走したネギがデュナミスを圧倒し、デュナミスに止めを刺そうとする。

「ツ！ダメだ、ネギ！！」

今誰かを殺したらネギは堕ちる・・・！だがネギの一撃はデュナミスに届かず・・・榊が貫かれた。

「あ……!?!」

するとネギの闇が深くなる。……この感じ……咲の何倍も禍々しい。

「そうはさせんツ！ネギ坊主！」

「先生ツ」

「ネギ君！」

「くっ！」

楓、のどか、まき絵、古菲がネギを抑える。

「ネギ……!」

俺もネギを止めようと走り出そうとした瞬間、

ザクンツ、ブシュツ

「亮君ツ!?!」

「が……あ……!」

俺の身体に無数の剣が突き刺さる。

「……言っただろう。弓兵に背を向けるなと」

俺はそのまま地に倒れた・・・

咲

「・・・どや、姉ちゃん」

「うん・・・この部屋で間違いないのね？」

「ああ、この部屋や」

俺達は今、一つの部屋の前にいた。

「・・・入れない」

恋が言う。・・・そう、この部屋全体に強力な障壁が張られている。

「仕方ねえ、ノックか」

「いえ、待つです」

カモの言葉に夕映が待ったを掛ける。

「全体を魔法障壁で覆う封印錠と言いましたね？ならば術式の数は多くありません」

夕映がアーティファクトで結界について調べる。

「……ありました。帝国の情報部と連合の特殊部隊のファイルに一つずつ。解除可能です」

「……手伝うよ、夕映。……こんな時じゃないと俺の能力の使い道がない」

俺はキーブレードを取り出して壁に当てる。

「……いくです」

「……開け」

俺が大まかな解錠。夕映は細かい畏の解錠を担当する。

カチン

そして鍵を開ける。

「（……ほな開けるで。何が出るかわからん。気い抜くなや、みんな）」

そして小太郎が扉を開けた瞬間、

バキイ！

「「「!?」「」」

いきなり中から誰かが小太郎を殴った。・・・そして小太郎はソイツの足を掴む。

「キヤーーツ！何よ、何よツ！」

「落ち着け、仲間や。救出隊や」

そしてしばらくして・・・

「アスナがツ・・・アスナがアイツに連れてかれちゃったのよ！！！」

そうアーニヤが言った。

亮

「亮君！しっかりして、亮君！」

「血・・・血がこんなに・・・」

アキラと亜子が俺に駆け寄る。

「う、ぐ・・・ガフッ」

血を吐きながら俺はアーチャーを見る。・・・アーチャーも全身ズ
タボロで、満身創痍のようだ。

「・・・許さない！」

アキラが立ち上がる。・・・だがアキラも同じだ。アキラもボロボロで立っているのがやっとといった感じだ。

「・・・やめておけ。アキラ・・・と言ったか。真似事では私には届かん」

するとアキラはポケットから笛を取り出す。

「・・・なら、違う手段で・・・！」

アキラは笛を吹き、額に当てる。・・・そしてアキラの周りに風が吹き荒れる。

「・・・ハアツ！」

そしてアキラは天鬼へと変身していた。

「・・・ヤツ！」

そしてアキラは鬼石を発射する。

「なにっ!？」

アーチャーは不意を突かれたのかソレに当たる。そしてアキラは音撃管を構える。

「音撃射！疾風一閃！」

そして音撃管を使い、アーチャーに一撃を与えた。

「ぐおおお!?」

ドガアアアッ!!

そしてアーチャーは消滅する。

「・・・さすが・・・アキ、ラ・・・」

俺は荒い呼吸をしながらネギの方を見る。・・・ネギの方が何倍も悪い状況だった。

「亜子・・・ネギは・・・ゴボッ!」

「しゃ、喋っちゃアカンよ!大人しくしとき!」

血が苦手なハズなのに亜子は必死になってくれていた。

「・・・亮君!」

アキラが変身を解除しながら戻ってくる。・・・そして朝倉のアーティファクトに乗ってさよとカモネギがやって来る。

「・・・最悪の展開だッ!!!!ここに来て兄貴達がこんなことになるとはッ!!あのフェイトと唯一兄貴や旦那達だけが互角に戦り合えたかもしれないねってのに・・・」

カモネギが地面を殴りながら言う。

「・・・諦めるな・・・まだ・・・手段が・・・ガハッ、ゴフッ
!」

「喋ってはダメでござるよ」

そしてデュナミスが自分を倒したサービスと言って上層の大祭壇について説明してくれた。そして作戦会議をおこなう。

・ ・ ・
そして大まかに状況をまとめるところになる。

龍宮、刹那の両名はポヨ、月詠と戦闘中。

最も最上階に近いのはアーニヤ救出組。それに楓、のどか、まき絵、祐奈、さよが加わり、アスナと最後の鍵奪取に向かう。

そして俺とネギ、千雨や亜子、このかの戦闘が不可能な者がここに残り、そこに古菲とアキラが護衛につく。

「それでは・・・行こう！あきらめる訳にはいかぬでござるー！！」

「」「」おうー！！」「」

こうして新たに決意を固めるのであった・・・

崩壊（後書き）

咲

「えー、つーわけで今回は『真・恋姫無双 新たな6人の天の御遣い！』よりその天の御遣いの一人、剛鬼をゲストにお呼びしてまっす！」

剛鬼

「ああ、よろしく」

亮

「……早速で悪いんだが……」

剛鬼

「……何だ？」

咲

「……仮面取れば？」

剛鬼

「……あまり気が進まないが、別にいいか……後書きだしな」

明命

「えっと……剛鬼、さんでよろしいのですか？」

恋

「……強そう」

剛鬼

「……」

恋

「……何？」

剛鬼

「いや、本当に別人なんだなと思ってな」

亮

「あー、確かそっちは恋がメインヒロインだっけ？」

剛鬼

「ああ、こうして見ると同一人物に見えるんだがな」

咲

「……ま、こっちの恋は俺の家族だからな。変なコト考えんなよ」

剛鬼

「……わかつている」

明命

「……とりあえず、私は周泰。真名は明命です。よろしくお願ひします！」

剛鬼

「いいのか？真名を預けて」

明命

「構いません。目を見れば判ります。……貴方は私と同じ感じ 같습니다」

亮

「暗殺・・・ってことね」

恋

「・・・恋は恋」

剛鬼

「・・・よろしくな、恋」

咲

「・・・ってコラ！言ってる傍から声のトーンが変わってるじゃねーか！」

剛鬼

「仕方ないだろう。何故かは知らないが、恋を相手にするところなるんだ」

亮

「それほど好きなんだよ」

明命

「剛鬼さんは優しい方ですね」

剛鬼

「・・・そうか？」

咲

「・・・そういやそっちは何処にいたんだ？軍」

剛鬼

「最初は曹操とかに会って、それから董卓軍に、そして蜀だな」

咲

「・・・奇遇だな。俺は董卓軍から蜀のくだりまでは同じだ」

恋

「・・・似た者同士」

剛鬼

「かもな。そっちの月達はどうなんだ？」

咲

「元気さ。大切な家族だしな。元気でいてほしいよ」

剛鬼

「なるほど・・・こっちも楽しくやってるよ」

亮

「そんじゃ、恒例のプレゼントタイムだ」

恋

「・・・恒例？」

咲

「えっと・・・んじゃ、これかな？」

剛鬼

「・・・コレは？」

亮

「暗器一式とハマーンの杖だ。暗器はわかると思うけど、ハマーンは武器を新品同様にする効果があるんだ」

剛鬼

「そうか、ありがたく受け取ろう」

恋

「・・・もう終わり？」

剛鬼

「そうみたいだな。次回の真似と開閉と世界旅行」

亮

「次回もよろしく！」

咲

「それではまた次回！」

起動（前書き）

遂に追いついてしまった・・・ではございませぬ。

起動

そして、楓達が動き、作戦が開始する。

「ふ、ぐ・・・」

「大丈夫？亮君」

「あ、ああ・・・」

俺は自力で回復して、何とか立てるまでには回復した。・・・だが戦闘は厳しい。このかが申し出てくれたが、このかのアーティファクトはこの後重要になるかもしれないと断った。

「・・・たく、世話やかせやがって・・・」

千雨がそう言ってネギの額に手を乗せる。

「くつくく・・・その少年の症状は魂魄レベルでの魔素の侵食だ。その程度で回復するとは思えんな。良くて数週間、まあ数ヶ月はかかるだろう」

デュナミスがそう言い放つ。

「へっ、おしゃべりな大幹部様だけ。なんだよ、話し相手が欲しいのか？」

「貴様・・・！」

「よせ、焰」

千雨の言葉に反応した焰をデュナミスが制する。

「いいぜ、どうせ今はお互いこうして結果を待つしかねえし、聞きたいこともある。．．．あんたら一体なんなんだ？．．．いや、そもそもあんたらのボス．．．アレは一体何者だ？」

「．．．ふん、良かろう．．．少し話をしてやろう」

そう言ってデュナミスは話始めた．．．．．

咲

「．．．小太郎、どうだ？」

「．．．ああ、おるな。間違いない、フェイトや」

俺達は祭壇まで到達して、今は離れた位置で待機していた。

「づっ．．．ぶぐっ．．．く」

夏美が端から見ても解るくらい身体が震えている。

「落ち着け夏美姉ちゃん。姉ちゃんが作戦の要なんやで。・・・何が起こっても姉ちゃんだけは俺が守る。安心せえ」

「う・・・わ・・・わかってるよ」

そして夕映が基本魔法の応用で夏美のステルスが生きる距離を調べている。その時、楓が地面から現れ、すぐに最後尾の恋と手を繋いだ。

「・・・よし、そろつたな。いよいよ大詰めや。ええな？ネギのヤローがダメな以上、俺達だけで何とかするしかない。ここまで来たからには覚悟決めてもらうで」

全員が頷く。

「・・・後、一時間。それで全てが決まるんだな」

「そやな・・・そやけど焦る必要はない。ゆっくり近づけるトコまで近づいて・・・」

「限界までいったら作戦開始だな」

夏美がそれを聞いて唾を飲む。

「・・・やれやれ、ま、無理ないな。・・・気休めになるかわからんけど、奴らが俺らを殺すのは一応禁止されとるんやし、万一やられてもあのお気楽な夢の世界が待つとるだけや」

アレか・・・

「今、それでもいいかもって思ったでしょ？」

「思っただけですッ！！全ッ然いきないですッ！」

朝倉や夏美を始めとして色恋話に花が咲き、皆の緊張が解れ始めた時、何かが飛んできた。

「ッッッ！！？」

飛んできたのは・・・フェイトだ。

「離すな！！皆も手え離すな！！！」

小太郎が叫ぶ。そしてフェイトは歩き、夏美の前に立ち止まる。

「あ・・・ッひ・・・」

「ッ！跳ベッ！右やッ！」

小太郎が言うのと同時に皆横に跳んだ。

ドオオオンッ！

フェイトの一撃で通路が吹き飛んだ。

「きゃあああ!?!」

「わああっ!?!」

「ひ……ふ……」

「……フム?」

フェイトが去ろうとした時、夏美が倒れ、その拍子に帽子が取れる。

「マズ……」

「何のツ!?!」

小太郎がギリギリで帽子をくわえて何とかバレずに済んだ。

「……気のせいか……いや、彼なら最早隠れて近づくなどという真似はすまい」

そうして今度こそフェイトが立ち去る。

「た、助かった……?」

「拙者が来たときの微かな気配を気取られたようじゃあるな……」

「あつ・・・私・・・？」

「平気か？夏美姉ちゃん！？よおアーティファクトを離さんかったな！エライで！見直した！」

「・・・小太郎もナイスファインプレー！・・・二人が何とかしなかつたら死んでたな、俺ら」

小太郎は夏美に呼びかける。

「立てるか？歩けるか？あ？」

「う・・・うん・・・立・・・ッ・・・う・・・つく、んぐつ・・・」

夏美は立ち上がろうと努力するが・・・

「うつ・・・だ・・・だめ・・・ち、力が入らな・・・ごっつ、ごめんみんな・・・コタロー君、わ・・・私・・・私もう・・・」

「・・・わかった、大丈夫や！別の作戦を考える。夏美姉ちゃんはよおやった！」

「え・・・」

「さあ・・・っとなるとどうするっ..」

「少し遠いがここから攻めるべしね」

「せやな、結局危険度は同じや」

「・・・恋が皆を守る」

「・・・ああ、何とか俺達が皆を守って、その際に・・・」

「コタロー君!!」

「うおっと!?!」

夏美が大声で小太郎の名を呼ぶ。

「だ・・・大丈夫って大丈夫じゃないよね、私・・・私がッ・・・
私がここでごんばんなきゃ・・・ダメだよ」

「・・・ま、正直せやな、成功率は落ちるやろ。・・・でも、そこ
までは頼めん。気にすんな」

「う、うん・・・わかった・・・やるよ」

「お、おい、大丈夫かいな?」

夏美は完全に立ち上がる。

「大丈夫だって・・・せつかくもらった主役だもん」

「ほ・・・上等!!」

俺達は限界地点まで歩き出す。

「……ここが限界です」

「……よし、作戦開始や」

「……よし、始まるぞ」

俺がそう呟いた時、空から強力な一撃がフェイトを襲う。

「……開け！」

俺は空間から武器を取り出す。……取り出したのはレヴァンティンと鉄碎牙。

「……（こんなの造ったっけ……？）」

何故か見知らぬ男女が頭に浮かんだが今はそれどころではない。

「行くで！」

小太郎の言葉と同時に皆動き出す。祐奈は調べ、まき絵は最後の鍵

へ、楓はアスナへ・・・そして俺と小太郎はフェイトに向かう。

「カートリッジロード!」

ガシャン、と音がして、レヴァンティンに闇が纏う。

「紫電・・・一閃!」

小太郎が拳で、俺は剣撃でフェイトを吹き飛ばす。

「く・・・キミ・・・達風情にッ・・・!」

フェイトが大量の杭を出した。

「させんッ!」

小太郎が獣化してフェイトに俺は杭を落とす。

「シユランゲフォルム!・・・風の傷ウ!」

鉄砕牙とレヴァンティンを振り回すが杭を落とすしきれない。

「チッ・・・な!?」

俺に迫る杭が三本。

「ハアッ!」

カキンッ!ガキャンッ!

・・・ダメだ、一本まだ残っている！

ドンッ

何かに突き飛ばされて地面を転がる。

「ぐッ・・・！」

イヤな予感がする。あの状況で俺を突き飛ばせたのは・・・

「く・・・あ・・・」

「れ・・・レエエエエッ！！！」

俺の代わりに恋が杭に当たり、身体が石化する。そして、そのまま恋はゴトン、と音を立てながら倒れた。

「恋ッ！！！」

俺は恋に向かって走る。

「・・・咲殿！恋殿を拙者の隠れ蓑へ！」

楓がそう言う。見ると祐奈やベアトリクス、それにさよが石化していた。

「く・・・頼む！」

石化した恋を担いで楓のアーティファクトの中に入れる。時間さえ

かければ回復できるが、今はその暇すらない。

「……本屋ちゃん！」

まき絵が最後の鍵をのどかに渡す。

「はいッ！」

「敵座標固定！今だよッ！」

朝倉がフェイトをロックして茶々丸に教える。

「リロケット！！！」

のどかによって転送される。そして茶々丸のアーティファクトの撃がフェイトを飲み込む。

「……やっつけたのでしょうか？」

「わからぬ……が、これで討伐し果せるほど楽な相手ではないでござろうな！」

小太郎がその場に倒れる。

「大丈夫コタロー君ッ！！！」

「へへ……大したことないわ。腹にちっと穴が空いただけや」

「たいしたことあるよーッ!？」

「お、終わったの・・・？も・・・もう大丈夫なの？」

「いや、まだまだよ！宮崎！ここは祭壇から近すぎる。この距離はマズイよッ！」

「・・・」

「宮崎！？どうしたの！？」

のどかは無言で俺に近寄ってくる。

「どっし・・・」

ドシユッ

「が・・・！？」

見馴れた剣・・・黒い鈴音が深々と俺の胸に突き刺さっていた。

「おま、え・・・のどかじゃ・・・ないな・・・」

「く・・・アーハッハッハ！」

のどかが高らかに笑う。他の皆はのどかの行動に驚愕していた。

「くくく・・・無様ですね、五十嵐咲」

「まさか・・・于吉、か・・・」

鈴音が引き抜かれる。

「うが……」

そのまま膝を着き、腕と手で倒れないように身体を支える。

「のどかは……のどかはどうした!」

「宮崎のどかなら、そこにいますよ」

于吉が示した方を見ると、のどかは宙を浮いていた……何故か？
誰かがのどかの首を掴んでいるからだ。

「5（クウイントウム）風のアーウェルンクスを拝命」

フェイトにそっくりな奴が、そう口にした……

亮

「……ところで、君達の作戦はなかなか良いな。特に、あの少女のアーティファクト、あれは逸品だ。フェイトをも出し抜けるかも知れぬ」

デュナミスが言葉を繋いでゆく。

「そう……我々の残りのカードが、フェイト一枚であつたらな」

「何？」

「サウンドマスターに倒されたあの人形を、復活させたのは誰だと思つ？——この私だ」

足音が聞こえてくる。

「鍵の力で残り3体の稼働も間に合ったようだ。いやはや、保険はかけておくものだな」

「……6（セクストウム）水のアーウェルックスを拝命」

目の前の少女がそう口にする。

「冗談……じゃねえぞ」

咲

「……く、こじは拙者が引き受けるでござるー！」

「楓姉ちゃん!?!」

「これしか打つ手はなとそつでござるよ」

そう言つて楓はのどかを掴んでいる風のアーウェルクスに向けて突撃した。

「ぐ……夕映!のどかを背負つて早く行け!」

俺は立ち上がりながら于吉を見据える。

「おや……心臓を貫いたと思いましたが……」

于吉が亮と同じ姿になる。

「悪いね……こちとらもつ心臓を刺されたぐらいじゃ死ねないんだよ」

と言つてもコレは強がりだ。実際自分の能力と闇で命を繋ぎ止めて

いるようなものだ。

「では、貴方を消させていただきますよ」

「ッ！ウガアアアッ！！」

Bモードを発動させる。

ズガアアンツ！

「カハツ・・・」

だがそれよりも早く于吉の拳が俺を捉えた。

「チツ・・・」

俺は近くの建物まで吹き飛ばされる。・・・そしてすぐに立ち上がって鎌を取り出す。

「いきますよ」

ヒュン、と于吉が目の前に現れる。

「く・・・」

カキンツ！

ガキャンツ！

鎌と鈴音がぶつかり合う。・・・亮の力に闇が加わってやがる・・・

「そろ」

カキヤアアンツ！

「ウワアアツ!?!」

再び于吉に吹き飛ばされる。

「まだまだ」

ズガンツ！

「ごっ・・・」

バカンツ！

「ゲホツ・・・」

バキィツ！

「ガアツ・・・!」

于吉に絶え間ない攻撃を浴びせられ、なす術がない。

「・・・ふむ、これも試みますか」

そう言って于吉が構えを取ると、黒い虎が姿を現す。

「猛虎・・・獣衝撃」

黒い虎は・・・俺を飲み込んだ。

ドガアアンツ！！

「ガアアアアア！？」

そのまま地面に叩き落とされる。

「あ、あ・・・」

「咲くん！」

まき絵が最後の鍵を持ちながら走ってくる。

「・・・は、ぐ」

身体が動かない。目の前が暗い。

「・・・おや、何故貴女がそれを持っているのですか？」

「きゃっ・・・」

于吉がまき絵の首を掴み、持ち上げる。

「あう・・・く、苦しい・・・」

「于、吉ウ・・・」
動かない身体を無理矢理動かそうとする。

「くく・・・どちらが先でしょうかねえ？貴方が立ち上がるか、この小娘が死ぬか」

于吉が更に力を籠める。

「ぎ、ああ・・・」

ズガア！

「何!？」

于吉が弾き飛ばされる。

「・・・何しとんのや」

どうやら小太郎が于吉をぶっ飛ばしたようだ。

「う・・・ゲホツ、ゲホツ！」

「まき絵姉ちゃん、無事か!？」

「う、うん・・・ありがと・・・」

「ここは俺に任せてお前らはとっと逃げろや」

「無理だよコタロー君！お腹に穴が・・・」

夏美が止めるが小太郎は聞かない。

「チビ助！のどか姉ちゃんや！のどか姉ちゃんが起きれば最後の鍵で逃げれる！楓姉ちゃんの頑張りを無駄にすなや！・・・長くはもたんで、はよ行け！！」

「・・・了解です！マキエさん、行けるですか？」

「うっ、うん！」

夏美が残ると騒いだが、朝倉が無理矢理連れていった。

「さーて、いけるな？咲にーちゃん」

「やるしかないだろ・・・」

あの楓が一瞬でやられた相手を小太郎が、于吉の相手は俺がする。

「・・・まったく無駄な事を・・・もう貴方も虫の息でしょうに」

「うるせえ・・・行くぜ、小太郎」

「おう・・・」

俺達は同時に駆け出した・・・

亮

「推参いたしました、マスター」

「ご苦労、セクストウム。だが私はマスターではない。我々の主はあくまで彼であることを忘れるな」

「・・・再生を」

デュナミスが再生していく。

「そ・・・そんな、ネギ君がせつかくやつつけたのに・・・」

「・・・くそっ」

「最悪だな・・・畜生」

「・・・うむ、その少年には再生核を損壊されてさすがの私も危ない所であった」

「くっ」

古菲が構える。

「元の木阿弥か・・・最悪だ」

「フッフ・・・安心したまえ。私は強制契約によって君達には手を出せない。・・・私は・・・だがな」

水のアーウェルンクスが歩いてくる。

「くっ・・・ハアッ！」

「ヤアッ！」

古菲とアキラが同時に攻撃を仕掛けるが、どちらも弾かれ、キューブ状の水に閉じ込められる。

「「!？」」

「こおれ」

ガキンッ！

「くーちゃん!!アキラ!!」

「・・・では、わたしが永遠の園へご案内しましょう」

俺とネギを除く全員が水に閉じ込められる。

「・・・セクストウム。その男は殺せ」

「了解いたしました」

水のアーウェルンクスは手に水を纏い、凍らせて鋭い刃を作り出した。

「はは・・・ここまでかな」

俺は力を振り絞って南海霸王を構える。

「では、消させていただきます」

覚悟を決めたその時、

「――そうはさせません――！！！！」

声が聞こえた。

ガキインツ！

そして俺に迫る攻撃を誰かが防いだ。

「ご無事ですか!? 亮!」

「・・・明命!」

ガシッ

そして水のアーウェルンクスの腕を誰かが掴んだ。

「・・・ネギ!?!」

再起不能のハズのネギが、軽く手を触れる。

バシヤンッ!

結界やその他諸々を吹き飛ばし、水のアーウェルンクスの額に指を当てると、水のアーウェルンクスは座り込んでしまう。

ザバアアンッ!

水に閉じ込められていた全員が解放される。

「ゲホッ、ゴホッ!・・・セッ・・・!」

「ネ・・・ギ君?」

「バカなッ!? セクストウム・・・水のアーウェルンクスを一撃で・・・いや、それ以前に魔素に魂魄まで侵されたあの状態から復帰するなど・・・」

「ネギ君!?!」

「兄貴ッ！」

「ネ・・・ギ君！」

「ネギ・・・さん・・・」

「遅えぞ、主人公・・・ったく」

「ホント、良いタイミングで目覚めやがって」

「・・・(コクッ)」

「こっ・・・この私を・・・貴様ッ！」

水のアーウェルンクスが動こうとした瞬間、ロープを被った人物が現れ、身体に手を突き刺さされていた。

「動くでない。核を握り潰すぞ」

「貴様は・・・ッ!？」

「主よ・・・裏切ったか!？」

「主・・・!？」

「墓所の主つてヤツか!？」

デュナミスの言葉に千雨とカモネギが反応する。

「裏切ったじゃと？・・・心外じゃな。同志であつた覚えなど無いが」

そしてネギが何かを気づいたように話しかける。

「・・・あなたは母の・・・アスナさんの・・・！」

「ぼやぼやしとると全てが無に帰すぞ。行け、我が末裔よ」

「・・・解りました。・・・僕の仲間に、手出しはさせません！」

ネギはそう言つて飛んでいく。ハルナ達の援護へ向かうために・・・

起動（後書き）

咲

「く・・・主役・・・だよな、俺・・・」

亮

「ま、まあ・・・落ち着けよ。そんなコトもあるさ」

咲

「だけどさ・・・」

亮

「いいじゃんいいじゃん。前は俺の方がボロボロだったんだし」

咲

「まあな・・・確かに」

亮

「それに、お前は最後の最後に于吉に立ち向かったじゃん」

咲

「本当に最後にならなければいいけどよ・・・」

シイ

「明命！亮！助けに来た・・・よ？」

二人

「・・・」

シイ

「あれ？」

亮

「ここは後書き部屋だぞ」

咲

「しかも肝心の亮と明命復活してるし」

シイ

「……テヘッ」

亮

「何そのドジッ子だから許してみたいな感じは……」

シイ

「おつかしいな……私の予定じゃ本編に乱入するハズだったんだけど……」

咲

「ウチの作者じゃ間違いなく説明不足になるだろうから空間のポイントをずらされたんだろうな」

亮

「……ま、今の話の流れじゃ于吉に操られて出てくるぐらいしか手段ないだろうし」

シイ

「……皆と戦うのはイヤ。そっだ、あの八雲紫って人は？」

亮

「紫は気まぐれだからな・・・」

シイ

「ふーん・・・うん、それじゃあ、行くね」

咲

「帰るのか？」

シイ

「その前に明命や恋、それに色々な世界の人とお話ししてから帰るよ」

亮

「そっか、それじゃあ・・・」

シイ

「次回の真似と開閉と世界旅行！」

咲

「次回もまた見てください！」

番外編（前書き）

題名の通り、番外編です。・・・ではどうぞ。

番外編

?????

「ふむ・・・ずいぶんとポンチのようじゃのう・・・ん？」

少年は向き直る。

「これを見ている正史の者よ。終焉を迎えた世界がどうなったかは知りたくないかね？」

少年は指を高く上げる。

「見せてあげよう。正史に存在しない物語の続きを・・・」
少年は指を鳴らした・・・

士郎

「先輩・・・起きてください」

「うん・・・」

桜に起こされて目が覚める。

「……悪いな桜。毎日毎日」

「いえ、わたしが好きでやってるんですから」

「……それでもありがとな。……よし、朝飯を作るか」

「はい！」

俺は台所に立つ。すると、

「……おはようございます、シロウ」

「おう、おはよう、セイバー」

俺のサーヴァント“だった”セイバーが話しかけてくる。

「……にしても」

「……?どうかしましたかシロウ?」

「いや・・・まさかこんなことがありえるんだな、と思って」

あの融合しかけた世界から帰ってくると、全てのサーヴァントが受肉して現界していた。言峰やギルガメッシュといったものは復活していないが、ランサーやアーチャーは普通に生活をしていた。

「・・・おはよ・・・」

遠坂が寝ぼけながら台所に入ってくる。

「・・・凜、はしたないぞ」

アーチャーがやれやれといった感じで居間に立っている。・・・遠坂から話は聞いた。アーチャーの正体は未来の“オレ”だと。・・・アーチャーは俺を殺すつもりだったが、今は殺す気はないらしい。

「・・・シロウ、サクラを見ませんでしたか？」

「？ライダー？いや、一緒に来たはずなんだけど・・・」

ライダーと桜は普通に俺の家に来ている。

「・・・あ、ライダー・・・どうしたの？」

タイミングよく桜が歩いてきた。

「ああ、いましたか、サクラ。・・・シンジの朝ごはんはどうしますか？」

「大丈夫。ちゃんと作りおきをしてきたから」

「士郎、おっはよー！」

藤ねえが居間に飛び込んで・・・固まる。

「・・・やっぱり日に日に士郎の周りに女性が増えていってる・・・」

「・・・？何固まってるのよタイガ？」

イリヤも普通に歩いてくる。・・・そう、何とあのバーサーカーも現界している。さすがに屋敷に待機させているようだが。

「・・・ほら、もうじき出来るから、みんな手伝ってくれ」

俺の言葉を合図に全員が協力して朝食の用意を始める。

「……そう言えば知ってる？」

「?……何が？」

遠坂が話しかけてくる。

「ランサーよ。どうやらアイツ、元のマスターと仲良く暮らしているらしいわ」

「……そうなのか」

ランサーもランサーでそれなりに幸せなようだ。

そして学校に到着する。

「……おはよう衛宮、おはよう」

「慎二、今日も早いな」

「まあね。……なあ衛宮、そろそろ戻ってこないか?」道部にち

「悪いけどさ、今は色々忙しいから」

「そうか・・・いつまでも待ってるからな。戻りたくなったらいつでも言えよ」

「ああ、サンキュー」

・・・多分一番変わったのは慎二だろう。何があったのか休校が解けてからはまるで別人だった。桜やライダーが言うには何でも百八十度人格が変わったんだとか。

「・・・む、衛宮ではないか」

「ああ、おはよう一成」

こいつは柳洞一成。学校の生徒会長だ。

「・・・」

「どうした一成？キャス・・・メディアさんが何かしたのか？」

「いや、むしろ良い女性だな。何か企んでいるような気配はあるが、あの方の前では一途な乙女そのものだ」

「あの方・・・って葛木先生か？」

「うむ。それに小次郎殿も中々の御仁であるようだしな」

そう、あのキャスターやアシシンも平和に過ごしている。この前キャスターと話したけど・・・何か普通の主婦みたいな印象だった。

多分、一番この時代の生活に馴染んでいるだろう。

「む、そろそろH.L.の時間か・・・それではな」

「ああ」

そして帰りになって・・・

「桜」

「あ、兄さん・・・どうしましたか？」

「今日も衛宮の家に行くのかい？」

「は、はい・・・その・・・」

「帰りは気を付けるよ。ライダーがいるから平気だとは思っけど、夜道は危険だからな」

「あ・・・ありがとうございます」

「ああ・・・衛宮、桜を頼むよ」

「あ、ああ・・・」

一体慎二に何があったのだろうか・・・

「ねえねえ衛宮くん」

クラスの女子が話しかけてくる。

「いったいどうしたのアレ？」

「別人だよね」

「わたし、今の間桐くんなら好きかも・・・」

・・・本当に何があったんだ・・・

そして今日はバイトの日だ。

「さて、やるか・・・ってランサー!?!」

「ん？おお、テメエか」

「何でお前がバイトをしてるんだよ？」

「ハア・・・それがよう・・・バゼットの奴にこつ、祝いの品を買ってやるうかなって・・・」

「祝い？何のさ」

「復帰祝いに決まってるだろうが・・・だがよ、言峰のやるうに従った時と同じで文無しでな・・・だからまずはバイトをして金を貯めるところから始めようと思ってな」

「そうだったのか・・・何か、人間らしいな」

「らしいんじゃないよ、今は人間なんだよ、小僧」

ランサーは笑いながら言うてくる。

「・・・じゃ、働くか」

「よっし・・・力仕事は得意だぜ」

「・・・シロウ、随分と遅かったですね」

セイバーが家の前に立っていた。

「あ、悪い、セイバー。・・・晩飯の用意、すぐするから」

「いえ、構いません。アーチャーが作っています」

セイバーの言葉に目が点になる。

「驚くことではないでしょう。・・・私もまだ信じられませんが、アーチャーが未来のシロウと言うなら料理は得意のはずです」

確かにそれはそうか・・・

「・・・なあ、セイバー」

「はい？なんでしょうか」

「・・・いいのか？あの丘に帰らなくて」

俺はずっと気になっていた事を口にする。

「・・・確かに、私はあの丘に戻らなくてはいけません」

「・・・」

「ですが、今人としての生が再び与えられたのならば、私はこの命が尽きるまでここであなたと共に生きたいと思っています」

「セイバー……」

「さあ、いきましようシロウ。みんなが待っています」
セイバーが手を差し出してくる。

「ああ、今いくよセイバー……いや」

もうこの名で呼ぶ必要はないだろう。

「いっとう……アルトリア」

「……はい」

?????

「お楽しみいただけたかの？……次はこの世界じゃ」
再び指をパチンと鳴らす。

日向

「……しかし、相変わらず賑やかだな、このライブは」

俺はそうポツリと呟く。……今俺はユイを連れてガルデモのライブに来ていた。

「……いつまでこんな所にいる？そう言う奴もいた気がする……」

「フーーーーッ……!」

ユイはおおはしゃぎだ。そしてライブが終わる。

「……あ、秀樹さん！サイン会ですよ!」

「待て待て、車椅子じゃ通れないから……よっ」

俺はユイを背におぶる。

「ふえ!?!は、恥ずかしいですよ!」

「仕方ねえだろ?こうしなきゃ列に並べねーんだからよ」

そして俺達の番がやって来る。

「次の人は・・・」

「あ、俺じゃなくて、コッチっす」

俺は頭を動かしてユイを示す。

「・・・身体が不自由なのか？」

確か・・・そうだ、ガルデモのリーダーの岩沢が聞いてくる。

「ああ、事故でな。今は指を動かすのがやっとだよ」

「ど、どうも・・・初めまして・・・」

「何柄にもなく緊張してんだよ。憧れの岩沢が目の前にいるんだぜ？」

「・・・ふふ、えつと・・・名前は？」

「あ・・・ユ、ユイって言います!!..!」

「そっか、ならユイ。アンタには夢があるか？」

「え・・・はい、一応・・・」

「ならその夢を諦めずにずっと追い続けてみな。そうすれば必ず叶うから」

「は、はい..!」

そしてサインを俺に渡して岩沢は手を差し出す。

「え……」

「握手だよ。また来てくれよ？」

「でも……」

「ユイ、もう岩沢に言われた事を忘れたのかよ？」

「あ……そうでした。諦めちゃダメですよね……」

ユイはそう言っつて右手を震えさせながら岩沢に向かって手をゆっく
りと近づけていく。

「……ッ!」

ユイはそれだけで汗だらけになる。……だが、その手はちゃんと
岩沢の手に届いた。

「あ……握手、できた……」

やった本人が一番驚いてた。

「……じゃあな。次のライブを楽しみにしてくれ」

「~~~~」

「嬉しそうだな」

「だってあの岩沢さんに名前を憶えてもらったり、サインをもらったり握手をしちゃったりしたんですよ!？」

「・・・そうだな。確かに嬉しいよな」

その時、角を曲がるうとしたら・・・

ドンッ

「きゃっ!?!？」

「うわ!?!？」

誰かが車椅子にぶつかってコケた。

「あ・・・だ、大丈夫ですか!？」

俺は倒れている女性に話しかける。

「あ、いえ・・・こちらも急いでいたので・・・すみません」

女性は立ち上がって誇りを払う。

「本当に大丈夫ですか・・・？すみません・・・アタシが車椅子に乗ってるから・・・」

「あ、気にしないでね。あたしもちゃんと前を見てればこんなことにはならなかったから」

「あの・・・ところで良いんすか？何か急いでたようですけど・・・」

俺がそう言つと女性は慌て始める。

「アーツ！？は、早くしないと弟の授業参観に間に合わないー！」

「あ、アタシは大丈夫ですから、行ってください」

「え・・・でも、そ、それじゃあ改めてお詫びをしたいので、暇な日にこの番号にかけてください！それでは！」

そう言つて名刺を渡してまた走っていく。

「えっと・・・『仲村ゆり』か・・・」

「忙しそうな人でしたね」

「そうだな。・・・ユイ？大丈夫か？」

「アタシは平気ですけど・・・あの女の人の方が大変だったと思い

ましたよ。・・・だってあの人、アタシにぶつかる瞬間に自分から跳んでましたもん」

「・・・参ったな、これじゃどっちがお詫びすればいいんだよ・・・」

「それより、病院に行きましよう？今日はリハビリが午後から入ってますよね」

「そうだな・・・行くか」

「・・・え、今は人がいない？」

病院に着いていきなりコレだ。

「すみません・・・あいにく出張や緊急手術などで私のような研修医しかいないんです」

「ハア・・・」

「ですが簡単な検査は私でもできますので、検査してからユイさんにはリハビリに向かってもらいます」

「そうっすか・・・お願いします」

「ええ、任せてください。日向さんはあちらの席でお待ちしていてください」

そう言っつて研修医・・・音無は席を指差す。

「ふう・・・」

「・・・貴方も何か病気ですか？」

隣にいた小柄な男性がそう言う。

「いや、俺の彼女・・・がな」

少し彼女と呼ぶのは恥ずかしいが、あえてそう呼ぶことにする。

「・・・と言うか何処かで見たとあるような・・・」

「ああ、僕、陶芸家ですから・・・何処かでふと目にしたんだと思いますよ」

「そっか・・・えっと」

「直井です。直井文人」

「俺は日向。よろしくな直井」

俺はそう言ってから直井に話しかける。

「そっぴや直井は何かの病気なのか？」

「いえ・・・軽いカウンセリングですよ。・・・少し前まで僕は悩んでまして・・・その時に音無さんと出会ったんです」

「ふーん・・・」

「音無さんは僕の悩みを全て解決してくれました。・・・だから、こっぴして暇な時にちよくちよくお話をしているんですよ」

「・・・あの」

その時、少女が話しかけてくる。

「あ、立華さん。お久しぶりです」

直井がそう少女に挨拶する。

「久しぶり、直井さん。・・・結弦は？」

「今検査で忙しそうですよ？どうしたんですか？」

「……初音に言われてこれを持ってきたの」

そう言っつて立華が取り出したのは可愛らしい弁当箱。

「……貴方は？」

立華が俺に聞いてくる。

「あ、俺は日向。……その音無先生が検査している奴の連れ」

「そう……あたしは立華奏」

「奏ちゃんね……」

おかしいな……岩沢といい、仲村といい、音無といい直井といい奏ちゃんといい……初対面じゃ無い気がする。

「日向さん。検査終わり……っつて奏？どうしたんだよ？」

音無の口調が変わる。こっちが本来の話し方なんだろう。

「結弦、初音が怒ってたわ。『いつもいつもお弁当を忘れるんだから』っつて」

「悪い悪い、朝早いからな、つい忘れちゃうんだよ」

そして音無が遅めの昼食を食べている時に、俺達は色々話し合った。

「でよ、その時にそいつが・・・」

「ははは、マジかよ」

お互いに話が弾み、気軽に話せる仲になっていた。

「・・・しっかし直井。お前って結構いいモノ作ってるんだな」

俺は直井の作品を写真で見え言う。・・・ちなみに写真は音無が持ってた。

「いえ・・・僕はまだまだです。・・・まだ兄や父に追いついていませんから」

「ふーん・・・」

「秀樹さん！ここにいたんですか！」

その声振り返ると看護師さんに車椅子を押してもらっているユイがいた。

「あ、もう終わったのか・・・それじゃあ、帰るか？」

「はい！」

俺は音無達に別れを告げて帰路に着く。

「……ねえ、秀樹さん」

「んだよ？」

「何で秀樹さんはここまでしてくれるの？……アタシは、それが知りたくて……」

何故かユイの声のトーンが低い。

「……前に話さなかったっけ？……俺達の出会いは俺がお前の部屋にホームラン叩き込んだんだよな」

「あの時はビックリしましたよ。いきなり大きな音がしてボールが飛んでくるんですもん」

「俺もさ、こんな漫画みたいな事があるんだなーって思いながら内心ビクビクしてたんだよ。……どんな鬼親父がいんのかなって。……けど」

「けど？」

「実際にいたのは優しい親と身体が不自由な少女だ。……最初は可哀想だなんていう同情が強かったな」

「……」

ユイが顔を伏せる。・・・だろっな。コイツは同情されるのは嫌いだろっしな。

「・・・でも、代わりに何か運命的なモノを感じてたんだ。『この子の介護をしたい。一緒にいたい。仲良くなりたい』ってな」

「秀樹さん・・・」

「それに、単なる同情だけじゃここまでお前の面倒を見ねえよ」

「じゃあ・・・ますか」

ユイがボソツと呟く。

「ん？何か言ったか？」

「アタシと・・・結婚してくれませんか」

そう言うユイの顔は後ろから見ても解るほど真っ赤だ。

「アタシ・・・こんな身体だから・・・一生、誰にも出会えないんじゃないかって・・・」

俺はユイを後ろから抱きしめる。

「ふわっ！？ひ、人が見てますよ！？」

俺が見る限り人はいない。車も通ってない。

「・・・ああ、俺が結婚してやんよ。どんな障害が、ハンデがお前
にあったとしてもな」

「・・・ッ！」

ユイが息を飲むのが分かった。

「それじゃあ・・・秀樹さんが来る前までずっとアタシが迷惑をか
けてきたお母さんも・・・大切にしてくださいますか？」

「ああ。もしユイと結婚したならあの人も俺の母親だ。・・・大切
にするよ」

頭に一瞬“ありえない”映像が流れる。ユイが立っていて、音無が
いて、知らない男もいて・・・

「・・・さ、帰ろうぜ。あんま遅くなると親が心配するぞ？」

「・・・はい」

俺達は人生を幸福に生きる。・・・もう、

『じゃあな、親友!』

・・・あの世界に行くことはないだろう。

?????

「ふむ、この外史はちゃんと進んでいるようじゃな・・・とと、次が最後じゃ。・・・それでは」

パチン、と指をまた鳴らした・・・

一刀

「……今日の政務はこれで終わり？」

「あ、はい。以上です」

朱里に聞いて終わりを告げられると身体力が抜ける。

「……あの、ご主人様。少しお休みになられた方が……」

「大丈夫だよ。俺はまだまだ余裕さ」

「ですが、平和に導いた天の御遣いとしてご主人様は三国を渡り歩いています。……疲れない筈がありません」

そうだ。俺はこの乱世の世を静めた天の御遣いとして民の支えとなつている。本来なら亮や咲の方が相応しいけど、今彼らはいない。なら残っている俺がやるべきだと思ひ立った。

「じゃ、次は運動だな。じゃあまた後でね、朱里」

「あ、ご主……」

最後まで聞かずに俺は中庭に向かう。

「……のう、お館様。いくらなんでも無理をしすぎではないか？」
桔梗がそう言う。

「そつだな。最近のお館は変だ。倒れるぞ？」

焰耶にまで心配されるとは、やはりかなり無理なコトをしているらしい。

「そつだぜアニキ。あたいから見ても頑張りすぎだよ」

「そつですよ。終いには麗羽様まで心配してしてるんですよ」

「え……嘘」

猪々子や斗詩にも言われる。しかも衝撃の事実まで。

「……だが、顔に疲れは見られない。一体何を動力にしておられるのですか？主よ」

星が聞いてくる。

「約束……かな」

「約束？……咲殿達との……」

「ああ、俺にしかやれないことをしっかりやろうと思ってね。……」

アイツらが役目を果たして消えたのなら、俺も消えるかもしれない」

「……主！」

星が怒りを含んだ声で言う。

「安心してよ、星。俺の役目は多分、そう簡単には終わらない」

きつと俺の一生を使っても足りないだろう。

「……お館。始めるぞ」

焰耶が金棒を振り回す。

「……うん、お願い」

俺は鍛冶屋に造ってもらった日本刀を構える。

「たああああ！！！！」

「うおおおっ！！！！」

俺達は同時に駆けつけた……

「……んでやられるんだからな……」

「アンタってバカでしょ」

詠に治療してもらいながらそう言われる。

「……なあ、詠」

「……何よ」

「……寂しくないのか？咲がなくて……」

「……ッ！バカ……！アイツの名前を出さないでよ……」

そう言った詠の目には涙が溜まっている。

「……ごめん……今のは無神経すぎた……」

「……ボクも、どんな危険な目に逢ってもいいから咲に着いて
きたかった……」

「詠……」

「でもね……ボクが着いていつたら絶対に足手まといになる。……
・咲と離れるのはイヤだけど、迷惑をかけるのはもつとイヤ」

「……」

俺は無言で詠の頭を撫でる。

「……」

その時、コンコンッと扉が叩かれる。

『ご主人様、いるか？』

翠の声だ。

「ああ、いるけど……」

「入るぜ。……ってご主人様」

そう言つて翠は俺と詠を見る。……泣いている詠の頭を撫でている俺。

「……サイツデーだな、ご主人様」

「いやいや！？俺が泣かしたん……だけど色々弁解を……」

「……ってそれより呉の話は本当かよ？」

翠が話題を伝える。呉の話……それは蓮華が行方不明になつたということ。……だが皆は知っている。どうしていないのか……それはあの男……于吉の仕業に違いないと思つた。

「それに……確か甘寧と呂蒙もいなくなつたんだよな」

それは知っている。・・・というか現場にいた。突然空間が開き、八雲紫という人が蓮華が操られている。亮がピンチだと二人に伝えて二人は八雲紫の力を借りて何処かにいった・・・

「・・・ご主人様？」

翠が覗きこんでくる。

「いや、何でもないよ」

俺は詠にお礼を言いながら中庭に戻る。

「・・・」

考えながら歩いていたその時、

ズボツ！

「ツ!？」

いきなり土の感覚が消え、落ちる。

「いてて・・・」

「・・・ご主人様？」

たんぽぽが上から顔を出す。

「あのかな・・・むやみやたらに落とし穴を掘るなよ・・・」

「ご主人様が悪いんじゃない。穴が空いてるのに落ちるなんて」

「・・・え」

落とし穴じゃなくて純粋な穴？

「さっきまで南蛮兵士が落っこつてた穴だよ・・・今埋めようとしてたらいきなりご主人様が落ちるんだもん。びっくりしたよ」

俺は穴から這い出る。

「・・・つてたんぽぽ？何か泥だらけじゃないか？」

見るとたんぽぽの服は泥だらけで所々擦りきれていた。

「あは、あはは・・・その・・・」

たんぽぽは少し言い淀んでから・・・

「・・・桃香さまに負けた」

「桃香に？」

あの桃香も特訓を始めている・・・恥ずかしい話、俺はすでに桃香に何回も負けている。桃香の成長速度は雪蓮や華琳も認める程だ。

「じゅじんさま」

璃々ちゃんが走ってくる。

「どうしたの？璃々ちゃん」

「うんとね、おかーさんが探してたよ」

「紫苑が？」

俺は中庭に向けて歩き出す。・・・中庭にいたのはちつきとは違うメンツ。

「えい！」

「甘いのだ！」

カキンッ！

「桃香様！もう少し深く踏み込んでください！」

「う、うん！」

「まだまだなのだ！」

ヒュンッ！

「今度は大振りすぎです！」

桃園の三姉妹が中庭で特訓していた。俺は近くの椅子に座っている

紫苑や雛里の傍に行く。

「あ、ご主人様……」

「やあ、雛里。……紫苑、俺を探してたって？」

「ええ。これを見せたかっただけですけど」

「桃香の特訓を？」

「……はい。私は存じませんが、あの桃香様やご主人様がここまでやる気になっている。お二人は似ているというのを自覚してほしかったんです」

「……え？何で……」

「……あの、多分、似ているならお互いに負けたくないと努力を続けるから……だと思えます」

「……えっと、つまり紫苑は、俺や桃香にライバル意識を持たせてもっと成長を促そうとした。……ってことかな。」

「……それは建前ですけどね」

そう言ったのを俺は聞き逃さなかった。

「建前？」

「……ここ最近ご主人様は頑張りすぎです。……ですから少しだけでも私達が気晴らしをできればと……」

雛里がそう言ってくれた。

「ご主人様！ご主人様も一緒にやろうよー！」

桃香が剣をぶんぶん振り回しながら言う。

「……」

「あわわ……」

「……申し訳ありません。桃香様には説明していませんでしたわ」

「……ハア」

仕方なく日本刀を持って桃香達の元に走る。……当然のように叩き潰された……

「……大丈夫ですか？ご主人様……」

「……一日に二回もここに来るやつはすごいわよ」

再び医務室。今度は月に治療をしてもらっている。

「アンタ・・・実は痛いのが好きなんじゃないの？」

「俺にそんな趣味はないよ!？」

詠にまさかのM疑惑を建てられた・・・

「・・・ん、ありがとう、月」

俺は月の頭を撫でる。

「へう・・・」

前までならここで詠が何かを言うハズだが、詠は黙ったままだ。

「・・・詠ちゃん？」

「え？な、何？」

月もおかしいと思ったのか詠に話しかける。

「・・・ごめん、ボク・・・少し歩いてくる」

そう言っつて詠は部屋から出ていった。

「・・・やっぱり、アイツがいないとダメなのかな」

「・・・咲さんは詠ちゃんにとって大切な人でしたから・・・」

「詠はともかくねねはもつとダメージ・・・悲しみが大きいだろう」

な。咲だけじゃなくて恋もいなくなつたから……」

「そうですね……詠ちゃん達……よく部屋で泣いてるんです」

「……そう言えば呉の人達も元気がなかったような……」

やっぱりアイツらの存在はそこまで大きかったんだな……

「……ご主人様も蜀の人の支えです」

「月？」

「ですから……ご主人様までいなくならないください」

確かに不安を感じるだろう。二人の御遣いが消え、俺が残っている……つまり、もしかしたら俺も消えるかもしれないと皆不安なんだ。

「……大丈夫、消えないよ、俺は」

更に付け加える。

「それにアイツらは戻ってくるさ、必ず」

俺は天井を見上げる。

「……だから、早く帰ってこいよ……」

亞莎

「……」

私は今、紅魔館にいる。……八意永琳と言う人に蓮華様の治療をお願いした。だが普通の石化なら良かったのだが、高度な魔法によって石化したため、時間がかかるらしい。だから私はこの紅魔館でお世話になっている。

「……亞莎、その本を取ってちょうだい」

「あ、はい。パチュリーさん」

こうしてお手伝いとかをして生活している。……ちなみに思春さんはまた別の所へ行った。

「……はあ」

「どうしましたか？亞莎さん」

小悪魔さんが話しかけてくる。

「あ、いえ……蓮華様はどうなったのかなって……」

「……それは真名、ですよ……」

「あ、すみません。．．．えっと、孫権様です」

「．．．興味深いわね」

パチユリーさんがそう言つて一冊の本を取り出す。

「貴女は確か、呂蒙だったわね」

「は、はい．．．」

「私が知ってる呂蒙は男．．．でも目の前にいるのは女の呂蒙．．．」

パチユリーさんは私に一冊の本を渡す。．．．それには『三國志』と書かれていた。私も文字の勉強をして大分読み書きできるようになった。

「大澤亮と言つたかしら．．．彼には一度やられたわ。．．．話が逸れたわね。彼は何か予感じみたコトをしなかつたかしら？」

パチユリーさんに言われると心当たりがたくさんある。亮様は孫策様や冥琳様に祭様．．．それに私の死まで知っていた。

「彼はこれを読んだから貴女達を救えたのかもしれないわ。．．．せめて貴女も一度は読んでおいた方が良いわ」

「はい、後で読ませていただきます」

私はその場を後にして門に向かう。

「・・・美鈴さん、起きてますか？」

「その何時も私が寝てるみたいな言い方は止めてください・・・」

「・・・そうは言われなくても・・・ここに来てからもう数えきれないくらい咲夜さんに怒られてるのを見えますから・・・」

「・・・それを言われると何も言えません・・・」

美鈴さんは頬を指で掻きながら言う。

「それで、どうかしたんですか？亞莎さん」

「いえ、咲夜さんに頼まれました。『美鈴が寝てるようなら私に伝えてください』・・・と」

言った瞬間、美鈴さんは震え始める。

「だ、大丈夫ですよ美鈴さん！ちゃんと警備をしてれば何もありませんから！」

「・・・それは解ってるんですけど・・・つい、うっかり」

「・・・それじゃあ私は戻りますね。・・・あ、お飲み物ここに置いておきます」

そして次は紅魔館のとある部屋に向かう。

「失礼しま・・・」

「亞莎ーッ!」

「わわっ!? フラン!?」

私に突撃してくるフラン。最初は敬語を使っていたけど、フラン本人に普通に話してほしいと言われ、今の状況に至る。

「亞莎、遊ぼうよ!」

「ごめんね、今はまだ忙しいから、やることが終わったら遊んであげる」

「わーい! 約束だよ!」

「・・・フランも大分貴女になついたようね」

「レミリアさん」

紅魔館の主、レミリア・スカーレットさんだ。この人は私が于吉に

呼び出されている時に亮様や咲さんと一緒にいたらしい。

「それにしても貴女も働き者ね。どうかしら？紅魔館にずっと居るのは……」

「……残念ですけど、私には帰らなきゃいけない場所がありますから」

「そう……それじゃあ、それまでの間、フランを頼むわね。あの子、友達が増えて喜んでるのよ」

「はい、分かりました」

「お仕事終わった？」

フランが話しかけてくる。

「うん。大体終わったから、何して遊ぶ？」

「うんと……弾幕じっ！」

「……ごめん、私はそれできないんだ」

スペルカードルールと言われるモノによって人と妖怪は均衡を保っているらしい。……実はこの紅魔館で人間は咲夜さんだけと言われてもまだ信じられない。

「（亮様……明命……）」

まだあの世界にいるのだろうか……

「亞莎！じゃあ追いかけてこいよー！」

「……うん、じゃあ行くよー！」

思春

ガキインツ！

「うあっ!?!」

妖夢が吹き飛ぶ。

「……もう終わりか？」

「く……まだ！」

私はこの西行寺家で世話になっている。当初の予定は亞莎と別れた後、蓮華様が回復されるまでこの幻想郷を巡り歩くハズだったが・
・偶然買い出しに出ていた妖夢を見つけ、色々あり、幽々子殿の計らいでここに住み込む事になった。

「……妖夢、お腹空いた」

再び走り出そうとした妖夢がコケる。

「……すいません、思春さん……」

私は剣をしまつ。

「……構わないから行ってこい」

「思春も食べるでしょ？」

「……はい、頂きます」

家の中に入り、昼食の用意を始める。

「……しかし、私には今だ疑問が残っている」

「……何がですか？」

「お前や幽々子殿が人外だということだ」

「まあ、初めてこの幻想郷に来た人は大体そう思いますよ」

「……しかし、私はあの世界で一度博麗の巫女を見たが、博麗の巫女は人間なのか？」

「……それは私も疑問ですよ。一応幻想郷最強らしいですから」

「……」

「よっ……出来ました。思春さん、お皿を取ってもらえますか？」

「ああ」

「妖夢、まだ？」

「もう少しですよ、幽々子様」

妖夢の対応を見る限り普段からこんな感じなのだろう。

「……食事を食べたらまた相手をお願いします」

「……お前は亮みたいだな。アイツも暇さえあれば私に鍛練してくれと言ってきたからな」

「強くなりたいとそれだけ思ってるってことですよ」

「……妖夢は何故強くなりたいと思っている？」

私は妖夢に聞く。

「……私は、幽々子様を守りたいんです。……今はまだ未熟ですが……いつかは私の尊敬している人みたいになりたいと思っています」

「……そうか」

誰かを守るため……私もそうだ。

「……なら稽古をつけてやる。私も力を試したいからな」

「……はい！」

「……」飯！

私達は急いで食事の用意を始めた……

?????

「どうだったかの？物語はまだまだ続く。……ほら」

そう言つて少年は下を指差す。

「彼らはいつても窮地から這い上がってきた。……きっとこの物語も終焉に導いてくれるじやろう。……儂の力はそれほど残つておらんが可能な限り彼らの旅を見守りたいと思つておる。……正史の者よ、これからも彼らを見守つてくれんか？……これが儂の願いじゃ。……それではお別れじゃ。……また何処かで会おう」

番外編（後書き）

亮

「時間稼ぎね……」

剛鬼

「軟弱だな」

咲

「いつの間にさも当然のようになっているんだよ……」

剛鬼

「所でフェイトという奴はいるのか？」

咲

「？何でだよ？」

剛鬼

「少し話をしようかとな……」

亮

「……絶対血が流れる話だよ……」

咲

「なあ、少し怒ってないか？」

剛鬼

「別に俺は何時も通りだ」

二人

「「そ、そうですか……（殺気がにじみ出てる……）」」

剛鬼

「……そうだな、咲、お前には鉄砕牙の使い方を熟知してもらおうか」

咲

「いやいや、アレって結構大変だし今本編それどころじゃないし！」

剛鬼

「……なら亮、お前には……」

亮

「こ、ここは後書きだから何か会話しようぜ、な？」

剛鬼

「なら本編に乱入すれば好きにしていんだな？」

二人

「「ダメだつてのおおおお！！！」」

剛鬼

「……仕方ない、なら恋に会って帰るか」

咲

「変な色気出すんじゃないぞ」

剛鬼

「俺はそんな男じゃない。・・・俺にはちゃんと俺の世界の恋がある」

亮

「・・・だそうだ。それじゃあ今回はここまで」

剛鬼

「次回の真似と開閉と世界旅行」

咲

「次回もまた見てください！」

亮

「それではまた次回！」

憎悪（前書き）

宿題が・・・宿題が終わらない・・・！
ではどつぞ。

憎悪

「……亮、大丈夫ですか？」

明命が近づいてくる。

「……無事だったんだな、明命」

「はい。……あの爆発は私の意識を刈り取るだけの威力しかありませんでした」

「……アーチャーの奴……何だかんだで加減してやがったな……」

よく考えれば固有結界を使われたら俺達は全滅してた。

「……ですが良かったです。ネギさんが復活して、亮が無事で」

「無事とは言い難いけどな……」

満身創痍。それが今の俺にピッタリな言葉だ。

「生きているだけでも私は嬉しいです。どんな状況でも」

「……ああ、俺もだ」

明命に向かって微笑む。……その時、

「・・・おやおや、随分と仲が良いですね」

「「ッ!?!?!」」

俺と明命が身構える。そこには俺・・・于吉の姿があった。

「・・・丁度いい、ここで倒してやる」

「・・・この二人のようになりますよ?」

そう言って于吉が両手を突き出す。・・・その両手が掴んでいたものは・・・

「・・・咲!?」

「恋さん!?!」

生きているか判らない程スタボロな咲と石化した恋だった。

「・・・て・・・めえ・・・」

「ふ・・・返しますよ」

そう言って于吉は二人を放り投げる。・・・マズイ、咲はともかく恋は碎けてしまう。

「明命!」

「御意!」

明命が恋を受け止め、俺は咲を受け止める。

「おい！しっかりしろ！咲！」

咲に必死に呼びかける。

「……ぐ……」

生きてる……！

「くく……これを見てもまだやりますか？」

「……愚問だ。俺は貴様をぶつ殺す」

俺はケータイを取り出す。

「明命……俺達は二人で一人だ！」

「はい！」

「モーションキャプチャー、W！」

腰にダブルドライバーが現れる。

「やるぞ」

『サイクロン！』

「……はい」

『アクセセル!』

俺はガイアメモリをベルトに装填する。すると明命の方のベルトにガイアメモリが転送される。

「……来てください!」

明命がガイアメモリを装填し、手を突き上げると、更に何かが飛んでくる。

『エクストリーム!』

「「変身!」」

俺の身体は明命と一体化し、仮面ライダーW C A Xへと変身する。

「……さあ」

「……振り切ります!」

明命がエンジンブレードを構える。

「……最初は私が行きます」

「ああ……このか!二人を頼む!」

「う、うん!」

俺達は于吉に向けて走り出す。

「ふむ・・・向かってきますか」

于吉は黒い鈴音を構える。

「ヤアアアッ！」

「・・・ハッ」

カキイインッ！

初撃は簡単に防がれる。・・・けど、まだ終わりじゃない。

「明命！」

「ッ！」

『エンジン！』

俺の声に反応して明命がギジメモリをエンジンブレードに入れる。

『エレクトリック！』

刀身に雷が宿る。

「・・・アレを受けるのは危険ですね」

于吉はそう呟き、攻撃を避けながら距離を取り始める。

「・・・今です！」

『ジエツト!』

「タアアアツ!」

切っ先からエネルギーが発射される。

ズガアアンツ!

「・・・まだまだ! 明命、代われ!」

身体の主導権を俺が持つ。

「そらよ!」

俺は于吉がいる方へエンジンブレードを投げる。

「くっ!?!」

カキヤアンツ!

俺はすぐにプリズムソードを構える。

「ウオオオオツ!!」

于吉に斬りかかった瞬間、

ズドオオンツ!!

「「な!?!」」

さっきのジェットがまずかったのか、床が崩れた。

「つつ……」

「大丈夫ですか？」

「あ、ああ……大丈夫」

『フルチャージ』

「ッ!？」

俺はすぐに振り返る。……そこにいたのは、仮面ライダーネガ電王。

「……消えなさい」

「やば……」

「……ふんっ」

ズガアアンツ!!!

「ガアアアアツ!？」

「キヤアアアツ!？」

変身が解除され、俺と明命は吹き飛ばす。

「あ……明……命……」

「く……まさか、ここまで……」

身体が動かない。于吉はデンガツシャーを持ち、ゆっくりと近づいてくる。

「……やれやれ、こんなに呆気ないとは……もう興味もありません。死になさい」

武器が振り上げられる。俺は力を振り絞って明命の前に立つ。

「何を無駄なことを。そんなことをしても周泰は殺しますよ?」

「うっせ……俺はもう諦めない、立ち止まらないって決めたんだ……最後の最後まで諦めらんねーんだよ」

「……なら一撃で二人とも仕留めてあげましょう。……これで完全にこの外史は破壊できる」

「…………それはまだ気が早いと思っぜ」

「…………まだ負けてない」

「何っ!?!」

バァァンッ!

この声は…………!

「よ、間に合ったみたいだな」

「…………平気?」

「咲！恋！無事だったのか！」

「・・・このかが恋と咲を助けてくれた」

「待ってる。今回復してやるから。・・・魔力最大集中、ケアルガ」
身体のダメージが回復していく。

「さて・・・電王には電王だな。モーションキャプチャー、電王」

腰にケータロスが付いたデンオウベルトが現れる。

「明命、咲、恋！行くぞ！」

「はい！」

「俺もか!？」

「・・・わかった」

「てんこ盛り、変身!!!」

『クライマックスフォーム』

俺は仮面ライダー電王クライマックスフォームに変身する。

『な、何ですか？コレ』

明命が喋ると右肩が揺れる。

『……みんな一緒』

恋が喋り、左肩が揺れる。

『何か変な気分だけど……』

咲が喋り、胸元が動く。

「へへ……俺達！」

すると皆の息が合った。

「……うみじ参上!!」「」「」

……一人ずれた気がしたが気のせいだ。俺はデンガツシャーを組み立てる。

「往生しやがれ、于吉!……いくぜいくぜえええ!!」

デンガツシャーを乱暴に振り回す。

ガキヤアンツ!!

カアンツ!

「そろそろそろあー!!」

「ぐ……おのれ……」

ひたすら攻める。自分のペースに持ち込む！

「オラッ！」

デンガツシャーをロッドにして投げる。

「効きませんよッ！！！」

ガキャン！

弾かれる……のは解っていた！俺はすぐケータロス进行操作する。

『チャージアンドアップ』

パスを通して于吉の方に向く。

「咲！やれ！」

『応よ！』

胸元の電仮面が動き、多数のミサイルが発射される。

ズガガガンッ！

「な……！！？」

「次だ！恋！」

『……うん』

アックスの電仮面を先端に、三つの電仮面が左腕に集まる。

「オラアッ!!」

ドガアアンツ!!

「グアアアッ!？」

于吉がその場で耐える。……だが好都合。

「明命!」

『はい!』

今度はロッドを先端に、右足に電仮面が集まる。

「テリヤアアッ!」

殴ったそのままの勢いで体を回転させて蹴りを放つ。

ガゴオオンツ!

「ぐあ、な、生意気な……」

『決める、亮!』

『止めます!』

『……倒す』

「ああ！」

『フルチャージ』

弾かれたデンガツシャーを拾いながらソードにして于吉に斬りかかる。

ガキインツ！

「ナメるなあ！！！」

于吉はデンガツシャーで防ぐ・・・が押されていく。

「何故だ・・・何故私が人形にいいいい！！！」

『俺達を見くびるんじゃねえ！！！！』

『・・・恋達は絶対に負けない』

『貴方のような人には・・・絶対に屈しません！！』

「必殺！俺達の必殺技・・・」

デンガツシャーが光出す。

「クライマックスバージョン！！！！」

ズバァァァンツ！！！！

「ぐわああああ!?!」

于吉が吹っ飛び、下に落ちていく。俺は変身を解除した。

「やった……のか?」

「さあな……だけど俺らは生きてる」

「……恋達が戦えば、誰にも負けない」

「そうですね」

「……おい!」

上からハルナの声が聞こえる。

「ネギ君とフェイトが戦うよ!早く乗って!」

俺達は頷き合い、船に向かっていった……

憎悪（後書き）

亮

「今回もゲストか」

咲

「剛鬼と同じ世界の天の御遣いの一人。斎藤知也が登場です！」

知也

「斎藤知也だ。よろしく」

咲

「知也はマグナムとライフルを使うガンマン。それなりに剛鬼とも交流があり、その銃の腕前はまさにロックオ・・・とあるスナイパーに匹敵するほど」

知也

「・・・今、違う何かの名前を出さなかったか？」

亮

「そりゃ口癖がな・・・」

咲

「どこのソレビーみたいだからな」

知也

「あんまふざけた事を言っと狙い撃つぜー！」

亮

「そうそれ。しかし、銃使いはあの世界でどうするんだ？弾とか」

知也

「・・・企業秘密だ」

咲

「俺は魔法弾だから弾切れ〓魔力切れ何だよな・・・」

知也

「魔力か・・・」

亮

「そ、俺らは恋姫の世界だけでなく色々な世界を廻ってるからね。魔力と気は生命線だ」

知也

「なるほど・・・つか懐・・・剛鬼の奴は魔力を使ってるのか？」

咲

「それはないだろ。アイツは純粋な力で戦っているからな」

知也

「だよな・・・それで銃弾を弾くからやってらんねえよまったく」

亮

「まあまあ・・・んじゃトリガーマグナムのお返しで・・・咲」

咲

「はいはい・・・それでは、ダラララララ」

亮

「ドラムロール？」

咲

「デン！・・・ほい」

知也

「ライフル？」

咲

「とあるバルキリーのと某マイスターのガンダムが使ってたのをモデルにしたライフル。・・・両方実弾に換えてあるけど」

知也

「へえ・・・」

亮

「つーわけでこれで世界の歪みを狙い撃つてくれ」

知也

「ああ。ありがたく受けとるよ」

亮

「それでは今回はここまで」

知也

「それでは次回の真似と開閉と世界旅行！」

亮

「次回もまた見てください！」

咲

「それではまた次回！」

再誕（前書き）

段々ネギまから離れてっっているような・・・ではどっぞ。

再誕

船に乗って俺達はネギの元・・・祭壇へと急ぐ。

「・・・亮」

咲に呼ばれ、振り向くと咲は船内から手招きをしていた。

「・・・何だよ？」

すると咲の身体に闇が纏う。

「咲!？」

「大丈夫、暴走じゃない。・・・この感じ、ネギ以外に闇がある」

「ッ!・・・まさか」

「于吉は“生きている”ってコトだな」

「チッ・・・仕上げ損なっただか・・・」

「・・・だけどそんなのはどーでもいい。・・・ゲートが開きかけてる。・・・いや、もう開いたか」

「え・・・？」

「ここと麻帆良が繋がったんだ。・・・アイツらの目的はこれだ」

「・・・」

「・・・だけど今はネギに任せよう」

「そう、だな・・・」

今フェイトを止められるのはネギだけ・・・信じるしかないよな。

『・・・亮君達、聞こえる？』

ハルナの声が聞こえる。

「どうした？」

『ここにいるコタ君達を救助してきてくれる？』

「あ・・・そうだな、分かった」

俺達は軽く話を通してから下に飛び降りる。

「・・・夕映！」

「あ……亮さんですか。丁度良かったです」

まき絵も夕映と一緒にいた。咲は楓を助けに向かっていった。

咲

「……楓！無事か？」

岩場に倒れている楓に話しかけるが反応が無い。

「魔力最大集中……ケアルガ」

楓のダメージを回復させ、肩に担ぐ。

「戻るか……ッ!？」

身体が疼く。……この感じ……まさか!？

「（間に合え・・・！！）」

楓を落とさないように出来るだけ全速力で飛ぶ。・・・そして見た。誰も気づいていないが・・・亮の後ろに于吉が迫っていた。

「亮ッ！！後ろだッ！！！」

「え・・・ぐあー!？」

振り向いた瞬間、亮が于吉に首を掴まれる。

「が、あ、て、めえ・・・」

「オノレ・・・オノレ・・・ソノカラダ、モラウ・・・」

于吉がそう言った瞬間、亮の身体と于吉の身体が同化する。

「な・・・あ、ああ・・・アアアアアアアアアアアッ！！！」

亮が尋常じゃない叫びを上げる。

「亮!？」

「亮君ッ！」

明命とアキラも船から飛び降りてきた。

「ッ！クルナ・・・フタリ、トモ・・・」

『丁度いい・・・その二人も私の配下にもらいましょう』

「あ・・・キヤアアアッ!？」

「ウアアアッ!？」

明命とアキラも黒い闇に包まれる。

「ヤメ・・・口、ウキッ・・・」

亮は二人が闇に包まれている原因であろう仮契約の繋がりを破棄するため、仮契約カードを取り出すが・・・

『さしませんよ』

「ナ・・・二・・・!？」

亮の左腕を“亮”の右腕が掴んだ。

「く・・・亮ーッ!」

こうなったら最悪楓を落としかけてでも速度を上げて・・・!

「・・・五十嵐咲、綾瀬夕映、佐々木まき絵。貴方達は邪魔ですね」
亮が軽く腕を払うと黒い衝撃波が俺達を襲う。

「くう!？」

何とかバランスを保ち、再び向かおうとするが・・・もう、手遅れだった。

「グ・・・アアアアアアアアアアア!!!!」

三人を一層強い闇が包み込む。

「・・・く・・・夕映、まき絵!楓と小太郎を連れて戻れ!」

俺はボードから降り、その途中で手を縛られているのかと夏美も助けて船に向かわせる。

「・・・ふふふ・・・」

亮が・・・いや、于吉が笑う。

「・・・ふふ・・・はは・・・ハーツハツハツハ!!」

「于吉・・・貴様ア!」

「いい身体です・・・くくく・・・力がみなぎる!・・・行きなさい、周泰、大河内アキラ」

「・・・御意」

「・・・はい」

一瞬で二人が目の前に現れる。

「く・・・！ソラアツ！」

ボードを飛ばして二人を弾き飛ばす。

「・・・お前ら・・・！」

二人とも完全に操られている・・・！二人とも肌は黒ずみ、アキラは赤い外套が黒く、瞳は赤く血走っている。明命も同じように服が黒く、瞳は金色になっていた。

「くそ・・・ハアアアツ！！」

Bモードを発動する。そして空間からスタンロッドを取り出す。

「・・・まさか、そんな武器で勝てるだけでも」

コイツらを傷つける訳にはいかない・・・

「ああ！そうですよねえ！仲間を傷つけるのは心苦しいですよね。・・・なら暇潰しに後ろからまとめて殺すのも面白そうですね！」

「・・・まれ」

「はい？」

「黙れ！于吉ッ！！亮の身体でそんなことしてみやがれ・・・お前が生きてきたコトを後悔するぐらい痛め付けてやる・・・！！」

「どうやってですか？この状況で、この不利な場面で！是非聞いてみたいものですねぇ！」

「・・・ッ！」

唇を噛み締める。

「・・・（落ち着け・・・ここで冷静さを無くしたら于吉の思いつ
ぼだ・・・）」

「おや・・・意外に冷静ですね・・・つまらない、実につまらない
！」

「・・・」

どじする・・・どじすねばいい・・・！

「・・・参ります」

「ッ！」

明命が放つ一撃を避ける。

「くっ・・・ダークフェザー！」

羽を飛ばして牽制するだけ・・・のハズだった。

「周泰、防いではいけません」

「・・・分かりました」

明命がガードを降ろした。

「何っ!?!?・・・止まれえ!」

羽を止める。

「・・・甘いよ」

ズバアッ!

背中をアキラに斬られる。

「が・・・!」

すぐに蹴りを使って距離を取る・・・

「遅い」

ズガンッ!

「!」あ・・・!?!?」

俺が退くよりも早く明命が回り込んで来る。

「く、ああ!?!?」

バキンッ！

ゴシャッ！

ズシャッ！

「あが……ぐ……」

俺は膝を着く。

「アッハハハ！無様！実に無様ですよ五十嵐咲！」

「ハア……ハア……」

「……では、やりなさい」

「……はい」

アキラが干将莫耶を振り上げる。

「く……」

俺は目を閉じる。……こんな所で……

ガキイインッ！

「……え？」

だが聞こえてきたのは肉を斬る音ではなく金属音。

「咲は・・・絶対にやらせない・・・!!」

「恋!」

恋がアキラの一撃を受け止めていた。

「ッ!今だ!」

スタンロッドをアキラに押し当て、ぶっ飛ばす。

「あう・・・」

アキラは痙攣しながら倒れる。

「次だ!」

「ッ!」

明命に向かって空間からスイッチを固定したスタンガンを射出する。

「・・・!」

明命はそれを弾く。

「恋!」

「(コクッ)(」

恋が突っ込み、方天画戟を振るう。

ガキヤアアンツ！！

「まあ防ぐわな・・・オラツ！！」

咄嗟に鎌を取り出し、魂切をすくい上げるように弾き飛ばし、さすが恋が石突きで明命の溝尾に打撃を加える。

「かはっ・・・」

崩れる明命にスタンガンを押し当てる。

バチン

間抜けな音がなって明命が気絶する。

「さて・・・あとは貴様だけだ、于吉」

「くっくっく・・・どうやってですか？この身体は大澤亮のモノです・・・ああ、言っておきますが気絶させても無駄ですよ」

「わかってるさ・・・だから殺す」

「殺す？何を言っているんですか？貴方にそんなことが・・・」

「出来るさ。亮も誰かを傷つけたくないだろうし・・・ならその前に俺が引導を渡してやるさ」

「そんな馬鹿な・・・」『やれ・・・咲・・・！』何っ!？」

「亮!？」

亮の音が確かに聞こえた。

『俺のことは構わない・・・やれ!』

「・・・ああ、遠慮なくやらせてもらおう。・・・たとえ明命や他の
皆に恨まれようとな」

鎌を構える。

「・・・咲・・・」

「恋は手を出すな」

「でも・・・」

「聞こえなかったのか?“手を出すな”」

「・・・」

恋を有無を言わず黙らせる。

「く・・・身体が!？」

于吉がその場に硬直する。

「・・・悪いな、亮」

俺は走り出す。

「・・・私をナメるな！」

于吉が明命とアキラから闇を戻す・・・だけどそれが狙いだ。

「この時を待っていた！」

俺は于吉に手を突き出す。

「な、何を!？」

「お前の闇を俺が取り込む！」

「馬鹿な!そんなことをしても無駄です！」

「うるせえよ!ウオオオオオオオオオオオツ!!!!」

全ての闇を俺の闇で引き寄せる。

「ハッ、グ……ガ……」

『無駄なことを……すぐに乗っ取って……』

俺は恋との仮契約を破棄する。

「咲！」

恋が叫ぶ。

「悪いな恋……万が一があるんでな……」

俺はそのまま後ろに後ずさる。

「咲……?」

『何をするつもりですか!?!』

「少し……付き合えよ、于吉……地の底までな……」

『ま、まさか……』

「そのまさかだよ」

後ろに壁も床も無い」

「咲・・・!!」

恋が駆け寄ろうとする。

「来るな!!恋ツ!!」

「ひっ・・・」

今まで恋に対して放ったことの無い声。恋はそれを聞いて息を呑んだ。

「・・・おい、何を・・・考えて・・・」

亮が起き上がる。

「・・・悪い、亮・・・後頼む」

俺は後ろに跳んだ。

「咲・・・!!」

「おい!!」

「（悪いな・・・皆・・・）」

俺は落下しながら目を閉じた・・・

再誕（後書き）

亮

「……つーわけで今回は」

恋

「恋達が話す……」

知也

「何か暗くないか？」

剛鬼

「本編をみてないのか」

知也

「渡された資料なんか滅多に見ないからな」

亮

「恥ずかしい……闇に負けた自分が恥ずかしい」

剛鬼

「全くだな。自分の弱さを知れ」

亮

「……」

剛鬼

「力が無いのなら戦うな。他の奴の邪魔になる」

知也

「懐・・・剛鬼。空気読め」

剛鬼

「そんなのでは誰も守れないな」

恋

「・・・止めて」

亮

「・・・恋」

恋

「亮が弱いなら恋も弱かった。だから咲は自分を犠牲にした」

剛鬼

「・・・まあ、それはそうだが」

知也

「相変わらず意見を変えるな、おい」

剛鬼

「何か言ったか？」

知也

「別に。・・・ま、弱いなら強くなればいいのさ。人は強くなれるからな」

亮

「・・・ああ」

恋

「・・・（コクッ）」

知也

「それで強くなって于吉とかを狙い撃て！わかったな？」

亮

「サンキューな、知也」

知也

「いや・・・本来なら楽しく雑談する場が何か本編の空気を引きずってたからな・・・」

恋

「知也、ありがとう。・・・あと、剛鬼もありがとう」

剛鬼

「・・・」

恋

「剛鬼、自分から嫌な役をした。・・・本当は剛鬼、優しい」

剛鬼

「・・・やっぱり恋は恋・・・か」

亮

「よっし！それじゃあ次回の真似と開閉と世界旅行！」

知也

「次回も見なきや狙い撃つぜ！」

剛鬼

「じゃあな」

恋

「・・・また次回」

再現（前書き）

話が見つからないので、一部オリジナルが入ります。・・・かなりおかしくなってしまうましたが、ではどうぞ。

再現

「……」

俺は立ち尽くしていた。咲が落ちていった空間を見つめながら。

「咲……咲……」

恋はつわ言のように呟いている。……そして恋はその場に座り込んでしまう。

「……恋！おい！」

「咲……どこ……」

恋を揺さぶるが反応が無い。それどころか目が死んでいる。虚ろな目でひたすら咲の名を呼び続ける。

「う……」

「明命！？」

明命が起き上がる。

「あれ……私……」

「話は後だ！恋を頼む。俺はアキラを……」

俺達はすぐに船へと戻る。そして、明命に起こったことを全て話し

た。

「そん、な・・・」

明命もかなりのショックを受けていた。

「俺のせいだ・・・俺が油断してたから・・・クソオツ！」

ガァン！

壁を全力で殴る。

「私は・・・どうすれば・・・」

俺は息を整え、言う。

「戦うぞ」

「亮・・・」

「約束してるんだ。・・・後悔は後でできる」

「・・・そう、ですね」

俺達は甲板に上がる。

「状況は？」

俺は近くにいた夕映に話しかける。

「・・・互角です。そして今」

いきなり魔力が吹き荒れ、そっちを見るとネギとフェイトが手を繋ぎ、互いに一撃を与えようとしていた。

「これで・・・決まる」

その時、

『だ、誰か！レンが、レンが暴れだし、きゃっ！？』

船内で恋の様子を見ていたコレットがそう言うてくる。俺はすぐに中に向かって走り出す。

「コレット！？」

「咲、咲・・・！どこ、どこ・・・あああ・・・」

恋が自分の身体を掻きむしる。コレットはそれを止めようとするが抑えきれずに弾き飛ばされる。

「チツ・・・モーションキャプチャー！ルルーシュ・ランペルージ
！」

俺はコードギアスの主人公、ルルーシュの真似をする。

「恋！俺の目を見る！」

一瞬だが俺と恋の目が合う。絶対遵守の力・・・“ギアス”それを
使っしかない。

「この俺が命じる・・・この戦闘が終わるまで休んでいる！！」

これでギアスが発動してくれれば・・・

「・・・わかった」

恋の動きがピタリと止まり、そう呟いてゆっくりと目を閉じる・・・
・あくまで一時的なモノだ。咲に関する記憶を消すというギアスも
考えたが、それでは恋が可哀想だ。

「（あのバカ野郎・・・）」

だが咲のことは責められない。俺だって自分を犠牲にしてあの世界
を救ったのだから。

再び甲板に出る。その時、

ズガアアアッ！！！！

ネギとフェイトの魔法が炸裂して船を揺らす。

「く……！？」

そして霧が晴れた時……フェイトが膝を着いていた。

「ネギ……やったのか？」

「……でも、十年も仕事仲間なら、一緒にお茶を飲む機会ぐらいあるだろう？」

「ふん……言っているだろう。僕はコーヒー派だって」

二人は手を繋いだ……

「え？何！？どーゆーこと！？」

「和解した・・・ってこと？」

ネギの奴・・・やりやがった。だがこれで終わりだと思った次の瞬間、ネギとフェイト、そしてアスナを解放しようとした調が何かに貫かれた。

「な・・・！？」

そしてそれを放ったのは・・・

「なん、で・・・」

完全なる世界のメンバー・・・それが全員並んでいた。

「く・・・明め、ガハアッ！？」

目の前に風のアーウェルンクスが現れ、殴り飛ばされた。

「亮！？よくも！」

明命が敵陣に突っ込む。

「ぐ……ゴホツ……やってくれたなあ……!!」

俺は咳き込みながら立ち上がる。その時、

「倒す……敵は倒す……」

虚ろな目をした恋が方天画戟を持って歩いていく。

「なんでだ！？ギアスの効果は……」

しまった……ワンランクダウンか！絶対導守の力が緩くなっていたんだ！

2873

「お、おい恋！ま……」

「……倒す！」

恋も敵陣に突っ込んでしまう。あれは危険だ。今の恋は命すら捨てかねない。

「くそ……アキラ！古菲！任せたぞ！」

近くにいた二人にそう言うってから、暗い顔をしているアキラに言う。

「アキラ、お前は何も悪くない。・・・だから今はこの船を頼む」

「でも・・・」

「悪いのは俺だ。今は無駄なことを考えるな。わかったな？」

「・・・うん」

「じゃ、行ってくる!」

俺は瞬動を使って明命と恋の援護に向かう。

「やっとハッピーエンドになりそうだったのに・・・!!!!てめえら・・・覚悟はできてんだろうなあああ!!!!」

鈴音と南海霸王を振り回す。

「・・・邪魔だ!」

「ぐわ!?!」

炎が身を包まれる・・・が、

「こんな炎・・・蓮華のに比べりゃ温いんだよお!!!」

炎を振り払い、近くにいた火のアーウェルンクスを蹴り飛ばす。

「く・・・愚かな奴め・・・」

明命と恋は・・・!?

「ヤアッ!」

明命は二人を相手に立ち回っている。恋は・・・

「咲の分も戦う・・・戦って・・・戦って・・・でも、咲はいない・・・誰の為に・・・」

恋のペースがおかしい。あれじゃ長くは持たない・・・! だけど援護は出来ない・・・数が多すぎる。けどこの力じゃアキラに魔力を廻す余裕はないし、古菲はさっきの戦闘で水のアーウェルンクスにあっという間に負けた・・・つまり二回目は勝てるか怪しい・・・となると今は刹那や龍宮を待つしかないのか・・・

「（あんのバカ咲・・・）」

咲
〜

・・・クライ・・・サムイ・・・

「・・・俺は・・・」

目を開くと辺り一面真っ暗だった。

「死んだのか・・・俺は・・・」

最後に見た恋の絶望の顔を思い出す。

「・・・ゴメン」

最悪なコトをやったな・・・だけど死んだのならもつと最悪だ・・・

『貴方は死んでませんよ』

「ッ!？」

向こうから歩いてきたのは俺・・・いや、

「于吉か・・・」

『ここは貴方の中です。貴方はまだ死んではいません・・・ですが、諦めているならこの身体を下さい』

俺は軽く笑う。

『どうしましたか？』

「いや・・・俺が死んでないとわかったらな・・・」

俺はキープレードを構える。

「まだ俺は恋に会える・・・会って謝る・・・そのためにも俺は生きて帰る!」

于吉も武器を構える。

「ウオオオオツ!!」

キープレードを全力で振るつ。

ガキインツ!!

「ハア!セイヤツ!」

キキキンツ!

ガアンツ!

しづとい・・・なら!

「Bモード・・・ウオオオオ・・・」

Bモードを使おうとするが、同時に于吉もBモードになる。

「何!?!」

『今の私は貴方と同化してますからね。貴方の能力は私のモノです』

『お』

「そうかい!・・・だけどな!」

素早く攻め込み、于吉から武器を弾く。

「開け！ウラアアツ！」

鎌を取り出し、于吉の首に突きつける。

「……」

『どうしたんですか？早く止めを刺しなさい』

「……お前は言ったよな。同化してるって。……つまりお前を消せば俺も消えるんじゃないのか？」

于吉の顔が歪む。……やっぱりか。

『ですが、どうするといふのです。私を消さない』

「答えは簡単だ。……お前を取り込めばいい」

『……何をバカなコトを……私に勝てるっても？』

「確かにそこら辺の外史の住人の俺と、外史を破壊して廻っているお前とじゃこういった実力は雲泥の差だ。……けどな」

俺は于吉に手を突き立てる。

「俺には……お前よりも負けない強い思いがあるんだよおっ！！」

于吉の闇が身体に染み渡る。……同時に激痛が走るが、俺は諦めない、諦めて、あきら、あき、あ……

亮

・・・最初に異変を感じたのは俺だった。

「(何だ？この禍々しい感じは・・・)」

俺はすぐに叫ぶ。

「明命！恋！」

「「！？」」

二人ともそれで何かを感じ取ったのか、一旦相手から距離を取った。
・・・その時、

ズガガガガンッ！！

「な、何者だ！？」

二番目のアーウェルンクスがそう言う。俺は空中に浮かぶ何かを見つめていた。

「さ……き……？」

空中にいたのは、咲だ。だがその姿は変貌していた。Bモードよりも更に禍々しく、髪はほどけ、銀色……FFのセフィロスのようになっていた。

「……」

咲はそのまま辺りに黒い波動を撒き散らす。……ソレは俺達も夕ーゲットに含まれていた。

「危なッ！」

俺達は何とか避ける。

「おい！誰を狙ってるんだ！」

その言葉を聞いて咲はゆっくりとこっちを向き、腕に闇が纏い、刃になる。

「咲！俺が分からないのか！？」

そう叫んだ一瞬で咲が接近し、刃を振るう。

ガキヤアンッ！

「ぐ……さ、き……！」

つばぜり合いが続くが、それに終止符を刺したのは……

「こおれ」

パキン

「な・・・」

足と腕が凍らされる。・・・当然、ガードは出来ない。

「・・・」

ズガンッ！

「はっ・・・」

咲の波動が直撃し、俺は地面を転がる。

「あぐ・・・！」

咲は無言で近づいてくる。

「亮！！」

明命が叫ぶ。・・・だが明命は完全なる世界のメンバーに足止めされて動けない。

「ぐ・・・まだ、やられるわけには・・・」

その時、誰かが俺の前に立ち塞がった。

「咲……ダメ！」

「恋……」

恋だった。恋は両手を広げ、俺の前に立っていた。

「バカ！恋、下がれ！」

「イヤ……咲……目を覚まして」

咲の歩みは止まらない。

「このままじゃ死ぬぞ！恋！」

「構わない……！」

「恋……」

「約束した……闇が暴走したら倒せて……だけど、恋はイヤ。最後まで諦めない」

「恋……」

「もし、駄目だったら……咲と一緒に死ぬ……だから、最後まで諦めない」

恋の意思は堅い。

「この……咲！恋はここまで言っただぞ！良いのか！？このまま、このまま終わっていいのかよ！？」

咲が刃を構える。

「……咲！」

刃が突き出され、恋を……

「……あ」

……貫かなかった。

「グ……レ……ン」

「咲……？咲！」

恋が咲を抱き締める。

「無駄なことを……」

水のアーウェルンクスが咲と恋に攻撃を加えようとしますが……

「……戦場を駆ける疾風のコンセツ一撃……！」

ズバアアアッ！！

明命がそれを阻止する。

「お二人には手出しさせません!!」

「咲!・・・咲!・・・」

恋が咲の名を呼ぶ・・・すると咲の姿が元に戻る。

「・・・悪いな・・・恋・・・心配、かけた・・・」

「・・・咲!」

恋が一層強い力で咲を抱き締める。・・・そして俺も立ち上がり、咲に近づく。

「亮・・・」

「バカ野郎・・・俺達が、恋がどれほど悲しんだと思ってやがる。・・・ま、生きて帰ってきたから許してやる。・・・于吉は?」

すると咲が自分の胸を指差す。

「・・・ここだ」

「・・・平気なのか？」

「ついさっきまで戦ってたよ・・・心配はいらないさ」

「く・・・亮！手を貸してください！私一人じゃ・・・キャツ!？」

明命が吹き飛ばされて飛んでくる。

「明命！」

俺は瞬動を使って明命を受け止める。

「あ、ありがとうございます・・・亮」

「いや・・・助かった。お礼を言うのはこっち・・・」

その時、二番目のアーウェルンクスがネギを攻撃しようとするのが目に入った。

「ヤバッ!!!」

間に合うか!?!?!?!だが、二番目のアーウェルンクスの腕は突如地面から現れた腕に掴まれた。

「え・・・!?!?!」

「まったく・・・まだまだ未熟だな、ぼーや」

「マ、師匠!?!」

「エヴァ!?!」

エヴァは片腕を吹き飛ばされるが、そんなのは関係ないと言わんばかりにアーウエルンクスを弾き飛ばした。

「さすがエヴァ・・・」

吸血鬼の再生能力って凄いな・・・

「おのれ・・・」

アーウエルンクスはそのまま大量の杭を後ろにいたこのか達に向かって打ち出した。・・・が、それは新たに現れた二人によって防がれた。

「お父様!!おじいちゃん!!」

学園長と近衛詠春だった。

「・・・まさか・・・二人が来るなんて・・・」

更にクウネルまでやってくる。

「骨董品が一つ増えただけだ!」

「確かにこの中で一番年寄りなのは認めますがね・・・なら若い二人を呼ぶとしますか」

風のアーウエルンクスがクウネルに向けて突っ込むが・・・居合い

拳でブツ飛ばされた。

「高畑先生！？それにクルト・ゲーデル！」

更に誰かが飛んできた。

「よ ミンメイ嬢ちゃん」

「ら、ら、ラカンさん！？」

明命がすつとんきょうな声を出す。

「もう・・・何でもありだな・・・」

「おい！？恋！？」

咲の声に反応して振り返ると、恋が倒れていた。・・・あ、

「ギアスカ・・・」

「・・・って、恋にギアスカけたのかよ！」

「仕方ないだろ！恋の身体を見るよ！あっちこっち掻きむしってやむを得ずギアスカを使ったんだよ！」

「ぐ・・・それは俺が悪かったけど・・・どんなギアスカを使ったんだよ？」

「・・・『この戦闘が終わるまで休んでいる』・・・だ」

「・・・仕方ない、一旦下がるぜ」

「あ、ああ・・・明命」

「あ、はい」

俺達は一旦アキラ達の方に避難する。

「・・・ハルナは？」

「それが・・・船ごと・・・」

「・・・ゲートか」

「うん・・・」

つーことは繋がってる麻帆良に落ちた可能性が高いな・・・

「・・・あ、恋を頼んでいいか？」

「え、うん」

恋を預けてから立ち上がる。

「咲、明命。行けるな？」

「もちろん。・・・余計な心配かけた分は戦うさ」

「私はどこまでも着いていきます」

「よし・・・じゃあ」

「その必要は無いぞ」

エヴァが飛んでくる。

「ハア？何でさ・・・」

「私が今、全てを終わらせてやる。大人しく待ってるんだな」

そう言ってエヴァが飛んでいく。

「よっしゃ、やれロリババア！」

「ほう。貴様、よっぽど死にたいらしいなあ？」

そう言つてエヴァが使つた魔法は・・・そう、例えるなら触れたものを全て凍らせる台風。それにより、完全なる世界のメンバーは全員氷漬けになつた。

「すっげえ・・・」

今度こそ終わり・・・か？

「・・・流石だなエヴァンジェリン。我が娘よ」

身体中に悪寒が走る。アレは今までのとは桁違い・・・聖杯よりも禍々しい・・・

「・・・離れろ！」

咲や赤き翼のメンバーが反射的に突っ込むが、簡単に弾き飛ばされてしまう。

「あれが・・・あれが・・・」

黒いソイツがネギを持ち上げる。

「アイツが黒幕・・・」

そこにいたのは・・・造物主。ライフメイカー 本当の意味でラスボスだつた・・・

再現（後書き）

咲

「復活！」

恋

「……心配した」

明命

「はぁ……私は罪悪感が……」

亮

「……元は俺が悪いからな……」

咲

「……ま、暗い話はこちらまでにして……ボツ設定その3！」

亮

「久々に四人揃ったのにそれかよ……」

・亮の物真似は曲を鳴らして、その曲が鳴り終わったら真似できるといったモノだった。

亮

「隙だらけじゃん！」

明命

「そんなに待ってたら間違いなく負けますね・・・」

咲

「だから作者は想像の時点でボツにしたんだな」

・咲は軍師として活躍させる気だった

咲

「・・・ないない」

恋

「でも・・・詠や朱里や雛里に勉強を教えてもらってた」

咲

「名残だな。実際は俺と亮はずっと（勉学的な意味で）バカの予定だったからな」

・咲は闇に吞まれ、光と闇の人格に別れる予定だった

咲

「あはは・・・洒落になんねー・・・」

明命

「まあ、それはそれで面白かったでしょうけど・・・」

・魔子エンジ的な意味で明命と恋は武器になる予定もあった。

明命

「うえええええ!？」

恋

「・・・恋が、武器？」

亮

「・・・デイスガイアを持つてくるか・・・」

咲

「まさに一心同体だな」

・ロボット系の世界にも行く話もあった

亮

「・・・ガンダムとかマクロスとか？」

咲

「いいな、面白そうだけ」

亮

「・・・一回ガンダムに乗ってみたいな」

咲

「いつそスパロボ? アイラブユウってか? それとも・・・つまんねえことしてるな? (扉バンツ)」

亮

「ひっ・・・って何やらせんだよ!？」

明命

「亮が息を呑む・・・何かくすぶられますね」

恋

「・・・シオニスト」

咲

「何で恋が知ってるんだ・・・」

亮

「ま、まあ今回はここまで」

明命

「それでは次回の真似と開閉と世界旅行！」

恋

「次回も見る」

咲

「それではまた次回！」

結末（前書き）

何か無理矢理感が・・・ではどうぞ。

結末

・・・アイツは桁違いだ。直感で分かる。・・・だったら・・・

「・・・アスナだ」

そう。黄昏の姫御子であるアスナの力が必要だ。

「皆・・・アスナを呼ぶんだ」

「え・・・？」

「この状況を打破できるのはアスナしかない。アスナを読んで呼び覚ますんだ。神楽坂明日菜をな」

「亮君は・・・？」

「足止め。・・・最悪死んでもお気楽世界が待ってるか、それとも存在が消えるか・・・ま、それは今考えることじゃないな。・・・いくぞ、明命」

「・・・御意！」

俺と明命は跳んで接近する。

「く・・・亮！下手に近づくな！」

咲が叫ぶ。・・・だけど、俺はそれを無視する。

「オラアアアッ！」

「ハアアアアッ！」

同時に攻撃を仕掛ける、だが・・・

カキヤアンツ！

「ぐう・・・」

「う・・・」

簡単に受け止められ、弾き飛ばされる。

「うわっ！？・・・くそ、桁違い過ぎるんだよ・・・」

「亮、どうする？」

咲が聞いてくる。

「策なんかねえよ・・・ここまで来たら、やるだけだ！」

そう言っつて突っ込もうとした次の瞬間、

「・・・ネギッ！..！」

ゴドオンッ！

「ア・・・」

「……！」

「アスナさんッ！」

「うんっ」

上から飛んできたアスナが造物主の腕を一閃。ネギを助け出した。

「……まさか、俺が言う前に呼び掛けてた……？」

「じゃなきゃあまりにも速すぎる。」

「アスナ……」

「ア……アスナさ」

「……つとに、アンタはも……」

「は？」

アスナが全力でネギを抱き締める。

「まあ心配させてえええッ！何・よ・コ・レ……！」

「ふぎええ！？」

「ボロツボロじゃないのよッ!？」

「ちよっ・・・死に・・・ますッ、死にっ」

「ア、アスナ・・・ネギがマジで死ぬって・・・」

その後も長々と口論するが・・・

「神楽坂明日菜。イチヤイチャもいいが、後ろヤバイからな」

「へ」

「え」

巨大な魔法陣が展開される。

「明命! 咲! アスナの後ろに!」

俺達は慌ててアスナの後ろに入る。

ズバアアッ!!

「おほほ、アレを止めたぜ」

ラカンが愉快そうに言う。

「ネギッ!・・・終わらせるわよ!」

「・・・はい!...!」

アスナのハマノツルギをネギが掴む。・・・すると、ハマノツルギがホウマノツルギへと姿を変えた。

「あああッ!!」

ズガアアンッ!!

その一撃は、造物主の魔法を断ち、造物主を横に切り裂いた。

「やったのか・・・!?!」

その時、造物主のフードの中が見える。・・・その中にいたのは・・・

「と・・・」

「・・・ギ」

「!?!」

「・・・ネギ、俺を殺しに来い」

その顔は・・・ネギの父親、ナギ・スプリングフィールドだった。ナギはニツ、と笑うと、消えながら言った。

「それで全てが終わる。・・・待ってるぜ」

「父……！」

サアツと姿が消えた。ネギは暫く立ち尽くしたあと……

パンパンッ！

自分の頬を叩いた。

「アスナさん！それよりも、今はやることが……！」

するとアスナは、

「大丈夫。止めてあるから。あとはもとに戻すだけ」

「え……」

「まずは今回のコトで消されちゃった人を向こうから取り戻さないとね」

するとアスナは消された人の数を的確に計算し始めた。

「え……アスナ、お前、そんな詳しいってコトは……」

「アスナさん、ぜ、全部把握してるんですか？」

俺とネギが聞く。

「うん。まー、何て言っても……私は正真正銘、魔法の国の伝説

のお姫様なんだからね」

その時、声が聞こえた。

「オーイ！アスナー！」

「大丈夫ーっ？」

「アスナーッ！終わったのーッ？」

「ネギくーんっ！」

そこにいたのは戦闘していた刹那や龍宮、それに委員長や鳴滝姉妹にチアリーディング部に・・・クラスの大半がそこにいた。

「な、なんで・・・」

咲が疑問の声を上げる中、俺はザジと目が合う。

「・・・(ニコッ)」

アイツか・・・

「・・・ありがとう、みんな・・・声・・・届いたよ」

「・・・アスナさん」

「・・・任せて！」

アスナは最後の鍵を使い、魔法陣を展開させる。

「・・・世界を、もとに」

光が溢れる。世界が光に満ちていく。・・・そしてその光と共に、俺達の身体にも異変が起きた・・・

「・・・」

光が引くと、辺りは何も変わってはいなかった。・・・いや、俺達は、いつもより遅く、確実に消えていつていた。

「亮さん・・・!」

ネギが声を出す。

「・・・どつやら、俺達の役目はここまでみたいだな」

「そんな・・・まだ、まだ終わっては・・・」

「終わったんだよ」

「咲さん……」

「後はお前らだけでも大丈夫ってコトだな」

「……亮君！」

「……咲！」

アキラと恋が降りてくる。……ギアスの効果が切れたか。それに合わせて、のどかやアリアドネー組も降りてくる。

「亮君……」

アキラが顔を伏せる。

「……悪い、お別れ……みたいだ」

「……もう、会えないのかな」

「それは分からないさ」

「え……」

俺はアキラの頭をわしゃわしゃと撫でる。

「いつかまた会えるさ。……俺達は繋がってる……だろ？」

仮契約カードを取り出す。

「うん・・・そうだね」

「あ・・・」

恋が仮契約カードを見て咲に詰め寄る。

「・・・咲、仮契約、破棄した」

「い、ごめん・・・あの時は恋を捲き込みたくなくてさ・・・」

「・・・カモ」

恋がカモネギを呼ぶ。

「・・・OKです！最後にいっちょ仮契約！」

カモネギが魔法陣を描く。

「え・・・今やるのか？皆が見てんに・・・」

「・・・（コクッ）」

「・・・あー！わかったよ！」

そして咲と恋は皆が見てるなか、口づけを交わす。・・・そして現れたカードの柄は全然違っていた。

「・・・別カード？」

カードの絵は、白を基準としたドレスのような服に、白く輝く細身の剣。そして背中には白い翼が生えた恋の絵だった。

「天使と悪魔……」

咲が呟く。

「……レン」

アリアドネー組が恋に近づく。

「……行っちゃうの？レン」

「……うん、お別れ」

「もう、帰ってこれないのですか？」

「……多分……ベアトリクス」

「あ……何ですか？」

「エミリイに、ゴメンって伝えて」

「……わかりました」

そして咲や明命もお別れを言う。

「のどか、クレイグ達に会えたら何か適当に礼を言っておいてくれ」

「あ、はい」

「・・・じゃな、エヴァ。色々サンキューな」

「ふん。これで家が静かになるな」

「・・・ラカンさん」

「良い男じゃねえかよ」

「あ・・・」

「その坊主ならきつとミンメイ嬢ちゃんも幸せになれると思つぜ」

「はい・・・！ありがとうございます！」

俺達の身体はもうほとんど残っていない。

「ネギ、最後に言っておく・・・決着を着けるんだろ？」

「・・・ハイ」

「・・・迷うな。自分を信じる」

「・・・ハイ！」

俺は最後に大声で言う。

「皆……今までありがとう!!また……またいつか会おうな!
!絶対にだ!!」

最後は……皆……笑っていた……

結末（後書き）

亮

「つーわけで、お疲れ様でした!!」

ネギま!

『お疲れ様でした!!』

アスナ

「でも、まだ原作は続くわよね・・・」

刹那

「・・・ですが、終わらせるならここらが丁度良いかと」

このか

「うーん・・・でも、何でラスボスがネギ君のお父さんなんやろ?」

アキラ

「そこら辺は原作の結末を見ないと何とも言えないよ」

ネギ

「長かったですね・・・もうこのメンバーで集まることはないんでしょうか?」

のどか

「そ、そんなことはありませんよー」

ユエ

「・・・そうです」

亮

「そついやさ、結局ネギは誰をパートナーに選ぶんだ？」

ネギ

「うえっ！？今それを聞くんですか？」

亮

「今だからこそだよ。・・・誰だろうねえ、ネギの本命は・・・」

千雨

「くだらねえ・・・たかが十歳のガキに何言ってるんだか・・・」

亮

「そつ言う千雨はどうなんだよ」

千雨

「べ、別に何もねーよ」

亮

「ま・・・あんまネギを苛めると可哀想だから、締めますか」

ネギま！

『ネギま編を見ていただき、まことにありがとうございます！』

亮

「それでは次回の真似と開閉と世界旅行！」

アキラ

「次回もまた見てね」

ネギ&アスナ

「「それではまた次回会いましょう！」」

神様

「……」

いつもの白い空間……だが、普段なら目を開けたらそこには神のじいさんが立っている……ハズなのに、じいさんはその場に倒れていた。

「ッ！じいさん！？」

「ジジイ！？」

俺と咲は駆け寄ってじいさんを抱え起こす。

「む……お主達か……」

「どうしたんだよ……神が倒れるなんて……」

「……さっきまでは普通に立っていたのじゃがな……見ていたぞ、また外史を終わらしてくれたの……」

「ジジイ……」

じいさんは息が乱れながらも立ち上がる。

「よし……では次の世界に……」

「ま、待てよ！じいさん……もう力が残っていないんじゃないの

か？」

「……後一回送ることはできる」

「だが……それじゃジジイが……」

「気にすることはない。遅かれ早かれこうなることは解っておったのじゃ」

「……」

「咲よ」

「……何だよ」

「安心してはならんぞ」

「……ッ!」

咲は言葉の意味を理解し、反応する。

「……亮」

「……ああ」

「紫から連絡があつての……孫権は無事回復したらしいぞ」

「蓮華が……!?!?」

それは嬉しい……

「・・・お別れじゃ。長い間すまなかつたの」

「何、だよ・・・まるでもう会えないみたいな言い方は・・・」

「・・・僕の力が戻った頃にはお主達は生きているかは解らん・・・だから、お別れじゃ」

「ジジイ・・・」

「・・・さらばじゃ！」

「じいさん!!..じいさん!!..!!」

俺達の意識は消えていった・・・

帰還（前書き）

次の世界へレディGO。・・・ではどうぞ。

帰還

「……つたく……最後の最後までえー！？」

目を開けるとお約束のように落下していた。

「く……」

しかも周りに誰もいない。完全に俺一人のスカイダイビング。

「咸掛法で身体の強度を上げるか……？」

何があるか解らない以上真似は極力使いたくない。

「……合成……咸掛法……」

最大限にまで力を高めて落下に備える。

「……あ」

普通の地面ならよかった。だけど眼前に広がるは目に優しい緑色……森だよ。

「ウワアアアツ!？」

木の枝をへし折りながら落下していく。

バツシャアアッ!

「じぼっ!?!」

落ちたのは運よく（よかったのか？）水の中。

「ぶはあ!?!」

慌てて水から顔を出す。

「もう……いきなり誰よ!?!」

声が聞こえる。振り返るとそこにいたのは忘れることの無かった仲間。

「シャオ……小蓮!」

「え……?」

顔に水がかかったのかゆっくり目を擦りながらシャオは目を開ける。

「りよ、う……?」

俺を見た途端驚くシャオ。

「……ああ、俺は大澤亮だ。……帰って、これなんだ……」

「あ……ッ!う……うっ……亮ーッ!」

シャオが泣きながら俺に抱きついてくる。

「バカバカバカ！今まで、今までどこに行ってたの……！遅いよ
お……帰ってくるの遅すぎるよ……」

「……ゴメンな……ほんとにゴメン……」

俺も涙を浮かべながらシャオの頭を撫でる。

「……落ち着いたか？」

「……うん。ねえ、明命は？」

俺はその言葉を聞いてハッと気づく。

「そっいえば……バラバラに……」

「……そっだ……早くみんなの所に、会いに行こうよ！」

シャオがそう言うってくる。そしてそれに更に疑問を抱く。

「蓮華は……蓮華達は戻ってきてるのか!？」

「え……お姉ちゃんがどこにいるか知ってるの?？」

「……つまり、まだ戻ってきていない……か。俺はシャオに蓮華達の事を話した。」

「……じゃあ、お姉ちゃんは無事なの？」

「ああ、もう帰ってくる」

「……よかった」

俺はシャオに案内してもらい。城へ向かう。シャオは気分転換によくこの森の中にある川に来ていたらしい。ここは建業の近くで、すぐに着いた。

「……町に活気があるな……」

「うん。一刀がね、戦を終わりに導いた天の御遣いとして三国を廻ってくれたんだ」

「一刀が……」

「一刀の必死さはお姉ちゃんや思春も認めるほどなんだよ？」

アイツ……

「急いづ。……早く皆に会いたい」

「……うん！」

シャオが俺の手を引っ張って走り出す。

咲

「……この町並みは……やっぱり……」

見たことがある。ここは……洛陽だ。俺はとりあえず近くの店に入る。

「……活気があるな」

生き生きとしている。町並みも店の中も。

「店主、もう一杯」

そう言って酒を飲んでいたのは……

「……霞！」

「ん？おお、咲やないかい。咲も一緒に……って咲イ！？」

霞は立ち上がると俺の肩を揺らしまくる。

「何でここにいるん！？てかいつ帰ってきて……いや、んなことはどーでもええ！」

霞は酒も相まってかなりテンションが高い。

「お、おち、落ち着け……か、会話ができな……！？」

それに反応して霞は手を話した。それに合わせて俺は説明をする。

「……アカン、よーわからん」

「あはは……でも、よく俺だって分かったな？」

髪を触りながら言う。

「……ウチが咲の声を忘れれると思っとなんか？……まあ、かなり変わったとは思っくんやけど……第一賈馱っちの眼鏡かけとるやん」

「あ、そうか……」

そして更に聞くと衝撃的な事が分かった。

「……曹操が旅に出た？」

「そや。華琳も思い立つたら早くて・・・華琳に賛同する武将達を連れて海の向こうや。・・・ウチはさすがに断つたんやけどな」

「そんじゃこの洛陽は・・・」

「月が仕切つとる。意外に民も受け入れてな。むしろ歡喜が上がつたんやで？董卓様が生きてたー！ってな」

「へえ・・・」

「ふっふーん・・・ここまで来たら会いたいやろ」

「・・・ああ。一緒に来てくれるか？」

「もちろん」

俺は城に向かう。恋はいないけど、とりあえず今は皆に会おう。・・・
・絶対に詠とねねに殺されるな・・・

亮

「・・・亮、どうしたの？」

俺はシャオと一緒に玉座に続く扉の前にいた。

「うう……目の前に着いたら緊張して……」

「……もう、きっと今の時間は皆いると思っただけ」

「……だよな、よし、それじゃ!」

そう言っただけで扉に手をかける。

『くら!待ちなさい、雪蓮!』

ガゴンッ!

「づあ……!?!」

いきなり扉が開いて顔面を強打した。

「ゴメンね、ちょっと急いで……て……」

「雪蓮!また仕事を終わらせ……て……」

出てきたのは雪蓮と冥琳。二人とも俺を見て固まった。

「亮……?」

「嘘……?」

俺は激痛に耐えながら雪蓮達を見る。

「た……ただいま、二人とも……」

「何を呆けておるの……じゃ……」

「あれ〜みなさんどうしたん……ですか……」

後ろから祭さんと穩も来て、固まった。ちょっと見た目が変わっても俺と気づいてくれたらしい。俺は照れながらももう一度皆に向けて言った。

「ただいま」

咲

「〜」

「機嫌良さそうだな、霞」

「当たり前やん。ずーっとまっとうたんやからな」

「はは……」

「あ……ちょっと霞！仕事が……」

「あ……」

「え……」

バツタリと詠に会った。当然詠はフリーズ。怪しいと思ってるよな・

「咲……？」

「え……？」

霞が横で感心していた。……俺は驚いてた。

「……えつと……ただい、ま？」

そう言つと詠の目に涙が溜まり、

「こんの馬鹿あ！……」

両手で俺の胸元をポカポカ殴り出す。

「死んじゃったか……死んじゃったかと思っちゃったじゃない
！……」

「あれ……ジジイに俺達は無事だって伝えるよつ言ったよつな・
」

「あんな言葉を信じられる訳ないでしょう!? ボクは・・・ボクは・・・!」

・・・悪い事をしたな。・・・まったく、俺はどれだけ人を泣かせばいいんだか・・・

「・・・悪い。でも、俺はこうして帰ってきた。・・・帰って・・・これなんだ」

「うっ、あああ!」

詠は泣き出す。今まで溜め込んだものを吐き出すように。

「・・・」

俺にできることは詠を慰めるコト。今は泣きたいだけ泣かせよう。

「・・・」

詠は顔を真っ赤にしてうつ向きしていた。

「・・・詠」

俺は詠に声をかけようとした瞬間、

「ちんきゅーきいっくー!!」

ズガンッ!

「グハアッ!？」

横から蹴りが飛んできて、俺は吹き飛ぶ。

「ど、どの面を下げたのか!」

「ね・・・ね・・・」

いつつもいつつも嫌な所にちんきゅーきいっくを当ててくれるな・・・

「今更・・・今更・・・」

ねねも涙を流していた。・・・俺は無言で近づき、頭を撫でてやる。

「あ・・・」

「ただいま、ねね。・・・でもちんきゅーきいっくは止めような」

「・・・うるさいのです。・・・恋殿は・・・?」

俺はそれを聞いて顔を伏せる。

「一緒じゃないんだ。バラバラに落ちて・・・」

「そう・・・ですか・・・」

「む・・・？何だコレは」

華雄が歩いてきた。

「あー、華雄ちゃんは少し向こうに行つとこうな？」

「お、おい霞!？」

霞は気を使ってくれたのか華雄を連れていった。

「・・・そうだ、月にも会わないと・・・」

「・・・はい、ねねも行くのです」

「ボクも・・・」

「ああ・・・行こう」

亮

俺は椅子に座っていた。軍議の時に座っていた席だ。

「にしても亮、ずいぶんと男前になったじゃない」

雪蓮がそう言ってくる。

「格好よくなっちゃいましたね」

「うむ。頼りがいがありそうじゃな」

「中身はわからないがな」

皆笑いながら言ってくる。

「ねえねえ亮？旅って楽しい？」

シャオが聞いてくる。

「・・・ああ、色んな所に行ったよ。・・・あ」

その時、仮契約カードの存在を忘れていた。

「召還・・・もしくは念話が出来れば・・・」

額に当ててみる。有効距離があったような気がするけど・・・そこは俺の魔力で底上げをする。

「(明命・・・聞こえるか?)」

(・・・亮!?)

通じた。俺はすぐに明命に聞く。

「(今、どこにいるんだ!?)」

(今は蜀にいます。・・・恋さんも一緒に)

「(恋も?・・・つか蜀?)」

どんだけ遠くにいるんだよ・・・

(亮は?)

「(奥にいる。・・・早く来いよ、待ってる)」

(・・・はい!それでは)

「・・・ふじ」

「今のは何だ?」

冥琳が聞いてくる。

「他の世界の道具だよ」

その時、空間がいきなり開いた。

「え……？」

その中から……思春、亞莎……そして蓮華が出てきた。

「あ……」

「……」

「……ふふ」

思春と亞莎が俺を見て笑う。そして、俺は蓮華の元に歩く。

「ただいま……でいいのかな？」

「……お帰りなさい、亮」

俺と蓮華はお互いに笑いあうのだった……

帰還（後書き）

亮

「帰ってきたんだな……」

蓮華

「まったく……心配ばっかさせるんだから……」

亮

「悪い悪い。でも、また会えて嬉しいよ」

蓮華

「……私もよ。貴方にまた会えるなんて」

亮

「一時期敵になっちゃったけどな」

蓮華

「それは言わないで。……私、かなり嫌だったのよ？」

亮

「……わかってるよ」

蓮華

「……でも、亮が来たと言うことはまだ何か役目があるというとなのかしら？」

亮

「あ……」

蓮華

「亮？」

亮

「い、いや・・・何でもないよ。・・・まあ、今度はどんな物語になるんだろうな」

蓮華

「どんな物語でも貴方がいれば充分よ」

亮

「蓮華・・・よし、それでは次回の真似と開閉と世界旅行！」

蓮華

「次回もまた見てくれ」

お祝い（前書き）

しばらくは平和な話が続きます。ではどうぞ。

お祝い

「それじゃあ、かんぱい」

雪蓮の号令で俺達の帰還祝いが始まった。明命は一日で戻ってきて、その次の日の夜・・・つまり今、雪蓮の案によって帰還祝いを行うことになった。これには普段渋っている冥琳も許可をした。

「ほら！どんどん飲まんか！」

祭さんに酒を勧められる。

「うん。もらっよ」

その言葉に祭さんは目を丸くする。

「・・・前は嫌がったような・・・」

「・・・嬉しいのは祭さん達だけじゃないってことだよ」

明命は亞莎と話しをしている。

「・・・やっぱり、帰ってこれたんだな」

「何を言っているんですか？」

穩が不思議そうに聞いてくる。

「……ここが俺の帰れる場所だったんだな……ってさ」

その言葉を聞いた皆は微笑んでくれた。

「なあ、思春」

「何だ？」

あの思春も俺に微笑んでくれた。

「……また、鍛練お願いできるかな。……亞莎もさ」

「……私が教えられることはもう無いと思うが……」

「そ、そうですよ」

「いや……俺はまだ未熟だよ。それに、生き残ってこれたのは……」

俺は鈴音と人解を取り出す。

「……これのお陰だからな……あ、返さない」と

「構わない」

「え？」

「まだ貸しておいてやる」

「ですが、必ず返していただきますからね」

つまり、勝手に消えるなっでことか・・・

「・・・ああ、わかったよ。・・・けど、さすがにコレは返さないとな」

俺は南海霸王を取り出し、蓮華の所にいく。

「蓮華」

「あ・・・亮、どうしたの？」

よかった・・・まだ酒は入ってない。

「コレ・・・返しに来ただけど・・・」

南海霸王を差し出す。

「お、南海霸王じゃない。どうだった？」

すでに顔が赤い雪蓮もやって来る。

「助かった。短い間だったけど、南海霸王コレイがあつてよかった。鈴音
や人解を含めてお守りみたいだったからな」

「そう・・・亮」

「・・・何だ？」

蓮華の声が鋭くなる。

「今度は・・・いなくならないわね？」

蓮華はまっすぐに見つめてくる。

「ああ、今度は消えそうにない。・・・ここが、俺の旅の終着点な
んだと思う」

雪蓮は横でニコニコしていて、蓮華も表情を緩めた。

「・・・よし、それじゃあ蓮華も飲みましょっか？」

その言葉に俺と明命と思春と亞莎の顔が青くなった。

「・・・そうね。飲みま・・・どうしたの？四人とも私から離れて」

「な、なんでもございません・・・！」

「そ、そうです。ね、亞莎？」

「う、うん--！」

俺は蓮華から離れて飲む。

「……ずいぶんと寂しそうに飲んでいるな」

「冥琳……」

「どれ、私が一緒に飲もう」

冥琳が俺の隣に座る。

「……悪かったな。色々と」

「何の話だ？」

「蓮華とか……さ」

俺は顔を伏せながら言う。

「……別に気にしていないさ」

「……」

俺は冥琳の方を向く。

「蓮華様達が抜けた分は私と穏……それに、雪蓮や黄蓋殿も手伝つてくれた」

「雪蓮と祭さんが!？」

それは驚きだ。

「・・・そうだ、冥琳・・・」

「体調も万全だ。ちゃんと睡眠も取ってるし、定期的に医者にも見てもらっている」

「・・・そっか」

「亮」

シャオが後ろから抱きついてくる。

「ねえええ。シャオとも飲もうよ」

・・・シャオもいつかは雪蓮や蓮華のように・・・

「・・・亮、泣いていないか？」

「いや・・・何か現実を認めたくなくて・・・」

「まったく・・・今度は祭りもあると言っのに・・・」

「祭り？」

「ああ、北郷が考えてな。年に一回、平和を祝うお祭りがあるんだ」

「色々な出し物があるんだよ」

「へえ……」

それは楽しそうだ。

「きゃああつ！？ね、蓮華様！？」

「や、止めてください！！」

「お、お気を確かに、蓮華様！」

俺はため息を吐く。

「……でも」

今日ぐらいは……いいよな？はしゃいでも……いいよな。

咲

俺は蜀にいた。月が勧めてくれたのだ。詠やねねは名残惜しそうだった。だが、祭りはどうやら、ここ、蜀でやるらしい。祭りは来週……すぐに会えるからと納得してくれた。俺は飛ばして半日で蜀につけたのだ。

「……懐かしいな」

蜀は最後に見たときと同じだった。

「さて……」

誰かいないかな……

ズドドドドド……

「ん？」

何か地響きが・・・

「うわあああっ！？」

向こうからやって来たのは・・・大量の犬に追いかけてる焰耶だ。

「ハアアッ！？」

俺も犬から逃げ出す。

「・・・ッ！焰耶あ！どういうことだ！？」

「私を知るかぁ・・・って貴様、まさか咲か！？」

焰耶も一発でわかってくれた・・・もちろん月や華雄も一瞬でわかってくれた。

「貴様、帰ってくるのが遅い！私や翠との決着をな・・・」

「それどころじゃねえ！？逃げろおおお！」

俺達は走り続けた・・・

「ゼエ・・・ゼエ・・・」

「はぁ・・・はぁ・・・」

「焔、耶・・・お前な・・・」

「私も・・・何故好かれているかはわからない・・・」

そしてお互い息を整えてから焔耶が一言。

「遅い！」

俺はそのままズルズルと城まで引き摺られた・・・

「焰耶？どうしたんだ、そんなに慌てて」

焰耶に声をかけたのは愛紗だった。

「愛紗か。見る！」

そう言っつて愛紗に俺を突き出す。

「……や、久しぶり」

俺は片手でぶら下がりながら愛紗に挨拶する。

「あ……もしかして……咲殿ですか！？」

おお、愛紗も解ってくれた。

「今からコイツを桃香様に渡してくるんだが、愛紗はどうする？」

「ああ、丁度軍議が終わったからな。大体の人はいるハズだ」

そう言っただけは・・・

・・・皆に見られていた。

「ホントに咲君？」

「・・・そうだよ」

「変わったな・・・」

桃香や一刀に言われ、

「綺麗だね・・・朱里ちゃん」

「そうだね、雛里ちゃん」

ついに・・・綺麗とまで言うか・・・！

「おやおや、何か妄想でもしておられたのですかな？」

「星・・・？久々にあつてそれはないだろ・・・？」

「・・・？姉様、何やってんの？」

たんぽぽが隅っこにいる翠に話しかける。

「翠は照れているのだ！」

「なッ！馬鹿、そんなわけないだろ！」

鈴々に茶化され、大声をあげる翠。

「その・・・何だ・・・決着、忘れてないだろうな」

「もちろん。・・・約束は守る」

「・・・綺麗なんだな・・・」

「おやあ？白蓮殿、もしかして落ち込んでいるのですか？」

「・・・落ち込んでなんかいない！」

いいな・・・このノリ。

「あらあら、どうしたのかしら」

「騒がしいぞ。まったく・・・」

紫苑と桔梗と・・・

「あ、咲お兄ちゃん！」

璃々ちゃんが飛び付いてくる。

「璃々ちゃん！よく俺だつてわかつたな？」

「うん！何となくわかつたんだよ！」

腕にズシリと来る。璃々ちゃんは明らかに成長していた。

「大きくなつたな、璃々ちゃん」

「えへへ・・・」

言葉もハッキリとしていて、それでいて無邪気さが失われていない。

「（良い子だな・・・）」

璃々ちゃんを一通りぐるぐる回してから降ろす。

「・・・ふう」

「おーっほっほ！皆さん何を集まっているのかしら？」

「れ、麗羽様あ・・・明らかに入るタイミングじゃないですよ・・・」

「姫は空気読めないからな・・・」

「猪々子さん？何かおっしやいましたか？」

「いーえ。何も？」

騒がしい三人組が入ってくる。

「？なにをやってるにゃ？」

そこに入ってくる孟獲。気がついたら蜀の全員が集まっていた。

「あ……あはは……」

そして……

「……咲」

「恋……」

「……帰って、きた？」

「ああ。ここが……俺達の居場所だ」

本当に……帰ってきた！……だけど喜んではいられない。この世界にまた何かが起こる……それに、

「……」

今は抑え込んでいる于吉。……いつまで封じていられてるかは解らない。……けど、負けてらんないんだよな……この幸せを守るためにも……

亮

「……よし！」

俺達は……全員中庭にいた。理由？雪蓮が俺を試みたいそうだ。

「こっちはいいわよ？」

「ああ、それじゃあ……」

俺は鈴音、雪蓮は南海霸王を構える。

「……いくぜ！」

瞬動を使って背後を取る。

「てやあっ！」

「ハッ！」

カキーンッ！

「何い！？」

完璧に後ろを取ったと思ったのに……！

「……ふう、何か来ると思ったのよねえ」

勘かよ……！

「まだまだ！」

俺は連撃を加えるが・・・

「甘い！」

カキキキンツ！

全てが弾かれる。

「うつそ！？」

「・・・やあっ！」

ガキイインツ！

「ぐう・・・」

力負けして押される。

「はは・・・」

やっぱり雪蓮は凄い・・・なら・・・

「左手に魔力！右手に気！合成、威掛法！」

そして・・・

「明命！」

「はい！・・・来れ（アデアット）（！）」

明命が魂切とアーティファクトの南海霸王を投げてくる。

「来れ、呉の若き誇りよ！ここに集いて呉王の力を呼び覚ませ！
・刺天猛虎！」

槍を作り出す。

「「な！？」」

古参の二人が驚く。・・・そりゃそうか。

「それは・・・母様のね」

「ああ・・・こうなったら余力はいらない。力を出しきる！」
体制を低くして突っ込む。

「そろそろそろそろあっ！！」

「ッ！」

カキインツ！

カキャンツ！

ガン！

「チツ・・・」

これも弾かれるか・・・なら！

「フッ！」

上段に槍を振り下ろす。

「タアッ！」

それは受け止められる・・・よな！

「タッ！」

「わわ！？」

そのまま蹴りを放つ。雪蓮は慌てながら蹴りを避ける。

「やるようになったわね・・・」

「まだまだこれからだ！」

そうだ・・・前は五分で撃沈していた・・・けど、今は違う。

「ウラッ！」

「せえい！」

俺は一旦距離を取り、力を溜める。

「ッ！」

雪蓮は何かを感じたのか俺に迫る。・・・けど、俺の方が早い。

「必殺！猛虎・・・獣衝撃イ！！」

虎が雪蓮に襲いかかる。

「（決まった！）」

そう思った瞬間、

「ハアアアッ！！」

ズバアアアッ！！

「な・・・にい・・・！！？」

虎は雪蓮の一撃で真っ二つになった。

「・・・！！？」

ゾクツとする。・・・雪蓮が纏う気配が変わった。

「・・・」

ガキインッ！

「うわっ！！？」

み、見えなかった……!?……なら手数で圧倒するだけだ!

「ヤヤヤヤッ!」

「……ハッ!」

ガツキヤアアッ!

「ウアアアッ!?!」

だ、ダメだ……技や速度で攻めても力でねじふれされてしまっ
・!

「……」

カキヤンッ!

「あ……」

刺天猛虎が空を舞う。……負けた……だが、雪蓮はまだ向かっ
てくる。

「雪蓮!? ウワッ!」

俺は跳んで避ける。まずい、体制が崩れた。

「く……あ!」

人解がタイミングよく飛んできてそれで防ぐ。

「ハッ！」

ドンッ！

雪蓮に拳を打ち込む。

「まだまだ！気功破！」

ズドンッ！

雪蓮がぶっ飛ぶ。・・・これなら

「・・・グウウ・・・」

唸り声をあげながら雪蓮が立ち上がる・・・マジか。・・・その時、鞭が雪蓮の自由を奪った。

「え？」

「そこまでだ・・・雪蓮！」

冥琳だ。冥琳が止めていてくれた。

「黄蓋殿！」

「んん」

祭さんが雪蓮を担ぎ、運んでいく。

「すまないな、少し行ってくる」

「あ……ああ……」

俺はその場に座り込む。

「マジビビったー……！」

「大丈夫ですか？亮様？」

亞莎が駆け寄ってくる。

「亞莎……助かった……今は特に人解が無かったら死んでた……絶対に」

まあ思春や明命のお陰でもあるんだが……

「亮！？大丈夫！？」

「蓮華……」

蓮華がやって来た。

「まさか亮が姉様をあの状態にするなんて……」

「……結構怖かった……本当に殺されるかと」

「馬鹿ね……気を付けてね。姉様は本当に容赦がなくなるから」

「あはは……」

俺は空を見上げる。 . . . 祭りはすぐそこまで近づいていた . . .

お祝い〜（後書き）

亮

「ほんつとに怖かった・・・！」

知也

「そこまでビックリするか？」

亮

「・・・じゃあお前は武器無しで飢えた虎の前に出されたらどうする？」

知也

「・・・ノーコメント」

咲

「よっぽど恐ろしいんだな」

亮

「恐ろしいなんてもんじゃねえよ！」

咲

「ははは・・・そうそう見た目が変わったのは璃々ちゃんだな。人って成長するんだな」

亮

「シャオも大きくなってたな・・・あ、ちなみに思春は髪を降ろしてて、蓮華は髪が元に戻ってるよ」

知也

「何で、今言っただよ・・・」

亮

「ここでしか言っ機会無いんだよ」

知也

「あっ、そう・・・」

咲

「つか知也・・・お前、なんでマグナム持ってんだよ？」

知也

「なんで・・・ってそりやお前らを狙い撃つ・・・」

咲

「おいおいおい・・・普通の距離なら弾けるけどこの後書き部屋の距離じゃ避けられないっての」

亮

「普通に弾を弾けるって断言できる俺達ってなんなんだろうーな・・・」

「・

知也

「まあ、気にすることじゃないだろ？」

咲

「まあ・・・そんじゃ、コイツを進呈」

知也

「・・・これ・・・銃か？」

咲

「デイエンドライバー・・・まあ仮面ライダーの変身道具だな」

亮

「ああ、そっぴや伊東大輝っていたな。一文字足したら・・・」

咲

「言っな。・・・それでは」

亮

「次回の真似と開閉と世界旅行！」

知也

「次回も見なきや、狙い撃つぜ！」

咲

「それではまた次回！」

何も変わらない日常〜(前書き)

平和っていいですね。ではどうぞ。

何も変わらない日常

俺は仕事を終わらせて、通路を歩いていた。

「……おう、亮ではないか」

「……祭さん？……ってまた昼間から飲んでるの？」

顔を赤くしている祭さんを見てため息を吐く。

「む……ちゃんと仕事はやっておるぞ」

よく見たら祭さんの耳が赤く腫れている。……引つ張られたか。

「……んで？悪いけど普段から酒に付き合う気はないよ」

お祝いの次の日、俺は休みをもらった。理由は二日酔いが酷く、人や文字が分身し、一歩歩けば視界が大地震。頭は割れそうなくらい痛い和最悪な状況だったため、無理矢理休めさせられた。そしてその次の日は復活して今に至る。

「いやいや……ちつと買い物頼まれてほしいのじゃが……」

「……何の酒？」

「お、行ってくるのか？」

「……前、帰ってこれたら出来る限り皆の頼みとかを聞くつもりだと思ってたんだよ」

「む……そ、そうか……」

「じゃ、行ってくるよ」

祭さんから酒の名前を聞いて買いに行く。

「……魔力や気がない俺だったら音を上げてたな……」

重量感のある買ってきた紹興酒。それを両手で持ち運ぶ。

「……こうして見ると街にも色々あるんだな」

さすがに荷物が増えるようなミスはしないが。……その時、見慣れた服装が目に入った。

「（……亞莎？）」

何故か背中を丸めて歩いている。俺は気になって後ろから声を掛ける。

「おい、亞莎？」

「わあああっ！」

「うおっ!?!」

すると跳び跳ねた亞莎の袖から何かが地面に落ちる。

「あ……あああ……ああ……あ……」

亞莎が消え入りそうな声を出しながら立ち尽くす。

「わ、悪い……そんな驚かすつもりは……ん？」

「……りょう、さま……」

俺は落ちたものを見る。……それは、

「……ま団子？」

それらを拾い上げ、亞莎から袋をもらって片付ける。

「……ゴメン！」

俺は頭を深々と下げる。

「え!?!そ、そんな、顔を上げてください!」

「だってこの量・・・大分金飛んだだろ？」

「い、いえ・・・」

「・・・亞莎、来い！」

「ふえっ!？」

俺は亞莎の手を引っ張る。向かった先は・・・だんご屋。

「いらっしゃい!何にしましょっ?」

俺は所持金を確認する。

「あ・・・」

祭さんの酒代で所持金が少ない。

「すみません・・・これで何個ぐらい買えますか？」

「ひいふう・・・そうだねえ、おまけして十個だね」

足りない。さっき落ちたものは十個は裕に越していた。

「ホントに悪い、亞莎・・・最低だ・・・」

「あ、あのっ!私は十個で充分ですから」

「・・・今度は好きなだけ買ってやる・・・本当に悪かった」

「・・・ねえ、あんたたちさ」

店のおばちゃんが話しかけてくる。

「はい？」

「そんなに食べたいなら自分達で作ったらどうだい？作り方なら教えてあげるからさ」

「え・・・いいんですか？」

「かまないよ。これだけあれば三十個分くらいは買えるんじゃないかねえ？」

「三十個・・・っ!」

亞莎の目が輝いてる。・・・ああ、本当に落としてゴメンナサイ。

「よし・・・じゃあ作るか!」

「で、でも・・・私、料理なんてしたこと、ないですし・・・出来るでしょうか？」

「大丈夫だよ！簡単だからさ、誰でも作れるよ」

おばちゃんがメモを書きながら言ってくれる。

「・・・決まり！せっかく俺も、亞莎も帰ってきたんだ。楽しもう

「よっ」

「……は、はい……」

そして俺達は材料集めを始めた……

「よっし、確認だな」

「はいっ」

「だんご粉！」

「ばっちりです！」

「あんこ！」

「たっぷりと！」

「じゃま&じゃま油！」

「揃っています!」

「材料は揃ったな……」

おばちゃんの本物の確だった。安く、質が良く、量が手に入る店がピックアップされていた。

「何だかドキドキしてきました。こういうお買い物も楽しいんですね」

亞莎は軽くスキップして嬉しそうだった。……けど、

「なあ、亞莎?」

「はい?」

「……その袖、不便じゃないか?」

明らかに長すぎる。どれくらい長いかというと、剣の間に合より長い。

「そう……でしょうか?」

亞莎の手を見たのは……ああ、あの時だ。

「……あの姿になる?」

闇の姿（通称黒亞莎）を想像する。亞莎も気づいたのか、ブンブン首を振った。

「い、いえいえ！あの姿はその・・・あの姿だと遠慮が無くなってしまつて・・・」

「だよなあ・・・つてか俺も真横から黒い波動をずっと感じるのは嫌だな」

「あ・・・」

亞莎がハツとなる。

「何かあるのか？」

「あるにはあるんですけど・・・その・・・」

「何だよ？・・・言わないとだんご作らないぞ？」

作らないのは嘘だ。すると亞莎は顔を隠しながら。

「じゃ、じゃあ・・・用意をしますから、亮様は先にそれを・・・」

そう言つて亞莎は酒を指差す。

「・・・わかつた。それじゃ、後でな」

俺は祭さんに酒を届けてから亞莎の部屋に向かつた。

扉をノックする。

「亞莎？用意終わった？」

『はい……』

中から返事が帰ってきて、ゆっくり扉が開く。

「……」

絶句。何故なら亞莎は白や青で彩られた“メイド服”を着ていた。

「あ、亞莎……？それは……」

すると亞莎は顔を赤くする。

「そ、その……咲夜さんやレミリアさんが、仕事をするならコレを着ると……」

「（アイツらか……！）」

似合っていない訳じゃない。つか似合いすぎる。インパクトが強すぎた。

「あ、あの……変、でしょうか？」

「い、いや、似合ってるよ、うん！」

俺達はそのまま移動する。

「よし、始めるか」

「・・・また亮様といられるんだ・・・(ボソッ)」

「ん？何か言ったか、亞莎」

「い、いえ！何でもありません！」

俺達のクッキングは始まった・・・

「分量はこれぐらい・・・きちゃっ！？」

「おっ！とー！？」

亞莎がコケる。俺は亞莎を抱えるが・・・共に飛んだだんご粉が俺に直撃した。

「あ、ああ・・・ごめんなさい！」

「い、いや・・・ゲホツ、大丈夫だけどね・・・」

「亞莎！？それ砂糖じゃない、塩！」

「え、えええええ〜！？」

ホントにいるんだ・・・砂糖と塩を間違える人。その後もてんやわんやになりながらもごま団子は完成した・・・

俺達は中庭に来ていた。丁度いい場所を捜していたのだ。

「あ、あそこはいかがですか？風が当たって、気持ちがよさそうです」

「そうだな。じゃ、行くか」

「はい」

俺は仰向けに倒れる。

「いや〜、気持ち良いな〜！」

午後に入って丁度良い風が吹いていた。

「ふふふ・・・失礼します」

亞莎が横に腰かける。

「はい、どうぞ。 亮様」

「お、サンキュー」

亞莎からごま団子を渡される。

「すみません・・・それでも比較的きれいな形のものを選んだのですが・・・」

「いいんだよ。そんなの気にしなくったって」

俺はごま団子を見る。

「いただきます・・・」

「・・・くっくっ」

亞莎が俺をじっと見つめている。

「・・・亮様？」

「・・・？亞莎は食べないのか？」

「えっ、た、食べますよ？」

「じゃあさ、同時に食べるか」

「は、はいっ」

「・・・せーの」

「せーの・・・あむっ」

俺達は無言で口を動かす。

「・・・おいしい」

「ああ、うまいな。・・・良くできてる」

「はいっ！外はカリっとしてるのに、中のはほくほくのあつあつのトロトロで・・・」

「ごま油が香ばしいな」

「お餅ももちもちです！」

俺達はすぐに二個目を手にする。

「う、ちょっと脂っこいかな？」

「はい！「ちらのは少し焦げ臭いです」

「・・・でもおいしいな！」

「・・・もぐ・・・んぐ・・・はいっ！」

夢中で食べている内に、あっという間に食べ終わってしまった。

「・・・ふう、おいしかったな」

「はい、色んな味のものがありましたけど・・・自分で作ったから
でしょうか・・・どれもおいしく感じました」

「そっだよ」

「はい？」

俺が即答すると亞莎が聞き返してきた。

「だから・・・自分達で作ったから、頑張ったからおいしいんだよ、
きつと」

「あ・・・」

「・・・たまには良いだろ？こんなのも」

「はい・・・頑張って・・・良かった」

「また作るうな、亞莎。今度はもっと上達できる！な？」

「・・・はい！」

「はは・・・ふわぁ」

「亮様？大丈夫ですか」

「ああ・・・っと」

起き上がるうとしたらずっと横になっていたせいか、立てずにバランスを崩し、丁度膝を伸ばしていた亞莎の足の上に俺の頭が乗っかる。

「わわわわっ、りよ、りよりよ、りよっ、りよっ、りよったまッ!?!」

亞莎が滅茶苦茶混乱していた。

「わ、悪い!?!すぐ退くから・・・ッ」

立ち上がるうとしたら亞莎が俺の額に手を置いた。

「え・・・」

「だ、大丈夫です・・・その、私でよければ・・・その、あの・・・」

俺はその言葉に甘えて、そのまま身体の力を抜く。

「・・・亞・・・莎」

「りよ、亮様?」

「・・・」

あれ・・・こんなに・・・疲れてたっけ・・・

「……りょ……う……な……」

「……」

「ん……」

「あ、起きられました？」

「……え？」

目を開くと、目の前で亞莎が微笑んでいた。

「おはようございます」

「……まさか、寝ちゃったか？俺」

「はい、ほんの少し……ですけど」

「ああ……悪いな……おわ！？」

起き上がろうとしたら再び亞莎が俺を抑えた。

「亞莎……？」

「……亮様は……少し無理をしていますから、その……もう
少しだけ……大丈夫、です」

「……」

「……勿論、亮様がお嫌でなければ、ですけど」

「……いいのか？」

「はい」

「……ありがとう」

俺はまた力を抜く。

「……にしても恥ずかしいな」

「何がですか？」

「いやさ、ホントに寝るとは思わなくてさ。……恥ずかしいだろ
？」

「そんなことはありません。私は……とても嬉しかったです」

「嬉しい？」

「はい、寝顔を拝見することができて・・・」

俺の顔が赤くなっていく。

「亮様を、身近に感じました」

「・・・亞莎」

俺は恥ずかしくて亞莎から目を背ける。

「亮様？」

「もう少しだけ寝るよ・・・適当に起こしてくれ・・・あと」

「はい？」

「・・・いい加減、俺のことは様付けで呼ぶなって」

「あ・・・はい、亮・・・さん」

「上等だ・・・」

明命だって時間が掛かったんだ・・・それに、恥ずかしがり屋の亞莎が俺と普通に会話している・・・それだけで今は充分だ。時間はたくさんあるんだから・・・

咲

「・・・」

「・・・」

俺は焰耶と向かい合っていた。何でか？約束を果たすためだ。

「・・・用意はいいな」

「ああ。構わない」

焰耶が鈍砕骨を振り回す。

「・・・!!」

対する俺はキープレード。・・・ていうか見物人の皆さん、仕事は？

「まあいいや・・・いくぜー!」

「来い!」

俺は地を蹴り、走る。

「セヤアッ！」

「ふん！」

ガツキインッ！

「そらよー！」

「まだだ！」

俺はひたすら速度で攻める。焔耶のペースに持ってかれたら負ける。

「ウララララッ！！」

「く……うざい！」

ブオオンッ！

「ッ！とおー！！？」

攻めをやめ、ギリギリで焔耶の攻撃をかわす。

「なら……開け！」

俺は空間から直槍を取り出す。

「ほう、あれは私の……」

見物していた星が眩く。

「タラアッ！」

「ぐ、反則だぞ！」

「別に武器は持ち替えちゃいけないなんて決まりはないだろ!？」

攻め方を変える。焰耶も馴れてない戦い方をされているため、動揺している。

「・・・そこだあ！」

ガキヤアンツ!

見切られた・・・なら次、片鎌槍を取り出す。

「ッ！蒲公英の武器か・・・」

あ、武器セレクトミスった気がする。

「良い度胸だな・・・その武器を見せるとは・・・」

ヤバイって。目が。

「うおーっ！」

ブオンツ!

「ッ！」

横に払う攻撃を避ける。・・・そして攻めに入ろうとするが・・・

「まだだあ!!」

「ういつ!?!」

遠心力を利用してもう一回転してきた。

ガキヤアン!

受け止めきれず、槍が宙を舞う。

「止めだあ!!」

アレを喰らったら折れる! そう判断した俺は、右腕だけに闇を纏い、右腕で防いだ。

ズガアアンツ!

「が……」

勢いは殺せず、そのまま吹き飛ぶ。

「チツ……なんつー一撃だよ」

腕が痺れている。……だが立ち上がると焔耶が仰天していた。

「な、な……何故無傷なんだ!?!」

「……まあ、色々」

「・・・咲、本気じゃない」

「何い！？貴様、手を抜いていたのか！」

恋の一言に焰耶が反応する。

「いや・・・手を抜いてた訳じゃ・・・」

「黙れ！貴様、そこまで人を舐めていて・・・」

・・・しょうがない。不安だし、あまりこの世界の人には見られなくなかったんだけど・・・

「・・・ハアア・・・タアツ！！」

Bモードを発動する。

『な！？』

恋以外の全員が驚きの声を出す。

「・・・咲、その姿・・・」

焰耶が鈍砕骨を降ろす。

「……どうした、焰耶？まだ終わってないだろ？」

俺は鎌を取り出して構える。

「……！」

焰耶も武器を構え直してくれる。……そして、お互いに駆け出そうとした瞬間、

「うわぁー！ーん！咲お兄ちゃんがお化けになっちゃったぁー！ー！ー！」

璃々ちゃんの泣き声が聞こえた。

「あ……」

俺はBモードを解除して璃々ちゃんに近寄る。

「……璃々ちゃん、俺は大丈夫だよ。ゴメンな？怖い思いさせて」

俺は璃々ちゃんの頭を撫でる。

「う……ひつく……」

「……」

失敗だな……これじゃ焰耶に大人しく怒られてた方がマシだったか……

「璃々、ちょっとびっくりしちゃっただけよね？」

紫苑が璃々ちゃんを慰める。

「うん・・・咲お兄ちゃんが、咲お兄ちゃんじゃなくなっちゃって・・・」

「・・・俺は俺だよ。璃々ちゃん」

「・・・本当？」

「ああ・・・だから心配しなくても平気だよ」

「うん・・・わかった」

「ん、良い子だ」

俺は鎌を担ぎながら焔耶に向き直る。

「・・・続ける？」

「いや・・・止めておく」

焔耶はそのまま歩いていく。

「その・・・すまない」

最後にそう言って焔耶は部屋に帰っていった。

「・・・えっと」

皆の視線が集まる。

「大丈夫だよ」

「桃香……」

「まあその程度では動揺しないって」

「一刀も言う。」

「……てつきり何かの趣味かと……」

星……？

「そ、そうでしゅ！怖くないです！」

「は、はひ……」

ビビってるよね、軍師二人。

「……まあ、いつか……」

簡単に受け入れてくれる。段々と人ではなくなっていくても……
皆は受け入れてくれる。

「恋は……咲がどんなことになっても受け入れる」

「恋・・・ああ、ありがとう」

俺は気分転換に街を歩き回っていた。

「・・・人が多いな」

俺は人に流され、近くの茶屋に押し出されて倒れる。

「・・・つー・・・」

「あれ？咲、どうしたんだ？」

上から声が聞こえる。

「・・・一刀？」

俺は立ち上がる。

「朱里と雛里もいるのか・・・デートか？」

「ち、違うよ。ちょっと二人の付き添い・・・咲も座れよ」

「一刀に促されて俺は空いてる席に座る。」

「……雛里？何か固くない？」

「い、いえ……そんなことはありません……ずずずず」

雛里はお茶を一気に飲む……今日は暖かい、むしろ暑いくらいだろう。その気温の中でも湯気が出ていたお茶……結果は明白だった。

「ひーーーーー!?!」

「……あはは、雛里ちゃんったらうっかりなんだから」

「く、くくく……」

俺は笑いを堪えていた。

「舌がひりひりひまふ……」

「冷たいものでももらおうか？すいません、冷たいお茶か何かを」

「あひがろっごらいまふ」

「雛里……お前、笑いの才能あるよ……くくく」

「咲さんひろいれす……」

そうしている内に俺の分も含めたお茶がやって来て、お茶菓子をみんなで食べる。

「・・・二人でどうやってお茶とお菓子をいただいと学生時代を思い出すね」

朱里がそう言う。

「学生？ああ、二人は同じ私塾の出身なんだっけ？」

「はい、あの頃はよく教室のみんなで集まってお茶をいただいたりしていました」

「へえ、学生らしいな？」

「？咲さんは学生じゃなかったんですか？」

「・・・今の所中学と高校を行ったり来たりしている」

「刀は意味がわかったのか笑っていた。」

「そうそう、わたしと雛里ちゃんのお友達に元直ちゃんっていう子がいてですね」

「元直ちゃんは、すごくお菓子作りが上手なんですよ」

「元直ちゃんって・・・」

「刀が頭を捻る。」

「ご存知ないですか？徐庶元直ちゃんです。あの子も王佐の才と呼ぶにふさわしい、知略家なんですよ」

雛里が説明してくれる。

「やれやれだぜ・・・」

「・・・どうしたんですか？」

「いや・・・何でもない・・・」

やっぱ亮がいないとネタが通じないか・・・

「・・・あ」

一刀が呟く。見るとお菓子全部食べ終えていた。

「・・・もう少し注文しよっか？」

「・・・」

雛里も俺が来た時よりは大分リラックスできているようだった。

「なあ一刀」

「何だ？」

「祭りつてさ、武道会みたいなのある？」

「あるぞ。武道会に限らず知略、料理・・・あとファッションショ

「みたいなのもあるな」

「・・・それ全部お前が考えたのか？」

「形にしたのは他のみんなだよ。俺は案を出しただけ」

「ふーん・・・頑張ってたな」

「・・・だってさ、ちゃんとした世界を作って、平和な世の中にしないとな。・・・完全な平和はないと思うけど、俺や桃香・・・それにみんなが頑張ればそれも実現できるかもしれない」

するて一刀が右手を差し出す。

「だから、咲や亮も力を貸してくれ」

「・・・当然」

俺も手を差し出し、一刀と握手する。完全な平和・・・目指そう。そう俺は思った・・・

何も変わらない日常（後書き）

亮

「む……」

咲

「……」

亮

「……ネタがない？」

咲

「じゃ、あれやるか、中の人ネタ」

アサシン&音無
「トランザム！」

夕映

「あちゃくらりようこ、復活！」

エヴァ

「みくるみくる〜ノートみせてくれるかい？」

雛里

「あ、はい。勝手に持って行っていいですよ」

郭嘉

「私は審判の羽根のツバキニヤヨイ中尉です」

張勳

「私は・・・彼の所に行かなくちゃいけないの」

ひさ子

「テイガー、その馬鹿を止めろ」

遠坂

「・・・哀れな娘」

岩沢

「姉さん？・・・うん、わかったよ、この人も敵なんだね」

のどか

「おととい兎を見たの。昨日は鹿、今日はあなた」

アスナ

「髪だってお姉ちゃんのように伸ばしますから、料理だって上手になりますから・・・」

楓

「柊、木偏が揃っててイケてるよね」

このか

「最悪です！」

亮

「作品を固めたな」

咲

「わかる人が何人いるかわからないけどな」

亮

「えっと・・・それでは次回の真似と開閉と世界旅行！」

咲

「次回もまた見てくれよ！」

準備（前書き）

やっと次話で祭りが始まります。ではどうぞ。

準備

祭りの日が近づいて、俺達は蜀に向かう用意を始めた。

「……といつても用意するものは少ないんだけどな」

「亮、準備は終わったか……何だ……それは」

思春が部屋に入ってきて言った。

「ん？ああ、思春の服を真似したんだけど……」

俺はずっと前の世界から着ていた思春の服を着ていた。……制服はあんまり着たくない。

「……まあいい。蓮華様が待っているぞ」

「……もうそんな時間？」

前はシャオとかを置いていったので、今回は古参の三人が留守番することになった。……雪蓮と祭さんは渋っていたが。

「うげ・・・俺が最後か」

「遅いぞ、亮」

蓮華が声を掛けてくる。

「亮さん、私達も今来ましたから、大丈夫ですよ」

・・・蓮華が笑っている。・・・このやるー・・・俺が困るのを楽しんだな。

「あれ〜？いつから亞莎ちゃんは亮さんを亮さんって呼ぶようになったんですか〜？」

穩が亞莎に聞く。

「そ、それは・・・この間からです!」

「明命ちゃんも呼び捨てですし〜・・・あ、ならわたしはだんな様って呼んで良いですか〜？」

「ぶっ!？」

俺は吹き出す。い、いきなり何を・・・

「あ、シャオもそう呼びたい」

「な、なに馬鹿な事を言っている!行くぞ!」

「……亮？乗れますか？」

「明命、俺を侮ってもらっちゃ困るぜ……っと」

俺は馬に跨がる。

「……さすがです」

明命は微笑んでくる。

「よし……行こうぜ」

俺達は馬を走らせた……

咲

俺達は祭りの用意の日々だった。祭りは毎回蜀で行われる（一刀がいるため）今回は魏の大半が参加できない状態にあるが、それでも民はたくさんいる。

「よっ……たんぱぽ！そっちはどうだ！？」

「あとちょっと〜！」

俺とたんぼぼはステージ作りをしている。たんぼぼなら、材木の効率的な使い方を知っているの、強化や変化が使える俺と組むことになった。空いていれば朱里達も来てくれるが、いかんせん忙しい民だけでは手が回らず、武将や軍師まで駆り出されている。

「・・・咲さん、たんぼぼちゃん、お茶です」

斗詩がお茶を運んできてくれた。

「お疲れさん。・・・残りの二人は？」

「文ちゃんは力仕事を手伝ってますけど、麗羽様は・・・」

「言わなくてもわかった。・・・大変だな」

「・・・好きでやってますから」

「・・・そう言えば咲、お姉様は？決着どうなったの？」

「それがさ、焰耶と戦った日から静かになっちゃってさ・・・何か知らない？」

聞くがたんぼぼは首を横に振る。ちなみに闇の力はみんな知っている。姿を見せていないのもちらほらいるが。

「祭りか・・・」

「まさかあんな乱世からこんな日が来るなんて思わなかったよね」

「私も・・・捕虜になって、そのまま処刑されるかと思ったけど・・・」

「そこがご主人様のいいところだよ」

「何人かは甘い考えを持つてる人がいてもいいよな」

そしてお茶を飲み終わり、斗詩にお礼を言ってから作業に戻る。・・・ちなみに、祭りは数日にかけて行われる。だから当日は民も泊まれるようにカプセルホテル（のようなもの）を翠や鈴々や猪々子といった人材が材料を運び、それを知っている一刀と、説明を受けた朱里達の指示で大工さんが大急ぎで作っている。俺達がつけている舞台は重要で、ここで武道会や色んな事を行うことになっている為、未完成は許されない。

「あ、そこはこう・・・重ねた方が壊れにくいよ」

「そうなのか？よっ・・・」

そして作業が一段落して、俺とたんぽぽは昼飯を食いに街に出た。

「~~~~」

「嬉しそうだな、たんぽぽ」

「だってお祭りだもん」

わからなくはないけどね・・・

「・・・やっぱり人が多いな・・・」

「三国から人が集まるからね。お祭りが始まるともつと人が増えるよ?」

「マジか・・・」

朱里とか雛里とか璃々ちゃんは人に流されるんじゃないだろうか? ・ ・ ・ 鈴々とかは寧ろ人を撥ね飛ばしそうだな。

「うわわわ〜!?!」

「たんぽぽ!?!」

たんぽぽが人波にさらわれる。俺は慌ててたんぽぽの手を掴む。

「・・・大丈夫か?」

「あ、ありがとう・・・早くご飯食べようよ」

確かにこれ以上ここにいたらたんぽぽどころか俺まで流される。近くにあった定食屋みたいな所に入る。

「いらつしやい！・・・おや、御遣い様じゃないですかい」

「おっちゃん。この店だったんだ」

よく見たらここはよく来ていた店だった。

「おやぁ・・・お二人はそういう仲なんですか？」

おっちゃんが言う。その視線の先には・・・手を掴みあっている俺とたんぽぽ。

「~~~~~！」

俺は慌てて手を離す。

「あれ〜？咲、恥ずかしいの？」

たんぽぽが茶化してくる。

「・・・おっちゃん！焼飯一つ！」

「あいよー！」

俺達は適当な席に座る。

「・・・あれ？咲とたんぽぽじゃないか」

向かいの席を見ると、一刀と愛紗がいた。

「二人も昼か？」

「ああ、宿の方も一段落だ。むしろランクアップして普通のアパートみたいになつたよ」

「へえ……」

「そつちは？」

「たんぼぼと咲が作り上げたよ！後は板を固定しておしまい」

「そつちも順調そうですね」

「あ、そつちの席行って良いか？」

「ああ、構わないよ」

俺とたんぼぼは一刀達の席に移動する。その後は談笑しながらご飯を食べ、別れを告げて、一人城の仲をさ迷う。……すると、木陰にだれかいるのが目に入った。

「（……恋）」

恋は丸くなって寝ていた。よく見るとあちこち泥だらけで、今まで作業をしていたのがわかる。

「……ご苦労様」

恋の隣に座ってそう言つと、恋の目がゆっくりと開いた。

「あ……起こしちゃったか？」

「……咲、おはよう」

「あ、ああ……」

「咲、汚れてる」

「え？」

俺は顔を腕で拭う。……あー、

「あつちやあ……今日は風呂の日じゃないからな……」

「……咲、来て」

「お、おい、恋!？」

俺は恋に引つ張られていく。城壁に空いていた穴をくぐり、森を歩く。……穴が空いてたら不味くないか?……そうして着いたのは……川だった。

「……川？」

「(コクツ)……泳げばきれい……ん」

恋はそう言つて服を脱ぎ出し……ホアアアアツ!?

「れ、れれれれ恋！？何脱いでんのさ！？」

俺はパニックになる。

「・・・大丈夫」

恋はそう言って俺の顔を強引に恋の方に向かせる。

「あ・・・」

「水着、着てる」

水着・・・なぜ着てるんですか？

「・・・ご主人様が作った」

「一刀か・・・！だが、今は礼を言おう。万が一アレだったら俺は様々な人に殺されていた。」

「・・・泳ぐ」

恋はそう言って川の中に入っていく。

「はあ・・・ふう・・・何を慌ててたんだか・・・」

俺は冷静さを取り戻し、上着を脱いでズボンを捲る。

「よっし！おらあああ！」

俺は気合いを入れて水の中に飛び込んでいった・・・

そして遂に日はやって来た。俺と一刀は門の前で来客を待っていた。

「魏……というか月達は？」

「ええと……月と詠とねねがくるらしい」

「？華雄と霞は留守番なのか……呉は？」

「……蓮華と思春と穩と亞莎と周泰ちゃんと亮だな」

「ふむ……あ、来たみたいだぜ」

旗と砂ぼこりが見える。それも2方向から。そしてそれらの人影が歩いてくる。

「……何だ、随分と元気そうじゃん」

「そっちこそ。呉で平和ボケしてんのかと思っただぜ」

ソイツは笑う。

「……バーカ、そりゃこっちの台詞だ」

そしてお互いハイタッチを交わす。

「「せっかく帰ってきたんだ。楽しもうぜ!」「」

祭りの始まりだった・・・

準備（後書き）

亮

「平和だな」

咲

「そうだな」

二人

「……」

二人

「（また会話が……）」

咲

「また中の人ネタ？」

亮

「二話連続でかあ？」

咲

「うーん……」

亮

「どうするか……」

咲

「……」

亮
「りん」

咲
「ゴリラ」

亮
「らくだ」

咲
「ダーマ」

亮
「いいのが、それ・・・マクド ルド」

咲
「そっちの方がアウトだろ・・・ドラ」

亮
「ららら、らぶらり・・・」

咲
「ストップ！危険だ！そのネタは危険だ！」

亮
「あ、ああ・・・悪い、つい小説を終わらせるところだった・・・」

咲
「じゃあお前の負けな・・・それじゃあ次回の真似と開閉と世界旅

行、祭り偏！」

亮

「あ、てめ！・・・次回もまたお楽しみに！」

祭り、開催（前書き）

お祭りの開催。色々なことがあります。ではどうぞ。

祭り、開催

「……多い」

街を見ての感想が思わず口に出た。俺は今、一人だった。何故か？ 呉の皆は荷物を置いたり、挨拶したり、手続きしたりと忙しそうなのだ。俺は一刀に許可を取り、先に蜀の都を見ていた。

「……賑やかだな……っておおお！？」

何故か屋台が出まくっている。……焼きそばとかはわかるがなぜかき氷まである……？

「……すみません、かき氷ください」

俺は店の人に言う。

「へい！ “しろつぶ”は何にしやすか！？」

指差した先には瓶に入った色とりどりの液体。……ブルーハワイ
どうやって作った……！？

「えと……その青いので」

本物かどうか怪しいので試す。俺は金を払って一口食べる。

「……本物だ」

凄いなこの世界……よく見たら街の人々も現代の服装がちらほら

と・・・

ドンッ

「と・・・」

誰かにぶつかる。

「あゝ、すみません」

のんびりとした声。下を見るとローブを纏い、フードを被った・・・少年・・・少女？がいた。

「あの〜聞きたいことがあるんですけどお」

「あ、ああ・・・何？」

「兄を知りませんかあ？」

「いや・・・見た目知らないし」

「僕と同じようにローブを着ているんですけど〜」

「・・・悪い、見てないな」

「ああもう！変わって！」

「ええ〜？」

「いいから〜」

「？」

目の前でいきなり騒ぎ出した。

「……城へはどっせって行くの？」

さっきとは違うトーンで話しかけてくる。

「城は、ここからまっすぐいけばすぐだよ」

「ありがとう、亮。……ほら、いくよー！」

「どづいたしまして……ってあれ？」

俺は子供が去ってから首を捻った。

「……俺、名乗ったっけ？」

細かいことは気にしないことにした。

今日の日程は、武道会の予選の後、料理大会。あと何と黄巾党の三

人を始め、自由参加ありの歌合戦。

「・・・これで一日目が終了か」

そろそろ予選の時間が近づいたので、俺は会場に向かう。

もう賑わっていた。それはもう、どこぞの天下一を決める武道会並みだ。そして辺りを見渡すと意気込む武将達が見られる・・・その中、またフードを被った奴がいた。

「・・・またか」

気にしないでおくか・・・今の内ルールを確認して・・・っと。

・試合終了条件は、10カウントダウン、降参。もしくはリングアウト。
ウツ。

・武器は刃引きしたものを使う。

・相手が戦意喪失したら攻撃してはならない。

・飛び道具の使用は許可する。（ただし、牽制程度。本格的に狙うのは反則）

「・・・なるほど・・・お、咲」

俺は咲を見つけて近寄る。

「いい！？絶対に無茶するんじゃないわよ!？」

「わ、分かってるよ、詠」

「・・・何だ、尻に敷かれてるのか？」

「亮・・・あのな・・・」

「おい、亮」

思春が俺に話しかける。

「・・・容赦はしないぞ」

「……おう、旅の成果を見せてやる」

「予選が始まりまーす！参加者は以下の場所に……」

予選会場はバラバラな為、俺達は別れる。

「明命」

「あ、亮。よかったです。おなじ予選なら落ちませんね」

「……確か四人ぐらい残れるらしいから、俺達の他に誰が残るかな？」

そうこうしている内に予選が始まる。俺と明命は万が一があると嫌なので、周りが金属製の武器を使う中、木刀を構える。

「え？周泰將軍だけじゃなくて亮様まで参加してるのか!？」

「か、勝てるわけねーよ」

「ば、馬鹿野郎、諦めてんじゃねえ!」

多分仲の良い呉軍の兵士なのだろう。俺と明命を見て驚愕していた。

「か、数で囲め!一気に攻めれば・・・」

そう言つて参加者の半分ぐらいが俺と明命を取り囲む。

「か、かかれえー!」

『ワアアアアッ!』

そして襲いかかってきた参加者を・・・

「セヤッ!」

「ハッ!」

ズガアアンツ!

『グワアアアアッ!?!』

全員が宙を舞つて落下した。

「や、やっぱり勝てる訳がない・・・ガクッ」

「さ、残り半分。決めようぜ」

「はい！」

だが、向かおうとしたら参加者達が倒れていく。

「は!?!」

そして倒れていく参加者の中をロープを纏った奴が歩いている。

「アイツか・・・」

すると俺の方に指を向けるロープ。

「・・・亮と戦うのを楽しみにしているね」

そう言っつて予選会場から降りていく。

「・・・誰なんだ・・・一体・・・」

俺の謎は深まるばかりだ。・・・だが解るのは、最初のロープと今のロープは別人。声と気配が違いすぎる。

「よっ、どうだった？」

「どうだったって・・・そりゃ余裕で突破だよ」

俺は咲と会話をしていた。正直勝ち残れるかは怪しい。咲に明命、恋に思春に馬超や関羽・・・それにローブの少女（声は少女だった）・・・勝てるか？いや、やるしかないな・・・

「そしてやることないんだよな・・・」

時間があるって訳でもない。この後、料理大会があり、亞莎が出場するのだ。ちなみに今は予選の真っ最中。亞莎はあの日からごま団子以外のモノも練習していた。しかも咲夜にもある程度基本は習っていたみたいだった。

「・・・まあ、そろそろ会場に向かうか・・・」

ドンッ

「またか・・・」

再びロープを纏った誰かにぶつかられた。

「あ、ごめんなさいです。・・・失礼しますが、料理大会の会場はどちらですか？」

「・・・今から向かうから、一緒に来るか？」

「はいです」

・・・多分、ロープを纏った少女を連れて会場に行く。なんでこのロープの集団は顔を隠してるんだか・・・まさか、于吉の仲間か？神が言っていたからな・・・気を付けないと。

「ほら、ここだよ」

「ありがとうございます。大澤さん」

俺はそれを聞いて今度は迷わず少女の腕を掴む。

「ッ!？」

「何者なんだ？俺はお前らロープの集団にさっきから会ってるけど、皆俺の名前を知っている。いや、むしろ知り合いのような感じだ。……だが俺はお前らに心当たりがない。……誰なんだアンタ一体」

「……あまり説明はできませんが、これだけは言えます」

「?」

「私達は貴方達の敵じゃありません」

「……」

「さよならです。……ディープミスト」

「く……!？」

霧が満ちて、視界が閉ざされる。そして目を開けると、少女は跡形もなく消えていた。

「チツ・・・何なんだ一体・・・」

俺はそう言いながら観客席へ向かった。

「お、始まる」

観客席でさっきの少女を見つけようとしたが、見つからなかった。

『さあ始まります！この料理大会を制するのは誰だーッ！？』

司会者がメガホンを持って叫ぶ。・・・さすがにマイクは無理だったか。そして入ってきたのは一般人の人と亞莎と孔明・・・そしてローブを被った人物。

「!？」

あれは・・・背的には男・・・か？

『さあ今回は・・・お菓子！お菓子を作ってもらいます！』

「（・・・よし）」

俺は内心でガッツポーズをする。菓子なら亞莎も充分いける。そして調理を始める面々・・・

『・・・そこまで！それでは審査員の皆さんに試食してもらいます

』！

つか、あの声大きいな。・・・そして順番に料理が運ばれる。・・・何とローブの男と亞莎のお菓子が同じ・・・ごま団子だった。そして審査員の人達が食べていく。本来は俺と咲と一刀が審査員の予定だったが、俺が情で判断しかねないからと断った。それで審査員は三国の城の料理を作る人を審査員にした。

『……審査員の皆さん、それでは一番だと思っ方を指差してください！』

そう言って全員が指差したのは……ローブの男だっ。……亞莎はうつ向く。自分が練習を一番して、努力したものと同じモノで負けたのだからしょうがない。するとローブの男は亞莎に近寄る。俺は反射的に観客席を使って瞬動で亞莎とローブの男の間に割って入る。

「亮……さん」

亞莎は涙ぐんでいた。

「……亞莎に近づくな」

「……別に何かするわけじゃない」

やっぱり男の声だな。つまり、すべてのローブは別人。

「あ、あの、亮さん……別にこの人は何も……」

俺は亞莎に手で合図する。

「……少し聞きたいことがあっ。……お前らローブの人間は何なんだ？二重人格みたいな奴……アイツの兄貴はお前だろう。そして武道会の予選に現れた女。さっきそこまで一緒にいた女……」

全員が怪しすぎるんだよ」

「……アイツら……目立ちすぎだろ……」

「人のことは言えないと思うけどな」

「違うない。……まあお前は俺達を知らなくても俺達はお前を知っている……ってことで納得してくれないか？」

「……」

「悪いな、妹達が待つてるんでな」

そう言って男は歩いていく。

「……俺の仲間に手を出したら……」

「分かってる。決してそんなことはしない」

その言葉に嘘偽りはない。

「……わかった。信じてやる」

そう言って男は片手を挙げる。

「あとで必ず説明はする」

そう言って去っていった。俺は亞莎を慰めながら、呉の皆と代わる代わる祭りを見て回った。

そしていつもの四人組で夕暮れを歩いていった。

「咲は何やってたんだ？」

「恋と詠とねねで街を巡ってた。・・・また出会えたのは奇跡だな」

「そうか・・・」

「・・・亮」

明命が話しかけてくる。

「ん？」

「歌合戦に参加しませんか？」

「・・・はい？」

「・・・歌いたい」

「恋もか」

「でも楽器が・・・」

「あるぞ？」

「え？」

咲が普通に言った。

「決まりです！行きましようー！」

俺は明命に引っ張られながら会場に向かう。

「みんな大好きーッ！」

『てんほーちゃーんっ！！』

「みんなの妹ー！」

『ちーほーちゃーん!』

「とっても可愛い」

『れんほーちゃーん!』

「……凄い人気だな」

俺は舞台裏でそう言う。

「……まあアイドルだからな」

「……ところで道具は？」

「バツチリだ」

「……随分と便利な空間だな」

「最初は押し入れレベルだったけど今じゃ蔵レベルだ」

そりゃ広いこつて……

「・・・明命、恋。ガルデモの曲、いけるな？」

「はい！」

「(コクッ)」

そして始まる出番。

『みなさんどうもー！』

俺が声を出す。咲が小型マイクも持っていたので皆装備している。・・・そして観客がざわめく。そりやそうか、天の御遣いが2人もいれば。そしてここからシャオが騒いでいるのが見える。

「(・・・明命)」

『(はい)・・・みなさん！お祭りは始まったばかりです！もっと・・・もつと盛り上がっていきましょー！』

『ウオオオオツ！』

『1・・・2・・・1234！』

俺の掛け声で演奏が始まる。気がつけば呉や蜀の皆や、ロープの団体も楽しんでいた・・・

祭り、開催（後書き）

日向

「祭りねえ……」

野田

「ふん、くだらん」

大山

「でも面白そうだよ？」

藤巻

「でも、だりい」

日向

「わかっただろ？こういう連中なんだよ、コイツらは」

大山

「日向君は？お祭りとか……」

日向

「生前は忙しかったからな。あんまり行けなかったな……」

大山

「僕は家族としか行けなかったんだ。……まあ色々あったから……」

藤巻

「何だよ、いきなり湿っぽくなって」

大山

「ねえ。みんなはずっと友達だよね？」

野田

「何を言っている」

日向

「当たり前だろ？」

藤巻

「俺達や親友だろ？大山」

野田

「今更言う必要はないな」

大山

「皆、ありがとう！！僕達の物語はこれからだね！」

全員

『おっ！』

日向

「……って何か打ちきり漫画みたいになっちゃってますから！」

大山

「日向君！男らしさを忘れてるよ！」

日向

「ああ、わりい……打ちきり漫画みたいになっちまってるじゃねえか!！」

大山

「カツコいいよ、日向君!」

日向

「サンキュ……ってこのネタはもういいよ!！」

大山

「それじゃここまでだね!」

藤巻

「次回の真似と開閉と世界旅行!」

野田

「次回もまた見るんだな」

大山

「それじゃあまた次回!」

日向

「……結局、叫ばずに終わらない時はないんだな……」

祭り、二日目、前編（前書き）

長くなりそうなので 前後編に分けます。ではどうぞ。

祭り、二日目　前編

咲

「……ん……」

「……」

目を開く。……何故か詠が座って見ていた。

「お、起きた？」

「詠……？どうして俺の部屋に……？」

目を覚まし、髪を纏めながら起き上がる。……我ながらだいぶ髪を縛るのが上手くなった気がする。

「その、ね……もし、嫌じゃなかったら……その……ボクと……」

「……？」

寝起きのせいで頭の回転が悪い。

「ボクと……ボクと……二人っきりで祭りに行かない？」

「……え？」

二人っきり？二人っきりで……二人っきりで……つまり……

ッ!

「ッ!」

理解した瞬間、俺は顔から湯気が出るくらい真っ赤になる。

「……嫌?」

詠がすぎるような目で見てくる。……断る理由は俺にはない。

「……ああ、いいよ。一緒に祭りを楽しむか。……あ、でも途中から武道会があるから……」

「大丈夫。……うん、ボク……咲といたい……から」

「~~~~ッ!」

何かこう……くすぐったい感じがする。

「……じゃあさ用意するよ」

「……わかったわ」

「……」

「……?」

「……詠?」

「……な、何よ?」

「俺、着替えるんだけど」

「~~~~~!?!?」

詠は顔を真っ赤にしながら部屋から飛び出ていった。

(・・・咲)

「(恋か?どうした?)」

仮契約カードから恋が念話を使ってくる。

(恋は、今日ねねと遊ぶ。だから咲は詠という)

「(お、おい恋!?)」

恋からの念話が切れる。

「・・・恋の奴・・・」

気を使ってくれたのか・・・っと、早く行かないとな。

「悪い、待ったか？」

「う、ううん。大丈夫よ」

俺が声を掛けると詠は身体を硬直させる。

「えっと・・・じゃ、行くか？」

「・・・(コケッ)」

俺達は街に向かって歩き出した。

「どこから廻るか・・・」

昨日一日だけじゃ廻りきらなかったんだよな・・・

「詠、行きたいところはあるか？」

「え！？いや、ボクは、何処でも・・・」

「・・・ハア」

ビシッ

俺は詠にデコピンをする。

「痛っ！な、なにすんのよ！」

「そんな緊張しないで、普段のお前でいてくれ。こっちまで固くな
つちまう」

「う・・・だ、だって・・・」

「だって？」

「咲と二人つきりを出掛けたことあんまりないじゃない・・・だか
ら・・・えっと」

「・・・」

そういえばそうだ。二人つきりなのはそこまでなかった。

「へえ、やっぱり詠も乙女なんだな」

「ボクを何だと思ってたのよ！」

詠が普段通り怒る。俺は詠の頭を乱暴に撫でる。

「そういう普段のノリでいてくれればいいんだよ」

「あ……」

「さあ、片っ端から見て回るっぜー！」

「……うん！」

俺は詠の手を引いて店を見て回る。

「こんな食べ物があるんだ……」

「たこ焼きっておい……」

昨日も色んな店があったけど……

「これ食ってみるよ、詠」

「？何よこれ」

「クレープ。甘いよ」

「ん……もぐ……！」

詠が目を輝かせた。やっぱり女の子なんだな。普段軍師として気を張ってるんだから、この時くらい……気を抜いてもいいと思う。

「ほらほら、亮早く」

「こらシャオ！亮を引っ張らないの！」

「あはは・・・」

「さ、次は何処に行く？月」

「えっと、私はご主人様が行きたいところに行きたいです」

「あ」

「え」

「お」

集結する天の御遣い。しかも全員誰かを連れている。

「ゆ、月!?!」

「詠ちゃん。咲さんといたの?」

「亮……二人連れか」

「そっちだって随分とラブラブじゃないか?一刀もな」

「いやいや……二人には負けるよ」

「嘘つけ!!」

どうやらそれぞれ朝に迎えが来たようで、皆似たような理由で今のメンバーでいたらしい。

「……咲、そろそろじゃないか?」

亮がケータイを見ながら言う。

「……もうそんな時間か……」

武道会の時間だ。意外に参加者が多いから早めに大会が開催されるらしい。

「……悪い、詠」

「大丈夫よ。会場まで一緒に行くわよ」

「ああ」

「蓮華とシャオはどうする？」

「見に行くわ。亮の試合が気になるし……」

「シャオも」

「一刀と月は？」

「見に行きたいけど……月、いいかな？」

「はい」

俺達は武道会の会場に向かう。

そして会場に着いて、発表されたトーナメント表を見て……固まった。

亮

「・・・咲？」

俺は固まった咲を無視してトーナメント表を見る。

五十嵐 咲対呂布 奉先

「・・・なるほど」

昨日・・・桃香から聞いたが、咲はBモードを使って色々あったらしく。人前では使えない状態。

「まあ、頑張れ」

ポンっと肩に手を置いてやる。・・・あ、そうだ。俺の相手は・・・

大澤 亮対結衣

「・・・？」

結衣・・・？・・・俺は視線に気がつき、振り返ると、昨日のロブの少女が手を振っていた。

「・・・アイツか」

無視するのも悪いので、手を降りかえす。

「ハア・・・頑張るか・・・」

咲はそう言いながら控え室に向かった。・・・頑張れ。

咲

「・・・よし！」

俺は気合いを入れて舞台に向かう。相手は恋。人の目がある以上、Bモードは使えない。使えてもDモードだ。だが負ける気はない。今までの旅で強くなった事を皆に見てもらおう。

『さあ第一回戦が始まりました！選手入場！』

俺と恋が向かい合う。

「・・・咲、恋は本気でいく」

刃を潰した戟を構える恋。

「もちろん。俺もはなっから全力でいく」

闇の力が使えないなら別の力を使うまでだ。

「第一強化・・・第二強化・・・ハアツ！」

キープレードを構えて魔力で身体を強化する。

『それでは試合開始！』

「タアアアツ！」

キープレードを思いつき叩きつける。

「ッー」

ガキヤアンツ！

初撃は防がれる。・・・さすがに先手必勝とはいかないか。

「ハッ！ヤッ！」

上段、下段と振っていくが恋は防いでいく。

「・・・えい」

ビュオオンツ！

「く、おおお！」

上半身を逸らしてギリギリ避ける。そしてそのまま身体を右手で支え、左足で蹴りを出す。

ガスッ！

「・・・く」

恋は戟で蹴りを防ぐ。

「まだまだ！」

戟で防がれている左足に重心を移し、身体を回転させる。そしてそのまま今度は右足で恋の頭部を狙う。

「・・・クッ！」

恋は咄嗟に戟を持ち代え、空いた右手で蹴りを防ぐ。・・・なら次！

「セヤアッ！」

今度は右手に捕まれている右足に重心を移し、もう一度回転。両足のふくらはぎの辺りで恋の頭を挟み、回転する。

「う・・・！？」

恋はそれに堪えられずに回転する。結果、

ズガンッ！

「あぐ・・・！」

恋は地面に叩きつけられる。・・・まさかプロレス技を使う日が来るなんて。

「ハアッ！」

跳ねた恋の身体の下に入り、背中を蹴りあげる。

「ハアアアア！」

空に飛んだ恋の上に跳び、キープレードを叩き込む。

ズバアアンッ！

「あう……」

ガァァンツ！

恋を地面に叩き落とした。

「ふう……ふう……」

闇の力を使えないなら、他の手札を使えばいい。俺は警戒しながら恋に近寄る。……今のは決まったはず。

「……な!？」

だが恋は立ち上がった。恋は口から流れる血を拭う。

「……驚いた」

「……そりゃこっちの台詞だ」

「もし、闇の力を使われてたら今ので負けてた」

目の前の恋を見て、改めて闇の力に今までどれだけ頼ってたかを思い知らされる。

「……やるしかない」

Dモード。これなら鎧と言い張れば大丈夫な筈だ。

「ハアア、タツ！」

Dモードを発動。同時にキープレードはソウルイーターに変わる。

「行くぜ……」

「……来れ（アデアット）」

恋の体が白いドレスに包まれる。背中には白い翼。恋はレイピアを地面に突き刺し、戟を構え直す。

「……タアツ！」

ソウルイーターを一閃。さっきよりも速度も威力も段違いだ。

「ダークファイガ！」

至近距離で爆発を起こす。恋を直接狙っていないから反則にはならない。

「ハアツ！」

「やあ！」

ガキヤアンツ

ガキイン

キキキキンツ

お互いに高速で動く。観客からは歓声とざわめきが入り乱れている。

「フンッ！」

距離を取り、息を整える。その時、何かが疼いた。

「ツグ……」

『そんな加減をする必要はないじゃないですか……もっと力を使いなさい……』

「だ……まれえ！」

Dモードを解除する。

「ハアツ……ハア、ぐ……」

「咲！？」

恋が駆け寄ろうとするが、手で制する。

「大丈夫……まだいける！」

「……わかった」

恋は戟を構え、突っ込んでくる。

「最後に……全力だ！」

キーブレードがアルテマウェポンに変化し、魔力を籠める。

「セイヤアアアツ!!」

「・・・ハアアアア!」

ガギヤアアアツ!!

「くうう!?!」

辺りが煙に包まれる。・・・そして霧が晴れた時、勝者が決まっていた。

「・・・恋の、負け」

恋の身体は舞台外に出ていた。

『し、試合終了!勝者は五十嵐咲様・・・選手です!』

『ワアアアアツ!』

歓声が沸き起こる。俺は恋に近づき、言った。

「・・・闇の力に頼らなくても中々だろ?」

「・・・うん、咲は強い」

俺達は舞台から控え室に戻る。次は亮の試合だ。

「」
「」苦勞さん

亮が軽く叩いてくる。

「次はお前だろ？負けんなよ」

「もちろんさ」

そう言っつて亮は歩いていく。その時、

「咲」

「え？」

振り返るとそこにはローブを纏った奴がいた。

「誰だ？俺の知り合いか何かか？」

「うづん。ちょっと知ってるだけ。……一つ忠告するよ」

「？」

「……闇に気を付けてね。咲なら呑まれないとは思っけど」

その言葉に驚く。

「何で知って……いる……」

辺りを見渡したが、誰もいなかった。

「……何者なんだ……一体……」俺の呟きは誰にも聞こえなかった……

亮

俺は舞台上上がり、対戦相手の結衣話しかける。

「結衣……だったか？」

「あ、それ嘘」

ズルっとずっこけた。

「あのな……」

「あはは・・・私の名前は・・・」

そう言つて少女はローブを脱ぐ。・・・見た目は何もおかしくない普通の少女。

「私の名前はシィ。・・・結衣咲シィ」

「シィ・・・ね」

「・・・キリエは最初待機。亮の動きに合わせてるよ」

『了解です、主』

「デバイス・・・リリなの世界の・・・」

「ううん、違うよ。キリエは貰ったの。亮のケータイと同じでね」

「・・・お前も外史の・・・」

そこまで言つた所で審判が試合開始を告げる。

「・・・行くよ」

シィがポケットに手を入れる。・・・まさか・・・俺は咄嗟に頭の位置をずらす。

ヒュオンッ！

顔があつた位置に何かが通り抜けた。

「……やっぱり使つたことのない技は無理か」

『ですが、今ので彼の力量が解つたのでは？』

「うん。……やっぱり亮はかなり戦える」

「お褒めに与りまことに光栄……んで、今のは居合い拳だな」

コイツ……少しでも気を抜いたら負ける。下手したら于吉以上の恐怖を感じる。……だが、

「……面白そうだ」

ワクワクしていた。命を掛ける戦いじゃないからか、それとも実力が及んでないからか。……何にせよ、シイは俺の事を知っている。だから不意打ちは効かない。

「……咸掛法……全開！」

最初っから全力全開、出し惜しみは無しでいく！

「ハアアアア！」

「キリエ、モード」
『剣』
「」

『了解です』

デバイスが剣に変わり、俺の木刀を受け止めた。

ガキーン！

「それがデバイスの能力か・・・！」

「そうだよ・・・！タアツ！」

体格的には勝っているのに、小柄なシィに押し返される。

「なんつー力だよ！？」

一回離れて指先にエネルギーを溜めて、連続で放つ。

「ゼアツ！」

「・・・私に飛び道具はダメだよ！」

「・・・何っ！？？」

シィに当たると思った弾はシィに当たる前に俺に戻ってくる。

「くっ・・・ハアツ！」

同じエネルギーを当てて相殺する。

「……つたく、世界が断定できないな……」

今のは一方通行アクセラレータの能力……

「飛び道具がダメなら接近戦で攻めるだけだ！」

俺は再び攻めるがあっさり防がれる。

「えい！」

「うわっ!？」

シィは片手で俺を掴み、真上に投げる。

「チツ……」

するとシィは右手を引いて構える。

「ラカン……」

待て。まさか……

「……インパクトオオオ!!!」

強大な気が迫ってくる。

「……ッ!」

ドガアアアアン！

「……やり過ぎちゃったかな？」

『いえ……生体反応確認……来ます！』

「ウオオオオツ！」

「え！？グツ！？」

俺は一応持ってた人解の先に力を溜め、ラカンインパクトを防いでその勢いでシイに打撃を入れる。

「まだまだ！」

掌底を顎に当て、更に両手をシイの腹部辺りに当てる。

「気功破！」

ズンツ！

「ぎあつ……！」

シイは吹っ飛び、舞台の上を滑る。

「……やば」

普段片手でやってた気功破を両手でやった。・・・下手したら内臓ぐちゃぐちゃかもしれない。

「・・・いつたいな・・・けど」

「げ・・・」

シィは立ち上がる。血を流しながらも普通に立ち上がる。

「痛いけど・・・楽しい！」

「くそ・・・不老不死じゃあるまいし・・・」

「そうだよ？」

「・・・はい？」

マジで不老不死？・・・どうやって勝てと。

「キリエ、どう？」

『内臓損傷率68%。まだ動けます』

「それじゃあ、取って置き！」

そう言ってシィは何かを呟き始める。そして、言った。

「『千の雷』・・・固定、掌握！」

シイの身体が雷に包まれる。

「闇マキア・エレミアの魔法!?・・・何でもありだな・・・！」

そう言った瞬間、シイが消え、背中に衝撃が走る。

「あぐ・・・があっ!?!」

俺がぶっ飛んだ方にシイが素早く現れ、コンボを繋げていく。

「がぶっ・・・くそ、やられっぱなしでたまるか！モーションキヤプチャー、ザビー！」

ケータイが消え、ザビーゼクターが飛んでくる。俺はそれを装着する。

「変身！キャストオフ！」

変身と同時に外装を飛ばし、シイを遠ざける。

「ッ・・・そんなんじゃ・・・」

シイは再び雷速瞬動を使おうとする。

「クロツクアップ！」

『クロツクアップ』

素早く動き、シイの脇腹に拳を叩き込み、更に回り込んで蹴りを放つ。

「これで決まってくれ……！ライダーステイング！」

『ライダーステイング』

ザビーゼクターの針の部分にエネルギーが溜まる。そしてそれをシイに突き刺す。

バシユウンツ！

『クロツクオーバー』

「きゃああつ！？」

シイは火花を散らしながら倒れる。

「こ、今度こそ……」

カウントが始まる。

「……参ったなあ……」

「ッ！？」

あれだけ喰らってまだ・・・

「ここまでやられたら・・・負けを認めなきゃね・・・キリエ、ダメージは？」

『全体的に90%オーバー・・・普通の人間なら死んでいます』

「・・・負けだね」

そして審判が10カウント数える。審判は試合終了を宣言する。・・・その瞬間、シイが跳ね起きる。

「・・・あのな・・・」

「やっぱり亮を強いね！こんな戦いができて嬉しかったよ！」

シイが俺の手を掴んで握手をする。

「あ、ああ・・・」

俺とシイは舞台から降りる。

「シイ、ホントに大丈夫か？」

「うん。しばらく休めば治るよ。・・・仮面ライダーも馬鹿にできないね」

「意外に一番勝率が高いからな・・・」

そこで気が付く。シイとまるで友人のように話している事を。

「何か友達みたいだな・・・」

「みたいじゃなくて、友達だよ」

シイが笑顔を俺に向ける。

「・・・あ、忘れてた。私達の仲間がもう一人参加してるんだ」

「仲間？」

あのローブ集団か・・・

ズガアアンツ！！

「「ツ！？」」

ステージから派手な音が聞こえる。俺とシイは慌ててステージに戻る。・・・確か、次の試合は・・・！

舞台を見ると、誰か倒れていた。

「あ……思春！」

相手の少女は腕から血を流して膝を付いていた。

「ユエ！？」

シィは少女の方に向かう。

「思春!?!」

「く……不覚を取った……気をつけろ、亮。……アイツは強い」

思春はそう言って気絶する。俺は思春を抱き抱え、持ち上げる。

「シィ……ソイツが仲間……か?」

「……はい。私は……ユエと言います」

少女……ユエは痛みを歪めながらそう答えた。

「ユエ……大丈夫?」

「は、はい……強すぎて、加減ができませんでした……申し訳ありません。大澤さんの仲間を傷つけてしまいました……」

「……いや、試合の以上、仕方がない。……お前こそ、その傷……」

「大丈夫です……ファーストエイド」

ユエが術を唱えると、ユエの傷が塞がる。

「そちらの甘寧さんも……ファーストエイド」

思春の傷も治り、苦痛に歪んでいた顔が安らかになった。

「……ユエ、俺はお前と戦うのを楽しみにしているよ」

そう言っつて俺は先に医務室へ向かう。

「ふう……」

思春を医務室のベットの上に寝かせる。

「……ぐ!?!?」

身体に激痛が走り、倒れ込んでしまう。

「~~~~!ツツ……無理をしすぎた……」

シイの力は規格外だった。……勝てたのは正直奇跡。……その仲間のユエはそれ並みの力を持っていると判断できる。……勝ち進んでいけば必ずユエに当たる。……勝ち進めれば、だが。

「参った……どんだけ強い奴が参加してんだよ……!」

とりあえず俺は咲に回復魔法を掛けてもらいに歩き出した……

祭り、二日目　前編（後書き）

咲

「いや・・・参ったな・・・」

亮

「本気で死ぬかと思った・・・」

咲

「・・・てかシイの奴、剣を使ってなかったか？」

亮

「審査員はOK出してたから・・・それにアレ、斬れないようになってた」

咲

「いつ見たんだよ？」

亮

「デバイスが言ってた」

咲

「ああ・・・そう・・・」

亮

「・・・会話が続かないので今回はここまで！」

咲

「それでは次回の真似と開閉と世界旅行！」

亮

「次回もまたお楽しみに！」

祭り、二日目、後編（前書き）

お祭り後半戦。やっぱり平和はいいなー・・・ではござい。

祭り、二日目 後編

咲

「・・・あの、詠さん？」

「うるさい！黙ってなさい！」

「はい・・・」

俺は詠に包帯を巻かれていた。・・・別に恋の一撃が当たった訳ではないが、擦り傷はあったので、試合終了の時に詠に拉致られ、こうして近くの部屋で包帯を巻いてもらっていた。

「別に恋の打撃が当たった訳じゃないからさ・・・」

「黙ってなさいって言うてるでしょ！」

「だからいって！」

包帯を巻こうとする詠に抵抗する俺。・・・さっきから詠の顔が近く、恥ずかしくなってきたのだ。

「大人しくしなさい・・・きゃっ!?!」

「詠!?!」

詠がバランスを崩して倒れる。俺は詠が頭を打たないように手を伸ばして支える。

「あ……」

「え……」

すると詠の顔が俺の顔の間近にあった。

「……」

「……」

無言。お互いがフリーズしてるからどちらも動かない。

ガチャ

「咲？ここにい……る……」

亮が入ってきて、固まった。

「……悪い、邪魔した」

亮は再び扉を閉めた。……そして思考回路が復活した。

「「ま、まっつてええええ！？」」

亮

・・・その後、二人がかりで説明をされた。

「・・・でも、それなりにお互い好きなんだろ？咲も、賈馱も」

「ま、まあ・・・」

「・・・そうだけど」

「まあ、二人とも恋がいるからって思ってるんだろ？」

「・・・そういつお前はどつなんだよ？種馬」

久々に聞いたそのフレーズのお陰で、ネギまの世界で見せられた可能性を思い出し、冷や汗がだらだら流れ出した。

「ちょ、ちょっと、アンタ大丈夫？なんか凄い量の汗が出てるんだけど」

「あはは・・・」

「・・・そついや亮？俺に用があつたんじゃないのか？」

「あ、ああ。ちょっと・・・グツ・・・!？」

動き出そうとしたら激痛が走る。

「お、おい、亮!？」

俺は床に手をつく。

「・・・シイの奴、よつぽど本気でやつたんだな」

「まあシイさんですから」

「!？」

いきなりローブの二人組が入ってくる。

「・・・お前は」

「シイの仲間か・・・」

「は？シイ？」

咲が聞いてくる。・・・俺は咲に説明する。

「なるほど・・・」

「・・・んで、何のようだ？」

「いや、コレを渡しに来たんだ」

そう言って男の方が何か液体が入ったビンを差し出す。

「・・・飲めと？」

「ああ」

「まあお兄ちゃんの薬は確かだから、大丈夫だよ」

少女の方が言う。・・・俺は意を決し、一気に飲む。

「え・・・」

すると一瞬で身体が回復する。

「……おお」

「……さて、亮も回復した所で、聞かせてもらおうか」

「……ああ。もうシィの奴もユエも正体を明かしてるからな。問題はないだろ」

そうやって二人はローブを脱ぐ。……二人はシャツとズボンとネクタイ……つまり何処かの制服を着た男女だった。

「まあ自己紹介といくか。俺はクレス。クレス・エステイド」

「ルナはルナ・エステイド。……一応日本人だよ？」

するとルナの気配が変わる。

「……そして僕がセナ・エステイドですう」

「……二重人格、か？」

「まあ、そんなもんだと思ってくれ」

「……」

「亮？」

咲が聞いてくる。

「あ、いや・・・ルナとセナ・・・」

それはつまり世界は・・・

「一応、聞くけど・・・何処の世界なんだ？」

「・・・ああ、俺とルナは・・・正史の奴らで言うなら、“バカとテストと召喚獣”の世界だな」

・・・あれ、ルナとセナってブレイブルーじゃ・・・

「色々あるんだよ」

納得してしまう自分がいる。

「・・・じゃあシィとユエは？」

「シィはネギま。ユエはテイルズオブジァビスだよ」

「・・・なるほど。・・・ん？何でバラバラの世界の奴らがそこま
で・・・」

「ルナ達は同じ人の考えから生まれたんだよ」

「だから俺達はお互いに干渉できるんだ」

「・・・じゃあ次の質問。何で今正体を明かしたんだ？」

「・・・俺達はシィの能力でこの世界に来た。・・・だけど俺達は

完全なイレギュラー。世界に拒絶されると不味いんでな。シイの奴が世界の目を誤魔化すまで正体を明かせなかつたんだ。・・・そこについては謝る。悪かつたな」

「いや、事情が聞けたからそれはいいよ」

今度は咲が口を開く。

「・・・次、何で俺達の事を・・・」

「それは私達が亮達と友達だからだよ」

「そうです」

シイとユエも入ってくる。

「・・・悪い、詠。少しだけ・・・」

「分かったわ・・・ボクが関わってよさそうな話じゃ無さそうね」

「ゴメンな。後で説明するよ」

賈馱が部屋から出ていく。

「・・・どういう意味だ？」

「さつきクレスが言ってくれたと思うけど、私は世界を渡れる力がある。・・・それで色々あって、亮や咲・・・それに明命や恋と家族同然の友達になつたんだ」

真名を呼んだって事は本当に仲が良いんだな。

「・・・聞きたいことはありますかあ〜？」

セナがいきなり現れる。・・・混乱するな・・・

「・・・大体分かった。それで目的は？」

「えつと〜お祭りを楽しみたかったんです〜」

「「・・・は？」」

「俺達は純粹にこの世界に遊びに来たんだよ」

「亮とかと戦ってみたかったし」

「・・・え、マジでそんな理由？」

「だから言ったじゃないですか。私達は敵対するつもりはないと」

ユエが言った。

「ま、まあお前らが他の外史の住人だと言うことは分かった。・・・ホントに楽しみに来ただけ？」

「うん。・・・前、皆を助けに行こうとしたけど失敗しちゃったんだ。だから私はコツコツと鍛えて、今に至る・・・ってこと」

「・・・く、変に疑って損した・・・」

俺はうなだれる。

「・・・ねえ、咲。私と戦う？」

シイがニツコリ笑顔で言った。

「・・・お前、打撃に気功破にライダーステイキングを喰らってもう動けんの？」

俺は疑問を口にする。

「だって不老不死だもん」

「はあ!？」

咲が驚く。・・・再び説明タイム。

そして説明も終わり、大会もどんどん進んでゆく。そして、残ったのは・・・

一般参加者対五十嵐 咲

周泰 幼平対ユエ

大澤 亮対 関羽 雲長

魏延 文長対一般参加者

咲は当然勝ち、明命とユエの試合・・・明命が・・・

「く・・・」

「そこです！セントバブル！」

泡が弾け、明命を襲う。もう審判にはアレがなんなのかは解らないだろう。

「タアッ！」

明命は泡を避け、斬りかかる。するとユエは槍を上に薙ぎ払う。

「天雷槍！」

明命はそれを弾く・・・瞬間、

バシインツ！

「キャッ！？」

雷が明命を襲い、明命は動かなくなる。・・・そう、明命は・・・
負けたのだ。

舞台から落ち込んで歩いてくる明命を見つける。ユエはどう話しかけたら良いかと悩んでいたの、俺が手で合図すると、ペコリとお辞儀をして先に歩いていった。

「ま、頑張ったよ。明命は」

「ですが・・・」

「仕方ないだろ？・・・それに負けたからって死ぬ訳じゃない」

「・・・はい」

「ん。まあ次は俺だから、応援してくれよ」

「・・・はい！頑張ってください！」

「おう。んで、勝ったらお猫様祭りだな」

「お、お猫様祭り・・・」

明命の目が輝く。

「最高です！」

「・・・自分で言うっておいてなんだけど、片手をあげなら『おい、明命！いいーやっほーう！』ってやるのは嫌だな。」

「よし……行ってくる!」

「・・・関羽」

「どうも。貴方が呉の天の御遣いですね」

「ああ、亮って呼んでくれ」

「ならば私は愛紗、と」

「・・・いいのか？」

「ええ。ご主人様や咲殿の友人なら充分過ぎるほどの判断材料です」

「・・・そっか、なら」

俺は木刀を構える。

「・・・やるか」

先手必勝。俺は愛紗に接近し、直前で瞬動を使い、背後に回る。・・・
だが、

「そこだあ！」

「うひゃあ!?!」

槍が顔を掠める。

「く……何で……」

「何となくですが、空気の流れで場所は読めます」

嘘お……だったら揺さぶるだけ揺さぶって見るか。

「ハアツ！セイツ！ソラアツ！」

咸掛法でブーストを掛けて攻める。

「く……やはり、強い……！」

俺は槍が振りにくい場所を攻めるが、愛紗はそれを防いでいく。

「さすが一刀や桃香が頼っているだけあるな……！」

「いえ……呉の者に頼られている亮殿程では……！」

「俺はまだ未熟さ……だから強くなる！」

木刀を投げ、人解による肉弾戦に移る。

「ソラソラソラア！」

拳を振るう。

「く……速い……」

力や技術は剣術に劣るが、体術なら速度が勝る。そして俺は隙を見つけ、腹に手を当てる。

「気功……ってダメだ！」

つい本気の気功破をやるうとしてしまい、慌てたため、気が出ず、不発する。

「く……」

すると愛紗は静かに、言った。

「……私の負けです」

「え？」

俺は耳を疑った。

「……実際の戦なら私は今ので死んでいます。……それに、貴方は本気ではない」

「まあ、俺は命を賭けた戦いの方が力が出るけど……」

「その状態で互角とは……やはり、私の負けですね」

そう言って愛紗は舞台から降りる。

「……最後まで戦い合えばいいのに……」

俺もぼやきながら下に通路に戻っていった。

そして次の対戦が決まる。

五十嵐 咲対魏延 文長

大澤 亮対ユエ

よし・・・と気合いを入れた瞬間、司会者の人がやって来た。

「準決勝、及び決勝戦は明日に持ち越しです。・・・もう日が沈みますので」

「あらら・・・」

「亮」

会場から出るとシャオが抱きついてくる。

「カッコ良かったよ亮！こっ、手を出して気功破ーって」

「・・・大体アレが止めだからな」

「亮、貴方大丈夫なの？」

蓮華もやって来た。

「大丈夫・・・って何が？」

「・・・だって、かなりやられていたから・・・」

ああ、シイの時か・・・

「大丈夫だよ。ほら」

俺は身体を動かすと蓮華の緊張は緩む。

「もう・・・亮、貴方は無茶ばっかするんだから。気をつけて」

「へい・・・」

「じゃ、もつと遊ぼうよ！お祭りは夜も賑やかなんだから！」

「シャオ。あなた、昨日夜遅くまで遊んで、朝起きられなかったわよね？」

「う・・・大丈夫だもん！明日はちゃんと起きるもん！」

「はは・・・」

「笑わないでよ！・・・ほら、行こう！」

「ちよ、シャオ!？」

「お、おい!？」

シャオが俺と蓮華の手を引っ張る。・・・俺と蓮華は目を合わせて笑った。

咲

俺は詠を連れて会場を出た。

「ふう……」

「どうしたのよ？」

「いや、時間が過ぎるのは早いな……ってな」

「何か爺臭いわよ」

「……爺臭くて悪かったな」

俺と詠は夕暮れの中歩いていく。すると……

「あ、そこのお二人さん！ちょっと寄ってってくださいよー！」
服屋のお姉さんが声を掛けてくる。

「……あ、し、失礼しました！御遣い様！」

だがお姉さんは俺の顔を見ると謝り始めた。

「あー、気にしない気にしない。・・・それで?」

「あ、はい。北郷様が発案なさった服がございますが・・・」

俺は詠に言う。

「着てみるよ、詠」

「え!? ぼ、ボクが!？」

「他に誰がいるんだよ、ほら」

俺は詠の背中を押してやる。

「う・・・わ、笑わないでよ?」

「ああ」

「それではこちらへ・・・」

詠がお姉さんに連れられて店の中に消える。

「・・・咲」

「ん？・・・恋か」

恋が歩いてきて、俺の耳元で一言。

「・・・詠を泣かしたら、咲でも許さない」

この上ないほど背筋が凍った気がした。

「・・・詠は咲が好き」

「あ、ああ・・・」

「・・・恋は、気にしない」

「は、はあ・・・」

「・・・だから、詠を拒絶しない。・・・それだけ」

恋はそう言って歩き出す。

「・・・ねねを待たせてるから。また明日」

「は・・・はい・・・」

・
・
・恋にあんなプレッシャーボイスが存在するとは
・
・

しばらくして・・・

「お待たせいたしました！」

お姉さんが満足げな笑顔で出てきた。

「それではどうぞー！」

「・・・あ・・・」

詠が出てくる。・・・だが軍師服ではない。長い髪を一まとめに縛り、青色を基準とした“浴衣”を着ていた。

「・・・」

俺は呆然とする。

「・・・似合ってる？」

詠がそう言ったのに慌てて返事をする。

「い、いや、似合ってる！てか似合いますぎー！」

「そ、そう？・・・ならよかった」

「・・・あ、代金は・・・」

「結構ですよ。その代わり、今後ともごひいきに」

「……そ、そんな見つめないですよ……」

「あ、ああ……悪い……」

俺は頬を掻きながら、手を差し出す。

「……ほら、行くぞ」

「……うん」

詠も俺の手を取ってくれた。

「……ね、ねえ。今日の終わりに花火があるそうよ」

「花火い！？……何で花火まで……」

「あのバカが考えたらしいわ」

「……ああ、一刀か……っつてか、アイツはどんだけ詳しいんだか……」

ちなみに俺の頭の中だと……

バカ 一刀

アイツ 亮

で、詠が誰を示しているかを判断している。

「……ボク、花火を見てみたい」

「……あれ？よくよく考えたら前の祭りも……」

「違うわよ」

詠は俺の腕に抱きつく。

「……ボクは、咲と一緒に花火を見たいのよ」

「~~~~~!?!?」

多分明るかったら詠に真っ赤になった俺の顔を見られていただろう。

「……ッ行くぞ!」

俺は詠に合わせて歩き出す。

ドォーン……！

「始まったな……」

「ええ……」

詠と近くの岩に腰かける。

「……綺麗ね」

「ああ……」

俺と詠は花火を見続ける。

「……ねえ」

「……ん？」

「本当に……もういなくならないのよね？」

不安なんだろう、詠は。

「……ああ、俺はこの世界に居続ける。恋やねね、霞や華雄に月・
・それに詠と生きるために」

「……」

「それにもし、また消えたとしても……どんなリスクも引き受け
て俺の力でこの世界に帰ってくる。……絶対に、だ」

「……約束よ」

「ああ。……指切りでもするか？」

俺がそう言って詠の方を向いた瞬間、唇に柔らかい何かに触れた。

「……」

「……」

それが詠の唇だと気づくには時間がかかった。

「……………ぶは」

詠が離れる。

「……………これが約束よ」

「え、い……………」

すると詠は立ち上がる。

「ま、また明日ね！じゃ、じゃあね！」

詠は走っていく。後に残されたのは呆然とする俺だけだった……………

祭り、二日目、後編（後書き）

咲

「づぐうえおおあいいええああ!！」

亮

「……………どうしたいきなり」

咲

「すまん……………今色々と思考回路がショートしてる……………」

亮

「……………どうしたんだ……………アイツは」

明命

「あの、亮」

亮

「ん？」

明命

「あ、あの……………お猫様祭りは……………」

亮

「……………県に帰ってからね」

明命

「はい！楽しみにしています！」

亮

「それでは次回の真似と開閉と世界旅行！」

明命

「次回もまたお楽しみに！」

咲

「うぐ……うおお……」

亮

「……いつまで悶えてんだか」

祭り、三日目〜(前書き)

段々自分が書いてて訳ワカメな感じに・・・ではどうぞ。

祭り、三日目

「……」

気配を感じ、目を開ける。

「……ん？」

「……」

思春だ。思春が目の前に立っていた。

「……どうした、思春？」

「……」

何故か思春は無言で睨んでくる。

「えと……？」

「……暇か？」

「はい……？」

聞き返すが思春は答えない。……だが、俺にしては珍しく思春の言葉の意味が分かった。

「・・・ああ、大会までは暇だ。だから、一緒に祭りを見て廻るか？」

「・・・ああ」

思春はそう言うなり部屋から出ていく。

「・・・さて、準備をするか」

思春を待たせたら怖いからね。

「・・・お待たせ」

俺は部屋の前に立っていた思春に声を掛ける。

「・・・来たか、行くぞ」

思春はスタスタと先に歩いていく。

「・・・まったく」

俺は苦笑しながら思春を追った・・・

「思春！待ってっ！思春さーん！？」

俺は先を歩いていく思春を呼び止める。

「・・・」

だが思春は止まらず歩き続ける。

「思春・・・ったく、待ってっ言ってんだろ！」

俺は思春の腕を掴む。

「・・・」

「どうしたんだよ？」

「・・・ないんだ」

「え？」

思春は顔を伏せて一言。

「・・・男と二人でこうして出掛けたことがないんだ」

「・・・」

衝撃のカミングアウト。・・・よく考えたら、俺と思春って、二人で出かけることはない。いつも誰かが側にいた。

「・・・」

俺はそれを聞いて思春の手を引く張る。

「お、おい」

「なら経験しようぜ！二人でさ」

「・・・下らないことだったら容赦しないぞ」

「ああ！望むところだ！」

人をかき分け走り出す。そして・・・

「・・・頭に随分と馴れ馴れしいな？」

・・・海賊の方に捕まりました。

「てめえ！頭とはどういう関係だ！」

服を引つ張られ、首が絞まる。

「思春、とは・・・同じ部隊で・・・く、苦し・・・」

怪我をさせるわけにもいかず、俺はあまり抵抗しないでいた。・・・忘れてたよ。鈴の甘寧っていったら海賊の間では知られまくっている・・・思春はもとは海賊なんだ。

「・・・やめろ、お前ら。コイツが本気を出せば貴様らは敵わない」

その言葉に海賊の皆さんに青筋が浮かんだ。

「ほう・・・随分頭に認められてるみたいだなあ？」

あー、町で不良に絡まれる人の気持ち分かる。

「試してやるうじやねえか・・・おい！」

海賊の皆さんが集まる。数は十。

「し、思春・・・」

「構わん、やれ」

俺は仕方なく拳を構える。

「往生せいやあああ！」

そうやってきて突っ込んできた海賊を・・・

ズガン！

「ぐへ・・・」

一撃で倒した。

「・・・これで解ったよね？」

「「「な、ナメるなああああ！」」」

ズガガガガンツ！

「すまなかったな、私の部下が」

「いや……気にしてないけど……いいのか？」

倒した海賊達は放置してきた。

「構わん。……アイツらには良い薬だろう」

「あはは……」

再び町の喧騒の中を歩く。

「どこか行きたいところあるか？」

「……ないな」

「そうか」

「……」

「……」

会話が続かない……！その時、

「あ、亮」

「シイ……」

シイが歩いてくる。

「……って、私は邪魔かな？」

シイは思春を見るとそう言う。

「……私なら構わない」

思春は言うが……明らかに不満の色が見える。

「……ふふーん……亮、こっち来て」

「ちょ、シイ!？」

シイに引つ張られ、裏路地に連れてかれる。

「……何でこんな所に……」

「……亮、甘寧みたいなタイプは亮がリードしてあげないとダメだよ?」

「は?」

「ちょっと強引なぐらいがいいんだって。ほら」

シイは俺の背中を押す。

「さ、行って来なって」

「あの、な……?」

シイはどこにもいなかった。

「・・・思春、悪い、待たせた」
「別に気にしてはいない」

思春の返事が早い・・・気にしてるな、コレは。

「・・・よし、お詫びに・・・あ、亞莎！」

亞莎が歩いてくる。

「あれ？亮さんに思春さん？」

俺は閃いた。

「お詫びに思春には可愛くなってもらおう！亞莎！あの服を思春に
「！」

「な、何を言っている！」

思春が拒否する。亞莎はあの服が何かを思い出し、頷く。

「はい！思春さん、こちらへ！」

「ば、馬鹿な事を言っな！」

思春はそう言って逃げ出す。

「逃がすか！明命！」

「御意！」

明命が思春の目の前に現れ、思春を捕まえる。

「な、離せ、明命！」

抵抗しようとする思春、だが、亞莎も明命と共に思春を拘束する。

「あ、亞莎！？」

「思春さんも・・・可愛くなりましたよ？ふふふ・・・」

いつの間にか亞莎の周りに黒い何かが浮かんでいた。・・・亞莎の
闇って段々ギャグになってんだよね。咲のはシリアスだけど。

「それでは失礼します」

「待っていてくださいね、亮さん？」

「あ、ああ」

「く、亮・・・覚えている・・・！」

何故だか今の思春は怖くなかった。

思春が城に拉致られてからしばらく。俺は城に向かう。

「・・・あ」

向こうからねねに引っ張られている咲が来る。

「よ、咲」

「ああ・・・亮か・・・」

もの凄い元気が無かった。

「ど、どうしたんだ？」

「ちよつと眠れなくな・・・」

「まったく、眠れないなんて子供みたいなのです!」

ねねが咲に言う。

「まあ、俺はねねと回るから・・・また後でな」

「ああ・・・」

そう言って咲は歩いていく。・・・大丈夫か、アイツ。

そして城にたどり着き、呉に与えられた部屋に向かう。

コンコン

「亞莎ー？どうだ？」

『はい！出来ました！』

『ま、待て！亮・・・入るな！』

思春の声が聞こえたが、俺は迷わず入る。

「あ……」

思春は……亞莎が着ていたメイド服を着ていた。

「~~~~~!」

思春が涙目になりながら顔が真っ赤になる。

「どうですか？亮」

「ああ……似合ってる」

俺も明命も亞莎も思春を見つめる。

「……蓮華や穩にも見せるか」

そう言った瞬間、思春が一瞬で俺の首を掴む。

「ぐえ」

「……蓮華様には絶対に言っな……!」

いつの間にか思春の目が真紅に染まっていた。

「わ、わかったから、力を抑えてくれ・・・」

ガチャ

「思春？いるかしら？・・・え？」

「あ・・・」

タイミング悪く蓮華が入ってくる。・・・祭りが始まってからこのパターンよく入るな・・・

「・・・ぷ、ははは！どうしちゃったのよ、思春！」
蓮華が笑う。

「~~~~~!？」

「ぐえ!?!し、思・・・息が・・・で・・・」

思春の手に力が籠る。

「はうあ!?!亮が白目を向いて・・・!?!？」

「し、思春さん！亮さんが死んでしまいます！」

「ちょ、ちょっと思春!？」

「・・・本気で死ぬかと思った・・・」

三人に助けられ、椅子に座り込む。

「・・・お前が悪い」

「思春」

「う・・・ですが・・・」

「・・・まあ、俺も悪いと思ってたよ・・・だけどさ、思春には一人の女の子としても、いてほしいんだよ」

「・・・私は」

「蓮華の為とかじゃなくてさ、たまには自分がやりたいようにやってみるんだよ」

「……お前には……」

思春が何かを呟く。

「え……?」

「お前には関係ない!……私は、私は……!」

思春は自分の服を掴んで部屋から走り出す。

「あ……おい、思春!?!」

追いかけてよとすが、蓮華が止める。

「亮、貴方試合が……」

「くそっ……もうそんな時間かよ……」

「思春は私達に任せてちょうだい」

蓮華が言う。

「……わかった」

「……亮は間違っていないわ。むしろ私が言いたいことを言ってくれたわ」

「……」

「……思春は過保護すぎるのよ……思春や皆の幸せが私の幸せでもあるのに……」

「……三人とも、頼んだ。……でも」

「ええ、試合が終わったら思春とちゃんと話をしなさい」

「ああ……じゃ、行ってくる」

咲

会場に着いた。ねねと遊んだお陰で目は覚めた。……そして、観客の大半が浴衣を着ていた。……俺は昨日、ボーっとしながら帰った時に、一刀に言ったら、『出来上がったんだな！いやー、祭りに間に合ってよかった。これで皆にも教えられるな』……と言っていた。……浴衣は人気なんだろう。だって……

「……頑張るのです!」

ねねも浴衣を着ているのだから。髪は降ろし、黄色い浴衣を着ていた。

「……行ってくるな、ねね」

「負けたら承知しないのですぞ！」

俺は片手を挙げて返事をした。

……通路を歩くと、亮が沈んだ様子で歩いていた。……俺は迷わず亮を殴る。

バキィ

「……って何でいきなり殴るんだよ!？」

亮がわめく。

「試合前にそんな落ち込んでんじゃねーっの」

「・・・わかってるけど」

亮をもっかい殴る。

バキィ

「テメエやる気か!？」

亮が胸ぐらを掴んでくる。

「まあまあ・・・まったく、バカなんだから変に考えなくたっていいんだよ」

「・・・」

「じゃ、俺は試合があるから」

俺は歩き出す。・・・後ろから」「・・・ありがとうって聞こえたのは、気のせいだということにしておく。

俺と向かい合う焔耶。・・・だが、その顔はどことなく暗い。

「……どいつもこいつも……焰耶あ！」

「ッ！」

「……あの事をいつまで引きずってんだよ。……悪いけど……
ハアアアッ！」

俺は闇を引き出す。

「ば、馬鹿、やめろ！」

焰耶が止めるが俺は無視する。

「ハアッ！」

闇の力……Bモードを使う。

ざわざわ……

俺は観客に向き直る。

『おやおや……自ら孤独を選びますか』

「黙ってる……観客の皆、聞いてくれ！」

俺は大声を出す。

「この通り、天の御遣いの一人、五十嵐咲は人ならざる姿になってしまった！……だが、心は人だ！この三国を救おうとした心は失われていない！……だが、もし……民の皆が俺を否定するならば、俺はこの国から去る！」

『く……あつはつは！貴方はバカですね！昨日、賈馱と約束をしていたのではないですか？』

……コイツにも見られていたか……そして、観客の一人が立ち上がる。

「何言ってるんですか御遣い様ーッ！」

「こうして平和になったのは御遣い様達のお陰だーッ！」

「御遣い様を否定する奴は俺達がぶっ飛ばしてやるよー！」

「だから御遣い様、いなくならないでーッ！」

気がつけば観客全員が立ち上がって叫んでいた。

『ば、馬鹿な……』

「……やっぱり、皆そう思ってくれてたな」

『ま、まさか・・・』

そう、俺には確信があった。・・・一生懸命やったら、結果は裏切らない。

「于吉、俺はお前には負けない。・・・この身体は俺のモノ、お前の間も俺のモノだがな」

『く・・・』

「今は消えろ、于吉」

『諦めませんよ・・・必ず、この外史を・・・!』

于吉の声が聞こえなくなる。

「・・・さあ、焰耶・・・待ち望んだ全力の勝負だ」

「お前・・・」

「確信は一つだけじゃない。・・・桃香達も受け入れてくれた・・・だから、民も信じる気になったんだよ」

「桃香様・・・?」

「・・・桃香や一刀がまとめていたなら、それなりに民も受け入れてくれるかなって」

「・・・だがもし、否定されたら・・・」

「その時は顔を変えるなり姿を変えるだのして約束を守るぞ」

「約束だと？」

「ああ・・・その約束は絶対に守るんだ・・・」

俺はちゃんと刃を潰した鎌を構える。

「・・・勝負！」

鈍砕骨を構える焰耶。・・・俺達は激突した・・・

亮

派手な音が響き、魏延がぶっ飛んだ。・・・そして、試合が終わり、咲が魏延に肩を貸しながら歩いてくる。

「・・・これで、満足だ」

「全力で戦えてか？」

「・・・ああ。・・・後で翠とも戦ったな」

「もちろん・・・あ、亮」

俺は咲に近づき、すれ違いざまに言う。

「・・・お前の覚悟は見せてもらったよ」

・・・咲が笑った気がした。

俺の目の前にはユエが立っていた。

「・・・シィ並みに強いんだろ？」

「・・・自信はありませんが、負ける気はありません」

ユエは槍を構える。

「……俺はアイツと……咲と戦いたいんでね……勝たせてもらうぞ！」

木刀を構える。

「……こちらも全力です」

ユエの影が伸びる。……そしてその影が自ら意思を持っているかのように動き出す。

「マジかよ!?!」

審判はもはや何が反則か理解できないだろう。

「く……うおおー！」

影を避け、近づく。

「甘いです!」

完全に裏をかかれ、槍が襲ってくる。

ガイインッ!

咄嗟に強化した腕で防ぐ。……だがその一瞬が命取りだった。

シュルル

「う、足が・・・」

影が足にまとわりつき、身体に侵食してくる。

「チツ・・・やっぱりライダーに頼るか・・・モーションキャプチャー、キバ！」

ケータイが消え、キバットが飛んでくる。

『キバツて・・・行くぜえ〜！！』

それを掴み、右手を咬ませる。

『ガブツ！』

「変身！」

仮面ライダーキバに変身し、まだ動く手でフェッスルをキバットに咬ませる。

『ウエイク、アールップ！！』

辺りが暗くなり、一瞬、影が消える。足の封印が解かれ、俺は飛ぶ。

「ダークネスムーンブレイク！テヤアアア！」

だがユエは怯まない。

「・・・ネガティブゲイト！」

突如空間が歪み、俺は叩き落とされる。

「ぐは・・・!?!?く・・・」

すぐに立ち上がる。そしてフェッスルを使う。

『ドツガハンマー!』

フォームを変え、ドツガハンマーを引きずって走り出す。

「ウオオオオツ！」

ハンマーを下から振り上げる。ユエはそれを受け止めようとするが・

バキインツ!

槍が碎け散る。

「く・・・まだです！」

影が槍を形作る。

「・・・ツ!?!?」

「そこです!?!」

ズガンッ！

「ぐはっ！？」

「まだまだ！」

ガアンッ！

「うわあ！？」

「ハアアアッ！瞬迅槍！」

ズガアンッ！

「ごは！？」

ユエの連続攻撃に吹き飛ばされる。

「く……強い……！？」

「アイシクル」

シャキイインッ！

氷が地面から飛び出し、それに直撃してしまふ。

「あが……ぐ……」

俺は咄嗟にフエッスルを取り出す。

『ガルルセイバー！バツシャーマグナム！ドツガハンマー！』

俺は仮面ライダーキバ、ドガバキフォームになる。

「これで・・・！」

バツシャーマグナムで牽制しながらガルルセイバーで斬り込む。

「ハアアアア！」

キュピインツ！

「く、ヤア！」

カキインツ！

ダダダンツ！

キキキキンツ！

ガキヤアンツ！

ガインツ！

「く・・・」

「隙あります！アブソリユート！」

パキインツ！

「が……！」

俺の辺りが凍らされ、俺は身動きができなくなる。

「……（負ける！？）」

負けたくない……そう思った瞬間、何かが飛んできた。

『ビュビュビュビューン！テンションフォルテツシモ〜！！』

タツロットが飛んできて、俺を凍らしている氷を砕いた。

「た、助かった……」

そのままタツロットは俺の……キバの封印を解いた。

『変身！』

「う、おおお！？」

俺はエンペラーフォームに変化する。

「……ファンガイアの王なのに、皇帝とはこれいかに……？」

ツッコミは後にして俺は走り出す。

「タアッ！」

「喰らうかよ！」

蹴りで槍を破壊する。

「ッ!？」

ユエが驚く。・・・俺はそのまま踏み込む。

「ウラララララ!！」

ガガガガガンッ!

連続で蹴り込む。

「あぐ、が、ぐ、ぎ、うあ!？」

ユエを蹴り飛ばし、タツロットを操作する。

『ウェイクアップフィーバー!』

「ぎ、う・・・まだ、です」

ユエは再び槍を作り出し、構える。

「秘奥義！ニール・ヴァレステイ！」

ユエは槍を投げ、俺に槍が触れた瞬間、

ズガアアアアッ！！

「これ……なら……」

ユエはそう言った瞬間、俺は既に蹴りの体制に入っていた。

「な！？」

「エンペラームーンブレイク！！」

両足での蹴りが炸裂する。

ズガガガンッ！！！！

「ウアアアアッ!？」

ユエが吹っ飛び、倒れる。

「く……何故秘奥義が……」

「エンペラーフォームは設定上、核爆にも耐えられるんだよ」

「……やっぱり、ライダーは無茶苦茶……で、す……」

「……ユエ!?!……やば、やり過ぎたか!?!」

俺は変身を解除してすぐにケータイを取り出す。

「モーションキャプチャー、シャマル!!」

すぐにデバイスを起動させる。

「頼む、クラールヴィント」

ユエの傷が回復していく。

「……まあ、起きないよな……」

仕方ないので、ユエを抱き抱えて舞台から降りる。

「・・・ユエ！」

シイ達が走ってくる。

「やりすぎだよ！」

ルナが頭を叩いてくる。

「ユエは私みたいに不老不死じゃないんだからね！」
シイにも怒られ、

「まったく、ここまでやるか？普通」

クレスに呆れられ、

「つまり〜男として最低なんですわねえ」

「はぐうあ!？」

セナに止めを刺された。

「・・・申し訳ありません」

俺は謝るしかなかった。

「……次は咲と亮の試合だよね。頑張つてね」

「僕達は観客席にいますからあゝ」

「楽しませてもらうよ」

そう言つて三人はユエを連れていった。

そして決勝戦が始まる。

「ウラアアアッ！」

「ハアアアア！！」

咲はBモードを発動させている。俺は人解で攻める。

「吹っ切れたみたいだな、亮！」

「誰かさんのおかげで、な！」

決勝戦だけあって観客の歓声が凄い。俺と咲、どちらが勝ってもおかしくない。

「悪いね・・・負けたらねねに怒られるんでな！」

ガキヤアンツ！

「こつちも、思春に合わせる顔がなくなるんだよ！！！」

ビュオンツ！

「じゃあ、どつちも負けらんねえな！」

ガゴオオンツ！

「引き分けにするか！？」

ガキイインツ！

「・・・冗談！」

そして、その時はやって来る。

「さあ、喰らえ！闇の吹雪！！！」
ニライス・テンベスターズ・オブスクランス

「虎よ吼えろ！猛虎獣衝撃！」

ズガアアアンツ！！

視界が光で塞がれた・・・

「・・・んで、引き分けか・・・」

俺達は見事に相討ちになった。

「・・・あれ？詠？」

「・・・」

賈馱は無言で咲に近寄り、

パンツ！

ピンタをした。

「・・・ええ〜・・・」

「いてて・・・いきなり何を・・・」

「それはこっちの台詞よ！ボクと約束していきなりいなくなるつもりだったの！？ボクとの約束を破る気だったの！？ねえ、答えなさ

いよ!」

咲に向かって叫び続ける賈馱。

「いや、あのな？本当に消える気はなかったというか・・・もやもやしてた葛藤にケリをつけたというか・・・」

「うっさい！言い訳なんて聞きたくないわよ！」

「・・・咲、ちゃんと慰めておけよ」

「あ、ちよ、亮!？ま、待って・・・」

「俺も話さなきゃいけない奴がいるんだよ。・・・じゃあな」

俺はその場を離れ、ある所に向かう。

「てめえ・・・頭に何やってくれたんだ？ああん？」

再び海賊の皆さんに捕まりました。

「いや、ですからね・・・」

「てめえのせいでこっちは祭りを楽しめねえだろうが？呉の海に運んで沈めるぞ？」

やばい。ちょうど思春の居場所を聞こうとしてる時にこの人達に会うなんて……

「モーションキャプチャー、エリオ・モンディアル」

リリなのエリオの真似をする。すると体格が縮んだお陰で海賊の拘束から解かれる。

「ソニックムーブ！」

俺はその場を素早く離れた。

そして全力で逃げた先に、捜していた人物がいた。

「思春……」

「……！」

思春は逃げ出そうとするが。

「待てよ！」

その前に腕を掴む。

「……」

思春は諦めたのか口を開いた。

「……すまなかった」

「え？」

思春の口から出た言葉は謝罪だった。

「な、なんで思春が謝るんだよ」

「私は・・・わからなくなったんだ」

「・・・」

「最初、お前に会ったときは何処にでもいるような男だった」

それに関しては否定ができない。

「だが、お前は努力し続け、孫策様や周瑜様を救った。そして呉の・・・平和の為に戦い続けた」

「ああ、それが俺の役目だったからな」

「・・・だが、お前が消えたとき、何故か何時もの生活に穴が空いてしまった気がした。・・・誰も来ないのに朝早く庭に立っていたり、残党を討伐する時も、誰もいない場所に命令を下す。・・・そしてお前の敵になった時・・・辛かった」

「思春・・・」

「そして、亮が壊れた時・・・何とも言えない虚しさに襲われた」

「・・・」

「だが、お前が帰ってきた時は・・・嬉しかった。心の底からだ。・

「・・・それが不安だった」

「え・・・」

「こんなに苦しみ、悩んでいては蓮華様を守れないかもしれない・・・だから、私は感情を殺そうとした。・・・だが、だが！」

思春の目から涙が溢れる。

「答える！何故・・・何故、お前といるとこんなに苦しい・・・どうやってたらこの苦しみから解放される！・・・私は・・・ッ!？」

俺は思春を抱き締めていた。

「お前、バカだよ！何で自分の気持ちを殺そうとするんだよ！そんな必要はないだろ!？思春は思春だ！お前が考えた事を、心のままに、身を任せればいいだろう!！」

「・・・りよ、う・・・」

「蓮華だって、そんな自分を殺してまで守ってもらいたくないと思う。・・・それじゃむしろ蓮華が辛くなる・・・」

「・・・ふふ」

「思春？」

「蓮華様にも似たような事を言われた。・・・不思議だ・・・」

思春が俺の胸元に顔を埋める。

「……」うつしていると、苦しくなくなる……」

「じゃあ、苦しくなったら何時でもうつしてやる。……だから、少しは俺に、頼っ……て……?」

いきなり睡魔に襲われる。

「(こんな……時に……)」

俺の意識は途絶えていく。

「……とじ」

「(……?)」

何かが唇に触れ、何かが聞こえたが……今の俺に、それが何かを突き止める意識は残っていなかった……

咲

「・・・参ったなあ」

今は深夜。あの後詠の部屋で、謝りまくった。・・・詠はまだ怒っていたが、許してくれた。・・・その後、気がついたら俺と詠は寝てしまった。そして俺は目が覚めて、謎の奇声を発し、詠を起こさないように部屋を出て、今に至る。

「明日で祭りも終わりか・・・」

俺は自分の部屋に向かって歩く。・・・その時、おかしいものを見た。

「・・・？」

蜀の兵士だ。・・・だが、なぜこの時間帯にここにいる？ここは將軍や軍師の宿舎の筈だ。兵士は入口にしかない筈だ。

「・・・怪しいな、おい」

俺は兵士の後をつける。・・・そして兵士は・・・鈴々の部屋に入っていた。

「ッ！」

俺は走り、鈴々の部屋に駆け込む。

「待ちやがれ！」

驚いて兵士がこちらを向く。・・・その手には短刀が握られていた。

「・・・テメエ、何をするつもりだった！？」

兵士は窓から逃げる。

「な、待て！」

だが一瞬で見失ってしまった。

「くそ・・・」

「むにゃ・・・もつと食べるのだ〜・・・」

鈴々の寝言が聞こえる。・・・あの兵士は鈴々を殺そうとした。何のために？・・・

「于吉、何か知ってるんじゃないのか」

俺は制御を緩めるが、疼きも、声もしない。

「・・・こんなときだけシカト決め込みやがって・・・!!・・・くそ、二日連続で寝不足確定だな・・・」

結局俺は眠らず、日が昇るまで見回りをすることにした・・・

祭り、三日目（後書き）

咲

「・・・今日は予測変換ミスを紹介するか」

亮

「またいきなり・・・ま、いいか」

・咲はDモードを発動させた　咲はデートを発動させた

亮

「何を発動しようとしてんだよ!？」

・モーションキャプチャー！　モーションキャプテン！

亮

「何の動きだよ・・・」

・方天画戟　包天が劇

亮
「いや、何事!？」

咲
「天を包む劇じゃねえの？」

・変身！ 返信！

亮
「……ノーコメント」

咲
「……まあこんな感じだな」

亮
「単なる変換ミスを紹介して文字数稼ぎをただけじゃねえか」

咲
「いいんだよ、それで。……次回の真似と開閉と世界旅行！」

亮
「いいのかな……それでは次回もまたお楽しみに！」

祭り、最終日（前書き）

お祭り編の終わり・・・次回から動き出す（かも）・・・それでは
どうぞ。

祭り、最終日

祭りの最終日、俺と一刀は咲に呼ばれ、中庭の隅の椅子に向かい合
って座っていた。

「・・・咲、いきなりどうしたんだ？」

一刀が尋ねる。

「・・・」

咲は辺りを見渡し、誰もいないのを確認してから話を始める。

「昨日・・・鈴々が暗殺されかけた」

「え・・・」

「何だつて!？」

一刀が勢いよく立ち上がる。

「落ち着け、一刀」

咲に言われ、一刀は座り直す。

「昨日の夜、部屋に戻る途中、兵士を見かけたんだ。・・・蜀の兵
士だ。・・・そいつは一人で、鈴々の部屋に入っていった。俺は急
いで追いかけて、兵士を止めた・・・その兵士の手には、短刀が握
られていた」

「「・・・」」

俺と一刀は固まっていた。

「・・・鈴々はこのことを知っているのか？」

「いや、知らない筈だ・・・結局朝まで見回ったが、成果は無しだ。
・・・二人とも、何か考え付いたな？」

俺と一刀は一つ、歴史に存在する出来事を思い出した。

・・・張飛の暗殺。

張飛の態度に腹をたてた兵士が裏切り、張飛を殺した・・・

「・・・だけど、鈴々はそんな酷いことはしていない！むしろ兵士達は鈴々を慕っている！」

「一刀！・・・月がこっちを見てる。楽しいフリをしてくれ」

一刀は落ち着き、話始める。

「どづいことなんだ・・・？何で、今更・・・」

「・・・仮説は立ててある」

「聞かせてもらうぜ、咲」

「ああ。・・・この世界は一度消えている。・・・それは覚えてるな？」

俺と一刀は頷く。

「つまり、俺達の想像が失敗を呼んだのかもかもしれない」

「え・・・？」

「・・・亮、お前・・・世界を作り直した時、何かを感じたか？」

「・・・いや、あの時は壊れてたし・・・あ」

俺は感覚を思い出した。

「・・・ただ、何かの輝きに包まれて、こう、身体から何かが出るような感じはしたような・・・」

「・・・そう、俺と亮は普通の三国志の事まで考えてしまったのかもしれない」

「それじゃあ・・・！」

「ああ、もしかしたら歴史が動くかもしれない」

「・・・」

「……いいぜ」

俺は口に出していた。

「その歴史を片っ端からぶっ壊してやる。……明命は、皆はやらせない……！」

「俺もだ。桃香や愛紗達を守る！」

「……愚問だったか。……まあ、あくまでも仮説だからな。……当たらないことを祈るよ」

俺は咲達と別れ、一旦自分の部屋に戻った。

ガチャ

「……すうすう……」

ボタン

あつれえ〜？こころって俺の部屋だよな・・・

ガチャ

「・・・うん・・・」

ボタン

「・・・!？」

いた、明らかにいた。何故、俺の布団に・・・亞莎が寝てる。

ガチャ

「・・・亞莎く・・・風邪を引くぞ〜」

優しく起こしてやる。

「え・・・あ!？」

亞莎は一瞬で目が覚めて起き上がる。

「申し訳ありますッ！」

ガツン！

「~~~~ッ！」

ベッドに足の指をぶつけ、亞莎は涙目になる。

「……えと、まあ色々と言いたいことがあるけど……大丈夫か？」

「はい……！」

そしてしばらくして……

「……あの、亮さん！一緒にお祭りに行きましょう！」

「……いいけど、昼間までな。……悪いけど、昼間から明命と約束してるんだ」

「構いません！……ほっ」

「……じゃあ今更だけど、何で俺の布団で寝てたんだ？」

聞いた瞬間、亞莎が顔を赤くして爆発した。

「そ、それは……その、亮さんを待とうとしたら……うとうととしてしまって……」

「・・・寝ちゃったか」

「はい」

亞莎は袖で顔を隠す。

「・・・じゃ、行くか。時間もないし」

「・・・は、はひー！」

街に出る。・・・今日も晴れている。・・・だからかもしれない、俺は言わなくてもいいことを言ってしまった。

「歴史が動く・・・か」

「・・・今、何て言いましたか？」

あっ、と思った時は遅かった。亞莎はそれで何かを判断したようだった。

「この……“三国志”の世界に何かが起こるんですか？」

「……!？」

亞莎の発言に驚く。

「……パチユリーさんから本を読ませて頂きました。……亮さん、何が起こるんですか」

「……」

俺は亞莎に朝話したことをもう一度話した。

「……なるほど。大体解りました」

「……この事は」

「はい、誰にも言いません」

その話は止めて、亞莎と歩く。……すると、あるものを見つけた。

「……衣装大会？」

ファッションショーみたいなものか……

「亞莎、出るか？」

「ええ!？」

「よし、行くござー！」

「そ、そんな・・・止めてくださいー！」

「・・・御遣い命令だ」

「あうく・・・」

亞莎を拉致って衣装が置かれている場所に入る。

「・・・や、やっぱりやめましょうよ、亮さん」

「やだ」

「じう〜」

亞莎は諦めたようで、服を見ていた。

「・・・やあ」

「亮も来てたんだな」

「ん・・・？咲に一刀」

二人がやって来た。

「お前ら、何やってんの？」

「……ここに来たらやることは一つだろ？」

「……だったら相方は？」

その時、向こうから誰かがやって来た。

「あ、あの、ご主人様……どう、でしょうか」

「……コレを着るの地味に大変なんだけど」

愛紗と賈馱だ。愛紗は水色を更に薄くした色のドレスを、賈馱は青色を基準とした浴衣を着ていた。

「……亮は？」

「……ふ、決めたぜ……」

だったらこっちはシンプルにしてやる。

「亞莎！これとこれだ！」

「え？あ、ひゃ、ひゃい！」

そして・・・

「お、お待たせしました・・・」

亞莎が更衣室から出てくる。

「おお・・・」

一刀が声を出す。亞莎の服装は、髪を降ろし、真っ白なワンピースに、麦わら帽子。

「・・・夏をイメージしてみました」

「・・・てか一刀。お前、どんだけ作れてんだよ」

「いや、服は絵だけを職人さんに見せたら後はなにもしないで出来上がるんだよ」

「マジでか・・・」

「あ、あの・・・亮さん・・・どうでしょうっか」

亞莎がおずおずと聞いてくる。

「似合ってるよ。・・・やっぱ斬新だな。・・・明命や恋の私服姿の時もこんな感じだったな」

「はぁ・・・」

そしてファッションショーは始まり、亞莎ら三人は色んな意味で盛り上がった・・・

(・・・亮、聞こえますか?)

明命からの念話だ。

「(・・・どうした?)」

(・・・すみません。少し用事ができてしまって・・・約束の時間に間に合いそうにないです)

「(・・・仕方ないよ。俺なら大丈夫。・・・気を付けてな)」

(はい、それでは)

「・・・」

最後の気をつけては、俺は・・・どんな意味で言ったんだろうな・・・

昼間になったら亞莎と別れた(亞莎も用事があったらしい)俺は時間までぶらぶらすることに決めた。

「キヤーーーー!?」

「!?!」

悲鳴が聞こえる。俺は人溜まりができている場所に駆け寄る。

「……どうしたんですか？」

俺は近くにいる人に聞く。

「ん……おお、御遣い様！黄巾党です！残党が出たんですよ！」

「……何だつて!?!」

「そして今、華蝶仮面が戦ってくれてるんだ！」

「……何だつて?」

あら不思議、一瞬で緊張感が銀河系の遥か彼方まで飛んでった。俺は何とか様子を見る……すると、

「く、何者だ!?!」

「通りすがりの華蝶仮面だ！覚えておけ！」

「……」

おかしいな。俺の友人がいたような……

「トリヤア！ソラアツ！」

「……」

咲だ。間違いなく咲だ。……そう言えばアイツは華蝶仮面の一員
だったんだった。

「……助太刀してやるか……モーションキャプチャー、アギト」

ケータイが消え、ベルトが現れる。

「・・・よ、苦戦してるかい？」

「げ、亮・・・」

「おや、御遣い殿ではござらんか」

「・・・見せてやるよ。本当の変身を！」

俺はポーズを取り、ベルトの両端のスイッチを押す。

「ハアアア・・・変身！」

俺は仮面ライダーアギトに変身する。

「ほう・・・」

趙雲の目が輝く。

「咲華蝶、アレを持っていますかな？出来れば三人分」

「え・・・あることにはあるけど」

「・・・是非」

咲は嫌々ベルトを趙雲と・・・

「朱華蝶！」

「え！？私もですか！？」

そうして三人が並ぶ。

「どうでもいいけど早くしてくれ！」

俺は叫ぶ。

「よし・・・じゃあ、俺に合わせる！変身！」

『オープンアップ』

「なるほど・・・変身！」

『オープンアップ』

「はわわ・・・へ、変身！」

『オープンアップ』

咲がグレイブ。趙雲がランス。孔明がラルクに変身した。

「・・・んー、キャプチャーキャンセル」

俺は一旦変身を解除して、もう一回真似をする。

「モーションキャプチャー、レンゲル」

何となく皆に合わせた方がいいかなって思った。

「変身！」

『オープンアップ』

ライダーが揃い踏みだ。

「俺は最強だあああ！！！」

そう言いながら俺は突っ込む。

「く、くそ！俺達が協力すればコイツらも倒せる筈だ！」

「そ、そうだ！俺達の力で友情を見せてやる！」

「いい台詞だ、感動的だな。・・・だが無意味だ」

ズガアアンツ！

「グワアアア！？」「」

咲は余裕で敵をぶっ飛ばす。

「華蝶仮面・・・ではなく仮面ライダーの一撃を受けよ!」

趙雲はノリノリで敵を倒す。

「は、はわわ!?!」

・・・戦ってる途中におどおどしてる仮面ライダーなんてあんまり見ないな。その時、

「う、動くんじゃないええ!コイツがどうなってもいいのか!?!」

「く、人質とは卑怯な・・・」

俺と咲もそつちを向く。

「「あ」「」

そして捕まってる人を見て、同時に声を出した。

「おらあ!大人しくしねえと!どうなるんだ?!」え?」

残党の腕を掴んでいるクレス。

「・・・なあ、妹に何をやる気だったんだ？答えてみるよ」

ギリギリ・・・

骨がこつ、軋むような音が聞こえてくる。そう、残党が人質として捕まえていたのはルナだった。俺と咲は内心残党に両手を会わせていた。

「・・・いつまで妹に触れているんだ？」

「ひいつ!？」

ビビって離れた残党にクレスは腹に蹴りを入れる。

「ぐぶえ・・・」

そしてくの字に曲がった男の頭に両手を組み合わせて振り下ろす。

ゴスンッ！

そして地面に叩きつけられて浮かんだ身体を・・・回し蹴りで蹴っ飛ばした。

「大丈夫か、ルナ？」

「う、うん。ありがとう、クレス」

「・・・助かりました」

残党は今ので怯んでいる。

「クレス、ルナ！下がれ！」

『ブリザード』

カードをラウズし、残党の足を凍らす。

「あ、足が!？」

「三人とも！」

「OK！」

「応！」

「は、はい!！」

『『『マイティ』』』

三人もカードをラウズする。

「は、はわーっ!？」

ズガァンッ!

孔明は反動で吹っ飛び、弾は残党の足元に当たる。・・・直撃したら不味かったからセーフだな。

「ハアアアア・・・タアツ！」

ズガガガンツ！

咲は峰打ちで残党を打ちのめしていく。

「止めだ！華蝶、風月斬！」

槍を振り回し、地面に突き刺す。すると衝撃で残党の全員がぶっ飛んだ。

そして、残党は全員捕まえて、皆と別れる。・・・ちなみに、その一件で趙雲と孔明が真名を許してくれたのは祭りが終わってからのことだった・・・

・・・そして本屋を見つけたとき、見慣れた誰かを見つけた。

「はあくん・・・こんなにお宝があります・・・」

・・・存在が18禁な方がいた。

「じゅるり・・・この本も興味深いですね・・・いっそ切っちゃいましょうか・・・」

「待て待て待て！穩、犯罪には手を染めるな！」

俺は穩を止める。・・・どこの天才少女じゃあるまいし。

「あれ、亮さんじゃないですか」

「気づいたか・・・犯罪だけは止めてくれ・・・」

「丁度良かったです。今は暇ですか？」

「……まあ明命から連絡が来るまでは」

「じゃあ一緒に行きましょう」

そう言っつて穩は腕を掴んで……っつて当たってます！当たってますよ、穩さん！

「そ、それで何処に行くんだ？」

「この蜀の本屋全部です」

「……冥琳に本を買っていいか許可は取ったのか？」

「……バレなければいいんですよ」

よし、バラそう。そう心に決めた俺だった……

そして夕方まで付き合わされ、明命から念話が入り、穩と別れる。

「あ……亮！」

明命が走ってくる。

「すみません、待ちましたか？」

「いや、俺も今来たところだよ」

俺達は最終日に祭りを一緒に楽しもうと前々から話していた。

「行こうぜ」

「はい！」

俺と明命は手を繋いで歩く。

「色々あるからな……」

「私も全部は見れませんでした……」

「……また見れるさ。ずっと、生きてる限り……」

「・・・そうですね」

その後は適当に回り、祭りを二人で楽しむ。

「・・・なあ、明命」

「何ですか？」

「運命って変えられると思うか？」

「思います」

即答だった。

「・・・根拠は？」

「亮は何度も運命を変えてきました。・・・違いますか？」

「・・・そう、だな」

すぐ弱気になるからな、俺は・・・

「明命・・・俺は、運命を全部打ち破ってみせる。それには皆の・・・明命の力が必要なんだ。・・・協力してくれるか？」

「・・・今更ですよ、亮」

「・・・ああ」

「・・・負けられない。・・・誰も、死なせたくない・・・」

「・・・明命、見るよ、星だ」

「わぁ・・・綺麗ですね！」

俺と明命は空を見上げる。・・・そこには星が輝いていた・・・

そして祭りが終わり、俺達は帰る用意をして今は門の前にいた。

「……亮、一刀。……気をつける」

「ああ、そつちもな」

「誰も、犠牲を出さない。……鈴々のこと以外も気を付けないと・
」

「病も徹底的に防がないとな……」

「……やるさ、やらなきやいけないからな……」

俺達は手を合わせる。

「次の祭り・・・いや、何時までも誰も欠けないようにしよう！」

「おっ！...！」

・・・祭りは、こうして幕を閉じた・・・

?????

「いいのか？別れを言わなくて」

「大丈夫だよ。また会えるから」

「お祭り、楽しかったですねえ」

「馬鹿セナ！それよりも色々あるでしょ！」

「……大丈夫でしょうか、皆さんは」

「・・・危なくなったらまた助けに来ればいいよ。・・・私達だつて誰にも死んでほしくないから・・・」

「・・・そうだな。・・・今は帰るか？」

「うん。・・・亮、咲、それに明命、恋・・・頑張つてね、応援してるから」

???

そこにいるのは仮面を付けた男とライフルを背負った男。

「・・・なるほど、動く、か・・・」

「どつするんだ？俺達は」

「特にやることはない。・・・亮と咲ならそれなりにやれるだろう」

「・・・んで、危なくなったら助ける訳か」

「・・・さあな」

「・・・この外史を壊す奴はこの俺が狙い撃つぜ」

「壊す・・・か」

「あ？」

「何でもない。・・・行くぞ」

「はいはい・・・じゃあな、亮、咲」

二人はそこから立ち去った・・・

祭り、最終日（後書き）

ゆり

「出番欲しい……」

日向

「無理に決まってるだろ？俺達や第二の人生を歩んでんだから」

ゆり

「じゃあ、声優ネタ！」

日向

「相変わらず唐突だな……」

月詠

「行くぞ、ハヤテ！」

楓

「待ってくださいお嬢様！」

小太郎

「……おいサキ、何処に行くんだ？」

遠坂

「何でやねん！」

柿崎

「別に平気よ？下、スパッツだし」

日向

「・・・あと、入江に閨根にネギに佐々木にセイバーにアーチャーも呼べるな」

ゆり

「・・・って結局何であたしはこんな事を・・・」

日向

「今更かよ！・・・どうせ映画が始まるからじゃねえの？」

ゆり

「うっ・・・って日向君、どこに行くのよ」

日向

「俺も音無とかと夏目

にいかないとな・・・じゃな」

ゆり

「・・・次回の真似と開閉と世界旅行、次回もまたお楽しみに！ちつくしよー！」

崩れる平和（前書き）

やっぱり戦いは苦手です。・・・どはなひんぐ。

崩れる平和

あれから数週間が過ぎたが、特に何も起こっていない。……だが、不安の種はあった。

「……そこで、呉は蛮族を……亮、亞莎、聞いているのか？」

「あ、す、すみません！」

「……悪い、ちょっとボーっとしてた」

「まったく、少しは思春を見習え」

蓮華が言う。……今日は朝早くから軍議の時間。蓮華は再び王の座に戻った。雪蓮は旅にはもう出ず、呉に残っている。

「……」

「思春？貴女もなの？」

「あ……すみま、せん」

俺は思春の様子がおかしいのに気付いた。

「思春？……顔が赤くないか？」

「気のせい……だろう……」

「……体調が悪いんじゃないのか？」

「気のせい、だと言っ……」

ドサッ

「思春！？」

思春が倒れる。

「蓮華！何処か横になれる場所を！」

俺は思春を抱き抱える。

「亮！こっちじゃー！」

祭さんが近くの部屋の布団に誘導してくれた。俺は思春を布団に寝かせる。

「冥琳！医者を……」

「もう呼んでいる。少し落ち着け」

「思春……まさか無理してたの？」

蓮華が言う。俺は部屋から出て壁を殴る。

「亮……」

「……くっ、思春の様子がおかしいのに気づけなかった……」

「亮は悪くありません。……私達ですら気づけなかったんです」

俺と明命はお互いにため息を吐く。

そして医者に来て、診察してもらった。

「……どうですか？」

「過労だな。ここ最近随分無理をしていたようだ。……さすがに過労は俺の針を用いても簡単には……」

「そうですね……思春は？」

「今は寝ている。……見舞いはしても構わないぞ」

俺は医者に一礼して中に入る。

「……」

思春は眠っていた。

「……何で……」

黙っていたんだ。そう言いたかったが、その答えはすぐに分かった。……ただそれは、親に怪我を知られたくない子供のそれと同程度の理由だろう。

「……りよ、う……?」

「ッ!……目が覚めたか」

「……そうか、私は……倒れたのか」

「過労だったさ。まったく、今までのツケが回ってきたんだよ」

「そうかもしれないな……」

「……どうしたんだよ、お前らしくもない。……何か飲むか？
持ってきて……ッ」

思春に服の裾を掴まれた。

「……傍に、いてくれないか……？」

俺は微笑み、返事をする。

「……ああ、分かった」

祭りの日以来、思春はこうして俺に多少は頼ってくれたり、頼みごとをしてきたりしている。

コンコン

「……はい？」

「……亮、ちょっといいかしら？」

俺は蓮華に呼ばれ、思春に断ってから部屋を出る。

「……例の蛮族が動き出したわ」

「ッ！」

新たな問題はここ最近、前触れがなく賊が現れる。

「……思春を頼むわ」

「え……」

「思春が動けない以上、貴方も出陣はできないわ。……いえ、それは建前で、本当は思春を見張ってほしいのよ」

「思春を？」

「・・・思春はきつと皆が動いてるのに自分だけ休んでいるのは・・・」

「なるほど、だからお目付け役に俺が選ばれたのか・・・数は？」

「大丈夫よ。数はこちらが勝ってるわ。・・・亮、思春をお願いね」

「・・・ああ、気をつけて」

蓮華を見送る。

「・・・亮、蓮華様はなんて・・・」

「・・・ちゃんと思春の看病をしてやれってさ。・・・思春、欲しいものがあつたら何でも言ってくれよ。可能な限りは用意するから」

「・・・どうした・・・？随分と、優しいのではないか？」

「失礼だな。俺は普段から優しいつもりだぜ？」

「……そうだな」

「……俺はここにいるから、思春は安心してゆっくり休んでくれ」

「ああ……そうさせてもらおう……」

思春は目を閉じた。

「……」

俺は唇を噛み締める。……思春の過労は俺のせいでもある。明命は悪くないと言ってくれたが、さすがに気にせずはいられなかった。

「……思春……」

俺も背中をを椅子に預け、目を閉じた……

咲

俺は今、戦場の真っ只中にいた。

「恐れるな！所詮は賊だ！呂布隊と張遼隊の動きに合わせて殲滅しろ！」

賊がいきなり現れた。おかしいとは思うが、それしか言いようがない。いきなり出現し、近くの村や民家は焼き払われた。それどころかその場にいたものを皆殺しにしたのだ。

「せつかく・・・平和になっただつてのに・・・」

「伝令！敵増援！このままでは前線を保てません！」

「何だと！？・・・くそ、誰か詠に、賈馱に増援を要求してくれ！」

「御遣い様！既に蜀より増援を呼んでいるそうです！」

「・・・そうか、なら時間を稼ぐ。俺も前が出る！」

馬から飛び降り、Bモードを発動させ、飛ぶ。

「地獄に落ちろゲスども！」

遠距離武器を使って敵を殺していく。

「あ、悪魔だー！」

「恐れるな！進めー！」

「・・・チツ、一人じゃキツいか・・・」

「・・・燃える天空」
ウーラニア・フロゴース

ドオオンッ！

騎士正装に身を包んだ恋が魔法で敵を吹き飛ばした。

「さっすが恋・・・」

「・・・数が多い」

「増援が来るはずなんだけどな・・・」

「・・・敵を止める。咲は一旦詠の所に行つて」

「・・・分かつた。無理するなよ」

「・・・(コクッ)」

俺は詠の所に飛ぶ。

「・・・詠!」

Bモードを解除しながら詠に近寄る。

「咲・・・不味いわね、状況が喜ばしくないわ」

「蜀からの増援は?」

「・・・あつちも足止めを喰らつてるわ。・・・作戦を変えるみた

いね。まず愛紗を含む蜀の武将が敵を止めて、別部隊が違う道からこっちの増援に来てくれるみたい」

「そのメンバー・・・人員は？」

「軍師に雛里、武将は星と白蓮と翠と蒲公英。・・・後大将は桃香ね」

「・・・一刀とかは？」

「別部隊に行く道を敵に封じられたみたい。だけど人数や兵力に問題は無いからそのままこっちの増援に来る・・・」

俺は地図を見せながら説明してくれている詠に質問する。

「・・・増援部隊が通る道・・・こっつて何がある？」

文字が書いてあるが、掠れてよく見えない。

「えっと・・・ここは落鳳坡だけど・・・」

「何だと！？ここがか！？」

「え、ええ・・・」

落鳳坡、そして雛里・・・これが意味することは・・・

「詠、時間を稼いでくれ！・・・このままじゃ雛里が・・・死ぬ」

「な、何言ってるのよ!?!」

「言っておくけど冗談とかじゃない、俺の世界じゃ雛里は……落鳳坡で死んでいる。」

「……どれぐらい時間を稼げばいいのよ?」

「雛里を助けられれば……俺が全力で飛べば早く着く。……頼めるか?」

「……やってやるつもりじゃない。でも、やるなら絶対に助けなさいよ」

「分かってる……それじゃ、行ってくる!」

俺は再びBモードを発動させ、空を飛ぶ。……待っていてくれ、雛里……!

森

「まったく、祭りの後にこんなことになるなんてな!」

「ぼやくな翠。急がねば月達が危ないぞ」

「星、もう少し急げないか!？」

「無茶を言わないで下され白蓮殿。・・・これ以上急いだら桃香様と雛里が着いてこれなくなる」

「こうなるんだったらもつと罌を仕掛けていればよかったよ・・・」

「ああなたんぽぽ・・・それじゃ一般人まで危ないだろうが」

「雛里ちゃん、着いてこれてる!？」

「は、はひ!」

馴れない乗馬の為か、思うように速度がでない。

「……え？」

その時、雞里の視界を遮るように霧が出始める。

「あ、あわわ……」

そして霧が晴れた時……仲間も、兵士もいなくなっていた。

「え、み、皆さん……？」

亮

コンコン

俺はノックの音で目を覚ます。

「失礼します！……こちらにいましたか！」

兵士が入ってくる。

「この馬鹿、病人がいるんだぞ」

「あ、し、失礼しました……ですが、本隊から伝令が入ってきてます」

「聞こう」

「敵増援にて劣勢。至急増援を送られたし……とのことですよ」

「なんだって?……この城に、後誰がいる?」

「孫尚香様と陸遜様ですよ」

「ならその二人に部隊を作らして増援に向かわせてくれ」

「了解しました、では」

兵士は部屋から出ていった。

「……亮」

しまった、そう思った。……外で話をすればよかったと思うが、そんなのは後の祭りだ。

「……今のは、どういう……」

「……すまない、蓮華達が蛮族を討伐するために出陣したんだ」

「何だと!?……う……」

「バカ、大人しく寝てろ！」

「だが・・・劣勢と・・・」

「ふらふらなお前が行ったって足手まといになるだけだ！」

「部隊を指揮することぐらいできる！あ・・・」

思春が立ち上がるうとして、崩れ落ちる。

「お、おい！」

俺は思春を支える。その時、

「・・・すまない」

「え・・・」

首に衝撃が走り、俺の意識は刈り取られた・・・

「う……」

目が覚め、俺は跳ね起きた。

「思春!?!」

布団にも、近くにも思春の姿はいない。

「……確か、甘寧は演義で……」

蛮族、病（過労だが） それを無理して出陣した甘寧……

「ッ!」

考えに結論が出た瞬間、俺は走り出していた。

「……その兵士!」

「は、はい!?!」

「思春は……甘寧が外に出たか!?!」

「は、はい!孫尚香様達が出陣した後に、甘寧様が……」

「どれくらい前だ!？」

「……一刻ぐらいです」

ざっと四時間ぐらい……

「俺も出る!」

「し、しかし兵は用意が……」

「単騎で行く!」

俺は跳んで外に出る。

「りよ、亮様!」

「……あ、あの時の兵士さん!？」

前に祭さんと冥琳で留守番してた時の兵士か……

「頼み通り、敬語は止めたよ!」

「私も名で呼びました!」

俺は手で合図する。

「後で飯でも食いに行こう!……名前は!？」

「凌統……凌統です！」

俺はそのまま瞬動を使う。連続で何発いけるか解らないけど、やるしかない。

咲

「く……まだ見えないのか！」

地図は頭に入っている。だから場所を間違っではないと思う。

『動き出しましたね』

「……テメエは肝心な時に出てこねえで何でこんな時に出てくんだよ！」

『それはそうですよ。貴方の苦しむ様が見たいですから』

「……チッ」

于吉を制御する力を強める。

『うぐぐぐ……！？』

「答える、この世界に何が起っている」

『ふ、ふふふ……外史を壊そうと動いているのは私達だけではない、ということですよ』

「何？」

『どの世界にも必ずいるんですよ。私の仲間はその世界の登場人物の役割を受け、存在する。私は本来名無しなんですよ。……丁度この“于吉”の身体と存在を受け、こうしているわけです』

「……珍しくベラベラとありがとよ」

『いえいえ……こうして私と話している間に、大分速度が落ちたでしょ？』

「……やっぱムカつくなテムエはよ！」

『最高の褒め言葉ですね』

俺は全力で飛んだ。

森

「あ、あわわ、あわ・・・」

必死に走っていた。何故か？敵が明らかに自分を狙っているからだ。

「ひっく、うぐ・・・」

涙が溢れる。怖い。実際はここにも来たくは無かった。彼女は兵士から鳳雛と呼ばれている噂を聞いた。・・・そしてここは、落鳳坡。不吉すぎる場所だった。

『見つかったか？』

『いや、まだだ』

『早くしろ。軍師を絶対に逃がすなどのことだ』

『多分他の奴もそろそろ戻ってくるぞ』

『……急がねえとな。さっさと殺さねえと』

「……ッ！」

言った。今確かに自分を殺すと。……馬から降りて正解だった。馴れない馬ではすぐに追い付かれてしまうだろう。……だが、

パキン

枝を踏んでしまった。

『あつちか！？』

「ひ……」

逃げる。脇目も振らず森の中を。

「見つけたぞ！」

「は、は、ふぐ、う……」

息が乱れる。だけどそんなの構っていられない。

ドスッ

「あぐ……!?!」

左肩に激痛。それに耐えられずに倒れる。……矢が、左肩に刺さっていた。

「ひっ……い、嫌……」

立ちたいのに足がすくんで動けない。

「てこずらせやがって……」

「おい、さっさと殺れよ」

弓を構える男。

「あ……や、やめてくだ……」

ヒュン

矢が放たれた……

亮
〜

「ハア、ハア……見えた……！」

戦場が見える。・・・そして、見た。

「・・・思春が孤立している!？」

甘の旗を囲むように展開している蛮族。

「やっぱり・・・」

俺は力を振り絞り、思春の元に急いだ。

「か、甘寧様！」

「狼狽えるな！一転突破でここを抜けるぞ！」

「りよ、了解です！」

兵士達は蛮族の部隊の一ヶ所に戦力を集中させる。

「・・・ゲホッ、ゴホッ！」

頭がぼうつとする。・・・そのせいで、自分を狙っている兵に気づくのに遅れた。

「しまっ・・・」

「思春ー！ーッ！ー！」

俺が飛び込む。思春を抱きかかえ、跳ぶ。

ドスツドスツ

「があっ・・・」

背に矢が刺さる。

「・・・はっ、亮！？何故、どうして・・・」

「・・・傍にいてくれて言ったのは、お前だ、ろ・・・ゴブツ！」
血を吐き出す。・・・四本ぐらい刺さってるか・・・

「それに・・・思春を死なせなくなかったから・・・」

「馬鹿・・・貴様が死んだら元も子もないだろう」

「そう、だな・・・はは、参ったなあ・・・こうなるんだったらもつと真面目に障壁の練習をするんだっとな・・・」

「う・・・」

顔に暖かい何かが落ちてきた。

「何で・・・泣いてんだよ・・・お前が、泣いたら・・・困るだろ・・・？」

「私は・・・なんて、ことを・・・このまま、死ぬなんて」

「・・・まだ手はある」

ケータイを使う余裕はない。・・・俺は仮契約カードを取り出す。

「頼、む・・・明命・・・」

明命を召喚する。

「・・・！？亮、どうしたのですか！？」

「俺はいい・・・！ここを、突破してくれ・・・」

「は、はい--」

明命が魂切を構える。

「思春・・・無茶をせずに・・・生きて・・・」

目の前が暗くなっていく。

「亮!?目を開ける!・・・おい!」

「・・・」

意識は薄れていく。

「・・・よう!・・・頼・・・起きて・・・」

森

「・・・！」

・・・自分は数秒後に貫かれる。・・・だが、その時はやってこなかった。

咲
〜

雛里に放たれた矢を掴む。

「間に、合った！」

俺は振り返り、雛里に話しかける。

「無事か！？雛里！」

「・・・嫌」

「雛里？」

「お願いします・・・殺さないでください・・・たす、助けて・・・嫌・・・嫌ああ・・・」

「雛里！おい、しっかりしろ！？」

雛里は目の焦点が合わず、泣いて、助けを求めたり謝ったりしている。俺はゆっくりと敵に向き直る。

「貴様ら・・・覚悟は、できてるんだろっな・・・！」

「・・・っしやおらああ！..！」

「たああ！..！」

その時、横の草むらから翠と白蓮が飛び出てきた。

「翠、白蓮……」

「ここは私達に任せろ！」

「星達が先に行った！雛里のことは私たちが！」

「……頼む！……雛里、もう大丈夫だ。……だから落ち着け、な？」

「嫌……嫌……」

俺は何か沸き上がる感情を抑えて再び空を飛んだ……

崩れる平和（後書き）

亮

「・・・今回は次回予告風に行くか」

咲

「・・・今度はお前が振るのか」

「私のせいだ・・・私のせいで亮が・・・」

「貴女はそうやってお父さんも殺した！」

「私達は・・・信じるだけです」

「恋とねねをどうする気だ！・・・それに、貴様は何者だ！」

「儂か？・・・儂は曹操」

「・・・于吉、力を使わせてもらおう！」

次回『闇、解放』

亮

「なお、都合により予告はあてにしないで下さいね」

咲

「おいおい・・・まあでも、作者も色々考えてやってんだろうし。・・・それじゃあ、次回の真似と開閉と世界旅行！」

亮

「次回もまたお楽しみに！」

闇、解放（前書き）

ああ、戦いが終わらない・・・ではどうぞ。

闇、解放

明命

蛮族は鎮圧できた。．．．だけど、亮が思春殿を庇って重傷を負った。呉に戻って亮と思春殿はすぐに運ばれた。そして今、治療を受けている。

「．．．」

「明命．．．」

「蓮華様．．．」

「．．．私のせいね」

「誰も．．．悪くありません」

「．．．そう思わないとやっていられないのよ」

蓮華様が手に力を籠める。

「．．．そう言えば蓮華様。蜀の方でも戦闘があったと聞きました
が．．．」

「ええ、今も戦闘が続いているわ」

「．．．私達は．．．」

「増援を出せる余裕はないわ。・・・残念だけど」

「・・・何で、こんなことに・・・」

咲
〜

「く……間に合ってくれ……!」

(……咲)

「(……恋、どっした!?)」

(・・・ごめん、守りきれなかった)

「(何だと!?!・・・それじゃあ・・・)」

(今は洛陽を捨てて逃げてる。・・・一応、皆無事)

「(・・・そうか、何処に逃げてるんだ?・・・)」

(桃香の所・・・咲、今どこ?)

「(そっちに向かっている・・・待ってる、すぐ向かう)」

(・・・待ってる)

俺は急ぐ。運が良ければ桃香達にも合流できるはずだ。

明命

亮はまだ目を覚まさない。そして今、念のため国境線の城に亞莎と穩様が警備についている・・・けど、警備に付く前、亞莎が何処と無く思い詰めた顔をしていた・・・理由は分からない。前に見た三国志の本の内容はあまり覚えていない。思い出そうとすると思考に霧がかかる。

「明命、少し休みなさい。・・・疲れているでしょっ。」

「蓮華様こそ・・・返り血、付いてますよ」

「明命もよ」

普段は血がつくと嫌なのに今は気にならない。・・・何でだろう。

「あ・・・」

その時、一人の兵士が歩いてきた。

「周泰様・・・あの、亮様は・・・」

「誰だ、お前は」

「そ、孫権様！？す、すみません！自分は凌統と申します！」

そう言つて・・・凌統と名乗つた兵士が答えた。

「凌統・・・もしや、凌操の・・・」

「・・・はい、娘です」

「・・・父君のことは・・・」

「ええ・・・」

何かを話しているようだ。その時、

「・・・あ・・・」

「思春殿！？」

ふらふらしながら思春殿が歩いてくる。

「思春！？大丈夫なの、動いて・・・」

「は、はい・・・蓮華様、亮は・・・」

その時、私でも、蓮華様でもない声が聞こえた。

「・・・重傷ですよ、甘寧様を庇ってね」

凌統だった。鎧兜を外し、綺麗な黒髪と整った顔を露にしながら思春殿に詰め寄る。

「ああ・・・そうだった」

思春殿は顔を伏せる。

「私のせいだ・・・私のせいで亮が・・・」

「そうですね。貴女はそうやっていつもいつも奪っていく」

明らかに凌統の声には敵意が混じっている。・・・だけど、蓮華様は何も言わない、いや、何も言えないのだ。

「・・・私、は蓮華様の為に・・・」

その時、敵意に殺気が混ざった。

「貴女はそうやってお父さんも殺した！」

「・・・！」

今、何て・・・

「彼女の・・・凌統の父親は、思春が討ち取ったのよ」
蓮華様が言った。

「どうして・・・いつもいつも奪っていくんですか！亮様だって・・・数刻前には元気で・・・約束を・・・一緒に、ご飯を食べようって・・・！」

「・・・」

「返して・・・返してよ！」

「・・・許してくれとは言わない。・・・恨むなら恨め。・・・それしか、できない」

「・・・ふぐ、うう・・・」

凌統は泣き崩れる。彼女だってわかっている。思春殿をいくら憎んでももつどうにもならないことを。・・・だけど、誰かに怒りをぶつけないと自分が保てない。・・・そんな状況なのだ。

「・・・亮が居てくれれば・・・」

私はそう呟く。・・・そして、

「……どつすればいいの……！私達は……！」

「私達は……信じるだけです」

私は亮が眠る部屋を見つめた……

董卓軍

「・・・アカンな・・・」

霞が呟く。

「こうなったら玉砕覚悟で突撃して・・・」

「ダメよ。もう囲まれてるのよ。ボク達は増援を待つしかない」

「皆・・・ごめんなさい・・・私がいなければもう少し速く逃げられたのに・・・」

「・・・月は悪くない」

「そうです。・・・それに、そうしたら今度はねねが遅れるのです」

全員が笑う。ここは砦。今は残った兵力で籠城していた。

「咲が援軍を連れてきてくれる・・・ボク達は耐えないと・・・」

「そやな・・・ったく、敵さん何が不満で戦い挑んでんのか・・・」

「戦いたいからだろう」

「アホう、華雄ちゃんと一緒にするなや」

「ですがおかしいのです。明らかに兵力が多すぎるのです。・・・
まるでいきなり現れたとしか思えないのです」

全員が思考を巡らせていたその時、

ズガアアンツ！

『ギャアアアツ！？』

兵士が吹っ飛び、髭面の男が入ってくる。

「な、何よコイツ！？」

恋、霞、華雄が武器を構える。

「青龍偃月刀・・・何もんや、アンタ。・・・ウチは張遼、字は文遠」

その時、男が驚いたのが分かった。

「お主が張遼か・・・まったく、つくづく面白い世界だ・・・」

男はそう言って青龍偃月刀を一振りし、答える。

「我が名は関羽！字は雲長！・・・いざ参る！」

咲
)

「あれは・・・」

見つけた、桃香だ。

「桃香！」

「え？・・・咲君！？・・・雛里ちゃんは！？翠ちゃん達は！？」

「ギリギリ間に合った！今は翠達が雛里を保護してくれてる！」

その言葉に桃香は安堵の息を吐いた。

「良かったあゝ・・・よし、急ごう！皆！」

「・・・！お待ちください桃香様！・・・何か来ますぞ！」

星が言う。確かに向こうから砂煙が上がっている。

「嘘、敵！？」

「いや、違う・・・あれは・・・華雄！」

そう、華雄が単騎で走ってきたのだ。

「華雄！」

「・・・咲、か・・・」

近くで見ると華雄の怪我は酷かった。おびただしい量の血を流し、顔面蒼白だった。

「何とか・・・包囲網を抜けられてな・・・援軍を・・・まだ・・・戦って・・・」

「華雄？・・・華雄！おい！・・・く、魔力最大集中・・・ケアルガ！」

華雄の怪我を治す。

「この傷口・・・偃月刀、ですな」

星が言う。

「分かるのか？」

「それは愛紗や霞がいますからな」

「・・・とにかく急ごうよ！」

「・・・でも、月達って結構兵力あったよね・・・今のたんぼ達の兵力で大丈夫なのかな？」

「洛陽くらい取られたって取り返せばいい・・・けど、命は・・・取り返せない」

俺達は一度向かい合い、頷いてから再び動き出す。

卷

ガァン！

「うぐ……!?!」

「こっちは制圧したぞ、孟徳」

眼帯の男が霞を組み伏せながら言う。

「く……離せえ！離さんかい！」

「……にしてもこの小娘が張遼とはな……」

「何なんやさつきから！ウチが張遼やと何かおかしいのかい!?!」

「……そこにいるは呂布か」

一人で戦ってた恋に孟徳と呼ばれた男に聞かれる。

「……惇よ、董卓を連れてこい」

「ああ、分かった」

惇と呼ばれた眼帯の男は何処かに行き……

「う……」

縛られた月を連れてきた。

「月……!」

「お前に選ばしてやろう。……仲間を死なせなくなったら、董卓を斬れ」

「……ッ!？」

「アカン! 恋、言うこと聞いたら……ガッ!？」

眼帯の男に顔を地面に打ち付けられる。

「お前は黙っている」

「ぐ……!」

「どじする……田布よ」

「恋さん……やっってください。私の命で皆が助かるなら……」

「何言つとるんや・・・ぐっ!?!?」

「黙れと言っているだろう」

「誰が黙るかい!命を犠牲にされてまで生き延びたくはないわ!」

「さあ、選べ、呂布よ。自分の命か、他者を殺して皆を救うか」

「・・・悩むまでもない」

恋は方天画戟を投げ捨てる。

「・・・取るなら恋の命を取れ」

「ほう・・・」

「何言つとるんや!?!?」

「だから他の皆には手を出すな」

「ふ・・・なら、呂布と陳宮を連れていけ」

「・・・!ねねは関係ない!」

「いや、あるな・・・儂らはある特定の条件を果たさねば元の世界に帰れぬのでな・・・その為にも、貴様らには死んでもらう」

「く・・・」

咲

「何だ・・・あれ」

俺は砦を見て驚愕した。何故なら董卓軍ではない大量の兵がいて、砦の前に大きい絞首台のようなものがあり、そこに立たされていたのは・・・

「・・・恋!？」

遠くてよく解らないが、アレは恋だ。近くにはねねの姿も見える。

「く・・・!」

俺は飛び、向かうが、大量に矢を放たれ、打ち落とされる。

「くそっ・・・」

「・・・貴様が、天の御遣いか・・・」

「恋とねねをどつする気だ！・・・それに、貴様は何者だ！」

俺は叫ぶ。

「儂か？・・・儂は曹操」

「な・・・にい・・・？」

曹操だと・・・？

「お前は・・・何でこの世界に・・・」

「儂らも迷惑をしている。いきなりこの世界に飛ばされたのだからな・・・だが、この世界で天下を取るのも悪くない」

「・・・つざけんな！俺達がつった平和を・・・何だと思ってやがる！」

「知らんな。・・・どのみち歴史を繰り返さねばならぬ。呂布と陳宮を殺し、董卓も殺す」

「ふざけやがって・・・」

『ふふ、面白くなってきましたね』

「・・・于吉、力を使わせてもらおう！」

『ほう？私の力を・・・扱いきれるのですか？』

「やるしかないんだよ！」

俺は力を籠める。・・・内側からドス黒い何かと力が溢れる。

「ウアアアア・・・！」

金色の髪と瞳が銀色になる。髪がほどけ、細部も禍々しいモノに変わっていく。

「ウオオオオツ！ハアツ！」

「ふ、何をしようと思駄だ。おい、処刑せよ」

恋の首に縄が、ねねの首に刀が当てられる。

「やめろおおおお！」

仮契約カードの召喚で恋は救えてもねねが救えない。なら今の加速
力に賭けるしかない。・・・と思ったその時、

ダンッダンッ

兵士の頭が吹き飛んだ。

「何……?」

「誰だ……」

すると空からライフルを持った男がやって来る。

「へ……沢山いるな……狙い撃つぜ!」

ライフルを使って敵を撃っていく謎の男……そして、

ズシャアッ!

「ギャッ!?!」

今度は仮面をつけた男が敵のど真ん中に立っていた。

「恋を傷つける奴は誰であれ許さん」

「何なんだ……お前は……」

「説明は後だな。……今は、お前の愛しの仲間を救ってこいよ」

「……すまない!」

俺は飛び、恋の元に駆けつける。

「恋、ねね!無事か!?!」

それに合わせて桃香達も戦闘に入る。

「遅いのです……！」

「……でも、まだ詠が……」

「……そうだ、詠は！？霞は！？月は！？」

「……咲い！」

上から声が聞こえる。

「……霞！」

「受け取りい！」

霞はそう言って……月を投げた。

「な！？」

俺はすぐに月を受け止める。

「月、無事か！？」

「あ……」

月は気絶していた。

「……そこまでだ」

曹操が言った。……そして、後ろの眼帯の男が詠の首に大剣を当てていたのを見た。

「テメエ……！」

「大人しく退かねばこやつのはねるぞ？」

「……卑怯な……」

「……破格の条件だな。退くぞ」

仮面の男が言う。

「しゃしゃり出てきて命令すんな！何者なんだ……お前らは……」

「天の御遣いだ……別世界のな」

「御遣い……だからか」

恋を真名で呼んだ理由が分かった。

「だけど、霞と詠を見捨てるわけには・・・！」

「行って、咲！月を・・・お願い！」

詠が叫ぶ。

「だけど・・・！」

「大丈夫よ・・・咲なら助けに来てくれるでしょ？」

「・・・！」

「退くぞ」

仮面の男に引っ張られる。

「離せ！離せよ！俺は・・・俺はああ！！・・・あ」

意識が薄れる。・・・まさか、

『やはり、貴方では使いこなせませんね』

意識がなくなる。・・・詠の口が動いた。

亞莎

「・・・亮さん、無事でしょうか」

「大丈夫ですよ？亮さんは何度も危機を乗り越えてきたんですからあゝ」

「・・・信じてるんですね」

「亞莎ちゃんは信じてないんですか？」

「信じてます。・・・亮さんなら必ず・・・」

「た、大変です！」

兵士さんが慌てた様子で入ってくる。

「どうしましたか!？」

「ら、洛陽が・・・陥落しました！」

「ええ!？」

「そして今・・・その軍勢がこの城に迫っています」

「・・・旗は上がってるんですかあゝ？」

「……はい。関の旗が上がっています」

「……関羽……！」

私は……これ以上ない嫌な予感がしていた……

闇、解放（後書き）

亮

「次回予告バージョン2！」

咲

「まだやるのか・・・」

亮

「また固まった声優ネタとかはまた今度やるみたいだね」

咲

「それではどうぞ」

「お前は何者なんだよ!？」

「俺は剛鬼・・・天の御遣いだ」

「俺は、一番近くにいたのに雛里を止められなかった・・・」

「こっちの一刀も甘いな」

「私は・・・もしかしたら死ぬかもしれない」

「亞莎は死なせない・・・俺が守る!」

「何で・・・私を助けたんですか、甘寧様!」

「私の真名は思春だ・・・そう呼べ」

「詠は俺が助け出す・・・絶対に、だ」

「私は、この力で生き延びる!」

「鈴の音は、黄泉路へ誘う道しるべと思え!」

次回『絆』

亮

「ついでにアンケート。・・・前回、ならびに今回登場の凌統の真名が何が良いか？・・・是非お教えください」

咲

「よろしければ・・・だけどね」

亮

「それでは次回の真似と開閉と世界旅行！」

咲

「次回もまたお楽しみに！」

絆（前書き）

久々に長く書いたなうではどうぞ。

絆

咲

「……」

目を開くとまず最初に天井が目に入った。

「……」

俺は……

「……目が覚めたのか？」

横を見ると上半身に包帯を巻かれた華雄がいた。

「……そっだ、詠！」

俺は立ち上がりすぐに動こうとするが……

ドクン

「あ、ぐ……！？」

闇が……疼いて……！

『……ふふふ』

「ハア・・・ハア・・・ぐ、おおおお・・・」

「お、おい!」

華雄が近寄ってくる。

「来る、な・・・!」

俺は華雄を手で制する。

「・・・随分進行してるんだな」

入ってきたのは仮面の男。

「丁度いい・・・聞きたい事がある・・・」

俺は剛鬼に近寄り、叫んだ。

「お前は何者なんだよ!？」

仮面の男はそれに対し、冷静に答えた。

「俺は剛鬼・・・天の御遣いだ」

「・・・それは聞いた!・・・剛鬼っていったよな・・・何の目的で、この世界に・・・」

「恋を助けにきた。それだけだ」

その言葉にカチンときた。

「ここは俺の世界だ。お前がくる必要は・・・」

「無いと言い切れるか？」

「・・・」

「お前は弱い。だから誰も守れない」

剛鬼は淡々と言葉を口にしていき・・・

「だから目の前にいて助けられないんだ」

言うてはならないことを口にした。

「テメエエエエエ!!」

俺は怒りに任せて拳を振るつ。

パシッ

「な!？」

「遅い」

バキイツ！

「がはっ……」

俺の拳は受け止められ、逆に剛鬼の拳を喰らう。

「……貴様、私の仲間に出すか」

華雄が剛鬼の前に立つ。

「手を出したのはそっちだ。……凶星を突かれ、キレる。……
まるで子供だな」

「咲を愚弄することは許さん！」

「止める華雄！……ああ、俺は子供だよ！甘ちゃんだ。……だ
けどな、それでも戦ってきたんだ！亮と……明命と……皆と……
そして恋と！俺は戦い続けた！……だから、だから……
はは、何が言いたいかわかんなくなっちゃった……」

俺は立ち上がり、布団に腰かける。

「……剛鬼」

「……何だ」

「手を……貸してくれ」

「……何故だ」

「詠と・・・霞を、助けてい。・・・そうだ、月達は・・・」

「無事だ。さつき恋と見てきた」

「・・・そうかい・・・」

「あ・・・」

その時、一刀が入ってくる。そして・・・

「・・・咲、すまなかった」

一刀は俺に謝った。

「俺は、一番近くにいたのに雛里を止められなかった・・・」

「一刀・・・」

「誰も、欠けちゃいけないって言ったのにな・・・」

「こつちの一刀も甘いな」

「・・・お前は、剛鬼・・・だったか」

一刀が剛鬼を見据える。

「確かに甘いよ。・・・だけど、乱世の中で甘い人が何人かはいて
もいいんじゃないかな？」

「……ふん、こっちの一刀は甘いなりに色々考えているようだな。
……目が違う」

「……それはどうも」

その時、空間が開いた。

「「「!?」」」

その場にいた全員が身構える……が、すぐに緊張は解けた。

「……咲!」

「……シイ!??」

結衣咲シイ。なぜ彼女がここに……

「ねえ!みんなは大丈夫!??」

「……いや、詠と霞が……」

「そんな……」

「ほう、お前が結衣咲か」

その言葉にシイが振り向く。

「……剛鬼、さんだっけ?」

二人は少なからず敵意を持っていた。

「……」

「……」

二人はずっとお互いを見ている。

「……大分強いみたいだね」

「そつちもな。……細かい力は判らんが」

「試す？」

「止めておこう。ここら一帯が消し飛ぶだろうっからな」

「……」

一応、和解してるってことでいいのか？

「……そうだ一刀……雛里は……！」

「……来てくれ」

俺は一刀に連れられ、とある部屋に案内される。

「……」

雛里は寝ていた。華雄と同じように上半身……特に左肩に包帯を巻かれていた……。だが、華雄と違うのは……両手両足に革のベルトが付いている所だ。

「よっぽど怖い思いをしたんだろうな……誰彼構わず暴れるんだ」

「……ッ!」

やり場のない感情がわき出てくる。

「俺が……止めていれば……!」

「あ……ご主人様……咲さん……」

朱里が入ってくる。……って、

「おい、朱里……寝てないんじゃないか?」

「ええ……眠れなくて……」

朱里の顔色は悪く、拳動はふらふらで、目の下に隈ができてた。

「朱里……!」

今は休め、そう言おうとしたが、悲しそうな顔をした一刀に止められる。・・・俺達は、外に出るしかなかった・・・

亞莎

「皆さん、籠城戦の準備をしてください！」

「ええ？？亞莎ちゃん、ちゃんと周りを見てください。・・・雲は雨雲、城内は高低差があつて開閉可能なんですよ？？ここは招き入れて水攻めが効果的・・・」

「分かっています。・・・ですが、それは最後の手段です」

「え？何で・・・」

私は知っている。これをしたのは関羽だけど、水攻めは・・・私の死の運命を早める。

「私は・・・もしかしたら死ぬかもしれませんが」

そう口にした・・・

亮

「・・・う、ぐ・・・」

「亮・・・！目が覚めたのか」

「思、春・・・？何で、泣いてんだよ・・・」

「・・・お前が、生きていたからだ・・・」

「そうか・・・俺は、お前の死の運命を壊せたんだな・・・」

「ああ、ありがとう・・・そして、すまない」

俺は思春の頭を撫でる。・・・前までだったら頭に触ったら怒って
ただらうな。

「気にするな。・・・俺が好きでやったんだ。・・・いてて・・・」

「む、無理をするな！」

「大丈夫だよ・・・つたく、蓮華の次は俺に過保護すぎるぞ」

その時、空間が開いた。

「・・・よう、無事か？」

「クレス・・・ユエも！」

「どうもです」

「どうしたんだ、お前らは・・・」

「助けに来たんだよ。・・・ピンチっぽかったからな」

「・・・お前は」

思春がユエに反応する。

「甘寧さんですか・・・武道会ではすみませんでした。・・・本気を出しすぎて・・・」

「構わない。・・・私が未熟だった、それだけだ」

俺はふと気になった事を言う。

「そっいえば・・・シィは？」

「・・・咲の方にいったみたいだな」

「そうか・・・」

「あ、そうだ。これ飲んどけよ。・・・ほら、甘寧も」

クレスは前にもくれた特効薬を渡してくれた。

「・・・」

「大丈夫だよ、思春」

「・・・そうか」

俺が先に飲むと思春も薬を飲み干した。

「・・・身体が」

思春が驚く。・・・その時、

「・・・元気になったんですね、亮様」
入り口に黒髪の少女が立っていた。

「お前・・・凌統、か？」

「よく解りましたね」

「声と心配だな」

その時、場の空気がおかしいことに気付いた。・・・凌統が思春にだけ殺意を放っているのだ。

「（・・・そうか）」

確か正史では甘寧は凌統の父親を射殺したんだっけ・・・

「・・・それにしても、皆に心配かけちゃったな」

「・・・これで何度目だか」

「うぐ」

クレスに言われ、息が詰まった。

バタン！

「思春殿！大変・・・です・・・？」

明命が俺を見て固まり・・・そして、泣き始めた。

「おおっ！？」どどどどつした明命！？」

「大澤さんが無事だったので喜んでますよ」

「あ……そっか、悪い。でも、こうしてちゃんと起きたから、もう大丈夫だ。……あとユエ、俺のことは亮と呼んでくれ。……多分、咲も同じこと言うだろうから」

「……分かりましたです」

俺は明命に向き直る。

「……そだ、何か用事があつたんじゃ……」

すると、明命の顔に焦りが出る。

「そ、そうです！ 亞莎と穩様が、国境線の城にて……関羽と交戦中！」

「「「!?!?!」」」

「おい、亮!」

クレスの言葉に頷く。

「明命！ 出陣の用意は!?!」

「八割は終わっています。後は思春殿の隊の編制ですが……」

「私なら大丈夫だ」

「・・・よし、急いで準備を！」

「で、ですが・・・そこまで急がなくても時間はあるかと・・・」

「バカ、明命！三国志、覚えてないのか！？亞莎・・・呂蒙と関羽が戦ったらどうなるか！」

「・・・あー！」

明命は思い出したのか慌てて部屋から出る。俺と思春も出ようとした時・・・

「待てよ、俺達も手伝う」

「で、でも・・・」

「亮さんの仲間なら私達の仲間でもあります」

クレスもユエもかなり強い。

「・・・分かった。思春と俺の隊に・・・」

「あの・・・！・・・私も、私も入れてください！」

「凌統！？」

いきなり凌統がそう言った。

「お願いしますー！」

「・・・連れて行ってやれ」

「思春、いいのか？」

「ただし、亮が凌統を指揮しろ」

「・・・だそうだが、いいか？」

「はい！」

「よし、行くぜ！」

俺達は部屋から出る。

「亞莎は死なせない・・・俺が守る！」

咲

「・・・それで、お前は どうしたい」

剛鬼が聞いてくる。ここにいるのは、俺と一刀とシィと剛鬼と、剛鬼と一緒に来た知也だ。

「俺は、助けたい」

「・・・それは俺も同じだ」

「私も」

「そうじゃなきゃこの世界に来た意味ないからな」

剛鬼を除く全員が答える。

「・・・俺達は張遼を救うまでは手伝おう」

「それに関しては問題ない。詠は・・・」

俺は一度息を吸って、言った。

「詠は俺が助け出す。・・・絶対に、だ」

「ふ・・・なら用意をしろ」

「言われずとも。・・・一刀、部隊編成を。軍師はねねで行こう。
今の朱里じゃ無理だ」

「・・・ああ、補佐に紫苑辺りを付けられればいいか？」

「・・・だな」

「んじゃ、俺は弓兵に紛れてスナイピングと行くか」

「私と剛鬼と咲が単騎突入だね」

「・・・待ってくれ、曹操軍は何処にいるんだ？」

「ええと・・・定軍山だな・・・あ」

「・・・よし、歴史には歴史で返してやる！一刀！桃香と鈴々と紫苑と桔梗と星だ！」

「ああ、定軍山は道が狭い坂道だ。・・・あまり兵は連れられないな」

「それは相手も同じ、いや・・・相手は数が多すぎて足止めをくらっているな」

「一刀、早く準備して行こうよ！」

シイが急かす。

「あ、ああ！」

俺達は急ぐ。・・・その時、

「ま、待ってくれ」

「華雄・・・」

「私も・・・連れていってくれ」

「ダメだ。・・・回復魔法だって完璧じゃない。お前は休んでろ」

「だが・・・！」

俺は華雄の包帯が巻かれている部分を叩く。

「つぐ……!?!」

「ほら見る。万全の状態では負けたのに、負傷した状態で勝てるか？」

「だが私は……皆が戦っている時に、一人だけ……」

「お前のお陰で俺達は危険を知って早く行軍できたんだ。……詠達のことは任せてくれ。……必ず、救い出す」

「……ああ」

俺はもう一度走り出す。……後ろから、壁を殴る音が聞こえた気がした……

亞莎

「く……」

「やっぱり籠城じゃ大変ですよ?」

「……分かっています……ですが……」

「どのみちこれじゃあ負けちゃいますよ〜?」

「……解りました。……門を開けて、敵を集めてください」

その時、雨が降り始める。

「丁度いいですね〜」

ズガアアンツ!

その時、一人の武将が走ってきた。

「……貴殿が呂蒙か」

「……なるほど、貴方が関羽さんですね。……穏様、下がってください」

「ええ? 亞莎ちゃん……」

「大丈夫です」

内側から溢れる力を解放する。

「ハアアア!」

髪や瞳が変色し、服装も変わる。……大切な人を、二人もこの姿

で傷つけた・・・けど、

「私は、この力で生き延びる！」

「関雲長、いざ参る！」

亮

出陣したのは、蓮華と明命と思春と冥琳。雪蓮と祭さんとシャオは待機。そして思春の隊に、俺とクレスとユエと凌統が組み込まれた。

「まだ着かないのか!?!」

「無茶を言つな!そう簡単に着いたら苦労はしない！」

思春に怒鳴られる。

「くそ・・・雨も降ってきた・・・このままじゃ・・・」

「亮様!私が行きます！」

「バカか！お前一人が行ったってどうしようもない！」

「ですが・・・ごめんなさい！」

凌統はそう言っつて数人の兵士と共に先に行っつてしまつた。

「あのバカ・・・クレス、ユエ、飛ばせるか？」

「・・・馬なんて今乗つたんだよ！無理だ！」

「こちらもです！」

「・・・俺も馴れてないからな・・・！」

「・・・なら私が行こつ」

「思春・・・」

「亮、私の隊を任せたまぞ」

「・・・ああ！・・・凌統を頼む！」

思春が凌統と同じように駆けていく。・・・お前がやれっつて言われ
たそばからこれかよ・・・

咲

俺達は今、定軍山の頂上にいた。

「……どうやら敵さんも戦うみたいだな……」

俺は敵の陣を見ながら言う。

「この戦いの要は紫苑だ。……頼むぞ」

「私……ですか？」

「ああ。紫苑、派手に暴れてくれ」

「暴れるのは苦手ですけど……やってみますわ」

「安心せい、紫苑にはこの敵顔がついておるからな」

「ええ。よろしく、桔梗」

「手筈通り、俺達三人が一気に坂を降る」

「私達は張遼を」

「俺は詠を助ける。．．．こんなの、頼めたことじゃないんだけど．．．」

俺は頭を下げる。

「力を貸してくれ。別の世界のお前達に頼むのはおかしいって分か
ってる。．．．けど、俺達だけじゃ無理かもしれない．．．だから」

「大丈夫だよ。咲の仲間は私の仲間だから」

「今更ぐだぐだ言うな。．．．助けるならさっさとやれ」

「ありがとう。．．．一刀、桃香。後ろは任せたぞ」

「うん！」

「ああ、必ず二人を助けよう！」

アイツらが歴史通りに進まないと帰れないなら詠と霞．．．賈馱と張遼は仲間に入りたい筈だ。

「．．．全軍、出撃！」

『オオオオオオオツ！！』

戦が始まった。

「狙い撃つぜえ!!」

「全軍放てえ!」

銃弾や弓矢が飛び交う。

「(待っている・・・詠、霞・・・!)」

亮

「・・・見えた!」

遙か遠くに城が見える。・・・だけどまだ遠い。

「ユエ、何か無いのか!? 譜術かなにか」

「・・・すみませんです。私は水と氷と闇ぐらいしか・・・」

「クレスは・・・ないよな」

「・・・悪い」

凌統

「囲まれた・・・!？」

私は一瞬で展開した敵軍に吞まれてしまった。私は槍を振り回し、敵を倒していく。

「助けなきゃ・・・早く助けなきゃまた亮様が無茶をする・・・」
「ただ、その焦りが動きに無駄を増やしていく。」

ガキインツ!

「ああ・・・!」

槍が弾かれる。

「（私も死んじゃうのかな・・・）」

目を瞑ったその時、金属音がした。

ガキヤンッ!

「……どうした、諦めていいのか？」

「な……」

私を庇ったのは甘寧様だった。

「何で……私を助けたんですか、甘寧様！」

「仲間を見捨てることはできないからだ」

「仲間!? 嘘だッ!! 私を仲間なんて思っていないでしょ! 私が死んだ方が甘寧様だっていいでしょ!? 恨まれ続けるなら……」

「思春だ」

「え……」

「私の真名は思春だ。……そう呼べ」

「何、で……」

「お前を信用しているからだ。……仲間の為に動ける。その行動は評価している」

「でも……」

「こんな所で死んでも凌操殿は……」

「お父さんの話は止めて！……お父さんの何が解るの！？」

「お前を任されたんだ！」

「……え？」

「凌操殿は私との一騎討ちを望んだ。……私は、まだ未熟だった。刃が深く入ってしまったんだ。……だが凌操殿は笑って……私に、『娘を頼む』……そう言ってくれた」

「嘘……お父さんが……」

「だからいくらお前に恨まれようと私はお前を見守る……だから、今は私に着いてこい、凌統」

「……春鈴」

「何？」

「春鈴しゅんれい……私の真名」

「……」

「皮肉ですね。“鈴”の甘寧の真名の思“春”……私はこの真名は嫌いだった……だけど、今なら誇りに思えるかもしれない」

「ふ……ほら」

思春様が手を差し出してくる。

「……はい」

私は手を掴む。

「さあ、亞莎を助けるぞ」

「……はい！」

私は近くに落ちていた槍を拾う。思春様は剣を構える。

「鈴の音は、黄泉路へ誘う道しるべと思え！」

亮

「甘寧隊は思春と凌統を援護しろ！クレス、ユエ、跳ぶぞ！」

「ああ！」

「はいです！」

俺達三人は一気に城の中に飛び込む。

「私がやります！アブソリュート！」

パキインッ！

兵士が凍っていく。

「そらっ！」

それをクレスが砕く。

「ここは私達に任せて・・・」

「お前は呂蒙を！」

「ああ、頼む！」

俺はさっきから音が鳴り続けてる方へ走り出した・・・

咲

「孟徳の元には行かせん！」

「うつせえ！」

眼帯野郎に迫るが、簡単に馬から落とされる。

「うわ！？」

「咲！？きゃっ！？」

シイも何かの攻撃に弾かれて落馬する。

「美しくない……実に美しくない！美しくないものは死になさい！」

シイの前には鉄の爪を装着した男がいた……なんだ、このオカマは。

「剛鬼、お前だけでも！」

「言われずとも、先に行かせてもらう」

剛鬼は馬に乗ったまま先に行った。

「シイ、悪いな……ってシイ？」

「美しくない……ふーん……それって、私が醜いってこと？」

「何を知れたことを……ええ、貴女は醜い」

ブチン

「あ……」

「……千の雷……掌握」

シイがマガリア・エレベアを発動させる。……俺の闇が反応するほどの力だった。

「少し……頭冷やそうか」

シイは戦い始める。

「俺は五十嵐咲。……アンタは？」

「俺は夏侯惇だ」

俺は空間を開き、武器を取り出し……

「……つて重おっ!?!」

俺が取り出したのは偃月刀だったが、やけに重い、こんなの作った覚えはないが……

「やるしかない……ハアアア!」

Bモードを発動してやっと偃月刀を持てた。

「う……おおお！」

偃月刀を振るう。いや、偃月刀に振られた。

ズガアアン！

近くの岩に当たり、岩が砕けた。……なのに刃はこぼれない。

「そんなので俺に勝てると思っているのか！」

「いつも勝てると思ってるねえよ！……于吉う！」

『やるんですか？』

「一分持てば上等！」

『やれやれ……ですが、隙あらば乗っ取らせさせていただきますよ』

「やれるもんならな！ウオオオオッ！」

あの姿に変わり、偃月刀を嵐のように振り回す。

グオンツ！ビュオンツ！

「大……旋風！」

回転しながら放つ一撃は……夏侯惇を大剣ごと叩っ斬った。

バキヤアアンツ！

「うおおお！？」

浅かったか・・・なら次・・・いや

「悪いが退かせてもらおう」

「・・・時間、だな」

闇の力を解除する。・・・シイは・・・

「タアアアアア！！」

ズゴオオオンツ！

「・・・終わった・・・みたいだな」

俺とシイは再び馬に乗り、剛鬼を追った・・・

亮

「いた！」

俺は関羽と戦っている亞莎を見つけた。．．．だが、亞莎は負けていた。

バキィッ！

「あぐ．．．」

亞莎が吹き飛ぶ。．．．そして関羽は止めを刺そうとする。

「．．．また頼るか！モーションキャプチャー、ジーク！」

俺は亞莎に飛び込む。

バシユウン！

亞莎の髪の一部に真っ白のメッシュが入り、瞳も真っ白になる。

（亮さん．．．ですか？）

「（ああ、助けに来た！）」

（良かった．．．怖かったんです。．．．私．．．死んじゃうと思
って．．．）

頬に涙が落ちる。

「（・・・泣くのは後だ。・・・今は、戦う!）」

腰にベルトを巻く。

「変身!」

『ウイングフォーム』

仮面ライダー電王ウイングフォームに変身する。

「降臨・・・満を持して」

「・・・面妖な・・・!」

関羽が驚く。

「俺達の絆の強さ・・・見せてやるっぜ!」

（はい!）

デンガツシャーをハンドアクセス、ブーメランに組み立てる。

「ハア!」

「ぬん!」

ガキインツ!

力では負ける・・・なら、技で・・・

「タァ！セヤツ！」

舞うようにデングァッシャーを振り回す。

（亮！）

「分かってる！」

パスをベルトに通す。

『フルチャージ』

「我が刃の前に屈しろ！」

ブーメランを投げる。

「ぬうん！？」

ガキインツ！

「本命はこつちだ！」

ハンドアックスを隙が出来た関羽に投げる。

「ぐおお！？」

ブーメランとハンドアックスが関羽の周りを飛び回る。

ドガアアアッ！

「やったか・・・？」

（・・・これで終わってくれれば・・・）

だが関羽は立っていた。青龍偃月刀は壊れ、全身ボロボロだったが、確かに立っていた。

「・・・私の敗けだ。殺せ」

「断る」

俺はベルトを外し、亞莎から離れる。

「お前は殺さない。・・・お前の帰りを待っていてくれる奴等がいるだろう？」

「・・・だが」

「私は、無抵抗の人を殺したくありません」

「呂蒙・・・まさか、貴殿に情けを掛けられるとはな・・・」

「今なら退却すれば逃げられる。・・・行け」

関羽は立ち去っていく・・・最後に、振り返ってこう言った。

「この恩は忘れぬ。・・・お主の名前を覚えてくれるか？」

「・・・大澤亮」

「覚えておこう・・・」

こうして・・・亞莎を助けることに成功した・・・

咲

「あ・・・剛鬼！」

大量の死体の中を馬から降りて走る。・・・剛鬼の奴、一人でこの量を殺ったのか？

「・・・咲か、張遼は助けたぞ」

霞が、ボロボロの身体で立っていた。

「なんや・・・ぎよーさん助けが来とるな・・・」

「霞！無事か!？」

「ウチは平気や・・・はよう詠を助けたり」

「・・・分かった・・・」

「行かせるか！」

「仲間の仇！」

曹操の兵士が集まってくる。

「・・・咲は行って・・・やれるよね？」

「それは俺に言っているのか？」

剛鬼とシィが並ぶ。

「丁度いいからどっちが多く倒せるかやってみようか？」

「いいだろう・・・行くぞ」

この二人が並ぶと恐ろしいな。

「・・・頼む！」

俺は走り出した。

「・・・おい、曹操様は何でこの小娘を生かしておくんだ？」

「さあな。・・・なあ、ここって誰も来ないんじゃないかねえの？」

「おい、止めておけよ。曹操様に知られたら首が飛ぶぜ」

「いいんだよ、バレなきゃ」

「ちょ・・・ボクに何をやる気？」

「決まってるだろうが・・・」

兵士は詠に近寄っていく。

「こ、来ないでよ！この変態！」

「おい、そこまでにしてお・・・ぐは！？」

ズシャア！

兵士の一人が血を撒き散らしながら倒れる。

「え・・・」

「・・・テメエ」

俺は残った兵士に近寄る。

「ひ・・・！」

「詠に何をしようとしたんだ・・・」

俺の声に兵士が怯む。俺は兵士の腕を掴み、へし折る。

ゴキン

「ギャアアアアア！？」

「聞こえないのか・・・？」

もう片方の腕も折る。

ボキン

「アギヤアアア！腕、腕がああああ！？」

「・・・もういらぬか、その四肢」

偃月刀で両手両足を切り捨てた。

「あああああああああああ！?!?!?!」

俺は偃月刀を振り上げる。

「た……助け……」

「地獄に落ちろ」

ブシヤア

兵士の首が飛ぶ。

俺は返り血を浴びないように避けながら詠の元に行く。

「……詠！無事か！？」

俺は詠を縛っていた縄を切る。

「あ……う、うわぁん！咲……咲い……！」

詠が泣きながら抱きついてくる。

「うう……ぐす……わぁん……！」

「怖かったよな……大変だったな……けどもう大丈夫だ……
・皆が助けに来てくれた」

「もう……咲には会えないかと思ったら……ボク……周りが
暗くなって……」

「ああ・・・さ、帰ろう。皆が待って・・・」

「そうはさせるかあああ！」

体格が太い男が剣を振りかぶる。

「詠！」

俺は詠を庇うように抱き抱える。・・・だが、

タアン・・・

ドス・・・

「がは・・・悖、兄・・・」

銃弾と矢が男を貫いていた。

「・・・やるね、黄忠」

「そちらも・・・中々の腕ですわ」

「黄忠の弓の精度もな」

「・・・紫苑、で構いません」

「・・・真名だろ？」

「いいんですよ。知也さん」

「・・・咲ーッ！」

シィと剛鬼がやって来た。

「大丈夫！？」

「ああ、知也と紫苑に救われた」

「・・・敵は撤退したようだな」

「そうなのか？」

「序盤の知也と黄忠の精密射撃で敵が崩れていたからな」

「・・・ありがとう、二人とも」

「お礼を言うのは私達だけにじゃないよ。・・・ね、剛鬼？」

「そうだな、シィの言う通り、他の仲間にも礼を言うんだな」

「・・・お前ら、仲良くなってないか？」

「だって実力が均衡してるって分かったから・・・」

「お互いがいつか本気で戦える力を持つ奴はそういないからな。息も合っ」

「そうですね・・・」

こうして、俺は詠と霞を助け出せたのであった・・・

絆（後書き）

亮

「今回は凌統の設定です」

姓名 凌統

字 公績

真名 春鈴

CV 中原麻衣（えっ

武器 直槍（兵士の標準装備）

外見

腰まである黒い髪をポニーテールにしている。・・・と言うか肌が白く、若干弱々しそうな明命を想像するのが一番早い。

性格は真面目。だが意外とドジな部分もある。基本は敬語だが、思春に対してはたまに地が出る。思春を親の仇として憎んでいたが、今はそれなりに和解している。

亮 「何で中の人まで!？」

咲 「途中の“嘘だ”発言だろ」

亮 「俺達だって決まってるのに……」

咲 「俺達は……あれだ、読者の皆さんの好きな声で再生されてるんだよ」

亮 「オオールウハイルウ……ブウリイタアニアアアアアア！」

咲 「ないない」

亮 「……それでは次回の真似と開閉と世界旅行」

咲 「お楽しみに！」

傳い平和く（前書き）

あれ、何か呉と蜀の空気が違うような……ではどつどつ。

傳い平和

「・・・占拠された洛陽を拠点に曹操は魏を設立した。・・・だが、二つの戦で戦力を消費したのか動きは見られない。・・・だが、それは呉と蜀も同じだ。・・・だから俺達は戦力を増強しながら訪れた一時的な平和を楽しむのだった・・・」

「・・・んで、今回はいつまでいるんだ？」

俺はお茶を飲むクレスとユエに尋ねる。

「・・・俺に聞かれてもな・・・」

「シイさんに聞かないと分からないです」

「・・・そうか・・・まあ、帰るまではここを家のようにつて、俺が言うことじゃないか・・・」

「いや、構わない」

蓮華が入ってくる。

「・・・蓮華、堅いぞ」

「そうです。蓮華さんは亮さんと二人だともっと女の子らしいです」

「な！？な、何を・・・」

蓮華の顔が赤くなる。

「・・・何で、お前らはそれを知ってるんだ？」

「そりゃ、見て読んで聞いていいるからな。・・・例えば、明命が猫化して亮に・・・」

「待て待て待て待て！？まさかそこまで知ってるのかよ!？」

「はい、明命さんや大河内さんと仮契約・・・」

「言つな！ッ！それ以上言わないでくださいお願いします!」

俺は全力で二人に頼む。

「・・・ふ、ふふ・・・」

蓮華が笑う。

「蓮華？何がおかしいのかな？」

俺は顔をひきつらせながら言う。

「え、な、何でもないわ！」

「嘘つけ！あんなハツキリ笑ってたる！」

「そんなわけないでしょ！勝手なことを言わないで！」

「・・・クラスメートに似たような声の奴がいたな」

「そうですか？」

ガキン・・・

気がついたら春鈴と思春が鍛練をしていた。・・・凌統は出世した。凌統は門を守るただの兵士から思春の副将になった。つまり、俺と同じ位だな。・・・それには俺と思春が蓮華に進言したのもある。その際に凌統は真名を・・・春鈴という真名を紹介、呼ばせてくれるようになった。・・・本人曰く、前までは自分の真名が嫌いだったらしい。

「・・・しっかし、随分仲良くなったもんだな」

カキン・・・

槍と剣がぶつかる。

「・・・今は、平和なんだよな・・・」

「何言ってるんだよ、亮。・・・これから平和をまた作るんだろ？」

「・・・ああ」

「私達もお手伝いするです」

「・・・ああ、悪いな」

咲

定軍山の戦いから数日。特にには変わったことはない・・・変わった

たとえば董卓軍の皆が蜀に加入したことぐらいだ。．．．それ以外は変わらない。何処と無く暗いムードと雛里の容態．．．

「皆、さん．．．おはようございます．．．」

朱里がふらふらしながら入ってくる。．．．この無事な仲間が一番様子が酷いのは彼女だろう。日に日に様子はおかしくなって言うてる。

「朱里．．．少し休めよ。そんな無理したって雛里は．．．」

「．．．ておいてください」

「え．．．」

「放っておいてください！鳳雛って呼ばれている雛里ちゃんを落鳳坡がある場所に行ったのは私の配置が間違っていたから！．．．咲さんに何がわかるんですか！親友が．．．あんなことになって．．．」

見たことのない朱里の形相。普段の俺ならキレて言い返しているだろうが、今の朱里を見たら何も言えなくなってしまう。

「・・・悪い、けどな・・・皆、心配してるんだ・・・」

「あ・・・す、すみません・・・咲さんに怒ってもどうしようもないのに・・・失礼します」

朱里はそう言って歩いていく。・・・俺に出来ることはないのか・・・？

そして今、俺と一刀とシイ、五虎將軍と桃香が玉座のある部屋にいた。

「・・・なあ、剛鬼は？」

一刀が俺に聞く。

「アイツらは・・・どっかにいった。」

『俺はしばらくこの世界を見てみる。・・・また何かあったら来るぞ』

『・・・悪いね、俺も剛鬼に着いていくよ。・・・じゃあな、また

敵を狙い撃つぜ』

そう言つて二人は何処かに行った。

「……ここまで来たら説明してもらいますぞ。主、咲殿」

星が言う。

「私もおかしいって思つてるんだ。……なあ、説明してくれよ」

「お二人の行動は明らかに何かを知っている動きです。……説明していただけますか？」

翠と愛紗も言う。

「……分かった。俺が話す」

俺が立ち上がる。

「俺や一刀に亮……シイも多分そうだ……未来から来たのは知つてるな？」

「私達はその人を天の御遣いつて呼んでるんだよね」

俺は桃香の言葉に頷く。

「……そしてその未来ではこの世界の出来事……つまり、歴史が伝わっているんだ。それが三国志……」

「……それでご主人様達が動いているのですね」

紫苑が言う。

「……まあ、その三国志は数人以外全員男だけだな。……とと、それで、俺の世界では更にこの世界の話がゲーム……簡単に言うと声や音がでる紙芝居で話が出ているんだ」

「……俺はゲームの登場人物何だよな？」

一刀が言う。

「まあな。そうやって正史の話が分岐したのは外史ってワケだ」

「にゃ？どついう事なのだ？」

「私もサツパリだ。もっと分かりやすく説明してくれよ」

「やれやれ脳筋族が……」

「んだと！？」

鈴々と翠に星が呟く。

「……話がそれたな。外史は……そうだな、例えば鈴々。ラーメンと焼飯、どっちかしか食べられないって言われたらどっちを選ぶ？」

「うん……無理をして両方食べるのだ！」

俺達全員椅子からコケた。

「ま、まあ。その時、外史が出来上がるんだ。鈴々が片方しか食べなかつた世界や、どっちも無理して食べた世界がな」

「めげないね、咲」

シイが言う。

「にゃ？」

「つまり、選択肢で悩んだ数だけ外史が出来上がる！以上！」

「何となくわかつたよ。・・・まあ、まだ怪しいけど」

「鈴々も何となくわかつたのだ！」

「それで・・・えっと・・・話どこまで進んでたっけ？」

「咲と恋が何処まで進んだか」

「そうそう、一緒に寝たり・・・ッ！」

ガツン！

「痛あ！？咲が本気で殴つたあ！」

「下らない冗談は言うな・・・シイ・・・！」

シイに拳骨を喰らわした。

「……とりあえず、今この世界に何で敵が現れたか……だろ？」

一刀が言ってくれた。

「そうそう……俺が最初に異変を感じたのは祭りの途中だ……祭りの夜、俺は通路を歩いていた時、怪しい兵士を見つけたんだ……そいつは鈴々を暗殺しようとした」

「「「え!?!」」」

一刀とシィ以外の全員が驚く。

「鈴々は知らなかったのだ」

「……実は正史の三国志にもその出来事は存在している……まず、関羽が呂蒙と陸遜に捕らえられ……首を跳ねられる」

「何い!?!」

「落ち着いて愛紗。俺達の世界の話だよ」

一刀が愛紗をなだめる。

「……そして、それに激怒した劉備は趙雲や諸葛亮の言葉を無視して呉に戦を挑むんだ」

「……」

「まあ、色々あって……そのあと、張飛の扱いにキレた兵士が張飛を暗殺した……そして、劉備は義兄弟を二人とも失い、床

に伏せた」

「「「「」」」」」

三姉妹は黙っていた。

「・・・そして、劉備も世を去り、諸葛亮が蜀を仕切ることになった。・・・だけど、その諸葛亮も病に掛かった」

「・・・」

「諸葛亮も世を去った。そして・・・今度は魏延が蜀を裏切るんだ」

「焰耶ちゃんか!？」

「いや、焰耶ではないんだけど・・・」

俺は気を取り直して続ける。

「・・・その魏延も諸葛亮によって準備していた馬岱により、討ち取られた・・・まあ、諸葛亮が死んだ時点で蜀の勝利は消えたんだけどな」

「質問してよろしいかしら?」

紫苑が聞いてくる。

「じゃあ・・・雛里ちゃんも・・・」

「ああ、鳳統は落鳳坡で矢を身体に浴び・・・死ぬ」

「それを咲殿が救ったのですな。．．．なるほど、あの時叫んでいた主の意味がわかった」

星が納得したようだった。

「．．．あまり聞きたくないけどよ。私達はどうやって．．．」

「不明だ」

「はあ!?!」

「趙雲、馬超、黄忠は気がついたら死んでいるんだよ」

「それは安心していいのかどうか．．．」

「複雑ですわね．．．」

「ああ．．．」

「じゃ、じゃあ白蓮ちゃん達も．．．」

「ああ、白蓮は．．．てか公孫贇は結構早く脱落したんだ。その際に趙雲が生き延びて劉備に参加した．．．だっけ?」

「あれ、咲知らないの?」

「．．．知らないってか覚えてないってのが正しいかな」

「ふーん．．．」

「袁紹は・・・忘れたけど、顔良と文醜は関羽に討ち取られてる」

「あ、ねえねえ 私達が男なら、ご主人様は女の子なの？」

「残念だけど一刀はいないんだ」

「・・・俺が女って・・・」

『主は元おと』

「キリエー？少し黙ってようねー？」

シイがデバイスに殺気を叩き込む。

「・・・じゃあ、これからは・・・」

「その歴史に注意ってことだな」

「・・・男の我らはどのような活躍を？」

純粹に聞きたいのだろう。星が聞いてくる。

「うーん・・・趙雲なら、劉備の子供を抱いて曹操軍の中を単騎独走したってのが有名だよな？」

「そう、だな」

「ええ！？私子供なんていないよ！？」

「だから男の方だったの」

「鈴々はー？」

「たった一人で曹操の軍勢を追い返した・・・だったかな」

「それは鈴々もやったのだ」

「・・・そうだったのか」

「ああ、やってくれたんだ、鈴々は」

「一刀が言う。」

「じゃあ私は・・・」

「黄忠はさっきの定軍山だよ、紫苑」

「そうそう、劉備だか諸葛亮だかに『もう年だからー』って言われ・・・て・・・」

俺はそこまで言ってしまったと思った。紫苑に黒いオーラが出ている。

「・・・桃香様？」

「わ、私じゃないもん！」

「・・・でもさ、諸葛亮って病で死んだんだろ?・・・なら、今の朱里って不味くないか?」

「ッ!」

俺と一刀は翠の言葉を聞いて走り出す。何で気づかなかったんだ・・・!

「何処にいると思う、一刀!？」

「雛里が寝ている部屋だろ!」

俺達は部屋に転がり込むようにして入る。・・・最初に目にしたのは床に倒れた朱里の姿だ。

「朱里・・・!」

「朱里、しっかりしろ!」

「く・・・おい、誰かいないのか!？」

「医者を呼んでくる……」

「待て！まず朱里を寝かせてやれ！俺が行く！」

俺の方が早く走れる。そうして連れてこようとしたが……

「お医者さん連れてきたよ！」

「速あ！？」

シイが医者を連れていた。

「か、患者は何処にいるんだ！？この俺の五斗米道コトツクミチで病魔を滅ぼしてやる！」

「……ってこっちだ！」

俺はすぐに医者……華佗を朱里のもとに案内した……

亮く「ええい！」

「よっ」

カキインツ！

俺と春鈴は手合わせをしていた。・・・そして俺は鈴音を腰に納めて言う。

「なあ、春鈴は槍苦手だろ？」

「え、ま、まあ・・・武器全般が得意じゃなくて・・・全部平均だったんです。・・・お父さんは色んな武器を使えたんですけど・・・」

「・・・なあ」

俺は拳を構える。

「体術ならどうだ？」

「え？」

「やってみたことは？」

「無いですけど・・・やってみます！」

春鈴は身体を半身に、左腕を軽く突き出して右腕を引く・・・いわ

ば格闘家スタイルの構えを取る。・・・ちなみに俺に体術時の構えはない。何故なら体術を使うときは大体緊急だからだ。

「はっ」

俺は手始めに左ストレートを放つ。

バシン！

春鈴はそれを左手で流し、右の拳を俺の顔面にかすらせる。

ビュン！

「おお」

動きのキレが違う。更に春鈴は右足を軸にして左足で連続で蹴りを放つ。

「うおお！？」

俺は弾く弾く。

「ちゃちゃちゃっ！」

春鈴は蹴る蹴る。

「足癖が悪い奴だ、な！」

俺は足を掴み、投げようとしたが、春鈴は巧みに身体を捻って俺の

頭を足で挟む。

「(ヤバ・・・)」

そのまま一回転。俺は頭から叩きつけられる。

「つつ・・・」

そして春鈴は倒れた俺の足に四の字固めをおおお！？

「いだだだだ！？ギブギブ、マジでギブ！！」

俺は地面を全力で叩きながら春鈴に許しを請う。

「え・・・ああ！すみません！」

慌てて春鈴は離れる。

「・・・足が次世代型の人類になるかと思った・・・」

涙目になりながら足をさする。

「・・・よく、お父さんに教えてもらってたんですけど・・・」

「凌操さんごんだけ器用なの！？」

「あ、亮さん」

「あー、亞莎ええええ！？」

俺は亞莎を見てビックリする。あの闇の姿だったからだ。

「あ、あああ亞莎？俺、何かした？何で闇をまとっているんですか？」

すると亞莎は自分の姿を見て慌てる。

「こ、これはちょっと慣れておこうと思って・・・べ、別に亮さんには危害を加えませんかから安心してください」

「？どうして亞莎様が姿を変えると亮様が怖がるんですか？」

「・・・色々あったんだ・・・色々・・・」

俺は亞莎に尋ねる。

「そつだ、春鈴と戦ってみてくれよ」

「え？い、いいですけど、春鈴はいいの？」

亞莎は明命と同じように春鈴に接する。・・・俺にもそれくらいの態度ならな！

「か、構いません！よろしくお願いします！」

そして二人は戦う。・・・女子の殴り合いは見てて怖くなった。

気晴らしに街に出る。

「あ、亮く」

「雪蓮。・・・また酒か？」

「大丈夫よ。ちゃんと仕事はやったから」

「ホントか？」

「本当だ」

「あれ、冥琳もいたのか」

「ああ、雪蓮に付き合っていた。・・・亮は？」

「ちよつと気晴らし。・・・また戦が始まるなら、気は抜けるうちに抜いておかないと。いざってときに困る」

「・・・確かにな」

「・・・でもさ、民には活気があるよな。・・・また戦が起こるか
もしれないって知ってるんだろ？」

俺の言葉に冥琳が頷き、同時に街の人が言う。

「何言ってるんですか御遣い様。また戦が始まるとしても、また御遣い様達が静めてくれるんですよね？」

「・・・そのつもりだけど」

「ならあつしらに心配する事はないんですよ。だから普段通りなんです」

・・・信じてくれてるんだな。

「次の戦は私も戦おっかな？」

「・・・雪蓮が出れば戦が早く終わりそうだな」

「戦力も増えた事だしな」

「ああ・・・」

俺は空を見上げる。

「誰も・・・死なせたくない」

そう空に向かって呟いた・・・

咲

華佗が部屋から出てくる。

「……朱里は？」

「一応無事だ。……だが後少し遅れていたら不味かったな」

俺と一刀はため息を吐く。

「よかった……翠のお陰だな」

一刀が翠に言う。

「別にふと思った事を言っただけだから気にしないでくれよ」

「シイもサンキュー。華佗を迅速に連れてきてくれて」

「私に越えられない壁はないからね」

「……どうやってシイが華佗を連れてきたかは聞かないでおこう。

「ですが困りましたね」

「……朱里と雛里、蜀の要の軍師が二人とも倒れるとはな」

紫苑と翠が言う。

「この際、詠とねねに任せるか？」

俺が桃香に言う。

「うん、それがいいよね」

「……でもどうするのだ？いつまでも詠達に任せたら詠達が大変なのだ」

「……新しい軍師とか……馬謖はどうだ？」

「泣いて斬りそうだからやだ」

一刀の案を真つ向から否定する。

「……やっぱり紫苑と愛紗が補佐するしかないだろ。……ま、あの二人には休んでもらうさ」

「……」

皆が黙る。

「さ、解散解散。今の内に平和を満喫しようぜ、な？」

そう言つと皆が帰っていく。……俺は朱里の部屋の隣……雛里

の部屋に入る。

「う、うう・・・助け、て」

雛里はうなされていた。

「・・・俺の闇なら」

強い闇に俺の闇が疼く。・・・なら負の感情は？・・・俺の闇で負の感情を吸収できるかもしれない。

「これしか・・・ないよな」

俺は右手を高々と上げて、右手だけ闇を具現させる。・・・そして、振り下ろそうとしたとき・・・

「何をやっている？」

「ッ!？」

焰耶に声を掛けられた。

「……まさかとは思うが、自分を犠牲にしようとしているんじゃないだろうか？」

「……これしか手段はない。……ぐっ!？」

焰耶に襟を掴まれる。

「何故自分を犠牲にするんだ!！」

「それしかないだろ!華佗にだって治せないなら……俺がやるしかない!」

「だが!」

「やるっきゃねえんだよ!」

焰耶を無理矢理振りほどく。だが焰耶も負けじと組みついてくる。……その時、雛里が目を覚ました。

「だ、誰?……いや、こないで……許してください……怖い、助けて……誰かぁ……!」

目を見開き、涙を流しながら暴れる雛里を見て、もう迷いはなかった。

「ダークファイガ!」

ズドン!

「ぐは・・・咲・・・」

焰耶が壁に叩きつけられ、気絶する。

「悪いな、焰耶」

そして雛里に手を突き刺した瞬間、俺の意識は吞まれた・・・

辺り一面真っ暗だ。この景色は知ってる。俺の心の中と同じ・・・
黒い感情に支配されている景色だ。

「・・・」

そしてその奥に、雛里がしゃがみこんでいるのが見える。

「雛里・・・！」

「・・・」

雛里に近寄る。

「……ここは何処ですか？暗くて、寒くて、怖くて、痛くて……」

「帰ろう。皆待っている」

「どうしても帰れないんです。……怖くて、立てなくて」

「その為に俺が来た。……なあ、一人でダメなら二人で行けばいいだろう？……なあ？」

俺は手を差し出す。

「もう……平気なんですか？もう怖くないんですか？」

「ああ、必ず俺は仲間を守る。……だから、帰ってこい」

「……はい」

雛里が俺の手を取る。その瞬間、世界に光が溢れた気がした。

「……あれ」

目が覚める。そこはどこかの布団の上。

「ここは……」

俺は起き上がる。すると蜀の面々が部屋に入ってきた。

「……咲、お前は……!」

焰耶が俺に掴みかかろうとするが、それも早く一刀が俺を殴った。

バキィ!

「つぐ!?……最近よく殴られるな」

「ふざけるなよ! 焰耶から全部聞いたぞ! 一人で何突っ走ってんだよ!」

珍しいな、一刀がこんなに怒るなんて。そのせいか他の面々も呆然としている。

「少しは俺達を頼れよ! 一人でやろうとするなよ! なんのための仲間なんだよ!」

一刀は俺の胸ぐらを掴んで叫ぶ。

「……仕方ないだろ。苦しむ雛里を見たら放っておけなくなった。……雛里が元に戻れば朱里も元気になる。……そう判断して、」

ガッ!？」

バキィッ!

再び一刀に殴られる。

「だからって、もしお前が死んだらどうするつもりだったんだよ! 考えなしにも程があるだろ!」

「……ぐだぐだうっせえよ!」

バキィッ!

「ぐう……」

俺も一刀を殴り返す。

「俺が本当に何も考えてないと思ってんのか!？」

「よくもやったな!」

「ああ!？やんのか!？」

俺と一刀が殴り合いを始めようとした瞬間、

「そこまで!ッ!」

ガッン!ゴッン!

「「あだっ!?!」」

シィに拳骨を落とされる。

「二人ともそこまでだよ。結果的に皆助かった。でしょ?」

「・・・そうだけど」

「咲も断りもなく勝手なことをしたでしょ?皆に謝って」

「・・・俺は・・・」

「頭冷やさされたい?」

「皆さん、ごめんなさい」

心から謝罪をした。すると焰耶がやって来る。

「・・・仕方ない。許してやるっ」

「焰耶・・・」

焰耶は笑顔で拳を構える。

「一発で勘弁してやる」

目の前が暗くなった気がした。

「……皆して……」

結局あの後翠にも殴られ、一刀にももう一発殴られ、ねねに蹴られ、詠にビンタされた。霞は口を聞いてくれなく。桃香と愛紗と紫苑は目に見えないオーラで俺を威圧し、たんぼぼは俺を罨にはめ、桔梗には罰として酒を奢らされて、鈴々には大盛りラーメン、星はメンマ丼を奢らされ、肉体的にも精神的にも疲労困憊な所で華雄に模擬戦を挑まれ、白蓮や麗羽達には暇潰しに付き合わされ、南蛮ズには追いかけれられ（捕まるとかじられる）そして今……

「……咲」

「はい」

恋の前で正座していた。

「……恋は怒ってる」

「……はい」

「咲は勝手なことをして皆を怒らせた」

「おっしやる通りです」

「・・・本当なら、恋も何かを言いたい」

「・・・もう殴るなり奢らせるなり模擬戦やるなり好きにしてください」
「さっ」

「じゃあお願いする」

「・・・何なりと」

「もう・・・無茶、しないで」

「恋・・・」

「咲はいつも他人優先」

「・・・否定はしない」

「これからは自分も大切にしていって」

「・・・善処はするけど、保証はできない」

俺はこれだけは言いたかった。

「仲間が死にそうになったら身体が勝手に動く。・・・特に、恋・・・
お前が窮地に陥った時は正気が保てないと思う」

「・・・じゃあ、窮地に陥らなければいい」

「・・・それが一番だな」

「じゃあ、約束してくれる？」

「ああ、誓うよ。……これからはちゃんと自分の身も考えて行動する」

……俺は、そう言った……

夢い平和（後書き）

亮

「次回予告タイム！」

咲

「二度あることは二度あるって言うしな・・・」

「俺は紅音也。えらい人だ」

「イライラするんだよ・・・」

「なんでコイツらが・・・」

「私に何をする気だ！」

「お前は我らの操り人形になってもらおう」

「・・・もう、戦うしかないのか？」

「誰か焰耶を救ってくれる奴はいないか・・・！」

「ここにいるぞーッ！」

次回『焰と野花』

亮

「・・・」

咲

「明らかに最初の二人、アレだよな」

亮

「・・・言っなよ」

咲

「それでは次回の真似と開閉と世界旅行！」

亮

「次回もお楽しみに！」

焰と野花（前書き）

恋姫じゃなくて仮面ライダーに……ではございませぬ。

焰と野花

咲

「曹操とは別の軍勢が動いている?」

俺は報告を聞いて、そう言った。

「ああ、どうやらこの混乱に乗じて賊が一塊になったらしい」

一刀が答える。

「そいつらはどうする?」

「今、焰耶が偵察に行っている。・・・報告を待とう」

「そうだな・・・」

焰耶

「・・・随分とでかい城だな・・・」

私は数人の兵士と共に偵察をしている。

「魏延様、ここら辺でよろしいかと」

「ああ・・・撤退するぞ」

そう言った時、どこからか音が聴こえてきた。

「・・・何だ？この音楽は」

音を発している場所を探すと、軽そうな男が何かを弾いていた。

「・・・運がよかったな。この俺の演奏が聞けるなんて、まさに宝くじの一等が当たるくらいの確率だ」

「何者だ貴様は」

「・・・気の強い女も嫌いじゃない。全ての女性は俺の為にあり、俺は全ての女性の為にある」

馴れ馴れしく近づいてくる男を避ける。

「触るな！・・・何者だと聞いている！」

「……まったく、どっかの誰かさんみたいだな」

男は自分の胸に手を当てて言う。

「俺は紅音也。えらい人だ」

「紅……音也」

私は鈍砕骨を構える。

「……貴様は敵か？味方か？」

「待て待て、俺は女を傷つけるのは趣味じゃ、ない。お前の相手は……」

男がそう言うといきなり灰色の壁のようなものが出てきて、中から全身に鎧を……確か、仮面ライダーと言われているものが現れた。

「イライラするんだよ……」

紫色の仮面ライダーがそう言う。

「……お前を倒せば少しはイライラが収まりそうだなあ……」

首をゆっくり回り回しながら仮面ライダーが言う。

「……いいだろう相手をしてやる」

私は鈍砕骨を振り下ろす。

ズガアア！

「・・・そんな程度か？そんなんじゃイライラは収まんねえんだよ」

「な・・・！？」

仮面ライダーは片手で鈍砕骨を受け止めていた。

「・・・これで終りだ・・・」

仮面ライダーは私を投げ、杖に紙切れを入れる。

『ファイナルベント』

「ハアアアア・・・オラアッ！」

ズバババンツ！

「うあああつ！？」

連続で放たれた蹴りを防ぎきれずに吹き飛ばされる。

「うっう・・・」

「・・・チツ・・・イライラする・・・」

仮面ライダーの姿は消える。

「・・・予想外に簡単だったな。・・・まあ、あまり傷つけなくて良かったか」

「紅、音也……！」

「……まさか、ライダーキックを喰らって無事とは、驚いたぜ。
……連れていけ」

「く、離せ……！」

賊が私を押さえつける。

「私に何をする気だ！」

すると賊の一人が答えた。

「お前は我らの操り人形になってもらう」

「何……！？止める！離せ！……ぐっ……」

首に衝撃が走り、視界が黒くなった……

咲

あれから数週間が経過した。

「・・・おかしい」

「うん、私もそう思う」

「連絡も途絶えてんだろ？」

「・・・」

今は軍議中。焰耶からの連絡が途絶えたのだ。

「・・・」

桔梗はさつきから貧乏揺すりをしていて、心配と苛立ちが見られる。

3464

「一刀、俺はその賊を攻めることを提案する」

「だけど、俺達の敵はその賊だけじゃない。ここで魏に動かれたら・・・」

「・・・お館様！ならこの敵顔めに兵を貸してください！」

「桔梗・・・」

「焰耶は僕の娘のようなもの・・・頼みます！」

「……たんぽぽからもお願い」

あのたんぽぽも焔耶の搜索を支持する。

「……けど」

「なら、私達が行けばいいよね？」

「……ああ、そうだな」

「シイ、剛鬼に知也……」

俺は一刀に言う。

「それに、最悪呉に力を借りればいい。蓮華や亮なら力を貸してくれる筈だ」

「……分かった。……軍師は詠に頼もう。咲、桔梗、たんぽぽ、シイ、剛鬼、知也、翠、星は出陣用意」
『応!!』

亮

「援軍要請？」

「ええ。蜀から賊を倒すための援軍が欲しいと来ているわ」

俺と蓮華はさっき来た援軍要請の話をしていた。

「……正直、この時期に賊を討伐する意味はないと思うわ」

「……だけど、動いているなら何か理由がある。俺は増援を送った方がいいと思う」

「……解ったわ。人員は……」

「思春の隊……つまり、俺と思春と春鈴が行く」

「……じゃあ私は思春に伝えるわ」

「ああ、行ってくる」

俺は一旦街に出て、注文していたあるものを取りに行った……

「……春鈴！」

俺は春鈴に話しかける。

「あ、りよ、亮様……」

「……緊張してるのか？」

よく考えたら副将になって初めて出陣か……

「春鈴、出世祝いだ」

俺は箱を手渡す。

「これは……？」

「開けてみるよ」

春鈴が箱を開けると、中から武器を取り出す。

「武器……ですか？」

「そう、ブレードトンファー」

「ぶねーどとんふぁー？」

俺は春鈴から武器を借りる。

「普段は普通のトンファーだけど、ここをこつやると・・・」
持ち手をいじると刃が出てくる。

「・・・といった面白い武器だ。春鈴なら槍よりいいかなって」

「でも・・・高かったんじゃないですか？」

「あはは、俺って滅多に金使わないから貯まってるんだよ。それに出世祝いだって言ったろ？ありがたく受け取っとけ」

「・・・はい！ありがとうございます！」

「・・・出陣の話、聞いたか？」

「はい。後は再確認すれば終わりです」

「そうか。・・・じゃあ、先に行ってるよ」

咲

「・・・なあ、あれは本当に賊か？」

俺は思わず口にする。目の前には賊とは思えないほどの量・・・そして、怪人がいることだ。・・・その時、ヴァイオリンの音が聞こえてきた。

「・・・？」

俺達はそつちを向く。

「・・・今日は客人が多いな。皆してこの紅音也様の追っかけか？」

「・・・紅音也だ！？・・・丁度いい、焰耶を知ってるか？」

「あの気の強い女のことか。もちろん、俺達が預かっている」

「・・・ッ!」

桔梗がそれに反応して武器を構える。

「・・・やれやれ、随分気が強い女が多いな」

紅音也が右手を突き上げると、コウモリのようなものが飛んでくる。

『カブツ』

「変身！」

紅音也はダークキバに変身した。

「チツ・・・」

「咲殿、ここは私にお任せを」

「星!？」

星がベルトを取り出し、装着する。・・・そうだ、貸してそのまんまだった。

「変身」

『オープンアップ』

星はランスに変身する。

「今の内に兵を突撃させるぞ!」
俺達はダークキバを星に任せ、軍を動かし、戦闘を始める。

「なんで「イシ」が・・・」

明らかに大半が怪人で構成されている。つまり、あの紅音也は俺達を消しに来た……

「くそ……翠達はともかく兵士じゃ怪人には勝てない……」

「ねえ、咲！ベルトってまだ持つてる？」

シイが聞いてくる。

「そりゃ、作ってはあるけど……」

「じゃあ、皆で変身するのは……」

「……ここって恋姫の世界だよ……」

俺とシイは話ながらも詠唱していた。

「闇の吹雪！」
ニウイス・テンベスターズ・オブスクランス

「雷の暴風！」
ヨウイス・テンベスターズ・フルケリエンス

ズガアアン！！

キイン……

「ッ！耳鳴り？」

「違う、これは……」

目の前に一人の男が現れる。

「俺はもう……鏡の中の存在じゃない。変身」

男は黒い龍騎……リュウガに変身した。

「……咲、ここは任せて……何かない？」

俺は空間からデッキを取り出し、シイに渡した。

「一回やってみたかったんだ……変身！」

シイは龍騎に変身した。

「任せた！」

「任せられた！」

「狙い撃つ!」

ターン!

マグナムを撃つが、目の前のライダーは怯まない。

「ライダーって反則だな・・・」

知也は距離を取ろうとするが、目の前の金色のライダーは凄いい勢いで迫ってくる。

「ウェイ!」

「うおっと!?!」

剣による一撃を避ける。

「知也、何を苦戦している」

「見てねえで手伝えよ!」

「こっちも手が離せない!」

知也はブレイドキングフォームと、剛鬼はクウガライジングアルティメットと戦闘をしていた。

「剛鬼、知也！」

「咲か。・・・まったく、仮面ライダーは面倒だな」

「俺達も変身すれば楽かもな」

「できるぜ」

「・・・マジ？」

俺はベルトを二人に渡す。

「・・・俺もか？」

「無いよりはあった方がマジだろ」

「・・・まさか二十歳にもなってこんなことをするなんてな」

「ま、いいだろ？・・・変身！」

『ターンアップ』

「・・・やるか、変身」

『カメンライド・・・ディケイド！』

知也がギャレン、剛鬼はディケイドに変身した。

「さあ・・・狙い撃つぜ！」

「暴れるか」

スペックは劣るハズなのに、二人は互角以上に戦っている。

「（やっぱり元の身体能力が高いからか？）」

そう思いながら俺は城の中に急いだ。

亮

「なあ、思春」

「何だ？」

「明らかに人外の奴がいないか？」

「・・・ああ。こうなるなら明命と亞莎を連れてくれば良かったな」

「ああ・・・けど、やるしかない。春鈴！アイツらは爆発か消滅するまで手を緩めるな！」

「はい！」

「思春、行くぞ！」

「ああ！」

俺達は馬を走らせた・・・

咲

「・・・咲！焔耶を見つけたよ！」

「ホントか！？・・・桔梗！」

「おう！」

俺と桔梗はたんぽぽに案内されて奥に進む。

「・・・いた！」

玉座に焔耶が座らされているのを見つける。

「焔耶！」

桔梗が焔耶の元に走り出す。

「・・・？」

おかしい。こんなにあっさり捕虜が取り返せるか？

「・・・桔梗、待て！」

「ッ！？」

桔梗はそれに反応して止まる。

「・・・」

焰耶がゆっくりと立ち上がる。その手には鈍碎骨が握られていた。

「・・・タオス」

「焰耶!？」

ゴウンツ!

鈍碎骨が振り下ろされる。桔梗は間一髪それを避けた。

「桔梗!？・・・今たす・・・ツ!？」

ズシャ

「え・・・」

俺の腹から槍が突き出ていた。

「たん、ぽぽ・・・?」

たんぽぽは俺に槍を刺したまま笑う。

「・・・気づいてなかったの?」

そう言ってたんぽぽの姿は怪物に変わる。

「ワー、ム……だと……」

俺は刺された部分を押さえながら後ずさる。

「咲!？」

桔梗が俺の近くに寄る。

『……ああ、言っておくけど、焰耶は本物だよ。仲間と戦えるかなあ?』

「だ、まれ……たんぼぼの声で喋ってんじゃねえぞ」

くそ……どうする……

「……もう、戦うしかないのか?」

「焰耶は俺が正気に戻す……例え俺自身を犠牲にしてもな」

「桔梗……バカな事を言つな……願うんだよ。誰かに頼れ。アイツは必ず来るぞ」

桔梗はそれに気がついたのか、頷いてくれた。

「誰か焰耶を救ってくれる奴はいないか……!」

桔梗はそう言った。そう言えば彼女は必ずこう言いながら来るだろう。

「ここにいるぞーッ！」

「……たんぼぼ!！」

『そんな!? 痛め付けて閉じ込めておいたのに……!』

「……悪いな、俺が助け出した」

「……亮!」

たんぼぼの後ろから亮が現れる。

「……馬岱、魏延を救う方法を教えてやる。モーションキャプチャー、ダブル」

亮がたんぼぼにダブルドライバーを装着させる。すると、焰耶にもドライバーが現れた。

「これを使えば魏延と一体化できる。そこで操られている魏延の封じられた意識を呼び覚ませ」

そう言って亮はジョーカーのメモリとファングのメモリをたんぼぼに渡す。

「使い方は頭に流れる筈だ。いけるな?」

「……うん！」

『……そうはさせない！』

「お前の相手は俺だ！……たんぽぽ、頼むぜ！」

「ヤアアア！」

たんぽぽが焰耶に向かって走り出す。

「……ハアツ！」

焰耶の攻撃を避け、懐に入る。

『ジョーカー！』

「焰耶……」

『フアング！』

たんぽぽは自分のドライバーにメモリを入れ、倒れながら……フアングと転送されたジョーカーを焰耶のドライバーに差し込んだ。

『フアング！ジョーカー！』

たんぽぽは倒れ、焰耶は仮面ライダーW FJになった。

「ウオオオオオオ!!」

当然焰耶は暴走を始める。

「こっちは儂に任せろ!」

桔梗が武器を構えて言う。

「・・・咲!!」

「分かってる!」

俺と亮はベルトを巻くと、カブトゼクターとガタツクゼクターが飛んでくる。

「変身!!」

『『ヘンシン』』

亮がカブト、俺がガタツクに変身した。

「キャストオフ!」

俺達はいきなり外装をパージする。

『キャストオフ チェンジビートル』

『キャストオフ チェンジスタッグビートル』

亮はカブトクナイガンを、俺はガタツクダブルカリバーを構える。

「ハアッ！」

「タアッ！」

カアン！

シャキーン！

斬りつけるがワームはビクともしない。

「ギャオオオン！」

バゴオオオンッ！

「グワッ！？」

「ふっ……！？」

俺と亮は簡単にやられ、転がる。

「……くそ、強いな……」

「まだ手はある！」

俺と亮の手にハイパーゼクターが現れる。

「ハイパーキャストオフ！」

『ハイパーキャストオフ』』

俺達はハイパーフォームになる。

「ギャオオオン！」

ワームがクロックアップを使う・・・けど、

「ハイパークロックアップ！」

『ハイパークロックアップ』』

俺達からすれば止まっているようなものだ。

「ウオオオオオ！」

「ソラソラソラア！！！」

ズガガガガンツ！

拳と蹴りの連打が入り、ワームが吹き飛ばす。

「決めるぜ！」

俺と亮はゼクターを操作する。

『マキシマムライダーパワー』』

「ハイパーキック！」

『ライダーキック』

俺と咲は挟むように走り出し、亮は飛び蹴りを、俺は飛び回し蹴りをワームに喰らわす。

ズガアアン！！

『ハイパークロックオーバー』

時間が元に戻る。．．．焰耶は．．．

「いい加減目を覚まさんか！」

「ウオオオオオ！」

『シヨルダーファンゲ』

刃が桔梗を襲う。

「この・・・馬鹿者があああ！」

桔梗はあえてそれを避けず・・・焔耶に立ち向かった。

ズシヤア

刃は桔梗を貫く。だが桔梗は血を吐きながらも焔耶を抱きしめる。

「・・・」

「桔、梗・・・様・・・」

『焰耶！いい加減に目を覚ましなよ！』

たんぽぽと桔梗が呼びかける。

「え・・・あ、ああ・・・私は、何て事を・・・」

焰耶が正気を取り戻した。桔梗は攻めるわけでもなく、焰耶を抱き締め続ける。

「今はよい・・・今は・・・戦え」

「・・・はい！」

「焰耶……」

正気に戻ったんだな……

『な……何で……』

ワームが立ち上がる。

「おいおい……ハイパーキックを喰らって生きてんのかよ……
止めを……って咲？」

俺は亮を止める。

「あの二人にやらせてみようぜ」

「一つ・・・私は敵に捕まった。・・・一つ、そして敵に操られた。・・・三つ、桔梗様や皆を傷つけた」

焰耶が告げていく。

『な、何を言ってるの!?!』

ワームが叫ぶ。

「私は自分の罪を数えた。・・・たんぽぽ」

『うん! アイツにお返ししてやる!』

『「さあ、お前の罪を数えろ!」』

「ギャオオオン!」

ワームはダメージが溜まっているのかクロックアップしない。・・・
まあ、した所で俺達が倒すけど。

「ハアツ！タアツ！ソラアツ！」

焰耶達は野性味溢れる動きでフォームを翻弄していく。

『焰耶！止めえ！』

「ああ！」

『フアング マキシマムドライブ』

「ハアアアア・・・」

焰耶は飛ぶ。

『「フアングストライザー！！」』

『うっ、うわああああ！？』

ドガアアアンツ！！

他の場所でも戦闘は終わろうとしていた。

『ファイナルベント』

シィはカードを使い、ドラグレッターと飛ぶ。

「てやあああつ!!」

ズガアアン!!

「ば、バカなああ・・・」

「行くぜ！」

『アブソープクイーン フュージョンジャック』

「……これで……」

『クウガ アギト リュウキ ファイズ ブレイド ヒビキ カブ
ト デンオウ キバ！……ファイナルカメンライド……ダイケ
イドー！』

ギャレンジャックフォームとダイケイドコンプリートフォームに変わる。

『ファイア ラピッド バレット』

「タアアア・・・」

『バーニングショット』

「狙い撃つぜえええええ！！」

ズガガガガンツ！！

「な、うわっ！？」

「終了だ！」

『ファイナルアタックライド・・・ディディディディケイド！』

「ウオオオツ！！」

ズガアアン！

「グワアアアツ！？」

ドガアアアンツ！！

「く・・・」

『マイテイ』

「ハアアアア!!!」

ランスをダークキバにぶつける・・・が、

「ほう、良い突きだ。だがこの俺には残念ながら通用しない」

「な・・・くは!？」

ズガンッ!

蹴りを喰い、吹っ飛ぶ。紅音也は変身解除しながら飄々と歩いてくる。

「悪いが俺は女にはあまり手を出したくない。それに・・・俺の目的はこれで終りだ」

「なんだと・・・?」

「それじゃあな、今度はデートでもしようぜ」

紅音也はそう言って姿を消す。・・・それを見たあと、星は意識を手放した・・・

「・・・桔梗様！大丈夫ですか！？」

「安心せい。死にはしない」

「ホツ・・・」

焰耶は変身を解除する。

「いたた・・・焰耶、ちゃんと感謝してよね」

たんぽぽが目を覚ましながら言う。すると焰耶は顔を伏せながら。

「ああ・・・その、ありがとう・・・」

「え！？あ、いや、うん・・・どういたしまして」

たんぽぽも予想外だったのか言葉を返す。

「一件落着か？」

亮が言う。

「ああ、そうだ・・・な・・・」

変身を解除した瞬間、足から力が抜けた。

「え・・・」

「咲!？」

「(忘れてた・・・俺も腹貫かれてたっけ・・・)」

「おい、咲!？」

・・・けど死ぬような怪我じゃない・・・

「(・・・また怒られるんだろうな・・・)」

さすがに今回ののは許してほしいけど・・・俺は目を閉じて、意識を
暗闇に落とした・・・

焰と野花（後書き）

亮

「今日はテイルズでコードギアスをやってみるか」

咲

「・・・多すぎない？」

亮

「だからメインパーティー&少しだけ」

カイル

「合衆国日本を設立する！！」

メルディ

「日本人を名乗る皆さん、死んでください！」

ティア

「ポイントが貯まった。チーズ君人形をくれ」

フィリア

「ランスロット、発艦してください」

アスベル

「了解！ランスロット、発艦します！」

マオ

「（シャーリー・・・後で百回殺す・・・）」

亮

「・・・まだまだあるけど、きりがないから止めておこう」

咲

「サブキャラまで合わせたらもの凄いことになるけどな」

亮

「だってまだアーチェとかバルバトスとか・・・」

咲

「・・・そこまでそこまで」

亮

「それじゃ、次回の真似と開閉と世界旅行！」

咲

「次回もお楽しみに！」

変化（前書き）

・・・学校が始まるな・・・ではどうぞ。

変化

「……」

目を開ける。

「……また怒られるよな……」

俺は布団から起き上がる。

「……？傷が……」

全部治っていた。首を捻りながらも起き上がるうとした瞬間、

「あぐッ!?!」

ドクン

音が溢れる。

「あ……が、があああ……」

Bモードが勝手に発動する。

「どう、なってやがる……戻れ、戻れ……!戻れ戻れ戻れ戻れ
え!!--!」

Bモードが解除できない。それだけで俺は混乱する。

『……無茶のしすぎです』

「于吉……?」

『貴方は着々と人ではなくなっているんですよ』

「……何だって……」

『……まあ、これくらいなら抑えられますよ、ほら』

Bモードが解除される。

「……どっして」

『後々呑まれた方が絶望が深いでしょう?』

「……やっぱりむかつく」

その時、走る足音とドアが開く音がする。

「咲!?!今の声はどうした!?!」

亮が入ってくる。

「あ、あはは……つい寝返りしたら布団から落ちちゃったよ」

「・・・んだよ、何かかと思っただろ。・・・それと、良い知らせと悪い知らせ。どっちが聞きたい？」

俺は即答した。

「何か悪い方は響きそうだから良い知らせを」

「・・・分かった。・・・じゃあ、入ってこい」

中に入ってきたのは雛里と朱里。

「あの・・・ご心配をおかけしました」

「私達・・・元気になりました」

二人が頭を下げる。

「気にするなよ。二人とも、大丈夫なのか？」

「は、はい」

「はい、お陰さまで・・・」

「・・・後、厳顔も無事だ」

「そっか・・・それじゃあ・・・」

「悪い方だな。入ってこい」

入ってきたのは予想通りの詠と恋。二人は無言のプレッシャーを放っていた。

「……」

多分俺はこの世の終わりのような顔をしてるだろう。

「えと……そのですね。さっきの戦は無茶とかではなく……」

「言い訳はいい」

「……」

今までで一番冷たい恋の言葉。

「……咲、しばらく近寄らないで」

「れ、恋！？ま、待って……」

恋は最後に一言。

「恋は嘘つく人、嫌い」

「—————」

俺はその場に崩れ落ちた・・・

亮

「……」

俺は呆然としていた。予想外だった。

「お、おい……咲ー？」

「……」

「おーい……咲くん……？」

まったく反応がない。怒っていた賈馱も今はおろおろしていた。

「……」

「聞いたですぞ！また無茶をし……て……？」

ねねが飛び込んでくるが、周りの空気で停止する。

「こ、これはどういふことなのですか？」

俺はねねに教えてやる。

「……」

ねねも黙ってしまふ。

「なあ……亮……」

「な、なんだ？」

咲が消えそうな声で言う。

「……一人に……なりたい……」

その言葉に反論する人はいなかった……

俺と思春と春鈴は蜀に留まっていた。本当は咲が起きたら帰ろうと思っただが・・・何か、今放っておくと首を吊りかねない。

「ねえ、亮君・・・咲君は？」

俺は蜀の面々が集まる場所にいた。

「・・・この世の終わりみたいな顔をしてた」

そう言つと皆顔がひきつった。

「怪我をしたの、たんぽぽのせいだから・・・どつしどつし・・・」

馬岱が頭を抱える。

「しかし、あの恋がそんなことを言うとは……」

愛紗は首を捻る。

「……でもさ、本当に咲の奴、大丈夫なのか？」

「下手をしたら首を吊りかねんぞ」

翠と星は俺が思った事を言う。

「それで、今咲は？」

「刀が聞いてくる。」

「董卓軍全員で慰めてる」

中庭に出ると・・・

「・・・」

机に突っ伏した咲と・・・

「き、氣イ落としたらアカンよ?」

「そ、そうですね。きつと恋ちゃんも許してくれますよ」

「そ、そうなのです!」

「よ、よし、気分転換に私と仕合をしよう!」

「ほ、ほら、ボクは怒ってないから、ね?」

・・・皆必死そうだった。

「・・・ったく、嫌われたぐらいで何だよ」

俺は咲に言う。

「お前がすっかりしてればこんなことにもなんなかつたんだぞ?」

咲ならこれでキレて殴りかかってくるハズ・・・!

「・・・そうだよなあ・・・」

「(あれえー! ツ!?)」

まさかの逆効果。・・・恋の一言はそこまで強烈だったのか。

「ちょ、ちょっと嫌われただけだろ?」

「・・・じゃあ亮も明命の声でさっきの恋の台詞を再生してみろよ・
」

「はあ？・・・」

俺も机に突っ伏した。

「・・・ってアンタまで鬱になってびじりするのよ！・・・」

俺は中庭から退散する（逆に俺の精神が持たない）

「ダメージでかそうだな・・・」

まるで魂が抜けたみたいだったからな・・・

「・・・亮、ちょっといい？」

「シイか」

昨日、帰ってきてからシイと会った。他にも剛鬼、知也という奴にもだ。

「・・・ねえ、咲はどうしたの？」

「ガラスのハートが割れた」

「え？」

「・・・恋に嫌われた」

「……あー……」

「今のアイツは重症だよ。……普段ならキレる挑発をしても何も
反応しない」

「……どうするの?」

「少し、恋と話してくる。……シイは?」

「私は咲の方に行くよ」

俺とシイは別れた……

「恋」

「……亮」

恋は木陰で体育座りをしていた。

「……なあ、なんであんなコト言ったんだ？」

「……咲、いつも無茶をする」

「それはわかるけど……」

「……こうしないと、解ってくれない気がした」

恋が顔を埋める。

「……お前も辛いんだろ」

「……うん、あんなこと……言いたくなかった」

「バカだな、お前も、咲も」

「……」

「……それで、いつまでフリを続ける気だ？」

「……咲が解ってくれるまで」

「逆に特攻しかねないぞ、今のアイツ」

「……その時は守る」

「……でもさ、許してやれよ。……今の咲……見てて哀れす
きる」

「……」

「……折れる気は無いつてか……」

俺はため息を吐く。

「……わかったよ、けど、程々にしておけよ。……長く続けた
って良いことないからな」

「……」

俺はその場を離れる。

「（・・・という訳なんだ）」

（・・・大丈夫なんですか）

明命と念話をしている。無理矢理魔力で範囲を広げているため、長く話すと俺の魔力が尽きる。

「（・・・それがさ、明命は来なくて正解だな）」

(え?)

「(今来たら間違はなくストレスで倒れるぞ)」

(・・・それほど何ですか?)

「(ああ。・・・っと、思春が呼んでる。じゃあな)」

(はい。お気をつけて)

念話を切る。

「・・・明命と話していたのか？」

「ああ。・・・どうした？」

「何・・・今は暇か？」

「?・・・ああ」

「少し付き合ってくれ」

俺は思春と一緒に街に出る。

「・・・どうしたんだ？」

「・・・私にも気分転換をしたい時がある」

「へえ・・・」

思わず笑顔になってしまふ。

「・・・何を笑っている」

「嬉しいなって思ってたさ」

「・・・」

「俺、思春と会った時、何かさ・・・一瞬だけ寂しい奴だなんて思ったんだ」

「・・・そうか？」

「ああ・・・自分はどうなってもいい・・・蓮華を守る為なら死んでも構わない・・・ってな感じ」

「・・・確かにな。だが今は違う」

思春は俺を見て言う。

「今は・・・生きたいと思っている」

「そっか・・・うん、それがいいや」

「だから、お前も死ぬな。・・・命令だ」

「もちろん。・・・さつさと平和にして・・・明命や、思春・・・
亞莎に蓮華・・・皆と平和に過ごしたい」

「・・・過ごせる」

「・・・」

「その為にお前は帰ってきたんだろう」

「あ・・・」

そつだ。よく考えたら世界を創り直したとはいえ、俺と咲が一度終わらせた世界に行けるのはおかしい。じいさんは外史を終わりに導いてくれと言った。・・・じゃあ、今のこの世界は？外史を終わらせないと正史が崩壊するって・・・

「どうした？・・・私といるのは不満か？」

思春が不安そうな声で言う。

「・・・悪い、考え事してた」

「・・・」

「そっだな・・・思春、ずっと一緒にいような・・・」

「・・・あぁ」

咲
〜

「（・・・嫌われた）」

『今の貴方なら、簡単に身体を奪えますね』

「・・・そう」

『・・・さすがの私も貴方が気の毒になってきましたよ』

俺はそこまで周りから見て哀れなのか・・・

「・・・なあ、于吉・・・どうしたらいいかな・・・」

『貴方が私に相談する日が来るなんて思いませんでしたよ』

「はは・・・俺だって少しくらい・・・ハア・・・」

『・・・貴方は順序を間違えたんですよ』

「・・・え？」

『貴方はまず呂布に何を言いましたか』

「それって・・・」

『ここからは教えません。自分で考えなさい』

「・・・」

亮
〜

「……アイツ、何を一人で喋ってるんだ……？」

俺は相変わらず机に突っ伏している咲を横目に歩いていく。

「軟弱だな」

「うお！？剛鬼、お前いつの間に……」

剛鬼が隣にいた。知也もいる。

「少し嫌われたぐらいで何をやっているんだ」

「……じゃあさ、お前は大丈夫なのか？恋に近寄るなーって言われたらな」

「……別に、俺は普段通りに過ごすだけだ」

「またまた、どうせ寂しくて……って殺気を飛ばすな」

剛鬼と知也が漫才みたいな会話をしている。

「だいたい、恋も恋だ。戦で無理をするなと言う方が間違っている」

「……まあ、それも一理あるけど……」

「俺は構わないと思う」

俺の言葉に剛鬼と知也が振り向く。

「誰だって好きな相手には無茶を言ってしまう。・・・自分が間違ってるってわかっててもな」

「そついうもんかねえ・・・」

「そついうもんなんだよ」

「・・・じゃあ、お前はどつなんだ？」

「俺は・・・どつなんだろつな？」

「おいおい・・・自分のコトだろつが・・・」

「・・・だから、人を好きになるってのはこついうコトなんだよ」

「・・・俺には解りそつもないな」

剛鬼が早歩きで先に行く。

「あ、おい剛鬼！・・・悪いな、亮。・・・またあとで」

「・・・ああ」

アイツも何か深そつだな・・・

「なあ、春鈴・・・人を好きになつたことあるか？」

「ふえ！？な、なんですかいきなり・・・」

春鈴と鍛練をしているとき、春鈴に聞いてみる。

「・・・いやさ、好きな人に間近で嫌いつて言われたらどうなるか
なつて。・・・思春に聞くとあまりいい返事はこなそうだからさ・・・」

春鈴か小声で「・・・そういうことですか・・・」と言いながら、
構えを解いて考える。

「・・・やつぱり、しばらく立ち直れない気がします」

「・・・そんなものか？」

「はい。・・・だから亮様は・・・私を嫌わないうでくださいね」

「え、あ、うん・・・」

春鈴はトンファアの刃をしまい、腰に身につける。

「ふう・・・それにしても緊張します」

「何が？」

「だって御遣い様が三人もいるんですよ。それに・・・蜀の武將の

方々が・・・もう恐縮してしまいます」

「ははは、まあ最初はそんなものだからね」

「はぁ・・・」

「あ、おーい！凌統、私と勝負しようぜ」

「ば、馬超様！？わ、私とですか！？」

「お前以外に凌統がいるかよ。・・・咲の奴があんなだから相手がいないんだよ」

春鈴は俺にすぎるように見てくる。

「行ってこいよ」

「は、はい！」

そして始まる勝負。それを見ながら俺は近くの草原に寝転がる。

「・・・咲と恋・・・難儀なこと・・・」

そのまま俺は目を閉じて、眠りに入った・・・

変化（後書き）

亮

「・・・今回もネタがないから・・・」

咲

「・・・そういえば作者、チャリで一時間のところのゲーセンに行つて恋姫の格ゲーをやつてきたんだよな・・・結果は？」

亮

「思春を使つて夏侯惇にストレート負け」

咲

「ダサ・・・」

亮

「何故か喋らない蓮華だけど、作者は構え方が気に入ったらしい。ちなみに思春はレバガチャしたら、やったら瞬間移動して混乱したらしいぞ」

咲

「・・・まあ、慣れないゲームではそうなるわな」

亮

「ビックリしたのは蓮華と戦つても思春の態度が凄い偉そうっつていうね」

咲

「それはすごいな。・・・まあ、今回はここまで」

亮

「それじゃ次回の真似と開閉と世界旅行！」

咲

「それではまた次回！」

五丈原の戦い（前書き）

ちょっと短い上に読みにくいかも・・・ではどうぞ。

五丈原の戦い

あれから数日。ついに曹操が動いたと報告が入った。

「……と言っわけで、敵は五丈原で待ち構えています。……恐らく、私達を待っていると思われます」

朱里が報告する。この数日で俺と春鈴は大分皆と仲良くなれた気がする。

「……俺は曹操と戦おうと思ってるけど、どうかな」

「反対する人なんていないよ、ご主人様」

「相手が聞く耳を持たない以上、やることは決まっています」

「鈴々が敵を全部ぶっ倒してやるのだ！」

「主は私達に敵を倒せと命令するだけでよいですぞ」

「そつすりゃ私達は思いつきり暴れるからな」

「うふふ、皆乗り気ね」

桃香と五虎將軍が返事をする。

「……亮達も力を貸してくれるか」

「もちろん」

「私もやるよ」

「・・・ああ」

「腕が鳴るぜ」

「・・・」

「・・・咲」

「わかってる。ちゃんと戦えるさ・・・」

そうは言っているが咲は何処と無く沈んでいる。

「これが私達にとって大切な戦になるかもしれません・・・出し惜しみはせず、全戦力で出陣したいと思います」

朱里の発言に皆が頷く。

「・・・亮、呉は平気なのか？」

一刀が聞いてくる。

「ああ、多分大丈夫だと思う。・・・あっちには明命や・・・色んな人がいる」

「クレスやユエもいるからね」

シイの言葉に頷く。

「よし・・・皆、行くぞ！」

『おおー！』

そして、全員が配置につき、五丈原の戦いは今まさに始まるうとしている。

「・・・じゃあ朱里、相手の武将はわからないのか？」

「はい。残念ですが・・・分かっているのは相手は私達と同じ名の人達。そして、相手は三国の人間が揃っている・・・ということですよ」

朱里はそう言って、思考に浸る。

「・・・幸いなことに、この五丈原は私が色々用意をしてあった場

所です。それなりに優位に立てるでしょう。・・・相手も何か用意はしていると思いますが・・・ここは私と相手の軍師の知恵比べです」

「・・・わかった。任せたぞ、軍師様」
俺はそう言って思春の隊に戻る。

「・・・思春」

「帰ってきたか」

俺は朱里から聞いてきた部隊の動かし方を話す。

「俺達は序盤は待機。先陣を切る星と焰耶と鈴々と紫苑がある程度戦った後、一気に俺達は敵本陣に突っ込む」

「なるほどな・・・つまり、私達にこの戦の勝敗がかかっているという訳だ」

「そうなるな。・・・けど、簡単にはいかない。・・・さっき恋に

飛んでもらったけど、周りとの空気が違う奴・・・つまり武将はた
くさんいる。・・・俺と思春と春鈴だけでどこまで戦えるか・・・

「・・・随分と弱気だな」

「常に最悪の事態を想定していれば対応しやすいだろ？」

「ふ・・・言うようになったな」

「どっかの誰かさんに散々しごかれたからね」

俺と思春は笑い合う。

「フアアアア・・・!!」

「・・・始まった!」

咲

「ウラアア!!」

ズバシユ!

「ぐはっ・・・」

「タアアア!!」

ズバア!

「ぎゃあ!?!」

「ハアツ・・・ハアツ・・・次イ!!」

俺は敵を次々と斬り捨てていく。

「いけませんわね。咲さん、少し暴走気味ですわね・・・」

「鈴々達が助けてあげるのだ!!」

「・・・だが咲殿は早い。下手をしたらこっちが囲まれるぞ」

「それでも放っておくワケにはいかないだろう」

「邪魔だあ！」

「ぐおお！？」

また一人斬った瞬間、斬撃が迫る。

「チツ・・・！」

すぐに十文字槍を取り出し、防ぐ。

「ほう、今のを防ぐか」

偃月刀を構えた男が言う。

「・・・何者だ」

「私か？私は張遼。・・・魏の武将だ」

「へえ・・・アンタが張遼か・・・丁度いい」

俺は十文字槍を構え直す。

「ここで有力な武将は討ち取ってさっさと平和な世の中にさせても
らう」

俺はそう言っただけ。他に言葉はいらない。敵は倒すだけ。

亮

「……そろそろか？」

俺は思春に聞く。

「まだ指示はない。……動くにはまだはや……ッ！」

ヒュルルル……

音がして、上を見ると、こちらに向かって岩が飛んできていた。

「ッ！全員避ける！」

俺と思春は武器を構え、岩を粉碎していく。

「く……思春！止まったら格好の獲物だ！部隊を動かせ！」

「だがこれでは足を止めたら岩に・・・」

「俺が止める！今飛んできた方の奥に投石機があるはずだ・・・それを潰す」

「・・・分かった。頼んだぞ」

「任せろ！」

俺はそれを聞いて馬を走らす。

「どけどけどけーッ！！」

俺は馬に乗りながら足下の兵士を蹴散らしていく。

「・・・あそこだ・・・悪い、ハッ！」

馬を踏み台にして一気に敵の陣地に飛び込む。

「な、何者だ！？」

「天の御遣いだああ！！」

そのまま投石機を動かしている兵士を斬ろうとするが・・・

ガキヤアンツ!

「ツ!?!」

双剣に阻まれる。

「・・・予想外ですね。まさかこんなに早く来るとは・・・」

「・・・誰だ?」

「私は陸遜。・・・呉の軍師です」

陸遜・・・!?!?俺は驚きながらも剣を構える。

「・・・貴方達天の御遣いを抑えればこの戦には勝てます。・・・
悪いですが、足止めをさせて頂きます」

陸遜は双剣を構えて走り出す。

「へっ・・・上等!」

俺も鈴音を構えて迎え撃つ。

「呉の武将甘寧の副将、大澤亮……参るぜ！」

咲

「はあっ！」

ガキインツ！

「くっ……！？」

槍を弾かれ、後ずさる。

「……迷いがあるな」

「何だと……」

「まるで何か悩みを無理矢理振りきろうとしている……そんな感じがあるな」

張遼の言葉は正解だ。

「……うるさい、お前には関係ない」

空間から蛇矛を取り出す。

「さっさと……くたばれ！」

カキンッ！

キキキンッ！

「このっこのっこのおー！」

全力で武器を振るう。ただ無茶苦茶に、力任せに。

ドクン

「がっ……」

闇が疼く。……こんな時に……！

「隙ありだ！」

ズガアンッ！

「ぐは……」

地面を転がる。

「あ、があ……いや、だ……俺は……うああああああ
ああああ!？」

闇が吹き出し、身体を包んでいく。

「咲殿!？」

「な、なんなのだ!？」

『……この力は……私でも……いえ……私も吞まれる……』

「あああああああああ!？」

「……………」

オレハ……ドウナッタ……

「…………ア」

ミタ。ヒトナラザルモノノテヲ。

「ウ……アアアアアアア!?」

ズガアンツ!

「ぐお……!?!」

「張遼様!?!」

「く……撤退する……」

「咲殿!落ち着いてくだされ!」

「自分を保て、咲!」

「ミルナ・・・イマノオレヲミルナアアア!!」

オレハソラニムカッテトブ・・・モウ、イシキモクロク、ニゴッ
テキタ。

「オレハ・・・セイシンスラバケモノニナルラシイ・・・」

セイヤ・・・エンヤヲコロシタイ・・・コロシタイ・・・

「・・・サヨウナラ」

亮

「・・・ッ!?!?・・・これは・・・」

俺は何かを感じ、動きが止まる。

「そこです!」

「ッ！・・・ハアッ！」

瞬動で避け、そのまま陸遜を切り裂く。

「うわっ！？・・・く、参ったな・・・まだ・・・死ぬわけにはい
かないの・・・に・・・」

陸遜は倒れる。俺はとりあえず思春の元に戻る。

「・・・思春！部隊は！？」

「そこまでの被害はない。・・・このまま突っ切るぞ！」

俺は馬に跨がり、走らせる。

「……出てこないな……」

俺達は切り込みに成功し、敵の本陣の前に来たが、本陣は閉鎖されていて中には入れない。

「……よし、こうなったら……」

俺は大声を出す。

「この腰抜け野郎！！そんなに戦うのが怖いか！？」

そう言った瞬間、男が本陣から乗り出てくる。

「馬鹿めが、馬鹿めが！兵法をしらぬ凡愚め……今に見よ！全軍、全力でアイツらを叩け！！！」

本陣の門が開く。

「……あんな挑発で乗ってくるんですね」

春鈴が横で言う。……俺もビックリだ。

「思春、一気に飛び込んで敵の首を取る……いいな！」

「ああ！」

俺達は敵兵の間を縫うように走り抜ける。

「ここから先にはいかせないんだぞ」

「この俺の正義の槍を受けてみよ！」

巨漢の男と龍の兜を被った男が立ちふさがる。

「亮！私の肩を使え！」

「私もです！」

思春と春鈴が俺の前に出る。

「・・・ゴメン！」

俺は二人の肩を使って高く跳び、一気に総大将を狙う。

「見つけたぞ！」

俺は羽扇を持った男を見つける。

「く……まだ兵はいる！」

そう言うと大量の兵士が出てくる。

「く……多い……！」

それに怯みかけた時、何かが飛んできた。

ドガアアアンツ！！！！

『ぎゃああつ！？』

「な……この私が……ぬあああ！？」

飛んできた黒い波動は全てを呑み込み、消滅させた。

「……リヨウ」

俺は降りてきた奴を見て、固まった。あまりにも人ならざる者の姿をしていたが……そいつは……

「咲……お前……」

「……オレ、バケモノニナツチャツタンダヨ」

「嘘、だ……だって……お前は闇に吞まれないように……」

「ウキツノキュウシュウトカ……ムリヲシスギタミタイダ」

「……なんで……言ってくれなかつたんだ……どうして……親友じゃないのかよ!?なんで、黙ってたんだよ!?」

「……バカダツタンダ、オレハ……オレハ、タイセツナヒトニ……ウソヲツイタ」

「……咲!」

恋が走ってくる。

「……クルナ!」

「……嫌!」

咲の言葉に反対する恋。

「もう……嘘はやめて……!」

「モウモドレナイ……ソレイジヨウチカヨルナ!コロスゾ!!!」

「構わない!!」

恋が大声を出す。

「・・・構わない・・・前に言った。咲が死ぬなら恋も死ぬって・・・なら」

恋の右手が咲のDモードのようになる。

「ナンデ・・・」

「・・・フェイトの時、咲の闇が一瞬恋に流れ込んだ。・・・そして、咲は雛里を助けた」

「・・・マサカ・・・ヤメロ!!」

咲は腕を振るうが恋はそれを避け、一気に近づく。

「・・・咲が化け物になるなら、恋も化け物になる」

恋はそう言って闇を纏った右腕を咲に突き出す。

「う、ああああああ!?!」

「ガアアアアツ!?!」

咲の闇が恋に流れ、二人は悲鳴を上げる。

「何が・・・起こってるんだ・・・」

俺はその場に立ち尽くす。

「・・・亮！」

「・・・何だこれは・・・」

シィと剛鬼もやって来る。

「亮・・・？何、これ・・・」

「・・・」

「分からない・・・分からない！」

近くにいたのにまだ何が起きたか受けいれられなかった。

「フアアアアッ!？」

「ああああああっ!？」

バシユウンツ！！

視界を覆う程の闇が溢れ、目を腕で庇う。

「・・・どう、なった・・・」

目を開けると、ちゃんと人間の姿の咲と恋が手を繋いで倒れていた。
・・・俺達が呆然とするなか、蜀の軍勢の勝利の声が聞こえてきた。
・
・

五丈原の戦い（後書き）

亮

「もうネタがないじゃすまされないので、ネタを募集します！今までに登場したキャラの質問や、何かの設定についての説明がほしいなどの要望を受け付けます！」

咲

「・・・じゃないとここで話すことがないんです。些細な事でもいいのでよろしくお願いします」

亮

「それでは次回の真似と開閉と世界旅行！」

咲

「次回もお楽しみに！」

合肥新城包圍戦（前書き）

段々と話が苦しく・・・ではどうぞ。

合肥新城包围戦

「……どうなってるんだよ……」

俺は眠り続けている咲と恋を見る。

「……」

星が隣で拳を握り締めている。

「……亮殿……」

「……何だ」

「仲間の苦しみに気づいてやれなかったのは……辛いものですか」

「……そうだな」

星は顔を伏せて部屋から出ていく。

「……少し、外を歩いてきます」

「……ああ」

(……亮、聞こえますか)

「……明命？」

(……たった今、私達も出陣することが決まりました)

「(今!?)」

(はい。相手の陣地を制圧します)

「(何でこのタイミングで……)」

(……実は曹操が動いたと情報が入りました。だから蓮華様は相手の準備が整う前にこちらから攻めようと言う事になったんです)

「(……怪しくないか?何でいきなり動きが……)」

(……わかりませんが、亮達は来れますか?)

「(……ちょっと立て込んでるけど……すぐ向かえるようにする)」

(待っています。それでは)

念話が切れる。俺は部屋から出る前に咲に向かって一言。

「……少しは周りを信じてくれよな……」

「桃香、いるか？」

「……どうしたの？」

俺は桃香に頼む。

「兵を貸してくれないか？……呉が動き出した。曹操を倒すために」

「……！それじゃ私達も……」

「ダメだ。明らかに怪しいからな。万が一の為に戦力は残した方がいい」

「……分かったよ。……でも、気を付けてね」

「ああ。……俺は出陣の用意をする」

俺はそう言っただけで走り出す。・・・その途中、落ち込んでいる詠を見つけた。

「詠・・・」

「・・・亮？・・・ボク・・・」

俺は急いでいるので手短かに言う。

「今の咲にはお前が必要だ。アイツは多分、目が覚めたら間違いない。自分を責める。・・・その時どうなるかはお前次第だ。・・・咲を頼むぞ」

「・・・うん」

最後に肩を軽く叩いてまた走り出す。

「思春、春鈴！呉に戻るぞ！」

「……どうした急に」

「明命から連絡が入った。呉が魏を攻めるらしい。……俺達も出る！」

その言葉に二人は反応してすぐに立ち上がる。

「……行くぞ、亮、春鈴」

「ああ！」

「はい！」

咲

「・・・あ」

目を開き、すぐに手を見る。

「・・・あ、ああ・・・」

人間の手だった。だが、隣にいた恋を見て、自分の闇を探り、全て分かってしまった。

「あ、あ・・・あああああ!？」

俺は・・・恋を、闇に染めてしまった・・・!

「咲!？」

詠が入ってくる。

「あああ!?!うわああああ!?!」

「咲、しっかりして、咲！」

「・・・詠・・・俺は・・・」

「自分を責めないで、咲。大丈夫だから・・・」

「でも・・・でもお・・・」

「安心して・・・それに、咲がどんな姿でもボクは咲を見捨てない。もし咲が心まで化け物になったとしてもボクの命を賭けても絶対に心だけでも元に戻す・・・絶対に」

「でも・・・俺は恋を・・・」

「・・・恋は気にしていない」

「・・・恋！俺・・・」

「・・・」

俺は言うべき言葉を選ぶ。

「・・・最初に、ゴメン。・・・約束を破って・・・言い訳をした・・・そして、また嘘をついた。それで・・・恋を闇に染めてしまった・・・!!」

「……」

恋と詠が抱き着いてくる。

「え……」

「……恋も、「ごめんなさい」

「なんで……」

「恋も、無茶な約束を咲にさせた。……絶対に守れないのが分かってて約束させた」

「でも……」

「それに、気づいてた。咲の闇が強くなっているのを。……だから、恋は咲を遠ざけた」

「……」

それはどういう……

「……わざと咲を遠ざけて……」

恋は右手に闇を纏わせる。

「……恋も辛い思いをして“これ”を使えるようにした。……」

咲の闇を・・・和らげる為に「

「・・・ッ!」

恋の言葉に俺は涙がこぼれる。恋はわかっていたのだ。全てを。

「俺は・・・愚かすぎる・・・!この闇は・・・俺は・・・!」

言葉が出てこない。

「大丈夫・・・恋は・・・」

「ボクは・・・何時までも、どんなときでも」

二人は声を合わせる。

「「咲の味方であるから」」

「う・・・わあああ・・・!」

俺は泣く。悲しいからじゃない・・・嬉しいからだ・・・

「ありがとう・・・二人とも・・・!」

「……」

「どうした、焰耶」

「翠か……いや、私に入る余地はないと思ってな……」

「まあ、アイツらには勝てないな……」

「ああ……」

「……行くうぜ」

「……ああ」

二人は歩いていく。生まれていた感情を殺して。

亮

「……思春！呉は合肥に進むぞうだ！」

「分かった！……飛ばすぞ！」

俺達は出せるスピードを最大にして馬を走らせる。

「……彼処か？」

「……多分……あんな城……在ったか？」

「いえ……私は見たことはありません」

目の前に城があり、呉軍は既に城攻めを行っていた。

「……行くしかないな」

俺はそう言って馬を走らせようとした時、声が聞こえた。

「待て」

「……お前は……関羽！」

目の前にはたった一人の武将……関羽。

「……何の用だ？」

「……ここに曹操殿はいない。ここにいるのは呉と蜀の武将……そして、横から呉の三兄弟が奇襲をかける手筈になっている」

「……何で俺にそれを……」

「……私は恩を忘れない。……そういうことだ」

関羽は去っていく。

「……思春、信じるか？」

「信じよう。あれが関羽ならば……誇りがあるはずだ」

「……じゃあ」

「ああ、出撃するぞ。……増援部隊を潰す」

「……蓮華！」

俺は一旦本陣に駆け込む。

「亮！来てくれたの？」

「気を付けてくれ、ここに曹操はいない。そして呉の刺客が……」

「それは俺達のことか？」

「……ッ！」

そう言っただけで目の前にいたのは二人の男と一人の女。

「……どうやってここに……」

「私と兄様達ならあの程度は簡単よ」

女がチャクラムを構えて言う。

「蓮華……下がってくれ」

「俺は多対一は好きじゃねえが……」

男がトンファーを構える。

「悪いが、討ち取らせてもらおう！」

もう一人の男は剣を構える。

「・・・こい！」

俺は三人を迎え撃つ。

「いくぜええええ！」

ガキヤアンツ！

「ぐっ・・・名乗らないでいきなり攻撃かよ・・・」

「ハッ、そりゃ悪かったな。俺は江東の小霸王、孫策だ！」

「・・・私はその弟、孫権だ」

「私は孫尚香。弓腰姫って呼ばれているわ」

「チツ・・・仲良し三兄弟は厄介だな・・・ウラアア！」

「へへ、随分楽しめそうじゃねえか・・・たぎるぜえええ！」

トンファーが迫る。

「タツ！」

「そこだ！」

「うおっ！？」

ガキヤアンツ！

孫策の攻撃は防いだが、孫権の攻撃が迫り、それを間一髪防ぐ。

「そこよ！」

ズガアンツ！

「ぐは……」

孫尚香の一撃に吹き飛ばされる。

「亮！」

蓮華が南海霸王を構えると、先端に炎が宿る。

「……燃えろおおお！！！」

蓮華が南海霸王をゴルフクラブのように振ると、炎が螺旋を描いて飛んでいく。

「ツ！危ねえ！？」

全員が避ける。

「我が名は江東の虎、孫堅の娘！呉王孫仲謀だ！」

「蓮華……」

「へっ、聞いたか権。あれがお前らしいぜ」

「そのようですね。・・・信じがたいですが」

そして目の前に更に二人。

「随分いい王になってるじゃない、蓮華」

「さっすがお姉ちゃん！」

「姉様！？シャオ！？前線にいたんじゃない・・・」

「思春が戻してくれたのよ」

「増援部隊も抑えてくれているしね」

「・・・あれが私？まだ子供じゃない」

孫尚香がシャオに言う。

「む・・・な、何よ！ちょっと胸が大きいからって・・・」

「・・・胸だけじゃないと思うけどな（ボソッ）」

「・・・亮？」

「い、いや・・・何でもない」

「・・・貴方が私ね」

「・・・どつちが小霸王に相応しいか戦ってみようぜ・・・自分と戦れる機会なんざ滅多にあるもんじゃねえからな」

「同感ね。・・・血が騒ぐわ」

「亮、ここは私達に任せて貴方は前線に！」

「・・・悪い、気をつける！」

三兄弟は三姉妹に任せて俺は走り出す。

俺はある程度走ると、明命と亞莎を見つけた。

「思春、亞莎！」

「亮！」

「亮さん！」

「戦況は？」

俺は亞莎に聞く。

「戦況はこちらが優勢です。ですが、私達と同名の武将が存在し、兵が混乱しています」

「……私と亞莎もさつき自分と同じ名の人と遭遇しましたが……」

「やはり自分と戦うのは難しいですね……」

明命と亞莎が言う。

「……城門はまだ破れないのか？」

「はい。……まだしばらくかかるかと……」

俺は考え、一言。

「……俺達三人で突っ込むか」

「「え？」」

二人がきよとんとする。

「俺達なら単騎突破できるだろ？……中から崩してやるっぜ」

「いや、あの……既にクレスさんとユエさんが突入しているんですが……」

「……はい？」

アイツらが……

「……よし、行くか」

「ええ！？何ですか!？」

亞莎が驚く。

「二人だけじゃ危ないだろ？ほら、行くぜ」

「亮さん……」

「無駄だよ、亞莎。亮は言い出したらなかなか止まらないから」

「ハア・・・わかりました」

亞莎が闇を解放する。

「・・・やるからには殲滅します」

・・・亞莎はホントにこの姿になると怖いな・・・

「・・・行きます！」

俺達は跳んで城内に進入する。

「・・・何だ？」

何か機械音がすると思った次の瞬間、大量の矢が飛んできた。

「なーッ！？」

俺は驚くが亞莎と明命は素早く動いた。

「「亮（亮さん）には当てさせません！」」

ズガンッ！

明命はソニックブームを、亞莎は闇の波動で矢を撃ち落とした。・・・
そして俺は矢が飛んできた方に構える。

「・・・守られてはつかじやないぜ！猛虎獣衝擊イ！」

虎を飛ばして発射口を潰す。

「よっしー！」

そのまま俺達は走り出すが、今度は・・・

ビュオオオオ！

「「「竜巻！？」「」」

何でこんなに罾が仕掛けてあるんだよ・・・

「明命！」

「はい！ハアアアア！」

明命が的確に飛び道具で発生口を破壊していく。

「ここから先にはいかせん！」

目の前に槍を構えた男が立ちふさがる。

「趙子龍、参る！」

「……私が引き受けます！亮さんと明命は先に！」

「うん、分かった！」

「頼むぞ！」

「・・・あれは!?!」

俺は倒れている人を見つけ、駆け寄る。

「・・・クレス、ユエ！」

血溜まりに倒れていたのはクレスとユエだった。

「・・・大丈夫か!？」

「う・・・く、そ・・・」

「き、気をつけるです・・・」

二人が指差す方にいたのは、フードを被った謎の人物。

「・・・誰だお前は！」

「よくも二人を・・・ハアツ！」

明命がそいつに斬りかかるが、そいつは難なくそれを防ぐ。

「・・・甘いな、明命・・・」

「え・・・!？」

ガキヤアンツ!

「キヤアツ!？」

「明命!」

俺は弾き飛ばされた明命を助ける。

「大丈夫か？・・・ッ！」

俺は明命を弾き飛ばした奴を睨む。

「・・・止めておけ。お前じゃ勝てない」

「・・・？」

その男の声に聞き覚えがあるが・・・誰だかは思い出せない。

「お前がこの一連の出来事の犯人か！？」

「ああ。その通りだ」

「・・・何が目的だ」

「この外史を破壊するためだ」

「貴方は・・・」

明命が立ち上がる。

「貴方は・・・どうして私の真名を知っているんですか！？」

そう言えば、この男はさっき明命を真名で呼んだ気がする。男は少しためてから言った。

「……“知っているから”……そうとしか言えないな」

「「……ッ!?!」」

それは俺の言葉。何でコイツが……

「……じゃあな、今回は勝ちを譲るよ」

そう言っつて男は消えた。……俺達は、その男の事で頭が一杯になつていた……

合肥新城包圍戦（後書き）

亮

「今回は地獄の傀儡師さんから届いたお便りを読みたいと思います」

咲

「正しくはネタを提供してくれたんだけどな。・・・俺達のステータスか」

亮

身長180

能力

物真似能力。

恋姫の世界において、思春や明命と亞莎により、剣術と体術は達人の域に近づいている。また、思春と明命との鍛練である程度自分を無にできるようになった。それにより威掛法も習得。魔術は強化しか使えず、魔法は基本的なものしか使えない。だが、それを補うのは真似能力と鍛えられた技である。現に咲には純粋な剣の勝負じゃ敵わないと言われている。

なお、一時期真似をすると記憶が崩壊する恐れがあったが、今は神によって改善されている。だが、使いすぎると気絶する点は変わらないので、本人はあまり真似をいたくない。ちなみに余談だが、意外に他の世界でフラグを立てているが、気づいたのは僅か数名のみ。

咲

身長

170

能力

開閉能力

一言で言うなら器用貧乏タイプ。空間に大量の武器を内蔵して、開閉能力で空間を開いて状況に応じて武器を切り換える。Fateの世界で、闇が固有結界として発現し、ネギまの世界でエヴァンジェリンにより、今のDモードを使えるようになった。魔術は強化と変化が使える、魔法は闇、氷系が使用可能。なお、持続時間が短い、マギア・エレベアも使用可能。なお、心に宿敵于吉が潜んでいるが、今の所は無害。

ちなみに使用可能な武器を挙げていくときりがない。

仲間を家族と見ていて、家族に手を出す奴は誰であれ、許さない。

二人の共通点は、仲間の為なら自分を犠牲にすること。その度に仲間を悲しませているが、それでも身体が動くのか、また無茶をしては悲しまれるを繰り返す。

亮

「か・・・書ききらない・・・」

咲

「しかも作者すら忘れてる力とかありそうだな」

亮

「・・・こんな所でよろしいでしょうか・・・それでは次回の真似と開閉と世界旅行！」

咲
「次回もお楽しみに！」

一時的な日常（前書き）

日常って聞いて真っ先にアニメを思い浮かべるなんて・・・末期です
ね（笑）ではどうぞ。

一時的な日常

「・・・孫三兄弟は逃したのか」

「ええ。亮達が本陣を制圧したと同時に逃げたわ。・・・ごめんなさい」

「いや、蓮華達が無事で良かった。・・・今の状況は？」

「相手の武将は減っていつているわ。・・・けど、数が多すぎる」

「こっちは二国だけど相手は三国だからな・・・」

今、俺と蓮華は二人で中庭にいた。明らかに中庭で話す内容じゃないが、ちょうど蓮華を見つけ、話している内にこんな内容になったのだ。

「・・・」

「それにしても、クレスやユエがやられるなんて・・・どんな武将なのかしら・・・」

蓮華の言葉には答ええない。アレはあの場にいた四人だけの秘密になった。

「あの二人はどうしてるの？」

「クレスの自前の薬でとくに治ってるよ。・・・多分、今頃鍛え直してるんじゃないかな？」

「そう・・・あ、ごめんなさい。今から冥琳と用事があるから、私
は行くわ」

「ああ、行ってらっしゃい」

蓮華は立ち上がり、歩いていく。

「・・・そう言えば蓮華の奴・・・炎を使つてたよな・・・」

あの溶かすほどの熱を持った炎を使いこなせるようになったのなら・・・それは心強い。

「・・・さん」

「（しかし、あの男の正体は？考えられるのは別次元の・・・）」

「亮さん！！」

「うおおっ！？」

慌てて考えを解除して、振り返ろうとしたら、変な体制で足に力を籠めたため・・・

ピシッ

「あうああ！？・・・左足が、つってる・・・うぐうう・・・！！」

何故か頭に、何処ぞの鳥人間を思い出したけど今はそれよりも痛み

に耐えながら上を見上げる。

「だ、大丈夫ですか!？」

「亞、莎・・・!」

右足だけで立ち上がり、亞莎を見る。

「どうしたんだ・・・？」

「あ、いえ・・・お一人で難しい顔をされて悩んでいたようなので・・・」

「ああ、悪い。心配かけちゃったか」

「い、いえ・・・」

「・・・それで?何か用があつたんだろ？」

「あ・・・はい。少し・・・一緒に来てほしくて・・・」

「?」

俺は亞莎に案内されて、街に出る。

「アレなんですけど・・・」

路地裏を指差されて、そこを見る。すると・・・

「にゃにゃにゃ、にゃん」

・・・猫装備を付けた明命がいた。

「あの、明命があんな事をする心当たりがありますか？」

「・・・」

ある。ありすぎる。だってこの一連の出来事で俺は明命と・・・

「~~~~~!?!?」

顔が赤くなるのがわかる。

「亞莎・・・明命は猫と仲良くしようとしてるんだよ・・・ちなみに発案者は俺」

「あ・・・そうだったんですか・・・てっきり明命の猫好きが暴走したのかと・・・」

「帰ろう。明命の邪魔しちや悪いからな」

俺は亞莎の腕を掴んで引きずっていく。

「りよ、亮さん!?!?何で引っ張って・・・」

「いいから帰ろう、な?」

これ以上ここにいたら顔がオーバーヒートする。俺は亞莎を引きずりながら城に戻っていった・・・

咲

「・・・本当にやるのか？」

「(コクッ)・・・覚悟はできてる」

目の前には恋がいる。恋のお陰で、俺は化け物にならずに済んだ。・・・それに、恋が闇を幾分か吸収してくれたので、暴走の心配もない。闇も以前のように使える。

『・・・まさか、私の分まで持っていかれるとは思いませんでしたけどね』

于吉がぼやく。今、俺と恋は闇を共有している。そこで恋が俺に闇の使い方を教わりに来たのだ。

「……て訳で、内の闇を具現化させるように……」

「……」

恋はそう言って……髪の色が変わらないBモードを発動させる。
いきなりBですか。

「……さすが飛將軍呂布……呑み込みが早い」

「……いつも見てたから」

なるほど……

「……何か、恋がオルタ化したみたいだな……」

「……オルタ？」

「ま、ダークサーヴァントと想ってくれれば良いよ」

「……(コクッ)」

「……でも、あんなに苦労したのに一瞬で恋にマスターされると悲しくなるな」

「……まだ、咲の方が使い方は上手い」

「そうか?……よし、じゃあ遊びにいくか。最近遊んでないだろ」

「？」

「……ねねと、詠も」

「……そうだな、何処に行く？」

「……泳ぐ」

「……それで咲く？どうしてボクがこんな露出が凄いものを身に付けているのかしら？」

「すまん、俺が浅はかだった」

詠は白の水着を身に付けていた。……その、目のやり場に困るくらい面積が狭い水着を。

「……どうしたの？」

「どうせ皆をいやらしい目で見ていたのですぞ」

恋は詠と同じくらいの露出度のピンクの水着で、ねねは紺のスクール水着。

「……一刀に頼んだ俺がバカだった……」

水遊びするのに服じゃ濡れるからと一刀に「水着ってもう少し用意できるか?」……って聞いたらサムズアップして「任せろ!」何て言われて袋を持たされ、俺が詠を、恋がねねを誘ってこの川に来たんだが……水着を公開してあらビックリ。

「……俺だつて男なんです……!」

故に露出が少ないスク水のねねしか直視が出来ない……恋の水着は前にも見たけど……その時とは違う水着だったため、馴れないのは耐えられない。

「一刀の野郎……妙に笑顔だと思ったら……」

裏がありやがった……

「……こりゃ、月達を連れてこなくて正解だったな……」

「まったくよ……その、ボクだつて恥ずかしくて……」

詠が隣でもぞもぞしているのがわかる……ホントは董卓軍全員で来る予定だったが……

『ごめんなさい。今日は用事があつて……』

『あー、ウチは今日翠と鍛練をする予定なんや……』

『……悪いが、私だけでは気が重いのでな……』

よつて休暇の俺達四人が遊びに来れたわけだ。

「……あーもう！こつなつたら遊ぶわよ！」

詠に腕を引かれる。

「わつ、詠！？おぶつ！？」

バシヤアンツ！

足を滑らせて水に沈む。

「ゲホツ、ゴホツ……詠……」

「ご、ごめん……大丈夫？」

俺はニヤツと笑い、詠の肩を軽く押す。

「わわわ！？きゃあつ！？」

バシヤアンツ！

今度は詠が水に沈む。

「ふ、ふふ・・・咲く・・・？」

「はは・・・何だよ？」

俺達は同時に動く。

「喰らええ！ぶあつ！？」

水をかけるタイミングも喰らうタイミングも同じだった。

「・・・楽しそう」

「ねね達もやるのです！」

恋とねねも水掛遊びに参加してくる。

「やったなこのやる！」

「こつなったらとことんやってやるわよ！」

「・・・負けない」

「勝つのはねねですぞ！！！」

気がつけば俺らは笑いながら遊んでいた。

「……んで寝ちゃうんだもんなあ……」

夜になって帰る頃にはねねが疲れて寝てしまった。

「いいんじゃないの？たまには」

「……そうだな」

「……また、遊びたい」

「そうだな……今度は董卓軍の皆でさ」

「今度はもう少し露出が少ないモノをお願いしたいわ」

「あはは……」

空を見ると星空が広がっていた。

「……誰一人欠けることなく……また遊ぼうな」

「……うん」

「……(コケッ)」

二人が寄り添ってくる。多少歩きにくくても気にしない。……こうして体温を感じることで、俺という存在が分かるのだから……

亮

「……んで、何で俺は森にいるの？祭さん、穩」

今日は部隊訓練があるのだが、何故か思春の隊の俺と春鈴までが駆り出された。連れてきた兵士は二十人程度。……こんな森の中で何をするのだろうか……

「……皆のもの！これより訓練を開始する。心してかれ！」

祭さんがそう言つと兵士達が辺りを探り始める。

「……ねえ、祭さん？いい加減説明してよ」

「うむ。今日是对工作員の訓練だ」

「工作員？」

「そうです。工作員は明命ちゃん、すでに前もってこの辺りに隠れているんですー」

「その明命を、儂、穩、亮と三小隊で見つけて捕らえる、という訓練だ」

祭さんと穩が説明してくれる。

「・・・あの、私は何で呼ばれたんでしょうか？」

「つい最近まで兵士だったのを思い出したからな、ついじゃ」

「私はずいでしたたんですか!？」

春鈴が涙目になりながら叫ぶ。

「・・・でも、相手は明命様ただ一人なんですよね・・・じゃあ、簡単に捕まえられますか？」

「甘い。甘すぎるな、春鈴。・・・亮なら恐ろしさはわかるじやろ
う」

「ああ・・・明命は元々の能力が高い上に、サーヴァント化した事により、気配遮断のスキルを身に付けている」

サーヴァントやスキルと言った言葉に首をかしげる春鈴だが、何となく恐ろしさがわかったようだ。

「作業員とは頭が良く、機転も利き、腕も立ち、そして何よりも生き延びる術を心得ている者以外にはなりえん」

「何だかんだで俺は明命に助けられているからね」

「つまり、明命ちゃんこそ我が国最高の作業員なんですよぉ」

「・・・やっぱり皆様は凄いですね」

そのお前も着々と近づいているけどな。と思っただが口には出さない。

ドサッ

何か音がして振り返ると、兵士が気絶して倒れていた。

「「「・・・ッ!」「」」

「え?え?一体何が・・・」

「始まったぞ・・・明命の狩りが」

「狩り・・・ハンティング?」

俺は通じない英語を使って自分を落ち着かせる。

「よしっ、全員密集陣形をとれ!」

祭さんの一言で全員が円陣を組む。

「……俺と春鈴はどうすればいい？」

「武運を祈る」

「それだけっ！？」

「自分の身を守ることで精一杯ですから。明命ちゃんに捕まれば、恐ろしいことになっちゃうので」

「……恐ろしいこと？」

「ああ。顔中いたるところに墨で落書きされてしまうのだ」

「……落書きされるだけですか？」

春鈴がキョトンとするが、祭さんは言う。

「甘いぞ春鈴。その墨は特製で、洗っても中々落ちん」

「……油性ですか。」

「……あわわ……」

春鈴も想像していきなり恐怖に陥れられていた。……そして、や

られた兵士の顔にはこう書いてあった。

『一番にやられました。えへ』

「……」

これは嫌だ。

「……仕方ない、明命を捕まえるならここに密集してちやダメだな」

「はい、予定通り三隊に分けて明命ちゃんを捕まえます」

「よし……行くぞ、春鈴」

「は、はい……」

俺は兵士と春鈴を連れて森の奥に進む。

「……」

俺達は辺りを見渡しながら進む。気配を探る事も考えたが、明命を
探知するのは無理そうなのでやめた。

「何かあったら言ってくれ」

兵士に言った瞬間、

ガサガサッ

「……！そこか！」

俺は指先からエネルギー弾を草むらに向けて撃つ。……だが、

ドサッ

「ッ!？」

まったく逆方向にいた兵士が倒れる。

「ま、待て！」

違う兵士が草むらに飛び込んだ。

「バカ！それは……」

そう言いながら、全員でそこを見ると……飛び込んだ兵士は倒れ
ていた。

『注意力散漫』

『先走っちゃいました』

そう気絶した兵士に書かれていた。

「律儀な・・・」

あの一瞬でどうやってこんな達筆な字が書けたんだ・・・

「チツ・・・これで五人か・・・ってあれ？」

春鈴と俺を合わせても四人しかいなかった。

「・・・どんなホラー映画だ・・・」

「りよ・・・亮様、一旦戻りましょう？お二人と合流して数を整えないと・・・」

「そ、そうだな・・・」

「あ、あの・・・」

「分かつてる」

兵士が消え、今は俺と春鈴だけになってしまった。

「ふ、ふふ・・・こうなったら・・・」

「春鈴？」

春鈴はトンファーを刃が出ている状態で構える。

「こうなったら一撃で叩き割ってあげますよおお!!」

やばい!春鈴が恐怖で壊れた!

「あははははは・・・はぐっ」

「春鈴ーーツ!？」

何か影が飛んできて春鈴が倒れた。

『怖がりすぎね』

「・・・」

俺はくるりと背を向けて走り出す。

合流地点に戻ると、穩がびくびくしながら立っていた。

「……ッ!? あ、亮さんでしたか……驚かさないてくださいよ

」

「……穩も全滅?」

「はいー。やられてしまいました」

その時、草むらから人影が飛び出してきた。

「きゃっ!?!」

「く……つて祭さん」

「っはあはあはあ……穩、亮か……」

「……祭さんもやられたんだ」

「腹を括って仕掛けたんだが……この森では弓矢は不利じゃ」

「それで矢切れになつて逃げてきた……つてことは……」

「残つたのは私達だけですわね」

「お主達も一人か……」

「予想外だ……明命がこんな怖いとは……」

「しかし、やるしかあるまい」

「そうだな……まずは見通しの良い場所に移つて待ち構えるしか……」

「そうだな。よし、動くぞ、穩」

……

「……?」「」

返事が無い。俺は恐る恐る穩がいた場所を見る。……穩はそこに転がっていた。

『存在価値は巨乳のみ』

そう胸元に書かれていた。……ひつでえ……

「祭さん、どうす……る……」

祭さんは四つん這いで頂垂れたまま動かなくなっていた。

『胸に栄養行き過ぎ』

「……明命……どんだけ巨乳を敵視してるんだよ……」

何のひがみかは知らないが……残ったのは俺一人だ。

「……ッ!」

鈴音を引き抜き、走り出す。

「(ど)ど(じ)する……ど(じ)や(っ)て捕(ま)える……!」

まだ正々堂々とした勝負なら俺にも勝率は有った。

「(……俺は何て書かれるんだろう……)」

明命を捕まえるには……何か道具が必要だ。

「・・・にゃん」

猫が目に入る。そうか、明命の弱点は猫・・・だが、こんな森の奥に何故都合良く猫がいる？・・・罠だ。粉バナナ・・・じゃなくてコレは罠だ。

「・・・あ」

あるじゃないか、明命を捕まえる道具が。

「（仮契約カード・・・）」

これで明命を召喚し、一気に捕まえる。・・・これしか、ない。

「召・・・」

カードを使おうとした瞬間、

シュルル！

いきなり縄が飛んできて俺は固定される。

「何イ！？」

そして明命が目の前に現れる。

「・・・仮契約カードを使おうとするとは・・・卑怯ですよ、亮」

「・・・バレてました？」

「追い詰められた人間は、藁をも掴もうとするものです」

「け、けどな・・・この状況・・・こうするしかなかったんだ！」

縄を解こうとするが、何と縄が魔力で強化されていて、ほどけない。

「・・・さすがにお猫様には引つ掛からなかったようですが・・・やはり、亮はそれを使いましたね」

「く・・・やっぱり猫は罠だったか・・・」

「ちなみに、仮契約カードに気づくのが予想外に遅かったですね」

「・・・まさか、最初から手を読んで・・・！」

まさか初めから明命に踊らされていたとは・・・

「・・・それでは」

「・・・」

明命がものスゴい笑顔を向ける。

「私に捕まった以上は、罰を受けて頂くほかありません」

「……！？ま、待ってくれ！話せばわかる！」

「ダメです。今回はそういう規則なのです」

「み、明命……俺の事が嫌いなのか！？」

明命は一旦動きを止めるが……

「……好きですが、今はダメです」

「ま、待って……」

「問答、無用なのです！」

「う、うわ、ああ……うわああああ！？」

……その後、俺達は明命を先頭に帰ってきたが……やはり全員に笑われ、しかもクールなクレスやユエにも爆笑された。

『無鉄砲』

『無茶しすぎ』

『女泣かせ』

何故か俺だけ三つも書かれていた。・・・だけど、腕には・・・

『大好きです。何時までも一緒に居てください』

それに気づいたのは必死に顔の墨を落としている時だった・・・

一時的な日常（後書き）

亮

「この前は俺達だったから今度は明命達だな」

明命

「ええ!？」

明命

能力

気配遮断

Fateの世界でサーヴァントとして召喚されたため、かなり人離れした能力になった。ネギまの世界では人間の身体だが、能力は少し下がっただけで、強さは変わらない。気配遮断は昔から出来たが、サーヴァントアサシンとして呼ばれたことにより、更に技が上達した。宝具はいつでも使え、真名は戦場を駆ける疾風の一撃^{コンセツ}・・・魔力により、爆発的な加速を生み出し、かまいたちを発生させるか、通りすがりの斬撃で敵を切り裂く。ちなみに強化も使える。亮と仮

契約をして、アーティファクトで南海霸王を使える。また、威掛法も使用可能。・・・なお、どうやって刀を鞘から抜いているかは不明。

恋

能力

戦闘続行

サーヴァントについては明命と同じ。違うのはクラスはランサーで、クラススキルは戦闘続行。これは致命傷を負わない限りは戦闘を続けられると言うもの。宝具は戦場を駆ける一騎当千の将ホウテンガケキ・・・これは莫大な魔力を一気に放出する技で、威力が高すぎて使い所が難しい宝具（何回か使用を止められるシーンがある）

仮契約は最初はキープレードだったが、後に咲が仮契約を破棄、もう一度仮契約した際には、白いドレスに白い翼、白いレイピアと白だらけ（名称は無し）・・・魔法世界でさまよって、コレット・フアランドールに拾われ、咲を捜すためにレン・フアランドールとしてアリアドネーで魔法や学業を学び、基本魔法と炎系魔法を覚えた。・・・そして推薦枠により、騎士団に入団。・・・また、咲の発言により仲の良い相手は全て家族と見ている。・・・エミリイが消された際には怒り狂い、敵に特攻したこともある。・・・現在、咲の闇を吸収したことにより自身も闇が使用可能になった。

亮

「・・・書ききったか？」

咲

「手札が多いな・・・多分書ききったかと」

亮

「まあ次回の真似と開閉と世界旅行！」

明命

「それではまた次回もお楽しみに！」

来襲（前書き）

50万PV&5万ユニーク突破！・・・これからもよろしくお願
いします！ではどうぞ。

来襲

咲

「・・・何でこんな事に・・・」

今、俺と剛鬼とシィは構えを取って向き合っている。

「・・・発案者誰だっけ」

「・・・私だよ。軽い気持ちで『この三人で誰が強いのかな』って言うて今に至る・・・」

「剛鬼も珍しいな。こんなの興味ないんじゃないかと思ってた」

「・・・たまには、な」

「・・・じゃ、やる？」

「はいぜ・・・」

「・・・来い」

俺達は同時に走り出す。

「キリエ！モード刀！」
ブレード

『了解です』

「ウオオオオ！」

シィはデバイスを刀に、俺はBモードを発動させ、干将莫耶を構える。・・・この二人じゃ鎌は危ない。

ガキヤアンツ！

三人でつばぜり合いをして、お互いに弾き合う。

「ヤアアアツ！」

「オラアアア！」

「・・・ハアアツ！」

カキキキキン！

剛鬼の一撃を避けたかと思うと今度はシィが迫ってくる。まるで自分だけが攻められている気がする。きた。

「く・・・ダークファイガ！」

腕を振り際にダークファイガを撃つが二人は難なく弾く。

「そこだ！飛天御剣流・・・九頭龍閃！」

ズバババババ！

「な・・・！？」

同時に九つの斬撃に襲われ、切り裂かれる。

「ぐう・・・」

間一髪直撃は免れたが・・・危ねえ！

「もらったよ剛鬼！ハアアアア！」

シイの一撃は剛鬼に擦り、仮面が飛ぶ。

「あ・・・大丈夫！？」

「・・・気にするな・・・むしろ、好都合だ」

剛鬼が血を刀に垂らす。

「・・・シイ！」

「・・・ッ！」

俺とシィは本能で剛鬼に向かうが・・・

「フンッ！」

剛鬼の一撃は早く、的確に俺達の命を狙ってくる。

「チッ・・・」

「・・・速いなあ、もう」

「まだ、終わりじゃないぞ」

「「嘘っ!?!」」

剛鬼は再び構えを取る。

「飛天御剣流・・・」

「離れる！」

「分かってる！」

「天翔龍閃!!」

剛鬼の一撃は空を斬る。

「今だ・・・ッ!?!」

「うづ!?!」

何か当たって身体が動かなくなり・・・しかも勝手に身体が剛鬼に近づいていく。

「オオオオ!!」

剛鬼が遠心力を利用して更にもう一撃。

「・・・ツ!」

ズガアアアンツ!

「・・・今のを避けるか」

俺とシィは離れた位置にいた。

「俺は開閉能力で距離を稼いだ」

「私は雷化瞬動で逃げたんだよ」

「・・・」

剛鬼は血を拭いながら振り返る。

「・・・何時までそこにいる気だ」

「・・・?」

剛鬼が何も無い場所に話しかける。

「・・・何だ気づいてたのか」

現れたのはローブを纏った・・・多分男だ。

「・・・私達に何の用？」

「・・・大したようじゃないぜ。・・・ただ、お前らには死んでもらうだけだ」

「「「ツ!?!?」「」」

俺達は身構える。男はゆっくりと腕を上げる。

「“開け”」

空間が開く。

「・・・つたく、何で俺がこんな事を・・・」

「見つけたぞ・・・剛鬼イ！」

「ナギ!?!」

「左慈・・・!」

空間から現れたのはナギ・スプリングフィールドと左慈だ。

「じゃ、楽しんでこい」

もう一度空間が開くと剛鬼達がそれに飲み込まれる。

「剛鬼！シィ！」

「お前の相手は俺だ」

「・・・」

男はソウルイーターを構える。

「・・・くそ、何なんだ一体・・・」

干将莫耶をしまつて鎌を取り出す。

亮

「・・・またお前か」

ちょうど鍛錬場にユエと居たところ、この間のローブの男が現れた。

「何者ですか」

ユエも槍を構えながら尋ねる。

「・・・いくら俺でもこの間の二対一は疲れた。・・・今日は・・・」

空間が開く。

「・・・なるほど、これもユリアの預言スコアに詠まれていたか・・・」

「ヴァンさん・・・!」

ユエが驚き、動きが止まる。

「ユエ!」

「あ・・・」

俺が呼ぶがそれよりも早くヴァン・グランツがユエに接近する。

「双牙斬!」

ズガガンッ！

「アアアッ！？」

ユエが斬られ、吹っ飛ぶ。

「ユエ！？・・・う！？」

「そらよ！」

男が気を使ったのか俺は弾き飛ばされる。

「っ・・・」

俺は壁際まで転がり、ぶつかる。

「は、ぐ・・・」

ヴァンと男が近づいてくる。・・・その時、何かが二人を攻撃した。

「ぬう！？」

「何？」

「ハア・・・ハア・・・何時までも引き立て役で終わるわけにはいかないです」

「ユ、エ・・・ごぼっ・・・」

血を吐く。・・・さっきので内臓を潰された。ユエは立ち上がりながら血を拭う。

「亮さんはそこで休んでください。・・・私がやるです」

「・・・面白いな。・・・よし、じゃこっちも一人だ。いけ、ヴァン」

「致し方あるまい」

「・・・」

ユエの頬に汗が伝う。

「いくです!」

ユエが影を操り、飛ばす。

「甘いぞ、ネガティブゲイト!」

ズドオンッ!

黒い塊が影を押し潰す。

「く・・・アブソリユート!」

氷が飛び出す。ヴァンは避ける。そのままユエに接近して剣を振るう。

ガキヤアンッ!

「ほう、今を受け止めるか」

「まだまだ……です!」

ユエは槍を動かし、ヴァンに突きを放つ。

「筋もいい……だが、まだ甘いな」

簡単に弾かれ、押し飛ばされる。

「ッ!……ヤアアアア!」

ユエはそれでも怯まずに影と槍を混ぜて使う。

「……瞬迅……」

「瞬迅剣!」

ズシャ

ユエより早く動いたヴァンの一撃は、ユエを貫いた。

「ユエ……!」

だがユエは血を口から吐きながらも笑う。・・・笑う？

「・・・待ってたです」

「・・・何？」

「肉を切らせて骨を断つ・・・です」

ユエが持つ槍が光る。

「待て・・・ごほ、その距離で・・・」

あの至近距離でアレを使ったらユエまで・・・

「・・・勝つためです・・・ニール・ヴァレスティー!!」

ズガアアアッ!!

「な・・・!？」

大爆発が起きてユエが吹き飛んだ・・・
だが、誰かがユエをキャッチして、更に俺の前にも人影が現れる。

「無事か？ユエ」

「クレ、ス・・・さん・・・」

「嫌な予感がしたんですが・・・」

「駆けつけて正解だったな」

「大丈夫ですか？亮さん」

「明命・・・思春に亞莎」

「・・・分が悪いな・・・ヴァンもやられたみたいだしね・・・逃げるが勝ちだな」

そう言つて男は逃げる。

「・・・ッ！」

「待て、亞莎！アイツは危険だ」

思春が亞莎を止める。

「・・・まったく、この世界に来てから薬の消費量が半端じゃないな」

クレスが薬を取り出し、渡してくる。

「・・・助かったです」

ユエは難なく立ち上がり、俺も肩を回しながら立ち上がる。

「・・・何者なんだ・・・一体・・・」

咲

「ハア！」

「セイツ！」

カキイン！

鎌とソウルイーターがぶつかる。

「お前は何者だ！どうして俺らを狙う！」

「色々あるんだよ・・・まあ、強いて言うなら・・・」

ソイツの武器に闇が宿る。

「私欲の為だよ！」

ガギインッ！

「ッ・・・そんな理由でええええ！」

鎌を投げ、走り出す。

「当たるか！」

鎌は弾かれるが、すぐにあの重い偃月刀を取り出す。

「于吉！やれるな！？」

『・・・良いでしょう。ただし、発動時間は一分です。それ以上は・・・』

「つまり一分以内なら化け物にはなんないんだな！？・・・上等だ！」

あのモードを使い、偃月刀を持ち上げる。・・・するとこの間と違い、偃月刀が伸びた。

「ええ！？・・・まあいいや！」

両手で偃月刀を振り回す。

「オラオラオラア！」

「力任せか・・・闇の吹雪」
ニライス・テンベスターズ・オブスクランス

ズガアンツ！

「ツ・・・」

俺は押され、後ろに下がる。

「・・・さて、決めるか」

男の手に強大な闇が集まっていく。

「・・・防げるか・・・!?!」

力を溜めて対抗しようとした瞬間・・・

「タァン！」

男が直前に反応してその場から離れる。

「知也・・・」

「・・・何なんだよ、コイツ」

「さあな・・・う・・・」

姿が元に戻る。・・・時間切れだ。

「さてと・・・たった一人増えたぐらいじゃ結果は変わらないぜ」

「安心しろよ。・・・俺だけじゃない」

そう知也が言うと空間が開く。

「ハアアアア！」

「ウオオッ!」

シイと剛鬼だ。二人が突撃するが、男はアツサリ避ける。

「ハア・・・面倒だ。・・・ま、決着は後でもつけられるか・・・」

そう言つて男は空間を開いて逃げた。

「・・・逃げたか」

「ああ・・・お前らは平気だったのか？」

「ああ、コイツのお陰だ」

「私が空間移動を使って戻ってきたんだ」

「・・・だが、どうしてあの男は俺達に関係のある奴を読んだのが不明だ。・・・アイツは何故俺と左慈は因縁があることを知っている？」

「・・・分からない」

「まったく・・・この世界は何が起こってるんだよ・・・」

知也が愚痴を言う。

「・・・分からない。・・・皆、今日の事は黙っていよう。いいな？」

それには皆頷いた。

「・・・」

「ただ、俺はどうしてもこの事を伝えなかった人がいた。」

コンコン

「どござ」

「・・・咲」

「どうしたのよ、こんな時間に・・・」

恋と詠が部屋に入ってくる。

「・・・今から話すことを聞いてもらえるか？」

俺は二人に今日起きた事を話した。

「・・・という訳なんだ」

「・・・どうしてそれをボク達に言ったの？」

「・・・今までの咲なら黙ってた」

「・・・なんでだろうな・・・でも、もう二人には黙っていたくなかったんだ」

「・・・やっと信じてくれたの？」

「・・・そうかな、うん。・・・そうなんだと思う」

「・・・咲、危ない？」

「俺一人じゃな・・・だから二人を呼んだんだ」

「でも、ボクは戦えないわよ？」

「精神的に支えてほしいんだよ・・・次に暴走したら間違はなく俺は化け物に変わる・・・だから、二人には俺を支えてほしいんだ。・・・好きだから」

「・・・(コクッ)」

「・・・いいわよ。・・・でも、無茶は・・・いえ、それは無理ね。・・・生きて帰ってきてね。それなら守れるでしょ？」

「・・・ああ、何だかんだで俺は生きている。・・・それなら、守れる」

「・・・」

「・・・その約束、覚えたわよ。・・・破ったら一生恨んでやるわ」

「・・・」

「分かってる。．．．もう、悲しみは充分だ．．．って恋？」

「すう．．．すう．．．」

恋は俺の布団の上で寝ていた。

「．．．まあ、夜だからな．．．」

「どっぴりするのよ?」

「起こすのも可哀想だから一緒に寝るよ」

「い、一緒に!？」

詠の顔が赤くなる。

「何度か恋とは一緒に寝たことはあるぜ?．．．そうだ、詠も一緒に寝る?」

「~~~~~!？」

詠の顔が完全に真っ赤になる。

「．．．嫌ならいいけど．．．」

「．．．る」

「．．．?」

「ボクも．．．咲と一緒に寝る」

「……待っててよ」

俺はそう言っただけで恋を少し持ち上げて、恋が寝やすい体制に変えてやる。

「……よし、寝るか」

俺も横になる。詠も何度か深呼吸をして、ようやく布団に入ってきた。

「……たまには三人で寝るのもいいな……」

「せ、狭くない？」

「大丈夫だよ。恋も詠も細いし」

「……んん……」

恋が俺の右腕に抱きつく。

「……」

「え……」

詠も反対の腕に抱き着いてくる。

「・・・暖かい」

詠が口にする。

「こんなに近くで咲を感じられる・・・ずっと、待ってた・・・」

詠が心底嬉しそうに言う。

「俺も皆に会いたいってずっと思ってた・・・」

「・・・何回も聞くけど、本当に大丈夫よね？」

「ああ、俺だってもう消えたくない・・・」

「うん・・・」

しばらくすると寝息が二つになる。

「・・・さ、き・・・大好き・・・」

顔が熱を帯びていくのを感じながら、俺も寝ることにした・・・

亮

「・・・」

俺はユエを捜す。一言謝らないと気が済まない。

「ユエ、いるか？」

『ッ！？ま、待ってくださいです！』

しばらく何か布が擦れるような音がしたり、転んだような音がしてしばらく・・・ユエが出てきた。

「ど、どうしたですか・・・？」

「いや、お前がどうしたよ」

今のユエは服はボロボロであちこちに斬られた跡があり、おでこは赤くなっていた。

「いえ・・・最近の戦いで服の予備がなくなりまして・・・それで、何か無いかと調べていた時に亮さんが来て・・・」

「慌てて服を着ようとして転けたのか」

「・・・はい」

俺は軽いため息を吐いて一言。

「・・・さつきは悪かった」

「はい？」

「俺が強ければ傷つけずに済んだ。・・・女の子に傷がついちゃマズイよな」

「・・・平気です。・・・それに、私の世界には戦っても、皆傷がないですから」

「・・・そうなのか？」

「はいです。アリエッタやリグレットさんも傷は見当たらないですから」

「・・・それでも、ゴメン」

「・・・では、お詫びとして何か服を用意できないでしょうか？」

「あ、ああ・・・それじゃあ・・・」

俺は玉座の間にユエを連れて急ぐ。

「・・・入るぞー」

俺は中に入ると、ほぼ全員が中にいた。

「あれ？駄目じゃない亮、女の子を襲ったら」

雪蓮が言う。

「バツ、違つって！最近の戦いで服がこんなになつちやつたんだつてさ」

「なぐんだ、亮が新しい女の子に種馬としての仕事をしたのかと・・・」

「そんなことはしないから！つかユエも顔を赤くしないであのバカを凍らせ！」

話が進まない・・・

「・・・今から買いに行くのは時間がかかりますから・・・私達の服を貸すのがいいと思いますう」

穩が言う。

「お気持ちは嬉しいですが・・・その、皆さんの服は・・・」

「・・・まあ、確かに大体の人は胸が大きい・・・すぎるのを前提にした服だ。」

「・・・じゃあユエが着れるのは、明命と思春と亞莎とシャオの服か・・・」

「「「それはどういう意味だ（）ですか（）よ（）？」「」「」

四人に睨まれる。俺は慌ててユエに向き直る。

「そ、それで誰のを借りるんだ？」

「そうですね……戦いを前提に考えると、思春さんか明命さんの服がいいです。……裾が短い気がしますが」

「……思春、明命。いいか？」

「問題はない」

「全然構いませんよ！」

そうして二人はユエを連れて部屋に向かっていった……そして、しばらくして戻って来た時、俺はクレスを呼んで感想を聞いてみたら……

「……似合ってるんじゃないのか？」

……の一言だけだった。……俺はそのまま一日を過ごし、また明日を迎える為に眠ることにした……

来襲（後書き）

亮

「・・・質問？」

咲

「そ、剛鬼の仲間の大輝だな」

亮

「何々・・・こつちの世界に来たらどうするか、あと剛鬼に敗北を
教えてやってくれ・・・」

咲

「・・・やっぱり戦つき。それ以外に何かあるんだよ？」

亮

「・・・だけど、俺は呉が相手だったら嫌だな・・・かと言って剛
鬼達に敵対するのはな・・・」

咲

「・・・よく考えたら俺は恋と剛鬼がイチャイチャするのを間近で
見るのか・・・」

亮

「董卓軍全員な・・・俺達にとっては好感度初期化だな」

咲

「・・・泣きそう」

亮
「剛鬼だつてそうだよ」

咲
「・・・俺にとっては恋と詠は闇を抑える心の支えだからな・・・」

亮
「それでも戦うんだろ？」

咲
「ああ、違う世界とは言え、外史を終わりに導くのが俺達の役割だ。
・・・恋や詠の為なら、俺は戦う」

亮
「・・・だそうだよ。・・・俺達は物語を終わらす為に戦う・・・これ
でいいかな？」

咲
「あとは・・・剛鬼を敗北させるか・・・あの于吉を使ったモード
と亮が咸掛法全開で・・・勝てるか？」

亮
「やってみるか・・・剛鬼は何処にいるっけ？」

咲
「さあ？・・・捜してこようぜ」

亮
「それでは次回の真似と開閉と世界旅行！」

咲
「それではまた次回！」

特訓（前書き）

学校が始まったので一日一話はキツいかも・・・ではどうぞ。

特訓

「ハアツ！タアツ！」

俺は日の昇る前から中庭で素振りをしていた。

「テヤアツ！セエイツ！」

鈴音を振り回す。そこに敵がいると想定して。

「ウオオツ！……あつ……」

鈴音が手から離れて空を飛ぶ。

「やっぱ……」

すぐに地面に突き刺さった鈴音を回収に行く。

「よっ……あれ」

今になって左手が痙攣していることに気づいた。

「……」

右手で拾い、回して腰にしまっ。

「……あ」

呼吸は乱れてなかったが、汗だくで服がびっしょりになっていた。

「……参ったな……」

今日は風呂の日ではない。よって近くの川に行くしかないのだが・

「ダメだな」

「冥琳……頼むよ。外出許可を……」

「だから護衛を連れていけと言っているだろう？」

「……いやさ、護衛を付けたら気が張るでしょ？」

「だったら明命か思春……もしくは亞莎か春鈴を連れていけばいいだろう」

「そうだけどさ……何て言うの？こつ、思春期の男の羞恥心と言

「うか・・・」

「お前に羞恥心などないだろう」

「酷い！？つか、何で即答なんだよ冥琳！」

「・・・今更だ」

その後も口論を続けたが、冥琳に口で勝てる訳がなく・・・

「ハア・・・」

俺は港をうろついていた。

「・・・こうなったら海水でもいいかな・・・」

俺は海を覗き込む。一応俺は泳げる。・・・スイミングスクールは

六級で止めたが。

「・・・とりあえずタオルか何かを持ってきて・・・」

・・・と、そこまで考えていた時・・・

「ダメです亮様!!」

「おわあっ!?!」

後ろから誰かが抱き着いてきた。

「しゅ、春鈴!?!な、何を・・・つか危ない!?!」

「え・・・きゃあ!?!」

覗き込んでいた体制で後ろから抱きつかれれば・・・当然落ちる。

バツシャアアッ!!

「(・・・つたく、何を勘違いして・・・)・・・ゴホッ、ゴホッ
!」

水面から顔を出し、春鈴を探すが・・・視界に入ったのは春鈴の右

腕だけだ。

「ッ！春鈴！？」

俺はすぐに春鈴に近づき、潜る。

「（・・・鎧か！）」

服を着て、更に鎧まで身に付けていれば確かに泳げない。俺はすぐに春鈴の鎧を外し、抱き抱える。

「・・・ぶはっ！・・・春鈴！おい春鈴！」

「・・・」

春鈴はぐったりとして動かない。

「く・・・やれるか？・・・咸掛法！！」

春鈴を抱き抱えたまま咸掛法を発動させ、一気に水面から跳ぶ。

「成功・・・つと、春鈴！？」

俺は春鈴を寝かせて、右手を腹の少し上辺りに乗せる。

「・・・ふう・・・」

気だけを練って集中する。春鈴の内臓を傷つけないようにして・・・

「ハッ！」

ドンッ！

「……ッ……ゲホッ！？ゴホッ、うゝえっ！？」

気を流し込むと春鈴が水を吐く。

「う……」

「……大丈夫か？」

「あ……最近色んな事があって大変なのは分かりますが、自ら命を断つのはいけません！」

「……」

俺は無言で指を春鈴のデコに近づけ……弾く。

パチンッ

「痛ッ！？な、何を……」

「俺は汗を掻いてて風呂にも川にも行けないから海ならいいかな？
って考えてたんだよ」

「え……じゃあ……」

「早とちりだよ、お前の」

すると春鈴の顔が青ざめていく。

「も、ももも申し訳ありません！亮様を落とすただけでなく、勘違
いして更に迷惑をかけて……」

「落ち着け。……でもさ、何ですぐ鎧を脱がなかったんだ？」

「……ッ」

見逃さない、一瞬春鈴が硬直したのを。

「……泳げないのか」

「……はい」

「……マジか」

俺は頭を抑える。

「……決めた」

「え……」

「春鈴を泳げるようにしよう」

咲
〜

「・・・」

目が覚めていきなり心臓が止まりそうだった。目を開けるとすぐ目の前に詠の顔。反対を向けば恋の顔で、心臓がマジで止まるかと思っ
た。

「・・・」

二人は俺の腕をしっかりと掴んでいるため、俺が動くと二人が起きてしま
う。

ガチャ

「失礼します・・・あ」

「月・・・」

月が入ってきて、俺達を見るなり微笑んだ。

「・・・詠ちゃん、見かけないと思ったたらここにいたんですね」

「・・・悪い、起こす?」

「いえ、もう少し寝かせてあげてください。・・・こんな嬉しそうな寝顔の詠ちゃんはあまり見られませんから」

「・・・あはは・・・月はどうしたんだ?」

「私はお茶を持ってきたんです。・・・ご主人様に朝食をお持ちして、その帰りに・・・」

「ついでだから俺にお茶を持ってきた・・・ってこと?」

「・・・そのつもりだったんですけど・・・」

「じゃあさ、詠と恋の分もお願いできるかな?・・・月はどうする?」

「私はお仕事がありますから・・・それでは失礼します」

月はそう言って部屋から出ていく。・・・ちなみに、俺は月と寝ながら話していた。だって起きれないから。

「……ん」

「……うん……」

詠と恋が同時に目を覚ます。

「起きたか？」

「……おはよう、咲」

「うん……おは……ッ!？」

詠が俺の顔を見て固まる。……だが、すぐにまた動き出す。

「そうだった……ボクは昨日、一緒に……」

「月がお茶を持ってきてくれたんだけど・・・飲む？」

「ええ！？月が来たの？・・・って、あー！仕事が・・・」

「月がもう少し寝かせてやれってさ。・・・最近、睡眠あまり取ってないだろ？」

「・・・まあ、そうだけど・・・」

「・・・詠、頑張ってる」

「頑張りすぎかもな」

「咲に言われたくないわよ」

「・・・(コクッ)」

「恋・・・お前はどっちの味方なんだ・・・？」

「・・・恋は、皆の味方」

「・・・そうですか・・・」

俺は肩を落としながらお茶を入れる。

「え？咲ってお茶を淹れられるの？」

詠が聞いてくる。

「・・・前に色々あってな・・・」

ネギまの世界での麻帆良祭・・・執事の服を着させられたと同時に接客だの茶の淹れかただのを叩き込まれた覚えがある。・・・覚えてるよ、朝倉とハルナ。

「・・・ほい」

「あ、ありがとう・・・」

「・・・頂きます」

二人はお茶を飲み・・・

「・・・美味しい」

感想を聞いて嬉しくなる。

「・・・ボクだって・・・いつかは・・・(ボソッ)」

「詠？」

「あ・・・な、何でもないわよ！」

詠は顔を赤くしてそっぽを向いてしまふ。

「？」

「……ふふ……」

首を傾げる俺の横で恋だけが笑っていた……

亮
〜

「・・・まあ、何となく予想はできてたけど・・・」

俺は目の前にいる春鈴に目を向ける。

「・・・何でスクール水着・・・」

春鈴は紺色の胸元に“凌統”と書かれたスク水を着ていた。・・・
俺は上半身裸にズボンに膝まで捲っていた。

「・・・よし、始めるぞ。・・・てか何で泳げないんだ？」
すると春鈴は顔を伏せながら・・・

「お父さんが・・・水上戦で・・・」

「・・・ごめん」

「い、いえ・・・大丈夫です」

俺達は川に来ていた。さつきまで誰かと川に来るのに抵抗があったが、思春の副将である春鈴が泳げないとなると色々大変だ。・・・ちなみに春鈴が泳げないのは俺と冥琳だけしか知らない。

「ここは手頃な深さだから大丈夫だとは思っ。・・・じゃあ始めに、水の中で目を開けられるか？」

「それぐらいなら大丈夫です」

そう言って春鈴は軽く準備運動をしてから川に入る。

「・・・」

そして、意を決して春鈴は潜って・・・潜って・・・流れていった。

「おいおいおいおい!?!?」

慌てて春鈴を救出する。

「か・・・帰ってこれなくなるかと思いました・・・」

「絶対に違う川を泳がないでくれよ・・・」

その後もしばらく教え・・・

「わぁ・・・見てください亮様！泳いでます、浮いてます！」

春鈴が嬉しそうにバシャバシャばた足で泳いでいる。

「ふう・・・」

俺は息を吐き、一旦川から上がる。・・・その時、

「・・・やっと陸に上がってくれましたか」

「ッ！？」

俺の真後ろに少女が立っていた。

「・・・どうも」

「く……!」

俺は咄嗟に距離を取って拳を構える。春鈴も同様にトンファーまでゆっくりと歩いていく。

「……待ってください。敵じゃありません」

少女は茶髪の髪を軽く払ってから言う。

「シイさん達の仲間……と言えはいいでしょうか?」

その瞬間に俺達の敵意が薄れる。

「……何でこのタイミングで?」

「純粹に興味があったのと……忘れ物を届けに来ました」

そう言って少女は指輪とシイの絵が書いてある仮契約カードを取り出す。

「……んで、名前は?」

「……そうでした。私の名前は夜神撫子。好きなように呼んでください、亮さん」

そう言って撫子は近づいてくる。

「すみませんが……シイさんはいますか?」

「……蜀にいるけど……」

「……分かりました。では、少し行ってきます」

そう言つと撫子は形容しがたい音を出しながら影に沈んでいく。

「……」

「……」

後に残されたのは呆然とする俺と春鈴だった。

咲

「……んで？」

「ですから、私は敵ではなく、味方です」

「それはもう分かった。ただどいきなり後ろに現れた事について言うことがあるだろ？」

「……隙だらけですね」

「違う！謝れ！予想外にホラーを味わわされた俺のな……」

「すみませんでした。……これでいいですか？」

「何かスツゴいムカつくけどまあいいや……それで、これは何だ」

俺の手にはシイの絵が書かれた仮契約カード。

「それをシイさんに渡してほしいのですが……」

「……俺は便利屋か何かか？」

「・・・ぐう」

「寝るな！」

「・・・それでは戻りますので」

そう言って撫子は影に吞まれていく。・・・その後、シィにカードを渡して、軽はずみに相手を聞いたら拳が飛んできた。・・・黒歴史だったか・・・

亮
↓

「……んで、また戻ってきたわけだな」

俺は部屋に戻り、ベッドに座ろうとしたら撫子がいきなり現れ、驚かされた。

「……お前は誰かの後ろじゃないと移動できないのか？」

「別にそんなことはありません」

「・・・ハア」

俺は立ち上がって撫子の腕を掴む。

「？」

「どうせお前もしばらくここにいるんだろ？・・・なら皆に紹介しない」と

俺は玉座の間に向かう。今ならクレス達もいると・・・思う。

「・・・入るぞ」

中に入って例に漏れず、真っ先に雪蓮が口を開く。

「亮・・・いくらなんでもその趣味はどうかな・・・」

「だからそうじゃないっての。・・・クレス、ユエ。・・・知り合いか？」

「撫子さん？」

二人の知り合いで間違いは無いか・・・

「・・・蓮華、まだ部屋はある？」

「ああ・・・あることにはあるが・・・」

「・・・お世話になります」

「・・・亮さん、こう見えて撫子さんは私より操影術の扱いが上手いです」

ユエが言う。

「・・・何だかなー・・・」

こうして新しい、仲間が増える事になった・・・

特訓（後書き）

亮

「今回は鳩麦さんの質問で、俺達の最大技について色々調べようかなって」

咲

「・・・」

亮

「・・・どした？」

咲

「必殺技っていう必殺技がないんだ・・・俺」

亮

「・・・」

亮

最大技

猛虎獣衝撃

発動に掛かる時間等

大体五秒から十秒の間に溜める。

威力や見た目など

ぶつちやけラオウ・デイバウレン。一応威力は亮の技の中で最高の位置に入るが、獣化した小太郎には耐えられたり、雪蓮には両断されたり、蓮華には打ち負けたりと可哀想な技。亮本人は手数で攻めたりするタイプなので、デカイ技は不得意。応用としては大きさを変えてこまめに連射するのも可能だが、亮本人は使う気はない（溜めるより肉弾戦の方が楽な為）

咲

技ではないが、于吉の闇を使ったモードが現在最強技に入る。

発動に掛かる時間

実はまちまち。于吉があっさり承諾してくれればすぐに変身できる。

見た目

髪と瞳は銀色になり、Bモードが更に禍々しくなる。例えるならハセラビーストで髪がセフィロスな感じ。

問題点

現時点では一分が限界。これを越えると闇に呑まれ、暴走、もしくは化け物になってしまう。ただし、その分威力は強力で、1tする偃月刀を軽々振り回せる。

なお、Xブレードなる技を一度使ったが、アレは闇と光が必要で、今の咲には使えない。ダークファイガも牽制程度な技で、咲は大体相手の妨害に使う。

亮

「・・・文字数が足りなくなるので、明命達はまた次回」

咲

「それでは次回の真似と開閉と世界旅行！」

亮

「次回もお楽しみに！！」

終わりに近づくと平和（前書き）

学校・・・久々に行つて最初に思ったこと・・・階段長え！（教室は六階）・・・ではどうぞ。

終わりに近づくと平和

「……何で俺が……」

中庭には呉の全員と別の外史の出身者。

「……眠い……」

俺の目の前にはゆらゆらしている撫子。事の発端は雪蓮の発言。『撫子はどれくらい強いのか？』で、話が広がって……今に至るのだ。

「……撫子、用意はいいか？」

そう聞くと撫子が眠そうな目を開いて、影から鎌を作り出す。

「……では、行きます」

そう言うと撫子は一瞬で鎌の射程範囲に入る。

「な……」

鎌が振るわれ、俺は鈴音を両手で構える。

ガギインッ！

「ッ……こん、のお！」

「……！」

鎌を受け止めた体制で蹴りを放つが、撫子は後ろに飛んで避ける。

「好都合……猛虎獣衝撃ッ！」

すぐに魔力と気で虎を作り出し、撃つ。

「……“壁”」

ズガアアアンッ！！

「……」

俺は鈴音を持ち直して腰を落とす。……やがて煙が晴れ、無傷な撫子が確認できる。

「……だと思った」

バリアか何かを張ったんだろう。

「……流石ですね。……では、次行きます」

撫子の後ろから影が現れて、飛んでくる。

「速い……！しかも、鋭い！」

確かにユエが言う通り、ユエより影の扱いが美味い。

「く・・・瞬動！」

止まっても得は無い。・・・なら進む！

「来ると思いました。・・・“槌”」

そう言って撫子は金槌を出して、巨大化させて振るう。・・・避けられない！

ドゴオオオンッー！

「ガハア・・・!?!？」

受け身も取れずに吹っ飛ぶ。

「ぐっ……くそ、ハンマーは嫌いだ……」

ネギまの世界でヴィータと戦った事を思い出す。

「大丈夫ですか？」

撫子が聞いてくる。

「大丈夫だ。……まだやれる……」

これ以上敗けを重ねるのは嫌なんでな……！

「明命！蓮華！」

「は、はい！」

「え、ええ」

二人が魂切と南海霸王を投げる。

「来れ、呉の若き誇りよ！ここに集いて呉王の力を呼び覚ませ！・・・
降臨、刺天猛虎！」

槍を作り出し、突っ込む。

「ハイハイハイッ！！」

槍で連続突きを放ち、撫子はそれを避ける避ける。

ビュン！

「ッ！」

「あ・・・」

その内の一発が撫子の頬を擦る。

「わ、悪い・・・」

「・・・大丈夫です。・・・“束”」

「・・・え！？」

身体が拘束され、動けなくなる。

「・・・（ニコッ）」

撫子は微笑んで・・・巨大化させたハンマーを構える。

「ま、待って・・・」

ズガアアアッ！

「負けた・・・子供に負けた・・・」

俺は泣き崩れていた。

「・・・撫子さん、お疲れ様です」

ユエが撫子の頬の傷を治す。

「・・・まあ、途中動きが止まらなかったら私が負けてたかもしれませんが・・・」

「・・・亮は勝負には強いが試合には弱いタイプだな」

クレスが言う。

「・・・そういえば、亮って後がない勝負の時は・・・何と言いま
すか、こう・・・覇気が違うといえますか・・・」

明命が首を捻りながら言った。

「・・・ねえ、撫子。私とも戦ってみない？」

「・・・構いませんけど・・・」

その後は撫子は頼んできた相手と片っ端から戦った。・・・雪蓮があの状態になりかけて俺は焦ったけど・・・何もなく模擬戦は終わった。

咲
〜

「・・・曹操を叩く？」

軍議の場で朱里が言った。

「はい。このまま睨み合いを続けていても無駄です。・・・こちらから攻めましょう」

「それはいいけどよ……どこで戦うんだ？」

「……今進軍した場合……ここで戦う事になるでしょう」

そう言って広げた地図に朱里が指差した場所は……

「……赤壁になるでしょう」

「……またかよ」

翠が呟く。

「朱里、呉と連携を取るのか？」

愛紗が聞くと、朱里はうなづく。

「……蓮華さんには既に雛里ちゃんが伝令を送っています。……
後は返事を待つだけです」

「……でも、蓮華ちゃんなら協力してくれるよ」

その言葉に全員が頷いた。

「問題は敵の兵力ですわね・・・」

「なーに、どんな敵であれ、負けることはあるまい」

紫苑の言葉に桔梗が楽天的な答えで答える。

「・・・」

俺とシイ、剛鬼と知也は黙っている。理由は簡単。あのロープの男だ・・・だが、俺は正体は断定できる。・・・なら、そいつは俺が・・・！

(・・・咲)

「(・・・?)」

(一人で戦おうとしないで)

そうだ。俺は絶対に隠し事はしたくないって決めたんだ。

「(前に話したロープの男・・・現れたら、倒したい。・・・協力してくれるか?)」

(・・・もちろん)

「(・・・ありがとう)」

そつだ、いくら自分の問題だからと言つても誰かに頼っちゃいけない訳じゃない。

「それじゃあ、県から連絡が来るまで自由時間にしよう。皆、いいね？」

「一刀の言葉に反対する者はいなかった・・・」

亮

「……いよいよか」

蜀から曹操を叩くと連絡が入った。それで準備をするのだが……俺はケータイと武器があればそれでいいので早く準備がおわったりしている。

「……よし」

俺は草原に寝転がる。

「……随分と暇そうだな」

「おおあー!?」

視界に空ではなく思春の顔。

「び、びつくりした〜・・・準備は終わったのか？」

「・・・ああ、私も用意は早く終わらす方だからな」

思春が俺の隣に座り込む。

「・・・いい天気だよな・・・これから戦争なんていまだに信じらんないや」

「・・・そうだな、私もそう思う・・・だが・・・」

「分かってる。・・・やるだけだよ、俺達は・・・」

「・・・そうだな」

俺と思春は空を見上げる。そこには雲一つ無い空が広がっていた。

「・・・それで、お前らも休めば？」

「「ッ!?!」」

近くにいた明命と亞莎がやって来る。

「・・・気づいてたのですか？」

「そりゃもち」

亞莎と明命も思春と同じように座る。

「二人とも準備は終わったのか？」

「はい。・・・赤壁・・・ですね」

亞莎が心配そうに言う。

「・・・まあ、俺達が消えたのも赤壁の後・・・だったからね」

「」「」「」

三人とも押し黙ってしまふ。

「大丈夫だよ。・・・消えない・・・絶対に・・・！」

それは願望でもある。二度と消えたくない・・・俺は・・・

「・・・亮」

「え、あ、な、何だ？明命」

「いえ・・・何か難しい顔をしていたので・・・」

「大丈夫。ちつと考え事」

「そうですね・・・それならいいんですけど・・・」

「絶対に……」

「「「？」」」」

「絶対に……また全員で祭りを楽しもうな」

「はい！」

「ああ」

「もちろんです！」

俺達は笑い合う。……そして、遠くで春鈴が俺達を呼んでくる。
……時間だ。

「さあ……行くか！」

咲
}

「ハア！」

「っしやおらあ！」

ガギインツ！

今俺は翠と手合わせをしていた。翠とは決着をつけてやらないといけないと思った。

「・・・ソラア！」

ガキヤアンツ！

槍が吹き飛ぶ。

「・・・はあ、私の負けか・・・」

翠はアツサリと引き下がる。

「珍しいな、前だったもう一回・・・って言ってたろうに」

「ん？・・・まあ、今は・・・」

「もう、お姉様も素直じゃないんだから」

「たんぼぼ？」

「じ・つ・は〜・・・翠お姉様はご主人様より咲の方が〜・・・」

「たんぽぽッ!!--!!」

「うひゃ!?!?・・・そんなに怒らなくてもいいじゃん!?!?」

翠が顔を赤くしてたんぽぽを追い回す。

「・・・?」

俺は首を傾げる。

「ねえねえ、私とも手合わせしてみてくれる?」

「桃香?・・・あの時はネギの魔力があったから・・・」

「やってやれよ」

「一刀」

「・・・恥ずかしいけどさ、桃香はとっくに俺よりも強いんだよ」

「・・・あっはは!何、一刀負けたのか!?!?」

「笑うな!・・・それで?」

俺は笑いを止めて、若干真面目になる。

「……いいぜ？」

「……」

「・・・用意はいいか？」

キーブレードを回して尋ねる。

「うん。いつでもいいよ」

対する桃香は一枚のカードを取り出す。

「（・・・待て）」

よく考えたらアーティファクトって・・・と、その間に桃香は呟く。

「来れ（アデアット）」

カードが光り、地面に武器が突き刺さる。・・・が、増える。

「……なあ、武器増えてないか？」

「……これね、お友達になったらその人の武器が使えるんだよ？」

「……」

絶句。桃香の性格なら間違いなく武器は無尽蔵に増えていく。

「じゃあ……いくよー!」

桃香が手にしたのは……え？

「桃香……?」

桃香は武器を持っていない。……だが、瞬時に理解する。……
アレはセイバーの剣だ。

「えい!」

「チツ……」

カキイン!

剣が見えない事に苛つきながらも防ぐ。

「そこだよ!」

桃香は剣を手放して地面に刺さっていた偃月刀を引き抜き、振るうつ。

「ッ……!」

ガキャンッ!

何とか防ぐが桃香は次々に武器を変えてくる。

「神槍『スピア・ザ・グングニル』」

「嘘オツ!?!」

桃香はレミリアが使う真紅の槍を投げってくる。

「く……Bモード!」

ズガアアアッ!!

咄嗟にBモードを発動して、防御をする。

「……たく……チートだチート」

眩きながら煙が晴れるのを待つが……

「やああ!?!」

桃香はそれを待たずに偃月刀で斬りかかってくる。

ガギインツ！

「……ッ！普通は煙が晴れるのを待つだろ……」

「咲君が相手だから……守ったら負けちゃうよ」

「そりゃそう……だ！」

一気に桃香を押し飛ばす。

「うう……まだ！」

桃香は諦めずにまた武器を持ち帰る。……しつこい……！

「無尽蔵すぎるぞ……」

何より桃香の判断力が凄い。拾った武器を即座に理解して戦闘スタイルを変える……よっぽどの技術がないと無理だ。

「（……そして武器のバリエーション……！あの融合した世界で桃香は更に交流を広げた……）」

桃香はネギの杖を持っている。……まさか、

「雷の暴風（ヨウイス・テンペスターズ・フルグリエンス！）」

「な！？・・・闇の吹雪！」
「ヨウイス・テンペスターズ・オブスクランス」

ズガアアアンツ！！

杖が砕ける。・・・どうやら杖自身に魔力があったらしい。

「ウオオツ！」

「はあああ！」

俺は軽い方の偃月刀を振りす、桃香は蛇矛で攻めてくる。・・・そしてヒートアップしたその時、

「ストップ！」

「・・・そこまでだ！」

シィと剛鬼が止めに入る。俺は舌打ちをしながらBモードを解除する。

「・・・何？」

「中庭を、城を壊す気か」

「ハア？」

「周りを見てみてよ」

「……あ」

辺り一面クレーターだらけになってた。

「……」

俺と桃香は啞然として……

「……咲殿、桃香様？」

「……ツ!?」

愛紗の心底冷えた声で一気に青ざめていく。

「出陣前に……何をやっているんですかぁー……!!」

「……ごめんなさーい!?!」

出陣を前にして俺は怒られるハメになってしまった……

「……じゃあ、行ってくる」

詠にそれを言う。董卓軍の面々は恋を除き留守番だ。

「・・・約束しなさいよ。絶対に生きて帰ってくるって」

「・・・当たり前だ。・・・詠も、俺の、俺達の帰ってくる場所を頼む」

「分かってるわよ。・・・気を付けてね。待ってるから」

「・・・おう」

軽い死亡フラグだが・・・そんなのは関係ない。絶対に俺は帰ってくる。

「・・・行こう、恋」

「・・・(コクッ)」

俺達は出陣を開始した・・・

終わりに近づくと平和（後書き）

亮

「今回は明命達の必殺技！・・・数話前に説明した気がするけど」

咲

「気にするな」

明命

闇夜を駆ける疾風の一撃ソニック

効果等

魔力を爆発させて瞬発的に加速させる。それによりソニックブーム（かまいたち）を生み出し、相手を切り裂く。

溜め時間

助走がついていれば溜めはいらぬ。逆に考えると助走がついていなければこの技は使えない。

応用

瞬動のようには使えず、連発も出来ない（連発すると身体がGで持

たない) 明命はこれを応用して腕を加速させてソニックブームを飛ばす方法を編み出した。

リスク等

特にはない。直線的に見えるが、初見の相手にはまず見破られないため、本当の意味で初見殺し。

恋

戦場を駆ける一騎当千の将 ホウテンガゲキ

効果等々

莫大な魔力を方天画戟に集め、放出するだけだが、威力は絶大。ちなみに、ただ魔力を放出するならそれほどでもないが、恋はサーヴァントとして呼ばれ、知名度によって力が増幅されているので、魔力自体がかなりの威力を誇る。

溜め時間等

十秒くらい。これは長くできても短くは出来ない。

リスク

あえて言うなら威力がでかすぎる。ネギまやAngel Be
ats!では使用を止められた事もある。だが、Fateで一度だ
け校内で撃ったが、加減したソレでも学校は半壊した。

応用

セイバーの約束された勝利の剣エクスカリバーの様に、放出するだけではなく、刀
身に魔力を集めて斬りつけることも可能だが、大振りになり、更に
隙もデカイ為、一度も使っていない。そもそも恋の場合魔力を少し
だけ籠めて方天画戟を振るうだけで充分脅威になる。

亮

「やっぱり恋は強いな……」

咲

「そりゃ、俺の自慢の……彼女……てか……何て言うか……」

「妻?」

「そうそうそれぞれ……ってちっがあああう!」

亮

「(……それでも構わないだろうに)」

咲

「く……次回の真似と開閉と世界旅行!!」

亮

「次回もお楽しみに」

赤壁の戦い（前書き）

頭髪検査・・・髪を切らなかつたけど教師にスルーされてセーフでした。ではどつぞ。

赤壁の戦い

俺達呉と蜀は合流して、一旦話し合いに入る。何でももう少し曹操軍を誘き寄せたいらしい。

「……目が覚めたんだな」

「……ああ」

俺は咲と話しをしていた。

「……つたく、本当なら一発ぶん殴りたいところだけど、反省してるんじゃないや」

「ああ……悪い、これからはちゃんと話すよ」

「それならよし」

俺は拳を引っ込める。咲も反省してるのか頬を掻いている。

「……それで、恋は？」

「それがさ……闇を普通に使ってるんだよ……俺は使い始め

の時は黒い感情に呑まれそうになったのに……」

「……さすが恋……」

恋には脱帽するばかりだ。つか、器用だな、おい。

「……なあ、あのローブ……見たか？」

咲が聞いてくる。

「ッ！……お前の所にも来たのか……」

俺達はそいつらについてしばらく話し合う。そして、一刀に呼ばれ、皆が集合した。

3834

「……さて、予想通り相手は私達より兵力が上です」

「……？朱里ちゃん、今の私達より兵力が上なの？」

「はい。今までの戦や、状況を考えると、相手は三国が固まっていると判断してよろしいかと」

「……それで、何か具体的な案はあるかな」

一刀の発言に剛鬼がため息を吐く。きつと「自分でも考えるよ」的な事を考えているのだらう。最初に明命が手を挙げる。

「あの、また火計はできませんでしょうか？」

「無理だな」

俺が明命の案を否定する。

「……今回は風向きが悪いし、祭さんの苦肉の計も通じない。……それに相手は別世界の曹操……きつとこっちの策もある程度看破してくると思う」

その言葉に何人かが頷く。

「……じゃあ、やっぱり正攻法しかないのか？」

クレスが言う。

「……はい」

「……なら、俺と紫苑、それに黄蓋が後ろで援護して、そして後の奴等が突撃……でよくないか？」

知也がそう提案する。

「……それが一番ですが……被害もかなりのものになるでしょう……」

「そこは俺達が補う」

「単騎突破は得意だよ」

剛鬼とシイがそう言った。

「……もうパーっとやりましょうよ。負けたらどうしようもないんだし」

「雪蓮……それはいくらなんでも……」

「……今回は姉様が正しい。冥琳、他に案がないのならそれしかあるまい」

「……だな、どのみち船の上だ……下手な策は通用……っつて恋？」

咲の腕を恋が引っ張る。

「……恋なら飛べるし……燃やせる」

『あ』

そつだ。確かに恋は火を使えるけど……

「危険だ。矢で射落とされたら……」

「……障壁に集中すれば大丈夫」

「だけど・・・！」

「・・・私達も行けばいいよ」

「シイ？」

「私と咲と恋。速く飛べるのは私達くらいだし、三人もいれば大丈夫だよな？」

俺は軽く難しい顔をする。

「・・・亮さん、飛べなくて悔しいのは分かりますが、私達は私達ですっかり敵を倒しましょう」

「・・・ああ」

ユエの言葉に答える。後は大した話題もなく、部隊の割り振りの話をして、解散になる。

「・・・撫子さん、終わっただす」

「・・・ん・・・終わっただんですか・・・ふわ・・・」

喋らないと思ったら寝てたよこの子。

咲
〜

今、俺は恋とシィと一緒に魔力を練っている。

「・・・魔力切れは起こすなよ？」

「そつちこそ」

「・・・大丈夫」

遠くには曹操の船。アレを燃やし、曹操軍に大打撃を与える。

「・・・そろそろだな」

俺達は練った魔力を解放し始める。

「千の雷……固定、掌握！」

「ハアアア……タアツ！」

シイはマギア・エレベアを、俺はBモードを発動させる。

「……来れ（アデアット）」

恋はアーティファクトを展開……だが、いつもの白だらけの衣装ではなかった。白いドレスにはあちこちに黒いラインが入り、左手に真つ黒の大剣、左の翼は白から漆黒に変わり、目も左目が金色になる。

「恋……お前……」

「……闇の力」

恋はレイピアと大剣を握りしめる。……その時、作戦開始の銅鑼が鳴った。

「……行くぜ！」

俺達は一斉に飛び出す。シイは俺達に速度を合わせてくれている。雷速瞬間なんて使われたら追い付けない。

「……」

敵も気づいたようだ。段々と矢が飛んできた。

「ダークシールド！」

デフレクシオー
「風楯！」

俺とシィで防御する。・・・恋は背後で詠唱を開始していた。

「・・・恋！」

そして射程範囲まで辿り着いた。

「・・・魔法の射手連弾・火の199矢」
サキタ・マギカ セリエス・イグニス

ズガガガガ！！

恋は威力よりも数と速さで燃やす。そして敵船に火が燃え移り、薄暗い空が明るくなる。

「よし・・・戻るぞ！」

俺はそう言って戻ろうとした瞬間、

「きゃあああ!?!」

シイがいきなり叩き落とされた。

「シイ!?ぐわっ!?!」

俺も知覚できない内に弾かれ、海に落ちる。

「(今は・・・!)」

すぐに水面から上がる。

「くそ・・・」

「ゲホツ・・・やってくれたね・・・ハアアアア!」

シイが海から飛び出すなり、俺らを落とした・・・ロープの男に飛びかかる。

ビュン!

「遅いな」

「な・・・ぐ!?!」

シイの一撃は避けられ、頭を掴まれる。

「はな、せ・・・」

シイが暴れるが男は掴んだ片手をまったく緩めない。そして男は手に闇を纏い出した。

「く……ああ!?頭に……何かが流れ込んできて……!?!」

「……ッ!止めるおおおおお!!」

俺は飛び上がり、男に鎌を振り下ろす。

ガキャンッ!

男はキープレードを取り出し……受け止めた。

「く……咲」

恋は俺達に当たらないように一人で矢を叩き落としている。……そして男がローブを脱ぐ。

「な……」

「よう……俺」

俺と同じ顔がそこにあつた……

亮

「く・・・何があつたんだ!？」

「俺が分かるわけないだろ!」

「そうだけ、ど!」

「お前ら、喋っている余裕があるならもっと倒せ」

「「解ってるよ」「

俺とクレスと剛鬼で敵陣に切り込む。退路はユエと撫子が抑えていてくれる。

「下がれ！」

クレスが魔法媒体の指輪を向けると、辺りが爆発に見舞われる。

「行くぞ・・・風の傷!!」

剛鬼が鉄碎牙を振るい、兵士を倒していく。

「負けていられない！猛虎獣衝撃!!」

今の俺達ならやれる・・・勝てる・・・!!

「・・・おかしい」

剛鬼が呟く。

「・・・何がだよ？」

「明らかに敵が弱い。・・・まるで俺達を誘い込んでいるような・・・」

「その通りだ」

「「「!?!?!」」」

ズガァンツ!

背後の船が爆発する。

「まずい……ユエ! 撫子!」

クレスが叫ぶ。

「……そんなに呼ばなくても平気です」

撫子が影から現れる。

「……ユエは……!?!」

「……無事です」

ユエが爆発している船から飛んでくる。

「危うく丸焼きになるトコでした」

「……意外にしぶといな……」

ローブの男が言う。

「……お前は何者だ?」

剛鬼が刀に持ち替えながら言う。

「・・・あつちもバラしたみたいだし、いいかな」

男がローブを脱ぎ捨てる。

「え・・・」

「始めましてだな、俺」

俺と同じ顔だ。

「・・・生き別れの兄弟ですか？」

「撫子、今はそんな冗談はいいよ」

「「「うわあああ!?!?!」」」

ズドオオンツ!

咲とシイと恋が空から落ちてきた。

「・・・くっそ・・・あの野郎・・・シイ、無事か!?!」

「う、うん・・・少しだけ気持ち悪いけど・・・」

「恋は!?!」

「・・・大丈夫、無事」

「咲・・・!?!」

「……亮か……この状況……」

目の前にはもう一人の俺と咲。

「……開け」

もう一人の咲が大量の兵士を出現させる。

「俺達はこれで終りだ。……もしコレを倒せたら相手をしてやる
よ」

そう言って二人は姿を消す。

「……多いな」

「どうした？弱気だな」

「……尋常じゃない量なのは確かだけどね……」

「ですが、諦める気はないです」

「早く終わらせて寝たいですね」

「気持ち悪いのを発散しなきゃね」

クレス達が言う。

「・・・咲、今はやるぞ」

「解ってる・・・」

俺達が戦いだそうとした瞬間、上から誰かが飛んできた。

『トリガー！マキシマムドライブ！』

「トリガーフルバースト！」

「闇夜を駆ける疾風のコンボ一撃——！！！」

ズガアアアンツ！！

「知也」

「よ、いいタイミングだろ？」

「明命・・・！」

「助けに来ました！・・・さあ、いきましょー！」

「・・・咲、戦う」

「ああ・・・行くぜ！」

俺達は包囲網を突破する為に敵に突っ込んでいく。

「乱戦はなれてるんだよ！」

ズバア！

俺は鈴音を振り回す。

「・・・咲イ！明命に武器を！・・・明命！」

「は、はい！来れ（アデアット）！」

明命が魂切と南海霸王を投げる。

「来れ、呉の若き誇りよ！ここに集いて呉王の力を呼び覚ませ！吼え上げられ、刺天猛虎！」

「明命、受けとれ！」

咲が二本の長短の日本刀を投げる。

「・・・中の人ネタか？」

「なんなら小蓮も呼ぶか？」

そんなアホな会話をしている内に敵をどんどん倒していくが・・・

「・・・きりがなし・・・」

シイが呟く。確かに敵が減ってる気はしないが・・・

「・・・やるしかないか・・・于吉、力貸せよ！」

咲がそう言ってキーブレードを振り上げる。

「世界の壁よ・・・開け！」

キーブレードを振り下ろすと空間が開く。

「な・・・」

「出来たか・・・？亮！」

咲が膝をつきながら干将莫耶を投げってくる。

「お前・・・」

「いいからやれ！」

俺は干将莫耶を投げる。

「来てくれ・・・！」

それに答えるように空間から二人の人影が干将莫耶を掴みながら現れた。

「・・・久しぶりだね、亮君」

「・・・ったく、何だよいきなり・・・」

「アキラ・・・ひさ子！」

「私達だけじゃないよ」

更にどんだん人が出てくる。

「行くぞ、セイバー！」

「ええ。凜、行けますね」

「状況は把握したわ。・・・いけるわよ！」

Fateの三人が。

「アスナさん、刹那さん！お願いします！」

「行くわよ、ネギ！」

「お嬢様はお下がりください！」

「怪我をしてる人がいたら言ってーな。すぐなおしたるよ」

ネギまの四人もやって来る。

「はは・・・こりゃ凄い・・・」

「亮！危ないです！」

明命が叫ぶ。空から大量の矢が降り注いできた。

「ガードスキル、ディストーション」

だが矢はまったく違う方向に飛んでいく。

「奏!？」

「俺達もいるぜ!」

「助けに来た!」

「死んだ世界戦線、再集結よ!」

Angel Beatsの四人も来てくれた。

「ほら、ここはアタシ達に任せていけ!」

「・・・勝ってね、亮君」

ひさ子とアキラが言う。

「・・・悪い!咲・・・行けるか!？」

「・・・つたりまえだ!へばるにはまだ早いぜ!」

咲も立ち上がる。

「アイツらを・・・もう一人の俺達を叩く!」

「私達も手伝います！」

「・・・恋も行く」

「シイ、行ってこい！」

「・・・うん、お願い！」

「剛鬼、行け！」

「・・・任せたぞ」

俺達四人とシイと剛鬼は走り出す。決着をつけるため。平和を手に入れる為に・・・

「（・・・絶対に勝ってやるさ・・・！）」

決意を胸に秘めて・・・

赤壁の戦い（後書き）

亮

「さあ、ネタ切れだぜ！」

咲

「はええよ」

亮

「まあ、色々あるんでな」

咲

「どつするんだよ・・・」

亮

「昔みたいに適当に話の内容を話すか」

咲

「・・・今回はもう一人の俺達の登場だな。アレもリョーコやサキと同じ存在か？」

亮

「そつとも言えるし、違つとも言えるな」

咲

「・・・なんだそりゃ」

亮

「細かいのは次回わかるよ」

咲 「・・・じゃあ今回の俺の世界開きは・・・」

亮 「于吉の力を使つての開閉だから、世界の壁も開けた。・・・
だけ
ど当然疲労もでかい」

咲 「ふーん・・・じゃあ今回の明命の中の人ネタって？」

亮 「友達に見せられたとあるゲーム。他にも楽進や張角やシャオや詠
とかも呼べるぞ」

咲 「・・・じゃあ、今回の呼び出したキャラの基準は？」

亮 「その世界のメインを選んだ。アーチャーがいないのは単に来なか
っただけ」

咲 「ふーん・・・それじゃ、今回はここまでだな」

亮 「次回の真似と開閉と世界旅行！」

咲

「次回もお楽しみに！」

真似と開閉と世界旅行（前書き）

少し遅くなってしまいました・・・それではどうぞ。

真似と開閉と世界旅行

俺達は船から飛び降りて走る。

「……いた！」

遠くにもう一人の俺達が立っていた。

「……来たか」

「随分と早かったな」

「……まあな、聞きたいことがあるんだよ」

「……なるほど、それじゃあ」

もう一人の咲が指を鳴らすと辺りが闇に包まれる。

「亮!？」

「……咲!？」

俺と咲だけが闇に包まれ、黒い空間に投げ出される。

「……アイツらは邪魔だからな」

「……何が聞きたいんだ？」

「決まっている。お前らの正体だ」

咲が前に出ながら言う。

「・・・簡単だよ。俺はお前だ」

「それじゃ説明になんないんだよ・・・！」

「俺達はな、お前らが創り出した世界の破片なんだよ」

もう一人の俺が言う。

「破片・・・だと？」

「ああ、お前らのお陰で生まれた破片。それが集まってこの姿って訳だ」

「・・・それがこの外史を消すのにどんな関係があるんだ？」

今度は俺が聞く。

「・・・最初はよかつたさ。楽しい記憶もあつた。・・・けどな・・・」

もう一人の俺達の目に狂気が宿る。

「集められる破片はハッピーエンドだけじゃない・・・むしろ悲劇

的なバッドエンドが集まって、頭ん中が痛くて、苦しくて・・・お前らにこの悲しみが分かるか？」

「・・・」

「そこで俺達は思い付いたんだ・・・悲しみの記憶が流れてくるなら・・・」

「・・・その記憶の元を壊せばいいってことをな・・・！」

「・・・」

俺達は絶句する。俺が・・・俺達が派生させた世界の重みをコイツらに全て背負わせていた。ようは惑星が出来るのと同じだ。様々な塵が集まって、形を創る。・・・そして、物語の破片・・・つまり終わった外史はどう考えても悲劇的な終わり方のほうが多く集まる。

「・・・だから、俺達を消す・・・か」

それでも、コイツらが苦しんでいようと俺達には譲れないモノがある。

「・・・1つ言ってやる。悲しいからって俺達の外史を壊しても・・・他のより大きい破片がお前らにまとわりつくだけだ」

刺天猛虎を構える。

「それに俺達は負けられない。・・・待っていてくれる人がいるから」

咲がBモードを発動させて鎌を構える。

「……絶対に消してやる……!!」

俺と咲の間に闇が広がる。だが俺達は目でお互いの意志が伝わる。

「(……勝てよ)」

お互いの姿が見えなくなり、目の前のもう一人の……咲を見据える。

「お前が相手か」

「俺と俺を戦わせても相討ちになるのは目に見えているからな」

「……一応言っとく……咲は俺には勝ったことは少ないぜ」

「ナメるな……俺は色んな世界の五十嵐咲の力を持っている……アイツと同じと思うな！」

咲はあの銀髪のパターンを発動させる。

「消えろ……大澤亮！」

「やれるもんなら……やってみやがれ！」

俺と咲はぶつかり合う。この勝負だけは……負けられない！

咲

ガギインッ！

鎌と黒く輝く刺天猛虎がぶつかる。

「やるじゃねえ、か！」

「それほどでも！」

俺達はずっと武器をぶつけ合っていた。・・・正直に言っただけは強い。

「だが、諦めらんねえよな・・・詠・・・」

「そんなのんびりとしていいのかよ？」

「何？」

「俺達は何もしてないと思うか？・・・もうじきもう一つ作っておいた部隊がお前らの城を襲撃する。・・・もたもたしていると皆死ぬよ?」

その言葉に俺は焦る。マズイ。

「ウオオオオオ！」

「あはは！やっぱりそうなるよな！」

『・・・私よりタチが悪そうですね』

「・・・同感だよ！」

鎌を振るうが、亮はあっさりとそれを防ぐ。

『・・・使いますか?』

「まだだ！もう少し・・・ッ！」

亮がバックステップで下がる。

「・・・じゃあ、決めてやるか」

亮の周りに大量の武器が集まり、融合する。

「・・・呉王、刺天猛虎。蜀王、靖王伝家。魏王、絶」

亮の周りに全てが黒く輝く槍と剣と鎌が舞う。

「……はは、マジかよ……」

「当然、こういった武器も使える俺がいるって訳だ」

俺は息を呑む。アレは桃香と曹操の武器。

「（……参ったな……）」

こっちは体力を消耗している。せめてもう少し、力があれば……

『……ありますよ。……ですが、かなり危険です』

「……一応聞いてく。何だ？」

『この空間を作り出しているのは、何でしたか？』

「……！」

その言葉に黙ってしまふ。確かにそれなら俺の力は回復する。……
けど……

『……勿論、暴走する恐れはあります。ですが、ここで死んで外史を破壊されるよりはマシですよ。……ふふ、私は何を言っているんですかね。私はこの外史を破壊しようとしていたのに……』

俺はそれを聞いて、みんなの顔が浮かぶ。

「（恋・・・詠・・・）」

俺は覚悟を決めて手を上に向けろ。

「・・・暴走する気は更々ない。・・・使いこなしてやる。・・・行くぜ」

空間を維持している闇を吸収していく。そして段々黒い感情が頭に流れ込んでいく。

「ウオオオオオオ!!」

本来于吉の力を使わないと出来ないあのモードに切り替わっていく。

「（待ってる・・・必ず・・・生きて帰る!!）」

明命

亮達が闇に包まれた瞬間、大量の敵が現れた。

「……く、多い……」

「……それでも、やる」

私は刀を、恋さんは方天画戟を構える。

「来れ（アデアット）！」

「……さあ、やるか」

シイさんは大量の武器を出現させ、剛鬼さんは刀を取り出し、構える。

「・・・明命達は亮の所に行つて」

「ですが・・・どうやって・・・」

「俺達に任せろ」

そう言うと二人は空間を開き、闇に包まれた空間を出現させる。

「・・・剛鬼達、二人じゃ危険」

「大丈夫だよ。私は死なないから」

「俺を信じろ、恋」

「・・・(コクツ)・・・絶対に死なないで」

「・・・お願いします！恋さん！」

「・・・いく！」

私達は空間へ飛び込んでいった・・・

亮

「ハアアア！」

「ウオオツ！」

ガキャンッ！

咲の一撃に押される。

「ぐう・・・」

「弱いな。そんなに弱いならすぐ死ね！」

振るわれた鎌をギリギリ受け止める。

「うう・・・らあ！」

押し返し、刺天猛虎を振り回す。

「遅えよ」

ブン！

「そこだ！」

ズガン！

空振りしたところに咲の蹴りが入る。

「じゅっ……」

一時的に動きが鈍ってしまふ。

「（まず……）」

「そこだあ！」

ズシャア！

上半身を逸らしたが、避けきれず……鎌が身体を切り裂いた。

「あ……ぐ……！」

俺は何とか踏ん張って距離を取る。

「……へえ、アレを耐えたか」

「く……」

身体中が熱い。まるで全身が火にあぶられているようだ。

「……負け、られ……ない……」

倒れそんな身体を気力で支え、刺天猛虎を構え直す。

「……いい加減諦めて死ねよ。……くどいんだよ」

「お前、だって……そういう諦めの悪い咲の欠片だってあったんじゃないの？」

「……黙れ……黙れえええ!!」

俺は身体を倒した勢いで走る。

「ウアアアアア!!」

そして槍を振るうが、簡単に弾かれる。

「……まずはその腕をもらおう!!」

咲が鎌を返し、振るい……俺の右腕を刈り取った。

「……ッ、アアアアアア!?!」

血が腕から吹き出す。激しい痛みと喪失感。

「まだ……だあ!!」

残った力を全て残った左手に籠める。

「ソラアアアア!!」

「いい加減諦めやがれ!」

そのほか正直な左ストレートが当たるわけもなく、簡単に避けられ、更に二回、身体を切り裂かれた。

「が・・・」

今度こそ身体から力が抜ける。

「諦、めたく・・・な、い・・・」

「終りなんだよ。止めを刺してやる」

鎌が首に当てられる。

「(・・・明命・・・思春・・・亞莎・・・蓮華・・・皆・・・)」

目を瞑って覚悟を決めた時・・・もっとも愛している人の声が聞こえた。

「亮は・・・殺させません!!」

俺の腕と一緒に飛んだ刺天猛虎を持って明命が咲を刺し貫いた。

「なん、だと・・・!??」

「いくら別の世界の咲さんであろうと……亮に手出しをするのなら容赦はしません!」

「く……お前は……辛い記憶ばかりで耐えられるのか……?」

「辛い記憶だけじゃないはずですよ。貴方にだって……嬉しい記憶、楽しい記憶だってあった筈なんです! 貴方には……」

「……知るかよ! もう……思い出せるか……記憶なんて……過去なんて……」

「……なら、私達の世界を見てください……必ず、幸せな世界を築いてみせます!」

「……は、そんなん信じろって……?」

「信じ、てくれ……」

「亮!?!」

何とか身体を起こして言う。

「悲劇はいらない……俺が……俺達が今までの悲劇を打ち消すぐらいのハッピーエンドを見せてやる……」

「……期待はしない……だけど……」

咲の身体が黒く光り、塵になっていく。

『・・・楽しみだ・・・』

俺はそれを見届けてから地に伏せる。

「亮！？しっかりとっかりしてください！」

「あ・・・はは・・・ちょっと、やられすぎたかな・・・」

今までで一番傷が酷い気がする。

「どうしよっか・・・腕・・・なくなっちゃったな・・・」

「大丈夫です！早く戻ればこのかさんが・・・」

俺は目を閉じる。

「亮・・・？亮！？」

「・・・命・・・おれ・・・」

意識は暗闇へ落ちていく・・・何となく、周りを包んでいた闇が晴れていった気がした・・・

「ハアアア・・・」

咲

「……自分から破滅の道を進むのか」

『……私もフォローはしますが……やはり、やれて一分……』

「わかつ、てる……！」

空間から偃月刀……冷裂を取り出す。

「伸びるおおお！」

冷裂を伸ばし、強襲する。

「ツ……！何だ……この武器は？」

頭に浮かぶはこれの持ち主、狂った世界で戦う男。

「お前も力を貸してくれよ……！」

名前も知らない誰かに言う。

「ウラアアア！！！！」

ガキヤアンツ！

その一撃で絶にヒビが入る。

「何……華琳の武器が……」

「ウオアアア！」

次の一撃で靖王伝家を砕く。

「な……何処からこの力が……」

「貴様には分かるまい！俺の意志を……覚悟を！」

更に攻めて絶を砕き、刺天猛虎にもヒビを入れた。

「負けてたまるか……ぐっ!？」

心が塗りつぶされていく。

『……いけません！時間切れです!』

だが、俺は解除しないでそのまま攻める。

『バカな……貴方は化け物になっても良いのですか?』

「やるしかないだろ……于吉、もつと力を！」

無理矢理闇をバーストさせ、突っ込む。

「お前って奴は……どうしてそこまで……!」

亮がそう言う。

「……お前には……教えねえよ!!」

しかし、さすがに限界だった。全てが黒くなっていく。

「う、ぐ……ああああ!?!」

完全に吞まれる。そう思った時……何か暖かいものが俺を包んだ。

「……咲」

「あ……」

恋だ。恋が俺の闇を受け取っていてくれた。

「止める……お前だっていつまでも闇を受けきれるか……」

「……前に言った。恋は咲にずっと着いていく」

「恋……分かった……力を貸してくれ」

「……だから何故だ……何故それも簡単に自分を犠牲にできる……?」

「お前だってそうじゃないのか!?!三国を巡った大澤亮の記憶を持っているなら……!」

「……そうして壊れた記憶が沢山ある!無駄なんだよ……誰かの為に犠牲になるなんてよ……!」

「……無駄じゃない」

「何……!?!?」

「誰かを助けられたなら・・・自分を犠牲にしても満足」

「恋・・・」

「何でだ・・・」

「・・・目の前で助けられた人を助けられなかったら・・・悔しい・・・悲しい・・・」

恋は言葉を繋いでゆく。

「でも・・・助けられたら、嬉しい・・・助けてよかった、って思える」

「詭弁だ！あり得ないんだよ・・・」

「・・・恋、これ以上は無駄だ。・・・一緒にやろう」

「（コクッ）」

俺と恋は二人で冷裂を持つ。

「吼える・・・刺天猛虎オオオオ！！」

亮が突っ込んでくる。

「ハアアアア！！」

俺達はそれに合わせて振り下ろす。

バキヤアアンツ!!

その一撃は刺天猛虎を先端から砕き、亮も両断した。

「がは・・・こんな・・・こんな世界にいい・・・」

黒い塵となって亮が消える。

ドクン

「・・・ツ!?!」

俺と恋は同時に倒れる。

「あ、あぐ、ううう・・・」

「あああ、あああ・・・!」

俺達の姿が人外のモノに変わっていく。

「れ、ん・・・」

「・・・さ・・・き」

俺と恋は手を伸ばして・・・手を繋ぐ。せめて化け物になっても・・・恋と一緒にいたい。

『・・・頃合いですね』

「え・・・が!？」

身体から于吉が抜けていく。

「・・・貴方が弱っている今なら、こうして抜け出せますね」

「く・・・!」

マズイ・・・今、于吉に対抗できる力は・・・

「では、貴方と呂布の闇をいただきますよ」

「え・・・?」

于吉の言葉に疑問を抱く。何でわざわざ俺達から・・・?

「貴方達は元の世界に戻ってもらいます」

「なんで・・・だ!？」

「・・・どうやら貴方の中にいる内に、多少お節介な気持ちが生まれましたようです」

「バカか!何でだよ・・・俺達は敵だろ!?!それに、俺達の闇を吸収したら・・・」

「・・・ええ、私も吞まれるでしょう。まあ、この空間の闇を全て

もらうので、むしろ消滅すると思いますが」

「……つぎけんな！そんなベタな事してんじゃねえよ！お前は・
・俺達を絶望させたいんだろ……？」

「はい。ですから、今の貴方の顔を鏡で見てください」

「……？」

「……充分絶望的な顔をしていますよ」

「……ッ！」

于吉が宙に浮かぶ。

「待てよ……お前には、今まで迷惑をかけた奴らに謝ってもらわ
なきゃ困るんだよ……！」

「これが私なりの謝罪です。……中々楽しい経験をさせていただ
きました。礼を言いますよ、五十嵐咲」

「そんなお前らしくない事を言うなよ……最後まで皮肉を言い続
けるよ……！」

「……すみません、あいにくと空気を読むのは苦手です」

「はは……何だよ、それ……」

「……それでは……」

于吉がそう言うと、俺達の闇は暴走しない程度まで于吉に持っていかれた。そして周りの闇も于吉に集まり、景色が晴れていく。

「・・・お別れです、五十嵐咲。・・・また、お会いしましょうか」

「二度と・・・来るんじゃないねえ・・・バカ野郎が・・・」

「これは厳しい・・・」

そう言って于吉は“消滅”した。俺達の意識は薄れていく。

「（・・・終わった・・・？）」

最後に見たのは夜明けの空と、こっちに走ってくるシィ達の姿だった・・・

真似と開閉と世界旅行（後書き）

亮

「決着！！」

咲

「いきなり何を言ってるんだよ」

亮

「いや、特に意味は・・・とと、今回は続編についてアンケートを取ります」

1、亮と咲が再び主役で続投

2、世界観は同じだが、違うオリキャラが主役

3、まったく関係ないお話

4、いや、もう書かなくていいよ

亮

「・・・です。・・・4は無視してください」

咲

「軽いジョークだからな」

亮

「それでは次回の真似と開閉と世界旅行！」

咲

「次回もお楽しみに！」

待ちわびた平和（前書き）

実質最終話・・・かな？ではどうぞ。

待ちわびた平和

「……」

目を開けば当たり前だが天井が見えた。

「……」

起き上がるつもりだったが身体に力が入らない。

「……」

起き上がるのは諦めて身体の状態を確かめる。

「……目が覚めたか？」

「（……クレス？）……あ……」
声を出そうとしたが声が出ない。

「無理すんなよ。右腕が無くなってたり、深い傷があったりで……
普通なら死んでるぞ」

「（……そうなのか）」

「ま、無事だったのは皆に伝えてやるから、今は休んでとけよ」

「……」
「（コクッ）」

俺はなんとか頷いて目を閉じる。

咲

「……く」何とか布団から起き上がる。

「……」

喪失感。何かが無くなっている感じだ。

「……ああ」

于吉だ。于吉がいないんだ。俺は隣の布団で寝ている恋を見て、更に自分の身体を再確認する。……紛れもない、人間の姿。

「……起きたんだ」

「シィ。……無事だったか」

「……まあね。……まあ、ホントはそれなりにダメージ喰らっ

「ちゃったんだけどね」

「……そう言うわりには外傷が見当たらないけど？」

「うん、このかやクレスが色々してくれたからね」

俺は気になった事を言う。

「……亮は？」

「……片手が無くなってて重傷だった」

「……!？」

「でも、このかのアーティファクトで腕はくっついたし、細かいダメージはクレスの薬で何とかなったと思う」

「……良かった……じゃあ、戦は？」

「咲達が闇から出てきた時に敵は皆消えちゃったよ……だから私達の勝ち。それに皆無事だよ」

その言葉に俺は安心した。

「……じゃあ、この世界は……」

「……無事。ハッピーエンドだよ」

シィが笑顔で言う。

「・・・ふう」

それで完全に力が抜け、座り込んでしまう。

「・・・今は寝ても大丈夫だよ。・・・まあ、次に起きたらまずは謝った方がよいよ。・・・色んな人にね」

「・・・そうだ、な・・・」

俺は布団の上で横になった。

「・・・お休み」

亮

「・・・」

もう一回目が覚めて今度は無理矢理起き上がる。

「……ッ！」

身体に痛みが走るが、起き上がった。上半身は包帯でぐるぐる巻きにされていて、右腕は繋がってはいるが、動かせない。

「（……当然か）」

あんなに綺麗に持ってかれたからな……

「……あー、あー……」

声を出す。多少違和感があるが、難なく声は出せた。

「……」

何となく外の空気を吸いたくなり、あと水が欲しい。喉や口の中が血で凄いことになってる。

「……ぶはっ」

水を飲んで一息ついた。ちなみにここは赤壁の近くの城で、今は感

じ的に深夜だ。(ケータイは部屋に置いてきたらしい)

「・・・あれ」

遠くに人影が見えた。・・・こんな時間に？

「・・・」

俺は気になってそれに近づく。

「・・・思春」

「・・・ッ！目が覚めたのか！」

人影の正体は思春だった。思春は俺に気づくと早歩きで近づいてきて俺の両肩を掴んで・・・って、

「~~~~~!!!」

激痛が走り、思春を反射的に振り払ってしまふ。

「思、春・・・後で怒るなりなんなりしていいから、今は触らないで・・・!」

「あ・・・」

思春は申し訳なさそうな顔をして少し離れる。

「・・・大丈夫なのか？」

「何とかね。・・・右腕は動かないけど」

「そうか・・・だが、良かった。亮が生きていればな」

思春は心底安心した表情になる。

「・・・それと、蓮華様達も相当心配なされていたぞ」

「・・・だろうな。・・・謝らなくちゃな」

「ああ・・・そうしろ」

俺と思春は静かに笑い合う。

「・・・そうだ、クレスと近衛には感謝をしておけ」

「え？」

「治療したのはその二人だ」

「……そうなんだ」

あの二人でこの治り具合……俺、相当無茶したんだな……

「……よし、寝よつかな。……思春は？」

「……もう寝れる」

そう言っただけ思春は歩いていく。……途中、一度振り返って言った。

「お前達のお陰でまた平和が訪れた。……ありがとう」

そう言っただけ思春はまた歩き出す。残された俺は何かむず痒くなりながら部屋に戻った。

「……よし」

翌日、目が覚めて身体を確認。……相変わらず右腕は動かなかった。

「……はあ」

皆が集まっているであろう部屋の前に立つ。そして、部屋に入ろうとした瞬間……

「あら？亮君じゃない」

「……ッ！？ゆり！？遠坂も……」

「相変わらずね。……ちょっと見た目が変わってるけど」

ゆりと遠坂が立っていて、その後ろには士郎と日向が疲れた顔をして立っていた。

「……どうしたんだ？」

「……悪魔が手を組んだ……」

「日向君？何か言ったかしら？」

「衛宮くんも、何か聞こえたような……？」

「な、なんでもないです……」

……哀れな。

「……てか、帰ってなかったのか？」

「ああ。お前らが心配だからよ」

「呼び出された俺たちは残っているんだ」

「……悪いな、なんか」

「気にすんなよ。仲間だろ？」

日向がそう言ってくれた。

「……よし、入ろう」

覚悟を決めて扉を開く。

「……」

中には当然の様に皆が座っていた。

「……！亮……！」

蓮華が立ち上がる。

「蓮華……お「よかったー！！」シャオ！？ぎあっ！？」

シャオがタツクルをかましてくる。

「~~~~~!?!?」

当然激痛。俺は地面に横たわって悶える。

「シャオ・・・一応重傷だから・・・」
俺がそう言つとシャオは慌てて謝った。

「はは・・・」

立ち上がって見渡すと、呉や蜀の人間。それに他の世界の皆もいた。

「・・・おっす」

「咲」

咲が軽く手を挙げる。

「・・・大丈夫か？腕は」

クレスが聞いてくる。

「・・・感覚はあるけど、動かないな」

「・・・やっぱりあかんよ」

「仕方ないだろ、腕がくつついただけまだ」

このかとクレスがそう会話する。

「・・・現代知識じゃ対応できないな・・・」

音無がぼやく。

「・・・つかさ、日向と奏は分かるけど・・・何だよ、音無とゆりの服は・・・」

俺は笑いを堪えながら言う。

「悪かったわね！普通のOLやってたのよ！」

「・・・俺は医者だよ」

「・・・こうしてみると、ホントに沢山人がいるんですね」

「そうだね、ネギ君。・・・仮契約いらいかな？」

桃香がそう言うとアスナがネギに詰め寄る。

「ネギ？あんた別の世界の人まで・・・！」

「ち、違うよ、アスナちゃん！私がネギ君にお願いしたんだよ！」

「う……その、りゅ、劉備さんは……」

「桃香でいいよ、アスナちゃん」

あちこちで仲が良さそうなのが分かる会話が始まっている。

「……そう言えば共に戦うのは久しぶりですね、刹那」

「セイバーさんこそ。やはりセイバーさんは強いですね」

「刹那も人の身でありながらあの強さ……貴女の年齢を考えるとかなりのものです」

そんな会話を聞いていると……横から腕を引かれた。

「……シイ？」

「あの、ね？私の力を使って、世界をまた移動して亮の腕を治さない？……全力を出せばかなりの人数は連れていけるから、離ればなれには……」

シイはきつと気遣ってくれているのだろう。……だけど俺の答えは決まっている。

「・・・悪い、俺は、俺達はもう消えるわけにはいかないんだ。仲間だけじゃない、民の為に・・・ちゃんと今回の傷を癒さなきゃいけない」

「・・・そっか」

シィはそう言って椅子に座り直した。

「・・・亮」

「明命・・・」

最後に明命が近づいてくる。

「・・・よく、生きて帰ってきてくれました」

「明命のお陰だ。・・・明命がいなければ俺は死んでた・・・ありがとう」

「いえ・・・亮のためならこんなことは当たり前です」

「・・・それでもさ。・・・今までありがとう、明命。これからもよろしく」

「……はい」

「……それで、わたし達はいつまでそれを聞けばいいのかしら？」

「「……ッ！」」

遠坂に言われて俺達の顔は赤くなる。

「……まったく、見てる方が恥ずかしいぜ」

「……そうだね」

ひさ子とアキラに言われる。

「……くくく……」

咲も笑っているが……

「咲く？何か恋と手を繋いでないか？」

「な、なんで分かって……あ」

咲はそう言ってしまった、といった感じの顔をする。

「……適当に言ったんだけどな」

咲と恋も顔が赤くなる。

「……どつちもどつちだな」

「ま、良いんじゃないの？」

剛鬼と知也が言う。

「……ぐう」

「……また寝てるです」

まったく変わらない撫子。

「……よし、亮も咲も目が覚めたし、帰ろう。……俺達の居場所へ」

一刀が宣言して、俺達は一斉に頷く。どうやらしばらくはシィ達や士郎達も残るようで、呉や蜀に着いていくようだ。そして、俺の右腕はすっかりハビリすればまた元のように動くらしい。……まあ、定期的にクレスお手製の薬を使い続けなきゃいけないらしいが。

咲

蜀に帰ってきた。俺は恋と一緒に走る。

「・・・咲ーッ！」

「恋殿ー！咲殿ー！」

詠とねねが走ってきて、俺達に抱きつく。

「帰ってきた・・・ただいま、詠、ねね」

「おかえりなさい・・・咲」

「・・・無事で良かったのです」

「・・・皆、無事」

「・・・詠達は？」

「無事よ。・・・ボク、ずっと咲を信じてた・・・それで、絶対に勝てない状況でも頑張れたのよ」

「ああ・・・俺も、帰れる場所があるって自覚が出たら俄然生きる気力が湧いた。・・・助かったよ」

「・・・」

帰ってきた。大事な俺の居場所へ・・・

亮
〜

・・・あれから半年の月日が流れた。俺達は蜀に來ている。再び訪れた平和を祝う祭りが開かれるからだ。・・・本来なら一年に一度だが、一刀がわざわざ今開いてくれた。これには民を元氣付けるためでもある。

「・・・でも、あたし達までいいのかしら？」

隣で馬にのるゆりが聞いてくる。他の皆も元の世界に帰らずにこの

祭りに参加している。

「いいんだよ。お前らだって平和を作ってくれたんだから」

「……」

日向が難しい顔をしている。

「……ユイが心配か？」

音無が日向に聞く。

「……まあな、シイには大丈夫だって言われたけど……」

ちなみに呉に来ていたのはSSSのメンバーとクレスにユエや撫子だ。

「……それにしても良かったのう。腕が動くようになって」

祭さんが言う。俺は苦笑しながら右腕を振る。

「……結構大変だったけどね」

「……だが、それでもやり遂げた、だろう？」

「……そうだね、冥琳」

「中々の努力だったものね」

雪蓮が笑いながら言う。

「……まあ、俺が頑張れたのは……雪蓮や冥琳、祭さんや穩に
シヤオ、それに思春に亞莎と春鈴……アキラやひさ子。それに・
・明命のお陰だ」

その言葉に皆が笑う。

「……あ、そうそう。日向」

日向に向かって言う。

「……意外なサプライズがあるかもだぜ？」

「……はあ？」

よじぢやく蜀の門に辿り着く。そこには見慣れた面々と……

「……あ……秀樹さん!!」

「……ユイイ!?!」

日向がすつとんきょうな声を出す。

「……ふふーん」

ユイの隣でシイが得意そうな顔をする。

「……ふ」

剛鬼も珍しく笑う。

「……よ」

咲が話しかけてくる。

「……腕、いいのか?」

「かなり」

単純な返答。それでもお互いに笑い合う。

「……さて、また祭りだ。……楽しもうぜ」

「……ああ!」

俺と咲は前の祭りの時のようにお互いハイタッチを交わす。

「……今度こそ……平和なのかな……」

もし、また平和が壊されたらまた作ればいい。……必ず、俺はこの平和を大切な仲間と生きていこうと決意をした……

???

「……今度はどこ？」

「ああ」

二人の人影。

「……わたし達、いつまでこんなことするんだろっね」

「さあな。オレやお前には記憶がない。．．．いや、消されたんだよな」

「．．．うん」

「．．．まずは下準備だ。．．．行くぞ」

「あ、待って．．．」

二人の人影が消える。それは吉と出るか凶とでるか．．．それは後々知ることになる．．．

待ちわびた平和（後書き）

亮

「……いやいや、なんだよあの最後」

咲

「まあ、やけに謎な終わり方をしたよな」

亮

「……あ、一応次回は一話使ってお疲れ様会をします」

咲

「アンケートはまだまだ応募中ですので、バシバシお答えください
っす」

亮

「……それでは次回の真似と開閉と世界旅行！」

咲

「……次回もよろしく」

お疲れさま会（前書き）

今回はお疲れ様会です。それではどうぞ。

お疲れさま会

亮

「・・・今回は後書きみたいな感じでやるんだな」

咲

「だな。俺と咲が今までの世界の部屋に回って感想を聞くんだな」

亮

「それじゃ、行ってみよっか」

恋姫〜呉

亮

「・・・ここが始まりだったんだよね」

雪蓮

「私と祭が亮を見つけたのよね」

祭

「・・・まったく、あの時の策殿の判断は焦りましたぞ」

冥琳

「私はあるなひ弱な少年がここまで育つとは思わなかったな」

亮

「……あの時はね……」

穩

「面白そうな男の子だなって私は思いましたね」

亮

「……それだけ？」

蓮華

「私も最初はこんな奴は認めないって思ったわ」

思春

「……同感だな」

明命

「……実は、私も少し思っていました……」

亮

「う、うう……」

小蓮

「シャオは最初からいいなって思ってたよ」

亞莎

「私は、その・・・怖かったです」

亮

「・・・ホント評価低いね・・・俺」

明命

「で、でも、今は違います！」

雪蓮

「・・・そうね。見違えたわ」

祭

「これほど便りがいのある男はおらんぞ。・・・のう、権殿？」

蓮華

「な、何故私に振る・・・」

冥琳

「・・・まあ、この世界での成長は・・・」

思春

「人を殺す覚悟・・・」

亮

「・・・そうだね。明命がいなかったら俺は心が折れていたと思う」

亞莎

「・・・その時は私達はまだいませんでしたね」

小蓮

「シャオ達は別のところ・・・特に亞莎はまだ県にすら参加していなかったもんね」

明命

「・・・あの時、亮の心に初めて触れた気がします」

亮

「俺は明命の優しさを知ったよ」

蓮華

「・・・そんなに早くお互いを好きになったの？」

亮

「いや、俺が自覚したのはだいぶ後だよ・・・あの時は大変だったな・・・」

明命

「はうう・・・」

祭

「初々しいのうー！やはり若者はこうでなくてはつまらん！」

冥琳

「・・・人の恋路に口を出すのはいかがかと」

思春

「……子供か」

亮

「し、思春さん？この世界で考えても本編には関係ないですよ？」

亞莎

「……まずは亮さんの好みを……」

蓮華

「……亮は明命が……いや、諦めるわけには……」

明命

「私は亮と一番長くいます……このアドバンテージを利用して……」

穩

「モテる男は辛いですねえ」

亮

「……咲にバトンタッチ！」

恋姫〜董卓

咲

「投げやりじゃねえか・・・」

霞

「まあええやん。・・・何を話すん？ウチ、途中から出番なかったんやで？」

咲

「まずは出会いだな。・・・俺は恋に拾われたんだよな」

恋

「・・・最初は可哀想だから拾った」

詠

「ボクはビックリしたわよ・・・」

月

「いきなり恋ちゃんが人を運んできたからね・・・」

華雄

「・・・」

咲

「華雄？」

華雄

「……私の真名は……」

全員

『……』

華雄

「話を聞くに剛鬼の世界の私には真名がちゃんとあるそつだぞ……
なのに私は……」

音々音

「……別にいいと思うですが……」

咲

「……色々あんじゃねえの？」

詠

「ボクは咲に勉強を教えたわね」

咲

「この眼鏡ももらったしな」

詠

「……まだ着けてたの？」

咲

「そりゃ、詠から貰った大切な物だからな」

霞

「……ええなー。ウチなんて渡すもん、なんもあらへんの……」

「

月

「大切なのは気持ちだと思いますよ」

恋

「・・・恋もそう思う」

音々音

「ねねは常に恋殿には強い気持ちがありますです」

咲

「・・・謎の忠誠心だな。お前は犬か」

音々音

「不意討ちちんきゅーきつく!!!」

ズガァン!

咲

「ごはあ!?!い、いきなり溝に・・・」

恋

「・・・ねね、部屋が狭いから暴れちゃ駄目」

咲

「部屋かよ・・・」

華雄

「相変わらず騒がしいな、お前らは」

霞

「まったくやな」

詠

「・・・ボクはもう慣れたわよ」

月

「そう言えば・・・咲さんと恋ちゃんはいっつお互いが好きになったんですか？」

咲

「・・・それは、なあ？」

恋

「・・・気がついたら好きになってた」

咲

「・・・だな」

霞

「あーあー羨ましい・・・ウチも恋してみたいわ・・・」

華雄

「私は私より強ければ誰でもいいぞ？」

詠

「アンタより強い男なんかそうそういないわよ」

音々音

「ねねもそう思うのです」

咲

「……よっ……と」

月

「?……どうしましたか?」

咲

「次の部屋に行くよ。それじゃ、また後でな」

F a t e

亮

「それじゃ、数が多いんで主人公&ヒロインズだな」

咲

「この世界は……イリヤスフィールが最初だったな」

亮

「ザフィーラと咲の盾を容易く壊したからな・・・バーサーカー」

士郎

「・・・確かにアレはキツかったな」

セイバー

「見事な武人でしたが・・・何度も戦いたくない相手ですね」

凛

「そうね・・・わたしなんて握り潰されかけたし・・・」

桜

「・・・そんなに強いんですか？」

凛

「桜も対峙してみなさいよ。こっちは大人数でやっと倒せたんだか

ら

亮

「この世界で俺は強化を使えるようになったんだよな」

咲

「俺は強化と変化・・・固有結界・・・そして、闇だな」

士郎

「亮達はサーヴァントと渡り合えたのか？」

咲

「無理無理。ランサーと戦ったけど、すぐ蹴りをもらってKOだよ」

亮

「俺は真似をしてバーサーカーを足止めできたぐらいかな・・・」

セイバー

「それでも中々だと思います」

桜

「はい。・・・それにお二人はわたしを助けてくれましたよね」

亮

「俺、参上！・・・ってな。あの桜を士郎に見せたかったな・・・」

黒桜

「・・・」

亮

「・・・というのは冗談で・・・」

凜

「・・・弱いわね」

咲

「いや、怖いって」

セイバー

「しかし、色々ありましたね、今回の聖杯戦争は・・・」

亮

「あ、そか・・・セイバーは二度目だっけ？」

セイバー

「はい。……あの時は本当に……詳しいことはFATEZER
Oをご覧ください」

亮

「……宣伝かよ」

咲

「あはは……」

士郎

「俺は皆がいてくれて助かったよ」

凛

「……ほんとよね。士郎は無茶ばっかするんだから」

桜

「少し先輩は大人しくしていた方がいいと思います」

士郎

「……善処します」

亮

「……ま、無理だろうけどね」

咲

「……お前が言っか」

亮

「あ？」

咲

「……何でもねえよ」

士郎

「……なあ、そろそろ次じゃないか？」

亮

「……もうそんな時間か……よっしゃ、次だ」

咲

「じゃな」

ネギまー！

亮

「……さてさて、こちらメインメンバーでいこうか」

咲

「この世界の初めは……恋に襲撃されたんだよな」

刹那

「あの時ですね」

亮

「初めて会ったのは刹那と龍宮だったな」

このか

「あの時はせつちゃんが冷たかった頃やな・・・」

刹那

「う・・・」

このか

「・・・今は仲ええから気にはないんやけど」

アスナ

「あれ？ネギはいつ会ったんだっけ？」

ネギ

「確か・・・三年の始め頃でしたよね？」

亮

「確かね・・・」

のどか

「最初は怖かったですー・・・」

亮

「・・・亞莎で慣れたからなー・・・」

咲
「だからのかとの接し方を知ってたんだな」

アスナ
「この世界での二人は・・・」

亮
「俺は基礎魔法と咸掛法・・・かな？」

咲
「俺は基礎魔法と氷、闇系の魔法と・・・Dモードだな」

亮
「それで、俺達に異変が起きたのもこの世界だよな」

ネギ
「そうでしたね・・・」

このか
「そんであの世界で・・・」

刹那
「・・・」

このか
「最後は超さんとの戦いですね」

亮

「それが終わって俺達は一旦消えるんだよな・・・」

アスナ

「いきなり消えてビックリしたわよ」

咲

「悪いね。まあアレは予想外だった・・・ってことで」

亮

「・・・それで俺達は色々あってまたこの世界に帰ってくるんだよな」

ネギ

「魔法世界ですね」

咲

「ここで俺はBモード・・・だっけ？」

亮

「だな。ある程度力の制限がなくなっただんだよな」

のどか

「咲さんは私と一緒にトレジャーハンターをやりましたよね」

ネギ

「亮さんは明命さんと一緒に拳闘士として戦ってましたね」

アスナ

「それで私が魔法世界のお姫様って知って……」

刹那

「フェイトと和解して、世界を救った……」

このか

「なんやあつという間やったな」

ネギ

「ここでは色んな人に助けられました」

亮

「……誰一人欠けても俺達は生きていなかった……か」

咲

「そこら辺がバッドとハッピーの違いだろうな」

刹那

「本当に亮さん達にはお世話になりました」

亮

「……いや、俺らがいなくても大丈夫だったよ、お前らは」

アスナ

「そんなことないわよ!」

ネギ

「はい!本当に助かりました!」

咲

「……ま、厚意は受け取っておくか……じゃ、次行くか」

世界融合

亮

「次は主人公ズだな」

一刀

「……ここでしか出番ないのか……」

士郎

「この世界は三つの融合しつつある世界が自分の世界を守るために戦ってたんだよな」

一刀

「俺は最初の方で脱落しちゃったけどね」

ネギ

「今考えれば士郎さんと戦うのはおかしかったんですね」

士郎

「俺もそう思ってるよ」

咲

「仕方ないんじゃないか？自分の世界を守りたいなら当然だろ？」

亮

「あんな・・・そう事は簡単に進まないんだよ」

ネギ

「・・・そうですね。争いの空しさをよく知らされました」

亮

「俺としてはなのはと霊夢の挟み撃ちは勘弁してほしかったな・・・」

咲

「あれマジで死ねるって」

ネギ

「……そこまで何ですか？」

亮

「そりゃ、あの二つなら……アイアスの盾が砕ける」

士郎

「……本当か？」

咲

「……本当だよ」

一刀

「ここで于吉と左慈は勝負しに来たんだよな」

士郎

「俺達を戦わせて……か」

亮

「ちなみに、この世界が詠が咲に告白した場でもある」

咲

「バツ……余計なこと言つなよ！」

亮

「間違つた事は言っていないだろ？」

咲

「そうだけどさ……」

ネギ
「……そして最後は……」

士郎
「二人……いや、四人はは壊れてまで俺達の世界を救ってくれたんだよな……」

一刀
「あの時はお前らと絶交しようかと思ったけどな」

亮
「……ごめんなさい」

咲
「……悪かった」

一刀
「随分とアツサリ謝ったな……」

ネギ
「潔いですね……」

士郎
「それが二人のいいところだろ？」

亮
「……はあ、それじゃ、次の部屋に行くか……」

咲

「じゃな、三人とも」

Angel Beats！

亮

「・・・ここも人数多いからメインだけね」

咲

「お前、疲れてきてるだろ」

音無

「この世界の初めは・・・」

奏

「あたしに空から斬りかかってきたわ」

日向

「それで奏ちゃんの味方と間違えた俺達が二人に集中砲火・・・だっけか？」

直井

「貴様、優秀なる亮さんに向かってなんと失礼な真似をしている」

日向

「そういつお前は亮の武器をぶん投げてたじゃねえか!？」

音無

「あの時か・・・懐かしいな」

亮

「俺はよくガルデモの練習に顔を出してたな・・・トルネードもホントは体育館の中でやりたかった・・・」

咲

「お前はCDがあるからいいじゃん」

ゆり

「そうね。それでガルデモのユイを除くメンバーにフラグを立てたのよね」

亮

「フラグって・・・」

直井

「さすが亮さん、亮さんの格好良さには全ての女子がなびきます!」

日向

「・・・それ褒めてんのか?」

亮

「・・・むしろ悲しくなるんだが」

直井

「ああ！？貴様のせいで亮さんが悲しんでしまったではないか！」

日向

「どう考えてもお前のせいだろ！？何責任転換してくれてますか！？」

奏

「いたた・・・！」

音無

「ああ、奏が偏頭痛を起こしている・・・日向！ちゃんと男らしくやれよ！」

日向

「ああ、悪りい・・・何責任転換してくれてんだよッ！」

音無

「カッコいいぜ、日向！..」

日向

「サンキュ・・・ってこのネタ何回やるんだよお！？」

ゆり

「いつまでもやるわよ」

咲

「さすがツッコミに定評のある日向。・・・だてにやんやんよ言

「つてねえな」

日向

「俺、別にやんよやんよ言ってる気はねえんだけど・・・」

奏

「・・・あの告白シーンで少なくとも五回以上は言ったわ」

日向

「何で奏ちゃんが知ってるの!？」

奏

「だってフェンスの裏から見てたもの」

日向

「フェンスには俺がいたんだぜ!？それにその後だって亮がいたし・・・」

亮

「・・・気づけなかったか・・・」

咲

「まだまだ甘いな」

日向

「え、なに？その程度で済ませちゃうの?」

ゆり

「貴方の告白シーンより大山君の告白シーンの方が面白いわよ」

音無

「あれは可哀想だろ……」

直井

「……僕は何があったのか知らないんだが……」

亮

「大山が奏に告白して玉砕して日向が宙を飛んだ」

直井

「……？」

音無

「気にしない方がいい」

奏

「……あれは少しへこんだわ」

ゆり

「う……ごめんね、奏ちゃん」

亮

「さすが悪魔……」

ゆり

「何か言った？」

亮

「いえ、何も！」

咲

「しっかし、直井ってアレに似てるんだよな」

日向

「アレ？」

咲

「ギアス使いとペルソナ使い」

亮

「前者は立場とかが、後者は単純に見た目が」

ゆり

「・・・」

奏

「・・・あたし、よく考えたら最後はあまり喋れなかったわ。・・・
せめて何か駄洒落でも言えればよかったんだけど・・・」

亮

「やめとけ、キャラ崩壊に入るから」

奏

「・・・そうかしら」

ゆり

「あたしもそう思うから止めた方が良いわよ」

音無

「・・・確かに」

日向

「・・・試しにやってみるか。奏ちゃん、布団が？」

奏

「布団が・・・？・・・寝袋に変わっていた」

日向

「またかよ！じゃなくて布団がふつとんだ、だろ！？」

ゆり

「・・・寒いわね」

亮

「つまらないな」

咲

「・・・ハア」

日向

「・・・何で俺がスベってんだよ！？」

直井

「決まっているだろう。そういう存在だからだ」

日向

「……………くっそ……………結局俺は最後までこんな扱いかよ……………」

音無

「ま、仕方ないさ。諦めるよ、日向」

咲

「……………こんなもんだな」

亮

「それじゃ、次に行くか」

奏

「……………あたし達が最後じゃ……………」

亮

「まだいるんだよ。それじゃ」

黒一文字さん

亮

「……と言っわけで、集合」

シイ

「……は？」

亮

「題名通り。シイとクレス、ユエと撫子と話をするんだよ」

クレス

「俺達は祭りからの参加だな。……亞莎には少し悪いことをしたか」

亮

「……亞莎を泣かしたのは軽くキレかったな」

ユエ

「私は捕まったです」

亮

「武道会に出てたんはシイとユエだけ？」

シイ

「うん。……両方仮面ライダーで負けたけどね」

ユエ

「はいです。……核爆に耐えるってどんな設定ですか」

亮
「……………さあ？」

撫子
「……………ぐう」

亮
「喋んないと思ってたら寝てるよ」「の子」

ユエ
「……………撫子さん、起きるです」

撫子
「う、ん……………もうご飯ですか？」

亮
「はいはい、お約束をどうも」

クレス
「撫子はどのタイミングで来たんだ？」

撫子
「……………かなり終盤でしたね」

亮
「……………」

シイ
「亮？何か暗いけど……………」

亮

「……撫子に負け、ルナに笑われて精神的に死んだ」

クレス

「……悪い、妹が……」

亮

「いや、いいんだけどさ……」

ユエ

「私達は終盤の参加でしたから、大して活躍はできなかったです」

シイ

「私だけ人数調整で蜀だったんだよね。どうだったの？そっちは」

クレス

「どう、って……普通だよ。亞莎と菓子作りしたり、蓮華に料理教えたり……」

亮

「ほとんど料理じゃん」

ユエ

「……蓮華さん達が料理とかを学びたがっている訳を知っていますか？」

亮

「え？……そりゃ、上手くなりたいからだろ？」

全員

『・・・ハア』

亮

「・・・何で皆そんな可哀想な子を見る目なんだよ」

クレス

「・・・お前、明久と同レベルだな」

亮

「ハア!?!」

撫子

「・・・最低ですね」

亮

「ええ!?!」

シイ

「女心が解ってないんだね・・・」

亮

「うう・・・もう許してください」

ユエ

「明命さんに関しては敏感ですけどね・・・」

シイ

「いや、たまに気づいてないよ、亮は」

亮

「く……そういうお前らはどうなんだよ!？」

シイ

「ナギ達はそういう対象って言うよりは仲間って感じかな？」

クレス

「……特にいないな。いや、下手したら異端審問会に襲われるな。……まあ、返り討ちにするが」

ユエ

「……知り合いには特にいませんね。歳が近いのはシンクくらいですけど……シンクはどこか他人を遠ざけている感じがするです」

撫子

「……私、仲間は女の子だけですから」

亮

「……恋話がないやつらだな」

シイ

「……だってまだ興味ないもん」

亮

「……そんなんじゃないやすぐババアだぜ？」

シイ

「……だって、下手に恋すると孤独になっちゃっもん(ボソッ)」

亮
「……え？」

シイ

「あ、ううん。何でもない」

撫子

「……ふわ、眠いですね……」

亮

「……まだ寝るか」

ユエ

「ちなみに剛鬼さん達は？」

亮

「ああ、それなら咲が……それでは、そちらにお繋げします」

地獄の傀儡師さん

咲

「はい．．．って何言わせんだよ！」

知也

「何言わされてんだよ」

剛鬼

「まっただくだな」

咲

「．．．二人の登場はいつだったけ？」

知也

「祭りの後．．．だな」

剛鬼

「．．．」

知也

「コイツ、恋の為に．．．って殺気をぶつけるな」

剛鬼

「余計な事を言つな」

咲

「まあまあ．．．にしてもお前達には結構助けてもらったよな」

知也

「まあな。かなりの敵を狙い撃たせてもらったぜ」

剛鬼
「・・・恋を助けるためだ」

咲
「・・・でも、そっちの世界は今大変じゃね？」

剛鬼
「・・・ああ、こっちの恋が、ちよつと・・・な」

咲
「困ったら呼んでくれよ。・・・助けるぜ」

剛鬼
「余計なお世話だ。・・・第一、于吉の力をなくしたお前がどうやって俺の世界に来るんだ」

咲
「う・・・そ、それは・・・紫に頼んで・・・」

知也
「気持ちだけ貰っておくよ。・・・無理して死なれたら困るからな」

咲
「・・・ちえ。でも、ホントに気を付けるよ」

剛鬼
「お前に言われるまでもない。・・・恋は俺が守る」

咲 「……そういやさ、剛鬼の敵は左慈……でいいのか？」

剛鬼

「……取り合えずはな。……アイツだけは許さない……！」

知也

「……まあ、色々あったからな……」

剛鬼

「……そういう誰かさんは依頼されて俺を撃つたよな」

知也

「仕事だからな、悪いね」

咲

「まあ色々込み入ってることで……」

剛鬼

「……まあな。それで、この後のストーリーはどうなってるんだ？」

咲

「取り合えずは祭りをやって……後は企業秘密だ」

知也

「……考えついてないだけじゃねえの？」

咲 「……秘密なんだ！」

知也

「ふうーん……ま、いいけどね」

咲

「……そろそろ終わりかな」

剛鬼

「俺達が最後なのか？」

咲

「……多分ね」

知也

「……じゃ、またな」

咲

「おう！」

?????

亮

「……んー、やっとおしまいかー」

咲

「ああ。後は恋達と合流して……」

バチ……

咲

「……何だ？今の音」

亮

「ケータイが……」

バシユウン！

?????

「……マジで来れたよ……」

亮

「……誰？」

?????

「ああ、俺はリョウコウだ。……少し用事が出来て来たんだが……」

咲 「……ああ！リヨウか。前に感想欄で見たな」

亮 「……そういえばそうだな」

リヨウ 「俺の事は好きに呼んでくれ。……んで、用件は……」

咲 「……コレか？」 冷裂を引きずりながら空間から出す。

リヨウ 「……そうそう。……どうだ？役に立ったか？」

咲 「この初出は……霞と詠を助けた時か」

亮 「詠から聞いたけど、お前ぶちギレたんだった？」

咲 「……少しクスがいただけだよ」

リヨウ 「……よつと」 冷裂を持って担ぐ。

咲 「……重くないのか？」

リヨウ

「・・・まあ、筋力値上げまくってるし」

亮

「は？」

リヨウ

「知らないのか？俺は『SAO 戦士達の物語』から来た・・・つまり、ソードアート・オンラインの世界からって事になるかな」

咲

「・・・確かかなりリアルなゲームだっけ？」

リヨウ

「リアル過ぎるけどな・・・ま、お前なら使いこなせるって信じてたよ」

咲

「根拠は？」

リヨウ

「・・・カンだ！」

亮

「・・・やめてくれ。勘に頼るのは雪蓮だけで充分だ・・・」

リヨウ

「・・・これからも物語は続くのかよ？」

咲
「一応な」

亮
「どうするかは決まってるけどね……」

リヨウ
「へえ……楽しみにさせてもらっせ」

亮
「……もう行くのか？」

リヨウ
「そりゃ、俺は冷裂を返しに来てもらったただけだし……」

咲
「……そう言わずに。この後、後書き部屋で挨拶が済んだら皆でパーッとやるって決めてるんだよ。リヨウも他のキャラ達と馴染むいいチャンスだぜ」

リヨウ
「……迷惑じゃないか？」

亮
「構わないよ。むしろ参加してくれ。一人くらい巻き添え……げぶん、酒を呑む奴が増えれば祭さんも喜ぶからさ」

リヨウ
「……今、思いつきり巻き添えつつたろ」

亮

「気のせいだよ。・・・参加するよな？」

リヨウ

「ハア・・・わーっただよ。・・・俺は食うぜ？」

咲

「多飯食らいは恋で慣れてるから、大丈夫だ」

亮

「お前は先に行っててくれよ」

リヨウ

「・・・おう」

咲

「・・・よし、じゃあ行くか」

亮

「・・・だな」

お疲れさま会（後書き）

亮

「……というわけで」

明命

「長いようで短かったですね……」

咲

「……でも一年経ってないんだぜ？」

恋

「……意外に短い」

亮

「そもそも始まりは作者が友達と帰ってる時に話したのがきっかけだったんだよね」

明命

「そして確か……亮が人を殺す所まで下書きが会って、後はもうぶつつけ本番ストック無しでやってたんですよ」

恋

「……考えなし」

咲

「そう言ってやるなよ。……ちなみに、俺の眼鏡や先端恐怖症はその友達から取ったんだよな」

明命

「そうだったんですか？」

亮

「俺の身長は作者と同じだよ」

恋

「……色々設定がある」

咲

「恐怖症は後半からなかった事みたいになってるけどな」

亮

「……そこら辺にして、そろそろ締めるか」

咲

「おう……全員で言っぜ」

亮

「……真似と開閉と世界旅行!!」

明命

「長い間ありがとうございました!!」

咲

「そして……!」

恋

「……続編もよろしく」

全頁

『それではまた会いましょう!』

亮

「……おじいちゃん」

明命

「皆待ってますからね」

恋

「……会える」

「咲
おう、食べ食べ」

「亮
・・・新たな物語・・・か」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3523p/>

真似と開閉と世界旅行

2011年9月15日11時24分発行